

---

# 白の本は世界を渡る

みそアイス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白の本は世界を渡る

### 【Nコード】

N2489I

### 【作者名】

みそアイス

### 【あらすじ】

白い本は世界を渡る。失われたページを集めるために。しかしページは異世界に飛び散っていた。ページを集めるため、彼は異世界を渡る。

\*\*\*只今5つ目の世界\*\*\*

## 黒の声（前書き）

後半に行くほど文章の書き方が変わってきます。

初投稿だったので、物語と一緒に文章力も成長する感じでした。

主人公の性格が変わったりしたらホントごめんなさい。

## 黒の声

そこは、何も無い空間

すべてが黒で塗りつぶされた…、否。

すべてが漆黒の闇で塗りつぶされた空間

そこには一筋の光もなく

ただ永遠と漆黒が続いている

常人ならば数分で精神を崩壊させてしまっただろう

負の感情が渦巻く、漆黒の空間で声が響く

>>明日…か<<

>>何百年待っただろうか……<<

>>…この退屈な世界で

唯一の希望……そして…唯一の敵……唯一の理解者<<

>> 聞はすべてを塗りつぶす…  
……希望……愛……友情……世界さえも……<<

……そこで声は途絶えた

>>そして光は……<<

## プロローグ1

『キーンコーンカーンコーン』

秋晴れの最中、日の光と心地よい風を受けながら寝ている俺。こ  
と如月 刻は、授業の終わりの鐘を聞いていた。

といつても、昼休みが終わってからずっと屋上で仰向けになっ  
ていたのだが…

(…帰るか…)

ガシャンッ

そんなことを考え始めた時、屋上のドアが開いた。

「よう、トキ！」

(またきたか…)

こいつは、大河原 絶。毎日、放課後に俺のところにくる珍しい  
やつだ。多分俺にとっての唯一の知り合いだ。  
友達じゃなくて知り合い。

自慢じゃないが友達なんていままで出来たことないしな…  
そうなると大河原 絶も友達がいないように思えるかもしれない  
が…逆だ。

全校生徒が友達っていうくらいに、こいつの交友関係はひろい、



とゆうかめちやくちや好かれている。

イケメンで明るくてモテモテってやつだ。

だけど普通こういう奴は男子に嫌われるよな？　だが、こいつのすごいところは男子にも好かれてるって点だ…ホント俺とは真逆の存在だな。

(寝ていれば帰ってくれるだろうか…)

「また、さぼったのかよ刻」

絶はケラケラ笑いながら横にすわった。

それからしばらくは無言だったが、唐突に口を開いた。

「なあ…」

「…」  
「この世界っていつ終わるんだろうな…」

なにを急に言い出すんだこいつは。

「どうしたんだ、やぶからぼつに…」

「たとえば…。んー、明日世界が終わるってわかったとして、おまえは今日何をする？」

…きつとおれは何もしないだろう、家に帰ってゲームでもするんだろうな…と、思った。

「お前は、何をするんだ？」  
「そうだな…」

不意に、絶は空を見上げた…  
なかなか続きを言わないので、俺も空を見上げてみる。

10分くらい経つたろうか…絶は口を開いく、

「俺にとってさいっこーの終わり方にする！」

「はあ？」

「世界のやつら全員がこうしたい、ああしたいって言ったって関係ない！俺にとって最高なら誰が死のうが生きようが、地球が消えようが関係ない。俺は俺自身にできる最高の終わり方にするぜ！」

そう言って、絶は満面の笑みを浮かべていた。

「はあ…人が出来ることなんてたかが知れてるだろ？腹いっぱい飯を食べるとか、一日中恋人といるとか。俺の場合一日中ゲームだがな。」

「そうかあー？ 限界を決めてるだけだろ？」

また絶はケラケラ笑っている。こいつは最後の日までこうやって笑っていてそうだ。

「で、絶。なんでいきなりそんなこと言いはじめたんだ？」

俺は最初から気になっていたことを質問してみた。

「いや、だってよ。お前今日すんげー元気なくね？いつもは俺の

事づぎったがっつても、最後はからかったりするしな」

「やっぱするどいなーこいつは…、こつ言う気配りが人望集めるコツなのかもしれん…そんなことを考えてみた。

考えてみただけで実行はしないけど。」

「まあな…今日は一年で一番嫌な日だ」

そんな事を言うと、絶は一瞬目をまん丸にしたあと。  
またケラケラ笑いだした。

「はっはー。嫌な日か。生理か？」

「ああ、そして嫌な日にすんげー楽しそうに目の前で笑ってるやつを今は殴りたくてしょうがない。ちなみに俺は生物学的には男だ」

絶は、おーこわー。とか言いながら、逃げるように屋上の出口に走って行った。

「あ、そーだ」

不意に、何か思い出したように立ち止って、何かを投げてきた。  
それは放物線を描きながら、俺の手の中に納まる。

「誕生日おつめでとーー誕生日が嫌なんて変わってんなー」

それプレゼントだから。と言いながら絶は屋上を去っていった。  
日の光を浴びて銀色に輝く指輪は納まっていた。

「誕生日に指輪って…俺はお前の彼女じゃねーっての…。しかも、サイズピッタリだし…。薬指に…。」

最後の抵抗として、俺は右手の薬指につけてみた。

だって。ねー？ 他の指は入らないか、がぼがぼだし。左手はま  
ずいから右手に…。

そんなことを考えながら口を開いた。

「…あとな絶」

「俺の誕生日はわからないんだ。今日は俺の……」

「捨てられた日だ」

聞くものが誰もいない屋上で、俺は小さく呟いた。

## プロローグ1（後書き）

かるーいフラグづくりですので。

みなくても大丈夫かも。

でも後々なんで〜なんだ？

なんで〜持つてるんだ？とかなるかもしれない。

てかなるとおもう。たぶん。

## プロローグ2

ガチャッ

「ただいま」

俺は孤児院の扉を開き、中に入った。

「……おかえりーお兄ちゃん」「……」

あれから、絶が帰った後。俺もすぐに家に帰った。家って言うっても孤児院だ。

結局、今は午後7時過ぎだ。

にしても……

うんうん。

孤児で良かったのはこれだな。

子供たちにお兄ちゃんって呼ばれるのは最高すぎる！  
安心してくれ。

お兄ちゃんの守備範囲は広いから全員大丈夫だ。

男の子以外。

まだ手は出してませんよ？

などと考えていた。

「トキくん。部屋で着替えたら降りておいで」

出た爺（孤児院の園長）。



こいつは見張っておかないとな。いつ俺の妹達が襲われるかわからん。

こいつ言う無害そつなやつが危ないぜ。

「はいよー。」

とりあえず一番近くの妹の頭を撫でながら、二階の自分の部屋へ向かう。

撫でた時に『えへへ〜』って気持ちよさそつに笑う妹がかなりやばい。

ん？

今日、夜お兄ちゃんの部屋にくるかい？

って、感じた。

口にはだしてませんよ？

キィイバタン

とりあえず着替える為に部屋に入ると…

「なんだこれ…誕生日プレゼント？」

部屋の真ん中にラッピングされた物体が。

近寄って手にとると、メモが張ってあった。

ってか裏が白紙のチラシに書くってどうよ？

【トキくんへ】

お誕生日おめでとう。トキくんも今日で16歳じゃ。そろそろ結婚しないのかい？

わしなんて14歳で結婚しちゃったんじゃよ。まあトキくんはモテないからの。

妹達を見るトキくんの目には気づいとるよ？ ホント変態でロリコンじゃね。

ちなみに妹達はワシと結婚するからトキくんにはやらんよ！ 夢の年の差夫婦

50歳違いじゃよ、羨ましいじゃろ？

まあトキくんには一生彼女なんてできないと思うが、がんばるんじゃぞ？

PS. そういえばこの本。トキ君が孤児院の前に置き去りにされてたときに一緒に

置いてあった本じゃ。メモがあって16歳の誕生日に渡してほしい。って

あつたんで確かにわたしぞい？ これでプレゼント代が浮いたわい。

ぶるぶるぶる

ピキッ

何かが自分の中で切れた気がした。

「あッの爺絶対殺すッ！ てかアイツ結婚して三日で離婚しただろ！ ほぼ独身64年じゃねーか！ クソッ！ このままじゃ妹達が

危ないッ！ お兄ちゃんの部屋に早く非難させなくてはッ！」

ゴンッ

急いで妹達の前に向かおうとして…、何かを落とした。

そういえば、PSで俺が捨てられてた場所に一緒に置いてあったとか…

一応手に取ってみる。

表紙は真っ白。

裏も真っ白。

厚さに千ページは越えているような本だ。

一応開いてみるが中も真っ白。

一応全部見てみるか…

何か書かかれていないか、全ページ捲ってみるが、何も書かれていない。

もう、これは爺の陰謀としか思えない。

「とりあえずこの広辞苑並の厚さで、大きさだけは卒業アルバムってゆう物体で爺を殴れば…」

なんて物騒なことを考え、本に視線を戻すと。

黒い文字が見えた。

こんなのさつき書いてあったか？

えっと…白の本？ 文字的にドイツ語っぽいけどなんで読めるん

だ？

これはまさか、この本の様に白い心の持ち主だけ読めるっていうアレか！ フハハ！

俺のような妹を愛する兄にだけ読めるのか！

よし！ この心意気で妹を爺から救わなくては！

そして、本を置こうとして。

本を置こうとして…。

置こうと……………。

「離れねー！ー！ 手から離れねー！ー！ いくら俺の守備範囲が広いからって言っても本はダメだ！ 待てッ落ち付け本！ 話し合えばわかる！ それにほら…世間体とかあるでしょ！？」

そんな事を言っても、本は手から離れる所か体にまで張り付いてくる

「あああああああつ！ 入ってくるツ！ なんかすごい入ってくるツ！！ ってか熱い！ こんな熱いの妹の寝込み襲おうとして、見つかって広辞苑で後頭部叩かれた時以来だツ！ 助けてーッ！！ え！？ なんで移動してるのっ！！？ 俺のバツクホールはまだア！ そんなのどう考えてもオーバーホー…ルルウ！！ アツアアアアアアア！ 助けて妹おー！ 加奈ちゃん！ 千夏りーん！ みさみさー！ー」

「あ I LOVE Sister ああああああああ

本が完全に刻の体に入った瞬間、叫びが唐突に途切れ。同時に刻の姿は、部屋のどこにもなかった。

にしてもずいぶん余裕な主人公である。

それから数分後、部屋に青年が訪れた。

「ふむ。アイツは“渡った”か…」

青年の手には漆黒の本が納まっている。

『Essen Sie ihm Dunkelheit erschaffen?』

《闇よ、喰い尽せ》

青年が呟き、次の瞬間。  
青年は掻き消えた。

数刻後

闇に覆われ、世界は消滅した

## プロローグ2 (後書き)

E s s e n   S i e   i h m   D u n k e l h e i t   e r s c h  
? p f e n d

はドイツ語です。

人名とかもドイツ語多数

まだ主人公は壊れてませんまだです！



一話 目覚めた場所は露天風呂

「ふああ  
」

俺は目覚めた。

左確認：木

右確認：木

下確認：地面

上確認：葉っぱ

俺は再度眠った。

数時間後

「ふああああっ  
」

どこだ此処は……。

とりあえず現状確認……。

「やっぱ。夢じゃなかったか…しかも夜になってるし…あっ！」

ズリズリ

とりあえず俺はズボンとパンツを下ろした。

助かった…俺のホールは無事だ。

あんなオーバーホールな本が侵入してきたら俺のプライベートホールは耐えられなかった…。

そして、俺は気づいた…、向こうで湯気が上がっていることに。

とりあえず、此処がどこかわからない以上危険かもしれない。

安全確認の3Bをしなくては…

3Bとは、俺がいつも心がけている場所確認、絆創膏、バランス感覚の三つだ。

つまり安全な場所を、安全な姿勢で。

もし転んでも治療できるようにという3Bだ。

覚えるように。

数分歩いてみると、開けた場所に出た。

湯気がもつくもつくである。

つまり、お風呂。

しかも、露天風呂を見つけた。

これで、混浴なら最高だね。

ひゃっほーい。って感じで飛び出す。

そして、タオル一枚の女性というか、少女がいた。  
ってか、目が合った。

腰まで伸びた、しなやかな黒髪黒瞳ロングヘア。透き通るような白い肌。身長は160いかないくらいだろうか？ 顔は…うん、普通に整いすぎ！

アレは“C”だ！ 何がとは言わない。  
紳士だからネ。

しかも…、もう会った瞬間に目が合っているんだよね。  
絶体絶命と言つ言葉が素晴らしく似合う状態だねコレ。

まずいな。

フラグ立ててないのにイベントがつ！  
でも待てよ、…俺は今まで何人の女を落としてきた（二次元）！  
このようなイベントはたくさん起きている！（二次元）  
この状態を超えてこそ俺はフラグマスター・トキの名前を堂々と  
叫べるのではないか！？

そして行動に出た。

「失礼。マドモアゼル。一体ここは何処だろうか？」

フツ。常人から考えたらなんともレベルの高い漢だ俺は。  
一応、『失礼』の部分で謝ってるしな…

「見るんだつたら！ 見ればいいわ！ あなた『ブシュツ』を消して『メがつ！』私も死ぬわ！ 嘘！ 私は逃げる！」

言葉を吐いている途中で、既に目を指で刺してきた少女。

しかも、消して逃げると堂々と吠えた。

こいつ……、普通じゃねーぞ！

「とゆうか何で下を穿いてないの！ それはまずいわ！ 見た目的にとてもまずい！」

おや？ なぜ俺は、こんなに開放感があるんだ？ と首を傾げてみる。

「しまった！ さっきホールの確認でズボ「ブス」ツツめえがあああああッ！」

「汚らしい物見せないで！ 目が潰れちゃう！」

そう言いながらも、こいつガン見してる！？

しかも、目が潰れたのは眼ツブシ・リターンズを受けたオ・レ・だ！

あーもう開き直った！

見られたからもうどうでもいい！

その後、俺がつぶれている間に、少女は着替えて戻ってきたようだ。

その時、俺は…

もちろん風呂につかっていた。とことん余裕な俺である。

「で？ あなたは、何で覗きなんか？」

「勘違いしないで頂きたい。覗きなんて言う下賤なことは我はせん。堂々と風呂場の中まで入っただ『ゴスツ』ツぐぼあっツ」

桶で後頭部を強打された。

「迷子です。あなたのような美しい黒髪をお持ちの方が居るなんて……。ここは日本の何処ですか？ ていうか、どうも杖のような物を持っていて思いましたら、殴る為だったのですね」

俺は素直になった。

「ニホン？ アーベルよ？ 王都アーベル。」

「いえいえ。あなたの名前ではなくてですね。ここの地名を教えてくださいたいのです。お嬢さん。それにしても、変ったお名前ですか？ 王都・アーベルですか。東洋人と白人のハーフですか？」

そして少女は思った。

（はじめてナンパされてる。キャッ）

もうアホ同士の食い違い合戦だった。  
サルカニ合戦よりひどい合戦だ。

「まあいいわ。あなたの人を見る目に免じて許してあげるわ。」

「本当か！？ サンキューヒヤッホーイ！ 見る目ナンパしたこと（胸のサイズを

当てる技術)には自信があるんだ!」

「そういえば、あなたの名前は? 私はエラ・ブランド。王立アーベル魔法学園の高等部よ」

魔法学園?

ふむ…コイツもオタクか。

こんな美人でヲタクなんて、何かあったんだろう…

ここは乗ってやるか。

「俺は如月 刻。王立ネコ ミ学園の高等部だ。」

ふっ、決まったな。

「珍しい名前ね。知らない学校だし」

「俺の心のフォルダに在るからな」

「ここから遠いでしょ? そんなところ聞いた事ないし」

「ああ。俺も現実には在ると思わないぞ?」

「…ないの?」

「心のフォ『ボガツ』ッあぐれっしゅえぶッ」

なんだか…、殴られるのに慣れた。

いかん、Mの目覚めだ!

殴られないようにしよう……。

「すいませんごめんなさい。埼玉県在所沢市です。」

「聞いたことないわね…。とりあえずキサラギトキ。うちの学校が近いから行く? 先生なら行きたい場所わかるかも? 私は王都から出た事無いからわからないわ」

「ん？なんか変な呼び方だな。横文字だとトキキサラギだ。呼び方はトキでいい」

「じゃトキ、私のこともエラでいいわ偽名だけど。」

「偽名！？ まあ思いつきり黒髪黒眼だしな…」

「じゃ、行きましようか」

そう言つて、エラは杖を前え

『風の精霊よ 我が元を集え 夢幻の舞』

エラが呟いた瞬間、エラを中心に風が集まる。

俺は激しい突風に目を瞑る。

風が納まり、再び目を開けると…

エラは宙に浮いていた。

「お…おおおおおおおおおおおおお！」

「キャツ！なによいきなり大声で！」

「これが、噂のワイヤーフレーム！」

「わいやあふりえツ…何よそれ！ 一番初歩の風の魔法よ」

途中で噛んで、少し怒ってる…。

俺、何もしてないぞ？

「つていうか、あなた魔道具は？」

「魔道具？ 小説で言つと、その杖みたいなの？」

「そうよ。ないと魔法使えないでしょ？」

…これは。…マジな魔法か、マジ魔法か。

実際飛んでるしな…、つまりここは伊勢海？ 異世界？

地球上で魔法はないはず…。

あれだけ覚えたくて、ネット巡り巡って見つからなかったからな…、つまりこれはチャンスでは？

異世界だろうと地球だろうと、魔法が覚えられるかもしれない…。

魔法とかオタクの夢だろ？

だって、小説とかさ。

魔法抜いたら、ほとんど素っ気ないものになるぜ？

よし、決めた。

覚えよう。

「いや、持っていない。と、いうか初めて見た。魔法がない国に居たんでね。妹達に囲まれたハッピーワールドから来たから。ところで魔法って誰でも覚えられるのか？」

よし、うまくいった。

さりげなく情報収集だ。

「そうね、妹のところには変態と言っておこうと思うけど。魔法は全員覚えられるって言うわけではないわ。あー細かいことは、学校に行く途中で話すわ。私はここで待ってるから早く服を着て来なさい…。」

俺は最初からずっと裸（途中から全裸）だった。

一回見られて割りきった。

とりあえず俺は、今後の事を考えながら喜々とズボンを取りに林の中に向かう…



一話 目覚めた場所は露天風呂（後書き）

基本的な魔法は属性呪文 + 名称呪文 + 個人呪文で構成されている。

『風の精霊よ 我が元を集え 夢幻の舞』この場合

属性 + 名称 + 個人

属性は精霊への呼びかけ。名称はその形。個人は使用者。である。  
個人名称は各自自由にきめられる。



ズルッパシッ！

「ちよっと！ 何やってるのよ!？」

「バカッ！ あの体制ならぶら下がってる方がマシだ！」

にしてもおかしいな。

自慢じゃないが俺は筋力なんて全くない。

部活に入ってなかったし。

学校以外は、ひたすらインドアだったし…、それが体を支えてるのに全然重くない。

まるで小さい頃の妹を抱っこしたような重さだげへへ。

自分の体がどこかおかしくなったようで不思議に思う。

ま、体が軽い分にはいいや、考えるのやめよつと。

にしても魔法ってスゲーな…。

30メートルくらいの高さを、かなりのスピードで飛んでる…。

落ちたら死ぬだろうな…

魔法のことを考えていると。

ふと、さっきの質問が途中だったことを思い出す。

「なあエラ、さっきの全員が魔法使えないって所なんだが」

「そういえば質問だったわね、忘れてたわ。そうね、魔法が使えるのは、だいたい人族の半分くらいかしら。魔族やエルフなどは全員使えるわ。あとは魔物、これは高位の魔物などは使えるわね。」

「つまり、俺も使えるかもしれないってことか？」

「だいたい5割くらいの確率で使えるんじゃないかしら？ トキも人族だしね」

「ふむ。あと、コレって風の魔法だよな？ 他にはどんな魔法があ

るんだ？」

ぶら下がり健康法を試しながら聞いてみる。

「基本が火 水 風 土。基本からの派生が熱 氷 雷 金。更に上位に光と闇。見たことないから本でしか知らないけど最上級に時間 空間 創造 幻惑があるらしいわ。」

あと魔法にもランクがあるわ。例えば、今私が使ってる基本魔法。基本魔法は単体、つまり火だったら炎を出すとか。どんなに威力が強くて単体だったら基本魔法。詠唱も一節だから簡単で便利よ。

#### 合成魔法。

これは二種類の魔法を合わせるの。火と風みたいな、相性の良い魔法を合わせるの。二種類使うから魔力の消費も二倍、詠唱も二倍、難しさも格段に上がるわ。

#### 古代魔法。

これは三種類以上の属性を組み合わせるの。ただ、三種類以上になると、相性の悪い魔法も組み合わせないといけないから、難しさは数十倍から数百倍数千倍になるわ。火 水 土みたいな打ち消しあう魔法を合成することになるから……。って言っても、古代魔法を使える人は世界に数人らしいわ。詠唱も詩を唱えるから、時間も魔力も大量に消費するわ。

#### 神聖魔法。

本で調べた限りでは、神の領域ね。これは最上級の属性に関係あると思うわ。ありとあらゆるものを作り出したり。空間に穴をあけたり。時間を止めたり。人や魔物を操つったり。って言っても使える人が誰もいないだけだね。それに詠唱が半端なく長いわ。歌になってるから、たぶん数分かかるんじゃないかしら？」

そこでエラは一息ついた。  
長すぎるぞ？

聞き取れなかったし。

「長い説明アリガトウ…。あと、魔力さえあればどんな属性でも使えるのか？」

何か呆れられた……。

「いいえ。ほとんどの人は一つの属性ね。例えば私は火と風。私の場合は二つ使えるけど、二つ使える人は魔法学園でも10人に一人くらいね。三つ使える人は1000人に一人くらいでしょうね。四つ使える人は世界に数人程度かと。」

あと、魔法によって希少度があるわ。基本四属＋派生がほとんどね。上位の光と闇は一つの学年500人に一人居ればいい方。最上位は…歴代に各三人ずつくらい居たかしら？」

「OK。ダメだ。これ以上言われても覚えられない。」

「あはは、まあ相性とか細かいところは後で覚えればいいわ。それに魔法に興味あるってことは、魔法学校に入るんでしょ？」

「まあな。入れればだけど。」

しばらく無言で飛んでいたが（エラは鼻歌なんか歌ってる）、エラがある方向を指さした。

「ほら、アレが王立アーベル魔法学園よ！」

俺は、その方向をしてみるが…

「いやいや、アレはちゃうよ。確かに門とかあるけどさ…。これ門

から校舎までどれくらい歩くんだった？」

その方向には、全面森にかこまれた学校、もとい都市があった。  
一応校舎（？）っぽいのがぼつぼつとある。

門の上空から見ても、ほんの豆粒くらいにしか見えないが…。  
門から校舎まで歩いたら、一時間くらいかかりそうな勢いだ。

なぜ夜なのにわかるかというと、無駄にライトアップされているからだ。

昼？ というくらいに明るい。

こんなんでも眠れるのだろうか？

「とりあえず門のところに降りるわよ？」

「OK、そろそろ俺の腕が有頂天だ」

俺とエラは、門の前に降り立った。

二話 王立アーベル魔法学園へ（後書き）

魔法の説明ですねー

トキはあまりはっちゃけてません

### 三話 ちいさな先生

「あふっ！ 俺の手が笑ってる…妹だったら死んでも離さないが、あやうく落下するところだった。」

「また妹！？ あんた自分の命と妹の命どっちが大事なのよ!？」

「妹に決まってるだろがー!! エレベーターが体重オーバーで、ゴミと宝石どっち捨てる？ って聞かれて宝石捨てるバカはいないだろが!！」

「……………はあ」

心底疲れたようなエラさんである。

「まあとりあえず入りましょ？」

そう言って、エラは入口の門にカードの様な物を通した。

ピー カシヤッ

てか、魔法世界へ科学進んでないんじゃ？ カードロック？

まあ、一応通した時に光が溢れてたから、魔法(?)なのだろうか？

「なあ？ あつちのでかい門から入ればいいんじゃないか？」

「あの門はこの時間閉まってるのよ。だからこの非常扉しか入れないの」

と、言われ。

俺は、扉をくぐりながら上空の、警備性なんて全くない空を見上げた。



「じゃあ学園まで飛んで行けばよかつたんじゃないか？ 上なんて露出狂の開放感くらい全開だし」

「あー上からは入れないのよ。万が一魔物が入らないように、魔法陣が敷いてあるわ。結界に触れた瞬間粒子レベルで消えるわよ」

「魔法学園テラコワス…」

「たまに知らない田舎者が入ろうとして消えてるわ」  
「…」

そんな、話をしながら歩いていると開けた広場のようなところに出たようだ。

「どうしてここに来たんだ？ 遊ぶのか！？ 夜の遊びか！？ 大人のおそ『バキッ』ぶおふッ！」

殴られた……。

「うるさいわね！ なんでいちいち叫ぶのよ！？」

「うるさいのは理解したが、口より先に手とか杖とか出るほうが問題あるとおもっぞ…」

そんな事を言いながら、『口よりさきに手とか杖とか』ってなんかエロいな…。

とか、考えていた。

「少しは悪いと思うけど…、まあとりあえず！ ここにきたのは別に遊びじゃないわよ。ほら広場の真ん中が薄く光ってるでしょ？」

見てみると。

確かに、うすく紫色に光っていた。

「この学園は広いから、色々な場所に転移魔法陣が敷かれているのよ。転移魔法陣に魔力を通せば誰でも使えるわ。じゃ、さっさと魔法陣の上に乗って」

「お、おう」

俺が乗ったのを確認し、

エラは杖を前に構え、軽く深呼吸し。

『接続 高等部二年校舎 転移』

俺は、普通の日本語なのに、英語の発音のように聞こえるな！。つてか、なんでここは日本語が通じるんだ？

とか、今更な事を考えていた。

魔法陣が強く光り、目の前が紫一色になった。

光がやがて消えると、目の前に巨大な校舎が映し出された。

「でかいな……」

「そうね。私も最初みたときは驚いたわ」

デカイ。ホントにデカイ。

日本の大学の三倍ぐらいあるんじゃないかと……校庭も多分、校舎から門まで1キロ以上ありそうだ。

「とりあえず行きましようか？ もう0時近いけど、当直の先生がいると思うわ」

夜の校舎は不気味とか思うかもしれないが。  
あえて言おう。ここはめちゃうくちゃ明るい。

校舎の廊下を歩きながら、俺は本当に夜なのだろうか？ と思う。  
蛍光灯などはなく。天上には、丸い水晶みたいな物体が取り付けられている。

それが光を発している。

蛍光灯なんかよりよっぽど明るい。

そもそも、普通は電球に近ければ近いほど光量が増える。  
だが、なぜかこの水晶（？）はまんべんなく均等に照らしている。

つまり、壁が発行しているようなのに、影は下にできる。  
陰陽の法則まで無視してではないのかコイツ？

と言うか。常に薄い影が真下に出ていて、という状態なので。  
一面真っ白だったら、きっと歩いているのかもわからないだろう。  
光源完全無視だ。

校舎の中は、ほとんど日本と同じような設計のようだ。

ふと、隣で歩いていたエラが立ち止った。

「ここが職員室。」

「ちょっと緊張するな…初体験の時のようだ。経験ないけど」

「は、はつつ！？ ツツツ！ てかうるさい！ 先生の前に出るんだからちゃんとして！」

そういいながら、エラは真っ赤になりながらもドアをノックした。  
かわいい奴だぜ。フツ

「しっ、失礼します」

「失礼します」

本当にこんな時間なのに、先生がいるようだ。  
日本の教師も見習ったほうがいいとおもつ。

先生の姿は、後ろ姿でよくわからないが…わからないが…いや…  
コレは…。

「あの？先生？」

「…」

「先生？」

「…く…ふ？」

「ハンネ先生」

「ひゃ！ひゃいつ！」

ハンネ。と言う先生は一気に立ち上がって、『寝てません！？  
寝てませんよ！？』、とか言っている。

「もうエラさんっ！ いきなり人の後ろに立たないよーに！」

そんなこと言っているハンネ先生。もといハンネちゃん。

真つ赤な顔して怒っても、全然説得力ありませんよ？

しかも…、身長140センチくらいだろうか？

威厳をたもとうと胸を張ってるがAだろう。絶対に。

腰までありそうな金髪のロングウェーブに、アーモンド型の大き  
くパッチリした青い瞳。誰が見ても美少女、いや美幼女だろう。

とにかく小さい。ついでにスーツを着ているが全く似合っていな  
い。

白いワンピースと麦わら帽子が似合いそうだ。

「すみません、先生に用事があつたもので…」

「先生につ!!!?」

何か、大粒の瞳をいっぱいにひらいて。  
キラキラした瞳を、エラに向けている。  
他の先生や生徒が、先生をどんな目で見ているのか瞬時に悟った。  
たぶん妹とか子供のようにな...

「なんでもまかせてください! わたしはは”頼れる”先生なので  
」!

トンツつと胸を叩いているが……、  
と言うか”頼れる”を強調するあたり…。

あ、なんか涙でてきた。  
そんな心境。

「えっとですね。さっき露天ぶ…学園外で会った人なのですが。道  
に迷って帰れないそうなんです。目的地も聞いたことないところだ  
つたので、先生に相談をと」

ハンネちゃんがこつちを見た。

今まで気付かなかつたのだろうか?

そう言えば。子どもの視野は、大人よりずいぶん狭いつて聞いた  
な。

かわいい…。

ハンネちゃんかわいいよ…。

「それでどこに帰ろうとしてるんでしゅっ…?か?」

途中で嘔んで無理やりつなげてるよ、この子が可愛いな。

「えつとですね、日本の埼玉県所沢市つてところですよ。」

ハンネちゃんは目が泳いでいる。

もう考えるまでもなく速攻で逸れた。

人間の脳は一回聞いたことなら、もう一度聞くと、曖昧でも『聞いたことあるな』程度に思うはずだ。

しかし、今のハンネちゃんを見る限り、速攻で目をそらした。絶対聞いたこともない。

とりあえず俺は、ハンネちゃんが目をそらしたので目の前に移動してみた。

更に目をそらしてきた、目の前に移動してみた、さらに目をそらす。

両手で頭を押さえてみた。もう鼻と鼻がくっつきそうなくらいの距離である。

結果、ハンネちゃんは涙ぐみ始めた。

きつと、先生として答えられないのがつらいのだろうな。

せつかく生徒が相談してきたのに（俺は生徒じゃないけど）、可哀そうに…

ハンネちゃんの目を見つめること数十秒。

隣からエラが『ちよつと、トキ！ 近い近い！ キスでもする気！？』とか叫んでる。

結果、閃いた。

チュッ

キスを試してみた。  
口に。

雰囲気も何もあつたものじゃない…

エラは硬直している。

ハンネは硬直している。

まだ離れない。まだまだ離れていない。

30秒くらい経つただろうか

エラは杖を構えた。

なにかを呟き、体が淡く光輝いている。

ハンネは真っ赤になり、目を見開いている。

ドゴッ

「ぶべっッ！」

ズザアアアアッアアア

グシヤッ

エラの攻撃、側等部にクリティカルヒット。

直前にエラが何か呟いていたので、たぶん身体能力をあげる魔法でもつかつたんじゃないか…？

でなかったら人間が5メートルも吹っ飛ばはすがない。  
ホント、魔法はアリエン。

でも魔法って言うより、打撃ばかりなような気がしなくもないな。うん。

にしても……。

あー…これ気絶するな…。

視界が暗くなりはじめ。俺が意識を手放す直前。

ハンネが『わたしのファーストキスがー』とか叫んでいた。

かわいいな。

「くあつ！」

ガバツ

数十分後。

俺は復活した。素晴らしい回復力である。  
常人だったら死んでもおかしくない。



「あら？ もう起きたの？ 殺すつもりでやったのに」

エラは、そんな事をのたまっていた。

ハンネちゃんは、エラの後ろに隠れてこちらをうかがっている。

「で？ なんでいきなりキスなんてしたの？」

「お前は何もわかってないよエラ。あーわかってないよエラ」

「二度も同じこと言ったからにはちゃんと理由があるんでしょうね  
」？」

「ああ」

「発言を許可するわ」

「泣き顔で上目づかいで見られたらキスする『ベキッ』ッっぽっ  
はああ！」

「はあ…、まあ、わたしがされたわけじゃないし。先生と話して」

と、投げやりにハンネちゃんをこっちに押し出すエラ。

もちろん俺は抱きとめた。

と言っか、抱きしめた。

「それでハンネ先生。お願いがあるんですが」

腕の中。

胸の辺りでもぞもぞしているが、急に真っ赤になりだした。

なぜわかったかって？ 耳が真っ赤になったからだ。あっはっは！

「えっ、エッチなことはダメですよ！？ さっきみたいなの！」

この子の中ではキスはエッチらしい

「違いますよ。多分、俺はもう家に帰れないので。この学校でお世話になることはできませんかね？」

「え？」

なぜ？ と言うことだろうか。

「俺はこの世界の人間じゃないので。多分、この世界で言う《空間》の《神聖魔法》のようなものでコチラに送られたんだとおもいます。」

ハンネは『空間』とか『神聖』とかつぶやいている。

「ええ。エラの話だと《空間》の属性を持った人は現時点で皆無。更に《神聖魔法》を行える人。行ったことのない空間に飛ばせる人が俺が死ぬまでにそこに至れる人が現れる確率は天文学的確率じゃないでしょうか？」

「…」

「…」

隣で聞いていたエラも、腕の中にあるハンネも黙り込んでしまった。

確率でも計算しているのだろうか？

「そう…、ですね…」

ハンネが口を開いた

「現れないと断言はできませんが。ほぼ現れないでしょう…ぐしゅ…」

ハンネは泣いていた。

俺が帰れないと知って泣いてくれているんだろうか？

こんなあつたばかりで、拳句にファーストキスを奪った人間のために。

はあ……。元々あの世界に未練なんてないんだけどな……。妹以外には。

俺はいつまでも妹に固執するぞ！

「大丈夫ですよハンネ先生。別に俺はそこまで帰りたいたいと思ってないです。前の世界は魔法がなかったの、この世界で魔法が使えるって聞いて楽しみなからいすから」

そう言って。

先ほどと同じようにハンネの瞳をまじかで見つめる。

違う点があるとすれば、俺は満面の笑顔。

ハンネは涙でぐしゃぐしゃな顔。

にしても随分絵になる構図だ。片や笑顔の美男子（本人気付かず）片や涙を溜めた、人形のように美しい少女（本人は大人だと思ってる）。まるで恋び……。むしろ兄妹である。

「あ……。ぐすつ……」

ハンネの顔がみるみる赤くなつてゆく。

またキスをされるとでも思ったのだろうか？

紳士な俺はそこまでKY（空気読めないの略）ではない。

「…ふふ」

エラも穏やかな笑顔を浮かべている。てか、犯罪者を見ているよ  
うな。

あ、杖構えてるし。

ここでキスしたら、確実に俺は世界を渡るだろう。

あの世に。

「で…どうでしょう？ 入学何とかありませんかね？ あと先生の  
年齢はいくつですか？」

最後につけたすのを忘れない

「…そうですね。入学なら…わたしが保護者をやればなんとか  
ますね。お金のほうは奨学金、あとはギルドの依頼を受けながら  
て言うのも良いかもしれません。単位もはいるので生徒も結構やっ  
てますし。あとハンネは18です」

「良いんですか？ あつたばかりの俺なんかの保護者になって？

あと先生は18じゃありません12です。」

「大丈夫ですよ。保護者つていつても肩書きだけです！。勝手に  
にきめないでください18です！ あなたより年上です！」

そう言いながら、真剣な瞳で見つめてきた。

多分、ハンネちゃんは気づいているのだろう。

そこに、重い“責任”が付き纏うことにも。

「そうですか…、それではよろしく願います。あと今更ですが  
自己紹介してなかったです…。俺はトキキサラギ。16歳です。

先生の年齢は自分の中で12歳だと思っておきます」

「私はハンネ・ベルです。担当科目は水・風・闇です。もうっ！  
それでいいです……」

「闇ですか…、すごいですね。それって珍しいんじゃない？」

「そうですねー、誰もいないんで一回も授業したことありません」

担当って言葉いらない気がする。

「あ、そだ。トキくんは魔導具って、もう持ってますか？」

「いえ、魔法がなかったの」

「そうですねー、ならちゃっちゃと作っちゃいましょうかー？ そ  
うすれば明日から授業受けられますよ？」

「作る？ そんなすぐ出来るんですか？」

「ええ。作るって言うか自分に合った魔導具を召喚するんですよ。  
すぐですよーすぐー。ついでに自分の属性もわかつちゃうすぐれも  
のです！ 一石二鳥ですねー」

と、言いながら。ハンネ先生は笑顔でピースをする。

これは二鳥ってことで二つ指を立てているんだろうか？

俺には、子供がお母さんに写真をとってもらうポーズ。に、しか  
見えない。

「じゃ、エラちゃんは寮に帰っていいよー！ トキくんの話はハ  
ンネにまかせなさいー！」

「え？ ハンネ先生危険ですよ？」

「むーエラちゃんまでそうゆうこと言うの？ 魔導具召喚くらいひ  
とりでも平気だもん！」

頬をふくらませながら怒ってる、140センチメートルの先生は  
なんとも頼りない。

かわいいけど、

「はあ……。そう言うことではないんですが……。まあいいです。明日学校ですから……」

「うん！エラちゃんばいばい！　おやすみー！」

「はい。先生おやすみなさい。」

そう言っつて、エラは職員室を去って行った。

「それではトキくん！　召喚の部屋に移動するのでついてきてくださいー！」

そう言っつて、喜々として小走りで駆けて行く。

「あ、そだ。そう言えばさっき“会ったばかりの人にそこまでして”とか言っつてましたが。確かに会ったばかりかも知れませんが」

そこで一旦言葉をとぎり、トテトテとまた走り出す。

そして少し離れたところで振りかえった。

よっ  
『』

『トキくんは、“わたし”のファーストキスを捧げた人です』

自分の事を“ハンネ”から“わたし”って呼ぶようになったな。かくして少女は、キスで大人になりました。

違うな。

俺の“からっぽの覚悟”に対して“責任”を負ったのか。保護者っていう肩書きだけというが…。

住所不定、お金もない、実力もない。

入学試験も受けてないし、中等部卒業もしてない俺を、無理やり転入なんてさせて…。

保護者っていうだけじゃなくて、その“責任”で周りからどう思われるか…。

まあ、あの時の先生の“瞳”ならわかっていってるんだろうな…。

強いな…。

俺の空っぽの“覚悟”よりずっとずっと…。

ハンネは、俺が無理してる。と、勘違いしていたようだが…。

実際、俺は前の世界に未練なんてなかった…。

結局、利用したような形になったな…。



そういえば…。

なんかフラグ立ちそうだし、もらっちゃっぞ

ヒヤッホー

「待ってくださいって！」

そうやって俺は、彼女の後を追いかけた。

三話 ちいさな先生（後書き）

ヒロインじゃないよ？

しゅ。

#### 四話 表層と深層

「トキくん！ ここです！ この部屋です！」

そんなことを言いながら、ハンネ先生は腕をぶんぶん振っている。なんだか無性に抱き締めたくなる。

「この部屋が、召喚の部屋です。…あ、あの。トキくん？」  
「なんででしょうか？」

「なんで、先生の頭を撫でているのですか？」  
「気にしないでください。」

きっぱり言いはなった。

ええ、きつぱりと。

べ、別にロリコンなわけじゃないからね！

「はあ…。まあいいですが。それでは、入りましょか」

そうやって先生は、部屋の中に入る。

にしても…、この扉はなんだ…。

5メートルはありそうな純白の扉。

部屋にしては大きすぎるだろ…。

の割には鍵もなにもない。

出入り自由？

後で聞いたのだが。

この門は魔力に反応するらしい。

個人の魔力の質を読み取るのだそうだ。

だから教員以外には、絶対に関けられない。

中に入ってみると、これまた純白。

天井は高い。

多分20メートル位あると思う。

更に部屋の広さだ。

たぶん奥行き50メートルくらいはある。

ひたすら純白で、染みひとつない広大な部屋。

窓もなにもない。

一応、床には魔方阵らしきものが描かれているが…。

ハッキリ言って、模様で気持ち悪くなる。

「えっとー。では説明しますね？」

そういつてハンネ先生は、空中に何か書きだした。

魔力を放出して、固定化してるんです。とか言うが、

魔法を知らない俺には意味がわからない。

「この召喚では、個人の深層世界から魔導具を作りだします。なぜそこから作りだすか？　と言うとですね」

そういつて空中に円のようなものを描きだす。縁の外側に人がいて。中に怪獣みたいのが……。

「例えば、人族の5割は魔法を使えません。使えない人たちは、この表層と深層の間の壁に穴が開けられないんですよ。表層には魔力がありません。おもに心の部分を司ります。好きとか、嫌いとか、あーしたいこーしたいっていうのが表層です。表層までは自分の意思で変えたり出来ます。つて言っても表層は、自分の意思や普通の肉体を動かすことしか出来ません。」

それで深層。

これはその人の世界でしょうか。ここは、意思では影響を与えることが出来ません。つまり世界は個人の物であって、個人でも把握出来ないんです。

先ほど壁。と言いましたが、この壁はあくまでセキュリティだと思ってください。個人が深層を自由に使うって言うのは危険なんです。深層を表層と同じように使える人は、いなくはありませんが精神が壊れたり。体が崩壊したりします。

魔力とは、深層って言う自分の世界から表層。つまり現実に反映する力です。表層の意思を介して。深層から力を借りるって思っていてください。

後ですね、深層世界は無限ではありません。大きさは個人によって違いますし。密度も種類も違います。属性っていうのは深層に依存しています。深層世界のあり様によって使える属性があるんです。例えば、深層の世界に小さな炎の島が浮いてるとします。その島から炎を抜き取って現実に反映するのです。もちろん、炎も有限です。使いすぎたら最悪死んでしまいます。一応、世界の意味で時間をかけて元の島に戻そうとしますけどね。

では、この島がこの世界より大きな島だとします。そうすると、この世界すべてを飲み込める炎が使えるんです。ただ、魔法使いとは壁に穴をあけて使いますので。そんなに大きな世界はありえませんが。

基本魔法、合成魔法、古代魔法、神聖魔法というのは、その時の穴の大きさなんです。小さな世界で古代魔法を使ったら、世界がすべて出てしまい。使用者は死んでしまいます。それに小さな世界なので本来の古代魔法には到底及ばない上に、使用者は死と言う事になりえるわけです。」

『以上、深層世界の話おわりー！』と言って、ハイネ先生はピースをした。

癖なのだろうか？

それにものごい量の文字やら絵やらを書き込んでる。

ところどころクマのような落書きとかあるが…、気にしないでお  
う。

「じゃ、その深層世界の一部を魔導具にするんですか？」

「んー。一部ではなくて全部ですね」

おいおい。

さつき全部取りだしたら死ぬって言うてなかったですかい？ 先  
生。

「と言うよりもレプリカですね。深層世界を写し取り、それを魔導  
具として、表層世界に複写します。なぜ、同時に属性がわかるかと  
いいますと。引き抜くときに、そこから漏れる属性の余波でわかる  
んです。」

そう言うって、また何かを書いていく。

壁を面して、左側に人？ 右側に星？ みたいな？ なぜ疑問形  
かと言うと。

ものすごく絵がヘタだからだ。

「この壁が表層と深層のセキュリティの壁です。その足元の魔方  
陣を壁として直接に深層のレプリカにつなげます。魔方陣の下に、  
複写した世界が在ると思ってください。つまり床の下が深層世界み  
たいな感じですよ。手を入れると穴が開きますよね？ その穴から火  
だったら炎。水だったら水のように少量ですが漏れ出します。わか  
りやすいように壁一面白にしてるんですよー」

と、言うて。

ハンネは、壁に描いた文字やら絵やらを全て消した。

「ま、とりあえずやってみましょう。その魔方陣の上に立ってくださいー」

とりあえず俺は魔方陣の上に移動した。

ハンネは何やら複数呪文を呟いているようだ。

「一応規律なんで、壁に結界と。私自身に防御結界をかけました。

あ、トキくんは自分の魔力なんで炎とか出て来ても問題ありませんからね？ それでは、準備大丈夫ですか？」

そう言っただけで楽しそうに笑っている。

自分的には緊張とワクワク感の半々。

「では。魔法陣をトキくんの深層世界につなげます！」

先生は自分の足元の魔方陣。

俺の足元の魔方陣を、小さくしたような物に手をつけて呟いている。

瞬間、黒かった俺と先生の足元の魔方陣は、白く光輝いた。

「ふうー。つながりました。ではトキくん。トキくんの深層世界から魔導具を抜き取ってみてください。」

さあ、はやく？ みたいな感じでこっちを見ているハンネだが…何か足もとが膨らんでいる気がする…。

風船の面にマジックで魔方陣を描いたように…、

もしそうなら、手をいれた瞬間。  
風船に針を刺したようになるんじゃないかと…、内心びくびくである。

「あ、あのハンネ…、なにか足もとが、膨らんでいるような気がするんですが…？」

何を言っているんだ？ と、ばかりに先を促すハンネ先生。

「大丈夫です。今まで魔導具召喚では、危険なことは起きてません！ 使い魔召喚はちよつと危険ですが」

「それにですね？ 私が見た限りだとトキくんは魔力が全然ないので危険はないです！」 などと言っている。

それはそれで傷つく。

魔法学校に入って、魔力がないとは…。

落ちこぼれまっしぐらだ。

ひとつ溜息をついて。

俺は諦め半分に、手を魔方阵に近づけた。



#### 四話 表層と深層（後書き）

またまた説明ですね。

五話 魔導具召喚（前書き）

一部誤字修正しました！

## 五話 魔導具召喚

ハンネが見つめる中、俺は一気に手を突き入れた。

『ガッ』

ボキッ

「ツツツツツツ！」

思いつきり突き指をした…。

折れているんじゃないかと言っくらしいに。

普通に地面に指を思いつきり突き刺した感じ…

「あははー。すみません、穴あけるの忘れてました。テヘッ」

テヘッつと来たか。

「…って言うかですね。マジで痛いんで勘弁してください。次した  
らもう一度キスしますからね？ ティープなの」

先生は真っ赤になって俯いている。

いや、今のは俺悪くないだろ？

普通の地面に指突き刺したんだぞ？

下手したら骨折れるから。

ハンネは赤くなりながらも、魔方陣を再度起動した。

「これで大丈夫なはずです。多分。」

このハンネはやっぱりハンネだ。  
意味が分からないが、俺も意味が分からない。

「…じゃ、もう一度やってみますから…」

ハンネは、コクコクとうなずいてる。  
まるでコケシのようだ…

俺は恐る恐る（さっきのことがあったから）、手を入れてみた。

ズブズブ

何の抵抗もなく、手が魔方陣の中へ入り込んだ。

「はい。じゃあそこで何かを引っこ抜く感じで掴んでくださいねー」

何かを。って何だ…、とりあえず…。

よし、昔孤児院の誕生日会でお菓子掴み取りした時みたいな気分  
で掴んでみた。

ふと。

手に丸い金属のような感触が…。

「ハンネ何か手に…、手に何か！」

「まって！　なんで呼び捨てになっっているんですか！　とりあえず  
それ引きずりだしてください。それで属性もわかりますから」

とりあえず引っ張るか…、力をこめて引っ張る

引っ張る

引っ張る…

なんだろう。

これは勇者にしか抜けない聖剣ですか？

勇者じゃない俺には抜けないと？

まあ、手触りが明らかに丸い金属なんだが…。

と言つか逆に引っ張られているような…。

さっきまで手首まで埋まっていたのに、なぜか肘まで…。

「ツツ！ ハンネー…ツツ！ ヘルプ！ ヘー…ルプツ！ 愛し

てるから助けて！ 腕がモゲルツツ！！ ああああああつあああ

！ まだ初体験も済ませてないのにモゲル…大切な何かがモゲル

…！！！！ 助けてハンね…！！ ハンハン…！！」

何で助けられないこのハンネめ！

それで、ハンネの方を向いてみると…。

どこだどこ？

樹海ですか？

ジャングル？

周りの景色が一変していた…

「っああ！ 腕が…！！ ハンネなんとかしろ…ツツ！ 全然安全

じゃねーじゃねーか！ そもそも！ どこだここー！ そして腕が

抜けねー…！！」

「落ち着いてください！ 多分あれです！ 何かの属性（？）です！」

そんなことを言いながら、駆け寄ってきて一緒に腕を抜こうとしているハンネ。

「あ…、たぶんこれアレです！ 創造の属性だとおもいます！ 見たことないからわかりませんが！」

「適当すぎるだろおツツツ！ とりあえずなんとかして抜かないと俺の腕が死ぬー！ー！ ハンネ後でぜってーキスするからなツ！ デイープでツツツ！」

くそー！

俺の気持ちを弄びやがって！

そして、

次の瞬間、世界の色が消えた。

さっきまで自然色あふれる世界だったが、いまではモノクロに染まっている。

色を持っているのは俺とハンネだけだ。

しかもなんか…、

「ハンネ…、思うんだが。これ、時間止まってないか？ さっきまで風に吹かれてた葉とか、全く動かないんだが。オブジェクトみたいになつてやがる。」

「奇遇ですね。私もそう思っていたところです。多分トキくんの深層世界が現実を侵食してるんだと思います。見た限りでは創造と時

間ですね…。希少ですよすごく？ 多分、私が魔方陣から出たら私も停まつちゃうんじゃないかと…、それで腕はどうですか？」

抜こうとしてみた。

抜けなかった…。

「全く抜けません。」

「属性がすべてわかるまで…、と言つか表層に出るまで抜けないんですよこれ。つまりトキくんは三つ以上属性があるんじゃないかと…？」

そんなのいいから抜かせる！

「体から何か溢れ出すような感じにしてください。意識を外に出す感じで。そうすれば他の属性も一気に出ると思いますよ？」

溢れ出す感じ…、外側に…、体の中心から…、生み出す…。

ふと…。

頭に“白い本”が浮かんだ。

中から何かが出たがっているような…。

頭の中で、本に手をかける。

そして、止めようにも手が止まらない。

自分の手によって、ゆっくりと…、本が…。

【ドクン】

「え？」

心臓が跳ね上がり、思わず声が出た。

【ドクン】

何かが…、自分の中で“何か”が存在を主張するようだ。  
もうすぐ来る…。それがわかる…。

お前は“誰”だ？

これは本。

俺の世界。

俺そのもの。

君は？

君は俺の世界その物。

「ハンネ…」

「え？ なんですか？ あふれるイメージですよー？」

「わりー。多分まずいことになる…。“彼女”が出たがってる」  
「んー。何がですか？ 全部属性をだせば終わりですよー」



そんな事を言って、笑顔のハンネ。

『ドゴオオオオン！』

瞬間、モノクロの森の中で。

轟音が響いた。

空中に、漆黒の穴が開き。

暴風のように木々を吸いこんでゆく。

岩だろうが木だろうが全てを吸い込むつもりなのか？

俺の周りだけは、被害がないものの。

この光景は怖すぎる…。

ブラックホールってところだろうか？

ハンネも俺の近くなので被害はないのだろうか…、悲鳴を押し殺してみたいだ。

生物がうまれる。

小説の中でしか見たことのないような、ドラゴンやペガサスから動物までありとあらゆるものがだ。

生まれては穴に吸い込まれてゆく。

それでもさらに生まれ続ける。

ここは地獄だろうか。

闇が動き出す。

地面から上空へと伸びるように、天に闇が昇って行く。

それを、押しとどめるように、天から光が押し返す。  
闇と光の攻防は、拮抗していた。  
飲まれた周りの木々や生物は、闇に喰われて消え。  
光に溶かされて骨までなくなる。

これが地獄でなかったら何が地獄なのだろうか

周りは炎で燃え盛り。

氷と雨が、暴風にまじって降り注ぐ。

地面は割れ、土が鋼のようになり。

雷が絶え間無く鳴り響いた…。

もしこれが現実なら。

数分で生物は絶滅するだろう。

星すらも消滅するに違いない…。

そんなことを考えながら、俺はただ呆然としていた。

ふと…、ハンネを見てみると…。

俺の胸に顔をうずめながらぷるぷるとしていた…。

そんなハンネを見てみると、自然に気分が落ち着いてきた。

周りは今だにすごいことになっているが…。

俺はもう一度、腕が抜けるか試してみた。

スルッ

結果、ホント呆気なく抜けた。

ただ腕をあげたような感じだ。

周りを見渡して見ると。

さっきまでの光景が嘘のように静まり返っていた。

俺たちは、純白の部屋に二人でうずくまっていた。

ハンネは胸に顔をうずめている。

気付いていないのかも知れない。

「ハンネ…、終わったよ」

びくびくと顔を上げるハンネ。

涙目なのがかわいらしい。

まだ震えているが…。

チュッ

一度離す。

「えっ？」

「だからキスするっていったじゃんディープで」



そりゃもう徹底的に。

「……………」

「……………」  
「……はっ……」

そんな事を言いながら刻を引きずって行くハンネであった。

刻の右手には、白銀に輝く懐中時計が握られていた。

六話 寝すぎた…(前書き)

誤字修正…ハンネ打ちにくいよ!!

六話 寝すぎた…

「ん…」

どうやら、俺は寝ていたようだ。

「……ここ…は？」

現状確認。

ベッドに寝ていた。

よくわからないけど、マンションの一室？

どこの？

あれ？

たしか俺は昨日…、魔導具召喚で…。

シヤラン

なにやら音がしたほうを見ると、右手にしっかりと魔導具が握られていた。

銀色の懐中時計。

銀ではないかもしれない。

銀のようであって白く輝いている。白銀の懐中時計…、か。先ほどの音は、懐中時計につけられた鎖がずれた音のようだ。

「にしても…、懐中時計…ねえ。これ魔導具になるのか…？ 時計代わりにしかならないような…」



そんな事を思っていると、

「ん…あふ…」

隣で何か小動物のような声がきこえた。

「…ふえ？」

ハンネだ。

つまりこの部屋はハンネの家だろうか？

「おはよう」

とりあえず、挨拶は重要だ。

「…ほはお」

挨拶しているようだ…。

「あああつ！ え、ええええとコレは違うんですよっ！？ 襲って  
ませんよ？ 抱き枕になんてしてませんっ！！」

どうやら抱き枕にされていたようだ。

「…まあ、それはいいや」

ふと、俺は気づいた。

俺はまだ学校はないが、ハンネは先生ではないか？

「学校はいいのか？ たしかエラに明日は学校とか言ってたけど」  
そう言いながら、時間確認のために懐中時計を開いてみる。

うん。

売ったら結構高く売れそうな作りだ。

時間は、十時だった。

さすがに異世界だからって、10時で学校始まってないなんてことはないだろう…。

「えーと、今日は休みですよ？」

意味がわからなかった。

自分が休みたいからこんな嘘を？

そもそも、俺は昨日聞いたぞ。

明日学校だつて。

「よくわからないみたいなの顔してますが、魔導具召喚をした日が光の日の朝だつたんですよ」

ふむ…、確かに前日は休日っぽかったな。

エラも遠出で温泉に行つてたみたいだし。

「この世界は一週間が光 火 水 風 土 闇 の七日になります。ちなみに空が休みです。それで今日は空の日です。つまりです…ね」



なんで言わなかったんだ？ と。

「あつ、でも一週間で、転校手続きとか住居とか全部決まりましたよ！！？ ホラ、よかったねー……」

焦りながら言うハンネ。

ま、入学するって云ったのは俺だしな。

しかも面倒ごと全部やってくれたのはうれしい。

「はあ、まあいいや。めんどごと押しつけちゃったみたいだし。ありがと。」

ハンネが『はあ……完璧に敬語なくなっちゃったよ』とか呟いていたが気にしない。

「あ、忘れてました。はいこれ」

とカードを渡された。

テレホンカードくらいだろうか？

ずいぶん小さいな。

「何これ？」

「学園都市の生徒証明書ですよ。これで依頼を受けたり。単位をもらったり、お買い物したり出来るんですよ。身分証明書だと思ってください」

俺はそれを改めて見てみる。

「トキキサラギ……クラスF……名 未設定……」

属性……火 水 風 土 熱 氷 雷 金 光 闇 時間 空間 創造 幻想……。と言つかこれ属性が思いつきり下の欄まで突入してるし……」

もつ下の賞罰のところまで侵入している。  
もし賞罰受けても読めないだろう……。

「しっ、仕方ないじゃないですか！ そんな属性多い人いないんですから！」

そんなこと言いながら焦っている。

お？ でもそれってつまり俺最強ってことか？

「あ、でも魔法は使えませんよ」

幻想が一瞬にして破壊された。

「ってそれ、属性あっても意味ないじゃん！」

なんか一瞬にして落ちこぼれになった。

「んー、と言つかおかしいんですよ？ 魔力自体は誰よりも膨大なはずなんです。召喚の時もあれでしたし……。もちろん魔法がつかえない5割の人にも、魔力が高い人はいるんです。居ますけど……。そつ言う人とは壁が違つんですよ」

「壁？ 壁つてセキユリテイーつてやつなの？」

「そつです。上位の魔法使いなら他人の壁の状態つて言うのがわかるんです。見てみたんですが……。普通の使えない人つて言うのは黒い感じなんです。何も通さないような黒。魔法を使える人は壁の薄

い部分に穴をあけて魔法を使っんですよ」

ふむ…、わかるようなわからないような…。

「でも、トキくんの場合は白いんです。それもすごく薄い。向こうが見えるくらいに。ただ薄いのに硬いんです。黒い壁とは比較にならないほどに。たぶん膨大な魔力をとどめるために壁が硬くなったんだと思います。そして多くの属性をとどめるために白くなった。一番内包出来る白。何も書かれていない白紙。それゆえに染まりやすい」

一瞬頭の中に“白い本”が浮かんだ。

この世界に誘ったあの本はまだ俺の中にあるのだろうか…。

「ま、考えても仕方ありませんね。何かのきっかけで使えるようになるかもしれませんが」

「だな…、魔法が使えないのは残念だが頑張ってみる」

魔法学園に魔法が使えない生徒が…。

「では、説明しますね？ カードを見てください。クラスってありますよね？」

とりあえず魔法のことは置いておいてカードを見る。

「クラスってというのは授業を受けるクラスのことです。一つのクラスに40人程度で全部でA～Zまであります」

ん？ 40でA～Zの24クラス…、って。

「一学年千人ちかくっ!?!」

日本の高校の全人数より多いんじゃないだろうか…。

「です。だから学年ごとに校舎があります。その中でAが特待生B・Cが準特待生です。このクラスは成績に応じて入れ替わるので、トキくんがそこに上がっていったらうれしいですねー」

魔法使えないから無理なんじゃ…。

「あと名つてところがありますよね。それは個人の詠唱のことです。魔法全般は“呼びかけ”+“形づくり”+“名”をつなげて魔法を使うので…。まあ、魔法が使えるようになったら決めましょう」

「……ハイ」

「あと属性名とかは隠したほうがいいかもです。たぶん喧嘩売られたりします。属性が多いって言うのは、それだけで嫉妬の対象です。多くて魔法が使えないなんてばれたら餌食ですからねー」

なんとも軽く言う…、とりあえず隠そう。

「食事は、寮と学食は無料です。もちろんもつとおいしいレストランで食べたい。とかだったらお金がかかりますけど」

贅沢は敵です! それにお金ないし。

これ以上ハンネに迷惑かけたらマジで永久就職(結婚)するしかないくなる。

「寮は二人部屋です。もう一人は既にもう入寮してるので、仲良くしてくださいね? ついでに学校は寮の裏なのですぐです」

友達関係も心配されてしまった…。

まあ、地球では友達なんて一人も…、一人知人がいたか。

「ちなみに寮の番号はカードに書いてあります。カードキーにもありませんので、それがカギです」

「そういえば寮ってどこにあるんだ？」

「ここですよ？　ここも寮の一室なので。管理人室ってやつです。先生が一人一つ管理してるので。最初は私もついていくので。行きましょうか？」

そんなことを言いながら、とことこ玄関に走っていくハンネ。その後ろに俺もついていく。

「そういえば、魔導具ってこれだけ。何に使うんだ？　時間調べるくらいしか出来くないか？」

ハンネに歩きながら聞いてみた。

「そうですね…、私も初めて見るものなのでわかりませんが…。普通は剣とか杖とかなんですよねー」

つまりゴミってことじゃないか？

俺の深層世界！　どこまでしょぼいんだ！



そう思った瞬間懐中時計が少し震えたような気がした…。

む…？

見つめてみるが何も起こらない…、気のせいか…。

そう言えば…、あの時の“少女”は誰だったんだ？

「まあ、何かに使えるかもしれないので、持っておけばいいと思いますよ？」

まあ捨てるつもりもないけどな。

……最悪売り払えばいいし。

「あ、この部屋です」

「普通の…、マンションだな」

レンガを組み合わせたような壁、高そうな木の扉。

カードキー挿入口まで木だ。

これは機械では無理だろう…、魔法かな。

「では、また明日ですー八時に職員室にきてくださいねー待ってますからー  
あ、あと教科書とか洋服とかは部屋に運んであるので、  
でわでわ」

かなり迷惑かけたっばいな…、なにからなにまで…。

「おいつ！」

去っていくハンネに声をかけた。

「え？」

「スーツ似合わないぞ？ 休日くらい私服きたらどうだ？」

ニヤリとひにな笑みを浮かべてみる。

次第に真っ赤になっていくハンネ。

「うー…、よけないなお世話ですっ！」

とてとてと言つ言葉が似合う走りて走り去ってゆく

「フッ」

気付かせてあげたぜ。

とりあえず入るか…。

カードを取り出してロックを解除する。

ピー

カシャン

ロックを解除した。

「さて…、どうなることやら…」

俺は一人溜息をこぼした。

## 七話 魔導具と白の本

コンコン

「今日から入寮することになったトキキサラギですけどー」

『あいてるでー』

少し間が空いてから、返事があった。  
てか、何でエセ関西弁…。

ガチャッ

「失礼しまー……」

俺は中に入る途中、そのまま入ろうか戻ろうか、悩んだ。

「おい」

「どないした？　ワイの肉体美にやられてもうたんかいな？」

とか、言いやがってる。

この露出狂イケメンは！

「なんで全裸なんだよ……」

同室の相手は全裸趣味　みたいな感じだ。  
いや…、正確には全裸ではなく、大事な場所に葉っぱがあるが…。

ルックスは、肩まで伸びたサラサラの金髪。すこし釣り目の奥二重。身長は190近いだろう…、自分で言うだけあって筋肉もキレイだ。肌も白い。顔なんてもう上の上の上、最上級だ。

あとは裸じゃなかったら…、もう裸ってだけで一気にアホってわかる。

「だけどやはり友達は作りたいな…、この学校でも一人だったらつらい…、よし！」

ズルズル　バツ

「俺は全裸になった。」

「なんや…、あんた…！」

イケメン全裸男はわなわなと震えている…。

「めっちゃ。空気読めるやないかー！ー！」

ガシッ

イケメンと二人で抱き合った。全裸で。

「ああ。空気読むことと、胸のサイズを当てることには自信がある」「めっちゃええ才能やでそれ！」

「あまり褒めるなよ。照れるだろが。あと俺はトキキサラギ16歳だ。属性は…火でクラスFだ。っていつてもまだ魔法は使えないがな」

とりあえず属性は隠しておこう。

違う属性は、SとかMならSのほうが良いよ？

「奇遇やな。ワイもクラスF。アルブレヒト・ブティング16や。属性は火。気軽にプレちゃんとも読んでええよ。よろしゅーな」

「俺もトキでいいぞアル。よろしくな…あとな」

「なんや？」

「さすがに裸で抱き合つのは嫌だ…」

「奇遇やな、わいもそう思ったたところや…。しかもトキにゃんがくるの裸でまっつたんよ。きのうから。」

シユルシユル

俺とアルは服を装備した。

「でも珍しーな」。この時期に転入やなんてー」

そつえば、時期とかわからないな…。一年の何時ごろなんだ…？

「いまって二学年になってどれくらいなんだ？」

これで十か月とか言われたらショックだ…。

すぐ三学年。

「そやなー。二週間程度やなー！ まあそれくらいならすぐ追いつけるでー」

終始ずっと笑顔だ。

「こつ言つやつは絶対人は好かれるな。」

「どうせ同じクラスやし明日は一緒にいこつやー？ わからないことよーさんあるやろから案内するで？」

「ありがと、ま、でも学校までだな。八時半に職員室って言われているからー。転校生だからな」

「りょうかいやー。そつちの部屋がトキちゃんの部屋やでー？」

廊下の両側に扉がある。

片方が俺の部屋のようなだ。

たぶん奥に見えるのはリビングだろう。

「サンキュー。二週間分のテキストと明日の準備するから、部屋いくわー」

「はいよー、にしてもトキちゃんまじめやなー、ワイなんていつも授業中ねてるえ？」

まあ、魔法なんて面白いこと出来るんならやりたくもなる。

多分こつちの人には、日常だからそこまでまじめじゃないんだろ  
う。

地球での数学のようなもんだ。

「じゃ、また明日の朝にでもー」

「あいよー」

そういつて自分の部屋に入り。  
とりあえず見回してみた…。

「にしても…」

ベットにクローゼット 机 椅子 ソファー 冷蔵庫 って冷蔵  
庫？

近寄って開けてみると、ひんやりとした空気が流れる。  
奥のほうに水晶のようなものがあり冷気を放っていた。

「ふむ…、生活にはこの水晶のようなものが使われてるんだな…。  
科学の代用品か…」

視線を机の上に向けると、教科書や文房具、ノートなどが積みあ  
がっていた。

机の前にあつたイスに座り、手に取ってみる。

魔法論 魔法概論 各属性の基本と応用 錬金 エンチャント  
あとは日本にもあるような数学やら歴史やら。

にしても…。30冊近くあるな…。数学は中学生レベルだから楽  
だが…、

他のは初めから学ぶことになるな…大変だ。

「魔法…か」

呟いてみた。

魔力は在っても使えないとは…。

普通小説だと、異世界にきたら最強になるんじゃないのか…？  
現実はずらいな

『ふぁー やっと一人になってくれたー』

ビクッ

いきなり声が聞こえた。

あたりを見回してみるが誰もいない…、気のせいかな？

『こっちですよこっち！』

声が聞こえる方には誰もいない。

ふう…、ついに幻聴まで聞こえるように。

引きこもりのオタクになったはずはないんだがな。

一応学校いったし…、そこまで重症だったか俺？

『懐中時計ですよ！ 机の上の』

手に取ってみる…

………

さっきと変わらない。

『いえ、変わりますって』

完全に時計から声が聞こえる。だが…、

「すまん、いくら俺の守備範囲が広くても時計は範囲外だ。あと心の声に答えるな」

まったく油断も隙もあつたもんじゃない。



心の声まで聞こえるとは。

『心の声が聞こえるのなんてあたりまえじゃないですかー？ だって私は刻様の心みたいなものですから。』

刻様ときたか。

なぜそこだけ敬語なんだ…。

『まあ詳しくはハシヨリますがー』

ハシヨるなんてよく知ってるなコイツ…。

『刻様の中には“白の本”が入っているのですよ。入っているって言っても表層じゃなく深層に』

チツ、やっぱり入ってたかアイツ…、おれのホールを狙ったにつくき本が！

『それを複写して魔導具にしたわけですから、私が出てきたんです  
「おいっ！ ハシヨりすぎだろ！？ まったく繋がってないし。全然理解できない。」

んむ。本当に理解できない。

こいつはアホなのか？ アホの子か？

『アホアホ言わないでくださいよ？ 刻様から出てきた私がアホなら、刻様もあほですよ？』

めちゃくちや生意気なのが出てきた。

『私はあの本のレプリカです。ほら、深層世界を複写して、それが私になったわけですから。刻様の深層世界は“白の本”に完全に作り変えられているわけです』

なんか怖いこと言ってやがる…。

気分的には、勝手に心いじくられた気分だ。

心を弄ばれた！

『表層と深層は役割が違うので、心は関係ありませんよ？ 強化されたと思っていてください』

心で会話できるのが悔しいが…。

てか、全然強化されてないぞ？

魔法も使えないしな。

『そうですね。肉体は強化されたのですが。魔法はページが足りません』

ああ、筈でぶら下がって平気だったのはそのせいか。

とりあえずページって言うのは何だ。

『“白の本”は元々全ページ埋まっていたんですよ。今は真っ白ですが。契約者が死ぬとページをすべて失って時間を戻すんですよ。契約者が生きていたならば、簡単にできます。でも、失ってからだと魔力がないので、本のページが代用します。そして魔力を失ったページは、次元も宇宙も超えて飛び散ります。契約者は時間を超えても全次元に一人ですから。蘇生させるには、理を崩す魔力が膨大に必要なんです。そして、ページを失った本は契約者の元に戻る』

つまり：“契約者”は俺。  
そしてページは飛び散っている。  
死んだのか？ 俺は？

『はい。“黒の本”の契約者に殺されました』

コイツは殺されたとハッキリと言った。  
そもそも何故俺は契約したんだ？

『そうですね。契約者のいない本は主を求めます。契約者になる前のあなたは病気でした。手術なんて意味のなさないうような。もって数か月だったでしょう。そしてあなたは生きたいと願った。死にたくない。生きれるのなら何でもすると。その願いを叶えたのが“白の本”です。すべての“本”は契約者を不老にします。そして刻様は代償として世界を渡った』

つまり、本は異世界に散ったページを集めたかったと？  
そのために俺と契約した？

『おおむね、そうです』

でもそれだとおかしくないか？

最初は全ページあったんなら、俺と契約しなくてもよかつただろ？

『刻様と会ったときは最初から真っ白でした。刻様のまえの契約者がいたのですが。死んだあとに巻き戻され。その後、本と再契約する前に事故でなくなりました。契約者を失ったんです』

巻き戻されたら同じ様に成長しないのか？

『そうですねーよく“パラレルワールド”とか小説であるじゃないですか？』

よく知ってるなコイツ、オタクか？

『だから、刻様の記憶を共有してるんですよ！ 水を差さないでください！ で、話を戻しますが。実際そんなものないんですよ。たしかに未来に延びる並行世界はあるんです。たとえば現在が1、未来が2としてジャンケンをします。未来の結果として勝ちと負けで2通りがありますよね？ ただ、そこで負けたら勝ちという世界は消滅し2の未来が1の現在になるんです。そこから並行世界に行こうとしても一本道なので勝ちなどという世界は存在していません。過去・現在が一本道、未来は複数って感じでしょうか。過去に戻るのとは時間を戻せば確実に同じ道にたどり着きますが。未来に進めると未来の可能性の一本に辿り着きます。そして、もう一度現にに戻り、未来に行くとまた違う未来に辿りつくんです。コインを投げて裏、表とありますが表が出たからと言って、過去に戻りもう一度投げても、確率は二分の一なんです。生物、植物は機械ではないので。ただ同じように繰り返すわけじゃないんです。自分の成功の未来を見つけて。よし、この道をゆこう！ と思っても。全く同じことは出来ないですよ？ それと同じなんです。だから今日の気分で道を変えたら事故にあった。なんてことも起こりうるわけです』

ふむ。じゃあ契約者もう一度ページを集めればいいってことか。そして世界を渡れと？

『そうですねー…、いまの刻さまには悪いのですが…』

OK。了解した

『契約破棄はできないのでこればかりは…』

いや。だからOKだって。

『え？ いいんですか？ だってアレですよ？ これから危険な世界をいろいろ渡らないといけないんですよ？ 不老不死で永久にページを集めるんですよ？』

不老不死…、つまりは永久に16歳…。

30歳までドーターでウィザードになるっていう夢が……。

俺は両手を床につき、うなだれた。

『……なんか変なところで落ち込んでいますね…。前のご主人さまは発狂するくらい嫌がってましたが』

ああ。それこそさっきの並行世界だろ。

同じ人間だって同じ用に成長するわけじゃない。

それに病気の時契約したのは俺の方だろ？

彼女は少し沈黙し、

『そうですね、はい。では、私も“今回”の刻様を正式な契約者。ご主人さまと認識します』

ふむ。そんなに期待してくれるのは嬉しいが俺は魔法も使えないんだぞ？

『さっきも言いましたがそれはページがないからですよ。ページは

生物に惹かれるので、そこから取り戻します』

殺せってことか？

『いえ、気絶させてでも構いません。この魔導具はレプリカですが、“白の本”にも繋がっているので回収が可能です』

と言うか、本のレプリカがなんで懐中時計なんだ？

『そうですねー、白の本の本質が時空なんですよ。他の魔法も使えるのですが。本質はこの二つなんです。この世界にくるのに“空間”を使っていますし。時間を戻すのに“時間”を使いました。他の本は一度消滅させれば完全に消えますが。白の本だけは時間を戻します』

ふむー…。

『それにこれは仮の姿ですので。私自信は白の本の意思のレプリカです』

意思って言うのはわかったが…、仮の姿？

『そうですねーご主人さまは私が認めたので戻ってもいいですね。この懐中時計を持ってくれませんか？ 直接本とラインをつなげるので』

言われた通りにやってみる。

瞬間、懐中時計が光輝いた。

俺は懐中時計をゴミ箱に投げ捨てた。

ホールインワン！

「いたた…、何するんですかご主人さま…」

「すまん、なんか光出したからビックリした…」

「びっくりして数メートル先のゴミ箱に的確に入れるなんて出来るはずないじゃないですか！」

正論だ。

「と言うか誰だおまえ？」

ゴミ箱から出てきたのは20センチくらいの少女だった。髪は白くふわふわしたロング。ロングっていうかめちやくちや長い。たぶん足元まである。瞳は小さくてよくわからないが紫だろうか？ 洋服は白いワンピースのようだが、腰のあたりで縛っており。後ろに大きなリボンが見える。見た目的には12歳くらいだが…、身長が低すぎる。

どんな成長したら20センチの12歳がいるんだ？

淡く虹色に光る羽根が4枚ついている。

ぱっと見、ゲームに出てくるシルフだ。

時空属性のシルフなんてありえないだろ。

「だからさっきの懐中時計ですって！ さっき変わるところ見たでしょ？ 魔道具召喚の時に、声かけたじゃないですか！」

「いや、光輝いてからみてないぞ？ アレお前かよ」

「それはご主人さまがゴミ箱にホールインワンしたからでしょっ！  
!？」

またまた正論。

何故か、こんなちびっこに言われると腹が立つ。

「で、お前の名前はなんだ？　いつまでもお前じゃだるい」

率直な感想だった。

「私には名前はありませんよ？　レプリカですし。なんだったら主人さまがつけてください」

「じゃ、ハク」

「ハクですかー、いい名前ですねーすぐ決めましたけど何ですか？」

「白いからだ」

「……」

白ハク　そのまま読んだだけ。素晴らしい名前だ。

ハクもいい名前って言ってるしな

「褒めた私がバカでした」

結果良ければいいだろ！？

「にしても、ページを集めるって言っても武器もないし魔法も使えないし。気絶させればいいっていてもそれすら出来ないぞ？　逆に殺されるのがオチだ」

「いえー大丈夫ですよー。それでも私は魔導具ですし！」

ない胸を張ってるが全然使えそうにない。

投げて使えばなんとかなるだろうか？



いや、確実に使い物にならないだろう。

「とりあえず私を握ってください」

言われた通りにやってみるか。

握ってみた。

思いつきり。

「ぐふっ！ 強い強い！ いたたたたたた！ 死にます！  
死んじゃいます！ 身とか出ちゃいますから！！？」

自分で握れと言つて、なんともな言い草だなコイツ。

力を緩めてやった。

「はあはあ……。肉体も強化してるんですよ？ そんな握力で握つたらいくら私でもつぶれちゃいますから！ って言つても死にませんが。剣で切られようと魔法で焼き尽くされようと懐中時計に戻るだけで。懐中時計は本の魔力で守られているので別の本にしか壊せませんしね。私も懐中時計もご主人さまか、私の意思で手元に戻りますから」

なんてしつこいストーリーカードろうかハクよ。

壊せないし捨てても戻ってくるのか…。

「じゃ、握つたら頭の中に武器を描いてください。剣でも杖でも銃でも何でもいいです」

ふむ…目をつむって思い描く。

杖は 魔法使えないから却下。

銃は 当たらん絶対に当たらんよ。

無難に剣だな。イメージイメージ。

純白の剣……。

雪のように白く……。

美しく反り返った日本刀……。

するどい切れ味……。

剣筋は速く……。

絶対に折れなく。

歯こぼれしない刀。

感覚でハクの体が変わったのがわかる。

質感も心地よく手に馴染む。

目を開いてみる。

手には白銀に輝く刀。

するどく、刀身は1メートル程だろうか？

柄も白く、美しい装飾がほどこしてある。

柄の下部には、懐中時計のなごりのような白銀のチェーンがついている。

少し振ってみると。

速い。

刀の軌跡に、雪のような光の粉が舞う。

重さを全く感じない刀。  
重さがないのにこれで切れるのだろうか？

『ご主人さま、作ったものに名前を付けると、次からは名前を呼ぶだけ、名前を思い描くだけで同じものが構築されます』

刀から声が聞こえる。

頭の中に直接流れて来る声なので、普段使っても大丈夫だろう。

名前か…、ハクで構成されて俺が使う刀だから 『白刻刀』だ。

『また安直ですね 白く刻む刀ですか。白、何も無い無。対象が無に帰るまで刻む刀。安直ですが悪くはないですねー』

安直安直言うな！

一応考えたんだからな二秒くらい。  
てかこれ切れるのか？

軽すぎて弾き飛ばされそうだ

『大丈夫ですよー。空間ごとねじ切れますから！』

「……ハ？」

思わず声に出してしまった。

『言い忘れてましたけど、私がご主人さまを認めたことで、完全な本の主になったんですよ。ページがないので完全な力は使えません。が、本の本質。つまり時空属性が使えます。もちろん本来の力では使えません。本質はページを集めることに高まっていくので。異世界移動はまだ使えませんね。空間接続ならある程度は使えると思います』

ますが。普通に空間を切るくらいなら出来ます。時間のほうは未来に行ったり過去に行ったりは出来ません。って言うか。これするとページが吹き飛ぶので永久に使わない方がいいでしょう。ただ現在の時間を引き延ばすくらいならできると思えます。そんなご主人さまが刀を持ったら最強ですなー』

ハクがケラケラ笑っている。

試しに近くのイスでも…。

シュツ

スッパリ切れた。

抵抗も何もなくスッパリと。

空気の音しかしなかったぞ？

そして気づいた。

ああ……、イスなくなつた…。

『ご主人さまが切りたいと思ったものなら切れます。この世界の人たちと違って、ご主人さまの魔法は精霊の補助なんて必要ありませんので詠唱もいりません。詠唱の“属性+形+名”と言つのは精霊ありきなのです。属性〓どの精霊を呼ぶか決める。形〓精霊に何をしてほしいか教える。名〓詠唱者がだれか。なのでご主人さまの場合。属性・形・名〓自分の内の力なので思い描くだけでいい。とゆうことになります』

たしかに最強だと思う。

俺はハクに戻るように頭の中にイメージを浮かべた。

剣が白く輝いた。  
光が納まるとハクを握っていた…。

「いたいたいたいたい！！ だからなんでいつも強く握るんですか！？」

「柄は強く握るだろ？ しかも、そんな強く握ったつもりないし」「ご主人さまの体は強化されてるんですよ！！？」 石殴ったらくレター出来るかもしれないくらいなんですから！」

ハクよ…、強くしすぎだ。

俺はこれから手加減をまなばなければいけないのか……。

溜息をついて。

ふと、思い出した。

飯くってなかった…、思いだしたら腹へってきた。

「ハクお前って何か食べるのか？」

「ええ。別に食べなくても大丈夫ですが。その場合ご主人さまの魔力を食べるので、出来るだけ食事はしたいと思います」

「よし、魔力食われるのはなんか怖いからついてこい。飯いくぞー」

「はいはい！」

それから一時間ほどうるちよろしたが。

見つからなかったので、ハンネの部屋に行き場所を教えてもらった。

ハクは移動中、懐中時計になり。

食堂では、俺の膝の上で食べていた。

使い魔をつれている奴が何人かいたので隠さなくても大丈夫だったかも知れん。

明日は学校か…、魔法のことも何とかなっただし楽しくなりそうだ。

そう思いながら俺は眠りについた。

## 八話 初登校、最強の師匠（前書き）

関西弁わからなくてグチャグチャだ。無理に出さなければよかった。

捨てキャラ登場！アルデ…ヒト先生？自分も名前忘れました。

名前の間違いが結構あるっばいなので見つけたら報告してくれたらうれしいですw





「すまん、待たせたなー」

その後。

俺とハクで、言いあいになり。

結局、ハクの『懐中時計は息苦しい、息の代わりにご主人さまの魔力を喰べます』と、言う言葉で。

俺の頭の上に乗っけることで落ち着いた。飛べるらしいが、疲れるとのこと。

「ええよー。にしても“ソレ”使い魔かいな？」

と、言いながら。

俺の頭の上を指さしている。

“ソレ”とは、もちろんハクのことだ。

「いや。俺の魔導具のハクだ。まあ、歩きながら話そう。」

止まって話してたら遅刻してしまう。

そういつて歩き出す。

「にしても、めずらしい魔導具やなー？」

「はじめまして、ご主人さまの魔道具のハクといます」

「出来た使い魔やなー。おおきにー」

ハクは自己紹介をしている。

「そうなのか？ 他の人の魔導具って見たことないからなー、そういやアルのはどんなのだ？」

「ワイか？ ワイのはこれや」

そう言っつてカバンから取り出し、

見せてくれたのは、いかにもな銃二丁。

形的にはデザートイーグルのようなものか？  
かなり大きい。

「これはワイにとつての魔力の射出口みたいなもんやねん。せやから、弾丸も必要あらへんのや。連射も弾の大きさも自由自在やから便利やで？ もともと魔力制御とか苦手やさかいな、これのおかげで詠唱も必要ないんや」

便利なもんだな魔法。

詠唱は、属性とコントロールが銃にセットされており。あとは魔力の込め具合で大きさが変わるらしい。

「で、トキちゃんのハクにゃんはどうやって使うんや？」

ハクまで“にゃん”なのは置いておいて。

最もだろう。いかにも使い物になりそうにない。

まあ、見てもらった方が早いだろう。

そう思い、俺はハクを握る。

「いくぞー？ ハク」



「戻れ！」

そう言うと、手の平の上に、ぴくぴくとしたハクが戻ってきた。

「あつはははは！！　すごいんやなそれー！　音速の速さで飛ぶ魔導具かいなー？」

実際はただ強化された筋力で、投げただけである。  
めんどくさいので説明しないが。

「あ、その校舎裏の入口から入ればすぐ職員室や。ワイは先に教室行ってるさかい、ほな、後でなー」

「おーありがとな」

そう言って、挨拶を交わし。

俺が扉をくぐると。

目の前に職員室があった。  
ホント入って目の前だった。

コンコン

「失礼しまーす。」

中に入ると、事務の人なのか知らないが、女性が近づいてきた。

「ハンネ先生に呼ばれたのですが、いらっしやいますか？」

そうすると、事務の人(?)はニッコリと笑い、案内してくれた。

「あ、トキくん。おはよーお久しぶりです」

ニコニコしてるが。昨日あったばかりだ。しかも夜に。

そういえば、小動物は心臓の動きが速いから時間を長く感じるらしい。

人間の寿命100年とネコの寿命10数年は体感的に一緒だ。

ハンネもそうなのではないか？

「おはよ、ハンネ。相変わらず胸小さいな」

「そんなすぐ成長したら私はGカップです！あとですねー。たしかに、八時半といいましたが。ピツタリにこなくていいんですよー？<sup>ホム</sup> と言うか、もうちょっとはやくきてくださいよー。九時からH<sup>ホム</sup>Rなのにホントギリギリです。すぐいきますよーすぐー！」

すぐ成長してもお前はG無理だ。

がんばってBだ。

てか、九時からなら余裕なんじゃないか？

## 教室

そんな事を考えていた時期がボクにもありました。

校舎の大きさからしてわかりそうなものだったが。

遠い。遠すぎる。

教室前に着いた頃には、職員室を出てからホントに30分近く経っていた。

「今日からこのクラスが私の担当になりましたので、一緒に入りましょう?」

ここで“責任”が出たか。

大方、他の先生に自分で入れたんだから面倒見る。とか言われたんだろうな。

「でわ、私が先にはいるので。呼んだらはいってきてくださいね!」

「

ガララララー

『みなさーん。席についてくださいー。』

そついいながら手を叩く音がする。

『ドラマにでも影響されたのだろうか？』

そこで手を叩く先生は初めてだ。

『今日から、私がFクラスの担任になりました、ハンネ・ベル“18歳”です。ハンネ“先生”と呼んでくださいね』

“18歳”と“先生”と言つところを強調している。『『『『『わあー』』』』』とか聞こえる事から、ハンネの人気がうかがえる。

たぶん妹としてだろう。

と、その時。

カバンに突っ込んでいたハクがのそのそ出てきた。

そして、ふわふわ浮いて、俺の頭の上に移動した。

「ご主人様ひどいです…」

無視だ無視。

『あと、今日から転校生が入ります。仲良くしてくださいねー？  
ではトキくんはいつてきてください』

転校生ってめちやくちや恥ずかしいな、とか思いながら、先生の隣に向かって歩いて行く。



入った瞬間にザワツ。つとなった。

「はい。それではトキくん自己紹介をお願いします。」

そして、一旦深呼吸し、口を開いた。

「本日付けで、このクラスに入ることになりました。トキキサラギです。魔法学園という場所には、初めて通うので、不慣れな点多いですが、よろしくおねがいたします」

そしてニコツつと笑ってみた。

『キャアーーーー！』

うえっ!?!?

また気持ち悪がられた!?!?

くそっ、どこに言っても結局ダメなのか!

男子なんか、めっちゃくちや睨んでくるし!

「はい。それでは皆さん仲よくしてあげてくださいね? トキくんの席はー」

ハンネはしばらく空席を探していたが、『あそこですー!』と指さす。

ピシッと指を指した。

その席は、アルの隣だった。

「よろしゅーな！」

「ふう……、知り合いがいて助かった。よろしく」

と、席について軽く挨拶をした。

とりあえず周りを見回してみる。

男女比率は半々くらいだろうか？

教室の広さは日本の学校を少し広くした程度。

机は横一列に繋がっているタイプだ。

後ろの列になることに前が見えやすいように高くなっている。

「でわー、連絡事項に入ります。前の先生が言ったかもしれませんが。夏期休暇までは各自自由に授業を受けてください。単位をとるために授業をたくさん受けてもいいですし。自分の属性魔法だけを伸ばしてもいいです。別に全く関係ない授業受けるのも可。そして休暇明けからが本番ですね。パーティーを組んで、課外授業や魔物討伐、使い魔召喚。闘技大会などがあります。はっきり言っちゃって前半単位とらなくても単位足りちゃったりもします。もちろん後半優秀な成績を残せばですが。自信のある人は前半外部ギルドの依頼など受けていてもOKです。では、HRを終わりにします。各自、自分の受けたい教室に移動してくださいねー」

そう言って、先生は教室を出て行った。

瞬間、

「ねえ。どこの王都出身？」

「黒髪黒瞳つてめずらしいよねー！」  
「うわー髪さらさらー肌しろーい」  
「彼女とかいる？ 好みのタイプは？」  
「頭の上に乗ってるの使い魔？ かわいいー」  
「属性はなに？ 私は風だよー」  
「あの…アルブレヒト君と裸で抱き合ってたってホント？」  
「………キヤーーーーー」

恒例の質問タイムが始まった。

「えー、都市は秘密。彼女はいます、心の中に。好みは妹。頭の上のは魔道具で。属性は……秘密。裸で……、って何でそんなこと知ってたんだよ!？」

とりあえず答えてみたが、

馴れてないのでどう対処すればいいかわからん。

とりあえず此処は……。

ふあっさあー

おもむろに髪をかきあげてみた。

あれ？

ネタでやったのになんで顔赤くなってるの？

『ご主人さまは自分の見た目について、もうちょっと知った方がいいですよ？ ちなみに『彼女はいます、心の中に』って言うは、私

のことでですか？』

黙れハク！

てか、見た目は最悪だろ？

だから今まで嫌われてたんだろっし。

『はあ……、それはご主人さまが妹を愛してる、君たちの妹をくれとか自己紹介で言うから……、まあ、いいですけど』

溜息をつき、ハクは静かになった。

なぜだ？

周りは未だに真っ赤になってボーっとしてるな。

「ははは、ええなーモテモテやないかー？」

そこで声をアルが声をかけてきた。

全然うらやましそうにない顔で

嫌味だな。

お前はモテるだろうが。

「あー。転校生の恒例行事では？」

とりあえずこんなもんだろ？

「そう言えばさ？ 各自自由に移動っていったけど。どこに移動すればいいんだ？」

「そやなー」

そう言いながら、アルは自分のカバンをあさりだし、

一枚の紙を渡してきた。

「ワイは受けたい授業はメモしたさかい。それあげるわ」

紙に視線を落とすと、科目名と場所が記してある。

「おお、ありがと。にしても多いな…、50教室くらいあるんじゃないかこれ？」

めっちゃくちゃ多い。

「ほらあれや。例えば水属性だけでも理論 基本 応用 合成 治療 基本実戦 応用実戦 合成実戦 治療実戦ってあるんや」

と、いいながら指をさしていく。

ふと、思った。

「なあ、時間とか空間属性はどこにあるんだ？」

探したけど見つからなかった。

「そんなのあるかいなー！ そもそもそないな属性持つてる奴がないんやから、在っても無駄やし教える先生もいないやん」

アルはケラケラ笑っているが。

ここに持つてるやつがいるんだよ。

「そんでトキにゃんはどこ行くんや？　ワイは最近、火の応用実践やな。と言うか、そこだけや。トキにゃんも火の属性って言ったしくるかいな？」

科目を眺めていると。

一番下に剣術実践と言うのがあった。

他の教科は学、実戦というのがあるがこれは実戦だけだ。

「いや、今日は他のところ回ってみるよ。いろいろ見ておきたいから。

この用紙サンキューな」

「ほな、また後でな」

そう言いながら、アルは教室を出て行った。

俺も移動しようと思ったが、まだ周りの女子が真っ赤になっていたので。

キザっぽくネタでウィンクなんてして部屋を出た。

その後、女の子たちは昼休みまで同じ場所で真っ赤になっていたとかないとか？

校庭

「剣術は…校庭の左奥か」

俺は放出系の魔法が使えないので剣術にしようと思った。

「ご主人さま？ 剣術を受けるんですか？」

ハクが声をかけてきた。

「そうだなー、武器も刀だし、時空属性はなかったから剣術が一番良いだろ？」

「そうかもですね。それにご主人さまなら余裕ですよ。相手ことねじ切っちゃえばいいのです！」

なんともハクは怖いこと言う。

それじゃ俺は学べないだろ……。

「アホか！ 剣術学びにきてるんだから殺したら意味ないだろ！？」  
ん、そう言えば俺の剣は空間ごとねじ切れるのか？  
それじゃ何も学べないかもしれない。

「普通の剣とかに出来ないか？」  
「できますよ？ ご主人さまがねじ切ろうと思わなければ普通の刀  
ですね」

出来るらしい。

「とりあえず、もうすぐ着くから、懐中時計になってくれハク」  
「了解ですー」

そう言ってハクは懐中時計に戻った。  
それを手に握り、剣術実戦の講義場所に行ってみる。

そこでは、一人袴姿の男性が、刀で素振りをしていた。  
近づいてみる。

肌色の白い長身。  
黒い髪に黒い瞳。  
少し釣り目の整った顔の男性だ。



男性はこちらに気づき、ほほ笑んだ。

「めずらしいね？ 剣術を習いに来たのかい？ 多分一年ぶりの生徒だ。うれしいなー」

優しそうな声音で話しかけてくる。

それにしても一年ぶりって…。

たしかに魔法が使えれば剣術は必要ないだろう。

よくこの先生は解雇されなかったな。

「はい。よろしくお願いします。Fクラスのトキキサラギと言います」

「失礼、先に名乗らせてしまったね。私は剣術実戦担当のアドルフ・ブラル。よろしく」

思いつきり日本人のような見た目だが、横文字の名前だった。

「では、授業の説明をするよ？ まず、剣術と言っているが少し違う。たしかに剣も使うが体も使う。つまり、魔法を使うのも自由だ。もちろん肉体戦でもいい。勝敗にこそ意味がある。どういう事は、一度やってみればわかるよ」

それはそれで都合がいい。

ページを集めなくてはいけないので結局は勝敗なのだ。

剣を落として、その間に魔法で焼き殺されても卑怯とは言えないからだ。

「とりあえず準備運動から始めようか？ いきなりすると危ないからね？」

「ハイ！」

「じゃあトキ君この校庭10週しようか？ 僕も一緒に走るからね」

その言葉に唾然とした。

そもそもこの校庭対面まで1キロくらいある。

それを一周したら約3〜4キロになる。

それを10周、しかも準備運動ときた。

と、思っている。

アドルフ先生、もとい師匠は走り出している。

………ついて来いと言っことか。

「はあ……はあ……はあ……し……し……ししょう……」

「ん、なんだい？」

「授業は……はあ……はあ……一時間のはずでは？」

そうなのだ。

走り終わったら、すでに一時間以上かかっていた。肉体強化してこれだ。1キロ二分台で走っている。ちなみに師匠は俺の半分程度の時間で走っていた。

人間なのだろうか？

「うん、僕の授業はね。午前の10時から午後6時までなんだ」

愕然としたが……、もう何があっても驚かないと誓った。

「あの……お昼は？」

「トキ君。人間はね。一年食べなくても生きていけるんだよ？」

などと言っていた。

つまり食事は抜きなのだろう。

そもそも一年食べなかつたら確実に死ぬ。多分この人なら大丈夫なのだろうが、それを一般人のように言わないでほしい。

「さて。じゃ、10分程休憩したら模擬戦を始めようか？ 得物は木刀でいいよね？」

「はい……」

もう抵抗することは諦めよう。

10分後

「では、始めるとしようか？ 木刀はあるかい？」

俺はハク（懐中時計ver）を取り出して木刀を再構成した。少し振り返った白刻刀程度の長さの木刀だ。

「ほう。その魔道具は木刀になるのかい？」

「いえ。想像できるものなら何にでもなります。」

「便利な魔道具だねえー」

お互い木刀を前に構えた。

「あ、魔法も使っていていいからね？ 刀と魔法をどう使い分けるかってのも重要だから。さあ、どこからでもかかっておいで？」

舐められてるてるな…。

なら、素人の意地をみせてやる。

俺は時間の魔法を使った。

周りの時間を引きのばしてゆく。

限界の三倍程度になったところで、

ドンッ！！

地面を思いっきり踏み土煙りを上げ、一直線に師匠に向かって行く。

常人なら、俺の肉体強化と三倍の速度。

土煙りが上がって消えたと思うだろう。

100メートルを6秒で走れるようなやつの子三倍だ。

一秒で50メートル以上進むのだ。瞬間速度、時速180キロメートルである。

車のように、徐々に180キロになるなら見えるだろう。  
しかしこの場合、止まっていた人物が一瞬で180キロの速度に達する。

ガッ

しかし、師匠はそれすらも防いでみせる。

初刀が弾かれ。がら空きの脇腹に、師匠の木刀が襲い来る。

師匠の木刀に俺の木刀を当てるが、防ぎきれないとわかった時には、師匠の木刀の速度を俺の木刀で押さえながら上に飛び上がる。

視界が逆転し、師匠の剣筋の上に木刀で逆立ちしているような状態だ。

その体制のまま師匠の頭を狙う。

しかし、師匠の木刀の柄の部分。

つまり、手より下の数センチの部分に弾かれた。

柄の部分を殴ったことにより。

師匠の手が支柱となり、カウンターとなって刀身が俺に襲い来る。

ギリギリのところ、木刀の手に近い部分で受ける。

強度の差で師匠の木刀が折れ飛んだ。

中に太い鉄芯がはいつていることから相当な強度のものだが、この攻防には耐えられなかったようだ。

師匠は目を見開いたが、同時に何かを呟やき。

折れた木刀を俺に突き上げた。

俺はまだ空中で、避けることもできない。

確実に受けなければならぬ。

さきほどから撃ち合うたびに。

俺は重心を入れ替え吹き飛ばないよう、空中でいろいろな方向に

回転している。

そして師匠の折れた木刀を受けようとした瞬間

俺は吹き飛ばされていた。

ドッ

木に背中を打ちつけた。

バキッ！

木が折れ、更に吹き飛ばす。

ドゴォン！！！！

後方の石で出来た学園の外壁にめり込む。

腹が痛い……。

木刀に気を取られている間に掌底を受けたようだ……。

師匠の左手に風が渦巻いていることから、風を使った掌底だと思う。

師匠と俺の間に太い木が一本倒れている……と言っか、半ばから折れている。

そして俺は分厚い石の壁に完全に埋まっている……吹き飛ばされ、木にあたり、木は折れ。

更に石壁を破壊……。

俺が飛び上がることで自体、師匠の掌の上だったのだらう……この結

末も。

だけど……。

折れた時に目を見開いたのは、確実に予想外だったのだろうな。  
少ししてやったり……だ。

ズサアア

砂が落ちた…俺が最初に踏みつけた砂が。

つまり。

確実に魔法は発動し、時間は三倍になっており、それでも一太刀も入れることができず負けたってことか。

敵わねーな。

だけど、この人に教えてもらえば確実に強くなれる。

そんな事を思いながら。

俺は意識を手放した。



意識を失う直前に、

「あ、ちなみにこの授業の単位は俺に1000回中1000回勝たないとあげないから」

とか、聞こえた……。

## 八話 初登校、最強の師匠（後書き）

次の話から一気に強くなるよ主人公！

問題は起承転結の起でまだ全員出てないし…

短いはずの起すらおわらない。この話で言ってるとおりで承でイベントとか、言っていないイベントとかいっぱいあるのに）・・・

しかもひとつ目の世界で。。

数百話になるような勢いです、）・・・

同時執筆しようかなあ…

九話 剣術訓練の成果。ハンネとのやりとり

学生寮・屋上

シュッ シュッ シュッ

「ふうー」

「ご主人さま。最近私、懐中時計と刀にしかなくなってないんですが」

ハクが文句を訴えてきた。

「仕方ないだろー？ 師匠がずっと“アレ”だったんだから」  
「ううー……、そうですねー」

唸り声をあげてるが、

「よし、ハク元の姿に戻れ」

瞬間ハクは光輝き、元の姿に戻った。

懐中時計の姿へと、

『なっ！？ なんでこっちなんですか！？ 普通元の姿っていったら人型でしょ！！！？』

すまん。

お前の元の姿忘れてイメージできない……、自分で戻ってくれ。

『うう……ご主人さまの……人でなし』

そう言いながらも、元のシルフのような姿に戻る。

「にしても……、師匠きつかったですね」

「ああ……」

師匠が“アレ”とは剣術実戦のことだ。  
思い出したくもないが忘れることもできない、精神的に。

まず、あの時気絶して。

目覚めたら次の日の朝だった。

もう行きたくなくなった。

だが現実には甘くない。

教室にいた俺の元に、師匠が来て、俺を無理やり校庭に連れて行き、稽古をさせた。

毎日毎日稽古をさせられた。

10時から18時とか最初は言っていたが、終わる時間は、いつも0時こえてからだった。

休日は休日で、家まで迎えにきて朝の5時から0時まで稽古をさせられた。

稽古っていうのは間違っているかもしれない。

能力は実戦でこそ身につくと言っていて、毎日相手をさせられていた。

最初の一か月は、校庭での訓練中記憶が途切れ。

なぜか気がつくと自室のベットで朝を迎えていた。

もちろん、体中ぼろぼろで。

三か月目から朝の鍛錬を自分で行うようになった。

肉体が強化されていても、このままじゃ死ぬと思ったからだ。

まず、時間属性の能力を上げなければ、師匠には絶対に勝てないと思った。

朝の練習は、自分の引き延ばせる時間を、限界まで高めてひたすら素振りをする。能力が上がれば素振りの回数も増えていくのだ。

夏休みに入っても師匠が来た。

休日プランでひたすら実践を経験させられた。

途中からは、師匠から解放されるために頑張っていたようなものだ。

そしてついに夏休み最終日。

師匠卒業試験をうけ、100回倒し合格、解放されたのだ。

今日から学校なのだが、なぜか体が勝手に目覚め、  
暇なので素振りをしていた。

「でも、そのおかげでかなり鍛えられてよかったですかー」  
「まあな。特に能力のことが把握できてよかったな」

実際、つらかったが師匠のおかげで得るものが多かったのもたしかだ。

聞いた話だと。

師匠には、俺の動きは見えていないらしい。

ただ、どこに攻撃がくるか、どうやって動くかがわかるらしいのだ。

それがわかれば、そこに刀を移動させておけば勝手にぶつけてくるらしい。

ただ、俺の動きが早すぎるために。

俺の攻撃を“先読み”ではなく対処してるように見えるのだ。

そのノウハウを師匠から実戦で学び。

同じことが出来るのならば。

俺の時間魔法で俺が断然有利になる。

そして師匠に勝ったのだ。

俺がこの数カ月で学んだことは。

まず、師匠の太刀筋。

相手が防げないタイミングで攻撃する太刀筋だ。

そしてどこから来るかわからない。予測ができない太刀筋。

更に時間の魔法はひどく進歩した。

最大50倍まで引き延ばせるようになった。

つまり、最後のほうは。

朝の一時間の鍛錬で、二日以上素振りをしているということだ。

普通の人間だったならば、人より早く老いてしまっただろうが、俺は不老だ。

そんな心配も必要ない。

そして、空間魔法もだいぶ進歩した。

最初は刀で、空間をねじ切ることしかできなかったが。

今では刀から霧散と放出が出来るようになった。

基本魔法が使えない俺は、刀の軌跡を切っただけでは意味がないのだ。

火の玉を切ったとしても、切った数ミリの厚さ以外、そのまま飛んできて焼け死ぬ。

そのための霧散。

軌跡+放出量の空間の物がそのまま消える魔法だ。

あとは、放出。

基本魔法のように前方の物体を切り裂く魔法だ。

刀を振ると、斬撃が前につき進むと思ってくれたらいい。

もちろん空間ごとねじ切れる。

最後に霧散の副産物として生まれた空間倉庫と空間接続。

空間を開き、時空の狭間に物を収容できる。

中は時間の干渉をうけないので、食べ物なども新鮮なままだ。

接続は、空間と空間をつなぎ移動できる。

転移魔法があるか知らないがそんなようなものだ。

もちろん人前では使わないが。

他にも副産物があるが、おいおい使っていくと思うからわかるはずだ。

以上が俺が得たものだ、ハクによると、これ以上はページが集まらないと使えないらしい。

今現在出来ることが、基本で使える最高値なのだ。

「じゃ、学校行くかー？ 新学期初日から遅刻はまずい。」

「ですねー。今学期から本番ってハンネちゃんも言っていました。使い魔召喚とか楽しみですよー、時空属性のご主人さまが何を呼び出すのか」

そう言って、ハクはケラケラ笑っている。

「ま、たしかになー。ホラいくぞー？」

そう言いながら、口を両手で押さえてクスクス笑ってるハクを置いて部屋への空間を開く。

風呂に入り、服を着。準備が終わった時にふとおもった。

最近ハンネにキスしてないな…。

おもったら即実行。



俺の格言である。  
時間もあるしな、うん。  
カバンを持ち空間をつなげる。

ハンネの部屋へ。

## ハンネの部屋

てれってれっ  
こっ言っのなんかドキドキするなー

俺にとってプライベートなんて皆無だ。

そしてベットに寝ているハンネに近づいていく。

「はひゅ…すー…すー」

なにやら寝言を言っている。

まだまだおねむタイムのようだ。

かわいらしいハンネの寝顔を見つめて、おもむろに俺は…、

「はむっ！」

「ふみゅっツツツ!!?」

空気が漏れないように口を唇で封じた。

ハンネは驚いて起き、目を見開いている。

そして……。

ズキユウウウウウツッ!

思いつきり吸い込んだ

「んんんんんんんんんんんんんんん！?!?!?!?!?」

掃除機も真つ青な吸引力だ  
逆人工呼吸の完成である。

ズキューーーーズキューーーーズキューーーーズキューーーー!

「んーんーんーむーーーー!!!!!!」

ハンネは俺の背中をバンバン叩いている

チャリーンチャリーンチャリーン!

ハンネからなにか大切な物が抜けていく

「んあえーーーー!!!?!?!?!?!?」

ピチューーーーン！

ハンネの機体は消滅した。

「……くたあ」

「ぶはっ！」

##### ミッションコンプリート！ エクセレーント！  
#####

経験知を1204得た。

刻のレベルが上がった。

刻の吸引力が上がった。

肺活量が上がった。

男としての格が上がった。

童貞レベルが下がった。

#####

##  
##  
##

ハンネは死んだ魚のような目をしている。

「ハッ!!?」

ハンネは復活した。

『闇よ!』

ハンネの無詠唱闇魔法。

闇はあらゆる方向から刻に向けて針を伸ばしている。

「……………」

刻は無言で空間に穴をあけた。

ハンネの魔法は宇宙のかなたに消えて行った。

「つてええッ————…はあはあ……………何するんですかー!?!?」

真っ赤になって抗議するハンネ。

最後まで息が続かなかったようで荒い息を繰り返している

「いやいや、きわめて重大な事件が起こったんだ」

俺は腕を組んで難しそうな顔をする

「はあ……で。どんなことが起きたんですか？それと、キ、キスは関係あつたんですか？」

ハンネは、真っ赤な顔しながら恥ずかしそうに、  
布団を目もとまでかぶって上目づかいで俺をみていた。

真っ赤になって。

ハンネはかわいいなー。

「はい。とても大変なことです。俺の命に関わるかもしれません」

『え？』とキョトンとしているハイネ、

ガバッ

勢いよく布団から起きあがった。

「な、なにがあつたんですかトキくん！？ 私になんでもいってください！ できることならなんでもしますので！！」

必死になっているハンネ、

「はい。だからしてもらいましたよ?」

最高の笑顔で笑いかけてやる。

「最近キスしてなかったからしてみました」

さらりといった。

爽やかに。

「ううー」

真っ赤になりながらも、まんざらでもなさそうなハンネだった。

「こ、こつんどからは、ちゃんと行ってからにしてください……」

もうかなり慣れたハンネである。

実はもう100回くらいしてるので慣れてきているのだ。

ちなみに俺は、ハンネを妹だと思ってるので、キス以降はしていないし、しようとも思っていない。

「そう言えばハンネ」

「なんですか?」

俺は視線をすこしずらした。

たっぷりと時間を起き、

「あと15分で学校はじまるから」

言い放つてみた。

ちょうど、後15分になるまでハンネの右上の時計を見ていたのだ。

ハンネの表情はみるみる青ざめてゆき。

「なっ！　なんでいつてくれなかったんですかあああああああああああああ！！！！？　新学期早々遅刻ですか！！！！」

そう言いながらハンネは、ピンクのパジャマから、薄い赤色、袖がフリルになっている洋服と膝の少し上まである黒いスカートに着替えた。

これは俺が服装を変えさせる。

と、ハンネファッションショーをさせた時の服だ。

その時に何回も目の前で着替えさせていたので慣れたようだ。人は慣れるものだな。



ハクも、最初の方は俺の全裸を恥ずかしがっていたものの。今ではお風呂まで一緒に入っている。

「だから言ったじゃん」

俺はケラケラ笑ってみる。

「遅いです！ 学校まで何分かかると思ってるんですか！！？ トキくんも遅刻じゃないですか！」

洋服に着替えたハンネが腰に手をあて、涙目でぶんすか怒っている。

髪がぼさぼさでなんとも威厳がない。

「で、先生は職員室に一旦行かなくていいんですか？」

「それは大丈夫です。必要なものは家に持って帰ってきてるので」

ふむ……、にしてもハンネは忘れてるんじゃないだろうか？

「ハンネ、敬語かつたるいからやめていい？」

「はあ、いまさらじゃないですか……。別にいいですよ」

敬語とかほんとかつたるい。

敬語なんて死ねばいいのに。

「OK。ってかハンネ忘れてるだろ？ おれの属性」

『あ』とハンネ。

そして、おもむろに抱きついてきた。

「ほんとトキくんはべんりですねー これから毎日きてくださいよーそうすればゆっくりねていられますー」

そう言いながら、俺の胸に頬をすりすりしている。

寝ている時にキスされたことはすっかり忘れているな。

「それでもいいぞ。気分によってはキスするが」

「あう……」

ハンネは真っ赤になった。

にしてもコイツは、そのぼさぼさな髪で学校に行くつもりなのだろうか？

「ハンネ、ちょっとこい。ここだここ」

刻は膝の上をぼんぼん叩く

「……んっ？」

ストンツ

胡坐をかいた俺の膝の上に、足を延ばしてすっぽり納まるハンネ。

『来い！ハク！』

「はいなんですかー？ ご主人さむぎゅッ！！？」

目の前に現れたハクをむんずと掴みとった。

『ハンネの櫛』

光輝き形を変えるハク。

ハンネの地肌と髪を傷つけないように、動物の毛がブラシになっている櫛に変わった。

前にハンネの髪をブラッシングするときの名前をつけた櫛だ。

それを使い丁寧に髪を整えてゆく。

『ご主人さま、そのために呼んだのですか？ 私は武器専門なんです。』

別にいいだろ？

便利なものは使う主義なんだ。

『まあ、いいですけどねー』

「ふっふっん んっんーんー」

ハンネは足をぱたぱたさせながら、鼻歌を歌っていて気持ちよさそうだ。

「にしても便利ですねーハクちゃんってー この櫛すっごく気持ちいいですよー？」

何度もブラッシングされているので慣れたものだ。  
妹って言うよりペットみたいだ。

数分後、俺は髪からブラシをはなした。

「あっ……」

残念そうだが仕方がないな

「ほら、ハンネ時間だ。あと3分」

「むー……わかりました。また今度やってくださいね？」

人指し指を立て、頬を膨らませて言ってきた。

「わかったって、ほら行くぞ。ハクも元に戻れ」

そう言って教室の廊下に空間を繋いだ。

九話 剣術訓練の成果。ハンネとのやりとり（後書き）

うう・・・ハンネ好きだから仕方ない！最初は捨てキャラにしよう  
とおもってたんだけど使おう。うん。



「でわー！ さっそく使い魔召喚おー！ ……」

「…………ワア……………」

「の前にすねー」

ズサアアアア

クラスメイトが皆、立ち上がろうとしてそのまま前にのめりこんだ

つまりみんな使い魔召喚で浮かれているのか？

わからなくもない。

内心俺もワクワクしてる。

だってそうだろ？

RPGとか小説でしか見たことがないようなモンスターが自分の  
使い魔、もといペットになるんだから！

最高じゃねーかヒヤッホーイ！

「皆さんには、パーティーを組んでもらいます。パーティーはですね。これから課外授業や外部のギルドと連携した依頼、闘技大会などでも使うので大事なんですよー？ 今決めても抜けたり入ったりできるんで気がるにどうぞー！ 人数は3〜5人で自由に決めてください！」

そういつてハンネは教室の隅のベットへ ってベットッ！？  
なんでベットがあるんだ！？ ってもう寝てるし。

うん。

かわいいから許す。

パーティー決まったら俺も一緒に寝よつと。

「なー、トキにゃん？ もちろんワイとくむんよなー？」

そんなことを言いながら、アルはこっちを向いた。

「ああ、別にいいぞ？ 自慢じゃないが、師匠のせいで一学期は誰も友達が出来なかったからな。友達なんてお前しかいないぞ？」

うん、ほんと自慢にならない。

寂しくないよ！

寂しくなんてないからね！

「よかったわー、トキにゃんがダメだったらワイ一人だったわきつとー」

そんなことを言っているアルだが……、周りの女子の目がギラギラしてる。

アルモテるだろうからなー…。

嫉妬に刺されるかも。

「せやなー、そや！ ワイとトキにゃんであと一人ずつ決めるってのはどや？ 4人になるやろ？」

まあ妥当かな。

別に俺は誰でもいいが。と言うか知り合いいないから難しい。



最低アルが一人見つければ3人だ。

「じゃー、それでいこうか？ お互い頑張っで見つけようぜ？」

「まかしーな。じゃ、さっそく行ってくるわ」

そう言っアルは離れて行った。

しかしな……、見つけるって言っても俺は。

周りを見回してみる。

女子の視線が怖い。

男子の視線が痛い。

……無理だ。

ふと、視界の端に窓の外をじっと見つめている女の子が見えた。

俺は、その子の元に近づき前に座る。

その子がこっちに気づき顔を上げた。

黒い髪をツインテールにし、少し釣り目の瞳は、血のように赤く、  
白い肌の女の子だった。

雰囲気的にツンデレだろうと、思った。

「君、まだパーティー決まってる？ 俺、トキキサラギって言うんだけど。よろしく。よかったらウチのパーティーはいらない？」

ここでツンデレだったら「なんで私が入らなきゃいけないのよ！  
フンッ！ で、でもいいわ！ アナタがどうしてもって言うなら

はいつてあげる！』みたいになるだろうが、

ニコリと微笑みを口を開いた。

「わたしはクラウディア・ベーム。よろしく願い下げです」

新しい言葉うまれたー！ー！ー！？

てかツンデレじゃない！

毒舌だった！

じつとこちらを見つめてくるクラウディア

「ねえ」

「ん？」

「あなたは気持ち悪くないの？」

なんだかよくわからないことを言った。

「は？ なにが？」

「だからこれよ！ これ！」

自分の瞳を指さして言う

「ふむ」

全然意味がわからないが感想を言えってことか？

「きれいな瞳だな」

「なっ！？」

「黒い髪と白い肌に真っ赤な瞳。色彩のバランスがいいな」

本心だった。

クラウディアはなぜか真っ赤になって俯いてしまった。

「……なんで？ 人間と魔族のハーフなんて気持ち悪いでしょ？」

ハーフだったらしい。

「別に？」

そんなの地球で、日本人と欧米人のハーフとたいしてかわらない。白人と黄色人が、人間と魔族になっただけだ。見た目が一緒なら関係ないだろう。

さすがに動物と人間のハーフとかだったら驚くが。

「……ぐすっ……うぐ……」

いきなり泣き出した。つてかまってまで！？

俺何かしたか？

いや、断じてしてない！

神にかけていい！ 無神論者だけどな！！

「あーご主人さまがまた女の人泣かせてるー」

おい！ ハク！ テメーまたつてなんだまたつて！

「あのっ！」

いきなりガバッと顔をあげた。

涙をためて上目遣いって反則だろ……。

「わ、わたしを……パーティーにいらしてください……さい」  
「いいよ」

即答した。

「みんな気持ち悪がって……、パーティーどころか……友達もいなかったから」

真っ赤になって、じつとこちらを見つめてくる。  
目には涙をためている。

「はぁー……、ご主人さま天然ジゴローですね」

うるさいよ！

このエセシルフ！

「Bだな」

俺は唐突に口にした。

「はい？」

「胸のサイズだ」

「……………」  
「……………」

クラウドディアとハクは黙り込んだ。

「……………」あたりです」

クラウドディアはぼそつと呟いた。

当たったらしい。

やはりの俺の特殊能力は胸のサイズをあてることか。

「よし、とりあえずノルマは達成したから、他のメンバーに顔合わせに行くぞ?」

「はいっ」

「あとお前のことはクラウドディアは長いからディアな。俺はトキでいい」

「はいっ トキ様」

トキ様と来た。

なんか最初と反応が全然違うな。

俺が立ち上がると、ディアも立ち上がり、机を迂回し腕に抱きついてくる。

「えへへっ」

なんか懐かれたな。

とりあえず戻ろう。

そう思い、俺はアルの元に向かった

戻ると、アルもメンバーを捕まえたようだ。

「アルーこっちは見つけたぞー？」

アルはこっちを向いて驚いていた。

この世界では魔族は恐怖の対象なのか？

「おーワイもいま見つけたばっかやでー」

アルの隣には身長160くらいの耳のどがった女の子がいた。

ちなみにディアは150あるかないか。

アルの隣の子は、金髪でふわふわの髪を右に流した女の子だ、瞳は緑。

左の腰に剣を携えている。にしても…、

「おいアル!？」

「ん？」

「Fだぞ!？」

もう疑いようのない大きさだ。

「やる？ ワイのナンパテクニックは世界一や！」

そんなことを言いあいながら、親指をたてる男二人。  
後ろでは、ディアがジト目。  
金髪の子が冷やかな笑みを浮かべている。

「あーとりあえず自己紹介するか？」

「そやな？ ワイらは知り合いやけど向こうはしらないやろし」

うん。

自己紹介は大事だぞ。

「じゃー俺から。トキキキサラギだ。呼ぶときはトキでいい。属性は……」

いざというときに魔法が使えないとこまるな…仕方ないか…。

「悪いアル。最初の会った時の自己紹介で属性嘘ついた」

アルは眼を見開く、

「はあっ！？ なんでそんなことすんねん。別に属性くらい隠さなくていいやろ？」

「だからごめんって」

一瞬アルは思考顔になり、

「まあええよ。別に自己紹介で属性言つきまりなんてないしーな？」

アルは自分に言い聞かせるようにマジメな顔で言った。

「いや、これから背中を預けるメンバーだからな、いざっていつときに困るから言っよ」

一息ついてから口を開く、

「俺の属性は時間と空間だ」

三人が目を見開く。

まあ…そうだろうなあ…歴代に数人の属性を二つもだし。

ただ、驚き方がおかしかった。

ディアは普通に驚いていたが。

アルはまた思考顔。

金髪の女の子は『もしかしたら…』とか呟いている。

「まあ、他の人には言わないで。かつたるいことになると思っから。」

喧嘩売られたらたまらない。

「じゃ、次アル。」

アルは思考から戻り。

いつもの笑顔を浮かべた。

「せやなー、ワイはアルブレヒト・ブディンググっちゅーねん。気軽



にアルちゃんとも言うてくれ。属性は火や。ほな次は〜そこのオチビちゃん」

ディアに視線をむけた。

「オチビちゃんって言うな金髪ノツポ死ね！ ゴミ屑が！ ガルルルウウウウウ！」

めちやくちや怒ってる。

と言うかなついてない状態スゲー……。

今にも噛みつきそうだ、威嚇してるし。

「わたしはクラウディア・ベーム。属性は風。トキ様以外は名前も呼ばないでください、気持ち悪いので」

気持ち悪いまでか。

「いや、ディア…一応パーティーなんだから名前くらいはねっ？」

「トキ様がそう言うなら全然大丈夫ですよー ふふ」

なんか全然違うな対応が。

「わたしはシャルロツテ・ブリーゲルですーシャルってよんでくさいねー、種族はエルフですー属性はー水ですーよろしくですー」

ディアがまた威嚇してる。

胸を見ながら。

なんだか犬の飼い主の気分だ。

『ご主人さまご主人さま!』

ふいにハクが頭のなかに話しかけてくる。

なんだ？

『私は魔力の集合体みたいなものですから、相手の魔力や質がある程度わかるんです』

はじめてきいたが……、それでなんだ？

『三人とも嘘を言ってます。属性で。ご主人さまはデメリットがあるにもかかわらず、正直に言ったのに。あの三人が嘘をつくのは許せません』

で、ハクは三人の属性わかるか？

『属性まではちょっと……、でも魔力は大きいですね。ご主人さまにくらべたらゴミ屑ですが。この学園ならSクラスを軽々と越えます』

ゴミ屑とまで言ったか、ディアに影響されてる気がするな。とりあえず、

「なあ三人とも」

俺は三人を見回し、声をかける。

「なんやー？」

「はい」

「なんですー？」

少し怒って言うてみるか、

「俺は言ったよな？ 背中を任せることになるから、いざというときに使えないと困るからって。それで俺はあまり知られたくないけど言ったんだ。アルは『属性くらいかくさなくていいやろ』と、まです言った。その本人が隠してどうするんだ？」

「「「……」」」

三人とも俯いてしまった。

「ワイは……」

「アルだけじゃない。ディアモシャルもだ。三人にはもう一度自己紹介してもらおう。属性だけでいい」

「すまへんな。トキにゃん……」

「ぐすつごめんなさいトキ様……」

「ごめんねートキさん……」

三者三様に謝った。

はあ……、全く。

「別に俺は嘘をつかれたことに怒ってるんじゃない。もし使えるのに使わないで、このうちのだれかが傷ついたり死んだりしたらどうするんだ？ その確率を下げるためにも、仲間の事を知っておいた方がいいだろ？」

三人ともしばらく黙っていたが、納得したようにうなずいた。

「じゃあワイから、属性は火と水と風と土や」

予想以上だなこれは……、俺でも勝てないんじゃないか？

「ほー、基本属性すべてかーすごいじゃないか。やるなー。何で隠してたんだよ。人に誇れることだぞ？」

一瞬目を見開いて、照れたように

「そ、そやるー？ ま、まあワイくらいになればこのくらい簡単やわー」

いきなり自信過剰になった。

「次はわたしが」

と、ディア

「私は風 水 闇ですトキ様」

基本二つに 上位の闇か……ディアもすごいな。

「闇かー。黒い髪には闇が似合うよな」ハイネの魔法で闇をみただ、あれは強力だよなー。普通なら逃げられないぞ？」

「ふふ トキ様とお揃いの黒い髪です」

と、うれしそうに髪をもてあそぶ、

「わたしわー、火 風 光ですー。でもー今は使えないんですーだからこの剣を使ってるんですー」

剣を使ってるってことに嘘はなさそうだな。  
使えない……か。

よし、

「そうだなー、属性はあるってことはいつか使えるってことだ。俺も入学当初はなにも使えなかったからな。まだほとんど使えてないしな」

三人は驚いている

「ホンマかいなー!? 時間、空間属性ってゆーたら最上級のふたつやで? それがここ数か月でつかえるよーになったんか? それにほとんど使えてないってなんなんや?」

驚いているようだが事実だしな、この際いいか。  
シャルにも希望を持ってもらった方がいいだろう。

「あーみんな正直に言ってくれたから言っちゃうけどな……、このことは絶対に秘密だぞ? その場にいたハンネしか知らないことだからな」

秘密が一人から四人になるだけだ。  
なんとかなるだろ。  
それにこいつらは信用できそうだ。

「なんやー? これ以上まだ秘密があるんかいなー?」

と、アル

「トキ様との秘密」

やっぱり嬉しそうなディア

「……」

真剣な面持ちのシャル

「ああ。これ見てもらえればわかると思う」

そう言っただけが取りだしたのは。属性のところがおかしくなっている学生カードだ。

それを取り出し三人の真ん中に置く。

「な、なんやこれ……？ 属性のところバグってるんやないか？」

つまり俺がバグってるって言いたいのかこいつは？

「さすが私のトキ様です」

いつお前のものになったんだ俺は？

「？」

そんな裏返してみたり裏から見ても変わらないぞシャル……。

「あーつまりそう言うことだ。たしかに魔道具召喚の時にすべての

属性が出た。だけど俺が今使えるのは時間と空間だけ。規模は違うが状態的にはシャルとおなじわけだ。そして時間と、空間は克服できた。他のもするつもりだ。俺は諦めてはいない。どうだ？ シャル。お前は諦めるのか？ それとも俺と一緒にこのパーティーで使えるようになるか？ お前より俺の方が使えない属性は遥かに多いからな」

まあ俺の場合は頑張ったところでページ集めなきゃ使えないがな。境遇は全く違うし……。

「うう……ぐずつ……トキさんは、わたしのために秘密をしゃべったんです……？ それがバレれば解剖されたりねらわれちゃうかもしれないのにです……？」

うっ。

涙目で上目づかいはやばい。

てか俺弱いなーこの状態に……シャルみたいな美人で胸がでかいやつにいわれたのは初めてだ。

てか俺の周りみんな幼女体系だったからな……

ってまてまて！ 解剖ってなんだ解剖って！？

めちゃくちゃ不穏な言葉聞こえたんですが……！！？

それで泣いてるのかコイツ……！！

「あ……まあ、な」

まー事実だしな。

ガバッ

いきなりシャルが抱きついてきた。  
なんとか支えられた…。

「お……おいつ！」

「ありがとうございますー……ひっぐ……そしてごめんですー……えぐ」

そんなことを言いながら。俺の肩のあたりに顔をうずめて泣いているシャル

うおいつ！

てかこれはまずい！ いろいろまずい！

アルとハク！ テメーらなにニヤニヤしてんだ！

そしてディナ後ろから抱きついてくるな！ 服の中に手入れるな  
バカッ！！

そして何より俺の体に押しつけられてるコレ！！

なんだこの二つのやわいボールは！ つぶれるーつぶれるー！！

俺じゃなくボールが！ てか男子の目がめっちゃイテー！！！！

女子顔赤らめるな！！

たすけてー！ たすけてー！！！！ 世界に散らばるありとあらゆる妹  
神さまこの状況をー！！！！！！

数分後。



やっと二人は離れてくれた。  
はあなんか疲れた…。

「あーつかれたー。すまんアル。俺ちよつと寝てくるわ。ハンネも起きそうにないし。召喚はどうせ午後だしな。パーティー記入しといてくれ。」

もう限界だ

「まかせときーな。ちゃんと記入しとくさかい。ねててえーよ。」

未だに腕にすがりついている、シャルとディアにも同じことを言っ  
て開放してもらった。

俺はフラフラと歩きハンネのベットに向かった…。  
にしても大きいなー、教室にあるのが異様すぎるだろ。  
キングサイズくらいありそうだ。

その中にもともとちっちゃいハンネが、さらにちっちゃくなって  
寝ていた。

俺も限界だー、と。ベットの真ん中に寝転がる。  
ハンネは隅のほうにいたので安心だ。  
はー……、にしても。

三人の根っこの部分変えるのはむずかしいだろなー……。  
にしても気持ちいいなー、俺はすぐに眠りに落ちた。

「.....キ.....トキ.....る.....たで？」  
む.....？

「トキ……く起き……」

アル……か？

俺は薄く目を開いてみた。

「アル？ どうした？」

よくわからんが俺を起こしていたみたいだ。

「もう昼休み終わるで？」

「あーそっかすまないアルすぐ起きる」

起きれなかった。

俺の体は固定されているようだ。

「すまないある現状確認を頼む」

ここで3Bの一つ現状確認だ。

「せやなー、まずシャルにゃんが右側で、トキにゃんの首にうでまわして寝てるんや。足も絡んでるからから右側はダメや。次に左側やけど、ディアにゃんがシャルにゃんと同じようにして寝もーてるな。そしてハンネせんせーがトキにゃんの足の間に挟まりトキにゃんのプライベートポイントを枕にして寝よーてる。ついでにトキにゃんの魔道具が胸の上で丸のーて寝てる。どや？」

ああ。

「ありがとうアル。詳しい説明ありがとう。それでなんでお前は止めなかつたんだ？」

腕を出すアル。

なにやら歯形がついて、血がにじんでいる。  
痛そうだ。

「止めたら噛みつかれたんや。しゃーないやろ？」

「おまえは、本当の友達だアル」

「おおきに」

アルはいいとして、周りで囲んでるやつらはなんだ？ 人以外見えないほどにいるぞ？ ほかのクラスのやつもいるし。

「それで他の人たちは？ 何しているんだ？」

単刀直入に言ってみた。

「えと…私たちは…ねえ？」

隣の子に話しかけて納得しないでくれ全然わからん。

「トキにゃんアレや〜。美少年と美女が寝てる姿は国の宝やわ〜」

何を言ってるんだアル？

みんな頷いてるんじゃないか！

「美少年かはともかく、たしかに美女ではあるな」

うんうん。と、うなづく男ども。

「それにちよつと意外だったから」

と、口を開く女子Aさん。

名前知らん。

「クラウディアさんのこと、私たち怖かったんだ……。魔族って私たちより体も魔力も強くて怖い人たちだと思ってたから」

あーそう言うのもあるかもしれない。

自分たちより強い生物には本能が恐れる。

人間が虎を恐れるようなもんだ。

まあそれより強大な俺がいるんだがな

「でも、その寝顔見ると……。ふふ。私たちと全然変わらない。むしろ私たちよりかわいいわ」

そういいながら優しくほほ笑む女子A。

いやこの子に女子Aはかわいいそうだな。

エーコさんにしよう。

「魔族だろうと人間だろうとそいつらの性格によるだろ。人間でも悪い奴は人を殺すし。魔族でも良いやつはディアみたいに優しいやつもいるよ」

そう言いながら。

ディアが抱きついてる方の左手で、頭を撫でてやった。

その瞬間ディアの瞳がパチッと開いた。

ええ、もうホントにパチッと！ 少し涙がたまっているし。

明らかに寝起きじゃない。  
起きていた。

「トキ様……ありがとうございます」

ディアは泣いていた。

きっと今までつらかったんだろっな……。

「……ありがとう……と」

チュッ

ディアがキスをしてきた。

しかも頭押さえこんでいる！

まで！ いま息をちょうど吐き出したところだ！

その状態で口を完全に塞がられると！！ 押しつけすぎ！！！！

頬で鼻から空気すえない！！ 死ぬ！死ぬ！！！！！！！！

キス死する……まじで！！！！

バンバンバンッ

俺は必死に左手でベットを叩いた……。

チュポッ

「はぁ……はぁ……はぁ」

やっと離れたが俺は死が見えた。

ハンネの気持ち少しわかった気がする。

俺とディアの口の周りはべちよべちよである。

あんな荒業するからだまったく！俺は唾液をふき取った。

そして、どうもさつきベツトを叩いたことでシャルが起きたようだな…。

近づいてくるシャルの顔…、あーもうこの先が読める。

ブチュツ

チュっじゃないブチュツっだ！！ 勢いがつよすぎる！

深い！ 深くまでできすぎ！！ 舌！！？ 舌ですか！！？

待ってください、それだけは！！

まだファーストベローンは誰にもわたしたくないんです！！

舌の英語がわかりません！！ 出て行け！！ 俺の神域から！！！！

入り込んでくる舌を必死に押し出そうとする……が！？

選択をみすった！ 舌で舌を押し出すのは無理があった。

舌同士が絡み合う、そして吸われた。

あああああああああああああああああああああ！！

俺の舌が喰われる！ 舌を噛み切ったら人間は死ぬんだぞ！！

デリケートな部分なんだ！！

助けて！！！ 助けて！！！ 先生！！！！

いまこのときだけは先生って呼びますから！！！！

そして唐突に顔が離れて行った。

なんと起きた先生が。

シャルを引きはがしてくれていた。

ああ、今だけは先生が女神に見える。

妹女神様だ。

そして俺の上にまたがり見下ろしている女神様。

ポケットから取り出したハンカチで。

ディアの時よりべちよべちよな口元を拭いてくれる。

起きたばかりで少しうつろな目をしながら微笑んだ。

なんていい子だろう。

そして、俺をまたいだまま、前にしだれかかってきた。

もちろん結果は。

チュッ

弱った俺の半開きの口に、舌を差し入れて舌をからめてくる……。

ああ。

ハンネ……、お前はいつの間にこんなことを覚えたんだ。

女神様はいなかった……。

そして、俺の意識は暗闇に落ちて行った。



最後に見えたのは、胸の上で寝ていたハクが、ものすごく苦しそ  
うにもがいていた姿だった。

十話 三人の心（後書き）

あーてかこれは15禁のような気がしなくもないなあ  
とゆうかどこからが15禁なんだろう

自分でも文章へたくそってわかるんですがどうすればいいんでしょうね？

小説初めて書いたんでわからないんですよ…

アドバスとかもらえたらうれしいです。

十一話 使い魔召喚！（前書き）

レン登場！！

## 十一話 使い魔召喚！

### 学校屋上

「…………キ…………トキツにゃん!!」

バツ

「はっ!?!」

俺はいきなり呼びかけられたので、慌てて飛び起きた。  
どうやら床に寝かされていたようだ。  
少し体が痛い。  
痺れてる感じ? で。

「はあ、やっと起きたんかいなー?」

疲れたような顔で言うアル

「すまん。てか……アレ？ 俺アルにパーティー記入しといてって  
言って寝たはずじゃ？」

一瞬驚いたような顔をして、焦ったように、

「そ、そやなー！ な、なかなか起きないから、ここまで背負って  
きたんやで？」

刻は、ショックと恐怖で記憶を失っていた

「まあ、それはありがたいんだが……」

周りを見渡してみる。

場所は……多分屋上？

床には、魔導具召喚の時よりも大きい魔方陣が描かれている。  
この場に居るのは、ハンネ、アル、シャル、ディア、俺だ。  
ハクはいない。

最近あいつは一人でふらふらしているようだ。

見まわしてみると、

ディアのほうを向いた時。

サッ

顔を背けられた。

シャルのほうを向いた時。

サッ

顔を背けられた。

ハンネの方を向いてみた時。

サッ ポキッ

背けた勢いで首の骨が鳴っていた。

「……」

嫌われたか？  
理由わからないが。

「で、アル？ 何でここに？」

問いかけてみた。

そして、アルが口を開こうとして、

「そっ、それは私が説明しましょー！！！」

ハンネが大声で話し出した。

「えーつとですね、午後から使い魔召喚の儀式だったんですー。パーティーごとに、結界を敷いてある屋上に集まってもらったんですよー。屋上なのは、大きな使い魔を召喚した場合のためです。」

ふむ。筋が通っているな。

「で？　なんで俺はここに背負られて？」

背負われる意味はわからなかった。

起こしてくれればいいのに

「それはやなー、トキにゃんが全然おきなかったさかい召喚は最後にしたんや。でもなー、最後にしよーても起きなかつたんや。他のパーティーはみんなおわつとるえ？　今頃は教室で使い魔を見せあつてるんやないかなあ？」

アルが口を開いた

俺のせいで順番を最後にしたってことかー。

「ごめんな。皆。俺のせいで最後になっちゃって」

と言つて、みんなに頭を下げた。

「だ、大丈夫やつ！　ワイらなかまやる？」

「うっ……トキ様と一緒にがよかつたんです」

「はっ、はいですっ！　私は全然きにしてないで、ですッ！」

「き、気にしないでくださいトキくん！」

口ぐちに言った。

いいやつらだな……ほんと。  
ハンネまで言う必要はないと思うが。

「そういえばお前らはまだ召喚してないんだな？」

屋上のどこにも使い魔らしきものはいない。

「そうですねー、一応パーティーのリーダーからってことになっていたので。」

……は？

一体いつの間にもリーダーになったんだ？

「おい、アル」

「なんちゃ？」

普通に返事したコイツ

「……」

「……」

「……」

「多数決や」

アルはしれつとிட்டた。

「俺はアルがいいとおもう」

「わたしはトキ様以外の命令聞かないですっ」

「ワイはトキにゃんで」

「私も、トキさんがいいですー」



はい。

そうです、俺がリーダーです。

「ちなみに私は名誉顧問ですよー」

……なにそれ!?

「ハンネ担任だろうが!?!?　そもそもパーティーの名誉顧問ってなんだ!?!?　部活か!?!?」

「そうですねー、前代未聞らしいですが私の代で変わりましたねー。主に遊ぶためについていきますから安心してください。それにこれで気分的には5人じゃないですか?　4人のところは、あなたたちだけですよ?　顧問なのであと一人入れることもできるので安心してください」

キヤツキヤと言うハンネだが。

自分の代で変わるって言うのはハンネが最初になったからだろう。

しかも、遊ぶためときた。

手伝う気ゼロである。

4人の時と変わらないだろう。

「それではー、召喚の説明にはいりますねー!　召喚されたら。血の契約のあとに、ただ名前を付けなければいいだけです。魔方阵に自分の血を落として召喚します。召喚した時点で、血の契約は完了しておりますので。世界だろうと異世界だろうと魔界だろうと天界だろうとありとあらゆる場所から召喚しますので、見たことない生物が出てきたりしますね。っていつてもー、今日行われた召喚ではこの世界の生き物だけでしたが」

血の契約って、なんか魔法というより魔術だな……。

しかも黒魔術。

どこからでももってのは、地球からでも引つ張って来れるって言うことか。

風魔法が使えないから空を飛べる乗り物、もとい使い魔がいいな。

「それではー、トキくん、魔方陣の上に移動してください」

言われた通りにしみる。

「ハンネ？ これは危険ないんだろうな？」

魔道具の 때가 ヤバかったので一応聞いてみた。

「あははー、心配症ですねートキくん。前の時のように深層につながるわけじゃないのでー、現実にある世界につながるんですよー？」

はい、コレ」

そう言って手渡して来たのは、小さなナイフだった。

「心配しないでくださいね？ ちゃんと新品のキレイなナイフですから。それで指をチョコッと傷つけて、魔方陣に垂らしてください。その後に、魔方陣に手をついておもいつつきり魔力を通してください！」

自分の手をナイフで傷つけるのってなんか怖いよな…。

そう考えるとリストカッターするやつは勇氣スゲー！！

その勇氣を別の事に使えば、リストカッターする必要もなさそうなのにな……。

俺は指を少し切って血を落とす。

そのあとに、ハンネが水魔法で治療してくれた。  
傷跡なくなつたスゲー。

手をつき、魔力を流す。ハンネの言う通り思いっきり全開で。

そして、魔方陣が光輝きだす……。

あたりの光景が変わつた。

また……。

今度は宇宙のようなところだ。

足場がないので浮いているような状態だが。

息はできるから宇宙ではないと思うが。

四人が驚いている。

アルの場合

「ワイは自由やーーーーー!!」

とか叫んでる。

ディアの場合

「ここがトキ様の世界ですね、素敵です」

恍惚な表情をしている。

あと俺の世界じゃない

シャルの場合

「私お星様になったんですー?ぐすつ……」

死んだと思っている。

「……ハンネ?」

俺は静かに言った。

「ひゃっ、ひゃい!?!」

噛みながら返事をしたハンネ。

「ここはどこだ？」

ハンネはすこし考えているようだ、そして……。

「お……、お星様？」

まったくお気楽な事をいつている。

「召喚の時はみんな場所が変わるのか？」

「いえ、どこから召喚するからによりますね。同じ世界の場合何も変わりません。別の世界ですとその世界に変わります。もちろん光景が変わるだけで、私たちがいる場所は変わりませんが」

ふむ。

つまり俺の場合はここから召喚するってことか……？

「ハンネ、生物なんて何もいないんだが？　そもそもここで生きる生物はいなそうだぞ？」

うーん。とハンネが唸っているが、わからなそうだ。

あ、そうだ、

『来い、ハク』

目の前に白い光が浮かび、中からハクが現れた。

コイツは結界だろうと宇宙だろうと訪れるんじゃないだろうか？

「なんですか？　ご主人さま」

首を傾げているハク。

「ここがどこかわかるか？」

あたりを見渡してから。

「時空の狭間ですね」

どうやらわかるようだ。

「時がない世界、隔離された空間です」

なんともわかりにくい表現だ。

「えっとですねー、この世界は時流れないんです。そしてどこにもないけど、どこにでもつながっている世界」

時間が流れないってのはわかるが。

どこにもないがどこにでも繋がっている？ なぞなぞみたいだ。

「わかりやすく言うところ、ここからなら。一億年後だろうと一兆年前だろうとすべての時間にいけます。つながっているんで。時間が止まっているというよりは、すべての時間がこの時間なんです。空間がつながっているというのは、すべての世界がここを通るんです、異世界の間ですね。異世界っていうのは同じ世界にはないから異世界なんです。その宇宙には存在していません。まったく違う宇宙にできるのには、すべてにつながっている場所を介する必要があります。それがこの場所です。よくいわれる“全にして1”と言う世界がここです」

うん、なんとなくわかった。  
時間と空間の境界線みたいな世界ってことだ。  
にしても、とまった時間で生きれる生物なんているのか…？

「ハク。俺は召喚してるはずなんだが。こんな場所に生物なんているのか？」

ハクは少し考え。

「一種類だけいますね……、ここに住むってことは時間と空間を操れる能力が必須となるんで……、あ、そう言う点ではご主人さまも将来は住めるかもしれませぬ。だからここに繋がったんですねー」

と、くすくす笑っている。  
いいからその一種類教えやがれ。

「あつ！ ご主人さま。空間が戻りますよ。今のご主人さまの魔力ではあそこには居続けられませんね。ページが揃って、ご主人さま・NEOになれば大丈夫ですが」

次の瞬間、俺たちは元の屋上に戻っていた。

「戻ってきたな……、にしても使い魔なんてどこにも」

どこにも生きた生物なんていなかった。

「トキくんいるじゃないですかそこに！」

ハンネが指を指す

「ハンネおかしくなったのか？ そんな生き物いないぞ？」

ふうー……、と俺はかぶりを振る。

「トキにゃん現実逃避はやめたほうがええよ？ どう考えてもそれや」

うん。

たしかに“ある”さ。

だがこれは生物じゃないと思う。

「ハンネ、つまりこれが俺の使い魔か？」

役に立たないなんてもんじゃない。

邪魔すぎる。

「そうですねー。じゃあちゃっちゃと名前つけちゃってください。その“卵”に」

そうなのだ。

俺の前には俺の身長くらいの白い卵が転がっている。横になっているから身長程度だが。

縦たら3メートル越えてるんじゃないだろうか？

「よし。レンだ。卵 0 (ゼロ) レンでレン。うんこれにしよう」

ピキッパキッ



卵の内側から音がして、少しヒビがはいった。

「これ、生まれるのか？」

少しずつ卵に穴が開いてゆく。

「違いますよご主人さま！。最初から卵の中で寝てただけです。あの空間にいた、ってことは十中八九一種類の生物しかありえませんか！。あの空間でとどまることができる力をつけるまで、卵の中にいるんです！。中は時間が動きますからね！。数千年くらい眠ってたんじゃないでしょうか？ 成獣になるには数億年必要ですし。成獣になるまで止まった時間を故意に自分だけ動かさないとけませんから。その、力がつくまでは寝てます。それが普通の世界に来たので目が覚めたんですよ」

数千年もか。

俺より全然年上だ。

てか成獣に数億年ってどんだけ長命なんだよ…、俺の方が長命だけど。

歳とらないし。

パキッ

少しずつ出てくる…。

「……」

ピキッ

「……………」

カリッ

「……………」

パキピキッ

「あああああああああああ！　じれったい！」

『来い！　白刻刀！』

ハクが再構成され、同時に手元に戻る

「ハク！　殻だけ切れるか？」

『はい。ご主人さまが切ろうと思えば切れます』

よし！

シュン

卵に一闪。

卵が半分に割れた。

中から白い生物が……。

「きゅ？」

何だこいつは……？

「きゅっ！ きゅ〜 きゅう〜！」

真っ白な肌、金色の瞳。背中に生えた大きな翼。恐竜みただ。頭を持ち上げると、5メートル近くはあるんじゃないだろうか？体の周りに白い粉が舞っている。

多分ドラゴンに分類されるんじゃないかとは思つが……、めちゃくちゃ弱そうだ。

「きゅ〜〜〜」

そんな声を上げながらこちらに走ってきた。

俺の身長は176センチだ。

対して向こうは5メートル。

しかし、筋力を強化した俺なら受け止められるはずだ。

ドッ

弾き飛ばされた。

結界まで思いつきり。

「トキにゃんが轢かれた！ 救護班よろしゅー！ー！ー！」

「「ませてください（です）」

ディアとシャルが俺を介抱する。

お前らいつから救護班に……？

「きゅー……」

俺の使い魔も近寄ってきて俺の顔を舐めてくる。

舌はちゃんと赤いんだな。猫のようにざらざらするが。

まあ、卵の中から出たばかりで力加減わからなかったんだろ。

出たばかりであの力はやばいが。常人なら死んでもおかしくない。

俺は頭をな撫でてやる

「きゅー~~~~」

嬉しそうに俺の手にぐりぐりしてくる。

自然に俺も微笑んだ。

「トキくんはまた不思議な使い魔をよびましたねー……」

またってなんだハンネ。

……ああ、ハクのことか。

魔道具だが。

「それにしてもこの子はなんなんでしょうか？……そういえば、ハクちゃん知ってるんですよね？」

皆の視線がハクに向く。

ハクはなぜかレンの頭の上にいる。

「ですねー、えっと種族的には時幻龍ですね。まだ子供ですが」

時幻龍？ 何だそれは。

「数億年で成獣になり、自分の体の成長を止めます。だから寿命は永久ですね。大きな傷を負えば死にますが。成獣になれば、息をするように時間を超えたり。止めたり。空間を破ったり出来ます。子供でもやるうと思えばできると思いますよ？ まあ息をするようにとはいきませんが」

全員が全員絶句した。

つまりこいつは俺を超えてると言うわけだ。

俺自身ですらありえない能力だと思ってたのにこいつはさらに上をいく。

ま、まだ子供だからどれくらいかわからないが……。

頼もしい相棒ではあるかもしれない。

超弱そうだが。

「すごい龍なんですねー……、トキくん！　しっかりと手綱を握っててくださいね！！？」

「あ、ああ」

ハンネの気迫に少したじろぐ。

一応俺の保護者だしな。

兄は俺だが。

「でわー、次誰やりますー？」

ハンネが三人の顔を見渡す。

「私が行きます！　トキ様の助けになる使い魔を召喚してみせます！」

やる気満々でディアが前に出る。

うん、それは良いことだが自分に合った召喚してくれ。

そしてディアはナイフを受取り腕を切った。

腕っ！？

「いッッ！」

ディアの白い肌から血がドバドバと流れている。

ハンネが慌てて止血した。

魔方陣に手をつき。

「これだけ血があればきつと……ふふ……ふふふふふふ」

とか言いながら笑ってる……。

ハッキリいつてめちやくちゃ怖い。

魔方陣の上が殺人現場みたいになってるし！

そして魔方陣が輝く。

今一瞬、周りにすごい数の亡者が見えた気がするが……キノセイ  
ダキット。

とりあえず、うん。

今度は光景が変わることもなくすんなりすんだ。

そう、儀式は済んだのだ。

ただ、召喚された使い魔がありえなかった。

まず高さ、10メートルはあるだろう。全長は20メートルを超  
えている。

そして、犬のような体は漆黒の鋼のよう鱗で覆われている。てい  
うかドラゴンの肌と間違えて生まれたような肌だ。爪と頭なんてま  
るでドラゴンだ。

そして眼は淀んだ血のような色の赤黒。それがキラキラ光ってい  
る。

そして頭が三つある。

もうなんかめっちゃくっちゃ怖い！　そして強そうだ。  
レンの10万倍くらい強そうだ。

「こりゃー……」

みんな呆然としている

「ま、またディアちゃんも個性的な使い魔を召喚しましたね……」

ハンネ。

俺の胸に震えて頭をうずめながら喋るな。こそばゆい。

「あなたが……、私の使い魔ですか？」

ディアが恐る恐る訪ねた。

『『『我が名はケルベロス、我は主に永遠の忠誠をここに約束する』』』  
『』

めっちゃステレオ！　耳がいてー！　あとケルベロスだった  
ー！ー！

『『『主の名は？』』』

ディアは安心したようで口を開いた。

「私の名前はクロウディア、クラウディア・ベーム。そしてあなたはケルベロスだからシロよ」

『『『心得た、わが主クロウディア・ベーム。我はシロだ』』』



めちやくちや似合わねー！　てかなぜケルベロスだからシロなんだ！

シロって普通のかわいい犬のことだろ！？  
しかも白くねー、めちやくちや黒い！！

「にしても、ケルベロスって冥府の門番だろ？　亡者が逃げたらどうするんだ？」

俺は思ったことを聞いてみた。  
興味本位だが。

『『『門番は息子にませてきた。なんにも問題はない』』』

めちやくちや普通の犬だったー！  
普通に子供がいる親父か！　母親かもしれないが。

『『『にしても、そなたは本当に人間か？』』』

なんか酷いこと言われた。

『『『そなたは人間というより……、いや、しかし……』』』

なにやらブツブツと言っているシロ。  
てか、ホント似合わないだろ名前。

「トキ様は人間よ？　多分」

ディア、訂正するなら完全にしてくれ。  
多分とかつけなくていい。俺は人間だ……多分。

「でわー、契約も終わったようなので、次はどっちがしますか？」

なんか、だんだん召喚がおかしな方向になってきたぞ。

ハンネは、今までの召喚で異界につながったことないって言うってたよな？

なんで一人目が時空の狭間。二人目が……多分あれは霊界だろう。めっちゃくちゃサービス精神大勢ですね。

「じゃーワイがいくでー」

アルよ。次こそは普通のを召喚してくれ。

「はい、では移動してくださいー」

ナイフを受取り、魔方陣の上へ移動した。

そして血を垂らした。

「頼むでー！　なんかすっごいの出てくれやー！……」

いやいや。出るな。

ホント勘弁してください。もう嫌です。

そして、お決まりのように場所が移った。

あーもう諦めた。これが現実だ。こいつら魔力下げたほうがいいぞマジで。

にしてもこの場所は……火山？

しかも噴火してるし。

あー木がとけてゆくー。

「どこや！　ワイの心のように熱くて美しい使い魔はどこやー！！」  
うん。

たしかにあれは熱くて美しいな。

俺は、溶岩の中から飛び出た鳥を見ながら思った。  
その鳥はこちらに近づいてくる。

「キターついにワイの使い魔が！　さすがワイや！　なんかよーわ  
からんが熱そうや！」

火の鳥は目の前で翼を羽ばたいている。  
てか熱い！　熱すぎる！！　羽ばたくと熱風が！  
漏れてるから！

その燃えるような赤い体から火が漏れて噴き出してる！！  
あーもうこんなものどうしろと。

明らかにフェニックスだろこれ。

近づくだけで熱いよ！

まあ大きさ的には、うん。

大丈夫5メートルくらいだし。

めっちゃくちゃ熱いけどな。

「よし！　決めたで！　おまえのなまえは『にわちゃん』や鶏みた  
いやからな！」

バカ！　鶏に失礼だろ！　こんな熱い鳥が鶏くらいいたら世界焼  
けるわ！

にわちゃんは深くこうべを垂れた。  
服従したんだろうか？

「よろしゅーなー、ワイはアルブレヒト・ブティングってゅーねん」  
にわちゃんは喋れないようだが、うなずいたように見える。  
そして世界は戻った。

「はい、なんかもう先生は驚かなくなってきましたからいいですよー。次はシャルちゃん。シャルちゃんはどんな怪獣召喚するのかなー？」

やけくそ気味だなハンネ……、わからなくもない。

「でわ、いくですー」

血を垂らし……、世界が変わる

ん？ ここは……神社か？ ってことは日本なのかな？

『我を呼ぶは汝か？』

それは、いきなりシャルの前に現れた。

なんだろうこいつ？ かなり小さい。

今までのがでかすぎたんだが。  
体長140センチくらいか？

白い虎のような体だが、頭には一本の長い角が生え。  
後頭部の毛が異様にながい。

尻尾の毛も長い。

足の付け根も長い毛で覆われている。

「はい。私に力をかしてくれませんか？」

丁寧をお願いするシャル

『よかるう。名は？』

「シャルロツテ・ブリーゲルです」

『シャルロツテ・ブリーゲル、汝を主と認めよう。我は麒麟。汝の好きな名で呼べばよい。』

「じゃあ、きーちゃんってよぶですー」

そして、おもむろに麒麟は俺の方を向いた。

『して、汝はなぜそのような姿をしておる』

またか！？

またなのか！？

こいつまで俺は人間じゃないと！？

「俺は人間だからなあいにくだがこれしかない」

『汝が人間？ なにを申すかと思えば』

なんか笑われてる気がしてムカつくな。

そう言っつて鼻を俺の体に押し付けて来、

すぐ離れた。

『……ふむ……そう言うことか、えらく不自由になったものよのう。ならば我がここに呼ばれたのも頷けるのう……。まあよい』

そして屋上に戻った。

なあ、ハク。

なんで、アイツらは俺を人間じゃないっていうんだ？

『ふむー、今回呼ばれたのは神獣ですから……。 “本”が“何”であるかわかったのかもしれないですねー』

本が何か？

『そもそも、この“本”たちは何で存在すると思います？ ページを集めたり契約したりって。本の意思とありますが……。これはプログラムされたんですよー本の生みの親に』

こんな人を超えた力誰が作れるんだよ……。

『人じゃない者でもつくれませんねー。一つの方法を除いては』

一つ？

『んー、まだご主人さまには教えてあげません。早いんですよまだ。時が立ち、ページが集まったら教えます』

ふむ、確かにそうかもしれない。

本のページも全く集まってるないしな。

今言っても意味のないことなら、言わないほうがいい、余計に苦しむだけだ。

『まあひとつ言えることは、今回呼ばれた神獣たちはですねー。

たしかにあの三人は魔力もたかいですが……。あの程度で神獣がぼんぼんできたら、世界中が神だらけですよ？』

まあ、そうだろうなあ。

どう考えても神獣が人間の下にぼんぼんついてくるとはおもえない。

『です。あの神獣たちはみなご主人さまがいなかったら契約も出来ませんでした。そもそもこちら側に呼び出すことも不可能でした。』

……は？

それはそれで意味がわからない。

『まあそうですねー…神獣はご主人さまがこの世界にいるから来てくれたって感じですね。もちろん世界は渡れませんよ？ 時幻龍のレンちゃんを除いて』

まあ、それもそのうちわかるんだろ？

『ですねーご主人さまが死ななければー。ちなみに死ぬ前のご主人さまは旅の途中で知りましたよ？ 他の本の持ち主に教えてもらって』

まあいいや、今やれることはページを集めることだけだ。

『その勢です！』

「えー……、なんというか、学園始まって以来の怪獣達ですわー……」

ハンネがひきつった笑みをうかべている

「とりあえずそのままじゃ教室に戻れません。外にいても討伐隊がくるでしょう。そして討伐隊が来ても討伐隊が殺されるのがオチでしょうねー……」

ゲンナリしてるなーハンネ。

「とりあえず魔法で姿を変えましょうか？」

魔法恐るべし。

「えーせっかくなにかつこえーのになー」

アル、おまえのにわちゃんが教室に入ったら全員焼け死ぬぞ。

『ふむ、我らなら化身程度造作もないぞ？ 一応これでも神獣なのでな』

そう良いながらきーちゃんの体が輝いた。

そしてそこに現れたのは。

「にゃーにゃー」

子猫だ。

麒麟って猫だったのか…、白く長い毛が美しい猫だ。



「えへへ〜きーちゃん」  
「にゃにゃー」

シャルときーちゃんが妙なやり取りをしている。

『『』』 我も主が困らぬように変わるっ』』』

そして光…、

「ワンッワンッ！」

「シロ〜散歩いきますか？」

白い子犬だ。顔もひとつ。

どうすればあんなケルベロスからこうなるんだ…。

にわちゃんは話せないが、光輝く。

「コケーッ！」

「おーにわちゃん雌かいなー？ 明日の卵がたのしみやわー」

お前、知っててにわちゃんってつけたんじゃないだろうな？

そう言えばレンもできるんだろっか？

子供だっていったしなあ……。

「レン、お前もできるか？ 出来るならやってほしいんだが。出来ないと一緒にいれないぞ？」

「きゅっきゅーーー」

どっつやらできるわっだ。

他の三人と同じように光輝き

「「「「え?」「」「」

女の子になった。

「トキにゃーん……、いくら女の子が好きやからってそれはないわ  
ー」

俺のせいじゃないだろこれ…。

洋服が標準装備なのが救いだ。

身長は145くらい。顔は、なんか女神クラスだ。妹女神様ね。

サラサラな白い髪、下のほうに行くにつれて紫ががっている。髪型は右上でサイドアップテールみたいになっている。後ろの髪の長さは足の付け根のあたりまでである。サイドテールに黒いリボンをつけており黒いカチューシャをつけている。

大きくてクリクリした瞳は金色。肌は雪のように白い。

服は白いYシャツの上に袖無しの上まで隠れるワンピース。背中に大きな黒いリボンが見える。胸元には大きな黒いリボンがあり。肩には胸元まで隠れる黒いラグがかけられている。腕とエリ元、靴下、フリル以外はすべて黒だ。

「にしても結構でかいな……」

身長？ いやいや。

「そやなー、アンバランスやけどこれはこれでいいとおもっねん」

145センチで“D”くらいあるよこの子。

あと、ホントついでだけどね。

三人の視線が痛いよ。

目の前の女の子。

もといレンがニッコリわらった。

笑顔がまぶしー！

「パパーー」

と、言いながら抱きついてくるが……。

俺はまだ父親にはなりたくない。

「違うぞ？ レン。お兄ちゃんだ。ハイ、もう一度」

「おにー……ちゃん？」

おお！ 出来た！ やはり妹神様だったか！ 時空間からきた妹神様だ！！

「えらいぞーレン。今度からお兄ちゃんって呼んでくれ」

そういつてサラサラの頭を撫でてやる。

「おにーちゃん！ おにーちゃん！」

嬉しそうに頬を擦りつけてくる。

こんなかわいい妹が出来たんだから、後ろからの視線が痛くても大丈夫！

こら！ その四人！ 犯罪者を見るような目をやめなさい！

「えーそれでは……、通報される前に教室に戻りましょうか」

誰が通報するんだ……って！

こらハンネ！

お前、通信用の水晶とりだしてじゃねー！！

その後も、俺の首に腕をまわして、全然離れないレンをお姫様だつこで教室まで運んでやった。

違つよ？

最初は頑張ったんだからね？

そのままブラブラして引きずってただけど、疲れたから抱き上げたんだよ！？

あと首にぶら下がってる最中もレンはきゃっきゃ言ってる楽しそうだった。

ふいにレンが言った。

「ねえねえ、おにーちゃん？」  
「んー、なに？」

レンは一旦置いてから、

「おにーちゃんって神様？」

難しい問題だ。

「レンが妹神様だから俺も神様なのかなー兄だし」  
「んー、ちがうの、なんかねー？ 力が神様なのかなあ？」

よくわからないこといつてるなあ。

「力が？」

「むーむーむー……」

レンはしばらく唸った後。

「やっぱりよくわかんない」

わからなかったらしい。

「そっかー。レンは生まれたばかりだからねー一緒に勉強していいっか」

「うんーおにいちゃんと、お勉強するー」

そして、ぎゅーっと抱きしめ、レンは教室に戻る前には寝てしまった。

## 十二話 アルの心。解放

- - - - - 夜

コンコン

部屋のドアが叩かれた。

「トキにゃーん、起きてるかいな？」

アルだ、と言うかアル以外部屋に入ってこれない。

「どうしたんだー、こんな時間に？」

「ちょっと、えーかな？」

靡ごしの会話。

「ちょっと、屋上来てもらってええかな？」

屋上がお望みらしい。星でも見るのか？

ちなみに屋上とは、俺がいつも朝練していたところだ。

「なんでだ？ 別に俺の部屋でもリビングでもどこでもいいだろ？」

たしかに夏の夜は気持ちいいかもしれないが、こんな時間に行くのはめんどくさい。

23時くらいだ。

「ちょっと……な。ええやるか？」

まあいいか。

風呂上がったばかりで涼みたかったし。

「ああ。すこし服着替えて行くから先行っててくれ」

「わかった、さきいでまっとするわ」

そう言って、自室を出て行ったようだ。

「おにーちゃん、どこいくの？」

レンの髪をブラッシング途中だったので、こちらを見上げて聞いてくる。

ちなみに、白いパジャマ姿だ。

「ちょっと屋上にな、なんか話あるようだったし」

レンには先に寝てもらっかな……。

「むー……」

ブラッシングがよほど気持ちよかったのか頬をふくらませている。

「また、してやるから。なっ？」

と、言うて。

レンの頭を撫でてやる。

『えへへ』とか言って気持ちよさそうだ。



「レンは先に寝てるか？」

「んー……、ついてくっ」

と、言って腕に抱きついてきた。

レンに上着をかけてやる。

俺でも少しでかいくらいの上着だったので、膝くらいまである。

同じような上着を、俺もかぶり。

屋上に空間をつなげ、レンと二人で中に入る。

### 学生寮・屋上

「まだ、アルは来てないか」

上を見あげると、星がキレイに輝いていた。  
しばらく二人で見つめていたが、

ゴオオオオオオ

バシッ

1メートル程の火炎の球が豪速で飛んできた。  
それを。

レンが空間ごと打ち消す。

「なに？」

レンが、暗闇を睨み付け、殺気を振りまいてる。  
はつきりいつて隣にいる俺でも怖い。

「おにーちゃんに手だしたらゆるさないよ？」

レンの周りの空気が歪んでいる。  
空間の軋む音が聞こえてくる。

「ほんまこわいなー、トキにゃんの使い魔は？」

拍手しながら、ケラケラわらっているアルが現れた。

アルかよ……。

「で？ いきなり攻撃とは笑えないな」

俺は肩をすくめながら言ってる。

瞬間、

アルは笑顔を消した。

底冷えするような瞳で睨みつけてくる。

「……なあ、トキにゃん。ワイと闘ってもらえへんか？」

なんなんだろう……コイツは。

「唐突だな……？ 理由は？」

溜息をつきながら聞いてみる。

「ワイに勝ったら教えよーかいな？ ワイは別に殺されても文句言わへん。ワイも全力を出させてもらーけどな」

真剣な顔で殺されてもいいと言ってきた。

アルの根っこの部分はこの戦いでわかるだろうと確信した。  
でなかったらあんな痛々しい顔は出来ないだろう……。  
真剣だが、泣いているようにも見える。

「わかった。レン、手だすなよ？ 見たくなかったら部屋に戻って  
もいい」

殺気を出し続けていたレンを手で下がらせる。

「んーん、レンはここでみてるよ。おにーちゃんの初めての戦いを」

そう言ってニコリと笑った。  
頼もしい相棒だな……。

「じゃあ空間結界を張っておけ。あと地面と空間にも頼む。危ないからな」

うん。と言って空間を歪ませる。

この結界は攻撃が通らないが自分も攻撃できない結界だ。内と外の空間を遮断している。

ちなみに、そんなこと、俺には出来ん！

レン曰く、外からの攻撃だけを遮断して一方通行もできるようだ。反則的だよな。

「じゃあルールは……、そやなー、相手が絶対に勝てないと思うままでどうや？ 殺すか気絶させるのが手っとりばよーな」

つまり、殺し合いの実戦しろってことか。

「わかった。どこからでもかかってこい」

とか、カツコイイこと言ってみるが、  
遠距離魔法がないのである。

一応あるんだが、もし当たると存在ごと消し去りそうだ。

『ハク！ 白刻刀！』

剣の形で手元に呼び出す。

「むー、なんですかご主人さま寝てたのに」

ご主人さまのピンチに睡眠を優先するハクである。

「いくでー？ トキにゃん！」

刹那、アルの二丁の拳銃から、音が一回しか聞こえないような速さで、

8つの弾丸が放たれた。

基本四種、派生四種の属性弾丸。

弾丸だが、射出した瞬間、全く違う効果を及ぼす。

火。轟音を轟かせながら、真っ直ぐに飛んでくる。1メートルくらいのおおきさだろう。

水、雷。雷を含んだ水流が左右上で三つに分かれて突っ込んでくる。

地、金。地面からトゲのように硬い岩が突き上げてくる。

打ち出された瞬間には、俺は後方上空に飛びずさった。

ドゴオオオオオオオン！

3メートルほど飛び上がったあたりで、元いた場所に攻撃が殺到する。

射出の音が聞こえて数瞬で標的に的中する。  
あの場所にいたら、確実に死んでいただろう……。

ゴオッ！ ガッ

横合いから何かに殴られる。

ズドーン

境界付近の地面まで吹き飛ばされ、陥没し、体がめり込んだ。

なんだ今の…、いきなり横から衝撃が…、肌が…、焼けただけ  
れてる…？

「あまいなートキにゃーん。風と熱はみえないんよ？ 気をつけー  
な」

風と…火の派生の熱？

どれだけ高密度な熱風だ…、肌がただれる熱さって…。

肌が剥がれおちる感触は気持ち悪い。

「おにーちゃんー!!」

「くるなッ!!」

近寄ってこようとすると、レンを手で制する。

「っグッ!!」

ふらふらしながらも立ち上がる。

ここにいたら、普通に死ぬ。

「やるな！ トキにゃーん。あれくろつて起き上がれるとは」

「ほざけ！ げほっ……！ かはっ」

口から血がこぼれる……。

骨が折れ内臓がやられたようだ。

「なめるな……ッ……！」

時間を一気に引き延ばす。

世界が限りなくゆっくりになる。

能力を知っているアルは最大出力で砲撃をはなつ。

先ほどより5倍くらいの量だ。

風と熱を含めないで……だ。

時間が50倍と言えば避けるのなんて楽だと思っかもしれない。

だが、秒速1000メートルの魔法だとうだろうか？

あの魔道具は、機関銃のような速さで射出する能力でもあるのだろつ。

連射速度もありえない。

銃の速度で、銃より広範囲高威力。

反則的である。

距離50メートル。

50倍にもかかわらず秒速20メートルの早さだ。





俺は立っていた。

ボロボロに肌は焼けただれていたが……。

時間を引き延ばすことはしてない。

否、できないのだ。

それだけ限界に近い。

「ゲホッ……かえす……ぜ？ ……アルよ」

突如、俺の後ろの空間が歪み。

アルの先ほどの魔法がアルに向かって襲いかかった。

俺は、自分に襲い来る魔法をすべて空間の狭間に収納したのだ。  
熱や風はすべて収納することは出来なかったので一部体に当たっ  
ていた。

ボロボロだが。

これでも直撃は避けていたのだ。

そして、空間を逆に開き。

収納した魔法をアルに放出したのだ。

「チツ！」

アルは一度舌打ちし、自分に襲いかかる魔法だけを打ち崩す。

元々自分の魔法。しかも、風や熱は衰えており、コントロールが悪く。

すべてが自分に向かっていているわけではないのだ。

ドガガガガガガッガ

アルの背後の空間結界に残りの魔法が炸裂する。

「やるな！ トキにゃん。さすがワイのみこんだ男やでー？」

関西の人にはすまん。

真剣な顔に関西弁は似合わないなコレ……。

「今日は特別やー、ワイのとおっておき見るかいな？」

そう言っ て銃を下ろし 呟き始める

『火よ水よ風よ地よ 我の敵は汝の敵 汝の敵は我の敵』

アルの周りの空間が歪みだす。

『共に詩い 共に生きよう そして世界は変わりゆく 此処に世界を顕現す』

結界内に七色の光が溢れ出す。  
場違いながらもキレイだと思った。

『顕現するは 『悲劇の命』 夢の終焉！』

突如虹は弾け、世界が変わる。

炎に水が、風に大地が、熱に氷が、雷に金が。交わらないである  
う精霊たちが、すべてを認め交わってゆく。  
確かに個としての終焉なのだろう。

だけどこれは……キレイだ。

終わりにして始まり。

すべての精霊が個から一つになり。  
拒絶からのまじわり。  
空間を埋め尽くす。

ああ……、俺たちもなれるだろうか……。この精霊のよう……。……。

瞬間、

世界はすべて埋め尽くされた。

「終わった……、これがワイの世界やでトキにゃん。醜く濁り汚れた世界や……。ホンマ腐った世界やな……混じり合って濁った世界や」

聞かせるつもりがないのか小さな声でつぶやくアル。

アルは七色の衣を纏いながら。

七色の光の中で冷めた目で濁った虹を見つめている。

「チェックメイトだアル」

そう言うて。

突如、暴風のような世界から現れた刻はアルの首に刀を突き付けた。

刻の周りで空間が歪んでいる。  
空間結界だ。

「見つけたぞ、お前の“根っこ”」

ああ、たしかに見つけた。

すべてを拒絶するアルの世界の中からみつけた、本質。

「汚たなくなんてない。拒絶していた精霊と一緒に詩っているだろ。それになぜ俺が視界さえないこの世界でお前を見つけたと思う？」

ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「一番輝いていたからだ。キレイにまじりあった七色の精霊が見えたからだ。黒く濁った世界で唯一の光。お前の周りの精霊を見てみ

る。濁った虹からお前を守っている七色の虹。それがお前の本質だ  
る。キレイに七色に混じった虹だろ？」

そう言っただアルは、まわりを見る。

(ああ、たしかにキレイやなあ……、  
外ばかり見てたさかい。一番近いもんがみえへんかったんやな…  
…)。  
ワイがもとめていたものは……、こんなちかくにあったんや)

アルは銃を落とし、両手をあげた。

そして濁った虹は、キレイな七色の虹になったあとに霧散した。

「ニーさんやトキにゃん。ワイの負けや」

ドサッ

そう言っただアルは、そのまま仰向けに倒れ、星を見上げた

俺もアルと同じように仰向けになる。

……と言っただ立っているのもきつい。

「みつけてくれてありがとーなトキにゃん」

アルはそう呟いた。

「気にするな。あんな光ってたら嫌でも目につく」

ぶっきらぼうにいつてみた。

その言葉を聞き、アルは軽く笑った。

「ワイなーこの力のせいで捨てられたんよ」

懐かしそうに呟き始める。

「ワイの両親は魔力がめっちゃたかこうてなー、賢者って言われてたような人たちやった。そんな両親の子や、ワイも生まれた時から魔力が普通の成人以上やった。両親はそりゃよろこんでいたと聞きよーた」

アルの方を向いて見ると、星を見上げ、目を開いたまま涙をながしていた。

キレイな涙だと思った。

「でもなー、ワイが三歳のときに、既に両親の魔力量をこえてもーた。5歳のときには両親二人を合わせたよりたこーなってなー……。怖くなった両親はワイを自分の子供じゃないと言って捨てたらしいんや」

ああ……。これがアルの……。

「でもな、子供の自分にはよーわからなくてな？ いつか迎えに来てくれるとおもーて孤児院のちかくの学校にはいったんよーたしか

七歳のときやなー」

そんな奴が入ったら……。

「そやなー結果的にいえば最悪やったわー。最初は四つの属性があるーゆうて神童とよばれてたんや。でもなー確か10歳ころに、歴代でもほとんど使える人のいない古代魔法を完成させたんよ？ さつきつかったあれやなー、大人や他の子らはワイを恐怖や、嫉妬の目でみはりよる」

やっぱそうなるよな。

「それならまだよかつたんやけどな？ 大人とちごーて子供はワイをいじめはじめたんやー、大人はワイを避けてたかいなー」

人は異質の存在を許さない。

最初はもてはやすが、理解の範疇を超えたらそこからはわかりきったことだ。

「先生にゆーてもワイが悪いつてことになってなー、頼る人間なんていなかったんやー」

アルの表情は寂しそうだ。

「それでなー。気づいたんよ。ワイは親にすてられたんやって」

10歳の少年にはキツイ事実だ。

「それからや、ワイの古代魔法があーなったんわ。最初は七色に輝く光だったんや。面影もないんやけど癒しの魔法やったんや。変化



にきづこのーってつかってしまったんや。どうなったとおもー？」

こちらに聞いてきた、

「あの魔法の威力なら家くらい壊れたんじゃないか？」

くすくすわらっているアル。

「結果は町半壊や、たぶんかなりの人が亡くなったんやないやろうか。跡方ものこらんのや。どうなったかわからんねんけどな」

これが……、アルの“根っこ”の部分か……。

「こわのーてワイは逃げた。魔力がつづくかぎりひたすらに。そして膨大な魔力がすべてなくなるまで飛んでここにきたんや。それからは威力を押さえて属性も火だけってことにしよーてな」

穏やかな笑みを浮かべながら、アルは続けた。

「今日トキにゃんに言われた言葉うれしかったんやで？」「なんで隠すんだ？ 人に誇れることだろ」ってな。そしてトキにゃんならワイを解放してくれるとおもったんや。結果は最高つやな！」

満面の笑みを浮かべながら声をあげた。

「あー！ー！ ワイは弱いなあ！ー！ 今まで魔法使いをバカにしてたつてのもあつたんやー！ だつてそやろー？ みんな弱すぎんねん！ー！ でもなー、ワイはわかつたんや。上には上がおんねんよ！ ワイ程度を恐怖してどーすんねん！ そんなこといつたらトキにゃんなんて化け物やないかい！」

化け物は傷つくぞ……。

「だからなー今度からはいつてやるんやー、ワイ程度に恐怖や嫉妬してどうすんねん！！ワイより強いやつがいるんやぞ？ ってな」

まあそれくらいならいいだろう。

「名前は出すなよ？」

とぼつちり食つのはごめんだ。

「トキにゃん……ありがとーな。そしてごめんや」

行き成りしおらなくなったぞ。

「あ？」

「ワイらまだ友達でいいんかな？」

まったくコイツは……。

「当たり前だろ。友達ってか親友だ！」

「親友なんてはじめてやわー」

「俺もだ、そもそも最初の友達がお前だ」

悲しいが事実だ。

「はは……、そりゃ光栄やな！」

アルは声を上げて笑っていた。

「また一緒に御飯たべような？」

「ああ」

「教室でも話しような？」

「ああ」

「パーティーでの活動もがんばろーな」

「ああ」

「たまには一緒に寝ような」

「……………ああ」

「また裸で抱き合おうな」

「死んでもお断りだ露出狂」

そんなアホらしいやりとりをしながら、二人で星を見上げる。  
親友っていいよな…。

「星がきれいだな……………、トキにゃん」

「そうだな……………」

たしかにキレイだ……、まるで宇宙の中にいるようだ。

「トキにやんの召喚のときのようや……、あんな場所に住めるトキにやんの能力がうらやましーねんなー」

「すみたくはないがな」

あんな何もない場所に長くいたら、精神がおかしくなる。

「トキにやんがいなくなるときは……、ワイもつれてってくれんかなー？」

唐突にアルが言った。

アルは俺が世界を渡ることを知らない。

そして連れていくことはできない……。

あの空間を介すとなると普通の人間は生きていけないだろう。

それに俺は不老だ。

アルは年をとる。

その時、俺は別れを乗り切る自信がない。

「……………」

結局、俺は何も答えられなかった。

隣を見てみると、アルが眠っていた。

「ご主人さま」

忘れていたが、ハクが声をかけてきた

「なんだ？」

「私はご主人さまのことが少しはわかるんですけど」

言いたいことはわかる。

俺自身でもわかるからな。

「わかってるよ。もう限界だろこれ」

俺の体は限界だ。

自分自身でわかる。

常人なら死んでもおかしくないような火傷。

「傷もそうなんです。境界がボロボロです。壁ですね。ページ制限以上の魔法を使ってしまったので。壁にヒビがはいつてます。使える穴以上に大きな魔法を使ってしまったので穴の周りが壊れてしまったんですよ……。はあ、もう無茶はしないでください。空間結界と収納は大きな魔力を必要とするんですからね？ あんな量の魔法を収納したら壊れて当たり前です」

あーなんか聞くのがだるくなってきた。

と言うよりも、体がだるい。

「ご主人さまの壁は特別製なので修復が出来ますが。もし同じことを一般人がやったら壁が壊れて確実に廃人だったんですよ？ とりあえず寝てください。体も動かせないんでしょう？」

おーよくわかったなコイツ。

さすが俺の中身だ。  
指一本動かせそうにない。

「そうするわー。だるいし眠いし……。レン、結果として俺の部屋につなげてくれないかー？ あと俺とアルを運んでくれ」

うん。

もう空間に穴開けることなんて無理だ。

「おにーちゃん大丈夫？ あとはやっておくよ。でもレンあのひときらい。おにーちゃんを傷つけた。おにいちゃんに言われなかったら消してるよ？」

おう……。俺の妹神様はひどく極端な精神構造をしているようだ……。

レンが空間をつなげているのを横目に、俺は眼を閉じた。

いまさらだが……、不老ってきついな。

出会った人たちは死んでゆき。  
自分はそれを見届けるしかない。

それを何度も繰り返す。

苦しまないように世界を渡る……。

普通だったら放り出したくなるよなー、まったく。



## 十三話 魔力測定

### 教室

その後、俺は眠り続けていたらしい……。レンは俺と自分の時間を引き延ばした状態でずっと治療をしていた。

時間的には三か月間、目を覚まさなかったらしい。寝ていた日数は6日。

ホント使い魔さまさまである。

ちなみに、アルは引き延ばされていない状態で三日眠り続けたらしい。

古代魔法は世界を表に出すことだったらしい。精霊の力で世界を複写して出すらしい。ほとんどが精霊で補っているとしても。

やはり魔力を消費しすぎたらしいのだ。

そして復学初日。

「はいー。明日から一週間。使い魔評論会を兼ねた、使い魔の闘技大会が始まりまーす」

……はい？

何言ってるんですかハンネちゃん。

あ、でも俺が休んでる間に言ってたのかな？と、周りを見まわしてみるが、

他の生徒もポカーンとしてるし。

言っただけじゃなかったなこれ……。

「せんせーい！ 初めて聞いたんですが」

エーコさんが質問した。

「はい、はじめていいましたから」

あっけらかんと言いのけた。

「「「「「……「「「「」

そして沈黙。

ペシッ ペシッ ペシッ ペシッ

俺はハンネに消しゴムをちぎっては投げ、ちぎっては投げ。

「うー、仕方ないじゃないですか……。ちょっと忘れちゃってたんですから」

ハンネのふわふわな髪に消しゴムのカスが入りこんでゆく。

なんで前日に言うんだ！

全然仕方なくないから！！

「ハンネ、その大会っていつ知らされたんだ？」

ハンネもバカじゃないんだからきつと忘れるくらい前だったのだろっ。

腐っても先生なのだ。

「えっと……、夏期休暇前から職員室では毎日話に上がってましたね。一応学園創立からのイベントらしいので……。準備も進めてました」

腐れバカヤロウだった。

「一昨年の大会では私が優勝しましたよー？ そのあと、ごはん忘れてて逃げられちゃいましたか」

今はそんなことどうでもいい。

しかも逃げられるって何だ。

血の契約しているんだぞ？

どんだけご飯あげ忘れたんだ。

「トキにゃーん、あきらめーや。いつものことやる？」

どんな風に思われてるんだハンネ……。

「……………ぐすつ……………トキくーん……………説明はじめていいですかー……………？」  
泣きそうになりながら懇願してくる。  
うなずいてやる。

「はい、今回の大会はパーティーの中から一人出てもらいます。普通はパーティー内で使い魔を戦わせて一番強い人をだしますねー。でも、もう明日なんで、パーティーリーダーを出せばいいと思います。と言うかリーダーで登録しちゃったので出してください。10個のブロックに分かれてトーナメント形式の予選を行いますので、一つのブロックで20人、4回くらい勝てば本戦ですね。ブロックごとに会場が違うので迷わないように。予選四日間。本戦三日間でおこないます」

自分の責任を生徒に押し付けるなハンネよ。

「あと今回から単位も出ますから、足りてない人ががんばっちゃってください。一応決まりなんで、パーティーごとの総計単位ランキング張り出しますね〜」

そういつて壁に大きな用紙を……、張れなくて泣きだしたところで近くの生徒に張ってもらっていた。

結構高い位置なのでどこからでも見える。

生徒が風魔法で張りつけていく。

「トキにゃーん、ワイらのあるかいな？」

隣からアルが話しかけてくる。

「うーんどうだろ。上のほうはSクラスばかりだしなあ。他の場所を探すの大変だなこれ。200組も乗ってるし」

200組の名前がズラーっと並んでいる。

一番上の黒姫ってチームなんかもう300単位くらいか。

「あ、おにーちゃんのちーむあったよ？」

そう言つて、レンが指をさす。

「え？ どこだレン？」

「ほら、一番した」

その場所に視線を向けると、確かにあった。

チーム『レンわんにゃんコケコッコ』だ。

ふざけた名前かもしれないが、俺が寝ている間に名誉顧問。

すなわちハンネが決めたらしい。使い魔の名前をくつつけただけ。

「習得単位3……」

パーティーメンバーを見まわしてみる。

「あはは……、ワイは手抜きすぎて火応用とれなかったんや」

「わたしは……、自習室でずっと剣を振ってましたですー」

「ごめんねトキ様……、あまり顔を合わせたくなくて寝てました」

「俺は剣術だけだったからさだ」

なんとも言えない空気が流れた。

そのあとみんなでハァ……、と溜息を吐いた。

「あ、でも前半なのでトキ様が使い魔大会と闘技大会優勝したら一位ですよ」

たしかにそうなのだ。

使い魔大会賞金100万セラ+単位100Pらしい。

セラの単位がわからないが……。

なぜ賞金がわかるかというと、順位の隣にポスターが張ってある。多分かなり前に張り出す予定だったのだろう、日付も乗ってるし。

闘技大会のほうは、前にハンネと話してる時にパーティー優勝が300P、個人優勝が150Pらしいのだ。

「勝てると思うか？ コレで」

皆の視線がレンに向く。

レンはくりくりした目で首をかしげている。

その後、三人に視線を向けると、目を逸らされた。

「てか、ディアのシロが出れば絶対勝てるだろ……？」

あの巨体だ、しかも顔が三つあるから三倍の攻撃ができる。  
神獣だしな。

「仕方ないですよ、先生がリーダーで登録しちゃったし……」

ハンネは何を考えているのだ。

そもそも名前がやばい。

『レンわんにゃんコケッココー』ってなんだ。動物の合唱だ

「まあ仕方ないか……」

「はい。では、これから対戦表の書かれた用紙をおくりますね！  
ちなみに対戦相手はランダムですのでーAクラスとあたっちゃった  
人はご愁傷様ですー」

そうして、プリントを配る。

Aクラスと一般クラスでは実力がかなり違う。魔力の数値の桁が  
違うのだ。その分有力な使い魔が召喚される。

Aクラスの召喚は、俺達の後だったので異世界につながっていた  
人もいたかもしれない。

そして手元の紙を見てみると。

「こりゃー見事だな」

ああ。見事だ

「そやなー、いきなりAやな」

そうなのだ。最初からAだ。それ以外は初日に当たらないもの。  
二日目も多分Aにあたる。

「しゃーないか……、やれるとこまでやってみるわ。な？ レン」

となりのレンの頭を撫でながら聞いてみる。

「大丈夫だよおにーちゃん！ おにーちゃんの敵はみんなみんなレンが消しちゃうから！」

レンはやる気のようにだ。

むしろ、殺る気のようにだ。

ちなみに殺したら失格である。

「殺さない程度に頑張ってくれ……」

にこにこしながら頷いているが……、果てしなく心配だ。

「はーい、では次にー、魔力検査をしたいと思います。これは使い



魔闘技大会が終わってからの課外授業での参考にしたと思います。強い魔力の人から難しい任務が割り当てられますので。頑張ってくださいねー？ 去年は平均が500くらいでしたねー。ちなみに99万9999まで測れるので、どんなに魔力が高くても測れます。安心してください。賢者と言われる人たちで二万くらいなので大丈夫だとおもいますよー。これも後日張り出されますからー」

頑張るものにも、自分で上げるのなんて無理なんじゃないかこれ？

「でわー、一列に並んでくださいねー？ 水晶を握ると中に数値が表示されるのでー。それを私が記録します」

俺たちのパーティー以外全員が並んだ。

「トキにやーん。これなんとか隠す方法ないんかいなー？」

「同意見だ。このパーティーだと明らかに難しい任務になる」

うんうん、とうなづく三人

「ご主人さまー……」

ハクが小声で話しかけてきた。

「なんだ？」

「ご主人さまは最後に測るといいと思いますよ？」

？ まあ最後までもいいけどな。

「トキにやーんワイらもならばうやー？」

「んー、俺は最後でいいから三人で言ってきてくれ」

りよーかい。とアルが列に加わる。  
その後ろに二人も並ぶ。

まだ時間がかかりそうだし。

俺はレンの髪をブラッシングでもするかな。

数十分後、アルの番になったらしい

」  
「おおおおおおおおおおお」

とか、叫んで水晶を手にとる。

魔力を込める必要はないので意味はないのだが……。

ピー……

「はい、アルくんは……、すごいですねー5万4328です！  
王都でもダントツですよ？」

ザワッ

クラスの間がざわめきだす。

「スゲーなアルブレヒト！」

「キヤー！さすがですアルブレヒト様」

「っしやー！俺もお前に負けないようにがんばるぜー！！！」

「うちのクラスからそんなやつがでるなんて俺も鼻がたかいぜ！」

口々に褒めてるようだ。アルも照れてる。

恐怖や嫉妬はないようだな……いいクラスだ。

これならアルも、もう大丈夫だな……。

「はい、ではつきディアちゃん」

ディアが水晶を手にとる、

「3万2561ですねー……、なんかこのパーティーにはいつも私  
驚かされてます」

なぜかしょげているハンネ。

だが、お前は俺らの名誉顧問だろ？

ディアは無言で俺の方に歩いてきて。

ニコニコと俺のほうを見ている。

褒めてほしいのだろうか？

撫でてやると気持ちよさそうにしている。

「でわ、次はシャルさんですねー」

シャルは水晶を掌の上へのせる、

「シャルちゃんはー2万8921ですねー」

慣れたのかハンネはスラスラと手元の紙に書き込んでゆく。

一番低いシャルでも賢者クラスこえてるぞ？

なんかもう任務で他の国潰してこいとか言われそうな勢いだ。

「でも私魔法使えないんですけどねー……」

シャルはうなだれていた。

「では最後にトキくんですねー」

呼ばれたのでゆっくりと歩いて行ってみる。

ハクはなぜか俺の肩に隠れている。

「ご主人さまご主人さま。結界を張っておいた方がいいとおもいます」

ふむ。よくわからないが……、言う通りにしておこう。

「レンちょっときてくれー」

とととて、と走ってくるレン。  
かわいいな……。。

「レン、俺の周りに大きめの結界。あと内部にいる俺、レン、ハク、ハンネに個別結界を頼む」

コクコクとうなずき空間を歪ませる。

使い魔が結界を張った事にか、空間結界に対してなのかわからないが、他のクラスメイトは驚いている。

「では、トキくんこれを持ってください」

と、いい机の上の水晶を指さす。

ふむ……、初期値は右端に“0”とだけ表示されている。

とりあえず手に取ってみる、

数秒、何も起こらなかったが。

ピーーーーピキッ

数値は”000000”となっている。  
そして少しひびが入っている、

『あれー？ 壊れちゃいましたかねー？』とかハンネは言っているが。

「おにーちゃんレンもー」

とか言っつて、レンがこちらに走ってきて。

俺の手の中の水晶に手をつける。

瞬間…、

バンッ

水晶は爆発した。

結界のおかげで誰も怪我はしていないが……。

レンは不思議そうに破片を眺めている。

「んー、とりあえずトキくんは0ですねーおかしいですねー……。  
0だと魔法は使えないはずなんですが？」

そんな事を言っ書き込んでいく

「トキ……くん。あとですね……。この水晶すっごく高いんですよ？  
私のお給料じゃ無理です……。だからですねー」

涙目上目づかいで指を一本立て、こちらに言い聞かせてくる。

「次の使い魔闘技大会で優勝して水晶買ってください」

にっこり言っているが迫力がある。

これで俺は勝たないといけない理由出来た……。

あと優秀なパーティーの中で0な俺。

なのにリーダーという。

あとでハクに聞いた話だと、『ご主人さま、6桁程度の測定器  
じゃご主人さまの魔力が測れるわけないじゃないですかー』とのこ

とだった。

先に言えよ……。

どっちにしる俺は0扱いだけどな。





『殺せ』

『まずブロックごとに分かれ勝者をだすぜー！もちろん殺しは失格だぜー？　ここはブロックだー！興味のないやつはさっさとでてけー！さあー！わかったら早速試合開始だー！　司会は俺！　高等部三年ボリス・ブランケンハイム！　と』

『私。三年……アネル・ブランド。速く殺しあえ屑共』

「わあー！ーアネルちゃんーん」

『黙れ屑。引きちぎるぞ……』

『では早速！最初の試合からいくぞー！？』

「……………」

『でた——————！！！！ローリング——バスター——  
——！！！！』

『……………何がローリングばすた——だ……………ただのハリネズミとネコのたかいだ。屑司会め』

俺は選手控室でそんな司会の言葉をきいていた。

はあー……、なんだあの司会。  
自分中心な男の先輩と。  
毒舌な女の先輩。  
どんな人選したらこうなるんだ……。

「おにーちゃん、緊張してるの？」

不意に横から声がかげられた。

「ああ、大丈夫だよレン、おいで」

レンを両足の間に座らせて。  
髪をすいてやる。

「レンの髪をすいてるとおちつくなー……」

実際落ち着く。

さらさらな髪なので、別にすぐ必要もないんだが。  
目の前にあると触りたくなってしまう。  
妹神様は偉大だ。

「ふふ〜ん　らんらら〜ん　」

レンも鼻歌を歌って気持ちよさそうだ。  
視線が痛いのが気にしないぜ！

「おにーちゃん、レンの番ってまだー？」

上を見上げて、俺の顔を見つめ聞いてきた。

「そだなあー……、三試合目のはずだけど。もうすぐになったら係りの人が呼びに来るみたいだぞ？」

「おそとであそびたいなー」

などと言って足をぶらぶらしてるが……。遊ぶって闘うってことだよなーきつと、どんどん擦れた子に育っていく気がする……。

俺の育て方が悪いのか？

ガチャッ

「トキキキサラギさん。そろそろですので、フィールドの裏に待機してもらっていいですか？」

やっと俺の番らしい。

「はい。大丈夫です。レンいくぞー」  
「うん〜」

と言つて、俺の手を握ってくる。  
係りの女子生徒は眼を見張っている。

「えー……。それがトキキキサラギさんの使い魔のレンですか？  
誘拐では」  
「違います」

なんか犯罪者を見るような目つきだ……。

「今は姿を変えているので」

なぜだがほつとしたようだ。

「そーですか、かわいらしい使い魔ですね？ わたしはてつきり…  
…さ、ついてきてください案内します」

てつきりなんだと言つのだ。

そんな事を思いながら後ろをついていく。

「では、ここに待っていてくださいねー?」

レンと二人で選手入場口の手前で待つ。  
フィールドから入り込む、日の光がまぶしい。

「レン、どうだ? 勝てそうか?」

ここにこしているレンに聞いてみた。

「んーおにいちゃんが勝ってほしいならかつよ?」

うん。頼もしいんだが殺しそうな勢いだ。

「じゃ、勝ってきてくれるか? でも、危険だったりしたら降参しちゃっていいからな?」

水晶代と単位がほしい!

このままだと進級できない+ハンネに永久就職になりかねない。

「うん!」

『きまったーーーー!!!! アンゼルマのミレルの勝利!!!!』

『つまらない試合……とどめをさせとどめを……ブチ殺せ』

外は騒がしいな……。

『では次の選手入場だ——————!!』

『次つまらなかったら……帰る』

ひどい司会だな。

「レン行くか？」

となりのレンを促す。

「うん」

ととととと小走りで走っていく。

そのあとを俺が追いかける。



フィールドに出ると、

空からの光がまぶしくて、手で遮る。

レンは光の中でこっちを見て、にこにこ笑っている。

会場の見学席はほとんどうまつている。

1万人近くいるんじゃないだろうか？

ところどころ、年配の人がいることから外部からも来ているらしい。

フィールドは普通の会場、大きな岩が何個か配置されている。

広さは100メートルくらいだろうか？

空間が少し歪んでいることから、フィールドと客席の間には結界が張ってあるのだろう。

『ではーーーーー！！ 次の試合は！ 赤のコート入場！』レ  
ンわんにゃんコケコッコのリーダー！！ Fクラスのモテやろ  
う！！ ハーレム作ってんじゃないやねーポケエエエエ！ トキキ  
サラギ！！ 又の名をトキキサラギだーーーーー！そして使い魔  
はーーーー！ レンだーーーーー！！ クソヤローーーーー！！ 使  
い魔までなんでかわいい女の子なんだーーーーー！！！！ てかチ  
ーム名ばかだなおまえーーーーー！！』



てか名前キモイぞ。

自分の名前にEXつけるな。

「わたし的には……ブッシュ死ぬ。主人がキモイ」

うん。たしかにデブだ。

なんか会場が男子と女子で別れた気がする。

「これはもう勝者は決まったようなもんかー！ーでは試合をー。って何だお前あがつてくぶげっ！」トキにゃーんそんな不細工さつさとやつつけてーな」

「そうですトキ様。その不細工がトキ様と同じ空気を吸っているだけでも寒気がします」

「死ねくそガキ……私のマイクだ。……ブチ殺されたいか？」

「黙ってください。あなたみたいなちびっこはやく初等部にいつてください！ ペチャパイが」

「……脳まで湧いたかこのガキ。……私の方が年上だ。身長も胸もたいしてからないだろうが」

「トキにゃー！ーん！！ そんな弱そうなドラゴン一撃やー！ー」

何やってんだアイツ等……、司会席が混沌としてるぞ……。

「はっはっはー、君のクラスの人達は皆あんななのかい？ これだからFクラスなんかの雑魚は」

なんか前のデブが話しかけてきた。

「たしか君のチーム……」にゃんにゃんコケコッコ『だっけ？ 単位数最下位だったよね？ 雑魚ばかりのチームなんて所詮そんなもんだよ』

ピキッ

何かにひびが入った気がした。

「君の使い魔もなんだそれ？ 降参したらどうだ？ 僕も殺さないように手加減するの大変なんだよね」

ピキッピキッ

ひびが広がった。

「で、どうだい？ 別にFクラスの雑魚共が、Aの優秀な僕に降参してもなにも恥ずかしいことはないさー。はっはっはーにしても君

も悲惨だねー、弱いのに大会に強制参加なんて」

バキッ

壊れた。

自分がバカにされ。

レンがバカにされ。

友人がバカにされ。

クラスがバカにされ。

うん。もうね。限界。

「レン」

「なあに？ おにいちゃん？」

うん。今回はわかるよ。レンが怒ってるのも。

もうね。

レンと俺の周りの空気が悲鳴をあげてる。

もう聞こえるくらいに。

確かにね。

強そうなんだ。あのドラゴン。

20メートルくらいあるしね。

でもね、譲れないものってあると思うんだ。

それに、デカイから何？

「レン、遊んでやれ。殺すなよ？ 方法は好きにしろ」

レンは満面の笑みだ。

「うん おにいちゃんの悪口いうひとはホントは消し去りたいんだけどね。いいよ。お兄ちゃんの頼みだから」

そう言うと、空間が一層歪む。

今のレンには、俺以外誰も近づけないだろう。

近づいた瞬間存在ごと消える。

うん、バカだねあのデブは。

ドラゴンのほうはわかるのか後ずさってるし。

「ホント、あの方はバカですねご主人さま」

そう言って、いきなり現れたハクが、くすくす笑っている。

「龍種には絶対な序列があるんですよ。頂点に君臨する時空龍には

むかつなんて。あんな黒龍1憶匹かかってきても無駄なのに」

ホント楽しそうな笑みだ

そして俺は声を上げる。

「黒龍よ！ お前は何も悪くない！ だが！ お前がその主の召喚に答えたのが悪い！ お前には恐怖をやろう！！ この世界の最強種よ！！」

『ゴオアアツ！！』

黒龍が吠える。

悲しいような。

自分の末路を嘆くような声だ。

血の契約は絶対だ。

そこには主従という明確な差がある。

神獣程ならば、千切ることも出来るかもしれない。

レンはやろうと思えば出来ると言った。

しかし、黒龍程度には出来ない。

「な、何を言っているんだ君は！！　？最強の龍だぞ？　お前なんかにどういふことができるはずないだろ！！？」

無様だな。黒龍の主。

「司会！　速く試合を始めろ！！」

俺は叫ぶ、まったくいつまでやってるんだかアイツら……。

『トキにゃーん？　どーしたん？　ワイらのことなら大丈夫やで？　そんなこと言われ慣れてるんや』

『私もですトキ様、その程度の相手に何を言われようが関係ありませんよ』

うん、そうだろうな……、だからだよ。

アルは魔力の高さで。

ディアは魔族のハーフで。

シャルは魔法が使えない。

確かに言われ慣れてるだろうな。

だからって、傷つかないわけがないんだよ。

『つてもう返せ！！　それでは——第三試合開始っ！！』

『開始です……そのデブを引き裂いてください』



やっと始まったか。

「レン、お前に任せるよ。殺さない程度に自由に遊べ」  
「はい」

レンは一步前が出る。

「僕をバカにしゃがってーーーー！！！！！！ イケ！！ ブッシュ  
EX」

黒龍は上空に飛び上がった。

『ブワアアア！』

地上30メートルくらいで滞空し、レンに向かってブレスを吐く。

うん。

さすが最強種だな。この世界でだが。

漆黒の塊がレンに襲い来る。

それをレンはただ見つめている。

そして、右手を胸の左あたりに一度移動し。

ビュッ

その黒弾を手で横に弾いた。  
こんなものか？ 程度に。

会場は沈黙している。

12歳くらいの少女がドラゴンのブレスを弾いたのだ。

デブは哀れに震えている。

はあ……。

「レン。もうちょっと遊んでいいぞ？ 退屈すぎて欠伸が出る」

あのデブを見てたら、自分が怒ってたのがアホらしくなってきた。

「うんーわかった」

そして、次の瞬間レンは掻き消えた。

『ズドオオオオオオオーン』

次の瞬間、龍がものすごい速さで地面に衝突した。

「ひっ!!?」

哀れすぎるぞデブ。

「おいデブ！ テメーはその程度の使い魔召喚して有頂天になったのか？ ああっ!?!」

レンは空中でもう一度掻き消えた。

『ゴーン』

『ガン』

『ゴッ』

『ドッ』

『ガッ』

次の瞬間黒龍が消えた。  
いや、空間を飛び跳ねているようだ。

レンが殴り、蹴っているのだ。  
時間を引き延ばして、龍が殴り飛ばされる地点に先に移動しているの。

まるでピンボールのようだな……。

地面には漆黒の血が滴り落ちる。

「下らねーよデブ！！ ホントくだらねーよ！！ テメーが見下さしてたクラスにはな！ 俺と同レベルの召喚してるやつがゴロゴロいんだよ！！ テメーなんてFクラスにだってなれねーよ！ 初等部から出直してこい！！」

くだらねーよホント。

Aクラスがなんなんだ？

FだろーとAだろーと強い奴は強いんだよ。

「おい！ 司会ー！！」

俺は、呆然としてる司会の男に話しかける。

『はっ、はい』

「選手が使い魔に攻撃しなきゃいいんだよな？」

『そうですね……大丈夫です』

急に敬語になった。

「見てるデブ！ テメーがコイツを召喚して有頂天になってんなら、お前はコイツの主にふさわしくねー」

この龍が可愛いそうだ。

「レン！ その龍つれてこい！」

まだあそんでるレンを呼ぶ

「はい、お兄ちゃん」

レンは虫の息の龍をずるずると引きずってくる。

龍は俺の前で懸命に起き上がろうとしているようだ。太くてたくましい足がぶるぶると震えている。とめどなく体から血が噴き出している。

「レン。こいつが立てるくらいまで治療してやれ」

俺がそう言い終わると、レンはすぐに治療魔法を行使する。

「すまん、黒龍よ。別にお前が悪いわけじゃない。お前の主が屑だったんだ」

そう言って黒龍の頭を撫でてやる……。

「お、おい！ 何素直に撫でられてるんだブツシュEX！ 早くその使い魔を倒せ！！！ バカが！！ 試合中に回復しやがって！！！」

とことん下種なやろうだな……。

「もう飛べるか？」

コクツつとうなずいたように見えた。

レンの回復魔法はかなりのレベルだな。

「お前はあの主の元に戻りたいか？」

首を横にふる。

「いい子だな、お前は」

笑みを浮かべながら、大きな頬をなでる。

立てるようになったのか。立ち上がり、俺の胸に頭をぐりぐりする。

固くてごりごりしているがかわいいやつだ。

ますます、あいつに返すわけにはいかないな。

「レン。こいつの中からあのデブの血の繋がりを消し去れ」

そう言うと。レンは片手を上にあげ30メートルもある空間の歪みを作り出す。

宇宙のような、深い紫いろの塊だ。中にキラキラと星のような物がちりばめられている。

「動くなよ？ 俺も傍にいてやるから。何も怖くない」

レンは一気に振り下ろす。

想像していたような音も痛みもなく。

俺と竜を突きぬけて行く。

「これでお前は自由だ黒龍よ。行け！」

龍はじつと俺を見て、一度頭をたれてから。

『グオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』

大きく、長く吠え、遠くに飛んで行った。





そう言っつて、特大の火の弾を放つてきた。  
さすがAだ。  
それだけだが。  
アルより全然弱い。

刻はその場から掻き消え、すぐに元の位置に戻ってきた。

『ズドオオオオン』

一瞬後、デブは壁にめり込んでいた。  
遅れて襲ってきた火の球はレンが手を動かすと消え去った。  
いつの間にか会場の歓声は消え去り。  
誰も声を発つすることが出来ないでいた。

「正当防衛だ」

そう言っつて、レンをひきつれてフィールドを出た。



その後、不戦勝でブロック1の勝者になったことが伝えられた。

アレ？　なんでだろ？

レンも不思議そうな顔をしている。

もしかしたら、俺がレンを召喚したのは似た者同士だったからなのではないだろうか？

十五話 使い魔大会 本戦（前）

本戦会場

うん、予想してたよ。

本戦10組中。

6組がAクラス3組がBとC、1組がF。

しかも、なんか期待されちゃってるんだよね……、ABCクラス以外に。

確かにABCは特待生と準特待生だけだよ。

なんでそこまで上位クラスに嫉妬するんだろっね。

一般クラスだってアルみたいに強い奴いるのにな。

なんか、もうね。

プレッシャーやばいです。

本戦はパーティー全員で開会式に出るんだけどね。

俺らの入場したときなんてやばかったよ。

だって8割は俺らを応援してくれてたね。

学年にかかわらず一般クラスが。

その割にはね。公認トトカルチョが123倍とかなんだけどね。

応援はしてるけど勝ちはしないだろうって思ってるんだろうね。

そしてここ……。

デカイなー…、フィールドが1000メートルくらいある。

至るところに大きな画面が設置してるある。

これならどこの席からでも見れるだろうな。

しかもなんだろう、この人数。

10万人越えてるんじゃないかな人数。

そんな中に立ってるんだぜ？ 緊張しないほうがおかしいって。

レンなんて緊張しすぎてちようちよおっかけてるよ。

学園長の演説中にな。

今は、10列になりパーティーごとに並んでいる。

その後ろには、使い魔達が並んでいる。

さすが勝ち抜いてきたただけあって大きい使い魔が多いな。

それに比べてうちのはなんだ……、女の子、猫、鶏、犬。

なんだろうこれ。

女の子と家畜ですか？ 入った時なんてめちゃくちや笑われまし

たからね？

そのせいで倍率がこんなになったんだけど…。

『えー、これにて開会式を終了します。一回戦は一時間後にはじめますので、各自準備をしておいてください』

選手控室に歩みを進めていると、アルが離しかけてきた。

ちなみに、本戦からパーティーごとに部屋を使うことが出来る。

「トキにゃーん。なんか他のパーティーの使い魔つよそうやなー」

言っな、わかってる。

ドラゴンとかペガサスとかもうね。

「強そうじゃない、強いんだろ？ ここまでできたんだから」

うん、絶対強いよあれ。

「でもトキにゃんもここまで上がってきたやろ？」

いやいや、違いますよ？

「俺は一回しか闘ってないぞ？ 勝手に不戦勝でどんどん順位があがって……」

「それはトキにゃんに勝てないと思ったから負けをみとめたんやで？」

まあ黒龍のときは熱くなったからなあ……。

「なあアル」

「なんや？」

「金貸してくれ」

でも、この倍率はうれしい。

どうせ勝たないといけないなら賭けたほうがいいだろう。

「ないよ？」

「は？」

「全財産トキにゃんにかけてもーたからな」

どんな期待だ。

仕方ない。

女の子に借りるのはどうかとおもつが……。

「シャル、ディア金貸してくれないか？」

うん。かなりはずかしい。

「ないですよ？」

「ないですー」

……………まさか。

「「全財産トキ（さん）（様）にかけました（ですー）」「

期待が重いよ……………泣きそうだ。



そんなやり取りをしながら、選手控室に行くとハンネがいた。そう言えば、ハンネは名誉顧問だった。なんの名誉かわからんが。

「トキくん。絶対勝ってくださいねー」

いきなりだな……。

「トキくんに全財産かけましたから、200万セラほど」

アホだこいつら……。

どれだけ期待するんだ……。

この一週間で知ったんだが、セラというのは円と大して変わらないよつだ。

つまりこいつは俺に200万円かけたわけだ。

「ハンネ一応先生だろ？ 賭け事していいのか？」

最後の抵抗。

「学園公認ですからねー、それに私は先生だけどこのパーティーの

名誉顧問なんですよ？ トキくんを応援して当然じゃないですか？」

そんなこと言ってるが、その期待でキラキラした瞳はなんだ。

「はぁ……、てかお前らどんだけ俺に期待してんだ。しかも全員全財産かけるな……」

絶対負けられなくなっちまった……。

「安心して下さいトキくん、勝ったらトキくんに半分あげますからーその代わり負けたら半分背負ってください」

全然安心できない。

なんで、負けたら100万セラ俺が払わないといけないんだ……。

「まあいいや。そついや俺一戦目だなー……」

1ブロックと2ブロックが当たるから一戦目だ。

「レン、調子はどうだ？」

レンは俺によりかかって眠そつだ。

「ん、ちよつとねむいー……」

「そつか。じゃあ試合まで寝てていいぞー」

「ふぁーい」

そつ言つて俺の膝に頭を置き、眠りにつく。

なんか俺も眠くなつたな……。

「……キ……ん」

アル？

「トキにゃん、まじすべし誂合せべし」

あー俺も寝てたか……。

「んーじゃあすぐいくわー」

レンはまだ俺の膝枕で寝ている。

「レンーおきろー試合だー」

レンを揺り起こす。

「ふみゅーふぁーい」

めっちゃくちゃ眠そうだ。

「トキにゃん、本戦からはワイらも後ろで待機できるさかい。応援してるでー?」

んーそうなのか…。

「わかったよろしくー…、にしても眠い……」

横を見ると、レンもあくびをしている。

「レンー俺は眠いーちゃっっちゃとおわらそっ」

本当に眠い……。

「わかったー。レンもはやくねたい」

「じゃあ三人ともいくぞ〜ハンネはどうするんだ？」

ハンネはパーティーじゃないんだよな。

「残念ですが私は名誉顧問なんではいけないんですよ。でも、学園長がわたしに席用意してくれたらしいので、そこで応援してまっすね」

学園長はロリコンか？

「わかった。じゃあ言うってくるわ」

そう言いながら四人で控室から出る。

「がんばってくださいね〜」



『でわー選手の入場でーす！！ 赤フィールド～～～！ Aクラ  
ス『神々の黄昏』のパーティーですー！！ 選手はファルコ・コー  
エンでーす！～！』

『……………恥ずかしい名前。……………選手の質がわかるよなゴミ屑』

たしかに恥ずかしいが……………。  
だがこっちも負けてないからなー。

「「「「「「「「「「ワアアアアアアアアアアアア！」「」「」「」

そう思っているぞ。

向こうの選手が出てきたようだ。

割れんばかりの歓声が会場を包み込む。

ていうか遠すぎるだろ？ 豆つぶくらいにしか見えねーよ！

使い魔によつては向こうにつくまでにバテるぞー！？

まあそんな使い魔ならここに来れないか。

『次に、青のフィールドは～～～～～～～～！ Fクラス『レンわんにや  
んコケコッコ』のパーティー！！ 選手はトキキサラギです  
ー！！ ちなみにパーティー名は私が考えましたー！！！！  
トキキーん見てる～～～～？ 負けちゃだめだよ～～～～！！！！？』

めっちゃくちゃ身内びいきな司会である

『黒龍のように無残に殺し尽せ……』

おい！  
殺してねーよ！

『ではー、さつさと始めちゃってください！ ごはん食べてないの  
で限界です!!』

めちやくちや個人的な理由だなー！

『……死合開始。殺し尽せ』

字がちげー！ー！ー！ー！ なんなんだこいつらー！！？

「トキにゃーんワイもごはんたべてないんやー。さつさとしてや〜」

「私もです（ですー）」

うんお前らもか……。

そんなやり取りをしていると、向こうで何かが動いた。  
なんかめちやくちやデカイゴーレムかなんかか？

「レン」

「ん？」

「俺はな、今眠い」

「レンもねむい〜」

OK。

意見が合うな相棒。



「面倒だから速攻で吹き飛ばしてきて。動けなくなるくらいに」  
「りょうか〜い。行ってくるねおにーちゃん」

レンは一瞬にして掻き消えた。

二秒くらいでもう一度現れた。

「おわったよおにーちゃん。」

終わったようだ。

「さんきゅ〜、いくぞーおまえら〜」

俺は三人を促す。

三人は何を言っているんだ？ と、言う感じだが。

『しゅ〜りょ〜。何が起こったかわかりませんがエンシエントゴレムが粉々に砕けました〜ゴレムは数日で元に戻るので殺したことはなりません！ よって勝者！ トキキサラギ選手です！〜 あとお腹すいたんで私はかえりま〜す！〜』

『……………血が出ない……………つまらない使い魔。岩程度でいいきになるな屑。……………わたしもかえる』

そんな声が聞こえてきたが……………俺は空間を部屋に繋ぎ、レンとベットに横になった。

## 本戦最終日

今日はめんどいから時間ぎりぎりで来た。  
まさか本戦でも不戦勝になるとは思わなかった……。  
まあやらなくていいならありがたい。

いまは控室で作戦会議中だ。

「だからー私はですねー絶対朝はパンがいいと思うんですよー  
ー!？」

「ワイはぜったいごはんやわ! がっちり食わんときついでー?」

「私はトキ様と一緒に食べられるならなんでもいいですね」

「わたしはー両方たべますですー」

なんの作戦会議してんだ。

「むー平行線ですね」

「そやなー……、ここはひとつ」

二人がこっちを見た

「どっちがいい(んや)?」

ぶっちゃけどうでもいい。

「お前ら……、次決勝なんだが?」

こいつらなんも考えてないな。

「トキにゃーん。暇なんよ? ワイらやることないしなー」

「そうですよートキくんだけです」

じゃあテメーらが出る!

「はあ……、まあいいや。もうすぐ始まるから先行ってるな？」

作戦なんて出ないし、居ても意味ないだろ。

「まっつてーな、ワイ等もいくでー」

「それじゃ私も司会席いつてきますねー」

まだ、司会やってたんだ……、だってそうだろ？

一回戦でごはんあるから帰ったようなやつだぞ！？

「それじゃレンもいこうかー」

「はい」

今日は元気なようだな。

「そういえばトキくん。相手の要望で100メートルから試合スタートになってますからねー？ なんでも学園長が相手に賭けてるらしくて通った要望です。」

おかしいだろ？ この学園。

「わかった。OK」

そう言っつて、俺たちは控室を後にした。

にしても俺が大変なのにアイツらは暇なのか？  
そうかそうか。

言い事考えたぞ。

俺は不敵な笑みを浮かべてフィールドに向かうのだった。

「……………」

あーなんだろうコレ？

「はい。では決勝戦をはじめます！ 青フィールドとFクラス  
『レンわんにゃんコケコッコ』 トキキキサラギ選手〜！！ ここ  
までに来るまでに二戦しかしてないパーティーです！。蔭では「不  
戦勝王」と二つ名がついてますねー！ トキくーんちゃんと勝っ  
てくださいね〜私のお金がかかってるんですからー！ ちなみに

倍率は123倍でー！すー！」

めちゃくちや個人的ですねハイネさん！  
しかも不戦勝王つてめちゃくちや嫌な二つ名だな。

『対する、赤フィールドは〜！！ Aクラストップ『黒姫』のエ  
ラ・ブランド選手です〜！！ ここまで圧倒的な強さできました  
ー！ー！！ 二つ名は「黒髪姫」ですー！！ ちなみに個人的に  
はまけてほしいですねー！！ 倍率は〜〜1・6倍ですー！シヨ  
ボすぎですー』

お前どんだけ適当なんだ。  
なんか相手方の眉がびくびくしてるぞ？

『白いドラゴン……血が目立つ……血だらけになりなさい』

こいつもまだ司会してたのかー！！？  
いい加減誰が変わってやれー！！

それにしても……デカイな。

30メートル近くあるぞ？ この白いドラゴン。

てか後ろのやつらにしてもそうだが、こいつらドラゴン大好き  
だな。

左から赤 青 緑 黄 そして白。

カラフルドラゴンだな。

「にしてもお前がよエラ〜。なんか久しいな？」

うん。

確かこの学校につれて来てくれたやつだ。

「そうね。まさかここで会うとはね。ハンネ先生が入学したっていつてだけど」

「まあお手柔らかに頼むわ『黒髪姫』さん」

「っ！ あんたなんて『不戦勝王』じゃないのよ！！」

そうだったー！！！！

俺のほうがありえない二つ名だ。

「にしてもドラゴン好きだなーあんたら。スゲーカラフル」

目が痛くなる。

「仕方ないでしょ！！？ 一応学年でトップの5人なんだから！最強種のドラゴンが召喚されるのよ！」

またか……。

「くだらねーな……」

「なっ！！」

エラは怒ったようで、真っ赤になっている。

「くだらねーよそんなの。Aだとか最強だとか。アホらしくてやってられん。テメーらは金魚の糞みたいにAってレットルに張り付いてるだけじゃねーか」

後ろで三人がくすくす笑ってるが気にしない。

対する相手は真っ赤になって怒ってる。

なんともまあ……。

「うるせー！ テメーみたいな雑魚はその金魚の糞にもなれねーんだよー！」

後ろの赤いドラゴンのマスターが声を荒げる。

「黙れよ。金魚の糞の分際で口を開くな。俺はエラと話してるんだぞ？ お前の出る番なんぞ永久にない！」

あはは、真っ赤になつて拳がぶるぶる震えている。

一応、大会だから殴りかかつては来ないんだな。

「金魚の糞だつて、私は自分の力でここまでできたの！！ 学年のトップになったの！！ ここまで来れないあなたにそんな罵倒される覚えはないわ！」

まあそうだろうな……。

ちよつと演技してみるか、クスッ。

「勘違いするなよ女。そんな屑ばつかのくだらない場所になんか興味ない！ 最高の仲間がいればそれでいいだろ？ 実力のあるやつはどこにいたつてあるんだよ！ そんなレットル（プライド）にすがりついているお前らのところに行く気なんてさらさらないな！」

悔しそうだな。

「ッつ！ だつたらあなたに勝つて私は証明してあげる！ 私がトップだつてことを！！！」

俺がトップってわけじゃないんだがな……。



「使い魔大会じゃ意味ないだろ？　こんど闘ってやるよ。そこで証明してみな。あとな、お前らがすがっている最強っていうドラゴン？　それがただけ危ういものか見せてやるよ。最強と言われているように上には上がいるんだよ。それがわからず過信してるうちはダメーらはスタートラインにもたつてないんだよ！！　だからそれを崩してやるう」

俺は皮肉な笑みを浮かべる。

「何？」

「テメー言わせておけばふざけやがって！　テメーらなんて家畜しか召喚してねーじゃねーか！！」

まあそれは俺も思う……。

「外見でしか判断できないとは……、ますますくだらない。ドラゴンやAって表面しか見てないな。わかった、闘ってみる。お前らが家畜って言う俺の仲間の使い魔と、お前らの使い魔で。いいか？」

最後に後ろを向き“仲間”に確認をとる。

迷うことなくうなずいてくれる。

「ハンネ聞いてたか？　出来るか？」

一応確認をとる。

『学園長は大丈夫だって言ってます。楽しそうだからって』

学園長までそれかよ……。

「OKらしいな。お前らはどうだ？ あと俺らが勝ったらエラ。お前は俺のパーティーに入ってもらおう。まあこれじゃ理不尽だからな。俺らのほうが一人でも負けたらお前らの勝ちでいいよ。どうだ？」

これに乗ってこなきゃ俺の作戦丸つぶれだな。  
ここまで挑発したんだからのってこいよー？

何やら5人で話し合ってるようだが……。

「いいわ。その勝負受けましょう。でも人数が合わないわ？ こちらで一人抜けばいいのかしら？」

「いや、その必要はない。最後は二匹対レンだ。それでいい」

なにやら考えてるようだな。

「いいわ。それで。いますぐ始めようかしら？」

ふむ、その前に、

「いや、その前にお前らの過信を崩さないと勝負にもならない」

エラは不可思議な顔をする。

「さっきも言っただけど何をするのかしら？」

「まあ見てろ」

そう言って、俺はレンに手招きをする。

「レン元の姿に戻っていいぞ」

「うんー 久々だねーもどるのー」

レンはくすくす笑っている。

そして光だし。

元の白い籠にもどった。

うん。弱そうだ、めっちゃくちゃ

「……それが何？ 一応龍だけど弱そうね」

はあーまたこれか……。

「なんでお前らは表層でしかみれないんだ？」

レンが少し前にでる。

その瞬間、

白を含めたすべての龍が膝をつき頭をたれる。

「なっ!!!?!」

驚いているようだ。

30メートルはある白い龍が5メートル程度の龍に頭をたれているのだ。

「はっ!?! お前なにあんなのにへりくだってんだよ!?! 立ち上がれよ! おいっ!!!」

主の命令すら聞き入れない龍達。  
ひたすら頭を垂れ続ける龍。

「お前らにはそれが最強に見えるのか? まあ、レン?」

『きゅっきゅっ』と言いながら俺の出した手に顔をこすりつけるレン。

「うーん、とりあえずそのドラゴン達。一匹残して全員後ろに下がれ。」

素直に言うことを聞く龍。

主の静止の声すら聞かない。

レンの主人である俺はさらに上位なのだ。

そして、緑の龍を残して他は後ろに下がった。

「なあエラ？ 龍の序列ってどうなってるんだ？」

「え、えーと……、基本四種の上に白と黒かしら？」

ふむ。

「それ以上は？」

少し悩むエラ。

「いないわ。いるわけないわ。」

「調べ切れることだけが現実じゃないってこともあるんだ。過信はするな。お前らが侮っている俺の仲間もな。案外すぐにお前らが負けちまうかもな？ 過信してるとよ。お前の白い龍みたいにな？」

そう言っつて、くすくす笑いながら俺も下がる。

さて……言っちまったが。

神獣は龍より強いのか……な？

てかよく考えたら俺完全悪役だわ……。

まあ今回は悪役でもいい……か。

十六話 使い魔大会 本戦(中)

本戦・決勝。

『でわー、今回の使い魔大会は〜！ 特別ルールでおこないます！！！ 決勝戦で当たる2パーティーは全員闘ってもらいます。ただし！ Fクラスのレンわんにゃんコケコツコーチームは一回でも負ければ敗退となりますー！！ 上位クラスへの下剋上！！ さあ！！ 結果はどうなるでしょうか！！ ってかトキクーーん！！ これで負けたらゆるしませんからね！！ わたしが生活できなくなっちゃうじゃないですか！！ さて、相手は学年トップの黒姫です！！ 使い魔は最強と謳われる龍種です！！ こわいですねーデツカイですねー！！ それではまもなく試合開始です！』

『……………流血ドラゴンが好き』

なんか怖いこと言ってるぞあの子。

「で、最初に出たい奴いる?」

三人を見まわしてみる、するとシャルが一歩前に出た。

「私が行っていいですー?」

「めずらしいな? シャルが自分からって」

そうなのだ。

シャルは毎回最後にまわっていたはずだ。

「こつ言つのは一番弱い人から出るものなのですー、最初はスライムが定番なのですー」

そう言って、胸の中の子猫を抱きしめる。……ああ。  
気持ちよさそうだなあれ。

『はーい！ でわ一回戦！』 『レンわんにゃんコケコッコーから』！！ シャルロツテ・ブリーゲル選手使い魔『きーちゃん』！！！ 対するは！！ 『黒髪』よりグリシャ・ブツケル選手！！ 名前はそのまま！ 使い魔！ グリーンドラゴン！！ 前にでてくださいー！ 準備ができたら開始しますー！！』

シャルとグリシャと言う男が前に出る。

ふさあー

「「「「「キヤアアアアアアアアアアアア！」「」「」「」  
「「「「「チッ」「」「」「」「」

……前者が女子で、後者が男子だ。  
わかるぞーその気持ち。  
だってすごくイケメンなんだもん！  
俺と違って、髪を掻きあげる姿もネタじゃなく様になってるし。

ズウウウー……ン

「あの……トキさんのほうがカッコいいですからそんな落ち込まないですー」

シャルがフォローしてくれた。

シャキッ……！



一気に元気になった。

「よしシャル！！ あいつの顔がつぶれるくらいに殺してこい！！」

俺は宣言する！

「いえ……、使い魔大会ですー？」

もっともだと思う。

「ほー、グリシャ様のドラゴンにそんな子猫で挑むとは、つくづく哀れですね！」

自分でグリシャ様と来た。

「戻ってきーちゃん！」

そう言っと。

子猫は鳴き声を一つ上げ。

光輝く。

現れるは純白の虎。

長い毛は風もないのたなびいている。

美しい神々さがある。

神だけどね？

「ほー、姿を変えていたか。にしてもちっちゃい使い魔だね？ それでグリシヤ様の使い魔がやられるわけないだろ？ くはははっははっは！」

まあグリシヤのドラゴンは30メートル近いしな。  
きーちゃんは2メートルないし。

『我を侮辱するとは愚かな人間だな。汝、死にたいのか？』

きーちゃんはグリシヤに話しかけた。

「なっ！！！ 使い魔がしゃべるだど！！？ そんな使い魔聞いたことないぞー！！！」

はあ……、全くこいつらは同じようなことしか言わないな。

「だから、表層で判断するなっていうの……」

俺はついつい呟いてしまった。

だってそうだろ？

バカすぎるもん。

「きーちゃん。ドラゴンさんがかわいそうですから、すぐに終わらせてくださいです。殺しちゃだめですー」

あー、この試合すぐに終わりそうだな……。だから自分を過信するなって言ったのに、

『でわーーーー！！ 試合をーーーー！！……』

『開始しやがれ屑』

『あーーーー！！ 私ノセリフですよそれ！！！！ とらない  
でください！！！！』

司会はギャギャーやっている…。

まったくなんなんだコイツら？

『ゴゴオアアアアアアアア！！！！』

試合開始の合図と共に。

相手のグリーンドラゴンは風の塊を10個ほど打ち込んできた。

「きーちゃん！ 光弾よーい！！」

そうやって、敵のほうに手を銃のようにして構えるシャル  
きーちゃんの周囲には50程の光の球が浮かんでいる。  
大きさは10センチ程度だが。

まぶしく輝き、雷を含んだようにバチバチ鳴っている。

「シュートーーーー！！！！！！」

そう言ってシャルはまるで反動があったように肘を曲げる  
うん……。

なんかカッコイイなアレ。  
俺もなんか考えておこう。

オタクとしての本質が、カッコよさにこだわる。

シャルが叫んだ瞬間、すべての風弾に向かって光がぶちあたる。  
当たった瞬間爆発し、風弾を消し去った。

次の瞬間、大きなサイクロンがきーちゃんに向かってくる。  
グリーンドラゴンはいつのまにか上空にいた。

「きーちゃん！ あのドラゴンに光の剣！ その後、向かってくる  
竜巻を内部から破壊です！！」

瞬間、

目が痛いほどの光の剣が上空から、グリーンドラゴンに向かって  
何本も突き刺さる。

光が消えると、ドラゴンは地面に縫い付けられていた。

同時に残りの40発の光弾のうち、10発がサイクロンに吸い込  
まれ。

内部でおおきな爆発を起こし、消し去った。

『ドンドンドンドンドンッ』

地面に這いつくばりながらも、風弾を最初の倍の20弾程きーちやんに放ってくる。

「光弾で相殺です！ そのあとは光弾を内部に！」

20の光の球が風弾を消し、残りは10。

そして、10の光の球はきーちゃんの体に吸い込まれた。  
その瞬間、

光で出来た獣が姿をあらわした。

「はじきとばせですー！ー！ー！」

『ドゴオオオオー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

一瞬後、ドラゴンは500メートル近く離れた壁に激突した。  
もう起き上がれないのか、気を失ったように壁にめりこんでいる。

きーちゃんはまさしく光。

光の速さで突き飛ばしたのだ。

俺の時間魔法でも見きれない光速である。

その後、慌ただしく係員が出てきて、ドラゴンの生存を確認している。

これで死んでたら俺たちの負けだけだな。

『はいー、確認おわりました！ 一応生きてます。一応。よってー  
ー！ 勝者シャルロット・ブリーゲル選手！ー！ー！ きーちゃん！ー！』

「ワアアアアアアアアアアアアア」

割れるような歓声が会場を包み込む。

『ゾクゾクした……。一方的なぶり殺し……。最高……。あんっ』

司会席なが映っている画面では、毒舌少女が恍惚な表情で身もだえていた。

……。アイツはいつか犯罪を起こすだろ。

「バカ……。このグリシヤ様がこんなやつらに……。負けるだど……ウソだ。嘘だ！！ 何か反則をしているに違いない！！ 絶対そうだ！！！！！！」

あ……。この展開黒龍のときとおなじになりそうじゃね？

「おいエラ！！ コイツ殴りかかってきそうだから連れて行け！ 邪魔だ！！ 殴りかかってきたらお前から反則負けだぞ？」

そう言うと。

エラは頷き、グリシヤを無理やり引きずって行った。

『ふん。つまらんな。あのような雑魚』

「まあまあきーちゃん。カツコよかったですー」

『ま、まあなんだ。また何かあったら我を呼べ』

なんとなく照れているようだな……。奴は雄か。

「シャルもきーちゃんも御疲れーまああとは観戦でもしといってくれ、

「はいよコレ」

「はいですー」

そう言つて、俺は空間から大量のお菓子を取出す。

ちなみに後ろではもうアルとディアがお菓子を食べている。

「トキにゃーんこの芋を揚げたのうまいなー？ バリッパリッ」

「このあまいのもおいしいですー」

俺が作ったポテトチップスと、チョコレートを食べながら言つてくる。

「はいはい……、次どつち出る？」

そう聞くと、ディアが手を挙げる。

「スライムの次は小悪魔つて相場がきまっていますー」

なぜ日本の知識がわかる！？ と思うかもしれないが、この世界で森に入ると出てくるんだから仕方ない。

「よし！ がんばつてこいディア！」

そう言つと、子犬を抱え嬉しそうに前に出る。

「勝つたら褒めてくださいね トキ様」

向こうからも出てくる。

今度は黄色いドラゴンらしい。

「はーい！！ 次の試合がすぐにはじまりますー！ 選手は！！  
Fクラス！レンわんにゃんコケコッコのクラウディア・ベーム  
ちゃんでーす！ 使い魔はシロ！！！！ そして対するわー！！！！  
Aクラス黒姫から！ アグネス・ビュンテさんでーす！！ 使い  
魔は名前はそのままイエロードラゴンでーす！！！！」

にしても、さっきもだがコイツら強さしかみてないな…… 名前も  
つけないなんて。

「……シロかわいい」

あの子は犬派だったようだ。意外な一面だ

「だから血だらけになって……」

あの子はただの殺人鬼だ。

二人は前に進み出る。

俺らはお菓子を食べている。

「あらー、なに？ その犬？ それにしてもあなたには合わないわ  
ねその“白い”犬は」

グラマラスな姉さんが喋り続ける。

「だってあなた黒髪に赤い瞳……」

その先を言ったら容赦しないぞ貴様。



「魔族と人間のハーフよね？ ホント気持ち悪いわ。なんでこんな紛い物がこの学園にはいつてるのかしら？ 最高峰の学園も地におちたものね……」

言いやがった……。

コイツは言っではいけないことを言いやがった。

アルとシャルが相手を睨みつける、感情が使い魔につたわり。光弾があたりに無数にただよい、バチバチと鳴っている。付近の温度が一気に高まる。

ディアの方を見ると、真っ赤になり少し俯いている。体が震えているのがわかる……。

ああ、やっぱりお前は慣れてなんていないよディア。無理やり慣れなくてもいんだよ。

怒っていいんだよ……、にしてもアイツは。

「トキにゃん……ワイは久しぶりにキレそうや、殺してええか？」

アルが震える声でそう呟く。

「トキさん。限界です。私が殺します」

こいつらなら殺せるだろうな確かに、それでも、俺は後ろからの殺気を手で制す。

「これにはディアが決着をつける。その権利がディアにはある……」

だがな……。」

ド  
ン  
ッ

瞬間、フィールドの空気の重さが増す。  
人間の耐えられるギリギリの重さまで。

メ  
キ  
ッ

ビ  
キ  
ッ

立っているのは故意に除いた俺のパーティーと使い魔だけだ。

黒姫のパーティーとドラゴン、フィールド内に100人はいるであろつ係員は全員が地面に押しつぶされる。

俺の周りの空間は歪みを通りこしてずれている。  
まるでガラスが割れているような状態だ。

前に歩いて行き、ディアをつれて屑女のところに向かう。

「ひっツ!!!?」

屑女の目の前で止まり、ディアを抱き寄せながら見下す。

「なんなんだ？ お前は？」

声をかける、

「貴様にディアを見下す価値なんてまったくないんだよ！ ただ、  
哀れに地面にへばりつく姿がお似合いだ」

睨みつけてくる屑。

屑のあごの下に手を当て上をむかせる。

「どつだ？ お前が見下してた俺らに見下される気分は？ なにも  
抵抗出来ずにただ地面にへばりつくしか出来ない気持は？」

そう言ってニヤリと笑う俺。

「貴様みたいな屑よりディアのほうが全然価値があるんだよ。最初に言ったよな？ 自分を過信するな？ と。それでも貴様はまだディアを見下していた？ わかるか？ 貴様は根本的にも腐ってるんだよ。お前みたいなやつに生きている価値なんてない。本当は俺が殺したいところだが、パスだ。見てるだけで反吐が出る」

そう言って、俺はアルたちのところに戻り魔法を消す。

「ディア、お前に任す。試合なんてくそくらえだ。お前が殺したいなら殺せ。試合中なら殺しても事故だ」

そう言ってディアから俺は離れる。

ディアはニコリと微笑みうなずく。

まあこれがどっちの笑みなのかはわからんが……。

「トキにゃーんやるわなー。トキにゃんが魔王にみえたで？」

そんな事を言いながらケラケラ笑っているアル。

「ですー。すつごく怖かったですー」

そんな事を言いながらもここにこしている。

たぶんこいつらもスッキリしたんだろう。

「えーでは始めますね？ アクシデントもありましたが……トキくくん！ 少しは自重してくださいー！！ 会場におかしな空気がながれちゃいましたよー！！ もっつ！ あと地面に寝ている黒

姫の方々と係りの人ははやく立つてくださいよー！！　なかなかはじめられませんよ！』

たしかに会場は静まり返っていた。

あー大勢の人の中で魔法つかちまった……。せっかく隠してたのになー！。

まあ仕方ないだろ……。友人があそこまでバカにされたんだからな。

「シロいくよ？　元の姿に戻って」

ディアがそう言うと、漆黒の闇がうまれ。

その中からケルベロスが現れる。

『『『ハハハ、そちもやるではないか！　我でもアレは少し震えたぞ？』』』

そんなこと言ってきたケルベロス。

「しかたねーだろ？　ディアがあんな言われ方したんだから。それに俺がああ程度にしておかなかつたらアルとシャルに殺されてたろ？　あとお前にな」

くくく。と笑う

『『『だろうな、主が罵倒されるのはかなわんな』』』

そうなのだ。

コイツはアルとシャルよりもやばかった。

白い犬の目が真っ赤に染まって闇が噴き出してたからな。

「ディア行つて来い！」

その言葉にニコリと笑い。

「はい　頑張つてきますね」

そう言つて前に出た。

イエロードラゴンも前にでた。

体長はおよそ二倍。

『グルアアア』

あっちもやる気のようにだな。

「フンッ！ さっきはその男の卑怯な魔法で何も出来なかつたけどね。試合ではその使い魔を殺してあげるわ！」

めっちゃくちや怒ってるなああのグラマラス女。

『はーでは準備できたような』………試合開始』　だからー！ー！  
！　なんで私のセリフをー！』

相変わらずのやりとりをしてるな。

『ガガガガガガガ』

試合開始直後。

シロに向かって、尖った岩が地面を突き進んでくる。

同時に口から吐き出した岩の塊が襲い来る。

大きさは小さいが数が多い。数百個はあるだろう。

しかし、シロは避けようもしない。

そして、その岩がシロにすべてぶつかった。

「やった!!?」

土煙りが上がり視界が悪くなる。

だが、俺は見た。

当たる瞬間、シロの体から吹だす漆黒の闇。

煙が晴れると、無傷のシロが現れた。

『『『弱いな！ 弱すぎるぞ龍よ！！ なにが最強か！！ まだ亡者の方が齒ごたえがあるわ！！』』』』

そう叫び。

一気に距離をつめ。

真ん中の首が、龍の首に噛みつき押し倒す。

『ゲアアアア』

苦しそうに龍が吠えた。

そして、二つの首がそれぞれ翼の根元に噛みつき。

『ブチブチッ』

噛みちぎった。

おびただしい量の鮮血が宙を舞う。

『グギヤアアア』



「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!」

グラマラス女が叫んでいる。

まあこの光景はちよつと怖いな。うん。

『ゴアアア』

シロが至近距离から口から火、闇、水をはなつ。  
ただれ、氷つき、侵食されてゆく。

最後にシロは長いシツポで龍をはじきとばす。

吹き飛んだ先にはあの屑女。

とっさに土の結界をはったようだが、その結界ごと吹き飛ばす。

そして沈黙した。

『『『これくらいでいいか? 主よ。弱すぎてる気にもならん』』』

『

あれでやる気ではないようだ。

「うん ありがとうねシロ

そんな事を言って、頭を下げたシロの鼻をなでているディア。

係りの治療班が焦って飛び出してくる。

まああれだけいれば龍も女も死なないだろう。

一応防御張ってたようだし。

『……えーっと、只今確認中ですねー……。名誉顧問としてはちよつとやりすぎっていいたくなりますねー……。でもどうせ聞き入れてはくれないでしょうからいいです……。ぐすっ』

『このパーティー好き……。すごい残虐……。』

うん。お前ら後で覚えてるよ？

『あ、確認終了しましたー、瀕死ですがなんとか生きていますようですよー。治療をすれば治るようです。……。一年後くらいに。とゆうことでー、勝者『レンわんにゃんコケコッコー』のクラウディア・ベームちゃん！！ 使い魔シロ！！ 会場がグチャグチャですのでー10分間の休憩です……。』

『……圧倒的な暴力は素敵』

もつこの毒舌にも慣れたな。

「トキにゃーん大変やー！ お菓子がなくなつたー！！」

平和だなー……。

「わかったわかった……」

そう言って、俺は昨日入れたたくさんのご飯を取り出す。  
はぁ……。

選手用に出たバイキングでせっかくいろいろ持ってきたのに……  
俺の非常食が。

「おおきにー」

レンわんにゃんコケッコーはご飯休憩だ。

「ちょっとー！」

四人でご飯を食べているとエラが離しかけてきた。

「む？」

「あなたたち何もの？ それにそこはんどこから持ってきたのよ  
！？」

何者ときたよ。

「むぐ、にゃぐ、って、ぐくっの、くちゅ」

「飲み込んでから喋りなさいよー！」

まあたしかにそうだ。

「……ぐくっ、食べたいのか？」

そう言って俺は手まねをする。

「そんな事はどうでもいいのよ！」

そんなこと言いながら早速たべはじめてるじゃん。

「何者つて、言われてもなーお前らが見下してるFクラスのパーティーだよな？」

そう三人に言うと、コクコクとうなずく。

「Fクラスがなんでそんなに強いのだよ！！ そんなわけないでしょ！？」

アホなのかこいつは？

「だから言っただろ、クラスなんて関係ないつて。強い奴は強いんだよ。どこにいたつて。それにあれは俺らの実力じゃないだろー？ 使い魔の実力だ。もぐむぐ。それかお前が弱いか……ごくつ」

もうちょっとご飯持ってくればよかつたかもなー。

「なに言ってるのよ！ 使い魔は主の魔力によって決定されるのよ？ 強い使い魔は弱い魔力の呼びかけには反応しないわ！ 私だって5000以上あるからあの龍がでてきたんだからー！」

ふむ……なんかご飯食べたなら眠くなってきた。

ふわ〜とあくびをする。

「ちょっとマジメに聞きなさいよー！」

「ぐっ！……まてっ！……いま食べたばかりなんだくるしっ！……」

エラがヘッドバックしてくる。  
うん、とりあえずね。レンより小さいよ？

「んー5000が高いのかもわからない。まあおれは“0”だから俺よりは高いけどなあ……」

チラッと三人を見ると、別に教える気はないようだ。  
まあおれの場合も最低7桁らしいからな……。

「なに言ってるのよ！ これでも普通の10倍よ？ Aクラスでも他の人より1000ちかくは上なんだから!!」

またAかよ耳にタコが出来る。

「とりあえずもう俺たちの前でAって単語使うな。この大会で聞きすぎてだるい。そんな単語言っても俺たちはどうともおもわないぞ？ 尊敬もしなければ嫉妬も嫌悪もな。ホントどうでもいいんだよ。お前らが5000とか言ってもさー、結局0の俺の魔法ですら身動きとれなかったじゃん？ その程度のもんだよ。数字なんて」

「つつ!!」

くやしそうに唇を噛んでるな、あつはつは。

「あのなーじょーちゃん？ トキにゃんよりワイらのほうが全然魔力的にはつよいんよ？ でもなー？ ワイらはトキにゃんの下にっついていくんよ？ それはトキにゃんが一番リーダーにふさわしいからや。魔力なんてなんのあてにもならんのだよ。それにあんさんたちは魔力のトップを集めただけやろ？ それでいちばん高い奴をリ-

ダーにしたんやる？ そんな信頼もなにもないチームに負けるわけ  
あらへんやる？ まあ、魔力はたこーてもトキにゃんにワイは負け  
たんやけどなー」

そう言いながら笑っているアル。

おい！

照れるから後ろの二人もうなずくな！

「……」

沈黙してしまった、エラ。

「まあどうせお前も明日からうちのパーティーだからな。そろそろ  
はじまるから戻れ」

と言って、シッシツと、手を振る俺

「くツ！！ 絶対負けないから！」

そんな事を言いながら戻るエラ。

戻るときにおかずを一品持って行くことを忘れない。

うあー……、アイツいれるのだるくなってきたぞ。

だってアイツ最強主義なんだもん！

これは調教しがい……、もとい遊びがいがあるな。うん。

十七話 使い魔大会 本戦（後）

本戦・決勝

『はい、では！ フィールドの修復も終わったので使い魔大会を再開したいとおもいまーす。』

『殺しあいの再開だ……屑ども』

さーってちゃっっちゃと終わらすかー。

『でわー選手の方はまえにてくださいーい！ー！』



「トキにゃーん……、ワイやばいんよ……食べ過ぎておなかがゲブツ！！」  
「おい！！来るな！！そんな吐きそうな顔でこっち来るな！！」

そんなやりとりをしながら走り回ってる俺達。

「あんなやつらに二敗もしたのか……、わたしたちは……」

ズウウウーーン

落ち込んでるエラ。

「で？次はお前ら誰が出るんだ？」  
「じゃあ、俺がいくッス！」

お、ッス野郎だが結構まともそうなやつ。

顔も普通だし高飛車でもないし。

「あー俺はエラよりおまえのほうがほしくなってきたな……」

うん、エラは最強主義だしな。

「なっ！！　なんでよ！　わたしじゃ不満だっていうのー……！」

うるさいなあ。

「じゃ、よろしくな。こっちはアルがでるから」

「はい、よろしくッス」

うんうん。いいやつだ。

青い龍が前に出た。

ふむ、属性的には最悪な相性だな……。

「アルいけるか？　アル？」

なんか苦しそうだぞ……。

「ああ、まかせときーなトキにゃん……！」

そう言いながら前にでた。

「よろしくッス！」

挨拶してくれたのはじめてじゃないか？

「……………」

なのにアルは挨拶を返さない。

「アル？」

そしてアルは前にしゃがみ込んで手をつき……………。

「ゲエエエエエエエエ」

リバーズした……………。

「……………」

全員沈黙。

「アル……………、吐くほど食べるな……………。レン……………消してくれ」

『きゅっ』と一つ鳴いて得体の知れないものを消し去ってくれる。

「ふうースッキリよろしくやー」

と、言って手を出す。

もちろん相手は手を握らない……………。

『それではー選手も決まったのでー紹介します!! まずはここま  
で無敗!!! レンわんにゃんコケコッコーのアルブレヒト・ブテ  
イング!! 使い魔は『にわちゃん』です!!』

「いやーどーもどーもやー! ちなみに今のとこ彼女募集中や〜2  
00人までなら受付中や〜」

などと言いはじめた。

だが、先ほどのリバー스가放映されていたので反応は悪かった。

しかも200股すると言っている……。

『次はー黒姫よりー!! デニス・ツエルニ―選手〜! 使  
い魔は〜ブルードラゴン〜!! では〜……』

ハンネはいきなりきよると何かを探している。

そして居ないとわかると『ふう〜』とため息をつきもう一度マイ  
クをもち……。

『……試合開始です……ゲロVS屑』

声を出す前に上空から声が聞こえた。

上を見ると、風の魔法で飛んでいる少女がマイクをかまえていた。

『もおおお!! なんなんですか! あなたはー!ー!! 毎回  
毎回私のセリフを〜!!』 『闇の精霊よ 彼の者に絶望を 愛  
しい声!』 『死ねー!ー!ー!』

いきなり闇の魔法を使っていた。

なんか司会席のほうでバトルが展開してるが試合は始まったよう





溶岩は1000度って言うけどさ……、これ3000度くらいあるぞ？

モリブデン(2610)で溶ける金属(でも溶けるぞこれ)。

そして、にわちゃんに津波のような水が襲いかかる……。

だから。

『ジューー』

「アホだ。あいつ」

思わず声にだしてしまった。

だって仕方ないじゃん。

ホントアホなんだから。

「つまらんわー……。なんやワイはずねひいてもうたんかいな？  
もうええわ、にわちゃん。あのドラゴンの体にとりついてーや」

アルがそう言うと、火の鳥はブルードラゴンの背中に爪を突き刺

しとりつく。

『シユジューー』

『グギヤアア』

ドラゴンの体中から蒸気があがりはじめる。

ドラゴンのもがいているが外れないようだ。  
火が水を制圧する。  
相性を無視した力量差。

「なにしてんだボケーーーーー！！！！ つぶせ！！！！ そんな炎の  
鳥けしさっちまえーーーー！！！！」

うん。

バカだバカだとはおもってたけどさ……。

「なあエラ……。黒姫はバカの集団か？ 早く下がらせないとあの  
龍死ぬぞ」

溶けてきてるし……。

グロい………てかもう動いてないな。



「……」

エラは使い物にならん。黙ってるしな。  
ここから勝てると思ってるんだらうか？

「アル。もういい、死んじまうぞ？」

アルはかったるそうに地面に座ってる。

「そうかえ？ にわちゃんもついいわーありがとやー」

『ズドオオオン』

にわちゃんが離れた瞬間、ドラゴンは倒れた。  
支えがなくなっただからあたりまえか。

『はーーーーーい!!! 勝者レンわんにゃんコケコッコのアルブレヒト・ブティング選手~~~~、今回はあっさりしてましたねー!~! まあ試合はあっさりしてましたが傷はドロドロして

いて気持ち悪いですよー！！　なんでトキくんのパーティーはいつもこうゆう勝ち方なんですかー！！　まったくー！！　あとレンわんにゃんコケコツコーって発音しにくいですー！！　』

おい！　ハンネが考えたんだろこの名前！！　おもいついた名前勝手につけるなー！！　！

『……素晴らしい戦いだっただ……　水龍がとけるの滅多みれない……　ファン一号になる』

なんかあの毒舌少女ファンになってるぞー！！

「あー負けちゃったツス強いツスねー！次も頑張ってくださいツス、でわツス」

おお、戻ってる。

戦いのときだけああなるのか……。

やっぱコイツもパーティーにはいらないわ。

『でわー！次は選手は前に~~~~~！！　最終戦ですわー！！　さてー！！　勝敗はどうなるでしょうか！！　！　123倍VS

1・6倍の勝負の行方は……！……！では……！……！レンわんにゃん  
コケッコー代表、トキキサラギ選手……！ 使い魔レン……！  
……！ 続いて。対するは……！ 黒姫代表エラ・ブランド選手……！  
使い魔は『白き幻』……！……！ + 黒姫よりギーナ・カペル  
……！ 使い魔はレッドドラゴン……！……！ 今回は特別ルールにのつと  
り……！ 1VS2でおこないます……！……！ この不利な条件でトキくん  
はどうやって勝つのか……！……！……！……！……！……！……！  
一文無しかお金持ちか……！……！……！……！……！……！……！……！

おい！ 私情はいりすぎだろ……！……！

『……！……！実は私も賭けてる……！……！だから勝てトキ……！……！『残虐王』さん』  
なにぶつちやけてるんですがこの人たち……！……！……！？  
しかもなんか二つ名スゲーのに代わってる……！……！……！  
めっちゃくちゃ悪人じゃねーか……！……！

そんな事を思っていると、二人が前に進み出る。

「本当に最後までくるとはねー……！……！、こんなルールで」

「はっ！雑魚共にしてはやるな……。あいつらは弱いからな」

そういえば最近カップラーメン食べてないな、売ってないしな。

俺は全然関係ないことを考えていた。

「あー……！……！で？ 自己紹介でもする？ トキキサラギだ」

自己紹介なんてしてみた

「私はA組一位エラ・ブランド」

素直に言ってくれた。

「チツ！ 俺はA組二位ギーナ・カペルだ」

まあ素直にいつてくれたはくれたが……。

「いや、別に名前しか聞いてないし。いちいち名前の前に邪魔な単語と数字つけなくていいぞ？ 興味ないし」

「くっ！！」

「っだど！！」

あれー？ 正直に言ったら怒りだしたぞ？

「で？ 始めるか？」

早く終わらせたい。

「にしても本気なの？ 学年の一位と二位を同時に相手するなんて？ 絶対勝てないわよ？」

おーすごい自信だなー。

「別に一位とか二位とか関係ないだろ？ おまえはエラ・ブランドでそっちはギーナ・カペルだ。それ以上でもそれ以下でもない。恐れるポイントなんてどこにもないだろ？」

と言って、俺は下がり。  
変わりにレンが前にでる。

向こうも同じように二人が下がり。

ドラゴンが二匹前にでる。

そして……。

頭を垂れた。

「「「……………」」」

三人が沈黙した。

「あーすまん……そうだったなー……よし！」

そう言ってレンに手まねきした。

「レン、人間の姿でアイツら倒せるか？」  
「きゅ」

うん。理解出来ないが倒せるらしい。多分。

「じゃあ姿変えてくれ。このままじゃ一方的に殴られ続けそうだからあ  
の龍」

光が溢れ、人間の姿になったレン。

そして抱きついてきた。

「やっぱりこっちの姿のほうがすきー、だってあっちの姿だとおに  
ーちゃんに頭しか触ってもらえないもん潰しちゃいそうだしー」

うん。冗談じゃなく潰されそうだ。

おい、お前らなんでそんな目で見えるんだ!!

「あーあとな、その龍頭上げる。手加減はいらないぞ？ 攻撃し  
づらいなら自分の実力を試してもらってことでどうだ？」

二匹の龍は頭をあげ、レンの方をみつめる。『いいんですか？』

みたいな感じだ。

「うん、それでいいよ、全力でおいでーでもおにいちゃんに当たったら消すからね」

『グオ』

『ガア』

なんか上官に敬礼してるみたいだな。

「これでいいだろ？ エラとギーナ」

声をかけるが、なんか不満そうだ。

「敵に塩を送るとはいい度胸ねトキ？ あのまま負かすことだって出来たって言うのに」

「そんなんで終わらせようとは思ってないよ。仲間ががんばってくれたんだ。リーダーがそれに応えないでどうする？ 応援してくれる仲間がいるしな」

と、言っただけを向いてみる。

「それワイのサンドイッチやー！ ディアにゃんはそっちのから揚げくっついてやー！ー！」

「何を言っんですかゴミ虫の分際でー！！ それはトキ様の愛がつまってるサンドイッチですー！！ あなたは砂でも食べていてくださいー！！！」

「このケーキおいしいですー」

……………

見なかったことにしよう。

「……………誰も応援してないわよ？」

言っな、言わないでくれ。泣かないもん！！！！

「どっちにしる雑魚共が応援しようがしなかるうが俺たちの勝ちだ」

よし。腐ったやつに興味はない。終わったら千切ろう。

「はいはい。おーい。ハンネと毒舌く始めちゃってくれー」

もう話すこともないしな。

始めてくれた方が楽だ。



『わかりま』・・・試合開始』しッ!!? なんですかー! はやいですよ!!! それは予想していませんでしたよ!!! もう怒りました』闇よ!!!』』

またかよ……。

「手加減はしないわよ?」  
「いらん。そのために龍達に本気出させたんだろ?」

『ガアアアアア』

その時、レッドドラゴンが後方で火炎弾を30個くらい飛ばしてきた。

最初から決めに来たのか?

「レン。さすがに二匹はめんどいだろ? あっちの赤いの一撃で潰してきていいぞ」

「わかったー! いつてくるねー」

ふにやっとした笑顔でとてと歩いて向かう。

途中で姿が掻き消える、同時に火炎弾も消え去る。

『グシャツバキツ』

『ズドーン』

赤い龍は上空に殴り飛ばされ、結界にぶちあたって落下してきた。意識はすでないようだ。

「むーおにーちゃんのいつけまもれなかったー意外に固かったよあの赤いの？」

そんな事を言いながら両手を後ろにまわして、地面の石を蹴っていた。

「「なっ!!?」」

二人は愕然とした表情で見ている。

「いいよレン！戻っておいで！あとギーナ。あんたはもう終わりだろ？邪魔だから後ろ下がれ。巻き添えで死ぬぞ？」

にここにこのレンが駆け寄ってくる。

「くそっ!!! こんな雑魚にこの俺が…どんな卑怯な手をつかったんだテメー!!!?」

笑顔を消して、レンが立ち止った。

「ねえあなた? いまおにいちゃんの悪口いったの? ねえ? それ以上言ったらどうなるかわかる?」

『キキキキキキキキキキキキキキキキキキキ』

レンの周囲が歪み、耳障りな音が響きだす

「あなた、消すよ?」

いつもにこにこしているレンが見せる真剣な表情

こいつは自分のことでは怒らない。

毎回怒るのは俺に関係することだ。

まったく……、過保護な親みたいだな……。くすっ……。

レンのもとに行き、頭をなでてやる。

「レン、気にしなくていいよ。俺はあんなの相手にもしてないからな？」

うん。俺はレンに人殺しなんてさせたくない。

「えへへ」

嬉しそうに力を霧散させた。

「さて……消える屑。邪魔だ。最後の忠告だ」

それでもしぶっているギーナを、エラは下がれと命令する。

エラの言うことはきくんだな……。

「待ってくれて悪いな。じゃあ始めようか？」

素直に待ってくれていい奴だ。

「待ってなんかいないわよ！！ あれでどうやって攻撃しろっていのよー！！」

と言って、自分の白い龍を指さす。

そちらには、体の周りに空間結界を張られた龍が出ようともがいていた。

空間の遮断、絶対に出れないであろう空間。

「あーそうだった……すまん」

そう言つとレンは結界を消した

「じゃあ始めるぞー」

結界を解いた瞬間。

白い龍の口から、めもくらむような光が漏れていることに気づいた。

「レン前方に空間接続、奴の上の出口を」

『ギョオオオ』

あたりが見えなくなるような凝縮された光が放たれる。

そして、レンに当たる瞬間、突如光が消え。  
龍の上空から光の奔流が流れ出す

『ドガガガアッ』

「おー！ー！地面に縫い付けられたけど耐えたなーさすが自分の魔法だけあるな！」

あの光を耐えるとは、やるなー本当。直撃したらレンでも消えちやうだろうなアレ

「な、なによアレ！！ あんなの反則じゃない！！ どうやって勝てって言うのよー！」

うむ？ なんか最初と言ってることが違うぞ？

「いや、お前最初俺が勝つのは絶対無理って言ってたじゃん！？」

あと反則じゃないだろ？ レン自信の攻撃だし」

うん。俺は何もしてないぞ？

俺も出来るけどな。

「そんなの今みたいの見てないからよ！ だって今までの戦いだと全部速さだけで勝ってたじゃない！！？」

理不尽だなおい。

「はあ……？ 別にいままで手抜いてたって個人の自由だろ？ 弱かったんだし。あの光はちょっと当たったらシャレにならねーよ……さすがにレンを見殺しにはしないからな」

と、いいながらレンの頭を撫でてやる。

余裕だな俺。

「てか、なんでお前たちは考えないんだ？ はじめに全部の龍が頭垂れてただろ？ 自分よりの下のやつに頭はたれないだろうよ？ レンのほうが強いから頭下げてたんだろ？ 強いのが当たり前だったの……」

なんか真っ赤になってぶるぶる震えてるが……、考えるよ最初に。

「だってどうかんがえても弱そうじゃない！ 私の方が強そうだったし……その……」

ちょっと可愛いかもしれない。

「だから……、最初に俺が言っただろ？ 自分を過信するなって。」

そもそもお前が学んだ理論が間違ってるんだよ……。お前自身が理論じゃ測れない存在だろうに……。普通自分の属性しか召喚できないのに、お前が光属性の龍呼べたのだって理論の破たんたるが」

前例があるかはしれんがコイツの属性は火と風のはずだ。  
光属性を呼べるはずがない。

「それは……、運がよかったのかなって……おもって……」

真っ赤になってるけど、

うん。恥ずかしくなるくらいなら言わなくていいからね？

「まあそうだなあー……。あ、レン。奴に空間結界張っておいて！  
エラ、お前が最初に教えてくれた魔法の強弱言ってみて」

ここから行くのが一番早いな。

「四つの基本と派生、その上位に光と闇。最上級に時間 空間 創造 幻」

わかってるじゃないかコイツ。もっと考えろ！

「じゃあお前の白龍より強い存在なんてわかりきってるだろ？ 歴代の最上級の属性を持った奴だって初めはいなかったんだよ。調べてわかったことが限界だなんて思うな。おまえの龍より上、最上級属性しかないだろ？」

うん。簡単にわかることだ。わからないのは頭がかっちかっちに固まったやつだな。



「じゃあ……、その龍の属性は？」

「もちろん俺と同じ属性だぞ？」

「……あなたの属性知らないわよ！！！！？」

あれ？ そうだったっけ？ 最初目の前で使ったじゃん！！

「時間と空間。そしてレンは時幻龍。時間と空間を司る龍種の頂点だ、時空の狭間に生存する唯一の生き物。生物の頂点」

どうせ俺のパーティーに入るからな。今教えても大丈夫。

結構驚いているようだが、ずっと見下してきたんだ。いい気味だ。

「そんな……こと……。いや……でもアレは」

ぶつぶつ言っている。なんか壊れそうだ。

否、壊れたのだ。自分が信じていた世界が。

「まあいいや、再開するぞ？ その目に焼き付ける。現実を」

レンは空間結界を解除する。

上空で何かが光った。

「レン！ 掌を上！！ 収容！」

数十の光の剣がレンの上で、空間に吸い込まれる。

「倍率をあげて接近！ 放出！」

レンが掻き消え、龍の真横からさっきの収容した光の剣を放出

『ドスドスドスドスドス』

んー……、やはり同じ属性じゃダメージはほとんど通らないか。

「空間掌握！ たたき落とせ！」

『ドドド』

『グシャッ』

白龍の周囲の空間が質量を持ち。  
龍をたたき落とす。

地面が陥没するほどの衝撃でたたき落とされた。

だが、ゆっくりと立ち上がる龍。

そして、飛びあがった。

さすが白龍。

それでも立ち上がり飛び上がったか。  
これで最後だ。

「空間接続ブロック！」

白い龍の周りに、ブロック型の結界が形成される。

龍が移動しようとするが四角形の空間から抜け出すことができない。  
い。

面を越えようとするとは対面から出てきてしまう。

「ブロック内時間を10万倍！」

ブロック内の龍の姿が掻き消えた。

一分後

「ブロック、倍率解除！」

ドサッ……

龍は地面に落ちた……ピクリとも動かない。  
荒い息をしているので死んでないことはたしかだ。

「どうなった……の……？」

ふむ。理解できないだろうな……。。

「ブロック内の時間を10万倍に跳ね上げた。一日は1440分だ。そして、今のは10万分。その間ブロックから出ることはできない。約80日間飛び続けるか落ち続けるしかない。落ちるにしても落下速度が上がり続けてすごい速度だろうな。息をするのもやっとなレベルだ。それを80日間も続けたんだから、いくら龍だって体力は尽きるだろう？ それが今の状態だ」

って言っても、ブロック内じゃないと出来ないけどな。世界規模で10万倍なんてしたらレンでも死んでしまう。

「な……!？」

驚いてるようだ話をつづけよう。

「わかったか？　これが龍の頂点、時間と空間を司る時幻龍。光と闇の龍が一億いようと勝てない存在だ。そしておまえの現実の崩壊だ」

言葉を失っているエラ

わかれエラ。

レットルやプライドにすがって生きてきたお前を解放するには、一度壊すしかないんだ。

「……ぐすっ……だって……私は一番になって……を助けないといけないのに……」

あー……これはアレか……またこいつにも“根っこ”があるってことか……。

まだシャルの根っこも取り除いてないのにまた新たに……。

はあ……もうどうでもなれ……一人も二人も変わらん。

『あー！……決まりました。……トキくん……あなたを近衛騎士にしたいという王都のひとがたくさんきてますー！なんかほかにも引き抜きがたくさん……。たすけてくださいー！……だから自重してくださいっていったのにー……。とりあえず今大会はFクラスのレンわんにゃんコケコッコー代表トキキサラギくんにきまりましたー……。まあこれでお金持ちですねー私もふふふー』

『わたしも……お金持ち……それに楽しかった……』残酷王『ありがとー！……』

おい！！

二つ名がどんどんかわってるじゃねーか！！  
てか近衛兵とか無理だから！！！！

あー勝ったのに歓声がほとんどねー……。  
うん、わかるよ。あなたたちみんな俺以外に賭けてたんだよね？  
暴動起きそうだよ？



契約を破棄してあげよう！」

にやりと笑う俺。

「そんなことできないわよ？ 他人が契約破棄なんて？」

おやおや、エラさんはまだそれですか？

「だーから現実なんてもらいんだよ黒姫さん。そこで泣きながら見てなさい。レン！白龍以外の契約を破棄してくれ」

エラはむっとした顔してるが仕方ない

「はーい いくよー」

そう言っつてレンは弾を龍達に投げつける。

そのまま龍達にぶつかり契約が解除される。

もちろん怪我はしていない。

『トキく〜ん！！ 戻ってきてー！！ 優勝者インタビューー

+この勧誘の嵐をひきとってー！！！！！！』

ごめんよ先生……俺は帰りたい。

だって数百人くらいいるじゃんそれ。

いやだ！！そんな野郎共の中にはいりたくない！！

そして俺はエラを脇に抱え空間を寮につなぐ。

「おーい、お前らもいくぞー？ このままここにいてもいいが、お前らもきつと勧誘の嵐に巻き込まれるぞ？ お前らも活躍したから



な

言い終わると、急いでこちらに走ってきた。

「まってーな！　ワイはいやや！　女の子たちに囲まれるのはうれしいんだけど、あんなおっさんどもはいややー！」

「トキ様まってください。私は一生トキ様のおそばにいるんですー  
ー！！！！」

「やー！　ですー！　あそこに行くくらいなら舌噛み切って死ぬですー！」

そうだろうとも、そうだろうともよ。

「やつ！　はなして！！」

脇のエラがジタバタしてたが。

「暴れるな！　お前は景品だから俺の所有物になったの！！　君に人権なんてありません！！」

めちやくちや自分勝手な事を言って歩き出す。

もちろんエラが余計に暴れだしたのは言うまでもない。

「それに……な」

唐突にとまり話し出す。

「お前がやらなければいけないこと手伝ってやる」

エラは不思議な顔をしている。

「仲間だからな？ おれたち」

一瞬ポカーンとしてすぐに顔をぐしゃぐしゃにして泣きだした……

「……………ぐすつ……………えつぐ……………ずっと……………ずっと……………一人だった……………だから……………うつぐ……………ぐす……………自分が強くならなきゃって……………ぐすつ……………さびしかった！！… ずっと！！……………えつぐ……………ずっと！！……………でも……………うつぐ……………やらなきゃいけないことが……………あったから！！……………一人でも……………ぐす……………絶対にやらなきゃいけないって……………えつぐ……………助けないと……………ぐす……………何回も……………叫んでた！！……………ぐす……………助けてって……………でも……………誰も助けてくれなかった……………えつぐ……………近づいてくるのは……………いつもわたしの……………えつぐ……………外見とか強さしかみてなかった……………ぐす……………だから……………だから！！……………」

そこで俺はエラの口を手でふさいだ。

そして後ろを振り返り。

「聞いたかお前ら？ どうするお前ら？」

そう言っただけで問いかけた、答えなんてきわかりきってる問いかけて。

「きまつとるやろ？」

「きまつてますね」

「きまつてるですー」

「だな」

「「「「助けてやるよ）ちゃんよ）あげます（）あげますです（）  
「「「」

エラはますます涙をボロボロこぼし始めた。

「……………ぐっす……………ありがとう……………ごぞいませ……………よろしくおね……………  
えぐ……………がいたします……………」

おれたちは笑いながら空間の中に入った……………。

『トキク……ん……！』 たすけてください……い……！』  
『……』 やー

十八話 学園初の生徒会誕生

教室

「パチパチ」。なんとこのクラスから使い魔闘技大会優勝者が生まれたー！ー！。 トキくん！ 前へどうぞー！ー！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

すごいはずい。

「はい。ではーこれが預かっていた学生カードですねー賞金と、先生との約束の半分の額、あと単位いれておきましたからー！ー！  
！あとトロフィーと賞状です！！ ついでにこれ」



使い魔大会優勝だけならなんとかなったんですがね……ちょっと張り出しますから見てください」

『んーんー……ぐすっ』張れなくて泣きだしたところで、また生徒が張ってくれている。

「これはこの前の魔力検査の結果なんですがねー、合計値をパーティーの人数で割った数値なんですよー」

「「「「「」」」」」」

クラスの時がとまった。

うん。わかるよ？

俺もこれはわかったけどさ。

「俺が数値さげてもこれか……」

「うーん。病気にかこーたとかゆーて休めばよかったなー……」

「むー……どうしましょうか？」

「でもAクラスにはいきたくないですー……」

もう俺らのなんてすぐ見つかったよ。

一位	Fクラス	レンわんにゃんコケコッコー	2万8952
二位	Aクラス	黒姫	4318

うん。二万引いても二倍以上だよ？

「ってわけですねー、どうにもならなくなっただんですよ。もちろんこれはエラさんが入る前なので下がるんでしょうけど。結局ダ

ントツなんですよね。一位以外はAクラスがずらっと並んで、そのあとにB Cがずらってかんじなんです。一位がですねえ……」

そんなとき、

ガシャン ガシャツ ズザー……………

うおっ!!!? 扉が吹っ飛んだぞ!! 扉は手であけるんだよ!!

「トキ……………!! 何でだまつたのよ……………」

うお!!

エラ怖っ……………

なにこいつ……………

「このこのこのこのこの……………」

襟を掴んでゆさぶるな……………!!

「で? なんだ? 学年トップの黒姫ともあろうお方が」

「……………」



ガシッ

「今更トップもなにもないわよ……!……!……!」

だから揺らすな……!……!……!……!……!……!……!

「これよ……!……コレ……!……!」

バンッバンッ

「そんなバンバン叩いたら壁が陥没するぞ?」

ああ、なんかすっごい怒ってるぞ!

ブンッ

スルッ

めちゃくちゃ強く殴ってきた。



3しかとってない」

前に張り出された単位表を見て言っ。

「ふむー……、俺は剣術の師匠にしごかれすぎて一個しか受けられなかった」

「ワイは力おさえすぎてもらえたかったんや」

「私は寝てましたね」

「自習室でずっと剣を振ってました……」

「……結果3だ(や)(です)(ですー)」「」「」

おお、なんかエラがプルプルふるえているぞ……生まれるのか!?

「……」

お？ 震えがおさまった

「はあ……もういいわ。あなたたちに何言っても無駄よ……」

いきなり見放された!?

「パーティー名『非常識』に変えたほうがいいんじゃない?」

おい。変えたとしてもお前もそこにはいるんだぞ?

あ、でも今の名前よりはいいかも……。

「にしても何であなたたちそんな高いのよ? なんでこのクラスにいたわけ?」

む？

「「「別に上のクラスにいきたくないし（ないんやー）（んです）（んですー）」」」

めちやくちや息ぴったりだなー……。

「そうね、あなたたちはそうよね。強い人はどこにいても強い。わかったような気がするわ」

フツツと、そう言ってほほ笑む。

「まあでも困ってるんだよなーAクラス行けって言われててさ。あんな嫉妬全開のクラスいきたくないんだよな……」

死んでも行きたくない。

「そうねー……」

何か考えているようだ。

「いつそ誰も使っていない部屋とかがいいなー……、このトロフィーとか部屋においても邪魔だし」

「「それや（よ）！……」」

いきなり叫びました。びっくりした……。

「ハンネ先生！ パーティーレンわんにゃんコケコッコー5人に新しい部屋をください」

ポカーンとするハンネとクラス一同  
だって？ そうだろ？ いきなり生徒数人が部屋くわって。

ハンネは何やら考えている『それなら……』とかつぶやいている。

「わかりました。でも私の一存ではきめられないので、ちょっと学園長に連絡してみますね」

そう言って、通信用水晶を使って学園長に連絡をはじめた。  
無理だろ。

「そういえばさっきカード返してもらったな」

カードを取り出してみる。

「……」

目を擦り、

もう一度見てみる。

「……残高1億2400万セラ？」

つまり日本円で1億2400万円だぜ？

「すごい金額やなートキにゃん」

横からアルがのぞきこんでくる。

「そついえばワイらも今回結構増えたで？」

そつ言つて三人がカードを取り出し、机の上に並べる。  
それをエラも眺める。

そして時が止まる。

俺じゃないよ？ 俺はまだ止められないからね？

「なんであなたたち学生が全員一億万セラ超えてるのよ……？」

もつともだ。

てかコイツらまじで全財産かけてやがったのか！！

「お前、大会の時の俺のトトカルチヨ倍率知ってるか？」

首をひねっている。

「知らないわ。賭け事ってあまり好きじゃないのよ」  
「123倍だ」

「は？」

何を言っているんだって感じた。

「だから俺に賭ければ123倍になったんだ。優勝したからな。Fが勝つなんてないって思ったんだろ？ 使い魔もお前らが堂々と化身もしないで連れまわしていたに引き換え、俺らは女の子と家畜だっただろ？ 誰も賭けないから倍率がどんどんあがったんだ。そこでこいつらは俺なんか100万セラ近くも賭けてたからこうなった。以上」

なんだか悔しそうだ。

「ちなみにお前は1.6倍だ。ほとんどがお前に賭けてたんだろ。全敗してたけど」

「なんで言ってくれなかったのよ！！ 言ったら私もあなたに賭けたわ！！」

叫ぶの好きだなこいつ。

「お前最初俺らのこと見下してただろーが！ 知ってても絶対賭けなかっただろー！！断言できるぞー！！」  
「じゃあご飯今度おごってー！！」

ふむ。まあそれくらいならいいか。

「それくらいならいいぞ」

「やった……………あそのレストラン100万くらいかかるのよね（ボソツ）」

聞き逃さなかったぞ俺は、

「なんでそんなたけーんだよ!！」

「しかたないでしょー! 世界の珍味とかいって量が少ないのに高いのよ!！ だからいっぱい頼んでると100万セラくらいになるのよ!！」

そして、エラの目線が下にいき…………、何かに気づいたようだ。

「…………なにこれ?」

主語をはっきりしろこいつ。

「だからこれよこれ!！」

目の前にカードをつきだしてくる。

「近い!! ちけーよ! ! そんな瞳にくっつくくらいに近づいたら見えないだろうが!！」

後ろの三人笑うな!

「だからここのよ!」 「レ!！」



そこは俺のカードのバグった部分。

「あーやっぱこうなるか……」

「トキにゃん賞罰にのところに使い魔大会優勝が加わってまざってるんやー」

「ひどいですねーコレは……」

「よめないですー……」

「……で？ コレが？」

見事なタイミングだ。

「被ってること言ってるんじゃないわよ！ なんで被ってるのかってことよ！！ てかなにこれ！？ 火 水 風 地 熱 氷 雷  
金 光 闇 時間 空間 創造 幻つて全部じゃない！ どれだ  
けよくばりなのよ！！！！」

よくばりとか関係ないだろ……。

「ていうかトキが一番おかしいけどあなたたちもよ！！ アルのは  
火 水 風 地 熱 氷 雷 金つて基本と派生全部そろってるじ  
やない！！！！ そしてディア！ 水 風 氷 雷 闇つて上位魔法  
入ってるのになんで基本と派生が二つもあるのよ！！ シャル！  
水 地 氷 金 光つてこつちもなんで上位と基本、派生二つなの  
よ！！！！ はあ…… はあ…… はあ……」

ずいぶん饒舌だなー。

疲れるまで言つなよ。

「こんなの見たらこの学年のトップだとか死んでも言えなかったわ

よ！！ めちゃくちゃ一般人じゃないの！！」

うん。でもなぜ涙ぐむ？

「まあ落ち付けエラ。俺は今のとこ時間と空間しか使えない。アルは最近まで火の魔法、しかも手加減したもののしか使ってこなかった。ディアはハーフだからってことで目立つのを嫌がって授業には出なかった。シャルは素質はあるが今は使えない。つまりだなエラ」

俺は一旦言葉をとぎり、

「このパーティーは問題児ばかりなんだ。変人ばっかりなことだな。まだ全員の根っこの部分を取り除けたわけじゃないんだがな。皆で傷の舐めあいしているようなパーティーなんだよ。アルはある程度治ったがな。ディアもこのクラスではやっていけるようになったが……。お前のクラスのクズ女がそうしたようにまだ完全にはいかない。シャルはまだこれから。そしてエラはよくわからんがおいなんとかしていこう。話したい時に話せばいい」

こんなもんだろ。

「……そうね……。まだ言えないけど。いつか言うわ。あとごめんねディア。私のパーティーであんなことになって」

そう言ってディアの方を見る。

「大丈夫です。エラは全然わるくないですよ？ それに自分でなんとかしました。半殺しです」

うん。半殺しだったなあれは。

「問題児ばかりのパーティーねー。いいかもしれないわ。傷の舐めあいつて言うけどみんなが集まって助け合うってことでしょ？全然いいじゃない！」

これで一見落着か？

「そう言えば話は変わるけど魔力ってみんなどうだったの？一応知っておいたほうがいいかなって。私も入るわけだし。トキは0つで言ってたし。でも0じゃ魔法使えないはずなのよね……1キロ四方も空間の質量上げるなんてできるはずなのよね……」

いきなりそんな事を聞いてきた。

質問が絶えないやつだなー。

「ワイは5万4328やなー」

「私は3万2561です」

「私は2万8921ですー」

エラは絶句しているようだ…。

「そやなートキにゃんの時はおかしかったんよー表示は00000000になつててなー最後に爆発して水晶粉々やー」

あ、なんかエラが考え込んでるぞ……。

あー……まずい。

気づいたか？

「ねえ……それって……下6桁が0ってことじゃないの……？」

妙にするどいな……。あー……なんか四人がこっちみてるぞ？

「あー……バレた？ いやー……でもね？ ハクが6桁じゃ測れるわけないっていっただけでね……。実際は0なのかもなー……とか？」

めちやくちやジト目なんです……。。

「何言ってるのよ！！ そんなわけないでしょーが！ ……それどう考えても7桁以上の数値行ってるわよ！！ ……じゃなかったらあんな魔法つかえるわけないでしょー！！」

「トキにゃん！！ ……なんでいつてくれへんかったんや！！ ……それならワイが負けたのも納得や！！」

「トキ様はやつぱりすごいですね　結婚してください」  
「あーなんか納得ですー……」

なんか四人が目あわせてうなずきあってるし。

「……うん。納得や（です）（ですー）（だわ）」「」「」

めちやくちや納得されたー……普通ここで否定とかしないか？

「だって考えてみなさいよ。あんな強大な力使ってぴんぴんしてるのよ？　一人で国落せるわよ？　更にあのレンよ！　時幻龍なんてどうやったら呼び出せるのよ！？」　時空の狭間ってなによそれ！！  
一般人がそんな場所から召喚できるわけないでしょ？」

出来ちゃったんだから仕方ないし……一応元一般人。

「そやなーワイの古代魔法の中普通に歩いてるっておかしいんよ？  
あれワイの魔力以上の力やよ？　精霊でほとんど補ってるから1  
5万くらいあるはずなんよ。なんで普通に歩いて通れるんや」

いや、だって周りに空間結界はるとね……？　結構簡単に。

「私を驚かなかつたのも納得ですーー魔族なんかより全然強大で  
すー」

それ遠まわしに化け物って……。

「魔法が使えない私を受け入れてくれたのも納得ですー、私を守っ  
てくれるんですー？　キャッ」

おい。全然違う方いつてるぞ？

「あーでもそしたらこのパーティーの平均って最低でも27万はあるってことよね……本当問題児ね。」

ヒドイ……。

「ふ、ふふふふふ、ふふふふふふふふふふふ」

なんか怖い笑い方し始めた……お前が一番問題児だよ！

「っはー！ うん。吹っ切れたわ。プライドとかレッテルとかね。だってそうじゃない。このパーティーだと一番低いシャルさんでも私の5倍よ？ トキなんて最低でも200倍以上よ？ もうね。プライドなんてなくなるわよそりゃー！ でも、なんかよかったわ！ 私だけが頑張らなきゃっていうのなくなった！！ 手伝ってもらわよ皆！！ その代りわたしができることなら手伝うわ！」

いい傾向だな……。

「もちろんだろ？」

「そっちな」

「です」

「ですー」

「トキくんたちと交渉成功しましたよーー」

おおっスゲー。

「よくやったハンネ」

「部屋ゲットやー」

「やったわね」

「やったですね トキ様」

「ですー」

「あなたたちは生徒会役員になることが決まりました！」

「「「「「は？」「」「」」

「だからですねー生徒会なら家がもらえるんですよ。そこで生徒会の仕事をします」

「いやいやいやいや。」

「さてハンネ。俺らは教室を一室もらえばよかったんだが？」

「生徒会になんてならないぞ？」

「だからそれが無理なんですって。なんとかならないか聞いたら生徒会に入るってことでなんとかになりました。あ、ちなみに生徒会に行く課外授業。って言うより任務は最上級の物がいきますからねー」

「なにそのすごくイライナイオマケ。」

「いいじゃないですか家ですよ？ 家。それに私も生徒会の名誉担任になることになりました。昇格ですよー！ 給料があがります！」

「ハンネは給料にくらいついたようだ。」

「ん？ 生徒会って5人だよな？」

「それで給料が上がるってことは収入が40人のクラスより高くないといけないよな？」

「つまり高額な危険な任務受けまくるってことだな……はめられた」



！！！！

「ハンネそれははめられてるぞ！ 学園長に！！ 危険な任務たくさん行かせるが見返りとして給料アップと家をやるうってことだ！！！」

黙り込む一同

「無理ですよ……？ やめられませんよコレ。だってもうあなたたちこの学園の生徒からはずされちゃいましたから。私も……」

「……………」

「えつとですね。生徒会って今までなかったんですよ。そしてあなたがたはそこに入りました。そしてですね、ここが問題なんです。高等部の上に高等院ってのがあるんですよ。これは近衛兵とか王に近い人たちを育成する最上級の学園なんです。普通は高等部でありですね。ちなみに高等院卒業に5年かかります。それであなたたちは高等院の卒業資格があたえられました」

「え？ それってもう学園卒業しちゃっていいんじゃないですか？」

もっともな疑問だな。だんだんきな臭くなってきたぞ。

「そして、あなた方は生徒会。つまり学園でいちばん上の位になったんです。学生人口約18000人のトップになっちゃったわけです。あなた方にはこれから高等院教授と同じくらい給料が支払われます。でもですね、あなた方はまだ卒業の年ではないじゃないですか？ 卒業するまでの期間約6年とちょっと。どこにも属さないトップとして活動してもらいますよ。ちなみにこれは決定なのでどうしようもないんです……。学園長が手続きすぐしちゃいましたし……。ちなみに私も逃げられなくなっちゃいました……」

「……………」

一同沈黙、…………そばで聞いていたクラスメイトまで沈黙。

「うー……だってあなた達の魔力が高いのがいけないですよー！！ 学園でいちばん上だったんですよ！！？ そしたら危険な任務を受ける機関がほしいとかで……あ！ それにですね！！ 闘技大会とかもありますよ！！？ ……先生用のに……」

もう絶句するしかない……。

フォーローの仕方が先生方の闘技大会に出るとは。

「エラ」

「なによ？」

「よかったなお前の願ったトップだぞ」

「……………」

バキッ

「ぐふっ」

殴られた……。

「ここまでのトップになりたいとは思わなかったわよ！」

だろうな……。

「運が悪かったな。こんな時に入っちゃって」

「あ、あとですねー！ 権限は学園長の次くらいに偉いのでー。気に入らない兵士とかもやめさせられますよ？ よかったですねー……」

なんだそのいらない特権。

兵士なんか一回も会ったことないぞ？

「制服もかわりますねー。なんかその制服は生徒会になるように学園長が各学園に通達するとか」

なんか、どんどん条件が悪くなっていく気がする。

「えー、それじゃあ早速いきましようか？ 家の場所聞いたんで。もしかしたら気にいるかも……。ごめんなさい……。でも、もうやめられないんです。やめたら私もあなた方も路頭に迷いますよ？ そうしたら私トキくんに永久就職しますから！！」

ギンツ

うわっ！！ え！？ ちょっと待て！！

なにこれ？ 何でエラとディアとシャルめちゃくちゃ睨んでるの！？

てかレン！ お前意味しってるのか！！？ 空間ずれてきてるかー！！

「やりましようトキ様」

「やるです」

「やるわ」

「おにーちゃんは渡さない！」

『眠いですねー』

ハクお前は何いつてるんだ！！？

「アルはどつする？」

アルも大切な仲間だからな。

「そやなートキにゃんが行くならついていくで？ トキにゃんが最初のワイの理解者やしな」

サンキュー。

「じゃあハンネ。行くけどどこなんだ？」

「学園の中心の魔方陣がある広場の近くですね」

最初に使った魔方陣か。

「OK。いくか」

ブウーーン

俺は広場に空間を接続する、  
その中に一行は入っていく。

さて……と言って後ろを振り返る。

うん。

空間接続にビックリしてるのかな？

「みんな、今までありがとう。最高のクラスだったよ。ディアのことを認めてくれたしな。俺らみたいなのを受け入れてくれてありがとうな。次に会ったときは同学年の生徒同士じゃないけどさ。挨拶くらいしような？ 本当にありがとう」

俺は一礼し、空間の入口に一步進み、振り返る。

「あとな？ 実は隠してたけどな。」

俺らちょっとおかしいんだよ。

ぶっ壊れてるって言うのかな？

おれの属性なんて全属性だし魔力なんて水晶で測れないほど高いし……。

アルだって基本四属性だし、ディアだって上位の闇に風と水、シ

ヤルは土 水 光

使い魔だっておかしいんだぜ？

笑っちゃうよな？

時空の狭間にすむ龍やら冥府の門番 不死鳥 神獣とかさ。

ホント俺ら化け物みただけど……さ。

素直にお前らと仲良くなってきたんだ。

本当にありがとな……」

そう言って、振り返って空間をくぐるようにして。





「お前が化け物のわけねーだろ！」

「一緒にわらってバカやってきたじゃない!!！」

「君がいつてくれたんだよ？ クラスや数値なんて関係ないって」

「自分で言ったことが自分には適用されねーのかよなー？」

「たしかに空間とか時間とか使ってるけどさ。それがなんだ？」

「そうよ。化け物だろうがなんだろうと関係ないでしょ？」

「俺らはうれしかったんだ。クラスがバカにされたときお前は本気で怒ってくれて」

「誰よりも思いやりがある奴じゃねーか？」



ああ……なんていいクラスなんだろうな。

俺は後ろを振り向かない。

すすりなく声が聞こえるけど。

振り向かない。

か。 だってそうだろう？ こんなクラスはなえられるわけないじゃない。

振り向いたらもう先には進めないってわかってるから。



俺は振り向かずに言った

またな

かみならしは言わない。

また会おうと。





ああ……俺は泣いているんだろうか……？

泣いたのなんて何年振りだろう……。。

また会おう……友よ……。



そう言って、振り返らぬまま、俺は空間をくぐり

空間を閉めた。

十八話 学園初の生徒会誕生（後書き）

うん。全然感動にならないね。

文章力高い人羨ましいなー

十九話 新しい家

新しい家

あの後、泣いてる俺に誰も離しかけてこなかった。

素直に嬉しかった。

誰も声を発さず。

家があるであろう場所に無言で歩く。

「よしっ！！ 終了！！ トキキサラギ！！ 戻りました！！」

俺はしんみりした雰囲気を終了させる。

俺達はこれから前に進まないといけないからな。

ひきずっていたら死ぬかもしれないし。

立派になった俺を見てくれ。

友よ。

「トキにやーん家見えてきたで〜」

こういつとき、気づかいをしないでくれるのはありがたいな。

「おーどねど〜……………」

デカイヨ……………？

「でかすぎないか……………あれ」

「大きいですねー」

「大きいわね」

「おおきいです」

「おおきいですー」

「でかいんやな」

でかいよ！！

なんでこんなでつかいんだよ！！

みんなポケーっとして家、

いや、屋敷をみつめる。

これ5階くらいあるな。

しかも横幅も50メートルくらいありそつだ。

「とりあえず入ろうか……」

こくこくと頷く5人

ギィィィィィィィィィィィィ

でかい扉だな……。

「おかえりなさいませ。生徒会役員様」

「」

パタン

俺はそのまま大きな扉を閉めた。

「あれ？ 幻の魔法って今使える人いるの？」

あれは幻だ。

「いないわね。歴代で一人よ」





ハンネのほうを向くと、すごい勢いで首を横に振っている。

「私たちは、学園長にこの屋敷をまかされたものです。生徒会役員様のお世話もさせていただきます」

一人のメイドさんが一歩前が出る。

多分この人がメイド長だろう。

20歳前半くらいだろうか？

「では、お部屋にご案内いたします。荷物は寮のほうからすでに運んでありますので」

プライバシーねー！ー！ー！

「あ、そうだ。この部屋って一つの階に何部屋くらいあるんだ？」

5階まで使う気にはならない。

「8部屋になります」

ちよつどいいな。

「じゃあさ。生活は二階だけ使うわ。あとは風呂と会議室だけ使うかな？ それと食堂。その場所だけでいいや。とりあえずはね。そうすれば掃除とか楽でしょ？ 別に君たちの部屋として使っても構わないからほかは。」

メイドさんは何かかんがえてるようだが、

「そうですね。では、各部屋にご案内させていただきます。お荷物をどうぞ。」

荷物って言ってもな、  
普通にもてるし。

「じゃあカバンだけでいいや。あとこのトロフィーと賞状会議室にでも飾っておいて」

後ろでも同じように荷物を預けている。

トロフィーがなくなったのは助かった。1メートルくらいあったし。

「かしこまりました。では、こちらへどうぞ」

メイドさんが交替した、さっきより幼そうな子だ。

ふむーよく見てなかったけど……、

入口の天井に大きなシャンデリアがあるな。

なんかホントお城って感じた。

赤いじゅうたん敷いてあるし。

俺は、きよろきよろしながら後ろをついていく。

「こちらがトキサさまのお部屋になります」

ん？

「俺、名前いっただけ？」

「言っていないはずだ。」

「お名前と簡単なプロフィールと写真の方を預かっているので」

「まあそんなもんか。」

「それで君の名前は？」

「わたくしは、アンネ・ベルツと申します。」

「んーわかった。じゃあアンネって呼ぶわ。歳近そうだし」

「ふふふ……、そうですね同じ16歳でございます」

「若いな。」

「肩までの茶色い髪の女の子＝アンネと覚えよう」

「とりあえず自分の部屋に入ってみるか……。」

「うん広い。」

「いろいろ高そうな装飾が……。」

キングサイズのベットに…高そうなソファアール？  
机にイス、シャンデリラ、大きな鏡。ワインテラーにグラス。

「あと、これが生徒会長であるトキ様の制服でございます」

いやー……ないない。

コレはないわ。

何この上から下まで白いコート？

ボタンの部分はベルトになっていて首までついている。

腰の部分には長い布のベルト？ のようになっているな。

後ろには二本の布がぶら下がっている。

ところどころ金の装飾してあるし。

胸の部分に王冠のエンブレムが描かれている。

恥ずかしいなんてもんじゃない。

しかもデケーよー！！

ギリギリ地面にはつかないが。

よし、捨てよう。

ポイツ！

イエーイ！！ ゴミ箱にホールインワン！

「あ、スマン手が滑った。あははーこれじゃあもうキレナイナー！

」！

そう言つとアンネはニツコリ笑って、

「安心してくださいトキ様。こちらに予備がございます」

そしてクローゼットが開かれる。

うん。なんでこうじゃ。

こんなもの20着も用意するかな？

学園長いつか殺す！！！！

「あとですねー！ー普段着はすべて処分させていただきました。今日からそれを私服としてご利用ください。下の階にもたくさん予備がありますので」

死にたくなってくる…。

そんな中、レンがベットの上で跳ねてる。

ハクおまえなんでシャンデリラ揺らしてんだ！！

なんかすでにグラス一個割れてるんですが！！？  
なんでハクテメーグラスでバランス感覚鍛えてんだ！！

「なるべく壊さないようにします……」

「ふふふ。そうですね。では、会議室のほうにご案内いたします。」

会議室は三階の一番端だった。

「うん。ここはいい感じだな。6人入っても問題ないし」

片側に本棚。真中に大きな机、奥に一人用の机と皮のイス  
壁につけられている台の上には俺のトロフィーが飾られてある。

壁にも賞状が……仕事ハエー！。

「じゃあお風呂場にもおねがい」

「かしこまりました」

「ふうー……やっぱり風呂はいいなー……」

4階全部が風呂場とは驚きだ。

しかもめちゃくちゃ広い！

俺はアンネを帰して、一人風呂を浴びることにしたのだ。

バシャシャ

自分の家の風呂で泳げるなんて最高だなー

バシャバシャ

バシャバシャバシャ

バシャバシャバシャバシャ

バシャバシャバシャガラララーバシャ

バシャバシャ……。

ガララ？

「トキ様お背中を『ストロープツ！』お？？？？」

うん。

ダメ！ 絶対！

「ここは男湯OK？」

「はい」

「で、アンネは女装した男？」

「いえ。性別的には女ですが？？」

全然わかってないようだ。





なに笑顔でそんなこと言っちゃってんのこの人……………!!  
!!  
それにアンネおまえ背中流しに来たんじゃねーのかよ!!!!  
かけ水して速攻で風呂入ってるんじゃね……………!!!!

バシャー

「ゲアツ!!!!」

レン頼む……風呂場でだけはそれまじい!!  
いつもみたいに前から抱きついてくるな!!!!

「ひろいお風呂いいね……おにーちゃん」

なにニコニコしてんの……………!!!!

俺の顔をミロ!!

めちやくちや動揺してるだろ!!!?

ぎゅってするな! ギユって!!

おまえただでさえおかしな体してるんだからな!!!?

明らかにバランス崩壊したスタイルしてるんぞ!!!! 主にその

胸が!!!!

俺の胸との間でつぶれてる胸が!!!!

うん。脱出しよう。

ザバァ……………

俺は立ちあがってシュタっと手をあげて脱出を。

「実は俺、最初に体洗う主義なんだ。だからもっ出……る……わ？」

あれ？ 顔を真っ赤にしているアンネ。そして一点を凝視。

現状確認しようか？ ハハハOK？

あれ？ おれは裸だ。

タオルは風呂に置いてない。それはマナー違反だからな。

そして座っていた俺にレンが前から抱きついてきた。

で、右にいたアンネ

そして俺は立ち上がった。

もちろん俺のプライベートポイントは元気いっぱいだ……。

「くすくす、おにーちゃんのかかたいのがお腹にあたってくすくすしたい」

とか言っつてニコニコしながらギューっとしてくるレン

こらー!! くすくすしたいからって動くな!!  
めちゃくちゃこすれるだろうが!!!

「これが男性のなんですねー」

とか言いながら真っ赤な顔で凝視しているアンネ……。

ダメだ。  
死のう。

## 夕飯

「トキにゃん？ 何で今日はそんなに静かなんや？ そんな腹へつてたんか？」

「いいかアル？ 俺達はいついかなるときも油断してはいけない。いつどんな敵が襲ってくるかわからないから。自尊心が大きく削れる出来事だっておこってしまうかもしれない。油断はするな！ それが俺からの言葉だ！！」

妙に迫力のある雰囲気で言いきる刻

しかし、まったく理解できていないアルだった。

二十話 いざ初任務へ(前書き)

文章の方、指摘されたところに注意しながら執筆中

二十話 いざ初任務へ

バツ!!

珍しい!! 珍しいぞ!?

久しぶりに一人で起きられた…。

あー… やっぱりあれか。

枕が変わると寝れないってやつか?

隣を見るとレンがすーすー息をたてて寝ている。

うん。美人の寝顔はいいよね?

まだ子供って感じだけど。



ぎゅーーー

思わず抱きしめたくなるよね？  
もう抱きしめてるけどね？

「ふぎゅ……おにい……ちゃん？」

目を覚ましちゃった。  
仕方ない……、

「おはよ。レン」

「おはよーおにーちゃん」

にへらへら。と笑うレン

チユツ

……！！？ まさかアレですか？

お目覚めのキス？

キャツ！！ ボクのファーストキスが

心だけはいつもファーストなんです！！

「……レン？ 誰に聞いた？ 朝キスするってやつ」

「きのうね。ハクちゃんがね？ おにーちゃんよろこぶって」

そう言いながら微笑んでるレン。

うん。かわいいよ？ でもね、ハクは後で温泉5分倍率50倍の

刑だ！！！！

ちなみに俺はいまトランクス一枚だ。

別にすきでこんな恰好しているんじゃないぞ？

だって私服がパジャマも含め処分されたんだもん。

まじで処分しやがった！ あの混浴メイド！！

「とりあえず朝ごはん食べに行こうか？ レン」

「うん〜いく〜」

と、言いながら俺の膝の上にちょこんと座る。  
その髪を俺はブラッシングする。

『ご主人さま〜、私はまだねむいんですよ？ いきなり起きる前に再構築するとは……』

黙れ！！！！ レンの教育に悪いことしやがって！！

あとは…着替えてみたけど。  
予想以上に恥ずかしいな…。

「おにーちゃんカツコイ〜よ？」

お前の笑顔だけが唯一の少ないだよレン

よし、捨てるのは気が引けるから。

空間にでも収容してなくなったって言うておこう！

そう思いながら俺はぼいぼい20着の制服を空間に入れる。

「ありがとう。レン。じゃあ移動するか？」

そして俺は食堂の入口で立ち止まる

おい！！？

「トキにや〜んなんでもうそんな服きてるんや？」

「トキ様かつこいいです」

「トキさんは何着ても似合いますねー」

「…でも恥ずかしいわね」

なんでデメーら私服なんだよ！！！！？

俺だけ！！？ 俺だけなのか処分されたのは！！？

そのあと、俺はメイドに頼み、会長命令で全員の私服を処分させた。

「会議室に来たはいいがなにもやることなくね？」

暇だなく暇々とりあえずレンの髪ブラッシングするしかない。

いつもこんなことしてたらレンハゲるんじゃないだろうか？  
とか最近は気にしながらブラッシング。

いま現在レンとハク、使い魔以外は全員制服だ  
生徒会長が王冠で、他は盾に剣を。交差したエンブレムだ。  
そっちのほうがカッコいいなあ…。

どつせ恥ずかしいけど。

バンッ

「みなさんきましたー！ー！！ 最初の任務ですー！ー！！」

ハンネが慌てて会議室に入ってくる。

ズウウウウン

一同が暗くなる。

「ハンネ？ いくら暇でも死に行きたいやつはいないよ？」

「??? 何を言われているかわからないようだ。」

「はい！ ではこれ生徒会長への指令書です。それではわたしはこれです。」

シュタツッと逃げようとするハンネの頭を鷲掴みする俺。

「ハンネが読め」

「えっとでもですなー…これは拒否できませんよ？」

うん。明らかに大変な任務なんだな。

「それじゃあ読みますね」

生徒会様

此度は、生徒会就任おめでとうございます。

早速ではありませんが。任務の方をお渡しします。

てか、敬語苦手だから普通に書きますね」。

えーとですね。ぶっちゃけ傭兵と協力して討伐してほしい魔物がいるんです

たしか名前は“不死の死神”だったはず。よろしくねー

あ、ちなみにこれ。拒否できないから？

これで少しでも慣れてくれたらうれしいですね

学園長より

です

「……………」

一同が押し黙った。

「ハンネ？ いろいろと突っ込みたいところもあるけどさ。不死の死神ってなんだ？」

なにやら書類を確認しているハンネ。

「あー、ありました。えつとですね。アンゾルゲの森に住む魔物らしいです。属性は闇。あらゆる攻撃が通らない漆黒の死神。いままで討伐隊は300人程度殺されてますね」

おい！

300人？

「ちなみに一番多く討伐隊が出撃した人数は何人だ？」  
「300人です」

「……………」

つまり討伐隊だけで300人出撃して、全員死んだってことだよな？

「お前はあれか！？ 死にたがりか？ これで慣れろって言うのか



！？ まってるハンネいま学園長を殺してくる」

そう言っつて、俺はハクをわしづかむ。

ガバツ

「まっつてくさいよー！ー！！ 学園長もきつと生徒会で対処できるから渡してきたんですよ！ー！？ ね？ やっつてあげましようよ？ クビになっつちゃうんですよー！ー！！」

ハンネが腰にしがみついているがずるずると引きずつていく俺。

「で？ それランクは？」

ランクとはSSS〜Gまであるギルドで規定されている危険度ランクだ。

「えーと、ランクは“SSS”、報酬は1000万セラです」

ガシツ

俺はハンネのささやかな胸をわしづかむ。

「ひゃつ！ー！？ 何するんですかトキく〜ん！」

いやいやいや？

「それはこつちのセリフだろが！ー！？ 殺す気か！？ SSSランクつて最低でも精鋭100人は必要なランクだろつが！ー？ 何お前言っつちゃうつてくれてんの？ 死ぬしかないじゃん！ー！ アレか？

傭兵が1000人くらいいるのか？」

まじ死ぬよ？

「傭兵は30人ですねー……」

むにむにむに

別にする必要はないが揉みしだく。

「……あつ」

「あつ、じゃないだろハンネ？ 30人+6人ってなに考えてるんだ！？」

ハンネは俺の手から逃れ出て出口付近まであとずさる。

「……六人じゃないですよ？」

ああ、さすがに6人じゃないか。

傭兵以外に兵士でもいるのか？

おい、ハンネ。なんで扉の方をちらちら見ているんだ？

「私はこの後友達とご飯にいきますので。でわっ！！」

ダッ

（扉に走っていく音）

ガチャッ

（扉の取っ手に手をかけて下に下ろす音）

『Raumschlie?ung  
《空間閉鎖》』

ガツッ

(ハンネがそのまま扉に頭をぶつける音)

「ツッ~~~~~!?!?」

悶絶してるところ悪いかな。

「第一回生徒会会議をはじめる!?!!」

俺は後ろを振り返る。

「では! 学園長の判決への意見をどうぞ」

「俺は殺そうと思う」

「ワイもやな」

「賛成です」

「いいとおもってます」

「私も殺すわ」

「賛成5反対0。死刑確定」

ガタガタガタガタ

全員が起立する。

「ディアお前の部屋入っていいか？ 制服を借りたい。」

「いいですよートキ様。好きな時に入っていいです」

ありがとう。と言って空間を繋ぐ。

そしてもうひとつ空間を繋ぐ。

「では先ほどの判決の通りこちらが学園長室。俺は用事を済ませてくるから終わったら戻ってきてくれ」

そう言って俺は、ハンネをつれて空間に入って行った。

「おう、早かったな」

会議室に入ると既に全員が戻っていた。

「よわかったでー、護衛も学園長も」

「楽勝です」

「つまらないですー」

「あれで最高権力者なの？」

思い思いのことを言う。

「あの…これ。すぐはずかしい…んですが……」

それはわからなくもない。

いまハンネは生徒会制服を着ている

もちろん俺が嫌がるハンネを脱がせて着せたのだ。

あまりに暴れるので倍率を限界まで上げて着せた。

気づいたら着ていた。という事実にはハンネは泣きそうになっている。

だってねー？ やろうと思えばいつでもこうなるってことだからね。

まあやるけど。

「ハンネ先生。私たちもきてるのよ？ 名誉顧問なんだからあたりまえでしょ？」

と、エラ。

「そう言えばハンネ。何時にどこ集合だ？」

「はい、12時にカフェテラス」

「お前の友達との約束じゃねーよ」

「……ぐすん、11時に門の前です」

……ん？

「ハンネ。今何時だ？」

「11時23分ですね」

「遅刻じゃねーか！……！！？」

アホか！！！？ コイツはマジでアホの子か！！！？

「あーそれでは私は友人との食事に……」

そう言って扉に駆ける。

フツ…バカな子だ。

「ホンッ空間接続」

ハンネはそのまま扉から出ていく。

広場へと

「うう…はめられました…ひどいトキくん…わたしをもてあそんで」

弄ぶとか言うな。

俺たちも続いて空間から出た。

そこには、涙を流しながら地面に両手をついているハンネが。

「気にするな。お前ほどじゃない。生徒を死地に追い込んで一人食事するなんてゆるさない」

うん。学園長にだって罰与えたしな。

『Wieder aufbau・Ein Kragen  
nstand  
Gegge

《再構築・首輪 対象ハンネ》

パチン

ハクが再構築され、ハンネの首にひも付き首輪が現れた。

「はいはい、犬のように羞恥プレイしなくなったらちやっちやと歩く〜」

すでに羞恥なのだが。

俺達が急に現れた事に驚いたのか、周囲がざわめきはじめる。

「キヤーーーーー！！ アレが生徒会！？」

「きつとそうよ？ だって美男子美女子しかないじゃない！？」

「さすが噂に聞く生徒会ねー」

「美形じゃないと入れないって書いてあったもんねー」

「ほら、それに昼間からかわいいらしい女の子を犬のようにひきつれてるわ」

おい。学園長。お前どんな生徒会？ の連絡したんだ。

顔だけのトップとかめちゃくちや嫌われるだろ！！？

「トキにゃーん。この恰好で外にでるなんて自ら自尊心削っているようなもんや……」



ガラガラガラ

確かにそうだが。

「気にするな。ハンネの方が恥ずかしいだろ」

ガラガラガラ

現在ハンネは、首輪についている紐を俺にひっぱられ、台車の上に座らせられひきずられている。

「ほう。遅刻とは随分余裕だな。生徒会様はよー」

いきなり2メートルくらいありそうなおっさんに声をかけられた。

「すまん。だだをこねる子供がいてな」

「任務に子供をつれてくる時点で余裕っていうんじゃないのか？  
あ？」

ふむ。確かにそうだな

男の後ろにいる男たちが下品な笑みを浮かべる。

こいつらが傭兵か。

スゲーここまで予想通りの傭兵なんて……。

内心笑いそうだ。

「お前らが遅刻するから馬車がもうないぜ？ そっちの美人なお姉ちゃん達は俺らの馬車にのせてやるよ。男どもは屋根の上にも乗

「つておけ」

下種な笑みを浮かべている男たち。

明らかに馬車がおおいがな。30人で5台あるぞ。

「いやよ」

「あなた方と乗るくらいなら死んだ方だマシです」

「やーですー」

もつともだな。

「じゃーどうするんだー？ 馬車がないんじゃ風魔法で飛んでいくか？ 全員が風魔法つかえるのか？ あ？」

「気にするな。こちらはこちらで準備する」

「ハク首輪解除」

『Formwiederbau・Einbarracuda - Panzerwagen Ichtauscher Brennstoff durch eine magische Macht aus』

《形状再構築・バラクーダ装甲車 燃料を魔力で代用》

大きな光が輝き、迷彩色の塗装が施された装甲車があらわれた。

全長6メートル以上、幅2メートル以上。

通常時乗員数12名の広さである。

中は快適さを重視してふかふかのイスに変えてある。

うん。運転初めてだけどなんとかなるだろ…。

傭兵達と生徒会＋子供、はいきなりあらわれた装甲車にビックリしている。

車すらないからな。

この世界。

「伊達に生徒会名乗ってねーよ。道案内よろしく」

名乗りたくて名乗ってるわけじゃないが。

「くそっ！」

そう言っつて、馬車に乗り込んで行く傭兵達。

「さて、乗り込んでくれ。俺が運転するからレンは隣な？ 他は後ろに乗ってくれ」

と言っつて、後ろのハッチを開けてやる。

「ていうか私の白龍に乗ればいいんじゃないの？」

エラがそんなことを言っつてきた。

「場所わからないだろ？ 誰に道案内してもらうんだよ？ 龍じゃ速すぎて追い越しちまう」

それにな…理由がもう一つある。

「全員乗りこんだなー！？ よしいくぞー……！！ レン……！！  
ゲームで鍛えた俺の腕なめるな……！！」

「いけ……！ おにいちゃん……！！」

ありがとう！ 行くぜ俺！！

ゴンッ

ぶつけた。

前の木に、

別に傷はつかないしいいや。

魔力がある限り絶対傷つかないしなイケル！！

「トキ様…もしかして初めて乗りますか？」

おいおいそんなわけないだろ？

ゲームで乗ってるって。

たしか車をぶつけて町を壊していくゲームで。

「いける！！！」

ハク。頼みがる…。

「…なんですか？ ご主人さま？」

ギアはお前が変えてくれ…。

「わかりました」

だって仕方ないじゃん！！

音全然しないんだもん！！

なんでこんな車体なのに音しないの！！？

魔力で代用したからだけどさ、仕方ないよね？

ガソリンなんてないんだもん。

さっきも無音だったから走ってるかどうかもわからなかったよ。

ガタンッ      ガタンッ

なんか気持ち悪いな。音がしないって。

地面を走ってる音と振動の音だけが響く。



だ。あとな  
「

ゴキヤツ

バキ

ギシ

突如、前の馬車が一瞬で破壊された。

ギギギギギイイイイイ

俺は一気に後ろに走らせる。

「こつ言うことだ？ 知らないで領域に入り込んだら当然こつなる  
だろ？ つまり俺からしたらアイツ等はエサだよ。俺は全員を助け  
ることなんて出来ない。あいつ等30人の命と俺の仲間の命だった  
ら悩みもせずに30人を切る。王には向かない性格だな？ たぶん  
1000人の人間より一人の仲間を救うぞ俺は？ こんな人間をト  
ップにおいて大丈夫か？」

くすくすと笑う俺。

そんな俺にレンは頬を擦りつけてくる。

「トキにゃーん。ワイも一緒やよ〜大事な方をたすけるんや」

「そうですねー、トップとしてはどうかとおもいますが、身内としてはうれしいですね」

「トキ様と世界全員でもトキ様を選びます」

「わたしもですー」

「私は……よくわからないわ」

それで言いといっけてくれるのはうれしいな。

だけど別にエラの意見が間違ってるとは思わない。

むしろ俺たちが狂ってる。

「エラが本当は正しいんだろ？ お前は人の上に立てる人間だよ。

王様なんてどうだ？」

俺は笑いながらいうと、エラはまじめな顔をしている。

あれ？ ネタで言ったんだけどな…。

ギイイイイイイイイイイイイ

そして、俺は1キロくらい離れたところで止まる。

全員が降りはじめ、使い魔はレン以外元の姿をとる。

ハクは白刻刀の姿にしておく。

「準備はいいか？」



「一応確認！ って言っても、ダメだとしても行くことにはかわりない。」

「もちろんよ！」

「ワイもOKや」

「行けます」

「大丈夫です」

「いけますですー」

「お兄ちゃんいこーー！」

『『『 我も行けるぞ！』『『『

『 我は主についていこつ』

『グエエエエエ』

頼もしい仲間だな。

向こうで起こっている悲鳴や破壊音、煙を見てもそう言えるなんて。

俺は一回深呼吸をし……。

「行くぞ!!!!!!」

俺達の初めての任務が始まる。

任務名『不死の死神』ギルド認定ランクSSS 死者300名

## 二二話 闇のページ

俺達は現場まで走って向かい、

足を止めた。

やはりと言っか……なんというか。



血、赤、血、血、ち、血、赤、血、ち、血、ち、血、ち、赤、ち、血、  
血、ち、血、赤、血、血、ち、血、赤、血、ち、血、赤、血、ち、赤、  
ち、血、血、ち、血、赤、血、血、ち、血、赤、血、ち、血、赤、血、  
ち、赤、ち、血、血、ち、血、赤、血、血、ち、血、赤、血、  
ち、血、ち、赤、ち、血、血、ち、血、赤、血、血、ち、血、赤、  
赤、血、ち、血、ち、赤、ち、血、血、ち、血、赤、血、  
血、赤、血、

ひたすらに血の海。

転がっているのは腕、足、頭、体。

無事な部分なんてほとんどない。

細かく刻まれた体。

「…………お…まえ…………達、逃…ろ…………！！」

最初に見たデカイ男が声をかけてきた。

右腕が肩からなくなり、左腕も斜めに切断されている。

足は真横に切られたのか膝から下はなかった。

俺は血に汚れることなんて関係なしに男を抱き起こす。

真っ白いコートに赤いしみが広がっていく。

「どうした！！ 何があつた！！？」

何にやられたかなんて決まってる。

問題は どうしてこうなったかだ。

「あいつ……ガハツ……には魔法はほとんど意味がない……はあはあ……  
光だ！！ 光だけは嫌がっていた……だがソイツはまっさきに殺  
された！！ ……俺達は傭兵だ……死ぬのなんて覚悟していた……だ  
がな……子供も一緒に死ぬなんてのは……俺がひきつけてるあいだに、  
逃げる……！！」

ああ、腐っても人間だよコイツは。

俺だって死なせたいわけじゃない。

優先度が違うだけだ。

だけど、俺は今コイツを助けない。

ただの偽善だけと助けたいと思った。

「生きている奴はいるか？」

「いや……多分、俺だけだ。俺もどうせ助からね……だから逃げる  
！」

カッコイイ生き様だなコイツ。  
だがな……、

後ろを振り返ってみる。

アルは齒ぎしりをしている。  
ハンネは吐いているようだ。  
ディアは座り込んでいる。  
シャルは震えて泣いている  
エラは腕を拾い上げ体にくっつけようとしている。

みんな壊れる寸前だ。

どうせ逃げることなんて出来ない!!

クソッ!!!

「俺がお前を町まで転移させる。ここにいても何もできないだろう？  
はつきり言おう。こんな血の海にいたらアイツ等が壊れちまう。  
広場は騒ぎになるだろうけどな。死体や血ごと転移させる。あとお  
前はあつちで助けてもらえ。」

一度息を吸い込み、叫ぶ。

『だからイキロ!!!!!! 意地汚く生きろ!!!!!! それであ  
い  
つ等を吊つてやれ!!!!!! 俺達は死なない!!! お前は安心して  
戻れ!!!!!!』

男は眼を見開き。

「なっ……………」

パチンッ

俺が指を鳴らすと。  
すべての死体、血。男が消えた。

「……いきろよ。お前の意思。引き継いでやるよ」

そして叫ぶ！

『おい！！ テメー等もどつてこい！！ 何そんな場所で固まっ  
てんだボケ！！ それで何が変わる！！ 殺されて終わりだろ  
うが！！！！ 悲しいんだったら奴を倒せ！！ 吐くんだったら奴  
を喰らつてから吐け！！ 座ることは許さない！！ 泣くのはお前  
が死んだときだ！！！！ 俺が泣いてやる！！！！ 腕がくつつくわけ  
ないだろが！！！！ 奴を倒して戻ったらあの男でも治療してやれ！  
！ 死ぬまで止まることは許さん！！！！』

全員を見渡してみる。

やっと目に光が戻ったか…。

「ふ…… トキにゃんもひどいこというなーまあ、やるかいな？」



そう言って拳を胸の前に持ち上げる。

「むートキくん？ 私は魔物は食べませんよ？」

「いやいや、闇で喰えってことだから！」

「ふふ。トキ様は私の体の権利を得たいのですね」

「何とちくるってんだコイツ！！？」

「死んだら泣けませんですー」

「だから俺が泣いてやるって。俺が生きてたらな」

「私が行くまでに治療されてなかったら死んでるわよ？」

「もっともだが突っ込むな。」

「はあ…じゃあ行くか？ ちょうど敵さんも出てきたし」

そちらに視線を移すが。

うわー何だろうアレ…。

「これは……闇の煙か？」

「えー、どうでしょうか？ 一応布みたいのかぶってますよ？」

「目もありますね、白いのが」

「大きな鎌みたいのもってるわね」

「普通に浮いてるわね」

つまりだ。体は黒い煙で出来ていて。

その上に黒い布を頭から羽織っている感じ。

更に3メートルはありそうな漆黒の鎌が宙に浮いている。

目は白い点が二つ、もちろん体は浮いている。

「とりあえず、こっちは気づいているようだな。少し強さを見てみるか」

俺は限界の50倍まで時間を引き延ばす。

周りの色が少し薄くなる。

そこに立っているのはレンと俺だけ

のはずだった。

一気に時間を戻す。

「な！ なんや！？ いきなり瞬間移動かいな？ あの化け物！！」  
そうか、こいつらにはそう見えるのか。

「違うぞ…アル。アイツはな」  
そうアイツは入ってきた。

「アイツは俺の引き延ばした時間に入り込んできた。つまりアイツも早くなっちまう。だから俺は引き延ばすことは出来ない」

「……………なっ！…!?」「……………」

全員その意味に気づき驚愕する。

「じゃあ、アイツは時間の属性も持ってると言っの…!?」

そうなのだ、入れるってことはそうなのだ。  
しかし…何かが違うと俺は思う。  
何かがしっくりこない。  
気配というのだろうか？

「いや、多分違うと思う。とりあえず俺が攻撃してみるから」  
そういつて白刻刀を握る。

「気を付けてくださいね？」

俺は一度うなづく。

『Raumausschnitt・Freilassung  
Freilassung』

《空間切断・放出 霧散！！》

俺は一気に刀を振り。

縦5メートル程の空間切断の斬激を放つ。  
それはまっすぐに地面と木をえぐりながら突き進む。  
霧散によって周囲の範囲も消え去っていく。

パキンッ

そして死神に当たる前に弾けた。

「なっ！！！！？ 空間も効かないだと！！？」

ブンッ

死神は俺に気づいたようで、鎌を放ってきた。

俺は咄嗟にそれを避ける。

しかし、その鎌は近づくにつれて肥大化してゆく。

全長10メートルの鎌が俺を切り裂く。

避けられない。

パキイン

そして、俺の直前で鎌は砕け散った。

「なに！！！！？ どういうことだ？？ なぜ砕ける？」

途中までは確実に木々を切り裂いて俺に向かってきていた。  
死神が自分で解除するなんてありえない。なぜだ！？

「どういうことなんや？ トキにゃん？ アレは人を切り裂けないんか？」

少しほっとしたような顔をする一同。

「いや、さっきの傭兵達がやられた切り口。どう考えても鋭利な刃物で切り裂かれていた」

斬られて無事だなんて確証はない。

万が一があつた瞬間死ぬのだ。

「ご主人さま!!! アレ!!!! あれをみてください!!!」

って、こいついつの間にも刀解除した!?

指をさした方を見ている。

「死神だろ!?! わかつてるよ!?!」

何を言い出すんだこいつ!?!?

「違いますよ!?!?! もやの中の黒い塊!?!?!」

目を凝らして見てみる。

確かにあつた。

「あれがどうした?」

「アレがページですよ!!! 闇のページです!!! ページは生物に引き寄せられるって言いましたよね!?!? ページが魔物に住み着いたんです!?!」

アレが…ページ?

「ページって紙じゃないのかよ!?!?」

パキーン

俺は他の奴に行く攻撃もすべて自分で受けながら会話を続ける。

「違いますよ！！ たしかに紙ですが魔力を持っているので破れると球体になるんです！！」

なんだそれ、先に言っとけよ！！

「それがわかったとして、なんで俺の攻撃ははじかれるんだ！！？ 相手の攻撃も俺に当たらない！！？」

あの球を取り出すって言っても弾かれてちゃ取りだせないぞ！！？

「ページのプロテクトです！！ ページを保護するために！！！！ ページから本へ、本からページには攻撃が通りません！！！！ ページは違う本からの攻撃しか通らないって言うのはそうゆうことです！！ 自分の攻撃では倒せません！！！！」

はあ！！？

「ってことはどんな魔法でも本以外からの攻撃は通らないってことか！！！！？ 絶対たおせないじゃねーか！！！！」

パキーン

パリーン

「違いますよ！！！！ たしかにページにはとおりません！ ですが魔物本体を倒すことができればページだけになります！！ ただし、



本体もページに書き換えられて闇の属性に変化しています！！ 闇  
そのものと言っていていいでしょう！！ 闇は上位属性！！ つまり基  
本四種と派生四種ではダメージがおらないんです！！ 闇より上  
位か同等！！ 闇属性なら相殺！ 光 時間 空間 創造 幻の属  
性しかとおりません！！」

くそ！！！！光…。

「聞いたかみんな！！？」

振り返る。

「ページってなんなんや！？」

あーーーー！！！！ 言ってなかった！！ めんどい！！

「そんなことはどうでもいい！！ いま大事なのは上位以上の属性  
しかとおらない。そして俺の魔法は通らない！！！！」

パキィィィン

くっそ！！！！！！

「レン！！ 奴を消し去れ！！！！」

レンは空中に10メートル程の時空弾を5つ作りだした。  
そして全部を一気に投げた。

レンの魔法は通るはずだ！

地面や木ごと大範圍を消しさる。

パキイイン

パリイイン

パキイ

パリッ

パキイイーン

「なっ！！！ なぜだ！！！？」

レンの魔法がすべて弾けた。

「ご主人さま！！ レンちゃんは使い魔なのでご主人さまとラインがつながっています！！ レンちゃんの魔法もとどきません！！」

くそっ！！

「レン！！ 俺と同じように他のやつに來た攻撃の前に出ろ！！」

パリイイーン

案の定レンに当たる前に碎けた。

しかし…これじゃ全く解決にならない！！

「アル！！ エラ！！ 下がれ！！！！ そして白龍は上空から！  
きーちゃんは横から攻撃だ！！ ハンネ！ ディア！ シロ！！  
闇魔法で自身と白龍、きーちゃんを守れ！！」

死神の鎌の量が増える。全方向にもものすごい速さで鎌を打ち放す  
それをハンネ ディア シロが闇で相殺してゆく。



音はしない。ただ一面が真っ白に輝く。

そして光がやんだとき。

死神がいたところには何もなくなっていた。

「終わった……？ のか？」

確かに何もいない。

でも、おかしい。

ページは消えないはずだ。

一緒に消えたのか？

「レンツ！！！！ シャルを守れっ！！！！」

パライイイン

レンは言った瞬間には走り出していた。  
なんとか、シャルに襲いかかった鎌は消え去った。

「なんなんや…？ 倒したんじゃあらへんのか？」

愕然とした表情。

だが、俺は見ていた。

奴がどうやって復活したのかを！

「影だ！！！！ 奴は影が残ったらそこから生まれる！！ 地面の影  
だろうと人の影だろうと関係ない！！ すべての影を消さないとま  
た生まれる！！」

だが、そんなことは無理だ！！ 光源がある以上かならず影がう  
まれてしまう！！ 方法は一つ。

超広範囲でその範囲すべてを光源にしないといけない！！ 光源  
を作るのではなく、光源になる！！ それくらいしか倒すことがで  
きない！！！！

「白龍！！ きーちゃん！！ 広範囲をすべて光源にする魔法はあ

るか!!?」

これで出来なきゃ俺らは終わりだ。

『我には無理だ。それはもはや創造魔法に等しい行為。神獣とあれど神ではあらんのだ。その龍も無理だな。先ほどの攻撃を見る限り我よりいささか力不足だ』

くそっ!!... どうする!!..!

パライイン

パリンッ

避けてるだけじゃ死を引き延ばすことしかできない!!..!

パリーン

パリーン

くそ! 俺とレンだけなら助かるだろう。  
しかし他は確実に全滅するぞ!!..!

パリパリーーン

いつそ逃げるか!?!?

パリイイイン

逃げてどうする!?!? ここで空間をつなげればほぼ確実にあい  
つも入り込んでくる!!  
確実に学園は全滅する!!

パリイイーーン

「ご主人さま無理です!! 逃げましょう!?!?」

「無理だ!?!! ここで空間は開けない!?! 学園にこいつを連れ  
ていくのは絶対にさげなくてはならない!?!!」



「じゃあどうするんですか！！？　ここにいても死ぬだけです！！」

「死んだとしてもだ！！　学園にいる3万人近くを見殺しにはできません！！！！」

パリーーン

「ご主人さま言ったじゃないですか！！　『俺は10000人死のうと仲間一人を助ける』って！！」

パキイーン

「ああ。たしかに言った。だからな、逃げろお前ら！！　学園まで！！！！」

「な！！！？　何を言ってるんですかご主人さま！！！！」

「俺がこいつを足止めしてれば他のやつは逃げれるだろ！！！！」

「ご主人さま！！　確かに今は攻撃を受けないかもしれませんが！！」

でも闇の性質に侵食っていうのがああるんです！！ 取り込まれてしまいます！！」

ああ、なんとなくわかってたよ。

影から生まれたばっかの時は小さかったからな。

近くの木を一気に取り込んでたさ。

「白龍！！ 時幻龍の主として命令する！！！！ ここから全員を連れて学園に飛べっ！！！！」

『グオオアア』

ああ…なんだろうな。

白龍、泣いてくれるのか？

なんて悲しそうな叫びをすんだよおまえ…。

「なんで…なんで、ですかトキくん！！？」

仕方ないんだよハンネ…誰かが死ななければ仲間が死ぬのなら

俺は喜んでこの命を差し出そう。

「おい！ お前ら言ったよな！！ 俺は1000人死んだら一人の仲間が助かるなら仲間ををたすけるって！！！！！！」

ハンネ…そんな泣くなよ。

そして俺は吠える。

「1000人の中には俺も入ってるんだよ!!! 仲間を安全地帯まで飛ばす!!! そして俺は1000人の中の一人となって1000人を救おうと最後まで闘うんだよ!!!」

すまん。

白刻刀を握りしめ死神に攻撃をしかける!!

「おい! 死神!! お前は俺だけを見ている!!」

パチンッ

そして全員が消え去った。

「ハク…スマンな。1ページも集められないで」

ハクは元に戻っている。

刀なんて注意をひきつける以外に何も意味はない。

死神はいまもずっと攻撃しているが俺には触れられない。

俺の攻撃も届かない。

本とページの魔力は無限に等しい。

そして俺の特性は生命を育てる。

長い年月をかけて自由に育てる。

地球が生まれて、長い年月をかけて人類が誕生したように。

すべての世界を包み込む成長。

そして空間は守り。

どこにでも存在する空間。

ありとあらゆるものを受け入れる容器。

そして守る入れ物。

闇の特性は侵食。

すべてを喰いつくす闇。

平等にすべてを喰らい尽す。

そして取り込む。

時間と空間。

闇さえも受け入れ成長させる。

すべてを平等に等しく受け入れ成長させる。

この世でこれ以上平等なものなんてないだろう。

受け入れ育てる。

ああ…俺はあいつ等を受け入れてやれたんだろうか？



成長をさせてあげられたらどうか？

「ハク、今回の主はどうだった？」

「んーそうですねー確かにページは集められなかったですけど……」  
にこにこ笑いながら言うハク。

「わたしはよかったと思います。楽しかったですよ？　ご主人さま」

「まあ一言でいっなら」

「最高でしたねー！」

満面の笑みで笑うハク。

ホント、コイツは…。

あーそろそろきつくなってきたかもな…。

時間と空間が受け入れ、闇が侵食する。

「ページ集められなかったけどどうなるんだ？　これから…」

「そうですね、過去には戻りませんが相性は最悪ですからねー。たぶん飲みこまれちゃいますね。ご主人さま」

くすくす笑いながら、なんともお気楽にいう。

「もちろん、私もです。ずっと一緒ですね？　ご主人さま」

ああ。

「お前と会えてよかったよ。これからもよろしくなハク」

「はい。ずっと一緒にです。心はなくなっちゃいますが一緒に一緒にです」



「ありがとう。ハク。こんな俺に付き合ってくれて」

「ありがとうございます。ご主人さま。こんな旅に付き合ってくれて」

俺達は笑顔でお礼を言った。

さよなら、ハク。

そして俺とハクは。

闇に呑まれた。

二二話 闇のページ（後書き）

続くよ？

一二話 闇を受け入れし者

「ご主人さまご主人さま」

「ん？どうした？　ここは地獄か？」

俺達は真っ暗な空間に浮かんでいた。

「なにをいつてるんですかー私たちはどっちにもいけませんよ？  
侵食されたら闇としていきることになりますから」

「んーそうか。でも意外だな消えるかと思ったらまだ意識があるかな」

「そうですねー、でも時間の問題ですよ」

ケラケラ笑うハク。

「ご主人さまが完全に闇になる前に倒されるといいですねーご主人さまの魔力吸収しちゃったら、この世界すべて闇で包んでもおつりがきますからねー」

「おいおい…まあでも、さ。あいつ等が何とかしてくれるだろう」

「ひとまかせですねーもうっ！」

「でもご主人さまらしいですからいいですー！」

「にしても暇だな。あとどれくらいで俺は喰われるんだ？」

「そうですねー魔力が高いからそこそこ時間かかるんじゃないですか？」

「そっかー、地球からエロゲーでも持ってくればよかったなあ。途中のあつたんだよなー」

「まったくヲタクさんですね。ご主人さまは。」

くすくす笑うハク。

「仕方ないだろー？ 友達なんていなかったんだからさ。そしたら二次元に逃避するしかないのさ！」

「全然自慢できないですつて！！ あつ、そうだ！ 私が脱ぎましたよ？ これでも結構大きいんですよ？」

ハクの頭を軽くつついてやる。

「何を言ってるんだか…明らかに幼女体系だろ？ 見た目なんて10歳くらいだおまえ」

「失礼ですねー！ これでも私的にはCカップくらいあるんですよ？」

「いや、1センチでカップが4つくらいあがりそうなのよつに言われなくてもな」

二人で笑い合う。

「たまにはいいかもなーこう言うのも」



「そうですねーご主人さまのそばにはいつも女の子の人がいましたからねー」

「みんないやつばっかだったな…」

「そうですねいい人たちでした」

「どうする？ 消してやろうか？ これ以上ここにいてもつらいだけだろ？」

「んー。その方が楽ではあるんですけどね。最後までご主人さまに付き合いますよ。最後のご主人さまですしね」

「そっか…」

「ですね、私の旅もやっと終わりです。数兆年くらいかかりましたねー」

「またスケールがでかいな」

「そりゃそうですね！ 私は神なんですから！ー！」

「ははは、そっだなー神様」

「むー、信じてませんね！？ いいですよ。っもっ！ー」

「あはは……。なんか眠くなってきた…」

「そろそろなんですかね？」

「どーだろ。最後にお前にキスでもしようかな。お前にはしてなかったしなー」

「やっと私の魅力に気づきましたか？」

カポッ

「はみよひゆるんれふかー！ー！ー！ー！」

プハッ

「キスだ」

「違いますよ！ いまのは捕食です！ 頭ごと口の中に入れるキスが あつたら驚きです！ー！」

「むー！ するんならちゃんとしてくださいー体も変えますから」

そう言って、ハクは一瞬輝き。

やっぱり10歳くらいの女の子になった。

大きさは大きくなっただけ。

「大きさも変えられるんだな」

「だから私はご主人さまの好きなように変われるんですって。車とかにもなっただじゃないですか」

「そうだったな。それにしても…なんで裸なんだ？」

「そうですねー魔力を使うとそれだけご主人さまの消滅が早くなりますしー」

「今更だなー」

「そうですねー…でも見てください！　これ！　どうですか？　C位あるでしょ？」

そんな必死によせてあげなくても……。

「そうだなー、CとDの間くらいあるな」

「でしょー！？　ホラッ最後なんですから触ってください！！」

ふにゆ

「いや、別にいいぞ？　そんな真っ赤な顔で無理しなくても？」

「いえいえー、だって私実体化できたのはご主人さまが最初ですからね。最後くらいどう言っものなのかを」

ふにふにゆ

無理やり触らせてくる。

「んー、よくわかりませんが満足です！」

「はは、そうだろ？ あー、結構まずいな体からなんか抜ける気がする」

「安心してください。消えるときは私も一緒ですからね。じゃあ最後にキスしますか？」

ちゆ

抱きしめながらキスをする俺とハク。

「ふうー、満足ですね！ 消える準備は出来ました！！」

「消える準備かー、にしても世間体は最悪だな」

「今更ですよーご主人さまの守備範囲は世界一です！」

「はは。そう言うことにしておくか」

「おやすみ。ハク……」

「おやすみ。私の主様」

そうして俺は眼をつぶる。

『 ..... 』  
≠  
『 ..... 』  
ん

「ハク。なにか言ったか？」

「言ってますんよ？」

『トキ……キさん』

「なあハク」

「はい」

「俺あいつら空間に入れたとき結構臭いこと言ったよな」

「かなり臭かったです。でも死ぬ間際だったから許されました」

『トキくん』

「どうしよう？ 俺戻りたくなってきた」

「ですね。私もご主人さまと体の関係になりましたし」

「なっていないってない！！ 俺はまだ誰ともなっていないよ？」

「そうなんですか？ てつきりハンネちゃんあたりとなってるかと」

「いや、あれは妹だな」

「そうですかーもし出たら私も参戦しましょうかね？」

「まあ出れたらなー」

『光の精霊よ 我が命は光の中に 光は我が命に』

「なあどうしよう？ なんか詠唱聞こえるんだけど？」

「そうですねー、もう一度キスしますか？ 落ち着くかもしれませんよっ。」

ちゅっ

『光は希望 我が世界は光の世界 顕現せしは光の世界』



ぷはっ

「あのですねー。ちょっと抱きしめてくれませんか？ このままでると私裸なんですよ。こっぎゅーっ」と抱きしめてください。」

「だから今更って言ったのにお前…。」

ぎゅっ

「もっとですってほらー！！ 胸とか横から見えるじゃないですか！

！？ あ、そっだ」

そっいつて俺に抱きついたまま上着を自分の後ろでしばる

「これで完璧ですね。下と上から以外見えませんよ？」

「俺から丸見え何だが。」

「もう今更ですよ。お風呂とか毎日一緒に入ってるじゃないですかー？ ちっちゃい姿ですけど。今度からこの姿になりましょう。」

『光の奔流 「世界の浄化」 光の城！！』

そして、世界は光に埋め尽くされた。

光が納まり瞳をひらく。

ああ、戻ってきたのか俺は。  
陽のあたる場所へ…。

「トキにゃん…ワイはっ！　ワイは…！」

アルが泣くななんて珍しいな。

「トキくん…よかった…ぐすっ」

ハンネお前またか…。

「トキ様が死んだら私はどうやって死んだら…えっぐ」

死ぬ前提で考えるなよ。

「やりましたよー！トキさん…！」

何を!!？

「心配かけるわね、全く。うちの生徒会長は」

くすくす、いつもどおりだな。

「おにーちゃんやだよ!! レンをおいていかない…で?」

ごめんな、お前まで死んでほしくなかったんだよ。

「まったく、汝が候補とは先が思いやられる」

なんのだ?

『『『やはり我々がついていないと途中で死んでしまっ』』』

まあな。

「ただいま。みんな」

そして一斉にみんなを抱きしめ……いっ？

直前で止まっている。

「ぶはあっ！」

あ、ハクが出てきた。

俺のコートから頭をだして。

ジトつとした視線が全員から注がれる。  
俺はおおきくあとずさった。

そして俺が下がったことよって、ハクの裸体がさらけ出される。

「あ、ごめ」

そして俺はハクを手で隠した。

ふうー危ない危ない。

あぶなく全員に見られるところだった。

「よかったな。ハク見られなくて」

俺は真っ赤な顔のハクに笑顔をみせる。

まったくかわいいやつだなー別に見られなかったんだから真っ赤にならなくてもいいだろ？

先ほどよりジトつとした目で見られている俺。

あれ？ 俺何かした？ してないよ？

全員が目線が移る。

俺の手のある位置へ。

ハクの胸に食い込んでいる手と、下の部分を握っている手。

あれー？

ブンブン

俺は首を横に振ってみた。

ブンブンブンブン

全員が首を横に振る。

「全くご主人さまは積極的ですねー」

何言ってるのアナタは!?

この状況わかってますか?

そう言っただけの妖精の姿に戻るハク。  
もちろん服はいつもどおり。

「トキにゃん。中でなにやってたんやー？ むしろ、ハクにゃんの中で？」

「トキくん。先生は信じていたんですけどねー：私以外にそう言うことはしないって」

「トキ様。なんで私に言ってくれなかつたんですか？」

「トキサーン。私がかんばったのになんんですか？」

「まったくいつもどおりね。今度一緒にお風呂でも入る？」

「おにーちゃん。わたしの方が大きいよ？ 同じことやってみる？」

まったく、好き勝手言いやがって…。

あとレン服を脱ごうとするな。

「「まあ、でも」」

「「「「「「「「「「「「おかえりなさい」」」」」」」」」」」」



ああ、帰ってきたんだな。

「ただいま」

「帰ろうか？ 俺達の家へ」

そう言って、俺達が帰ろうとするど、

「ちょーーっ！と待つてください！ ご主人さま」

そんなことを言いながら、あたりを見回すハク。

「ここらへんに堕ちてるはずなんですよーーー！！？ ご主人さまも探してください」

あー、忘れてた。

「あ、ホラあその影にずぶずぶと……」

「ていつ！……」

パシッ

「ご主人さま何考えてるんですか！？ あれがまた影に入ったら二の舞ですよ！！ 早く収集しちやってください！！！！ はい、コレ

持って」

そう言っつて、俺に漆黒の球体を渡してくる。

「これがあいつだったのかー不思議なもんだな」

陽にかざしてみるが、まったく光を通さなかった。

「トキくん。さっきから何してるんですか？」

「え？ ホラ、コレ」

そう言っつて。

球体を掌の上に乗せ、皆に見せる。

「わー、結構手汚れちゃってますね」

お前はバカか!!？

「どこ見てんだ。この球だよ!」

あれ？　なんか可哀そうな人見るような目で見てくるよ？

「トキにゃん大丈夫かいな？　やっぱり一回呑み込まれたから後遺症やな」

うんうん。とうなずくー同

あれー！ー！ー？

「ご主人さま。他の方には見えませんか？　本になってる状態ならいざしらずこの状態では」



あ、でもなんか力チつときた。  
たしかにこれは俺に足りないものだ、と。  
俺から抜け落ちていたもの。

忘れていた転生前の記憶。

ああ、そうか……本ってそう言うことか。

瞬時に悟った。  
闇の使い方に本の記憶。

『闇・固定 死神の鎌』

俺の周りに死神の鎌が浮かぶ。  
手に取り木に切りつけてみた。

スパッ

『ズドオオオオオン』

スツパリ切れた。

『闇・固定 死神の鎌 20』

空中に20の鎌が現れ、  
木々を切り刻んでゆく。

『闇時空・ブロック 闇世界 加速!』

数本の木を包み込む黒いブロック、  
内部時間を100倍まで加速。

『全解除』

鎌もブロックも霧散した。

ブロックの範囲内の木は腐り、老化していた。

「ふむー。なかなかの使い勝手だな」

と、言って振り返る。

呆然としている一同と目があった。  
え？

「トキにゃん闇つかえたんか？」

アルが聞いてくる。

「それにそれさっきの死神の鎌じゃ？」

あー、これか？ と言って出してみる。

一同がビクつとする。

「あーこれもとも俺の力だったから。」

は？ っを感じた。

「んーだから落ちちゃったんだよね？ 時空以外全部」

少し唸っていたようだが一様にうなずいて。

「「「「「まー、トキ（にゃん）（くん）（さん）（様）だからね  
「「「「」

え？ 何その納得の仕方？ めちゃくちゃ不名誉なんですけど？

「トキにゃんならなんでもありや」

「です。トキくんなら星破壊しても納得できます」

「お前ら人を何だと思ってるんだ？」

「「「「「非常識？」「「「「」

「あつ！ 非常識で思い出したんだけどトキくん用に魔力測定水晶買ったんですよ！！ どこまでも測れるやつ！ あとではかっくてく  
ださいね？」

非常識で思い出すな。

「面倒だな」

まじめんどい。

てか何とかして今すぐ魔力を抑える方法を！！！！

「そんなこと言わなてくださいよー。だってあれ1000万セラも



したんですよ!?!」

なにお前やってんの!?!?」

また貧乏になるだろが!?!」

「お金のことは任せてください。教師の闘技大会でトキくんにかけて一攫千金です。そのために顔だけで生徒会入ったってことにしたんですから」

お前か!?!? あの噂お前だったのか!?!?!?」

「まああとでな。そういえばどうやってアイツ倒したんだ?」

古代魔法っぽい詠唱聞こえたけど。

「それならわたしですー」

と、シャル。

「え? お前いつの間に魔法使えるように?」

「えーつとですねー。私使えないわけじゃなかったんですよ? ただ怖かったんです。昔魔力を暴走させてエルフの里壊滅したら、追いつけられちゃいました……」

てへへ〜とシャル。

なにそれ!? 笑い事じゃないし!

「でもですー。今回、トキさんが死ぬの覚悟で残った時にです。使わないことがバカらしくなったんですー? 唯一私が倒せる相手だ

ったのに使わないでトキさんが死んじゃったらって思うところかっ  
たんです。失敗したらしてから後悔をしようって思ったんです。そ  
れでレンちゃんに頼んで送ってもらったんですよ。本当は私が失敗  
したら危ないから一人で来ようと思ったんです。でも、皆ついてく  
るって言うてくれたんですよ。だから失敗できないなって思っ  
てすー」

ん？　これがまさか。

「私、これからは魔法使おうとおもってますー。まだ危ないことがあ  
るかもしれないんですがトキさんが補助してくれるですー？　使えるの  
に使わないっておかしいです。だからどんどん使おうと思うです。  
私でもあんなキレイな光がうめるんです」

そう言っつて、シャルは微笑んだ。

ああ、三人目が巣立った。

あと一人。

エラが巣立った時に俺は…。

時間・倍率 100倍

俺は時間を引き延ばした。

なあハク

『はい？ なんですか？』

この世界にあるページはあとなんだ？

『幻ですね。微弱ですが私の一部ですのでわかります』

早く見つけようハク

『なぜですか？』

そしてエラが巣立ったたら

『根っこってやつですか？』

ああ。そのときに出よう。

この世界を

『いいんですか？』

俺は時間と空間を司る者だよ？  
すべてを平等に受けいれて育てる者  
そして世界を渡る旅人

『……つらいですね』

ああ。でも俺は集めるよ？  
それで神様になるよ。

『……知っていたんですね？』

いや、さつき闇を受け入れた時に知った

『そうですか。では隠す必要もないですね……。この世の属性ってな  
んだか知ってますか？』

世界の根源だろ？

『そうです。神になくてはならない力。そしてこれが世界を作る要素。火 水 風 地 光 闇 時間 空間 創造 幻惑。まず時間と空間がうまれます。大地が生まれ、そこに空からの光。光の対の闇。創造で生物を置き、幻惑で意思をあたえる。生きるために水が流れ風で水を雨として運ぶ。そして火を使い生物は成長していった。魔法のランクは生物に必要なものの順番なんです。時間 空間 創造 幻惑。時間の流れ、生きていく空間、生物そのものの意思、全てを創り出す創造。これが最上級におかれる理由です。そして“白の本”は時間と空間。すべてを受け入れ成長させるもの。だからすべての魔法が使えるわけです』

そつだ。すべてを受け入れすべてを背負う。成長させ巣立たせる。

『昔話をしましょう。神は数多の世界を作った。そしてずっと見守ってきた。何百億年も何兆年も何京年も。自分たちの子供のような存在の生物が死に。生まれ。死に。生まれ。死に。それをずっと見守ってきた。でも神は壊れてしまった。自分より後に生まれた子供が死んでゆく姿をずっと見せられて。世界に降りたこともあった。仲がよくなった人もいた。でも神は年をとらない。そして友は死んでいく。それを何億回も繰り返してたらどうなるとおもいます？』

壊れるよ。死にたいと思う。

『そうですね。神は普通の人間になった。でもそうしたら神がいなくなってしまう。だから託した。自分の代わりに神になるべき人に。“本”として。すべての力を本にして世界に落とした。それが本。本は何人も人の手に渡った。でもやはり続かない。神で居続けることなんて出来なかった。だから本はページを散らし。試練を与える。いまの地球を管理してる神はいないんですよ。根源として属性はありますが魔法を使える人なんていないでしょ？ それはこの“白の本”が地球の神だったから。あとですね嘘つきました。ご主人さまが最初の試練の候補者です。前の神がいなくなつてから本はページを散らしたんです。おとされる前に。そしてあなたの元に落ちた。ご主人さま。あなたはいま何回目の生だとおもいます？』

わからないけど…病気の時と前のときと今で3回目か？

『はずれです。ご主人さまはいま48万7987回目ですよ。100万年近く死と生を繰り返してます。その大多数が“黒の本”“紫の本”の神に殺されています。あたりまえなんです。まだすべて集まっていないご主人さまがやられちゃうのは。黒は闇。紫は幻惑。

闇はすべてを飲み込む。幻惑はすべての人間と闘わなければいけない。ご主人さまには相性が悪いですね。受け入れてしまいがゆえに侵食の闇。すべての生物を操れる幻惑。ご主人さまは受け入れることは出来ても突き放すことは出来なかつたんですよ。友に泣きながら殺されてゆくご主人さまを何度も見ました。私は思いました。一生この人と契約し続けようと。そして気づいたらこの回数です』

ああ…俺は何回生まれ変わってもかわらないんじゃないか…。

『そうですね。先ほどの出来事がいい例ですよ。自分を捨てて他者を生かす。私はあれで終わりにしようと思いました。これ以上ご主人さまがづらい目にあうのなんて見ていたくないんです。私は48万7986回もみたんですから。』

でもおれは殺せないよ…友を殺せない。

『そうですね。ご主人さまのことは100万年まえから知ってますから。やさしいご主人さまです。ご主人さま。これを最後にしましょう。“白の本”は永遠に主と共に。あなたは今までで一番やさしいご主人さまですよ。主の死は私の死。あなたが死んだら本も消えましょう。あなたが生きられるように最善の道を見つけましょう。でもご主人さま。今回は結構違うんですよ？ 私が実体化し時幻龍が味方についたご主人さまは今回がはじめてです。がんばりましょう。ご主人さま』

ああ、よろしく。俺と最後の旅を始めよう。

『そうですね。最後のご主人さま』

そう言って、ハクは横で微笑んだ。

この時間に入り込んでいるレンが不思議そうな顔をしている。

時間・解除

景色に色が戻る。

俺はそんなに生きてたんだなあ  
やっぱり俺は狂っているな。  
ふふつ。つと笑みを浮かべる

「何笑ってるんですー！！？」 私がまじめな話してるのにですー  
「！」

「あーごめん。聞いてなかった…」

「……はあ、もういいですー」

と、言って怒ってるシャル。

「すまんすまん。それより帰るぞ。眠くってさー」

『Raum・Verbindung Das Haus der  
Familie

《空間・接続 家族の家》

そう言って、俺は空間をつなげた。

「なんですかー？ トキくん？ 家族の家って」

お前らは俺の最初の家族だよ……。

俺は無言で空間を渡る。

「むうー、教えてくださいよ……!!」

背中をぽかぽか叩いてくるハンネ。





白の本よ。

俺は世界を渡ろう。

最後の旅人として。

お前の最後の契約者として。

お前の悲願を果たそう。

星を再誕させよう。

深層・接続 オフライン

ハク。お前には言わなかったけど知っているんだよ。  
闇を受け入れた時にな。

お前の悲願

地球の再誕を願うお前を。

誰がやったかもな。

前の俺は動揺して殺されたんだろ？

だから俺は覚悟しておくよ

最後の契約者として

唯一の知人。

闇の本の契約者 大河原 絶

唯一の理解者。

俺は拒絶しよう

時間と空間を司るものの拒絶

世界に矛盾を作りだす渡り神

光の本の契約者 如月 刻

深層・接続  
オンライン

二三話 レンを探して（前書き）

この話は途中からよまなくても大丈夫です。

刻とハクのちよつとエツチなお風呂物語

18禁ではないよ？

二三話 レンを探して

会議室

「はあ……」

レンはどこにいったんだ……。

「ご主人さまー元気ないですね？」

そう言って、心配そうにハクが声をかけてきた。

「あたりまえだろー？ レンに捨てられた……」

いまは二月。

闇を受け入れてから三か月近く経っている。

毎日のように別々の任務に全員が出動していた。

もちろん俺はレンから離れなかった。

しかし、俺が朝、目を覚ますとレンはいなかった。

いまから一ヶ月くらい前だ……。

新年開けたばかりにレンがいなくなってめちゃくちゃ気分が……。

「あのご主人さまベツタリなレンちゃんがいなくなりますかねー？」

「でも実際いなくなったしなあ……」

どうしていなくなったんだろうなあ……。

バンツ

「トキくん。これこれ。今週の任務もらってきたから全員に仕分けしといて」

そうなのだ。

俺はしばらくレンを探しに行きたいのに仕事が山のようにある。角言う俺も今帰ったばかりである。

「ハンネ〜ちょっとは断ってこいよー…しかもなんで討伐ばっか…。そのせいで毎回旅みたいになってるじゃねーか！ 期間ながい

しきー」

ホント困る。

そのせいで常に人が足りない。

「仕方ないじゃないですか〜SからSSSの任務はだいたいうちのところきますしーそのおかげでお金持ちですよ？ 5億くらいたりましたし〜」

めちやくちや喜んでるハンネだが俺はそれどころじゃない…。

S〜SSSはめちやくちや大変なのだ。

報酬がいいとはいえ数日間家をあけるなんてしょっちゅうだ。

「あ、そうだとキくんこれ魔力測定用の水晶だからちよつとさわってみてください。」

「はいはい」

そう言って、俺は触る。

ハンネの胸を。

『ピー……、コレハAカップ程度デス。セイチヨウシマシヨウ』

これで満足か？

「ち、違いますよ！？　なんで胸なんですか！？　水晶ですよ！！  
そんな硬くないでしょ！？」

まあ、確かに、最初はやわらかい。

途中から肋骨にぶち当たるが。



仕方ないので、俺は手を置く。  
何も起こらない。

「何も怒らないぞ?」

「これはですねーちゃんとした機関に調べてもらうのですよーだからこれでOKです」

「一か月くらいかかるとは思います」

「ふん」

一ヶ月後に俺がいるかはわからんがな。

まあどっちにしろレンがいないと渡れねー…。

「じゃ書類はやっておくから早く機関にでも持って行ってくれ」

「はい。ではいつてきまーす」

そう言って、出て行った。

「あと、トキくん」

扉から顔だけを出し、

「レンちゃんがいなくてそんなに根詰めないでくださいね?」

ボタン

はあー……。

あんな子供にも言われるなんて相当俺余裕ないんだろうなー。

「さーて仕事でもやるかなー！ ハクおまえそっちの書類仕分け頼む」

「はーい」

「でーコレはシャルつと。次はランクS猫の搜索〜?? どんだけ金持ちなんだよ。はい消去つと。つぎ〜ランクSSSドラゴンの巣? 10匹か〜レンがいれば楽なんだけどな〜…レン…」

「レン〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

ガバツ

俺は机に顔を伏せ泣き出した。

「もうご主人さま〜ちゃんとしてくださいよ〜。いつまでうじうじしてるんですか〜? 速く仕事してくださいよ〜! 私ばかりやってるじゃないですか〜! コレはアルさんつと。え〜と次は…アレ?」

「レン〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「ご主人さまご主人さま!!! これ見てください!!! コレですつ!…!」

「そんなものイラン! デリートだ!!! 消去!!! 俺にレンより優先順位が高い任務などない!!!」

「だからこれ見てくださいって!!!」

そう言って、ハクは俺の目の前に紙を突き出してきた。

「え〜なににな〜ランクEX? なんだこれ? バグか?」

「何言ってるんですか!?!? ランクなんてどうでもいいんですよ!?! 内容です!?!」

俺は読んでみる。白龍……? 属性は……。

「白龍で属性が時間 空間……? はっはっはっ! そんなバカな! こんな都合よくレンが〜…いくぞ!?!?!?! ハク!?!」

俺は速攻で行く決意をした。

「よし! 置き手紙をしていこう!?!」

俺は適当に書き、放り捨てる。

「いくぞー!! ハク!! 洋服の調達とご飯の調達だ!! 30秒後に俺の頭に集合だ!!」

「はい!! まかせてください!!」

俺とハクは洋服屋食べ物屋果物などを適当に。または店の品物ぜんぶを荒買いして町をでた。金は腐るほどあるからな。

出口

町を出たが門の前で止まっていた。

「ハクよ。場所がわからん。どこだ？」

まったく内容を覚えていなかった。

「よかったですねー私がいて。もってきましたよー！ えーっと。隣の国からの要請ですね。1000人が一瞬で全滅らしいです。報奨金10億セラ。バウムガルト王国ってところらしいです。」

「まあ1000人程度じゃな。その程度なら俺だって殺せるわ。」

「ですねー」

とか言ってるが、感性がおかしくなっていることに気づいていない。

「だめだ。方向すらわからん」

誰かに聞くか？

「すみませーん。バウムガルド王国ってどっやって行けばいいんですか？」

馬車の馬の世話をしているおっちゃんに聞いてみた。

「馬で五日くらいかかるかねー？」

5日か……、長いな。

でも、仕方ない。

「おっちゃん乗っけてってくれないか？ 1000万セラくらでさ」

そう言っつて、俺は大量の金貨が入った袋を取り出した。

「おわっ！！？ あんちゃんこんなにかい？」

「ああ、どうしても会いたい人がいるんだ」

おがむようにして頼む。

「コレかい？ ええよええよ。そう言っつ奴は好きだからな。金はいらないよ」

小指を立てて、笑っているおっちゃん。

「まじか！？ サンキューおっちゃん。急いであるから出来るだけ早く頼むぜ？」

「まかしときなー！ 俺の馬は世界一だ！！」

そう言っつて、俺達は馬車に乗りこんだ。

4日後、俺達はバウムガルド王国についた。

「サンキューおっちゃん！ あとやっぱコレやるわ。一日早く着いたしな。別に俺金つかわねーから。その程度三日あれば稼げるし」

「いいのかい？ ありがたくもらっておくよ。でも三日で10000万ってどんな仕事してんだあんちゃん！」

そして俺は走りながら声だけで返答した。

「学園のトップやってるよーじゃなー」

そのあと、おっちゃんは呆然としていた。



「ご主人さま……いいんですかー？ あんなポンポン大金あげて」

ハクが不満の声をあげてきた。

ちなみに今は人型サイズだ。年齢も14歳まであげてある。

「ああ、どうせこれで成功すれば10億入るしな。空間属性みせて死体も残らなかつたって言えばいいだろ？ 失敗すれば俺が死ぬから使えない。それに世界わたっちまうしな。衣服と食べ物代残しとけばどうとでもなる。それに レンには金など変えられない」

レンのためなら全財産すら惜しくはない。

「そうですねー、わかりました。それで、いきなり王宮行きますか？」

「そうだなーまずこの任務を受けるって言わないとな。王宮が直接依頼してるんだっけ？」

ゴッ

「ですねー。でも王宮って大変ですよ？ きっと入るの？」

そうなんだよなー……絶対警備兵とか素直に入れてくれないし。

「まあ、その時はその時だ。この国潰して金パクってけばいいだろ？」

「うわー。どこの盗賊ですかそれ？」

バキッ

「失敬な？ 盗賊にそんなこと出来るか？」

「できませんねーっていかさつきからご主人さま……なにしてるんですか？」

「何っってお前をナンパしようとして近づいてきてるやつ気絶させてんだよー！」

そうなのだ。さつきからひっきりなしにくる。

「そうなんですかー。あ、そうですよー恋人の振りしましょう！  
そうすれば来ませんよね？」

そう言っ腕に抱きついてきた。

「にしてもお前…14歳設定だよな？」

「そうですねー。いつもの体から成長したらっという構成です」

人差し指を唇にあてながら、軽く上を向いて口にする。

「なんでおまえ14で胸のカップがEくらいになってるんだ？ デカくなりすぎだろ？」

でかくなりすぎだよこいつ！？

「失敬な！ 詰め物じゃないですよ！！？ ちょっと何疑ってるんですか！！？ 何ですかその目！！？ ホラ触ってください生で！！ 詰め物じゃありません！」

ふにゅふにゅ

「ばか！！？ お前何やってんの！？ こんな恋人じゃなくて変態じゃねーか！？」

めちやくちや 白い目で見られてるじゃねーか！！

「わかりました恋人っぽくすればいいんですね！？」

ちゅーーー

くちゅ…

ぴちゅっ…

「ん————ん————!!!」

バンバンバン

ブハッ

「お前はバカかっ!?!? こんな公衆の場で舌入れるか!?!?」

「なにがですか!?!? 愛し合う恋人同士はやるんですよ!?!?!?」

ダメだ。

こいつは話が通じない。

「あーもうダメだ！　話が進まん！！　とりあえずいくぞー！」

「はい」

そう言いながらも、腕に胸を押しつけてくる。

「でかいなー。わかってたけど。」

「ですねー。あとなんか兵士がこっちみえますよっ、」

「うわー…絶対これややこしいことになるよ。」

近づいてきてるしー！。

「おい！ 貴様ら。王宮になんのようにだ？」

「ああ、これ受けようかなって思って」

そう言っただけの任務用紙をとりだす。

「ランクEXだ？ お前らみたいなガキが遂行出来るわけないだろ？ 速くおうちにでも帰ってママのおっぱいでもしゃぶってる！」

「なっ！！ 何を言ってるんですか！？ ご主人さまは私のおっぱいをしゃぶってるからいいんですよ！！」

俺の手を自分の襟もとから服の内部に入れる。

むじゅ

「お前のほうがバカかっ！！？ 何に怒ってたんだよおまえ！？ なににお前お姉さんキャラになってんの！？ お前身長140程度しかないだろーが！！」

「何を言ってるんですか？ ご主人さま！？ 私はこれでも143くらいはあるですよ！！？ 失礼なことを言わないでください！

「？」

「143でも十分ちっこいだろ!？」

「でさー、ホント受けたいんだけどどうすれば王にあえるんだ?」

「ほう。明日近衛兵の訓練が城の中庭で行われる。そこで全員に勝てたら推薦してやろう! まあ無理だとはおもうがな。この国で一番の精鋭だからな」

「言ったな? もし全員倒しても会わせてもらえなかったら城つぶしてでもはいるから。じゃなー」

そう言っつて俺らはその場を後にした。

「ご主人さま、明日になっっちゃいましたねー。今日はどうします?」  
「うーん。適当に宿にでも泊まるか。実際馬車の上に何日もいたから疲れてはいたんだよな」

馬車って乗り心地最悪。  
背中めっちゃ痛い。

「あと、さつきもそうだがお前胸触らせすぎ!? どれだけ触らせ  
たがりだよ!!」

「だって嬉しいじゃないですか? ずっとちっちゃかったんですか  
らね? いまならご主人さまも動揺してるじゃないですか? ちっ  
ちやいころなんて触った後に「柔らかすぎて坪押しにもならん」  
って言ったんですよ!? 覚えてますか!?!」

あー、全然記憶にないぞ?

「それが今ならやわらかさが正義! って状態ですからね! 今日  
は覚悟しておいてください。あ、高そうな宿屋発見! あそこにし  
ましよう! てかします! ではいつてきまーす」

あれー? 俺一応あいつの主だよな?

どっちかと言うと彼女に振り回されてる彼氏ってイメージだぞ?

そんなことを思いながら俺はハクの後を追った。



「お前の感は当たるな…」

めちゃくちや当たった。

「ですよー？ 結構自慢なんですよー」

「ちげーよ！ わりー意味でだ！！ なんで一泊一人100万もするんだよこー！！？」

「えー？ でもいい部屋ですよー？ ほらこのグラスなんて絶対ひとつ10万くらいー」

そういつてグラスをつつついてギリギリ倒れないくらいで維持する。

「バカっ！！？ お前触るな！！ 用があつたら俺を呼べ！！ 触るとしても俺が安全確認をしてから触れ！！」

「何言ってるんですかーご主人さま。安全確認なんてしないで今日は安全日ですから安心して触りまくっちゃっていいですよ？」

「おまえはアホか！！？ なんでこの会話からそこにつながるんだお前は！！？ あーもついいや。俺は寝る」

そう言って、俺は横になった。

「せつかくいい部屋とったのに……ぐすん」

やっぱり疲れてたんだな……。すぐ寝そうだな。

「ご主人さま不潔くお風呂にも入らないで寝るんですかー？ そう言えばここのお風呂すごい広いらしいですよ？」

広い風呂…。

「すごく疲れが取れるとかくなんか種類もたくさんあって日本でいうスーパー銭湯並みらしいです」

そして俺はお風呂場のほうに歩いて行った。

「あれー？ ご主人さまお風呂には入らないんじゃない？」

「いや、そういえば長旅のせいで風呂はいつてなかったからな。王の前にでるからにはちゃんとしないと」

王なんて一般人程度にしか思っていない人からの言葉だな。

「あ~~~~風呂はいいな。部屋にこんな風呂がついてるなんて高いだけあるな~~~~」

のほほんとしながら目を瞑る。

「ですね~~~~やはり色々なお風呂にはいったほうがいいですね~~~~屋敷のもいいですけどここもなかなか~~~~」

「だ~~~~でさ~~~~おまえなんでここにいるの?」

「全く忘れちゃったんですか? レンを探すためじゃないですか?」

「ちっげーよ! なんで風呂一緒にはいってるのってことだよ!」

「だって~~~~お風呂は部屋にあるからそれ以外ないんですよ~~~~ここしかないじゃないですか?」

「時間ずらせばいいだろ？」

「そんなことしませんよー私とご主人さまの仲じゃないですかー？  
もうお風呂だって100回以上はいつてるじゃないですかー？  
ちっちゃい時でしたかー？」

「はあーもうどうでもいいやー。気持ちいいからどうでもいいー」  
バシャバシャ

「そうですねーただ私にはちょっと深いですねーもうちょっと短  
『ストゥップ！』なんですか？いきなり声上げて？」

「お前何で俺の腰の上乗ってきてんの？」

「だからこれだと私には長す『ダメだ！』なんですかー？さっ  
きから」

「お前は精神年齢5歳でとまってるだろ？あと苦しいから。お前  
のアンバランスMAXな胸で息ができない」

「失礼ですなー私はこれからかなりの痛みを伴うというのに、何で  
そんなひどいことを言うんですか？」

「安心しろ。痛みなんてないからな」

「ご主人さまそんなにうまいんですか？」

「まで。お前はなんで毎回都合のいいように考える！？よし。俺  
は出る」

ガバッ

ゴツッ

「……」

「ご主人さまどうしたんですか？ そんなに私の方をじっとみつめて。そんなにしたいんですか？」

「お前いまおれが頭打つたの見たよな？ お前が押し倒して後頭部思いつきり打って喋れない俺にお前はそんなこと言うのか？」

「大丈夫ですかー？」

ふにゆふにゆ

「お前はそんなことを言いながら俺の上からどかないんだ…、あと掴むな。何かは言わないが掴むな」

「すみませんご主人さま。気分が悪くて立てない上に掴むものかな

いと…」

よし。逃げよう。コイツは頭がおかしい。

ダッ

(俺が走り出す音)

ツルツ

(ハクが放った石鹸が俺の足の裏に入り込みすべった音)

ゴガッ

(俺が大理石の角に頭をぶつけた音)

ぐて〜

(俺は気を失った)

「え？ チャンスですか？ ご主人さま？」

## 二四話 レンの元へ

「アルくん！ 速く仕事してください！！ そんなんじゃ一生おわりませんよ？」

「トキにゃーんかえってきてや~~~~~！！！」

「仕方ないじゃないですか？ トキくんは10億セラの任務受けに行っただからです！ これではうはうはです！！ 更にトキくんの闘技大会に全額かければ最高です！！！」

お金のことしか考えていないハンネだった。

そのころ刻は





「ご主人さま、昨日は激しかったですね…」

ハクは恥ずかしそうに、悶えていた。

「何言ってるんだお前！！ 気を失った後何をしゃがった！！？」

「そんな恥ずかしいこと…ポツ」

「ポツじゃねーだろ！！？ テメーなにしゃがったーーーー！！！」

結構楽しそうだった。

「まあ実際してないですよねー。だって気を失ったらいきなりシユンとしちゃいましたし。触っても啜えてもダメでした。いくらわたしがあつと短『だめーーーー！！』 またそれですかー」

こいつの存在はやばいかもしれん。

話をずらそう。

「とりあえず王のところいくか？ あと俺の上からどけ。どうも寝苦しいとおもったらお前のせいかな！ そしてなぜ俺とお前は裸なんだ！？」

「それはご主人さまがいきなり倒れちゃうからここまで私が運んだんですよー。まったくしつかりしてください」

「違うだろ！？ お前が俺を転ばせて意識失わせたんだろ！！ 記





「……………ぐすん」

俺は涙を流しながらうなだれていた。全裸で

そのそばで勝ち誇ったように胸を張るハク。全裸で

「俺はもうお前とは泊らない」

「なんでですかー！ーあれだけよくしてあげたのに!?!」

「全然よくないだが！！？ お前のせいで俺は寿命が3年縮んだわ！！！」

「安心してください、ご主人さま。ご主人さまは寿命が三年縮もつと100年縮もつと変わりません。不老ですから！」

ああ、俺は一生こいつには口げんかで勝てないだろう…。

「あ？ ホントに来たんだなお前ら？ まあいいや、約束だしな。  
こっちこい」

俺とハクは兵士の後ろについて歩きながら城の中に入った。

「でも、お前らホントにやるつもりなのかー？ 兵士はめっちゃくちゃつよいぞ？」

「あー別にいいよどうせ雑魚ばっかだし。」

「はっはっはっは。俺はお前らのこと好きなんだよ。その年で挑戦するってことはいいことだからな。でも死んでほしくはないんだ。子供が死ぬのを見るほどいやなもんはないぞ？」

こいつもあのとときのデカ男とおなじこと言うんだな。  
嫌いじゃないな。

「ああ、どうしても助けないといけないやつがいてな。その龍のそばにいるかもしれない」

まあ完全に嘘ってわけでもないだろ。

「そうかー、あいつの時間と空間がやつかいでなー気づいたら死んだ。映像用の水晶に残ってたんだけどな。実際何が起こったんだが見えなかったな」

そりゃそうだろう。レンなら一秒でも一年とかに出来るだろう。

「あ、ほらここだここだ。」

そこには、100人くらいの近衛兵がいた。

「すまんなーこいつらがどうしても腕試しがしたいっていうんで連







空間を固形化し、移動しておっさんにぶつけた。

ガンッ

でつかいおっさんは50メートル程横に飛んで、壁に激突して沈黙した。

「はい。終了次全員でいいよね？」

俺はため息をつきながら聞いた。

「あ、ああ……」

「はい。じゃあすぐはじめて。すぐにも出発したいんだから」

「わかった。少年VS近衛兵103人 試合開始！」

『Ich belasteb』

《重ヲ為ス》

空間の質量を500キロにまで増加し、落とす。

ズドオオオオオオオオン

兵士は皆、地面へばりついた。

「はい、終了。じゃあ王のどこ案内してくれる約束だよね？」

「あ、ああ…でも謁見の予約が…」

はあ…、大方勝てると思ってなかったんだろ…。  
だがこれ以上は待てない。

「昨日言ったよね？ 城を破壊してでもはいるって？」

昨日約束したんだから守ってもらおう。

「とりあえずあんたが強さの証明。じゃないとあそこで地面に入ばりついでるやつ殺すよ？」

…実際殺さないけどさ……。

「しかし…」

「めんどいな『Die Dunkelheit beschreiben  
kt alles』《闇は全てを拘束す》」

ジャラジャラジャラジャラ

ガシッ

虚空から現れた漆黒の鎖がおっさんに巻き付く。

馬車の中で考えた俺流、短縮詠唱だ。

とりあえずおっさんを拘束した。

「別に害するわけじゃないからな？ 任務の受託しよっつってだけだ」

「…わかった。ついてこい」

俺とハクは歩き出した闇の首輪付きのおっさんの後ろについていく。

「ここだ。くれぐれも失礼のないようにな？」

「いや、あんたも入るんだよ。証明って言ったじゃん」

バンッ

俺はデカイ扉を蹴り開けた。

「なっ！！？」

おっさんは驚いているが。ホントこれ以上は俺の我慢の限界だ。

「王は誰だ？」

「貴様！！！！ いまは我が謁見中だ！ 兵士共やつを拘束しろ！」

『Acht Punkte der Sterne』

《八点星陣》

「はい。邪魔だからね、俺は王にしか用事ないから。」

謁見中の爺と兵士を空間に閉じ込める。

八点星陣とは、八つの点をつなげ、ブロック上の結界を作りだすことだ。

「はいそこの爺も王の前になくていいからねー邪魔だし」 Beweggung 《移動》

王の前の爺は壁際に空間ごと移動させた。

「なにを!!!?」

後ろのおっさんが俺のあまりにも無礼な態度に声を荒げる。

「で? あんたが王か?」

「いかにも、余がバウムガルド王だ」

うん。立派な身なりだな。金持ちそうだな。

「そちはこのような事をして何が望みだ?」

「はー? あんた勘違いしてるぞ。これだこれだ。」

そう言っつて、例の任務書を見せつける。

「あんたこれアーベルに送ったろ? だからその受諾に来たのに全然通してくれねーからここまで来たんだよ。あーすまん。自己紹介がまだだったな? はいよ学生カード。っつ言っても学生じゃないけどな」

それを受取つて目を見開いている。

「アーベル学園生徒会長!!!? じゃあそちが学園三万人のトップか?!?」

「だから。そうだつて。ついでに魔力は測定不能。属性はそれに書いてある通り全属性。文句はないだろ? ついでにここの城の近衛兵100人程倒したから受けさせてくれないか?」

王は視線をおっさんに移動させる。

「事実です。この少年は一秒ほどで近衛兵103人を行動不能にしました。使われた魔法は多分空間です。そこに記してあることも事実でしょう」

「ふむ。ではそちに受諾してもらおうかの？」

「あーそだ。一ついい？ 俺の魔法使うと跡形も残らないと思うんだ？ 証拠なくなっちゃうけどいい？ もちろん龍がいなくなったかどうか後で調べていいからさ。そうだな……。なんかいらぬもんじゃない？ 消えてもいいようなの」

そう言って、王は高そうなソファアを差し出した。  
もったねー収納しちゃうおと

「こんなふうにね」

『パチンッ』

指を鳴らすとソファアは消えた。

部屋の中にいるやつらが目を見開いている。

「俺、空間魔法が得意だから消えちゃうわけよ。跡形もなく。なん

だったらこの城とか王国とかつぶして証拠見せようか？」

俺はニツコリ笑う。

「い、いや。そちを信じよう。では護衛は何人つけなければならないのじゃ？」

「邪魔だからいらない。場所だけ教えてくれ。大規模魔法使ったら護衛ごと死んじまうだろ？ 終わったら場所に空間ごと繋げるからあんたも見ればいいだろ？ その後にでも。それとも自分の目より兵士を信じると？」

「うむ、わかった。では今から渡す地図に場所は記してある。頼む」

「りょーかい。いくぞーハク」

「はい」

『Raumverbindungs』

《空間接続》

そう言って、俺は街の出口に空間をつなげる。

そして地図を受取。

「じゃあーあとはまかせてくれ。じゃなーー」

「ばいばーい」

空間をくぐる。

「ご主人さま、それにしても嘘八百ですねー」

そう言って、ハクが腕に抱きついてきた。



「頭を使ったって言うてくれよ？ レンも探せて金ももらえる。それにレンの居場所がわからなかったからな。結果的には早く見つかるだろ？」

「今のもあとからの出まかせでしょ？」

「ふっ…バレたか」

ふあさあ

髪をかきあげてみた。

「あのっ！！ 私たちと一緒にお茶しませんか？」

「いま暇なので！！ すっごく！！」

いきなり女性が話しかけてきた…。

「いえいえ。あなた達のような美しい女性には私はつりあいませんよ。それに妹が怒るのでね」

最後にウイंकなんてしてみた。

「はっううう〜」

なぜか真っ赤になったぞ？

ネタなのに。

「妹さん？ お兄ちゃんにあまり迷惑かけちゃだめだよ？」

「また会ったらお茶しましょうね〜」

手を振って去って行った。

「ご主人さま…どれだけ嘘八百ですか…」

「だから機転だつての！！ お前をナンパしてくる男なら半殺しでもいいけど女性は無理だろ？」

「はあ〜〜…まあいいです。はやくレンちゃん迎えに行きましょう」

そうだな。

「でもおかしいですよね？ だってレンちゃんが1000人も人を殺すって」

たしかになー…いや。

アレ？ なんか納得できるぞ？

いつも俺の悪口言ったら消すとかいってなかったか？

「……」

「どうしたんですか？ ご主人さま？」

「あ、ああ。速く行こうか？」

「？」

## 洞窟

「このあたりなんですがね……」

「あの糞王騙したな？ もしいなかったら王都つぶす」

「ご主人さま……私もですが現実逃避はよくないですよ？ どう考えてもあれです」

「アレだよなー……」

入口に立ち入り禁止の看板。

あたりに白い骨が無数に転がっている。

すごい危なそうな洞窟。

入口なんて何メートルあるんだこれ？

「これは洞窟じゃないな。もうアレだ」

「アレですか？」

「ああ、オナホー『バキッ』ゴフウッ！！！！？」

「まだメイデンフィルターが残ってるわたしになんてこというんですか！！？」

「いやいや…お前昨日それ俺で天元突破しようと思っただろ？」

「それくらいダメってことです。はやく。さっさといきますよ！！」

そう言って走って行ってしまった。

「まてまて、絶対危険だから先に行くな」

『Acht Punkte der Sterne』

《八点星陣》

俺は周りに結界を張る。

「ほらなー絶対危険だと思ったんだよ。どっだけ魔物いるんだこころ？」

「ご主人さまさつきから結界にめっちゃくちゃおそいかかっているんですが!? むしろ前が見えません」

『Ich belasteb』

《重ヲ為ス》

空間の質量を5トンまで上げ。  
魔物の上に落とす。

『ドスンッ』

魔物は潰され、黒い血が地面にしみ込む。

「さつきからこれのくり返しですよー全然すすめません」

「しかたないなー…お前俺にだきつけ」

「え…？ 最初から立った状態でやるんですか？ 噂では深くまで入ってくるとかで、私にはきついんじゃないかと……」

「お前何言ってるの！！！？ こんな時に何しようと思ってんの！！？ 倍率あげて魔物が反応する前に突破すんだよボケ！！」

「そついえば天元突破ってなんかいろいろ怖そうですね？ むしろいろいろ壊れそうですね？」

「いらねーこと言ってるじゃねーって！！ あーーもうほら！！」

『Ernt en Sie eine Seele』

《魂よ踊れ》

漆黒の鎌を多数出現させ、  
それが魔物を切り刻む。

「お前がそんなだから抜けられねーだろうが！！ 早くどっかつかめ！！」

そして抱きついてくる。首に。

「お前それで俺にどうしろと？ はあ… たくしゃあねえな」

そう言つて、俺はハクをお姫様だっこした。

「じゃあ行くぞ？ ちゃんとかまってる」

「はい。ご主人さまとなら宇宙の果てまで…！」

「だからいらねーこというんじゃねー！！！！」  
「Die We  
lt in Ewigkeit」 《世界よ永遠に》  
「Raumve  
rbindung」 《空間接続》

時間を10倍まで引き延ばす。

正確には、自分の体感速度を速める。

そして、前方と、後方の空間をつなげた結界を自分に張る。

ド  
ン

地面を蹴り、駆ける。

周りには見えないだろう速度で。

俺はひたすら走る。

敵は俺達を通ったことにすら気付かない。

前方の結界に当たった敵は後ろの結界から出る。

前方と後方の空間をつなげる魔法。

同じように空気も後ろに通す。

俺はひたすら走る。



「ご主人さま。100倍で一時間も走るなんてやりますね。でも外にしてみましたら30秒ちよつとしか走ってないんですよ。つまりご主人さまの走った時間も30秒なんじゃ？」

「お前は何を言っているんだ？ たしかに30秒程度だが、進んだ距離は一時間分だろうか…」

そんな話をしながら俺達はご飯を食べている。

ここまででは敵が来ないようだ。  
てか奥から異様な威圧感が…。

「ハク。なんかめっちゃ強大な力が…」

「ですねー…確証はないんですがーそのー…多分ですねー」

「はっきり言え」

「実際見てからでいいですか？ そしたらわかりますから」

「じゃあ見て来い。そこ曲がってすぐだぞ。敵いないしな。いたとしてもこの異常な威圧感を放っている相手だけだ」

「ご主人さま、怖いんですが？」

顔が青ざめている。

「お前魔力が続く限り再構築できるだろ??」

「あ、そーでした。でもですね？ 怖いんですよ？ 痛いですし」

仕方ない、俺も行くか。

「じゃあねえ、俺も頑張るわ。飯はもういいか？」

「大丈夫です。ゆっくりにしましょうね？ まだ心の準備ができてません」

「俺もだ。でもここにずっととどまるわけにはいかない。がんばろ

うぜっ」

「そうですね。はい。がんばってみます。」

そしてハクは服を抜き始めた。

「おい。お前は何をがんばるんだ？」

「え？ だからこのままの関係にとどまれないってご主人さまが」

「お前バカか！！？ この状態でなんでそうなるんだよ！！」

「だからわたしはまだ心の準備ができないっていったんですよ！」

「どこからそう言う話になったんだおまえ！！？」

「だからー」『ご主人さま、怖いんですが』からです思い出してみてください  
「ください」

「覚えてねーよ。とりあえず覗いてみるぞ？」

「え？ 何を覗くんですか？」

「だからこの威圧感の主だろ！？」

俺達は300メートル程進み。

岩から頭をひよこつと出し、右を覗いてみた。

そして頭を戻し、

そのまま後ろに、

ゆっくりと下がって行く。

300メートルほど戻った。

先ほどの場所だ。

「……………」

「ご主人さま。どう思いました？」

「あれは……レンだった」

「ですね。たしかにレンさんです。」

だが大きさが違った。

鱗とかも。

見た目がすべて違った。

エラの白龍などあのレンにくらべたらゴミ屑みたいなもんだ。

大きさだけなら50メートル程度だ。

十分でかいが。

なんだろう。

威圧感もそうなんだけどあんなの絶対攻撃通らない。

なにあの鱗？

ロンズーライト（ダイヤモンドよりも硬い鉱物）で出来てるんですかアレ？

めっちゃくちゃキレイだったぞ。

「ハク。あの鱗って攻撃通ると思うか？」

「無理ですね」

「ロンズーライトとどっちが固い？」

「あの鱗の方が固いですね」

「そんなにか？」

「そもそもロンズーライトって隕石の衝突によって生まれる程度です。所詮一つの宇宙です。時幻龍っていうのはすべての宇宙につながっている狭間で生きているんですよ？ 比べるまでもありません」

「どうしよう……。」

「てかデカくないか？ 50メートルくらいあるぞ？ 最初何かの結晶の岩かと思った」

「あれでもまだ成獣にはとどきませんよ。大きなものと星一周するとか聞きますから」

「……」

「どうしよう……。」

「そう言えば見てから確証を得るとか言ってたけどなんなんだ？」

「それがですね……」

「早く言え」

「ひじょーに言わずらいのですが……」



「幻惑のページにとりつかれてますね」



## 二五話 幻惑のページ

「じゃ、幻惑の属性だけになってるのか？ 闇の時みたいに」

「いえ。違いますね。時幻龍自体が神の能力に近いものを持っているので今回はちょっと違います」

「どつ言つぷつにだ？」

「時間と空間の神の力+幻惑の神の力って感じに再構成されている  
ちうです」

「しまじっ？」

「最強の生物の誕生です」

「ご主人さま！今回はかりは倒せませんよ？ レンちゃんはもと  
もとご主人さまとラインつないでますし幻惑もご主人さまの力です  
よ？ 攻撃なんて通るはずないんですよ」

「じゃあ向こうからも通らないだろ？」

「ご主人さま！攻撃は通らなくても殺されちゃうんですよ？ フ  
ィールドが特にやばいです。天井に攻撃があたったらそれで終わり  
ですよ？ 向こうは岩はおるか隕石が落ちてきても問題ないんです  
がご主人さまは終わりです」

確かにペしゃんこだ。

「なあ、俺って死ななければ体とか再構成出来たりしない？」

「？ 出来ますよ？ ご主人さまは魔力の塊みたいなもんです。しかも無尽蔵の。再構成なんて余裕です」

「うわー俺そこまで人間やめてたのかー…」

「何言ってるんですか？ 今更です。ご主人さまは神ですよ？ 候補ですが」

わかってたけどさ……。少し落ち込む。

「でもご主人さまがレンさんを倒す前に殺されちゃいますよ？」

「?? お前何言ってるんだ？ 俺がレンを攻撃するわけないだろ？」  
ポカーンとしてるハク。

「何言ってるんだはご主人さまですよ!!？ 正気ですか!？ あれはレンさんであってレンさんではないんですよ!!？ 普通に攻撃してきます!」

「だろうな。でも俺は攻撃なんて出来ないぞ。出来るわけないだろ？ あんなになってもレンだぞ」

「はー…これだからご主人さまは…わかりました。私もいきます。」

時計の姿にでもなってますから。どうせご主人さまが死んだら私も消えますし。どこにいようと変わりません」

「ありがとな。まだ俺に付き合ってくれて」

「だから今更ですつて。最後のご主人さまですからね。結局私のメイデンフィルターは永久保存版ですか？ 生き残ったら次元突破してくださいね」

「おい、おまえレベル上がってるじゃねーか！！？ どっちにしろダメだ。そんな18禁な関係になりたくない」

「安心してください。ご主人さまが創造のページを手に入れたらわたしも体を手に入れられますので。そしたら毎日ミルク味です。しかも、再構成で、毎回処女です」

「お前自分で言ってること意味わかってるか？ 俺にははっきり言っつてニュアンスでしか伝わってこないぞ？」

「安心してください。私も適当に言ってますので」

「さて。最後まで普通に和ませてくれてありがとな」

「いえいえ。これも私のつとめですので。でわ」

「  
」  
行くか  
(  
)きま  
し  
しょう  
(  
)「  
」  
「  
」

『ご主人さまここを曲がったら後戻りなんて出来ませんからね？』

ホント今更だな。

『確率論で行くと9割強で死にますよ？』

いいよ。もう。確率なんて関係ないしな。

『ですね。生きるか死ぬかの五分五分です。ファイファイファイテ  
イーともいいます。更には1 on 1ともいいます。』

ちなみに最後のはなんか似てるけど違うからな？ 1VS1と同  
列だ。

『どつでもいいです』

お前が言ったんだろ！？ さて、再構築までの時間は？

『少しかかりますね。戦闘中には不可能です』

じゃあ、一回傷を負ったらそのままか。

『ですね。てか長ったらしいので早く死に行きましょー！』

はあ…死ぬの前提かよ…。

そう言っつて、俺は一步前に出た。



『なに小説調にしてるんですか？ そんなこと口にしないで  
すよ』

おまえプライバシー0すぎ！？ 俺いま前に言おうとしてない  
からね？

自分の中で語ってたのに！！？

直後、レンと目が合った。

『グオオオオオオ』

空気がびりびりと振動する。

周りの岩までもが悲鳴をあげる。

ああ。これが王だ。

世界の頂点の生物だ。

俺は真っすぐに歩いていく。

魔法なんていらない。

ただまっすぐに。

「  
レ」

レンの目がこちらを見つける。

『ガアアアア』

レンが叫ぶ。

『グオアアアア』

30メートル強の、空間の塊が大量に俺に向かって飛翔する。

はは、これは怖いな

大会でレンと当たった使い魔はすごいな。

『ガンガンガンガンガンガンガンガンガン』

着弾。

俺は宙を飛んでいた。

ああ…やってしまった…。

あのレンに俺を攻撃させてしまった。

きつと泣くだろっな？

悪口を言われただけでも消そうとするくらいだ。

自分で攻撃させてしまった。

ガン

ゴッ

ズザーーーーー

なんて情けない主だるうかレンよ？

ごめんな。

お前が泣くのがわかってて、

あたってしまった。

「…………ご主人さま…腕が…………」

言うなハク。

こんなものレンに比べたら大したことない。

ゴッ

俺の目の前に右腕が落ちてきた。



「レン」

俺はレンの目を見つめ、また歩き出す。

「めんなレン。」

『ガアアアア』

「 レン帰るっ? 」

レンの体がピクっとこわく。

ガガガガガガガガガ

大きな岩が俺に向かって飛んでくる

パライイン

ガゴッ

これが幻惑か…、

意思のないものにも意思をもたせる。

宙を舞う俺に、更に無数の石が飛んでくる…。

『ゴガッガッガッガゴッ』

『ご主人さまッ！！！！ もう無理です  
ださいっ！！！！』

自分の体を見てく

言われるまでもないよ、ハク

お腹が熱い……な。

自分の体だからね……？

ゴン

ドサ

俺の両足が落ちてきた。

ハハ、でもさすがだねハク

これでまだ意識を失わずに生きてるとは。

お前の強化のおかげかな？

「 レン一緒に帰らないか？」

レンの眼だけを見つめ、前へ進む。

残った左腕で前へ

少しでもレンの近くへ

だってそうだろ？ アレは

いつものレンだから

体を引きずり前へ

レンの元へ

『ギャオアアア』

5メートル程の空間の塊を数個俺に吐きだされた。

『ガンガツゴガツガガ』

俺の周囲にすべてが落下する。

当たらないよ？ レン

最初より弱くなってるね。

疲れたのかな？

前へ前へ前へ

本当にごめんな

レン



かえ…かえ…かえ…

レンの元へ

あと10メートル

前へ…

レンが泣く

せせこしにレンが

俺のせいだ……

「ない？」

「レン！ レンッ！」

また

一緒にくらし

『グアアアアアッア』

「ごめんな？ レン 攻撃させちゃって 帰るっ？」

俺は片方しかない腕を思いっきりレンに伸ばした。

ピチャ

あ……ごめん レン

レンのキレイな白い肌に真赤な血がついちゃった……

あんまり感覚なかったから……

飛び散るほど血がついてるなんて……ね？

いま拭いてあげるから……。

でもどうしよう？

血だらけで拭けないや……

レンの肌を血が伝う

『ガアアア……ア……ア』

あ……血がレンの口……

汚い……よ？

パ  
リ  
イ  
イ  
イ  
ン

あ、まずい……

いま戻ってきちゃダメだよレン。

『……あ……ああ……おに……いちちゃん……？』

あー……血、粘膜接触……

血の……契約……？

いま戻っちゃ……きつとレノは泣いちゃっから……

『レン……………が？……………おにいちゃんを……………？』

ああ……………俺を見てる……………レンが、

きっとレンはかじりかぶ……………。

氣<sub>レ</sub>じいぢぢう



『ああああああああああああああああああああ』

レンの絶叫が洞窟にこだまする。

ああ……………泣かしちゃったな                      レン。

ああ……………レンが泣いてる。

いかなきゃ、前へ

foNo

foNofoNo

前へ前へ。

レンの元へ。

१०२०१०२०

१०२०

१०२०

あれ？

コジ  
ッ

おん

「わは？」

レン？

レン

お帰り

『おにいちゃん……えっぐ……レンは……レンは……ぐっ』

「レン？

ただいまは？」

『おにーちゃん……えっぐ……ただいま……「ごめんなさい……  
すぐ……「ごめんなさい」』

.....  
。レンが泣いている.....抱きしめないと.....さっさと帰るわ.....

あれ？

レン？

「ジュン」

「レン」

「おいで？」

「ごめんね、みえないんだ」

スリッ

ふと、顔になりかが触れた。



ああ。これがレンだ。

『おにいちゃん……ぐす……おにいちゃん』

「泣かないで？」

レン

急速に意識が暗くなる。

あ

もう無理かな？

最後に抜かないと……。

『 Bewahren Sie Geliebte  
mein Kind  
』

《愛しい我が子を、救い給え》

ページが俺の中に戻った気がした。

よくわからないけど

おやすみ……レン

二五話 幻惑のページ（後書き）

なんかしょぼいことになった

二六話 学園への帰還

「ん……あ？」

……手 あるし

あーレン……レン!?

バツ

座ったままあたりをきよろきよろ見渡して見る、

ああ……レン

……夢じゃなかった

レンは横で寝ていた。

「レン……帰ろうか？」

泣きはらした顔のレンの頬を撫でてやる。

レンは人間の姿になっていた。

幻惑は回収できたんだなあ。

「ふえ……あ……」

ゆっくりと金色に輝く瞳をひらく。

レンの瞳からどどんと涙が溢れてくる。

そして、逃げようと走りだす。

ガシッ

その手を俺は掴む。

もう離さないように。

「おにいちゃん…ひぐ……はなして。えっぐ…消すから。…わたし消すから。ごめんなさい」

ぎゅっ

「ダメだよ？ レン。 離さない。一緒に帰るんだから。 怒ってないから。 レンが帰ってきてくれたらから」

ああ…レンが腕の中でぼろぼろ涙を流してる。



そうだな…。

「レンはずっとそばに居てくれたのか？」

「だって……おにーちゃん、すっごい痛がって叫び続けてたから…心配で…それから消えようかかって……」

まったく、なんでそんな消える消えるって…ん？

「ハク？　まて！？　俺はなんで痛くて叫び続けてたんだ？」

あれ？　一か月寝て再構築してたんじゃないのか？

「ご主人さまは多分数百回くらい起きては気を失う。を繰り返してましたねー再構築の激痛で」

「再構築ってパアアアアって感じでもどるんじゃないのか？」

「はあ……ご主人さま、何を夢物語みたいなことを言っているんですか？　断線された筋肉の線維や血管、骨、神経などが血を流しながらミミズのようにのたうちまわって徐々に生えてくるような感じですね。線維が一本一本意思を持ったかのように踊ってました。たぶんあれを撮った映像があったらほんどの人が嘔吐しますねー。死体のほうがまだましですよー？　すっごいグロテスクです。痛みは神経なども再生されるのでそのときですねー」

あ、まったく想像しちゃう。

そんな気持ち悪いもん見たくない。



「スマン。ハク。お前がいつも自分は死んでもまた戻れるとか軽く言ってたから楽なのかと」

まじ、ごめん。

「いえ、ご主人さまだけですよ？ だって私は純粹に魔力で出来ますから。ご主人さまは肉体も持っているじゃないですか？」

絶対謝らないぞ！！！！

「まあいいです。抱きしめてください」

そう言っつて、抱きついてくる。

右側にレン、左側にハク。

これが両手に花ってことか？

「？」

「わたしだっつてずっと心配してたんですよ？ てか死んだと思っつてましたよ。 レンちゃんが時間とめなかつたら死んでましたね」

「てかそれだと俺もレンの時間に入りこんじゃうんじゃないのか？」

だって、ラインつながってるし。

「あーあれはですね。ご主人さまが攻撃だと認識しなければ大丈夫なんですよ。だから寝込みにならレンちゃんでもご主人さま殺せませす」

「むうーハクちゃんレン、おにーちゃんにそんなことしないよ？」

「たてですよ。ちなみに寝込み襲つてもご主人さまは起きますよ？ 前に裸にしようとしたら起きましたから」

おい、そんなことされた記憶ないぞ？

「まあ…よくないけどいいや。レンも帰って来たし。で、レンは戻ったのか？」

「そうですねー。年齢は変わらないので人の姿は変わりません。ただ再構成されちゃったんで、龍になった姿と幻惑の魔法が追加されちゃいましたね。本当はページが入りこんじゃうと魔力が足りないのでページが代用し、抜かれちゃうと死んじゃうんですが。レンちゃんはもともと魔力が無尽蔵なので追加されただけなんですよ」

ならあのでっかいのなのか…、

普通に主人より強いぞ？

「血の契約のラインとページと完全に同化してなかったたのであの姿でも意識が残ってたんですね。神に意識をのつとられても意識があるってすごいことですよ？」

まあレンだしなー…納得できるわ。

「まっくらいいところにいいたの。そしたらおにーちゃんの声が聞こえたの。ずっと走ってたけど全然声においつけなくて…でも急にはああああああって明るくなって起きたらお兄ちゃん血だらけだった。レンがやっちゃんだなんて……」

ああ、俺の声はちゃんとレンに届いていたんだな…。

「あらためておかえり。レン」

「ただいま。おにーちゃん」

レンは満面の笑みで言ってくれた。

「じゃーとりあえず報酬でもふんだくってくるか？」

「ご主人さまはハンネちゃんのこと言えませんね。金の亡者です」

「いやいや。もらえるものはもらっておくよ。まあでも渡るときには置いてっちゃうけどな。それにもうすぐだし」

ああ、俺はもうすぐこの世界を去ろう。

「ですね。この世界にはもうページはありませんので。お好きな時に旅立ちましょう」

「じゃーいくぞー。この床一面血が乾いた在り様を見ればどれだけ激しかったかわかるだろ。上乘せしてもらおう」

「実際はほとんど再構築した時に、ご主人さまから出たものなんですがね。あ、そだご主人さまに渡すものがあつたんです」

「ん？ なんかくれのか？ 復活祝い？」

「はいコレです。一応乾かないように布にくるんでレンちゃんに時間を止めてもらってます」

そういつて布を手渡してきた。重いしデカイなんかの武器か？

とりあえず俺は布を広げてみた。

「おい。お前はなにを考えて俺にこれを渡したんだ？」

「いえ、記念になるかなーっと。それ持っていればもう無理しないでしよう?。」

袋の中からは生々しい俺の腕と両足が転がり出てきた。時間止めてたらしくまだ血が渴いていない。

「はい消去」

パチン

「あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ なにするんですか!? それだけで普通の魔法使い何億人分の魔力の塊だと思ってるんですか!?!?!? ご主人さまの体は生きる魔力塊なんですからね!? すっごい高く売れましたよそれ?。」

「アホかつ!?!? お前誰が好き好んで自分の切断された体持って喜ぶんだ!?!? アホだとは思ってたがここまでかつ!?!? もうッホントアホの子!?!?。」

そうやって俺はしくしくと泣きつなだれていた。

「とりあえずこのままもどるぞー! レンもな」

「うん いくよ。おにーちゃん」

元気になったようだな。  
やっぱり攻撃させちゃったのはまずったよな！。

「の、前にと、『Anorganische Kontrolle』  
『《無機制御》』」

俺は、幻惑で無機物の岩を制御し、崩壊させた。

『ゴガガララララッ』

「よし、準備完了っつと」

「ご主人さま…戦闘が激しかったように見せかけるために壁をくずすなんて」

だからいいじゃねーか。

これだけでふんだくれるんだから

そして、俺は王室へと空間を繋いだ。



「よっ！ 王様倒してきたぞ？」

その場には王様と来客中の爺（前とは違つ）と兵隊がいた。

「そ、そちは生きていたのか…よく一か月も……」

いきなり現れた三人に全員驚いている。

にしてもひどいな。

死んだと思つてるとは。

「だから生きてたからここにいるんだろ？ ぴんぴんしてるじゃん？ ただ一か月もずっと激しい戦いしてたから死にそうに疲れてる。だから金上乘せしろ。てか現場みればどれだけ大変かわかるからな。兵士つれてきてくれ。龍の洞窟内の居場所知ってるやつな。いた場所に直接つなげるから」

「わ、わかった。すぐに準備しよう」

そう言つて、兵士につれてくるように指示をとばしている。

「小僧！ いまはワシが謁見中じゃぞ？ あとから来て何を言つて  
いるのじゃ！！」

またこの手のやつかー。ホントこつゆーやつ嫌い。

パチンッ



その場から爺は消え去った。

「こ、殺したのか？ そちは」

王が慌てて訪ねてくるが。

「いや。丁重に王都の出口まで移動しておいた」

「ふ、ふむ」

んー、にしても幻惑の使い方知ったから早く帰って試したいな！。

『ドタドタドバタツドタ』

そのとき、30名くらいの兵士が部屋になだれ込んできた。

「龍の場所を確認した30名をつれてまいりましたっ！！」

「ふむ。こ苦勞」

「『じゃ、つなげるわー』 Raumverbindung 『空間接  
続』」

いきなり現れた空間の切れ目に、驚きの声上がる。

「じゃ、入ってみてくれ」

「あ、ああ」

そう言って、兵士30人と王 俺とレンとハクが中に入る。

「こ、これは……!!?」

そこには地面一面に血が乾き。

壁にも血がとびちっており。

大岩がごろごろと崩れ。

壁が崩壊している洞窟の最奥の姿があった。

「わかるか？ この壮絶さが。それだけ強かったんだ」

まあ実際は魔法も何も使っていないけどな。

偽造のため以外。

血なんて全部俺のだし!!

「バウムガルド王!! たしかにここは龍がいた場所であります!  
」!

そう言って、兵士は敬礼した。

「ふむ…そうか…たしかにいないようだ…では、二億上乗せでいいじゃろうか?」

「5憶だ。魔法もほとんど通らなかったからな。こんな危険な任務だしかたない。」

「いや……でもそれは」

『Anorganische Kontrolle』

《無機制御》

『ガゴッゴゴッ』

俺は幻惑の魔法で周りが見えないほどに、岩を空中に浮遊させた。

「あーなんか俺つかれてコントロールみすりそうだなあ……」

なんて、のたまってみた。

「わ、わかった!! 15憶セラ支払おう。そ、それでどうだ!？」

「ありがとー、王さま。」

ニコリと笑った。

ハクとレン以外は、まるで悪魔のような笑顔だとおもった。



「ふんぷん」

今現在、俺は鼻歌を歌っている。

「ご主人さまご機嫌ですね」

「そりゃそつだ。やっぱり金はあるだけいい。まあどうせ「ミニ」になるけどな」

「ですねーお金は大事ですからねー」

「明日からは毎日最高級の食事にでもするかー。ハクモレンも最後くらいはいいものいっぱい食べようぜー。ついでに店がつぶれるくらいに頼んで収納しておこう。金は腐るほどあるしなー。使わないともったいない」

「そうですねー」

『はい』

ちなみに今は50メートルくらいになったレンの上に乗り、空を飛んでいた。

別に空間をつなげることも出来たが龍の上に乗るっていう好奇心に勝てなかったのだ。

「にしてもすごいなー、それに喋れるようになってるし。」

「ですねー。でもいいんじゃないですか？ 普段は小さいですし。」

味方だったら頼もしいですし。敵対したら死にますが」

うん。あれは死ぬ。

攻撃が通っても死ぬな。

絶対傷つかないもんこの鱗。

「すごい鱗だよなこれ。宝石みたいだぞなんか？ 光輝いてるし」

俺は、座っている鱗をかるく叩きながら言った。

「そうですねー、この鱗も一枚売れば数億くらいになりますよ？  
世界に存在しない物質ですし。まあ、とろうと思っても龍自身が  
自分で抜かないと抜き取れませんかね」

「おにーちゃん鱗いる？ 抜こうか？」

話を聞いていたレンがそんな事を言ってくる。

「いやいや、こんなキレイな鱗とったらダメだぞレン。もったいな  
い」

『すぐはえてくるんだけどなー』

ダメだ。一部でも抜けたら見栄えが悪くなるからな。うん  
人間に戻った時に円形脱毛症にでもなったら困るし。

『おにーちゃん。みえてきたよー』

「OK」 werden Sie nicht wahr」 《視認は

叶わぬ《『Sache nichts er, der bloc  
kier te』《阻むもの無かれ》」

幻惑で不可視状態にし、学園の上空の結界を幻惑+空間で無効化する。

「じゃ、レンそのまま突っ込んで空いてる場所にも降りてくれ」

「はい」

結局レンが下りられる広さの場所がなかったので、森の中に着地し、空間をつなげた。



「トキにや〜ん〜ん!!! おかえりや〜これですと仕事がへるんねんな〜」

会議室に入ると、いきなりアルが抱きついてきて、感動で涙を流している。

仕事が減ることで感動していた。

「あ、レンちゃんおかえり〜」

ハンネがレンに離しかけた。

「ただいま〜ハンネちゃん〜」

レンも嬉しそうだ。

まるで子供同士だが。

「それでトキく〜んどうでした〜? 一か月もいませんでしたが」

「んーそうだなー。ハッキリ言うと“漆黒の死神”の時よりきつかった。相手が時間と空間と幻惑の属性の“黒い龍”でさ。結構やばかったな。レンはそいつにつかまってたから俺がいったんだ」

レンのことは絶対に言えないな。

「最強生物ですねー…よく無事にかえってきてくれましたねー。幻惑なんて持つてる龍もいるんですねー」

実際一度死んだようなもんだ。

「って言うっても、闇と同じで俺の幻惑の力拾ってただけだった。取り戻したぞ。『Sache nichtser, der blöckier te』《無機制御》こんなふうに」

バラバラだった紙がキレイに積み上げられてゆき。

ほこりやゴミがゴミ箱に移動する。

机やすい。本などもキレイに並べられてゆく。

アルとハンネは驚き眼を丸くしていた。

「すごいですねー！！ 幻惑ってお掃除の魔法だったんですねー 便利です！！」

実際は意思を与える魔法なんだがな。

俺が指定しない限り絶対遵守の力だが。

人とかも操れちゃうからホント性質が悪い魔法だ。

「まあそんなようなもんだ。ところで、他のやつらは？」

俺は周りを見回してみるが、二人しかいない。

「別の任務いつてますよー？ 明日にはみんな帰ってきますね」

「そっか。あ、そだった。ちょっとメイド数人呼んでくれないか？」

「いいですよー？」

そう言っつて、ハンネはメイドを5人ほどつれてきた。

「お、アンネ。ひさびさだなー」

「はいお久しぶりですトキ様、それでわたしたちに何かご用でしょうか？」

うん。小首をかしげるしぐさがかわいいな。

「これ生徒会の金庫にでもいれておいてくれ」

ジャラ

そうやって、俺は空間から金貨がいつぱいつまった大きな木の箱をとりだした。

「こ、これはどうしたんですか？ トキ様」

めちやくちや驚いている。

「今回の任務の報酬10億セラ+ボーナス5億セラで金貨1万5000枚だ」

ちなみに、金貨一枚10万セラだ。

「大好きですっ！！ 結婚してください！！」

ハンネが飛びついてきた。

「トキさんと結婚すれば一生安泰です」

「ハンネ…おまえどんだけ打算的なんだよ…」

「失礼ですね？ 私男を見る眼だけはあるんです」

おまえが見てるのは金だけだろ！？

「ハンネさーん、ご主人さまを狙うとライバルがめちやくちや多いですよ？ レンちゃんも最近立候補してますし」

と、ハク。

ってかいつの間にレンが!?

レンは俺の腕にだきついてハンネを睨んでいる。

ああ、こいつは俺を狙ってきた奴を片っぱしから消してゆきそう  
だ。

「お取り込み中のところ失礼します。では、たしかに金庫にいれて  
おきますね。だいたいこれで生徒会資金は30億程度になりました。

」

と、言つてメイドさんたちは重そうに木箱を持って行つた。

「いつのまにそんなたまつたんだ？ 生徒会が出来てまだ半年くら  
いだろ？ なんで全員が一生遊んで暮らせそうな金額になつてんだ」

おかしいだろ？

「そうですねー6人がフルで個別にSランク以上こなしてますから  
ねー。一回で数千万〜1憶くらい稼いでますし。休みなんて一回も  
とつてないんじゃないですか？ 各国の高ランクの任務ねこそぎ私  
たちが処理してますからね。噂が噂を呼んでどんどん任務も増えて  
ますし。今回トキくんがE×ランクなんてクリアしちゃいましたか  
らさらに増えるでしょうね」

さも嬉しそうに言いきつた。

「お前、俺達を殺す気か？ これ以上増えたらお前にも仕事まわす  
から」

うん、絶対回す。

「いやですよー！！ 私じゃ死んじゃいますよー！！ 私これでも魔力結構ひくいんですからね！！？ トキくんになら指一本でポイされちゃいます！」

「はいはい、だったら断ってきてね！。知名度なんていらん。」

「知名度は大事なんですけどねー」

「闘技大会の倍率下がるぞ？」

ピクツッとハンネの耳が動く。

「任務断ってきますねー」

「はいはい。いってらっしゃい」

バタン

ハンネは部屋を出て行った。

パタン

「そうでした」

ハンネが戻ってきた。





「明日高等院に生徒会全員で行くことになってますからね？」

パタン

## 二七話 生徒会への挑戦状

「なあ、俺らは何で今ここにいるんだ？」

現在、時刻13時半。

場所は、よくわからない商店街。

「知らないわよ？ だってどこかわからないし」

「そうですー、ごはんおいしかったですー」

とりあえずシャルは黙れ。

「結局飯たべに出かけたって感じだぞこれ？」

「でもおいしかったわ。」

「そりゃそうだろ。全員で一食2000マンもかけたら。」

ちなみにこれは、後で食べるように収納したものも含めてだ。

「トキにゃーん。誰かに道きかんの？ もう約束から二時間半遅れてる状態やで？」

約束の時間11時。

「わかったちよつと聞いてくる。あ、ちよつとそこのひとすみませーん」

現在時刻 14時

「なんでトキはお茶してくるのよ？」

「いや、だってナンパだとおもわれてつれていかれた」

「トキ様は美形ですからねー？ そんな話しかけ方したらつれていかれちゃいますよ？」

ディアも十分美人なんだがな。

「でも場所はわかったぞ？ 第3地区らしいぞ」

「」「」「」

「トキここがどこだかしってる？」

「34地区」

「つまり目的地は？」

「ここから正反対」

エラの顔がみるみる般若のように。

「なんでこっちほうめんにきたのよ!!!??」

は!?! 何言っちゃんでんの? コイツ

「いやいや!!?!? お前がレストラン行きたいって言ったからこっちきたんだろが!!!」

「いいわ。許してあげる。たまには失敗もあるわよね」

離し通じねー!!!?!?

プライド高いとこなんて全然かわらねー!!!?!

「はあ……まあいいや。あそこなら言ったことあるからつなげられるし」

『Raumverbindung』《空間接続》

そして一行は空間を渡る。

現在時刻 14時半

「すいません。生徒会の視察で訪れたんですがー」

受付のお姉さんに聞いてみる。

「あ、はい。聞いておりますよ。でも11時にくるって聞いていたんですが？」

もつともだ。

「すいません。コイツがナンパしていて遅くなってしまっ

そう言っつて、俺はアルを突き出す

「ちょ、ちょっとトキにゃん!!?」

ジトつとした目をアルに向けているお姉さん。

「そうですかー、ではこちらへ……………女の敵(ボソツ)

最後に何か呟いていたが笑顔で言ってきた。

「すごいですねーここ。教室とかは最低限しかないですけど、  
実践用の施設がたくさんありますね」

めちやくちやたくさんある。

広さ的には高等部2年の5倍は広い。

「そうですねー。高等院は上位の位の人々を育てる場所なので

はー、どこにいても差別はあるんだな。

つまり金持のエリートしか入れない学校ってことだろう。

「あ、ここです。高等院代表教官がおまちしております。」

コンコン

「失礼します。生徒会役員数名をおつれしました」

『はいね』

うわーなんかエラそうな声が聞こえた。

そして生徒会＋レンとハク（生徒会制服特注品を着ている）は中に入る。

「こんにちは。優秀な生徒会諸君。座りたまえ」

ああ、こいつとは生理的に合わないな俺。

いちいち優秀とかつけなくていいから。

しかも、なんだその男爵ヒゲ！！ 本物か！！？

そんな事を思いながら、俺達7人はふかふかの黒い皮のイスに座った。

目の前にいるのはスラっとした紳士っぽいやつだ。  
髪の毛が油でテカテカしている。



「はて？ 生徒会とは5人ではないのかい？」

俺達を見回しながらそんな事を言いだした。

「二人は俺の使い魔と魔道具です。今は人間の形体に変化させています」

俺は二人を見ながら答えた。

「そうか。さすがに生徒会長ともなると。常識通りのような使い魔や魔道具ではないのかね」

あーいちいち話しがだるいぞ。

そもそも俺は普段言葉少なくすむように言葉づかいを荒くしているのだ。

なんでこいつはそれを逆に伸ばすような言い方してくるんだ。

「さて、では早速我々の代表と闘ってもらえるかね？」

は？ 何言っちゃんのコイツ。

「すみません？ 何を言ってるんですか？」

「君たちは今日は高等院の視察におとずれたのだよね？ ならば、高等院でいちばん優秀な者たちと闘うのが一番手っ取り早いと思うのだよ」

まあ、実際まとは得ている。

コイツに言われるとムカツクが。

「どうかね？ 一応私にとっては最高傑作の生徒たちだからね。はつきり言うとうたしはうちの生徒を生徒会にしてほしいのだよ。君たち16、17歳の少年少女よりね。なにしろ君たちは地位的には学園長の次の地位だからね。私より高いのだよ。トップは強さを証明しなければならぬのではないかい？ だからこの学校の院生会と闘ってほしいのだよ。院生会とはこの学校の生徒会のようなものだ。学園で一番優秀な生徒というところだね。君たち生徒会は学園都市すべてのトップの人間だろう？ 学校程度の生徒代表ならば簡単に勝てるのではないかい？」

「はあ…コイツうざすぎる。」

生徒を物みたいに扱うのもそうだけど、つまりコイツは生徒会に不満なんだな。この学校の方が優秀だと言いたいのか。

「てかレン！！ お前怒りすぎ！！？ 壊れる！！」

「そんな力放出したら地区ごと壊れる！！！！」

にしても、レンは帰ってきてから特に俺にべったりだしな…。力もめっちゃくちゃあがってるし。

「失礼ですが、つまり。俺達が負ければ生徒会を交代しろと？」

「ふむ。そう聞こえてしまったのかい？」

「そう言いながら、ニヤリと笑っている。」

「そうだね。交替、あるい

生徒会を解散してもらいたい」

つまりコイツは俺から家族を奪つと？

ブチッ

あ、俺の中の何かが切れた。

「上等だ雑魚が、貴様らなどに負ける？ はっ！ 笑いすぎて内臓が飛び散るわ！！ あとお前にも出てもらう。そして、お前が負けた場合この学園から去ってもらおうか！？ お前は俺らの中から好きなやつを最後に選ばせてやる。それが条件だ。どうだ？ この条件を呑むか？」

エセ紳士の教師も生徒会メンバーも俺のいきなりの豹変に目を点にしている。

「わかった、うけよう。では私はその少女に相手をお願いしたいな」

そう言って一人を指名した。

レンを

こいつは見た目で選ぶすぎる。

レンと闘いたいやつなんて世界のどこを探してもいないだろうに。

まあいいだろう。

こいつの指名だ。

「レンいいか？」

「うん おにちゃんのためにレンがんばるよ」

レンが頑張ったら星ごと破壊しちまうだろ。

「なああんた。こいつは俺の使い魔だけどいいか？ もちろんお前が勝ったら俺達が解散。と言つか俺らのうち一人でも負けたら解散でいい。どうだ？」

「ほう。そんな条件でいいのか？ いささか君たちに不利すぎるのではないか？」

「別にいい。いつものことだ。」

そう、いつものことだな。

「わかった。では早速、第一実戦場に移動しよう」

そう言って、部屋から出ていく。

俺達はそのあとをついていく。



「あんだまたそんなこと言ってるの!!!?」

小声でエラが話しかけてきた。

「ん？ お前たちの時もそうだったろ？」

「バカっ!!! たしかにあのときは出来たわよ！ だって非常識が4人のチームだったんだから!!! 今は私がいるのよ!!!? 二年の時にトップだからってここでは最下層付近よ!!!」

アホか？

「いや、今はお前も俺達の仲間だろ？ それにだな」

俺は一旦、呆れたように肩をすくめ、

「本当の実戦も経験してないやつがエラも含めた俺達に勝てるかも？」

## 第一実戦場

「君たちが来ると聞いて用意はしておいたのでね。早速始めようと思っ方がいいかい？」

広いな。2キロくらいあるぞー」  
教師とか生徒も全員揃ってそうだし。  
5000人くらいか。

「ああ、別にいいぞ。審判はそっちから出してくれ」  
俺は投げやりに言うてる。

「いいのかい？ こっちが何か審判に指示をしているのかもしれな  
いのだよ？」

「はっ！ そんなことか」

「だったら誰が見ても勝ちとしか思えないような勝ち方をすればいいだけだろ」

俺はそう言い、先を促す。

「わかった……、ではこちらは院生会から順番にそして最後にわたしだ。実力が低い順に出そう。と言っても高等院でのトップだがな」

「同じでいい。最後はレンだ。あとざったいから観客に声を上げさせないでくれ」

「ほう、わかった。君、担任の教師に連絡して声を出させないようになさせてくれ」

エセ男爵は、近くの教師に命令した。

近くに、一人の男性がやってくる。

「では、私が審判をさせていただきます。よろしいですか？ 生徒会様」

生徒会様って言ってる時点でバカにしてるな。

一応敬語だが。

「ああ、別に誰でもいい」

「では10分後に開始します」

俺は選手のベンチに全員をつれて戻る、っと言ってもパイプイスだが。

戻って早々アルが声をかけてきた。

「トキにゃーん。大丈夫なんか？ 一応あつちは全部の学校のトッ  
プやで？ ワイらなんて半年前まで高等部二年の生徒なんや」

少し不安そうに聞いてくる、だから、

「雑魚だよ」

俺はそう言っただけだ。

「にしてもトキ様なんで急に怒りだしたんですか？」

お前らを家族と思ってたからなんて死んでも言えない！！

おい！！！？ ハクテメー俺の声聞いただろ今！！

なんでニヤニヤしてこっち見てんだよ！！！！

「まあ、たいしたことじゃない。にしてもアイツらもかー…なんで使い魔変化させないであんな堂々と見せびらかすんだろな？」

「悪かったわね！ 私の時もそうで！！ でもホントどうするの？ たぶん私勝てないわよ？ 聞いたことあるけど高等院のトップで最低でも8000くらいあるわよ？ 私なんて5000くらいだし…」

「あーそんなことか。魔力が強くて体は生身だ。一定以上の力で当てれば倒せる。それにおまえは毎日学校より厳しい任務行ってるんだろが」

「そうだけどさー…」

「はいはい。じゃあお前から行って来い。弱い順番らしいし勝てるだろ」

「わかったわよー、じゃあ行ってくるわ」

そう言って、自分の魔道具の杖を持って走って行った。

「トキにゃーん実際どうなんや？ 勝てるんかいな？ エラにゃん」

「俺の予想通りなら勝てるな。エラの武器は魔法より敏捷性だからな。どっちかというとなんの相手のほうが心配だ。死んじまうかもしれないぞあのエセ紳士」

あ、あと。

「お前ら全員短縮詠唱以上できるよな？ 出来ないときついかもしれん」

「ワイは合成までなら大丈夫やゝ無詠唱でいけるで」

「私も合成までですね。無詠唱でいけます」

「私は魔法最近おぼえたです。だから合成まで短縮詠唱ですー」

「まあ短縮まででいけるだろ。あつちもそこまでだから多分。そんなに生徒会みたいに合成で無詠唱できる化け物がぼんぼんいても困る」

俺は古代まで無詠唱でいけるけど…。

いや、むしろ神聖か……。

短縮魔法は精霊に言葉で呼びかけ、あとは誰が、どこに、どうゆう形でを一瞬で考えればいい。三つのことを同時に考えれば出来る

のだ。

まあ合成の場合短縮でも無理だけど普通は。

無詠唱はまず出来る人がいないだろう。

そもそも精霊に呼びかける時点で言葉にしないのだ。

魔力を空气中に大量に散布して意思をつたえてあつめる。

しかもすぐに霧散してしまうのだ。

呼びかけ続けながらさらに自分の魔力をそそぐようにし続け、さらには形と誰がどこに打ち出すのかを同時に考えないといけない。

一瞬で発動するには5つのことを同時に考えなければいけない。

時間をかければできるのだが、そんなら言葉にしたほうが早い。

ちなみに俺の場合内部に意思がある精霊王がいるようなものなので、形と場所だけ指定すれば勝つてに発動する。

まあ緊急時以外は自分への暗示のような感じで言葉にするが、短いしね。

「あ、はじまるみたいですよー」

「じゃあ我らが仲間の戦いを鑑賞しますか」

「はい」

そう言って俺達はフィールドに視線を移す。



二八話 生徒会VS院生会（前）

生徒会VS院生会

「両者前へ!!」

そう言われ、エラと院生会の人が出た。

俺達は離れているので手元の画面から試合を観戦する。

「では、生徒会と院生会の試合を開始します」

二人が一礼する。

「試合開始!!!」

審判の、試合開始の合図。

両者の距離50メートル

最初に動いたのは院生のほうだった。

『風よ!! 切り裂け』

短縮魔法。

横10メートル程の風の刃がエラに襲いかかる。

第一刃がエラに襲いかかり、ジャンプして避ける。

そして、ジャンプしたエラに第二刃が……。

襲いからなかった。  
どうやら一刃だけのようだ。

「「「「は?」「」「」」

俺以外の全員の声が重なった。

「トキにゃん? これはどういうことや?」

アルが声をかけるが俺はこめかみを押さえていた。

「トキ様、なんで二刃目をジャンプした位置に配置しておかないのですか?」

と、ディア

「なんで二刃がないのに横一列なんですー?」

ああ。お前らが言いたいことはわかるよ。

「お前らは一刃は飛びあがらせることが目的で、少しずらした二刃目でとどめをさすだろ? って言いたいんだろ?」

こくこくとうなずく三人。

「あのなー短縮詠唱の場合精霊に形を与えてないから刃がきえるままで、その形をイメージし続けなさいけないんだよ」

くびをかしげる三人。

うん。わかるから。

「だから生徒会は皆おかしいんだって。おまえらは無詠唱だろうと短縮だろうとどんどん次の放てるだろ？ それって無意識のうちに制御してるんだよ。5つ放ったら、無詠唱の場合25のイメージを同時にしてるわけだ。そんなこと一般人に出来るわけないだろ？ あれが普通なんだよ。だけどアイツもダメだな。俺がアイツだったら最初に普通の詠唱で魔法を固定してから短縮つかうからな。そうすれば二つを一緒にはなてる。たぶんあいつは実戦経験がない」

俺達みたいに強い敵を、一対一とか一対多数をしてるやつなんて学校じゃないだろ…。

「ってことはトキにゃん。あいつめちやくちや弱いん？」

アルが直接的な質問をしてきた。

「普通よりは強いくらいじゃないか？ ちなみにお前らはその強いやつより数千倍強いんじゃないか？」

生徒会全員が溜息をついている。

まあわからなくもない。レベル低いな。

「えーっと、あなた本気でやらないの？」

俺の説明を聞いていないエラはそんなことを質問した。  
常に生徒会といるために自分は弱いと思っていたのだろう。

「は、はは。いまのは遊びだ！」

「水よ！！！」

激流のような水の大砲がエラに向かって高速で向かってくる。  
5メートル程の大きさだろうか。

「雷風よ！！ 炎よ！！」

エラの前に大型の雷を含んだ竜巻が現れる。

そこに水球が当たり。  
水、雷を含んだ竜巻となる

炎は院生会の生徒の周りをぐるっと囲んでいる。

「はははは！！ どこにはなってるんだ！！！！？」

バカにしたような院生会の生徒

そこへ上空から水と雷を含んだ竜巻が襲いかかる

生徒は炎と熱で移動することができず…。

『バシヤアアア』

直撃。





生徒会サイドにエラがとぼとぼと歩いてきた。

「トキ…なんかむなしいわ」

すごくしょぼくれたエラが話しかけてきた。

「言うな。わかってる。最初にいっただろ。めちやくちや弱いって」

俺は肩をすくめ言ってやる。

「私最近自信なくしてたのよね。だって他の生徒会メンバーに全然かなわないんだもん。私弱いのかなとか思ってたんだけど。学校のトップでアレはないわ。初等部かと思っただわ」

わかってる。

確かに弱すぎる。

あんなのに任務なんて行かないわけがわかる。

だから俺達にくるんだけどなー……。

「生徒会が異常すぎるだけだ。普通魔法使いは数人でパーティー組むだろ？ 一人でどんどんSSSランクとか終わらせてくる俺達はつきりいつて異常だ。アレが普通なんだ。実際生徒会5人で多分一国くらい落せるぞ」

うん。まじ出来る。

俺とレンと神獣達がいたら星すら制圧できるだろう。

「トキにゃん…わかってたんけど異常ってのは認めたくないんねんなー」

「トキ様、確かに私たち異常ではありませんよねー」

魔力がこの年で普通に二万とか超えてるやつが普通なんてないだろ。

俺なんて最低100万だぞ。実際はどんなだよ

「さて。次は、前みたいにシャルが行くか？ と言うか、敵が弱すぎてどうしようか？ もう何かやる気ないんだが。いっそ俺が出て行ってここにいる人間ごと全部倒しちゃったほうが楽かもしれん」

5000人程度余裕だ。

「いえー、行かせてくださいですー。魔法覚えたばかりなのでいろいろ試したいのですー」

試せないと思うけどな……。

「じゃあ行って来い」

シャルがフィールドの中心に走っていく。

「シャルには悪いがはつきりいつていろいろなんて試せないだろ」

俺は適当に言葉を発する。

「」「うん」「」

深くうなづく三人。

## 第二試合

『両者！試合を開始するので前へ！！』

二人が前にでる。

「はっはっは！！ 学園でも珍しいボクの光の魔法をみせてあげよう！！！！ 魔力量は9230だ！！！」

シャルにきざっばいイケメンが声をかけている。

「よろしくおねがいますです」

うわー、シャルいい子だなー普通に挨拶してる。

けど向いてる方向違うからね！！？  
それ画面の映像だから！！？

『でわー二試合目！ 開始！！』

『光よ！！』

シユン

始まった瞬間、シャルに向かって高速の光の矢がはなたれる。

うん。高速なのだ。

シャルの魔法を見たことがあるが光速だった。

あれじゃ密度も低いだろう。  
まあシャルとじゃ魔力に三倍の差があるが…。

『光よ』

シャン

グサッ

上空から落ちてきた光が院生会の光の矢をこなごなに消し去り、  
突き刺さる。

相変わらず高密度だ。

大きさをなんて院生会の10倍くらいある。

「な!!!? 君も光かい!!!? は、はははは! でも僕の光には  
遠く及ばないね!!!」

何を言ってるんだろうあいつは?

実戦だったら喋ってる間に殺されるぞ?

そう言うのは自分より数段格下の奴に言え。

『光よ! 柱へ!』

シャルに向かって光の大きな柱が落ちてくる。

うん。確かにでかいけどさ。

密度を低くしすぎて透けてるし。

威力より見た目ってか？

『光よ。剣へ』

シャルの魔道具の剣の刀身が、  
10メートルくらいの光の剣に変わった。

『切り裂け!!』

ブウウウウーン

上空の光の柱が一刀で砕かれた。

「つまらないですー…トキさーん、なんなんですか？ この弱い人」

うん。わからなくはないけどさ。

お前叫ぶな。

教師＋全生徒がめちゃくちゃ怒ってるぞ？

「終わりにしますー、無駄な時間ですー。」

『光よ！ 光の牢獄！！』

相手を囲むように上空から何条もの光の柱が突き刺さる。

うん、相変わらず高密度だ。

そして、シャルは詠唱を始める。

『光の精霊よ 我が命は光の中に 光は我が命に』

は…？ いやまてまてまて。

何する気？ この詠唱ってあれですか？

『光は希望 我が世界は光の世界 顕現せしは光の世界』

「トキにゃ〜ワイは思うねん。これはなったら多分こちら一帯吹き飛ばんやないかって」

「そうですね。どうしましょつか?」

あーくそ!!

『シャルーーーーー!密度を100分の  
一までさげろ!命令だ!!!!』

俺はめいっばい叫んだ。

聞こえたのか少しうなずくのが見えた。

『光の奔流 『世界の浄化』 光の城!!!』

カッ

瞬間世界は光に包まれた。

とっさにこちらのメンバーには全員結界を張ったが、他はどうなるだろっな。



そして数十秒後、光はおさまった。

現状としては。

フィールドの中心にはシャルしかない。

あと地面が広範囲につてか100メートルくらい抉れてるな。対戦相手は校舎の近くの木のほうまで飛んで木折れてるし。

死んだんじゃないか？

他の生徒はあれだ。

そこそこ近くにいたやつ。

つて言っても500メートル以上離れてるが。

10メートルくらい吹き飛ばされてるかな？

さすがと言っべきか、ある程度は結界を張ってるやつがいる。

てかおい！！ 教師自分に張ってないで生徒にもかけるよ！！

『しよ、勝者！！ 生徒会！！』

フィールドでは教師が地の魔法で修復している。  
相手の選手は運ばれて行った。

シャルは、

「つまんないですー。生徒会の人たちだとこのくらいふせいでくれるですー!」

とか言っつて、ふてくされてる。

「き、君たち！ 弱い人から順番に出すんじゃないか！ たかい!!? いきなり一番強い人を出すなんてどうかとおもうんだよ!? わたしたちは順番にだしているだろう? なんで古代魔法使える人なんてなんでだすのかな!!?」

エセ紳士がフィールドのまん中で叫んでいる、  
はあ。何を言ってるんだこいつは?

仕方ないので、俺は500メートルほどの距離をシャルを連れて一瞬で詰める。

「なっ!!!?」

目の前にいきなり現れて、驚いたのが固まっている。

「あのですねー? あなた達は何か勘違いしています」

カメラにも向かって言う。

「俺達に決闘を持ちかけてきたのはあなたたちですよ？　なんでこちらがこれ以上手加減しなければいけないんですか？　今戦った生徒会メンバーもそうですがめっちゃくちや手加減してますよ？　直前で俺が叫んだの聞いてましたよね？　密度なんて普段の100分の1なんですよ？　手加減しなかったらこの地区なんて簡単に吹き飛んでいたでしょ？」

と、言つてシャルに発言権を譲る。

「あとですー。その人が一番強い人を出すとか言ってるですー？　でもわたしは一番か二番目くらいに弱いですー。だから順番なんですー。古代魔法くらいなら私から後ろの生徒会も全員つかえるですー」

学生達と教師が全員沈黙する。

「な！？　じゃあ、君たちは弱い順からだして。更に手加減してあれなのかい！！？」

そんな驚くなよ……。

「だからそうだつて言ってるじゃないですか。次いきますよ。次。弱すぎて練習にもならないってメンバーから苦情出てるんですから。あと俺も面倒なので古代魔法は使用しないように言っておきますから。これ以上なにか譲歩してほしいですか？」

俺は見下すように質問する。

「い、いや大丈夫だ。」

「わかりましたそれじゃ。シャル」

シャルを呼ぶと、抱きついてきた。

そして、次の瞬間にはベンチに戻っていた。

「あれは…人間なのか……」

エセ教師は呟いたが誰にも聞こえていなかった。

「じゃあ次ディアいけるか？」

順当にいったらディアだろう。

「はい トキ様」

すぐくつれしそくに立ち上がるディア。

「古代魔法は禁止な」

一応釘刺し。

「りょーかいです」

ちなみに既にディアも古代魔法は使えるのだ  
闇の古代魔法は危険すぎて使ってほしくないが。

「つまらないですー。弱すぎですー」

まだシャルはぶーぶー言ってる。

まあ練習したいって出て行ったわけだからな。

「まあ今度俺が相手してやるから我慢しろ」

「ほんとですー？ トキさんなら古代魔法普通につつても大丈夫だ  
からうれしいですー」

人体実験か。

「じゃあディア、あそこまで遠いからとばすぞ？ 時間がもつた  
ない速攻で終わらせろ」

「はいっ！言ってきますね」

相変わらず満面の笑みだ。

シユン

俺はディアをフィールドの真ん中まで飛ばした。

### 第三試合

『では、両者前へ』

「あら？ あたしの相手はこのおちびちゃん？ けがさせちゃったらごめんなさいねー」

いきなりディアに話しかけた女。

「黙ってくださいゴミア増。あなたがしゃべると化粧臭いです。いるだけでも臭いですが」

俺から離れたディアは素に戻っていた。

「なにを言うのあなた！！？ これでもわたしは……」

「御託は結構ですので、早くはじめてください。息をとめるのにも限界があるんですよ？」

すごい口が悪くなったなディア……。

『では試合開始!!』

審判がディアの毒舌に圧倒されていた。

『火よ!』

相手の頭上に炎塊が数個浮かんで、

突如黒くなり、  
消えた。

「なっ!!!?!」

相手の選手は驚愕の表情を浮かべる。

「だから無駄な演出なんていらななんですよヨリノ。直接ぶつけるなりしてくればいいんです。雑魚すぎます」

もう、絶好調ですディアさん！

「あなた！！ 無詠唱ができるの！？」

「何をいつてるんですかゴミ婆。そんなの基本じゃないですか？  
初等部だって出来ますよ」

さもめんどくさそうな感じで言い放ったディアだが。  
初等部どころか教師ですら出来る人はほとんどいない。

その事実には驚いたようだが、

「くっ『火よ！！』」

突如ディアを中心に球体の炎が生まれた。

「あははははははは。酸欠にでもなってしまうばいいわおちびち  
ゃん」

赤い炎は威力を増し……、

黒く変色した。

「誰がおちびちゃんですか婆、この程度の炎じゃ虫だって焼き殺せ  
ません」



炎を侵食した闇が、ディアの後ろに控えている。

ディアに仕分ける任務は大体が、多数の魔物の討伐任務だった。全方位から攻撃されるなんて慣れていない。全方位に対してディアの闇の侵食は有利なのだ。

「どうでしょうか？ 終わらせちゃいましょう。だって臭いですもんゴミ屑が」

次の瞬間。

ディアの闇は爆ぜた。

個々に意思があるように闇は相手の全方位から襲いかかる。侵食の特性により下位の魔法はすべて吸収される。

上位以上の属性でしか絶対に破れない攻撃

『ブワッ』

そして院生会の生徒は闇に呑みこまれた。

会場はあまりの闇の異様さに言葉を失っている

ディアはしばらく待っていたが、審判が呆然としているのを見、

「どうしたんですか？ 審判さん。はやく試合終了しないと闇に飲まれちゃいますよ？ あのゴミ屑が」

審判は青ざめた顔で腕を振り上げ、

『し、試合終了！！！　しよ、勝者！！　生徒会！！』

そしてディアは、俺によってその場から消えた。

「トキ様　見てくれましたか？　私の華麗なる漆黒を」

うん。絶対相手にトラウマ植え付けたね。  
だって失神してたし。

と言っか失禁……。

「うん、御苦労さまディア」

そう言って頭を撫でてやると、嬉しそうに微笑んでいる。

「おにーちゃんまだー？」

暇そうにしていたレンが抱きついてきた。

「うーん。あとちょっとまってね」

「わかったー」

はにかみながら答えた。

そしてディアに視線を移し、にやり、

【だかこのとき。

ディアを撫でている刻を邪魔しようとして声をかけたことを知る者はディアしかいなかった。】

その後もレンは俺に抱きついたままだった。

まったく。レンはホント最近べったりだな。

そんな事を思いながら、次のアルに向きなおる。

「じゃ、次アルいつてこーい」

「まかせ『シユン』」

話の途中でアルは消えた。

「なんか最近ワイの扱いがひどくないかなートキにゃん……」

アルはフィールドの中心でいじけていた。

#### 第四試合

『両者前へ!』

審判の声によって、

相手が前に出た。

明らかにお嬢様って感じの金髪。  
ピンクのドレスを着ている女。

「あなたがわたくしの相手ですか?」

アルはおもっただろう。

(うわー! なんやこの高飛車そうな女。絶対話ながくなりそうな女や)

「あらあら。なにを怖がっているの? あ、でもそうよね。わたくしの前にお出になったひとはかならずそうなりますものね。大会ではおしくも二位でしたし。ほんとうだったらわたくしが一位のようなもの。ですからあなたがこわがってもとうぜんよね。ほんとわたくしって罪な女ねおほほほほ」

(やっぱりながのーてしまったー! そんなの一言でええやん!?!?)

「審判やん、早くはじめてーな」

審判は一度うなずき、

『試合開始』

心配が開始の合図を出した瞬間、

『水よ 風よ 地よ』

その瞬間女の後方に6つの1メートル級の球が浮かんだ。

「みなさい下民め！！ このワタクシの美しいカラフルな球体を！  
！ そしてうやまいなさい！！」

すごい胸を張ってる高飛車……。

口元に手を置いておほほほほって感じた。

「なんやねんホンマ…苦手やわーこつゆうの。はいはいキレイやね。  
でもそれでいいんねんか？」

「なにを言っているの？ 珍しい三属性保持よ。あなたみたいな下  
民にはもったいないけどつかってあげたわ」

アルは人差し指で上を指し、

「上や上や、もうちょい視野ひろくしよなー？ 任務にいったらま  
っさきにしぬで？」

何を言ってるの？ と上を見上げる高飛車。

「ひっ！…!？」

そこには三メートル程の色とりどりの球体が50個近く浮かんでいた。

いろいろな属性を合わせているせいか、すべての色が違っている。

「まあそやなー。トキにゃんが前言ってたんやけど。自分の力を過信しすぎんなっちゅーことや。ホント死ぬで？ じゃ、これでもいやな」

アルは腕を上にあげ。

振り下げた。





「どやー？ トキにゃん！？ ワイの活躍は？」

戻ってくるなり聞いてきた。

「そうだなー。とりあえずアルとディア。女が出てくるたびになぜ失禁させる？」

これが重要だ。

「違うねん。最初の二人は物理的に倒したやる？ でもワイとディアにゃんは恐怖でたおしてるねん。相手が戦意損失するくらいに恐怖をあたえるとゆるんで失禁してしまうねん。女の子には怪我負けせられんやろ？ これもワイとディアにゃんの優しさや」

こくこくとうなずくディア。

うん。なんかすごく正しい気がしてきた。

でも女の子にとって5000人の前で、しかも、映像が撮られている状態で失禁するのは怪我するのどっちがいいんだろうか？

だって、判定を決するために最後ブームになるんだよ？

思いつきりお漏らしたの見られるよ？ しかも録画されるし。

「でも次はトキにゃんやねーどんな勝ち方するんやろー？ たのしみやわ」

アルがくすくすと笑っている。

「そうですねー、トキ様なら骨も残らないくらいに地下100メートルくらいまでプレスでつぶすんじゃないでしょうか？」

物騒なことを言いだしたディア。

「違いますー、きっとここにいる全員宇宙にほうりだすですー」

おい、シャル？

「違うわね。内部から爆発させるのよ。辺りに肉片がとびちるわ。結界の準備を」

くそ！ コイツら！

「ご主人さま大変ですねーどれやるんですか？ あ、やるっていえば、いつ私のメイデンフィルターをビリヤードのように突き破ってくれるんですか？」

なにこいつら。

好き勝手言ってくれやがる。

出来るけどさ…。

ついでにビリヤードは何も突き破らないぞ？

「とりあえず行ってくるわ」

そう言って俺はその場から消えた。

二九話 生徒会VS院生会（後）

最終戦

あー、なんかもうさ。

なんで負けを認めないんだろうか？

元々こっちだって戦いたいわけじゃないんだから素直に終わりにするのよ。

でもこっちは負けたら解散だから負けられないしよ。

あと目の前のアイツが嫌すぎる。

「なあ…あんた何そのカツコ？」

俺はかつたるそうに聞いてみる。

「ふ…、ボクの神々さに惚れたのかい？」

そんな、モテすぎて困るみたいに髪をかき上げるな。

「いやいや。確かににまぶしいけどさ。違うまぶしさだ」

そうなのだこいつは確かにまぶしいのだ。

俺は眩しさを見、

「その金ピカの衣装なんかならないか？　ちょっとイライラしすぎるんだけど？」

「僕の人気ぶりに嫉妬して怒るとは…、君はどこもまでもみじめだね」

なんなのコイツ？

どこからくるのこの自信!?

たしかにカツコイイけどさー！！！

こいつに惚れる奴なんていないだろ？



割れんばかりの黄色い歓声。

すごい歓声だな。

女ばっかだけど。

男は俺の味方してるし、

よし。こいつの倒し方はきまった。

その前に、

「お前は歓声とか好きなのか？」

「あたりまえじゃないか？ 美しい僕をみて声をあげる女性たち」

そんな演技みたいに髪書きあげるなって……。

「おい教師代表。俺は外野がうるさいから声あげさせるなって言  
ったよな？」

おれはエセ紳士に声をかける。

「たしかに言いましたね。しかし、この人数をすべて静かにさせる  
のは無理ではないかね？」

「出来るんだよ。代表。あんたらが出来ないなら俺がしてやるっ」

『Ich belasteb』

《重ヲ為ス》

ズドドオオーン

対戦相手、審判、エセ紳士、生徒会メンバー＋二人以外はすべてが地面にへばりついた。

「はい終了。悪いねー？ あんたの歓声ばかり聞いてるのもだるい」

「な、なにをするんだ君！ 歓声がもらえないやつ嫉妬だろ？」

嫉妬？

「まあ嫉妬でいいや。でもお前はこれから誰にも相手にされないよ  
うな人間になるからな」

俺はニヤリと笑い、

「で、代表。静かにしたけど別にいいだろ？ 俺の魔力も減って一  
石二鳥じゃん」

減らないほど無限だな。

「あ、ああ、別にかまわないが……なにを……？」

エセ神父は驚愕に目を見開いている。

まあ教えてやってもいいか。

「空間の質量をあげただけだ。どう？ 簡単だろ？」

俺にとっては簡単だ。

「空間：属性：なのかい？」

震えながら聞いてくる。

「まあ、そんなようなもんだあと時間とか」

驚愕に目を見開く

「時間：か：ハッ！！？」

何かに思いあたったのか金ピカにつめよる。

「バ、バルド君！！ やめたほうがいい。君では勝てない！！ い  
まずぐ降参するんだ！！ 未来を失いたくなかったらやめなさい！  
！」

うん、ちょっと面白い。

「な、何を言ってるんですか！？ ボクは学校で一番強いんですよ  
？ そんなボクが誰に負けるって言うんですか？」

一応目上には敬語なんだな。

「だからっ時間はっ 審判の人。これって殺さなければいいんです  
よね？」ツツ！！」



俺はエセ紳士の言葉をさえぎって審判に問うた。

さすがエセ紳士。

すべての属性を知っているようだな。

だが、それは困る。

「はい。相手が死ななければ大丈夫ですよ」

「わかった。あと代表。邪魔だからどいてくれ。」

俺は軽く睨みつけてやる。

「くっ！？ 仕方ない…ですね。試合を申し込んだのは私ですから。バルドくん。目上の人の言うことは聞くものですよ?。」

そう言って、代表は下がった。

まあ今回は聞くべきだっただろうな。

「では。審判お願いしますね?。」

そう言って、ニコリと俺は笑った。

『では!?!?! 生徒会長と院生会長の決闘を始めます。始め!?!?!』

『闇よ!!--』

ぶわっ

「見る!!-- この僕の闇を! なんて美しいんだろうか?」

「って、闇かよ!!--? なんてそんな金ピカなのに闇属性なんだよ!!--」

「ははははは、いつか君にも闇のよさがわかるとおもつよ?」

「まあいいや、はよこい」

この学校の生徒は魔法発動するときに、喋る決まりでもあるのだろうか?

大量の闇が俺を包み込もうと向かってくる。

にしても、さすが会長だな。

密度も量もディアに引けをとらないぞ?

そして、闇が俺のすぐ目の前まできたところで俺は詠唱する。

『F o l l o g e n S i e i h m』

『A l l e s』

《従え

全よ》

そこで闇は止まった。

更には俺の後ろに控える。

「幻惑で、無機、生物全てを配下に置く。

「なぜ襲いかからない!!? ボクの美しい闇よ!!?」

バルドは更に闇を増やしているが、生まれる闇はすべてが俺の制御化にうつる。

バルドが魔力を消費し、俺の武器を増やすようなものだ。

「げ、幻惑…だと?」

お? 代表すごいな。わかるなんて。

「代表やりますね。正解です。でもこんなの遊びですよ?」

あなたが誰に喧嘩売ったか思い知らせてあげますよ。

そしてこれからは生徒会に手を出さないでもらいたい。

俺の家族をとらないでいただきたい。

俺達が学園に干渉したことはありませんか?

迷惑をかけたことがありますか?

俺達は学園に与えられた、学園のための任務をしているだけです  
よ?

なぜ何もしていないのに、俺達が目の敵にされなきゃいけないんですか？

俺達は権力を行使することなんてしていないでしょう？

任務が達成されたときにギルドで規定された報酬を受取っているにすぎませんよ？

だから教えて差し上げましょう皆さんに。

家族に手を出したらどうなるか」

俺は勝ちたいわけじゃない。

あそこは俺にとって家族がいる家なのだ。

大切な家族と住まう場所。

勝手な想像で壊させるわけにはいかない。

俺はこの世界を出るけれど。

アイツらには残してやりたい。

帰れる家があるんだって。

幸せな場所をつくってやりたい。

全員が問題を背負い、本当の家がない家族に。

見せてやろう俺達を。

理不尽な干渉を拒絶する俺達を。

☐

F a n g e n    W i r e s    a n

☐

V e r u r t e i l u n g

《はじめよう。断罪を》

『Anorganische Kontrolle』

《無機制御》

『トントントントント』

地面が持ち上がる。

俺の背後には土で出来た小さな家。

そしてそれを守る全長50メートルはある土の騎士。

「ひっ、君は何をする…つもりなんだい？」

バルドがそんな事を言ってくるが、

「俺は干渉を許さない」

だが、俺は世界への干渉をはじめ。

『Und die Dunkelheit füllt die  
Welt voll』

《そして、漆黒は世界を埋め尽くす》

空が闇に覆われる。

光のない漆黒。

そして闇が開ける。

小さな家の上空の闇が。

真つ暗な世界で、

唯一の光（希望）が

小さな家は光（希望）に包まれる。

小さな家の上に人影が見えはじめ、

アル、シャル、ディア、エラ、俺を形どつた土人形が空を見上げる。

まるで、空を見上げているような人形。

「お前は闇がすきなんだつたな？ どうだ？ 漆黒の闇」

「これが…闇……？ なんて嫌な闇なんだ」

がくがくと震えている。



生徒達は質量によって逃げることも出来ず、その光景を見つめて  
いる。

『Acht Punkte der Sterne』

《八点星陣》

二人をブロック型の結界に閉じ込め、移動する。

「なっ!!!? 何をするんだ君っ!!!?」

「ヤッ!!! す、すまなかった。もう君たちには近づかない!」

バルドと代表は空間ごと、小さな家に近づいていく。

そして、光の中に入る直前で、巨大な騎士が二人を握る。

潰してはいない。

巨人の手から顔だけを出している。

俺は映像用水晶を持ち、一人の騎士の手に乗り二人に近づく。

「お前は決して手を出してはいけないもに手を出した。

この聖域は誰であろうと手を出してはいけなかった。

見ている代表。お前が招いた結果を！！

手を出した結果を！！

渡り神である俺からの断罪を！」

Zeit f?ngt an zu laufen  
Beenden wir einen  
Traum

《時よ、駆ける

夢の終焉》

バルドの八点星陣が加速する。

俺は水晶でバルドを映す。

すべての学生に見られるだろう映像を、

固定されたバルドは消えることなく老けてゆく。

最高属性三つを受け入れている、俺の加速速度限界で。

『Absage』

《アップ・ザーゲ》

俺は、数秒で解除した。

バルドに60年の時をながし。

髪は白くなり。

肌はしわくちゃ。

頬はこけ。

美形の面影もない姿。

唯一の救いは空間内は食事が必要ないことだけ。

いつそ死んだほうがマシかもしれない。

いたるところで悲鳴があがる。

「これ……は……なんてことを……」

代表が言う、

「お前が招いたことだぞ？ 代表よ？」

「わたしは！！ こんなことなど！！！」

「ほう。人の心配か？ お前の対戦相手を呼んでやろう。俺の使い魔をな」

俺は叫ぶ。

「レン戻れ！！」

『グギャアア』

レンが俺の呼びかけに、咆哮をあげる。

「おいで、レン」

まだ見えぬレンに、優しく声をかける。

バツサバツサ

50メートルはあろうかと言う、白い龍が上空から舞い降りた。

「これが俺、渡り神の使い魔のレンだ。時と空間を統べる生物の頂点。時幻龍だ」

レンは俺に顔を擦りつけている。  
俺はレンを撫でてやる。

「そしてお前の対戦相手だ。どうだ？　楽しみだろうか？　お前の断罪者が美しい龍で」

ニヤリと笑ってやる。

エセ紳士は顔を蒼白にし、

「いやだッ！！　私はッ！！　まだ死にたくないんだッ！！！！」

「ほう？　死にたくないのか？　人の家族に手を出しておいて？　笑わせるな。　だが特別にお前の願い叶えてやるっ」

『Acht Punkte der Sterne』

《八点星陣・遮断》

「どうだ？　今お前の脳を保護してやった。　お前の願いを叶えるために。　レンこいつに時間を止める空間を」

『グアアアア』

レンの口から5メートル程の、宇宙空間のような球球が放たれ、代表を包みこむ。

「よかつたな？ 代表？ お前は最高に長生きが出来るぞ？ 脳が死ぬまで約250年。生き続ける。ただ生き続ける」

『Anorganische Kontrolle』

《無機制御》

突如地面に10メートル程の円形の穴が開いた。

底が真っ暗になっていて見えない。

「地底深くで生き続ける代表。レンこいつをあの穴に落とせ」

そして脳以外の時間を止めた球体は、地中に呑みこまれ、穴は閉じた。

「レンちょっと？ 頭に乗せてもらっていいか？」

レンは頭を下げ、俺を乗せる。

さて。

「おい学生と教師！！！！ しかと目に焼き付けたか！！！！？」

お前達が手を出したものがどのようなものか!!! 関係ない?  
ハッ! 笑わせるな?

結局はお前達が望んだことだろ!!! ここに居るやつ全員だ!!  
お前たちの誰かがこの決闘をとめたか!?

自分が関係ないと思って面白くおかしく見ていただけだろ!!!?  
自分が楽しければそれでいい!!!?

お前らが楽しむのは勝手だ!!

俺には興味もなんもない!! だがな!!

それになぜ俺達が巻き込まれなくてはいけない!!!?

なぜ家族を壊されなくちゃいけない!!!?

反論があるなら言ってみろ!! 皆殺しにしてやろう!!

問題を抱えた俺達が!!! せつかく幸せに手をかけた!!

だがお前らはそれすらも許さずに壊そうと言つのか!!!?

ならば壊してやろう!!! この世界もろとも壊してやろう!!!

俺は干渉を許さない!!

なぜ俺達だけが幸せになつてはいけないんだ!!



もし俺達に文句があるなら力で証明してみせろ！！

俺達は問題だらけだった。だから力でここまで来た！！

そこでお前らはまた邪魔をしようとした！！ 力で屈服させよう  
と！！

ならば俺達も力で証明しよう！！ 譲れないものを力で守ってみ  
せよう！！

渡り神たる俺が守ってみせよう！！」

俺は叫んだ。

絶対に譲れないものだから。

学園が敵に回るなら打ち砕いてやるっ。

国が敵に回るなら滅ぼしてやるっ。

世界が敵に回るなら消し去ってやるっ。

俺は渡り神。

矛盾に満ちたすべてを受け入れるもの。

如月  
刻  
だから。

「レン下に降りようか？」

『ズドオオオオオオン』

レンが降りた衝撃で、爆音が響く。

頭を下げ俺を降ろしてくれた。

「審判？ どうだ？ 俺は殺してないぞ？ さっさとしてくれ」

俺は年をとったバルドを降ろした。

『しょ、勝者！！！！ 生徒会！！ 6 - 0 生徒会の勝利！！ これにて試合を終了します！！』

審判は逃げるように走り去って行った。

俺とレンは歩いて戻る。

大切な家族の元に。

「ただいま。みんな」

「「「「おかえり。トキ（にゃん）（様）（さん）「「「「

家族は泣いていた。

全員泣いていた。

抱きついてきた四人を抱きしめる。

俺は包み込む。

すべてを受け入れ、包み込み、成長させる者。

矛盾に満ちた白の渡り神。

それが俺 如月 刻 の魂の本質。

三十話 エラの事情

生徒会室

「みなさん昨日はどうでしたかー？ 私が考えた息抜きなんです  
よー？ 褒めてくださいー！」

そう言って、胸を張るハンネ。

ガシッ

そう言って、胸を張るハンネの胸を潰す俺。

「お前の考えはこの胸のように小さいな!」

ぐにぐに

「あつ……なにをするんですかー?」

文句を言うハンネ。

「お前俺らの状態をしてみる。とても楽しい息抜きをしたあとには見えないだろ?」

ぐにぐに

全員がぐでーっとしている。

「んっ……うーんゆったりしてるのかと思いましたが」

お気楽思考だな。

「お前のせいで二人死ぬような目にあつたぞ? あと変な声上げるな」

ぐにぐに

「あふっ……それはトキくんが胸をずっといじってるからですよ!」



離してやった。

「あーそう言えば昨日、高等院で教師一人と生徒一人が行方不明になっただけですよ？ 大変ですね」

確かに代表とバルトだ。バルトはきっと誰が見てもアイツだと思わないだろう。

「トキにや〜ん家族からのお願いと思ってしばらく休ませて〜な」

アルがいきなり言ってきた。

「そんなのハンネに言ってくれ…、ハンネがひたすら仕事拾ってくるからやすめないんだ」

うん。こいつひろって来すぎ。

「ワイにはむりや〜ん言つこときいてくれへんもん」

俺の言つことも聞かないぞハンネは。

「俺の言つことも聞かないから諦めてくれ。ハンネは何回言っても成長しないからな。身長や胸とおなじように」

「トキくん、私だって好きで小さいんじゃないんですよ？ 小さくてもせめてレンちゃんみたいに胸だけは大きかったらトキくんもすこしは触るの躊躇してくれるんですけどね」

うーんバランスがあるだろ。

「おにーちゃんさわる?」

レンが俺に両手を広げてきた。

「ハンネこつ言うつふうになるからそれ以上話すな。ついでにハク。お前何服脱ごつとしてんだ」

「ご主人さまがロストメイデンしてくれないからどうしようかと思  
いまして」

「どうもしなくていい。てかお前なんで最近人型サイズなんだ?」

「いつご主人さまが襲ってきてもいいようにですねー。努力をして  
みました」

「いらん。もうちょっと恥ずかしさを学んでくれ。とりあえず俺は  
寝る」

そう言って、机につつぶせになった。

「ねーそういえばなんであんた、あんな魔法使えるのよ? あれは  
反則的よ?」

寝させてくれないのかエラ。

「使えるもんは使えるんだから仕方ないだろ」

「素っ気ないわね。昨日は大声であんな恥ずかしいこと言ったの  
に」

昨日のあれか…。

「まあな。だが事実だ。恥ずかしいが今生徒会を解散させるわけにはいかなかったんだよ」

「トキくんっ！！ 解散ってなんですか！！？」

「そっぴゃこいつ知らなかったな。」

「あーでも説明めんでー。」

「気にするなハンネ。お前の成長率くらいな謎もたまには在ってもいいだろ？」

「ぷくーっ」と膨れるハンネ。

「そんなことを言うトキくんにはこれをお渡しします」

「なんだこの紙の束？」

「っってお前！！？ また任務受けたのかよ！！！」

毎日見るあの紙だ。

「ねえ、ちょっと話あるんだけどいい？」

エラが話しかけてくる。

「おお！ いいぞ？ っことで俺は出かけるから、じゃー！」

言い終わるとすぐに俺、エラ、レン、ハクは消えた。

「ああー……！！！！？ トキくん仕事ー……！！」

ハンネは叫んだ。

そしてアルを見て言った、

「じゃ、アルくんよろしくおねがいますね」

「トキにゃー……ん……！！！！ ワイを生贄にしようたなー……！！！！」

そう叫んだアルは、任務受諾書に押しつぶされた。

そのころ俺は第一地区を歩いていた。

「お？ エラちょっと俺あその果物店に行って来ていいか？」

「いいわよ？ それにしてもトキが果物好きって言うのも意外ね？  
何買うの？」

返事をする前に俺は果物店に走って行った。

「……………」

俺は戻ってきたが何も持っていない。

「…あんなにしたの？」

すごいジトつとした目で、エラが見てくる。

「なにって果物買ったんだけど？」

うん。ちゃんとお金払ったからね？

「なんで店の品物全部買ってんのよ！！！！？」

「いや、収納しとけばどうせ劣化しないからいつ買ってもおなじだ  
ろ？」

いつ渡ってもいいように、着々と準備を進めている。  
って言ってももう5年分くらい収納してあるが。

「相変わらず非常識なことするのね……」

溜息をつきながら、そんな事を言ってくるエラ。

「金ばつかたまって使わないのもったいないだろ？　ってか、エラ  
話あつたんじゃないのか？」

その為に来たんだぞ？

「そうね。私の…両親に会ってほしいのよ……」

そんな事を言ってきた。

「いや、エラ。まだ早いぞ？　お前とはまだキスもしていないぞ？  
いきなり結婚はない」

うん。

「ないないないないばー！ー！ー！バキッ」ぶふっ！ー！？」

俺がムカツク顔でいないいないバーしたら殴られた。

「ちがうわよ！！　ただちょっと帰りたいから一緒に行ってほしい  
のよ！ー！ー！」

真っ赤になって杖を抱きしめながら怒るエラ。

「先に言ってくれ…、俺は理不尽に殴られたぞ…？」

にしても、コイツはなんで属性付加させて殴るんだ？  
はつきり言っつてめっちゃくちゃ痛いぞ？

「あんたがムカツク顔するからでしょ…！？」

ちよつとしたジョークなのに。

つてコラレン…！ 俺のマネするな…！？

それは女の子がやっていい技じゃない…！

「まあいいけどさ。で、どこにあるんだそこ？」

「クローク王国のはずれにあるわ。バウムガルドから馬車で4日くらいね」

バウムガルドってレンが居たところか。

「ふーん、じゃあお前の龍に乗っていけばすぐだな。そついやお前白龍どこ行つたんだ？」

最近全然みてないぞ？

「それならここにいるわ。」

そつ言っつてエラがいつも持っている白いカバンを開けた。

「くふーー」

中から30センチくらいの白いちび龍が出てくる。

「なんかスゲーかわいくなつたな。しかもちゃんと龍だぞ？ 他のやつは面影がないほど変わってるって言うのに」

うん。レンもシロもきーちゃんもにわちゃんも明らかに面影がない。

「それはあなたたちが特殊なのよ。普通化身使って言っても、子供の時に戻るようなものよ？」

つまり子供の時はあれなのか？

白い犬がケルベロスや鶏がフェニックスになるっていうのか！！？  
レンはかわいいから許す。

「じゃあお前の家行くならあそこの菓子店買ってくるわ」

そう言って、走って行く。

「ちょっとあんた！！？ 店じゃなくて品物買いなさいよ！……！……！」



## どこかの上空

いま俺達は、レンの背中でのんびりしている。

別に白い龍でもいいんだけど、それだと風が防げないのだ。レンは空間に干渉しているので、速いのに向かい風がない。長時間飛ぶには白龍じゃきついのだ。

「にしてもレンは何ですっごい大きくなってるの？」

もっともだな、5メートルくらいだったからな。

「なんか成長したらしい、でもこれでも全然子供らしいぞ？ 大きくなるも星一周する大きさって言ってたし」

ホントは再構成されちゃったんだけど適当に誤魔かした。

「ずいぶん早い成長ね…そんなすごい龍じゃ白龍がおびえるのも無理ないわ」

カバンのなかで白龍はぶるぶる震えている。

「まあなー、俺より強いし。てか、そろそろなんじゃねーの？」

バウムガルドから、レンを使って数時間飛んだ。

速度が速度なので、すぐ着いてもいいはずなんだが…。  
相変わらず、一面森だ。

「そだね、あ、ほらあそこよあそこ！！」

エラの指さした場所を、目を凝らして見てみる。

「何もないぞ？ お前の家族はホームレスか？」

ホント何もない。

少し木々が開けた場所があるだけだ。

「何言ってるのよ！！ とりあえずちょっと手前におりて！ 家が潰れるわ」

「レンここに降りてくれ」

『クギヤア』

一回吠えて、下降をはじめてくれた。

『ズドオオオン』

レンの着地時の振動で周りの木がどんどん倒れていく。  
まるでドミノ倒しのようだ…。

「よかったわ…手前で降りておいて…」

家付近だったら、風圧だけでも家を吹き飛ばしていたらろう。

「レン戻っていいぞ〜お疲れさま〜」

レンが人型に戻って抱きついてくる。

「とりあえず行きましようか？ 上から見たから方角はこっちね」

俺はエラの案内について行く。

### 5時間後

「おい！！ おまえの方向音痴はトンボレベルか！！？」

もう5時間近くは歩いている。

せつかく早く着いたのに辺りは暗くなっていた。

「……計画通りよ。ホラ？ なんかあつちに明かりが見えるでしょ

？ あれだと思つ多分」

たしかに見えるが…。

お前なんで今まで気づかなかつた？

「いくわよ。早くいかないと夜になつちやう」

もう十分夜だ。

俺達はもう一度歩き出す。

更に二時間後

「ついたわね…」

やっとなつた…。

「ああ…光が見えてから二時間も迷うとは思わなかった。どうやら目的地がみえて全然違う方向にすすむんだ？」

エラがこつちのほう將近道とか言つて、いろいろ行かされた。どう考えてもまっすぐ進んだ方が近道だろ？

「たまにはそう言うこともあるわ。許してあげる」

まるで俺が迷つたような言い方だな？

「おい。俺はお前の後をついてきたんだぞ？ 迷つたのはお前だ」

「だらしないわねー。男性は女性をエスコートするものよ？」

これが俺の話を全く聞かないで進み続けた女の発言か……。俺は真つすぐ行くと言つたぞ？

「もういいや…、さっさと入るぞ。お前の家だろ？」

もう疲れた、俺はエラを促した。

コンコン

エラはノックをした。

「おかあさーん。いるー？」

おお、エラがお母さんって呼ぶのは斬新。

しほらへこつて

バンッ

勢いよくドアが開き。

ガバッ

中から二人の人影が、エラに抱きついた。  
違ったらどうするつもりなんだって速度で。

「エラちゃーーーーん!!! おかえりなさーーーーい!!! 会いたか  
つたよーーーー!!!」

「おねえちゃんーん！！ おかえりーん！！」

そう言っつて、エラに抱きついた30歳くらいの女性と、8歳程度の少女。

もうエラの家族だつてわかるね。

だつてまんまエラを小さくした少女とエラ+15歳くらい歳をとつた母親。

エラのようなキレイな漆黒の髪に瞳、色白い肌。

「ただいまーお母さん、アマンダ」

そう言っつて、ほほ笑み会う家族  
いい家族じゃないか。

そして、いきなりこつちを見る二人

「あら〜？ エラちゃんの恋人さん？ カッコイイ子ね？ でもエラちゃんだめよー？ この年で女の子を二人も侍らせているってことは大人になつたら100人くらい侍らすわよ？」

「おにーちゃんん？ おねえちゃんと結婚するの？」

盛大に勘違いしてるぞこいつら。

「何言つてるの！！？ 私は違うわよ！！ あとこのほかにも三人侍らせてるわよ！！？ あとメイドを20人くらい」

おまえ、完全に自分だけ逃げて俺売つたる？



ああ！！ ほら！　すごい汚い物を見るような目になった！！

「はじめまして。トキキキサラギです。右は俺の使い魔のレン＋左は魔道具のハクです」

とりあえず説明しておいた。

「あら？　人間を使い魔と魔道具にするなんてエッチなのね」

ちっげーよ！！！！　何この人！？

「いやいや。普通に化身がこの形体なだけです。ちなみに自分で選んでいませんよ？　最初からこれでしたから」

必死な俺。

「そうですかー、わかりました。　私はアレグラ・バドル・クロークです。」

「私はアマンド・ハリア・クロークですおにーちゃん」

ん？　ちょっとまでおかしくないか？

「エラ。この人たちと家族だよな？」

「ええ、そうよ？」

「そしてお前の名前は？」

「エラ……、エラ・ハリア・クロークよ」

「こいつ偽名だったー！ー！！？  
そういや、最初会ったとき偽名だと言ってたわこいつ！  
まあそれはいい。偽名なんて自由だ。  
だがね、これは…。」

「エラ。この国の名前はなんだ？」

「そうだ。」

「これがあり得ない。」

「クロー……ク王国よ」

「もう一度」

「だからクローク王国よっ！！」

「つまり？」

「わたしは……第一王女エラ・ハリア・クロークよ」

「やっぱりそうかー！！！！？」

「まあでもいいや。」

「だっておかしいでしょ？」

「この小さなログハウスに住んでるなんて？」

「絶対問題ありだよこれ？」

「あらー？ エラちゃん言ってなかったの？ でも私たちにはあまり関係ないことだから気にしないでね？」

「関係ない？」

「そうね。とりあえず入って。そろそろ夕飯の時間でしょ？」

「あらー？ でも私たちはもう食べちゃったわよ？」

夕飯どころじゃないぞ？ もう寝る時間でもないと思う。

「気にしないでください。飯は持ってきているので」

「そうなの？ でもどこにもないようだけど…？」

そう言っであたりを見渡しているアレグラさん。

「まあ大丈夫です。ちゃんと持ってきてますよ。中でお見せしますから。では、失礼します」

俺は中に入った。

軽い雑談をしながら夕食をとる俺、エラ、アレグラさん、アマン  
ダちゃん。

夕飯は食べた。と言っていたが、一緒に今も食べている。  
しかも、かなりの量をたいらげている。

さきに食べ終えたアマンダちゃんは、俺がだした大量のお菓子を  
レン、ハクと一緒に食べている。

まだ食べるのかあの子。

俺は20人前くらい夕食を出したんだぞ？

もちろんエラの希望のあの店だ。

これだけでも数百万はいつているだろう。

出した時はアレグラさんも驚いていたが、調理後すぐに収納した  
熱々のご飯を見て

よだれを垂らして俺を見つめてきた。

30歳でよだれを垂らすっていうのもどっかと思うが…。

食べていいと言つと、すごい勢いで食べ始めた。

もうほとんど20人前がなくなっている。

「あつ、そうだ。トキさん。お風呂入らない？ 実はうち、お風呂  
だけは自慢できるのよー。裏に露天風呂があつてね。自然の温泉よ  
？」

そう言いながらにこにこ笑っている。

でも自然の温泉っていうのはいいな。

日本でもほとんど行ったことがないからな。

たぶん小学校以来かな。

「じゃ、いただきます」

「え？　だめよ？　私は既婚なんですからそんなこと」

「まってください！！！？　なんで言葉をそのまま読むんですか！？　普通にお風呂に入るってことですよ！！！」

なんでそっち方面にもっていくんだ…。

「そうなのー？　じゃあここを出ておうちの裏に回ればすぐだから、行ってらっしゃい？」

「では、失礼します」

そう言って、俺が出ようとするよ。

「おにーちゃんレンも行くよー？」

「ご主人さま私も行きます」

レンとハクが腕に抱きついてきた。

「はいはい、じゃあおいで」

後ろでアレグラさんが犯罪者見つけたとばかりに見てくるが気にしない…。

数分後

「あゝさすが自信あるだけはあるなーこれ」

「ですね〜自然は最高です〜ご主人さまが神になったら原泉でも創造してくださいー」

「きもちーなんだかねむくなっちゃうー」

三人でお風呂につかっていた。

結構広がった。

5メートルくらいの広さはあるかもしれん

ちゃっちゃと体を洗って、ついでにレンも洗ってやって温泉に入った。

レンが自分で髪を洗うとめちやくちや痛むから俺が丁寧に洗ってやる。

体を洗うのもすごく適当にあらうので俺がキレイに洗ってやった。

ばつちいままで風呂に入るのは許さん。

別に何もなかったんだからね!!

「それにしても、ご主人さまは慣れましたね」

「なにがだ〜?」

「わたしとレンちゃんと一緒にお風呂に入ることですよ。最初はすごい嫌がってたのに」

「そりゃなー…毎日お前らがあらゆる手を使って乗りこんでくるから慣れたよ」

「でも元気ですよー? ほら?」

ふにふに

「さわるな…。はぁ…、でもそう言つのも慣れたなー」

くすくす笑いながら、つついてくるハクとレン。ってレン!!!??

「おい!! レン!!!? お前は何をしているんだ!?!」

レンは始めてたぞ!?! なに毒されてるんだ!?!?

「ハクちゃんがいつも触ってるからなんなのかなって」

首をかしげているレン。



「レンはそう言うことしちゃだめだぞ？　ハクはちょっとおかしな子だからな」

そう言うのと、むーと頬をふくらませるレン。

「ていつー！」

バシヤッ

そう言って、俺の腰のあたりに座り抱きついてくるレン。

「レンもこうなるかー…、ハクと一緒にだから時間の問題だとは思ってたけどなー」

ガラララー

その時、扉が開いた。

後ろを振り向くと。

エラがいた。  
なんか額に青筋が見えそうな勢いのエラが。  
もちろん裸だ。

「自分の使い魔とそう言うことする人も珍しいわね？」  
すごく汚いものを見る感じで吐き捨てられた。

「エラッ！！？ 違う！！ と言うかだな？ お前なんで入ってきた！！？」

こいつはだめだ！ こいつとは一緒に入っちゃまずい！

「それはこの空気を壊させるなど言うことなのかしら？」

「ちげーよ！！ おまえと入ったら犯罪だ！！ 無理！ 早く服を

きるー!!」

「でもレンとハクとは入ってるじゃない？ それに…わ、わたしよ  
り…お、大きいし!!」

うん。エラはCくらいだ。

レンはDくらい、見た目は12歳くらいだが。

ハクは14歳形体でDかEだろう。

こいつらは人間として超えちゃいけない所までいつている。

だって人間じゃないもんこいつら。

「ちげーよ!! お前は明らかに見た目が同年代なんだよコイツら  
を見てみる!? アンバランスだが見た目的には明らかにちっちゃ  
いだろ?」

どう頑張っても140台の身長だ。

エラは160近い。

「問題は身長じゃないわ!! 胸よ!! それが正義なのよ!!?」

何を言っているんだコイツは!!?」

なんでそれが正義になるんだ!?

「と言うか私だって平均くらいはあるのになんで…?」

自分の胸を見下ろし、しょんぼりしている。

「なんで? って聞かれても人間じゃないんだから人間の平均では  
計り知れないだろ?」

真っ赤になって頬をふくらませるエラ。

て言うか体つきが違うんだよエラさん。

確かにコイツらは胸はでかいかもしれないが、体つき事態は少女のそれだ。

だがお前は明らかに女性方面に近い。

それは犯罪になる。

少女でも犯罪になるんだが刻は理解していない。

「はぁ……もういいわ、トキだし。」

そう言ってかけ水をして入ってくるエラ。

「さて、エラ。お前はそれだけで体の汚れが落ちるとでも思っているのか？」

「は？」

何を言っているんだと。

「神聖な風呂に入るには体をキレイにするという儀式が必要なんだ」

俺は先に体を洗う派なんだ。

「別に温まってからでも良いじゃない？」

わかってないなコイツは。

「レンちよつとここでまってるな？」

そう言つてレンを少しどける。

風呂につかつていたエラを抱き上げる。

お姫様だつこだ。

「ちよつ！！？　ちよつとなにするのよ！！？」

真つ赤になっているエラ。

だが、俺はエラを近くの岩に座らせる。

かけ水では汚れも、穢れも、瘡気も落ちない。

「いいか？　まずスポンジに液体石鹸を二プツシュだ。これは途中で泡がなくならない為と、キレイに洗うための量だ」

そう言つて、二プツシュし泡だてる。

「泡立てたら次は左腕から洗うんだ。左利きなら右からでいいからな？　左腕　右腕だ。心臓付近は最後だ」

そう言つて俺は、エラの腕をキレイに洗う。

「次は脚だ。これも左足から洗う。爪の間も足の裏もキレイに洗うんだぞ？」

「ちよつ、ちよつと待つて！！？　なんであなたが洗ってるの！？」

文句を聞きながらも、両足をつま先から根元まで丹念に洗う。

「次はもつとも重要な胴体だ。首から洗うのがいいだろう。あと耳の裏は汚れが付きやすいからキレイに洗うように」

そう言って、首もとから上をこすりあげてやる。

「はふっ…耳は待って!」

全く待たない。

「あとは簡単だ上から徐々に洗っていく。下から洗うと上からの汚れが流れてしまうからな。背中是最後だ。ちゃんと脇まで洗うんだぞ?」

俺は脇も洗ってやる。

「まって脇はくすぐりたい…ひゃ…くすぐりたいって!」

どんどん洗っていく。

「まって…あんっ…胸まで? あうー…んっ」

真っ赤になっているがそれどころではないぞ?

キレイにする。

さて、ここも重要だ。

「最後に一番汚れが溜まりやすいここを『バキッ』こぶっッ!」

バシャーーーーーンッ

手をかけたところで俺は温泉の中にまで吹っ飛んだ。

「あ、あんたは変態か!!!? な、なんで……まで洗おうとするのよ!!! あとは私がやるからいいわ!!!」

ぶんぶん怒っているエラ。

「ご主人さま、私やレンちゃんと同じようにしないほうがいいですよー? 普通の人だったら自尊心とかが大幅に減少しますのでー」

俺は温泉の底に沈んでいる。

「おにいちゃん、ん大丈夫?」

レンが抱きあげてくれた。

「ああ……俺の神域に対する思いが生んだ不幸だ」

だが俺は満足だ……ふつ。

チャプツ

暫くし、

「はあー、あんななんであんな人が変わったようになったのよ？」

エラが体を洗い終わり、風呂にはいつてきた。

「いやー、お前があまりにも風呂を汚すような真似をしたから抑えられなかった」

「私が汚れてるってこと？」

「ああ、一日たったら超汚いぞ？」

隣を見てみると、鬼の形相のエラと目が合った。

なぜだ!？

「はあー…もういいわ。あんたは変わってるしね。全くいやらしいことを考えないであんなこと出来るなんてある意味すごいわ」

溜息をつきながら言ってきた。



「いえー、エラさん。ご主人さまは洗ってる最中ずっと元気でしたよ？ お風呂に入ってからずっとですので、すごい持続力です」

おいハク。

お前は俺を殺したいのか？

俺達はしばらく無言で風呂に入っていた。

「ねえ、トキ」

唐突にエラが話しかけてきた。

「なんだ？」

「なんで王族の女王と王女がこんな所にいるか聞かないの？」

「んー、聞いてほしいのか？」

目を見開くエラだが、ふっと笑って。

足を伸ばすように、空を仰ぎ見た。

「そうね、聞いてほしいのかもしれないわ」

上を向いたまま、そう言ってきた。

「じゃあ話せ。適当に聞いてやる」

その気遣いがエラにはうれしかった。

と、俺は思った。

だってさ、俺の立場だったらそう思うからね。

これが小学生が先生に言われるあれか。

自分がされて嫌なことはするなって言うヤツ。

「私たちはね、捨てられたのよ」

そう言って、エラは悲しそうな顔をする。

「私たちはね、小さい頃に命からがら逃げたの。王の殺しの命令でね」

王ってことは父親か。

「王は実力主義だったの。階級や役職などもすべて実力主義。強きものを育てるために税金もすごい高かったわ」

兵士は維持にも育てるにも膨大な金が必要とされる。

武装や食糧や訓練場、更に泊まる施設や強い兵士なら給料も多いだろう。

「民は戦場に駆り出され。捨て駒としてたくさんの人が死んだわ。いままで制圧した国もすごい数で、どんどん強くなり。広くなり。感染症のように広がって行った。国としては一番大きな国でしょうね？」

国を落とせばそれだけ強くなる。

最初は大変だが勝ち続ければどんどん制圧も楽になってゆく。

「完全な独裁者だったわ。気分が悪いという理由だけで街において、数百人単位で殺したりね。税金を払えなかったら殺したり」

んー、でも……。

「よく民は逃げないな？ そんな国で」

「逃げたわよ？ でも追ってきて殺されるのよ。強大な国だから他の国もすぐに亡命して来た人を差し出すわ。そして、結局は理不尽な国で一生を過ごすしかなくなるの」

エラは泣いていた。

泣きながら話していた。

「そして王は最強の後継ぎを求めて、お母さんと結婚したの。魔力がすごい強かったお母さんとの子供なら、強くなるだろうと。そして私とアマンダが生まれた」

でもエラからもアマンダからも強い魔力は感じないが…。

「私たちは普通の子供だった。ただ無邪気なだけの子供。王は最強の男の後継ぎがほしかったのよ。あなたのようなね？」

そう言って、こちらを見てふっ、と微笑んだ。

「王にとって私たちなどゴミ屑同然だった。魔力は平凡よりちょっと高い程度、しかも女。邪魔以外の何でもないわ？ それで兵士に命じて殺そうとしたの。でもお母さんは私達を愛してくれていた。お母さん側の兵士にその情報を聞いて、お母さんは私たちをつれて逃げたわ。国は無理だから深い森の奥へ。母さんに情報を与えてくれた兵士は殺されちゃったけどね…」

エラは嗚咽をあげず、ただただ涙を流していた。

「だからね、私は守らなくちゃいけないの。助けなきゃいけないの。王女として、国民すべてを。あの悪魔のような王から。だから私は魔法学園にいつて必死に学んだ。一人でもね。やらなきゃいけないと思ったの。あの王をなんとしても止めなければいけないとおもったの。私は、私の人生の全てをかけてあの王をとめなければいけない。国民の幸せを一番に考える第一王女エラ・ハリア・クローク。それが私のすべて」

ぐちゃぐちゃに顔を歪めながらも毅然として話すエラ。

王女としてのエラ・ハリア・クローク。

こいつのすべてを受け入れよう。

包み込もう。

羽ばたかせてやろう。

これが最後の子供の悲願。

俺が巢立たせるべき雛。

ならば巢立たせてやろう。

俺の愛しい雛たちよ。

天高く舞え。

導いてやろう高みまで。

例え俺が

殺戮者になっても。

ハク、聞こえるか？

『なんですか？ ご主人さま』

最後の雛だ。

終わり次第渡ろう。

『……そうですか。がんばりましょうねご主人さま。我らの愛しい雛たちのために』

そうだな。

まだ神にはなれないが、渡り鳥くらいにはなれるだろう。

『はい。育てて渡る。それがご主人さまのこの世界での勤めでございませう』

では、行くところか？  
神の従者よ。

『はい。行きましよう我が神 如月 刻様』

「エラ、俺は出るよ。のぼせそつだ」

そう言うと、エラはお湯を一度顔にかけ、ほほ笑んだ。  
痛々しい笑顔で。

「そうね。私はもうちょっと入ってるわ。先に寝ててもいいわよ？」

「そつみせてもらひよ」

バシヤッ

そつ言つて俺は湯船を出た。

エラの家

ガチャ



「あら、トキくん？ もう出たの？ エラちゃんに変なことしちゃダメよー？ したら責任とってね？」

そんな事を言いながら、微笑んでいるアレグラさん。

確かめないとな。

『Acht Punkte der Sterne』

《八点星陣》

不可視と音声が無れない結果は、俺とアレグラさんを包み込む。これで外からは見えないし、声も聞こえないだろう。

アレグラさんは驚いたようだが、俺の顔を見てなにかを悟った。

やはりこの人は女王だ。

人の上に立つ資質を持っている。

「聞いたのね？ エラちゃんに」

「そうですね。聞きましたよ」

「そう……。それで私に何か？」

「そうですね。確認したいことがあるだけです」

「確認？ ですか？」

首を傾げるアレグラさん。

「そうです。あなたは女王として何をしたかったのですか？」

少し黙り込むが…。

「私ですね。小さな国でもよかったです」

一旦口を閉じ、続ける。

「今みたいな大きな国じゃなくても。それで国民が幸せに過ごせるならそれでよかったです。それであの子たちと幸せに暮らしたかった。それだけが望みだったんです」

そう言い、寂しそうに俯いてしまった。

「あなたは今の王に不満がある？」

だが、俺はまだ聞かなくてはいけないことがある。

「そうですね、無理やり結婚させられた事については、今では何も思っていない。ただ、あの子たちを亡き者しようとした事については、強い怒りを感じます。そして、今の国民に対する酷さ。あの国は今や、地獄です。いずれ取り込まれた国もまとめて滅ぶでしょう」

「あなたは国を取り戻そうとは思わなかったのですか？」

「はい、私だけならば殺されてもよかったです。確かにあの子たちも殺されるでしょう。それだけは避けたかった。国民を見捨てて我が子を守る愚かな女王です」

悲しそうな顔をしながら話す女王。

ま、及第点か。  
決まりだな。

「では、王都に王はいるんですか？」

俺は更に言葉を続ける。

「いえ、王都から少し東に、王が住む城があります。あの…何をするつもりですか？ あそこに数万人の兵がいるんですよ？」

「いえ、ただ聞いてみただけです。ちょっと夜の散歩がてら王都にも行こうかなと」

「そうですか、気を付けてくださいね。」

「はい。レン、ハクいくぞ」

俺は後ろで控えていたレンとハクをつれて外に出る。

そこで、

『Raumverbindung』

《空間節独》

そして俺はその場から消えた。

王都

「ここが王都か？ 兵士ばっかだな。」

女の店員にいやらしいことをしたり、町中で剣を打ち合ったり、血の跡がそこらじゅうに染み付いていてひどい有様だ。

「ですねー、でもここには用がないですからね。さっさと行っちゃいましょう」

「ああ」

王都は来る途中に見かけたから来ることだ出来たが、城へは移動できない。

俺は少し離れてレンで移動することにする。

「レン頼む」

レンは龍の姿にもどり、おれはレンに飛び乗る。

「行くぞ。ここから東に一直線だ城が見えたら降りてくれ。」

数十分後

俺達はレンから降りて歩いていた。

「ご主人さま、今から行って全員殺しちゃうんですか？」

そんなことをハクが言ってきた。

「んなわけあるか！ここでつぶしてもなんも意味がない。こいつらに圧倒的な戦力を用意してもらって、映像水晶でそれを流す。そしてエラ王女の兵として殲滅する。そうすれば名声名実ともにエラが女王だ。王を殺すかどうかはエラにまかせる」

ホントはエラが兵を率いて倒せばいいが。  
敵は数十万。

エラ一人では無理。  
更にどんな国が味方につこうとも無理だ。

「ふーん、じゃあ宣戦布告ってやつですね！ かつこよく演説してください」

くすくす笑ってハクが言うてくる。

「適当に行きあたりばったりでいくよ。気分の問題だ」

気分屋だからな俺は。

「あつ！ あれですよねー？ でっかいお城がいっぱい立ってますよー夜なのに兵士がいっぱいいますね？」

ハクが指さした方向には、

真ん中に大きな城が立っており、周りに城のような建物が数個ある。

所々光を放っている。

兵士の見張りも500人くらいいるんじゃないかこれ…。

「あーめんどくさい。気分変更。城一個つぶして兵士に伝言しようかな」

「派手にいきましょー！ー！ 楽しみですねー我が主の演説」

相変わらずくすくすわらってやがる。  
遊んでるなーコイツ。

「じゃあいくぞ。レン、ハク」

そうして俺達は、城に近づいていく。  
真正面から。

「おい！！ お前たち！ 何しにきた！！ ここは王の城であるぞ  
！？ 即刻立ち去れ。さもなければ殺してでも去らせてやるっ」

死んだら去れねーだろが！  
てかめんどうだ。

『Ich belasteb』

《重ヲ為ス》

空間の質量は1キロトン。  
千トン位あれば城が潰せるかな？

『ズドオオオオオン』

重すぎたっばい。

「あーあ、ご主人さまめんどくさくて城と一緒に兵士まで同じ技あてましたね？ 地中のどこらへんまで埋まってるか知りませんが確実に死んでますねー」

あーそうだった、てか俺的にここの兵士などどうでもいい。

あの町の兵士の惨状みちゃうとなー。

ご愁傷様です。

俺は城の瓦礫の上に歩きだす。

轟音に驚いた兵士がわらわらと出てきて、俺に魔法を放つがレンがすべて消し去る。

相変わらず頼もしい相棒だな。

城の瓦礫の上で立ち止まり、

俺はめいっばい息を吸い込み、叫ぶ。





「十分だ、じゃ、頼む」

「わかったおにーちゃん。集まったら褒めてね？」

「ああ。さて…」

「帰るぞ。二人とも」

二人が俺の腕に抱きついてきた。

次の瞬間、

その場から三人は消えさった。

### 三二話 クローク制圧

#### エラの家

「なあエラ、この後ちょっと出かけたところがあるんだけどいいか？」

朝食を食べながら聞いてみた。

「ええ、別にいいわよ？ っって行っても、ここら辺なにもないわよ？ 王都だって治安悪いし」

まあ、あれじゃ女の人なんか絶対外に出れない。

「んー、ちょっと行くところがあってな。昨日散歩行った時に約束してさー」

うん。嘘ではない。

宣戦布告っていう約束した。

「わかったわ。私もいつていいの？」

「ああ、あとお前この服着て行け」

そう言つて、空間からエラの制服をとりだした。

「…あんたいつのまに制服盗んだの？」

失礼な！ 俺はちゃんとメイドから予備を持ってきたんだぞ！

「予備の奴だから新品だぞ？」

「まあいいわ。これ結構恥ずかしいんだけどね」

この服は白と金の装飾だから、どこかの聖騎士のよつだ。  
ちようどいいだろう。

俺は時間の倍率をあげ一気に着替えさせる。

ふにゅん

うーん、やはりレンとかハクより小さいな。  
着替える最中に触ってみただ。

そして着替え終わらせ。

時間を戻す、

「え！？ あんた今時間とめた！？ なんで着替えさせるのよ！！  
？ 自分で着替えられるでしょ！！？」

そう言っつて、体を自分で抱きしめて上目づかいで睨んでくる。

「いや、大丈夫だ。ちゃんと下も洗ったよ『ゴキッ』げふうっ！！」

なぜだ……？ なぜ俺がこんな目に！！？

「と言うか何でそこまで見るのよ！！？ 下着着替える意味ないで  
しょ！！？」

「いや、一回脱がしてもう一回穿かせただけだから着替えてはいな  
いぞ？」

うん。一回裸にして、キレイになってるか調べてもう一回穿かせ  
た。

だつて全国に流すもん。

映像。

裸は流さないけどさ。

「な、なんてことしてくれてんのよ！！？ 触ってないでしょうね  
！！？」

真っ赤になってキツッと睨みつけてくる。

「うん、隅々まで触って見て調べた」

「うっ……なんで私が……」

「安心しろ。俺のお気に入りに入りフォルダに保存しておいたから」

そう言っつて、指を立てる俺。

ボキッ

その指をへし折ったエラ。

「ツツ!!!? おまえ……!!!? なぜ? なぜ俺がここまで親切にしてあげたのにこんな仕打ちを!!!?」

まじ、意味わからないこの女!

再構成しないとだめじゃん!

幻惑で応急処置だけすっかな……。

「何が親切よ!? ただの痴漢じゃない!!? 汚された!!? 汚されたわ!」

何を言っているんだ?

「安心しろ。むしろ少し汚れてたところをふき取ってやったぞ? 生理ならそうと言っ『バキッボゴッ』ッはっ!!--」

なぜだ!!？

「決めたわ!! 結婚しましょう!! もうお嫁に行けないからもらってもらうわ!」

そんな事を宣言された。

「いや、ダメだ。早まるな。俺はまだ自由なドーターウィザードでいたいんだ!!」

俺は家の外に走りだした。

「あ! 待ちなさい!!」

エラがそれを追いかける。

そして出たところにレンとハクがニッコリとしていた。

「え?」

そして、次の瞬間四人は消え去った。

広原

「ってかなんでこんな広原の真ん中につなげるのよ!!!？」

王都と城の間に俺は飛んだ。

「いや。ここが目的じゃないぞ？ レン、戻れ。あとハクこれ持って」

レンが元の籠に戻る。

ハクには、昨日の夜学園長に頼んで、全国放送出来るようにした映像用水晶を渡した。

「レン乗せてくれ、ハクは俺が指示したら撮れ」

俺はハクとエラを横に抱いて、腹ばいになっているレンに飛び乗った。

「って、どこいくのよほんと」



「まあ、あとでわかる。 レン、不可視状態で城の西に飛べ」

『グオオアアアア』

バツサバツサ

レンは飛び上がり、高速で飛翔する。

高原上空

「にしてもすごい兵士だなこれ、数十万人くらい居るんじゃないか？」

下を見ると、すごい数の兵士がいた。

「そうですねー、色が違うので、他の国にも要請かけたんじゃないでしょうか？」

ハクが分析した。

「あ、あんた何するつもり！？ まさかこれ相手に私たちだけで闘うって言うの！！？ 絶対無理よ？ 人数が多すぎる！！！」

青ざめて、叫んできた。

「いや、俺達だけじゃないぞ？」

うん。別に俺だけでも勝てるかもしれないが、できるだけ殺したくないからな。

逃げる奴は逃げてほしい。

「私たちの他に誰がいるの？」

「うーん…誰かっていうかなんというか。まあ見ればわかる」

うん。人間じゃないし。

「レン！ 用意していた増援を！！」

『ガアアアアアア』

俺の言葉に、レンが一鳴きする。

『グアア』

『グエア』

『ギユアア』

『グオオオ』

いたるところから、龍の音がする。

ぼっんぼっん

ぼっんぼっんぼっんぼっん

「ひっ！！？」

エラが杖を構えようとしたので止めた。

「アホか！？ 仲間打ち落してどうすんだよ！！？」

「これが仲間！？ だって龍よ？ 何匹いるのよこれ。向こうの景色見えないじゃない！！！！？」

レンの後ろを飛んでいる龍は、約500匹弱。

レンの話ではこの世界にいるすべての龍らしい。

300とか言ってたが、すべて揃えるとはやるな。

普通龍は、契約者以外には忠誠を誓わない。

そして好戦的である。

だから任務にもたびたび龍討伐があるのだ。

しかし、龍にも序列は存在する。

基本＋派生の7種類の龍は光と闇の龍に従う。

そして、光と闇の龍はレンに従う。

それで集めた龍がこれだ。

「あ、そう言えばお前の龍もいるぞ？ ホラあそこに」

そう言って、俺が指を指す。

「ちょ、ちょっと！！？ なんであんたの命令に従ってるのよ！！」

「？」

「優雅に飛んでいた。」

「あー、契約者より俺の方が上位だからじゃないか？」

「しょぼーんとしているエラ。」

「まあいいや。レン。あそこに降りるぞ！！ アップ・ザーゲ」

「そこは、兵士の最前列より3キロくらい先だった。」

『グオアア』

レンは不可視を解除して下降を始めた。

『ズドオオオン』

『ドオオオオオ』

『ドゴオオン』

レンに続いて兵士に向かい、6列に龍が降りる。

「レン、俺の後ろに続け、ハク記録開始。エラ俺の前を歩け」

龍達は三列に分かれ、真ん中に道を開く。

そして、すべての龍が頭を垂れる。

その様子をハクがすべて記録する。

「では、エラ・ハリア・クローク王女殿下どうぞ」

と言って、俺は真ん中を歩くように促す。

一応放送されているので敬語だ。

すこし戸惑ったようだがエラは歩き出す。

そして小声で話しかけてきた。

「よくあなたこれだけの龍を集められたわね。しかも私に敬礼してるわ。なんだか壮絶ね」

ちなみに敬礼しているのはレンとレンの主の俺にであって、多分エラが命令しても聞かない。

「まあな、この世界の龍すべてだ」

「全部っ！！！!?」

と叫んだ。

「でかい！ 声がでかいって！ 一応放送してるんだからな。お前は王女だ。ちなみに最初は俺が演説するから、終わったらお前な」

多分、最初コイツにやらせたら緊張で何も言えないだろう。

「わ、わかったわ。でもこの状況どう考えても私の方が位が低くみえるわ」

うん。確かにな。

「ちなみにあの龍って私の命令も聞く?」

不安そうに聞いてくるがすまん。

「たぶん全く聞かない。俺とレン以外だと無理だな」

頬をふくらませているエラだが仕方ない。

龍は上位か自分より強い力の奴の言うことしか聞かないからな。

「仕方ないだろ？ まあ代わりに俺がお前の騎士って設定だから。俺が龍に命令しても怪しまれはしないだろう」

「でもトキが騎士かー……えへへ」

怪しくにやにやしているが、まあいい。

「そろそろだな。あと、お前は王女だからあんま闘わなくていいかな？ おまえが少しでもやられたらそれで終わりだ。王女は象徴だ。まあ龍はレンと俺がやられない限り士気は落ちないが、民衆の支持が落ちるからな。あと多分惨いことになるから。見たくなかったら見るな。だが毅然としている。上空でも見ていけばいい。まっすぐ前を向いていければ雲を見ていてもいい。」

こくこくとうなずくエラ。

コイツには人殺しなんてさせたくない。

汚れるのは俺だけで十分だ。

出来れば俺が殺す姿も見てほしくないがな……。

最後、上空でも見ていければ良いつて言うのは、俺がそうしてほしいからだ。

さて、龍が途切れたな。

兵士との距離約2キロ。







あの王に任せておくことなど私には出来ません！ 他国への侵略を許容することは出来ません！ 私は、私の全存在を賭けてあの王を打倒しましょう！！ 我が騎士よ、我が龍よ。壊れたクローク王国を、共に新しい国につくり変えましょう！！ ですが、私はあなた達を殺したいわけではありません！！ 属国となった兵士達よ！！ 去るならば追いません！ 私が勝利した暁には！ 属国ではなく！！ 共に歩む同盟国となることを私は宣言します！！！！』

相手の陣営にどよめきが走る。

普通の人間ならこの龍の数だけで逃げてくれるだろうな。

残るのは本当に今の王に忠誠しているやつら。

属国の兵などは真っ先に逃げるだろう。

案の定かなりの数が減っていく。

最初は100万人近くいた兵だがいまは半分くらいだ。

更に減ってゆく。

そこで一人の男が声をかけてくる。

『貴様ら数人とドラゴンごときで勝てると思っっているのか！！！？  
こちらは100万人の大軍勢だ！！ そちらは子供二人に王女、  
ドラゴン500程度ではないか！！ どうやって勝とうと言うのか  
！！ 貴様らが我が王、ハリア・アヒム・クローク王に忠誠を誓う

なら見逃してやろう！！」

何を言っているんだこいつ？

二人に俺達と同じ手を使うって？

はは、バカらしいな。

それは意思が統率しきれない大人数につかうもんだ。

俺達は決意したエラ。

そして俺の配下のすべての龍。

実質二人しかいないんだよ。

どんな言葉なら寝返るよ？

おー、まだ減るなー向こうは。

うーん人数は10万人くらい残ったな。

まあ結構減った方だろ。

よし、やるか。

『我らは引くことはできない!!! 我らの願いは王女の悲願!!  
それでは戦争を始めようじゃないか!!! エラ・ハリア・クロ  
ーク王女。開戦の合図を』

小声でエラに問う。

「エラ、もしはじめたら残りの10万人はすべて殺すことになるが  
いいか?」

エラは一瞬くらい顔をしたが、

「ええ、責任はすべて王であるエラ・ハリア・クロークがとります。  
それが王つてもものでしょ? 悲しみも憎しみもすべてを私が受け  
入れるわ」

では、そのすべてを受け入れたエラを俺が受け入れよう。  
それが雛に対する俺の責任。

にしても。

いつの間にか王らしくなったじゃないか。

『我が騎士、我が龍よ!! 我が敵をうち滅ぼせ!!』

そうエラは言いきった。

『王のお望みのままに』

相手の兵士が一斉にこちらに走ってくるのがみえる

「龍よ！！！！ 敵を葬り去れ！！！！！！」

『グガアアアア』

『ギヤアアア』

龍は、一気に飛翔し口から個々自分の属性の球を放つ。

『ドガン』

『ドガン』

『バキ』

『ゴガン』

そして始まった虐殺。

俺は王女とハクを抱き抱え、レンの上に飛び上がる。

「レン行くぞ！！ 敵の後ろから殲滅する！！！！ レンはエラを守

れ！！ ハクは撮り続ける！！」

『ガアアアア』

レンは倍率をあげ一瞬で兵の上空に飛ぶ。

そこで俺は飛び降りる。

「あとはまかせたレン！！ かならず守れ！！！！ あと」

俺は……

「エラ、出来るだけ俺を見ないでくれ！」

高原

ダンッ！！！！！！！

兵はいきなり真ん中に着地した俺に驚く。

『Schneiden Sie ersch? pfenn』

《狩り尽せ……》

俺の手には10メートル程の漆黒の鎌が現れる。

それを手に俺は遠心力で回転する。

『Die pechschwarzen Umhangt?che  
rauf der Welt』

《漆黒は世界を覆う》

ブワッ

バシユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッ  
ユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッバシユッ





全方位に飛んだ空間を切り裂く空気の斬撃が、兵士たちを数千人単位で切り裂いて行く。

俺の周囲数百メートルは誰もいなくなる。

『Anorganische Kontrolle!』

《無機制御!》

地面が一気に盛り上がり、土の巨人が出来上がる。  
大きさにして200メートルくらいだろうか。

巨人は手を振り上げ、

ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ

ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ

巨人が地面に手を打ち付けるだけで、数百人が死滅する。

相手の兵士は青ざめた顔をしているが、魔法を放ってくる。

『Ich erlaube es nicht, da? ich  
mir damit zuwinken kann』

《我に触れることは許さず》

俺の前に横100メートル程の不可視の壁が出来る。

相手の攻撃が壁に吸い込まれ、反転し相手に襲いかかる。

ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ  
ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

大きな魔法を多くの兵が放っていたせいで、数千人が死んだ。

「レンツ！……！来い！……！」

俺はレンを呼び上空に飛び上がった。  
それをレンが拾ってくれる。

「レン、龍を上空に移動させる……！」

『ガアアアアア』

レンの声に応じて、龍達は上空に飛び上がる。

「トキ、どうしたの？」

「大技かますから危ないんだ」

「大技って……いままでのも十分大技だったとおもっけど」

たしかにな……。  
てか、見てたかやっぱり……。

「じゃあいくぞー」

『Dunkelheit

Essen Sie es

ersch?pfend』

《闇よ

喰い尽せ》

兵士がいる地面すべてが漆黒色になる。

そして、兵士は暗闇にずぶずぶと飲みこまれていく。

「えげつないわねー…死体も全部なくなっちゃったし。でも飛んでる人もいるわね」

「じゃあ次ので終わらすか」

『Ich erlaubes nicht zu Flucht』

《逃れるは許さず》

ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ  
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ

漆黒の闇につつまれた地面から、兵士目掛けて飛び付く束縛の鎖  
が、すべての兵士を拘束し、闇の中に引きずり込む。

兵士たちは悲鳴をあげているが、闇がずぶずぶと呑みこんでいく。

「……別に最初からこれ使えば一発で終わっただんじゃ？」

確かにそうだが。

「映像のためだよ。それ言ったら最初から龍なんていなくてもよかつた。あとさ、」

俺はエラの方を見つめながらいった。

「そんなぼろぼろに泣いてるのになんで普通にしてるんだ？ もうなんて言うかだな。毅然としてるって言うか痛々しいぞ？ 別に泣いてもいいぞ？」

どれだけ背負ってたこいつ。

これだけ泣いてるやつ始めてみたぞ。

水分全部なくなりそうな勢いだ。

それで普通にしていられるって言うのも驚愕だな。

俺はエラを抱きしめてやった。

泣き顔が見えないように

「……………う、うう、うわあああああああああああああああああああああああ  
あああああんっ！！！！ だって！ だって！！！！ えっぐ、怖か  
った！ 怖かったの！！ 人がどんどん死んでいって！！ ぐす…  
…潰れて……………えっぐ、燃やされて、切り裂かれて、凍らされて、ぐ  
ちやぐちやになっていくの！！！！……………怖かった……………生きていた10  
万人が、数十分で全員死んで……………ぐっす……………」

俺はエラの頭を撫でてやる。

まあ、これが普通の反応か。

俺がおかしいだけだな。

味方が死んだら悲しんで怒る。

敵が死んでも何も思わない。

にしてみんなだと、王のようにはいけなそう？

よし

そして俺はおもむるに。



エラの服の下に両手をつっこみ、

胸を揉み始めた。

もにゅもにゅもにゅ

もにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅ

もにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅ  
もにゅもにゅ

もにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅもにゅ 『バキッ』 あぶっ！……！

殴られた。

「あんだ……ぐっす、何してるのよ」

うん、これはかわいいかもしれないぞ？

「いや、泣いてるから気分かえようかなーと」

「やりかたがおかしいでしょ……！？ もうっ！…… もっとあるでし  
よ 違うのが……？」





## 城

「あーってか兵士いるじゃん。めんどいなあ」

俺達は城の上空を旋回していた。

「そりゃ、王の守りもいるでしょうね」

まあわかってたけどさ。

「めんどいな、レンちょっと宇宙空間にでもつないで真ん中の城以外全部消してくれ」

『グガアア』

レンは100メートル級の球体を数個口から放った。

着弾しても全く音がしない

まあ音はしないが破壊力がね。

城は一個以外全て消え、地面にはどこまで深いかわからない穴があいている。

「さて、とりあえず降りようかな。レン降りてくれ」

『ズドオオオン』

レンが降り、俺達はレンの上から降りた。

「どうしようかなあ……王の場所なんてわからんし」

「ご主人さま、叫びましょう！ 出てこいって」

なんておまえ幼稚な考えを。

とりあえず叫んでみるか。

「おおおおおおおおい！！！！ 王でてこい！！！！ 出てこないと城ごと潰すぞボケ！！！！」

大声で叫んでみた。

「はあ、そんなことで出てくるわけないわよ。あの王もそこまでバカじゃないと思うわ？」

ボタン

タツタツタツタツタツ

「「出てきたッーッーッー！」」

兵士を連れて、急いで出てきたぞ？

「お前の親はアホだな」

「あんなアホ親じゃないわ。ただのゴミ屑よ」

王に対してひどい言い草な二人。

現れたのは全身金ピカな太ったデブだ。  
周りには100人ちかく護衛がいる。

「なんであんな金ピカなんだ？　そもそも実力主義の割にめっちゃ弱そうなんだが」

デブだし、魔力も感じないし。

「あたりまえよ。おかあさんが強いのになんで私達が強くないの？  
そんなの簡単。アイツが魔力なんて0だからよ。ホント顔がお母  
さんに似てよかった」

まあアイツに似たら死にたくなるだろうな。

「自分が弱いから周りを強くして強いつて思いたいだけなのよ」

まあわかりやすいっちゃやすいな。

「そちたちはなんなのだ！！？」

いきなり王さまが話しかけてきた。

「そちつて、おまえは自分の娘の顔忘れたのか？ 顔だけじゃなく頭までくそつたれだな」

真っ赤になっている王さま。

「我に娘などおらん！！ そもそも何故そちたちはここに来た！」

何だこいつ？

「何も何も、昨日宣戦布告したろ？ だったらここまで来て当然だろ？ あんたの兵マジ弱いし」

まああんま見てなかったのだから。

「あの数を倒したつて言うのかそちは！！！！？」

俺は無言でいる。

「我の養子になれ！！ 望むものはなんでも与えてやる。我の駒になれ！！！！」

こいつはバカか？

駒なんて言われてなるやついないだろ？  
てかなぜ命令系？

「お前の下に着く気なんてこれっぽっちもないし。てか、なんでそんな後ろにいるんだよ。前に出て来い」

「……」

無言かよ！！

子供じゃねーんだから…。

「ご主人さま」『下に着く気何て』って下着ってところがすごく気になりますよね？」

「黙れハク！！ お前はなんで真剣なところでいつもそうなるんだ  
！！！？」

ハクが膨れているが仕方ない。

「もういいよ。前に出ないなら出せばいいし」

パチンッ

グチャッ

「あっ……」



「ご主人さま、無詠唱なのはいいですが。質量みすりましたよね？  
いま。王以外ぺっちゃんこじゃないですか。なんか色々出てはい  
けない中身が出てるんですけど？ まあどっちにしろ死んでますが」  
うん。まじミスった。

300キロくらいにしようとしたのに、たぶんこれ5トンくらい  
あるかもしれん。

詠唱大事！！

「すまん青ざめてるどころ悪いがミスった。ホントは動けなくする  
はずだったんだがな……」

体中血だらけの王様はもはや土気色だ。

「エラこいつどうする？ 殺してもいいし」

俺はエラと交換する。

てか、なんか殺しすぎて麻痺してきたぞ。

このままじゃ危ない。

壊れかねないわ。

「ねえ王さま。あなたどうする？ このままどっか行っちゃってく  
れないかしら？ 本当は顔も見たくないの」

スゲー怖いぞなんか。

やっぱ怒ってたんだろうなあコイツ。

「いやだっ！！！！ 我は！！ 我はこの国の所有者じゃ！！！！ 此  
の国は我のじゃ！！！！ この国を失うのは嫌じゃ！！！！」

あ、やばいぞ。

エラの血管が切れそうにやばい！

「所有…者ですって！！！！？ あなたのですって！！！！？ そんなわけないでしょうが！！！！ 民だって生きてるのよ！！！！？ あなたとおなじ人間よ！！！！？ あなたなんかよりよっぽどキレイですけどね！！！！」

エラは叫ぶ。

「何を言つか出来そこないの子が！！！！ 貴様なぞ我の前に顔を見せる資格などありはせんじゃ！！ さっさと我の前から消えらんじゃ！！！！ 後で始末するように言っておくがの！！！！」

コイツいまの状況わかってんのか？  
後なんてもうないぞ？

「トキ。この人のことは任せるわ。なんだか頭が痛いわ  
ふるふる震えながら声を絞り出したエラ。

「んーじゃあそうだなー王様。殺すのは勘弁するけどさ  
ほっとしたような王様。

「軽く植物状態になってくれ。」

『Bildgriff』

《心象掌握》

ドサッ

糸が切れたように王は前のめりに倒れた。

「ハク、映像ストップ」

映像を終える。

「で？ どうする？ 今までの映像で確実にお前が女王だぞ？」

「そうね、しばらくはお母さんに任せるわ。まだ学校生活楽しみたいしね」

「まあそれもいいんじゃないか？ 学園終わったら女王か」

「どう？ 私と結婚したら王よ？ なってみない？」

手を後ろにまわしてニコニコしながら言ってきた。

よかったなエラ、お前の悲願達成されて。

いい国にしるよ？

「それもいいかもなー、あのさ。生徒会が解散したらお前のところで三人雇ってやってくれないか？」

「もちろんそうするわ！ それであなたが王？ ふふふ」

よかったな。

三人とも新しい家が見つかったぞ？

エラもここまでの笑顔は初めて見せただろう。

羽ばたいたなーハク？

『そうですねー、元気に羽ばたきましたね』

どこまでも羽ばたいてほしいもんだ。  
俺がいなくなってもな。

『しばらくは泣いちゃうでしょうねーエラさんだけじゃなく全員が』

仕方ないかな…。

泣かせたくはないけど仕方ないさ。

『ご主人さま、私はずっとここにいてもいいですよー？』

止まらなさいさ。

俺が育てなきゃいけない雛がまだいるかもしれないだろ？

『そうですねー、多分いますねー。そしてご主人さまはその人も巣立たせると思いますよ』

そうだな、ちなみにお前が最後な。

『……なにを言ってるんですか！！！？ ナンパですか！！！？』

はは、そうかもな？

『じゃあ帰ったら早速私をノンフィルターにしてください！！』

無理だ。

お前は一生フィルター在りでいきろ。

むしろお前には年齢規制フィルターがついている！！

『ぶーぶー、もういいですよー』

それより、明日から準備するか。

『はい 承りました我が主』

いつものふざけた口調で言ってくる。

「じゃ、今日はお前の家に帰るか？」

「そうね。婚約発表は早い方がいいわ」

「しねーっつのー!」

そして、その場から俺達は消え去った。

三二話 クローク制圧（後書き）

つまらない（．．．）

主人公がつよすぎる早く次の世界へ飛び立たなくては！！

### 三二話 世界を渡る

あの後、

一回エラの家に戻り、アレグラさんに報告した。

最初はびっくりしていたが、泣いて喜んでいた。

そのあと、エラ、アレグラさん、アマンダちゃん、王都に行き。

エラが女王となったことを発表した。

兵士、役職は一度すべて解散し、信用できる人で構成しなおした。属国となっていた国も同盟を組み直したそう。

アレグラさんの希望で、エラは生徒会が終わるまで学園で過ごすことになった。

そのあいだにアレグラさんが国を良くしていくそう。

税金や兵士などまだまだいい国とは言いきいが、これからいい国にしていくそう。

あ、あと龍は近くの山脈や森で暮らすことになった。

町の人には手を出さずと言っておいたし、

アレグラさんに従えって言っておいたから大丈夫だろう。

他の国にも、龍に守られた国って噂が出来始めているそう。侵略とかもないだろう。

ちなみに学園にもどった俺達は人気だった。

あんな人を殺したっていうのに人気なのもおかしいよな。

クローク国は相当嫌われていたよう。



あの王から王権が移って他国にも嬉しいようだ。

強大すぎて出来なかったが、  
他の国もなんとかしようと思っていたのだ。

これからエラやアレグラさんやアマンダちゃんで、  
いい国にしていけばいいとおもう。

あの場所にいると、そのまま婚約発表されそうな勢いだったので  
先に帰ってきた。

## 会議室

「トキくん、なんてことしてくれるんですか？」 トキくんの闘

技大会での予想倍率が一倍台ですよー？ どうすればいいんですかー？」

そんなこと言ったって仕方ないだろハンネ？

「安心しろ、俺は出ないからな。先生用のは参加自由だしな」

俺は、肩をすくめながら言った。

「むー、出ないんですかー？ 生徒会の名声があがりますよー？」

そんな、不満そうにしたって……。

「いやいや、これ以上上がってどうする？ 結局、生徒会が国を落としたことになっただろ」

しかも生徒会に女王までいる。

まあこれで生徒会にちよっかいかけてくるやつはいなくなるだろ。生徒会が解散するまでは自由に皆過ごすといいだろ。

「でもトキくん。任務の依頼がすごい増えてますよ？ はっきり言ってこれはトキくんのせいですね」

「うあー、あとは任せたぞ生徒会……」。

「トキにやーん、なんでワイらをよんでくれなかったんやー？ 言ってくれたら喜んでてつだったんよ？」

と不満そうなるアル。

「いや、やろうとしたのが前日でさ。それにいつもの任務と変わら  
ないし」

まあ、呼ぼうと思えば呼べたが呼びたくはなかった。

コイツらにはまだ人を殺してほしくないからな。

いずれそうなるとしても……な。

「せやけどこれでトキにゃんが一人で一国を落とすことができるっ  
てわかったんねー」

アルはケラケラ笑いながら言ってきた。

「いや、はつきりいって他の四人でも一国くらい落せるぞ。全員が  
しよっぱなから古代魔法使えば10万くらいは殺せるし。あとは頭  
を使え。一応クローク付近の龍はアレグラさんとエラ、アマンダ  
ちゃんに預けたからお前らが使ってもいいぞ？」

こいつらが守っていくことになるからな。

「でもそれならトキ様と一緒にいけばいいんじゃないですか？」

ディア……。

「俺がいつもその場にいるとは限らないだろ？ だからお前らでも  
一国くらい落せるようになれ」

それはきついわートキにゃん。とか言ってるが大丈夫だろう。

「そうですー、わたしたちもがんばるですー」

お、シャルはやるきだな？

「うん、がんばれ。あと俺これからちょっと学園の街まわりたいんだけどいいか？」

「いまさらですねートキくん。でも大丈夫ですよ。任務はいまのところすくないですし。このあと増えると思いますけどねー」

お前が増やしたんだから何とかしろよハンエ？

「じゃあ行ってくるはー夜には帰ってくると思う。ハク、レン行くか？」

「おにーちゃんいこー」

「ご主人さま行きますー」

三人はその場から消え去る。

街

「じゃあハク、レン、好きなものはどんどん買っていいからな？  
てか渡った後にどんな場所行くかわからんから出来るだけ収納して  
おきたいな」

数十年食えないとか嫌だ。

一応魔力で生きられるけどさ。

「ですねー、特に食糧はあるにこしたことはありません」

「おにーちゃん、全部の品物かつちゃえばいいんだよー」

それもいいかもしれないな…。

「よし、とりあえず服とか買いに行くか？ 一応生徒会の服は数  
十着あるが。あれは正装として使おう」

そう言って、俺達は服屋へ入って行った。

「いじつしゃいませー」

とりあえず俺は適当に見繕ろつてみた。

レンとハクは何かを抱えて速攻で試着室へ入って行った。

うーん、なんだかめんどくさくなつたな。

どうせたくさん買わなければいけないだしー。

「すみませーん」

店員に声をかけた。

「はい、何かお買い求めでしょうか？」

にこにこしながら訪ねてきた。

「えーと俺のサイズに合うの全部売ってくれ」

「全部……ですか？」

「ああ、全部頼む」

「おにーちゃーん」

そんなとき、レンとハクが出てきた。

「みてみてーこれー。かわいい？」

うん。かわいいがこれは。

ゴスロリではないだろうか？

てかその手に持つてる引き裂かれたぬいぐるみはどこから……!?!? ?

「うん、かわいいな。今度死神の鎌削ってやるつ。似合いそうだ」

「こいつらは白髪で肌も雪のように白から黒とのコントラストが合うな。」

「こんな似合うやつもそうそういないぞ？」

「まあちっちゃいし顔がいいからこそ似合うんだと思うが。」

「ご主人さま、闘う女の子が好きですか？ それなら返り血をあびた私を襲ってくださいね」

おい、店員がめっちゃくちゃひどい目でこっち見てるぞ！

「はあー……じゃあこの服と、こいつらに合ったサイズのやつ全部くれ」

「適当ですね、私とレンちゃんのファッションショーを堪能させてあげようかと思いましたが」

残念そうだが、店員の視線に耐えられん。

「別にこれから嫌っていうほど一緒にいるだろ？」

ほぼ永久にな。

全員不老だし。

「そうですねー、毎日違うのに着替えて見せましょつ」

「じゃ、店員さんカードで頼む」

そう言つて俺は、店員さんにカードを差し出す。  
最初俺みたいなお子どもが払えるのか胡散臭そうだったが、残高を  
見て喜々として商品を用意してくれた。

「ありがとうございますー」

俺はすべて収納して三人で外に出た。

「次はどこいくかなー」

「家具とかは必要ないのでやっぱり食糧ですね、あ、ほら」

といてレスランを指さす。  
かなり高いところだ。

「あそこで片っぱしから注文して全部収納しちゃいましょう。皿」  
と買い取って」

まあそれでいいか。

「じゃあいくぞー」

「はいおにーちゃん」

俺達は中に入った。

「いらっしやいませ。三名さまですね。お席のほうにご案内いたし  
ます」



俺達は店員につれられて席に座る。

そのまま戻ろうとした店員を呼びとめて注文をする。

「では、ご注文はどういたしますか？」

「あーこれだけ買えるだけ頼む。出来た順に持ってきてくれ。皿も売ってほしい」

そう言っつて、カードを渡す。

「はぁ…お皿もですかー…ツ!!!? ただいまお持ちいたします!」

毎回この反応だな…。

カードを見て反応を変える。

ちなみにこれは俺の金なので生徒会資金とは違う。

それでも10億くらい入ってるんだが…。

それからしばらく俺は、料理を収納する作業に没頭していた。  
ちなみにレンとハクは食べているようだ。

「じゅいんはまー、これらけふゆるいがあればしばらくはあひな  
さぞうれす」

何言っただかわからないぞハク。

「無理に喋らなくていいぞ。レンを試てみる。めちやくちやくばし  
て口も汚いが静かに食べてるだろ？」

もうこれ以上ないほどに汚れている。  
口の周りなんてぐちゃぐちゃだし。

それを見た俺がキレイに拭いてやる。

「えへへおにーちゃんありがとー」

うん。かわいいな。

それからしばらく作業を続けた。

「「「「「ありがとうございます――――」

ウエイトレスも調理人も全員で挨拶してくれた。  
俺達が出た後にクローズの札をかけた。

残高は結構減っているがまだ全然余っていた。

「あー、結構かかったな。5時間くらいかかったんじゃないか？」

「量がおおかったですからねー。あとは調理前の食材でも買いますか？」

「お前料理できるのか…?」

してるところ見たことないぞ？

「出来ませんよ?」

「俺もだ」

……。

「焼くだけで食える肉とか野菜とか果物にするか。あとお菓子もい  
いぞ。とりあえずハクとレンで行ってくれ。俺は違う地区で買うか  
ら。レンは俺の収納空間につないで入れてくれ。あとそこに金貨入  
れてあるから勝手に使っでいいぞ」

はい。とレンが返事をする。

「じゃあ行ってきますね。終わったらそのまま戻りますから」

「おにーちゃんいつてくるねー」

レンとハクは走って行ってしまった。

さて、俺も行くか。

俺はその場から姿を消した。

## 会議室

その後、一つの地区のものを買い尽したあたりで俺は帰った。  
レンとハクはまだのようだ。

会議室にはいるとハンネがいた。

「あ、トキくん。大変です。二人組の女の子が町のあらゆる食材を買い尽してるらしいですよ？ 今ほとんどのお店で品薄状態らしいです」

明らかにレンとハクだ。

あいつら全地区回ってるのかよ…。

「んーそうなのかい？ 大変だな」

他人事のように言ってみた。

「ですねー。あ、そうだ。明後日から闘技大会ですので。トキくん

は出ないとのことでしたが。見には来てくださいね。私も参加しますので」

ハンネの強さには興味あるが、そのときには俺はいないだろう。

「まー気が向いたらな」

だから、適当に答えてみた。

「そんなこと言わないで来てくださいよー」

そう言っつて、俺にしだれかかるハンネ。

なんかこいつらの形見のようなものがほしいな。

かさばらなくて普段身につけているような……。

「ハンネちよつと動くな」

そう言っつて、ハンネを捕まえる。

「え、！？ なんですかトキくん！！ まっつてください！！！！？  
なにするんですか！！！！？」

俺はハンネの服を脱がそうとしていた。

「まっつてください！！ まだはやいです！！ あっ……下着までとら  
ないてください！！ なんで下まで！！！！？」

真っ赤になつて抵抗してくるが、

「いま脱がさないと遅いんだよ!！」

そう言っただけ俺は、全裸のハンネを下に組み敷いて天高く下着を掲げた。

やはり下着だな！ これは重要だ。

ハンネは俺の下でしくしく泣いていたが気にしない。

「あー、この小さな胸も触りおさめかー」

ふにふにふにふにふに

ふにふにふにふにふにふにふに

「あつ……んっ……いきなりは……」

ふー、満足だ。

「さて、ハンネ服着ていいぞ?」

「はい? 何を言ってるんですか? トキ君? ここまで来たなら最後までやっちゃってくださいよ」

何を言っているんだ?

「だから最後までやっただろ? ホラ」

と言つて、下着を見せる。

「……」

「とりあえずこの下着は俺がもらつておくから早く部屋に戻つて替えの下着を……ハンネ？」

ハンネが全裸で俺を押し倒してきた。

ちゅっ

「んっ……あふ……ちゅく……」



ぷはっ

時間にして数分だろうか？

そして、ハンネはそそくさと服を着て。

「ふんっ」

と言って、出て行った。

俺はしばらく呆然としていた。

廊下

俺は廊下を歩いてた。

とりあえずあとの三人の下着を集めなくては。  
まずはティアからだな。

コンコン

「ティアくいるか？」

ガチャッ

「はい、なんですか？ トキ様？」

「入っていいか？」

「どうぞー、いつでも入っていいですよ？」

そう言われたので、中に入った。

そして言っ、

「ティア、頼みがある」

俺は両手を合わせて頼み込む。

「何でも言うてください　なんでも聞き入れましょう」

これは楽しそうだな。

「下着をくれ」

言いきった。

空気が一瞬固まったが、

ディアはダンスをあげ中からたくさんの下着を持って戻ってきた。

「……どうぞ」

真っ赤になりながら差し出すディア。

だが違うんだディアよ。

俺がほしいのはいま穿いているやつだ。

「ちがうんだディア、今穿いてるやつだ」

もう普通に変態かもしれん。

ディアは一瞬耳を疑ったようだが、恥ずかしそうに後ろを向いて服を脱ぎだした。

そして手に取り、

ふるふると震える手で手渡してきた。

「どうぞ……」

真っ赤な顔で差し出してきた下着を受取り、俺はそれを天高く掲げて勝ち誇る！

そんな俺に抱きついてくるディア。

「トキ様…私は準備出来てますからどうぞ」

うるうるした瞳で上目づかいをし、見つめてくるディア。

ちゅく

いきなりキスをしてきた。しかもいきなり舌だった。

「ちゅく……あっ……はむ」

「んっ…あっ」

ぷはっ

もにゅもにゅもにゅ

ふむ。

ハンネよりは大きいが小ぶりだな。

これがバランスだ。

レンとハクはちょっとおかしい次元だな。

「あっ……トキ様？」

と、ディアが俺を脱がそうとして来たところで俺は立ち上がった。

ディアは転がり落ちた。

「よし。次だ！！ サンキューディア！！ コレ大切にするぜ」

そう言って、下着を握りしめてにこりと笑ってやる。

バタンッ

そしてそのまま出ていった。

「あれ……トキ様？」

その後呆然としたディアは裸のまま固まっていた。

シャル

いま俺はピンチだ。  
みすった。

シャルから後は危険と隣合わせだったのだ。

下着を収集するのは成功したがまずい。

現在、俺は壁に縫い付けられている。

しかも、この光の鎖硬すぎる。

そして俺は全裸に？かれていた。

今はシャルが裸で俺の胸に頬ずりしている。

まずいまずいまずい。

俺の貞操魂が悲鳴を上げている。

ぺろ

ヒイイイイイイイイイイイ！！！！

舐めるなシャル！！

俺にM趣味はないぞ！！？

「トキさーん、私を最初に選んでくれてありがとうございますー」

にこりとしているが怖い。

ぱふっ

「まへ！！ いひがねきん！！！！ くうしい！！！！」

シャルは俺の顔を抱きしめてきた。

この凶悪までにでかい胸をなんとかかしてくれ！！！！  
人を殺せるぞ！！！！？

んちゅっ

「ちゅるっ……あぶっ……」

おい!!

キスはなんか慣れたが触るな!!

俺の貞操が危なすぎる!!

「ちゅるるるる」

や—————!! 吸い込まれる!!

魂まで持ってかれそうだ!! まずい!!

『ふうつかん・いほう』

俺はその場から消え去った。

「むー、また明日やるですー」



## 自室

はあはあ。

ひどい目にあっただぞ。

そそくさと着替える。

服を一着失った……。

とりあえず下着は回収できた。

問題は次のエラだな。

あいつは他と違って妙に歳相応だ。

はつきり言ってミスったら最後までやられる。

既成事実とか言って婚約させられるかもん知れん。

そこで俺は思いついた。

今まですべてキスをさせられていた。

つまり最初にキスをすればそれ以上いかなんじやないだろうか？

よしいくか。

風呂場

エラは風呂にいた。

「え？」

そして今現在、下着姿のエラと目があっていた。  
よし。好都合かもしれない。

ちゆ

ここで俺からすればいいわけだ。

エラは驚いていたようだが舌を絡めてきた。

「ん……ちゅ……んんっ……」

よし、いまだ。

俺はエラの下着を脱がせていった。

「あ？……ふふ……んっ……」

エラはそれに気づいたようで自分で脱いでいく。

はっはっは！ なんて楽なんだ！！

そして俺も脱がされた。

なぜだ！！！？

そしてなぜ押し倒す！！！？

ぶはっ

「ふふふ、これであなたも王様ね」

やーやーやーやーやー！！！！

めちやくちや妖艶な笑みしてる――

こすりつけるな――！！！！

まずいこのままじゃマジで王様だ！！

たぶん数分で王になっちまう！……！

「ん……コレね？」

まで！！ それをどこに持っていくつもりだ……！

既成事実反対だ！！

あーまたこれかよ……！！

『Raumverbindungs』

《空間接続》

俺はその場を脱出した。

「本当にキレイ好きね？ お風呂に入ってきてきれいにしてからって」

とかしら？ ふふっ」

自室

はあはあ……。

またか。

まじ女怖い。

でもこれで収集完了だ。  
服がまた一着なくなっただが。

あとはアルだけだ。

あいつはどうしようかな…。

アルも下着でいつか。

さて行くか。

アル

コンコン

「アル〜いるか？」

『なんやー？ 鍵あいてるで？』

ガチャッ

アルは自分の魔道具を磨いていた。

「まじめだなーお前」

「だって自分の相棒やからな。いつも最高の状態がええんや」

「えらいなーお前。ところでさ

「



ふうなかなか具合だったなアル。

まあ下着収集しただけだけどさ。

俺はアルのパンツをつまんでもち部屋を出た。

「トキにゃん。ワイめざめてしまつかもしれんよ」

とアルは頬を染めていた。



## 自室

ガチャッ

部屋に戻ると、レンとハクは戻っていた。

「おにーちゃんいっぱい買ったよ〜」

「ご主人さま〜全店制覇です！！ 移動の間、時間を止めてがんばりました」

すっごい嬉しそうに言う二人だが何してんだこいつら？

「お前らががんばりすぎ…品薄になってるらしいぞ？」

てか確認したが金貨なくなってるし。

俺カードから引き出して入れておいたんだぞ？

「こいつら食材とお菓子に何憶使ったんだ!!?」  
絶対計算するのめんどくてもめに置いてきただろ？」

「まあいいや、どうせ金あっても意味ないしな。キレイに使ってくれてアリガトウ」

「「えへへ」」

嫌味も通じないのかよ!!?」

「そう言えばレンとハクは最後に皆に会わなくていいのか?」

お別れは言えないかもしれないが会った方がいいのかもな。

「だいじょうぶですよーさっき会議室に行きましたので。皆いましたよ? なんか顔真っ赤でしたが」

「明日の朝おにーちゃんの部屋に来るようなこと言ってたよ?」

朝から何するつもりなんだアイツら!!!?」

「じゃあ、俺、手紙書くから寝ててもいいぞ?」

「そうですねー、じゃあ夕食にでも行ってきます。ご主人さまはどうします? もうすぐですよ?」

「俺はいいや。手紙書いときたいし。なんかボロ出しそうで怖い」

「そうですねー、じゃあ疲れてるから先に眠ったとでも言うっておきます」

まあ具合悪いとかいっただら来るだろうしな。

「ありがとうよ」

「いえ〜では行ってきます。レンさんもいきますよね？」

「うん〜」

そう言って、二人はぱたぱたと出て行った。

じゃあ書くかな……。

よし。これ置いて行けばいいだろ。

「ご主人さま〜じゃあ行きますか？」

既に二人は夕飯から戻ってきている。

「そうだな……レンはどうする？ 俺は一緒にき来てほしいが……  
がいいなら居てもいいぞ？」

一応確認を取ってみる。

「ん？ レンはおにーちゃんにずっとついていくよ？」

「そっか……ありがとな。おいで、二人とも」

俺は二人に両手を開く。

「はい。ご主人さま！」

「はい」

二人を抱きしめて、

俺は消えた。

翌朝の会議室

「うーん。今日はトキくん襲いですねー？」

「寝坊してるんじゃないか？」

「むー、困りますね！！ 仕事いっぱいあるんですから！！ トキ

くんのせいでねー!」

刻が一国を落としたせいだと言い張るハンネ。

「じゃあ迎えに行けばいいんちゃうか？ さっきからあそこの三人が隙あらば出ようとしてるねん」

そこには、早くトキの部屋に行こうと牽制しあう三人。

「そうですねー。私も昨日下着取られちゃいましたから返してほしいんですねー？」

とハンネ。

「ワイもやで？ トキにゃんなんか変な趣味でも目覚めたんやないかと」

「え？ 私もですよ？ トキ様なら全部持って行ってくれてもいいんですが」

「わたしもよ？ 逃げられちゃったけど」

「わたしもですー。既成事実失敗したですー。でも硬かったですー」

何がとは言わないシャル。

「なんでそんなことしたんやろな？ 女の子だけならわかるがワイもやで？」

「そうですねー、額縁に飾ってるのかもしれないですね。とりあ  
えず行ってみましょうか？」

そこまでの変態じゃない刻。たぶん。

ぞろぞろと刻の部屋に移動する一同。

### 刻の部屋

コンコン

「トキくん。私の下着飾らないでください」

「ワイのパンツはいてないやろな？」



「トキ様、ちゃんと最後までしてくださいよー」

「トキさんー一緒にねましようですー裸でー」

「トキ、王になりなさい。既成事実を！！」

口々に自分勝手な事を言う5人。  
それを招いたのは刻なのだが。

しばらく待ってみるが刻の返事はなかった。

「どうしたんやろなー？」

ためにアルがノブをまわしてみる。

ガチャ

「なんやあいてるで？」

「うーん。下着が飾られているので入っちゃいましょう」

そんなことは決してない。

「トキ様の寝顔」

ぞろぞろ

入っていく一同。

「あら？　ときやんいないで？　ベットもキレイやな？」

「そうね。　レンとハクもいないわ？」

『我らの役目も終わったということか…』

突如きーちゃんは麒麟の姿に戻った。

「きーちゃんどうしたですー？」

『ふむ。我らは神獣だ。神に創られ神の為の獣。神を守るしもべだ。なら我らはここで役目を終えたということだ。守る神はもういない』

全員意味がわからないようだ。

「あ？　なにか手紙があるですー」

シャルの指さした机の上には一通の便せんが置いてある。

「トキくんのですかねー？　またレンちゃんの搜索ですかねー？」

そう言って、ハンネはくすくす笑っている、

「とりあえず読んでみよか？」

そう言ってアルは、便せんを破り、中の手紙を取り出す。

そして読み始める。

生徒会一同＋ハンネへ

突然こんな手紙書いておどろいてるだろうなー、すまんな言葉で言ったらお前ら絶対引き留めようとするしさ引き留められたら俺いけなくなっちゃうじゃん。

だから手紙で勘弁してくれ。たぶんお前らがこれ読んできるときには俺はいないだろう

だから俺の最後の言葉と思って聞いてくれ。

俺はさ。お前らと会えて本当によかったと思う。だってそう  
だろ？

ただのオタクで嫌われてた俺がさ、こんな美男子や美女子に  
慕われてたんだぜ？

ホントこれが夢だったって言っても俺は信じられるね。  
実際の俺はまだ孤児院で寝てるんじゃないかってさ。

はじめての家族だったよ。お前らは。

俺の中でかけがえのない大切な家族だった。

俺がこの世界ですごした一年。俺は本当に幸せだったよ。  
大切な家族と一緒にすごした一年。大変な目にもあったけど  
さ。

それを差し引いても膨大に有り余るくらいに幸せだった。

俺はこれから何千年、何億年の生の中でお前らのことは絶対に  
に忘れないよ。

ハンネ、お前はちょっと無理させすぎ。俺がいるときのよう  
にやっていたら、

他のやつ倒れちまうから自重しろよ？

ありがとな。最初から最後まで保護者として面倒見てくれて  
俺は今まで親がいなかったらからさ、本当にうれしかったよ。

アル、お前は一番強いからな、みんなを守ってやれ。

絶対に干渉を許すな。生徒会はお前らの家だ。居場所だけは  
絶対に守れ。

俺みたいになやつになれとはいわないけどさ。  
あんまり女子に手つけるなよ？ 俺みたいに大変なことにな  
るぞ？

ディア、お前は魔族とハーフってことでいじめられててさ。  
俺が救ったから慕ってくれてるんだと思っけどさ。

お前には仲間がいることを忘れるな。周りを見てみる。  
お前を蔑む奴なんて誰もいない。俺はお前が堂々としている  
姿を望む。

泣くなよ？ ディア。お前はもう羽ばたいているんだから。

シャル、魔法使えるようになってよかったな。

たしかに暴走させると危険な力かもしれない。だが俺がみた  
お前の光は

キレイだった。何よりもキレイな光だったよ。

俺を助けてくれただろ？ その美しい光で。

自信をもてシャル！！ お前は危険なんかじゃない。かわい  
い女の子だよ。

エラ、お前は最後に生徒会に入ってさ。自分が弱いと思っ  
たのかもしれない。

だけど、俺が見たお前は誰よりも強い女の子だったよ。

魔法なんかよりもっと大切な心が強かった。

たしかに王としての器を宿した強さだった。

生徒会が終わってもみんなを頼む。女王としてではなく友と  
して接してやってくれ

困ったときは協力して乗り越えてくれ。

さあ巢立ちの時だ！！

羽ばたけ雛達よ！！！！

天高く！！

どこまでもその大きな翼を広げて！！！！

神の導きによって飛び立った雛たちよ！！

我は願う！

汝達の永遠の幸せを！！！！

我は、白の本の契約者“世界を渡りし神”

すべてを受け入れ

すべてを包み

すべてを成長させる者

渡り神 如月 刻

よ。

ありがとう。そしてさようならだ。神の加護を受けし雛たち

刻の手紙をすべて読み、

「なん…なんなんやコレ…トキにゃん…」

「トキくんは……トキくんはどこにいったんですかっ！…!?」

「トキ様は…神様なのですか？」

「そんなわけないでしょう！…？ あんな神様が……」

「トキくんをさがすですー！」

全員が頷き、探しに行こうとする。

『待て！ そのままの意味だ。奴は神。渡り神』

「三匹の使い魔が道をふさぐ。」

『奴は神、我らを創造せし万象をすべる神。我らの役目はこの世界での神の補佐。我らを造りし神への忠誠。我らの主への！』

そこで一度外を見、  
頭を垂れた。

『世界を渡れ！！！！ 我らの主よ！！ 世界を見守り、すべてを受け入れる者よ！！ 我らは主に永遠の忠誠を！！ 渡り神 如月 刻よ！！』

その言葉を聞き、

「あはははは、トキくんは神様だった……. . . . . ですね。通りで……」

ハンネは一旦言葉を切り、

「……. . . . . 私<sup>ワイ</sup>達は幸せだったわけですよ（や）（だわ）」「……. . . . .」

そう言って、全員が天井を見つめる。否、天井ではなく更に遠くの空を。

「でもね、違うんですよ？ トキくん。わたしは保護者ですけど……. . . . . 違うんですよトキ……. . . . . くん。さびしかったんですよ。先生って言うっても誰もたよってくれませんか……. . . . . 先生たちの中でも子供扱いずっとさ



れてました。だからトキくんに助けられてたのは私なんですよ？  
ずっとずっと……ぐすつ…私はトキくんに助けられてました！」

そう言つて、ハンネは涙を流してほほ笑み空を見上げている。

「トキにゃん。ワイを強くしてくれたのはトキにゃんなんよ？ ト  
キにゃんがいなかったらワイはいまでも魔法は使えなかったんや。  
守るで。トキにゃんの守つてきた居場所を。……でも女の子はトキ  
にゃんには負けるわー」

アルはたしかに泣いているが、なんだか嬉しそうだ。

「だめなんですよ！ 私はトキ様がいないとダメなんですよ……あ  
なたがいたから私はここまでこれたんです！！ トキ様がわたしの  
すべてです！ でもトキ様がわたしに笑っていてほしいなら私は笑  
います！！ そしていつか、堂々としているわたしを見てくださ  
い！！」

ディアは泣きながら笑っていた。

「がんばります。トキさんに救うためにつかつた魔法をもう一度つ  
かうためにです。知ってましたか？ わたしはトキさんを助ける時  
につかつた魔法が一番キレイだったんです。私を救つてくれたあ  
なたを助けるための魔法です！ トキさんが私の希望だったんです。  
希望を助けるための希望の光だったんです！ わたしはこれから  
もこの光で希望をつないでいきますです！！」

シャルは涙目ながらも満面の笑顔だった。

「まったくあなたは。助けるだけ助けていなくなるなんて……ほん

と……ぐす……何考えてるのよ！！　これで一生私は独身女王だわ！  
！　あと、言われなくても生徒会はそのまま王国につれていきます  
！　もちろん。友としてね」

エラは一度目元をぬぐうと、  
キレイに微笑んだ。

バンツ

その時、唐突にドアが開き。  
人がなだれ込んできた。

「す、すいませんこの人たちが勝手に入ってきてしまって」

メイドさんが後ろの方で謝っているが姿は見えない。

「こ、このトキキサラギという少年はどこだ！！？」

いきなり一人の男が叫んだ。

「はあ……いったい何なんですか？」

ハンネが聞いてみる。

「こ、これだよ！！　魔力測定を依頼していただろう！？」

そう言って、結果が描かれた用紙をとりだした。

「ふむーなんや？ あー……トキにゃんやしねー」

全員が見つめているが。  
驚いてはいないようだ

「トキくんですからこれくらい不思議ではないですねー」

「トキ様なら当然ですね」

「トキさんですからー」

「全く非常識よね？ ふふっ」

そこには魔力数値 7863 億 9800 万という数字が書かれていた

その反応を見て、魔力の検査機関一同は呆然としていたが。

「トキくんは最後まで非常識ぶりを発揮していつてくれましたね」

「そやなー、最初から最後まで非常識やったわ」

「トキ様は非常識な神様ですね」

「非常識ですー」

「まったく、非常識が服歩いてるようなものよ。神様だしね」

みんなにここにこ笑っている。

「まあでもやー」

「「「「「ありがとう。神様」「」「」

そう言っ、一回は空を見上げた。

自分たちの神がいるであろう場所を。

実はあながちはずれてもいなかった。

「ご主人さまーめそめそしないでくださいよー」

刻、レン、ハクは空中に足場を造り不可視状態で座っていた。

「別にいまなら戻れますよ？ ごめーんやっぱあれうそーとか言うて」

そんなことをハクが言ってきた。

「いや、いくよ。最後にあいつ等がどうなるか見たかっただけだし。笑って送り出してくれたな……ちゃんと羽ばたいていたみたいだ」

「そうですねー。でもそんな泣きながら言っても説得力皆無です。それにしても魔力すごかったですねー？ 8000憶近かったですからねー」

まあ予想以上ではあったな。

「まあ神様の力がそのまま入ってますからね。それくらいあってもおかしくないですよー。それにまだ増えますからね」

ハクはくすくすと笑っていた。

「まあな。じゃあそろそろいくか？」

「そういつて立ち上がる刻。」

「そうですね。でもいいんですか？ もう戻ってこれませんよ？  
戻れますが時間指定なんて出来ないので一億年前とか後とかになっ  
ちやいますよ？ 全ページ集まれば出来ますが」

それなら、いつかまた来れるかもな。

「いいよ。これは俺が決めたことだからな。にしてもアイツら最後  
まで俺を非常識ってなあ」

刻は一回生徒会一同を見、フツツと笑って、

「さていくぞ。相棒。」

「了解です、我が主」

「いいよー、主様」

そういや、結局この星の名前って何だったんだ…。

そう言い残し、三人は姿を消した。

その世界、レディアンから永久に。

三二話 世界を渡る(後書き)

続くんだからね!!!



### 三三話 二つ目の世界へクレル

#### 狭間の世界

「なあ……、いつまで俺達は此処にいるんだ？」

宇宙のような空間に浮かんで俺は問う。

「そうですねー、今、色々世界の情報調べてるんですけどねー」

眠っているように見えるが？

そもそもここに何年いるんだ。

「てか俺いま何歳？ 飯食わなくていいのは楽だけどさー。娯楽も何も無い場所にこんないるの飽きたんだけど」

飯ないって言うのも味気ない。

この空間は世界のルールから外れているらしい。

ま、時間もないんだから外れてはいるけどな。

停止世界の理から外れてる時と同じだ。

腹もすかない。

「ちよつと待つてくださいよー。一応世界は決めたんですが、もうちよつと内部を調べたいんですよー」

ハクはいま、安全な世界を探しているらしい。

「あ、ちなみにご主人さまは今年で28ですね。おめでとつごぞいます」

全然おめでたくねーよ。

まったく成長しないでこんな場所に10年もいるんだぞ？

「早く地上におりてーなー、なあ？ おっさん」

『我に言われても困るのだが……』

ちなみにおっさんはここで仲良くなった時幻龍だ。

成龍らしくめちやくちゃデカイ。

広大な鱗の一枚しか視界に入らない。

「だってここだとおっさんとレンとハクしかいないんだぜ？ 暇す

ぎるっの」

『我はお主たちが来てから楽しいものだぞ？ 新しき神よ』

「って言っても話すくらいしか出来ないしな」

まあ、俺もおっさんに色々教えてもらって結構博識になって来かもしれんが。

『暇だからと、我の鱗を抜こうとしないでくれるとありがたい。お主になら多分剥がされるぞ…』

前に剥がそうと思って、少し鱗が起き上がったところでおっさんが体を揺らしたのだ。

多分あれで数十キロ吹き飛ばされた。

「ああ、すまん。あまりに暇だったんでな。でさー、ハク。ちょっとその世界見せてくれ」

もう限界。

どこでもいいよ。

「はい、いいですよ？ 二二です」

そう言っつて、その世界がある宇宙空間を開く。

「ふーん。時代的には前の世界よりちよつと前あたりか？」

「ですねー、でもかなり戦争が多いですねー。いつそご主人さまが世界征服すればどうですか？」

ハクはくすくす笑っているが、めんどくさすぎる。

「で？ このページはどうなっているんだ？」

「風と光ですね。風はご主人さまの本ではないんですか、譲渡要請出てますのでご主人さまなら習得できるでしょう。光は多分また取り込まれちゃってますね」

譲渡つて…。

「そんなことまでわかるのか？ でも風かー、空は飛びたかったからちよーどいいかもしれないな。てか他の本のまで取れるのか？」

それだところちのも奪われるぞ？

「始祖の本なら可能ですね。全部の能力が入られますので。ただ神が譲渡した一部の力の本。たとえば赤の本単品とかだと火しか使えませんし取り込めません。ここは総司令室みたいなものですから、本の事なら大体わかります」

つまり始祖の本とは、白の本みたいに神がすべての力を譲渡した存在で、火の本とかは、神が各能力だけを譲渡した場合の本ってことか。

「あとですねー、この世界は精霊がいまませんね」

精霊がない？

「いないと何か不便なのか？」

「あのですねー、ご主人さまは精霊なんて必要ないですからいいですけど。前の世界だとだいたいは精霊の補助だったんですよ？ 精霊が必要ないってことは詠唱もご主人さまと同じような自己暗示だけですし、すべてを深層世界からひっこめくので魔力が切れたら確実に死にますね」

なんか怖い世界だな。

「つまりご主人さまのミニチュア版みたいな人がいつぱいいるわけです。って言っても力は弱いですが。ただそう言う文明で成長した世界ですので、その力を最大限まで使えると思います」

「なんかどんどん行きたくなくなる世界だな」

「ですねー、でも一回で二つの属性をとれる星がここしかないんですよー、他はページごとに散らばっていますし」

「じゃあここに決めるかー」

ここしかないしな。

「あ、後忘れてましたが、ここには前の世界のような最上級魔法がないですよ？」

「って言っても前の世界にも使えるやつ俺だけだったぞ？」

「まあそうですね。でもここは光と闇もすっごい貴重ですよ？ 前の世界は何人か見ましたけど、ここなんて前の世界の最上級並にめずらしいですね。更に言うなれば、最上級は隠した方がいいかもし

れません。そんな意味がわからない属性だったら迫害されちゃいますよー?」

それはかなり痛いぞ?

「俺の場合は闇をかぶせて使えばバレないかもしれないが……、レンはどうするんだ?」

「そうなんですよねー、使い魔だって別次元から連れてくるなんてできない世界なんですよねー……。そもそも召喚じゃなくて、交渉で使い魔になってもらう世界ですから」

「なんかすごい遅れてる世界じゃないか?」

「そうなんですよー…ドラゴンだってすごい珍しい世界ですよ? ドラゴンに出会ったら死ぬって言うくらいに言われていますから。」

多分レンちゃんなんか元の姿に戻ったら大変なことになりますね」

それは困るな…、だって移動出来ないじゃん!!

「レン。お前幻惑だけで倒すこと出来ないか? 主に物を操る力で岩とか使って。相手の魔法は普通に幻惑で操っちゃっていいから。時間止めるとかは使っている。バレない魔法は使っているから、あと危ないときは全力でやっちゃっていいぞ」

「んーたぶんできるよ? それでやってみるー」

素直にならずにいる。

「あとですね、めんどくさいことに得意不得意はありますが四属性

全部使えますよ?」

それは確かにめんどくさい。

「めっちゃくちゃめんどくさいなこの世界」

「ですねー、でも仕方ないんですよー。とりあえず行っちゃいますか? 調べ切れてないから何かあるかも知れませんが」

「まあいいよそれで」

「ではこのベクレルって星でいいですね? あと風の本から一番近いのはブレって国ですので、そこを目指しましょう」

「OK。じゃあいくぞ、レン、ハク。」

「はい」

「行きましようご主人さま」

そこで俺は振り返り、

「おっちゃん。行ってくるな? 何年後かわからないがまたな」

『行ってくるがいい新しき神よ。お主が呼べば我も助けに行こう』

おっちゃんが来たらやばいぞ。

ベクレルって言う星ごと潰れるんじゃないだろうか?

「そっぴやハク? 言葉は大丈夫なのか?」

ハクは眼を見開き、溜息をついた。

「何を言っているんですか？ 前の世界でだつてご主人さま全然違う言葉喋っていたのですよ？ 本にはすべての言語が記録されてますからね。一度この狭間に来たことがある神の力ならば余裕です」

おい。そんなこと初めて聞いたぞ俺？

普通に日本語話す世界かと思つてたし。

普通に考えるとそんなわけないな。

「まあいいや。にしても、このおっさんにもらつた神が使つてた服とか言うのめっちゃ着にくいな。腕なんて手の先まで隠れてるぞ？ 袖が長すぎるし、前全開だし」

今の俺の服装はハッキリ言つて異様だ。

めちゃくちゃ袖と丈がながいダボダボの前開きの服。

肩には襟の高いラフ。

その下に生徒会制服のコート（気分ですら黒にそめたやつ）。

その下にエリもとまであるニットにジーンズ。

「いいじゃないですかー似合いますよ？ それで杖なんて持ったら完璧です」

杖か…。

『Raumverbindung Einweiser Stock』

《再構成 白の杖》



ハクは杖に再構成された。

長さは1メートル30センチくらい。

上には宝石がついている。

色は茶色だが、材質は何だかわからないようなものだ。

俺の周りには、5つの濃い紫色の球体が浮かんでいる。

ちなみにこれは、暇すぎたので色々作っていたら出来たものだ。

『ご主人さま、ひどいですよーいきなりですか？』

「いいじゃん。俺は見た目から入る性質なのだよ？」

そう言って、俺が杖を振ると、俺とレンはその場から消えた。

上空

ヒュウウウウウウ

「おいハクヤ？　なんで俺達は今の状況になってるんだ？」

『何を言っているんですか？　私がまだ調べていたのに、無理やり降りたくせに。移動するときは一回その場所に行くか的確な計算が必要なんですよ？』

「だからって何も上空に移動しなくてもいいと思うんだが？　これ落ちたら死ぬぞ？」

ちなみに今の状況は、左手にレンをかかえ落下中。  
多分常人なら死んでいるであろう位置から。

『死にますねー。なんとかしてくださいよ』

「はあ…『Verschieder Formen - Griff  
f』《万象掌握》」

ふよん

空間を固定し、幻惑でやわらかくして操作出来るようにした。

『ナイスですご主人さま。けどこの世界にそんな属性ないのでカモフラージュしてください』

はいはい。と言って杖を振ると、固定した対象が漆黒の闇に包まれ雲のようになった。

「なんか神様みたいだな？ 雲の上に乗ってると。黒い雲だけど」

『そうですねーでもご主人さまは神様ですし』

俺達はふわふわと地面に向かって行く。

「あーなんかいきなり戦争中っぽいぞ？ めんどいなー。逃げるか？」

うん。確実に巻き込まれるぞこれ。

てか劣性だなー…少ない方。

10万VS1万くらいだなこれ。

『ご主人さまでもブレがどこだかわからないんですよー下において聞いてください』

「お前はアホか！！？ 何で調べてこないんだよ！！ おりたら絶

対巻き込まれるだろ!!?」

何を言っているんだコイツは!!

『ご主人さまが途中で降りたのが』はいはいわかったよおりますよ…』わかればいいのです』

ああ、これ関係はベクレルにいる間、ずっと卑屈に出ないといけないぞ…。

そう思いながら俺は降りて行った。

「お？ アレでいいんじゃないか？ 一人上空に浮かんでいるぞ」

『たぶんアレは指揮官ですねー、風の伝達で声かけてるんじゃないですか？』

ふーん。

四種類属性使えるって言うのは便利だな。

「まあいいや、アレに聞こえ」

そう言って、俺は近づく。

「おい、あんた。ちょっと訪ねたいんだがー」

その声をかけると、慌てたようで。

「貴様！ カバネルのものか！！？」

カバネル？ 誰だソイツ？

にしてもこの世界はみんな杖で戦うんだな。

このおっさんも杖構えてるし。

全員杖持つてるな。

「カバネル？ そんな奴しらんぞ？ 俺はブレって国がどこか聞きたかっただけだ」

俺の顔を見て、本当にしらないと悟ったのか杖を下ろしてくれた。

「ふむ、カバネルとは今我々が戦っている相手だ。って言っても負け戦だな。これでブレも終わりかと思うと悲しくなるな」

ん？ こいつもブレのやつか？

「おっさん、俺達をブレまで連れてってくれないか？」

そうすればはやいなー。

「我々は最後の1人になっても闘うー！！ 我らに帰路はないー！！」



ドサドサドサドサドサドサドサドサドサドサドサドサドサドサドサドサ

数秒後、霧が晴れるとすべての兵士が昏睡していた。

「なっ！！！？ 貴様闇の属性か！！？」

あーそついや闇って珍しいんだつた。  
でもおれ闇しか使えないしな…。

「ああ、それはそうとおっさん。約束守ってくれ。俺をブレに連れて行け」

「あ、ああ。わかつた。事後処理は仲間に任せるとしよう。ちなみにアレはいつまで寝ているのだ？」

あーそつだな。  
設定してなかつたな。

「うーん。設定忘れたから多分俺が解くまで永遠だ。明日にでも解いておくよ」

「じゃあ行くぞ。下に馬が在るからそれに乗っっていこう」

馬…乗ったことないぞ俺は。  
あーレンが使えないとつらいな。

道中

あの後、おっさんは指示を出し馬に乗った。

「おっさん！！！！ ケツが痛い！！ 痔になる！！！！ アツアツ！！！！」

「ちょっとは静かにしてくれ！！ 君！！ そっ言えば君名前はなんなんだ？ 私はアラン・ブロー」

「ああ、俺はトキキサラギだ！ ケツがつ！ いたっ！ いたっ！！！！」

なんなんだろうこれは。

まず馬の背中が上がった時にケツが少し浮く、そして落下する。落下しきって背中にケツがつくまえに、下から馬の背中がぶつか



ってくる。

これのエンドレスだ。

よく馬なんて乗れるもんだ。

龍にのれ!!!

龍の方が早いし安定するし痛くないし最高だ!!!

「だからトキ君静かにしないか」

無理だろこれ!!!?

「トキでいいぞアツ!!!」

ダメだ言葉が発せられないぞ。

「わかった。それでトキ、君はなんでブレに行くんだ？」

「あー、別にブレに用があるわけじゃアツ!!! ないんだ。ただ、ブレが目的地にちかかったアツ!!! からだ」

「……トキはずいぶん愉快だね……」

仕方ねーだろ!!!

にしてもレンは楽しそうだな。

俺の前に座ってキヤツキヤ言ってるぞ??

「おっさん!!! それでブレまでどれくらいかかるんだ!!!?」

「あぁ、三日で着くぞ」

……。

『Bildgriff』

《心象掌握》

「停まれ！！！」

馬がゆつくりと止まる。

おっさんは俺の命令に従ったことに驚いたようだが。

『Verschiedener Formen-Griff』

《万象掌握》

馬の下の地面が、闇に包まれ浮遊する。

馬は俺が操作しているので動かない。

「な、何をしたんだ！？」

「ああ、最初にやってただろう？　闇の魔法だ」

他にも使ってるけどな。

「飛べ！！！！」

ものすごいスピードで飛翔する闇の雲。

向かい風は結界で消失している。

「便利な魔法だな闇とは。だが一つ問題がある」

おっさんはまじめな顔で言う。

「なんだ？」

「方向が違っあっちだ」

舐めとんのか——！！！！？

このおっさん！！

「あーもうおっさんが案内しろ。指させ指」

俺はおっさんの案内で操作する。

そして今、俺は城内を歩いていた。

「……おっさん。俺はブレに来たかったわけ。城には興味ないんだが……？」

うん。全然興味ないぞ？

「いやいやすまんすまん。君の事を風の伝達で話したらね。王女がどうしても会いたいと」

知れつと言いやがった！

「いやいや、おっさん。俺は誰にも話すなって言ったぞ？」

おっさんは黙り込んだ。

「どうだこの城は、キレイだろ？」

キタネー……！！ ヤツパ大人キタネーよ……！！  
めちゃくちゃ話しずらしたぞ……！！

『ご主人さま諦めましょう。こう言う人には諦めが肝心です』

「おにーちゃん？ 殺そうか？」

にっこり言ってるが殺すのはやいよ……！！？  
レンお前いつの間にそんな黒くなつたんだ……！！

「いや、殺さないでくれ。もう明日行けばいいや。てか俺金ないか

ら泊めてもらえると助かるわ」

「ああ、部屋を用意しよう」

やっぱり金は必要だな、あっちではずいぶん金あったからな。

「なあ、さっきから合つ皆敬礼してるがおっさんってエライのか？」

「そうだなー。一応兵士の中では一番上だ。これでも強いはずだな。トキよりは弱いかな」

そんな事を言つて、ハハハと笑う。

どっちかと言うと、人柄で尊敬されてるんじゃないか？

「俺は兵士には死んでもならないぞ？ 絶対おっさんそうするつもりだったろ？」

おっさんは黙り込む。

わかりやすすぎるだろ！！！？

「仕方ない、まあ王女にだけ会つてあげてくれ」

まあそれくらいならな。

そして俺達はしばらく歩き。

王室

「ここだ、あまり失礼なことしないでやってくれな？」

別に失礼はしないぞ？

普段通りにするが。

「そうだな。気分の問題だが善処しよう」

コンコン

「失礼いたします。例の彼を連れてきました」

そう言って、扉を開けた。

にしてもこの扉もスゲーな。

キレイな装飾してあるし3メートル位ある。

「そちが我の兵を助けてくれたのか？」

と王女が話しかけてきた。

俺は王女を見た。

そして、俺の時間が止まった。

三四話 魔法の使えない王女様

王室

ん？

いやいや。

ありえないだろ？

あいつが居るわけないじゃん？

じゃあコイツは誰だ？

「なんじゃ？ そちは何をしているのじゃ？ 早く入ってくればよ  
かるっ？。」

どうすれば確かめられる？

これがあいつじゃないって。

もう10年も経っているんだぞ？

進めるように封印しただろ？  
なぜ涙が出てくるんだ…。



『Fangen Sie einen Gegenstand』  
《対象を捉えろ》

トン

俺は床に、杖の底を叩きつけた。

「何をするんだトキ!!?」

兵士たちは、皆黒い鎖に束縛された。

『Ewig pechschwarz』

《永久の漆黒》

兵士たちは、黒い霧に包まれ視界を奪われた。

俺が解かなければ、漆黒の中で一生さまよい続ける。

確かめないといけないと思った。

『ご主人さま、動揺しているところ悪いですが、アレはハンネちゃんじゃありませんよ?』

目の前の王女はハンネ+2歳くらいの子供だった。

身長も3センチくらい伸びているが。

顔つきがほとんどかわらない。

胸はギリギリBに届いた程度だろうか?

『考えてくださいよ。人形に同じ顔が多いような物です。最高のパーツを集めて作ると似ちゃうんですよ。考えうる限りで最高の造形

を組み合わせせて行くところなっちゃうんです。まあ、でもここまでやっちゃいましたので好きに確認するといいですよ』

ふわふわの金髪に青い瞳。

口調は違うがどう考えてもハンネにしか見えないぞ？

「な、なにをするのじゃそちは！！？ わらわは王女じゃぞ？」

「…お前はハンネじゃないのか？」

声をかけてみた。

「何をいつておるのじゃ？ 我はセリア・クロテイルド・ブレじゃ」

こいつが王女？

ないない。

これはハンネだぞ？

俺は王女に近づいていく。

「まあまあ、お前がハンネなのか俺には確かめようがない」

うん、普通はないだろう。

「だが一つだけ確かめる方法があるんだ。それを今から実践しないとならない」

俺は、空間からあるものを取りだす。

確実にハンネの物であるソレを。

「ま、まで。そち、その手はなんじゃ！！？なぜわらわの服に手をかける！！？」

これしかないんだよ。

我慢してくれ目の前の王女よ。

「やつ！！ やー！！！！ 脱がすでない！！ わらわは婚約するまで肌を見せてはいけないのじゃー！！！！」

「安心しろ、お前に似たやつも最後には嬉しそうだったから」

「わらわはハンネと言うものではないわ！！！！ くらなぜ下着を脱がそうととするのじゃ！！？ あ、あっ……うううう……もうダメじゃ……わらわはこやつによって散らされてしまつたのじゃな……」

全裸で泣き崩れる王女を前に、ハンネの形見の下着を穿かせていく。

別に死んだわけではない。

むしろ今の時代生まれてすらいないだろう。

時系列が戻っているのだ。

「何をしておるのじゃ！！？ 小さい！！ わらわには小さいのじゃ！！ きついのじゃー！！！！」

確かにキツそうだな……。

胸もすこし上からはみ出ている。

下も途中までしか入っていない。

「ふむ。成長したのかこれは？」

いまいちこれではわからない。

チュッ

「ん なっ!?!?」

ちゅー————

「むむむむむむ!?!?」

じゅるじゅるじゅる

「んむ——!?!? んむ——!?!?」

ズズーズズー——ズズズズー——

ばんばんばんばん

(床に手を打ちつけている)

ーほーーほーーほーー

くたー

キュツツポン

(何か蓋が開く音)

ゝくゝくゝくゝくゝ

(飲み干す音)

.....。

ぷはっ

そして俺は口元を拭き。

真っ赤になりながら涙を流して、うなだれている少女に杖をつきつけ。

「おまえは偽者だ！！！！」

コイツは違う！

舌触りが違う！

「うーそちはなんなのじゃ……」

そそくさと身なりを整え始める姫様。

トントン

杖を地面に叩くと、闇はキレイに払拭された。

「なっ！！？ 姫様大丈夫ですか！！！！？ おのれ貴様姫様に何を  
した！！！」

そう言っつて、俺の周りを包囲する兵士。

「あー、にしてもハンネじゃないしなー、舌の感触とか唾液の分泌  
量が全然違うぞ。ハンネよりなめらかだった。ザラザラしてたほう  
が男は喜ぶんだぞ？ どうしてとは言わないが。てかお前名前なん  
だっけ？」

ハンネだと思っつてたので、名前など覚えていない。

「うー……セリア・クロテイルド・ブレじゃ……ぐすん」

「あ、あとレンそいつら解放しちゃっていいぞ？ 攻撃されたら反転させるから」

レンは兵士が周りを取り囲んだ瞬間に、幻惑で城の材質をつかって牢獄を作り出していた。

牢獄は崩れ去るが兵士は手を出せないでいる。

「で、セリア。俺はトキキサラギだ。トキくんと呼べ。お前の見た目だとそれしかダメだ。それ以外だったら調教タイムに入るのだからそれで呼べ。それで用はなんだ？」

ハンネの見た目だからそれ以外はありえん。

「うー……用など忘れたのじゃ……トキ……くん？」

「姫様……護衛を頼むんじゃないですか……？」

「そ、そうじゃった。明日からわらはちょっと出かけないといけないのじゃ。その間護衛を頼みたいと思ったのじゃ」

すごく嫌だ。

「却下だセリア。なんで俺がお前の護衛をしなくちゃいけない？俺はブレに用があったから助けたが、別に味方と言うわけではない。それにハンネじゃなかいお前に興味などない！」

はつきりと興味がないと言いきった。

「うう……わらは裸を殿方に見られてはいけないという規則を破ら

れたのじゃ……、えっぐ……」

うっ、痛いところをついてくるなこの女は。

だがそれをしたのは俺だ。

普通だったら死刑になってもおかしくないかもしれん。

「はぁ……で？ どこに行くんだ？ 俺も下限突破程度には悪いと思ってるから手伝ってやってもいいぞ。ちょっと動揺しててな」

まあ少しくらいならいいだろ。

時間制限がある旅でもないし。

「明日から魔法学校に通うのじゃ」

「死んでもお断りだフランス人形め!!」

アホか？

俺は魔法学園卒業したんだぞ？

何でもう一回行かなければいけないんだ!!!

あとこいつは、顔が整いすぎてフランス人形みたいだ！

「な、なぜじゃ？ そ…トキくんはわらわと年もほとんどかわらないじゃろ？ わらわと一緒に通えばよかるう？」

まあたしかに童顔とか言われてきたけどさ、

「お前は何歳だ？」



「わらわは16じゃ。魔法学校は16から入れるのじゃ。ちょうど明日入学式での、本当は今日わらわは殺されるはずじゃったんだが……トキくんのおかげで助かったのじゃ……」

うん。見た目より少し上だけど許容範囲だ。

それにしても殺されるとはな……さすが戦時中だ。

だがな!!

「俺は今年で28だぞ？ それに魔法学園も7年ほど飛び級で卒業したぞ？」

目を見開いている。

「そなたが28じゃと!!？ ありえん！ どんな人間が28でそのような見た目のじゃ!!」

いや、うん。

わかるよ？

見た目なんて16ってなさそうだし。

とりあえずどんな人間かっていうと、不老だとこんな見た目のままで100歳でも1000歳でもこうだ。

「仕方ないだろ？ 事実なんだから？」

溜息をつきながら言ってやる。

「ふむ……大丈夫じゃ。トキくんならば16で通用するじゃろ。わらわにまかせてみよ」

いやいやいやいや。

「だから行かないってーの…、なんでそんなガキばっかのところに  
いかなきゃならない？」

「報償を『いらん』…ぐすっ」

泣き出したセリア。

「はー……てかなんでそんなに俺をつれて行きたがるんだ？ 兵士  
でもつれていけよ？」

「それがダメなのじゃ…兵士は威圧感があるのだと断られたのじゃ。  
入学を認めないとの」

こいつ権力ないなー……。

まあこの見た目だとバカにされるかもしれん。  
結婚ならすぐ出来そうだが。

「それにわらわはな……魔法が…その」

真っ赤になって口ごもってるが早く言え

「……あまり使えないのじゃ……」

「だったら城にずっといればいいだろ？ お姫様ならそれが普通だ  
と思うぞ？ 王と女王にでもかくまってもらえ」

「とっ！…！トキ殿！…！…」

何やら慌てて声をかけてきたおっさん。  
それをセリアは手で制した。

「いいのじゃ……わらわはな。飾りだけの王なのじゃ。父上もは母上も、お兄様もカロン王国に殺されてしまったのじゃ……。それでわらわは見せかけの王として座らせておるのじゃ。実質は属国と変わらないのじゃ。だからわらわは強くなって、ちゃんとした王と民に認めてもらい、この国を再建していきたいのじゃ」

あー…コイツもかよ…。

エラしかりコイツしかりなんで王女つてのはこうなんだろうな。  
だが問題は別にあるぞこの場合。

エラと違つてこいつの場合自分で強くならないといけない…。

エラの場合王座の奪取だけだから俺がやってよかったが、  
こいつの場合自分が強くなるのを望んでる。

はつきり言つてめちゃくちゃ時間かかるぞ。

最低でも数年……最悪コイツが死ぬまで…。

たしかに俺にとつては大した時間じゃないが…、  
体感時間は同じだからなー俺…。

『ごしゅじんさまー最初の雛がきまつちやいましたねー』

くすくすと笑うハクだがどうすっかな…。

『そんなこと言つても助けてあげるつもりなんでしょ？ 別に私たちは時間なんて戻つたり進んだりするんですから大丈夫ですよー？』

まあそうだけどさー。

はあ…。

「わかった。ただし条件がある。」

「本当かそ…トキくん！！ なんでも言っていていいぞ」

「一つ目、お前は本気で勉強しろ。絶対に逃げるな。お前が逃げたら俺はやめる。」

二つ目、別に報償などいらん。だが衣食住は出せ。

三つ目、今すぐお前の魔法を見せる。見ないことには使えないってのがわからん。

四つ目、お前は俺に上から目線で接するな。友として接しろ。

五つ目、お前に変わる文官を用意しろ。そうでないと国を出れん」

「くつ貴様！ 姫様になんという！！」

これだから兵士は嫌いなんだ…。

「黙れ。お前らが弱いからこの国はこうなってしまったのだから！  
！ それをセリアが王となって再建したいと責任をとるんだぞ！！  
わかっているのか！！？ だったらお前らが強くなれ！！！ こ  
いつが強き王となった日にお前達はそれにふさわしい兵でいろ！！」

兵士は事実なので、唇を血が出るほどに噛みしめていた。

「よかろう、ではトキくんはわらわの友一人目じゃな」

そう言って、にこりとほほ笑むセリア。

あー、なんで俺の友は皆友達いないんだらうな…？

俺も人のこと言えないが、ホントいない同士で集まってると感

じだ。

「じゃ、お前の魔法を見せてくれ。それがわからんと何も出来ん」

「そうじゃなー…でも…笑わないでくれないかの…」

いや、笑うも何も魔法では笑えないだろ？

それくらいで顔真っ赤になるな。

「マスターは全然魔法使えないですからねー？」

と、くすくす声がする。

あたりを見回して見るが、誰もいない。

首をかしげてみる。

「あー、トキくんにはめずらしいのの？ この杖は意思を持って  
おるのじゃ。王族に受け継がれる杖じゃ」

うん。胸を張ってるが…。

ってことはハクも出ていいじゃん？

「ハク、出て来い。お前も話していいぞ」

「そうですかー。話せないのはつらかったんですよね。それにしても意思がある杖のある世界なんてめずらしいですよー？ はじめまして。私はご主人さまの魔道具のハクです」

セリアがなぜか目を見開いている。

いや、お前も意思ある杖持つてるだろ？

「と、トキくんも持っておったのじゃな。すごいめずらしいの……」

なんか落ち込んでるが……。  
そんなに自慢してたのか？

「はじめましてー、わたしはエステルといいます。一応マスターの杖ですね。でも正直いってそちらの方をマスターにしたいですね」

多分俺のことだろう。

エステルは１メートルくらいの白い杖だな。

「な、なにを言うのじゃエステル！！？ そなたは契約の儀式の時にわらわと契約すると言ったじゃろ！！？」

焦っているな……。

にしてもすごい杖だな。

主を主と思っただけぞ？

「だって仕方ないじゃないですかー？ 私の杖としての本能がある方を求めるんですよ？ あんな魔力見せられ続けたら壊れちゃいます」

なんかすごく怖いぞこの杖！！？

「はあ……まあいいや。んじゃあ見せてくれ」

「そうじゃな！ 恥ずかしいが見てもらおうかの」

そう言って、両手で杖を構える。

『炎 火の玉となりて 出でよ!!』

詠唱の構成は俺とたいして変わらないな……。  
だが炎はどこだ？

しばらく待ってみたが出ない。

「おい。火はどこだ？」

「これじゃ」

真っ赤になってるが……、どこを指しているんだ？

「どこだ？」

「だからこれじゃ!!」

あついッ!!!!??

杖を俺の鼻先まで持ってきやがった。

その先つちよにマツチより小さい炎が浮かんでいた。

「おまつー!!!? あつちーよ!!! 何してんの!?!」

「ううー…ぐすつ…だつて仕方ないじゃろ?…これしかでないんじやから」

にしても、これは魔法よりライター片手に戦った方が勝率は上だな…。

「おい、エステル。お前原因はわかるか?」

俺は杖に声をかけてみる。

「んー、そうですね。全然魔力が流れてこないんですよー」

単純に魔力不足か?

「ハクおまえちよつと試してみる。原因突きとめられればそうしてくれ」

そう言つて、俺はセリアに杖を渡してあいつの杖を持ってやった。

ぼとぼとぼとぼと。

5つの球体が地面に落ちた。

「トキくんなにやら落ちてしまったぞ?」

セリアは落ちてしまった球体を見回している。



「これはですねー、ご主人さま用の攻撃兼防御装置ですので魔力が維持できないと使えないんですよ？ たぶん一般人だと一回放出するだけで死にますねー」

とか軽く言ってるが、そんな白物だったのか！！？

俺はかっこいいからとか言う理由だと思ってたぞ！！？

「やっぱりわらわは……えっぐ」

「気にしないでください、ご主人さま以外に操れる人なんていませんからね」

にしてもあの姫様泣き虫すぎだろ！？

「ああ、なんて膨大な魔力……私を使ってください！！ 一生ついていきます！！」

そんな事を言ってるがバカか！！？

「ぐす…杖にまで見放された……」

どんどん事態が悪化してるぞ！

「アホかつ！！？ おまえ主いじめてどうすんだ！？ てかもし俺が使ったとして最適化されちまうだろ！！？」

そうなのだ。杖は最高出力の状態を維持する。

最初は小さな穴が開いていると思ってくれればいい。

1の人が使って穴を広げたとしよう。

次に2の人が使って大きく広げ、次に1の人が使っても、魔力量が足りず、空気のように魔力が抜けてしまう。

穴を絞って勢いを増し放出するはずが、大きすぎて空気だけが抜けてしまうようなものだ。

「そうですねー、きっと他の誰にも使えなくなりそうですね」

お前それ杖で言う既成事実みたいなもんじゃねーか！！？

「あーもう。セリア安心しろ。別に俺はこの杖で魔法を使おうとは思わない。あとエステル、お前の許容範囲だと俺が使ったらお前木端微塵だ。で、セリア詠唱してみてください」

泣き出しているセリアを促す。

「いいのかな？」

普通杖は相手に貸すことなんてしない。

理由は小さい穴だと大きくしてしまい主が使えなくなる  
最初から穴が大きすぎると魔法が発動しない。

はつきりいつて利点なんてどこにもない。

「ああ、別にいい。うまくいけばお前の原因がわかるかもしれないぞ」

それを聞いて、パアアアアつと明るくなるセリア。

『炎 火の玉となりて 出でよ！！』

しかし今度は確実に何も起こらない。

「ぐすん……」

あーもう泣くな！！

どんだけ泣き虫だよ？

「おまえ杖のこと知ってたんだろが！？ 俺の杖使って魔法出せるわけないだろ？ 今のはお前の現状をハクに調べさせたただけだ！！別にいなくても怒らない！」

これはハンネより泣き虫だぞ…。

「で、どうだった？ ハク」

俺は杖を交換し訪ねてみる。

「そうですねー。穴が大きすぎますね。ただ世界がそこまで大きくないんですよ。それで世界が出ないようにほとんど魔力を外に出さないようにしてるみたいなんですよ」

「それってかなり危険じゃないか…？」

「そうですね。下手したら一気に出しちゃって死んじゃうかもしれません」

「なにか解決策は？」

「そうですねー、ご主人さまちょっと白紙もらっていいですか？」

「ああ、別にいいぞ」

『Keine Notiz ruft Herausziehen aus』

《無記ページ抽出》

俺の手に、一つの透明な宝石があらわれる。

これは白の本の白紙ページだ。

習得したページはページが増えるだけなので、

白いページはそのまま残る。

つまり、余った無駄なページってことだ。

「では、ご主人さま。それをセリアさんの胸に押し付けてください。でも多分寿命が延びちゃいますね。多分200歳くらいまでは延びちゃいます」

それはつらいかもしれん…。

「セリア。お前は魔法が強くなるかもしれない。だが対価として寿命が増えるぞ。はっきり言って友や家族が死ぬのを何回も見ることになるからオススメは出来ない。覚悟はできてるか……」

ほんときついで。

「わ、わらわの身は国の為にあるのじゃ!! それくらい覚悟はしておる!!」

強いじゃないか王女様よ。

あとで後悔しても遅いからな。

「じゃあいくぞ。恥ずかしいかもしれないが胸を開け。あとは兵士出ていけ。お前達は姫の裸をみたいのか？」

俺はニヤリと笑ってやる。

「なっ！！？ お前がいるのになぜ我々が！！」

「いいのじゃ！！ わらわでも国のためになるならば喜んでこの身を差し出そう。頼む。退室してくれんかの」

おい。俺は別にとって喰うわけじゃないぞ！？

兵士たちは文句を言いながらも退室した。

「さて、じゃあいくぞ？」

そう言つと、セリアは上着を脱ぎ、胸を広げた。

そして俺は球体を押しこむ。

「あっ……んっ……やっ……」

球体はずぶずぶと入って行く。

「はあはあ……これでわらわも魔法を使えるのかの？」

いや無理無理。

「無理ですね。無知のページを入れたので。それはセリアさんの力で侵食していくんです。今がニュートラルの状態。それを魔法学校で頑張つて侵食し増やすのです。全部を侵食できれば、魔法を一日打ちっぱなしでも死ななくなりますよ」

セリアは胸を押さえ目をつむっている。

「マスターなんか変な感じですよこれ？ こうなんて言うんでしょうか？ 膨大な魔力が眠っている感じです。とり出せないけど確かにそこにある力みたいなの」

そんな事をエステルが言った。

「わかつておる、心に空間があいたような感じじゃ。でもこれは悪くない空間じゃの。父上などが死んだ時の空間とは何か違うのじゃ」

そう言つて、目を瞑りながら微笑んでいる。

むにゅむにゅ

とりあえずなかなか服を着ないので揉んでみた。

「なっ！！？ 何をするのじゃ！？」

胸を押さえながら、真っ赤になって抗議の声をあげてくる。

「いや。お前早く服きるよ。」

そう言つと、セリアはそそくさと服を着はじめた。

「あ、そうだ。俺行くところあるから。ま、明日までには戻るよ」  
そう言って、俺は手をひらひらしながら出口に向かう。

「と、トキ……」

後ろから呼び止められた。

「……ありがとう」

そう言って、はにかみながら笑った。

「まだまだこれからだ。あとな」

「お前はハンネじゃないよ。すまなかつたな？ おまえはトキくんよりトキって言った方が似合うよ。これからはそうしてくれ」

そう言って、俺は扉をくぐった。



三五話 風の本

その後、俺達はレンを不可視状態にして30分程飛翔し、森の中に入った。

森

「おいハク。ほんと世界ごとに全然違うんだな!!」

「そうですねー。ビックリしましたよ」

さっきからすごい数の魔物の数だ。

『Automatisches Abfangen』

《自動迎撃》

トトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト

5つの浮遊球体から、闇の弾がものすごい勢いで連射されてゆく。  
数十匹のオオカミのような魔物が貫かれゆく。

「てかホントにこっちでいいのか？ レンそっち頼む」

「わかったおにーちゃん」

レンの周りに数十個の30センチくらいの球体が出現する。  
それが音速で敵にホーミングして突撃する。  
的だった敵は音もなく消滅している。

「こっちははずですよ？ 風の本の最後に出された情報はこっちです  
すね」

って言っても全然ないぞー？

もう暗くなってきたるし。

あー！ っつこい！

『Raumgriff!!!』

《空間掌握　　握り潰せ》

俺は杖を持ってない方の手で拳を握る。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』

周り数百メートルが地面ごと一か所に潰される。

「くそー、どこだよまったく!!!　　レン前方の森を消し去れ!」

「はーい　　」

レンは両手を上げ、その上に50メートルくらいの球体を出現させる。

それを前方に放つ。

音もなく前方の森を土と魔物ごと消し去る!!!

その出来た通路に横から魔物が出てくる。

「ちつくしよー!!!　　全然へらねー!!!」

### 三時間後

「やっとついたぞ……。この世界魔物いすぎだろ。こんな人間の戦争してるところじゃないぞ」

何万倒したかわからん。

「そうですね。ですが戦争は人を成長もさせます。平和な世界はそれだけ成長することも出来ないんですよ。戦争は人を不幸にするとか言いますが。生き残れば生き残った人は成長が出来るんです。世界の仕組みですねー」

「まあ人間なんてそんなようなものだ。惨劇や悲しみを味合わなければ自分たちを見ようともしない」

「ご主人さま、まだ30年も生きてませんのになんか達観してますねー？ 神様としての自覚が出てきましたか？」

にやにや笑いながら球体を動かしつつついてくるハク。

「アホか。そもそも俺は見守るだけの存在だからな。滅んだら作り直せばいいさ。それはその世界のやつらがした結果なんだろ。なあ？ ハク」

「……まったく。何で知ってるんですかー？ でもそれが結果ならなんで作り直すんですか？」

溜息をつきながら聞いてきた。

「それが自分たちでしたことの結果ならばだ。神の介入は許されないだろ？ ちなみに俺はまだ神じゃないから許されるかもしれないぞ？」

「ご主人さまだって力的には十分神様の域ですよー？ まあわたし的にはもう一度地球を誕生させたいですね。一応元あの世界の神様だったのだから」

そんなことを言いながらも、やはり悲しそうだ。

「もう一度誕生させるよ。俺が神になってな？ さて、じゃあ行くぞ？」

「はい、ご主人さま」

コンコン

「すみませーん資源ゴミの回収にきましたー」

「ご主人さま……神の力をゴミって……」

「だってこのやつはいらなんだろ？ ならゴミだ」

そんな事を言ってしばらく待つ。

まるで洞窟にそのまま扉をつけたような家だ…。

『あいておるよーはいつてこい』

扉の向こうから声が聞こえてきた。

ガチャ

俺達はとりあえず中に入る。

「して、なにか用かな？」

口調は老人っぽいが8歳くらいの男の子だった。

「要請があったからきたんだけど？ 渡り神のトキだ」

そう言うと、目を大きく見開き。

泣き出した。

「よつやくじゃ……よつやく着てくれおった……譲渡要請をしてから何憶年まったことか……」

8歳の男の子が老人の話し方で、ただただ泣くというのは異常だ。普通8歳なら声をあげて泣きわめくはずだ。

「お前…もう何年いきた？」

俺は聞いてみた。  
単純に何年生きればここまでなってしまうのか気になったのだ。  
俺の未来の姿かもしれないと。

「ワシはな…数えていないが多分数百億年は生きておるのじゃ…」  
その年月が人をここまで変えてしまう期間。  
人の限界の時間か。

「いいのか？ 本を渡してしまつて？ そんなことしたら多分お前死ぬぞ？」

ページでなく本を譲渡したら十中八九死ぬだろう…。

「いいのじゃ…ワシはな。長くいきすぎたのじゃ。もう嫌なのじゃ。永遠の時の中でもう疲れてしまったのじゃ…早く自由になりたいのじゃ…」

ああ、これが神が力を手放す理由か。  
永遠の命は限度を超えると苦痛でしかなくなる。  
人間だけじゃなく神の限界でもある期間。  
約100億年。

世界が正常に回る期間でもある。  
神がいる期間。

それは星としての時間にしては随分少ない時間だ。  
だが、人としてはあまりに長すぎる時間。

「なあ、俺と闘ってくれないか？」



俺がそう言つと、風の神は驚いたようだ。

「なぜじゃ？　ワシは無条件で本を差し上げるぞ？　必要はないはずだ」

「俺はな、新しき神として古き神から力を受けつぐんだ。お前に托しても安心だとおもつて逝つてほしい。これは俺のわがままだ。どうか頼めないだろうか？　神よ」

風の神は一度悩んだようだが。

「よかろう、ワシの力。受け入れるにふさわしいかどうか見極めてやろう」

「ありがとう神よ。外に出ようか？　古き神と新しき神の決闘にふさわしい戦いにしようではないか」

そう言つて、俺は外に出た。  
後ろには神がついてくる。

## 決闘

「レン、手はだすなよ？」

うなづくレン。

俺達は100メートル程離れ、対面した。

『我は、すべてを受け入れ、すべてを包む神 如月 刻！！！！  
神よ！！ 此度の戦い。感謝する！！！！』

そう言い、俺は頭を下げた。

『我は、すべての風を束ねし神！！ アベル・シラム！！！！ 最後  
の戦い！ 楽しませてもらうぞ！！ 新しき神よ！！！！』

そう言い、頭を下げた。

「はいでは、私の命図ではじめてもらいますね。では…神々の戦い」

「はじめ…!…!」

『Automatische Abfragen』  
《自動迎撃 対象指定》

まずは俺が闇の球弾を無数に放射する。

『ブブブブブブブブブブブブブブブブ』

アベルは上位である闇魔法のすべてを、手を横に払った時に出来た風ではじく。

さすが神。

息をするように魔法を放つ。

「それでおわりか新しき神よ！！！！」

『ゴゴゴオオオオ』

アベルは空中に一気に飛翔し、俺に空までつながるようなサイクロンを放ってきた。

『Raumgriff！！』

《空間掌握 崩壊》

サイクロンが空間ごと砕け散る。

『Zeit f?ngt an zu laufen』

《時よ、駆ける》

周りの色が一気に色を失いはじめ、時間が引き延ばされる。

俺は空中のアベルに一気に近づく。

確実に反応しきれない速度のはずだが、俺に手を向けていた。

俺が移動する前から手を向けていたのだろう。

そして、膨大な魔力が俺を包み込む。

引き延ばされた世界ごと打ち砕かれた。

「やりおるなー少年。じゃが神を舐めちゃいかんぞ？」

そう言った時には、空中の俺に全方位から風の刃が襲いかかる。まるで剣山が近寄ってくるような量だ。

「チツ『Raumverbindung』《空間接続》」

俺は一度舌うちをし、全方位の空間を、アベルの上方につなげる。

しかし、つなげた場所にアベルはいなかった。

俺の着地点に先に降りており、

風の球体を数百個宙に浮かべていた。

『Eine Spiegelung』

《反射》

俺の前方に反射の壁を作る。

キンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッ  
キンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッ  
キンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッ

キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ  
キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ  
キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ  
キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ  
キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ  
キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ  
キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ  
キンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツキンツ

それに大量の風の球体があたり、反射する。

神は驚いたようだが、反射された魔法を右手で振り払った。

『Ernten Sie Existenz』

《存在を刈り取れ 千の刃》

空中に千の漆黒の鎌が現れ、すべてがアベルを切り裂こうと飛翔する。

「追い風はすべてを返すんじゃないよ?」

そう言つて、老人の後ろから暴風のような風が吹き、漆黒の鎌がすべてこちらに戻ってくる。

「くっ!?!? 『Absage』 《アップ・ザーゲ(解除)》」

鎌はすべて消え去った。

『12 Punkte der Sterne!?!』

《十二点星陣 循環世界》

十二点を撃いだ結界。

八点よりさらに強度が高い。

アベルを循環空間に閉じ込める。

内部からの攻撃は通じない

「ほう？ 風よ集まれ」

神が片手を上に掲げると、

収束するように膨大な風が世界から集まる。

結界は外部から、許容量を超えた風によって弾け飛んだ。

俺もあらがいきれず風と一緒に収束される。

アベルの近くまで吹き飛ばされた。

ミスったなアベル！

俺を近づけるなんて！！

『Einhundert alle sofort Emissionen!!!』

《一斉放射 百点》

百の球体から弾丸を放とうと、叫んだが何も起こらなかった。

そこで俺は悟った。

ああ、ここはもう俺の領域じゃないのか……。

風の中だ。

手に触れるほど密度を増した風の中。

アベルが意思を伝えた瞬間俺は切り刻まれるだろう。

負けたか…。

初めての負けだなそういえば。

ずっと自分は強いって思ってたのかもしれない。

エラ…過信してたのはどうやら俺のようだったよ…。

はじめての敗北。

完全な敗北だ。

神は強いな…。

俺なんてまだまだ。



「どつじや？ ワシの勝ちじやな？」

その声をかけてきた。

「そうですね…完敗ですよ。殺されても文句は言えません」

うん。俺が挑んで俺が負けたんだ。

高等院での立場が逆なだけだ。

「アホう！！ ワシがなぜお主を殺さなければいけないのじや？」

そう叫んできた。

「いや、だって俺はあなたに負けましたよ？」

「ワシは見極めていただけじや。お主が本当に神の器になれるかどうか」

そうだったな。

俺は倒すつもりだったんだがな。

完全に遊ばれてたわけだ。

「そうじやなー、まだまだ使いこなせていない上に未熟じやな」

まあそうだろうな。

いま思い出すともしっかりいい方法だって思いつくし。

「じゃが合格じや、お主手加減していたじやろ？ 最初からワシ」と周囲の空間消し去ってしまえば勝てたじやろうに「

バレバレだわ……。  
って言っても、それしたら当分俺眠り続けるし…。

しかも、この神も手加減してたぞ？

雷属性使ってこなかったし。

風の派生なんてこいつなら息をするように出来るだろう。

それに、アベルが最初から風を集めていたらどっちにしろ負けた。

「技を磨け新しき神。汝みたいな優しいものにならワシの力を託しても大丈夫じゃろう。優しき神になるのじゃぞ！！ 子供たちを守れ！！ 新しき神よ！！」

この場合子供たちとは星のことだろう…。

この神はすごいな…。

「すべてを受け入れし神 如月 刻よ！！ 汝に我が力託そう！！  
！ あとは頼むぞ？ 新しき神よ！！」

そして俺は、風の神の胸に手を置く。

「いいのか？ 俺ではまだまだあんたの代わりにはなれない。それでもあんたは俺を信じてくれるのか？」

俺は、風の神の目を見つめ、最後の問いかけをする。

「信じているよ。お主はまだ若い。いずれお主もワシに追い付くことが出来るじゃろ。神であることが重荷になったときは思い出すんじゃ。最初、なぜ神になろうとおもったのか。ワシはもう長い時の

中で忘れてしまったんじゃ。忘れてしまったらもう終わりじゃよ。  
神なんぞやっついていられないんじゃ。消えゆく神の戯言として聞いて  
くれ」

忘れないよ。

戯言なんかじゃないさ。

長き時を生きた神の言葉だ。

俺はまだ見つかっていないが、その理由が出来たら覚えておこう。  
今はただハクの望みを叶えることでいっぱいっぱいだよ。

「じゃあ行くぞ。さようなら。古き神よ」

そう言うと、神は眼を瞑った。

『Der Wille Es wird anvertraut  
werden』

《その意志 受け取る》

神の体が光輝き

最後に笑顔を浮かべて言った。

『ありがとう』

「なあ、ハク」

俺は杖になっっているハクに声をかける。

「いつか俺も忘れてあぁなっってしまうだろうか？」

「それはご主人さま次第ですね。まあ少なくとも永遠に神だった神は見たことありませんが」

そうだよな、神ほど大変な職業はないだろう。

「でもあの神が言ったことを忘れなければ大丈夫かもしれないね。忘れないでくださいよ？ ご主人さまのお気に入りフォルダにロックしておいてください」

「そうだな…忘れないようにしよう」

数百億年後の俺がどうなっているかわからないが、存在する間は覚えておこう

「ちなみに既にそのフォルダには私の18禁画像を詰めておいたので容量に飽きはありませんよ」

なんでこいつは最後までこうなのか。

そもそも俺はそんなもの見たことないぞ？

……そうだった、全裸が18禁画像ならかなりの容量たまってるは…。

レンとハクとハンネとディアとシャルとエラとセリアのが。

……多いな。

「さて、帰るか。そろそろ朝方だぞ？」

「そうですね、風の本もゲットしましたしね。これであとは火 水  
地 光 時間 空間 創造ですね」

ああ、つてえっ!!!?

までまで!!

「時間と空間って最初からあったんじゃないのか!!!??」

そんな、何を言ってるんだみたいな顔されても。

「それは空間と時間を渡るために標準装備されているものですよ。表紙です。ページは別ですよ。全ページが集まって表紙が強化されれば時間も止められますし過去とか未来に時間指定していけますよ? つまり前の世界のあの時間にだっっていけるんです。完全に神になれますね。星だっって壊せますよ。だからがんばってくださいね。ご主人さま」

まだまだだなーホント…。

まだ3つしかそろってないし。

一体あと何百年何千年かかるんだ。

他の世界は世界にページ一枚しかないって言うし敵もいるし。ま、とりあえずは。

「そつだな。がんばるかー。よしとりあえず帰るぞ。この時間なら空間つかって大丈夫だろ。いくぞレン、ハク」

そう言い、俺はその場から掻き消えた。

三六話 入学式(前書き)

さて。独自理論つっぱしってる物語



### 三六話 入学式

セリアは文官に仕事を任せて、今はごとごと馬車の中。

「のお、わらわは入学手続きをトキの分しかしておらんぞ？」

いきなりそんなことをセリアが言ってきた。

「ああ、レンは俺の使い魔だから別にいい」

いま、レンは俺の膝を枕にしてすやすや寝ている。

おいセリア！！ なんてお前はそう言う目で見るんだ！！

「はあ、あとお前今日から生活中ずっと風纏っておけ、慣れたら寝る時もな」

「風を纏うって言うってもわらわはそんなこと出来ないんじやが……」

「まあ最初のうちは出来ないかもしれないが、すぐ出来るようになるだろ」

そう言って、俺は体の周りに風を薄く張る。

「こつやっとな。これすると魔力が体になじんでページも早く侵食できる。ちよっと触ってみる」

そう言うのと、セリアは恐る恐る俺に手をのばす。

バチッ

「つつ!!?!?.....ぐす...」

触った瞬間、セリアの手がはじかれた。

「っておい!! なんですすぐ泣いてんだよ!!? 全然痛くないだろこれ!? ちなみに俺の場合風と雷纏ってるから、はじかれて少痺れるな。便利なんだぞ? 自分が拒絶したら触れられないからな」

「わらわはトキに拒絶されているのじゃな...えっぐ...」

なんでそうなる!!?!

そんな事を言いながら涙目で見つめてくる。

「今のは試しにはじいたただけだったの!!? てかお前なんでそんな泣き虫なんだよ.....」

「しらないのじゃ.....わらわは初めからよく泣いていたのじゃ...」

そんな自慢気に言わなくても.....。

「まあいいや、ほら纏ってみる。周囲の風を体に張り付けるような感じだ」

そう言つと、うーん。とか力んでいる、がまったく纏えてない。

「...ぐっ...」

何で泣く!!!??

なんで息をするように泣くんだこいつ!!!??

「うう…出来ないのじゃ……」

「はあ…別に最初は出来なくて当然だろ？ まあページの侵食が進んだら楽になると思うぞ？」

「そうじゃの…気長に頑張るの…」

めっちゃくちや落ち込んでるし…。

「でさー、今から行く学校ってどんなところなんだ？」

話題を変えてみる。

「そうじゃのー、全校生徒が1000人くらいじゃ。場所は中立国に建っておるのじゃ。5年制でクラスはA〜Eまであるのじゃ。成績順になっておるので、わらわはEじゃ…ぐすん…トキとは別れてしまうの」

あああああまた泣くコイツはー!!!

「だから泣くなっつの…、別に俺は学校になんて興味ないからお前と同じクラスでいい」

そもそも俺四属性なんて風しか使えないしな。

俺も落ちこぼれじゃん!!!

セリアはぱあつと顔を輝かせて抱きついてくる。

「ありがとうじゃー！ 一人は寂しかったのじゃー！！」

「抱きつくな、レンが起きる！！」

頬を膨らませながら離れるセリア。

「ってかコイツは全然王女らしくないな。」

「むー、これくらい、いいではないか。そう言えばトキ。なぜ制服を着ないんじゃない？」

俺は前と同じような服装だ。

生徒会の制服は予備がめちゃくちやあるし服もたくさんある。神がきてた羽織りとかいうのは一着しかないが全然汚れない。汚れがついても勝手に落ちるからだ。

まあ袖が長すぎて飯食うのも大変なんだがいいだろう。

ちなみにハクはずっと杖のまま。

「それにこの球体がきつと目立つぞ？」

セリアは俺の周囲に浮いている5つの球体のうちの、一つをつんつんしている。

この球体は常にふわふわ浮かんでいる。

はつきり言って、どこかの大魔道士みたいな姿の俺。

「まあ別にいいだろ？ 規制されてるわけじゃないし」

セリアは装飾がキレイな白い制服だ。  
スカートが短いので、下になにか穿いてるのかと思い、  
さっきめくってみたが下着の上に何も穿いてはいなかった。  
ちなみにレンもこの制服の上に生徒会の制服を羽織っている。

「むー、そうじゃが目立つかも知れんぞ？」

「別にどうでもいいよ。そこまで興味ないし。」

またややこしいことになっちまう。

「むー、目をつけられてしまっかもしれないんじゃないよ？」

「学生程度どうとでもなるわ」

教師だろうとな。

「……なんでトキはそんな強いんじゃない？」

セリアが真剣な様子で聞いてきた。

「なんでって言うても…俺28だし一回学校出てるんだぞ？ そこ  
そこ強いはずだろ？」

16の時点で学園でもめちゃくちゃ浮いた存在だったけど…。

「わらわも……強くなれるのか？」

そう言うことが。

「さあな。でも王女なら心も強くなれよ？ 俺も前に王女の友達いたけどな。強かったぞ。魔法より心がな」

俺の言葉に目を見開き、

「そ、その王女は恋人だったのかの？」

いやーあれはそんなものじゃないな。

「いやー違ったぞ？ だが俺を王にするとか言ってひたすら俺の貞操を狙ってきた」

セリアは真っ赤になっていた。

「はあ…とりあえず出るぞ？ お前気づいてるか知らないが、さっきから馬車止まってるんだぞ？ なんで止まった馬車でずっと話しかけてるんだ？」

うん。結構前についてたっばい。

「あ、ほんとじゃな。では行くとするかの？ 入学式があるらしいのじゃ」

「おーいレン。おきろー？ いくぞ？」

のそのそと起き上がるレン。

「うーん、おにーちゃんついたの？」

「ああ、だからいくぞー」

俺とセリアとレンは外に出た。

そして学校を見上げた。

うん。ひろいなー。

学園と比べたら全然狭いが

あれと比べたらすべてが狭い。

人がうじゃうじゃいるが……。  
いるが……。

「トキ…すごい目だっているようじゃぞ？」

うん。めちゃくちゃ目立った。

不可視使いたくなる。

てか目立ってるの俺だけじゃないぞ!?

セリアとレンも美人過ぎて目立ちまくりだ。

「おい、俺はお前らの方が目立ってると思っぞ？」

「なにを言っておるのじゃ？ わらわは普通の制服を着ているんじやぞ？」

コイツは自分の顔を鏡で見たことがないんじゃないだろうか？

「お前今度自分で鏡を試してみろ」

「ふむ。わらわは毎朝みておるぞ？ 変かの？」

ダメだ。

こいつの美的感覚がおかしい。  
てか世間知らずすぎる。

「あ、そっぴや俺入学手続きしたって言ったけど、試験も何もうけてないぞ？ いいのか？」

試験ない学校なんてあるのか？

「大丈夫じゃ。わらわも受けていないが、文官がやってくれたのじや」

権力スゲーー！！

しかも本人なんも知らねー！。

はつきり言つてコイツから目はなすと、どっかつれこまれて売られちやいそつだ。

「はいはい。じゃあ行くか。入学式あるし」

俺達は人の流れる方に歩きだした。



初日

「つかれたーーーーー入学式なげーーーー!!!!!!」

入学式が終わって教室へ移動中。

「何を言っておるのじゃ!!? トキとレンは二人で寝ていたじゃろ!!!? わらわは恥ずかしかったのじゃぞ!!!? 一回先生に怒られておったが、黙れ死に腐れ。って言ったんじゃぞ? どんな新入生じゃ!!!?」

? まったく記憶にないぞ?

「悪い。記憶にすらないほどどうでもよかった。適当に教室いくぞ!。かつたるいし。速く寝たい」

俺は適当に返して、歩きだす。

「まだ寝るつもりなのか!?! 寝すぎじゃ!?!」

ぶんぶん怒ってるが…。

「いちいち怒鳴るな。行くぞ。あ? 教室ここじゃね? Fってかいてあるし」

とりあえず俺は入ってみるが…。

そのまま下がった。

「さて、セリア帰ろうか? 俺そろそろお前との約束果たしたんじゃないか?」

セリアの頭をなでながら言ってやった。

「だから何を言っておるのじゃ!?!? 果たしたも何もまだ教室にも入っておらぬわ。はやくくるのじゃー」

そう言って、俺を引きずって中にはいるセリア。

だってさー。

なんか目立つし場違いだし〜。

小学生の教室みたいにするさいしー。

とりあえず俺達はあいている席に座った。

レンは俺の隣にイスをくつつけてしだれかかってくる。

やはり視線が痛いのが気にしない。  
だって使い魔だし？

「やっぱり目立つじゃないん。てかなんで皆使い魔とか持ってないんだよ？ だから俺が目立つんだって」

交渉で手に入るはずだから、16になる前に持っていていても不思議ではないだろう。

「使い魔は学園中に手に入れるのが普通なのじゃ。普通は入学前に持っていないはずなのじゃよ。しかもトキは人間が使い魔じゃし」

ん？ そう言えば言っていなかったな。

「何いつてんだ？ こいつは姿変えてるだけだぞ？ 元は違う見た目だ」

俺の言葉に目を見開く。

「そうなのかの？ 姿を変える使い魔なんて聞いたことないので知らなかったのじゃ。ちよっと戻ってもらえないかの？」

ダメすぎる。

こんな場所で戻ったら校舎崩壊する。

「あーそうだな。見せる機会があったら見せるよ」

うん。そんな機会ないでほしいが。

「そうじゃの。楽しみにしておるよ。」

ガラガララ

「お、先生きたぞ？」

「わかっておる。静かにしておれ」

うん。これこそが先生だろ？

ちゃんと身長高いしメガネかけてるし。

「皆さんはじめまして。今日からこのクラスを担当いたしますアネル・クラネスといます。よろしくおねがいますね？」

と言って、にこりと笑う。

普通の先生でよかった…。

「でわー…」

そう言って、こつちをじっとみつめる。

あれ？

俺何かした？

そう言って、俺は後ろを振り返る。

「おいセリア？ お前何したんだいったい。見られてるぞ？」

「なんでわらわなのじゃ！！？ 明らかにトキを見ておるじゃろ！！？」

まあそうだよなあ……。

とりあえずもう一度先生を見てみるとやはり俺か……。

あ……。。

「先生……ひとつ質問してもよろしいでしょうか？」

まさかとはおもうが……。

「ええ、いいですよ」

うん。笑顔は消えたけど丁寧だ。

「もしかしてこの学校の先生って人の魔力とか見えちゃったりします？」

「そうですね。詳しくは見えませんが大体の量とかはわかりますね」

そうか……。

世界はいろいろあるな。

「その……なぜあなたのような人がこのクラスにいるんでしょうか？」

「うわー、いきなり全否定された」。

「あなたなら世界でもトップの『すみません』。入学手続きおくれた

ので』そうですか。わかりました。」

ふう助かった。

いきなりバラされそうになるとは。

てかこの世界魔力見えるのかよ…。

危険だなこじ。

「では、今日はレクリエーションをしたいとおもいます。いまから各施設のパンフレットを配りますので見て置いてくださいね」

そう言って、パンフレットを配りながら話を続けるアネル先生。

「基本授業は6時間体制で行われます。魔法理論 火 水 風 土 剣術 実技で一週間6日、各3時間授業のローテーションになります。学生課にいけば単位付きの依頼もありますのでそっちでもらってもいいです。おこづかいがほしいという人は行ってみるというでしょう。更に自分の実力が知りたいという人は、数人でパーティーを組み洞窟に入ってみるのもいいかもしれません。賞金は出ませんが、各層までいくと単位がでます。倒した時の素材も高く売れますね。一応現在の最高は5年生の39層になっています。また、この洞窟は死亡しても学園は責任を負えません。なぜなら、学園というより国に管理されているからです。別に行かなくてもいい場所なので行かない方がいいでしょう」

お、おおおおおおおおおおおおおおおお

ダンジョンじゃねーか!!!?

RPGきたぞ!!!!!!!?

必ず行こう!!!

一番奥に何があるか調べなくては!!!!!!!

にしてもクラス単位で授業受けるのか。  
ずいぶんと違うな。

「一年の予定としましては。闘技大会やクラス単位の洞窟探索などがありますね。詳しいことはパンフレットを確認ください。では、明日は各属性の現時点でのレベルと最高レベルの計測をおこないます。説明は明日しますので今日は各寮に戻ってください」

おい、そう言えば俺寮どこだ!?

アネル先生が出ていくのをまって、後ろを振り返る。  
教室は途端に騒がしくなった。

「おい、セリア? 俺の寮ってどこだ? 知らんぞ?」

「ふむ、わらわと同じ火の寮じゃ。ちなみに同室じゃ」

は?

「お前何言っちゃってんの!? 女子寮とかないのかよここ!!!? なんてお前と俺が一緒なんだ!?!」

「何を言っておるのじゃ? わらわの護衛なんだから当然であろう? それにもう肌も見られておるしの…ぐすん…」

なんでそこで泣く!!!?

「あーもういいや…てか二人部屋なのかここ」

「違うぞ? 三人部屋じゃ。あと一人いるかの。ちなみに女子寮と

言うのではないが、部屋は女子だけの階にお主を入れたのじゃ」

何してくれちゃってんのこいつ！！！？

それ女子寮じゃん！！？

「お前そしたらもう一人の女子どうすんだよ！！？　いきなり男と同じ部屋になるんだぞ！！？」

「ふむ。考えておらんかった。なんとかなるじゃろ。」

ならねーっての！！？　俺の嫌いなケバイ女とか来たら化粧の匂いで俺は死ぬぞ！！？

むしろ俺が殺す！

そもそも、誰がきても嫌がるだろ！！？

「気にするでないぞ？　では行くのじゃ。荷物は届いておるはずじゃからの」

「じゃあねえ…レンもいくぞ？」

そう言って、三人で寮を目指す。



## 迷子

「ってなんで迷ってんだよ!!? 最初から見えてたたる!!」

盛大に迷っていた。

「知らないのじゃ。わらわは一番近いと思った道をいったまでじゃ  
!!!」

なんで王女は道に迷うんだ!!?」

なんかそう言う法則でもあるんじゃないのか!!?」

「だから最初にそのまま真っすぐ行けって言ったたる!!!!?」

「しらんのじゃー!」

こいつは泣きながら俺にしがみついている。  
なぜかというと。



7時間後

「ついたぞ……セリア」

やっと寮についた。

入学初日からかなりの魔物を倒したのは俺達が初めてではないか。と言うか迷った奴は初めてではないか？

だって目の前に寮があったのに迷ったからな。

「はあはあ……そうじゃな」

「疲れてるようだが、お前のせいな上にお前は何もしてないぞ？」

こいつはひたすらしがみついて俺の邪魔をしていた。  
レンですら頑張ってたのに。

せめて後ろにでも居てほしかった。

「ううー……えぐ……」

もうこいつが泣くのは慣れた。

水分をどこから補充しているんだろうか？

「ほら、泣いてないで行くぞ。二階だからすぐだ」

泣いてるセリアをお姫様だっこでつれていく。

「あつたここだここ」

ガチャッ

ドサッ

「いたっ！！？ いたいのじゃー……ぐすん……」

部屋に入ってすぐにセリアを落とした。

だってそうだろう？  
入った瞬間、部屋にいたやつと目あったし。

その女の子は下着姿のままこちらを見つめていた。

あー、そういえばもう九時だ。  
パジャマになっても不思議ではない

キレイな女の子だなー。

身長は160ないくらいかな？

158程度だとおもう。

胸はCかDだな。

黒髪黒瞳で色白な女の子だ。

サラサラの腰まである黒髪。

頭には白いカチューシャ、カチューシャに双葉のようなりボンがくつついている。

下着は薄い水色だな。

これが日本人じゃなかったらなにが日本人なのだろうか？

これでもかっつけてくらいにお嬢様な子だ。

でも変な感じだ。

全然赤くもならないし。

あれ？

「あ、同じ部屋の方ですね。私はEクラスのりりり・シャルレと申します」

そう言ってペコリとおじぎをした。

思いつきり横文字の名前だった。

ってかあれ？

なにこの反応？

「あ、あれ？ えっとりりり。お前男に見られてもはずかしくないのか？ ちなみに同じクラスのトキキサラギだ」

？ と首をかしげているが。

一応挨拶されたので俺も返してみる。

「そうですね。私の存在価値などないに等しいので別に大丈夫ですよ？ それに私途中で亡くなるとおもうので。それまでよろしくお願ひしますトキさん」

は？

なんか今までにないタイプだぞ？  
てかなんだこのタイプ？

「なんで死ぬんだお前？ そもそもなんでそんなキレイで存在価値ないんだ？ 別に言いたくないなら言わなくていいが」

うん。もつともな質問だな。

「はい。別に隠すことじゃないですが。お父様に洞窟の深層まで行って、シャルレの名を残せと言われていきますので。それか魔力の強い方の子を成せと。お強いお兄様が後を継ぐので私みたいな弱い人間は必要ないんですよ？ せめて名を残すために死ねとおおせつかっています」

そう言ってニコリとほほ笑むが…。

これはひどすぎるんじゃないか…？

てかどんな父親だよ…。

「じゃあお前はむざむざ殺されにこの学校に入ったのか？」

「はい。運が良ければ生きられるかもしれませんが」

そんな事を言ってるが……。

洞窟のレベルは知らないが、100パーセント無理だろう。  
リリーから魔力なんてほとんど感じない。

「兄と父親はどれくらい強いんだ？」

「そうですね、お父様は軍の軍事総監をしています。お兄様は軍の  
トップですね」

俺はセリアを見る。

ブンブンブン

どつやらブレの兵士じゃないようだ。

ふむ。

つまりこいつは…。

「お前の家系は強い奴ほどえらいつてことなのか？」

「はい。そうですね。女性であろうと強い方が家を継いでいたよう  
です」

そうかそうか。

『Als die Tiefen zur Uferen  
Scheitern』

《深層より表層へ 魔力放出》

ブウウウウウン



パライイイン

俺は属性など付加させないで、魔力だけを放出した。息をするのもつらいほどの高密度の魔力。

セリアなんて座り込み青ざめて震えている。

リリーは床に倒れ、息が出来ないのか口をパクパクしている。

ピシッピシッ

部屋に亀裂が入りはじめ、窓なんて速攻で割れた。

数分後、俺は放出をやめた。

「さて、お前の父親や兄より。俺の方が強くてエライ。ってわけで」

「お前今から俺の奴隷だ！」

めちやくちやである。

たしかに魔力的には強いかもしれないが刻は家系でもなんでもないのだ。

「はい」

この娘も常識が通じない。

それも、小さい頃から魔力が弱い奴は存在に価値などないと父親に言われ続けたので、誰であろうと魔力が高い人＝偉いという構図になっているのだ。

「命令だ。俺が許可するまで死ぬな！！　そしていつか父親と兄を倒し家を継げ！！」

許可なんてするつもりないけどな。

「洞窟に行くことはしませんが、私ではお父様やお兄様には…」

そんなことはわかっている。

『Keine Notiz ruft Herausziehen aus』

《白の本　無記ページ抽出》

俺の手には透明な球体がおさまった。

「ご主人さま、またやるんですかー？　しかもまた時間かかりそうな子ですし…ご主人さま、これだとなかなか渡れませんかよ？」

そうハクが言ってくる。

「仕方ないだろ？　放っておけるか？　このままだと、確実に死ぬぞ？　それに俺の周りにはいる雛だけでも羽ばたかせてやりたいだろ？」

「はあ……ご主人さまがいいならいいですけど。まったく優しい神様ですねー…」

まあ俺もそうだと思うけどさ…。  
なんか見ると放っておけないんだよな…。

「よし。リリー脱げ」

「はい」

全く顔を赤くもしないで、脱ぎ始めるリリー。

「っってお前なんで脱いでんの!!!?」

「はい？ いま脱げと？」

違う!!

なんでこいつは下まで脱ぐんだ!!!?

もういいや…さっさと終わらせよう。

俺はリリーの胸に球体を押しつける。

「あっ……んっ……あっい……」

っておい!!?

ここで顔を赤らめるな!

不意打ち反則!!

球体はずぶずぶとリリーの中に入っていった。

「はぁ……はぁ……」

リリーは真っ赤な顔で息を荒くしている。

「今お前の中に真っ白な魔力の核を埋め込んだ。それはお前が努力

したらただけ魔力を上げることが出来る。頑張つて強くなれ」

こいつも自分で強くならないといけないしなあ……。まじ時間かかりそうだわこれ。

「はい。ご主人さまにもらった熱い核。大切にします」

そう言つて、目を閉じて両手を胸の前で合わせているリリーだが……、  
おい。

「なんでご主人さまなんだ？ トキでいい」

「奴隷ならそう呼ぶのかと思ひまして。ではトキ様ですね。しつかり仕えさせていただきます」

仕える必要なんてないんだが……。

「ご主人さま、世間知らずな子に奴隷なんて言うからですよ。いくら命令するためと言つても、もうちょっと方法があるでしょう？ でもご主人さまって呼ばないで助かります。わたしとかぶつちやいますからね」

どっちにしるディアに被つたよ！

「はあ……あとリリー。お前人前で脱ぐな。そのまま襲われそうだ」

こいつも全然自分のことわかつてないぞ。

「そうですか？ でも今まで襲われたことなんてありませんか？」

それはお前が家から出なかったからだ!!

危険すぎるぞこの子!!?

てか危険×2預かっちゃまった!!

「まあとりあえず脱ぐな。あとお前早く着替える。なんでずっと裸なんだ」

こいつずっと全裸だった。

リリーはゆっくりとパジャマを着始めた。

てか下着つけない派なのか!!?

「すみません。トキ様に着ていいと許可をいただいていたの  
で、着てはいけないのかと」

めちやくちやくこの子の扱い難しー!!!!

「そうだなあ…セリアは…だめだな。レンを見本にでもして、一般常識学んで自分で行動してみる」

「はい。それでは」

そう言って、リリーは俺に抱きついてきた。

は？

「お前何してんの？」

かわいく首をかしげているが…。

「レンさんという子の真似を」

ああ、たしかにレンは今俺の腕に抱きついてるが…。

「やっぱレンを見本にしちゃだめだ。はあ…俺が教えるよ。今日は寝ていいぞ」

「ではお先に眠らせていただきます」

なんか疲れるな…。

また大変な雛が出来たぞ…。

「ご主人さま、私はいつまで杖のままなのですか？」

「お前は这个世界にいる間はずっとだ。」

「ひどいっ!!? なんかライバルいっばいで出来そうなのに！この姿じゃ何もできません!!」

ハクの言葉を無視して俺はレンとベットに入った。

「セリアくいつまでも座り込んでないで寝ろって。あ！俺風呂入ってないし。レン…とハクもいいや来い風呂入るぞ。セリアもちゃんと入るんだぞ？ 汚かったら無理やり明日の朝洗うからな？」

そう言い、三人で風呂に向かった。

## 三七話 初授業

### 部屋

朝起きると、部屋がぐちゃぐちゃになっていた。  
俺の魔力で何でもんじゃない。

コップとか小さめの家具がぐっちゃぐちゃだ。

一応窓も割れちゃったりしてたから、結界張って置いたんだけど  
なあ…。

「なあセリア。リリー。お前達は何を暴れているんだ？」

うん。

こいつらが原因だからね？

「違うのじゃ！！ わらわは魔法の練習を…」



魔法の練習でここまでなるなんてすごいな？

「私はセリアさんに聞いて、トキ様がやれといった風を纏う練習を」  
うん。

たしかにお前らの周りに風集まってるけどさ。  
全然霧散してるよ、それじゃ魔力だけが抜けていく。

「まあ頑張るのはいいと思うけどちゃんと寝るよ？ 体壊すぞ？  
あと纏うってというのは」

そう言っつて、俺は風に命令してセリアとリリーに薄く膜を張る。

「こつ言っつことだ。頑張ってみる。お前らの状態だと魔力を無駄にするし風がそのまま吹いてあたりを破壊しちまう。でもよく一晩で風集められるまでになったな」

そう言っつて、俺は二人の頭にぽんと手を乗っける。  
褒められたのが嬉しいようで、えへへ〜とか言っつてる。

「でも、トキ様は人の魔法にも干渉出来るのですか？ すごいですねー！ お兄様やお父様でもできませんよ？」  
「と言うか、それだと人の内部にも干渉出来るってことなのじゃ？  
見つかったら解剖なのじゃ」

二人がそう言っつてくる。  
確かに、俺は外部だけじゃなく内部まで干渉出来る。

「まあ俺のほうが強いしなあ。あと、内部干渉は出来るけどしないぞ？」

ページがない属性は幻惑で操るしかないが、風なら余裕だ。  
他世界で言う精霊王みたいなもんだ。

風は大体俺の言うことを聞く。

「さすがトキ様ですね」

そう言って、リリーはにこりとほほ笑む。

うん。なんかお前が笑えるようになったから良いとしよう。

「あと、お前ら。そのボロボロの服を着替える。明らかにそれ廃棄だ」

こいつらの服はもうボロボロすぎる。

服の役目なんてないぞ？

リリーなんて下着つけてないからモロ見えだ。

そう言つと、リリーはその場で脱ぎだし制服に着替え始めた。

まあ一緒に生活するからいちいちこそこそしてたら……。

うん。セリアはめっちゃくちゃこそこそしてるな。

「はい。セリア隠さなーい。てかそれだと一緒の部屋で生活できないぞ？ レンとリリーをしてみる。もうちょっと自重してほしいくらい堂々としてるぞ」

まじ自重してくださいー！

下着ならいいけど、なんでお前全裸で服探してるんだよー！

「うっー…わらわは一応王女なのじゃ…裸は見せるものじゃないと規則が…ぐす」

そう言いながらも、着替え始めた。

うん。なんか裸になれて常識崩れてきたけどいいや。

お気に入りフォルダ更新して、ロックしておこう。  
パスワード20桁くらいで。

もちろんアルファベットと、数字の混合パスワードだ。

「トキ様。食堂から朝食を持って来ましょうか？」

ニツコリと笑いながら出口に向かうリリー。

仕えてくれるのはいいがリリー。

おまえ全裸で食堂まで行くつもりなのか？

食堂には男もいるぞ？

「いや、皆で一緒に行こう。とりあえず着替える」

そう言ってやると、せつせと着替え始めるリリー。

あ、ハクのこと教えないと飯いけん。

「そっぴや言い忘れてたけど、俺の杖人間の姿にもなれるから覚えておいてくれ。ハク」

ハクが人型等身大の大きさに変わる。

「はい、ご主人さまの魔道具ハクと言います。以後お見知り置きを」  
ペコリと一礼する。

二人は驚いているようだ、

「さすがトキ様ですね。珍しい杖をお持ちです」

「エステル！ そちも変わるのじゃ！！？」

「ええー？ 無理ですよーあんな杖見たことも聞いたこともありませんって」

そんな会話をしていた。

二人が着替え終わったところで俺達3人+レンとハクは食堂に移動する。

現在登校中

それにしても、さつき食堂で知ったんだが。

金の単位がおかしいぞこの世界。

銅貨50枚で銀貨

銀貨25枚で金貨

銅貨をレル

銀貨をリル

金貨をレラルという。

この世界の貨幣制度作ったやつ死んだほうがいいぞ。

どんだけわかりにくいシステムにしたんだ!!!?

まあ金はセリアが払ったけどな。

定食は3レルだったが。

価値がわからん。

「トキ様、早く行かないと遅れちゃいますよ？ トキ様がお望みでしたら休んでもいいでしょうが」

いやいや。お前も一緒に休むなよ！  
俺も行くけどさ。

「だったら走るぞ！！？　いくぞ！！！」

そう言って、俺達は駆け出した。

## 教室

「では。今日は現在の属性の、相性を調べたいと思います。だいたいの人は初めてだと現在地はですね。でもこれは努力すればどれだけ強くなれるかを示す値を調べる測定なので大丈夫です。一応火水風地光闇を調べますが、基本四種以外はほとんどの人が最高値0ですね。基本四種は全員が持っているので、最高値は1以

上です。最高は10となっております。では、順番にこの装置に手を入れてください。一応、結果用紙は回収するのでよろしくおねがいします」

なんか2メートルくらいの丸太のような装置だ。

印刷されるのか紙の取り出し口みたいなところがある。

「はい。カリーネ・シヨヴィレさんは 現在値 火2 水0 風1  
地0 光0 闇0 最高値 火4 水2 風3 地1 光0 闇0  
ですねー。なかなかの結果だと思いますよ？ 最初から火が2なのは  
おうちで勉強していたのですねーえらいです。」

にこにこしながら席に戻っていく女の子。

「ではじぎはー……」

なんか静かになったので、教室内を見渡してみると。  
隣と後ろで二人がうなだれていた。

なぜリリーが隣かと言うと、隣にいたやつをリリーがふるぼっ…

…、  
まあなんか仕えるのに支障が出るとかの理由で移動してきた。

「お前らなんでそんな死にそうになってるんだよ……」

屍のように机にうずくまっている。

「トキ様…、私はこれ一度やったことがあるんですよ…。最高値が

火1 水2 風1 地1 闇光0 現在地すべて0だったんです…」

まあ軍事家系だもんな。

「わらわも一度やってみたのじゃが…同じような結果じゃ…」

こいつらは何を言っているんだろうか？

お前等に俺が何を入れたと思ってる？

「はぁ…お前ら何も分かっていないようだな…とりあえず行って来  
い…」

リリーがしぶしぶ歩いていく。

まるでゾンビのようだな……。

どっちかという問題は俺だ…。

この世界にない属性を持つてる俺はどうなるんだ…？



「では、リリー・シャルレさん手をいれてください」

先生がそう言うが、リリーは手を動かさない。

「あの…本当にやらないといけませんのでしょうか？」

まだしぶってるぞ。

「はい。一応あなた達の目標にもなるのでやってくださいな」

あー、ここからでもわかるくらいに絶望してるぞ。

リリーは恐る恐るてを入れた。

ピーガシャ

リリーはうなだれながらも用紙を手にとる。

そして眼を見開き。

一度目をごじごじと擦って、もう一度見て目を見開いている。

「はい、ではリリー・シャルレさんの結果はー……」

先生も目を見開いている。

「現在地 火0 水0 風1 地0 光0 闇0そして最高値です  
が……」

一旦言葉をときり、

「火10 水10 風10 地10 光0 闇0です……。すごい  
ですね…私もこんな初めてみましたよ…？ まだまだですが素質  
としては歴代の大魔道士レベルですよ！？ がんばってくださいね  
！！」

教室でスゲーとかざわめきが起きているが…。

まあ一番下のクラスのやつだしなあ。

クラス決めた時は素質なかっただろうし……。

「はいっ！！ がんばります！！！」

元気に返事をし、

満面の笑みでこっちに走ってきて、

ドンッ

ガラガラ

「トキ様っ！！ やりました！！！」

とか言っつて、思いつきり抱きついてきて、俺と後ろの席のセリア  
まで吹っ飛んでいた。

てかセリア、お前なんで絶望してんだよ！！！！？

「おい、セリア…お前なに考えてるんだ？ お前とリリーには俺の核が入ってたぞ？ お前も同じ結果に決まってるだろ…？？」

「やっぱりトキ様の熱いのおかげだったんですね！！？ 大好きですー！！！」

おまえキャラ崩壊してるじゃねーか！！？  
どれだけ嬉しいんだよ！？

まあずっと存在価値ないって言い聞かせられてたからな。  
当たり前なのかもな。

「トキ、本当なのか？」

セリアが聞いてきた。

「ああ、十中八九同じ結果だ」

ばあああつと顔が輝き喜々として走って行った。

うーん、やっぱり自分の魔力で侵食するから光と闇はつかないか…。

もちろんセリアも同じ結果だった。

喜々として帰ってきて抱きついてきた。  
今度は俺とレンまで後ろに吹っ飛んだ。

「おにいちゃん……いたい……ぐすっ」

あああああああレンまで泣いちゃまったじゃねーか!!?!?  
セリアの泣き虫が移ったのか!!?!?

「邪魔だ!! リーのときもそうだが周りの視線が痛すぎる!!  
! どけ!!」

文句言いながらもどいてくれた。

「では次はトキキサラギくんどうぞ!」

うわー……まじやりたくね。

俺もうなだれて席を立つと、

「トキ様がんばってください。」

「わらわよりいい数値をとってみるのじゃ!」

お前ら好き勝手に…。

「あー行きたくないぞ……」

リリーよりのろろといく。

「ではトキキキサラギくん手を入れてください」

「先生、これって張り出されたりしませんよね?」

一応聞いてみた。

「はい、現時点での結果なのでこれは張り出されませんね」

とりあえず一安心か。

俺は手を入れてみる。

うん。なんかくすぐったい感じだなこれ、

ピーーーーー

ピーーーーー

おい。

なんか長いぞ？

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーガシャッ

「先生、長くないですか……？」

「おかしいですねえ……普通そんなことないんですが」

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーガシャッ

お、終わった。

出てきた紙を手を取ってみる。

あーーーーーーーー……やっぱりか。

文字化けとかしてるじゃん……。

結果をみた先生も硬直している。

「トキキサラギくん。やはりあなたはこのクラスじゃないほうがいいわね……」

うあー捨てられた！

「とりあえず結果としては……現在値 火0 水0 風10 地0  
光0 闇10 gせh gws10 げgたえr10 .:えj@1  
0 pげj p0 最高値火10 水10 風10 地10 光10

闇10 gふえあhj10 ペあjpf10 ふあjf10 あ  
えhj10ね……なんかよくわからないところも数値になっていま  
すが……」

教室はざわめきを通り越して啞然としている……。

まあ光と闇が減多ない世界で10だしな……。  
更にわけのわからない数値まであるし……。  
時間と空間と幻惑と創造だよなこれ……。

そう思っていると、先生が風の伝達でなにやら話していた。

数分後終わったようでごちらを振り向き、

「やっ……」

「トキキサラギくん、リリー・シャルレさん、セリア・クロティルド・ブレさん。あなた達はAクラスに移動になりました」

そう言って、ニッコリわらった。

……。

やーーーーー！

絶対また嫉妬の嵐のようなクラスだろ！！？

っってお前ら二人なに喜んでんの！！！！？

あー、こいつらは強くないといけないんだっただった。Aクラスのほうが効率いいかもしれない…。

しゃーない。

俺も付き合つか…。

「ちなみにAクラスは一日7時間で今日から午後の授業はじまっていますので」



俺の人生は此処までのようだ…。

## 校庭

結局、俺達はAクラスに転入することになった。  
学校が始まったばかりなので、そこまで疎外感を感じない。

俺以外は。

多分あれだ。

服と宙に浮かんでる球体+使い魔のせいだ…。

ってことで、午後の授業の飛行にきている。

クラスってのは潜在能力で決められるようで、現在値は、みんなそこまで差がないようだ。

「じゃー、わたくしがお手本をみせるのでー同じようにしてくださいねー？」

なんかほわほわした先生だな…。

『風 集え 飛べ』

そう先生が呟くと、先生は宙に浮いていた。

やっぱり便利だなー。

隣ではリリーとセリアも始めているようだ。

『『風 集え 飛べ』』

ふわっ

二人は宙に浮かんでいた。

「おー、一発で出来るなんてすごいな」

うん、すごいぞ。他のやつらも半々くらいで失敗してるからな。

「トキ様見てくださいー私飛んでいます!」

うんうん、言い笑顔だな。

「わらわは自由じゃー! トキも早くくればよからう!」

「よし、いくぜ!」

俺も詠唱を始める。

出来るだけ風を少なく集めよう。

『風 集え 飛べ』

その瞬間、俺は掻き消えた。

別に時間や空間を使ったわけではない。

『ズドオオオオオン』

バキツバキ

他のクラスメイトや先生でさえも啞然としていた。

俺は数本の木を折りながら、飛翔もとい弾丸と化していた…。

「……なんて難しい魔法なんだ…こんな練習していたら死ぬぞ!？」  
ぼろぼろだった。

「ご主人さま〜ご主人さまの少ない魔力と、他の方の最大比べてもご主人さまの少ない方が多いんですよ？ 小さな風を集めるなんてかなり難しいです。さっきもかなりの量の風が集ってましたから」

ハクよ、先に言ってくれ。

「ははは、転入生!!! おまえやっぱEクラスの方がよかつたんじやないか？ Aは荷が重いな」

とか言っつて、飛んでいる男子生徒。

くすくす笑っている他の生徒。

ピキッ

『風!!! 来いボケ!!! 命令だ!!!』

めっちゃくちな詠唱をした。

『ゴオオオオオオ』

突如、暴風のように風が収束していく。

他の生徒は風力を根こそぎ奪われて落下してゆく。

俺は浮いていた。

というか、下から強烈な風が吹き続け、浮いているって感じた。

『ははははー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

風の中でさげんでいる俺。

「はははっは……は？」

すごい冷え切ったクラス＋先生の目とあった。

「トキ様ひどいです……おしりうちましたよ……」

「トキもうちよっと手加減するのじゃ……！」

二人も文句を言っている。

俺は問題児のレッテルを押された。

じいじとじいじ、このあとちゃんと飛べるようになった。

## 三八話 訓練

### 授業

「眠い……ここまでつまらない学校もないんじゃないだろうか……。  
なんてくだらない授業だ。理論なんて説明しても意味ないだろ？ 実  
戦でやれ実戦。なんでこんな初歩な……」

俺は机にうつぶせになり、ぶつぶつと文句を言っていた。

「トキ様……口からただただ漏れですよ？」

だつてさ。

なんだよこれ属性の相性とかいらなくね？

そんなの使ってるうちにわかるし。

使わなくても感覚でわかるだろ？

「えーですから水は火に強く、風は火に強く。更に派生の雷は水に強く……」

めちやくちや適当に言ってるだろこいつ？  
ダメだ眠い。

「ねえ君、トキ君だったよね？ そんなに暇なら依頼を受けに行ったらどうか？ ちょうど僕も受けたかったから一緒にどう？ 単位も出るし報償も出るしね」

俺は顔をあげて声の主を見る。

「あんた誰だ？ 俺的にはあんたみたいだな僕っ子につきあつとろくなことがないってビシバシと脳裏に声がするんだが？」

ボクっこだ。

金髪で顔のラインにそつて髪が流れている  
かっこいいと言つか、かわいい。

「あつ、ひどいなー。僕も暇だね。って言っても授業が余裕っていうか眠くなつちやう性格だね」

にこにこ笑っているが、謙遜だなおまえ。  
明らかに魔力そこそこあるぞ？  
まあ俺も暇だったしいいかな。

「うーんちよいまつて。実戦で訓練させたい奴が居てね」

そう言つて、振り返る。



「俺ちょっとこいつと依頼受けてくるけどどうする？」

二人に声をかけておく。

「トキ様が行くなら行きますよ」

「わらわも行くのじゃ。眠くてしょうがないのじゃ」

行くらしい。

「行くってさ。所でお前誰だ？」

「あ、自己紹介がまだだったね。僕はレリア・ロアナ・コメットだよ。」

レリアって……まあいいか。

「てかお前王族かよ？　なんで前後の席が王族なんだよ……」

「んーと言つかここの学校。結構裕福な人たちしか入れないよ？」

初めて知った。

ハクもそうだが何でみんな言うのが遅いんだよ……。

「うし、じゃあ行くか？」

どうせ俺の場合ページ集めないと使えないからな。

「先生……！　ちょっと気分が悪いので依頼受けてお金稼いできま

す！！ じゃ！

適当に言って席を立つ。

俺の後ろに三人＋レンがついてくる。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！！」

「なんですか？」

かったるそうに振り向く。

「火が水に弱い理由を詳しく答えてから行きたまえ」

ニヤニヤ笑ってそんな事を言ってきた。

ふむ。

「水は比熱が非常に大きく。水はなかなか温度を上げることができない。そして一度上がると下がりにくいという特性を持っている。水は気化熱をものすごく必要とし、金属に比べて熱伝導が低く、なかなか温めることが出来ないのはそのためだ。もし魔法で使う場合、同威力だと気化させる前に押し切られてしまうからだ。どうだ？  
先生」

「くっ！！ 行きなさい……」

「ありがと。先生」

そう言って、俺達は出て行く。

「にしてもトキ様は博識ですね。私には何を言ってるんだかわかりませんでしたよ？」

俺の知識って言うより、世界構造の知識から引っぱり出したんだけどな…。

「ふふふ、僕も感動だよ？ あの先生頭が固くて嫌いだったんですよ」

とか言っつて、レリアが腕を掴んでくるが……。

俺は必死に振りほどく「あー」とか言ってるが、おい！！

お前はそっちの趣味か！！？

やだ！！

それだけは嫌だ！！！！

「とりあえず学生課いくぞ？ 依頼受けるんだろ？」

「そうだね。行こうか」

そう言って、小走りでレリアが走るが、後ろに何か子猫みたいのがついていく。

「おい。それおまえの使い魔？」

振り返り、

「そうだよ？ にゃーっていうんだ。どっちかと言うとペットだけど、使い魔なんてみんなこんな感じだよ？」

ん？

つまり神獣とかはないのか。

てかペットみたいなもんだから使い魔召喚がなくて、自分で連れてきていいのか。

「わらわも使い魔買おうかの…」

「わたしもほしいですね」

と二人が、レンとにゃーを見る。

「いや、お前らの使い魔は何にするか決めてある」

二人は何か驚いたような、感動している目で見つめてくるが、

「まあ確實ってわけじゃないが…、洞窟にいるな。来週あたり入るぞ？」

二人は青ざめていった。

「あの…洞窟の魔物は使い魔にすらい上に強いですよ。」

「わらわは別に猫でも犬でもいいのじゃ」

俺の予想が正しければ深層にいるのは…。

「いや、勝手に使い魔作るな命令だ！」

「わかりましたトキ様」

「わらわはトキの奴隷じゃないのじゃ」

とか頬を膨らませているが、

ガシッ

むにむに

「何をいつているのかなAからBにアップグレードした程度で」

「うう…胸は関係ないのじゃ…ぐすん……わかったのじゃ……」

素直になつたな、よし。

「すごい関係だね君たちは…」

なんかレリアがおかしそうに笑っている。

「王女の奴隷とお嬢様の奴隷だ。豪華だろ？」

俺がそう言うと、ますます笑っている。

リリーは嬉しそうにしていたが、  
セリアは膨れている。

「とりあえず入るぞ？　ここだろ？」

俺達は学生課に入る。

普通だった。

紙がたくさん壁に張ってあり。

奥のお姉さんが受理してくれるようだ。

「じゃあ各自探してきてくれ」

俺達は散開して探すことにした。

うーん、ランクはSまでのようだ。

なかなかいいのがないな……。  
お、これがいいな。近いし。

俺が戻ると三人とも決めていたようだ。

「じゃあどれがいいか選ぼうか、セリアからな」

促してやる。

「わらわはこれじゃ!!!」

胸を張ってバンと突きだした。

ランクE 草むしり 場所ブレ国 広場 報酬2リル(銀貨)

ガシッ

むにむに

「な、なにをするのじゃ!!!」

「ぶち殺すぞ? お前は自分の国に帰るつもりか!!!?」

「うう… わらわは王女として」

知らん黙れ。



「はい、次はリリー」

「私はこれですね」

そつと紙をだす。

ランクE 学生寮の掃除 場所 魔法学校 報酬5リル

ぐにゅ

もにゅもにゅ

「あつ…んっ……」

だめだ。

こいつにはこの手が効かない。  
めちゃくちゃうれしそうだし…。

あと、胸の感触が前者と差が大きい。

「はあ…とりあえずこんなのだったら授業受けてた方がマシだ…次  
くレリア」

目の前に紙をだしてきた。

ランクC 洞窟の入口に集まったビッグベア5匹の討伐 場所  
魔法学校 報酬1レラル（金貨）

「まあマシだが、これだと練習にもならん。強いより弱いので数がほしい」

一応訓練だからな！。

「ならばトキはなにを見つけてきたのじゃー！」

俺はニヤリと笑い、紙をだす。

全員が覗きこんで見て固まる。

「トキはアホか！！？ これ5年用のパーティー依頼ではないか！」

「トキ様これはちょっと…」

レリアはくすくす笑っている。

「いや、ちょうどいいだろ？ ちゃんと見てみる」

ランクS 魔法学校周辺の森、魔物約一万匹討伐 場所 魔法学校  
報酬 1000レラル

「ほらな？」

「なにがほらな。なのじゃー！！ これはいくらトキでもきついと思

うのじゃー!」

興奮した様子で、セリアが言ってくるが。

「は？ 何いってんの？ 俺は見てるだけだ。お前らの訓練だからお前らが討伐するんだよ、安心しろ。ちゃんと回復もしてやるし（レンガ）。回復中は敵が来ないように俺が倒すし」

うん。これで安全じゃん。

三人は絶句していたが。

「あ、おねーさん？ これ頼むわ。ん？ 大丈夫だってホラはやくはやく」

俺は勝手に受理させた。

「トキ様すごいです…」

「あはは、君たちは面白そうだね」

「わらわはここで死ぬのかの…」

そんな三人を引きずって、俺は森に向かった。

森

『Automatisches Abfangen』  
《自動迎撃 対象範囲内》

『トトトトトトトト』

「えーでは、ここを回復地点にしたいと思う。ここ付近なら俺が倒すから。あと傷おつたらレンに治してもらえ。はい、行ってこーい  
！！！」

レンは隣でナース服を着ていた。

は？ こんなもんどこで！！？

あ、あの店か！！！

まあいいやかわいいから。

自分的にナース服はあんま好きじゃないが。

「トキ恨むぞ?」

「トキ様のためにがんばります」

「んーじゃあ僕はあっちいくね」

とりあえずセリアのケツを蹴って行かせた。

それから数時間

『水 波となり 押し流せ』

すべての敵を押し流していく。

「はいりレアお前それじゃ押し流すだけで倒せないだろ? ちや

「つちゃと倒せ」

俺は言葉を発しているだけだ。

『地 障壁となりて 守れ』

リリーの前に巨大な岩が出現して守る。

「リリー守るだけじゃ片がつかないぞ？ どんどん攻撃しろ」

ひたすら声だけ。

『風 渦巻きて 押しつぶせ』

上空から風が吹き敵を地べたに押し倒す。

「おまえは魔物を寝かせる趣味でもあるのか？ そよ風なんていらねー」

ふむ。なかなか強くなったがまだまだだな。

「トキーーー！！ そんなこと言うならトキがやって見ればよかるう！！？ この魔物意外に強いんじゃぞ！！？」

黒い狼みたいな魔物を指さしてセリアが叫ぶ。

全員がこちらを見ているようだ。

まあ、お手本を見せるかな。

「あー、わかったよ。じゃあ俺が見本みせるからお前ら次同じことしろよ?」

そう言つと、三人はうなずいた。

「じゃあいくぞ」

『Versammeln Sie sich entlang  
s』

《集い 潰せ》

『ゴオオオオオ』

突如、上空から巨大なサイクロンが地面に向かって突撃する。

『ドガガガガ』

魔物も木も地面も粉々に砕く。

終わると、周囲数百メートルが更地になった。

三人は絶句していた。

「……………」

「  
やれ  
」

「「「できるかっ！！！？」  
「「「

うおいー！！？

リリーまで敬語やめたぞー！！？

さらに数時間

『氷柱となりて貫け！』



上空から何本もの氷の柱が降り注ぎ、数十匹を串刺しにする。

『熱 熱風となりて 焼き殺せ』

周囲にもものすごい温度の熱風が吹きよせ、数十匹単位で肺が焼け、死んでいく。

『雷 天より降りて 貫け!!!』

天より響く稲妻が、的確に敵を駆逐してゆく。  
数は少ないが、完全に消滅しているので威力は大きい。

んーこんなもんか。

パンパン

「はい、もういいぞー。今日はこれくらいでいいだろ?」

三人が集まってくる。

「何を言っておるのじゃ? まだ残っているぞ?」

「トキ様まだやれますー」

うん。出来ると思うがこれ以上やるとお前たち倒れるか死ぬし。

「まあいいよ。後は俺がやるから」

『Und die Dunkelheit füllt die Welt voll』

《漆黑は世界を埋め尽くす》

地面が漆黒に包まれ、すべての魔物がずるずると闇に吸い込まれていった。

「あ、そだ。皮も金になるんだ」

『Raumverbindung』

《空間接続 点を点へ》

闇の中よりつながれた空間から入り、魔物の死骸が上空の出口から降り注ぐ。

山のように積み上げられてゆく魔物の死骸。

『Absage』

俺は解除する。

「ふうー終わった。」

「」「」「……」「」「」

「何？ あ、そだ。明日から学生課に10時集合な？ あ。ちなみに逃げたらどうなるかわからないから」

ニコリと笑って俺は去る。

三人は呆然として、その場にしばらく立ちつくしていたらしい。

ちなみに報酬は、皮の代金を含めて2000レラル出たので50  
0ずつ分ける予定だ。

三八話 訓練（後書き）

次からちよつとほんわかモードぶちこわすよ。

### 三九話 黒の本介入

いま俺は洞窟に向かっていた。

『ご主人さま、おかしいです。』

どうした？

いきなりこっちで話すなんて。

『本の反応がおかしいんです。ページが至るところにあります』

は？

それなら別によくないか？

『違いますよ多分反应的に：“黒の本”のページ…しかも譲渡じゃないですね……』

黒の本…そんな自分のページ無駄にしているのか？

『黒の本の性質は侵食ですよ。喰らい尽す間。多分ページを入れて人間や魔物を侵食してしまったのでしょ…危険ですよこれ。無記ページに侵食させて無理やり複製をつくってます…。しかも始祖の本ですので、ご主人さまが力を奪うことも出来ません。ひたす

らに倒すことしか出来ません。譲渡して正式な本の契約者になったわけではありませんからね…』

誰が侵食されるかわからないってことか。

『いえ、ご主人さまの無記のページが入ってるセリアさんやリリーさんは平気でしょう。もっとも、直に触れられてしまえば侵食されてしまいますが。本体程の大きな力は感じないので、狭間からの介入ですね…。あと残念ですがここまで力がいたるところにあると、光のページがどこにあるかわかりません……』

黒の本って実際どうなんだ？

『そうですね…完全な本ですよ。すべてのページが入っています。複製でも停止世界に入れるでしょうね。プロテクトがないのが救いですが、死んだら根本から白の本を碎かれますよ。と言うか契約者が最悪です。遊んでいるんですよ。ご主人さまで。今までも強くして闘うって言うのを繰り返して来ましたから。これも遊びでしょうね…』

大河原 絶…。

わかった。

注意しておこう…。

『あと白の本のページもきついですね……おそろく……』

おそろくなんだ？

『最悪が起こったらその時です』

まあ心配してたら何も出来ないだろ。

「そうですね。じゃあちゃっちゃんと洞窟行きますかー？」

急に明るい声になったハク。

黒の本ね……。

お前は何がしたいんだ？

大河原絶よ。

「さて、それじゃ行くか？」

「ですねー」

俺は洞窟に向かって走り出した。



洞窟

『雷風　すべてを包み　焼き殺せ!!』

電気を含んだ風が、洞窟の奥に駆け抜け、敵を焼き払っていく。

「トキ!!　なんでわらわ達が闘って、トキは寝ているのじゃ!!」  
「?」

現在俺は、風を纏ってふわふわ浮いている。

「んー、だってちょうどいいし訓練にもなるっしょ?」

「そうですね。僕もこれは訓練になると思います。やはり授業より  
実戦ですね」

レリアはにこにこしている。

「トキ様は悪くありませんよ?」

「ってリリーもなんで浮いているのじゃ!?!」

リリーは首をかしげ。

「風で?」

「そんなことわかっておるのじゃ!?!?!?!?!」

すごい怒ってるなーセリア。

「だって俺はこれから大変な仕事があるんだぜ？」

そう言っつて、俺は欠伸なんてしてみる。

「なんの仕事じゃ……」

「んーお前とリリーの使い魔との交渉兼戦闘」

セリアとリリーは喜々とし始めた。

「なあなあトキー、わらわの使い魔はどんなのなんじゃ？ 美しく  
て強いのはんじやろうか？」

すごい嬉しそうだ。

「ああ、めちゃくちゃ強いし美しいぞ」

「トキ様、私のもキレイですか？」

やっぱりリリーも嬉しそうだ。

「ああ、すげーキレイだぞ」

すっごくダルそうに言っつてやった。

「それでどんなのなんじゃ？」

「あー僕もトキ君に選んでもらえばよかったなー」

おい、お前の猫がふてくされて爪とぎ始めたぞ？

「ドラゴンだ」

俺の言葉に、三人が硬直した。

「」「」……「」「」

「ドラゴンだ」

もう一回言ってみた。

「わらわは今日家の手伝いがあったのじゃ」

お前家からどれくらい離れてると思ってるんだ？

「そついえばトキ様の下のお世話が」

お前は自分で何を言ってるのかわかっているのか？

「そうだった、タマの餌を買いに行かないと」

お前の猫はにゃーって名前だろ？

「ドラゴン捕まえに行くぞ」

「」「」無理です（じゃ）」「」「」

三人が大声で叫んだ。

「はぁお前ら何言ってるの？」

すっごく呆れながら言葉を発してやる。

「トキが何を言っておるのじゃ？ ドラゴンじゃぞ！？ あの最強凶悪なドラゴンじゃぞ！？ 捕まえる前に死んでしまっぞ！！ トキはドラゴンの怖さを知らんのじゃ……わらわは昔……」

何か話長くなりそうだ。

「ストップお前話長い。それ以上話すとお前のセカンドキスまでなくなるぞ？」

トキ様のキス……とかリリーが頬を染めていたが気にしないでおじつ。

「おまえらね？ いつもドラゴンと一緒にいるのに何が怖いんだ？」

？ って感じで首を傾げる三人。

「まあここなら広いからいいか。レンちょっと戻ってくれ」

「はい。おにーちゃん」

そう言って、レンは元の姿に戻る。

どんどん大きさが増して、天井ギリギリの高さまで頭が届く。

白くて美しい輝きを放ったドラゴンだ。

『グガアアアア』

レンが叫ぶと、空気が振動し、細かな石がパラパラと落ちてくる。

「レン、ちょっと顔顔」

レンは体を丸めて俺に頬ずりをする。

「ほらな？ 俺の使い魔だってドラゴンだ。お前らもドラゴンにとけ。空が飛べていいぞ？」

三人は呆然としてその光景を見つめていた。

「」「」……「」「」

沈黙好きだなこいつら。

「ドラゴン捕獲にいくぞ？」

もう一度問いかけてやる。

「」「」無理です(じゃ)」

「なんなのお前ら？」

呆れたように俺は問う。

「な、なんなのはトキじゃ！！　なんて使い魔持つてるんじゃ！！  
？　こんなのもってる奴誰もいないぞ！！？　普通は猫とか鳥とか  
じゃー！！？」

ほんとにみんなちっこいものばっかだな

俺の友はフェニックスとかケルベロスとか麒麟だったのに…。

「んー、お前らなんでそんなもんばっか選ぶわけ？　強さならドラ  
ゴンでいいじゃん？」

さも当然のように言い張る俺。

「トキ様、トキ様のような使い魔を飼いならせる人はいないんです  
よ……？」

ああー！　そう言うことか！？

血の契約がないんだ！！

だから大きいのは言うことを聞かないんだ。

よし。

俺が契約しちゃおう。

「うん。わかった、お前らはいつか反抗して殺されるとか思ってる  
んだな？」

「はい。このような大きさですと歩いただけで踏みつぶされてしま  
います」

「じゃあ俺が契約させちゃおう。お前らとドラゴン。解決だな」

まだ渋っている二人。

「あー、ドラゴンなんて持つてる王女いないだろうなー。持ってたら民衆も支持してくれるかもなー」

ピクッ

「あー、いくら軍の上層部でもドラゴンなんて持ってないよなー。もしかしたら強さの証明みたいになるかもなー……」

ピクッピクッ

「いくぞー!! わらわのドラゴンを見つけに!!」

「行きましょう!! 今こそお父様とお兄様を見返すときです!!」

二人はずんずんと先に進んで行った。

俺とリレアは一度顔を見合わせ、ふっと笑ってやった。

9層

『火 地獄の炎 焼きはらえ』

地面一面が炎につつまれ、魔物を焼き殺していく。

「まだ九層なのに敵が強いのじゃ……」

敵は緑色の巨人になっていた。

「たぶんドラゴンは最下層だな…、最低でも40はあるはずだぞ。最高39って行ってたし。たぶん一か月近くかかるんじゃないか？」

一同は愕然としていた。

「わらわは何も持ってきておらんのか……」

「私も一日で帰れると思って」



「僕もですね」

うん。

ってことはマッピングしてたのも俺だけかよ!!!?

「お前ら甘く見すぎ…てかここまでもそつだがマッピングしとけ。帰りどうすんだ?」

全員が青ざめていた。

考えてなかったなこいつら。

「そ、そんなこと言ってトキも何も持ってきてないじゃろ?」

まあ手には持ってきてないが。

俺は自分の影の中に手をつっこみ、ご飯を並べていく。  
ちなみに、光は宙に浮遊している球体を再構成して、ライト変わりにしている。

「まあいいか。とりあえず飯にしよう」

三人はめちゃくちゃ驚いてるようだが……。

おいセリアおまえ涎たらすな!!?

「トキ様…それはどこから……?」

「あー言ってなかったっけ? 俺の影って収納できるんだよ。闇の魔法で」

実際は空間を影の上につなげただけだが。

「便利なのじゃな…トキわらわと結婚してももの持ちになってくれんじ」  
「死んでもお断りだ貧乳」……ぐすん」

自分の胸を見、レンとリリーを見て泣きだした。

リリーも自分の胸をみてちょっと微笑み、

「それならトキ様わたし」  
「黙れ喰い尽すぞ」……えう」

お前らワンパターンすぎて先が見えてしまう。

おいリリー!!?」

お前何喰い尽すぞってところで両手を耳にあてて体くねってるんだよ!!?」

「それなら僕」  
「死に腐れ変態」……ヒドイ」

男だけは嫌だ!!」

鬱陶しくなったように、俺は立ち上がる。

「どうしたんですか?」

「ああちょっとトイレに」

「それなら私が飲」  
「お前頭おかしくなってきたな?」……うう」

こいつはどんどん変態になってくぞ!!?」

はつきり言っただけで仕えるって言うのを間違ってる。

貴族に買われた奴隷みたいなことを素でやるつもりです。

さて、

『Hervor als ein Gesetz der Natur』

《理より外へ 倍率限界》

世界は色を失いほぼモノクロとなる。

「ハク、レン。気づいてるか？」

俺は二人に声をかける。

「うん。おにーちゃん大きいよ」

「ご主人さま、白の本か黒の本のページですね…」

だろうなあ…普通こんな力ありえない。

「たぶん次の層ですね。とりあえず行ってみますか？」

「行くしかないだろな…」

そう言って、俺達は歩き出した。

十層

近づくにつれて、床に散らばる骨　骨　骨。

「これはきつついなあ……」

「たぶん人の骨ですねー…魔物はこんな力発していれば近づきませ  
んから」

「おにーちゃんいっぱいいるね」

たぶん100じゃきかないだろうなあ…。  
討伐しにきた王国軍とかかもしれないな。  
学生も混ざっているだろう。  
こんな場所じゃ学生なんてきたら瞬殺だろう。

そして俺達は歩みをすすめる、

あーもう最悪すぎる。

なんかもう見ただけでわかるぞ…？

白い龍に黒いまだら模様。

真っ赤な瞳。

大きさは30メートル程度だが…。

「どうしましょうご主人さま。今度こそ死んじやうかもしれません  
……」

「なんとなくわかるけどあれはなんだ？」

「ドラゴンに白のページがとりついて、それに黒のページが侵食してますねー……。こちらからの攻撃は不可能。向こうからの攻撃は完全には届きませんが届きます。しかも結界とか張っても相殺されて更に半分の方が届きますね……」

もう最悪すぎる相手だわ……。

「ついでにもう目合ってますね、というか……避けてください……！」

俺とレンは一気に跳躍する、  
そして……。

『ガアアアアア』

『ドゴゴオオオ』

俺達のいた場所が破壊される。

レンは！？

俺はレンの方向を見、

「レンっ！！ 避けるー！！」

叫ぶ。

だが、避けられるはずがないんだ……。  
空中に跳躍したばっかだぞ……。

『ドゴゴゴオオオン』

レンごと壁を貫通した……。  
上空から光が差し込む。

地下10階だぞ？

地上まで貫通しただと！？

「ご主人さま！！ レンちゃんならあれくらい平気です！！ です  
が戻ってはこれないでしょう！！ 集中してください」

『ゴガアアアン』

集中しろって言っても、避けるので精一杯だぞ！！？

『Verschiedener Formen・Griff』

《万障掌握 全は意思により》

周りの岩が大量に龍に向かって突撃する。

ゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッ  
ヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッ  
ゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッゴシヤッ





『24 Punkte der Sterne』  
《二十四点星陣 循環世界》

二十四の点が循環の結界を張る。  
俺の現在作れる限界の結界。

それが、龍が空間に閉じ込める。

『ガアアアア』

パライイイイン

『ドゴオオオオオオオ』

くそっ

循環させればいいと思ったが一瞬もたねえ。

「ご主人さまどうしましょう!!!? ここはやられるの覚悟で私のアイアンメイデンを奪ってみませんか!!!?」

「アホかつ!!!? 処刑道具だろうが!!!?」

『ガアアアア』

くそっ、普通小説とかだと、会話中は攻撃してこないはずだろ!?  
めちゃくちゃ攻撃してくるし!

「違いますこの場合ずっと守ってきた処『いいからなにか案考えろ

「!!」思いつかばないんですよー!!」

にしても、なんだよこの光と闇の融合見たいな光線。  
めちやくちや破壊力あるし!!」

アイアンメイデンするか!!」

『Eiserne Maid』

《アイアンメイデン》

「ご主人さまついに私の!!」

『ブシャアアア』

周りから岩を金に変えた針が、無数に龍に向かって差し貫く。  
龍はかなりの血を流しているが……。

普通に立ち上がる。

生命力たけー!!!!!!!!!!

「ハクのアイアンメイデンつかえねー!!!!!!!!!!」

「何を言ってるんですか!!!!!! ちゃんと傷はつけたでしょ!!!!  
? 早く私にも傷を!!!!!!」

『Verschiedener Formen - Griff』

《万象掌握 穿ち殺せ》

天井から極太の針が龍に突き刺さる。

『グガアアア』

「おいハクつ！！！！ 天井なくなつた！！ 幻惑が使えねええええええええ！！！！」

『ドガアアアアア』

「私に言わないでくださいよ！！ ご主人さまが早くわたしにもあ  
あ言う太いの突き刺してくれないからこう言うことになるんです！  
！！！！」

「適当なこと言ってんじゃねー！！！！！！！！！！」

『ガシヤアアアア』

てか俺の上崩れそうだ！！！！  
俺はとっさに跳躍して避ける。

『ガアアアアアアアアア』

あ…。

岩は避けたが…。

死ぬ死ぬ。

「短い人生でしたね！……」

「おまえ何億年生きてんだよ！！？」 『Metastase』

俺は地上の穴付近に転移した。

「じぶつ……くそつ……！」

「ご主人さまはまだ転移は使えないんですよ！！ だから今まで空  
間つなげたんじゃよ！？」

俺は口から血を吐いていた。

まあ分かってたけどな。

そうか……。

ここからなら……。

「ハクすまん。また死にかけるか、死ぬかもしれん」

「はあ、別にいいですよ。一緒に心中してあげますから」

「よし、レンと同じ素材で俺の腕と足に取り付け」

そう言うと、ハクは俺の両手両足に装着された。

サンキュ。

『Verschiedener Formen - Griff』

《万象掌握 押し潰せ》

一瞬でいい。動きを、

周囲からの岩のホールドによって、

龍の動きが一瞬とまる。

十分だ!!

俺は一層目の天井を蹴り、龍に向かって突撃する。

あと50

あと20



『ズドオオオオオオオオ』

倍速時間で、速度を速め現実世界に戻る。

俺の体は慣性で超光速のまま。

俺の世界に入り込んでいた龍は、モノクロ世界から現実世界に戻る。

そのまま殴り飛ばし10層くらい地面を砕きながら共に落ちる。

「つてえ…レンの鱗でも肩まで砕けてるぞ…」

右腕は完全に肩口まで消失していた。

「無茶しますねー。でもご主人さまの無茶は大好きですよ！！さてもう一回必要ですね？ 次は足にしましょう。多分あの深さじや腕だと心臓まで砕けちゃいます」

『Metastase』

《転移》

一層まで転移する。

「じほっ…じふっ」

俺は更に、転移の代償の血を吐きだす。

「また転移ですかー」

「じほつ……もう変わらねーよ!! いくぞ!!」

『Zeit f?ngt an zu laufen!』

《時よ、駆ける 限界突破!》

俺はもう一度地面を蹴り飛ばす。

限界以上に倍率を上げ、鮮血をまき散らしながら突き進む。

あと150

『ご主人さま』

なんだ

あと130

『侵食されたページをとりこんだらですね』



あと100

『たぶんご主人さまは長い眠りにつきます』

どれくらいだ？

あと70

『たぶん100年以上ですね』

そんなにか

あと50

『はい。それで深層に落とされて記憶をみます』

俺のか？





を我が主』

『ご主人さま……時間は止めておきます。塚の間の休息

そこで、俺の意識は完全に途切れた。

四十話 本の記憶

「じいじは？」

「ああ。」

「たしかハクが」

「ハク？」

「誰だっけ？」

深いなことは？

どこまで潜ればいいんだろうか

あかりが

あそこのまじろはび

あ  
と  
ち  
ち  
よ  
っ  
と  
ん

カ  
ッ



まぶっ...

ああ。

ここは俺だ

キレイだな

俺の中にもこんな場所あったんだな

誰かいるな

一人は黒い人だ

一人は白い人だ

白は俺か

そんなに暴れた壊れちゃう

キレイな世界が

ああ

世界が壊れた

白い人は死んだ

俺の中にもぽっかりと何かが空いた

カッ

キレイな世界が戻った

さっきのは？

何か言っているな？

「……………あ！……………のに！！」

白い人が何か…？

もう少し近づいてよか

「リセット！！ なんでお前が！！？」

白い人が剣で貫かれてる

「じぶっ……ずっと好きだった……。じぼっ……愛していたよ……  
さよなら」

ああ、これが俺の結末か

カッ

世界が戻った？

「ああああああああああああああああああああ……！！  
俺は……！！！！！！」

あれは友だったのだろうか？

俺が人を殺している

そして自分を貫いて死んだ

カッ

次は何だろう？

「信じてた……信じてたのに……」

これも友かな？

今度は殺されてるけど

真っ赤な炎で焼き尽くされて

カッ

「俺は！！ なぜこんなにも人を殺さなければいけないんだ！！！！」

たくさんの骸の上にたってるな…

剣を捨てて目をつむってる

そして、全方位から刺されて死んだ

カッ

「ありがとう……こんな俺を殺してくれて……」

ん

恋人かな？

キスをしながら刺されてる

つらいね

カッ

「我はまだ死ねない……死ねないんだあああああああああ  
!!!!!!」

真黒ナ塊に押しつサレて死んだ

あれ？

おれは我？

我八だレ？

カッ







コレデワレは何どメを終工たノダるウか？

カッ

「世界を我が手に！！！！ 人々よ！！ なぜ我に立ち向かう！！！！  
我は神じゃぞ！！！！！！」

我八人のテニよつテ死ンダか

カッ

「ふんっ。ござかしい黒の本めが……！ 貴様と我。どちらが神に  
ふさわしいか決めようではないか……！」

我はヨワいノウ。

強くなリタイノウ。

何トシねバ気がスムのジヤ

カッ

「白の本よ。なぜ我から出てゆく、我では不足だったのか？ ならば死のう次の生にかけようではないか！」

わレハ？

カッ

「次の生にかけようではないか……！」

同ジシを？

カツ

「次の生でこそっ！！！！！」

我八ワかった

カッ

「次こそ我は！！！」

我八…いや俺は

カッ

「我こそが！！ だが次で！！！」

なぜハクがこれを最後にしようとしたか

カッ

「いずれ次の我が現われるであろう」

俺は頼りすぎたんだ……

カッ



「我は何度でもよみがえるぞ!!!!!!!!!!」

お前に頼りすぎたんだよ。

カッ

「我の次の生よ!!!!!!!!!! 頼むぞ!!!!!!!!!!」

終わりだよ。

お前はそこで終わりだ。

俺が終わらせるよ。

終わらせよう

48万7986人の俺よ

俺が限界までやるよ。

ダメだったらあきらめてくれな？

48万7986人の俺。

それにしてもハク。

お前、前に一兆年っていったじゃん……。

どう考えても1京年以上前から一緒だったじゃねーか……。

一人一人が千億年近く生きてるんだから……

ありがとうハク

ありがとう前の俺

教えてくれて

俺は踏み外さないよ

カッ

「なあ、来世の俺よ。俺は気づいたんだよ。もしお前が見てるんだつたらさ。次で終わらせてくれ。俺はもうダメだけど。自分を忘れるなよ？ いまの自分を忘れるな。時がたっても今の自分を大切にしろ。俺はもう3億年くらい生きただけ。まだ覚えてるよ。最初の気持ち。見てきてどうだった？ 忘れた俺と忘れてない俺？ この言葉が来世の俺に残せてよかったよ。」

覚えとくよ一つ前の俺。

お前の覚悟俺が叶えてやるよ。

俺は48万7987人の俺を胸に抱いていきよう。

これから何があっても忘れないよお前らのこと

俺は最後の俺として精いっぱい生きよう

じゃあな。

俺

「白の本に少し しておくな 緒 るからな？」

聞こえないよ、俺。

「 時は 呼 」

何を？

「 らだ 」

聞こえない……。。

カッ

『じ』……ま……じんさま……！』

「ご主人さま……！」

俺はゆっくりと目を開けた。

帰ってきたか……。

「ただいま。ハク」

目の前にはハクとレンがいた。

「見てきたよ。48万7986回の光景を」

「そうですか……。どうでしたか？」

「やっぱりきついな…俺は壊れてたよ。ほぼすべてが」

俺は泣いていた。

ぼろぼろと泣いていた。

「ご主人さまは時の中で、少しずつ変わって行ってしまいましたか」

「う」

「前回の俺の頼みだったんだな。ハク」

「そうですね」

「ずっと俺はお前を頼りにして自殺してったよ」

「はい」

「最後の奴の言葉覚えてるよ」

「壊れなかったご主人さまですね」

「そつだな。これだけ生きて唯一だよ」

「そうですね」

「忘れなければ壊れない。それが確信出来てよかったよ」

「忘れないでくださいね。最後のご主人さまは、それをアナタに残すために生きていたようなものでした」

「俺に伝えるためか」

「はい」

「俺もあいつみたいになれればいいな」

「なれますよ。似ていますから」

そう言って、ハクは笑った。

「ありがとうハク。今まで付き合ってくれて。そしてよろしく」

「どういたしましてご主人さま。最後の生をよろしくおねがいします」

「それで俺は何年眠っていたんだ？」

「約260年ですね」

「そうか。長かったな」

「はい。数兆年ですから」

「ずっと世界は止まっていたんだな。その間」

「はい。世界はご主人さまの目覚めを待ち続けています」

「そろそろ戻そうか。あ、俺はここに何をしに来たのかと誰ときたのか教えてくれないか？」

「リリーさんとセリアさんの使い魔として、ドラゴンと交渉に。男の方はレリアさんです」

「どうしようかな。全然思い出せないが…何をしようと思っていたか。あとで教えてもらっていいか？」

「はい。すべてお話ししましょう。今までのこと。これからのこと」

「ありがとうハク」

「私のご主人さまですから当然ですね」

「レンもありがとう。ずっと世界を止めてくれて」

「おにーちゃんのためだから大丈夫だよ。おきれてよかったね。お兄ちゃん」

「そうだな。さびしかったか？」

「さびしかったけどハクちゃんとずっとはなしてたから平気」

260年も何を話してたんだが…。



「あーてかおれ290歳近いじゃん…」

「まだ全然ですよ。あと1兆倍くらい生きてもらわないと困ります」

「すごい歳だな…それは」

「はい！ だから起きてください一緒に生きましょう。三人で」

「そうだな。いくぞ。レン時間戻してくれ」

「わかった、お兄ちゃん」

そして世界は戻る。

キレイな色のある世界に。

俺達は三人で歩き出す。

仲間の元へ。

## 四一話 シロクロ

俺とレンとハクは戻った。

「ただいま」

三人が振り向く。

うん。それはいいんだけどさ。

どっちがリリーでどっちがセリアだ!?

「おかえりじゃー」

よし。感でいこう。

「ただいまリリー」

沈黙が……。

ミスった……。

なんか雰囲気的にセリアを無視してリリーに話しかけたように。

「す、すまんセリアちょっと寝ボケてた。ただいまセリア」

「また寝ぼけてたのかのー? 全く御飯がさめてしまうぞ?」

あれ？

俺ってそんな寝ぼけてるキャラだったのか？

「そうだなー。最近寝ぼけてるよな」

「「「……」」」

え？

なに？

俺なんかミスった？

「トキが認めるとはめずらしいの？」

俺めちやくちや難しー！！？

「じゃあ俺も食べるかな」

そう言っつて、俺はご飯に手をつける。

ハク。俺の特徴をひたすら教える。

あと以前の事とこれからのことだ。

時間がある時には、記憶のバックアップデータもくれ。

『わかりましたー。ではひたすら食べていてください。話せないくらいい』

俺はひたすら食べる作業に入った。

そして現在食べ過ぎて気持ち悪い。  
ハクにはある程度聞いておいた。  
何百年もあの映像見せられてると、思考が神に近寄ってしまう。

「トキ、がつつきすぎじゃぞ？」

「トキ様大丈夫ですか？」

「ああ、なんか腹減ってな。とりあえず行くかー？ 使い魔とり行くぞー」

そう言って、俺達は進んだ。

つてかほんとに動きたくない……。でもここにいと絶対にボロだすぞ。てか体感時間は260年どころじゃなかったしなあれ……。普通に一京年超えてたぞ？

「……なんじゃ？　これは」

目の前には大きな穴って、これ俺がやったんじゃないか？

「ああ、それ俺がさっき開けといた。下に降りやすくなっただろ？　上にも開けておいたから出る時も楽だな」

「」「」「」「」

またやっちまったのかー！！？

「この洞窟って魔物があばれても大丈夫なくらい頑丈なんじゃが…」

…

「トキ様ですから不思議ではありませんよ」

「そうですね、僕もそう思います」

ハク？

俺ってこんな扱いだったのか？

『はい。前の世界では二つ名が『非常識』でしたよ？』

すっげーいやな二つ名だ。

『にしてもよく無事でしたねー。侵食したページを収集したときはもう起きないかもしれないって覚悟していたんですが』

戻るぞ。

お前達が待っているからな。

って言ってもお前たちのこと途中まで忘れてたが……。

『ヒドイですね』

すまん……。

「まあだから降りるか。全員飛べるだろ？」

俺達は、全員風の魔法で飛び降りた。

「トキ様……これ40層どころじゃないですよ？ 50層くらいありそうです……」

「と言うかどうな壊し方したらこんなになるのじゃ。壁とかまでロボロボじゃぞ？」

すまん。俺もわからん。

そもそも俺が壊したって言うのもさっき聞いたし。

にしても暗いな。

『Beleuchten Sie』

《照らせ》

部屋を丸ごとてらすような光を放つ球体が、30個ほど宙に浮遊した。

「「「……」」」

なんで――――！！！？

「トキ様…光の魔法使えたんですか…？」

そう言うことか。

時系列が全然わからん。

「ああ。なんか光と闇使えるって言ったら騒ぎになりそうだったから使わなかった」

俺は世界を学んだんだぜ！

ハクからな！！

「そうですね。私たちはトキ様に慣れましたが、他の方は驚くですよ」

「僕は君に非常識って名前をつけようかとおもっよ」

またそれかよー！！

「やめる。そう呼ばれていたことがあつたらしいからな」

「「「らしい？」」」

なんでお前達はそんな所に敏感なの！！！？



「いや、ただ俺は知らなかっただけ。知人から聞いた」

「そうじゃったのか」

ふー

「にしてもモンスターが全然いないな？」

さっきから見かけもしないぞ

「そうじゃの。結構深くまで来たからもっと思っただんじやが……」

うーん。

「そこで隠れてる虎みたいなの。なぜ出てこない？」

俺の視線に気づいた三人はそちらをみる。

そして固まった。

そこには白い5メートルくらいの虎がいた。

「トキ様……やめたほうがいいかと。すごく強そうですし……」

俺は虎のほうに歩いていく。

「な、何を？」

『グガアアアグガアアアガアアア』

「ふむふむ。そう言うことか」

「トキ、虎の言葉かわかのか？」

「いや全然」

全員がずっこけた。

「ってかお前日本語話せ！」

ぱいっ

俺は虎の鼻を叩いた。

「ひっ……ひっ……」

三人は恐怖に震えていたが。

トラは腹を見せて仰向けになった。

「……」

「なんじゃ。結構人懐っこい魔物なのじゃな？」

と言ってセリアが近づいてくるが。

『グガアアアア』

トラは牙を？いて威嚇した。

ぱじっ

「だから。お前威嚇するな。怖がられるだろ？」

また腹を出して寝ころんだ。

上につて腹を撫でてやると気持ちよさそうだ。

「なんでわらわにだけ……ぐすっ」

「いや…あれはトキくんにだけだと思えますが……」

「そう言えば、魔物は敵の強さに敏感らしいです」

「あれに恐れられるトキくんっていったい……」

俺はまだ虎で遊んでいた。

「さて。お前、俺達を乗せてこの層の地下への道まで走れ。吠えたら噛み殺す」

そう言つと、一回震えて地べたに座り込んだ。  
乗っていいということだろうか。

「ほらおまえら乗っていいってよ。はやく乗れ」

「」「」「」

三人はびくびくしながらも虎に乗った。

トラはものすごい勢いで洞窟を走り抜ける。

「トキ様。なんでこの魔物は言うことを聞くんですか？」

「弱いからだ」

「はい？」

リリーは首をかしげているが、

「こいつは弱くて臆病なだけだ。だから自分より強い奴には従うんだよ」

何をあたりまえなことをもって感じて言ってみた。

「でもわらわのときは……」

「それはお前のほうがこいつより弱いからじゃないか？」

「わらわは……えっぐ……」

泣いた「……!!?」

なぜこれくらいで……。

「まあ気にするな。これから強くなればいいだろ。あ、ホラついたぞ」

俺達は虎から降りる。

「ありがとなー虎」

そう言って、俺は最後に降りた。

「お。ここ最下層だぞ？」

「なんでわかるのじゃ？」

だっているし。

「そこ曲がればわかるぞ」

俺達は曲がり。

俺とレン以外は後ろに戻った。

「おい！！ なんでお前たちついてこないんだよ！？ セリアとリリーの使い魔だろ！！？」

ぶるぶる震えてるぞ…。

「……だってそれじゃそれ。」

そう言って、俺の後ろを指さす。

すっごい小声だ。

そこにはドラゴンが50匹くらいいる。

この世界にドラゴン少ないって言うけど、多分隠れてるからなん  
だろな。

「はあ、交渉しに来たんだろ？ あとプライド高いからあまり変なことするなよ？ 食われるからな」

ビクツつとなる三人。

にゃーだっけ？

猫なんてぶるぶる震えて服の中に入ってる。

そんな二人を俺はひきずって行く。

「おい貴様ら！！！！」

俺は大声で叫んだ。

ぼーっ

いきなり後ろから、セリアが殴ってきた。

「何するんだお前は？」

「トキがさっき失礼なことするなって言ったんじゃろ！！？ なにやっておるのじゃ！！？」

声ちいせーよ…。

「ああ、別にいいんだよホラ。」

ドラゴン達は全員こちらに頭をたれていた。

『我らに何か御用でしょうか？』

一番おおきなドラゴンが声をかけてきた。

「おお、しゃべれるやつがいたのか都合がいいな」

そう言って、俺とレンは前に出る。

「なんじゃ結構いい奴じゃの」

と言って、セリアが前にでてくるが、

『ガアアアアアア』

「」「ひっ!?!?」「」

ぼっ

俺はセリアを殴った。

「だから失礼なことするなって言ったただろうが!?!?」

「トキのぼうが失礼じゃろ!?!? わらわは近づいただけじゃ」

『人間ごときが我らに近づくことは許されん!! 消し炭にしてやろっ!!!!』

三人はがくがくしているが、

「てかお前短気だな……、まあいいやちょっとドラゴン二匹くれ!」

めちやくちやふてぶしく言う。

「と、トキ様、何を言ってるんですか…殺されちゃいますよ……」

後ろの二人がこくこくうなずいている。

「あそこの二人の使い魔になってほしい。ちょっとお前ら二人来い」  
「！」

なかなか来ない二人をひきずっていく。

「こいつらだ」

『失礼ながら、あなたならいざしれず。人間ごときになぜ仲間を差し出さなくてはいけないのでしょうか？』

「使い魔がほしいからだ。だって強いし」

しれっと、言ってやった。

『たしかに我々は他の種族よりは強いです。しかし、人間如きに仲間を差し出すわけには』

なかなかくれないな。

「お前達は何か勘違いしてるぞ？ これはお願いじゃない。命令だ」

刻の態度に三人は今にも倒れそうな勢いだ。



『……』

「ほう、黙るか？」

『ズドオオオオオオン』

俺は掻き消え、

一番でかいドラゴンの上空から殴りつけた。

そして組み敷く。

「わかったかドラゴンよ。お前が何を考えていようと俺には関係がないのだ。差し出さないのなら二匹以外全員殺して連れていくぞ？」

そう言って、俺が見まわすと。

ドラゴン達はビクツツと震えひざまずいた。

三人はあまりの光景に愕然としている。

相手はドラゴンなのだ。

人間よりはるかに強大な最強の種族。

「なあ？ わかるか？ お前と俺どっちが強い？ ドラゴンは強い奴に従うものだろ？ そして上位にも従う。両者ともここにはいるじゃないか？ 何を躊躇うことがある？」

にやりと俺は笑う。

『わ、わかった。そなたらに二龍渡そう。どれでも好きな龍を選ん

『でくれ』

俺はにこりと笑い、掻き消え、

瞬間、セリアとリリーの二人のそばに立っていた。

「よし、交渉成立だな。いいドラゴンでよかったよなー?」

三人はいまにも気絶しそうだった。

「おい、選ぶぞ。てか俺を選ぶ。交渉したんだから選ばせる」

「と、トキ。あれは交渉じゃなくて脅迫じゃ」

「交渉は時には脅迫も必要なんだ」

なんだかカツコイイこと言っていないか俺?

『ご主人さま、カツコイイかもしれないがめっちゃくちやですよ?』

黙れハク……。

「さて、俺は始めから決めてたからな。リリーついてこい。お前はこっちだ」

そう言って、リリーをつれて。

って言うっても、歩かないのでひきずって。

「こいつだこいつ。お前の髪と同じ黒。属性は闇だ。大きさは20メートルくらいしかないが強いぞ。これでいいだろ?」

リリーは顔面蒼白になってこくこくとうなずいている。

「ハクお前契約方法知らないか？」

これでなかったらどうしよう……。――

「そうですねー……一応ページが入っている二人なので白の神として契約を仲介することが出来ます。これですがどうですか？」

そう言って、俺の中に白の本からデータを送ってくる。

「これでいいや、そうだ。お前化身できるか？」

ドラゴンに聞いてみると、こくこくとうなずいている。

「OKいまから契約始めるから。逃げられたり殺されないようにな。リリーとドラゴン対面に立て」

リリーはおそるおそる前に立つ。

「じゃあ今から契約始めるからな」

俺は、一度息を吸い込み。

『Ein wei?er Vertraag』

《白の契約・開始》

二人の間の地面が白く輝き。

光の中にあるような感覚になる。

『Die Zeremonie des Vertrages von wei?em God』

《白の神による契約の儀式 移行》

二人の間に光の祭壇のようなものが浮かび上がる。

『Sie Lily Charle. Versprechen Sie, da? Sie dieser Person ewig einen Aufseher annehmen?』

《汝リリー・シャルレ。この者を永遠に従者とすることを誓うか?》

「ち、ちかいます」

噛みかみだが、大丈夫だろう。

言葉違っても通じるんだな。

本の翻訳か?

『Versprechen Sie, da? Sie Sie machen, Lily Charle Hauptleitunng ewig.』

《汝、リリー・シャルレを永久に主とすることを誓うか?》

『グアアアアア』

もう何言ってるかわからんが、OKってことだろう。

『Der Vertrag wurde hier. Ich, wei?er Gott schickt einen ewigen Segen』

《此処に契約は成った。我、白の神が永久の祝福を送る》

ひとときわ光輝くと、光の祭壇から何か、リリーとドラゴンの胸に入り込んだ。

「ふうーおわった。そうだなー効果で言うと、ちょいドラゴン。お前リリーに攻撃してみる」

これで失敗してたらせどうしよう……。

「え？」

リリーがそんな声を上げるが。

既にドラゴンの爪が目の前にせまっていた。

「ひっ!」

パライイイイイン

ドラゴンの攻撃は何かに弾かれた。

「よし成功だ。これからお互いに攻撃すること出来ないから。あとリリーもドラゴンも誰かと契約することが出来ない。どちらかが死ぬまでな」

そう言うとリリーは安心したのか、ドラゴンの顔をなでる。

ドラゴンも気持ちよさそうにしてるな、よし。

次行くか。

「はい、次はセリアだ。ペットのようには扱っなよ？ 相棒だからな？ ドラゴンに王女かどうかなんて関係ないんだからな」

一応釘をさしておく。

「わ、わかっておる！ー！」

「じゃあついてこい」

そう言って、一匹の白いドラゴンの前に立つ。

「こいつだこいつ。どうだ？ キレイだろ？ 属性は光 まあ体長はやっぱり20メートルくらいだがこいつも強いぞ。これでいいだろ？ 文句言ったら自分で交渉しなおせ」

確実に失敗するけどな。

「これがいいのじゃ」

おお。いい返事だ。

「聞いておくがお前化身できるか？」

こくこくとうなずく。

無口だな。

喋ったらそれはそれでうるさいが、

「じゃあはじめるから」

『E i n n W e i ? e r V e r t r a a g』

《白の契約・開始》

同じように光りだす

『Die Zeremonie des Vertrages  
on wei?em God』

《白の神による契約の儀式 移行》

同じように祭壇が現れ

『Sie Seria Clotilde, der versc  
hwimmt. Versprechen Sie, da? Si  
e dieser Person ewig einen Auf  
seher annehmen?』

《汝セリア・クロティルド・ブレ。この者を永遠に従者とすること  
を誓うか?》

「ち、ちかうのひゃ」

お前噛みすぎ……。

まあいいやこの行程あんま意味ないし。

俺が認めることが大事なだけだし。

『Versprechen Sie, da? Sie Sie  
machen, Seria Clotilde, der ew  
ig Hauptleitung verwischt?』  
《汝、セリア・クロティルド・ブレを永久に主とすることを誓うか  
?》

『グオアアアア』

『Der Vertrag wurde hier. Ich, w

ei?er Gott schickt einen ewigen Segen

《此処に契約は成った。我、白の神が永久の祝福を送る》

二つの光がそれぞれの胸に入り込む、

「はい、契約終了」はいドラゴンセリア攻撃して」

「ま、まつのじゃ」

だが俺の方が優先度高い命令権なんだよな！。

パライイイイイン

「はい契約終了」

「なんでわらわじゃなくてトキの言っことを聞くのじゃ………?」

やっぱり聞いてきたか。

「上位だからだよ。たしかに普通ならお前の命令を聞くだろうが、俺とレンの命令の場合お前より優先される。もともと契約自体俺がしたしな。この世界契約ないし」

話聞いてねー！

さっそく背中に乗ろうとしてるし!!

「はい。お前からこっち来て化身になってくれ」



龍は主を無視して俺の方に歩いてくる。

そして光輝き、1メートルほどの小さなドラゴンになった。角々しかつたのが、少し丸くなった。

なんか二人が目をきらきらさせてるが…。

「「かわいいいいいいい（のじゃああああああ）」

そう言っつて、抱きついてる。

「はい、とりあえず学校はその姿でいさせる。食事の量もすくなくなるからな」

うなずいてたが、俺のことをじっと見る。

「なんだ？」

「トキ様白の神ってなんですか？」

「我白の神が〜って言ったのじゃ」

あーばれてたか？

やっぱ、儀式対象には翻訳されるんだなこれ。

「契約の定義文みたいなもんだ。結婚式だって誰がやっても同じこと言っただろ？ それとおなじ」

「そうですかー私はてっきりトキ様が神様なのかと」

『何をいっつておるのだ？ 誰がどう見たって彼は神』ストーーーーーッ

「プお前それ以上何か言ったら首根っこから千切るぞ！」…なんでも  
ない」

「まあとりあえずありがとな。こいつら俺の加護つけてるから、3  
00年くらい生きると思うけど、終わったら返すよ。ありがと」

『よかるう。我らやそなたにとって300年などないに等しいから  
な。その時にでももう一度顔を出してほしいものだ』

「ああ、じゃあ300年後に会おう。またな」

三人がじーっとみてる…。

「トキ様。私なんで300年も生きるんですか？」

あ、言ってなかった。

「すまん。俺の核いれたろ？ 魔力高めるために。あれの副作用で  
寿命が延びる。下手したら400年とか生きるかもしれない」

「そうですか、別にそれくらいいいです。対価ってことですね」

「トキはなんで300年生きてても元気なのじゃ？ よくよく考えた  
らおかしいのじゃ」

確かにおかしいが。

人間の寿命増やせるほうがおかしいだろ？

「よくわからないがとりつかれた感じ？ 呪いの杖のハクに」

「ご主人さま、それはひどいですよ。たしかに見方によってはのろいですが…」

うん。ある意味呪いだな。

「とりあえず行くぞ。どうせ深層はつて、あーそうだった。おいドラゴン。なんかお前ここにきた証拠になるようなものないか？ また生えてくるものでいいぞ。お前たちの体のどっかとか」

三人のために単位とっておかないとまずい。

『ふむ。じゃあこれでどうだ？』

そう言つて、自分の歯を一本折って渡してきた。  
めっちゃ痛そうだな。

「それ生えてくるのか？」

『一か月くらいで生えてくる。気にするな』

「わかった。サンキュー、また来るわ。暇な時にこの龍連れて顔出すよ。あとコレお礼だ」

そう言つて、俺は20メートルくらい積みあがりそうな果物を取り出した。

はっきりに言っていない。

ハクとレンが買いまくったやつだ。

『ふむ、すまぬな。楽しみにしておる』

俺は2メートル近くある牙を収納して、出口に向かった。

そのまま飛んで地上に出、下を見た。

このままだとここから誰かドラゴンの所にいつちまうな……。

『Verschiedener Formen - Griff』

《万象掌握 操作》

俺はすべての穴が塞がるように、地面を移動した。

「トキくん今なにやっただい？」

なにして……また誤魔化さないよ。

「ああ、地の魔法でふさいだんだよ。このままだとアイツらの住処があらされちゃうだろ？」

「ふふ、君は本当に……」

そこで言葉をとぎつたが、先は言わなかった。

「とりあえずよかったな。お前たち使い魔が出来て。化身すれば大ききさもちょうどいいし見た目的にもかわいいだろ？ 二匹一緒にいると白と黒で双子みたいだ」

見ただ目そっくりだ。

「はい。ありがとうございますましたトキ様」

「ありがとうじゃ。ういやつでのつ」

とか言っつて、頼りしてる。

「名前はなんてつけたんだ？」

「クロです」

「シロじゃ」

……思い出せないが、どこかで聞いたようなネーミングセンスだな……。

「まあそいつらにふさわしい主になるようにがんばれ。いまは俺の仲介でだけど、いずれな。そいつらは光と闇属性だから結構強いし」

この世界なら最強の部類に入るだろう。

「そうですね、がんばるね？ クロちゃん」

おお、なんかリリーが普通の少女みたいだぞ？

「がんばるつものシロ」

シロも訓練に付き合わされるのか……。

「ボクもにゃーに決めないでトキくん決めてもらえばよかったよ」

おい!!! にゃーがまた爪とぎ始めてるじゃねーか!!!

ストレスだぞ!!!??

確か、ハクからもらったバックアップに、同じ光景があったな。

「じゃ、とりあえず学生課いくぞー」

俺達は学生課に向かった。

「おねーさん買い取りおねがい。あと洞窟の証明」

俺達は学生課のお姉さんの所に行った。

「はい、どれでしょうか。」

ドゥンッ

「これは…なんでしょうか？」

不思議そうだ。

「洞窟の一番奥にいたドラゴンの親玉の牙」

「どっ……ドラゴンですか！？ ちょ、ちょっとまってください」

何やら奥で慌てているが…。

「トキ様ーこれで私たちが最高記録ですよ？ 予期せずお父様に言われた例題完遂しました」

そしたら……、きっと親が来るだろうな。

どうやって追い返そう。

「そうかもしれないが、お前は俺の奴隷だから家に戻るなよ？」

「はい。私はトキ様の奴隷ですから」

奴隷って言われて喜ぶやつはあんまないぞ……。

お、奥からおっさんが出てきた。

「では、少し拝見させてもらっていいですか？」

「別にいいですよ」

何やらループのようなもので見ている。

「これは……、たしかにドラゴンのもですね……この大きさだと50メートル以上のドラゴンでは？」

「ああ、たしかにそれくらいだったかな。測ってないから知らないけど」

「では、ドラゴンの牙は貴重です、さらにこれほどのものとなるとほしがる王族もかなりいるでしょう。ですから四人ということでも40万レラルでいかかでしょうか？」

「……よ、40万レラル?!?!?」「」「」

驚いているが俺にはまったく理解できません。  
円にしてくれ。

「なんだ？ そんなすごいのか？ 俺貨幣価値知らないからわからない」

てかこの世界の通貨わかりにくいんだよ……!

「どつでしよつか？ ドラゴンの牙は最高の嗜好品なのでいくらいいのですが」

「ああ、いいよ別にいくらでもいいし」



「と、トキ。わらわの国の年の収入よりおおいのじゃ……」

「お前の国の収入はずいぶんしょぼいな？ たかがドラゴンの牙のときで」

「ちっ、ちがうんじゃ！！ たしかにわらわの国はちいさいかもしれんがその値段が異常なのじゃ」

「まあたしかに光輝してるしな。宝石みたいだ。もちろんレンの鱗よりは全然しょぼいけどなーレン？」

そう言っつて、撫でてやると気持ちよさそうにしている。

「でき。それ証明にならないか？ また行くのめんどいから証明になればいいんだけど。てかはつきり言っつてそれくらいしか証明するものなかったぞ」

一部屋しかなかったしな。  
いたのもドラゴンだけ。

「だ、大丈夫です。最高探査者として国に申請しておこう。学校でも表彰されるとおもっぞ？ 学生証を見せてもらっつていいじゃるか？」

別に隠すようなものじゃないからカードを渡した。  
使い道のないただの学生証だがな。

「い、一年生じゃったのか…、5年生30人でも39層が限界だったのに……一年生四人で……」

いや、30人とかいたら逆に邪魔だ。

「それで何層まであったのだ？」

「53層くらいだったかな」

「そんなにあつたのか……最深部はどんなところだったのだ？」

ずいぶん興味ありそうな顔だな。

どうせ行けないだろうし、いいか。

「ひとつの部屋しかなかったぞ。でも行かないほうがいいな。ドラゴン50匹くらいいたし」

俺以外が言ったらきつと……、な。

「ど、ドラゴンが50匹だと……？ とてもじゃないが誰もいけん……いろいろ教えてくれてありがとう。お金のほうは明日教室に届けからな。学生書を返すよ。情報提供ありがとうな」

「いや、またなんかあったら頼むよ」

「こちらこそよろしく」

そう言って、俺達は歩き出した。

「にしてもどうしようか。洞窟以上に強い魔物がいる場所どこかあるかな？ 目的がないと訓練のやる気が出ないぞ」

「そうですねー。そういえば最近凶暴な黒い魔物がでるとか言う村が」

絶対それ黒の本だ〜…。

「それって何匹くらいでるんだ？」

「なんでも滅ばされた村付近一帯が、魔物で真っ黒になるほどだとか」

まずいな…そいつらだけでこの世界壊れるぞ。

「じゃ、それ行くか。ついでにお前らは留守番してろ」

「はい？」

「だから留守番」

「何で連れて行ってくれないんですか？」

めっちゃくちゃ危険だからだ！！

「いや、危ないでしょ？」

「今回はトキ様にずいぶんと助けていただいたので次は私もがんばりますー！！」

「いやいや。ドラゴンなんかと比べたら一万倍くらい危険なんだけど」

「わらわもいくのじゃー!!」

はぁ……。

「わかったけどさ。遠くから俺の戦ってるところ見て、無理だと思つたら絶対くるな。この約束が出来ないなら連れて行かない」

まだ納得していないようだったが、しぶしぶうなずいた。

「ボクもいくよ。君たちといれば強くなれそうだし。なにより面白そうだ」

「まあそれはいいけどさ。」

ガシッ

むにゅ

やっぱな。

「最初から思ってたけどお前なんで男のふりしてんの？」

三人は眼を見開いている。

まあハクに教えてもらったんだけど。

魔力が女のだとか。

「気づいてたんだね？」

「まあな。バレバレだ。しぐさが女だよ。ズボンでスカート穿いて

るように座ったり、指の動きとかな」

もちろん適当にはったりだ。

「すごいね。トキくん。まだ理由を教えるわけにはいかないし変えることも出来ないけど、いつか聞いてもらうことがあるかもしれないね」

ってか今の胸の感触だとかなりデカイぞ？

胸ってそんな質量まで変えられるのか？

つまり女は天然の空間魔法を使ってるわけじゃないか！！

とか全然話を聞いていない。

「まあ別にいいや。とりあえずお前ら使い魔登録行くぞ？ 教室持ち込めないだろ？ てかレン生徒だと思われるから一応登録しておくかな…」

「じゃあいくかの。こんなついやつを留守番させるなんてわらわにはできんのじゃ」

俺達は校庭の隅にある使い魔登録所に行くことにした。

## 使い魔登録所

「おお、なんか人いっぱいいるぞ？」

なんか結構人いる。

「そうだね。今の時期、最初から使い魔を持つてる人を見たりして、自分のもほしいとおもう時期なんだよ。ちょうど休み明けだから皆買ってきたんじゃないかな？ お金はみんな持つてる家だからね」

使い魔が売ってるのも不思議だ。

取りに行けばタダじゃないか！！

「にしてもみんなちっこいのばかりだな。動物ジャン！！！ 魔物捕まえろよ！！！ タダじゃねーか！！ 金の無駄だ！！！」

「トキ様みたいに来る人はいないかと…魔物って人に懐かないから討伐されるわけで…」

うんうん、とうなずく二人。

「よかったな。お前らタダで。金ないだろ？」

何黙ってるんだ？

「トキ様は知らないようでしたが、さっきの40万レラルってどれくらいが知ってますか？」

普通に分かんぞ。

「全然わからん。40万だからリンゴ一個100円として4000個くらいか？」

はあ、とため息を吐く三人。

「1レラルでリンゴ125個くらい買えますよ？」

そんな事をリリーが教えてくれた。

「ん、まてまて。それだと40万で5000万個買えるぞ？ 50億円……。王族バカだろ！！ セリアばか！！！」

俺は興奮して、セリアの頭を叩いてやった。

「なんでわらわなのじゃ！！？ わらわはそんなの買わないのじゃ  
！！ むしろ買えないのじゃ……ぐすん……」

もっともだ。

「見た目が宝石のようなのもそうなんですけど。ドラゴンの火などを直に浴びてるはずなのに、無傷なんですよ？ 武器にしたり防具にしても最高のものが出来るんです。しかもあの大きさと武器を何本も作れます。結果あの値段になるんですよ…。美しく、魔法も通さないし攻撃にも使える宝石です。万能なんです」

すげーな。

今度アイツの歯全部折ってこようかな。

そんな事を俺は考えていた。

「まあそれならばらくは金に困りそうにないな」

「と言うか一生遊んで暮らせませすよ？ 私と暮らしますか？ トキ様」

変なところでプロポーズしてくるな。

「暮らさん。とりあえずさっさと行くぞ。すぐそこなのになんて話しこんでんだ……」

そして、俺達三人は使い魔を登録用紙に記入していった。

「後はこれを出せば終わりだな」

「そうじゃの」

俺達は、ちょうど空いたおっさんがいる窓口に行く。

「すみませーん、おっさんこれよろしく」



俺はおっさんに声をかけた。

「む？ その小さいの二匹とそこのおじょうちゃん姿変えてるな？」  
そんな事を言ってきた。

「おい。セリアおまえ化身できるやつ聞いたことないって言ったじやん！！」

「わらわは聞いたことがないだけじゃ！！！」

なにこいつ自慢してんの！！？

「一応登録は本来の姿ですることになってるからな。すまんがちょっと戻ってもらっていいか？」

いや、無理だろ？

「おっさん、なんとかならないか？ ここで戻すと大変なことにな」

多分最低でも木とガラスは割れる。  
着地したら校庭にクレーターが。

「大丈夫だ。ここは使い魔を扱う専門だからな。何かあってもすぐ対処できるんだよ」

ホントかよ……。

「おっさん。もし何かあったらあんたが責任とってくれるんだな？」

「おお、いいとも。ただし故意に攻撃したりしなければなはっはっは」

仕方ねーな。

「セリア、リリースするしかないぞ……」

「そうじゃな」

「そうですね……」

「ボクはならない方がいいと思うけどな……」

じゃあどうしろと？

「とりあえず踏み潰さないように速攻で飛んでくれなレン、シロク  
」

一人と二匹はうなずく。

「シロとクロが一緒になっておるぞ……」

どうでもいいだろ。

「戻れ！！ 三匹！！」

『ゴオオオオオ』

三匹は戻るやいなや、上空に飛翔した。

ばっさばっさ

あー木とか風圧で折れてるし!!

『グオオオ』

パライイイン

校舎のガラスがー！ー！ー！ー！！！！

下でも生徒がパニックになってるし、使い魔が暴れてる！！！！

俺の責任じゃないからな？

俺はおっさんに詰め寄る。

「おっさん。さっきの言葉守れよ？ 俺達は戻すの反対したからな？」

「あ、ああすまんかった。とりあえず俺が責任はとろう……給料が……」

知らん!!

お前のせいだ!

「にしてもドラゴン三匹とは今年の新入生は……」

多分俺達だけだ。

てかあいつら三匹で遊んでるな！。

レンが3倍以上でかいし。

てかレンお前20メートルくらいでかくなってるぞ！！？

260年でそこまでか！？

そう言えば、時幻龍のおっさんがあのでかさだから成長遅いから  
いか……。

「レンー！！ シロクロー！！ 遊ぶのやめて戻れ！！」

そう叫ぶと、元の姿になってとてととと三匹が駆けてくる。

「レン成長したんだなーよかったな？ 人間の姿は変わらないが」

そう言って、撫でてやると嬉しそうにしている。

「おにーちゃんを守れるように早く成龍になるよ？」

おおーそれは嬉しいが、お前が成長するとどこにもつれていけな  
いな。

「まったく面影がないんだな……」

おっさんがそんなことを言ってるが、

「普段はこっちでいないと一緒に入れないだろ？ 登録いいか？」

「あ、ああ。大丈夫だ。だけど学校で戻さないでくれ」

「わかってるさ。だから断っただろうが」

溜息まじりに言ってる。

「そうだな、それはすまんかった。今度からは信じることにするよ」

そのあと、俺達はそのまま寮へ帰った。

四一話 シロクロ(後書き)

新しい小説書き始めたので更新おくれるかも？

あとレポートが・・・

## 四二話 リリーの父親(前書き)

<http://ncode.syosetu.com/n4247>

i /

同時連載してみた)・・・)

## 四二話 リリーの父親

「んー……」

もにゅもにゅ

ん？ なんだこれは？

むにゅ

バツ

目の前にはシリコンがあった。

あれ？

こんなシリコン買った覚えないぞ？

これが秋葉原名物おっぱいマウスパッドか？

視線を少しずつ上に移動すると、顔があった。

うん。本物だ。このさらさらの黒髪はリリーだ。

でもまて？

俺は昨日は普通に寝たはずだ。

ハクにもそんな関係になってるとは聞いていない。

ハク。

俺はいつもこんなことしていたか？

杖状態のハクに聞いたです。



「そうですねー。いつもは私に襲いかかっていたんですが。今日は気分変えたんですか？」

変えたも何もお前に教えられないと記憶ないぞ？

だがなんとなくわかる。

こいつは嘘をついている。

「よし。俺は起きる。この状態でリリーが起きるのはまずい」

そう言って、立ち上がるうとするが何かが足に絡みついていた。

後ろを振り向くとレンがいた。

全裸の。

まてまて。

ハク、俺は使い魔に手をだしていたのか？

「はい。毎日揉みまくりでした」

揉みまくってたらしい。

もみゅもみゅ

うん。柔らかい。

規格外のアンバランスさだな。

そこでレンがゆっくりと目をあける。

「んっ……おにーちゃん胸触りたいの？ いいよ？」

やはり俺は触っていたのか？

むにゅ

「んっ……あん……」

まずい。絶対これはなかった。  
魂がなかったと言っているぞ？

チユッ

レンにキスを試してみた。

一瞬目を見開いたレンだったが、嬉しそうに舌を絡ませてきた。

「んっ……ちゅく……ぴちゅ」

一度離し……、

「おにいちゃん初めてしてくれたね？」

そんな事を言い出した。

「ハーーーークッ……!!」

俺は一気に布団から飛び降りた。

俺の叫びで、全員が目を覚ましたようだ。

「お前嘘つきすぎだろ！？　いつもしてるって言っただろがっ！？」

レンなんて初めてでディープだぞ！？

「ご主人さまへ気にしないでくださいよ。キスくらいみんなやっているので、レンちゃんだけかわいそうですよ？」

いやいや。レンは子供だぞ？

胸はでいかもれないが12歳くらいだ。

無理だろ！？

「おにーちゃん？　最後までする？」

子供だったー！？　なんでそんなこと知ってるの！？

「レン……お前いつそんなこと聞いたんだ？」

「おにーちゃんが寝てた260年の時いろいろ教えてもらったよ？」

ハク。お前は廃棄処分だ。

その後、重りをつけられ、熱湯に漬けられていたハクが、リリースに救出されたのかなんとか。

全校集会にて

「えー、ですから……」

長い……なんて長い集会だ。

あのハゲ校長いつか殺そう。それが生徒のためだ。

「何を怪しい笑みを浮かべとるのじゃ？」

セリアがこちらに気づいたらしい。

「トキ様は寝ているのですよ？」

おいっ！？ 目あけて、にやにやしながら寝ているやつがいたら  
気持ち悪いだろリリー！？

「なんだ、そうなのか？ わらわは少し心配したのじゃ」

納得してる！？

「いや、お前ら？ なんでそれで納得してんだ？」

「「ひっ！……？」」

トドメー！

「全くビックリさせるでないわ、寝てるとおもったのじゃ」  
「トキ様、いつのまに起きてたんですか？」

「一回も寝ていませんが？」

「えー、次に洞窟の最下層まで行ったチームが出ました。国からの表彰と記念品が届いております」

途端に生徒たちがざわめきだした  
「うわー、ここですか。」

めちやくちゃ恥ずかしいじゃん。

「最下層！？ すご……」

「だって今まで五年生のAクラス全員で行って39層だったよね？」  
「そんなすごい人たちがいるの!？」

そんな呟きが聞こえる。

「よし、俺は寝る。任せたお前ら」

「だめですよトキ様、主役がいないと困ります!」

俺の腕をぐいぐいと引っ張るリリー。

「いくのじゃトキ!」

「バカ!？」 両側から引っ張られても拮抗するだろうが!

「えー、では。一年Aクラス、トキ、キサラギ。セリア・クロティ  
ルド・ブレ。リリー・シャルレ。レリア・ロアナ・コメット。前へ」

全員呼ばれたー！ー！？

一年が？ みたいなざわめきがあがるが知らん。

「よし。俺も行くが、リリーお前代表だからな？」

「はあ、わかりました」

しぶしぶと俺は段の上へのぼる。

「では、代表トキキサラギ。前へ」

「なぜだっ！！？」

全然意味がわからないぞ！？

「すみませんトキ様。朝聞かれたときに代表はトキ様と……」

「よし、お前帰ったらお仕置きな？」

「あ……はい。えへへ」

なんか嬉しそうだな……やめておこう。

仕方ないので俺は前に出た。

「トキキサラギよくやってくれた。君は我が校の誇りだ」

そう言って、学園長は、手を前に出してきた。

「すまん、セリア。お前がいつもつけてる手袋貸せ」

「仕方ないのじゃ……」

そう言って、渡してもらった手袋。

小さすぎるので、手と手の間において握手をし、にっこりと笑んであげた。

学園長の口元がひきつっていた……仕方ないと思う。

「はいよセリア返す」

「い、いらなのじゃ！ 汚いのじゃ！！」

そう言って、セリアは受け取った手袋を地面に叩きつけて、踏みこじっている。

学園長の額に青筋が……。

「あーゴホンっ、これが表彰状と記念盾、それと光の球だ。君たちには表彰状を読む気も失せたよ。光の球は貴重品で暗い場所でも宙に浮いてまわりを照らせるらしい」

うん。いらない。

光の球なんて俺の周りに5個浮いてるし。

俺はそれを受取。

「はいよ、お前ら。俺の分のは全部やる。いらない」

俺はそう言って、ぽいぽいとリリーとセリアとレリアに渡す。

「トキくん。いいのかい？ 光の球は貴重品だし。盾も普通もらえるものじゃないよ？」

「ああ、いらん。荷物になるし」

そう言いながら段からおりた。

ふと、リリーが一点を見つめて驚愕に瞳を見開いていた。



その先には、えらそうな髭をはやしたおっさんがにこにこ立っていた。

あー、たぶんあれは……。

だいたいの事情をさとした俺は、そのまま教室に向かった。

教室

「ひどいのじゃ。あのあと監にいろいろ質問されたのじゃ」

セリアが頬をふくらませて、文句を言ってきた。

「トキくん。君のことも結構聞かれたよ？　ぶっきらぼうだけどファンクラブもあるらしいよ？」

「いやいや、ファンクラブとか怖いから！　てか喧嘩売ってんだろセリア！？」

「とりあえず、俺の情報は秘密にしとけ。めんどくさいことになりそうだし」

それよりさっきから黙り込んでるリリーが……。

「リリーさっきのお前の父親か？」

びっくりしたような顔をしていたが、

「はい……多分私を連れ戻しにきたんじゃないかと……。お父様に言われた命令を遂行しちゃいましたので」

そう言って、俯いてしまった。

さて、でもまだ今のリリーじゃ勝てないだろうな。

バンッ

「みなさん。おはようございます！」

めっちゃくちゃ有頂天な先生が現れた。

俺の怒りも有頂天。

「うちのクラスから最下層まで行く人が出ましたー！ー！！ 先生も鼻高々ですっ！」

いやいや、お前何もしてないだろ？

「それとですねー、四人には国からお金が届いてますよ？ 国の兵士さんこっちです持ってきてください」

そう言っつて、先生は扉の向こうにいる兵士を呼ぶ。

なにやら二人でひとつの宝箱のような物を運んできたようだが…。

ぞくぞくと運んでくる。

ぞくぞくと…。

ぞくぞく…。

「っつて、多すぎだろ!?!」

「トキ、何を言っつておるのじゃ？ 金貨40万枚じゃぞ？ あれくらいの量になるのじゃ」

40箱程、大きな宝箱のような物が積み上げられていた。

「トキキサラギ様。ドラゴンの牙の代金40万レラルです。サインお願いします」

とりあえず、こんなの一つずつ確認してたら朝になってしまうの

で、適当にサインをして、兵士を帰した。

「よかったですねー？ 私もこんな大金見たの初めてですよ？」

先生がめちやくちやく目を輝かしている。

クラスの連中も目がキラキラしている。

乱闘が起こりそうだ。

「セリア、リリー、レリア。あとで分けるとして、おれの影の中に早くいれちゃうぞ」

影の中に空間を開き。

四人で全部いれていく。

クラス一同はその光景に驚いていたが。

「でわー、次は魔法理論の時間なので、先生がくるまで待っていてくださいねー。HR終了でーす」

「そう言っつて、先生がいなくなつた。  
俺達もやっつと収納が終わり、のんびりしていた。

「リリー、ちよつと外行かないか？」

リリーを呼び付ける。

「え……でも、今は」

「いいから行くぞ。他のやつらは来なくていいからな？」

リリーの手を引き外につれていく。

## 学校の外

「ふむ、以外にすぐ見つかったな？」

「あ……」

リリーは途端に青ざめて俯いてしまった。

「やあ、これはこれは。最下層までいった優秀なチームのリーダー様ではないですか？」

いちいち嫌味が。

身長は185くらいの髭を生やしたおっさん。

細身だが、服の上からでもしっかりと筋肉がついていることがわかる。

「ああ。トキキキサラギだ。で？ あんたは何の用でここに来た？  
「たいしたことではありませんよ」

そう言って、くすくすと笑っているおっさん。  
上品な笑い方だな。俺にはめ真似できん。

「リリーを連れて帰ろうと思いましたが、国に名前はもう残したので、ここに通う意味もないので」

やっぱりそれかよ……。

「残念だがそれは無理だ」

「ほう……無理とは？」

笑いをやめ、目を細めるおっさん。

「こいつはもう俺の奴隷だからな。あんたに返すわけにはいかない」

そう言っつて、俺はリリーを抱きよせる。

「少年。リリーは私の娘だが？ シャルレ家の所有物を勝手に盗まないでほしいのだが？」

目を細め、見下すように俺を見ている。

「ああ、だが今は俺の奴隷だ。シャルレ家だかなんだか知らないが」

一度言葉をとぎり、

「そんなゴミ屑のような家系にリリーを戻すわけにはいかないんだよ屑が……」

俺は叫んだ。

「き、貴様……！ いま貴様は誰に喧嘩を売ったかわかっているのか！？ 我がシャルレ家に立て着くということは、レイズ王国に喧嘩

を売ることに変わらないのだぞ！」

ちよつとビックリした。

いきなり鬼の形相に変わるんだもん。

「いやー、と言うかさ？ お前の家つて実力主義だろ？ だったら強いほうのものだろ？」

そう言うと、キョトンとしてからにやにや笑いだした。

「そう言うことが、つまり今私と闘ってリリーを奪い取るうと？ 私がだれか知っているのかい？」

「何をいまさら。レイズ王国の軍事総監だろ？」

「それがわかつて挑んでくるなら話はよいな。レイズ王国で最強の人間よ！ 来い！ エアリー！！！」

突如、上空から10メートル程の大きな鳥が甲高い声を上げながら降下してきた。

「これが我がシャルレ家の当主にのみ従うエアリーだ！！ 見る！ この美しい羽根を！」

驚いた。

使い魔にじゃなくて自分で戦わないその姿勢にだ。

「あんたさ？ まさか自分で戦わないってことか？」

「何を言っているのだ？ 使い魔は強さの証明！ それで主の強さはわかるだろうが！！！」

うん。こいつはアホだった。



そもそも、当主が弱い中から選ばれてたら、使い魔が当主より強くなるじゃん。

「あー、わかった。でもさ。もし俺があんたに勝ったらリリーはもらうけど。リリーにはもっかい後であんたの兄に決闘を挑ませてよ？」

「トキ様？ 何を……？」

腕の中のリリーが震えながら訪ねてくる。

「はははははっは、いいだろう。もし貴様が私とエアリーに勝てたらお前の望みを聞いてやろう」

「はいはい、それだけ分かればいいよ。いい加減むかついてきたし」

笑い方すら人をおちよくなるな。

「では、ここで勝負をするか？ 校舎がすこし危険だと思うが？  
なにしろ私の攻撃は破壊力がすごいからな！」

「うわー、なんだろうこいつ……？」

「いいよ、ここで……はあ……」  
『Acht Punkte der  
Sternen』《八点星陣 拡張》

俺達の周りの空間が急速に広がる。

校舎があつと言う間に遠ざかり、見えなくなる。

地面以外なにも見えない空間。

「な、何をしたんだ貴様……！」

「いちいち叫ぶなよ……空間広げただけだったの……」

リリーとおっさんが驚いているがいいだろう。  
こいつらしいかないから。

リリーは別にいいし、おっさんには忘れるほど恐怖を味わっても  
らおうか。

「そ、そんな魔法知らないぞ!？」

「だから……別に攻撃したわけじゃないんだから驚くなって……」

んー、でもこいつの実力がわからないんじゃないやリリーをどこまで強  
くしたらいいかわからん。

「あと使い魔邪魔だな。あんたはさ。使い魔自慢したいようだけど  
さ? どうでもいいんだよね? リリー、ちょっとクロ戻して」

リリーが慌ててクロを戻す。

目の前に20メートル程の美しい、漆黒色の龍が飛び上がる。瞳  
はルビーのような赤い色。体は漆黒をここまでキレイだと思つこと  
もないだろう美しさだ。

「な、なななな。こ、これは?」

俺はリリーの背中を押してやる。

リリーはニッコリと俺に笑い前が出る。

「私の使い魔です。お父様」

驚いていたようだが急に態度を急変させた。

「でかした！ でかしたぞリリー！！ このドラゴンがいれば我がシャルレ家も更に評価されよう」

何を言っているんだ？

「おっさん。勘違いしているようだが？ リリーは俺の奴隷だ。お前にやるとは言っていないぞ？」

「な、何をいうのだ貴様は！！ 貴様もどうせこのドラゴンがほしくてリリーに近づいているのだろう！！？」

「あー、てかりリリーがめちゃくちゃ哀れそうな目でお前を見ているが？」

「はあ……レン戻れ」

レンが一度きらめき、70メートルはあるだろう大きな龍に戻る。純白の龍へ。鱗が宝石のようなので、光を浴びでプリズムに輝く。

『グガアアアアッ』

レンが吠えると空気。いや、空間がびりびりと震える。クロと比べるとクロが赤子のようだ。

「な、な……」

「まあ、と言うわけでドラゴンは間に合ってるから。ついでに俺。使い魔の戦いなんて見たくないから。エアリーおいで」

エアリーは甲高い声を上げ俺の方に飛んでくる。そして俺の頬に顔をこすりつけてくる。

「エアリー何をしている！ 戻って来い！！」

エアリーは元主を見向きもしない。

「あのね？ 使い魔はお前の家と同じで実力が高い奴に従うんだぞ？ お前如きが俺に敵うはずもないだろ？」

おっさんは顔を真っ赤にして震えている。

『水 雷 熱 暴水よ 敵に向かいて殺し尽せ』

熱湯に雷を含んだ水の放射が俺に襲いかかる。  
相当な電気を含んでいるのかバチバチと言っている。

しかし……熱しすぎて結構気化してるし……、  
これだけ挑発して、しかも、長い詠唱でこれが。  
一番強い魔法が？

「なあリリーこれがあいつの一番強い魔法か？」

「はい。これで軍事総監になったようなものですね。と言うかトキ様！ 何をのんきに話しているですか！？ 避けてください」

ふむー……

俺は振り払うような仕草をした。

それだけでおっさんの魔法は消え去る。

「なっ！！？」

「と、トキ様いまのは！？」

あれで最高ならリリーはすぐ抜けるだろうな。

「あー、あれは前方の空間ごと消し去っただけだ」

二人は驚愕の顔をしている。

「トキ様は……光と闇と風しか使えないのでは？」

「んー、そんなこと言ってないぞ？ あと時間と空間と幻惑だ」

知らないと思うけど。いい機会だから教えるか？

「そ、そんな属性聞いたことないぞ！？」

「そうなの？ じゃああんたで試すから見てればいいよ」

そう言っつて、俺は地面に手をつき。

『Verschiederer Formen - Griff』

《万象掌握 操作》

地面が持ち上がり、100メートルはありそうな巨大な龍が首をもたげる。

ドラゴンではなく、スマートな龍。

ただ、顔だけで100メートルはありそうだ。

「おっさんは聞かなくていいけどさ、これが幻惑ねりりー」

龍がおっさんに向かって口をあけながら呑みこむ。

殺すわけではなく、そのまま口の中を通って地面に潜り込む。尻尾は開けておいたからね！

「っつて！ もう失禁してる！？」

はやつ！

「じゃあ次は、ちょっと遊ぼうかな」Ailes sofort  
Emission』《一斉放射 威嚇》」

宙に浮いた光の球体5個と、闇の球体5個からすさまじい勢いで弾丸が放射される。

それをおっさんはわたわたしながら避ける。

もちろん当たらないように設定している。

「ぷっ……くすくす」

お、やつとリリーが笑ったな。

おっさんのせいですつと暗い顔してたからなコイツ、

「どうだ？ お前が怖がってた父親は、漏らしながらわたたと足踏みしてるアホだぞ？」

「くすくす……そうですね？ なんでこんな人を怖がっていたんでしょうか……ぷっ」

いい笑顔だな。始めてかもしれないこんな笑顔。

「じゃあ次は、」Acht Punkte der Sterne  
《八点星陣 循環闇世界》」

おっさんが闇の結界に包まれる。

「んでこれが」

俺は光の球を結界の外に配置する。

中からは自分の手すら見えない暗闇の中に一条の光、出口のように見えるはずだ

「さらに『Wenn ich dadurch laufe』《  
駆け抜ける時》」

そこで俺は座った。

「トキ様。あれはどうなつたんですか？」

リリーが俺にしだれかかるように座り、聞いてきた。

「んー、暗闇の中に循環する結界を張つてな？　そこに光が見えるわけだ。人間は普通の暗闇ならいいけどさ。自分の姿すらも見えない闇だと心が壊れちゃうんだよ。それで、光を求める。でも、その光には絶対に届かないから走ってるだろうな。時間も中は一万倍の速度で経過するからな。一分でも一か月くらいか？」

「くすくす……トキ様はいじわるですね？」

「まあな。お前にずっとひどく当たってた父親だからな」

そう言って、リリーの黒くてさらさらした髪を撫でてやる。

「ふふふ……でもそんなトキ様も大好きです」

うん。普通に笑えるようになって何よりだな。

「あとはお前が頑張れ。たぶん父親は俺が壊しちまったけど……、兄はお前が勝つんだ。そしたらお前は自由だ」

「はい。がんばりますね？ そしたら私と結婚しましょうか？」  
「嫌だ」

即答だ。一瞬も考えていない。

「むー、ひどいです！ そんなこと言いつトキ様にはえいつ」  
ちゆ

いきなりキスをしてきた。

「あっ……んむっ……ちゅっ」

最近なんかディープに慣れてきたな……。

「ぶっ……ん……ちゅく」

そう言えば昔雑誌でキスは甘いとか言うのが  
普通は無味だよな。

甘いつて言うのは確実に直前に何か食べたたる？

ぶはっ



「ふふふ……既成事実までもう一步」

自分の唇に人差し指を押しつけてウィンクするリリー。

「強引になったな……お前」

「トキ様の性奴隷ですからね」

「いやいや。まで。」

性奴隷なんて言ったことないぞ!?

「俺は初体験もまだで性奴隷がいるのか?」

リリーはキョトンとし、

「そうなんですか!?!? うれしいですね やっちやいましょうか? 今。誰もいませんし?」

「いるいる。レンとハクが。どっちにしろやらん。それにやってたらお前の親父死ぬぞ?」

うん。確実に死ぬ。

「なんかトキ様がいればお父様もお兄様もどうでもよくなってきちゃいました」

めっちゃくちゃ怖いこと言ってることに気づけ!?

「とりあえず解くは。一年くらい放置したぞこれ……ちょっと覚悟しておけリリーきつと酷いことになってるから……」 『Absage』



『パチン』

あつ……あまりの恐怖に飛ばしちまった……。

「すまんリリー飛ばしちまった……」

「えーっと、どこにですか？」

「洞窟の最下層」

「……………」

あんな人間を見たらドラゴン達速攻で殺すだろうな……。

「トキ様……………」

「なんだ？」

リリーが決意をしたような表情で口を開く。

「私達は何も知りません。私と愛の巣へ帰りましょう」

「ああ。愛の巣は行かないけど帰ろうか……………」

そう言つて、俺は立ち上がる。

リリーは立ち上がらない。

「どうした？」

「あ、あの……………あまりの恐怖に腰が抜けて……………」

たしかに怖かった……、多分俺の人生で一番怖かった。

俺はリリーをお姫様だっこをして帰るのだった。

「この体制ってキスし放題ですよね？」

「俺が落とすかもしれないぞ？」

「ひどいですねー。そんなことしたら明日の朝にはトキ様は童貞卒業しちゃってますよ?」

「めちゃくちゃ大胆だな? 無理だろ?」

「大丈夫ですよ観察してましたから。トキ様が朝立『ストップ』なんですか?」

「それ以上は禁句だ」

「はい。あと腰を抜かすって何かエッチな気がしませんか?」

「……」

「ねーねー、トキ様もそう思いますよね?」

そんなやり取りをしながら、俺達は寮に帰った

## 四三話 黒き獣

侵食された町

今、俺達四人+使い魔は例の町から二キロ程離れた上空にいる。

うん。早速帰りたい。

て言うか、俺、ここから細部が見えるってどンドン人外に……。

「三人ともあれ見えるか……?」

後ろの三人に問うてみる。

「みえませんか?」

「見えないのじゃ」

「見えないね」

まあ、普通見えないよな。

黒くは見えると思うが、

でもこれ以上近づくと感じられるってハクが言うしな……。

闇で望遠鏡のようなものを作ってみた。

実際は空間つなげただけだけど。

それを二人に渡して見てもらう。

「あー、もうね。わかる? ほらもうさ……」

「「「……」」」

「 どうでしょうか? 」

「「「……」」」

三人が押し黙ってしまうのもうなずける。

だってもう完全に村人なんて生きてないし。

地面が黒で塗りつぶされるくらいになんかいるし……。

動物を最大限に不気味にしたような黒い生き物が……。

「ハク。俺の攻撃通じるか？」

一応聞いておくか、

「はい。闇以外なら。ただし耐性は高いでね……大技じゃないと一回で殺しきれないかと。あの数ですとご主人さまが先に魔力切れちゃうかも？ さすがに何日も大技放ち続ける程魔力がないので……」

うん、絶望的な分析ありがとう。

「はい、作戦会議します。誰かあれに挑みたい人」

「「「……」」」

だよな……村なんてもんじゃないぞ。

山一個全部おおわれているようなもんだ……。

木々に隠れて表面上は見えないが……地面なんて見えない。

こいつら連れて行くわけにはいかないな……。

「レン。止める」

俺がレンに声をかけた瞬間には、時間を引き延ばしてくれた。

最近レンも成長してるな。

見た目以外が、

「ハクどうすつか？ 三人には悪いが荷が重すぎるだろ？」

「ですね。三人なら一分も持ちませんよ。それでいいと思います」

「で、どうしよう……。時間止めても普通に動いてるし……」

「そりゃ入ってきますからね……」

打つ手がないぞ……？

「今回はレンにも手伝わってもらっけどいいか？」

「うん。おにーちゃんのためならなんでもするよ？ 世界だって壊しちゃっ」

うん。いい具合に壊れてきてる……。

にしても……どうすっか……。

『Acht Punkte der Sterne』

《八点星陣 停止世界》

三人の周りに、時間をとめた結界を張る。

「はっきり言って時間を止めたまま闘うのは今回はレンでもきついからな……。固定して、このまま学校に戻ってもらおう」

『パチンッ』

俺は三人を学校に飛ばす。

「ですね……今回はかりは全力で挑まないと……」

「レン解除」

レンはすぐに時間停止を解除する。

「しゃーない。いくか？ レン、最大級の攻撃ぶつけてくれ。それを合図にその場所に繋げる」



「はい」

上空に100メートル程の球体が出現する。  
それをレンは村の上空に移動させ、落とした。

『ズドオン』

隕石が落ちたような音がし、黒い魔物も、木も草もなくなった地面が現れる。

そこに二人と杖のハクで転移する。

あー…すごい怖いこれ……。

黒い波が360度から襲いかかってくる感じだ。

一分もかからず戦闘開始だなこれ……。

「レン！ 絶対に死ぬなよ！ 危なくなったら逃げろ！」

死んだら元もこつもないからな。

レンは周囲に空間ごと消し去る球体を無数に放りながら、うなずいたように見える。

『Automatisches Abfangen』  
《一斉放射 光空》

俺は宙に10個の球体を浮かせ、一斉放射をしながら別の攻撃をする、

まるでマシンガンのような連射音を響かせながら敵を駆逐してゆく。

どこに打つても、確実に命中するから照準とか関係ない。

『光・剣 300柱』

天から300本の光の剣が降り注ぎ、シヤランとキレイな音を立てて敵を葬り去ってゆく

隣ではレンが俺以上のスピードで敵を駆逐してゆく

「ご主人さま。大技を使い続けると続かなくなります。一斉放射だと二発当てないと消せませんし」

わかってるが……！ 倒さないと飲みこまれて終わりだ！

『Einleichter Pfeiler, um vom  
Himmel zu bohren』

《天より穿つ光柱 三百柱》

目もくらむような光の剣が、地上に降り注ぐ。

シヤラン、と言う音と、閃光を残し、周囲一キロほどの敵を駆逐する。

同時にゴツソリ魔力が扱られる感覚に襲われる。

「くそっ……これはキツイな……」  
「おにーちゃんやっぱり結果だめだった。使ってみたけど素通りしてくる」

やっばそっだろっな……。

今も周囲は消し去ったが数分でまた来るだろうな……。

「レン！ 攻撃だけでいい！ まだまだいけるな！？」  
「うん！ がんばるよ！」

頼もしい相棒だな……。

「いくぞっ！ レン！」  
「うんっ！」

第二陣を倒すために俺達はまた魔法を放つ。

三ヶ月後

俺達はまだ戦っていた……はつきり言って訳が分からない……。敵の数が全く減らない。もう何十億倒したか分からない。俺とレンは交代で休憩をとりながら戦っていた。でも、

「はあはあ……ハク。たぶんあいつら……」

「はい。十中八九増殖してます。でなかったら、こんな世界丸ごと覆っているような数になりませんよ」

「……ってことは……」

俺は一点を見つめ、

「いるな」

「ですね。たぶん黒のページが侵食した大本がいるんだと思います」

探すしかないか……じゃないと終わらない。

魔力も限界が近いし……膨大すぎてわからなかったが限界ってるんだな……」

昔インフルエンザにかかった時のようにふらふらだ……」

「たぶん山の山頂でしょうね。その方向の敵の密度が一番高いです」

「って言うても……近づくほど増えて行くんだよな……それを10キロくらいか？」

加速なしでそれはきついな……」

距離的には同じだが、敵を全部倒しながら行かないといけないし……」

「でも、仕方ない行くぞ。レンはドラゴンに戻って上空の敵を殲滅しながら頼む」

「うん」

レンは70メートル程の白い龍の姿に戻り、上空を飛翔しはじめる。

「ハク！ 魔力が足りない！ 維持できないから白刻刀に戻れ！」  
「久々に出番ですね！」

そう言って、懐かしの純白の日本刀に戻る。  
刀を握り俺は走り出す。

『E i n l e i c h t e r P f e i l e r , u m v o m  
H i m m e l z u b o h r e n 』

《刃は無を斬り伏せる 常》

すべてが放射と霧散する設定にし、黒い波を切り裂きながら俺は  
走る。

はつきり言つてめっちゃくちゃつらい……途切れない敵に向かって  
倒しながら走る。

それでも走り続けるしかない現状。

三日後

「はあ……はあ……」

『ザシユッ』

「グアギヤアッ！」

まずいな……睡眠なしで三日走り続けるって……強化した肉体でも限界だ。

足も手も震えて言うことを聞かないぞ……？

「ご主人さま。頑張ってくださいあと少しです！」

あと数百メートルくらいか……だが数が……。

上空を見るとレンが敵を殲滅している。

レンもつらいだろうな……俺なんかの使い魔になったばかりに  
こんな

「ご主人さまっ！！ 後ろです！」

『ザシユッ』

くそっ！

俺は後ろの敵を振り向きざまに切り捨て、周囲にありったけの魔力をばらまいて消滅させる。

「ご主人さま……また……」

「わかつてるハク……」

俺の左腕の感覚はない。

そんなのあたりまえだ。

噛みちぎられたのだから。

だが、ここで止まるわけには……、

「レン！　一瞬でいい！　俺の前方の敵を蹴散らせ！」

俺の叫びが聞こえたのか、レンが前方に特大な球体を落とす。

レンも限界なのありがたい。

これで俺はすぐにでも倒さないといけなくなった。

俺だけじゃなくレンも死ぬかもしれない……！！

一気に駆け出す。

走り出す瞬間、一瞬だけ見えた。

やはりというか、契約者以外からの攻撃では本体は消滅しないのか。

だが、他の敵が消滅した一瞬。

黒い巨大な塊が

だがそれも一瞬だけだ。

秒間何百の黒い魔物が生み出されるのか……。



分裂なんてものじゃなかった。

ホースが本体で、蛇口を全開にしたような水の勢いで黒い魔物が出てくる。

そんな勢いだ。

俺は右手一本で波を押し返してるようなものである。

あと30メートルほどだが……一歩も進めていない。

どうするどうするどうするどうするどうするどうする！

「ご主人さま！ 核の位置が特定しました！ 視覚同調します」

俺の視界が広がる。

真つ暗な世界に一つの球体が浮かんでいる。

すぐさま同調を解除し。周りの敵を排除する。

「場所はわかったが！ 結局は近寄れねーよ！」

いまの俺の魔力じゃ全部消すなんて確実にできない。

レンですらもう出来ないだろう。

そしてこの場には三人しかない……。

ほとんど詰まれたようなものだ。

「ご主人さま！ 死に際とか恐怖を感じた時って生殖能力が上がるって知ってました？」

「てかおまえ！ 俺が死にそうになったらそう言う話するってわかってるから、逆に死ぬんだなって思っちまうだろ！」

まったくいつもこれだよ。

「そうですねー、今度から何か考えておきましょう。だから生きてくださいね!」

きつつい注文だなー……一歩も動けず体力だけが減る……。持ってあと半日かな……。

どうせ死ぬなら最後に

ん？

「ハク。ちよつと賭けしていいか？ 俺消えるかもしれないが」

「ここまできて何かあるんですか？ やっちゃってください」

了承得たし、さて………するか……。

アル。ありがとな。

お前が最初にやったこと真似させてもらうぜ!

『Innerer Weltmanifestation  
Die Welt nannte die  
Entstehung』

《世界の顕現 原初なる世界》

「まっ! 待ってください!」

その瞬間すべての音が消えた。

モノクロの世界に生じるブラックホール。

地上、上空すべての物を飲み込む。

レンも飲みこまれたが……レンなら戻ってこれるだろ……。

地上ではすべての自然現象が周囲を壊し尽す。

空は、闇と光が混ざり合い、斑のようになっていく。

周囲で生命が生まれ、朽ちを繰り返す。

その中で俺は走る。

白刻刀を握りしめ。

小さくなった黒のページの本体を目指し。

視界すら無く。

ハクとの同調で得た真つ暗な世界を。

急速に体から何かが抜けてゆくのが手に取るようにわかる。

さて、俺は死ぬか。生きるか。

神のみぞ知るってか？

あつ……、

見えないけどこれ足なくなつたな……？

多分腰からしたらあたり全部。

どうすつか……。

ここまでできたら一緒か。

かすれた声を振り絞る。

『Metastase……』

《転移》

よし目の前だ……。

俺はページのすこし上に転移し、

重力に従ってページに落ちる。

剣を下に構えながら。

振り上げるなんて出来ないし……。

『パキイイン』

やったかな？

なんか毎回限界だよな俺……。

「じ……幻龍のおっさん……たの……む……」

急速に意識が薄れてゆく。

『心得た新しき神よ』

最後に、そんな声が聞こえた気がする……。

そこで俺の意識は完全にブラックアウトした。

#### 四三話 黒き獣（後書き）

インフルエンザにかかって死んでました。  
その時の状態をちよこつとだけ物語に登場W

四四話 二人の修行

狭間

バツ

俺は一気に起き上がった。

右手、異常なし。

左手、OK

腰、くっついてる





「約3000年です」

はっ!?

「まてまて! 俺寝すぎだろ!? てか、俺3300歳なのに3250年眠ってるじゃん!？」

どっだけ睡眠好きなんだ。

「ご主人さまは、体の維持用の魔力まで引つ張ってきたんですよ? 魔力が完全に戻るまでそれくらいかかりますよ?」

「よく死ななかつたな……」

「最初の1000年くらいはアメーバみたいでしたよ?」

いやいや、気持ち悪いぞそれは?

「体が構成できないんですから仕方ないですよ。それで力蓄えてましたね」

うん。気持ち悪いから聞かなかったことにする。

「で、なんで狭間に?」

「それは時幻龍さんが助けてくれましたよ」

そうか……。

「おっさんありがとな」

姿は見えないが、ここの空間はすべてがつながっているから聞けるはずだ。

『助けると言っただろ新しき神よ。そのようになる前に呼んでくれればよかるうに』

そこまで頼っちゃな、俺の試練だしこれ。

「ってことは俺もう戻れない？」

『安心せい。新しき神の今の力じゃ無理だが、我の力なら送れる。時間軸に目印をしておいたからの』

スゲー助かった。

ん？ じゃあ前の世界も行けるんじゃない？

「前の世界は無理か？」

『無理だ。目印をつけておらんのでな』

そうそううまくはいかないか。

あ、そうだった！

「レンごめんなーブラックホールに吸い込ませちゃって」

「んー、大丈夫だよ？ すぐ戻ってきちゃったから」

よかった。これで戻ってきてなかったら俺も追いかけないといけない。

「で、ハク。俺の魔力はどうだ？」

「完全回復です！ ついでに暇だったので次の世界も見つけときました！」

いやいや。

「いや、戻るぞ?」

きよとんとした顔をしているが……。

「なんでですか!? ページ集め終わりましたし。どの時間軸からも闇のページは消えましたが、また来るかもしれないよ?」

闇のページが来るのはつらいな……。

「いや、まだ雛残してきたし」

うん。俺この世界で何もやってないしな。

「それでしたら先送りしてみました。ご主人さまが消えてから何も出来ずに死にましたよ?」

……………。

「アホかつ!? 見るなよ! 戻せ! やっぱ戻らないとまずいだろ!?!」

「ちなみにセリアさんは敵国に殺されて。リリーさんは魔力が高いつてことで兄の子供産んで泣きながら死んで。レリアさんは民に殺されました」

おい……。

なんか考えうる最悪の形で死んでるぞ。

「はい。わかりました。おっさん、元の時間に戻してくれ。いますぐに」

『行ってくるがよい新しき神よ。汝の好きなように生きるとよかる  
』』

三人の姿はそこで掻き消えた。

## 寮の部屋

さて、戻ってきたが。

『Bildgriff』

《心象掌握 記憶消去》

俺は三人から、黒のページに会った、当日の記憶を消し去った。  
あんま記憶改変は好きじゃないが仕方ない……。。

『Absage』

そして固定結界を解除。

三人は少ししてから、目を覚ました。

「うわっ寝坊したのじゃ！」

「トキ様すみません。今日は村に行く予定だったのに」

「と言うか僕はなんでここに？」

村に行くって内容は覚えてるんだな……。

「村はいいや、めんどくなつた。レリアは昨日の夜、遊びに来てそのまま寝ただろ？」

ウソがうまくなったな俺。

「なにを言うんじゃトキ！ わらわはいくぞ！」

「じゃあ行ってくれば？」

「うぐっ……卑怯なのじゃ……一人ではいけないのじゃ……ぐすっ」

行っても何もいからな……。。

「はいはい、とりあえずレリアは早く部屋戻ったほうがいいぞ？

学校始まるし」

「うわっ！？ もうこんな時間じゃないか、では、僕は戻らせてもらうよ。またあとでね」

そう言っつてレリアは部屋を出て行った。

「わらわも準備するのじゃ」

「わ、私も！」

「ストップ」

そこで俺は二人を止めた。

二人はキョトンとしている。

「さて、お前達は覚えているか？ セリアは強くなって認めてもらう。リリーは強くなって兄を倒す」

「あ、あたりまえじゃ。そのために学校に通っているのじゃ」

「覚えています！ 絶対にトキ様にふさわしい女性になります！」

うん。とりあえずリリーは目的変わってきてるからね？

「でも、お前らの強さは属性ごとに3程度だろ？　つまり超弱い」

「……」

それはわかってるようだな。

「よし。で、だ。二人を一日で10まで上げる方法がある。10が限界だから実質はもっと上まで行ける。どうだ？」

二人は眼を大きく見開き、ぽかんとしている。  
そして、

「と、トキ！　それはどうやるのじゃ！　わらわはそれをやるのじゃ！」

「トキ様！　私もよろしくお願いします」

ふふふ、喰いついてきた！

「二人とも今日明日学校休むけどいいか？」

「大丈夫です（じゃ）」「」

よしよし。

「じゃあちょっと影の中に入ってくれ。場所移動するから」

二人は俺がつなげた空間におそるおそる足から入り込んでいく。

ちてちて……どうなるかな。

## 洞窟最深層

二人を連れてきたのは、使い魔を手に入れた場所だ。

「さて。二人とも今から俺の考えた訓練を始める。準備はいいか？」

うん。全然よくなさそうだな。

「こ、こわいのじゃ…………えっぐ」

「と、トキ様…………」



めちゃくちゃ震えてるし。

「OK。じゃ、真ん中に立って二人とも」

おそろおそろって感じたな……。

終わったあとどうなってるか楽しみだ。くくく……。

「おいボス龍」

後ろに並んだ龍のボスを呼ぶ。

『それは……我のことか？』

「お前以外ないだろ？ ちよつとさ。一日龍全部貸してくれね」

『さすがに、あなたでもそれは……』

すごく嫌そうだ。

「条件として、この洞窟から出さない。これでどうだ？」

『それならいいが……此処から出ずに何をするのだ？』

「まあ、見てな」

そう言っつて、俺は他の龍を見渡す。

「さて！ お前ら。今からお前達にはこの二人の訓練を手伝ってもらう。絶対に殺すなよ？ お前達は強い！ だからこいつらを強くしてくれ！ いいか？ てかやれ！」

『グガアア』

「よし！ いい返事だ。じゃあ真ん中に集まれ。あの二人を踏みつぶすなよ？ 殺したらお前らも殺すからな？」

龍達がぞろぞろと真ん中に移動する。

うん、壮観だな。

「トキ様……私たちに何を？」

「わらわを殺すきかの？」

まるでハムスターのようだなこいつら。

「修行してこい。じゃーな」

ニコリと笑い。

早くも二人がこつちに走りだしそうなので、

『Acht Punkte der Sterne』

《八点星陣 内部拡張》

龍達と二人を空間に閉じこめる。

『Zeit f?ngt an zu laufen』

《時よ、駆ける 一日を十年に》

倍率考えるのも面倒なので、内部時間を日付で設定。

これでいいかな？

『何をしたのだ？』

いきなりボス龍が話しかけてくる。

「ん？ 内部の広さをかなり広くしてから、こっちの一日を10年にしただけ。約束通り一日だろ？」

ニヤリと笑ってやる。

『はあ……悪知恵が働く神だな……』

龍がため息つて、異様だな。

「まあゆっくり話しながら待とうぜ？ これやるから」

俺は3万レアル程かけた大量の肉を龍の前に出してやった。

竜の体長より高く積みあがった肉は壮観だった。

かなりの出費だが別にずっとこの世界にいるわけじゃないからな。修行代としては安いもんだ。

『神もわかっておるな。これなら仲間内で食べてもしばらく持つぞ？』

「だろ？」

『そう言えば内部では食事はどうなっておるんだ？』

「中は腹減らないんだよ。なんでだろなー？ ハクわかる？」

「はい、そもそも内部は時間の理から外れているんです。時間がたつとお腹が減るって言うのは世界を運営させるためです。食物連鎖ですね。内部は神が作った別の世界と違ってくれて結構です。もちろん幻惑で設定を変えればお腹も減りますよ？ 狭間みたいなものですね」

「いまいち納得いかないが……。」

「便利だな……。」

「神ですからねー」

『では、あの二人はいいのか？ 10年も年をとつたら大変じゃぞ？』

ボス龍が人間の心配とは……。

「おまえが人間如きの心配とは珍しいな」

片方の唇を釣り上げて笑ってやる。

『ちつ、違う！ 我はただ……ただ、そうっ！ 死んだらお主が我らを殺すだろうと！』

これはまさかツンデレかっ!?

初めてツンデレみたぞ！

だが龍だしな。

ついでに俺はツンデレ嫌いだ。

「そう言うことにしといてやるよ。で、あいつらだけだな。俺が加護与えるから10年経つても見た目なんて一歳程度しか変わらんぞ？ 結局あと一年たてば、周囲が追い付いて、抜かしちまうからな。てか前言ったろ？3〜400歳くらいまで生きるって」

絶対言った！

『そ、その時はどうでもよくての……覚えておらん』

ふーん。

「つまり今は気にしてるんだな？」

『いや……ちよつと興味があつたのだ。人間とは何なのか。我はほとんどあつたことがないしの』

弱いから毛嫌いしてたつてことね。

「まあ、あいつらが人間かはわからないけどな。400年も生きる人間がいるかどうか……。でも、俺がいなくなつたらたまにあいつらに会つてやつてくれよ。多分100年超えたら確実に知り合いなんてアイツらいなくなるから」

それはきつと寂しい。

『そうだな、我も長寿の人間がどうなるか見てみたいからの。しかし、我らを怖がつているようだぞ？』

「問題ないだろ？ 龍50匹と10年一緒にいるんだぞ？ この世界に怖いものなんてなくなるって」

逆にトラウマ作つてくるかどつちかだ。

「あ！」

『なんだ！？』

「お前くらいの大きさになるのにどれくらいかかる？」

『ふむ。三千年くらいだな？』

あれ？ 意外に短いな？

「お前らの寿命は？」

『ほとんどないようなものだ。傷を負って死ぬ以外はずっと成長し続ける』

おもしろいなドラゴン！

「じゃあ別に年を重ねても気にしないんだな？」

『ああ、むしろ傷を負わぬで成長できるならうれしいはずだ』

「ふむ。にしても、うちのレンは数百年でもかなり成長するぞ？」

この世界に戻った時に、一回龍に戻ってもらったが、100メートル超えちゃった。

『それは種族が違うのだ。時幻龍など龍族のおとぎ話に登場する様なものだぞ？ 星の大きさすら超えるといわれる伝説の龍だ。我らは会えただけで涙が出るくらいにうれしいぞ？』

レンってすごいな……。

「そうだな、俺も狭間にいる友達の時幻龍の成龍もさ。鱗一枚で数十キロありそうだった」

ものすごく驚いたような顔してるぞ！？

表情豊かな龍だな！

『それは時空の狭間のことか！？ 本当にあったのだな……。友達って言うのもすごいなお主は。さすが神だ。そう言えば、なぜ龍のことを？』

忘れてたわ。

「今借りてる龍の、シロクロも成長させていいか？」  
『ふむ。いいと思うぞ？ 子が成長するのは楽しみだ』  
「あの二人も大変だからさ。頼もしい相棒が必要だろ？ シロクロ  
こっちこい」

二人についていかなかった二匹の龍が俺の方に歩いてくる。

「ちょっと暇かもしれないが二匹で遊んでくれな？ 訓練するのはいいが殺しちゃダメだからな？」

「くきゅっ！」

「いい返事だ。じゃあ元の姿に戻ってくれ」

二匹が元の20メートル程の白と黒の龍に戻る。

「レン！ 俺と同じように。時間は一日を5000年に加速して二匹を入れてくれ。拡張も忘れるなよ？」

「はい」

レンが二匹をブロックに閉じ込め加速する。

『ふむ。私の二倍の年齢になるのだな？ 7、80メートル程になるうか？』

「だな。お前ボスの座奪われちゃうんじゃないのか？」

『心配するな。私は珍しい龍なのでな。すべての属性が使えるのだ。強さは一番だぞ？』

「ふーん。じゃあレンと闘ってみるか？」

俺は意地悪く言ってみる。

ボス龍はぎよつとして後ずさる、

『わ、我を殺す気か！？ 全属性と言っても火水風地光闇だ。時間や空間に勝てるはずがなかるう！』

「いや、レンは幻惑も使えるぞ？」

『レン様も特別ですね……。私の特別ななんてたいしたことないのだな……』

なんか落ち込んでるな……。

「すまんすまん。気にするな。神の使い魔だからな」

俺はレンの頭を撫でてやる。

「えへへ〜」

うん。気持ちよさそうだな。

『……………』

「どうした？」

『いや、最強の生物が懐いているな、』と

ああ。こいつらにとって伝説だからな。

「えへ〜おにいちゃんのためなら何でもするからね〜。龍ちゃんもおにいちゃんに何かしたら全員殺すからね？」

ヤンデレなのかこれが！？

ボス龍めっちゃ震えてるぞ！？



「気にするな。手をださなければ何もされないからな。ちなみに、俺より強いから手出して殺されても助けられないからな?」

ボス龍はこくこくうなずいている。

うなずいてるのが震えてるのかわからん。

「さてさて、では一日待つか」

『そうだな』

俺はレンの髪をすきながら待つことにした。

一日後

「そろそろ出すかな？」

『私も楽しみだ』

さて、どうなることやら……。

『Absage』

俺は二人と龍がいる空間を解除した。

ん、無事だな。

傷はあるが幻惑で細胞を活性化させれば治りそうな程度だ。

二人は顔を伏せているが……。

あ、

「レン！ セリアを抑え込め！！」

「うん！！」

瞬間二人の姿が掻き消えた。

風の魔法だろうな、速度を上げただけでこれかよ！

俺は一気に加速し、上から組み敷く。

隣ではレンも同じように組み敷いている。

『Bildgriff』

《心象掌握 記憶消去》

魔法の記憶と技術以外をすべて消し去る。

ひたすら修行をしてきた10年間の記憶はこいつらにはキツすぎたか！

『Lebensgriff』

《生命掌握 肉体操作》

二人の細胞を活性化させる。

戻らない傷は周りの細胞を移動して傷を治す。

これでいいかな？

「レンいいぞ」

俺とレンは二人から離れる。

しばらくして、

「あれ？ わらわは何をしていたのじゃ？」

「トキ様？ ここは深層ですか？」

戻ったか……。

『大丈夫かトキよ』

ボスが心配してくれる。

「ああ、混乱してたんだろな平気だ」

ああ、魔力は上がったが戦闘技術が……。

あとあと考えておこう。

「な、なんなのじゃこれ？ 体に魔力がみなぎっておるのじゃ。使い方もすべてわかるのじゃ」

「トキ様……なんかすごいですよ私？」

おお！ 成功した。セリア、おまえみなぎるってなんか嫌な言い方だな？

「あー、混乱しないで聞いてくれ。俺の闇魔法でお前らを10年程成長させた。まあ気にするな」

うん。別に正直に言わなくてもいいと思うし。

「なっ！ 修行しなくても魔力をあげられるなら最初から……」

「そんなこと言う子からはページ抜き取っちゃうぞ？ そしたらお前落ちこぼれだからな？ がんばらない子にはあげません」

「ぐっ……わかったのじゃ……」

セリアは押し黙った。

『トキよ、闇魔法ではなく空 』

「黙れ。それ以上言ったらお前は消滅だ」

俺はボス龍の言葉を遮った。

「さて、実はな？ お前達の使い魔も成長させた。どうだ見たいだろ？ 俺もまだ見てないんだ」

俺自身がめっちゃ見たい！

「シロがかの？ 見たいのじゃ！」

「成長したクロみたいです！」

うんうん。

「じゃあ、レン解除してくれ」

「はい」

あ、ちなみにレンを成長させないのは、でかくなりすぎて戻れなくなるからね。

俺の言葉に、レンはブロックを解除してくれた。

中からは

「あー……でかいな」

他の龍達も驚愕してるぞ……。

「これが……シロなのかの？」

「クロ……おつきいです」

『……やはり我より大きくなったの……』

いや、マジでデカイ。

多分80メートルくらいあるんじゃないだろうか？

レンと並んだら怪獣大戦争が起るぞ。

しかもなんか鱗が輝いてるし。

レンほどではないがかなりキレイだ。

パールとブラックオパールで出来てる感じだ……。

その二匹が自分の主を見、うれしそうに顔をちかづけ、

「「きゃっ」

『ズドーン』

二人は壁まで吹っ飛ばされて壁にめり込んだ……。

多分大丈夫だろ。風纏わせてたしね？ 多分。

「いたいのじゃ……………」

「うう……………」

ぴんぴんしてた。

なんかめちゃくちゃ強くなってないか？

「あ……………ずっと二匹でいたから力加減わからないんだろうな……………。  
おいおい教えてやれ」

普段は化身だしな。

とゆうか……………、

「なあボス龍。龍は強い奴がトップなんだよな？」

『そうだな』

「なんであいつら俺を見てるんだ？」

『おおよそあなたの方が弱いとみて従えようと……………』

「俺に手を出すとレンが……………」

『ハッ！？ まずいぞ！ みんなのもの！ あの二匹をとめるのだ！』

龍達は遠巻きに見ているが……………。

無理だろうな。三倍以上ある龍だし。

「まあいいや、俺がなんとかするよ」

『かたじけない……………』

舐められたな。

『Ich belaste』

《重ヲ為ス 拘束》

『ズドンッ!』

質量を拘束できる程度に設定し、二匹を縫い付ける。

「あー、シロクロ? お前達がいくら強くなろうと俺とレンには勝てないから。従わないなら死んでみる?」

龍は動きずらいのか、ゆっくりと首を横に振る。

地面にこすりつけて痛そうだ。

「従うよな?」

『『くきゅっ』』

「なんだって?」

『従うらしいぞ 　もうすこし相手の实力を見る力つけたほうがいいの……』

『Absage』

解除してやると、頭を垂れてきた。

うん、いい子だ。

「じゃあ化身に戻れ」

二匹は頷き、いつもの姿になる。

こっちは大きさ変わらないんだな。



俺は二人に向きなおり。

「もうすぐ闘技大会あるだろ？ お前らどっちかに優勝してもらっからな？」

「む、無理じゃ！ わらわには……」

「トキ様……それは」

こいつらは何を言ってるんだろつか？

「お前らの致命的なところは実力を知らないところだ。昔からコンプレックスだったのかもしれないがな。はっきり言ってお前達は強い！ 自信がありすぎるのも困るが、なさすぎるのも困る！ 学生の大会くらい余裕で勝て」

うん。不満そうだな。

「レンちょっと、20匹ほど上の層から強そうなのつれてこい」  
「はい」

レンは掻き消え、すぐにたくさんの魔物を連れて戻ってきた。  
加速して持ってきてくれたのか。

「「ひっ！？」」

二人は震えている……。

大体10メートルくらいの魔物か。  
すっごいビクビクしてるが……。

二人もびくびくしている。

なんだこの状況？

とりあえず、

「お前達！ 殺されたくなかったらあの二人を殺せ？ それとも俺に挑むか？」

獣達は俺と二人を交互に見、二人の方を向く。

「10匹ずつに分かれて二人に襲いかかれ。二人は反撃してもいいからな？」

にこりと笑ってやる。

「な、なにを言うのじゃトキー！」

「トキ様は私たちを殺そうと!？」

うん。もう完全にびくびくだ……。

「じゃー、いけっ!」

俺の声を聞き、唸り声を上げ、二人に向かって殺到するが、

「くるなーなのじゃ！ 嫌なのじゃ!」

セリアが腕をパタパタと振る

うん。お前気づいてないかもしれないが……。

おまえ腕振るたびに20メートルくらいありそんなカマイタチが、  
獣切り刻んでるぞ？

「トキ様！助けてください！！」

どこに助ける必要があると？  
うづくまるのはいいがな。

獣の上に際限なく太い氷の柱が降り続けてるぞ？

無詠唱だし……。

「はい。終了」

二人はきょとんとしてあたりを見渡す。  
もう周り血まみれだからね？

「トキ、助けてくれたのか？」  
「ありがとうございますトキ様」

うん。俺見てただけ。

「いや、お前達がやったんだぞ？」

二人は首を傾げ龍達を見る。

一斉にうなずき頭を垂れる。

『お主らがやったぞ』

二人は顔を見合わせ首を傾げる。

「はあ……龍がお前らに従ってるのに何で信じないんだよ……。お前達あそこの壁になんでもいいから魔法打て。無詠唱で」

二人はこくこくとうなずき。

壁に風と氷の魔法を放つ。

セリアが放った風は、俺と同じようなサイクロンとなって壁に向かう。

リリーの氷は、めちゃくちゃ太い氷の柱がドリルの様に回転しながら突き進む。

着弾。

轟音。

空気がびりびり震えるような爆音がひびく。

あとには壁に20メートルくらいだろうか？  
穴があいている。

二人は沈黙しているが、

「わかった？」

ものすごい勢いで首を振る二人。

「龍達ありがとな。手伝ってもらって。そろそろ帰るわ。もう二日も学校休んだし」

『ふむ。またくるがよい』

俺は背中越しに手を振り、二人に声をかける。

「帰るから影の中はいつてくれ」

「はい！」

うんうん。自信ついたのかな？

二人は、ためらいもなく影に入り込んだ。

さて、二人の強化は大方終わったが……レリアどうすっかな。

そんな事を思いながら、俺も影に入り込む。

## 四五話 修行の成果

### 寮の部屋

「さて、二人に相談だ。レリアをどうやって強くしたらいいと思う？」

二人に向きあい相談する。

俺にはいい考えが浮かばなかったからな。

ページを入れれば楽だが……。

「そもそもレリアは強くなりたいのかの？」

ふむ。それはもつともだが、

「俺のチームと行動してるってことはそうだろ？」

主に修行ばっかしてるからな。

「今日学校でまた魔力テストがあるだろ？ お前達だけ強くなった  
ら絶対落ち込むぞ」

二人は口に手を当て悩んでいるようだ。

「そうじゃ！ 今日の夕飯は外に食べるにこのうの！」

ガシッ

むにむにむに

「あっ……」

「お前、ここで食べ物を持ってくるっていうのは犯されるって  
ことだぞ？」

こいつの頭はからっぽだ、

「トキ様！ 私を先に犯してください！」

「黙れ奴隷！ いいから案をだせ！」

俺はずっと魔法使いなんだ！ むしろこの年なら賢者！ いや神

！？ 神だけど……。

「そうですね……私たちと同じようにしてみるの？」

それが一番手っ取り早いっちゃ早いが……。

「あれはお前達が400年近く生きるから出来るんだよ。普通の奴につかつたら10年歳とるぞ？ ついでに魔力の限界があるだろ？ お前達はほぼないからな」

そうですねーとか言って悩んでるが……。

どうしようかなまじで。

そもそもレリアが何の問題を抱えてるかがわからないしな……。王族か……、

「セリア。王族の問題点を言え」

「ほむ。出かけられなくて暇。お菓子をもっと食べたいのじゃ」

「お前に聞いた俺がバカだった。死ぬ！」

「ぐすん……だって……えぐ」

こいつはダメだ。

脳の大きさが胸の大きさに比例して全然ない。

楽なのは敵国を倒したいとかだが、絶対違うな。

あ、

「セリア！ ちょっと空間つなげてやるからコメント王国の資料ばくってこい。10分以内に帰ってこなかったら全裸で外につるす」

すごい嫌がつてるが、俺は影の中に空間を繋ぎ、セリアを放り込



「とってきたのじゃ……」

10分後

む。

なんかすごいなだれてるぞ？

「何に使うのかすごい疑われたのじゃ……ぐす」

とりあえず泣き虫は置いておこう。馴れたし。

俺はセリアの持ってきた用紙に目を通す。

「ふむ。国土は結構でかいな……王は……レリア・ロアナ・コメツトか……レリアじゃん」

まあなんとなく予想してたがな。

にしてもこの世界大丈夫か？

王が子供ばっかじゃん。

「えーっと、問題は……国の内部で抗争が多数。これだろうな……」

……

「そうじゃの、広い国土を持つと大変そうだの」

「お前の国はミトコンドリア並に小さいからな」

「ぐすっ……」

これは兵を強くするかもしくは……。

ってか！

この国兵士いねー！！

しかも財政ダメすぎ！

ブレよりすくねーぞ！？

「トキ様。龍を使うのはどうでしょうか？」

どっかでやったことあるぞそれ？

えーっと、確かエラだな。  
ハクに注入された記憶だから曖昧だ。

「龍……か。楽っちゃ楽だな。竜を周辺に住まわせて、王の器を国内に。国の強さを外の国に。うーん、ありきたりっちゃありきたいりだがやってみるかな。本人強くするとレリアが死ぬまでこの世界にいるようになるしな。俺はお前達が40代になった姿で攻められたくない」

うん。俺がいつまでもいたら絶対結婚しないし子供つくらないぞ  
コイツら？

俺が襲わないのもそう言うところからなんだよな。  
男なら結婚する相手は初めてがいいだろう。

だれが好き好んで落された城を落としにかかるか？  
鉄壁の城を落としてこそ価値があるんだ！

うん。比喻だよ？

「多分あいつが男装してるのもそこだろうな。女じゃなめられるし、セリアみたいにちっこいとなおさら」  
「ぐすつ……わらわだって大きくなりたいのじゃ……」

絶対無理。大きくなる気配ないし。

成長期で一年ほど成長してるはずなのに何も変わらない。

リリーは胸だけ少し大きくなったぞ？

「じゃ、お前達のことを終わったらレリア助けるからお前達も協力してくれ」

「わかったのじゃ」

「わかりました」

うん。いい奴らだな。

とりあえずは闘技大会終わってからだな。

「さて、学校いくぞー遅刻だがな！ 単位全然足りてるからどうでもいいが」

「魔力テストが楽しみなので今日は行きたいですね！」

「わらわもじゃー！」

じゃあ行くかな。

って言っても、結果なんて確実に10だろ？

俺は三人+使い魔で扉を出た。

Aクラスの扉の前

「何か入りにくいぞ？」

「わらわ達何日ぶりじゃ？」

「全然行つてませんよね？ 報酬貰つて以来かもしれませんが  
その前も休んでましたが」

単位が足りてるから行く必要もないんだが。

「仕方ない。入るぞ？」

『ガララ〜』

俺は後ろのドアから中に入り

そのまま前のドアから出た。

入ろうとしていた二人と目が合う。

「「「……………」」」

沈黙が痛い。

「何をしておるのじゃ？」

「お前が入れ先に」

俺はセリアに先を促した。

「わらわは普通に入れるのじゃ！」

セリアは中に入っていった。

自分の席に向かっていき

- -そのまま窓から飛翔した。

俺は、咄嗟に作った漆黒の鎖でセリアを釣り上げて連れ戻した。

結局三人とも中に入ったが……、

視線がめちやくちや痛い。

やっぱり普通に勉強頑張ってるやつには俺達はムカつくだろうな……  
国にまで表彰されたが、やる気0みたいなの？

結局三人でそそくさと席についた。

「あー、ゴホンッ！ では、次はレリア・ロアナ・コメット君前へ」

お、ちょうど魔力検査中だな。

今回はたしか張り出されるとかなんとか  
だがな……。

「わらわ急に受けなくなっただのじゃ……」

「私もです……」

気持ちはわかるぞ……。

ここでいい成績なんて出したら憎悪が集中する……。

「安心しろ。お前達は確実にトップだ。憎悪びしばしうける」

他人事なら面白いな！

「トキもじゃぞ……？」

「ふっ、俺は風と光と闇以外は測定不能だから30だ。お前達は40だ。確実にお前達の方が上だ」

せいぜい嫉妬に狂った生徒たちに気をつけるんだな！

「トキ様ひどいです……私たちをこんな体にしたのはトキ様ですよ？」

お前それは誤解される！

ほらっ！ 視線がめっちゃいたいし！

「えーレリア・ロアナ・コメットくんが終わったら三人もだからな？」

二人がうなだれているが。

俺には関係ない！ ぜっ！

レリアが測定器に手を入れた。

あれ？ 測定器が前と違うけど変わったのか？

「レリア・ロアナ・コメットくんは、最大が火8 水3 風6 地

2 光0 闇0で。現在値は火5 水2 風4 地1 光0 闇0  
だ。よくがんばってるな？ 短期間でここまで出来る奴はなかなか  
いないぞ？ 学年代表は君かな？」

先生もにこにこしてるな。

クラスの奴も尊敬のまなざしだ。

つまり今のでかなりいい部類なのだろう。

一年だしな。

「トキ、わらわは手洗いに！」

「トキ様。私は夕飯の支度が！」

逃げ出そうとする二人を捕まえる。

二人とも今にも泣きだしそうだ。

「セリアはさつき行ったばかりだろ？ リリー、夕飯は寮だから  
作らなくていい」

こいつらが逃げたら俺がトップになっちまう！

「では……リリー・シャルレさん前」

ああ、クラスの視線が痛いだろうなこれ。

すごい目つきで見てるぞ……。

「……はい」

とぼとぼとリリーが前が出る……。

「先生……私、全部0でいいのでやらなくてもいいですか？」



あー……それは後で、勝者の余裕に思われるぞ……。  
何を勘違いしたのか先生はニヤニヤしてるが……。

「ダメだ！ 低くても決まりだからやれ！」

逆に勘違いしてるー！？

「うう……」

おそろおそろ手を入れたリリー。

手つきは前と同じだが。

今回は高すぎてやりたくないって不思議だな。

ピーーーーーガシヤッ

「えーでは……」

言葉が止まる……。

リリー此処に眠る。

「最大火 1 0 水 1 0 風 1 0 地 1 0 光 0 闇 0 現在火 1 0

水10 風10 地10 光0 闇0」

沈黙が痛い……。

もう生徒の視線が親の仇を見るような……。  
先生なんて歯ぎしりしてるぞ…？

リリーがその間にそそくさと戻ってきて俯いてしまう。

「セリア・クロティルド・ブレ前」

さん付けなくなった！？  
“前”しか言っていないし！

俺の横を通るとき俺に目で訴えかけてくる。

「トキたすけるのじゃ」

俺も目で訴える。

「死んでこい」

俺の訴えがわかったのか、泣きそうになりながら前へ歩いていく。  
二人目だぞ。  
連続であれだと……。

「先生、わらわは全部10でいいからやりたくないのじゃ」

アホだ！ アホがいる！

リリーが0でいいって言って失敗したから10でいいって言ったんだと思うが……。

アホすぎて可哀そうになってくる。

「ヤレ！」

先生コエー！！

「ぐすつ……」

涙ぐみながら手を入れるセリア。

ピーーーーーガシャン

「……」

先生の額に青筋が……。

「最火10 水10 風10 地10 光0 闇0  
10 風10 地10 光0 闇0」

めっちゃ省いてる！？

生徒の沈黙やべー！！？

「ぐすつ……」

泣き出した……。

上目づかいで先生の方を見、

「カエレ！」

上目遣い失敗してる！

「トキ……！！」

セリアは俺の方に泣きついてきた。  
頭をなでてやるが、

「トキ来！」

なに！？

フルネームどころか“来い”すら省いた！？

俺は脇にセリアをどけて前に出る。

だが俺は30だ！

ザマーミロくそ教師くたばれ！

俺はニヤリと笑い手を置いた。

教師もニヤリと笑い。

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

相変わらず長いな。

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

「トキ、言い忘れてたけどな」

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

ー

「前に文字がおかしくなっていたら？ データを研究室に送って解析してな？」

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

「文字がおかしくならないように調整してもらったんだ」

ガシャンッ

俺は速攻で手を抜いたが、間に合わなかったようだ…。

「さて、トキキサラギ！ 結果を言おう」

二人を見てみると、

ザマーミロって感じでにやにやしてる。

あとで揉むからなアイツら！

「最高値火10 水10 風10 地10 光10 闇10 時間

10 空間10 幻惑10 創造10。 現在値火0 水0 風10  
地0 光10 闇10 時間10 空間10 幻惑10 創造0」

もう視線が痛いなんてもんじゃない。

視線で人が殺せたら間違ひなく結界張る前に殺されてる。

驚くより先に、殺気を放つ生徒と先生やべー！

ぼんつと肩に両手が置かれる。

めっちゃいたい。

「よかつたな。お前が学年代表だ。卒業したら研究所送りになるからよろしく」

解剖される！！

そんなことになったら二人をつれてこの世界滅ぼしてやる！

俺はすごすごと席に戻り。

二人は満面の笑みだ。

絶対揉みしだく！

「言い忘れてたが。学年で代表二名が学年内の闘技大会に出ずに、学年代表の闘技大会に出てもらう。これは一年から五年の代表が二名ずつチームで出る大会だ。最終日に行うのでよろしくな。十中八九一年は負けるがな。代表は三人で好きなようにきめて学生課に提出しとけ」

俺達三人だろうなこれ。

「闘技大会は来週の最初からだ。学校の管理内の森に全員が散らば

り、最後に残ったやつが優勝だ。チームは三名まで組める。各学年一日ずつ5日にわけてやるから、一年は一番最後だ。六日目に代表選だ。公認の賭けもあるからがんばれ！ 先生もやるからな！」

うん。ここでも公認かよ!?

先生まじ屑！ くだばれ！

とりあえず必要な情報はゲット。  
もう属性バレたし使っちゃおう。

『パチンッ』

俺は教室から掻き消えた。

学生課

「おねえさん、学年代表の登録したいんですけど」

「はい、その前に学生カードを提出してもらっていいですか？  
あ  
とで違う人が来た場合あなたに責任が生じますが」



まあ、仕方ないな。  
俺は自分のカードを渡す。

お姉さんは何やら俺の名前を調べているようだ。

「はい。終わりました。あなたのランクはSSS、信用度としては確かですね」

ランクなんてあったのか？

あったかも？

記憶にないけど

「んーこの二人だけどいい？ 代わりに登録しとけてさ」

俺は二人の学生カードを手渡す。

二人のは常に俺が持ち歩いてるからな。

「はい、お預かりします」

お姉さんは、二人の名前も調べる

「この二人もSSSランクですね。登録が完了いたしました。では、がんばってくださいね」

「ありがとうおねえさん。ばいばーい」

俺は学生課から出たところで寮に飛んだ。

## 寮の部屋

「トキなんでいなくなるのじゃ！？ わらわ達はひどい仕打ちをうけたぞ！ 属性の説明や、嫌味を！」

「トキ様ひどいですよ……」

帰ってきた瞬間愚痴られた。  
せっかく寝てたのに……。

「あー、そうか？ すまんな」

ちよつとは悪いと思っているぞ？  
ゾウリムシの大きさ程度に。

「仕方ないの。今回だけじゃぞ？」

「そう言えばトキ様。代表には誰がなるんですか？」

ふむ。

俺は空間から二人の学生カードを取り出し手渡した。

「なんでトキがもっておるのじゃ！？」

「私なくしたと思ってました……」

俺が盗んでおいたからな

「まあ、気にするな。悪用はしていない」

悪用はな。

「ふむ。で、誰がなるのじゃ？ 今週中には登録しておけといわれ  
ての」

「一人はトキ様ですよ。セリアさんと私どっちが出ればいいでし  
ょうか？」

「二人出る」

「は？」

全く意味が分からないみたいな顔をしている。

「トキ、二人じゃぞ？ 三人は出れないのじゃ」

こいつは勘違いしてるな。

「だから二人がでろ。俺は出ない」

きっぱりと言ってやる。

「「な、何ですか（じゃ）！」「」

「いや、俺が出て意味あるとおもつか？ 俺はお前らに少しでも強くなってもらおうとな」

めんどくさいだけが。

「と、トキはそこまでわらわ達のことを」

「トキ様。好きです！ 愛してます！ 抱いてください！」

うん。騙されやすいな。

リリーは少し自重してほしい。

「私達は絶対勝ちますので！」

愛が重い！！

「そうだな。頑張ってくれ。さて、修行行くぞ！ 一年くらい修行してこい。時間は延ばしてやるから」

「「……」」

二人が沈黙した。

「そういえばトキの属性ってなんなのじゃ？」

そう言えば見せてなかったなこいつには。

「んー、時間はその名の通り早めたり遅くしたり。空間は世界の空間を掌握して自由にするとか、転移したり。幻惑は無機物に命を与えたり操ったり」

意思とかも操れるが。

教えない。

「……トキは反則じゃ」

ぶいっとふてくしてるぞ？ なぜだ。

俺が何した？

「トキ様は万能ですね。私との子供もきつと賢くなります」

結婚しないから安心しろ。

じゃ、お前達は闘技大会前日くらいまで修行ってことで、

『パチン』

俺はいきなり三人をつなげた空間に落とした。

洞窟最下層

「今度は大丈夫なのか？」

俺はボス龍と二人で話をしていた。

セリアとリリーはすでに龍達とブロックの中。

「今度は一週間くらいを一年にだからな。それに万が一のために出た瞬間幻惑かけるぞ」

『ふむ、それならよさそうだな』

そついや、頼みたいことがあつたんだつた。

「なあ、ちよつと取引しないか？」

『またか？』

まあ、まただけどな。

「お前達にある王国の付近に住んでほしいんだ。すぐではないが」

『我らはここが気にいっておるのだが？』

「お前達が心配しているのは軍隊でもつれてこられて殺されるからか？」

『ふむ。確かに一匹だと軍隊で討伐されるな』

「だったらお前達が強くなればいいだろ？」

『無理なのだ。我らは修行など必要はない。齢によつて強くなるからな。お主の時間加速は確かに外側から見たら加速しているが、内部からは普通なのだろ？ それだったらここに同じ時間居ても変わらないのだ』

意外に考えてるなボス。

「いい方法がある。俺の魔法に幻惑つて言つのがあるんだ。それでお前達を加速が終わらせるまで眠らせる。そうすれば、一日で一匹一匹が強い龍になるだろ？ どうだ？」

少し考え込んでいるようだな。

『確かに我らは強くなることを望む種族だ。その案はいいかもしれないの。皆がお主に貸した龍のようになれば人間なぞに襲われても平気だ。だが、その大きさでは住む場所がないぞ?』

「それは考えてある。俺が地下にここより広い住処をつくるう」  
『ふむ。して対価は?』

食いついた!  
フィーツシュ!

「もし、俺が言った国が他国から攻撃を受けたら守ってくれ。あと最初にちよつと手伝いをしてくれ」

『食事はどうなる? 勝手に魔物を喰ってもいいのか?』

魔物ならいいんだよな……多分。

「ああ、人間だけは喰うなよ?」

『分かっておる。骨ばっかりでうまくないしの。その取引受けよう』

釣りあげた獲物は大物だー!

「じゃ、引越しの日程が決まったら呼ぶからそれまでは自由にしてる」

『心得た』

これで最終仕上げは終了つと。

まずは二人の雛を。かな?

「とりあえず俺は一旦帰るわ。暇そうだからシロとクロおいてく。



「一週間くらいしたら戻ってくるからな？」  
『了解だ』

それだけ言って、俺は掻き消えた。

四六話 闘技大会（前書き）

トキの戦いはおまけです。

## 四六話 闘技大会

学校内・闘技大会五日目・前座

人多いな……。

てか、テレビなんてあつたんだここ……。

文明が遅れてるのか発達してるのかわからんぞ。

画像悪いし、画面より後ろの部分が大きいが。

周りを見渡してみる。

ここもか……、兵士の勧誘が。

「トキ様。今日はがんばってくださいね」

「トキ、トキのトトカルチヨ倍率が出てるぞ！」

ほう、どれどれ？

「めっちゃ倍率たけー！なぜだ？俺国で表彰とかされてるんだけど？」

「チームじゃ。他は皆三人なのにトキだけ一人なのじゃ。だからこんな63倍などと」

「トキ様をバカにしています！」

うーん、でも63倍ねえ…。

そう言えばまだ皆に牙の報酬分配してなかったな……。  
63倍……。

「すまん、ちょっと用事が出来た。開始には戻ってくるから」

俺はすぐに掻き消え、目的の場所に飛んだ。

## 学校管理の森

「んー、ここから入って10分後にスタートか。皆もう散らばっちゃったのかな？」

あたりには誰もいない。

「トキ様応援してます！がんばってくださいね」

「トキファイトじゃ！」

「お前ら何でここに居るの？」

選手じゃないじゃん。

「此処までは入れるんじゃない、入口だからの」

「トキ様絶対勝ってください!」

なんで、こいつ何度も勝てと?

「なあ、お前らまさか俺に賭けた?」

ふたりがぴくつとした。

「うん。お前らアホだな」

俺も賭けたけどさ。37万レラル。

こいつらの分配もな。

「勝つのじゃ! 我が国の年収すべて賭けたのじゃ!」

「バカッ! このバカ姫! おまえの金じゃねーだろが!」

ああ、まずいぞ?

勝たないとブレ王国が潰れる!

「私は家の金庫からすべてのお金をとってきました! お兄様がいなかったので余裕です!」

「お前らバカすぎる!? 終わったら部屋の中に全裸で逆さ吊りにしてやる!」

こいつら金をなんだと!?

「逆さプレイなんて壮絶です!」

もうダメだ。

リリーには何も効かない！

「それよりトキよ。そろそろはじまるのじゃぞ？ 森に入らなくていいのかな？」

「ここでもいいんだろ？」

一応ライン超えてるしな。

「？ 一応大丈夫です。ラインを超えれば参加者ですからね。でも、始まってからだと奥に行くのに疲れますよ？」

そこで、風の流れが変わった。

『それではー、今から一学年の闘技大会を開始します！ 皆、頑張ってください！ 注目株はレリア・ロアナ・コメットが入っている三人チームだ！ では、皆正々堂々と闘ってください！ 試合開始！』

風の魔法って声飛ばせるんだな。

やったことなかったな。

「ふーんレリア人気だなーどんなチームなんだ？」

二人に振り返って聞いてみる。

「たぶん学年のトップ三人ではないでしょうか？ それよりいいのですか？ はじまっていますよ？」

「あいつも勝ちにこだわるなー、チームとはねー」

「トキがおかしいのじゃ。普通は組むのじゃぞ？ 早く倒しに行くのじゃ」

「いつら……」。

「お前らさ、勘違いしてるぞ。こんなん前座だ。本番は明日のお前達だつての。だから俺はさっさと片付けるんだよ」

「「？」」

理解してないな？

「まあ、金がかなりかかっているから勝つけどさ てか俺らこんな賭けたのに63倍つて、他誰も賭けてないよな絶対。どれだけ他のやつに金賭けたんだよ……」

「そう言えば先生はレリアのチームに全財産賭けたとか。借金までして」

「よっしゃー！！ やる気出てきたー！！！！」

あのおそ野郎借金地獄でくたばれ！！

「さて、始まって今何分くらいだ？」

「10分くらいでしょうか？」

10分か。そろそろいいか……普通は一日続くはずだけど。

「あの、トキ様？ ここで待ってても意味が……」

「じゃ、終わらせるわ。観客にはつまなくなつて悪いけどな」



『Buildgriff』

《心象掌握 設定範囲》

俺は闘技大会が始まる前に設定した範囲に幻惑をかけた。

「さて、終了。おつかれさーん」

まあ、ここからじゃ誰も見えないが。

「何を言っておるのじゃ？ まだ終わっておらんぞ？」

「トキ様。棄権ですか？」

こいつら涙目だ……。

金めっちゃかかっているからな。

涙目から涙に変わろうとする直前で、

『一学年闘技大会終了ー！ 勝者は個人参加のトキキサラギです！！ 一瞬にしてすべての生徒が戦闘不能！！ 前代未聞の展開となりましたが、勝者はトキキサラギ！！ 盛大な拍手を！！』

拍手なんて全くないし。

二人がぼーんと口を開けているので、他の人もそんな感じなのだろうな。

「トキ様……なにを？」

「んー、フィールド全体に睡眠かけて眠らせただけ」

この世界に睡眠なんてないからな。

全員気絶させたように思うか？  
それとも不慮の事故？

どっちでもいいけど。

「トキは反則的なものじゃ。そんなの勝てるわけなかるう?。」

「いやいや、魔法だからね!? 防げよ!!! 空間か時間か幻惑か  
創造なら防げるし!。」

「そんなの持つてるやついないのじゃ! 光と闇だっていないのじ  
やぞ!?!。」

知ってるけどさ。

「文句言つな。これでお前ら金持ちだろ? よーし、金受け取りに  
行くぞー!。」

『パチンッ』

俺達三人はその場所から消えた。

闘技大会本番・朝

「こんな金あっても困るぞ?」

「全部トキに収納してもらってわからないのじゃ」

「私も知りません」

開いてやるか。

俺は収容した空間を広げた。

「どつだ？」

「……………」

まず俺の37万\*63で2331万レラル  
セリアの29万\*63で1827万レラル  
リリーの23万\*63で1449万レラル

合計5607万枚のレラル金貨

「どつすんだこれ？ 一生遊んで暮らせるどころじゃないぞ？」

積みあがった金貨。

日本円にしたら7000億くらいいくぞ。

まあ、まだ億万長者まで行かないが。

「わらわの金貨の中で泳ぐ夢は崩れ去ったのじゃ。きっと崩れて生き埋めになるのじゃ」

当然だ。

「なんか私、金貨チヨコに見えてきました」

その表現は微妙だが。

金貨チヨコがあるのには驚いた。

「まあいいや、とりあえずお前達の試合だからな、がんばれよ。終

わっいたら考えよう金のことは「

うん。まずそれが第一だ！

「じゃ、私達はいってきますね」

「トキも応援にくるのじゃぞ？」

「ああ、わかってるって。絶対勝てよ？」

二人は部屋の外に出て行った。

「さて」

俺の手元には代表のトトカルチヨの紙。

一学年代表12倍か。

昨日の俺を見たのか少々少ないが……

やはり一年ってことで、あまりかけてるひといないな。

五年は1.08倍だしな。

俺はその場から消え去った。

## 闘技大会会場

俺は観客席に来ていた。

あまりいい席ではないが、俺の目ならどこでもかわらない。

『ではこれから！ ルール説明をする！ まずランダムで1〜4年トーナメント戦だ！ その勝者と5年が戦うことになっている！ 1〜4年は三回勝てば優勝だ！ 5年は一回！ ではまず一回戦の発表だ！！ 一年代表VS四年代表！！ これが一回戦の組み合わせだ！ 一年にはちよつときつい相手かもしれないが頑張ってくれ！！ じゃ、10分後に試合開始だ！！ 選手は準備してくれ！！』

うーん。暇だ。ちょっと控室まで行くか。

『パチン』

「よっと、調子はどうだ？」

いきなり現れた俺に、二人は目を丸くしている。

「トキ、おどかすでない」

「トキ様応援にきてくれたのですか？」

うん。こいつら下着姿だけど全然恥ずかしがらない。  
慣れたものだ。

ガシッ

むにゅむにゅ

ぶにぶに

DとBだ。

「と、トキ様？ ひゃんっ」

「な、何をするのじゃ？」

「いや、緊張をほぐそうかと？」

「緊張じゃなくて胸をほぐしておるのじゃ！」

「トキ様……」

ちゅっ

いきなりリリーにキスをされた。

舌はなし

「えへへ、ほぐれました」

ふむ、キスカ。

ちゅっ

セリアにしてみた。

ガチッ

「！！？」

舌をかまれた！！

「お前これはタブーだぞ！？」

「な、何を言うのじゃ！ いきなりするでないぞ！？」

「ほっ」

「っッ！？」



俺はセリアの胸の先端をつねってみた。

「痛いんじゃない……ぐすっ」

泣かれた。

「トキ様！ 私も！！ ひゃん」

つねってみたが普通にうれしそうだ。

「大きい方が痛くない？」

「知らないのじゃ……」

「トキ様！ 下も！」

「黙れ淫乱！」

こいつ、シークレットフィルムありなのに危なすぎる！

「さて、ってことで着替えて勝ってこい！」

「はいっ！」

二人はそそくさと着替えて出て行った。

うーん、緊張はしてないが……多分こいつら……。  
ダメだったら最後の手段使うか。

一回戦

『一回戦！！ 一年代表リリー・シャルレ！ セリア・クロテイル  
ド・ブレ！！ 入場！！ おおつとこれは！！ スッゲーかわいい  
女の子だぜ！！！ そして相手は！！！ 四年代表！ チャド・ア  
ボット！！ コンラッド・エージー！！ 入場！！ こっちはむっ  
さい男だ！！ こいつらホントに学生か！！？ 俺的には女の子応  
援したいぜ！！ 両者既定の位置についでくれ！ いいか？ 始め  
るぞー？ よし！！ 始めるぞ？ 行くぜ！！ 始めゴフツ！！』

いい加減うざったいので、俺は周囲の空間を操り殴った。  
うまく始めることが出来たようだ。  
てか司会ってどこの世界も糞だな！！

っと、試合試合！！

『水よ 龍となりて 敵を駆逐せよ』』

相手の水が融合し、水龍の姿になりセリアとリリーを襲う。

リリーが手を上にあげ、下ろすと。

巨大な氷の塊が龍に向かって回転しながら飛び込み。

そのまま龍を消滅させた。

相手はいいコンビネーションだな。

実力がいまいちだが。

『風よ 暴風となりて 敵を吹き飛ばせ!』

『火よ 爆炎となりて 絡み付け!』

竜巻のような風に炎が巻き付き威力を上げる。

ふむ。相性も考えたコンビネーションだ。

魔力が高かったら一瞬で終わるコンビだな。  
だが、

『パシユッ』

セリア……俺のマネして指ならそうとしたのかも知れんが、  
鳴ってないぞ……。

「ぐすっ……」

うなだれているようだが、上空から巨大なサイクロンが地面にぶつかり爆裂する。

その風で相手の攻撃もろとも、相手を壁に叩きつけ気絶させた。

試合には勝ったが……、

多分5年で苦戦するだろうなこれ……。

『試合終了ー！！ 勝者一年代表！！ 見事四年代表を倒したかわいいこちゃんたち！！ 次はスカートで出てきてくれ！！ 俺はパ  
ンツがみゲフォー！！？』

俺は司会に攻撃し、掻き消えた。

## 決勝戦・待機時間

二回戦の三年にも余裕で勝ち。

いまは控室で待機中。

二人は優勝モードだ。

そこで、俺は口をひらく。

「お前達このままだと次で負けるぞ」

二人は目をまんまるにして、

「何を言うのじゃトキ！！ 余裕の戦いみていなかったのじゃな？」

「優勝です！！」

うーん。

ダメだこいつら。

自分で気付かないといけないことなんだがな……。

「過信をしすぎるな。これは俺の経験からだ」

一言だけ言って、俺はその場から消える。

決勝戦

『ついに決勝戦です！！ 学校最強はどちらか！！？ かたや入学期もない一年！！ かたや最上級生の5年！！ 前代未聞の一年が最強となるのか！？ それともやはり5年が強いのか！？ では、両者前へ』

セリアとリリーの二人と、相手の二人が前に出る。

「あら？ かわいい子たちね？」

話しかけているようだな。

「ふふ、ハニーの方がかわいいよ？」

「もうっ、ダーリンったら」

うん。バカップルだな相手。

もう戦術見えるぞ……だが

セリアとリリーにはきつい相手だろうな。

『さー、両者、準備はいいか？ では！！ 始めゲファッ！！』

長くなる前に空間で殴っておいた。

バレないからOK。

始まってすぐに、二人が腕を上げ、振り下ろす。

熱を含んだサイクロンと、電気を帯びたサイクロンが相手の二人に向かう。

二人は一瞬目くばせし、

『金よ 結界』

『水よ 結界』

短縮詠唱でお互いが相棒の結界を張る。  
得意属性が分かれているんだろう。

二つのサイクロンが当たるが、属性の相性が悪く、  
セラとリリーの攻撃は消し去られる。

続いて、セリアが電気を帯びた波を相手にはなつ。

『風よ 飛ばせ』

『水よ 結界』

下に残った男性が女性を魔法で上空に打ち上げ、  
女性は男性に水の結界を張る。

電気を帯びた水を放つが。

水がデンキを拡散させ、水は相性が悪くはじかれる。

『風よ 穿て!!』

上空へ飛んだ女性は両手に二つのサイクロンを作り出し、  
リリーに投げた。

セリアとリリーは結界を張ったようだが……。  
属性が全然だめだった。



風なら金で防げばいいのだが、二つの風を一つの風の結界で防いでしまい。

後ろまで吹き飛ばされる。

セリアにいたっては無駄に結界を張って魔力を消費しただけだ。

最善の方法は二人で同時に魔法を放ち、セリアが風の弱点である、横風で打ち消し。

消し去ったと同時に、上空で身動きが取れない女性を狙えばよかった。

男性は水の波の効果が続いているので手助け出来ないのだから。いきなり目の前に現れた攻撃には女性だって対処できないはずだ。

あー、このままだと負けるなこれ……。

リリーがなんとか立ち上がったが、男性の波も引いてしまい、相手の無傷の二人が自由になった。

セリアとリリーが両手を上げ振り下ろす。

上空から、融合した二つの大きな雷が二人に向かって轟音を轟かせ落ちる

だが……、

『地よ 天に突き進め!』

『金よ 土を鉄に!』

セリアとリリーのそばに大きな一本の柱が作り出され。鉄に代わる。

雷は方向を変え、セリアとリリーの鉄の柱に向かい突き進む。

落雷。

空気がびりびりと震え、地面に大きな穴が開く。

二人は纏った風で、ダメージは少ないもの。  
かなりの距離を飛ばされた。

『地よ 細かく細かく細かく炭となりて舞え!』

『火よ 着火』

下手したら決まるな……。

風を纏ってるから、さらにかき乱されて内部まで……。  
死……。

しかたない。

『Buildgriff』

《心象掌握 記憶復元》

俺は小さく呟き。

二人の10年間の記憶を復元した。

刹那、

周囲に舞っていた粉塵に着火。

天を貫くような爆音と爆発がおこる。  
かなりの範囲が消滅したようだ……。

もし風の結界のまま、二人が受けていれば最悪死……。

煙が晴れて、

二人は立っていた。  
水を纏い。

二人は俯いていた。  
突如、

二人が顔をあげた。

見る者が恐怖しそうな笑顔で。

目が全く笑っておらず。

口だけが限界まで開かれた状態で。

セリアの周りに七色の結界が張られる。

アルの時のような七色。

『ドンッ』

セリアが突如、一直線に相手に飛翔した！

相手は撃ち落とそうと魔法を放つが、七色の守りは消えない。

後ろのリリーが両手を広げる。

両手から雷が楕円を描くように、相手の真横から二人にせまる。

男性が地の結界を二つ張り防ぐ。

その間にセリアは近づき、勢いをつけ、拳に風を纏わせながら女性を殴りつけた。

顔を。

壁まで数十メートルも殴り飛ばされ、女性は意識を失う……。

『あはははははははははははっ！』

セリアが笑う。

底冷えする様な声で。

リリーが電気を通した水を、地面から一メートル程に、会場を覆うように張りめぐらせる。

男性は屈むしかない、

小柄なセリアが風の魔法を使い。音速で接近し、

殴りつけた。

なんのひねりもなく。

これが魔法の戦いなどと言えるだろうか？

ただ、敵を殺すための戦い。

男性は壁まで吹き飛ばされ、意識を失った。

セリアは一度俯き

顔をあげ、俺を見て口元を釣り上げた。

『Buildgriff』

《心象掌握 消去》

とつさに俺は二人の記憶を消す。

あのままだと、確実に俺の方へ殴りかかってきただろうな。

この記憶は出したらダメだ……。

たしかに魔力は一気に上がったが。

殺すための戦いになってしまう。

ただ、セリアのスタイルとしては接近戦がいいかもしれない。

小柄だが、魔法の補助があれば小柄を最大限に生かせる。

リリーはセリアと組んでこそ力が発揮されるな。

追い打ち、罠としての魔法。

これからはチームワークを鍛えるか。

二人の方を見ると、記憶を消してしまったので何が起きたか分からないといった感じだ。

まあ、優勝はしたからいいか。

そこで俺は寮へ飛んだ。



寮・夜

「なぜ途中で帰ってしまったのじゃ？ わらわたちの活躍を！」  
「トキ様にみていただきたかったです」

うん。活躍って言うか暴走だ。  
二つ名が魔王とかつきそうだぞお前ら。

「最後まで見て帰ったんだよ。あとお前達のかスタイルがきまったぞ」

キョトンとしている。

「わらわはもう育たないと……ぐすつ……」  
「私はこれ以上大きくなると垂れそうで……」

誰が体系っていった!?

「はぁ……、戦闘スタイルな？ セリアは魔法を使った近接格闘タイプ。リリーは、戦況を見て、前衛のセリアが戦いやすいように場を作るタイプだ。あとお前達にこれやるよ」

俺は二人に先ほど部屋に帰って作った装備を渡す。  
レンの鱗で作ったグローブと衣だ。  
固すぎたので幻惑で作った。



「「これは？」」

「俺が作ったグローブと衣だ。セリアは前衛だからグローブ。属性を纏わなくても境界ごと貫ける素材で出来ている。まあ、纏ったほうがいいけどな。硬さも宇宙で一番硬いから威力も上がるし、腕の負担も減る。リリーは後衛だから衣。すべての魔法をはじける衣。時間とか空間みたいの以外な。光も闇もはじける。グローブと同じ素材で織ってあるから近接防御も高い」

二人はキョトンとしたあと、

「きらきらしてるのじゃ……」

「光を放ってる？」

二人は物を見て、俺を見て。

「トキ、ありがとなのじゃー」

「トキ様愛してます！」

抱きついてきた。

「あー、もうわかったから。とりあえずこれからは、チーム練習を  
あいてる時間にしろ」

二人は全く聞いてなかった。

なぜか全裸になってグローブと衣を、

「ねえ……、お前ら何してんの？ アホなの？」

ドン引きだ。

「どんなものかと直に羽織ってみたのです。トキ様の愛が伝わってきます」

「身軽な方が近接で戦いやすかとおもったのじゃ」

バカだった。

「うん。服着ろ。お前らの裸なんて見飽きたからな」

二人はしぶしぶと服を着だす。

「お前らもわかったと思ったけどさ。チームプレイ出来ないと、魔力で勝つても負けるかもしれないだろ？ だから俺が言ったスタイルでチームプレイの練習してみ。お前らの魔力なら洞窟で魔物も近寄ってこないから龍とでも練習すればいい」

こくこくと二人が頷く。

「そつだ。金どうしよう。ちょっと大変なことになった」

「「?????」

わからないよな……。

「ちよいこれみてくれ」

俺は空間を、金が入っている空間につなげる。

「「……………」

「トキ、ふえてないかの？」

「膨大に増えてませんか？」

「1.2倍」

俺はそれだけ言った。

「？」

二人は意味が分からない。

「お前達の倍率」

「……」

「トキ様……かけてたのですか？」

「ああ、結果。現在6億7284万レラルだ。どうしよう？」

ホントにどうしよう……？

「わらわの城はいやじゃぞ？ 何部屋も占領される上に、びくびくしながら生活しないといけなくなるのじゃ」

うん。わかる。

「うちも無理です。金庫のお金全部持ってきたので戻れませんし。入りきりません」

だよな。

「安全性を考えるとトキが持っているのが一番いいのじゃ。トキが

死んだら取り出せなくなるが」

俺が持つても役に立たなくなるぞ。

あ、でも一億位もらっておくか。

次の世界の時、幻惑使って金貨を作れば。

「んー、そうだ。リリーお前、兄倒したらセリアの家に一緒に住め。一緒に住めば金わけなくていいから楽だし」

こいつ金はあっても路頭に迷いそうだし。

「そうですね。セリアさんがよければ住みたいです。私はもう帰る場所がないので」

「よいぞ。わらわも暇すぎてこまっておったのでな。リリーがいれば少しは楽しいじゃろ」

「じゃあお前の城の地下に金庫作るわ。もちろん全方位から入れないように結界張っとく。入口を不可視にして、鍵でも作れば誰も入れないだろ」

完璧だ。

「と、トキもわらわの所に住」

「却下だ。俺は自由に生きるのさ！一億位もらっけどいいか？

5億近くやるから」

「そ、それはいいのじゃが……残念じゃ」

二人がとても残念そうだが……仕方ないんだよな。

「よし。早速行くぞお前の城！お前の国のしょぼい年収10000年分以上だぜ？やったな？裕福な国になるぞ」

「所詮わらわの国は……えっぐ……」

また泣かせた。

「さーって行くぞ二人とも」

『パチン』

二人の意見など聞かずに、三人で城の内部に飛んだ。

## 四七話 龍との契約(前書き)

四十五話のレリア・ロアナ・コメットの国がレイズになっていたのをコメントに変更

四七話 龍との契約

洞窟最深部

『お主、最近毎日くるのう』

現在、いつものボス龍のとこ。

二人は倍率なしの修行中。

「ここ、誰にも見られなくてちょうどいいんだよな。あ、そうだ、お前達も強くするんだったな。ついでにしちやうかな。その間にお前達の引っ越し先つくって来ちやうから」

事前にやっておいて損はないだろ。

『ふむ、もう移動なのか？』

「いや、まだだ。だが引っ越し先とか見たいだろ？俺がいる間なら不可視状態に出来るから、近場の視察なんかもできるぞ？」

不可視じゃないと、説明前に引っ越しなんてしたら龍と人の戦争おきるし。

『わかった、皆の者集まれ！』

龍がぞろぞろと集まってくる。

「そっぴや、何年くらいで話せるようになるんだ？」

『我は1000年くらいだったが特別らしい。普通は3000年くらいだろか』

あれ？でもシロクロ……。

「シロクロ喋ってないぞ？」



『お主が押しつぶして喋れない状態からすぐ化身にしたからじゃろ。化身では無理じゃ。レン様は規格外だが……』

人間になる時点で規格外だろな。

「じゃ、5000年くらいでいいか。喋れないと不便だしな」

『ああ、それでいい。我は100メートル超えるだろうな。早めに引越しないと手狭だ』

「それは出来るだけ早めにするよ。お前達もそれでいいか？」

一応龍達にも聞いてみる。

うなずいてるようだ。

「シロとクロ見ててわかったと思うが、すこしデカクなかったからって調子のるなよ？ 別に反抗してきてもいいが、殺すからな？」

うん、うなずいてるようだ。

「じゃ、寝かせるからな？ 気づいたら5000年だ。一応寝てる間にでかくなるから一匹ずつ離れてる。二人とも一個上の階層で練習がてら魔物掃討してきてくれ」

二人は理由も聞かずに上の階に上がっていった。

俺達の話から分かっていたとは思うが。

俺は、龍達が離れたのを確認し、

「レン。この階層丸ごと一日を5000年に変更。ついでに幻惑で全部眠らせてやってくれ」

「わかったー」

龍達がバタバタと倒れてゆく。

加速世界には俺も入りこむので、よくわからないがされたのかな？  
レンは言う通りの作業をしてくれた。

寝てるから消えていない。

「レン、留守番よろしく。龍守ってやってくれ。俺はやることがあるから」

「はい」

俺はそれだけ言うと消えた。

ブレ王国。

さて。

まずは 前に風の神がいた場所から地下に穴を開けるかな。

『パチン』

俺は山の奥に移動した。

「ハク。この星、ベクレルの構造を頼む」  
「はい」

俺の中に知りえるはずもないベクレルの情報が流れ込む。

「ふむ、下部マントルが420～1900キロの間か。地球が670～2700キロだから、地球より小さいんだな」

「そうですね、でもなぜ下部に？ 上部でいいと思いませんか？ 重力も変化しちゃいますし」

「上部マントルは流動するだろが。鋼体の下部がいいだろ。ついでに、圧力が強いから、土がほぼ鉄に近い強度だから頑丈だ。龍が暴れようと何しようとか地表には意味ないからな。かなり広くしたいし」「龍達が地表に出てくるときは？」

「空間繋げておけばいいだろ？ 出口はたくさん作って、入口は山奥に作ればいい。出口は外側を循環させる結界を張れば入れないしな」

入口には不可視の結界張れば絶対ばれないだろ。

『Verschiedener Formen - Griff』

《万象掌握 操作》

何も起こらないが、多分地下に数十キロの空洞ができたはず？

「ハクつなげるぞ？」

「ご主人さま。圧力でどうなるかわかりませんよ？」

『Weltstruktur? nderung』

《世界構造変更》

「これでいいかな？ 作った範囲のルール変更したけど」

「はあ、まあいいですけど……もう完全に神ですね」

「神だろ？」

「そうでしたね」

会話をとぎり、空間をつなげる。  
一応、念の為に、空間があるかたしかめる。

大丈夫そうだな、空間繋がってるし。  
俺はその空間に入り込む。

『Licht wohnt』  
《光よ、宿れ》

壁自体が明るく光り出す。

「広いですねー。周りの壁が見えません。ここなら私に何しても気付かれませんか？」

とりあえずハクは無視して、

『Raumverbindung』  
《空間接続 ポイント干》

とりあえず地上と上空わけ隔てなく、世界の1000か所につなげる。

ハッキリ言っでどこにつなげたか分からない。

『12 Punkte der Sterne』  
《十二点星陣 循環結界》

さらに、その上に結界を張りつける。

『Raumverbindung』

《空間接続 ポイント百》

ベクレルのデータから、山奥に100か所入口を配置。

『Ich erlaube nicht, gilt? tten Si  
e . . auch』

《視認すらも許さず》

その上に不可視の結界を、

「ふー、これで大体終わりかな？」

「ご主人さま……壁につなげすぎて、壁に手をついたら、どこかに飛ばされますよ……」

慣れてもらうしかない……。

「世界中に行けるから何とかなるだろ。あとで龍達に、幻惑でベクレルのデータ入れておこう」

「そうですね。利点としては、世界中に行けるってことでしょうか？ 食べる量が増えてるので魔物もかなりの数退治してくれるでしょうね」

「それで龍の評価が変わればいいな。ついでに違う場所に住んでる龍も、ここに住んでくれればいい。後から来た龍は構造知るのに大変だろうが」

諦めてもらおう。

「大変っていうか十中八九覚えられませんか……、不可視ですから場所覚えないと入れませんし。出口だって1000か所覚えないと

どこに飛ばされるか……」

仕方がない。

諦めてもらおう。

「とりあえず戻るのか？」

「ですねー、一応世界のデータはこの洞窟のことも書き換えておきました。それを龍に入れてください」

りょーかい。

と言って、俺は龍達の元に戻った。

洞窟最深部。

壮観だ。

「お前達でかくなりすぎ。そんなの見たら人間なんて失禁するぞ…」

俺は苦笑しながら声をかける。

『一瞬でこの大きさになるとは、ありがたい』

一瞬ではない、寝てたから一瞬に感じたかもだが。

『ははは、今なら我らで世界すら壊せそうだぞ？』

豪快に笑ってそんな事を言っている。

「したら殺すからな？ 俺とレンは単体でも世界なんて一瞬で壊せ



るし」  
「す、すまん。なんとも強大な力なのでな、気が大きくなってしま  
った」

てか俺いなくなったらどうしよう……。  
司令塔いないと……。

「なあ、龍達よ。俺は取引をしたんだ。だが、約束が違える場合殺  
されても文句は言えないよな？」

『我らは刻様に一生の忠誠を』  
『逆らえるはずありません』

喋れるようになったんだな。  
だが取引内容かわってるぞ？

二人はまだ帰ってきてないな、よし！

「今から契約をする。自由を奪うものではないから安心しろ」  
の前に。

『Buildgriff』

《心象掌握 構造注入》

龍達に世界の構造を送り込む、

「どうだ？俺はちゃんと約束を守ったぞ？」

ニヤリと笑ってやる。

『ありがたい。これほどの住処はどこを探してもないな。契約を許可しよう』

満足したようだな。

「ハク契約の仕方あるよな？」

「白の本としての契約ならありますよ？」

「それでいい」

「じゃあ送りまーす」

俺の脳裏に契約の知識が入り込む。

『Der wei?e Vertrag』

《白の契約 開始》

階層まるごとを覆うような光が溢れ出す。

『Ziehen Sie Inhalt zusammen』

《契約内容 確認》

Ich ermorde einen, seine Person, nicht. Aber die Selbstverteidigung ist möglich.  
Zwei, ein verschwindendes Kind? nicht.  
reich. Und kooperieren Sie durch  
cheinen gleiches Standpunkt  
it dem Kommen?nigreich.  
Gehorchen Sie vier, Seria Clot  
ilder, der verschwimmt, Anweisu

nggen von Lily Charles .  
Sch?tzen Sie drei , den Drachen ,  
den ich noch nicht unter dem  
Einverst?ndnis beobachte .

Ich werde mit nichts fertig , w  
enn ich es ver?ndere 『

《一つ、人を殺さない。但し、自己防衛は可。

二つ、ブレ王国。並びに、コメット王国とは対等な立場で協力す  
ること。

四つ、セリア・クロティルド・ブレ、リリー・シャルレの指示に  
は従え。

三つ、まだ見ぬ龍は同意のもとで保護すること。

違えることがあれば、無へと処す》

俺の言葉が上空に書き出される。

「意見はあるか？」

ボス龍に問うてみる。

『ふむ。他にも龍はいるのか？』

「確実にいるな。どんな世界でも一つの生命体がこの数だけつての  
は異常だ。しかも最強種がな。魔物の数も多いし、食糧にも困らな  
い。寿命も半永久。ありえないだろ？」

黙ったので、OKだな。

『Weier Gott fragt es danach . N

ehmen Sie die Person des Einver  
st?ndnisses an. . in diesem Ver  
trag stellt zu friedem. Die Per  
son, die es ablehnt, lehnt es  
ab<sup>」</sup>

《白の神が問う。この契約内容に同意せし者は受け入れよ。拒否する者は拒絶せよ》

次々に龍達の体が輝きだす。

契約に同意した者たちだ。

全部の龍達が同意するのを待ち、

「Der Vertrag wurde geschlossen.  
Ich traage einen Vertrag als wei  
i?er Gott heraus. Zu diesem Per  
sonenschutz<sup>」</sup>

《契約は成立した。白の神として契約を執行する。この者に加護を》

龍達がひときわ輝き。

光の契約文が龍達の中に入り込む。

「Das Vertragsende<sup>」</sup>

《契約終了》

光が納まり、元の洞窟に戻る。

「ふむ。不思議な感じだな。力が上がった気がするの<sup>」</sup>

龍達は自分の体を見渡している。

「神の加護だからな。それくらいは上がる。まあ、それは置いといて」

「どうしたものか……」。

「ボス龍。違えたやつがいるよな？」

「そうだな。最初に言っておいたはずなのだがな。その時は同意していた。お主に任せよう」

「見せしめつてわけじゃないけど……」。

「絶対殺すよな人、アレは。」

「その黒い龍。どういっつもりだ？」

「俺の視線で、すべての龍の視線が、一匹の龍に注がれる。」

「なぜ我が、人間如きの下につかないといけない！！ この力があれば人間如き絶滅させられるだろう！ そうだろ皆の者！！」

「他の龍達はとまどっているようだ。」

「そこで俺は、」

「こいつらは神と契約した。違えた場合存在ごと消えさる。仲間を集めようとしても無駄だぞ？」

「龍達のざわめきが納まる。」

「ならば我がやればよからう。貴様さえ消してしまえば契約も解消される！ 違うか？」

「その通りだ」

『ははははは！ 素直に言うとはバカか？』

うーん……ダメだこいつ。

「ボス龍。こいつ消すぞ？」

『致仕方あるまい。』

「さて、お手並み拝見と……」

『グガアアア』

80メートル程の黒い龍から、10メートル級の黒炎弾が放たれる。

俺に向かって。

その黒い炎は、俺に向かう途中で一匹の龍に当たり霧散した。

レンいつのまに戻ったんだ？ やっぱでかいな。

ボス龍越えてるから120メートルくらいか？

『おにいちゃんに何するの？』

『貴様。何故人間などに肩入れをする！』

レンは首をかしげ、

『人間？ 誰が？ おにいちゃんが？ どこを見たらおにいちゃんが人間に見えるの？』

うん。あつてはいるが傷つくぞレン……ぐすっ……。

『自分のことを神などと戯言をほざく人間だろうが！そこをドケ  
！殺し尽してやろう！』

『そう。あなたはおにいちゃんを殺そうとしてるの。おにいちゃん  
は殺させないよ？代わりあなたを殺してあげるね？』

レンは一度翼を羽ばたかせた。  
たったそれだけで黒龍は存在ごと消滅した。

すべての龍がレンに対して頭を垂れる。  
美しく輝く純白の龍に。

全員で襲いかかっても一瞬で消滅させられてしまっただろう圧倒的  
な力の前に。

「レンありがとな」

『んーん、アレくらいならお兄ちゃんだって出来るでしょ？』

まあ、出来るけどさ。

「頭を上げる龍よ。お前達には何度か俺を手伝ってもらう方がいいか  
？」

『我らに出来ることなら手伝おう。だがお主の方がつよかるう？』

「いや、俺はこれでも見た目人間だからな。お前達の威圧感の方が  
人には効く」

『心得た』

うん。自分で言つて悲しくなる。

俺はレンに世界のデータを送る。

「レン、全員をそこに送ってくれ」

さすがにこの質量は俺にはキツイ。

『はい』

レンが返事をし、次の瞬間には移動していた。  
空間つなげないで転移できるっていいな……。

「これが新しいお前達の住処だ。世界中に移動出来るようにしてるが、データ送ったからわかるだろ？」

龍達は頷く。

『いい場所だの。この深さなら干渉もされんしの。食料をとりにくいのも楽そうだ』

満足してもらえてよかった。

「そうだなー……何か不備があったら……、そうだな。おっさん。ちよっといいか？」

俺は上を見上げて声をかける。  
そこには天井しかないが、

『なにか助けが必要か？』

その場の全員の脳裏に言葉が届く。



『この声は何だ？』

龍達が驚いているが。

『ふむ。我は時幻龍だ。トキの友だな』

友達なんて少なかったらすこし照れくさいな。

おい。俺よりも敬意払って頭たらしてるんじゃない龍！  
当然かもしれないが……。

『じ、時幻龍様。我らに何の御用でしょうか？ 消されるようなこととは何も……』

勘違いしすぎ……。

「俺が呼んだんだ。頭上げろ。おっさん。一応俺が構造した住処なんだけどさ。俺がいなくなつて不備が見つかったら治しといてくれ」  
『よかるう。その小さき龍よ。何かあつたら我に声をかける。新しき神の友の龍だしの、助けてやるう』

これで安心かな。

「サンキユ。もうちょいしたら戻るから狭間で待っていてくれ。土産話でも聞かせてやるよ」

『ふつ、楽しみにしておるぞ新しき神』

それだけ言って、おっさんの声が消えた。

「まあいいおっさんだから何かあつたら言ってくれ。さすがに降り

てはこれないからな。ベクレルごと潰れそうだ」

『伝説と会話をしてしまった……お主、何者なのだ？ 時幻龍と友  
などと……』

ふむ？

「前から言ってるだろ？」

「  
全てを受け入れ、成長させる渡り神 如月刻だ」

それだけ言って、俺とレンはその場から消え去った。

ブレ王国・城

俺は二人を洞窟に迎えに行き、そのままブレに飛んだ。  
さて、雛を羽ばたかせるか。

「さて、兵士長のおっさん。今のブレ王国の戦力を教えてくれ」  
いま俺は、おっさんと向かい合って座っていた。  
名前は……忘れた。  
セリアに俺の質問に答えさせるように言っている

「兵士をかき集めても1万程度だな」  
「レイズ王国はどれくらいだ？」  
「なぜレイズなのだ？ 大国だから30万程度だろうか？」

30倍……。  
やっぱり小国と大国だからな……。  
まずは……、

「おっさん。この国の兵の部隊長呼んでくれ」  
おっさんは一旦、セリアを見。  
うなずくのを確認して呼びに行った。

30分ほどで、10人の兵士を連れて戻ってきた。

「これが我が国の部隊長だ」

ふーん。

とりあえず幻惑でサーチっと……、

ビンゴ。

「Die Einschränkung vom Pechsch  
Warzen」

《漆黒の束縛》

そのうちの二人を鎖で束縛した。

「な、なにをするのだ!？」

「誰だこんなものを国に入れたのは!？」

「トキ、何のつもりだ?」

前者が束縛された二人。

後者が兵士長。

「じゃあ俺の質問に答えてもらおう」

二人の目を見つめ、

「カロンとレイズの間が何の用だ?」

俺は二人に言いきった。

「「なっ!?!」」

兵士たちも驚愕の目で見ている。  
俺は二人の目をじっと見つめる  
神としての威圧感を放ちながら。  
実際は空間を軽くきしませてるだけだが、勘違いするだろう。

二人は一瞬視線を外し、

「何を言っているのだ小僧？」

「私は生まれも育ちもブレです」

俺は兵士長に視線を移し。

苦々しい表情だが気づいたようだ。  
さすが人の上に立つだけあるな。

「この二人を拘束しろ！」

部下に命令して連れて行かせる。

途中で俺は、

「安心しろ他の兵士。今この場にいる奴は、そいつら以外密偵はいない。下の者はわからないが、そいつらを拷問でもして吐かせろ」

他の兵士は安堵の表情を浮かべる。

ここで疑心暗鬼になってもらっては困る。

「さすが、トキですね。見ただけで気づくとは、恐れ入りました。  
して、彼らの目的は？」

心を覗くような視線で俺を見てくるおっさん。

「とりあえず俺を疑ったってなんにもならないぞ？ 姫の近くにいたんだから殺そうと思えば既にころしてるっつ。で、目的だが。お前も現実逃避をするなよ？ わかってんだろ？」

苦々しい表情を浮かべ、

「やはり開戦は避けられそうにないでしょうか……」

「無理だな。隣国つても最悪だ。かたやブレ王を殺した国、かたや隣国を吸収していつて大きくなった国。闘う気まんまんたる？」

「だが、我々には……」

戦力不足……か？

「トキならなんとかならんのかの？」

セリアが口を挟んできた。

自分の国の危機だからな。

「俺なら一人で敵国を落とせる」

あからさまにほっとした顔をしているが、

「セリア、お前の目的はなんだ？ 俺が最初にここに来た時に言った目的は」

「民に認められ、幸せにしてやりたいのじゃ」

「俺は手伝わない。これはお前がやらなければならぬことだからな」

セリアは絶望したような顔になる。

「リリーお前の目的は？」

「お兄様に勝つことです」

「レイズの軍事総督だろ？ 最後に戦う相手だ。お前が一对一で戦え。たどり着くまではセリアと協力し、最後はセリアが王へ、リリーが兄へ向かえ」

リリーは俯いてしまう。

「だがトキ！ 一万の兵士とわらわたち二人では30万には……」  
「それに関してだが……」

一旦言葉をとぎり、

「お前達二人には、一週間で七色の結界を身につけてもらう」  
「七色？」

「ああ、火 風 雷 水 氷 地 金の七つの属性を融合させた結界だ。すべての魔法をはじける結界だ。基本属性の完成型と言っている。もし身につけられなかったら」

二人を見つめ、

「民とお前達が死ぬだけだ」

「！」「！」「」

愕然とした様子で、涙目のまま俺を見てくる二人。

だが、セリアは一度それが出来ている。  
記憶はないかもしれないが、出来ないはずはないんだ。

「一週間後に開戦だ。こちらから宣戦を布告する。敵はレイズ王国。」



大陸一の王国だ」

それだけ言い、俺はその場から掻き消えた。

## 四八話 プレ王国VS レイズ王国

### 宣戦布告前日・宿

「ご主人さま、やりましたね。前と歴史が全然違いますよ」

そついやこいつは世界を早送りして見たんだつたな。

ちなみに俺はブレの宿にいる。

一週間の間に食べ物を買いまくって収納した。

別にまだ渡るわけじゃないけど。

「本当の歴史だと、もう少し後に、レイズに負けてセリアさんが殺されちゃうんですよー。それでリリーさんは兄に連れさられて子供を産まされるんですよ」

すっごい嫌だそれ。

「まあ、また負けるかもしれないけどな。少なくともセリアとリリ  
ーを殺させはしないが」

「二人には死ぬだけとか言っていましたのにね」

くすくす笑ってるハク。

「いつまでも俺に頼ってちゃな。雛のままじゃ困るし」

「そうですねー。でも、結界使えるようになりましたかね？ 使え  
なかったら絶対死にますよ。二人には29万程倒してもらわないと  
いけませんし」

29万ね……。

「ご主人さまが助ければすぐですけどね。助けないんでしょう？」

「まーな。今回は自分たちで何とかしてもらいたいな」

って言っても29万はきつい。

それに殺してほしくないんだよな……。

「とりあえず一週間たつたから行くか」

「ですね」

俺はハクを杖に戻し消える。

城

「セリアとリリー完成したか？」

王座の上に空間をつなげた。

下にいたセリアを、踏みつけながら問うてみる。

「トキ……わらわは姫なのじゃぞ……ぐすっ……」

「いや、お前は俺のペットでそれ以上でも以下もない」

俺の言葉にすごい落ち込んでる。

「でき、出来たのか？」

二人はうなずき、

「見るのじゃ！　これが七色の結界じゃ！」

「見てください！」

二人は七色の結界を張る。

歪みすぎ。

「お前ら死にたいの？」

二人とも泣きそうだ。

「だって、出来ないのじゃ……………」

「制御が難しく……………」

はあ…………

仕方がない。

自分でやってもらわなきゃ仕方がないんだがな……………甘い俺。  
死なれたら困るし。

『Buildgriff』

《心象掌握　任意復元》

俺はセリアが使っていた時の技術だけを抽出し、二人に埋め込んだ。  
だ。

これは俺が一週間で選別した記憶だ。

もしかしたらこうなるって思ってたし。

「はい。これで出来るはずだからやってみ？」

二人はもう一度張り直す。

今度はうまく制御出来たようだ。

「な、何をしたのじゃトキ？」

「え？ お前達の膜破った」

適当に答えた。

「つ、ついに私はトキ様とやったのですね！」

「わらわもか！」

うん。バカ。

「お前達確認してみる……」

二人はスカートの中に手を入れて、  
残念そうな表情になった。

「きづかない間にやれるか……。とりあえずそれが出来ればほぼ無効化出来るから、死にはしないだろ。維持するだけでもかなり魔力使うけどな……。ついでに光と闇の攻撃だとすぐ破られる」

そう言って、俺は二人に闇の鎌を放り投げる。

パライイインと鳴り結界が崩れ去る。

「な？ 四つの属性なら大体は大丈夫だ。例外はあるけどな。もっ

かい張つてみる」

二人が張り直したのを見て、俺は七色の内の風と雷を掌握する。

音もなく結界は崩れ去る。

って言っても、掌握して結び目を解くなんて普通は出来ない。

俺の場合は風と雷が勝手にこっちに来てくれるだけ。

普通は七色で編まれた洋服から、指定の色だけを一本ずつほごき、指定の色を全部取り除く作業をやるようなもんだ。

二人がめちゃくちや落胆してるが、

「普通はこんなこと出来ないから気にするな」

「トキといると自信がなくなるのじゃ……」

「トキ様に比べたら闘技大会なんて屑なのです……」

落ち込みレベル半端ない…な？

「とりあえず明日だから今日は寝ろ。兵士は作戦とか考えてるのかもしれないが。お前達がなんとかしないと確実に負けるからな？」

1万VS30万なんて最初から勝負ならん。勝つには圧倒的な強さを持った奴がどんどん敵の数を減らさないといけないからな。シロとクロの参加もOKだが、殺しは許さん。俺がそういう場をつくり出してやるから。出来るだけ殺さないでやれ。シロとクロもいいな？」

「二匹はうなずいているようだ。」

「じゃ、頑張れ。」

俺はそれだけ言って消えさる。

戦争当口



「ご主人さま。なにをするつもりですか？」

いま俺は闘うであろう場所の上空に空間を固定して、ドラゴンの  
レンド、杖のハクと一緒に座っている。

一応不可視状態。

後ろには巨大なドラゴンが50匹不可視状態で空間に座っている。

「世界のルールをちょっといじってな。ホラ、そこに二つ空間結界  
あるだろ？」

ハクは俺が指さした方向を見る。

上空に不可視だが、大きなブロック上の結界が出来ている。

「あれは特等席だ。そしてルールは、どんな小さな傷でも受けたら  
あそこに転送される。殺すより、小さな攻撃で魔力消費を抑えなが  
らたくさん打った方が得だ。死ななくて済むしな。鼻屑はせず、平  
等に空間に突っ込む。負けた方には普通に戦って負けたっていう記  
憶を植えつける」

これで戦後のいざこざが減ればいいがな。

「ご主人さまも考えましたね。前の戦争ではあんなに殺したのに」  
「痛いところを突くな。あときは若かったからな。バカだった」

ホント後悔先に立たずって言うか。

「今だって年齢は3300歳ですが、起きてた時間は50年ありませんよ。しかも、半分くらいは狭間ですごしてますし」

ま、それはもう忘れよう……。

と、

「来たぞハク。30万って多いな〜一万すくな！」

レイズは人がゴミのようだ。  
むしろゴミが人のようだ？

「ですね。やっぱりセリアさんとリリーさんが何とかしないと負けちゃいますね」

「だな。お互いの距離が1キロくらいまでになったらルール説明だな」

どうなるかな。

俺的にはブレに勝ってほしいが。

神が介入するって言うのはな……。

今更だけどな。

上空

「おーセリアが軍を率いてるぞ！ 王自ら先頭に立ってる。俺ああいうの好きだぞ？」

「ですねー、城に残って悠々としてる王はちょっと、ですね」

立派になつたな。上空にはシロクロが飛んでるし。

てか空中戦なんだなこれ。  
ほとんど空飛んでるし。  
三次元戦闘カツコエエ！

「そろそろ１キロだな。早くしないと始まっちゃう」

そこで俺は大きく息を吸い込み。  
風の伝達も使い、叫ぶ。

『両軍とまれーーーーー！！』

いきなり現れた大量のドラゴンと、俺の声に驚いて両軍が止まる。

『我は調停者！！ どちらの見方でもない！ 我は殺し合いは望ん  
ではない！！ そこで我が考えたルールを適用することにした！  
かすり傷でも負えば我が空間に転送する！！』

そこでレイズ軍から大量の魔法が飛んでくる。  
もしブレ軍にあたってたら一撃じゃね？ みたいな量の魔法。

俺はため息をつき、幻惑で操作し、それを打ってきた方角にその  
まま返した。

着弾し、爆音とクレーターが出来上がる。

少しでも掠った兵士は、瞬時に上空の結界に転送される。

『我に魔法も直接攻撃も効かぬ。我のルールに則り戦争をはじめ  
がよい！！ 間違っても我に敵意を向けぬ方がよいぞ？ あの者た  
ちのようにならぬようにな』

俺は空間を見、

『ブレとレイズの諸君！！ 戦争開始だ！！』

大声で開始の合図をする。

「くすす、ご主人さま、調停者ってなんですかー？」

ハクがにやにやしなから笑っていやがる。

「前に小説で呼んだ言葉？」

ホラ吹きまくったからな……。

「でさー、お前達はどっちが勝つと思う？」

背後の龍に聞いてみた。

『そうだな、俺は人間の戦いには興味ないな』

なんか、契約してからいきなり砕けたぞこいつら……？

『そうね。私はブレに勝ってほしいかな？ 契約があるから』

『僕はどっちでもいいけど、君はいつも面白いことを始めるね、くすす』

『ふふふ、そうよね。人間には興味ないけどこのゲームはなかなか面白いわ』

『ホント面白い神様だよね。世界のルールを変えてゲームにしちゃうなんて』

おおむね好評かな？

「ご主人さま。すごい嬉しそうですけど遊びすぎです」

たしかにこれじゃゲームだけどさ……。

「実はこのルールって結構難しかったんだぜ？ 当たった瞬間転送される。つまりかすり傷以上は確実に喰らわないんだよ。一人も死なないゲームだぜ？ すごくね？」

「たしかにそうですねー、すごい勢いで人が減っていきますよ。結界が不可視状態です为上に人が立ってるみたいです」

うん。これはなんか気持ち悪い。

現実じゃないみたいだ。

「ま、俺らは観戦してようぜ。お前達もいい暇つぶしにはなるだろう？ たまにはこう言うのもあっていいだろ。特等席だしな」

俺達は笑いながら眼下を見る。

セリアとリリーは圧倒的だなやっぱ。

敵の中心地まで入り込んで周りをセリアが近接で吹き飛ばし。リリーが大技を放つ。

一回で数百人単位で転送されていくからな。

ダメージは七色の結界で無いし反則的だ。

「お前達、俺がいなくなったらあの二人に従ってもらうからよく見

とけ」

俺はセリアとリリーを指さす。

『ふむ。たしかに魔力量、技術ともにかんりのものだな。だが、貴殿のように全面服従とはいかんぞ？』

「わかってるさ。まだ、そこまでの実力はあいつらにないからな。ま、いずれこの世界でも歴代の大魔道士になるだろうからさ。そしてたら手伝ってやってくれ。最初は対等でもいいさ」

そう言って、また眼下を眺める。

うん。二人はよくルールを理解してるな。

大型の暴風の中、に小氷を混ぜてかすり傷つけてるし。

一気に数千減ってるぞ。

普段だったらあんま意味のないような攻撃だけど、ここでは効果的だな。

それにたいしてレイズアホか……？

最初に攻撃してきたときもアホだとおもったが、

「なんであんな疲れるし、高威力だけど単体にしか効かないような魔法打つんだらうな……」

どうせ殺せないのに……。

「たぶんですね。ご主人さまへの反抗じゃないですか？ いきなりあらわれてその場を取り仕切るって、ある意味めちゃくちゃうらまれますよね」

ま、そうだろうな。

「ブレは数は少ないが、セリアが指揮して、かすり傷を当てて転送させる作戦。レイズは多いが、高威力な魔法で殺そうとする作戦？ 殺せないけど」

上空の結界内を見ると、ブレの方は休んでる。レイズは壊せないものかと魔法を放って味方と喧嘩してたり……。

「レイズ終わったな」

「ですね。10万人くらい送られちゃってますよ。ブレは1000人も送られてないですね」

指導者と兵士の質の差が出てるな。

「てかシロクロ何もしてないな？」

「なんでも、私達の戦争に巻き込むのは悪いって二人にいわれたそうです」

一匹の龍が教えてくれた。

あいつらがね……。

『おーい！ シロクロ飛んでるの疲れるだろ？ こっちこい』

風の魔法で二匹を呼び、空間を固定する。

その上に二匹が着地する。

「お前達の主としてあの二人はどうだ？」

シロクロに聞いてみる。



『んー、そうですねー。頑張ってますよ？ 魔力もまだまだ増えそう  
ですし、技術はまだ未熟ですが。主としての不満はないですねー』  
『わ……わたしは好きだよ？ だ、だってやさしいもんっ！』

こいつらと初めて会話したが……特徴あるやつらだな……。

「ま、見守ってやってくれ。二人は長寿だから周りで支えてやれる  
のは龍くらいしかないだろ？」

二匹はこくこくとうなずく。

いい使い魔引き当てたなああの二人。  
俺が選んだんだけど……。

そこでセリアとリリーがこちらに飛んでくるのが見えた。  
近場の空間を固定してやる。

そこに二人が着地した。

「どうしたんだ？ まだ、闘ってるだろ？」

「わらわは少しでも数を減らしたいのじゃが……」

「兵士さん達が君たちはこの後大きな仕事があるだろうって。休ん  
でいいって」

「わらわ達、役にたたなかつたのかのう……」

二人がずーんと落ち込んでるが、

「お前達のおかげで勝てそうだから兵士はお前達に休ませんたんだ  
ろ。使い物にならないやつは戻すんじゃないって、特攻させるからな」

二人は顔をあげ、安心したのかほほ笑んだ。

「でも、セリアよくあの作戦思いついたな？」

「ふむ、トキが臭いセリフ吐いたあとにすぐに兵士に知らせたのじや。トキの本質はみぬいておるのじや」

臭い……傷ついた。

本質って言うか……表質しか見せてないけど。

「にしても……レイズ糞だな。あ、リリーの国だったな悪い」

「いえ、あの国にはいい思い出ないので、別にどうとも思いません。ブレの兵士さんたちのほうが暖かいですね」

「ずっとトキに反抗しているようじゃったぞ？ お前達を殺したあとはあの男だって言ってたのじや」

ははは……この龍みてもそれかよ。

「勝つたらどうするんだ？」

「ブレに併合させようかと思ってるのじや。言うことを聞くかわからぬが……」

んー、どうすっかな。

「んー、じゃあお前終わったらこの龍率いて村でもまわれ。無駄な血流さなくて済む。最初は力で抑えつけてもいい。あとあとお前が善政すれば民はついてきてくれるからな」

「それはいいのじやが、龍は言うこと聞くかの？」

「聞くぞ。一応セリアとリリーには従うように言ってるから、お前らがよっぱど理不尽なこと言わない限り大丈夫だ。な？ 龍達」

俺は振り返り聞いてみる。

『一応聞くよ、でも私たちを本質から従えたいならもうちょっと強くなつてね?』

『我らはトキ殿と契約しておるのでな』

『それに住まわせてもらってるしね』

聞くようだな。

「そついや、こいつらお前の国の地下に住んでるからな?」

二人は眼をまんまるにして驚いている。

「と、トキ。それはわらわの国が地盤沈下したりしないのじゃない?」

当然だな。

「ああ、約500キロ下に住んでるからな。それに国守ってもらつように言つてあるから利点しかないぞ? 魔物喰つてくれるから安全になるし。人は襲わないように契約してる」

二人はほつと安堵したようだ。

「全部トキの掌の上なのじゃ。いまの戦争だって、トキのルールがなかったら負けてたのじゃ」

「ははは、そつだな? いやだったか?」

俺はニヤリと笑い聞いてみる。

セリアは俺に抱きついてきて、

「よかったのじゃ！ これでみんな幸せになれるのじゃ！」

ま、俺の雛周辺はな。

相手の国にとっては多分不幸だ。

すべてを受け入れる神とか言っても。

所詮すべてを受け入れるのは無理だしな。

「残り10万人くらいか？ お前ら魔力はどれくらい減ってる？」

「まだ一割くらいしか使ってないのじゃ。密度の高い魔法を打ってないのでな」

「私もそれくらいですね」

「じゃ、ここから一発撃ってみる。セリアは風を全てに流すようにリリーは熱を流せ。一割くらい魔力使っていていいから、かなりの威力でな」

二人はコクリとうなずき、

兵士を下がらせた。

腕を上にあげ一気に振り下ろす。

暴風ではないが、全てに広がるような風を流す。

リリーは両手を広げ、前に押し出すような仕草をする。

セリアの風が熱風に変わる。

触れれば火傷は確実な熱風が敵の軍隊を包み込む。

結界を張っていないかった兵は、すべてが転送される。

最初は火すら使えなかったコイツらがよくここまで成長したな。  
やっぱうれしいよな。

俺は微笑み、二人の頭をなでてやる。

「「？」」

二人は何で撫でられたのかわからないようだが、  
なんとなく俺は撫でたかった。

頭から手を離し、ひとつの方向を見据える。

「リリーいけるか？」

俺はリリーを見ずに問いかけた。

「はいっ！ 全然余裕です！」

リリーの目では見えないだろうが、何の事だかわかったようだ。

「一番後ろで指示だけ出してるな。あーゆ言うの嫌いだ俺」

「私も嫌いです。トキ様以外どうでもいいです！」

そっとう好き嫌いじゃない。

「俺とセリアもついていくけど手は出さないからな？」

「はい！ がんばります！」

俺は二人を抱きよせ、その目的の場所に飛ぶ。

レイズ軍後方

俺は飛んだ瞬間100メートル程の結界を張り。  
目的の人物以外を外に飛ばした。

「おや、シャルレ家の屑が私に何のようだ？」

目的の人物は第一声をそんな風にかけてきた。

青ざめているリリーの額に軽くキスをしてやる。  
リリーはニコリとほほ笑む。

「ありがとうございます。トキ様」

「ふんっ。屑同士がなれあいか？ 邪魔だからよそでやって……お  
やっ？」

セリアの方を見、

「ブレの王じゃないか。つまり君を殺せばこの戦争も終わる」  
いきなり炎をセリアにはなってきた。  
俺はそれを空間ごと消しさる。

「お前の相手はリリーだ。俺達は傍観者。めんどろなことをさせるな

よ屑？」

俺は見下しながら言いきる。

「私を誰だと思っっているんだ？ クレメント・シャルレだぞ？」

「誰だそれ？ 俺はシャルレって言うのはリリーしかしらんし興味もない」

「きさまっ！！」

強大な氷の塊を数個放ってきた。

もちろんそれも消し去る。

「お前の頭は空っぽか？ お前の相手はリリーだ。リリーやってきていいぞ。転送も結界内は切っておいたからな」

「はい！ 行ってきます！」

リリーが一步前にでる。

「シャルレの落ちこぼれが私にはむかうと？ 笑い話にもならん」

「おにい……いえ、クレメント・シャルレ。言葉はいりません。かかってきなさい。ちなみに私はリリー・シャルレではありません。リリー」キサラギです」

そんな事をのたまいやがった。

「いつの間にキサラギなんて奴と結婚したんだリリー……」

「前世からですよ？ トキ様」

こいつは大物になるな。



「もういいから潰してこい」

「黙れ出来そこない!!」

クレメントは水の龍を三方向から放ってきた。  
それがリリーに着弾する。

「ふはははは！ 屑の癖に刃向うからだ!!」  
「そんな屑の結界すら破れないクレメントとは、そつとつなゴミニ屑  
ですね。屑というより塵ですか？」

口に手をあててくすくす笑うリリー。  
口調は丁寧だが相当キレてるな……。

「黙れ!!」

雷を数十本リリーに放ってくる。  
リリーが手を前に出すと、空中に水の球体が雷と同数あらわれ、  
雷を球体の中に閉じ込める。

「おかえしします。お・に・い・さ・ま？」

球体がすべてクレメントに飛翔する  
とつさに氷の結界を張ったようだが、  
即座にリリーが熱で溶かす。

電気を含んだ水の球体がクレメントに着弾し、感電しながら数十  
メートル吹き飛ばされる。

クレメントは地面に手を付き、リリーのそばに鉄の柱を作り出す。

更に全ての魔力を使い果たしたような大型の雷を上空から落とす。  
つてか避雷針みんな大好きですね。  
前の時は吹き飛ばされたけど今回は……。

リリーは手に七色の結界を纏わせ、避雷針を半ばから錆びつかせ、叩き折った。

それをクレメントの上空へ投擲する。

雷は、クレメントの上空へ落ち。腹の底に響くような轟音をあたりにまき散らす。

クレメントを吹き飛ばし。地面に巨大なクレーターを造り出した。

てかりりーすげー……さすがにあんな豪快なの思いつかないぞ……  
……？

クレメントは瀕死だが、這うようにこちらに向かってくる。

「トキ様。もういいです」

リリーがこちらを向いて喋り出す。

「これ以上あんなみじめな“元”兄を見ていたくないので」

本当に哀れそうに兄を見下ろす妹。

「クレメント・シャルレ。トキ様をバカにするのは許しませんから」

ん？ そう言えばコイツ何で怒ってる？

まさか『ふんっ。屑同士がなれあいか？』これか？  
レンと一緒に俺のために怒ってたのかよ……。  
まあ、ここにレンがいたらこいつは消滅してるが。

その時、

「リリー、強くなったんだね。我が妹よ」

ボロボロのクレメントが話しかけてきた。

「私と、リリーの子ならば必ず世界で一番強い子が生まれる。私との  
子供を産めリリー！ 当主命令だ！」

そっぴゃこイツ……。

俺が介入しなかったらリリーに子供産ませるんだった。

リリーがめっちゃ冷めた目してる…怖い。

「クレメント・シャルレ？ なぜ私より弱い人の命令を聞かなくて  
はいけないんでしょうか？ シャルレ家では強者に従うんですよね  
？ だったらあなたは私より下です。それに」

シャルレは言葉をとぎり、腕に抱きついてきた。

「トキ様との子供なら宇宙一強い子供が生まれます」

すっぴいっれしそっだな……リリー。

「なぜだ……」

地面に這いつくばったまま、眩きはじめる、

「なぜだなぜだなぜだなぜだっ！ 私は最強なんだ！！ 世界で一番強いんだ！！！」

突如、空間内に濃厚な魔力が満ち始める。

「ご主人さま！ 深層世界を解放する気です！！ 完全に外に出たらここら一带吹き飛びます！！！」

くそっ！

なんなんだコイツは！？

「リリー！！ お前の兄消し去るがいいか！？ 何万人も殺させるわけにはいかない！！！」

「はいっ！！」

「ご主人さま！ きますっ！！！」

あたりの空間に色が付き始める。

『P e c h s c h w a r z

V e r a n l a s s e n    S i e    i h n    z

u r d ? n n e n    L u f t 』

《漆黒よ    虚空へと誘へ》

俺はすぐに、俺と二人を外に転移させた。

結界内に穴が開き。

クレメントもろとも、顕現し始めた世界を吸いこんでゆく。

一応、光と空間でホワイトホールを開けるが。危険すぎてやる気にもならない。

そのまま三人で龍達の元に飛ぶ。

危なかった……あそこまで狂ってるとは……。

「ご主人さまナイスです。死ぬかと思いました」

俺も思ったぞ……？

「リリー、お前の家系狂いすぎ……」

「そうですね。私もそう思います。ってことは私も狂っているのでしょうか？」

心配そうに俺を見つめてくるリリー。

「お前の場合違う方面に狂ってるんだよな……」

「違うですか？」

「そうだな」

俺はリリーの服の上から手を入れて、直に揉みしだく。  
ガシッと腕をつかまれた。

「トキ様、やめてください……あっ……」

手！ 手はなせ！？

「ん……」

魔法使って固定してる！？  
しかも七色じゃねーか！！  
使う場所ちげーよ！！

「トキ様……こすれて……」

手離せー！！！！？

「トキ様抱いてください　　ここでもいいので！」

めっちゃ人見てる上に手がまだ外れねー！！

「くそつ！ 『Metastase』」

俺は数歩後ろに転移した。  
すさまじい痛みが体に走る。

「ご主人さま……今の状態で使えない転移使うなんて……」

黙れハクツ！

危なかったんだよ。

「はあ……。それだそれ」

「はい？」

「お前の狂ってるどころ」

どんだけ積極的なんだ。  
恐怖するら感じるぞ。

「違います、これは愛なんです」

そんな目を摘むって両手を手の前で握ってもな。  
愛が重すぎてきつい。

「それ以外だったら普通だよお前は。以外ならな」  
「はいっ」

てか俺渡ったらいっつまり自殺しそうで怖い……。  
どうしよう。

俺はリリーを撫で、眼下を見下ろす。

数分で終わるな。

「セリア終わったら移動するからな？」

「どこへじゃ？」

「……レイズの王のとこだよ。殺すのか？」

殺しは極力させたくないな……。

「王都までは飛ばしてやるから。そっからは龍連れて交渉でも殺し  
でもしてくれ」

「たぶん殺しはしないのじゃ。捕縛はするとおもっがの」

ちょっと安心。

さて、世界構造からデータを抽出してっつと、  
それをレンに注入した。

「レン、龍全部とセリアをレイズに飛ばしてくれ。龍達はちよつとこいつに従って協力してくれな。終わったら住処帰っていいから」

瞬間、セリアと龍達が消え去った。

「下も終わったな。よし」

『Buildgriff』

《心象掌握 記憶操作 睡眠》

完膚なきまでに負けたって記憶を埋め込んで。

全員眠らせて終了。

起きた時には国なくなってるな。

二つのブロックを地面に移動してつと、

『Absage』

世界のルールもブロックもすべて解除した。

俺は風の魔法を使って叫ぶ。

『ブレ王国諸君。勝利おめでとう。君たちの勝利だ。我は君たちの王に頼まれてこの戦争に介入した。王の血を流したくないという言葉に心を動かされ、我が介入したのだ。今、君たちの王は単身でレイズの王の元へ向かった。君たちが疲れているだろうと、これ以上血を流してほしくないと。だからひとりで向かった。もちろん我は勝利者の国の王が殺されるのを認めない。先ほどまでいた50匹の龍を与えた。君たちの王は、一人で危険なレイズ王のもとへ向かっ



ただ。心づかいに感謝し、勝利を喜べブレの諸君！……！』

一瞬の静寂。

『ワアアアアアアア』

怒涛の歓声があたりを包む。

『セリア・クロテイルド・ブレ女王万歳！！　ブレ王国万歳！！  
我らの勝利だ！！』

泣きながら喜んでいる兵士たちを見ると、よかったなと思う。

女王か……。王女でなくて女王。

王が死んだあと王の娘と言われていたセリアが、女性の王として認められた瞬間。

実力、名実ともに王となったセリア。

一番小国から、大陸一の大国になった王。

一人の死者すら出さずに、勝利した王。

そして、俺の隣にいる少女リリー

家で存在価値のない“物”として扱われたリリー。

レイズ王国最強の兄を倒し、過去を払拭した少女。

これからセリアと一緒に国を治めてゆくだろう少女。

自由になった喜びか、幸せそうに微笑んでる。

枷が外れたか…。

二羽の雛が今羽を広げた。

まだ広げただけ。

羽ばたけるかは雛次第。

それでも大事な一步を踏み出したと思う。

羽ばたいてほしいと思う、  
心から。

だから下準備はしておこう。

二人が羽ばたけるように。

そしてあと一羽。

ずっと一緒にいたわけではない雛が残っている。

巣においてけぼりにしてしまった雛。

それでも俺は……、

成長させてあげたい。

幸せに生きてほしいから。

雛に祝福を与えよう。

四九話 レリアの相談(前書き)

ちよっぴりえっちかも

## 四九話 レリアの相談

寮

あれから一週間ほど経つが、セリアは未だに帰ってきていない。なんでもレイズは内部も腐っていたらしい。村などは、龍の力を借りずとも、新しい王に歓喜したらしい。結局すべての法を変えたりと、いろいろやることがあるらしい。兵を一人も殺さなかったので、兵の補充などはいらならしく。お金はそこまでかからないらしい。

「トキ様。トキ様の国に行ってみたいです」

唐突にリリーが言いだした。

「ないぞ？」

「え？」

「だからもうない」

「ご、ごめんなさい……」

うーん、国が滅ぼされたとか思ったのかもしれないが、そんな生易しいものじゃない。星ごと消滅しているのだからな。

「気にするな。お前と同じで、あんまい思い出がない。妹がいつぱいいたのが唯一の救いだ」  
「いもうと、ですか？」

何やらリリーは思いついたようだが、こいつの思いつきはいいことがない。ホラ脱ぎだした！

「トキ様！ 私を妹だと思ってくれていいです！ 吸いますか？ 吸えますよ？」

そう言っつて、自分の胸を持ち上げるが、

「そんな妹いるか！？ どう考えてもお前は妹タイプじゃない。セリアならなれそうだが、お前は無理！」  
「ひ、ひどいです……」

全裸で泣いてると俺が何かしたみたいじゃないか？

俺は後ろを振り返る。

誰もいない。

お約束は起きないようだ。

まあ、レンとハクはいるけど。

「とりあえず服着ろ」

「ぐすん……きせてください」

「ったく……」

俺は服を上から着せていく。

「下は自分で出来るだろ？」

「無理です！」

すごい嬉しそうだぞ……？

もついいや……。

そして、俺がパンツを膝のあたりまで上げたところで、後ろの扉が開いた。

レリアだ。

今の俺の現状。

パンツを膝のあたりまで上げている。

見た目的には下げている。

俺の頭はリリーのシークレットポイントの位置。

「ここでお約束かつ?!?!?」

「ごめん、後でまた来るね……」

俺はとっさに闇の鎖を作り出し、レリアを拘束した。

「ヒイッ?!?!? 助けて誰か犯される!?!」

叫びやがった!

しかもいつもと違う地声の女声で!

俺は一気に引つ張り、結界を張った。

「さて、早速始めようか?」

俺はにやにやしながら近づく。

「ヒッ! こないで! こないでよーっ!?!」

口調が素に戻ってるのか?

俺は服に手をかけ、

「キヤアアア……ッ!?!」

耳が……本気で叫ばれた。

そこで、少し後ろに下がり、

「で、お前なんできたの？」

「あ……あのね。話したいことがあって……」

俯いてしまった。

「つてかこいつ男状態と女状態変わりすぎ！」

「よくよく見たら女子用の制服だ。」

「ブラッ」

「キャッ」

「スカート捲ってみたが女用だった。」

「薄い水色。」

「てか、お前レリア？ 双子の妹じゃない？」

「おかしい。変わりすぎだ。」

「レ、レリアだよ？」

『何を言っているんだい君は』とかの反応だったはずだ。

間違ってもこんな真っ赤な顔で恥ずかしそうにするはずがない。

「あ！」

「俺はレリアの服だけを転移し、全裸にした。」

「キャッとか言っつてしゃがみ込んでしまったが。」

「くくくらいはあったな。」

「ちよいレリアこれ着てみる」



俺の男子用制服を渡す。  
でかいかもしれないが新品だからいいだろう。

「こ、こじで？」

「こじで」

もそもそと着替え始める。  
全裸にする必要はなかったな。  
でも、ついてなかったから女だ。

お、着替え終わった。

「ふう。君は女の子に対していつもああなのかい？ もう少し気を  
つけた方がいいと思うよ？」

変ったーーーー！！

「お前服で性格変わるのか？」

「うーん。服ってわけじゃないんだよ。心構えが変わるって言うの  
かな？」

俺は制服を転移させた、また全裸にしちまった。

「キャッ……えと……何するんですか？」

とりあえず胸を揉んでみた。

「あっ……あの？ な、んふっ……」

女か？ 男か？

シークレットポイントを覗き込んで見るがない。

「女だ！」

「あ、あたりまえですよ……」

なんか恥ずかしがるって初めてのタイプだなこれ。

「とりあえず服着る。なんで裸になってんだよ？」

「あつ…あなたが裸に……うう」

そうだった。俺だ。

恥ずかしがりながら、目の前で着替える女の子って久々だ。

ちょっとうれい。

「まあいいや。で？ 話って何？」

「あつ、そーでした！」

スカートの中を何やら捜している。

「あ、あれ？ ここにいれたはずなのに？ ないよ？」

そんな隠さないで？ みたいな顔されても……。

「だ、大丈夫です！ 私、記憶力には自信があるんですよ！」

にこりと笑った。

虐めたくなるなんか。

上着の上から手を突っ込んで、胸の先端をつねってみる。

「キヤツ……なにをするんですか！？ えっち……」

あれ？

「リリーちょっとこっちこい」

近寄ってきたリリーに同じ用に見てみた。

「あっ……トキ様、もっと虐めてください」

うん。

俺はレリアに向きなおり、指を指し、

「女？」

首をかしげた。

「ま、まってくださいよ！？ 私が普通なんですよ！？ そんな普通じゃないみたい……見られても、あれ？ 私、普通じゃない？」

「くくく、と頷く。

「あっ、あの。もう一度お願いします！」

同じようにつねってみる。

「あっ……き、気持ち……いいです？」

なんか違う気がする。  
もういいや。

「何かレリアだと罪悪感がわくからいいや。で、話は？」

先を促してやる。

「そ、そうでしたね！ トキくんがブレ王国を再建させたとか？」  
「んー、間違っちゃいないけど……正解でもないかな？」

あれ？

いきなり真っ赤になって俯いたぞ？

「せ………性会」

そう言っつて、レリアは真っ赤になって俯いた。

「普通じゃなかったおまえー！！」

なんかおかしいぞこいつは！

「で？ 俺に相談とは？ てか座れ」

「は、はい」

そう言っつと、レリアは座った。

俺の上に。

「お前なんで俺の上に？」

「え？ ええっ？ だって……性会？」

なんか俺の知り合いおかしくない？

類は友を呼ぶって言うのではないと思いたいよ？

「あ、あのっ！」

今度こそ言うのか？

「け、毛が生えてないと興味がない……の？ ……わ、わたし昔から頭以外は……生えなくて」

まてまて。

こいつの思考が全く読めん。

「すまん。全然意味が分からない、と言うかお前なにしたいの？」

「だ、だって……ハクさんが……。ご主人さまはえっちないと手伝つてくれませんかよって？」

「ハークツ！！！！ おまえ吊るす！ どこ言つたお前！！！！」

あの野郎逃げやがった！！

「ふう、安心しろ。そんなことしなくても手伝う。俺童貞だし」

「そ、そうなんですか……わ、わたしも…処女、です」

恥ずかしがるくらいなら言うな。

誰も聞いてない。

「いいから要件を言え。先に進まないだろ？」

堂々めぐりになりそうだ。

「あ、あの…、わたし女王なんですけど…どうすればいいでしょうかね？」

省きすぎて全然意味が分からない。

女王だけどうしよう？ って言われも。

「詳しく話せ」

「そ、そうですね…よね。は、はずかしいんですが、わたし人望全然なくって……。政治とかもどうすればいいのかわからなくて、税金とかさげろって、いわれたり……。国も、どんどんわるくなっちゃって……」

ふむ。

「ちなみに今、税金どれくらいだ。年のな」

「え、えつと……5分です」

「じつ……」

国よく持つな!?

そんな少ないの初めて聞いたぞ!?

たしかセリアに聞いたが、普通が4割か5割のはずだぞ!?

「お前文官どうなってるんだ？」

「ぶ……ぶんかん??」

そんなんですかそれ？ 見たいに言われても……。

「国の仕事は今まで誰がやってた？」

「……え、えと。わたしが学校にもちこんで……やってました」

「脱げ！」

「は、はい？」

「お前には服もいらん！ とりあえず勉強だ」

俺はレリアを膝の上に移動した。

服は移動させなかったので全裸だ

「あ、あの！ えと……は、恥ずかしいのですが？」

「恥ずかしかつたら覚えろ！ お前の国は、今のお前のような状態だ」

「え、ええ？」

「まず表層。服の部分な。兵士がいない。外から見たら、つまり今の俺から見たら、隙だらけだな。穴あきまくり。むしろ布地さえない。守るものがなにもないからな。ついで文官。国の内部が空っぽだ。財源や政治、祭りごと。すべてがない。それをやれるやつがない。内部の下着さえもないんだよ。残るは国としてある土地や名前。お前の国は裸で突っ立ってるようなものだ。もし此処で攻められたらお前の国なんて一日ももたないだろ。まるで今のお前のように。俺が攻めようとしなから占領されないだけ。もし俺が」

そこで俺はレリアのファーストフィルムの上に軽く指を置く。

「これだけ無防備になる。その気になれば三秒もあれば十分だ。守るものが何もないからな。それがお前の国の状態」

俺は指を離して、体をこちらに向かせる。

「お前は何がしたい？ 何もしたくないならブレに併合させてやる。今、お前は何がしたい」

鼻と鼻がくつつきそんな距離で俺はレリアをみつめる。

「……………ぐすつ…国を……………お父さんとお母さんの国を……………元に戻したいです」

涙であふれているが、良い目だ。  
覚悟を決めた時の目をしていた。

「そこに立て。まっすぐに」

レリラを立たせる。

俺の目の前に全裸で立つ。  
背筋を伸ばしピシッと。

「だったらまずやらなければいけないことがある」

俺は空間から、レンの鱗を取り出し、幻惑で形を変えてゆく。

「政治をなんとかしなければいけない。優秀な人間が必要だ。ブレから引つ張ってきてやろう」

俺は鱗を、下着の形にし、幻惑で形を整えながらゆっくりとレリアに着せてゆく。

「そして国の守りの兵士が必要だ、これはお前の国で探さなければいけない。財政がよくなればすぐに集まる」

制服のような上着と、スカートを作り出す。

征服とは輝きが違う、純白で発光している服。



「さらに、他の国が絶対に攻められないような守りが必要だ。兵士が少ない国はそれだけで攻められやすい。それは俺がなんとかしてやる」

足元まであるような純白の長いローブを作り出す。  
時幻龍に俺がもらったようなローブ。

「あと、お前自身が強くならなければいけない。男装は禁止する。女で強くなるんだ。王として強く。まだまだだが、セリアに習うのがいいだろう」

俺が幻惑と加速で成長させた、樹齢数億年の大木から作り出した杖。

更にそれをレンの鱗でコーティングした物を手に持たせる。  
長さは一メートル半くらいだろうか。

「そして」

俺はレリアの小さな手を握りしめる。

「同盟だ。大国のブレと同盟を組め。あの国には貸しがあるから断られることなんてない」

美しく輝く衣をまとったレリアが誕生した。

身に纏うものは、最高級という言葉では表せない、神々さを放つ衣。

突如、レリアは俺に抱きついて、

「ありがとうございます……ひっく……ありがとうございます。ぐす……わ、わたしががんばります!」

俺はレリアの頭を撫でてやり、

「明日からコメット王国の復興作業に移る。リリーも手伝ってくれるよな?」

「もちろんです」

考える間もなく即答するリリー。

「セリアは無理やりひっぱってくるか」

俺はレリアの涙を拭いてやり、  
目を見つめ。

「明日から復興開始だからな? バカにされないようにちゃんと身支度しておけよ?」

「は、はいっ!」

さて、最後の難のために全力を尽くしますかな!

五十話 王国復興(前書き)

50話ワイノ。(。(メ)。(メ)。(ノワイ

五十話 王国復興

コメット王国

「ひどいな……」

「きつとわらわもあのままだところなっていたんじやるな」

「予想以上です」

「ぐすつ……ごめんなさい」

いま、俺達は四人＋使い魔でコメット王国の首都に来ていた。

首都なのにこれは 廃国のようだった。

無作為に生えた木々。

ツタが建物中に絡みつき、人の気配すらしない。

「レリア、前王の時からこうか？」

後ろのレリアに聞いてみた。

「い、いえ。活気があって、い、いいまちでした！」

何年たてばここまでなるんだよ……？

「お前いつ王位継いだ？」

「え……えーっと、た、たしか6歳の時で……す？」

6……約10年。

何も出来ない子供が大国の王になってからの期間。

10年で……廃都のようになっちまうんだな。

「とりあえず城はどこだ？」

「そ、そこです」

レリアが指を指すが

何もない。

「どこだよ？」

「それですよ？」

「「「……」」」

俺達は沈黙してしまつ。

「お前野生児？　これは木で出来た洞窟だぞ？」

「ちつ、違いますよ！？　見てください！」

そう言つて、そこに駆けて行くレリア。

両手でツタを掻き分けると、中にくらい洞窟が…、

レリアはこちらを見て微笑む。

俺も微笑み、

「離れる！　俺が燃やし尽くしてやるっ」

「まっ、待つてください！　わ、私の住む…場所が……」

こんなところに住むなんてありえない。

「いいからどけ。城つくるから」

「はあ……わ、わかりました……」

レリアがその場から離れる。

「この首都は誰も住んでないんだよな？」

「ふあ、ふあい。皆他の国か村に行ってしまったんで……」

こんな場所住みたくないだろうからな。

「ハク。エラの時の城データ入れてくれ」  
「はい」

俺の頭の中に城のデータが十個現れる。

『Verschiedener Formen - Griff』

《万象掌握 操作》

すべての木々が首都から移動して行き、  
建物が土に戻り、更地になる。

地面が盛り上がり、エラの時に見た要塞のような城が次々と立ち  
上がる。

土で出来た城が10個ほど並べられる。

家が立ち上がり、道の中央に木々が立ち並ぶ。

俺は更に、操作しながら、

「リリーとセリア。金で建物を鉄にしていってくれ」  
「わかりました（のじゃ）」

自然を操作しながらふと思う。

土が操作できるってことは、遠くの鉱物を引っ張ってこれるんじゃないか？

銀色に輝く、建物の上に金を引っ張ってくる。

おお、出来た。

楽しくなってきたー！

俺は銀色の建物に金でコーティングしてゆく。

数時間後



「」「」「」……「」「」

「さて、次の復興につつろつ」

俺が踵を返すと、

腰の辺りにレリアが抱きついてきた。

「ま、まっってくださいよ……ぐすん」

俺はずるずるとレリアをひきずる

「仕方ないだろ？ でもさ、ほら。成金みたいでいいだろ？」

「ぜ、全然よく……ありませんよ？」

黄金に光輝く首都が完成した。

途中で楽しくなってきた。やりすぎた。

めちゃくちゃ悪趣味な城がたくさん出来上がった。

「ほら、頑丈だぞ？」

「トキ様……目が痛いです」

「わらわもこれは住みたくないのじゃ」

「ぐすっ……」

俺も住みたくないけどさ……。

「水もひいたし生活は出来るぞ？」

三人を見ると微妙な反応だった。

「そもそもトキ、これじゃ目立ちすぎて民とか国がせめてくるんじゃないぞ？」

そつだなー……。

「おい、レリアの使い魔の猫。お前レリアを守りたいか？」

猫が頷く。

「よし、チヨイ待ってる」

『Lebensgriff』

《生命掌握 再構成》

とりあえず寿命は半永久にして、猫じゃなくなるけど……これをこつして……よし。

更に俺は結界に閉じ込め、一万年の時を過ごさせた。

あれ？ 今更だけど、姿変えないなら構成変えればリリーもセリアも強く出来たんじゃね？

ま、いいや。

で、猫の結界解除つと。

あ、しゃべれるようにもしておつと。

「よし、できたー！ー！ー」

「「「……………」」」

目の前には30メートル程のケルベロスが現れた。

「強くしてやったんだからレリア守れよ？」

『『『ふむ。不思議な感じだな。力があふれる感じた』』』

三人は啞然としている。

「な？ こいつに守ってもらおう」

「トキ……………すごく怖いのじゃ……………」

「にゃーがこんな姿に……………」

かなり怖がってる。

「猫、とりあえず俺達がいけない間、首都はお前が守れ」

『『『了承した』』』

OK！

俺は三人に向きなおり、

「じゃ、いくぞお前達。反乱おこしてる村おさめに。セリアは新しく文官と武官、兵士よこせ。同盟も組んでおいてくれ」

セリアとシロを飛ばす。

「あ、そだ」

俺は加速し、一瞬掻き消え、すぐに戻ってくる。

上空に龍を連れて。

100匹くらいに増えてるけど、新しい龍見つけたんだな、

新しい龍も成長させて、契約もした。

「三人で手分けしてくれ、一応二人には従うようにしてあるから。30匹くらい持って行ってくれ。あと残った龍は首都を守れ」

最後のところは龍に言う。

『了承した』

二人に向きなおると……。

「トキ様……人間超えてきてますね……」  
「ぐすつ……」

たしかに神だが……。  
それと、

「レリア、お前は覚悟したんだろ？ 泣いてる場合じゃない。おさめろ。荒れた村を治してこい」

俺をじっと見つめ、

レリアは涙を拭って、強くうなずいた。

「あ、あと終わったらお前の大切なものもらっから」

俺の視線は下に、

下着をもらいうける！

「え、えっと……あの……はい」

恥ずかしいのか俯いてしまったが。

「トキ様！ 私のも！」

「もちろんお前のもだ」

下着は記念だからな、

男だろっが女だろっがもらっ！

「じゃ、頑張れ！！」

そう言っつて、俺とレンは掻き消えた。

## 荒れ果てた村

俺は龍を30匹+龍のレンを連れて村を訪れた。

いきなり現れた巨大な龍を見、  
村人たちは恐れおののいた。

いったん息を吸い込み、風の魔法を使い。

『俺はこの国の王の嘆きを聞き受け、村を回っている者だ。これからはこの国を竜が守る。抗うな！ 国をよくしようとする王をないがしろにするな！ 王が民を守ろうとしている以上はお前達も王に協力しろ！！ さすれば王の祝福をうけられるだろう』

俺は地面に手をつき、

地や木々を操り、建物を改築していく。

荒れ果てた地や木々は取り除き、畑を最高の状態までもってゆく。  
畑には様々な野菜や果物が実をつける。

最初は何が起こっているかわからず、  
呆然としている村人たちだが、

刹那、

『ワアアアアアアア』

大歓声上がる。

『村の民はレリア・ロアナ・コメット王に忠誠を!!』

あ、そういやこいつら女だって知らないんだった。  
まあ、あとで演説させればいいか。

『なにかあれば王に言え！ 守ってくれるはずだ!』

それだけ言い、俺は次の村に飛んだ。

一ヶ月後

結局、三人ですべての村を回ると一か月かった。

レリアとリリーが一つの村に時間をかけすぎたからだ

8割は俺が回った……。

政治や法は、ブレから送ってもらった文官に手伝ってもらっている。

国の守りは龍と兵士がやってくれている。

最近レリアも、王としての貫録が出はじめている。



そして現在、

「おい……、俺此処にいる意味なくね？」

国の重要案の会議に出席していた。

「だ、だって……と、ときくんも、手伝ってくれらるって」

俺の前では貫録なんて全然ない。

「いや、俺は主に体力面での復興の手伝いを……」  
「ぐすっ……」

なんだろう……？

雖はみんな俺に依存する法でもあるのだろうか。

「それを言うならわらわこそじゃ、他の国の王がこの会議になぞ……  
……いくら同盟とて……それに城が」

レリアがいつまでたっても城が金ピカで嫌だというので、  
ブレの城も金ピカにした。

「ごほんっ、よいかな？ 次の問題は近隣の森にすむ大量の魔物だな。被害が大きく。早急に問題を解決しなくては」

ブレから派遣された文官が、分厚い被害届を手にし、苦々しい顔  
をしている。

「安心しろ、すでに龍を放っている。龍の飯にもなるし、魔物も減

るし一石二鳥だ」

俺がだるそうに言う。

おいお前ら、そんな尊敬のまなざしで見ろな。

たしかにこの世界では魔物から国を守るのが大事だが。

「ついでに、他国へのけん制にもなるだろ？ 龍が守る国を襲うバカなんていない。ブレとコメットの両国を守るように龍と契約したからな」

やめろレリア！

そんなうるんだまなざしで俺を見るな！

目がきらきらしてる！

「わ、わたしは、ときくに王になってもらいたいです」

そんなことをレリアが。

「……………異議なし……………」

「異議あるわポケツ！！ お前ら何俺の意見きかないで進めるんだ

……………」

そんなことになったら渡れねーよ！

「で、では。えと……………キサラギ王国にしてもいいですよ？」

「……………異議なし……………」

「異議ありまくるって言うてんだろが!? 俺はそんなの興味ねーよ! レリアも黙れ!」  
「ぐすつ……」

やってられんぞ……?

「レリア、そっぴゃお前、午後から演説だろ? 内容とか考えてるのか?」  
「?」

まったく考えてなさそうな顔してる。  
大丈夫かこいつ?

「いいのか? 支持率とかずいぶん変わってくるぞ?」  
「わ、私が今まで思っていたことを言うつもりです。演説用に考えた文章で民をだましたくないので……。本心を言ってみます。だから、考えなくていいんです」

そう言っつて、レリアはにっこりと笑った

いい王になるな……コイツなら。  
随分と成長しちゃって……。

いままで王っつて強いな、とか思ってたが。  
王が強いんじゃないかって、強くないと王になれないだけだな。  
レリアを見るとそう思っちまうよ。

心が強いよこいつも。  
さすが王だ。

「演説まで俺寝てくるわ。最近忙しすぎたからな」

俺はそこで掻き消えた。

演説

圧巻だな。

首都に国民全員を集めて演説することにしたが、  
大国だけあって民多いな……。

隣を見ると、  
めちゃくちゃレリアが震えていた。

「……お前何してんの？」

「い、いえ……こつこの慣れてなくて……。ちょっと怖くて」

はあ……、まあそうだろうな。

俺とセリアの場合は慣れてるからなんでもないけど。  
王を継いで何もやってこなかったからなコイツ。

俺はレリアを抱き寄せる。

「あ……」

腕の中でレリアが俺の胸に顔をうずめた。

「お前は王だ。民のために頑張る王だろ？ 逃げてばかりじゃ意味がないだろ？ 立ち向かえよレリア・ロアナ・コメット。民はなんのために集まってるんだ？ 報告はしたが、強制したわけじゃないだろ？ ここまでくるのに高い金はらって自ら来た民は誰のために来たんだ？ 王の言葉を聞きに来たんだろ？ 行って来いレリア！ 王として自分を見せて来い！」

腕の中のレリアは少し震えがおさまった気がするな。

「あ、あの……」

うるんだ目で俺を見上げる。

「緊張を、肩替りしてもらっていいですか？」

さすがにそんな魔法ないぞ？

「別にいいが、そんな魔法は」

ちゅっ

「んっ!?!」

いきなりキスをされた

「んっ……はむっ……」

舌もか……

「ちゅく……ふいとって（吸い取って）」

肩替りってそうゆうことかよ……。

「ちゅっ……ぢゅる……」

舌を吸いとってやる。

ぷはっ

レリアは微笑み、とてとと演説台にむかっていく。

途中でくるっとこちらを向き、

「魔法ですね」

唇に人差し指を当て、満面の笑顔で言った。

そのままとてとと走っていく

「ふむ」

雛が羽を広げた時の笑顔はいつみてもキレイだな。

「ご主人さまー、なにをにやにやしてるんですか？ そんなによかつたですか？ キス」

ハクがそんな事を言ってきたが、

「ばーか。お前はどっ思う？ あれみて」

俺は視線をレリアに向ける。

「そうですね、立派になりましたよね。雛は美しい羽根を広げました。嬉しいですけど、ちょっと寂しいですね」

「ん？」

「きつと、雛が独り立ちするときの親鳥のような気持ちです。きつとこんな気持ちなんでしょうね」

ハクは穏やかな笑みを浮かべそう言った。

「ああ、きつとそうだな」

俺とハクは微笑み、雛の羽ばたきを見つめる。



左右に白い龍と黒い龍を従え、上空には100の龍が飛翔する。まるで新しい王を祝福するかのよう。

レリアが前に出ると、さわがしかった首都は静寂を取り戻す。

龍達が左右に舞い降り、頭を垂れる。

契約上は一応主だからな。

レリアは一度息を吸い込み、

「私は、レリア・ロアナ・コメット！ 私は今まで、何もしてきませんでした。国の疲弊を知りながら。自分は何も出来ない王なのだと思います。何もしてきませんでした！ 自分のことを棚にあげ、男性なら民もついでに来てくれるのでは、と思つて男性のふりをしてきました。しかし、そんなのは意味がないことだとわかりました。男だろうと女だろうと、善き王ならば民はついてきてくれると知りました。そして私は今、女として、女王としてこの場に立っています！ 多くの人たちに助けられ！ 今この国は過去の栄光を取り戻そうとあがき始めました。私は、上を向いて善き王として、民と歩んでゆきたい！ どうか！ どうかこの立ちあがり始めたばかりの王と共に歩いていってくれないでしょうか！？ この国を輝かしい国に

戻す手伝いをしていただけなんでしょうか!』

そう言って、レリアは深く頭を下げた。

深く深く、王の威厳などなく。

ただただ、お願いする王。

今までのふがいなさを謝るように、

民を苦しませた自分を責めるように、

頭を下げ続ける。

王としてではなく、一人の人間としてお願いします。

共に歩みたいと。

静寂が包みこみ、

次の瞬間、

『我らはレリア・ロアナ・コメット女王と共に！  
レリア・ロアナ・  
コメット万歳！ コメット王国に栄光あれ!!』

割れんばかりの歓声。

空から七色の光が降り注ぐ。

隣でセリアとリリーがやっているようだ。

友達思いのいい雛たちだな。

俺もやってみるか、

レリアの背後から純白の鳥たちが飛び出し、

祝福するように空を舞う。

空に七色の虹がかかり、

幻想的な光景を紡ぎだす。

民はそれを見つめる。

自らの国の未来を照らしだす光景を、  
これからの国の未来を夢想して。

どうだハク今回の雛達は。

『相変わらず素晴らしい雛たちですよ。私たちにはもったいないくらいでした』

そうだな。

俺達は羽ばたくところまでしか見れなかったけど、  
きっとこいつらならどこまでも飛んでいけるだろうな。

ま、演説って言うより、日記みたいだったけどな。

『ですね、私たちなんてもう用済みですよ！』

はは、そうだな。

これ以上の介入は逆に弱い羽根にしちゃいそうだ

『はい、自分で飛んでこそその羽根ですよ。いつまでもご主人さまが  
支えてたら弱くなっちゃいます』

ああ、じゃ。明日かな？

『はい。でも、ご主人さまの覚悟が出来たらでいいですよ？』

いや、俺はなかなか羽ばたかないやつを羽ばたかせなくてはいけないから』

そう言っつてハクを見る。

『ですね。でも、私にしたらご主人さまが雛なんです。一京年以上も見守ってきた大切な雛（ぼそっ）』

途中から聞きとれなかつたぞ？

『いえ、いいんです。じゃ。戻りましょうか？』

だな、宿にでも行くか？

まだ、歓声の続く中、

俺は、掻き消える。

ここからはコイツらの場だから。

## 五二話 別れ

宿

「さて、ハク。今からやらなければいけないことがわかるか？」

俺は人型になったハクを見る、

「もちろんですとも！」

「そうだ、俺はいまから全員の下着を取りに行かないといけない！  
だが問題がある。俺の記憶をバックアップしてたからわかるだろ  
？」

「はい。毎回逆にご主人さまが襲われてました」

「そうだ！ 何とかしなくてはいけない！」

「ご主人さま！」

ハクが手を挙げた。

「発言を許可する！」

「闇の鎖で拘束してしまえばいいんです！」

「それだ！ ハクに変態の称号を与える」

「ありがたき幸せ！」

「よし、いくぞー！」

「はい！」

俺はその場から掻き消えた。

ブレ王国・セリアの私室

「さて、この扉をくぐったらどうなるかわからない。気をつけるよ

う」

「はっ!」

俺達は今、セリアの部屋の前にいる。

『ドクドク』

俺はドアを破壊し、すぐさま入り結界を張った。

「な、なにをしておるのじゃトキ!？」

すぐさま鎖をセリアの首に巻きつけた。



「ふははははは！ 勝ったぞ！ さてセリア。下着の準備は十分か？」

俺はにやにやと笑いながら近づいていく。

「何を言っておるのじゃ！？ く、くるでない！」

俺はセリアの服に手をかけ、

上から脱がしてゆく。

上の下着はゲットした。

ふにふに

うん。

やはり大きくはないな。

「と、とき？ …… わらわがほしいのか？」

「ほしい（下着が）！」

「そ…… そうなのか…」

セリアが自分から服を脱ぎだし、裸になった。

「わらわは…… はじめてなのじゃ…」

ちゅっ

「ん…… はっ…」

キスをされた。

ここまででは許容範囲だ！

だが俺には鎖がある。

「んっ……これ邪魔なのじゃ」

『パキイン』

鎖を壊された。

そうだった！！

七色使えるんだコイツ！！

セリアは俺の服に手をかけ、

外れないぞこの手！？

また七色の属性纏ってやがる！？

使いどころちげー！！！！

破れてるから！？

服破られてる！

5秒くらいで全裸にされたぞ……。

七色つえー！

俺の魔法かき消されてる！

セリアは俺の上にまたがり……。

「これを……わらわの中に」

まずいまずい！

触るなバカッ！

俺はとっさに下着に手を伸ばし、

『てっ、転移』

宿まで転移した。

宿

「ぐあつ!! 頭がいてー!!」

使えない魔法を使ったので反動が!!

「ご主人さま……どうしましょう? 拘束は無意味ですよ?」

俺はセリアの下着をしまいながら考える。

「ご主人さま! 服だけを転移させるのはどうしょうか?」

「それだ! 安全な方法だな! 行くぞハクツ!」  
「はい!」

俺は服を着て、消える。

コメント王国・王室

「あ、あれ？　ときくん？　どう…したんですか？」

目の前にはレリアがいる。

ちょうど誰もいなかったので好都合。

『パチンッ』

服だけを転移させて、中から下着をみつけ、空間に入れた。

任務完了

首にレリアが腕を回してきた。

身長差があるせいか、

首に抱きついているような感じた。

「ときくーん」

甘ったるい声で、

へにやっとした笑顔を向けてきた。

ちゅっ

「あぶっ……んっ……」

ここまでは、

「ちゅっ……んっ」

唇を離し。

「あ、そういえば……おわったら大事なものをもらって言ったよな？」

ふふ、っと笑う。

でもおれは下着もらったぞ？

「ひっ!!!?!」

レリアの手が俺のズボンの中にはいり、シークレットポイントをさすってきた。

「……お、おおきいですね……、はいるかな？」

それを取り出されそうになって……。

『転移!!!』

俺はその場から脱出した。

宿

「がああああああー!!！」

頭痛がやばい!!

「ご主人さま……」

しかもまた服とられた!!

「服移動してもそのあとどうしようもねー!!」

次が一番まずいぞ。

「次はリリーさんですね……ご主人さま、童貞損失おめでとございます」

「まだ失ってねーよ!!」

でも、下手するとまじでとらねる。

「気をつけて行くぞハク」

「はい!!」



寮

「リリー、何で俺はこんな状況なんだ」  
「もう我慢できません」

現在、俺は裸で押し倒されていた。  
両手両足を拘束されて。

その上に裸のリリーが乗っている。

ちゅぷっ

いきなり舌!?

「ふぁ……ちゅる……」

「あっ……ふぶ、こすれて……」

やーやー!

「安心してください、痛みがほしいので、そのまま入れちゃいます  
ね?」

そう言っつて、俺のシークレットを自分のシークレットにあてがい、  
ゆっくり……

『転移!』

宿

「あだまが――――!!」

いたたたた!

「ご主人さま半損失しちゃいましたね……」

「そんな言葉ない！」

俺は認めないぞ！？

「とりあえず、下着はゲット出来た」

いろいろと失いそうになったが。

自尊心とかいろいろ。

「それで、どうしましょう？ 何も言わないで出て行きます？ それともまた手紙ですか？」

うーん。

「やっぱり手紙かな？ あー、でも今度は手紙を一枚ずつ送ったらそのまま出よう。はっきり言って最後まで見てらんないわ。前の時もかなりキツかった」

別れの時のアイツら見たらやばかったしな。

記憶でしか分からないが。

「そうですね。わかりました」

さて書き始めめるかな？

俺は紙と、ペンを空間から取り出す。

「っしゃ、終わった！ これでいいかな？」

四通の手紙を書き上げた。

「ご主人さまが良ければ私はいいですよ？」

「うん。満足だな。んじゃ、ハクとレンいくか？」

二人に問いかける。

答えなんて分かってる問いかけ。

「はい」

「はい」

ふう……、この世界での俺の役目もこれで終わりか。

次もいい世界だといいな……。

二つの世界共、素晴らしい難に巡りあつたからな。

はは、人を嫌ってた俺が人と会うことを願うなんておかしいな。

でも、それだけいい出会いだったってことかもしれない……な。

不老で世界を渡り続ける神って結構つらいけど、  
出会いがあるなら悪くない。

別れは次の出会いの始まり……か。

うん！ 悪くない！

そう思えばやっていけそうだ。

俺は涙を流しながら笑う。

「ご主人さま、毎回そんなに泣くくらいなら……」  
「それ以上言うなハク」

心配そうに見ているが、

「でもなんだかスッキリした感じですね。前の時はほんとに痛々しかったのに」

そう言って、ハクも微笑んだ。

「二つ目の世界で知ったんだよ。別れはつらいが、新しい雛たちに  
出会えるだろ？」

「そうですね。私も楽しみですよ。次の雛！」

「ああ、それに全部ページが集まったら会いに行こう。いまの世界  
も前の世界にも！ 羽ばたいた雛に！ 多分、雛じゃなくなってる  
とおもっけどな！」

そう言って、俺は、四通の手紙を籠に送り、  
三人で狭間に戻る。

しばしの別れだ。また会おう。雛たちよ。

洞窟内

龍達が一か所に集まっていた。

「龍達へ、

お前達にはホントいろいろ迷惑かけてすまなかったな。

実際、お前達のおかげでかなり助かったよ。

まだまだ未熟な俺だからさ、今回はお前達のおかげで達成できたよなもんだよ。

お前達には結構ひどいことしちゃったけどな。



ま、運が悪かったと思ってくれ。

あとさ、三人のこと頼むな。

俺がいなくなつて落ち込むと思うんだよ。

だから手伝つてやつてくれ。あいつらはまだ羽ばたいただけだからさ。

誰かが手助けしてやらないとダメだと思つんだよ。

お前達が助けてやつてくれると助かる。

お前たちなら時幻龍経由で話も出来るしな。

じゃ、またいつか会おう。

あとさ、残りの手紙はあいつらに渡してやつてくれ。

だと  
』

他の龍達が皆頭を垂れていた。

『違つぞ神よ。我らはお主に感謝こそすれ恨んでなどおらん。ばらばらになつた我らを一つにまとめてくれたのもお主じゃからな。地上に出れるようになったのもお主のおかげだ。皆の者！！ 我らの神の旅立ちに祝福を！！』

『グガアアアア』

すべての龍が叫ぶ。

自分たちの神に栄光があらんことを、  
いつか、また会えることを祈るように。

『すぐに三人を連れてくるのじゃ！ 我らの新しき主を！』

主が旅立ち、龍達は新しき主に仕える。

主の友の三人に。

数十分後

「なんなのじゃ？ 急に呼び出したりして」  
「それに、何なんでしょうかこれは？」  
「？」

三人が洞窟内に連れてこられた。

龍達がすべて頭を垂れていた。

『ようこそ、我らの新しき主よ』

そう言い、龍の長は頭を垂れた。

「わらわ達はお主たちの主になっておらぬぞ？」

セリアは不思議そうに周りを見渡した。

『主の命により、今日より我らは三人を主と認めた。それが主の願いだ』

そう言って、三人に手紙を渡した。

「これは？」

『我らが主からだ』

三人は顔を合わせて、封をきった。

セリア、リリー、レリアへ

突然こんな手紙ですまないな。言葉で伝えるなんて今の俺には無理だからさ。

俺はしばらく、旅に出ようとおもっ。

と、言うより、俺は旅の途中だったんだ。

もう3300年くらい旅をしてるかな。あ、嘘じゃないかな？

たまたまお前達に会っただけなんだよなー実は。

最初会った時はホントだめだめでな、セリアはただの泣き虫だったしな。

リリーは自分に存在価値ないとか言ってる死のうとしてるし。レリアは男になりきって、自分捨ててるし。全くホントだめだめな子供だったよ。

そんなお前達がとてつもなく愛おしく、大切だったよ。

セリアは名実実力ともに王となったしな。

泣いてばつかの子供がよく王になれたよな！。

でも、お前の決意見させてもらったよ。

美しく成長し、羽ばたいていく姿は俺もみててうれしくなったよ。

大陸一の大国の王になったけどさ、これからは三人で支え合ってくれよ？

リリーは、やっと自分の存在価値に気づいたようだな。

何言っても最初は存在価値ないとか言ってる、裸見せてくるしな。

お前が自分の価値を見出そうと、頑張ってきた姿はキレイだったよ。

最初の頃より数千倍光輝いてるとおもう。

誰が認めなくても、俺だけはお前の価値を認めてやろう。

お前の周りには認めてるやつがたくさんいると思っけどな。

リリーは美しい翼をもってるよ。

レリアには、悪かったな。あんまり一緒にいてやれなくて。

おまえ全然自分見せないんだもん。

人に頼らないし、自分消すしさ。

これからはもう少し頼っていいんだぞ？

俺はお前に頼られて嬉しかったからな。

王としてやつと民と歩み出したお前ならわかるだろ？  
おまえだけじゃ無理ならセリアとリリーと協力して歩め。  
お前は一人じゃない。すばらしい仲間が周りにいるだろ？

いきなりいなくなつてごめんな。

これからはお前達だけで歩いて行け。

俺なんていなくても大丈夫だろ？

お前達の後ろに見える翼はそんなやわじゃないはずだからな。

神の気まぐれでたまたま俺が手助けしたが、

俺はこの、たまたまに感謝するよ。

お前達に会えてホントにうれしかった。

お前達も同じ気持ちならうれしいな。

俺がいつか帰ってきたとき、国がなかったりしたら怒るからな？  
全裸で一週間外につるすからな

1453

さあ、羽ばたけ雛たちよ。

その小さな翼で懸命に。

いつか大きな翼になりて。

天の全てを飛翔しろ。

我はそれを願い乞う。

願い続け世界を渡ろう。

渡り神として世界を廻ろう。

愛しい雛はどこまでも。

その命が尽きるまで飛び続ける。

傷つき、倒れたならば我を呼べ。

愛しい雛のためならば、いつでもかけつけよう。

さらば雛たちよ。

我はすべてを包み、  
成長させる神

渡り神、如月刻

愛しい雛たちよ、  
我は愛し続けよう

読み終わり、



静寂があたりを包み込む。

「と……き？」

「トキ様は、どこへ？」

「ぐすつ……ときくん」

三人は壊れたようにあたりを見渡す。  
刻を探すように。

『あやつは神だ。すべての生物を、星を見守る神。一人の人間を祝福し続けることはできないのだ。神は平等でなければならない。すでに矛盾の神ではあったがな。お主らは神を一か所にとどめさせるつもりなのか？』

龍はふつと、笑って言葉を紡いだ。

「トキが……神？」

「トキ様は神様なのですか？」

「？」

三人は涙を流しながら、顔を見合わせて、ふつと笑った。

「わらわはな、気づいておったのかもしれないのじゃ。ただ、それを言ったらトキがいなくなってしまうような気がしてな」

「私もです。私たちを助けるなんて人間には無理だったのです。トキ様が助けてくれたから私はここまでこれた」

「ぐすつ……ときくんなら、な、なつとくです……」

三人は微笑んだ。

『私も最初、あやつをみたときは眼を疑ったな。神は肩入れなどしないのだ。なのに三人を守護しているではないか？ なんの冗談かとおもった』

龍は一つ溜息をついた。

「確かにトキ様は神様かもしれませんが。私は神でも人間でもいいのです。私たちを助けてくれたのは、まぎれもなくトキ様の気持ちなので。それが私はうれしいのです」

本当にうれしそうに笑うリリー。

「そうじゃの、それにあやつは神なんて思えないような人間なのじゃ。いつも胸を揉んだりするやつなのじゃ」

少し顔を赤めて言いきるセリア。

「わ、わたしは……全部助けてもらっちゃって、おかえしも何もできなかつたのがつらいです。一方的に助けられただけで……」

すまなそうにうつむくレリア。

「まったく、トキよ。わらわは、トキに助けてもらったこの命。最善を尽くして善き王として使おう。それがお主の望みじゃからな」

「私も、無価値な私を認めてくれたトキ様のために、がんばります。見ていてくださいね。トキ様。私はトキ様にふさわしい女性になり

ます！」

「あまり一緒にいれなかつたけど、短い時間でも返せそうにない恩をいただきました。民と共に歩んでゆきたいと思えます。もう、男装などしません。自分に自信を持って生きていきます。それが私の唯一のときくんへの恩返しです。ですから」

「「「また会いましょう（うのじゃ）」「」」

三人は微笑み会う。

刻から託された龍の真ん中で。

『お主は、この世界にすばらしいものを残して行ってくれたの』

龍が呟き、頭を垂れる。

三人は歩みを進める。

それぞれの道を、交わらないかもしれない道を。

それでも、三人は同じ終着点を目指して。

いつか会えるだろう刻を想い。

翼を広げ、天に飛び立つ。

五二話 別れ（後書き）

微妙だ。

（ ・ ・ ）

## 五二話 世界選定

### 時空の狭間

「ハーク、俺はもう限界だ。ぶちぎれるぞ。お前の内臓ごとぶちぎる！」

いつまで此処にいれば……。

「待つてくださいますよ、ほんの130年じゃないですか？」

そうなのだ、すでにここに来て130年。

「このままじゃ、ここで俺は4000歳を迎えるぞ?」

「それにご主人さまが魔力使いすぎるから結構減ってたんですよ? ちょうどいいじゃないですか?」

たしかに使いまくったけどさ……。

「まだ回復してないのか?」

「いえ、狭間にきてから一か月くらいで全か…いたっ!? 何するんですか?」

「ふざけるなよ変態!」

「まだその称号継続なんですか!?!」

「ってかさ、冗談抜きで何してんのお前? なんてそんなかかるんだよ」

前もそうだが時間かかりすぎる。

「出来るだけ強いのも思って、創造のページを探していたんですよ。でも、みつからなくて」

ふむ。確かにあったら便利だ。

『む? お主たちは創造のページを探していたのか?』

いきなりおっさんが話しかけてきた。

「ああ、一応最上級だしな。時間と空間でもいいけど」



時間と空間もほしいな。

『我がもっておるぞ?』

は?

「何言ってるの?」

『だから我が持っておるぞ。創造のページ』

それが本当なら殺すぞこいつ。

殺せないけどさ!

「な、何で持ってるんですか?」

『前に深層世界を顕現させたあとに助けたじゃろ? その時に近くにあつたのだ』

? 全然意味が分からない。

あの世界にはないはずだが。

「ふむ。もしかして」

「ハク何か知ってるのか?」

「憶測でよければ」

「言え」

「たぶん、深層と表層の壁に挟まっていたんですよ。私を召喚したときはレプリカからの召喚でしたよね。はじめて顕現した時に一緒に出ちゃったのかも?」

何だそれ?

ドアにゴミが引っ掛かったみたいなの原理だぞそれ。

「とにかくおっさん、それ返してもらっていいか？」

『別によいぞ。と言うか、もともとお主のじゃ』

とりあえず、おっさんに入り込んでなくてよかった。

おっさんと闘ったら確実に死ぬ。

『我の目の前があるので取りに来てくれんか』

目の前？

「ちなみに、今俺達はどこにいる」

『つま先じゃ』

つまりつま先から目の前まで行けと？

どれだけ距離あるんだおっさん。

「あー、わかった。今から行くから。ハク新しい世界見つけとけな」  
「はい、ちよっと息抜きになりそうな所にしますね。ページがある  
の前提で」

それはうれしいな。

俺はおっさんの目を目指して歩き出した。



20年後

「おっさー！ーん！！！ どれだけ歩けばいいんだよ！ー！？」

ありえないだろこれ！？

なんで20年歩き続けてつかないんだよ！？

『ふむ。お主はいま、膝のあたりじゃ』

ひざですと？ H I Z A ? ? ?

「おっさん、限界だ。化身できないか？」

出来ればすぐなんだが……。

『できるぞ？』

「できるのかよ！？ あー、もういいから俺をハクの所に戻してくれ。それで化身してくれ」

『よいぞ』

俺はハクの所に一瞬で戻った。

「あ、ご主人さま久々ですね。手に入りましたか？」

ハクがにこにこしてる。

「俺は3500歳になったよ」

「おめでとございます。ローソク3500本つけましょう」

女性が一定年齢経つと年をとりたくなくなるのがわかる。

「おっさん、どこだ？」

「じじや」

ふむ。

「お前はなんだ？」

「だから我だ」

俺の目の前にはレンを小さくしたような6歳くらいの少女。

「おっさん、女だったのか？」

「どこからみても雌じゃったろ？」

どこから見ても一面に広がる鱗しか見えなかったぞ？

「おっさんじゃないじゃん！」

「だから我がおっさんじゃて！」

ちげーよ！

「女だからおっさんじゃないだろ！？ 言えよ！」

「ふむ、忘れておった」

性別忘れんな！

「名前は？」

「ふむ、随分昔にクーと呼ばれておったな」

ふむ。クーか。

最初は小さかったんだろな。

「じゃ、クーって呼ぶわ」

「了承した」

と、ページつと。

「それで、ページは？」

「そうじゃった」

ポケットをこそこそと探す。

「これじゃ」

うーん、何か今までで一番しょぼい。

光もしない。

白い球体。

「ご主人さま。これで間違いないですよ？」

これらしい。

「さっさといれるのじゃ」

クーが俺の胸にそれを押しつけてきた。

ずぶずぶと入っていく。

そして、完全に入り込んだ。

この感覚はいつまでたつても嫌だ。

次の瞬間ハクが輝いた、

「ご主人さま！ ついに私も進化を遂げる時が！ 本のが上がつたからですね！」

そう言うと光が納まり。

「どこが変わった？」

「どこも変わってないぞ？」

「見てください！ 服が変わりました！」

「……そんなの買えば済むだろ！！？」

「喜ぶのはいいが。世界によってはずっとお前は道具の姿だ」

「ひどいっ！」

だって、邪魔だし……食費も。

「仕方ないですね。レンちゃんにこの服を譲ります。ご主人さま。

創造でレンちゃんに同じものを」

ふむ。試してみたかったらな。

『Verschiedene Formen - Schaffung』

《万象創造》

俺の手元に、ハクと全く同じ服が一瞬で現れた。  
下着まで複製されてる。

とりあえずレンに着せてみる。

ふむ。

首もとまである、ちょっと大きめの白いセーター。  
セーターってかやわらかい毛がビッシリとついている。  
洗濯したら残念な結果になりそうだ。

スカートは黒にチェックが入っている。  
結構短い。

靴下は膝上まである黒いハイソックスだ。

「ハク、お前の進化は冬服に変わったただけか？」

どう見てもそれだけだ。

「違いますよ！？ 魔力もかなり増えてますよ？ 私じゃなくてご主人さまがですが。いまなら星作れます！ ただ属性がないから死の星ですが！ ついでに魔力切れて数千年寝ますが」



利点ねー！

死の星って……。

「全部集まったら作ってみるよ。で、次はどこに行くんだ？」

「それがですね。なんと、前のご主人さまが作った星です！」

？

「だって時間戻つただろ？」

「ここは時間なんて関係ありませんからね。」

「だったら地球いけるじゃん」

俺の信念が無駄に。

「いえ、行けるにはいけますが。かならず、破壊されますよ。黒の本の契約者に。だから新しく作ってほしいのです」

「てか、前のやつ作れるなら地球作れよ！」

「作りましたよ。作った瞬間破壊されましたが。黒の契約者倒すしかないんですよ」

ふむ。結局そいつ倒さないと作っても壊されるんだなずっと。

「あー、わかった。で、次の星は？」

「あ、ここです」

俺はそこを見、



「完全に再現しちゃってる？」

「しちゃってます」

「危ないような武器とかも？」

「はい」

俺死ぬんじゃないだろうか？

「あ、でも上条さんには会いたいなあ。まじかつこいいよあの人」  
「いますよ」

「てか、まて。ここ超能力だろ？」

俺そんなのないぞ？

「違いますよ？ あれは魔法です」

？

「深層が特化型なだけです、ご主人さまだって魔法で同じこと  
出来ますよね？」

「たしかに出来るが……、てか……夢壊れた、超能力って魔法なの  
かよ……」

「魔法の方が神秘だと思いますが？ ご主人さまは能力名『魔法』  
でどうでしょう？」

「死んでもいやだ」

「わがままですね」

わがままか？

「うーん、誤魔化せるのがいいな。創造……はやめよう。使いなれ

たのがいいし。『空間掌握』とか？」

「なんかすごい強そうなんですけど……？」

空間掌握とか何でもありだよなまじで、

「それでいいですよ。転移も出来るようになりましたしね。あと、詠唱しなくても出来ますよね？ 130年も練習してましたし」

「ある程度はな。創造は詠唱しないときついがそれ以外なら」

「十分ですよ」

じゃあ行くか？

「あ、世界構造くれ」

「わかりました」

頭に入ったのを確認し、ハクをヘッドホンに変えて首にかけ、

『Metastase』

俺達は消える。

「ハク、これのどこが『とある魔術の禁書目録』だ!？」

地球？

「世界はあつてるんですけどね……」

ヘッドホンからハクの声がした。

「年代は？」

「紀元前6500万年前ですね。白亜紀です」

「アホかつ！？ どこが『とある魔術の禁書目録』なんだよ！？ とある恐竜の絶滅目録にしるボケっ！」

そのとき、木の蔭から何かが……。

「ハクなにか生物がいるぞ？」

「そりやいますよ。ティラノサウルスですね。大きいですよね？」

たしかに大きいが……龍に比べたらしょぼい。

こちらをジロリと見た。

「ハク、あいつ攻撃してきそう」

「ですね」

適当に闇の鎌を投げてみた。

スツパリ首を切断した。

「よわっ!？」

「ご主人さまがいままで、強いのと闘いすぎてたんですよ……」

どうすっかな。

「ご主人さま、そろそろですよ？」

「ん？」

「上です」

空を仰ぎみると、何かがちらに……？

「なんだあれは？」

「隕石ですね。K-T境界に起きた大量絶滅の原因です。壊しちやうってください」

もう一度仰ぎ見る。

「これを壊したら、人類うまれなくなったりしない？ 恐竜が生き残ったり。氷河期こなかったり」

「……………」

「避けてください」

無理だろ！？

土砂が大気圏まで舞い上がる衝突だぞ！？

「ご主人さま避けて！」

無理だ！

『パチンツ』

俺はその場から転移した。

## 五二話 世界選定（後書き）

なぜとある魔術の禁書目録かって？

フリーダムだからさ！

この話は好き勝手やってるだけだから、すぐ脱出しちゃうような世界かも。

魔法ばかりで飽きてきたし、ちょっと遊びで。

世界観が嫌いな人は読み飛ばしちゃってOK

あとあとつなげられるようにするから

別PARTみたいに。



五三話 とある宇宙の下着マニア(前書き)

ここからとある魔術

作者はほとんどよんでないけどね！

五三話 とある宇宙の下着マニア

時空の狭間

「くそつ、あのティラノサウルス上条さんだったかもしれない」

俺は転移した後でうなだれていた。

「それはありませんよ。どうせあそこにいたら死にますし」

呆れた風にハクが言った。

「バカッ！ あのティラノが幻想殺し使うかもしれないだろ!？」

「普通に魔法じゃなくて物理の隕石ですが……」

そんなことはどうでもいいが、どうやって行こうかな。

「ご主人さま、私が指定した座標があるのでいきましょう」  
「先に言えよ！」

無駄な危機を潜り抜けたぞ！？

「これです」

ふむ。全然違うな

『Metastase』

俺達はその場から掻き消えた。

地球

「ほーほー、すごいな。未来って感じた。世界構造を取りに来ただけでも来た価値があるぞ」

この地面の機械なんてすごいな、勝手に掃除してくれる。

「とりあえずお金を手に入れないといけませんよ？」

それがまず第一だ。

『Verschiedene Formen - Schaffung』  
《万象創造 構造引用》

世界構造から引っこ抜き、指輪にした宝石を数個作り出した。

「さてハク、レン。売りに行くぞ」

「は  
い」

そういや俺レベル0だな。

カリキュラムとか受けてないし。

公園

「結構な額になったら」

3000万程になった。

かなり宝石とかでかくしたしな。

そのまま金も作れたけど、犯罪だ。

これも犯罪だけどさ……、本物だしね？

「ご主人さま、どうしましょう？ まだ本が現れていませんので時間早めますか？」

ハクがそんな事を言っていたが、

俺は聞いていない。

一点を見つめていた。

「まさか……あれは三次元上条さんではないか！？ てか今何巻だよ！？ 俺、二巻までしか……」

あのツンツンの髪はそうだ！ てか夏服見て気づいたが、夏なのにレンは冬服着ててかわいそうだ！

俺は感激にふるふると震え、自動販売機の前にいる上条さんに走っていく。

「上条さーん！！ 愛してます結婚して！！」

俺は飛び付いた。

「うわっ！　なんだお前！？」

慌てたようで少しおののいていた。

「何を言っているんだ上条さん！　後ろの穴を掘りあつた仲ではないか！」

「あ、そ、そーなのか？」

あ？　これは記憶を失った後つてことではないか？　ふふふ。

「だって、お前と俺幼馴染だろ？　如月刻だよ。忘れちまったのか？」

「い、いや。覚えてるぞ？　昔よく遊んだよな？」

ふはははははは！　捏造したぞ皆の者！

「ご主人さま……テンションがおかしくなってますよ」

ハクの声はヘッドホンから聞こえるので他の人には聞こえない。

だって上条さんだよ！？　ボクらのヒーロー上条さんだ！

「俺はずっと慕っていたぞ上条さん！　愛してる！」

「いや、違う！　絶対ちがうだろ！？　そんな関係誰とも結んでないはずだ！」

「ふう、とりあえず上条さんの家に行こうか？　今日この学園都市きたばかりで家なき子だから頼むわ」

「一日くらいならいいけど……」

俺は感激しすぎて目がうるんでいた、

「ちよつとー？ アンタたち邪魔よ。買わないならどくどく、そんなところでバカな漫才やってるんじゃないわよ」

いきなり後ろから声をかけられた。

肩まである茶色い髪、そこそこ整った顔立ち。レンとかにくらべたら全然悪いが。

制服っぽいから学生だともうが、

「あん？ あんただれ？ 俺は上条さんとの会話で忙しいから自販機持つてどっかいつてくれ、上条さん知り合い？」

俺は一応上条さんに聞いてみた。

こんな馴れ馴れしい奴が上条さんの友達のはずがないだろ！

「いや、知らない。誰だコイツ？」

知らないらしい。

なんか青筋が出そうなくらい怒ってる気がする。

「ッ！ わったつしにーはー、御坂美琴って名前があんのよ！ い加減覚えなさいよ！ あと、自販機なんて持っていけるわけないでしょ！？」

む？

「あー、上条さんが言ったたビリビリ！」

あ、何か地雷踏んだ？



何か髪からバチバチと火花が……？  
と、思った次の瞬間、ビリビリの額から青白い雷撃がこちらに向  
かって、

俺は上条さんを横にトンツと押し、反動で俺も横に避ける。

俺の前を通った雷撃はそのまま自販機にあたり、

自販機が消滅……。

「あーあ、何壊してんの？ その胸が小さいビリビリさん」

ピキッと何かが切れた感じがした。

「あんた……いい度胸ね？ 私をだれだか知っているかっしっら？」

ふむ。

「御坂水戸だっけ？ あとはびりびり？ てか、雷撃を頭からだす  
って角みたいでおもしろいな」

ケラケラわらってやる。

「『超電磁砲』の御坂美琴よっ……！」

そう言って、コインを、

電磁砲のようにはじき出しやがった。

青白い雷撃の槍が音速以上の速さで、

こわっ！？

俺はそれを空間ごとし消し去った。

「なっ!?!」

驚いているようだが、

「上条さーん、基地外のようなびりびりが襲ってくるたすけてー」

聞かずに、上条さんに抱きついた。

「お前! 余裕で防いでただろ!?! 俺の方が危ねーだろ!?!」

上条さんと話せるなんて幸せだ。

「あんた……なんなのよ?」

肩がぴくぴくしているが、こらえているようだ。

「何が?」

俺は興味もないが聞いてみた。

「だっかつらっ! レベル5の私の攻撃をあっさり消し去るってなんなのよ!」

「なんなのよも何も。お前が弱いから?」

「つつ! 名前と能力を言いなさいよ。特別に覚えてあげるわ!」

別に覚えてほしくないが…?

「レベル0、能力名『空間掌握』、よろしくなくていいから、覚えなくてもいいや」

あ、キレたな。  
めっちゃ火花ちりまくり。

「あんたがレベル0のわけないでしょうが！」

そう言いながら雷撃が何本も、

もちろん全て消し去ったが。

「ふむ？ ちょっと、お前が投げてるコイン一枚くれない？」

落ち着いたところで言ってみた。

「？ 別にいけど、そしたら名前とレベル言いなさいよ？」

そう言っつて、コインを一枚渡してきた。

王冠が描かれた一枚のコイン。

俺は御坂っつてやつからちょっと離れ、

「ちゃんとよけるよ？」

電気を付加させて飛ばせばいいのかな。

一応コインに帯電させるか。

原子分解しない程度に。

「？ 何言っつてんのよあんた」

俺は真似してみた。

御坂に向かってコインと雷撃をはじく。

「電磁砲を、って全然違うし!？」

似てるけど違う!

雷撃が先行してる上に本数が!

御坂を転移させた。

「あー……みすつた……。山が……」

公園にあった長い滑り台を固定する山が、消え去った。

「上条さん逃げよう! 捕まるの嫌だ!」

俺はレンと上条さんの手を引き、走り出す。

「ちょっと! あんた待ちなさいよ!」

後ろから御坂が追ってくるが無理だ!

捕まるまじで!

俺はひたすら走る。

？

はあ、疲れた。

「上条さん平気か？ まったく御坂のやつとんでもない攻撃考え付くよな？」

うんうん。危険だ。

「あ、ああ。てか、とんでもないのはお前だろ？」  
「刻だ」

「え？」

「刻って呼んでくれ上条さん」  
「あ、ああ。俺も当麻でいい」

幸せだ。

ヒーローから名前で呼んでいいなんて言われた。

俺が幸せを噛みしめっていると、

「ちょっと、あんた。私を無視するんじゃないわよ！」

……。

「まだいたのか？ 早くどっかいけ御坂とやら」

シツシツと手を振る。

「どれだけバカにすればすむのよ！？ 名前と能力教えてくれる約束でしょ！？」

「如月刻だよ。レベル0、空間掌握。以上」

てかさつき言ったし。

「そんなわけないでしょ！？ レベル0なのになんで……私より強いレベルガン……」

「レベルは測ってないだけ、それに空間掌握なんだから空間内ならなんでも出来るだろ？」

呆然としているようだが、

「空間って何よ！」

「空間は空間だろ？ 宇宙空間全てだろ？」

めちゃくちゃこじつけだ。

「そんな能」

「お姉さま？」

なんかまた声が……

誰だよ。

鬱陶しそうに後ろを振り向いてみる

「おお！ 妹っばい子だ！ 結構かわいい！」

うん。ツインテールだ。今度レンもツインテールにしよう。

「御坂！ 御坂！ この子誰！？ 妹として持って帰っていい？」

御坂に声をかける。

「……あんた私の時と随分対応がちがうわね。はあ……白井黒子よ、レベル4『空間移動』 好きに持ち帰っていいわよ？」

「おお！ 同じ空間じゃん！ 持ち帰るわ！ すごい胸ないけど、御坂以下だ」

二人がブチギレそうだ……。

「……もう怒る気にもならないわ。それに空間でもあんたと比べたら全然よ？ 修行でもさせてあげれば？」

溜息まじりに言う。修行ね……。

「お、お姉さま！ 私がこの男より弱いつていつのかしら!？」

「実際、私勝てないしあんたじゃ無理よ、黒子」

「白黒どんまい」

にこりと笑ってやる。

いきなりスカートをあげ、沈黙した。

「お前、露出狂？ 当麻見えた？」

「いや、見えそうだったけど見えなかった」

真っ赤になってふるふる震えている。

「あー、お前これ探してたの？」

俺は右手に乗せた鉄矢をみせた。

実際はスカートに手を突っ込んだ瞬間転移させたんだけど。

「ど、どうしてそれを？」

「いや、肌に刺さって危ないとおもって？」

疑問で返してみた。

いきなり白黒が掻き消え、俺の上空に現れた。

それを元の位置に転移させる。

「な、なに!？」

「いや、俺の上にといたらスカートの中見えるからかわいそうだなど。てか、Tバックかよおまえ……」



俺はレンの替えの下着を、白黒の穿いてたものと交換転移した。  
Tバックは上条さんの手に転移。

「当麻それあげる。妹としてその下着はないわー…」  
「ちよっ！ 待て待て！ 俺に渡したら」

御坂が当麻に雷撃を放っていた、  
さすが当麻、右手で完全に消し去った。

「あつ、あぶねーだろお前！」

「あんたが黒子の下着大事そうに持つてるからでしょ！？」

可哀そうに当麻……。

「うーん、にしても電気使いと空間ねー……」  
「な、なんででしょう」

黒子が聞いてくるが、

「一回粒子レベルで分解して、再構成してるんだよなそれって？  
なんでそんな上級なことができて空間開けないわけ？」  
「空間？」

全然わからなそうだな。

「そ、粒子になった瞬間に目的の場所に再構成されるんだろ？ つ  
まり空間つなげてるわけだろ？ それか、世界の空間構造変更。ん  
ー例えばな」

俺は空間をつなげる、空気が入らないように結界も張って。

「これわかるか？ 宇宙につなげてあるんだけど、あれ地球な？ 宇宙につなげればどんな攻撃だろうと勝手に吸い込んでくれるんだよ。簡易ブラックホールみたいな。宇宙じゃなくてもどこからにつなげればいいだろ？ 俺が御坂の攻撃防いだ時みたいに」

俺は遠くに見える青い星を指さす。

三人が呆然としてるが……、

「あつ、あんた私の攻撃それで防いでたの!？」

「つたりまえだろ？ あの質量どうすんだっての」

「わたくしには無理ですの。自分自身ですら遠くに飛ばせないのですわ」

超能力が魔法なら出来るはずなんだよな。

そついや、俺の場合本の補助があるんだよな。

「これが出来れば御坂超えられるからレベル5じゃん。御坂も御坂だな。電気使えるんだから電気分解して結合変えちまえばいいのに。こんなふうに」

俺は掌サイズの結晶を作り出す。

ああこれは創造でだけど。

「それなによ？」

「ダイヤモンド」

こともなげに言いきった。

三人が驚愕の顔をしているが。

「ダイヤモンドなんて炭素だけの結晶なんだから簡単だろ？ 水素爆弾とか作れるぞ御坂なら、学園都市だって一発だな。応用効かせろ。これやるよ」

俺は御坂に作ったダイヤモンドを投げた。  
あたふたとキヤッチしている。

「がんばれよ？ 二人とも。んじゃ、当麻いくぞ？」

俺は当麻に声をかけた。

「あ、ああ」

うーん……幻惑でルール変更しないと転移できないだろうな……。  
とりあえず、俺の魔力を幻想殺しから抜いてみるか……。  
いけるかなこれで……？

「当麻、ちょっと右手だして」

当麻が右手をあげる、  
そこにかかるく電撃をはなってみる。

「つッ!？」

「お、消されなかった？」

「あ、ああ。なんでだ？」

「まあ、気にするな」

「じゃ、二人ともまたな？ 今度会ったらいろいろ教えてやるから」

まだ呆然としている二人をおいて、転移する。

「すまん、当麻お前の家わからん」

「……じつてじつ」

俺とレンはそそくさと当麻の後ろをついて歩く。

## 当麻の家

む？ 学生寮の当麻の部屋の前に女の子が二人……と、猫？

「あ、とうまだ。……と、誰？ また女の子？ そんなとうまは女の子が好きなの？」

なんか俺の嫌いなタイプっぽい女の子が、とうまに話しかけてき

た。

「つつか、何やってんのおまえら？」

「スフィinksスについたノミとってるんだよ？」

スフィinksスって猫か？

「ふーん、ノミねー」

俺は猫に触れ、

幻惑でノミに命令する。

どこかにいけと

殺しはしないけどな。

ノミはびよんぴよんはねて、手摺から下に落ちる

ちなみにここは7階だ。

「とうま……その人何？」

なんかすごい怪しまれてる……？

「誰って 幼馴染？」

ごめん、それ嘘。

「おかしいよとうま。だってその人 すごい力もってる、科学と  
いうより、魔術」

ほう、こいつがインデックスか。

たしか、10万3000冊の魔道書を脳に記憶してるんだっけ？  
世界最強だよな。

すべてが禁書の魔道書だし。

こいつも世界くらいなら壊せそうだな。

「当麻当麻。このみすばらしい修道服きてる女の子だね?」

「あ、ああ。そいつはインデックスだ」

「説明しなくていいんだよとうま! この人私狙ってきたのかも?」

「インデックスちゃんを? それは自意識過剰だなちびっこ。君よりうちのレンの方が100倍魅力的だろ? 身長はたいして変わらないのに胸なんて特に」

俺はレンを抱きよせながら言う。

だって、インデックスAだし、レンDだし。

「だな、それは俺も納得だ」

「と、とうままで!?!」

わかるな当麻、さすが俺のヒーロー。

「ついでに今日は泊まることになってるから。安心してくれ、ちびっこには興味ないから」

俺はニヤリと笑いながら言うてる。

「う、うー。とうま! どっちが魅力的!?!」

当麻は二人を見比べ、

レンを指さし、

「こつちだ！」

ああ、当麻が頭噛みつかれてる！  
こえー……。

「で、そつちの巫女さんは？」

俺はそつちを見た

かなり長い黒髪だ。

キレイはキレイだけど……

うーん

「姫神秋沙だ」

当麻が教えてくれる。

「そう言えばとうま、あいさのケルトの十字に触れちゃダメなんだよ。」

結界か？

「ああ、わかった」

「当麻、疲れたから部屋へく、エセシスターはおいていこう。部屋に入ろう！」

「とうま！ この人いれるの！？ わたしのごはんがへっっちゃうんだよ！」

俺は空間から金をとりだした。



「当麻。そんな長くはないけど生活費」

俺は500万ほど渡す。

なくなったらまた宝石売ればいいし。

当麻はぎょっとしてるようだが。

「気にするな。エセシスター、これで文句ないだろ？ 前より多くなるくらいだ」

エセシスターは眼をまん丸にしたあと、俺を早く入って。みたいな感じで促す。

めっちゃげんきなやつだなコイツ……。

五四話 御坂が二人

当麻の部屋

んー……。

「……眠い」

今何時だ……？

「なんでトキは寝てるのかな？ 私だって眠いのに起きてるって  
いうのに」

インデックスが文句を言ってきたが……。

あたりを見まわしてみる。

「あれ？当麻はどこに？」

当麻が見当たらない？

「とうまなら学校にいったんだよ。補習で」

インデックスが教えてくれた。

「ふーん……じゃあ寝る……」

「だめなんだよ！ 私が起きてるのに寝るなんて！」

それはインデックスの都合だろ……？

あー。

「そういや、さ。ケルトの十字架って何？」

「『歩く協会』から結界だけを抽出したようなものなんだよ」

「歩く協会？」

「この修道服だよ？」

ふむ。見すばらしいな。

「そんなしょぼいもんか？」

「ちっ、違うんだよ！ これは……」

まあ、どうでもいいかな。

「で、なんであいさつてのはそんなの必要なんだ？」

「それは私が、『吸血殺し』だから。吸血鬼を引きよせて。殺す」

「どうやらあいさつてのも居たようだ。」

「ふーん。じゃあ、脱げ」

「はい？」

「あいさは意味が分からないようだ。」

「と、とき！？ なんなのかなそれは！？」

「インデックスかよ……。」

「いや、十中八九治せるから脱げて言ったんだよ」

「そ、そんなの無理なんだよ！？ これは魔術師だって無理なんだよ！」

「あーうつさいな。」

「じゃあ先にお前の服治してやるから出来たら文句言つなよ？」

「こくりとうなずくインデックス。」

「友達売るのかそれで……。」

「とりあえず形は創造でなんとかなるな。」

「能力は……、」

「幻惑でルール変えるか。」

「属性系はダメージ消すようにして……。」

物理も遮断すつかな。

俺はインデックスの服を能力付加して複製する。  
にしても修道服って微妙。  
帽子も変だし。

俺の手に、白い修道服が現れた。

「これでいいか？」

インデックスは眼を丸くして驚いている。

あつと、そうだった。

俺は軽く雷撃を修道服に放ってみる。

うん。傷一つ出来ない。

「一応魔力と物理遮断したから」

「と、ときは何の能力なのかな？」

「うーん。空間掌握ってことにしてあるけど。レベル0だし。学校行ってないから」

俺は頭をぼりぼりとかきながら、だるそうに答えた。

「魔術師ではないのかな？」

「んー、どつちかというと魔術師に近いかな？ てか、お前俺の魔力見えるだろ？」

こくこくとうなずく。

「本の中にそう言うのあるから見てみたけど。人間じゃないと思  
うんだよ。レンも」

そこまで見えるのか……。

「んー、だいたい当たってるわ。レンは龍だし、俺は神だし。あと  
コレ内緒だからな？ 言ったら怒るぞ？ 姫神もな？」

いいそうだなー、インデックスなんか。

「ってことで姫神。お前脱げ。治してやっから」

全然脱ぐ気配ないわー。

『パチン』

俺は姫神の服だけを手元に轉移した。

少し頬を赤くしてむっとしている。

一応手で隠してるな。

俺はケルトの十字架を手に取ってみる。

「あー、これ。内部結界じゃん。めんどくさいことするなー……」

全裸にすることはなかったな……。

俺は姫神の両手を、広げた状態で固定する。

絶対殴られるし……。

ふにふに

うーん、そこそこ？

「な、何をしてるのかな？」

「何ってもんでる。ぶっちゃけ服脱がす必要ないんだけどな？」

近づくと必要すらないし。

俺は胸をいじくってみる。

「あつ……ん……」

「あれ？ おまえ感情ないのかと思ったぞ？」

あとインデックス噛みつくこうとするな。

俺は当麻ほど頑丈じゃない。

俺は左の胸に手の平を押しつけ解析する。

「うーん……血がちよっと違うんだなこれ……」

いつそ再構成した方が早いなこれ……。

俺は再構成していく。

うっすらと姫神の体が光出す。

「ん？ 姫神お前能力いる？ なんか閉じてるけど能力あるぞ？  
開けば使えるようになるぞ」

吸血殺しが能力かとおもったけど、単なる呪だったんだなあれ。ちゃんとコイツにも能力がはじめから在った。

「くれるならほしい。私の胸をもてあそんだこと不問にしてあげてもいい」

まあ、閉じてる壁こじあけるだけだからな。

……よし、これでいいかな。

最後に俺はケルトの十字架を空間に収納する。  
代金代わり。

俺は最後に胸をさわって手を放す。

「……なんで、最後に胸を触ったの？」  
「気分？」

うん。気分だ。

「お前の能力は影だな。正確には闇なんだけど。影に特化してるって感じかな？」

「影？」

「うん、ちょっとやってみる。影を伸ばす感じで」

「くりとつなずき。」

影を……、



俺に向かって刺し貫こうと伸ばす。

はい、掌握っと。

影の制御を俺が掌握し、姫神を拘束する。

「なんで、俺に向けんだよ……」

「最後の胸は不問じゃなかった」

ふーん、俺は胸を揉みしだく。

そのあとに服を転移して着せてやる。

「まあ、いいだろ？ 吸血殺しも消してやったし。能力もやったんだから、胸くらいで怒るなよ……。それにそれ以上やると」

レンの方を見ると空間が割れ始めている。

「レンが暴走するだろ？」

インデックスと姫神もレンに気づいたようで、顔を青ざめ始める。この世界では規格外の魔力だからな。

宇宙でもか。

「トキはほんとに神様なのかな？」

「さあ？ 少なくとも地球くらいはレンも俺も消せるな」

「なんで、ここにきたのかな？」

まあ、もっともな質問ではあるな。

「うーん、ちょっと探しもの？」

そう言つて、俺はインデックスの服を転移させて、裸にしてから、俺が作った服を転移で着せる。

「と、とき！？ い、いま、何したのかな？」

「脱がして全裸にしてから着せた」

インデックスがいきなりとびついてきた。

「がうつがうつ！」

「いたっ！！ いたたたた！！！」

頭が！ 喰われる！！

『パチン』

俺はインデックスを外に飛ばした。

『ドンドンドン』

『あけるんだよトキ！ 肅清するんだよ！！』

ほつっておこう。

「とりあえずさ、姫神は能力の練習すればいいと思つぞ。強くしようと思えば俺がやつちゃえば早いんだけどさ」  
「何でしてくれないの？」

俺はニヤリと笑い、

「それじゃつまらないだろ？」

『パチンッ』

俺とレンはそれで転移した。

## マンション最上階

あのあと、俺は宝石を換金し、金持ちを見つけ、金のインゴットを買い取った。

それを複製して違う金持ちに売りまくった。

それで、マンションの最上階を購入した。

数十億したぞここ……。

借りるにも、住所もないから買うしか。

俺の目ならここから何が起こっても見えるし。

む？ 当麻が猫を連れて走ってるぞ？ なんかあったのか？

「レン、行くぞ」

「はい」

レンが俺に抱きついたところで、俺は空を駆けた。

鉄橋

下を見ると当麻が倒れていた。

そばには御坂がいる。  
なんだこれ？

「や、めて」

「やめて、よ」

いやいや、どう考えてもお前がやっただろ？

そしてそんな事を言いながらも、御坂は当麻に掌を定め、

「お前、殺すつもり？」

俺の言葉に、ハッと御坂はこちらを向く。

「別にいいけどさ。きっと後悔するぞお前？」

「あ、あんたには関係ないでしょ！？」

そう言っつて、御坂は当麻に雷撃を放つ、

高電圧の雷撃が紫電を放ちながら当麻に一直線に向かう。

それを俺は、消し去る。

「それ以上やるなら俺が相手になるが？」

「くっ……」

悔しそうではあるが、ホッとしているように見える。

俺は当麻の傍に降り立ち、再構成して傷を治す。

そして、そのまますぐに上空へ飛び、

御坂をレンと逆側に抱え、不可視状態にする。

「な、何をするのよ！」

「黙ってる、これから当麻が何するかみるんだよ。それに此処から落ちたらお前死ぬぞ？」

「ぐっ……」

「ほーらほーら、胸触られても抵抗出来ないだろ」

俺は御坂の胸をもみもみ。

髪がめっちゃバチバチいつてるけどすべて掌握する。

「あんたの能力って反則よね……」

「俺もそう思うぞ？」

「空間掌握って街ごと人殺したりできる？」

「町ってか、地球ごと出来る」

御坂は絶句して、

「……あんた既にレベル6じゃない……」

「レベル6？」

「『一方通行』っていう能力者をレベル6にする実験でね、私のクローン二万人を殺せばなれるんだって……さ」

ふむ、それで当麻は……。

まだわからないが、きっとヒーローなら止めるために立ち上がるだろう。

大方、『一方通行』って奴が強くて、御坂が当麻を止めようとしてこの有様ってところかな？

その時、当麻がムクリと起き上がった。

自分の体を見て、不思議そうにしていたが、どこかに走りだす。

「さて、追っぞ？」



## 列車の操車場

「ん？ 誰か闘ってる？」

当麻は、俺の知らない二人が闘ってる間に立った。

俺とレンと御坂は固定した空間に座った

「……離れるよ、テメエ」

当麻が怒りをこめて呟いた。

怒りで空間が歪みそうだな。

「今すぐ、御坂妹から、離れろっつってんだ。聞こえねえのか！」

当麻が叫ぶ。

「キヤー当麻くんまじかつこいい！ 惚れる！ 俺のアンダーホル  
ルささげてもいい！」

あ、

「はあ……あなた」

「みすった。全員にばれたぞ」

当麻とゴーグルをつけた御坂似と、白いのがこっちを向いた。

「あー、気にしないで続けてください。傍観者だとおもって」

うん。これでOK。

「……、はア？ ここに来た時点でお前も同罪なんだよ。はア、これってやっぱり口封じとか必要なのかア？」

なんか白いのが声かけてきたが、  
とりあえず幻惑でルール変えとこつと……  
なんか怖そう。

「いやいや、勝手にやってくれ。俺達は当麻の応援団だからね？  
当麻くんがんばってー！ ほら、御坂も応援しろ！」

「あなたと一緒にいると恥ずかしいわ……」

胸を揉みながら、

「い・い・か・ら・応援しろ！ お前の器は胸くらい小さいな！」  
「なっ！ いい加減胸触るのやめなさいよ……」

雷撃が、はいはい掌握。

「くっ……覚えてなさいよ？」

「お前の胸の感触などすぐ忘れるわ」  
「そつちじゃないわよ!！」

俺達がバカをやっていると。

『一方通行』の足元がはじけ、  
高速でこちらに飛んできた。

「ヒヤハハ！ いい加減にしるよ、三下ア！」

うわーお、早いなコイツ、  
てか素手かよ!！?

こいつのどこが強いんだ!！?

てか能力聞いてねー。

一応幻惑でルール変えたけどさ。

殴ってこようとした腕を俺は捕まえた。

「「なっ!?!」」

「御坂御坂、こいつの能力って何？ なんか普通に弱そうなんだけど？」  
肌青白いし」

御坂はため息をついて、

「ホント、あなたの能力『非常識』でいいんじゃないの？ 一応ソレ学園最強なのよ？」

「マジか!?! このままなんか放ってくるのか?！」

「はあ、ベクトルを変更するのよソイツ。核だろつと赤外線だろつと全部ね。触れることも出来ないわ」

俺は御坂の前にソイツを持ち上げてやる。

「普通に触れるんだが？」

「三下ア！ なんなんだよお前！ 面白エ！ ぶッ殺してやるよ！」

いやいや、

「お前の相手は当麻だから。ほーら、行って来い」

俺は当麻の傍に投げつける。

そんな強くなげてないが、地面に大きなクレーターが出来る、

あれがベクトル変更ってやつか？

「うーん、あの能力俺も真似してみようかな。ベクトル変更って面

白そう」

「あんたは……」

もう、御坂はあきらめ顔だった。

あ、御坂似もこっちに呼ぼつと。

俺は、大きなゴーグルをつけた御坂似を固定した空間の上に転移させる。

「んー、重症だなコイツ……」

「あなたは何なのでしょう、とミサカは問いかけます」

何この喋り方？

ああ！

俺は御坂のほうに指をさし、

「お前がクローンか？」

「んなわけないでしょ！？　なんで私の方がクローンなのよ！？」

「いや、だってこいつ自分で御坂って言ってるじゃん？」

「あんたは……もういいわよ……」

何か毎回呆れられてるな。

俺は虚空から8個の球体を取り出す。

「なによそれ？」

俺はそれを八か所に設置し、六面体の結界を張る。  
八点星陣だ。

「ん？　結界、もちろん当麻の能力も『一方通行』の能力でもやぶれないようにしてある」

また呆れられた！？

まあいいや、

「当麻！　被害でないようにしてやったから好きなようにやれ！  
御坂似の傷も治しといてやるよ！」

俺は当麻に声をかける。

「サンキュー刻！ 御坂妹を頼む」

OK。

てか白いの……、

「おい、白いの攻撃しても無駄だぞそれ？ 疲れるだけだ。お前の能力無効結界にしてあるから。当麻の能力もな」

さて、御坂似の怪我を、っと。

俺は創造と幻惑で再構成していく。

「ふむ。てかお前ずいぶん使いづらい体してるな？」

「よくわからないと、ミサカは質問します」

しゃべりがうぜー！

「そのためのゴーグルね？ 再構成しちまうわ」

脳以外を御坂の体に再構成してゆく。

ん？

「このラインなんだ？ お前みたいなのがいっぱいいるぞ？」

「ミサカネットワークにつながっている姉妹達です、とミサカは答えます」

ふーん。

「ちょっと、介入させてもらうわ」

『お前達、何で言いなりになって一方通行に干渉してんの？』

『あなたは誰ですか？ とミサカは問いかけます』

『私達はそのために生まれました、とミサカは答えます』

『なぜミサカネットワークに介入出来るのか、とミサカは質問します』

『あーうるせーな。いちいち最後に“ミサカ”ってつけんな！ てか、お前達がつながってんなら近くににいる御坂似に話すからそっち経由で質問しろ』

「御坂……お前の妹達やかましいな……」

「知らないわよ……」

頭痛くなるぞ？

「あと、御坂似、お前のゴーグルくれ。自分の体だからわかると思っけどさ。必要なくなっただろ？」

俺は御坂似からゴーグルを奪い取って収納する。

「あなたは何者ですか、と多数のミサカから質問を行います」

「何者って言っても……能力者？」

教えるつもりはないし。

「先ほどの能力を解析した限りでは、レベル6はすでに超えているもの、とミサカは思考します」

「いや、俺レベル0だし」

うん。0だ。

「って言うかあんたなら『一方通行』簡単に倒せるでしょ？ なんてしないのよ？」

ふむ。こいつなんで当麻が戦ってるかしらないな？

「あのなあ、当麻はこの計画止めようとして闘ってるんだぞ？ 最強が最弱のレベル0に負けたらこの計画なんてなくなるだろ？ だからわざわざ当麻が」

「それだったらあんたも0じゃない。しかも学校行ってないから一般人よ？」

そっぴやそっぴだ。

「忘れてたわ。まあ、当麻が死にそうになったら助けるわ。傷なら治せるし」

「ミサカの質問への解答を希望します、とミサカは発言します」

忘れてた。

「うーん。実際0だしね」

「ミサカが確認してもよろしいですか、とミサカは質問します」  
「勝手にしてくれ」

ちゅっ

ん!?



なにこの雑なキス！？  
舌からめるな！

「電気信号、体液を解析しました、とミサカは発言します」

「はあ、で何かわかった？」

「現レベル5と比較し、レベルに換算すると数兆は越えている、とミサカは答えます」

「兆っ……！？」

おい、御坂……そんなまなざしで見るな。

「ミサカネットワーク情報から、天使に一番近い状態、とミサカは答えます」

天使いるのかよ！？

そりゃ神だからな。

「ちょっとアンタ！ こいつの能力わからないの！？」

こら御坂！

妹にそれを聞くな！

「ミサカネットワークでつけた能力名で、『空間掌握』『時間制御』『万物創造』『自然制御』『万物掌握』『光闇制御』『次元掌握』となります、とミサカは解答します」

あちゃー、と俺はこめかみを押さえた、と俺は行動します。

てかさ、めんどいから万象にしとよ。

あと、心象掌握ばれなくてよかった……。

「あんだ、コレ終わったら私の部屋にきなさい。キッチリ全部の質問に答えてもらおうわ」

「ミサカの総意で、ミサカもついていきます、とミサカは発言します」

なんてこった……。

そう思いながら、俺は眼下の戦闘を見守る。

五五話 女子寮

一方通行

「ふーん。粉塵爆発ねー……」

眼下では、『一方通行』が、近くにあったコンテナに入っていた、小麦粉をあたりに散らし、着火させ、巨大な爆発を引き起こさせていた。

酸素が燃焼し、急激な温度の低下と爆風に当麻はつらそうだ。

俺は頼杖をつきながらそれを見てた。

「温度の低下かー、俺もやってみるかな。別に普通に温度下げればいいだけだし」

俺はこともなげに言ってみた、

「……あんたが学園に入ったら真つ先に一位よ……」

「んー、興味ないし」

「この方は、すでに3000歳を超えている、とミサカは発言します」

「お前記憶みんなよ」

「……それって、ホント？」

「まあな……体ちょっといじればすぐ不老だぞ？ お前もしてやろうか？」

「じょーだん。お断りよ」

ま、そうだな。

俺は眼下をもう一度見る。

「お、プラズマじゃん、風の凝縮かー、俺も今度使ってみるかな」

「って、ちよっとまってよ！ あんなの当たったら死ぬわよ!？」

そうだな……これだけはまずいかもしれん。殺しは勘弁してくれ。

「んー、仕方ない」

『パチン』

俺はプラズマをかき消した。

「なっ!？」

「すまーん『一方通行』、殺すのだけは勘弁してくれ」

俺はこともなげに言ってやった。

「チツ! シャーねエな。俺も殺しは寝ざめわりーからな。他は手だすなよ?」

「ああ」

俺は手を振りながら答えてやった。

お、勝負決めてくっかな?

『一方通行』の足元で爆発が起き、両手を突き出して一気に当麻の懐に向かう。

当麻は倒れたまま、か。

てかあれも当たったら死ぬんだよな……あいつの能力反則だわ。

その時、

当麻がゆっくりと立ち上がり、  
右手で『一方通行』の手を払いのけ、

更に、『一方通行の』顔面を殴り飛ばした。

『一方通行』は地面に叩きつけられ、ゴロゴロと転がり、沈黙した。

俺は、結界を張っていた球体を手元に戻す。

そして、四人を当麻の元に転移させる。

当麻はこちらを向き、

「あり……がとな。刻……、お前が止めてくれなきゃ死んでたぞ……」

瀕死の重傷でもお礼を言う。  
さすが俺らのヒーロー上条さんだ。

「いや、全部お前がやったことだよ、最強。あとは任せて寝ろ」

ふっ、と笑い合い。

当麻はそのまま気絶した。

俺は、再構築で傷を治してから、当麻を抱き上げ。

「さーて、帰るかな。御坂ばいばい」

ガシッ

服のすそをつかまれた……。

「ど・こ・へ・い・く・の？」

はぁ、とため息をつき。

「わかったよ。当麻を家に置いたら帰ってくるって」

俺はそのまま転移した。

当麻の部屋

当麻を布団に寝かせるとインデックスが喰ってかかってきた。  
頭を。

「一応、治療はしたから安全だ。あとで怒ってやれよ？ 勝手にこんなことしたんだからな。相談しろっつもの」

俺はもう一度転移で戻る。

常盤台中学・寮

「って、御坂！ 女子中じゃねーか！」



入りたくねー！

「安心しなさい、黒子と私しか部屋にいないから大丈夫よ」

そう言っつて、御坂は携帯電話を取り出し、

「あ、黒子？ ちょっと窓のかぎ開けてくれない？ うん、わかった」

電話を切り。

「いくわよ？」

「はあ」

俺はしびしび四人を浮かせる。

「っつて、他人も飛ばせるの？ それだと脇に抱えられてた意味ないじゃない！？」

「気にするな。小さい胸だったが、感触も悪かった」

殴られた。

「あのなあ、お前達と違って俺の体は治りにくいんだよ」

魔力の塊のようなものだ、再生にめっちゃくちや魔力を喰う。

「だったらおかしなこと言わないでよ！ いいから、こっちよ。っいてきなさい」

俺達三人は御坂の後を追う。

御坂が窓を開け、入ったのを確認し、俺も入り、御坂の頭頂部に顎がぶつかった。

「とまるなよ！ 後ろがつかえてんだから！」

俺は部屋を眺め

「おい、白黒とお前だけじゃないのか？ 俺の見間違いかもしれないから消そうか？」

「な、何バカなこと言ってるのよ！？ どう見てもいるわよ！」

後ろからは御坂似とレンが入ってくる。

俺はもう一度見まわし、呆然としている三人

「御坂御坂！ あの子何！？ かわいい！ 持って帰っていい？」

俺は黒くて背中まである髪、左の側等部に花のアクセサリをつけている女の子を指さす。

「あー佐天 涙子よ。さてるいこ。何？ あんたあーゆうのがい

いの？」

ジトっとした目を向けてくる。

「ああ、妹にはあれがいいな」

俺は佐天涙子の背後に転移し、お姫様だっこでそのまま窓に足をかけ、

「じゃ」

と言つて、シュバっと手をあげて振りかえつた、

振り返つた瞬間、電磁砲と鉄矢が飛んできた。

とっさに加速させ、電撃を掌握しながらコインと矢を掴みとる。

「あのなあ、危ないだろ？」

溜息をつきながら言つてやる。

「あんたを何のために連れてきたと思つてんのよ!？」

「じゃあ、質問に答えたら持ち帰っていい？」

「」「いいわよ」

白黒と御坂の声が八モつた。

腕の中の佐天涙子がひどいです。とか言ってるが、

「はあ、で？ 何が聞きたいんだよ。てか、部屋でかいのにテープルちっこいな」

俺は世界データから8人が座れる大きな机と椅子を創造する。

ついでに紅茶とお菓子も創造。

そして、紅茶を入れながら、

「早くしてくれね？ 早く持ち帰りたいし」

四人が呆然としているが、

「あ、そだアンタの名前は？ そのちっこい子」

短い黒髪の子に問いかける。

「あ、柵川中学1年の初春 飾利です、ジャツジメントで白井さんと同じ177支部に」

「ジャツジメント？」

なんだそれ？

「あんたジャツジメントしらないの？ 学園を守る風紀委員よ」

「ほー、じゃあ君も？ てか君名前複雑すぎ。涙子でいいや」

俺は妹候補に聞いてみた。

「いつ、いえ。私は……、あなたはすごいですね。二人の攻撃を素手で止めて」

「如月刻な？ 刻って呼べ。素手ってこれが、返すわ」

俺は二人の手元にコインと、矢を返した。

「お前達、前会ったときから全然成長してないな……弱すぎる……」  
すっごくいやしそうにしてて面白い！

「と言うか、なんで佐天さんだけ名前で呼ぶのよ!？」  
「いや、かわいいから?」

うん、真っ赤になってる。かわいいな。

「とりあえず全員椅子についでくれ、紅茶は勝手に呑んでいいし、お菓子も」

全員が椅子につく。

「あの、この机とかはどこから?」  
「うん。涙子の質問には素直に答えよう。これは今俺が作り出した。以上」

四人は呆然としている。

「あんたの能力ってなんなのよ!？」

御坂が質問してくるが、俺は口笛を吹いて聞こえないふり。

「くっ！ 佐天さん！」

「はい！ えっと、能力はなんなんでしょう」

涙子経由の質問、

「それはね、御坂妹さつきいった解析結果もつかい言ってくれ」

「あ、アンタねー！」

おまえ暴力的なんだもん。

「あ、紅茶おいしいですわ」

「そりゃね？ マカイバリ茶園のオーガニック ダージリンティー  
だし。100グラム2万くらいするぞ」

でも、話がずれるぞ白黒？

「ミサカネットワークの適合では『空間掌握』『時間制御』『万物  
創造』『自然制御』『万物掌握』『光闇制御』『次元掌握』です、  
とミサカは答えます」

覚えられねー。

「じゃあ、涙子に答えるでしょう、他おまけで」

御坂、そんなプルプルして。

「御坂トイレ我慢してるのか？」

「あんたが私無視するからでしょうが！」

とりあえず無視して、

「まず『空間掌握』、転移させたり空間に穴あけたり。ブラックホールとかホワイトホールとかね。あとは空間ごと対象を消し去ったり、結界はったり」

「そんな能力にどうやって勝ったらいいのよ！」

御坂、話のコシを折るな。

「頑張れば？ レベル5さん」

青筋が浮いてるぞ？

「次に、『時間制御』。これはそのままだ。時間を早めたり遅くしたり。まだ、使えないけど未来にいたり過去にいたり」

「……」

「『万物創造』はさっきみたいに机つくったり、ありとあらゆるものの創造。大きなものと星つくったり。人間とかもつくれる」

この星もそうだが言ったら絶望しそうだ。

「『自然制御』これは火 水 風 土 熱 雷 氷 金など世界の構成物質を自由に使える。御坂のレールガンは電気だから、電気を掌握すれば、ただこいんを投げてるだけ」

「あなたは……」

「『万物掌握』これはすべてのものに命を与えたり自由に動かしたり。あと人体の傷を治したりするのはこれ。あと、不老にしたり、能力を付加したり、能力あげたりできる」

「それを使えば私も能力者になれたりしますか!？」

目がきらきらしてるな涙子。

「ああ、レベル5だろうと6だろうとなれるぞ、多重能力者とかにもなれる」

なんか決意したような顔してるぞ……？

「『光闇制御』、これは光と闇をあやつる程度だな。影操ったりも出来るかな。上空からとか攻撃するから結構便利っちゃ便利？」

うん。

「『次元掌握』、これはそのまま、世界を渡ったりする時に使う。異世界とか行くなら必要。行きたい奴いたら連れて行ってもいいぞ？」

狭間で死ぬがな。

「異世界ってホントにあったんですねー」

今度は初春が目をきらきらと。

「で、妹達は納得したのか？」

そこで、御坂妹に視線を向ける。

「納得しました、とミサカは解答します」



「で、他は納得したか？ 最初『空間掌握』だけって言うてすまなかつたな」

見まわしてみるが、反応がまちまち。

「ったく、あんたは。そりゃ『一方通行』にも勝てるわよね……」

三人が目を丸くして驚いている。

「アレに勝ったのですか？」

白黒が驚いて聞いてくる。

「赤子の手をひねるようなもんだったわよ？ 見てたけど」

「いや、アレはベクトルめんどくさいから、世界のルールに干渉して俺に効かないようにしただけだ」

こともなげに言った。

「なんか、あんたに頑張れって言われてもやる気出ないわ……」

そりゃそうかもしれんが、

「刻さん！」

そんな胸の前で拳を握りながら目をきらきらさせるな涙子……。

「あーとりあえずもう遅いから明日な。休みだから泊まってんだろ？ はい、全員起立」

全員が素直に立ってくれた。

『パチン』

机とイスを消し去り、ベットを3つ複製する。

「何で一つだけベットが大きいのよ？」

ベットが5つある。

「ん？ 涙子と俺とレンが寝るから」

「あんた帰るんじゃないの!？」

いやいや。

「もう時間遅いじゃん？」

「一瞬で帰れるじゃない!」

たしかにそうだが。

「いや、じゃあ涙子持ち帰るぞ？」

「はい、どうぞ!」

うわー、絶対涙子俺に能力上げてもらおうとしてるぞこれ………？  
どれだけ能力ほしいんだよ、体すら捧げそうな勢いだぞ？

「つてことで泊まるわ」

「はあ、一応ここ女子寮なのよ？ 変なことしないでしょね?」

「お前に？ するわけないじゃんペッター子」

「誰が、ぺったん子よ!」

いきなりレールガンを放ってきた、  
消すけど。

「お前な……俺が反撃したらお前一瞬で消えるんだぞ？ いちいち、  
攻撃してくんなよ」

「く〜!〜!」

あはは、悔しそうだ。

『パチン』

俺はそれぞれをベットに収めた。

「あ、そだ。闇制御見せてやるよ」

あたりが一瞬にして漆黒に塗りつぶされる。  
自分の体すら見えない黒。

「あ、あんたなにやってんのよ!？」

『ゴチツ』

誰か頭ぶつけたな？

「何なのですかこれは!？」

「こ、怖いです〜」

「刻さん怖い」

おお、涙子がぎゅっと抱きついてきた。  
でも小さい。  
体も再構成したくなる……。

『パチン』

闇を解除する。

「お前らづるさいな？ 早く寝ろ」

「あ、アンタのせいでしょうが!？」

俺は無視し、そのまま眠りについた。

五六話 涙子再構築（前書き）

きいてる曲によってキャラのテンションが変わる

ちなみに今は ドラマチック Base Ball Bear

さーて、どんなテンションになるか。

五六話 涙子再構築

常盤台中学・寮

憂鬱だ。

女子中の現実を見た。

先ほど俺は目を覚ました。

右に全裸のレン、左に下着姿の涙子で抱き枕にされている俺。

他のベットでは。

初春がベットから落ちて、床でよだれを垂らしながら寝ている。

白黒は全裸で、喜々として御坂を脱がしている。

御坂は寝ているが、脱がされて下着姿。

妹はこちらをじっと観察している。

きつと妹達一万ちよいも見ているんだろつな、  
ミサカネットワークで。

クローンを二万作って、一万近く『一方通行』に殺されたっばい  
し。

にしても……、

涙子ちっさいな、AAだなこれ。  
隣にレンがいるから余計に。

白黒もAAだし、御坂はAだし。

中学だとこれが普通か？

10歳くらいのクーでもBだぞ？

とりあえず……。

俺は二人を起こさないように立ち上がり、  
移動する。

「刻さん、起きたのですわね？」

白黒がこちらを見、聞いてきた。

「立ち上がってるんだから起きてるだろ？」

肩をすくめながら言っただる。

さて、

『パチンッ』

全員を二つのベットに移動させ、ベットを消し去る。

昨日の大きな机を削り出し、最高級の料理を空間から取り出す。

「はい、お前ら起きろ！ てか、服着ろ。見てて可哀そうになってくる」

手を叩きながら俺は叫ぶ。

「と、刻さん、一応、女子寮なので声から声を小さくしてくれませんかしら？」

「安心しろ。昨日、結界張っておいたから声なんて漏れないし」

白黒はほっとしたようだ、

全員がのそのそと起き上がり、テーブルのほうにやってくる。

「んー……おはよ。アンタは朝早いわね」

「おはよびついでにいます」

「こいつらいつもこうだから気付かないのか？」

全員が机に着いたのを確認し、  
レンにだけ転移で服を着せる。



「じゃ、冷めないうちに食べてくれ」

どうぞ、と促してやる。

「アンタこれどうしたのよ？」

「空間に収納してた料理とりだしたただけだ」

初春涎ぬぐえ。

「すごいですわね……、キャビアやフカヒレ、フォアグラ、トリュフまで、世界四大珍味集結ですわ……」

全員が食べ始め、とろんとした目をしている。

「あとさ、お前達いつ服着るの？ 見てて可哀そうになってくるから早く来てほしいんだが？」

カラン。と数人がナイフやフォークを落とす。

「な、ななな、何でアンタはそれを早く言わないのよ！？」

そんな自分の体を抱きしめて、怒鳴られてもな……。

「どうせいつもそうなんだろう？ 普通かと思った。安心しろ、魅力がまったくないから、何とも思わん。ちなみに、起こす時に言った」

雷撃はやめる……。

掌握つと。

『パチンッ』

昨日、こいつらが着てた服を創り、転移で着させてやる。

「にしてもさ……、お前らは幼児体型のお泊まり会か？ 全員がA以下ってすごいな」

刹那、

雷撃がこちらに向かって来る。  
消し去る、

手元を見ると、俺の左腕から鉄矢が生えていた。  
生えているって言うよりくっついていてる？

カラン、と音を立てて鉄矢だったものの両端が床に落ちる。  
俺の腕の中に入っていた部分は消え去る。

「な、なんでですか？ 私はたしかにあなたの腕の中に直接」

あぶねーなこいつ！？

「質量の差だよ。鉄の分子結合の密度より、俺の力の密度が高いから消えるんだ。例えば金塊の中に鉄を転移させたら、鉄が消滅する。金塊の中にダイヤモンドを転移させたら金が消える。そんな感じだ」

白黒は絶句しているようだが。

俺は手元に、金の塊とダイヤモンドの矢を創り、

「ほらっ、まず鉄の矢を転移させてみる、次にダイヤモンドの矢」

それを白黒の前に転移させてやる。

黒子はそれを手に持ち二通りを試している。  
結果ダイヤモンド>金>鉄になったようで、納得した。

俺はダイヤモンドの矢を10本程創り出し、放り投げてやった。

「ま、もしもの時のためにそれやるよ」

驚愕し、

「な、これだけで一体いくらくらいするかわからないのですわ!」

「さあ、数億とか数十億くらいじゃないか?」

「もったいなくて使えないですわ!?!」

それをベットの横にあるキレイな箱に入れていたようだ。

「使えよ……。」

「使えつて、俺がいる間はまた作ってやつから……。」

しぶしぶ、と言った感じで太もものベルトに挟み込んでいた。

「密度が高いつてAIM拡散力場みたいなものかしら?」

御坂が質問してきたがわからん……。

「俺は学生じゃないんだぞ? なんだそれ」

「そうだったわね。と、」

「AIM拡散力場　能力者が無自覚に発散させてる微弱な力のフィールドのことよ。って言っても、精密機械を使わないとわからないけど。私のは微弱な電波ね。これでだいたいの能力がわかるわ。そう言えばアンタのは？」

ふむ。俺とレンが普段押さえてるあれか……魔力減っちゃうし。

とりあえず部屋のバックアップをとって……、

「あー、俺とレンは似てるから、レンちょっと力抑えるのやめてい  
いぞっ？」

「はい、お兄ちゃん」

瞬間、

世界がモノクロになる。

ここにいるメンバーは結界で世界に入れるようにした。

空間がひび割れ、ガラスの割れるような音があたりに響き渡る、  
家具などがすべて粉々に砕け散る。

一応部屋には結界を張ってあるから壁などは無傷

「まあ、こんなとこだけどうだ？」

振り返ると、

俺とレン以外の全員が倒れ伏して口をパクパクとしていた。

呼吸困難か……。

「レン！　抑えろ！」

元に戻し、家具をバックアップから創造しなおす。

「あー、すまん？ ま、これが俺達が無自覚に出すA I M拡散力場ってやつかな？ だから普段は故意に抑え込んでる」

一応全員がこちらを向いているようだが……。

「ぜえぜえ……普通に攻撃並よそれ……」

まあ、そうだけど……。

「はあはあ……ミサカは……ミサカは、今の現象をすみやかに解析する、とミサカは報告します」

こいつでも疲れるのか……。

「あー、そつだ妹、ちょっとネットワークに介入させる」

「おい、妹達、俺の情報はここに入れとけ、お前達以外見れないようにするから。科学者とかに見られるとめんどい」

俺はそう言って、ルールを変更し、セキュリティフォルダを作り出した。

「別にお前達が好きに使っていいから。バレたくないこととかはそこに入れておけ」

「検証実験体20001号、ミサカネットワーク管理者が代表して了承したとミサカはミサカは言ってみたり」

「誰お前？」

「シスターズの上位個体とミサカはミサカは思ってみたり」

「とりあえず任せた」

俺はそこで介入をやめた。

「妹、お前の妹にバグったやつ出てきたぞ？ 幼い声だった」

「実験体20001号はシスターズの管理者です、とミサカは答えます」

ふむ。どっちにしる全部バクってるんじゃないか？

「まあ、それはいいとして、じゃあAIM拡散力場つてのが多いほど能力が強いつてわけね？」

御坂に聞いてみる。

「そうね、普通は見えないけど……アンタのは異常」

ふむ、

それだと御坂>白黒>初春>涙子つて感じが。実際溢れた魔力みるだけだから簡単だ。

涙子が皆無だな……。

「で、涙子はなんでAIM拡散力場が出てないんだ？ 初春も少ないけど、涙子は全く出てないぞ？」

それを質問すると、

あれ？ 部屋に誰かサイレントかけたか？

「アンタがAIM拡散力場見えるもおかしいけど、佐天さんは気にしてるから言わない方がいいわよ？」

ため息交じりに御坂が言ってきた。

「いいんです、えっと。あたしは無能力者なんで、出ないんです。才能もないって言われてて、努力しても無理らしいので」

少し涙ぐんで涙子は言った。

おお！　これが涙子の名前の由来か！？

でも、努力しても報われないうて言うのはかわいそうだ……  
努力したらそれだけ見返りがあるようにしたいな、神としては。

「で、お前はなんで力がほしいんだ？　昨日ほしそうだったが」

ま、内容によってはやらん。

「はい、憧れ……でしょうか？　初春や白井さんがジャッジメントとして活動して人助けしているのが羨ましいですね……、あたしは何もできないので」

そう言って、俯くが。

一応、脳を覗いてみたが。

ウソではなかった。

うーん。

魔法使いレベルには出来ないが、レベル5程度になれる“体”にはしてやるかな。

それでなれるかは努力次第。

最初はレベル1程度つと。

「んーわかった。お前はそのためならなんでもするか？」

「はいっ！」

おお、迷いすらない。

まじで体すら捧げそう。いらないけど。

「じゃ、脱げ！」

「「「「なっ!?!」「」「」

声が揃った。

「あ、アンタなに考えてるのよ!? 中学一年よ!?!」

「いやいや、お前こそ何考えてるんだよ? 別に何もしないし、俺童貞だしテクないよ」

うん、ここまで童貞だと逆に怖くて出来なくなってくる。

「わ、わたしも! 処女です！」

真っ赤になりながらも大声で涙子が叫んだ。

これ前にレリアが同じこと言ったよな。

「いや、中一で経験あったら幻想殺しされるわ。それと別に言わな

くていいから」

「はっ、はい」

「じゃ、脱げ」

せつせと抜きだす涙子、

どんだけ能力ほしいんだ……。



「脱ぎました！」

「じゃ、そこに立って」

全く隠さないで直立する涙子、  
顔は真っ赤だが……。

俺はその左胸あたり手をおく。

「ひゃっ……」

感度はいいが……小さい。

「……アンタ犯罪を？」

「黙れ御坂！ お前なんて終わったら涙子にふるぼっこだ！」

俺はそう言ってから、解析する。

「んー、深層がほとんど皆無だな……、しかも壁に穴がない。やっ  
ぱ埋め込むしかないか……。このままだと属性付加しても数発で死  
んじまう……」

俺がそうつぶやくと、涙子が涙目になってきた。

「あー、泣くな。方法はあるから。再構築するしかないか……ちょ  
っとお前の内部いじるけどいいか？」

俺は白紙のページの球体を手の上に創り出し、聞いてみた。

「は、はい！ 大丈夫です！」

いい返事だな。

俺はそのまま球体を胸のあたりに押し込む。

「え、え！？ なにこれ！？」

ずぶずぶと自分の中に入っていく球体に驚いているようだ。

「あ、アンタ佐天さんに何するつもりなのよ！」

いきなり雷撃放ってきやがった！  
それを消し去り、

「お前うるさいから、ちょっと黙れ」

御坂の四肢を固定した。

御坂が暴れているが、もう一度涙子の左胸に手をおき、

とりあえず特化させるかな、このままだと四属性しかないし。  
魔力もしょぼいから、何かに特化させないと……。

「涙子、お前どんな能力がほしい？」

「刻さんの、『光闇制御』がいいです。いままで、希望なんてなかったのだから」

希望って光のことか。

魔力的にも制御だときついな。

自然から借りるか、掌握なら楽だし。

あと、光だけに特化させれば……。

「んー、お前の場合光だけに特化させて『光彩掌握』とかのほうがいいかも。横文字だと、プリズムアウト？」

プリズム……。とか呟いているが、

「そ、それでいいです！」

元気だな。

じゃ、それでいいか……。寿命どうしよう。

「そだ、涙子お前、寿命どうする？」

「？普通に100年くらいですかね？」

ふむふむ。それだとこの後の修行で年齢がヤバくなるから、500年くらいでっ……。脳も耐えられるようにして、成長しないのはかわいそうだから胸も……。よし。

再構築開始

「あっ……。んっ……」

何か俺の腕思いつきり両手で握りしめてくる。

結構痛いぞ爪が刺さる。

てか真っ赤になってぎゅっと目つむってるがなんなんだ？  
どんなかんじなんだろう再構築って？

「ん……。はあ……」

いきなり恍惚な表情になった!?

「涙子、再構築中ってどんな感じなんだ？」

「ひゃ？　ときふぁん……」

呂律が回ってない。

全く才能なかったから世界作り直したようなもんだしな……。初めてだそんなこと。

「えーつとれすね……からだにでんきがはしまったような？　きもちいですよ？」

なんとなくわかった。

アレ状態だ。

「佐天さん……あ、あんたそれなによ？」

御坂は一点を凝視し、わなわなとふるえている。

「へ？」

涙子は自分の体を見下ろし、

それを揉みはじめた。

「あれ？　あたしこんなありました？」

と、首を傾げるが。

御坂、白黒、初春がぶんぶんと首を振る。

とりあえず俺も出来を確かめるために揉んでみる。

うん、肌触りも柔らかかさも問題なしだ。

「んっ……ひゃん……」

「よし、これでいいかな？」

「あ、アンタなにやったのよ!？」

「何って、再構築」

適当に答えてみる。

「だからって胸大きくしなくてもいいでしょ!？」

「安心しろ。遺伝子レベルで大きくしたから子供が生まれても遺伝する。形も質もバッチリだ! あと、他にも理由あったし」

「理由ですか？」

涙子がかわいいなー。

「きゃっ」

全裸の涙子を抱きしめてみた。

「んー、そつだな。寿命間違つてさ……」

「じゅ、寿命……」

すごい震えている、そりゃ寿命間違つたとか冗談にもならん。

「うん。間違えて500年にしちゃった。だから、成長めちやくち

や遅いんだよ。ずっとAAだと、かわいそうだからくらいにしていた」

「「「「」ひゃっ……」「」」

絶句しているようだけど仕方ない、いまから修行したら一人だけ20台後半になっちまうし……。

ま、後で戻すけど。

「500年ですか……」

「うーん、でもさ。能力はつけたよ？」

涙子は沈んでいた顔をパアアッと輝かせた。

そこで俺は涙子の耳に口を寄せ、

力が足りないことと、修行の説明をした。

修行をする件には、こくこくと大きくうなずいている。

なぜ、誰にも聞こえないように言ったかというと、

ただ、終わった後、御坂達を驚かせただけだ。

「とりあえず、イメージしてみてください。まだ安定してないから掌の上に小さな光を。涙子風というなら希望の光？」

「くくりとつなずき。」

深呼吸をして、目を閉じた。

少しして、掌の上に拳大の光が現れる。

涙子は眼をゆっくりと開け、

目の前の光を見てパアアアと顔を輝かせた。

今はまだ小さい希望の光を見つめる。

「あんだ、あんな偉そうなこと言ってそれだけ？」

御坂がブスつとして、言ってきた、

俺はニヤリと笑い。

8つの球体を取り出し、結界を張る。

倍率は一分を10年へ。

心が壊れないように中は外のルールに変更。

念のために俺も入るかな……、

涙子を抱きよせ。

「あつ……」

真っ赤になつた涙子を連れて。

御坂達に背を向ける、

「じゃ、俺達はこれからお楽しみだから」

「……なっ!？」

後ろから、雷撃とダイヤモンドの矢が飛んできたが、そのまま結界

内に転移する。

ここでダイヤモンド使うのかよ!?

成長させるのって、俺にとってはお楽しみなんだけどなあ……。

さーて、修行の始まりだ。



## 五六話 涙子再構築（後書き）

なぜ、マイナー方面のキャラに行ったかと言っと、  
小説通りだったら小説みたほうがいいからです。

小説内容崩壊させまくっちゃうので脇役を、

ついでにいうと小説少ししか買っていないので、・・・（

五七話 『光彩掌握』 VS 『電撃使い』 (前書き)

ぷっ  
ぷー

五七話 『光彩掌握』 VS 『電撃使い』

空間内・10年後

「そろそろいいぞー、10年くらいたつたし」  
「はいっ！ マスター」

元気よく返事をする涙子。

別にマスターって呼ばせているわけではない。  
一年くらいで師匠と呼ぶようになり、  
五年くらいでマスターと呼ぶようになった。  
もちろん契約はしていない。

ちなみに涙子は全裸。

これも俺がしたわけではなく、

最初は毎回創造していたのだが、毎日数十回創造し直すことになるので、

涙子から服はいらないと言われたのだ。

と言っても、そのころには、数分に一回服がボロボロになるので、裸を見られ慣れてはいたのらしいが。

いまでは全裸でも堂々としているものだ。  
頬なんて全く染めないし恥ずかしくがってもない。

このまま外に出たら、全裸で町を闊歩しそうだ。

「涙子、その球体は常時出せるよな？ あと、体の周りの光も」

涙子の周りには、100個程の小さな光の球体が浮かんで、体も淡く発光している。

発光は無意識のようでAIM拡散力場ってやつなのかもしれない。  
ある程度の攻撃は自動で防いでくれる。

周りの球体も自動で迎撃してくれるので楽だ。

「はい、寝ている間も維持出来ますよ」

周りの球体をもてあそびながら言ってくる。

「よし、外でもそれ維持しとけよ？ とっさの時に勝手に迎撃してくれるから楽だ」

「はいっ！ マスター！」

涙子の攻撃は、球体を媒体として能力を発動させるから、ないとこまる。

って言っても、球体は自由に増やせる上に、完全な闇以外ならある程度直接光を操れる。

闇になってしまった場合に常に100個ほど保持させている。ホントに小さな球体なので、1cmのガラスが反射した光程度の大きさだ。

普段は髪の中に潜り込んでいるので目立たない。

体の発光も、肌の色が真っ白に見える程度だ。

白人程度なので大丈夫だろう。

「んじゃ、出るぞー」

「はいっ！」

そう言っつて、涙子は俺にすり寄ってきた。

まあ、十年も二人きりで生活してきたからな……、好意をもたれるのも不思議ではない。

もちろん手は出していない。

俺は結界を解除した。

寮

目の前には結界を破ろうとしていた三人がいた。  
俺と涙子には久しぶりだけど、こいつらには1分だ。

「あ、あんた、佐天さんに何したのよ！」

あ、服着せ忘れた……。  
もうずっとこれだったから、これが普通だと……。

「何もしてないよ？」  
「じゃあなんでそんな痣とか……暴力ふるったあとみたいになっ  
てるのよ!?!」

再構成忘れてた……。。

三人とも何があったか想像して青ざめてるし。

「黒子、手伝って！ 女の敵よ！」

「はい、お姉さま！」

御坂が、コインを取り出し、秒速1キロを超える電磁砲を打ち出し。

白黒が、ダイヤモンドの矢を9本投擲してきた。

涙子が俺の前に一歩出、にこりとほほ笑みかけてくる。

黒い髪の中から光が飛び出してくる。

刹那、

部屋を光が埋め尽くす。

俺に当たる直前の電磁砲と矢がすべて消滅した。

技ではなく、ただ凝縮した光をぶつけただけの自動迎撃。それで、レベル5とレベル4の攻撃はあっさり防がれた。

「「「なっ!?!」「」」

三人は、数分前まで、レベル0の人間に防がれたことに驚きを隠せない。

「マスターに手を出したら許さないかね？」

そう言って、涙子は二人を睨みつける。

中にいる時に気づいたが、この話方が涙子の素だった。

見事な依存が出来あがってる……。

「佐天さん、な、何もされなかつたんですか？」

「ん？ 何かってなに？ ういはる」

「その……えっちな……」

「はっはーん。何もされてないけど、ラブ！ ラブが世界を埋め尽くしたー！」

そう言って、俺の腕に抱きついてくる涙子。

服着ろ……。

「ね？ マスター」

そんなにここに笑っても……。

「いや、俺はお前をどうしようとも思わないし」

「つれないですねー、あたしの体の全部を知ってるくせに」

「全部っ!?!」

たしかに全部知ってるけどさ……。

全裸で5年もいた上に、解析でしょっちゅう内部みてトレーニング変えてたし……。

「と言うか、佐天さん、さっきどうやって私の攻撃ふせいだのよ？」

「んー？ そつれっはー、てーい」

一瞬にして御坂に近寄ったかと思うと、スカートをめくりあげた。



「はっはっはー、ずっとあそこにいたからたまってたんだよねー、スッキリした！」

もう、御坂に、敬語も敬意もなくなっていた。

身体強化もしてあるから動きが早い。

「……あなたは何をしているんですの？」

白黒がめちゃくちゃ怒ってるぞ？

「んー、いつもはういはるにやってたんだけど。たまには？ マスターは襲ってもすぐ逃げちゃうし？」

言葉が終わると同時に、白黒が涙子に、鉄矢を二本投擲した。

それを、何の能力も使わず、ただの身体能力で掴みとる。

強くしすぎた……だって、ほとんど休まずずっとごい頑張ってたし、強くしちゃった……。

って言っても、身体強化したわけではなく、中での修行の成果だ。

「ふふり。マスターの話ではやりようによっては『一方通行』でも倒せるっていわれたのん」

そう言って、胸を張る。

全員がこちらを振り向く。

「うーん、いくらはいじいたとしても温度の低下は無理だろ？ 冷気を防いだとして。太陽の光を完全に遮断しちまえば、どこから熱を持つてくるんだ？ 宇宙空間と同じような温度でいきられるはずないだろ？ 『一方通行』が、体の温度上げる能力を持つてるなら別だが」

涙子の能力は掌握だ。

ベクトルを変えたところで光を失ってしまえばどうにもならない。自分の手すら見えなくなるしな。

更に酸素の原子ごと消滅させてしまえば、『一方通行』が酸素を生み出す能力でもなければ息ができず窒息死だ。

「ってことで、御坂。お前涙子と闘え。殺すつもりでやれよ？」

俺が言いきると、御坂は驚愕の表情をし、

「な、何で私が佐天さんを殺さなきゃいけないのよ!？」

「いや、殺すつもりでやらないとお前が殺されるからってことだよ」「なっ!？」

まあ、軽くさつき実力見たところで、負けるとは思わないだろうな。

「涙子は自分に能力がないからさ。強い能力者に憧れて、尊敬してたんだよ。で、強くなった自分を御坂に見てもらいたいんだよ。レベル5の御坂美琴にな」

これは修行中に聞いた話だ。

「おねがいします御坂さん。ずっとあなたに憧れてました。だから試したいんです」

深く頭を下げてお願いをする涙子。

「頼めないか御坂？ こいつ、俺とばっか修行してたから負けっぱなしでさ。自分の力未だに弱いと思ってるから。どっちかが危なくなったら俺が助けるから」

御坂はしばし思考し、

「いいわ。私の全力見せてあげる。アンタ、危なくなったら止めるのよ？」

最後のところは俺に言い。  
俺は頷いた。

『パチン』

俺達は寮から掻き消えた。

河川敷

「じゃ、ルールは相手が負けを認めるか、気絶させるか。怪我は治せるけど死ぬなよ?」

はっきり言っこの戦いだと、どっちかがミスると死に直結する。

あ、

俺は今更だけど涙子に服を着せる。

同時に傷も治しておく。

誰もいなくてよかった……。

「マスター、服気持ち悪いので脱ぎたいのですが」

服離れしすぎた！

「ダメだ。もし外で脱いだら俺は一生お前に会わない」

「それはあたしに自殺しろと？　じゃあ、マスターの前でだけ服を脱いでおきます」

うーん……、まあいいや。

「じゃあお互い50メートルくらい離れてくれ。どうせ遠距離攻撃主体だろ？」

二人は素直にはなれる。

「大丈夫ですか？　あの子」

「佐天さんが死んじゃいます！」

白黒と初春が顔を青ざめているが。

十中八九、涙子が勝つだろう。

俺のページのせいで掌握範囲が反則気味だ……。

「じゃー、二人ともいくぞ？　レベル0『光彩掌握』 佐天涙子と、レベル5『電撃使い』 御坂美琴の試合を始める！」

俺は開始の合図をだした。

「おっねっがついしまーす！」

涙子がぴょんぴょん跳ねて、おおきく腕を振っている。  
あいつは……。

「ふっ、私も舐められたものね！　いいわ、遊んであげる！」

御坂がポケットからコインをじゃらじゃらと取り出す。

「この試合を動画保存していいですか、とミサカは問いかけます」

「いいけど、俺が作ったフォルダにいれておけよ？」

「はい、お姉さまのデータは参考になります、とミサカは発言します」

そんなもんか…？

御坂が上空にコインを10枚ほど放り投げ

落ちてきたコインを雷槍のように連続で射出する。

地面を抉りながら、白と青の雷槍が涙子に向かって、秒速1キロを超える速さで突き進む。

涙子は掌を前に掲げ、

刹那、

雷が落ちたような、轟音を響かせて連続で着弾。

「ええ！？」

しかし、着弾した瞬間、雷撃の槍は幾条もの光となって御坂に襲いかかる。

プリズムの特性。

分散・屈折・全反射・複屈折

全反射で完全に攻撃を反射し、分散で一条の槍を数十に分散させたのだ。

それが、10条の槍を反射し、数百に及ぶ光と電の奔流になった。

細くなった雷槍全てが御坂に襲いかかる、光が付加され。

正に光の速度、秒速299,792,458メートルの光の奔流が襲いかかる。

御坂は、最初の攻撃こそ走って避けたものの、涙子が角度を調整し、すべてが御坂に襲いかかるのを知ると、その場で止まった。

着弾。

まるで、一発一発がミサイルのように地面に突き刺さり。

閃光をともないが爆発する。

「お姉さま!!」

走り出そうとする白黒を止める。

こんな中にはいつたら死に行くようなもんだ。

「なぜ助けってくれなかったのですか!？」

白黒が俺を睨みつける。

「助ける必要がないからだ。お前は御坂をもうちょい信用しろ」

煙が晴れ、そこには黒い壁が立ち上がっていた。

「けほつけほつ……黒子。私がこれくらいでやられると？ 学園三位なめるんじゃないわよ！」

土煙りは防げなかったのか、咳をしているが、無傷だ。

「ほう、電気を運動させて磁場つくったんだな。マクスウェルの方程式なんてよく知ってたなお前」

「ばつ、バカにしないでよ！ 学校の先生に聞いたんだけど……」

うん、感心して損した。

「にしても、本気で行かないとやばいわね。死んだら治してもらってね！」

治せないぞ死んだら……。

体だけなら作れるが違う人間になっちまう。

「どーぞー」

余裕そうだな涙子……まあ、危なくなったら“アレ”使えば……。

「行くわよ！」

御坂が宙に数十枚のコインを投げる。



コインは宙で、止まる。

御坂から青白い電気がバチバチと立ち上がってる事から電気で支えている、か地面の砂鉄をS極コインをN極にでもしているのだから。

実際は多分前者だ。

電気が質量をもつ程の電気など、どれくらいなんだ……？

そこに砂鉄が集まり、空中に何条もの黒い剣が生まれる。

常に運動させ、砂鉄が振動し、チェンソーのようになってる。

それを音速で叩きだす。

一直線に飛翔する何条もの剣。

しかし、

涙子の手前でなぜか全てが斜め後方に飛ばされる。  
まるで剣自らが涙子を避けるような現象。

「……な、なんで!?!」「」

三人が訳が分からないみたいなお顔をこちらに向ける。  
なんで俺に？

「はあ、屈折だ。プリズムの特性に屈折ってあるだろ？ 最初に言っただろ『光彩掌握』、すべての光があいつのものだよ。どこにだって光で障壁はれるんだから」

実を言うと、あの場所から御坂を焼き殺すことだって出来る。  
完全な漆黒以外はすべてがあいつの攻撃範囲なんだから。

「ぬう、やはりレベル5ですねー、すごいです。次は私の攻撃です  
ねー」

涙子は片手を銃のようにし。

「ぱーん」

と口で言い、指先から小さな光の球体を放った、速度は光速。

御坂はそれを普通に避ける、

が、御坂の背後で見えない壁にあたり反射する、御坂の周囲数十  
メートルでその光弾は反射を繰り返す。

秒間数万回の反射。

御坂自身は砂鉄の壁で護るが、地面に反射することにクレーター  
が出来あがる。

涙子の全反射によって、全く威力が落ちずに反射し続ける。

「ぬ、ぬうー、なかなかやりますね」

涙子は両手を銃のようにして構え、

「ばーん ばーん ばーん ばーん ばーん」

更に五つの光弾が反射に加わる。

ミサイルが連続で落ちるなんてものじゃない。

爆音が一瞬の途切れもなく続く。

刹那、

光同士がぶつかり。

閃光を放ち爆発する

御坂が反射範囲から数十メートルも飛ばされる。

爆発時に砂鉄を張っていたおかげでダメージは少ないが、骨くらは折れているかもしれない。

御坂はぼろぼろだが、ゆっくりと立ち上がる。

「ふふ、ふふふふ。レベル0だからって甘く見てたわ……。人間相手にこんなことはしたくなかったけど……。神が許すわ。本気を出しましょう」

御坂からプラズマがバチバチと発生し、

上空を黒い雲が覆い始める。

ところどころから雷が見える事から、雷雲だ。

「これで最後にしてあげるわー！」

雲が俺達の上空にあつまりはじめる。

が、

一定以上近寄ってこない。

「え？　なんで？　なんで私の命令に従わないのよ!？」

ふむー……。

「あー、最大の攻撃が効かないなら、御坂お前の負けだ。雲は水蒸気だろ？　雲の質量以上の光をあてれば蒸発してあれ以上これない」

御坂は呆然としていたが、

「ふっ……、そうね。あなたの勝ちよ佐天さん。やるわね」

そう言ってニッコリと笑う。

「ありがとーございます御坂さん」

涙子もにっこりと笑う。

「にしても、勝てると思ったんだけどなー」

そう言いながら、頭をかく御坂。

「いや、この勝負つてはじめから決まってたんだよ。涙子に自信付けさせるための勝負だったわけだし」

「へ？ だって、やりようによつては多分勝てるわよ？」

うーん、

俺は少し離れた所に10メートル程の大きな岩を作り出す。

「涙子。あれ消し去れ」

涙子に命令をする。

「はい！ マスター！」

何も攻撃をしていないのに、一瞬にして岩が消え去った。

「ちよ、ちよつとどうゆうことよアレ！？ あんたと同じ力!？」

御坂、お前人の襟首つかんで揺さぶるな……。

「ちげーよ。『光彩掌握』だつて言っただろ？ 涙子の能力。俺が昨日やったみたいに自分の体さえ見えないような暗さじゃなかったら全てが攻撃範囲なんだよ。光量なんて自由自在。太陽光を直に浴びせるようなことだつて出来るんだよ。だから、漆黑で戦わない限り地球の裏側だろうが原始レベルで一瞬で焼き殺される。もう少したてば地球ごとだつて消滅できるかもしれん」

俺のページではば無限の魔力だからな……。

三人は驚愕の表情をし、

御坂が俺の襟首をつかみ。

「なんで、あんたはそんな能力渡すんのよー！！？」

首が閉まる……。

「ちがうつての、お前最初大した能力じゃないって言っただろ？俺が渡したのはあれだ。涙子が自分で努力してここまで成長したんだよ！あの空間で10年過ごしたんだぞ涙子は。ほとんど休むことなくずっと俺のしごきに耐えてたからな」

御坂は黙り、

「そうね、努力したなら報われて当然だわ。私も最初はレベル1だったからその気持ちわかるわ」

そう言っつて涙子に手を出す。

「よろしくね。これからはライバルよ？ 涙子って呼ぶわ」

涙子は一瞬ためらったが、手を取り。

「はいっ！」

と言っつて笑った。

「はあ、それにしてもその力反則よ？ レベル5なんて目じゃない

わよ。そして……その胸」

親の敵のような目で涙子の胸を見る御坂。

「ふっふーん。マスターに揉まれておおきくなっただんだー！」

いや、確かに再構成の時に胸に手を当ててたが。

揉んだだけで大きくなったら御坂だって大きくなってる。

「あんだ！ 私も！」

いやだ。

「別にいいがお前も500年いきろよ？ 500年いきたらお前ら全員能力上げて胸もでかくしてやるよ」

三人とも自分の胸と涙子の胸を見比べて葛藤しているようだ。

「まあ、御坂がおおきくなったら」

俺は、妹の胸をDまであげ、髪を少し伸ばしてやった

「こんな感じになるぞ？」

三人が啞然としてそれを見つめる。

「ミサカは500年いきるのでしょうか、とミサカは問いかけます  
「いや、寿命はあげないで胸だけ大きくした。御坂の外見が嫌だったら好きなようにしてやるから言え、計画なくなったらその姿嫌だる？ シスターズのやつがきたら変えてやるよ」

「はい、そのときはよろしくおねがいます、とミサカは答えます」  
いきなり俺の前に御坂が立ち。

「み、御坂は御坂はあの胸がいい、と御坂は発言します」

可哀そうになってきた……。

「「「「……」」」」

気まずい空気が流れ始める。

「だ、だってあれよ！？ あんな大きさ、絶対私このまま成長してもあんなにならないもん！」

半泣きの御坂を無視し、

「あーそだ、涙子の寿命戻しておいたから。修行中歳とらないようにしただけだし」

「って、寿命変えないでも胸大きく出来るんじゃない!?!」

出来るけど、あんまする気ないしなあ。

「はいはい、じゃあ片方Hで片方Aにしてやるよ御坂」

「そんなの怪物じゃないのよ!?!」

うるさいなーこいつは、

「マスターは何年生きるんですか?」



涙子が質問してきた。

「俺は……一生この姿だよ。不老ってやつだ。自分は再構成できないから絶対に治らない」

「だったら、あたしも、不老になりたいな……なんて」

今の俺なら狭間にこいつを連れていくことも出来るが……。不老なんてつらい役目押しつけれないわ。

「だーめ。一緒にいれる間は居てやるから我慢しろ。おいで」

涙子は少し残念そうだったが、喜々として俺に抱きついてきた。

「じゃ、俺ら帰るからまたなー」

「ってちよつと待ちなさいよ!? 涙子どうするのよ!?!」

「マスターの家に泊めてもらいますよ?」

けるつとそんな事を言った。

「な!?! なにかあつたらどうするのよ!?! 寝込み襲われたりするかも知れないでしょ!?!」

いや……御坂。俺そんなことしないぞ?

「んー、むしろ襲ってくださいって感じですねー」

涙子の発言に、三人が絶句している……。

「ホラ、レンもおいで」

レンが抱きついてくる。

俺は涙子の耳元に口を寄せ。

「あの四人に光端子つけといてくれ」

涙子にしか聞こえないくらいの声でささやいた。

こくりとうなずき、涙子の髪から四人の髪のなかに光が移った。

「じゃーな」

それだけ言い、俺は家に転移する。

五八話 黒子と結標（前書き）

時系列は無視します。

最後のほうがw

五八話 黒子と結標

自宅

「ふんぶん」

俺は今、レンの髪をツインテールにしている。

かなり前から計画していたことだが、今まで忘れていたのだ。  
はつきりいってレンならどんな髪型だって似合うと思うんだが、  
あえてツインテールだ！

やっぱり俺の真の妹は可愛いなー。

「きゅー」

俺が思いつきり抱きしめると、レンがつ漬れたような声をあげた。

「あぶっ……んー……」

頬ずりをすると気持ちよさそうな顔をする、

うん、かわいいな。

「マスター、光端子からの情報だと白井さんがピンチらしいですよ

」

ふむー、我らのヒーロー上条さんは何をやってるんだか……。

「どうすっかな……俺はいまレンを愛でるのに忙しいんだが……」

「んー、あたしも今は料理中ですしねー……」

涙子も行く気なさそうだ……。

「で、どんな状況？」

「んー、このままだと殺されちゃうかも？」

バツ。っと俺は立ち上がった。

殺されそうでも動かないとは、涙子恐ろしい子。

「じゃあ、俺ちやつちやと行ってくるからご飯よろしく」

「了解です」

「あと座標もらっていいか？」

「お好きにどうぞー」

俺は涙子の思考を読み、座標を調べる。

「ふーん、昔からのいざこざってやつ？」

「ですねー」

「じゃあアイツが解決しないとな。とりあえず見に行ってくるわ」

俺はレンをつれてその座標に転移する。

料理店

俺は不可視状態で店内の上空に座っている。

店内はぐちゃぐちゃだった、

窓は割れ、皿も割れ、テーブルは砕かれていた。  
なぜか場違いな音楽の有線放送が流れているが。

そして眼下には白黒と女。

涙子の端子情報だと結標 淡希。

白黒は腹からの出血がひどい。

傷的には銃で撃たれたな。

「ご主人さま、そんな場合じゃないかもしれませんが、火のペー  
ジが現れました」

ハクが教えてくれるが……ほんと嫌なタイミング……。

「暴れてるか？」

「いえ、まだですなー」

じゃあ後でいいか……。

とりあえず涙子の真似して、光端子を創り出し。

結標 淡希ってやつにくつつける。

「じゃ、こつち、見届けるか」

てかなんだかわからんが白いキャリアケースが狙いか？

結標 淡希がキャリアケース持って消えたし……半裸で……。

いまのやつのは髪型もなかなかったな。

下の方で縛ったツインテール。

今度レンで試してみよつと。

それにしても白黒負けたのかなこれ？

ん？

空間転移？

白黒の上の空間がミシミシと悲鳴を上げる、

刹那、

床を突き破って電磁砲が俺のすぐ横を走り抜けていった。

なぜ？ 俺何も悪いことしてないよ！？



「お姉さま！ 来ないでくださいますの！！」

床下では、磁力で集めた金属を固めて階段をつくり、それを誰かがのぼってくる。

こいヒーロー！

その人物は

御坂だった。

「お前かよ！？」

思わず叫んでしまった……。

二人がビクっとして声のした方向を見る。

「……あんだ、見てたなら助けなさいよ？ 姿隠してるようだけど

……」

俺は不可視をとき、

「やあ、奇遇だね？」

「どんな奇遇よ!？」

確かにそうだ。

「お、お姉さま！ それよりもここから逃げてくださいですの！  
四五二〇キログラムの転移がきますの！！ ビルごと崩壊してしま  
いますわ!!！」

あー、それで空間が歪んでたわけね。

何か光の屈折率が変わりまくって歪みまくってるし。

「ちょっとあんた！ 出来るならソレ消し去りなさいよ!!！」

御坂が歪んだ空間を指さす。

俺はため息をひとつつき。

『パチン』

空間を掌握し、介入を禁止する。

それだけで空間の歪みが消える。

「は、ははは」

白黒はへたりと座り込み、呆けたような顔をしながら笑っている。

「黒子を病院に運ぶから転移してくれない？」

御坂がそう言ってくるが、

「は？ 病院？ 白黒が行くところは病院じゃねーよ」

俺がそう言いきると、二人が訳が分からないような顔をする。

「おい白黒。一番やばい腹の傷だけは治してやる。そしてお前はど  
こに行くかわかるか？」

『パチンツ』

腹の傷だけを再構成する、

それを直したところで、ひどい状態には違いないが。

「わかるよな“黒子”。お前が行かなきゃいけないところ。能力が  
使えない？ それがどうした。アイツはお前が倒さなきゃいけない  
んだろ？」

俺はただ黒子だけを見つめ、ニヤリと笑ってやる。

黒子もただ俺だけを見つめ、ニヤリと笑いやがる。

「ちよつとアンタ！ 何言ってるの」

「お姉さま！」

黒子が御坂の言葉を途中でとめ、ゆっくりと立ち上がる。

「それだけ言うってことは、場所はわかるんですわよね？」

「ああ」

言葉は不要とばかりにそれだけを言う。

「礼は言いませんわよ？」

「別にいい。あとでお前を治す時に、全裸にして触りまくるしな」

俺はくすくすと笑う。

「ふっ、存分に堪能していいのですわ……、行きますわよ！」

『パチン』

俺は全員を転移させた。

黒子が倒さなきゃいけない敵のところだ。

って言うっても、俺には理由がわからん……。

ホント人助けしかしてない神だな俺は……。

学園都市・道路

転移した先には、結標 淡希と

『一方通行』がいた。

「な、なんで白井黒子がいるのよ!?!? あなたは私が殺したはずよ

！？　なんでなんでなんでなんで！　私の邪魔ばかりするよ！？  
『一方通行』だけでもツ！！！！」

ちよつと狂ったか……？

「　　てエ、またお前かよオ！」

「よつ、最強。お前なんだよその怪我？」

松葉杖をつき、電極をつけた『一方通行』

「ハハツ、ちツつとしくじツちまツてな」

自虐気味に笑う。

「まつ、それはいいがよ。ちよつと観戦しねーか？」

「はア？　なんで俺がそんな事しねーといけねーんだ？」

「よえーからだよ雑魚。レベル0に負けただろお前！？」

俺はニヤリと笑ってやる。

「あん？　あれはお前が助けたからだろーがア」

「どつちにしる俺に勝てねーだろお前？」

「はツちげエねエな。だがな、俺はあいつを殺すぞ？」

ややこしい奴だな。

「あーわかったよ、じゃ、お前の脳治してやつから今だけは言つ」と聞け」

「あん？　出来たら今だけは聞いてやるよ」

確かコイツのバックアップは前に……。

『パチン』

俺は脳を前の状態に再構築し、電極と松葉杖を消し去った。

『一方通行』は、自分の体をすこし動かし。

「ハハハッ、相変わらずスゲー能力だなお前？ いいぜエ。今だけは言うこときいてやる」

そう言いながら、俺の隣に歩いてくる。

「じゃ結標 淡希だっけ？ 黒子と闘え」

俺はだるそうに言ってやった。

「アンタだれよ？ やりたいならアンタがかかってきたらいいでしょ？ 無能力者」

はあ？ コイツはAIM拡散力場で言ってるのか？

「ハハハハッ！ オマエはバカか？ コイツが無能力者！？ わらえねエ冗談だな、だったら俺は無能力者に手も足も出なかったんだなア」

さもおかしそうに笑う『一方通行』

笑いすぎだお前。

「なっ!？」

「驚いてるようだが俺は介入しねーよ。お前の相手は黒子だ」

俺は8つの球体を放り投げ、結界を張る。

「さーて、黒子。やれよ。御坂も邪魔したら結界に閉じ込めるからな？」

「わ、わかってるわよ!」

黒子そのまま前方に歩いて行く。

「って言ってもアイツ……、  
もう能力すらつかえねーよな。」

俺はダイヤモンドの矢を創造し、黒子の太もものベルトに転移させる。

「俺からの選別だ、頑張れよ?」

ふっ、と笑い。

「誰に言ってるのかしら? 余裕ですわよ」

こちらを向き、不敵に笑ってきた。

「あははは! アンタが相手なら簡単よね」

殺せばいいんだもの」



刹那、

黒子の上空に鉄製のゴミ箱が現れ、  
重力に従い落下した。

黒子とはつさに横に飛びのいた。

ゴミ箱？

別に考えてなかったが、この戦場は黒子にはいいかもしれない。  
結界内には自販機や木くらいしかない。  
結界を超えることは確実に不可能。

重量制限がある転移らしく、重い物は無理。

結果、自分自身くらいしか転移させる物がないし。

「ハハツレベルの低い戦いだなア」

「まあ、そう言うなよ。あいつらも必死なんだからさ」

「アイツらがおわツたらオレ達もやるか？ 傍観してヤッてンだからことわらねーよなア？」

まったくコイツは……。

「ああ、それで納得すんならやってやるよ」

黒子が太ももからダイヤの矢を投擲する、  
途中で消え、上空から黒子の腕に突き刺さる。

てか、なんだ？

そのまま体内に転移させるか、方向を変えて転移させれば一発だろ？

あいつも能力が使いずらくなってるのか？

「御坂、能力が使えなくなるのってなんでだ？」

俺は隣の御坂に聞いてみる。

「はあ……、能力は集中力よ。黒子は傷を負いすぎて能力が使えない。それは向こうも同じだけど」

ふむ。

つまり、黒子が一撃でも与えれば向こうも完全に使えなくなるな。

黒子が腕の矢を引き抜き、もう一度投擲した。

ん？

先ほどと同じように、黒子に突き刺さり、鮮血が舞う

「あははははは！ アナタはバカなの？ 二度も同じことをするなんて！？」

俯いている黒子がニヤリと笑った気がする。

「そろそろ止めたほうがいいんじゃない？」

「黒子はあきらめてないんだ。やらせるよ」

俺は肩をすくめて御坂に答えてやる。

黒子がもう一度、ダイヤを投擲、

「あなたはホントバカねっ！」

その瞬間、上空から一本の矢が結標 淡希の肩口から入り込む。

俺が渡したのは、黒子が普段使っている転移用の矢ではなく、投擲用のがった矢。

細く鋭いダイヤの矢は、上空からの落下で、体内に6センチほど入り込んだ。

更に前方からの投擲された矢が結標 淡希の腹に突き刺さる。

転移させようとした瞬間の肩口からの矢、集中力が続くはずもない。

「あ、アンタ、まだ能力使えたの!？」

結標 淡希は、人を殺せるんじゃないかと思えるほどの目つきで睨みつける。

「いいえ、使えないですわよ？」

「じゃあ、なぜ上から攻撃できるのよ!！」

「あなたがバカバカと言った攻撃ですわよ？ 最初に投擲した瞬間に直線と上空に投擲したのですわ。あなたは一本を返した。二回目の攻撃は気付かせないためのおとり。二本目に集中してくれれば

上空には気づきませんわよね。ま、肩の傷に気をとられて二本目をよけ忘れるほどバカだとは思わなかったですけど?」

ニヤリと見下しながら言った。

「あんたは……自分の体をおとりに?」

「肉を切らせて骨を断つですわ?」

ゆつくりと黒子は結標 淡希に向かって歩いて行く。

結標 淡希は恐怖を浮かべながらも、黒子を睨みつける

黒子が結標 淡希の顔面を殴る。

更に馬乗りになり殴る殴る殴る。

一方的な暴力。

「チツ、気持ちわりイ戦いだ」

「まあな、でもよく上空に投げててあてたな? 俺なら出来ないぞ」

「当たり前よ、黒子の主要武器よ? 何度も何度も練習したんでしょうね」

ま、そうだろうな。

「黒子、もういいぞソイツは。傷治してやるから」

黒子が白いキャリーケースを持ってこちらに来る。

俺はそのキャリアケースを空間ごと握りつぶす。

「「なっ!?!」」

黒子と結標 淡希が絶句したようだが。

「俺は何が入ってるかなんて知らないけどさ。黒子の敵が持つてるなんてロクなもんじゃないんだろ?」

黒子は一度溜息をつき、

「ええ、あなたが壊さなかったらわたくしが壊してしまいましたのですよ。コイツの組織以外には不要なもの。これの為にわたくしは闘ってましたの」

黒子はそれを放り捨てながらこちらに戻ってきた。

「はッ! 終わったぜ? やろっぜ?」

めちやくちや楽しそうに『一方通行』が言うが、

「まあ、待て。黒子治してからだ」

ま、今回は頑張ったから全裸はなしにしてやろっ。

『パチンッ』

黒子を完全に治す。

「あんだ……全裸にしなくても治せるの?」

「ああ、全裸は趣味だ」

御坂はため息をついた。

「で、黒子。なんでこんなになっただんだ？」

御坂が黒子に質問した、

「最初はジャツジメントの仕事ですよ、今はお姉さまを侮辱したことにたいして。あの人はどちらが強いか気にしていたようですが？」

そんなもんか。

「ハッ！ くだらねエーよ三下！！ テメーらがどっちが強いだ？ どっちも雑魚だろが？ 最強を見せてやるよ。やるぞオマエ」

そんな事を見ながら言ってくる……。

「しゃーねえな……」

『パチンッ』

全員に結界を張り、結標 淡希の傷を治し、黒子の傍に移動する。

そして、俺は一方通行から少し距離をとる。

「楽しみだなア、ちゃんとやるのは初めてだしなア」  
「俺はめんどいよ」

俺達は軽い言葉を交わす。

「御坂、開始の合図頼むわ」

御坂が頷くのを見、俺は一方通行を見る

「見ていなさい結標 淡希。あれが空間能力者の頂点。私達がどっちが強いなんてバカらしくなるわよ？」

「アンタが人を褒めるなんて珍しいわね？」

「それだけすごいのですわよ」

黒子がそんなことを言ってるが、

恥ずかしくなるからやめてくれ……。

「開始ッ!!」

はじまった瞬間、

一方通行の足元が弾け、弾丸のような速度で俺に向かってくる。

俺は前方と後方の空間をつなげ、一方通行を受け流す。

更に、後ろで一方通行が風を凝縮しているのを感じ取り、

俺は同様に風を掌握し、同時に前方に打ち出す。

凝縮した風は電気を帯びながら、ぶつかり合い、結界内に暴風が荒れ狂う。

「ハハッ、面白れエ！ ホント面白れエよ!!」

口を吊り上げ笑う一方通行。

俺は一方通行の上空に転移し、空間ごと押しつぶす。

空間内の空気がびりびりと震える轟音が響き渡り、一方通行の周りの地面が数メートル陥没する。

しかし、一方通行は空間ごとベクトルを変更し、俺に空間の壁が襲い来る、それを掌握し消しさる。

地面に着地し、手を付き、地面が一方通行を中心に、くの字に折れ、叩き潰そうとする。

その地面のベクトルを『一方通行』は俺に変更し、俺は前方に反射の結果を張り、弾き返す。

同時に俺に向かってきた、凝縮された風も弾き返す、一方通行はベクトルを変え、弾き返す。

「ハハツ、なんなんだよこれエ!? 面白エよ! こんな楽しいのはじめてだ!」

空間内は風と岩の破片が飛びかい。時間が立つごとに、地面が下に抉りとられてゆく。

「埒があかねエ、これで最後にしようじゃねエーか!?!」

一方通行の掲げた手に凝縮された風と、プラズマが更に集まってゆく。

俺は上空に数百の鎌と光球を創り出し。



一方通行の風の制御を奪い取る。

一方通行が振りかぶると同時に、俺は頭上の光と闇をぶつけあい。

あたりを光と闇で埋め尽くし、一方通行の風をそのまま下に叩きつける。

視界が全くなくなる前に時間を引きのばし、

一方通行の腕をとり、ベクトルを掌握、逆に働かせ、一方通行をビルまで吹き飛ばす。

以前ルールを変えておいたから出来た芸当。

光と闇が晴れ、腕と足が逆方向に間がった一方通行を見おろす、

「どうだ？ まだやるか？」

俺は一方通行を見下ろし、問いかける。

「ハッ、ベクトルがきかねエー相手にこのじョうたいでなにすんだよ」

「ま、機会があったらまたやってやるから今日は帰れ。傷は治してやるよ」

「ハハッ、そりヤーありがてーぜ」

『パチン』

俺は折れた一方通行の四肢を治してやった。

「今日は、コレで終わりだ、最強はゆずッってヤンよ」

「はっ、いらねーよ」

「ハハハ、そうだな」

それだけ言い、一方通行は風を凝縮し、どこかへ飛んで行った。

なんとなくその姿は、天使のように見えた。

「ふー、疲れた」

俺は三人に向きなおる。

「アンタ、手加減してたでしょ？ 最初から最後のやれば勝てたわよね？」

「ご立腹のようだ。」

「ルール変えれば最初から勝てたがな、アイツはまだ強くなれるから、強くなってほしい。それに案外悪い奴じゃないぜ？」

「あれ以上強くしてどうすんのよ？ あいつが悪くない？」

「ああ、ミサカネットワークに介入した時にいた20001号保護してるっぽい。幼い声だったからちびっこだろ。お前の妹保護してんじゃん？」

あいつが電極つけてんのも実は知ってたしな。ミサカネットワークに制御を肩代わりしてもらってたらしいし、ベクトルの。

脳がおかしくなったのも20001号のためらしいし、治してや

んないとな。

「で、結標 淡希はどうすんだ？」

俺は結標 淡希に聞いてみた。

「私がジャツジメントに引き渡すのですわ」

「ふーん。暴れないのか？」

暴れそうだけどな。

「はあ、あんなの見せられたらバカバカしくなるわよ。空間能力者で一方通行に勝てるってわかっただけで収穫ありよ」

結標 淡希はそう言った。

うーん、実際は多分空間だけじゃ無理。

「まあ、一番楽なのはこんな風に宇宙空間につなげて」

俺は宇宙空間につなげ、散らばったゴミをすべて消し去り、閉じる。

「これで一方通行ごと宇宙に放出しちゃえば倒せるぞ。まあ、殺しちゃうからお勧めはしない」

三人が目を見ひらいて、

溜息をついた。

「どうすればそんな空間能力者になれるのよ……、私達が触らないで物を動かせるとか、自慢してるところじゃないわよ……」  
「現実がおかしくなるのですわ」

なんか能力名『非常識』が復活しそうだ。

「ま、一方通行もお前達もそうだが、まだまだ成長出来るだろ？  
あと、お前達気づいてないかもだけど、一方通行も空間能力者だぞ」

俺がしれつと言つと、三人は驚愕をあらわにした。

「ベクトルを制御するってのは、自分に攻撃したものを、自分の意思で好きな方向に反射すればいいだけだろ？ 空間が操れば風だつて操れるし、地面の爆発なんて足元の空間破裂させるだけじゃん。たぶんお前達もやろうと思えば出来るんじゃない？ 少なくとも俺はできるし」

うん、結構簡単だよあれ。

もしくは、世界のルール変更してるんだな。  
幻惑の特化か？

「ま、時間あったら教えてやるよ。怪我したら全裸で直すけどな」  
「はあ、アンタはホント非常識ね？ しかも、中学生の裸に興味あるなんて……」

「いや、趣味だぞ？ それにお前小さいし」

そう言つて俺は御坂の胸を揉む。

うん。小さい。

俺は少し後ろに下がり、

「空間能力でもこうやってさ」

御坂の周りでバチバチと紫電が走っているのを確認し、俺は反射の面を作る。

実際は吸い込んで速攻で出す仕組みだが。

そして御坂が電磁砲を放つ、

「見てろよ？ 空間能力つて結構強いぜ？」

俺に当たる瞬間、消え去り、御坂に向かって放たれる。

途中で空間ごと消しさる。

「今のは反射して、途中で空間ごと消し去ったんだけどな。お前らもがんばれば出来るようになるから。頑張ってくれ」

はい、抗議終了。

二人は呆然としているが、

「あ、アンタ私をつかったわね!？」

「いやー、お前わかりやすすぎ」

へらへらと手を振りながらからかう。

「じゃ、俺はこれ直していくから寮の部屋に転移するな？」

「まっ」

『パチン』

御坂が何か言ったがそのまま転移させた。

俺は、あたりを創造しながら、

「ハク、場所はわかるか？ 世界座標送ってれ」

「はい、でもご主人さま結構魔力減ってますよ？」

脳裏に座標が送られてくる。

「どうせこっちの魔法はきかないだろ？」

「そうですけど」

「じゃ、いくぞ？ あ、そだ涙子連れて行こう」

俺は思い出したように言う。

「え？ 涙子さんの魔法もききませんか？」

「ちげーよ。あいつには俺がいなくてもがんばってほしいからな。見てほしいだけだよ。俺がどんなことしているのか」

「それでついてくるって言われたら？」

「なんとかするよ……危険ってわかってる旅に連れて行きたくないしな」

「わかりました」

そして、俺はその場から消え去る。

五八話 黒子と結標（後書き）

キーボードがおかしくなった

すごく遅くなる

## 五九話 神と天使

### 海岸

俺は一旦、涙子の元に返り、再び転移した。

涙子には、御飯が冷めたと泣きながら怒られた。

そして、再び転移した先には、四人の人影があった。

一人は黒髪ツンツン、我らのヒーロー当麻。



もう一人は金髪アロハ男。身長は180くらいだろうか、チャラそうだ。

あと、長い黒髪の女。

身長は175くらいか？

なんか、刀持ってるし。

胸はでかいね。

で、上空にいるのが、ウェーブがかかった金髪に、深い帽子をかぶってる女の子。

身長は140くらいだろうか。

L字のバーベルを持ち、オレンジのマントをつけ、両足の間に鎖がつながっている。

露出はげし……、ベルトが巻きついているような服だ。

黒い首輪から延びる鎖、まるで自分の主人から見捨てられたようだ。

魔力の異常から十中八九あの女の子が火のページだろうな。

これで当麻が火のページだったら掘られてもいいね！

「よっ！ 当麻」

三人に後ろから声をかける。

いきなり現れた俺達三人に驚いたようだが、

「刻？ お前なんでこんな所にいんだよ!？」

ずいぶんな挨拶だな……。

「いやー、ちよつと用事があつてさー」

俺がぼりぼり頭を書いていると、

「カミヤんカミヤん、今はそれどころじゃないんだぜい？ 下がらせた方がいいにゃー」

変な話し方するな金髪アロハ！

「当麻、ちよつとちよつとアイツ。あの女の子なに？」

俺はオレンジ女を指さして聞いてみる。

「一般人は下がっていてください。あなたにだってあれの異常さがわかりませんか？」

黒い髪の女が発言してきた。

異常つて……俺の魔力パクられてるし……。

「誰あんた？ ちなみに、俺は如月刻だ」

「それならトキヤんだね。オレは土御門だにゃ」

「私は神裂 火織。魔術師でもないアナタがなぜここに？」

土御門と神裂ね。

「何って用事があつたんだよ。で、あの女の子はなんだ？」

俺はもう一度問いかける。

「あれは『御使墮し』で落とされた天使だにゃー」

土御門が教えてくれる。

天使かー……。

なんで毎回毎回やっかいなのに……。  
でもちよつとかわいいかも。

『御使墮し』ってのは、文字的に魂だけ人の体に降ろしたのか？  
降霊術みたいだな。

突如、いきなり夕闇が夜にかわった。

当麻が驚いている、  
俺もビツクリだ。

「見てわかりませんか？ アレは、夜闇へ切り替えたんです」

神裂が当麻に言い聞かせるように言う。

にしても……光量じゃなくて、地球自体が惑星を動かしたってこ  
とか。

さすが天使。

火のページにはそんなこと出来ないし、自分の能力だなあれは。

「待て！ おい、ちよつと待て！ 魔術ってのは、こんなことも出

来んのか!？」

当麻落ち付け。

「出来ませんよ、人には。自身の属性強化のための『夜』ですか。月を主軸と置く所を見ると、ああ。なるほど、心得ました。水の象徴にして青を司り、月の守護者にして後方を加護する者」

神裂は鋭利のような冷たさで言い放ち、一旦言葉をとぎり、

「その名は『神の力』。常に神の左手に侍る双翼の大天使」

ふむ、俺の隣にいるのはにこにこしてるレンだぞ？  
神の違い？

突然、厳しい表情をした神裂が、俺達の一步前に出、腰の刀に手を添える。

「エンゼルとは善悪なき力。あれはただ、元の位階に戻ろうとしているだけの『神の力』」

少女がなんの前触れもなく、右手に持ったL字のバーベルを天に振りかざす。

刹那、天に魔方陣が広がり、キラキラと輝いている。

ものすごいスピードで広がり、天を埋め尽くす、何十億という魔方陣。

隣をみると、涙子を含めた四人が額から大粒の汗をながしていた。

魔力の余波だけでも人間にはキツイ威圧感になっている。

「あれは……、かつて墮落した文明を一つ丸ごと焼きつくした火矢の豪雨です。あんなものが発動すれば、人類の歴史はここで終わってしまいます」

神裂よ、すまん。

俺の火のページがあるから、人類どころか地球ごと終わるわ。

にしても文明を消す　ね。

神としては許せないかな。

ハク。あの天使に意識はあるか？

『天使ならばあるはずです。神と同列の存在なので、完全にページの支配下にはなりませんね』

ふむ……、言葉は通じんのかなあれ……。

俺の天使じゃないから言うことは聞かないだろな。

つて、俺じゃん!?

作つたの俺の前の俺だよ!?

「くそっ!」

当麻がキレたかつこいいい!!

「くそつたれが!　一言くらいしゃべりやがれテメエは!　いいか?　俺は今怒つてんだよ!　最っ高にブチギレてんだ!　ここから先は交渉の余地なんて一片もねエ!　テメエは黙つてこの術式を止

めやがれ!!」

当麻が天を睨みつけながら叫んだ。

「ってか、あの天使、神がいなくなっただけで壊れたんだよな絶対。俺のせいじゃん……！」

「なんか、可愛そうになってきたでしょう……。」

「お、おりてきた？  
ってか俺見てるし……。」

「上条当麻、神の力は私が押さえます。あなたは一般人を連れて一刻も早く逃げてください」

「そう言っただけで、神裂は俺達と天使の間に立ちふさがる。」

「とりあえず空の魔方陣は掌握しておこう。」

「あれ？ 掌握して気づいたけど、魔法陣ってのは劣化版なんだな。神が使える力を使うための布石か。発動に30分くらいかかりそうだし。」

「俺は涙子を当麻の方へとドンッって押し出す。」

「一応、涙子には介入するなって言っておいたしな。」

「当麻、そいつ頼むわ。俺用事すませないといけないし」

「俺は天使の方へと、ゆっくり歩いて行く。」

「なっ！？ 危険です！ 下がってください！」

神裂が俺に叫ぶ。

「あんたらにも都合あるんだろうけどさ。俺にも用事があるんだよ」  
「刻！ 待ってくれ！ そいつの力は！」

わかってるよ、こいつの殺気は異常だ。  
実力くらいわかる。

「さて、そこの天使。自我はあるかい？」

俺は10メートル程の距離をとり立ち止まり、質問する。

天使の目から涙がとめどなく溢れ、

「あなたが……あなたが私達を捨てたから……ずっと、会いたかったのに……なんで……なんで？」

捨てられた子供のように泣きながら言葉を紡ぐ……。

ああ、やっぱりそうじゃん。

俺があの子をあんな風にしてしまったんだな……。

そもそも、アレは俺の子供じゃん。

俺が“創り”だした子供。

ちゃんと自我も残ってるしいい子だな……。

どこが善悪なしだよ神裂。  
甘えん坊の子供じゃないか。

「カミヤん。ときゃんはなんなん？ 神の力と普通に会話してるんだにゃ」

土御門が驚きながら当麻に聞く。

「あー、俺の幼馴染だ」

「そんなはずないぜい。だったらなんでオレが知らないんだ？」

当麻が目を見開き俺に視線を移す。

あ、バレた。

俺のヒーローと友達になる計画が、

「如月刻と言いましたね。神の力は何故あなたに捨てられたと？」

もっともな疑問ではあるな。

俺は後ろを振り向き、

「当麻、実は俺お前の幼馴染じゃないんだよな」

俺は苦笑いしながら言っっちゃった。

俺は三人に頭を下げ、



「こいつは俺に任せてくれないか？」

頭を下げたまま言い切る。

「きつ危険です！ これは」

「俺の子供だから」

「は？」

わけがわからない。という感じで疑問を口にする神裂。

「俺の忘れものだから。この子は」

天使に振り返り、

「ちょっと、旅に出ててさ。ごめん」

涙をこぼしている天使に言葉を紡ぐ。

「ただいま」

そう言って、俺は微笑む。

天使は顔をぐしゃぐしゃに歪めながら、俺の方に手を伸ばす。

「ダメ。俺がいない間、どれだけ成長したか見せてもらうからね？  
子供の成長は親の楽しみだから」

天使はそのまま腕をおろす。

可哀そうだけど、今の俺が君を受け入れる資格があるのかわから

ないんだ。

弱くなったのは俺のほうだし。

記憶もないからね。

もし、俺が君の主になさわしい神なら。

その時は、受け入れよう。

俺が創りだした、愛しい天使。

「どうかな？」

俺は天使に微笑みながら問いかける。

「わ、わたしは……ずっとあなたを……」

「知ってるよ。愛しい俺の天使よ。だからこそ、俺が君になさわしいか。君が俺になさわしいか。確かめようか」

俺はもう一度後ろを振り向き。。

「ねえ、俺は今から全力を見せないといけないから。気をつけるよ？俺の力場はちょっと特殊だから。レンツ！コイツらに結界を張ってくれ。それで、危なくないように守ってやれ」

「はい」

レンは返事をする、周囲と四人に結界を張る。

これで俺の戦場に入ってこれるだろ。

「涙子、見ている。俺がなんであるか。君にはついてこれない世界を」

つれていきたい。

毎回世界を渡るたびに思う。

でも、

それは出来ない。

確実に危険に遭遇する旅。

嫌われるくらいで納得してくれるなら安いもんだ……。

さびしいけどさ。

俺は一息つき、

故意に抑えていた力場を解放する。

抑えながら戦える相手じゃない。

認めてもらわないといけない、今の俺自身を。

俺はすべての力を解放する、

瞬間、

世界がモノクロに変わる。

空間がひび割れ、ずれる。

写真をハサミで雑に切りとったように、

世界が碎けてゆく。

レンの結界により。

世界に被害はないが、

付近は修復不可能なくらいに壊れはてる。

「「「なっ!?!」」」

涙子以外の三人が声を上げる、

「カミヤン……、トキヤンは……」

「無自覚な魔力だけであれ……、神の力を超えていますよ」

土御門と神崎が声を震わせながら言葉にする。

神の力って、この場合天使ってことだよな？

「じゃ、じゃあ、刻はなんなんだよ!?!」

当麻、隠しててごめんな。

「神の力すら超える、そんなの……一つしかありません」

「そうだぜい……そんな存在一つしか」

二人は一旦口を閉じ、

「「神そのものしか」」

二人の声が同時に紡がれる。

涙子も驚いているようだ。

「なっ!?! だって俺達と同じ人間だろ!?!」

当麻が問いたです、

「あれを人間だなんて言えるのはカミヤンだけだぜい……、そこに  
いるだけで、空間が悲鳴をあげる人間がどこにいるんだ？」

「こんな濃密な魔力、存在することが規格外です。結果がなかった、  
世界ごと崩壊してますよ」

当麻と涙子が絶句し、

「刻は、なんなんだ？」

当麻が震える声で呟く。

「当麻。俺はお前の 友達だろ？」

そう言って、俺はにこりとほほ笑む。

当麻は、目をまん丸にし、ふっ、と笑い。

「……そうだな。刻は俺の友達だ。好きにやって来い！」

友達と言ってくれる当麻をうれしく思う。

さすがヒーロー。

俺は振り返り。

「我が娘よ。さあ、遊戯を始めよう。全力を見せてみる」

瞬間、

周囲全てが、炎に包まれる。  
天まで焦がすような炎が。

炎は俺だけを燃やさない。  
ページにより、魔法はお互い効かない。

主は物理戦。

なんの前振りもなく、俺の上空から数十メートルの隕石が多数降り注ぐ。

それを、ブラックホールで吸いこみ、ホワイトホールで天使に返す。

天使はバーベルを構え、

隕石に叩きつける。

その衝撃だけで、周囲数十メートルにも及ぶクレーターが作り出される。

破片があたりに飛び散り、一つ一つが地面に突き刺さる。  
まるで槍の投擲のように、

そこで、俺は地面に手をつき、無数のダイヤモンドの針を天使に突き刺す。

まるで蛇のように天使を追いつがり、

一本が彼女の腕をとらえ、突き刺す。

辺りに鮮血が飛び散る。

天使は、それを、バーベルで途中から叩き折り。

俺に炎の球体を数個放つ。

数十メートルに及ぶ炎の塊が俺に向かい、

直前ですべてが砕け散る。

ページ同士の戦いは魔法は消されるのだ。

そう思った刹那、脇腹に何かが突き刺さる……。

先ほど、彼女に突き刺さった、ダイヤモンドの針。

ダイヤモンドの耐熱を利用して、炎の中にひそませていたのだ。

さすが俺の娘だ……。

俺の脇腹がじくじくと痛みを主張する。

その血まみれの針を俺は収納する。

そして、一方通行と同じように、地面を爆発させ、天使に飛翔する。

途中で、止めていた時間を抑え、通常の時間に回歸する。

光速すら超えた速度。

魔法ではない炎に包まれ、飛翔する。

熱のルールを変えていなかったら、既に体が消滅していただろう。

一瞬で天使に着弾、

同時に俺の腹部に、強烈な痛みが走る。

勢いが殺せず、天使もろとも地面に数百メートル穿ち進む。

周囲数キロに及ぶクレーターが出来あがり、

着弾した瞬間、俺は後方へ転移する。

「がはっ」

口から真っ赤な血が飛び散る……。

腹部にはバーベルが突き刺さり、背中を突き破り、貫通していた。

先端が溶け、強烈な熱を保持したバーベル……。

周りの肉が焼けただれ、血を止めている。

運がいいのか悪いのか……。

俺の体はすぐに再構成できないから助かったか？

バーベルを突き刺したまま、前方をみる。



そこでは、

天使が立ち上がった。

皮膚は爛れ、マントがぼろぼろにやぶれている。

体のところどころに、岩が突き刺さり、貫通している。

って言っても、俺自身も腕や足を貫通した岩が生えているが。

俺の方に、涙を流しながら手を伸ばし、

「お……お父様……、わたし……は……」

ごめんね、痛い思いさせて。

あとで、俺より先に治してあげるから。

「げほっ……こい娘よ！ 全力を見せてみる！ 最後の最後に全力を！」

見せてくれ、お前の全力を、

受け止めてみせるよ、俺の天使。

天使は両手を上空に向け、  
世界に魔法陣が展開する。

突如、空間が歪み、上空から数百キロに及ぶだろう隕石が近づいてくる。

地球を氷河期にした隕石でさえ10キロ程度なのだ。  
これが着弾したら確実に地球は消滅するだろう。

「お前の全力。受けとめよう」

俺は言葉を紡ぎ、飛翔する。

魔法で隕石をひきよせた攻撃だ。  
ページの制限にはひっかからない。

転移させることも質量的に不可能。

俺はただ、飛翔する。

愛しい娘の想いを受け止めるために。

幻惑で制御はできるが、それでは受け止めたことにはならない。

創造で、クーの鱗を創りだし。

数十キロに及ぶ盾、それを風で制御し、  
全力で受け止める。

隕石との距離数キロメートル、

あの速度だと一瞬だ。

着弾、

轟音と爆発したような炎花があたりに舞い散る。

地上全土の空気がびりびりと震え、着弾すらしていない地面がひび割れる。

盾に着弾した地点から、創造の応用の破壊で、原子レベルまで分解してゆく。

着弾した時点で、腕は完全に吹き飛ば、

クーの鱗がボロボロとはがれおち、俺に突き刺さる。

無事なところなんてどこもない。

通常の間人なら確実に死んでいる出血量。血を魔力で代用し、隕石の分解を続ける、

周囲は隕石の余熱で燃え盛る。

海が、断片のようになり、止まっているという不思議な現象が起こり、

蒸発した水蒸気であたりは何も見えない。

「げぼっ……じぶ」

口からは泡になった血がこぼれおち、声をだすことすら出来ない。

限界……か。

あと少し、あと少しで受け止められるよ……。

お前の想いを。

だけど

大きすぎるよ……お前の想い……。

突如、隕石の衝撃が軽くなる。

不思議に思い、横を見ると、天使が支えてくれていた。

ああ、ダメだよ。

これは俺の責任なんだ。

お前を見捨ててしまった俺の。

お前の想いを受け止めたいんだ。

天使はぐちゃぐちゃに顔をゆがませながら、

「嫌だよ……お父様、一緒にいたかった、ずっと一緒に歩きたかった……」

ぼろぼろと涙を流しながら言葉を紡ぐ、

「お父様と一緒に乗り越えたい、お父様の想いを受け入れたい」

そこで、俺は気づく。

そうか……、俺は間違っていたかもしれない……。

今も拒絶していたんじゃないか、

コイツの想いを、盾で拒絶しているじゃないか……。

受け入れるとか言って、結局拒絶している。

コイツの望みは隣に一緒にいたかったんだ。

今、一緒に隕石を支えているように、ずっと隣で。

コイツにとって隕石は俺の障害でしかなく。

想いなんかじゃなく、ただ一緒に乗り越える障害。

隣にすることが俺への想い、俺が受け入れるべき想い。

俺は幻惑で、隕石をすべてこまかく分散して海に落とす。  
同時に、盾も消し去る。

「おとう……さま？」

先ほど収納した、俺の血が付着したダイヤモンドの槍を、とりだし、  
口にくわえ。

娘の体に突き刺した。

「お……どうさま……？」

なんで……。という風に天使が言葉を紡ぐ、  
俺は言葉なんてもう喋れない、だから……。

『血の契約』

天使の体が光出したのを確認し、

俺は重力に従い落下する。

俺は……



お前を受け入れた……かな？

そこで俺の意識は途切れた。

『おかえり、お父さん』

最後に、そう聞こえた気がした。

六十話 アホローラ

俺は……

起きなくちや……

ちゃんと受け入れないと……

海岸・跡地

俺はゆっくりと目を開く。

起き上がり、かぶりを振る。

「あー……、頭ががんがんとする……」

ふらふらするわ……。

「あ、おはよう。お父様」

天使がそう言ってほほ笑んだ。

傷も治ってるようだ、よかったな。

「おはよう、えーっと……名前は？」

呼びにくいので、俺は名前を聞いてみた、

「名前はないの、だからお父様が決めてください」

つけるよ！ 前の俺！

創って放置かよ。

「んー……、マイルドセブ」

「嫌です」

却下された。

孤児院の園長、お前の吸ってたタバコはダメらしいぞ。

「天使……エンジェル……エルでどうだ？」

俺はにこにこしている天使に聞いてみる。

「んー、及第点です、ではこれからはエルと名乗りますお父様」

納得してくれたようだ……。

これ以上名前浮かばないから助かった。

そんなことを思っていると、

「ご主人さま、また1000年くらい寝てましたよ？ レンちゃんに時間は止めてもらってますが、ちゃっちゃと火のページ回収してください」

ヘッドホンからハクの不満そうな声流れる、

「そうだなー、エル。ページ返してもらっていいか？」

「いいよ？ でもー、お父様はずっとそばにいてくれるんですね？」

くりくりとした目でこちらを見つめるエル。

うーん、でもなあ……。

そんな何人もつれて歩くのは……。

「それならご主人さま、絶対契約しちゃいましょう！」

ハクがそんなことを言ってくるが、何だそれ？

「魂に刻印する契約です。絶対服従です。ご主人さまの深層世界に住めるので、どこにでも付いて行けます。まさに主と奴隷。ご主人さまと私のように!」

理解はしたが、お前は俺の言うことなんてほとんど聞かないだろ？

「うーん、で。どうすればいいんだ？ てか、エルはそれでいいのか？」

俺が死ねって言えば死ぬ契約ってことだ。

一方的になんてしたくない。

「わたしは大丈夫ですよ？ もともと、神の左手ですしー、お父様に絶対の服従をしていますし。一緒にいれるならそっちのほうがいいです」

にこにここと笑いながら言うてくる。

エルは一度見放してるから、一緒に居てやりたいのはやりたいたい、

それにここにいたら暴走しそうだし……。

「んー、わかったおいでエル」

そう言うって腕を広げてやると、喜々として俺の胸の飛びこんできた。

『Die geschichtete Versiegelung  
der Seele』

《魂の刻印》

俺の体が光輝き、  
エルの体が俺の中に入り込む。

「つて、待て待て!? なんでも入ってくるんだこれ!?!」

俺は怖くなり叫んだ。

突如、

「おにーちゃん、レンも!」

レンが飛び込んできた。

「まった!! レンいまは」

レンも一緒に俺の体の中に入り込んだ……。

「うおーい! レン! おまえまで絶対契約しちゃったぞ!?!」

そばにレンとエルがいきなり現れ、

「だって、エルちゃんばかりずるいもん! レンも!」

てか、すぐ出れるのか……。

これなら今までと変わらないか。

完全な主従関係になったが。

「まあ、いつか……、もともと従順だったしかわらん。二人とも寝るときとかはいいけど、普段は俺の中にいるよ? 大勢でぞろぞろ

いるのはさすがに嫌だぞ？」

目立ちまくる。

しかも、全員人間じゃないから美貌が規格外すぎる。

「わかったよ、おにーちゃん」

「わかりました、お父様」

全員が星ごと破壊できそうな強さだから怖いな……。

「そつだ、エル、火のページどうなった？」

「あ、それならお父様の中に入った時にはがれましたよ？ でも、力は消えてません」

再構成されたんだろう。

残るページは水 地 時間 空間か。

あと黒と紫の本の契約者が……。

「それならよかったよ。はあ、俺約5000歳になったわ……しかも9割寝てるし。人間の体と違って再構成時間かかりすぎ……」

「そうですねー、魔力が一気に減るので、魔力が回復すると徐々に再生します。だから出来るだけ傷負わないでくださいね」

ハクが教えてくれるが、無理だ。

だいたい傷負うし。

「さーて、レン。時間戻してくれ。なんか驚愕の表情で、神崎と土御門、当麻が止まってて笑える」

「わかったー、レンがんばるね」



がんばらなくても息をするように、時間とめたり出来るだろこいつ……。

レンが手を振り、俺達はモノクロの世界から回帰する、

当麻達が動き出したのを確認して、声をかける。

「よう、当麻。お前のフラグはかなり砕いたはずだ」

一方通行のあたりから、感じていた事を言ってみた。

「は？ いや、それよりソレ……」

そういつて、エルを指さす。

他の二人が構える。

「あ、手出すなよ？ 俺の使い魔になったから」

三人は驚愕に目を見開き、

「て、天使が使い魔ですか？……いや、でもそれが普通なのか」

神裂は、顎に拳をあて、何かを考えているようだ。

「俺の用事はコイツだったし、被害もでなくてよかつただろ？」  
「トキヤン……。これで被害がないって言うのかにゃ？」

あたりは原型すらなく、壊れ果てている。  
デコボコな抉れた地面だけが続いていた。

それを俺は創造で元通りにしてゆく。

「ほーら、被害がなくてよかつたな？」

三人は驚愕して、  
神裂は、神ならありか……。とか呟いている。

「刻、自分の言葉を本当にするために、基地外じみた力で現実を変  
えるってのはどうかと思うぞ？」

ちょっと傷つくぞそれ。

「あれ？ もう終わってしまわれたりけりですか？ せつかくわた  
しが来たりけるのに」

当麻達の後ろから、白い日傘を持った女がいきなり現れた。

身長は150ちよいか？

足元まである金髪に、大きなリボン。瞳は蒼。

薄い茶色の修道服を着ている。

修道服で胸でかいと目立つな……。

DかEありそうだし。

「あ、アークビショップ!? な、なぜここに!？」

神裂が何やら言っているが、  
アークエンジェルの友達か？

そいつの隣には黒くて長い修道服を着ている男。

肩まである髪は赤く、真ん中わけ。瞳も紅く、タバコを吸っている  
身長2メートルくらいあるし……。

「神裂神裂! この馬鹿な話し方する女誰？」

俺は思った通りに聞いてみる。

「馬鹿な話し方をする女で大丈夫です」

赤い男が教えてくれた。

見た目通りの名前らしい。

「で? あんたは?」

俺は赤い男にも聞いてみる。

「イギリス清教ステイル」マグヌスです、ちなみに14です」

「じゅうよっ!?!? あり得んぞ! ムカツク! 身長小さく再構成していいか? 65センチくらいに?」

「まっ!?! 待ってただけませんか……、好きな年齢でいいですからそれは……」

慌てて言ったあと、当麻に気づき、

「なんだ、お前もいたのか？」

口調がチゲー！

「って言っても何も役にたたなかったけどな」

「全部トキにゃんがしたのにゃー」

当麻が肩をすくめながら答える。

土御門が訂正する。

『ステイル、この方が神なのでありけるか？』

不意に脳裏に声が聞こえた。

『あの力を見る限り間違いないでしょう』

『で？ 俺が神だったらどうすんだ？』

『なっ！？』』

俺も会話に介入してみた。

「あ、あなたは何故通信符に入りなさって至れるのでせうか？」

「お前日本語ぐちゃぐちゃだぞ？ ホント、バカな言葉つかいするな。な？ ステイル」

俺はステイルに同意を求める。

「最大主教様は馬鹿ですから仕方ありません」

やっぱバカか。

「なんですか！ 二人して馬鹿馬鹿と言いなりにけりて！」  
話してて疲れる。

「俺は用事すんだし帰るかな、当麻、あとは任せた」  
そう言っつて、シユタつと当麻に手をあげて転

「ま、またりけりて！」

変な女に止められた。

「なんだ？ 変な女？」

俺は冷めた目で見ながら言っつてやった。

「わ、わたしは最大主教のローラ」スチュアートでありけるのよ！」  
「うん、じゃあローラ、ばいばい」

そう言っつて、転

「またりけるのです！」

俺の服をひっぱってきた。

「何なのお前？」

いい加減ごせい。

あれだね、うざ殺すぞ？

そんなことを思ってるいると、いきなりローラが俺の前に片膝をつき。

「神よ、我らイギリス清教にいらしてくれないでしょうか？」

ふむ。

「お前らは、頼み込むのにいちいち人の意思を操るのか？」

「「なっ!?!」」

俺の足元には魔方陣が浮かび上がっていた。

一応、解析してみたところ強制力を持つらしい。  
幻惑だな。

俺はローラに近づき、

「うーん、はつきりいつて印象が最悪だぞ?」

もう好感度がマイナス方向に突っ走ってる。

「な、なぜ効かないのでせうか?」

顔を青ざめさせて、俺に質問するローラ。

「いやいや、お前達の力って俺があげたもんじゃん。自分の力で洗脳されるやついないっての……。にしてもこの腹黒は、変な喋り方なのに策略ばっかり巡らせてんじゃねーよ」

俺はローラを羽交い絞めにし、

「ひゃっ!?!」

胸を握りつぶすくらいに握った。

更に揉む。

「これは自分の黒さで出来てんのか? だったら天使のエルが小さいのも納得だな。胸が大きい! 腹黒理論が出来あがる……、いや、いつそ世界のルールに加えるか」

みんな腹黒になりそうだ。

「すつ、ステイル、わつたしを……んっ……案じてくれないでしようか? 護衛でありけるですよ? って、な、何で手を中にいれけるの?」

俺に揉みしだかれながら言葉を紡ぐ。

上から手を入れてみた。

デカイけど……、飽きてきた。

「はあ……、仕方ないですね……」

ステイルは懐から大量のカードを取り出し、撒いた。

と言うか、今更だけど辺りに大量のカードが撒かれているのに気づいた。

『 世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ』

ステイルが何かつぶやき始める。

面白そうなので素直に見てよっと、

『それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。』

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ—————ッ!』

ステイルの修道服が大きく膨らみ、

突如、内側から弾け、爆発するように大きな炎が飛び出した。

なんか炎の中に、黒くてドロドロした核が……。

気持ち悪い……。

「おー、気持ち悪い見た目だな？」

「……」

俺の言葉に沈黙で返す。

ふむー……。

「名を『魔女狩りの王』、必ず殺す炎の魔人」

ちよつとカツコイいな。

「なーなー、なんかペット対決みたいで面白いから、俺もなんか作っていい？」



俺はにこにこしながら問いかける。

「ふむ、いいですよ?」

よしよし、

せっかく炎のページゲットしたから炎をベースにして、  
やっぱドラゴンだな、大きさは50メートル位にして。

名前名前、『世界を焼き尽くす龍』とかかっこよさそうだな。  
幻惑で意思を与えてつと、

創造つと。

突如、上空に赤い、巨大な龍があらわれた。  
そこにいるだけで圧倒的な存在感を放つ龍。

体のいたるところから青い炎が溢れ、噴き出す。

漏れる炎は焼けないように変えておこう……。

てか、炎の温度上げすぎて青い炎になっちゃった……。  
亡霊みたいだ。

「……ドラゴンっ!?!」「」「」

「うーん、ちょっと予定と違ったけど、まあいいか。勝負しよう」

多分、あの魔人はカード媒体にしてるんだろうな

「 ? ? !」

俺は叫ぶ、

ちよつとかつこよさを求めてギリシヤ語で  
意味はしよぼいけど。

普通に焼き尽くせだし。

龍は一度大きく息を吸い込む、

口から蒼炎が漏れ

それを一気に眼下に向けてはなった、って！

俺はとつさに結界を張る。

瞬間、視界が蒼で埋め尽くされる。

周囲の木々や、海がすべて燃え上がる。

ああー、せつかく直したのに……。

炎が納まると、俺の傍に龍が着地した。

「こらっ！ やりすぎだろ？ カードも全部燃やせたけど、周りも全部燃えたし！」

龍は、すまなそうに頭を下げる。

「な、何でだ！？ ルーンすらなかったではないか！？」

ステイル、素に戻ってるぞ？

「いや、だってルーンとかカードって人間が力を使う媒体だろ？  
てか、人間でもやろうと思えばルーンなんて必要ないはずなんだが  
？ なんで俺がルーン唱える必要があるんだよ？」

うん。俺は普通に詠唱なんていらんし。

「ちょい、当麻。この龍に右手で触ってみてくれない？」

当麻は恐る恐るといった風に、龍に触れる。

何も起こらない。

「な、なぜだ！？ ソイツの右手は魔術を消すはずだぞ？」

俺も考えてるからまで、ステイル……。

魔法は虚体、実物は実体……。

そして俺は創造。

つまり世界に創りだした……。

あー……。

「あー、すまん。ミスった。世界に創りだしちまった。生命と意思  
あたえたから本物だコレ」

全員が驚愕の目をドラゴンに向ける。

「当麻、消すのもかわいそうだからコレやるわ」

当麻に譲渡、いい考えだ。

しかし、

「い、いらねーよ！ 大体もらってもどこにおけばいいんだよ！？  
食事代とかやばそうだし」

たしかに……。

「じゃあ、涙子」

涙子はぶんぶんと首を横に振っていた。

どうしよう。

「はいはい！ わたしがもらいける！ わたしが！」

うん。

こいつにやったら世界制圧しそうだ。

俺は羽交い絞めにしているローラから服だけを転移させる。

「あん？ 何いってんだ？ この黒乳娘が！ お前の性格は糞って

判決がでてんだよ！」

俺は胸を直にもみしだく。

「あつ……ひどいでありける。んんつ……黒くないですし、見てください、此の白い肌とピンクを!？」

確かに普通にキレイな部類に入ると思うが、詰まっているものはドロドロの黒だ。絶対。

俺はローラのシークレットエリアに手を移動して、確認してから離してやった。

「なつ!？ なぜそこをさわりけるか!？」

「いや、お前その年で初めてとか不思議」

それを確認しただけだ。

「なつ! わたしは刻と年齢は多少しかかわりけぬ！」

「つまり俺と同じで5000年近く生きていると?」

「!?!」

「まあ、お前の歳は解析したからわかるけどさ、言ってるうか? ここで。その魔力で補った若作り。見た目17くらいなのになんで」

「あーあーあーあー!」

いきなり叫びだした。

全裸で暴れるな……、俺は服を転移できせてやる。

「あの最大主教様が遊ばれている……」

あのつてなんだよ、神裂。

「神様じゃ仕方ないぜい。さよなら最大主教様にゃー」

適当だな土御門……。

「とりあえずステイル。この龍お前にやるよ。炎だし相性いいだろ？」

俺はステイルに向きなおる。

「い、いいのですか？ そのような強大な力を人間に与えて」

「ああ、このままだと消さないといけないし、かわいそうだ。そのかわり、このアホローラの命令で使うなよ？ このアホは世界制圧しでかさないから」

「あ、あほって何故けりか!?!」

「わかった」

「ステイル!?!」

うるさいなこのアホは……。

「ほーら、アホおいで〜」

俺は手を広げて微笑んだ。

「アホじゃないからいか」

「実年齢は」

「わーい、刻様大好きー!」

俺の胸に抱きついてくるアホローラ。

やはりアホだ。

「うっ……最大主教なのに何故……」

抱きついたまま涙ぐむ、最高権力者。

あ、

「ちょっと、ローラ上向け」

「ん？」

はむっ

「んん!?!」

じゅるじゅる

「あっ……んっ」

ぷはっ

「はあはあ……わたしのファーストが……しかも舌……」

この年でかよ!?

「と言うか何故? 何か抜かれようでありけるが」

「抜いたぞ?」

「へ?」

「お前に洗脳魔術使えないようにした」

俺がそう言つと目を大きく見開き、

「あーあーあーあー、わたしの最大の魔術がなくなりて……」

洗脳が最大の主教がいる宗教つて糞だな……。

「さーて、若作りアホローラの胸も堪能して飽きたし帰るかな」  
「わ、わたしの胸の価値それだけなりて!？」

俺はもう一度揉んでやる。

「うん、どす黒い感触だ」

「何故!？」

「お前の性格がこの胸に詰まって大きくなってる」

「つまりすごくキレイな」

「すごく腹黒いってことだアホ」

こいつはアホすぎてだめだ。

まあ……。

『パチンッ』

「ん？ なにやらスースー」

「ああ、コレ？」

俺は手の中の下着を見せてやる、  
すごい勢いで奪い返そうとしてきたので、そのまま収納。



「な、どこに!？」

「ああ、空間に穴あけて収納した。それにしてもドラゴンにびびって漏ら」

「あーあーあーうーあー!！」

真っ赤になりながら暴れるアホ。

「うっ、もうお嫁にいけならざること山のごとし……」

いきなり俺の方を涙目、上目づかいで見つめ。

「もらって?」

俺はにっこりとほほ笑み。

「黙れ年増」

涙がみるみるたまり。

「うわーん! ステイル」

ステイルの方に走りだすアホの首に鎖をつける。

「何をしているんだ? お前は俺のペットだろ?」

俺のほづを振り返り、みつめ、泣きだす。

「わたしは、最大主教なりけるのに……」

「はい、最大主教様、パンツを穿きましょうね」

俺は転移などしないでゆっくりとか穿かせてやる。  
いろいろ触りながら。

「ぐすん……」

「まあこれくらいで許してやるか……」

俺は首輪をはずしてやる、

何かしそつなので後ろから腕で抱きしめてるが。

「ひどい」

顔をこちらに向け見つめてくるが、

「あのなー？ 神を崇めてる教会が、なんで神を洗脳しようとしてんだよ？ もし、俺にその魔術が効いたら、俺は一生奴隷だったんだぞ？ それを考えたら今の罰なんて甘いもんだろ？ たかだか全裸見られて触られて、ファーストキス奪われただけじゃん。まあ、お前の最後の髻穿つ寸前まで行ってたけど」

一生奴隷よりは絶対マシだぞ？

「それに新しい下着やっただろ？ 漏ら」

「あーいーあーうーあー！」

やかましいぞー！

「ま、お前ら二人はイギリスまで送ってやるから安心しろ。じゃーな」

俺は最後に胸を触り、

『パチンッ』

二人とドラゴンの姿は掻き消えた。

ふー、

「あの、最大主教様とステイルは……」

神裂が問いかけてきた。

「転移させといたよ」

「ありがとうございます」

ほっとしたような表情の神裂に続ける、

「北極に」

「へ？」

アホな顔になったぞ？

「北極に送ってやった」

実は俺、結構怒ってた。

洗脳って俺が一番嫌いな魔法だからだ。

どんな状態でも俺は、洗脳だけは使わなかった。  
ま、一回だけ認識変更はしたけど。

なのにアイツは何のためらいもなく使ったことが許せない。  
人を人と思わない禁術。

あとで、世界のルールから絶対にはずしておく。

「ま、ローラは寒いと思うけど、ステイルとドラゴンは大丈夫だろう。ドラゴンに乗ればすぐイギリスいけるし」  
「はあ……」

神崎は納得したんだがしてないんだが微妙な返事。

それから、俺は当麻の方を向き。

「これから頑張れよ？ 当麻」

俺は多分、少ししたら渡るからな。

「ん？ なんだよいきなり」

「お前の能力。まだ一片しか使いこなせてないけど、それは」

俺は一旦言葉を止め。

「それは？」

「ま、あとでわかるだろ。がんばれよ、少年。使いこなせば俺すらもこえられるかもな」

「神のお前もか？」

さあ。と言い、俺は肩をすくめる。

一応解析してみたが……まあ、今は教える必要ないだろ。

「待ってください！ あなたは本当に神なのですか？」

神裂に呼び止められる。

「さあ？ 神自体が幻想かもしれないし、本当にいるかもしれない。ちなみにコイツも天使かもしれないし、ただ力が強い人間かもしれないだろ？」

俺はそう言って、エルを抱き寄せる。

「幻想と現実の境界なんて曖昧だよ。実際俺だって不老だし、世界を壊したり世界も渡ることも出来る。でも、そんな幻想っぽい人間がいないとは限らないだろ？」

俺は肩をすくめながら言ってやる。

「神とはこの世界を作った全知全能と聞いていますが、あなたを見ていると、普通の人間に見えますし！」

「うん。確かにこの世界を作ったのは俺だよ？ 破壊も想像も簡単出来る。でもそれでも、俺は自分を人間だと思っし、これからもそうだと思う。俺はお前達にとってはただの当麻の友達だよ」

創ったのも前の俺だし。

「やはりこの世界はあなたが……」

なんだか落ち込んでるぞ？

そんなに嫌か。

「誰が創っても世界は世界だ。確かにお前らは俺が創った子孫かもしれないが。意思を操った覚えもなければ、介入することもない。これから何をするかはお前らの自由だ。頑張れよ？俺の子供たち」

俺はそのまま転

「待ってくれ！」

俺はだるそうに振り向き……、

「当麻く、今俺かつこよく消えようとしたのにさく、空気読めよ？」  
「あ、すまん。それより！俺はお前の友達だよな？刻が神だとしても！」

はあー……。。

「当たり前だろ？俺はお前を尊敬すらしてるぞ？神が尊敬する人間なんてお前くらいだったの」

ヒーローだもん。

「じゃーな」

俺はそう言って

「待ってくれ！」

「ブチ殺すぞ？」

いい加減ブチぎれそうだ。

「周りの炎とか消してほしいんだが……」

ああ、俺が創ったドラゴンのせいだな。

「りょーかい」

『パチンッ』

完全に元の状態に戻し、火も掌握して消し去った。

「いい？ 次、呼びとめたら地球ごと消し去るぞ？」

「あ、ああ。ありがとな！」

そう言っつて、当麻は軽く微笑んだ。

「じゃ、またいつかな？ はあ……もう全然カッコ良くないよ……」

俺は肩を落としながら、エルとレン、涙子を連れて転移する。

涙子これからどうしよー……？

## 六一話 神の右席

マンション・自室

俺はいま、重大な会議に出席している。

部屋には、レン、エル、ハク、涙子が人型で、机を囲むように座っている。

数週間経ったが、そろそろこの会議を終結しなくてはいけない。

「あたしは、それダメだともうー。どう考えてもマスターが逮捕されます」

涙子が案を出してくる。



「私はご主人さまの自由に」

ハクが

「おにーちゃん、レン眠い……」

レンが

「お父様のお好きに」

エルが

「そうだなー、俺もさすがにそれで外を歩いてほしくない」

俺は全員を見回す。

### 第九十三回・エルの服装会議

「だってベルトじゃん」

「気にしてないです」

エルは気にしていないようだが……、

「多分ですね。エルさんは胸が小さいから気にしないんだよー」

お前も元はちいさかったぞ涙子。

それに大きくなってもすぐ全裸になるし。

あの後、測ったらエルの身長は136だった。  
胸などあるはずもない。

「だからマスター、Bくらいまであげてみてください。B以上には  
しないでください」

それは、お前がCだから一個下にとって……。

『パチンッ』

俺はエルの胸を再構築してみた。

「く、くるしいですお父様……」

ベルトに押しつけられてあふれている……。

エルは急いでベルトをはずす。

「ほーら、ね？」

何が、ね？　なのか聞きたいぞ涙子。

「完全な上半身裸になっちまったぞ？」

「私の人格を著しく馬鹿にしていますが、動きやすいです」

お前がなんと言おうと、それは許さないぞ？

結局、大きなマントと同じ色の、先端が三角になっている肩かけをつくってやった。

一応胸は隠せたが。

下からだとも隠せていない。

大きなベルトを肩からクロスにするようにつけてやると、なんとか隠せたかな？

「てか、元の体に戻ればいいだろ？　なんで、天使じゃなくて、御使墮し的时候に入り込んだ人間の形にしたんだ？」

こいつは腐っても天使なのだ、たまたま魂だけ墮とされただけ。この姿は入り込んだ人間のものらしい。

体は返して、天使の体を再構成した。

「お父様と居る場合、性別がある体の方が有利なんです。もちろん女性の」

そう言っつて、エルは周りを見まわす。

「いや、別に性別なくてもいいぞ？」

「それは私にお父様争奪戦から脱退しろと？」

赤い瞳がキラキラと輝いている。

「てか背中から双翼が！」

「あー、そのままでもいいや、ついでに争奪戦なんてやってない」

全員がギラギラしているが……。

「ガブリエルとして、争奪戦に参加を表明します」

そう言っただち上がり、バサアッと、大きな純白の翼を広げる。  
全横長3メートルくらいある大きな翼、

体にくっついてるわけではなく、背中あたりに浮かんでいる。  
出し入れ自由で便利なんだそうだ。

あと、こいつ、名前ないとか言っただけでガブリエルだった。

前にそれを聞いてみると、名前ではなく力の名前だったらしい。  
十二使徒全てを合わせたより、大きな力をもってるらしいが、

普通に、親が大好きな子供だった。

心があるのは、火のページによる再構築だと判明した。

そもそも十二使徒なんて知らないし！

「はいはい、わかったから、他の奴も立ち上がるな。空間が歪むし、  
羽根が舞う、光がまぶしい」

全員を着席させる。

「さーて、終わったところでー、デート行きましようマスター」  
喜々として、また、立ちあがる涙子。

俺が世界を渡ることを言つと、最初は泣きながらすがつてきたものの、

Hかデートをしてくださいと言われたので、デートにした。

何かこいつにも考えがあるようだが。

思考を覗くのは敵対者だけで十分だ。

俺自身覗くのはあまり好きじゃない。

「あー、わかった。とりあえずお前らは俺の中に入ってる」

俺はレンとエルを、俺の世界の中に入れる。

涙子が机を迂回し、喜々として俺の腕に抱きつく。

「さー、さっさと行きましようー！」

俺はため息をつき、部屋の出口から外へ出る。

聖ジョージ大聖堂

部屋から出た瞬間、なぜか教会にいた。

出た瞬間、俺と涙子を光が包み込み、景色が一変したのだ。

「ふんふーん　やっときたりけりですかー？」

近くの部屋から、反響したような声が聞こえる、

俺達はその部屋に入る。  
バスルームっぽく、湯気が出ていた。

「せっかく転移の陣を引いたのに、遅かりけるですね」

バスのへりに、腕を組んで乗せ、その上に顎を乗せ、足をちやぶちやぶしてにこにこしているアホがいた。

ブチッ

隣で何かが切れた音がした。

「あ・な・たは！ なんのためにマスターとのデートをじゃましたのかなー!？」

涙子が一瞬にして、ローラの首を握り、吊るした。

「この胸が！ わたしより大きなこの胸がそんなこと考えたのね！  
ちぎりましょう！ ちぎりとりましょう!」

ちぎれんばかりにくにくにと揉む涙子。

ローラの胸が赤味を帯びてきたことから、相当な力の入れ具合だ。

「いた、いと、いたりけり!」

ローラは涙目だ。

「落ち着け涙子」

俺は涙子を下がる。

ローラはほっとしたような顔になったが、

「それで何だ？ 内容によっては、お前の無駄にでかい胸の脂肪を腹に移すが？」

俺は先端をつねりながら言っちゃった。

「ヒヤッ……、言う！ 言うからやめて頂き存じけりです！」

相変わらず馬鹿な言葉遣いだか、離してやる。

「てか、お前羞恥心ないのな？ こんな場所に呼ぶなんて」「い、いえ。見られたのは刻が初見らしけるのですが、見るどころか、すべて触られたのでいいかなと……」

普通だったら死ぬような歳の人間が、見られたこともないとは。

「で、早くしろ。間違って脂肪10割増しで腹に移動しそうだ」

「か、『神の力』のことでありける、苦情がきたりけりて」

慌てたように喋りだした。

「苦情？ なんでだ？ 俺何もしてないぞ？」

「ロシア成教から、サーシャ・クロイツェフの体が『神の力』に入り込まれたとか……」

別に害はないはずだが？



魂に刻印した契約なわけで、そのサーシャって体には関係ないし？

「と、言うわけで、行ってきてくださりて」

いきなり足もとに魔法陣が。

「あ、間違っても、ロシア成教に味方しないでくださりけりて」

次の瞬間、俺達は消えた、

現象管理縮小再現施設

いきなり、機器がたくさんおいてある大きな部屋に移動させられた。

なんかカプセルとかあるし、人体実験とかしてそー……。

「次にあつたら絶対あいつの脂肪移動する!」

俺が決意を叫んだ隣では、デートが……、とか涙子が涙目だ。

「何でしょうか？ あなた達は？」

いきなり後ろから話しかけられた。

話しかけてきたのは、ノコギリを持ったエルに瓜二つの少女。

そのとなりには、修道服をきた女。

不思議な修道服だ。

大きな十字が描かれている。

「なんでも、なににも。アホローラに飛ばされたんだよ。お前たちこそ誰だよ？」

答えなさそうだが、俺は投げやりに言ってみる、

「私は、サーシャ・クロイツェフ。では、あなたが自称神ですか？」  
すっごい訝しげに俺を見るサーシャ。

「さあ、候補って感じかな？」

俺がそう答えると、そうですか。と、

「神や天使を愚弄する愚者は消しましょう」

そう言って、いきなり襲いかかってきた、ってええ!?

俺は服ごとノコギリを消し去る。

一瞬なにが起こったのかわからないサーシャだったが、  
そのままもう一人の女の後ろに隠れた。

「な、何をするんですかあなたは!？」

「キヤー! 裸で震えてるサーシャちゃんラヴリー!！」

もう一人の修道服少女がサーシャを抱きしめていた……。

俺帰っていいか？

にしても、

「お前その震え何だ？」

恥ずかしがってるわけじゃないよな……??

尋常じゃない震えだ。

「サーシャちゃんも魔術が怖いよねー。さっきあなたから漏れ出した魔力でこーれ！」

「ヒヤッ!？」

ツンツとサーシャの胸の先端を、指ではじく女。

ふむ、

俺は全裸のサーシャを腕の中に転移させた。

「な、何をしていますか？ 私の尊厳が破壊されそうです」

「ちよっと黙れ」

「んっ……………」

俺はサーシャの胸に手をおき、解析。

恐怖？ トラウマ？

天使の力をまじかで感じた恐怖が脳裏に巣くってるのか…………。

記憶を消すか…………、恐怖に耐性をつけるか…………。

両方後遺症にはなるな…………。

うーん…………、納得させちゃうのがいいかな。

天使はこういうもの、人間の魔術はそこまでじゃないって。

天使級の魔法じゃなかったら恐怖を抱かせないだろ…………。  
地球を破壊させるような力以外なら。

これで再構築つと、

俺は腕の中のサーシャを見つめ、

「どうだ？ 恐怖取り除いてみたけど」

サーシャは自分の体が震えていないのを確認し、

「な……んで？」

不思議そうに尋ねてきた。

「んー、だって俺の娘のせいじゃんそれ、だから取り除いた」

「娘？」

「あー、そうだな。エルちよつと出て来い」

俺が呼ぶと、目の前に、サーシャそっくりのエルが出てくる、大きな翼を広げながら。

「こんにちはわ。お父様の娘のエルです、あなたたちの呼び方だと『ガブリエル』ですね」

そう言って軽く微笑む。

サーシャは眼を見開き、

「天……使？ じゃあ、あなたは、神？」

サーシャは俺を見つめる、

「神の定義によるかな？ 天使を使役すれば神なら神だし。この世界を作ったのがだれかと言ったら俺だけど……、思考で言うなら俺は人間だと思う」

俺は思ったことを言ってみる、

「あ、あのっ！ 何か記念にください！」

ずっずっしいなサーシャよ。

少し考え、

3メートル近い、漆黒の鎌を削り出した。

レンの鱗を闇で加工し、秒間70万回の振動を繰り返すルールを付加。

震えてるのかいまいちわからんな……。

試しに、軽く地面に刃を滑らすと、スッパリと縦に切り裂かれた。振動で、付近が原子レベルで崩れてる……。下手したら次元すら切り裂かない振動数だ。

「んー、これでいいか？ 一応、お前の体模写してエル作っちゃったし、お礼として」

俺がそれを渡そうとすると、こくこくとうなずき、喜々としてそれを受け取った。

そのまま、俺から離れ、喜々として試し切りをしている。

あたりの機器が細切れに……。

「お父様、わたしもアレほしいです」

はいはい、と言い。

同じものをエルにも渡してやった。

双子のような少女があたりを切り刻んでゆく……。

あ、そだ。

あいつら以外使えないようにルール変えておこう。

絶対、後世まで伝えられちゃいそうだし。

その時、バンツッと音を立て、後方の大きな扉が開けはなされた。

そちらを見ると、俺と同じくらいの身長の方が……。

緑色の、映画に出てくる宇宙人のような服を着ている。

髪がすべて逆立ち、40か50台くらいの見た目の男。

「……ローマ正教……、なぜここに？」

サーシャが愕然とした様子で、言葉を紡ぐ。

「間違いではありませんが、どうせなら『神の右席』と呼んでほしかったものですねー」

その男が言葉を発する。

「私の名前は、『左方のラッテ』。誰に呼ばれた、という」と

男は、サーシャではないもう一人の少女に視線を移す、

「ど、どうしてですかワシリーサ」

まるで裏切られたような顔で、ワシリーサと呼ぶ少女に声をかけるサーシャ、

「だって、ロシア成教とローマ正教、同盟結んだし？ それに、私

」

そう言って、サーシャを見つめ。

「上層部からサーシャの監視言い遣ってますから。『神の力』を宿することができる聖母の監視を」

ワシリーサはそう言い放ち、

「普通神の力なんて入れたら爆発しますよ？ すごい実験材料ですよね」。って言ってもも、本物の神と天使が現れたので、あなたはタダの餌でした。神と天使をおびきよせるね」

冷たく言い放つワシリーサ、

チツ、胸糞わりー策略だな。

「で？ テッラとやら。お前はなんでここにきた？」



俺は率直に聞いてみる。  
だいたいわかるけどな。

「これはこれは、神よ。あなたの保護にきたんですねー」

言葉を言いきる前に、腕を振ってきた。

それだけで白い刃こちらに迫る、近づくにつれ、遠近法どころではない大ききで肥大していく。

俺は直前で、それを消し去り、睨みつける。

「保護じゃないのか？」

「保護ですよ？ 研究のためにはあなたの体が必要なのです。殺したほうが手っ取り早いですねー」

これに比べたら、ローラなんてまだまだ甘いな。

体さえあれば生死など関係ない。  
糞すぎる。

消すか？

俺が消そうと、腕を動かした瞬間、

涙子が俺の前に出た。

「マスター、私にやらせてくださいー！」

何を思ったか分からないが、涙子が強く言葉を発する。

「いや、でもアイツは」

「やりたいんです！」

はあ……。

きっと強いぞあいつ……？

エルよりは全然弱いけど……

「わかった、空間広げるからちよいまで」

俺は空間を無限に広げる。

あたらしく世界が出来たようなものだ。

室内のはずが、空には雲一つなく、太陽がサンサンと照らしている。  
地面は荒野だ。

「ほう、さすが神ですねー、世界を作りますか。ますますほしいです」

感心したように俺に言うテッラ。

それを無視し、

「サーシャ悪いな。お前を利用したアイツは消す、戦闘中に介入させても困る」

俺はそう言い、ワシリーサを睨みつける。

「な、何を!？」

青ざめて言葉を発したが、何をも何もお前の存在が許せねーんだよ。

神としてでなく、人間としてお前の存在が。

俺はワシリーサの額に手を置く……、

は？

そこで俺はきづいた……。

「おい、サーシャ。コイツ雰囲気かわつたりしたか？」

俺はサーシャに問いかける。

「そうですね、この屈辱的な拘束具をバカにされました。これはワシリーサに言われてきたものなのですが……」

つまり……、

同盟を結んだとか言ってたが、ローマ正教に利用されてるなコレ。完全に洗脳されてる。

消すか。

「さよなら。天国も地獄もなく、消し去ってやるよ」

『パチンッ』

それだけで、俺の知るワシリーサは世界から消え去る。

ワシリーサはその場に崩れ落ちる。

一応、洗脳部分だけ削除しておいた。

洗脳中の記憶も。

「おー怖い怖い。神はこわいですねー。私も殺すのですかねー」

いちいち、嫌な言い方する奴だな。

殺してねーっつの。

「勘違いするなよ？ お前の相手は涙子で十分だ雑魚。神の右席？  
神としてはご免こうむるよ、それに」

俺は怒りを押し殺し、

「サーシャの友達を洗脳までして、天使のことを知りたかったのか？」

「なっ！？」

俺の発言にサーシャが驚愕し……。

「ローマ正教……」

サーシャが鎌を構えるが、手で静止し、俺は続ける。

「吠えるなよ人間。俺の神の右席はあいてない、今はそこに最も信用が置ける人間。涙子を代役に置いてある。本物の神の右席と、偽物の神の右席の勝負を始めようじゃないか」

俺は見下しながら言いきる。

「マスター、神の右席、佐天涙子。主の命を完遂させます！」

「行って来い。神の右席の一人よ」

今回限りの代理だけどな……。

不老で、世界を渡れるような人間じゃないと正式は無理だ。

「どちらが本物の神の右席かしめしてあげましょう」

「……」  
神の右席同士の戦いが始まる。

絶対に死ぬなよ、  
涙子。

## 六二話 神の判決

### 結界内

二人が対峙している、

一人は長い黒髪の、13歳の少女  
もう一人は髪を逆立てた4、50代の男

刹那、

少女から一条の光速の槍が放たれる、

そ男が手を振ると、白い刃が放たれ、

二つがぶつかり合い。

大きな閃光が生まれ、相殺される。

閃光がおさまった時、少女は上空に飛び上がっていた、腕を大きく上げ、振り下げる。

それだけで、上空から数十メートルはある、大きな光の剣が男に降下する。

確実に避けられないだろう、都市を丸ごと消滅させる力を秘めた剣。

それが男に降り注ぐ、

着弾する瞬間。

「優先する」

男の声が聞こえ、それを爆音と閃光が消し去る。

あたりを、土煙りが包み込む。



しばらくすると、土煙が晴れ、無傷の男が立っている。

「くっ」

少女　涙子が悔しそうに吐き捨て、掌を前に掲げる。

「優先する。　光を下位に、人体を上位に」

男　テッラがそう呟き、

涙子の手から数百条はあるだろう光の槍が連続で放たれる。  
まるでマシンガンのような連射性、更に威力と速度は光のそれ。

ラッセに着弾。

しかし、テッラの体にあたった瞬間、すべてが消え去る。

なんだ？

消したわけじゃなく……『優先する』……ッ！　幻惑の世界のル  
ール変更じゃねーか！  
なんでそんな力人間が！？

テッラが大きな白い刃を無造作に放つ、それを涙子が全反射の壁  
を展開して防ぐ。

当たる瞬間、

「優先する。 光を下位に、刃を上位に」

白い刃が涙子の光の壁を切り裂き

涙子の左腕が宙を舞った。

鮮やかな赤い鮮血を纏いながら。

「いつっ……」

涙子は痛みに耐えながら、立ち上がる。

「ははっ、やはり私が神の右席のようですねー」

バカにしたように男が笑う。

突如、

涙子の前に、何かが突き刺さった。

「あなたは、お父様争奪戦のライバルです。こんなところで無様に死なないでください」

エルがその言葉を発する。

エルが投げた、漆黒の鎌が地面に突き刺さっている。

「ありがとう……エルさん」

涙子はお礼を言い、それを手にとる。

エルの鎌は、サーシャの鎌と違い、本人以外でも使える仕様になっている。

「今更武器を持ったところで私に勝てるとは思っていませんよねー？ もっと私を楽しませてください」

テッラはそう言い捨て、いくつもの白い刃を涙子に飛ばす。

涙子は、髪や、服を斬られながらも、テッラのほうに駆けて行く。

そして、鎌を振りかぶり

「優先する。 刃を下位に、人体を上位に」

そのまま、テツラの腕を切り裂いた。

腕の周囲が原子レベルまで崩れ去り、切り取った腕も消し去った。もし、斬った状態で振り抜かなければ、テツラごと消し去っていただろう。

「ぐはっ！？　なぜだ！？　私はたしかに！？」

斬られた右腕を抑えながら、激痛に顔をゆがめるテツラ。痛みに慣れてないだろう動揺が浮かんでいる。

テッラは後ろに飛びのき、何十もの白の刃を涙子にめちやくちやに飛ばす。

「優先する！ 鎌の刃を下位に！ 小麦粉を上位に！」

テッラはそう叫ぶが、

涙子が鎌をふるう度に、巨大な刃は消えてゆく。  
まるで幻想殺しのように。

テッラは驚愕に目を見開き、

「なぜだ！？ なぜだー！！」

「にしても、あなたはバカだね。白い刃は小麦粉だって自分で言う  
ちやうし」

くすくすと笑いながら、左腕がなく、右手に鎌を持った涙子が笑  
う。

「そうだ！ 私の刃は神の体！ なぜ鎌ごときに！？」

「いや、俺の体小麦粉ちやうし。魔力だし」

俺が小麦粉なわけねーだろ……。  
めちやくちや侮辱だぞ？

肉体でもないけどさ……。

そして、涙子がゆっくりとテッラに歩いてゆく。

「くるなっ！　くるなあー！！」

テッラは恐怖に顔を青ざめさせている。

いまのテッラには、涙子が悪魔にしか思えないだろう。

「何を言っているのですかー？　こんなプリチーなわたしが近寄ってあげてるのに？」

もう涙子さん絶好調です。

くすくす笑って怖い。

無限に白い鎌を放ち続けるテッラだが、すべて涙子に消し去られる。

『優先する！　対称を下位に、地面を上位に』

テッラがそう叫ぶと、

涙子の体がずぶずぶと地面に埋まってゆく。

「は、はは！　勝ったぞ！　やはり私が」

テッラの言葉の途中、涙子は鎌を地面に突き刺す。

一気に地面が崩れ去る、

涙子の両足と共に。

「はぁ……はぁ……」

涙子は左腕と、両足がなくなり、苦しそつに、荒い息を繰り返す。

「わかった！ わかった！？ その鎌が私の神の体を！ すばらしいではないか！ ははっ！」

そつ叫び、テッラはもう一つの鎌の持ち主、サーシャに向かい走り出す。

「よこせ！ それは神の右席の私こそが持ち主にふさわしい！」

そつ叫び

サーシャの鎌を奪い取った

「「あ」「」

俺とサーシャの声が重なる。

カランと、音を立て鎌が落ちた。

テッラの姿はどこにもない。

「はあ……」

俺は肩をすくめ溜息をついた。

「どうなったのですか？」

サーシャが質問してくるから、答えてやる。

「あの鎌は異常な振動数で次元すら切り裂くんだよ。刃だけ異次元みたいなものだ。テッラの世界のルールを変える魔術でも、世界以外には効かないだろ？ 突き刺せば原子の結合を分解するし、周囲は原子ごと消滅させる。そんな危険なものそのまま人間に持たせるわけないだろ？ サーシャ以外の奴が持つと、刃の振動が鎌の柄まですり流れるようになってる。つまり持った瞬間、原子の結合がすべて分解されて消えちまう。それがさっきのテッラ」



サーシャが顔を青ざめさせる。

自分がもらったものが、そんな危険なものだったと知って。

にしても……微妙な終わり方だな……。

俺は左腕と両足がなくなった、涙子を抱き上げる。

「大丈夫か？」

俺が声をかけると、震える声で……。

「ま……すたー。あたしは……ますたーの、やくにたてましたか？」

焦点があっていないが、こちらを見つめ、

「これで……ますたーは……、安心してたび……だてますか……？」

瞳から、涙を流しながら……。

「あたし……ますたーの……のぞんた……とおりに……成長できました……  
……た？」

こいつは……そんなこと思って……。

「ますたーに……みて、もらいたかった……あたしは……ひとりでも、大丈夫……だから、昔……とは、違うから……」

そう言って少し微笑み、

「大好きな……ますたー……に、認め……て、ほしくて……あたしの……わがまま、ありが……と……ございました……」

そう言い、涙子は気絶した。

このままにしておけば数分で死ぬだろう出血量。

俺はそれを直してやる。

「お前は俺には過ぎた妹だったよ、涙子。思った以上に成長したし、ちゃんと見てたから。お前の強さを。認めるよ、お前は誰より強く、美しい。安心して旅立てるよ。俺の方こそありがとう。涙子」

俺は涙子を腕に抱き、立ち上がる。

周囲には、俺の怒りに反応するように、空間がひび割れ。悲鳴を上げる。

サーシャが震えながらその光景を見つめる。

ああ、こいつの恐怖は、世界を壊せる未満までしか消してないんだ。

それよりも

「潰すか。ローマ正教」

冗談にすらならない。  
完全にぶちぎれた。

「主のお望みのままに」

いつの間にか出てきた、エルとレンが片膝をつく。  
神の右席の二人。

手には末席の代理の少女。

介入しない神に介入するだと、人間が。

何故、一方的な欲望によって、他の人間が巻き込まれる。

俺は、腕の中の涙子を見下ろす。

俺は成長させた少女。

愛しい少女。

その少女を傷つけた神の右席。

サーシャの友を操ったローマ正教。

見せてやろう人間。

怒れる神がどう言うものか。

汚い欲望の末路を。

これが矛盾の神、如月刻。

我は全てを包み込もう。

變で、

そして

破壊でな



六三話 神の使者（前書き）

作者暴走！

だって五和！

存在すら忘れてたけど、この話書くまで

## 六三話 神の使者

フランス・アビニオン上空

「ほう、駆動鎧か。学園都市の技術かな？ それとも学園都市が介入？」

眼下では、多くの駆動鎧が、アビニオンを制圧している。すべてが暴徒ではないかと言う程の人間が暴れている。アビニオンの町並みはもはや廢墟に近い。

介入する前からこれかよ。

普通に殺しもありかよアイツら。

俺、レン、エル、クーはいま、上空に浮かんでいる。  
涙子は、マンシヨンの部屋で眠らせている。

俺のこんな姿見たらどうおもうかな……？  
涙子。

「お父様、全員殺しますか？」

そんな事をエルが言ってくるが、

「いや、トップと偽りの神の右席とやらを消すよ」

「お父様、それだと人間は、また同じものを作りますよ？」

エルが意見を言ってくる、

「植え付ければいい」

「え？」

「あらがえない程の恐怖を。欲望など抱けない程の恐怖を」

俺は無表情で、淡々と言いきった。

そのとき、爆撃機が上空から大きな宮殿にミサイルを落とす。

ステルス戦闘機か。

うーん、あの着弾点当麻いるじゃん……。

光端子つけといてよかった。

にしても……、なんでまた、フランスなんかに？

仕方ない。

当麻は友達だからな。

「行くぞ」

「はい」

二人の返事を聞き、俺達は下降する。

教皇庁宮殿・Side刻

俺達は、ミサイルが開けた穴から、宮殿の中に侵入した。

中はひどい有様だった。

炎と熱で埋め尽くされ、床がドロドロと溶けている。

「ふんっ、醜い。人間同士で争い。破壊しつくす。自分の欲望の押し付け合い。邪魔だ『消えろ』」

俺は掌握すら鬱陶しく思い、世界のルールに絶対服従の命令を下す。

現在、世界は俺の管理下にある。

自然に存在するもの全てが俺の管理下に。

一瞬で、火が熱ごと消えさる。

そして、俺が後ろを振り向くと、槍を構えた少女がいた。肩までの紫がかった黒髪、毛先は外側に跳ねている。大きな二重の瞳。

なぜか前開きの服が、下の方で結ばれている。はつきり言つて、胸がほとんど見えている。E……いや、F近くあるか？

そばには当麻が傷だらけで倒れている……。

それに気づき、俺の目がスッと細くなる。

「少女よ、当麻を瀕死まで追い込んだのは貴様か？」

俺は突き刺すような、冷えた声で問いかける。

「い、いえ。先ほどのミサイルで」

どうやら違うようだな……。しかし、

「お前はローマかロシアの宗教のものか？」

「い、いえ、日本で、です」「日本？」

「天草式十字凄教の五和と申します」

聞いたことないが……？  
そもそも日本で仏教以外……。

まあいつか。

「ふむ。傷は治してやる、当麻起きろ」

二人の傷を治し、当麻を起きるように『命令』する。

五和という少女は、傷が治ったことに驚いていたようだが、

当麻がゆっくりと起き上がる。

「アレ…？ 刻、どうしてここに？」

どうしても何も…、こちらのセリフだぞ？

「あっ、五和無事か！？」

「うっ、うん」

くっ、当麻め！

なんてフラグマスターなんだ！

「当麻！ お前の幻想をぶち壊す！！」  
フラグ

俺は叫んだ！ 心の底から！

「な、なんでだよ！？」

俺は宮殿の上空を全て消し去り、数十キロに及ぶ隕石を上空に出  
現させた。

当麻に消せるように、すべて魔力で構築。

これで、爆撃機は消せるかな。

「な、なんですかアレ!？」

「と、刻やめろ!？」

はいはい、熱掌握っと。

「当麻、右手を掲げろ」

え?　と言う感じで右手を掲げ、そこに隕石が着弾。霧散。

「あれ?　消せたぞ?」

不思議そうに自分の掌を見る。

「当たり前だろ?　全部魔力で作ったんだから」

俺は知れつと聞いた。

「な、なんでそんなことすんだよ!?　する必要ないだろ!？」

「爆撃機邪魔だろ?」

「なっ!?!　それじゃあ乗ってたやつが死ぬだろが!　ふざけんな  
!」

当麻が立ち上がり、怒りだす。

「五和、俺のやり方は間違っていると思うか?　率直に言ってみろ」



俺は、五和の方に問う。

「……あつていると思います」

「なんでだよ!? それじゃ人が」

「現実を見てください! あの爆撃機が一基でどれだけの人を殺しますか? 数千人、数億人を殺します。これだけ密集している人たちに、暴徒達を鎮めるために放つたら、一発で何百人死ぬか……」

当麻は、納得していないようだが、唇を噛み、沈黙した。

「お前の在り方は正しいよ当麻。それが理想だ。さすが正義の味方だよ。だが、ここでお前に邪魔されるわけないはいかない」

俺は当麻の右手に触れ、

『今は眠れ』

「なっ!? なんだこれ……」

俺は当麻の中に在る幻想殺しを眠らせた。

「お前の右手はしばらく眠らせた。ただの右手に戻ったんだよ、しばらくの間な」

当麻は絶句しているようだが、

「あなたは……なんなんですか? それに後ろにいるのは……天使?」

恐る恐ると言った様子で五和が問うてきた。

「さあ、なんだろうね？ お前達が何でここにいるか教えてくれたら教えてもいいよ」

ニヤリと笑ってやる。

「そ、そうでした！ C文書を！ バチカンで術式が！ 観光客全てを儀式の生贄に！」

慌てた様子で五和が教えてくれる。

「エル、バチカンの術式の魔力反応全てを破壊して来い」

「はい、お父様」

俺がエルに命令すると、エルはその場から消え去った。

「当麻、俺がいる間は、少しくらい俺に頼れ。友達だろ？」

俺は当麻に微笑む。

「ああ、すまない。急いでてな」

「ま、友達やめたくなくなるかもしれないな、この後」

「は？」

当麻は訳がわからないといった感じた。

「あ のっ！ それであなたは……」

五和が先ほどの約束を口にする。

「ふむ、じゃ、教えてやるから行くぞ、二人とも」

俺は当麻を風で浮かばせ、五和を抱き上げ、

そのまま、上空に浮かびあがる。

「わっ、ひゃっ!？ 浮いてる」

五和は初めてか。

「これってさ、なんの暴徒？」

俺は腕の中の五和に聞いてみる。

「ローマ正教が用意した陽動ではないかと。バチカンに注意が向かないようにと」

ローマ正教かよ……。

またあいつらは醜い事を。

アビニオン上空

上空に止まり、

「どうすればこの騒ぎが収まると思っ？」

五和に質問してみる

「え、えーと。ローマ教皇と神の右席が出てきて止めるか……」  
「とめるか？」

俺は意地悪に聞いてみる。

「殺せば止まります」

五和はハッキリとそう言いきった。

「なっ!?!」

当麻がひどく動揺しているが。

「見てろよ当麻、これからすることはお前の正義から激しく逸脱しているが。それでも人は救われたってことになるんだぜ？ お前の

正義と、俺の判断。どっちが人を救えるか、考えてみるのも悪くないかも知れない」

そこで俺は息を吸い込み

「あ、あのっ！」

五和……お前まで俺のカッコよさをとめるのか？

「何……？」

俺はムスッとして止めた少女に問いかけた。

「抱きあげるのはいいのですが……なぜ、手が私の服の中に入っているのでしょうか……？」

俺のせいだった。

どうもさつきから顔が赤いと……。

「だって、その服の着方いやらしすぎるし。手を突っ込んでくれと言わんばかりに」

ますます赤くなった。

「刻！俺だってそれは思った！だが、俺は我慢したんだぞ！」

当麻、正直すぎるぞ。

五和が当麻をキッと睨みつける。

「なぜだ！？ 俺は思っただけで刻は実践してるのに！ 不幸だ！  
ー！」

お前の責任だ当麻。

そんなのからかって揉む男と、ずっと凝視しているが言葉にしない男のようなもんだ。

前者は恥ずかしいかもしれないが、後者は居心地がくそ悪いぞ？

「当麻当麻、五和好きなの？」

率直に聞いてみた。

「い、いや別に」

五和が一気に沈んだぞ……。

俺は手を五和の下部に……。

「んっ……」

確認して手を放す。

真っ赤になってしまった。

「当麻当麻！ 安心しろ！ 初めてだ！」

「お前今何して確認した！？ お前の幻想（変態）をぶっ殺す！！」

当麻が暴れ出したが、

「お前の幻想殺しは眠ってるから無理だ」  
「くっ!?!」

そんなバカなやり取りをしていたが。

「さて、鎮圧するか」

「え？ 何をするんですか？」

五和がそう問いかけてくるが、

「俺の正体知りたいんだろ？」

俺はそう言って

キスをした。

「んっ」

いや、なんか不安そうにしてたからいつもの癖で……、  
ちよつと、反省してる。

「あ……、私のファーストキス……」

「当麻ごめーん！ ファーストキスもらっちゃった！」

「お前の幻想（存在）を完膚なきまでにぶち殺す！」

怒るな当麻、

俺は息を吸い込み、叫ぶ。

『世界よ、我に従え！ 我は帰還した！ 主の帰還に歓喜せよ！  
主の帰還に謳え！』

俺は叫ぶ、

俺の声を風が運ぶ。

主の声を届けるために。

声が世界を駆け抜ける。

「あの……、あなたは……」

チュッ



あ……。

「ほめーん、ほうま、せはんどまへ（ごめーん当麻、セカンドまで）」

俺は口をつけたまま、当麻に謝ってみる。

「お前の原子すら残さず消去する！」

幻想ですらなくなってる！？

「んっ……あふう……」

舌の感触ってホントひとによって違うよな？  
人によっても滑らかさ違うし。

レンは人じゃないからザラザラしてるし。  
レンの場合何か引き抜かれそうになるあれ。

「ん……ちゆる……」

そこで口をはなし、

「ふー、いいお味でした」

俺は腕の中の、恍惚な表情をした五和にお礼をいう。

「い、いえ……あ、ありがとございました、ふふ」  
「五和!？」

「ははは、見たか当麻の幻想!  
神の幻想(幻惑)なめんな!  
気持ちよさなんて思うがまだまだ!

洗脳はしてないからね。

「五和はもらった当麻!」

「クソ! 誰か俺に幻想を殺す力を!!」

「ははは、神が許さんぞ当麻! お前は一生インデックスだけで  
いいんだポケツ!」

「俺にはあれがお似合いなのか……!! 不幸だ……!!」

俺達のバカなやり取り。

「あの……先ほどの……?」

そろそろかな。

「落ちないようにつっかり抱きつけ」

「はいっ!」

俺は首に抱きついていて五和を更に抱きしめる。

驚いて落ちたらシャレにならん。

「そろそろくるぞ」

「え?」

俺は上を指とす

刹那、

『ラ————』

世界が震えるような謳が。

『  
ラーラーラー  
』

世界が歓喜する、

『  
ラーラーラー  
』

空から何条もの光の筋が舞い落ちる。

幻想的な光景と歌声。

唯、一人のための祝福。

『ラーーーーーラーーーーー』

光の中から天使が舞い降りる。

数百、数千、数万の見える範囲全てが天使。

人では絶対に届かない『神の力』

『ラ—————』

歡喜、慈愛、哀愁。

様々な感情が入り混じる謳。

「天使……？　なんで？　こんな数……世界の終り」

がくがくと震える五和を抱きしめ、軽くキスをしてやる。

少し落ち着いたようだ。

俺はそこで叫ぶ。

『我を崇めよ！　我を畏怖しよ！　私の言葉は世界の言葉！　私の  
願いは世界の願い！』

『ラ—————』

ひとときわ高まる謳、世界を覆つ美しい響き。

次の瞬間、

すべての天使が頭を垂れる。

ただ一点を見つめ。

頭を垂れる。

自分たちの主に対しての忠誠。

主への歓喜。

俺の前に二人の天使が舞い降りる。

性別などないような、中性的な美しい二人。  
事実性別なんてないだろう。

空中で、片膝をつき、頭を垂れる。

「お待ちしておりました主よ」

「どんなにこのときを待ったでしょうか、おかえりなさいませ主よ」

そのまま、二人を俺は見つめ。

「名は？」

「『光を掲げる者』、ルシフェルにございます」



「『神の如き者』、ミカエルにございます」

俺は二人を見下ろし、

「「なんなりと、命じください。我らは主のため、世界すらも破壊してみせましょう」「」

二人がそう言う、

「ふむ、少しまで」

二人が頷くのを見、

『我は世界に命じる、風よ眠れ』

瞬間、すべての風が止まる。

派生の電気の流れもすべてが。

爆撃機は墮ち、駆動鎧もすべてが止まる。

「ルシフェル、ミカエル。すべての天使に命じる。ローマ教皇、並びに、神の右席の三人をここに連れて来い。情報は、世界への同調を許可する。天使の制限も解除する。反抗する者は殺せ！ 下のやつらもだ！」

俺は命令する。

「「はっ、必ずや主の命。完遂させていただきます」「」

そう言い、天使達の姿が消える。

「あの……あなたは……あなた様は……」

五和が俺を崇めるような瞳でみつめてくる。

てか宗教だしな……神だところなるか……？

「ま、そのとおりかな？」

俺は軽く微笑む。

「十字教では、神は人の前には現れないと言われています。人の危機には天使が現れると」

ふむ、天使つてのは世界に創ったルールだからな。

存在としているわけではなく、世界の守護者。

地球の生態系が壊れる危機には、自動で調整する管理者。

前の俺が残した、神がいなくても地球が機能するようにした設備。

だから人間が絶滅しそうな時には必ず現れる。

人間の代わりの生物が訪れない限り。

居てもいなくてもいい生物では現れない。

世界の連鎖に常として含まれる人間だからこそ現れる。

「さあ、そういう考えでもいいかもしれない。神なんて気まぐれで、何をするかわからない。今回は俺のわがまま。絶滅するわけでもな

い。ただ、理不尽なローマ正教が許せなかっただけ。どう思う？  
当麻」

俺は当麻に聞いてみる。

「神の勝手に人を殺して、ゆるせねーよ！ 神だろうと何だろうと  
！」

「じゃ、お前は どうする？ 介入しなかったらバチカンの術式が発動して、数億の人間が死ねばいいと？ 下のやつらがそのまま暴れて町を壊し。殺されればいいと？ 俺のは小を犠牲にして大を救うやり方だ。お前ならどうする？」

俺はやさしく問いかける。

「俺なら全てを」

「どうやってやる？ お前の理想なんて聞いてないんだよ。現実はどうやってやるかだ。作戦や想像なんて意味ないんだよ。結果以外は何の意味もない夢物語だよ」

そこで当麻は押し黙る。

「世界は理不尽だよ当麻」

「お前が創った世界だろ！？」

「ああ、争いのない世界だって作れるよ。そんなの全員の自我をなくして、機械のように生態系に入れればいいだけ。世界構造としては間違っていない。お前はそれを求めるのか？ やってやるのか？  
「なっ！？」 人をなんだとっ！？」

当麻が怒鳴る。

「同じなんだよ、お前の言ってることとそれは。すべてを救う、そんなの意思のない生物を管理するしか無理なんだ。国だろうとなんだろうと結局はトップが束ねるだろ？　すべてをトップが束ねたとして。誰も反抗しないはずなんてないだろ？　だからこそ世界は別れてるんだから」

俺は言いきる。

「なら、私達はどうやって生きて行けばいいのですか？」

五和が俺にすぎるような目を向ける。

「ご自由に、自分の考えを通したいなら強くなれ。誰よりも。途中には争いも生まれるだろう。それでも通したいなら強くなれ。心を強くもて。実力も伴い強くなれ。自分の理論に当てはめて、実行すればいい。神が介入するなんて出来ないんだよ。願いなんて叶えられない。願いは他の願いに矛盾しているんだから。多くて、同じ願いないなんて一つだよ」

俺は一旦言葉を止め。

「それは……？」

聞いてきた五和に微笑みかけ、

「世界よ消えろ」

「なっ!？」

二人の声が重なる。

「これが人々の意思。あとは、金持ちになりたいとか、力がほしいとか、生きたいってのもあるけど。自分主体な願いではなく、世界に対してのお願いなんてこれくらいだよ。世界平和を願う奴がどれくらいいる？ 一番人間で多い願いは世界よ消えろ。生物全てを含めたら人間よ消えろだけどな」

俺は苦笑して言う。

「ねえ、五和」

「はい？」

「もう一回キスしていい？」

「へっ？」

すつとんきよんな声を上げる

いやー、だつてさ。

五和の舌すごい感触いいぞ？

この感じはハンネ以来だなまじで。

「ど、どつぞ」

そつ言つて目をつぶり、こちらに向く。

「やはり刻、お前は殺さないといけないようだ！」

ヒーローが壊れた！？

まあ、無視無視。

ちゅっ

うーん、この感触はいい。

俺からの一方的だけど相性バツチリだな。

ハンネが懐かしー、記憶でしか覚えてないけど。

『な、なにをしているんですかトキくん！』

ハンネの声が聞こえたような気がするけどOK。

「ちゅく……んっ……ぢゅる……」

うん。

なんかいろいろ吸い取られそう。

「はぶっ……んちゅ……」

ぶはっ

そこで俺は離す。

「うーん、五和。お前舌使いどこで鍛えた？」

「え？ あ、いえ。そんなことしてませんが？」

鍛え方知ってればレン辺りに教えようかと思ったけど。

「そっかー、お前の舌ざわりいいな」

俺はニッコリと笑う。

「いえ……あ、ありがとうございます?」

真っ赤になって俯いてしまったが。

ふっ、当麻よ。

お前の幻想は俺が両方眠らせてしまったようだな。

突如、上空から、何かが下降してきた。

六三一話 Side・五和（前書き）

時系列とかめっちゃくちゃなので、適当に見てくれたらいいです  
とある〜とは別ものとして？

作者暴走当麻涙目シリーズ・SAIDE五和

五和だと思ってみない方がいいよ？

見なくても支障ないからOK



教皇庁宮殿・Side五和

大きな音、爆音と言って差し支えない音によって、私は目が覚めた。

気を失ったのは部屋の中央だったはず……。

多分、先ほどの爆発で部屋の隅まで飛ばされたのだろう。

うっ、体が痛い。

体だるいし……。

えっと、槍は……あ、あつた！

自分から、そう遠く離れてない場所に、槍は転がっていた。

私はそれを手にとる。

体のダメージが大きいのか、動きがひどく怠慢だ。

なんだろう……それに……、体が熱い？

とりあえず、現状把握を、  
あたりを見渡してみる。

そこで、私の体が火照っている原因を見つけた。

宮殿の石造りの壁や床が、高熱により、ドロドロと溶けていた。  
あれが私に直撃してたら、と思うと、ゾッとする。

更にあたりを見回してみると、

近くに幻想殺しの少年が仰向けに倒れていた。

小さな火傷はあるものの、大丈夫そうだ。

少年の近くには、駆動鎧が倒れている。

どうやら機能は停止しているらしい。

あと、C文書……なんとかしないと……大変なことに……。  
自分の無力さに、少し涙ぐんでいるのが自分でもわかる。

そのとき、炎の中に、何か着地したような音が聞こえた。

でも……、あの炎の中だよ？ 石すら溶けるような  
きつと、気のせいだよな？ うん。

「ふんつ、醜い。人間同士で争い。破壊しつくす。自分の欲望の押し付け合い。邪魔だ『消えろ』」

気のせいじゃなかった……、中から声が聞こえる。

冷たい声だ。

よく見てみると、その人がいる場所だけ、火が避けている。  
なんで？

火の方から避けるなんて、何かの魔術でしょうか？

刹那、

その人が『消える』と言っただけで火は消えた、床の熱までもが  
すべて。

正直怖い……、だって人間がそんなこと出来るの？

私は思わず、槍を構えてしまった。

突如、その人は、こちらに振り返った。

身長は175センチくらいだろうか？

肩まである黒髪、襟足は少しはねている。

瞳は……金色？

人間で、輝く金色の瞳なんて生まれるのだろうか？

方には大きなヘッドホンをつけている。

それにしても　カッコいい少年だった、年齢は私と同じくらい  
かな？

私がいままでみたどの少年よりもカッコイイ、というか。

存在が違う。

最高の造形を集めたような？

日本人ってあそこまでかっこよくなれるんだ……。

後ろには二人の女の子。

わー、みんなキレイ。

やっぱり美形同士集まるって言うのかな？

っていつか……天使！？

あの天使！？ 神の力を持っているって言うあの！

一人で世界すら壊せるとか……。

でもキレイ……。

ちょっとボーっとしてたのか悪いのかな？

カッコイイ人の目がスッと細くなった。

「少女よ、当麻を瀕死まで追い込んだのは貴様か？」

そんな事を言われた。

すべて見透かされているような瞳で、冷めた声だった。  
怖い、と思った。

「い、いえ。先ほどのミサイルで」

あ、言い淀んじゃった、

これじゃ怪しさを満点だよ。

「お前はローマかロシアの宗教のものか？」

えっと、それってローマ正教かロシア成教のことかな？

「い、いえ、日本で、です」

今度は噛んじゃいました……。

「日本？」

「天草式十字凄教の五和と申します」

うつ……、変な敬語に……。

「ふむ。傷は治してやる、当麻起きろ」

傷？

わっ!?

痛みがすぐに無くなった、傷もないし。

あ、幻想殺しの少年の傷も。

つて、起きあがった!?

すごい！ あの傷が。

カツコイイ人の言うことには世界すら言うことを聞くの？  
理不尽だよ……？

「アレ…？ 刻、どうしてここに？」

こらっ！ まず御礼を言いなさい！

「あつ、五和無事か!？」

少年が声をかけてきたけどそれどころじゃないよ。

「うっ、うっ」

あ、言い淀み癖が。

「当麻！ お前の幻想をぶち壊す！！」  
フラゲ

なんで！？

なんか、カツコイイ人が怒ってる！？

「な、なんでだよ！？」

それは当然の反応かも幻想殺しクン。

あれ？ 急に光って、宮殿の天井が消えちゃってる！？

それで遠くから………なんだろう？

赤い壁が近づいてくる？

ってまさか、このカツコイイ人が！？

死んじゃう………これは死んじゃうよ。

「な、なんですかアレ！？」

思わず聞いちゃいましたけど、

「と、刻やめろ！？」

ん？ 急に暑さがなくなりました。

「当麻、右手を掲げろ」

へ？ あれを消せって言うの？

そして、少年が手を掲げる

「あれ？ 消せたぞ？」

少年すごっ！？

いいなー、私なんて役立たずですし……。

「当たり前だろ？ 全部魔力で作ったんだから」

なに何でもない風に言ってるの！？

あんな魔力普通持ってないよ！

「な、なんでそんなことすんだよ！？ する必要ないだろ！？」

いいこと言ってたぞ少年！

「爆撃機邪魔だろ？」

あ、そのためだったのかー。

「なっ！？ それじゃあ乗ってたやつが死ぬだろが！ ふざけんな

！」

あれ？ なんで少年は怒ってるんだろ？

当然だよな？

「五和、俺のやり方は間違っていると思うか？ 率直に言ってみろ」

あ、私に聞いてくれた。

「あっていると思います」

うん、当然！

「なんでだよ！？ それじゃ人が」

何を言っているんだろう？ 少し思慮が浅いです。

「現実を見てください！ あの爆撃機が一基でどれだけの人を殺しますか？ 数千人、数億人を殺します。これだけ密集している人たちに、暴徒達を鎮めるために放つたら、一発で何百人死ぬか……」

ちょっと言い方が厳しくなっていました。  
でも、事実ですから。

「お前の在り方は正しいよ当麻。それが理想だ。さすが正義の味方だよ。だが、ここでお前に邪魔されるわけないはいかない」

そう言つて、カツコイイ人は幻想殺しに触り、

『今は眠れ』

「なっ！？ なんだこれ……」

一瞬、発光して元に戻りました。

「お前の右手はしばらく眠らせた。ただの右手に戻ったんだよ、しばらくの間な」



この人はなんなんだろう？  
魔術さえきかない幻想殺しに魔術をかけるって……。

「あなたは……なんなんですか？ それに後ろにいるのは……天使？」

私は素直に聞いてみた。

だって、天使ですもん。

神の命令しか聞かないはずです！

「さあ、なんだろうね？ お前達が何でここにいるか教えてくれたら教えてもいいよ」

むー、交換条件らしいです。

そんなニヤリと笑わないでください。

「そ、そうでした！ C文書を！ バチカンで術式が……」

あー、片言になってしまいました……、緊張して……。

「エル、バチカンの術式の魔力反応全てを破壊して来い」

「はい、お父様」

エル、と呼ばれる天使がその場から消えちゃいました……。

お父様って子供！？

でも、バチカンのほうはなんとかなるっばいです。

天使なら楽勝ですよね？

「当麻、俺がいる間は、少しくらい俺に頼れ。友達だろ？」

どうやら、この仕事を手伝いたかったらしいです。  
私もアナタがよかったです！

「ああ、すまない。急いでてな」

「ま、友達やめたくなくなるかもしれないな、この後」  
「は？」

そんなのどうでもいいです！  
それよりさっきの約束！ 正体！

「あのっ！ それであなたは……」

聞かないと！

「ふむ、じゃ、教えてやるから行くぞ、二人とも」

教えてくれるらしいで、わわっ!?

お姫様だっこです！  
初めての体験です！

それに、こんなカッコイイ人に！  
あとで自慢しちやおっと。  
って、

「わっ、ひゃっ!?!? 浮いてる」

カッコイイ人が私を抱き上げて浮いています！  
さすがです、風にすら愛されています。

「これってさ、なんの暴徒？」

私をみつめて問いかけてきました。  
ちよつと照れますね。

「ローマ正教が用意した陽動ではないかと。バチカンに注意が向かないようにと」

です。

すこし移動し、上空に止まりました。

「どうすればこの騒ぎが収まると思っ？」

「って、また質問ですか!？」

「うーん……。」

「え、えーと。ローマ教皇と神の右席が出てきて止めるか……。」

「とめるか？」

「一番手っ取り早いのは……、  
言ったら嫌われちゃうかな？」

「殺せば止まります」

「なっ!？」

少年慌てすぎです。

「見てろよ当麻、これからすることはお前の正義から激しく逸脱しているが。これでも人は救われたってことになるんだぜ？ お前の正義と、俺の判断。どっちが人を救えるか、考えてみるのも悪くないかも知れない」

あ、そういえばさっきから気になってたんですが……。  
と言うか、別にいいと言えはいいのですが。

「あ、あのっ!」

「何……?」

ちよつと、怒ってますね。  
すみません、でも……、

「抱きあげるのはいいのですが……なぜ、手が私の服の中に入っているのでしょうか……?」

すつごく恥ずかしいです。

胸ずつと揉まれてますよ?

これだって初めての経験です!

「だって、その服の着方いやらしすぎるし。手を突っ込んでくれと言わんばかりに」

いやらしいって、これしか……。

恥ずかしいです……。

「刻! 俺だってそれは思った! だが、俺は我慢したんだぞ!？」

む、少年はだめです!

さつきもじろじろ見てきましたし!

この人みたいに自然に出来ないのですか?

睨んでみます。

「なぜだ!? 俺は思っただけで刻は実践してるのに! 不幸だ!

」!

それくらいで不幸って……。

もし触られたら私が不幸ですよ？

「当麻当麻、五和好きなの？」

なっ！ 何を言っているんですか！？

「い、いや別に」

ちよつと、残念ですね。

って！？ どこ触ってるんですかこのカツコイイ人！？  
下！？

待ってください！ そこは、ってなんで入ってくるんですか！？  
ああ、私はこのまま……。

「んっ……」

思わず声が……、

あれ？ ある程度入ったところで手が離れて行きました。  
別に期待してないですからいいです！

「当麻当麻！ 安心しろ！ 初めてだ！」

何を言っているんですか！？

確かにあってますが……。

「お前今何して確認した！？ お前の幻想（変態）をぶつ殺す！！」

ダメです！

その幻想の幻想を私がぶっ壊します！  
あなたに狙われるのは嫌です！

「お前の幻想殺しは眠ってるから無理だ」  
「くっ!？」

ふふり

「さて、鎮圧するか」

鎮圧？

「え？ 何をするんですか？」

問いかけてみます。

「俺の正体しりたいんだろ？」

確かに知りたいですね。  
でも、鎮圧したらわかるんでしょうか

キスをされました。  
いきなりでした。

私の気持ちが鎮圧どころか逆効果です。

「んっ」

声が出てしまいました。  
恥ずかしいです。

初めてが奪われちゃいましたよ？  
なんか、この人にどンドン奪われていくような。

「あ……、私のファーストキス……」

「当麻ごめーん！ ファーストキスもらっちゃった！」

貰われちゃいました……。

「お前の幻想（存在）を完膚なきまでにぶち殺す！」

ダメですよ！



私の初めての人が亡きものに！

『世界よ、我に従え！ 我は帰還した！ 主の帰還に歓喜せよ！  
主の帰還に謳え！』

そう思っていたら、いきなりカツコイイ人が叫びました。  
大きな声ですが、心地よいですね。

眼下の人たちもこちらを向いています。  
すごい声です。

でも、今のは何なんでしょうか？

「あの……、あなたは……」

チュツ

あ……、聞いた瞬間キスされました。

「ほめーん、ほうま、せはんどまへ（ごめーん当麻、セカンドまで）

」

キスしたまま喋らないでください！

こしよばゆいです。

「お前の原子すら残さず消去する！」

ダメですって！

あ……

「んっ……あぶっ……」

舌までですか？ ディープですか！？

キスしたのも初めてでしたので、これも初めてです。

なんだかちょっと気持ちいいです。

「ん……ちゆる……」

これは、舌を絡めればいいのでしょうか？

絡めると、ちょっと声が漏れて恥ずかしいですね

あつ……、離されちゃいました。

ちょっと、残念です……。

「ふー、いいお味でした」

そんなことを言ってきましたが、  
すごく恥ずかしいですよ？

「い、いえ……、ありがとうございます、ふふ」

あ、思わずお礼を言ってしまいました……。  
だって、気持ちよかったですし。

「五和！？」

何を驚いているんですか、正当なお礼ですよ？ ……多分。

「五和はもらった当麻！」

貰われちゃいました！

「クソー！ 誰か俺に幻想を殺す力を！」

「はははー、神が許さんぞ当麻！ お前は一生インデックスだけでいいんだポケツ！」

「俺にはあれがお似合いなのかー！ー！！ 不幸だー！ー！！！！！」

あ、そう言えば、さっき叫んだのは何なんでしょうか？

「あの、先ほどの……」

顔すらまともに見れません、恥ずかしいです。

「落ちないようにしっかりと抱きつけ」

「はいっ！」

役得です！ 首に抱きついてみます！

背中を抱きしめてもらえました、キヤー！

「そろそろくるぞ」

「え？」

何がでしょうか？

生理はまだですよ？

顔をあげて見ると、カツコイイ人は上空を指さしていました、

何もありませんよ？

あれ……、

『ラ—————』

なんでしょう……？

世界のすべてが歌っているような声が。

『ラ——ラ——』

喜ぶの？

『ラ——————』

空から光が降りてきました。

なんてきれいなんでしょうか？

ずっと見ていたいですね。

『ラーーーーーラーーーーー』

天使！？ 天使が降りてきます！

数えるのも無理なくらいの天使が……。

これがレクイエムでしょうか？

『ラーーーーー』

勝手に体が震えます……  
怖いです。

「天使……？　なんで？　こんな数……世界の終り」

うう、怖いです……あつ。

優しくキスをしてもらいました。

ちよっと、落ち着きます。

こんな終わり方なら満足です！

『我を崇めよ！　我を畏怖しよ！　私の言葉は世界の言葉！　私の  
願いは世界の願い！』

カッコイイ人がそう叫びました。

うう、天使にそんなこと言ったら殺されちゃいますよ？

『ラ————』

あれ……？

でもうれしそうです、

すごい幸せそうに歌っています。

いまの私みたいです。

って、あれ？

天使達が私に頭を下げています！

壮観です！ 見渡す限りの天使が……。

うん、ちょっと思ってみただけ、

どうみても私じゃないです。

視線の先には……、

カッコイイ人でした。

ですよー……。。



天使にすら愛されるってすごすぎですね。

あ、でも。そんな人にファーストキス奪われた私はすごい？

って、わわっ！

なんか、天使が二人私の前に……。

って言っても、もちろん見てるのは私じゃないです。

私を抱き上げてる人ですね。

うわー、なんて幻想的なんでしょうか？

二人の天使が自分の主人にするみたいに頭を垂れています。

「お待ちしておりました主よ」

「どんなにこのときを待ったでしょうか、おかえりなさいませ主よ」

え？ 主？ え？

「名は？」

カツコイイ人が聞きました。

「『光を掲げる者』、ルシフェルにございます」

「『神の如き者』、ミカエルにございます」

って、神の次にエライ大天使様たちじゃないですか!？

「「なんなりと、命じください。我らは主のため、世界すらも破壊してみせましょう」」

ちよつと、待ってください。

この二人の主って……。

「ふむ、少しまで」

二人が頷くのを見、

『我は世界に命じる、風よ眠れ』

瞬間、すべての風が消えました。

眼下の電気がすべて消えて、爆撃機が落ちていきます。

駆動鎧もとまってますね……？

ちよつと、このカツコイイ人何者ですか！？

言葉だけでとめちゃうんですか！？

「ルシフェル、ミカエル。すべての天使に命じる。ローマ教皇、並びに、神の右席の三人をここに連れて来い。情報は、世界への同調を許可する。天使の制限も解除する。反抗する者は殺せ！ 下のやつらもだ！」

わー、堂々としてますね。

「「はっ、必ずや主の命。完遂させていただきます」」

すごい主従です、でも……これじゃまるで……。

「あの……あなたは……あなた様は……」

まさかですが……。  
でも……、

「ま、そのとおりかな？」

まぶしーです！

その笑顔が！

神様ですか！？

なんか全て納得出来ますよ？

「十字教では、神は人の前には現れないと言われていました。人の危機には天使が現れると」

一応そう習ったんですけどね……、実際目の前にいますしねー、

「さあ、そう言う考えでもいいかもしれない。神なんて気まぐれで、何をするかわからない。今回は俺のわがまま。絶滅するわけでもない。ただ、理不尽なローマ正教が許せなかっただけ。どう思う？  
当麻」

私もあそこは許せません！

「神の勝手に人を殺して、ゆるせねーよ！ 神だろつと何だろつと  
！」

この人はどこまでお人よしなのでしょうか！？

「じゃ、お前は どうする？ 介入しなかったらバチカンの術式が発動して、数億の人間が死ねばいいと？ 下のやつらがそのまま暴れて町を壊し。殺されればいいと？ 俺のは小を犠牲にして大を救うやり方だ。お前なら どうする？」

です。

「俺なら全てを」

「どうやってやる？ お前の理想なんて聞いてないんだよ。現実はどうやってやるかだ。作戦や想像なんて意味ないんだよ。結果以外は何の意味もない夢物語だよ」

この少年にはちょっと呆れてしまいますよ？

「世界は理不尽だよ当麻」

「お前が創った世界だろ！？」

「ああ、争いのない世界だって作れるよ。そんなの全員の自我をなくして、機械のように生態系に入れればいいだけ。世界構造としては間違っていない。お前はそれを求めるのか？ やってやるうか？」  
「なっ！？ 人をなんだとっ！？」

私の怒りが上がっていきます。

この人は世界を知らないからそんなことが言えるんです。

「同じなんだよ、お前の言ってることとそれは。すべてを救う、そんなの意思のない生物を管理するしか無理なんだ。国だろうとなんだろうと結局はトップが束ねるだろ？ すべてをトップが束ねたとして。誰も反抗しないはずなんてないだろ？ だからこそ世界は別

れてるんだから」

神様はやっぱりすごいですね！。  
でも……それなら、

「なら、私達はどうかやって生きて行けばいいのですか？」

助けてくださいー、

「ご自由に、自分の考えを通したいなら強くなれ。誰よりも。途中には争いも生まれるだろう。それでも通したいなら強くなれ。心を強くもて。それを実行出来る実力も。そして、自分の理論に当てはめて、実行すればいい。神が介入するなんて出来ないんだよ。願いなんて叶えられない。願いは他の願いに矛盾しているんだから。多くて、同じ願いなんて一つだよ」

なんででしょうか？

「それは……？」

「世界よ消えろ」

「なっ!?!」

そんな願いが多数あるはずありません！

「これが人々の意思。あとは、金持ちになりたいとか、力がほしいとか、生きたいってのもあるけど。自分主体な願いではなく、世界に対してのお願いなんてこれくらいだよ。世界平和を願う奴がどれくらいいる？ 一番人間で多い願いは世界よ消えろ。生物全てを含めたら人間よ消えろだけだな」

……納得かもしれません。  
自分勝手な願えばっかりですよ、きっと。  
だから神様は降りてこなくなったのかもかもしれません。

「ねえ、五和」

なんででしょう、なにか粗相を？

「はい？」

「もう一回キスしていい？」

「へっ？」

変な声を上げてしまいました……。

だってキスですよ？

しかも、神様です！ それに気持ちいのです。  
神の力でも働いているのでしょうか？

確かめたいです！

決して、もう一度したいからとかじゃ！

「ど、どうぞ」

どうぞしよっ？

目をつむって向けばいいのかな？  
さすがに唇は突き出さないよね？

「やはり刻、お前は殺さないといけないようだ！」

黙ってください幻想殺しの少年！

幻想でもいいんです！ 殺さないでください！

ちゅっ

はふー……。

ホントなんなんでしょうか？

したことないからわかりませんが、

キスってこんな気持ちいいものなのでしょうか？

んー、舌、舌っど。

「ちゅく……んっ……ぢゆる……」

んー、なんか幸せです。

溶けそうですね。

これ、絶対人間には無理ですよ。

脳に直接刺激を与えられているような？

もっとほしいですねコレ、

麻薬ですね。

吸ってみましょうか、

「はふっ……んちゅ……」

もっと、もっとですー！

ふはっ

むー、足りないです……。

離されてしまいました。

「うーん、五和。お前舌使いどこで鍛えた？」

へ？ 舌ですか……、もっと唾液を吸い取れるように必至で……。

「え？ あ、いえ。そんなことしてませんか？」

あれ？ この返事でいいよね

「そっかー、お前の舌ざわりいいな」

舌ざわりですか！

だったらもうちょっと……続けても……。

って、その笑顔は反則です！

神の威光が！

「いえ……あ、ありがとうございます？」

はずかしくて顔が見れませんが、

お礼は大事です。

もう一度あとでもらえないでしょうか……？

神様すごいです！

キス神様と呼びましょう！

でも、慣れてる感じがちょっと残念ですねー……。

私初めてだったんですけど……ぐすん、



って、あれ？ 上から何かぶっってきましたよ？

六四話 偽神の右席（前書き）

文章気分BGM RADWIMPS

聞く音楽によって文章が変わる特性

RAD知ってる人いたらうれしいな

最後の方作者暴走しまくり。

エロくなっています。

六四話 偽神の右席

アビニオン上空

「とうまく何また危ないことしているのかな？」  
インデックスが怒っているようだな。

下降してきた正体はローラ、インデックス、ステイル、神裂を乗せた火龍だった。

おー、元気にしてたんだな『世界を焼き尽くす龍』だっけな名前。

俺は当麻を龍の上に移動する。

「何してるでありけるのですか？」

ローラが声をかけてきた、

「五和と逢引？ だよなたしか？」

五和に聞いてみる。

「は、はい」

そつらしい。

ローラがぶちぎれそつだ。

「落ち着いてください馬鹿最大主教様」

ステイルが渡し船を、

「誰が馬鹿でありけるか！？」

怒らせただけだった。

せめてアホにしとけ。

「まー、一言で言うと。ローマ正教潰そうと思ってな」

俺がそう言うと、当麻以外が目を丸くして驚く。

「だ、だって、あなたは私たちに協力しないと言いけるのに」

「黙れアホ。刻様だろ？」

「ぐす……、刻様はそう言い切ったでありけるですよね？」

とりあえず訂正させないと。

買ひ犬は賤けないといけない。

「協力してないぞ？ 俺はただ、ローマ生教の在り方がむかつくから潰すんだよ。つかお前ら敵だったの？」

「そうでありけるですよ。ローマ生教＋ロシア成教VSイギリス清教＋学園都市みたひになっているんです」

ふむ。

「じゃ、邪魔するなよ？」

「わかり」

「インデックス刻を止める！」

当麻が邪魔をする。

「とーまの頼みなら、でも、これから浮気しちゃうだめなんだよ？」

ほっ？

「イギリス正教は俺の敵になると?」

俺はニヤリと笑い言ってやる。

「い、インデックスやめたほうがいいぞ? まじで、殺される」

ステイルがんばれ。

「だ、大丈夫だよ! 一人くらいならわたしでもいけるんだよ!」

その時、

『ローマ教皇および、偽神の右席確保しました。主様』

通信が届く。

ちょうどいいな。

「ステイルも俺に逆らうと?」

俺は言ってみる。

「インデックスがそうするなら……仕方ないか」

ステイルが構える。

「ローラは?」

「わ、わたしは今日のかえろつかなど」

「アークビショップ」

「わ、わかったでありけるよ」

こうなるのかよ。

「神裂もだよな？」

俺は神裂にも問いかける。

「最大主教様が戦うなら」

結局こうなるのかよ。

「イギリス清教最強の布陣でありけるです！」

「はあ、じゃ、俺も最強の布陣でいくから」

めんどいよ……？

「そ、そんなのいないんだよ！ ここには結界が張ってあるんだよ  
！」

いやいや、それは人間用じゃん。

『パチンッ』

俺はすべての天使を呼び戻す。

空を覆う、天使、天使、天使。

数十、数百、数千万の天使が空を埋め尽くす。

「な、なんなのでありけるかですか……」

「何ですかコレは……」

「とーま、やっぱり私かえるんだよ……」

「最大主教様、私ちよつと用事が……」

天使はただの守護だ。

世界か神の意志なら無限に生み出せる。

そして、世界の意思より、神の命令が上位に立つ。

つまり、俺の意思で無限に天使は増やせるのだ。

「で？ 闘うのか？ ローラ、ちなみにその龍もステイルより俺の方が上位命令権持つてるから言うこと聞かないぞ？ ついでに言う  
と、インデックスの本も俺が削除出来るぞ？」

龍の上の5人が青ざめる。

「当麻、さつき言ったけどさ。自分の意思を通したいなら強くなれ。強さを伴わない意思なんてゴミと一緒にだ。ヒーローが強いんじゃない、強いからヒーローなんだよ。俺が神だから強いんじゃない、強いから神なんだよ。人間と同じ神なんて誰も神なんて思わないだろ？」

ま、実際は神だから強いんだけど。

「だけど、俺は……」

さすがヒーロー！



「ああ、強くなれ当麻。RPGみたいなもんで、弱い奴から順番に倒して強くなれ。いまのお前はいきなりラスボスに挑んでるようなもんだぞ？ 今はあきらめろ。お前の意思なんてまったく役に立たん。強くなりたいなら、目に焼きつける。俺の自己満足を。神と言う名の無慈悲な暴力を」

俺は当麻を見つめ言いきる。

「あと、ローラ。お前は後で全裸の刑な。部下の責任はお前がとるんだろ？」

ニヤリと笑ってやる。

「とき、それ」

「トキ様だ」

「トキ様……ぐす……」

言う気力も根絶やしにした。

「ミカエル、ルシフェルつれてこい」

俺は声をかける。

空間を固定し、

その上に俺は着地し、ローマ教皇と、神の右席を三人つれた天使が着地する。

早速何か仕掛けてきたな……？

「五和、ちょっと離れててくれ。絶対敵を見るなよ？ 目をつむっ

ている。安心しろ。守ってやつから」  
「は、はい」

俺の言葉に従いぎゅっと目をつぶった。  
少し紅くなつたようだが、なんだ？

俺は連れてこられた四人に向きなおる。

ローマ教皇　腰の曲がつたじーさんだ。んっ？

「おい、ローラ、この教皇なんもしてないぞ」

おかしい、こいつが指導者では？

「ただの操人形でありけるです。実際は、神の右席がすべて支配してます」

ふーん、

俺は、青ざめている教皇に声をかける。

「教皇、あんたはいらん。ただし、もし虐殺や無謀な術式を展開したら、信者もろとも殺すからよろしく」

ガクガクとうなずくのを見、

「天使よ、こいつを下に連れて行け。あと、信者の騒ぎを収めるようにさせる」

天使が数人、ローマ教皇と一緒に消える。

さて、

問題は。

天使の情報によると、

前方のヴェント 全身ピアスかよ、この女……服も全部黄色だし……、センス疑うぞ。

てか、こいつも何か俺にしかけてきてるな。  
解析はあとでいいか。

後方のアックア 茶髪の白人ね、蒼いゴルフウェアみたいな服きてるし、空気中の水分掌握してるなー、とりあえず。従った振りしとけて命令出しとくか。

俺は掌握できないし。

右方のフィアンマ ほう、こいつがサーシャを監視させた本人か。俺を叩き潰そうと何かやってるな。てか、実際全部コイツの命令だな。

ま、命令聞いた奴には罪がないって言う考えは嫌いだ。  
そんなこと言ったら、組織の部下なんて誰も捕まらない。

「えーっと、どうすっかな。俺さ結構キレちゃってんだよね、君たちの行動に、在り方に」

存在に」

俺は眼を細め、見つめながら冷めた声をかける。

「当麻、こいつの記憶覗いてみたけどさ、ヴェントってやつ。お前闘ってみただろ？ どうだった？」

少し離れた当麻に声をかける。

「えーっと、天罰術式って言うらしい。インデックスによると神様に唾を吐くものは誰であるかと許さないとか、敵意を向けたら昏睡するらしいから気をつける？」

うん、既にめちゃくちや受けてるけどね。

てか、当麻は神にめちゃくちや唾吐いてるけどな？

神だってそこまで、無慈悲じゃないぞ？

どっちかと言うと、人間の環を委ねは尊重するし。

「あー、えつとヴェント？」

俺が声をかけると、

俺の前に走ってきて、ひざまずく。

「神よ、どうか我らに祝福を」

ふーん、記憶の喋り方と違うな？

「うん、別にいいよ？ あとさ、君が今使ってる天罰術式って、天使にも俺にもきかないからね？ でさ、思っただけど」

俺は眼を細め、

「神ってさ、恨みを背負うのも仕事だと思うんだよ。天罰っておかしいと思う。でね、そんな術式を使う君に、プレゼントがあるんだ

」

俺はニヤリと笑い、

「君は敵意を向けた相手に天罰を下すんだよね？ だったら君自身は誰にも天罰を向けてないはずだよ？ だから……、君がだれかに敵意を向けたら存在の抹消。これがプレゼント。どう？」

「なっ!?!」

驚いているようだが、

「当然だよ、でも安心して。慈悲深い君なら大丈夫でしょ？ じゃ、ルールをプレゼント『パチンツ』」

その瞬間、ヴェントは消え去った。

「あれ？ おかしいな。大丈夫だと思ったけど。人を呪えば穴二つつてね」

一種の呪いだし。

一方的な呪いはダメだな。

そして、俺は二人目の前に立つ。

後方のアックア

「君は罰を打ち消すって能力があるんだよね？　あとは水掌握だけ？　やってみたら」

俺は眼を細め言い放つ。

「なっ!？」

出来ないようだな。

「さーて、じゃあ、君の大好きな水で、罪を洗ってしまおう。今から君の術式を壊すから。あ、もちろん罪がなかったら術も返すからね。そうだな……、過去に殺した人数がいいかな。一人につき10ミリリットル水飲んでもらおう。大丈夫だと思うけどさ。お腹が破裂しそうになったら消えるようにしてあげるから。さて、ルール開始『パチンツ』」

俺がルールをつけると、アックアのお腹がみるみる大きくなり、まるで赤子が入っているようにパンパンに……服を突き破り……、そのままアックアは消えた。

「あー、もうすこし罪に向き合おうね？　聖母の慈悲だって無限じゃないんだよ？　聖母から溢れた罪はどこに行くんだろ？」

さて、三人目

右方のフィアンマ

「ふーん、君がリーダーだね？　んー、じゃあ。君はどうしたい？」

問いかける。

「俺様が、なぜ  
『パチンツ』」

「ごめんね、わずらわしいから声は奪わせてもらったよ?。」

口をパクパクさせながら、顔を青ざめさせる。

「聖なる右ねー……」

俺はフィアンマから生えている光の右腕を引きちぎる。

「たしかにキレイだよな? だつたらさ。この“聖なる”右腕に付着した血の分量、君から血を飛ばそう。やっぱり聖なるってくらいだから、血に汚れることなんてないよね。たまたまかかった血くらいなら、1デシリットルもいかないんじゃない? あ、安心してね。血が足りなくなったら皮膚や骨や肉で代用するから。ま、そんなことないよね?。」

俺は冷酷な笑みを浮かべ、フィアンマを見つめる。

口をパクパクさせている。

「終わったらちゃんと声も返すから。血も全部霧散させるから汚れないしね。はい、ルール開始『パチンツ』」

俺が指を鳴らした瞬間、その場には服だけが残された。

「神の右席が聞いて呆れるね。聖なるなんて、けがれた右腕の間違いいじゃない?。」

俺は後ろを振り向き、

「おいで、五和。もういいから」

かけてきて、俺に抱きつく。

ちょっと涙目だから、多分声で何が起こってるか想像したのかもな。

「あー、ごめん。ちょっと神の裁判を

」

ちゅっ

いきなりキスをされた…。

あれ？

俺当麻と違ってフラグマスターじゃ……。

あー、キスに幻惑使ったんだよな……。

洗脳じゃなくて。

落ち着くとか、幸せな気分になるとかそんな感じの。

うん、俺悪くない。

「んっ……ちゅる……」

ああ、ファーストキスすらまだだった女の子が……。



舌使いがすごく、てか全部吸われる。

「ぢゅ……ぢゅるっ……」

吸われる!?

どうしよう、ちょっと快楽をあげて。

「んっ!……ぢゅぶ……」

んー

「ぢゅる……くちゅ……」

あ、無理。

余計ヤバくなった。

ぶはっ

「はぁ……はぁ……」

疲れた。

「とぅわわっ……」

ああああ、へろへろだこいつ。

焦点がおかしい！へにやっとなってる！

まずいな、下限が分からん、俺は限界を知るべきだ。

あ、ちょうどいい実験材料が。

「さーで、終わったし」

俺は当麻達に目を向ける。

五人とも顔を青ざめさせているが、

「ローラちょっと引き渡してくれ」

俺がそう言う。

「い、いや、なのです、つてあれ？　ねえ？　何でみんなして私を  
押さえるでありけりますか？　ねえ、私一番偉いんだけど？」

4人が主教をこちらに放り投げてきた。

俺はそれを捕まえ、

ニコリと笑う。

「五和、ちょっと待ってる？　今からお前に出来るか、ちょっと実  
験体を使うから」

「はい、そのあとお願いします」

「さーて実験体、覚悟はいいか？」

俺はにこりと笑い、ローラをこちらに向かせる。

「な、なんでありけるか？ わ、わたしは最大……はむっ」

さーて、

「んむっ……ちゅる……」

ここで一気に最大まで快楽を、

「んんんんん！……！！？………くだあ……」

「あ」

一瞬にして失神した。  
痙攣してるし……。

失神と言うか……失禁していたが、さすがにかわいそうだから速攻で消した。

なんか、怖い……涎が口から……。

「神裂神裂！ 試そうか？」

首をぶんぶんと振る。

そう言えばさっきインデックスが……。

俺はインデックスを一気に手元に転移させ、

はむっ

「んっ!？」

驚いたようだが、

「ちゅく……じゅ……」

さて、さっきの半分くらいで。

「んんひゃ!!?……くたあ」

ダメだった。

失禁までいかないけど痙攣してるし……。

俺は五和に振り返り。

「ダメだ五和、こんなになっちまう」

「大丈夫です！ 耐性付きましたので少し抑えていただければ」

ふむ……。

ちゅっ

「はむ……じゅる」

少し抑えて

「んっ!?!?……ちゅぷ……」

うん、行けるか?

「んまふ!?!?」

今度は俺が驚く番だ。

こすりつけるな!

服の中に手が!

さするな!!

仕方ない

「んんん!?!?……くたあ」

ぷはっ

俺は倒したぞ!!

……すまん、五和。

お前危なかった。

痙攣してる五和を抱き上げてやる。

「あー、ちょっと、これ引き取って?」

当麻達はこちらを見ていなかった、必死に三人で何か話している。  
現実逃避。

三人の真ん中に痙攣中のローラとインデックスを転移してやる。

「「「ひっ!」「」」

三人ともひどいな。

「あー、天使たち、もういいぞ。帰って、また何かあったら頼むな」

声をかけると、一度頭をさげ、消えた。

「ときさま」

ひっ!?

五和復活早い!?!?

「」

目の焦点おかしいって!?

俺の手をどこに持って……濡れて……いや――――！！！！

あ、ごめん。

また、やっちゃった。

しかも全開で。

これしばらく起きないだろうな。

失禁は……転移させたから安心だよ？

はあ、連れて帰るか……、

涙子になんて言われるか……。

六四話 偽神の右席（後書き）

わーお。

調子に乗った。



六五話 地球との別れ。(前書き)

気分BGM HY 出会い

## 六五話 地球との別れ。

### マンシヨン自室

結局、あれから数週間経ったけど、まだ地球にいた。

学園では、報道規制がされているのか、神とか天使のことはニュースでやっていない。

今は、ハクが完全にバックアップするまでの時間である。

涙子と五和は未だに泊っている、

学校とかどうなってるのか気になるが、涙子は確実に休んでいる

だろう。

早く渡らないと絶対留年する。

中学で留年ってないのかもしれないが、この世界はわからん。

救いとしては、二人とも俺が渡ることには納得しているようだ。

涙子は、俺が心配しないで渡れるようにデートしたかったらしい。テツラが来なかったら、俺と試合したとか。

五和は十字教つてのに入っているだけあって、神がどういうものが理解しているらしい。

最近には涙子に感化されて、全裸主義みたいになっているが。

涙子が裸で俺に抱きついていてのを見て、俺の唯一のはじめてを奪われるとか。

奪わせるつもりなんて誰にもないけど。

実力、名声（童貞）ともに神でいたい。

最近ではローラがよく、キスをせがんでくるが、失神させて送り返している。

アイツにだけは全開でやっても罪悪感ゼロだ。

年増だし。

いつそ、歳相応の姿にしちゃおうかと思ったけど、  
そしたら死にそうだから、やってはいない。

ローラの話だと、ローマ生教＋ロシア成教VS学園都市＋イギリス清教はなくなったらしい。

ローマの教皇が普通の主教となったらしいのだ。

学園とイギリスはもともとパイプラインがあったらしく、仲良くやってるらしい。学園側になにか思惑があるらしいが、ローマがいなくなればなんとか出来るとか。

当麻とは仲直りしたけど、やっぱり俺のやりかたは気に食わないらしい。

うん。それでこそヒーローだ。

そういえば、エルに聞いたところ、天使はほとんど自我がないらしい。

二大天使はすこしはあるが、エルもなかったらしい。

エルには、サーシャの自我が根付いているとか。

あと、火のページの影響があるかも、と。

再構築されたせいで二大天使より、強大な力を得たらしい。

それなら、と。翼を6枚つけたら、何が何だか分からなくなった。

翼だけで、飛ばせて遊んだりしてるらしい。

さて、そろそろいくな。

挨拶は二人でいいか。

「二人とも、そろそろ俺出るけどいいかな？」

二人は一瞬、きょとんとしたものの、その意味に気づいて慌ててこちらにやってきた。

「マスター、戻ってきますよねー？」

「もう、行くんですか？」

うーん……、

涙ぐまないでほしいんだけどな……。

「そうだなー、時系列で言えば、来るときは数分後にまた現れるかも？ その時俺が何億年歳重ねてるかわからんけど。見た目は変わらない。てか、もう行くなって、結構長くいたぞ？」

うーん……。

「何か記念にほしいものとかあるか？」

なんか、いつももらってばかりだしたまにはいいかな？

二人は少し考え。

そして

「不老に」

と、言いきった。

俺は目を丸くした。

「いや、お前不老って大変だぞ？ 寿命延ばすとかじゃないと成長

しなくなるし。まったくそのままの姿で一生だ。俺みたいにタバコも吸えなくなるぞ？ 副作用として、病気にはかからないが」

不老だけはおすすめしないな……。

「いえいえ、これは契約なんですよ？ 刻さんへの」

五和がそんなことを言ってきた。

「そうですねー、もし、マスターが帰ってこなかったら、私たちは永遠を生きなきゃいけないっちゃいます。つらいでしょうねー、初春とかの死に目を見なきゃいけないし」

あー、そう言うことが……。

「だからですね」

二人は目くばせし、

「絶対に戻ってきてください。私たちを、永遠の生から解放できるのは刻さん（マスター）だけです」

なんとも……。

「さながら呪いを受けたお姫様ですね、呪いをかけたのは王子様ですが」

けらけら笑いながら涙子が、

「もちろん断りませんよね？ “記念”ですし！」

泣いてはいるが、満面の笑顔だな、五和。

俺は一回溜息をつき、

「わかったよ……契約を此処に」

ちゅ

「んっ……」

ちゅ

「あふ……」

二人に軽くキスをする。

同時に寿命を永久に再構築。

「これで、お前らは死ねないぞ。死が安息だとしたら安息はもうない」

二人は自分の体を見回していた。

「どこも変わりませんか？」

首を傾げる五和。



「あと10年たてば変化がすごいぞ。普通は大人っぽくなるのに、お前らはずっと子供。50年たてば全員ばあさんじいさんなのに、お前らは子供。俺が戻ってこなかったらイギリス清教でやつかいになるくらいしか道がないぞ。働けないし。まあ、お前らなら喉から手が出るほどほしいだろうけどな。神の加護あるし」

そう言って、俺は二つの槍と、ナイフを創りだした。  
レンの鱗製だから光輝いている。

それを二人に渡してやる。

「ま、涙子は能力あるから、護身用ナイフだ。五和には槍壊しちゃったから、変わりのな。両方所有者以外は使えない」

二人はその光輝く刃物を、うれしそうに見つめる。

「マスター……これって、もしかして……」

ま、そのとおりだな。

五和の長い槍が天井に……、って！

「あつ、待て五和！」

「え？」

五和が言葉を発した時には既に遅かった。

天井が完全に消滅した……。

「え？ ええ！？」

五和が焦っているようだが……。

俺は天井を創造し、二人の武器の刃にレン製鞘をつけてやる。

「五和、神が与える武器なんて普通なわけないだろ？ 歴史でも見てみる。神が与えたのなんて、どう考えてもオーバーテクノロジーか神秘だろ」

二人に渡したのは、サーシャやエルに渡したのと同じだ。

「あたたった瞬間、相手は消滅するぞ？ 鞘がない状態だと、お前以外が持ったら消滅するセキュリティ付き」

五和は驚愕し、恐る恐る、一緒に渡しておいた薙刀用の袋に収めた。

「ま、俺がいない間の護身とでも思ってくれ」

肩をすくめながら言っただけ、

いきなり、五和が胸の前で両拳を握り、

「がんばって処女を守ります！」

啞然とした、俺的には子供でも作って幸せになってほしいんだが

……？

「ま、期待せずにいるよ」

俺はそう言い、

「じゃ、そろそろ行こうかな」

俺は立ち上がり、

「待ってください、お別れは海岸でお願いします」

海岸？ エルと闘った場所か？

「んー、別にいけどなんで？」

二人は慌てたようで、

「え、えーと。ほ、ほら！ お別れって海岸がベストじゃないかと」

よくわからない原理だ。

「ま、いいや。この家はお前達にやるから、権利書はめんどくたそこの引き出し。管理人には話通してあるから。数十億もしたしもつたいたい。と、」

あ、忘れてた！

「下着くれ」

二人は一瞬時が止まったように硬直し、

せつせと脱ぎだした。

」「どっぞー」「」

全裸のまま、上と下の下着を手渡してきた。

俺はそれを収納する、

そして、そのまま二人が抱きついてきて、

俺はまた、アレか？ と思ったが、

「ぐすん……マスター、やっぱりさびしいです……」

俺に抱きつきながら泣きじゃくる涙子。

「うっ……、絶対もどってきてください……えっぐ……」

同じく五和。

俺は二人の髪をやさしく撫で、

「戻ってくるよ……、俺には時間なんてあつてないようなもんだしさ。俺はこの世界の神だぞ？ お前達に寂しい思いなんてさせないよ」

そう微笑みかけ、服を転移で着せる。

そして、俺達はその場から消える、

二人は数時間〜数年後、

俺は数億〜兆年後に再び出会うであろう場所を後にする。

海岸

ふむー、なぜだ？

「涙子、五和。連絡した？」

俺はしてない。

「あたしがしましたー」

元気よく、涙子が言うが。

二人だけでよかったんだけどな……？

空を埋め尽くす天使、天使、天使。

地を埋め尽くす、人、人、人。

更に空、地で転移魔法陣が光輝く。

あー、初めてだぞ………こんななの？

どうすっかな。

とりあえず、五和と涙子を近場の固定した空間の上に乗せる。

「あー、天使たち。なにこれ？」

俺は天使たちに聞いてみる。

「我らの主の旅立ち、駆け付けぬわけにはいかないでしょう」

「世界との同調で知り、駆け付けました」

あー、そっぴやコイツらまだ同調させておいたんだ。

俺が命令しなくても実体化できるように制限も切りっぱなしだ。

「これから頼むな。俺が戻ってくるまで。同調と制限解除は維持させておくから。あまり人を殺すなよ？」

俺は二人を見つめ、言葉を発する。

「はい、我らの主の命、かならずや」「

二人がうなずき、

『ラーーーーーラーーーーー』

天使達が謳う。

『ラーーーーーラーーーー』

俺の旅立ちへの謳。

そのキレイな歌声を聴きながら、

「で、お前達はどうした？」

眼下の人間に問いかける。

「わ、わたしは責任をとつてもら」

「黙ってください馬鹿最大主教様」

「ぐす……」

最後までバカやってるな、ローラとステイル……。

結構お似合いじゃ？



片や婆さん、片や14歳だけどさ。

「あなたは」

そこでステイルが口を開く、

「あなたは、ただの我がままで神の右席を殺したと言いましたが！  
それでも救われた人はたくさんいるんです！ アビニヨンの市民  
や観光客、術式の効果範囲！ 利用されたローマ生教、ロシア成教  
の信者。我々、イギリス清教、学園都市。確かにあなたのがま  
まかもしれない。それでも」

ステイルが一旦言葉を止め、

「ありがとうございます。まだまだ、問題が多いこの世界  
ですが！ 私達はこの世界に生を受けてよかったと思います。どう  
ぞ見守っていてください。神よ」

そう言って、頭を下げる。

すべての人間が、天使が頭を垂れる。

この世界を創った俺に。

ああ、前の俺よ。

お前の創った世界はちゃんと廻っているよ。

力強く廻っているよ。

神がいなくなつて、

これが人間、神の最高傑作の人間。

強く根を張り、小さき器で世界を廻す者。

さすがに、この人数に見送られると涙がとめられないな……。

俺は叫ぶ、

『我はこの世界の創造神 如月刻！ 見守ろう人間たちよ！ 世界が終るその時まで！ 我は神として汝らを見守ることを約束しよう！ すべてを包み込み、すべての成長を司る我が！ 汝らを包み、成長させることを約束する！！ 汝らも見守ってほしい！ 神を！ この世界の神はどんな神であるか！ 汝らを見守るに値する神か！！ 』  
だから

俺はあふれ出る涙を止められないでいた、

歌声の中で、涙を流し続ける神。

『一緒に、歩んでほしい！ この星を！ 世界を我と一緒に！！ いつかまた会おうぞ人類よ！！ ありがとう！！』

俺はそこで叫ぶのをやめる。

「涙子、五和。世界は美しいよ。汚い部分もあるけどさ。それを差

し引いても余りあるほどに美しい」

俺は泣きながら二人に笑いかける。

「当然です。マスターが創った世界ですよ？」

涙をこぼしながら俺に聞かせてくる。

「感謝します。私達を産んでくれて」

泣きながら微笑む五和。

「「いつてらっしやいませ、我らの神よ」「」

二人がそう言い、頭を下げる。

すすり泣く声が聞こえるが、

ありがとう二人とも。

俺は今回も安心して渡れそうだよ。

俺は海岸に背を向ける。

「刻！！！」

俺の背に当麻が声をかけてくる。

「俺達は！！ 友達だよな！！ まだ、納得いかないけどさ！！」

俺強くなるよ！！ 意思が通せるくらいに！！ だからさ！ 友達なら遊びに来い！！ いつでも待ってるから！！！！」

ありがとう、当麻。

お前は俺のヒーローで友達だ。

背を向けたまま狭間へとつなく、

また会おう、俺の子供たち。

いつかまた。

俺も成長するよ。

お前（世界）も成長しろよ？

ありがとう、世界よ

次の瞬間、俺は狭間へと転移した。

六五話 地球との別れ。(後書き)

とある〜終わり。

次どうしよう……

六六話 第四の世界は大鏡？

狭間

「ぶち殺すぞハク！」

我慢の限界なんて既に1000年くらい前に通り過ぎた！

3000年くらい経ってるぞ!？

「待ってくださいよー……、ちょっと問題が……」  
「今度は何だよ？」

くそっ、もう、絶対レンの姿戻せないって。



狭間で戻したけど500メートル超えてたし。

もう壁だしあれ。

大きさ変えようにも、レンは時間 空間 幻惑耐性ついてて無理だし。

「うーん、見てください説明しますから」

俺はハクの手元を覗き込む。

「まず、これが時間のページのある星です」

「おい、これのどこが星だよ？」

暗黒の星だこれは。

すべてが闇に覆われてる。

明らかに太陽すらないぞ？

「黒の本が創った星ですね。一応、地下に少しだけ人間が住んでいきますよ。地表は魔物しかいませんが」

こんな世界行きたくないぞ……？

「で、これが空間のページがある星ですねー」

うん、これも星じゃないだろ？

もう地表すらないぞ。

機械の集合体のような物が宇宙に浮かんでる。

と、言うか……。

「この生物は何だ？」

「この世界の人間のようなものです。見ての通り無機物に無理やり生命を与えていますね」

まるでエイリアンとか、機械の蜘蛛のようなものが闊歩している。

「これは創造の本が創った世界ですね。この二つの世界は、ルールで魔法が効きませんから、肉弾戦ですよ？」

いやいや、無理。

だって、明らかにデカイし人間ですらないし。

「世界の神のほう上位命令もってますので、ご主人さまのルールが適用されません。だから最後に回した方がいいですね。ページ的には魅力的なんですけど……」

ってか永久に行きたくないぞ？

でも、

「うーん……とりあえず、少しだけ見に行こうか？ どれくらいの敵なのか」

俺はそう言ってみた。

「んー、別にいいですが……、お勧めしませんよ？ これが座標です」

俺はハクからもらった座標に転移する。



何故、此处に5000年も居たかというと、理由がある。

「だから、言ったじゃないですかー……」

うん。わかった。

「あれはないわ……」

正直甘く見ていた。

黒の本の星に行った。

魔法が全く使えなかった。

そして、白刻刀が全く通じない。

加速すら出来ない。

結果、世界を無理やり暴走して、雑魚一匹を倒した。

俺はアメーバ状態になり、おっさんに外部から転移してもらった。そして、それからずっと回復。

いま、やっと完全回復だ。

あれはダメだ。

「ご主人さま、魔法が使えない状態での戦闘を覚えましょう。一番いいのは、ご主人さまの世界の守護者を創る方法です」

そんな事を言ってきた。

「守護者？」

「はい。正確には、魔力を外部媒体として顕現させます。剣に宿すくらいしか出来ませんが。あと、もう少し強い武器データを世界から持ってきてみましょう。まったく通じません」

ふむ、それが出来ればな。

「わかった、どうやるんだ？」

「はい、とりあえず次の世界に行きましょうか？ それを見てから決めましょう」

まあ、それがいいか。

「で、あとの二つの世界ですが。前のご主人さまが創った世界です」

あー、もうわかるぞ？

「で？ 小説から創ったと？」

「はい、漫画かも？ 違う世界も今度回ってみましょうか。色々ありますから」

けらけらわらいながら言うてくるが……、。

「で？ ページがあるのは？」

「二二と、二二です」

ふむ、なんとなくわかるけどさ。

「俺ほとんどみてないんだけど……」

俺はため息をつきながら答えた。

「はあ…… オタクが聞いてあきれます。有名どころですよ？」

「いや、俺主にRPGしかやらないし。RPGの世界ないのかよ！  
てかね？ 有名かも知れんが。これ何の世界だよ？ 特にこっち」

俺は、なんかすごく危なそうな世界を指さす。

「大鏡ですよ」

もう、明らかにおかしな方面言ってる。

「それって紀伝体の歴史物語だよな？ 四鏡の一つの？ 平安時代  
？」

小説じゃないし。

「本当はそのつもりだったんですが、地のページがかなり昔に侵食  
してしまったので、物語の原型なんてありません。西暦が30世紀  
に近いので、文明レベルは学園都市並ですね。あと、この世界は魔  
法ではなく“呪”ですね」

そんな事をハクが言ってきた。

「陰陽師のか……?」

「はい。安倍晴明が生まれるはずだったのですが、先祖が殺されて生まれませんでした。完全に別もの世界ですね。しかも、地のページが数ページごとに飛び散って最悪です。全部倒さないとページ収集も出来ません」

もう最悪な世界だな。

俺のせいだが。

「くそつ、俺はこの怒りをどこに発散すれば!」

「美少女で発散してはどうでしょうか? 私とかどうでしょうか?」

「いらん。お前はペットだ」

「性ペットですか?」

「ちっげーよ! 性ペットってなんだよ!」

「又の名を性奴隷」

「そっちが主流だろ!」

はあ……、疲れる。

「もういいや、お前は俺の中にも入っててくれ」

俺はハクとレンとエルを中に入れる。

ハクのデータ通りの場所に転移する。

街？

ふむ？

結構普通じゃないか？

活気あるし。

でも、学生しかないな。

『そうですね。ご主人さま、上空数キロに転移してみてください』  
？ よく分からんが俺は転移した。



## 上空

「なんだこれ？ 街を結界が包んでいる？」

眼下には結界に包まれた街。

円形の10キロ程の街だ。

街は文明が進んでいるが、周りが荒野だ。

しかも……、これは。

「魔族から放出されている害のある呪力ですね。人間の持つ呪力とは質が異なります。ご主人さまは周囲に魔力を纏っているのですが、普通の人間じゃ生きられません。それを守っているのがあの結界。地下に通路があり、街が点々としてますね。ここは学園都市ではないでしょうか？ 陰陽師を育てる」

ふむ、予想以上にひどいな。

とりあえず、俺は街に転移する。

学園都市？

路地裏に移動した。

「どうしよう。俺、式神とか使えないし。九字とか呪符も使えん…」

「だからですよ。守護者を作りましょう。集まったページの属性の守護者を。それなら符に込められますし。ですが、いっぱい居ても困るので、ページ属性をまとめて一匹、もしくは一人にしちゃいましょう」

ふむ、使えるに越したことはない。

しかも、宿せるって言うのは魅力的だ。

剣に宿せれば今後役に立つ。

「どうすればいい？」

「はい、深層世界に一度落しますから。そこで作りましょう」  
「わかった。やってくれ」

俺がそう言うと、俺の意識は薄れてゆく。

## 深層世界

意識が戻ると、俺の世界にいた。

「てかさ、レンとエル俺の世界破壊して遊んでるじゃん……？」

ステージ壊して遊んでる。

壊した所から戻るが。

「安心してください。これくらいなら魔力すら減りません」

ハクが教えてくれるが、一般人の世界だったら宿主死ぬぞ？

「まあいいや。で、どうやって創るんだ？」

「はい。手を世界につき、世界を守る者を創造してください。ご主人さまの世界なら最強クラスが生まれますよ。神ですからね」

ふむ。

俺は、地に手を着き、

『E i n H ? t e r , d e r u n s e r e r W e l t f  
o l g t

I c h m a c h e d i e S c h

a f f u n g g h i e r 『

《我が世界を守る守護者よ 我は此処に創造す》

姿は龍がいいな。

ドラゴンではなく、日本で言う龍。

俺の所持属性を龍に付加。

むしろ、世界にそのまま意思を与える。

俺の前方が光輝き。

光が納まる。

そこには、

「おい！」

普通に女の子だった。  
龍ですらないぞ？

女の子は俺を見、

「あ、すみませんごめんなさい申し訳ございません、むしろ死にます」

そんな事を言った。

だが、力はかなり強い。

「愛してます、好きです大好きラブです、むしろ私を好きにしてください」

言葉使いはおかしいが……。

「えー、ハク。何でこうなった？」

ハクに聞く。

「ご主人さま、この世界を意思にしましたね？ 中にはレンちゃん  
とエルちゃん、私が住んでいるんですよ？ 三人の意思が結合され  
ています。だから、三回言葉を発してますよね？ さっきのたと『好  
きです、大好き、ラブです』ってところですよ。そして最後にまとめ  
た言葉を発してます。私たちの愛の結晶ですね！」

言いたいことはわかるが、うーん。

「とりあえず、ワールド。ルード、ワード、ルー……。お前の名前はルーだ！」

俺の言葉に、胸の前で両手を組み、目をつむっている。

「ルー……。ルーですねルーですよルーだよ、むしろルールを無視して私を犯してください」

なんか色々残念な女の子だった。

髪は膝もとまである白。しかし、光を反射した部分が虹のような色彩を帯びる。

瞳も黒点以外は白、こちらも光を受けると虹色に輝く。

透きとおるように白い体。

胸はレン並だろうか？

身長はちっちゃい。

140ちよい？

「ルー、ちょっと姿戻してくれない？ 出来たらでいいが」

俺は龍を思い浮かべた。

この姿は化身であるはずなのだ。

「はい、出来ますよ出来る出来るね、むしろ交尾も出来ます」

もう最悪な性格だ。

そう思っていると、ルーの姿が輝き、形状が変わる。

そして、30メートルくらいの黄金の龍になった。

光を反射すると、虹色に輝く。

長くて美しい髭が生えている。

首の周りには柔らかかそうな毛がもさもさ。

色が違ったらシエンロンだな。

「いいぞー、戻って。美しい龍だな」

ルーは人型に戻り、俺に抱きついてくる。

「美しいですか？ ですよねですか、むしろ結婚したいですか？」

そんな事を言ってくるが、

「いや、今のお前は可愛いって感じた」

俺の言葉に嬉しそうに、両手を頬に添え、悶える。

「えへへへ、可愛い可愛いですか可愛いですよね、むしろ可愛がり殺してください」

可愛がり殺すってなんだ！？

てか、こんなんでホントに宿れるんだろうか。

俺は一枚の紙を削り、自分の血を垂らしてみる。  
文字なんて知らないし。

「おい、ルー。ここに入れるか？」

「はい。入れる入れますよ入れますか、むしろ私にインサートしてください」

こいつは最後に下ネタを入れるんだろうか？

突如、光となり、ルーが紙に宿る。

血が少し光輝く。

「とりあえず、炎かな」

……、呪符の使い方なんて知らないぞ？

とりあえず俺は投げてみた。

まるで、風の抵抗がないカードの様に飛んでいき。

突如、炎へと変わった。

それが、炎の龍のようになり、あたりを焼き尽くす。

てか、これ普通の呪符か？

威力たっか……。

「さすがご主人さまの世界の顕現ですねー、一枚でやろつと思えば  
周囲ほとんど焼きつくせます！」

嬉しくねーよ……、今度から力調整しよつと。



はいはい、掌握つと。  
あたりの炎が消える。  
ルーの姿も呪符の姿も消えた。

「え？ え！？ 使いきりでルー消滅！？」

スゲーかわいいそうだとぞ！？」

「はい、呼びましたか呼びましたね呼びます、むしろ予備の奴隷ですか？」

普通に俺の前に現れた。

予備の奴隷ってなんだ？

「あれ？ お前どこ行ってたんだ？」

「使用し終わると世界に戻ります、守護者なので守護者です守護者ですか、むしろ貞操の守護者です」

ふむ、世界に勝手に戻るならいいな。

たくさん符を作っておいていいかも。

宿すことに特化した使い魔って感じかな？

貞操の守護者って言う割には、俺の貞操狙ってそうだが？

そんなとき、

『アンタ！ 大丈夫！？』

世界に声が響き渡る。

「あれ？ ハク。今、現実の俺はどうなってる？」

こんな声聞いたことないぞ？

「えーっと、寝てますね。心臓すら動いてないです」

……。

『リルちゃん。そんなに叩いたら……死んじゃいます？』

え？ 俺叩かれてる？

『大丈夫よリルちゃん！ もう死んでるもん！』

いやいや！ 死んでないよ！？

生きてる！

「ハク！ どうやってここから出る！？」

出ないと火葬される！

「はい、では戻します」

そこで、俺の意識は途切れた。

六七話 双子の少女(前書き)

新世界 第四世界

第四世界はキャラの個性を出す。を目標に。

今回の話は遊び。

## 六七話 双子の少女

俺が目を覚ますと、目の前には女の子。

そして、顔が痛い。

「あ、ルリちゃん。起きたわよ？」

そう言ったのが、

身長150程の女の子。

ツインテール金髪、瞳は大きな茶色。

少しきつそうな瞳だ。

別に釣り上がってるわけではない。

目つきが鋭い？

胸はギリギリくらい？

顔はめちゃくちゃ美少女だな。

白くて、襟が高い袖無しYシャツに赤いネクタイ。

黒い膝上までのスカートに、ハイソックス。

黒くて大きなフード付きのニットガウンを着ている。

着ているって言うか、羽織っている。

腕は通していない。

「あ……、リルちゃんに叩かれて真っ赤な頬……素敵」  
なんか悶えてる……。

こつちも全く同じ人間だ。  
見た目まったく同じ。  
顔まで一緒。

違う点は、瞳がすこし眠たげだ。

完全に一卵性の双子だろ？

「あー、とりあえず。頬がめちゃくちゃ痛い。虐待？」

俺は話しかけてみる。

「ち、違うわよ！ アンタが死んでるから起こそうと思ったのよ！」  
いやいや、死んでたら起きないだろ？  
死者への冒瀆だぞそれは。

「あなた、女難の相が出ていますね……ますます素敵」  
とりあえず、コイツは危険だ。

「よくわからんがありがと。殴ッテクレテ」  
全然嬉しくない。

「少しは悪いと思ってるわよ！ あとね、ルリちゃんの『六壬式占』は当たるわよ？」

そんな占いが当たるとか言われても……。しかも女難とか、心当たりが多すぎて困る。ついでにコイツらもソレに含まれそうだ。

てか、今まさしくじゃね？

「それは俺が女に殴られたから女難の相が出てるんじゃないか？」「だから悪かったって言ってるじゃないのよ」

そんな不貞腐れて謝られても困るが？

「はあ……、で。君たちは？」

はっきり言ってみ分けがつかないがな。

「アタシは瀬古里瑠 瑠璃の妹よ？ 瑠璃は知ってるわよね？」

いやいや、知るわけないだろ？

「なんで初めてあつたやつの名前知ってたんだよ？ 誰だ？」

なんか驚いたような顔してるぞ？

「わたしが瑠璃です。特技はこれです」

そう言って、手を組み、指を二本突き出す。

まさか、今更カンチヨウ？

「……尿道カンチヨウ」

こわっ！！？

想像するだけで超コワイ！！

「瑠璃だっけ？ おまえ人間としてヤバイな」

マジやばい。

俺がそう言つと、小首をかしげ、

「レイモンドは今何やっているか？」

「言つてねーよ！？ おはスタなんて小学生以来見てねーよ！？」

てか、この星でやってることが驚きだわ！！？

話通じねーコレ！

「ルリでいい」

変らなくね？

漢字とカタカナってことか？

「ルリね」

「アンタッ！ ルリちゃんを呼び捨てにするなんて！」

どうすればいいんだよ。えーっと、里瑠？

「里瑠だっけ？ 今ルリがそう呼べって言ったんだろ？」

「そうだったわね、じゃあアタシもリルで良いわ」

だからかわらねーだろ！？

「それで、アンタは？」

そっぴや言ってなかった。

「如月刻」

「ときね」

「ときさん」

前者がリル。

後者がルリ。

見た目も区別つかない上に、名前もややこしい。

「それで、アンタ何でこんな所に寝てたのよ？」

「コトリバコの呪い？」

「何でホラー投稿サイト知ってんだよ！？」

「ここは地球か！？」

「はあ、無一文で行き倒れてた」

深層世界に行っただなんて言えない。

「女難の上に不幸なんて……ぞくぞくしちゃう」



ルリやベー！？  
こいつ危険すぎ！

「ま、気にしないで。ルリちゃんは呪いが趣味だから  
絶対危ない人だ！

「ってことで俺は帰る」

俺は立ち上がり、逃げるように

裾を掴まれた。

ルリに。

「うちに住まない？」

何か顔を真っ赤にしてそんな事を言ってきた。  
これは照れてるって言うよりも……。

「おもしろそう」

すっごい可愛い笑顔でそんな事を言うが。  
明らかに俺の不幸をおもちゃにしようとしてるぞ？

「る、ルリちゃん！？ こんな男をウチに住ませるの！？」

リルの言葉にルリは悶えてながら頷いた。

めっちゃ怖い。

「な？ ホラ、リルが嫌だってさ」

俺はそう言つと、ルリはリルの方を向き。  
不機嫌そうに、

「チッ」

え？ 舌うちしました？

なんか、リルがふるふると震えだしたぞ……。

「ルリちゃんを男にとられた！」

ええー！？

どう考えても違うだろ！？

そう思つてると、すそを引つ張られる。

また、ルリだ。

「ねえ、パリってイギリスではパリスって言われるんですよ？」

は？

「でも、他ではパリって言われる」

「……だから？」

意味が分からない。

「ベネチアではペニスって言われるの。ペニス商人とか、ペニスエ  
ステとか」

コイツは何を考えてそんなこと言いだしたんだ？  
かわいい顔して、何を？

「だから、うちに住まない？」

「いやいや、全然繋がってませんよ!？」

「繋がるなんて、だ・い・た・ん」

「コラー!! ルリちゃんに何してんのアンタ!!」

リルが殴ってきた!?

リルがニヤリと笑ってる、って!!

この為かよ!!?

俺がリルに殴られてるの見てめっちゃ喜んでるし!!

俺への好意なんて全くなく、こんな風になる女は初めてだぞ!?

「帰りましょう?」

そんな首を傾げられても。

お前の思考が怖くて……。

「る、ルリちゃんが言うならいいけど……。アタシは認めたわけじ  
ゃないんだからね!？」

いや、俺が認めてないぞ？

ルリはコクリとうなずき。

「こつち」

俺の腕を、両手で引っ張って行く。

ああ、なし崩し的に下宿先が決まる……。

「寮じゃないのか？」

女子寮は困るぞ？

「すぐだから、自宅通い」

それはそれでいいが、両親どうすんだよ!?

でも、情報は必要なんだよな……。

「なあ、お前の家に行くのはいいけどさ。この街のこと詳しく教えてくれないか？」

手を握られて移動しながら質問した。

「それくらいなら構わないわよ？ アタシも知りたいことあるし」

？ 俺に教えられることあるか？

まあ、情報くれるならうれしいが。

「小腸から虫垂をつまみ出すとどうなるか知りたいわ」

なんて怖いことを言う姉妹だろうか……。

情報もらったら逃げよう、うん。

俺はそのまま連れて行かれる。

ルリとリルの自宅

家の前に着いたが、普通の家だった。  
大きくもなく、小さくもない二階建。  
どこにでもある家だな。

鍵が網膜認証ってところが特殊だけど、30世紀だしな。  
人口が少ないだけあって、発展は遅いようだけど。

「入っていいですよ？」

俺はルリに言われ、中に入るが、

「汚いな」

すごい汚い。

もうね、よくコレで人を家にあがらせたな？

俺はこれでも結構潔癖なのだ。

ブチギレそうだ。

「仕方ないでしょ？ アタシもルリちゃんも家事は苦手なのよ。ちなみにご飯はカップラーメンが唯一よ！」

そんな事胸張って言ってんじゃねーよ！？

「はあ……、お前ら着替えて来い。片づけとくから」

俺が肩をすくめながら言うと、目を見開いて驚いている。

「いいの！？ 最近外に出るのも大変で困っていたのよ！」

掃除しろよ!!

「ああ、着替えて来い!」

「尻にしかれるときさんも素敵」

あー、もうルリは悶えるな!

「お前も着替えて来い! てか邪魔だ!」

俺がそう言うと、二人は喜々として二階に上がって行った。

そこでルリが顔を出し。

「覗いてもいいですよ?」

「いいから早く着替えろ!」

覗いたら確実にルリに殴られて、それをルリが喜々として見るだろつ。

未来が予想できる。

さて……。

時間停止つと。

始めるかな。

停止世界・数時間後。

まず、ゴミ袋が30個ほど出た。  
ありえない。

ちなみにそのうちの10袋が洋服だ。  
二人の好みがわかった。

ゴス服しかない。  
ゴスロリ服ではない。  
白、黒、赤。



これ以外の色がない。

下着は薄い水色とピンクと白。

てか、ゴミに紛れてるだけあって汚い。

下着とか黒くなった血ついてたりもうね。

いくら美少女の下着でも誰も欲情しない。

リビングも白と黒ばっかだったけど、センスは良いようだった。

コントラストの調和が取れていた。

ゴミは全部消し去った。

塵も消し去り。

台所も汚れを消し去り、皿は風でキレイに棚に納めた。

てか、白い部分俺がいなかったら確実に汚れ落ちなかった。

風呂の湯が茶色かったのには驚いた。

シャワーしか使っていなかったようだが。

俺の精神が壊れそうになったから掃除しておいた。

てか、両親いねーよなコレ……。

とりあえず、適当に飯を創造して、停止世界を解除した。

現在、俺はのんびり紅茶タイム。

どたどたと階段から降りてくる音が……。

疲れるからもう少し待ってくれたら良かったのに。

ガチャッと音を立てて、リビングの扉があげ放たれた。

二人は眼を見開いて驚いていた。

「す、すごいわね。ときは掃除のプロね？ 料理も？」

涎たらしそうな勢いだ。

俺は下着と服の山を指さす。

「それだけは何とかしろ。捨てられないだろ？」

さすがにあの服と下着はもったいない。  
汚れは落ちるだろう。

なんか、リルが真っ赤になってゆくぞ？

「あ、アンタ！ に、においとか嗅いでないでしょうね!？」

はっ、匂いだと？

「冗談、触りたくもなかったよ。そんな血ついたり、排卵したよう  
な下着誰が」

「言っつなー！ー!」

飛び蹴りが横から！！

てか俺の血が飛び散るわ！！

「あんつ、素敵」

ルリ悶えてんじゃねー！！

「家事したんだから文句言っつなつての。冷蔵庫の中は腐ってるし最悪すぎる。お前達よくあんなハエが飛んでるトイレで用足せるな？」  
「う、うー！ 仕方ないじゃない苦手なんだから！」

もう苦手ってレベルじゃないぞ？

ちなみに、今こいつらは肩まで開いた上着に、めっちゃ短い短パンを穿いている。

スラっとしたキレイな足だな。

生足フェチだったら貪りつくね。

残念だが俺はフェチではない。

「わかったから食べ。冷めるだろ？」

二人は席に着いた。

「よくこんな短時間で作れたわね？」

「ああ、料理人は時間じゃない」

「適当に言ってみた。」

「ふーん、ってコレ!？」

ん？ 何驚いてるんだ？

みんな大好きフカヒレースープじゃん。

「ふ、フカヒレよね!？ 本でしか見たことないわよ!？ 海に面した地区なんて一つしかないし。その中でも最高の食材よ!？ どれ何十万するのよ!？」

あー、この世界だとそうなのか？

飯とか不便そうだな。

「ま、気にするな。いいから食べって」

震える手で口に運び。

トロ〜ンとした顔になる。

創った料理をそこまでおいしく食べてもらうつとうれしいな。作ったわけではないがな。

「ってことで、俺の頼みを聞いてくれ。これ学校用、こっちは自宅用」

「コレは?？」

不思議そうにしてるな。

前に置いたのは、白と黒のミニハット。

ついでに自宅用はネコミミ。

「お前達似すぎて見分けがつかない。ちょい、ルリ来い」

俺が呼ぶと、素直に近寄ってくる。

相変わらず眠そうな目だな。

俺はルリに白い猫耳を装着する。

ちなみに、二人はツインテールを解いている。

「ほーら、似合う。ルリも似合うからつける。ホレ」

俺はルリの頭に猫耳を装着する。

「うん、似合う似合う」

めっちゃ適当に褒める。

「むー……、べ、別にときの言うこと聞くんじゃないんだからね。アタシも気にいっただけだもん……」

何拗ねてんだコイツ？

「ときさん。そう言えば何で路地裏に倒れていたのですか？ 無一文の割に高級食材が多数」

うおい。

コイツアホじゃなかった。

「この街に来たばっかだな。どうしようかと思ってたら空腹で倒れ

てた。話変わるけどさ、この街の守りってどうなってるんだ？」

とりあえず情報収集かな。

くだらない話が延々と続きそうだった。

「そうですね、周辺の魔物は学校の実技の授業で倒したり。魔族は生徒会が倒したりですね」

ふむ。

やっぱり魔族は強くないと無理なのか。

「結界から出るのは生徒なら誰でも出れるのか？」

それなら生徒になっちまえばいいんだが。

「いえ、生徒会だけ自由ですね」

生徒会かよ……。

「生徒会は学科と実技の成績がよくなないとなれないのよ？ ちなみルリちゃんは一年なのに生徒会長よ。この都市はほとんど大人がないからかなりの権力持つてるわね」

いや、リルが自慢すんなよ!?

「てか、一年でよく生徒会長になんてなれたな？」

「ええ、ここは完全実力主義なので、年齢は関係ありません」

生徒会に入るしかないのか？

俺単体でも外に出れるが、情報がほしい。

「その学校って俺でも入れるか？」

俺の言葉に二人は眼を見開いている。

「はい、大丈夫ですよ。お金は陰陽師育成費用から出ますので。あとは、勉強+素質があれば大丈夫ですね」

ふむ。

「あ、そう言えば今度学期末試験があるわよ？ それで一緒に受ければいいんじゃない？ ちなみに、これでも私はテストはトップよ！」

いや、そんな胸張っても……。

「ま、いいけどさ。そんなことより部屋掃除とかしろ。ばっちすぎる」

「うっ、うるさいわね！ 家は汚くするものなのよ！？ ゴミもインテリアよ？」

片づけられない人が言う言い訳じゃないか？

「とりあえず一週間後くらいにテストがあるから、一緒に受けちゃいましょう。転入試験も一緒にやればいいと思います。試験自体は座学だけなので。では、私は疲れたので寝ますね」

そう言って、食べた皿を床に置いて……ファブリーズをかけて。ってオイ！

「まてルリ。お前風呂はどうするんだ？ 湯張ってあるぞ？」

なんか、何を言っているんだ？ みたいに二人が見てくるんだけど。

てか、俺が二人の体を触らないのはこれが理由だったりする。

普段なら触りたいような美少女だ。

だが、匂いがいろいろ混ざっている上に、耳の後ろとか垢が……。

「コレです」

そう言って、ファブリーズを掲げた。

「万能ですよね」

そんなニツコリ言うなバカッ！

「そんな匂いだけミントにしてどうすんだよおまえは！ ダメです！ お風呂に入りなさい！」

許さん。それだけは許さないぞ！

「……めんどうね」

何なんだこの二人は！？

てか床に皿置いたりするから汚れるんだろが！

「俺に無理やり入れられるか自分で入るかどっちかだ」



一応コイツも女なら。

「めんどろ……洗って?」

女じゃなかった……。

「る、ルリちゃん! さすがにそれはダメ!!」

だろうな。

「よし、リルも一緒に入ってこい!」

俺が言くと黙り込んだ。

「……めんどろ」

この二人は……!?

なんなのもろ!?

「俺が洗うか、自分で洗うか決めろ!」

リルはどう出るかな?

「……洗っていいわよ?」

もろダメすぎる!!

なんで自尊心より面倒って言うのが上なんだよ!?

そこで俺は気づいた。

今までどうしてたんだ？

「お前ら風呂いつ入った？」

二人は何かを考え。

「「「一月くらい前？」」」

ここで、双子神秘のハモリかよ！

「死ぬゴミ並の汚臭野郎共」

「ヒドイです……ミントの香り？」

「ちげーよ！！ それは汚臭の上にファブリーズ纏っただけだろ！  
？ 年増の厚化粧とどう違うんだよ！？」

知った瞬間臭いような気がしてきた……。

「失礼ね、化粧なんてしたこともないわよ？」

そりゃそーだろが！

お前達の面倒くさがり見てたらわかるわ！

まあ、化粧は素がキレイだからいいが。

後天的な現象で超汚い！

「はいはい、もうお前ら洗うから風呂場な」

俺は全く歩こうとしない二人の襟首を掴みひきずる。

「首がくるしー」

「しんせう… 歩け！」

まじダメすぎる「いっしょ…！」

## 風呂場

「はい、脱げ！ 入れ！」

その言いつと、ルリがそのまま風呂場に。

「お일러リ。お前なぜそのまま入る？」

「洗うんじゃない？」

「服は？」

「服の上から洗えば一石二鳥。同時に洗える」

口元をニヤリと吊り上げ、ピースをするルリ。

「バカッ！ ホントバカッ！！ どうしてそんな考えするのお前！？」

もうどんな思考回路してんの！！？

「で？ ルリは下着姿で何してんの？」

「服を濡らして体を洗えば一石二鳥よ！」

もうヤダ！

なにこの姉妹！！？

どうやって今まで生活してきたの！？

「はい、お前らそこに立て！ てかもう動くな！ お前らに任せて

もいいことがない！！ 仁王立ちしてろ！！！」

「はい」

「わかったわよ」

俺の前に立ったルリとルリをパツパと脱がせて、服を洗濯機に入れる。

下着はもちろんネットに入れてだ。

いま気づいたが。

ルリは手を前で組むのが標準体位らしい。

ルリは手を腰のあたりで固定。

性格がわかるな。

「とりあえず中入れ。今日は許すから、一人はかけ水して風呂入れ！ 普段は洗ってからだからな？」

二人は不思議そうな顔をしている。

「お風呂の中で体洗うんじゃないの？」

そんな不思議そうに見つめるなルリ。  
お前の常識はすべてがおかしい。

とりあえず俺はシャワーの暑さを加減して、ルリにかける。

「あふ……、久々」

確かに久々だろうな。

「水道代と、電気代の節約？」

「そんなかわいく首をかしげてもダメだったの！ 二人が洗濯しな  
いから服代に飛んでくんだろが！」

俺の怒りがMAXハートレボリューションする。  
空間ごと消し去りそうだ。

そんなとき、

「ねえ」  
「あん？」

リルがバスタブに顎を乗せて声をかけてきた。

「アンタはなんで脱がないの？」

「脱ぐ必要があるか？ お前ら洗うだけだぞ？ 後で入るし」

「理不尽じゃない？ アタシ達だけ裸見られて」

「恥ずかしいのか？」

「全然」

「じゃあ、いいじゃん」

恥ずかしくないのも不思議だけどな？

「お風呂は裸で入るものよ？」

最初下着で入ろうとしたり、服のまま入ろうとした奴のセリフか？

「一緒にはいつちやえは楽じゃない？ 背中くらい流してあげるわ

よ？」

「別に自分でも背中あらえるが？」

なんか驚き顔になつたぞ？

「背中って一人で洗えるの！？」

「コイツどこに驚いてんだよ！？」

「今までは……？」

「二人で入ってたから洗ってもらってたわ。背中だけじゃなく頭も

ね。見えなくなっちゃっし」

コイツらにはシャンプーハットが必要では？

「まあ、いいわ。洗濯機も回したばかりだから一緒に入れればいいわ」

はあ、仕方ないな。

俺は脱ぎ、洗濯機に入れた。

「ねえ、アンタ胸は？」

そんな事をリルが言ってきた。

「まさかとは思うが。俺が女に見えた？」

「男性でしょ？」

「男と女の相違点は？」

「生殖器の形？」

なんて生なましい言い方するんだコイツ。

「どこが生殖器かわからないけど」

保険体育どうなってんだ！！

陰陽師の授業に潰されてるんじゃないか！？

「それにソレすごいわね？」

ソレが生殖器だが？

もういいや、とりあえずシャンプーでルリの頭をわしゃわしゃと洗う。

「目がー目がー」

泡が入ったのか？

「目瞑ると後ろにお化けがいそうで怖い」

「アホかつ！？ お前の後ろには俺とリルしかいねーよ！？」

「でも、一人でお風呂に入って頭洗うと怖いわよね。後ろに何かいそいで。それで頭洗えなくなったわ」

この双子はアホか！？

「お前ら陰陽師だろが！？」

「関係ないわよ。怖い物は怖いわ！」

「もういいから目瞑れ！ 流すからな」

俺はシャワーで洗い流す。

そしてトリートメント。

「洗顔するから目瞑れ」

ルリはぎゅっと目を瞑る。

俺は洗顔を泡立て、洗う。

「くしゅっ」

「……」



普通洗顔中にくしゃみするか？  
しかも洗ってもらってるのに。  
俺の顔が泡だらけ。って言うか目が痛い。

「寒い……」

ふるふると震えている。

俺は速攻で洗って流してやった。

もうヤダ！

タオルにボディークリームを泡だてて体を洗ってやる。

「にしても、リル。それだけ面倒くさがりなのに、よくムダ毛とか処理してるな」

ツルツルだぞ？

脇って誰でも生えるんじゃないのか？

「？ 頭以外にどこか生えるの？ リルちゃん生えてる？」

「全然生えないわよ？」

二人は小首をかしげている。

産毛すらもどこも生えないって……。

こんだけ素がいいのに、適當すぎるだろ二人……。

「お前ら全身洗われても恥ずかしくないのか？」

首をかしげてる。

「小さい頃お父さんに入ってたわよ？ 8歳くらいで死んじゃったけど」

「やっぱり、親いなかったか……、しかも八歳？  
どうやって生きてきたんだよ。」

「しかも八歳の時一緒に入ってたからって他人と入るなよ。」

「魔族に殺されちゃったのよね。顔も思い出せないわ」

「そんなハードな事適当に言うなよ……。」

「俺はルリをキレイに洗い終わったので流してやる。」

「はい、リル交代」

「二人が交代して、リルが出る。」

「そしておもむろにしゃがんで……、」

「ストップ。お前今何しようと思ってる？」

「俺の予想通りなら風呂から出たら説教だ。」

「何って、おしっ」

「こいつらどうしてくれようか？」

「何かお風呂場ですると気分よくない？」

「したことないから知らん」

「そうなの？　してみる？」

「しない。てか風呂場でするな」

「どうせ流すわよ？」

確かに流すが……。

「お前らもう世間知らずすぎる。お前ら今までよく襲われなかったな？」

「この家に来たのはアンタが初めてよ？　攻撃されてもルリちゃん  
がやっつけちゃうわ」

襲うの意味すら違う！

もうダメだ。

後々教えて行く……。

「もういいから座れ！　洗ってやるから！！」

「別にいいけど、今ここ刺激されたらおしっこ出ちゃうかも？」

そう言っつて、リルは自分のソコを軽く触る。

「あー！　もう！　俺は少し風呂場から出るから出せ！　流

せ！！　次からは先にしてい来い！！」

俺はそう言っつて外に出た。

あー、もうどうしよう……。

前途多難な家に来ちまった。

俺はじずくまりたい衝動に駆られる。

結局、リルを全部洗ってやって、俺は自分で洗った。  
はつきり言って、コイツらに任せたら何されるかわからん。

素でやってくる奴らがこんなにやつかいだとは……。

とりあえず、明日からは勉強しないな。  
なんとかして魔族倒さんと。

## 六七話 双子の少女（後書き）

風呂ですが、出来るだけエロを消して、どんなキャラかを説明する  
ようにしてみました。

布石にするつもりだった事柄入れ忘れた（．．．）

あー！、双子のキャラが強すぎて文章かえられねー！！  
トキがつっこみ（．．．）

普通だったら

「よし。お前達の家に行こうか？」

くらいになるはずなのになれない！

六八話 転入シマシタ（前書き）

よっよっよっ

久々に話を進められるので調子に乗った。

感想も受け付けるに設定し直します。

## 六八話 転入シマシタ

学校

一週間後のテストで俺は無事受かったらしい。  
別に勉強する必要すらなかった。

反則ではあるが、世界構造データから引っ張ってきて終了って感じだった。

と言うか、思考すると脳裏に一瞬にして式から解までが浮かぶ。  
それを書き込んでいくだけ。  
間違えようがない。

内容は高校一年の一学期末テストだったが。

それより、問題は夏休みがないことだ。

一週間くらいはあるが、学生として最悪だ。

学校は一学年300人くらい。

大きな学校だ。

AからH組まである。

別に成績順とかはなく、ランダムだ。



俺はCクラスに入るらしい。

ルリ、ルリはAクラスだ。

ルリ、ルリで思い出したが。

二週間くらい一緒に生活していたが、今もしているけど、身の回りの世話をなぜか俺がしている。

最近は少しずつ手伝ってくれるが、ルリがわざと俺にルリをけしかけるので穏やかではない。

殴られたり、蹴られたり、噛みつかれたり大変だ。

風呂は未だに自分で入ろうとすらしない。

俺の堪忍の尾が鬼瓦になりそうだ。

意味わからないが俺もわからん。

それほどムカツク。

で、今は担任と一緒に教室前にいる。

190センチくらいの男の先生だ。

年齢は39で独身らしい。

毛深く。

顎髭が痛そうだ。

田辺五郎というらしいが。

ムキムキマツチヨだ。

結構いい先生である。

なんて言うか、テンションが俺好みだ。  
体は俺好みではない。

「おおおう、緊張したきたなー」

そう言って、俺の肩に手を置く。

「俺が転入生なんですか？」

「それでも緊張するっての！」

子供っぽいうちというか、親しみやすく好きだ。  
愛してはいない。

「さっさとしましょうよ……」

「ま、待て！ 心の準備がな！？」

隣で深呼吸をする五郎先生。

「よし、いざ出陣！ 敵はモガドルにロリ！」

「モロッコ王国！？ しかも旧都市名！？ その顔でロリコンキラ  
ーだったら殺してやる！！」

なんか、俺の突っ込みでしょんぼりした。

「ロリでも熟女でも老人でもいいから結婚してー……」

もう人間としてここまで来たら終わりだと思う。

「ほらー、もう行きますよ！ 俺も彼女今までいなかったし、童貞  
ですので元気出してくださいー！」

途端に顔を輝かせて、つてか怖い！  
そのエラが出てる顔で笑顔やめて！

「よし、行くか。転入生が入ることは言っているからな」

そう言っつて、五郎先生はガラガラと扉を開けた。

俺達が入ると静かになった。

「ではー、今日からコイツがこのクラスに転入することになった。  
自己紹介よろしくな。ちなみに、俺は結婚相手募集中だ」

何がちなみになんだろうか？

「……せんせーい、死んでください！」「……」

クラスの女子が先生に声をかけた。

「なんで、ぐすん……」

全然かわいくない！

むしろ気持ち悪いから泣くな！！

てか、15、6の女子高生狙うなよ!?

とりあえず自己紹介つと。

「えー、如月刻です。趣味は人助けです。特技は……、出来そくないの双子を世話することです。よろしくおねがいます」

俺は一礼する。

顔を上げるが、静かだ。

あれ？

刹那、

「」「」「」「」かつこいいいいいいいいいいいい！……！……！「」「」「」「」

教室中に響く黄色い声。

「彼女いますか!?!」

「好みのタイプは!?!」

「その瞳本物!?!?」

「結婚してください!?!」

「髪の毛さらさら」

「色白〜い!」

もう途中からシャツアウトした。

肩に手が置かれる。

「刻よ……、後で先生と二者面談だ！」

血流を流しながらそうつぶやく五郎先生。

「二者面談ってなんですか!？」

「お前の後ろにいるそれも一緒にだ！」

俺は後ろを振り向くが、何もいない。

「お前の後ろにいる大きなゴキブリの背後霊だ」

「ひどっ!？ いないですよね!？」

まじ怖い！

「せんせー、死んでください！」

「ぐすん……」

なんだろうコレ……？

「とりあえず刻の席はほら、あそこだ」

指を差された先には、ひとつの空席があった。

「そばに女子はいないから安心しろ」

確かにいないが。

ぶつちやけいない方がいいかもしれん。

俺はその席に移動する。

途中、女子が先生を殴り出したけど知らん。

「よろしくな、我が愛しの刻よ！」

席に座ると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、金髪の美形がいた。

座っててよくわからんが、身長180くらいありそつだ。

「俺はお前に初めて会ったぞ？」

「オレは数億年前からお前のバックヤードに豪速球を投げ込んでいた」

怖い！

なんか変な奴が知り合いになつた!？

「あ、オレは不破春木だ」

「ああ、わかつた。一生膜が破れなくて童貞の、春が来ても仁王立ちしてる春木だな」

「ヒドイっ!？ これでも、オレは童貞だ」

「安心しろ。初見からわかっていた」

「友達になろう夜伽」

「黙れ春木！ 人の名前をいやらしくするな！」

「失礼、口説き。友達になろう」

「女の敵みたいな名前になつた!？」

「友達になろうレイプ」

「名前ですらなくなつたじゃねーか!!？」

なんだコイツは……。

突如、いきなり火災報知機みたいな音が鳴り響く。

「なんだコレ？」

俺は春木に聞いてみる、

「ああ、朝礼の時間だぞ。ホラ」

春木が指さした方向を見ると。

何も映し出されていないホログラムが、教室の前に出現した。

「……待ってましたー、我が諏訪学園の姫！！！！」

男子が立ち上がって拍手をし始めた。

「何あれ？」

「ああ、見てろ。ホレ。麗しのお姫様の朝礼だからな」

前方には二人の少女が脇から現れた。

ホログラム فقط。

てかルリとリルだった。

何やら二人で手を繋ぎ、繋いでない方の手を広げ、

『『てーらはー』』

「『『『てーらはー』』』』

俺は頭を抱えなくなった……。

リルとルリが意味不明な言葉を発すると、それに続き男子全員が……。

「なんだ……これ？」

俺は暗い顔で、喜々としている春木に聞いてみる。

「いつ見ても美しいです双子姫様。あ、これ朝礼ね？ 一週間に一回あるんだよ。月曜にだけな。皆、てかオレもだけど、楽しみにしててなっ！ ファンクラブだって学園以外にも広がり、一万超えてるぜよ！」

あんな汚い女のどこが姫なんだろうっか？

そんな事を思っていると、放送が続く。

『さて、やってきたわよ愚民共！ アタシ、瀬古里瑠と』

『アタシ、瑠璃がお送りいたします』

『『せ』の』』

『ウサギのしっぽ』』

『スーパ―おちんちんタイム』』



ブっ!!

いまルリはなんて言った!?

言葉がかぶさってよく聞こえなかったが!

絶対放送で言っちゃいけないこと言ってたぞ!?

「~~~~~わ~~~~~ルリルリル様最高で~~~~す!」~~~~~

黙れ男!!!

『さーて、では今日のオープニングからいくわね?』

『はい、リルちゃん』

普通に流された。

『おかあさんといっしょから「笑顔」』

『ちなみにこれは「お義母さんと一緒」』

ルリが18禁っぽい同人誌を取りだした。

『中身はこんな感じです……ピラッ』

口でピラッ。とか言いながら中身を見せてきた。

普通に18禁でした。

『母乳プレイ?』

そんなかわいく首を傾げるな!!

『皆!! 早く注文しろ!!』

「『『『オスつ！！』』』」

一人の学生が、片手を大きく広げ叫ぶ。  
それに全員が頷き、携帯電話を手に取る。

アホか！？

お前らは雄すぎだボケ！！

そして流れる音楽。

ルリルルが後ろに手を組み、ゆらゆらと揺れはじめ、

『『『~~~~~』』』

って、お前らが歌うんかい！！？

しかも超うめー！！！！  
ハモリまでしてるし！！

そして、音楽が終わり、

『では、質問タイムに入るわよ？ ルリちゃんお願い』

お？ 視聴者からの質問か。

『パンはパンでも食べられないパンはな〜んだ？』

と言って、小首を傾げるルリ。

それもお前が質問すんのかよ!?  
めちやくちやだぞ!?

『ちなみにパイパンじゃありません』

女の子がそんなこと言うなよ!?

周りでは、サイパン島 パンツ フライパン パンパース 戦犯  
パンスト パンダ ピーターパン アンパン パンク パンフレ  
ット パパス チンパンジー松浦 とか、いろいろ叫んでいるが。

『終了、ルリちゃんどうぞ』

『それよりも、パンを食べられない人々が世界には大勢います。食  
べられる幸せに感謝致しましょう』

そう言って、目を瞑り、胸の前で両手を組み涙を流す。

周りでも何か涙流してる!?!?

なにこの学校!?

質問でも何でもないじゃん!!

騙されすぎだろ!?

『次は、最後のコーナー。期末テストの上位発表よ! アタシはこ  
の時のために生きてきたわ!』

ガッツポーズをするリル。

『ちなみに四角いゆで卵の作り方は、かために茹でた卵の殻をむき、四角い入れ物にいれて8分くらい待つと四角くなります。なぜか黄身も四角く。わーお』

なんで家事出来ないやつが知ってんだよ!?  
わーお。つてなんだよ!?

『では、第三位!』  
『ぶっぶっぶー チャララン』

効果音が気が抜ける……。

『900点中893点 一年A組 瀬古瑠璃! つて、下がってる!?!』  
『ぐすん……、落ちた……。ニヤリ』

泣き真似をして、ニヤリと笑いやがった!  
しかも効果音口で言ってる!?

「「「誰だルリ様を泣かせたのはー!」」」

男子が吠えた!

『はい、二位は。900点中897点 一年A組 瀬古里瑠……、わーん! 下がったよルリちゃん!』

ルリは泣きだしてルリに抱きついた。  
ルリはよしよし、と言って頭を撫でてやっているが。  
ルリの唇が持ち上がってる。

『ぐすん……。えっと、一位 900点中900点 一年C組 如月刻ってアンタかい!!? どれだけ万能なのよアンタ!?!』

リルがそう言うと、男子がギロリとコチラを向いた。

「「「「「キヤーーーーー、刻様!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

刻様になった。

女子だけの歓声。

男子は舌うち。

てかリルがニヤニヤ笑ってる!!

絶対にこのために泣き真似してただろコイツ!!

『あとで見に行く………』

最悪だーーーー!!

『でわー、最後はいつもの挨拶でさよならね。次の放送を楽しみにしてるわ』

『『せーの』』

『じまびっぴー』

『らっふぁー』

めちゃくちゃじゃねーか!?!?

叫んでる男子もみんなチゲー!!!

どんだけパターンあるんだよ!?!?

『アタシ達と同じ言葉だった生徒は今日はラッキーデーよ！ チャオ』

最後にリルがウィンクしてホログラムは消えた。

男子がすごい絶望してるぞ……。

「は、今日の放送も最高だったわー、ときりん」

「ときりんってなんだよ春木！！」

「あだ名。それとも『りん』がよかったか？」

「原型の方消すなよ！？」

てか、あの二人頭良かったんだな。

俺のは反則だしな。

893と897なんて普通とれないぞ？

「さーて、双子姫様の放送が終わったし授業に入るぞ」

そんなときに、五郎先生が授業の開始の合図をした。

てか、お前実技の教師じゃねーのかよ！？

周りが一気に静かになり、真剣だ。

切り替えすごいな。

生死がかかってるからな。

「では、前回のおさらいだ」

そう言って、黒板に何やら書き始める。

「まず九字。これは基本だから絶対覚える。臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前（りん・びょう・とう・しゃ・かい・じん・れつ・ざい・ぜん）の9字を言う。唱えながら印を手で結ぶか、剣を指でなぞり、文字を刻印することで自然から力を借りることが出来る。九字をすべて光らせることが出来たら一人前だな。今の時期なら一字光らせれば十分だ。意味は『臨める兵、闘う者、皆陣をはり列をつくって、前に在り』だ」

ふむ、剣に力を宿らせるってことね。

俺の場合ル・を剣に宿らせるのか。

宿らせる属性と数によって強くなると。

「次に呪符・霊符。紙に自分の血で文字を刻印して使う。主に『五芒星』や『九字格子』を刻印する。自分の血に呪を宿らせて使うから攻撃としても効果は高い。単純な言葉の『急急如律令（急いで律令の如く行え）』よりも効果が高いな。更に護りにも使える。結界などだな。使い捨てなのが少しつらいがな。出血死などには注意だ」

ふむふむ。

急急如律令でも使えるのね。

俺の血は魔力があれば無限に使えるから、呪符をストックしておいた方がいいな。

「で、ここまでがおさらいだったな。今日は『人形』と『式神』についてやるぞ」

なんかわかりやすいぞ？

五郎やるな！

「まずは、人形（ひとかた、ひとがた）  
形代（かたしろ、かたじろ）、撫物なでものとも言うぞ。紙や木材・草葉・  
藁などで人の形に作られ、それにより患部等を撫でることによって  
自分の穢れをこれに移しつけて祓うのに使われるもので、流し雛の  
風習はこれを元としている。一方で人形に相手の名前等を記し、そ  
の人形を傷つけるなどして、相手に事故死や病死などの重大な災い  
をひき起こす呪いとして用いたり、男女二体の人形を一つにし祈祷  
することで恋愛成就を祈るなど、様々な祈祷儀礼に広く見られる。  
丑の刻参りの藁人形が有名だな」

ふむー。

たしかルリの部屋にたくさん……。

呪いだよな……。

「ちなみに、結界の外に出る場合、これを口に咥えて外に出る。汚  
染を人形に移すんだ。傷の肩代わりにも使えるから便利だぞ？」

確かに便利だ。

今後の世界でも役に立ちそうだな。

「次に式神。式神・識神（しきがみ、しきじん）とも言う。陰陽師  
が使役する鬼神のことだ。鬼神とは、妖怪、神霊などを使役するこ  
とだ。有名なのは十二神将だな。ほぼ伝説に近い鬼神だけだな。式  
神は、普段は主を守護し、霊体でいる。呼び出せば実体化し、守っ  
てくれるからな。一応学校でも鬼神降ろしの儀式はするから、今い  
ないからって心配するな」

ふむ、俺の場合ルーがそれだな。

てか全てがルーだ。



刀がハクなだけ。

一応神の世界の守護者だから神霊か？  
てか、俺が神じゃん……。

「さて、今日は朝礼が長引いたからここまでだな。予習出来るやつはしておくように。次は渾天儀について説明する。天文観測についてだな。では、解散！」

先生がそう言った瞬間、一気に騒ぎ出した。  
まじ切り替え早いつ！

「ときりん……、オレはもうダメだ。何も頭にはいってこなかった」

バカだ！！

コイツはバカかつ！？

「わかったよ、これやるから我慢しろ」

俺は国産練ワサビを春木の目にねじり込む。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ！！！！快感が郷愁に変わり、街が荒れ果てたああああ！！！！」

やばい、コイツはまじ基地外すぎて意味が分からない。

放っておこう。

あ、そう言えば……。

「なあルリリルって“呪”使えるのか？」

もうまとめてルリリルにした。

呪なんて一回も見たことがないぞ？

「ひりひりする……、ルリ様はすごかったぜ？ ホント学園って言うか、世界でトップレベル？ リル様も生徒会に入ってるんだけど、見たことないなあ……。使えるから生徒会に入ってるんだと思うけど」

春木は目元から拭いたわさびを、口に運ぶ作業に移っていた。  
まあ、それはどうでもいいや。

とりあえずルリリルの事って、

ルリは俺もわかる。

だが、リルから魔力、もとい呪力は全く感じない。

それで生徒会へ？

「生徒会って今何人だ？」

「まだ二人やね。学が850点以上。実技がトップクラスじゃないと無理だぜ」

それだとリルはどうやって？

「ルリリルっていつも一緒に実技してるか？」

「そうやね。二人でもものすごい数の魔物倒してたぜ。シビレたわー」

とりあえず、春木が恍惚の表情浮かべてるのは無視して。

やはりな。

すべてルリが倒して、リルの成果にしてるなコレ。

いつか話してくれるかな。

そんな感じで、俺は午前の授業を受けて行った。

## 昼休み

あれ以降の授業は一般科目だった。

午後に実技があるらしいが。

ちなみに実技は午後全部を使つての授業らしい。

俺はお手製弁当をカバンから取り出し、女子からの誘いをなんとか断り。

春木と食べようとした瞬間。

扉が吹っ飛んだ。

そして

「てーらはー」

二人の金髪ツインテネコミミ悪魔が降臨した。

猫耳は自宅用だって言ったのに……。

ついでに、それがこの学校の標準挨拶だったら嫌だなと思った。

## 六八話 転入シマシタ（後書き）

ちなみに『笑顔』のYOUTUBE URLはコチラ

ttp://www.youtube.com/watch?v=  
| YggP3488EMo

先端にh入れてみるといいよ？

六九話 蓮華（前書き）

ちよつと書き終わって不完全燃焼な話。

眠いと話がつまらなくなる病気にかかりました。

ちなみにタイトルはレンゲと読みます。

注\*蓮華の発言は、ある程度調べてから載せていますが、ガセ情報あり。キャラの心情を盛り下げる役割って考えていただければ幸いです。

六九話 蓮華

教室

「てーらはー」

くそー、絶対に来ちゃいけない奴が来た！！

てか、面倒くさがりの癖になんでいちいち俺の教室に来るんだよ  
！？

「てーらはー」

ほら！

クラスの奴のテンションが上がっちゃった！

お前らがアイドルっぽいことに気がつけルリル！！

俺の前に二人はとととと走ってきて、目の前で、

「てーらはー」

手を広げて挨拶(?)をする。



「「てーらはー」」

「ぎゅ……。」

「「……」」

そこで、ルリがニヤリと笑った。

こいつが笑うとロクなことが……。

「結婚してください愛してます！ 断られたら死にます！」

叫びやがったー……！！！！？

しかも土下座！？

「お前何言ってるのバカッ！ 自分の発言力わかってんのお前！？」

ほら、周りが！！

「OKしたら殺すぞ？」

「断ったら殺すぞ？」

そんな言葉が聞こえてきた！

どうしろと！？

「ときさん。下着の血がなかなか落ちないんですが……。」

なにお前！？

なんでそんな涙目演技してるの！？

俺を殺したいの!?

それはお前が数か月もゴミの中に放置したからだろうか!?

ああ、殺気が……。

そして、そんな俺を見て悶えるルリ……。

「さて、ルリルリ。お前達は調教だ」

俺は二人の襟を掴み、引きずる。

「あんっ、焦ってるときさんも素敵」

黙れルリ。

「これさえあればごはん何杯でも行けるって言ったのに、一杯でお腹いっぱいになるのって失礼よね?」

ルリ、お前はそれがどうとられるか分かっているのか?

あー、教室に戻りたくねー……。

俺は安らぎを求めて旅立った。

## 屋上

俺は屋上の扉を開いた。

そこで、一人の和服少女を見つけた。

「今日は誰もいないわね！ ラッキー！」

リルがそんな事を言うが、目の前に……。

そして、俺はその少女と目が合った。

少女は眼を見開いて驚いていた。

俺にしか見えない？  
幽霊じゃん！

「さーて、ルリル飯喰うぞ、“誰もいない”屋上はいいなー」  
幽霊は認識してはダメだ！

二人が俺の前に座る。

ひざの上」。

「おい」

「なによ？」

「なんでしようか？」

「何故そこに座る？」

「コレです」

ルリは携帯電話を取り出した。

ちなみに携帯って言っても、ガラス板みたいなものだ。  
ガラス板にボタンなどが浮かんでいる。

「ハイ、チー……」

パシヤッ

「おい、お前今撮った後どこに送った？」

なんか速攻で操作してたぞ？

「編集者です」

そんな事を言いだした。

「あー、ルリちゃん。そこって前にアタシ達を取材にきたところ？」

「うん。これで、明日からときさんは嫉妬の対象……素敵」

こいつら自分たちの人気に気づいてやってんのか……。

「あの一、見えてますねー、見えてますよねー、ね？」

いきなり声をかけられた、

もう誰かわかるからヤダ！

幽霊イヤ！

よし！

「かわいいなー、お前達」

俺は二人を後ろから抱きしめた。

「え？ え？ どうしたんですか？」

「い、行き成り何よ!？」

俺は知らん！

幽霊は知らん!!

「いやー、お前達があまりにも可愛くてなー」

俺は二人の頬に頬ずりする。

「あふつ……、虐められてる子がすぎるみたいで素敵」  
「ちよつと、ストップストップ！」

よし、消えた。

「見えませんか？　ね？　むー、男の人にはこれじゃ無理なのかな？　ね？」

出た！！

黒髪赤瞳の女の子だった。

身長は140ないなコレ。

髪は背中辺りまであり、前髪は眼の少し上で切りそろえられている。

黒い布地に、赤い蓮華の模様が描かれている和服。

半衿は赤。帯は黄色くて、後ろに大きな結びが付いていた。

だが、これは幽霊だ。

その証拠に二人には見えていない。

無視だ！

「よし、おにーちゃん二人の体まさぐっちゃうぞー」

俺は二人の体中をまさぐってみた。

何でも良いから、この幽霊から意識を離したい！

「って、あ、アンタ何やってんのよ！？」

「ときさんやりますね。これはあれですか？ ペンギンはお家で飼えますか状態ですか？」

ペンギンは知らんが幽霊は嫌だ！

「脱ぎますから見てくださいよー、一人は寂しいんですよー、ね？」

そんな首を傾げてもしらん！  
成仏しろ！！

てか、マジで脱ぎました！  
Bくらいだった……。

「ほらー、どうですか？ 見えますか？ ね？」

見たくないから成仏しろ！

「むー、仕方ありません」

そう言い、幽霊は前の二人の服を脱がせ始めた。

「ときさん？ 写真とります？」

「ちよっといい加減に！」

あーもう！

「二人とも、すまん我慢出来ない」

「え？」

俺は二人の……、二人を抱きよせ、幻惑で。

「「んんんっ!!? ……くたあ」」

失神させた。

そして幽霊を拘束。

「さて、幽霊。物理的に成仏させてやろう  
「ヒッ!?!」

俺は空間を割りながら見下す。

つて、言っても……、  
ふるふる震えてるし……、小動物を虐めているようだ。

「はぁ……、てかなんだよお前?」

俺はため息をつきながら聞いてみる。

「ご主人さま、それ幽霊じゃありませんよ? 吸血鬼ですわー」  
いつの間に出たハクが教えてくれた。

吸血鬼ねえ……。  
とりあえず服を着せてやる。

「で? 全然呪力感じないけど?」

吸血鬼も魔族だからな。  
呪力があるはずだ。



「弱っていますね。このままなら消滅しちゃいます。存在すら感知出来ない程に呪力がありません」

ふむー、

「すみません……、もう300年くらい誰とも話してなかったの、嬉しくって……ね？」

こいつは首を傾げるのが癖なのだろうか？

「吸血鬼って、血吸わせればいいのか？」

何か俺が聞いたら顔を青ざめさせたぞ？

「血は……、怖いので嫌ですね、ね？」

本当に吸血鬼なのだろうか？

「ご主人さま。吸血鬼ってのは人がつけた名前なんですよ？ わかりやすく言うと、魔力で出来ている体を持つ存在が魔族なんです」

ふむ、俺は？

「ご主人さまも魔族に近いですね、違いは自分で魔力を生成出来るか、外部から取り入れるかです。ご主人さまは生成出来る上に、魔力で出来ているので規格外ですね。魔族である吸血鬼は、魔力を血として取り込めますが、効率は悪いです」

「で、コイツを見る限り吸血鬼って弱いつてことか？」

強いなら外部から取り入れればいいだろうに。

「いえ、多分魔族では最強ですよ。魔力を身体強化に変換出来るので、魔力がある限り肉体再生だって出来ますし。不老不死です」

実際コイツこんななってるが……。

「えーっと、わたしは魔族から追放されちゃったので、ね？」

ね？ って言われても知らんぞ？

「詳しく話せ」

溜息をつきながら言ってる。

全然わからねーよ……。

「パパとママは魔族の王様でした。でも、千年くらい前に、おかしな魔族に食べられちゃって……。パパとママに魔力もらってたからわたしは……。魔族を追放されて死ぬしかなかったんです。誰にも見えなくなっちゃったから此処にいました。外だと、魔族に殺されちゃうので、ね？」

ふむー……。

変な魔族って、俺のせいじゃないか？

『ご主人さまのせいですね』

ハクが内部で声をかけてきた。

うーん……。俺のせいで幸せを奪われたってことになるよな……。

助けてはやりたいが。

『助ける方法は？』

俺も内部で話す。

『そうですね、吸血が無理なら方法が三つあります』

ふむ。

助けるのはいつでも出来るが、

とりあえずコイツの目的でも聞くか？

死にたがりだったら助けても意味がない。

「で？ お前は何をしたくて生きてるんだ？」

「パパと……ママの遺体を取り戻したいんです……」

食べられたんじゃ？

「千年程度なら多分大丈夫ですね。死んではいますが、吸収されてはいません。問題は、彼女がもう消えちゃうってことですかね」

やっぱそこに戻るのか……。

「で、助ける方法は？」

ハクに聞いてみる。

「一つ目、一番効果が薄いですが、ご主人さまと裸で抱き合えばいいんです。かなりの時間必要です」

は？

「広面積の接触で、ご主人さまの体から魔力を吸いとればいいんです」

うん、却下だ。

「次」

「二つ目、魂の刻印で、常に魔力を供給します。利点は属性が変わるので弱点が消えること。難点は、絶対服従になります」

最悪コレだな。

「三つ目、子宮に直接魔力を注ぎ込みます。一番効果がありますね。ご主人さまなら一回で全快にさせてあげられますよ？」

最悪しか残らなかった。

「どれがいい？」

一応聞いてみる、

「えっと、子宮に」

「却下」

「ぐすん……、じゃあ刻印で、ね？」

何で俺が此処まで守ってきた童貞をささげなきゃ……。魂の刻印か……。つまり一生コイツといることになるんだよね……。

「言っとくけど、刻印したらお前一生俺の奴隷だぞ？」

俺は眼を見つめ問いかける。

絶対服従なんて奴隷と同じだ。

「どうせこのままだと死んじゃうんで……、それに、実は学校に通ってみたかったんですよね？」

はあー……、吸血鬼が学校ねえ…。

「わかったよ、でもお前わかってるか？ てか、俺が何に見える？」

全然わからなそうに首をひねっている。

「魔族の敵はなんだ？ 人間以外で」

「光属性でしょうか？ 神とか、天使とか」

ふむ。

「お前は魔族の敵と契約するってことだぞ？」

俺の言葉に少女は眼を見開く。

「お父様、魔族と契約するのですか？」

俺の隣にエルが現れる。

六翼の天使が。

それを見、少女はぶるぶると震え青ざめ始める。

「天使が仕えてる存在が何か分かるだろ？」

俺はニヤリと笑ってやる。

「あ、ああ、か……み？」

もうぼろぼろと涙を流して、顔なんて土気色だ。

「お父様は神を創った神よ？　そしてこの世界を創った神でもある。アナタ達を創った神でもあります。あなたを見つけられたのも納得です」

無表情で言葉を発するエル。

人が見たら、エルの方が怖いだろっな。

漆黒の鎌持つてるから、死神だ。

「さ、最高神……？」

この世界ではそんな風に呼ばれてるのか？

俺は少女を見つめ、

「お前は魔族の頂点の種族でありながら、神の頂点と契約するってことになるんだ。もう魔族には戻れないぞ？　それでもいいのか？」

目を細め、威圧感を込め言い放つ。

なぜか、俺の周りにはレンまでもが出ていた。

涙目であつたが、コクリと頷いた。

は「、親玉はコイツが倒さないとな……。

「少女よ、名は？」

俺は見つめながら言う。

「蓮華」

蓮華……ね。

魔族らしくない名前だ。

「花言葉は、草感化、私の幸福、心が和らぐか。いい名前だ。おいで、蓮華。実はな、魔族と神や天使は敵対してるかもしれないがな？俺はその神の枠には入っていないんだ」

蓮華は俺に抱きつき、不思議そうな顔をする。

俺は微笑んでやる。

「世界や神を創つたのも俺だがな。同時に魔族を創つたのも俺なんだよ。だから、お前は俺の子供でもあるんだよ。神だろうと天使だろうと、人間だろうと、魔族だろうと。俺からしたら皆大切な俺の子どもなんだよ。『契約を此処に』」

強く抱きしめてやる。

300年も一人じゃ寂しかっただろうな。

なんだかんだ言って、俺は周りに誰かしらいたから。

そんな事を思っていると、蓮華は俺の中に入り込んだ。

「ご主人さま、初めて弱い存在と契約しましたねー。エルさんやレンちゃんは魔力を逆にご主人さまがもらってましたが、今回はご主人さまがあげる番です」

ハクがそんな事を言うてきた。

「ま、たまにはいいかな？ 二人も仲良くしてやってくれよ？」

俺はレンとエルに声をかける。

「おにーちゃんの頼みだもん！」

「これからはお父様争奪戦のライバルです」

なんとかなるかな？

「にしても、三種族が使い魔になりましたねー。あとは神だけですよ？ 人間は無理なので」

好きでなったわけじゃないんだが……。

はあ……。

俺がため息をついていると、

裾が引っ張られた。

「主様、元気ないんですか？ 私のせいですか？ ね？」

不安そうな蓮華だった。



俺が供給してるから存在感がある。

「わたしが、幸せになるお話をします、ね？」

なんだろう。

すこし気になるぞ？

蓮華の花言葉だし。

「わたしが一人かくれんぼをしていた時です。2000年くらい前です、ね？」

何か一人かくれんぼって聞いた瞬間鬱になる……。

「コンテナに隠れていたんです。それで寝て起きたら」

なんか幸せになりそうにないぞ？

「起きたらウラジオストクにいました！　ね？」

ロシア！？

全然幸せになれねー！！

「では、私の雑学王としての知識を。世界を回っていましたので、ね？」

なんかロクなのがでてこなそうだ……。

「ゴミを分別して出しても、結局は同じ焼却炉で焼かれます、ね？」

あああああ、俺がせつかく分別したゴミがー！！！！？

蓮華は更に続ける。

「マッシュルームは馬糞に生えるキノコ、ね？」

やあああああああああ！！！！！

「リルさんは部屋の中のゴミ箱に排尿したことがある、ね？」

あいつつつつつつつ！！！

「ストップ！！ もう言うな！！ 特にリルはありえるから勘弁！」

俺はそこで止めた。

精神的によろしくない……。

「まだたくさんありますよ、ね？」

そんな毎回首を傾げられても困る。

話を変えよう。

「お前学校に通いたいんだろ？」

「はい、ずっと此処にいたんで、楽しそうでした、ね？」

うーん……。

洗脳は嫌いだけど、認識させるか？

今までの学生として、俺が面倒みればいいかな。  
クラス同じにすれば面倒見れるし。

『パチン』

俺は学校内の人間への認識を変更した。

「さて、これでお前は学生だ。とりあえず、如月蓮華ってことで妹設定。ちっさすぎるから、飛び級で。勉強は……出来るか？」

「足し算くらいなら？　ね？」

ダメすぎる……。

「あー、そつち方面の知識は入れてやるから。能力は自分で成長させるよ？　魔力は提供してやるから。自分で両親の体取り返せるくらいにな」

俺が出来るのはこれくらいだな。

「はい！　ね？」

なんか首を傾げられると、気が抜ける……。

あとは、

「これやるから使え」

俺はレン製の、白く輝く刀を創造して鞘に納めて渡した。  
別に特殊なことはしていない。

九字を刻印するために使うであろう武器だ。

「ありがとうございます様。代わりに一つ雑学を。紙コップタイプの自販機の中はゴキブリ天国、ね？」

「だからやめろつての！！ もう自販機使えねーじゃねーかー！！」

こいつは精神攻撃のプロかもしれない……。

てか、刀がでかすぎて、引きずってるし。

和服少女＋引きずった刀。

変な構図が出来た。

「さーて、お前ら戻れ。蓮華以外な。そろそろ始まるからな」

エル、レン、ハクが俺の中に戻る。

「ちょっと試していいですか？」

蓮華が刀を持ち、聞いてくる。

てか、身長と刀の長さが大して変わらないぞ。

「別にいいぞ」

蓮華はスルッと刀を抜

抜けなくて鞘を吹っ飛ばして抜いた。

きらびやかな刀身が現れる。

側面に指を触れ。

「りー・びょー・とー・しゃ・かい・じん・ねー・ざい・ぜー」

すごい拙い言葉を呟きながら、ゆっくりと指を移動した。

九字の漢字が刀身に刻まれ、黄色く光輝く。てか、いきなり九文字かよ!?

「出来ましたー、ね?」

さすが魔力で出来た人間。

自然との感応力も高いな。

別に俺がしたわけじゃないし。

まあ、呪力は漏れない様にしたけどさ。

俺も白刻刀を取りだし、指を這わせる。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」

俺が呟き、指を這わせると、九つの漢字が浮かび上がる。

一文字ずつ色が違う。七色+白と黒。

更に、たくさんの文字が刻まれた円が4つ、刀身を中心に回っている。

なんか九字じゃなくなっているような?

「さすが主様ですね。なんか強そうです、ね?」

小首を傾げるなって……。

俺は解除し、刀を消す。

蓮華も鞘に戻したようだ。

「さーて、二人を起こすかな、の前に」

俺は蓮華の花を創造する。

外側がピンクで内側が白いグラデーション。  
中心には黄色。

それを、黒いヘアバンドの右の方につける。

幻惑で枯れないようにし、蓮華の頭に装着つと。

うん、似合うな。

俺が鏡で蓮華を写してやると、にこりとほほ笑み、

「ありがとうございます。大切にしますね」

初めて語尾に『ね?』とつけなかった。

後で浴衣の色も変えてやろう。

とりあえず……、

『パチン』

二人が目覚めます。

「あれ? アタシこんな場所で寝ちゃったのね」

「ときさんに確か……あれ?」

別に記憶消したわけじゃないけど、ちようどいいな。

その時、ちょうどチャイムが鳴る。  
開始5分前のチャイムだ。

「つて、やばっ！ 早く行くわよルリちゃん、蓮華、ときー！」

お、蓮華も認識してるな。

『蓮華、行って来い』

脳に直接言葉を送る。

『はい。主様、ね？』

三人が走りだす、つてか俺もだ！

俺は三人を追いかけて走る。

この世界でやることは三つ。

ルリルルの秘密。

蓮華の願い。

ページ収集。

どれくらい時間かかるかな……。



六九話 蓮華（後書き）

これで、使い魔は全部そろったかな。

龍族 天使 魔族 守護者。

わーい、神の右席完成した（´・`・´）

+?????????

感のいい人は？部分が布石でわかるかも？w

七十話 実技授業（前書き）

第四世界のプロット書いてみた。

書き方分からなくて50文字だけ（．．．）

今までよりはマシになったかも？

注\*蓮華の発言は、ある程度調べてから載せていますが、ガセ情報あり。キャラの心情を盛り下げる役割って考えていただければ幸いです。

## 七十話 実技授業

### 校庭

「えー、では。先ほど授業で教えた、九字をやってもらいたいと思う。今出来ないからって落ち込むことはない。この時期なら出来なくても問題ないからな。出来たって奴は、符を作っただけでもないからな。ちなみにこっちの“クジ”で当たりをひいた女子生徒は先生と個人授業だか」

「『せんせーい、セクハラです。訴えました』」  
「過去系！！？ 五郎シヨンボリ……、始め」

先生が膝をついて落ち込んでいる。

現在、俺達は校庭での実技授業を受けている。

それはいいが……。

「お前ら何でいんの？ クラス違うじゃん？」

俺は双子少女に声をかけた。

「別にいでしょ？ 一般授業暇なのよ」

「ときさんと居たほうが面白いことが……素敵」

「こんなんでも学園トップなんだよな……」。

「どっちかと言つと、見た目だけでホームページのTOPになりました、って方が信じられる。」

「別に俺は大したことやらないぞ？ ホレ、蓮華。刻印しとけ」

「俺は蓮華に白紙を数百枚渡した。」

「蓮華はニコリと笑い。」

「ありがとうございます。ではお礼に、イチゴ牛乳は蛾の燐ぶん」

「ははは、そんな事は知っていた」

「抹茶アイスに含まれる緑色の食用色素の原料は蚕の糞、ね？」

「……」。

「「「あああああああああああああ……！！！！！！」」」

「俺とルリルルが叫んだ。」

「それは言わないでほしかった……」。

「あの白い芋虫を想像してしまう……、しかも糞……」。

「桜塚やつくんが指名する観客は、実はデビュー前の若手芸人、ね？」

「やめて……！ もうあの罵倒がヤラせに思えてきちゃう……！ っ」

か何で知ってんの!？」

この世界にもいるのかよ!？」

もうこの子怖い!!

そう思っていると、

「ときりん、何やってんの?」

背後から声がかげられた。

振り向くと、春木だった。

視線はルリリル+蓮華。

「お前こそ授業受けるよ」

かったるそつに言ってやる。

「ときりんには言われなくないが……」

それもそつだ……。

「お義兄さん」

は?

いまコイツなんて言った?

「俺としたことがこんなかわいい子をチェックし忘れてたなんてな  
!。しかもときりんの妹だし」

蓮華のことか？

身長138だったぞ？

身長にしては大きいが、胸だつてBくらいだし。

かわいいけど、ロリだぞ？

だがな春木。

「消える春木。お前みたいなロリコンを蓮華に近づかせるわけには  
いかない」

俺は蓮華を抱きよせ刀を向ける。

「はははは！！ ときりん。甘いぜよ！ 俺の蓮華ちゃんに対する  
愛『死ぬ！』つぶげっぺ！！？」

つまらぬ屑を切り刻んでしまった……。

俺は魔力補助ありで春木を投擲した。

春木は星になった。

「……アンタも十分ロリコン、もといシスコンよ？」

黙れリル！

妹を汚すやつは殺す！！！

「くすくす、ときさんは面白い」

ルリはいろいろツボに入ってるようだ。

さーて、

俺は刀で指を切った。

「つて、アンタなにしてんのよ!!!?」

「え? 符描くんだが?」

血で描くんだろ?

「そうだけど違うわよ!!! どんだけ切ってるのよ!?!」

俺の指は1センチくらいパツクリだ。

爪で繋がってるみたいな?

スラスラと五芒星を書き込んでゆく。

隣では同じように蓮華も。

蓮華は復元が早すぎて、手頸を切っている。

俺の場合は治そうと思えばすぐ治る。

蓮華は勝手に治る。

「効率がいいんだよ。ホラこれやるから使ってみろ」

俺は1枚をリルに手渡す。

他のやつでも使えるか調べたかった。

俺はその間もスラスラと描いてゆく。

「いや、でもアタシは……」

「リルちゃん……」

暗くなってるが、呪力ないのなんて知ってる。

俺の符にはルーなんて込めてないけど、勝手に自然霊が集まっているのが見える。

「他の人の血じゃ無理なのよ？」

「適当に投げてみる」

俺がそう言うと、人差し指と中指に挟み込み。

ビツッて感じで投擲した。

あ、予想以上に……。

突如、広大な校庭が炎に包まれた。

気づいた五郎先生が符を5枚投げ、結界を張ったが破られる。

「バカリル！ 消せ！！ 全員焼け死ぬ！！」

俺は慌てて叫ぶ。

「え！？ え！？ あ、アタシ使ったことないから消し方なんて……」

くそっ！

『水剋火』

俺は一枚の符を投擲する。



水龍が上空から地面に突進し、あたり一面に膨大な水の波が発生する。

水は火を打ち消し、相剋する。

火は完全に消し去られ、あたり一面は水びだし……。

周囲是水びだしになりながら呆然としている。

フッ……。

俺はリルに振り向き。

「全く、リル。力加減くらいしろよな？ いくら強いからってさ」

俺はリルのせいにした。

リルは俺の言葉に気づき、

「あ、アンタが！！ なんで」

俺はリルの口に指を当て、言葉を遮る。

「少し待て」

あたりが立ち直りはじめ。

刹那、

「くくくくくすっげー……！！」「」「」「」

大きな歓声。

「さすがリル様です!!」

「そうよ、今まで見せてくれなかったら実力ないんじゃないかって思ったけどすごい!」

「さすが生徒会! 学園トップだ!!」

次々にリルを褒める言葉が。  
にしても……、

『ご主人さま、彼女は多分』

ハクが声をかけてくる。

ああ、特化だな。

確かに俺は火気にしたはず。  
集まるのは火霊。

だが、あそこまで集まるようにはしていない。  
木生火。

木は燃えて火の威力を高める。

おそらくリルは木気。

更に何か別の要因が……。

呪力がないのは……、何か問題が。

あれだけの木生火は普通じゃ考えられない。

ま、おいおい解決するか。

問題見つけないとな。

「そ、そうよ！ 今までは隠していたのよ！？」

何胸張ってんだよ！？

「もう一度見せてください！ リル様！！ 惚れました！！」

「私もみたいです！！」

「う……、それは……」

アホだろリル……。

はあ……、俺が問題見つけるまでだからな。

そしたら自分で頑張れよ？

「おいリル！ “お前” がさっき描いた符忘れてるぞ！」

俺は符を数枚手に取り、声をかける。

リルは顔を輝かせ、とことこと走ってきた。

「今度は威力調整したからな。あんま、調子に乗るなよ？」

俺は小声で呟き、渡してやる。

「う……、ありがと……、ごめん」

小さく呟き、受け取って走って行った。

そして俺は符描きを再開。

「……どうやったんですか？」

俺の隣にルリが座り、問いかけてきた。

「コイツにしたら方法知りたいたろうな。ずっとルリを守ってきたんだろっから。」

「お前には無理だ」

俺は描きながら言いきる。

「……………なぜですか？」

ルリじゃないみたいに、低く険呑な声音だ。

「血が精霊に好かれていないと無理だ」

「……………血？」

俺は一枚の符を渡してやる。

「お前自然霊見えるか？」

「雰囲気程度なら」

「なら見てみる」

俺の言葉にうなずき、ルリは目を瞑っている。

「……………これは!？」

驚いたように目を見開いている。

「それが好かれるって事だ。勝手に集まってくる。お前じゃ無理だ」

る？ 極稀に自然に好かれる血がある。だから、あの威力になる」

これは嘘だ。

そんな血があるわけがない。

普通は血を媒体として、自然霊を降ろす。

俺の場合、世界が勝手に俺に従うだけ。

世界に好かれる人間がいたらたまったもんじゃない。

「そう……ですか……」

ルリは俯いてしまう。

「お前達双子が秘密を話してくれたら手伝つよ」

俺の言葉に、ルリは目を見開き、

「考えておきます」

ま、その答えで今はいいか。

頭を覗いてまで人助けしようとは思わない。

俺が加護するのはすがってきた相手だけ。

「ま、出来るならお前から頑張ってみろ」

問題さえわかればすぐにでも……。

ふと、俺の白紙の紙束に手が伸びていることに気づいた。

蓮華だ。

そちらを見ると……千枚以上の符が……。

「蓮華……、そんなに作ってどうするんだ？」

俺の声に、自分の符の山を見つめる。

「楽しくなっちゃいまして、ね？」

そう言って、手を振った。

それだけで動脈の傷は跡形もなく消える。

さすが不死。

「でも、主様もそれどうするの、ね？」

指さした方向には、数百枚の俺の符。

俺も作りすぎた……。

「こどもを漢字で書いた時に「供える」なのは、昔子供を生贄として神に供えていたからです、ね？」

「だからそう言うこと言うなー！」

何で唐突に言うんだこいつは！？

しかも、毎回決るような雑学じゃねーか！

ま、それはいいとして、俺は百枚程の符をルリに渡してやる。

「コレは？」

「リルを何とか出来るまで使わせとけ。お前の負担が大きすぎる」  
俺が渡した符をじっと見つめ、

「……ありがとうございます」

「だがな、いつまでもお前が支えてるだけじゃずっとそのままだ。  
解決策を探してやれ」

素っ気なく言い放つ。

「すみません……ありがとうございます」

俺の符を胸に抱き、

「アタシのときさんに対する好感度フィールドが、ラテン語のフェ  
チオと言う言葉が、世界中に広まったくらい広がりました。今な  
ら裸見られてもいいです」

そんな事を言いだした……。

「そんなこと女の子が言うな……、ついでにお前の裸はいつも見て  
る」

うんざりだ。

「ちなみに、フ ラチオとは、チャップリンが起こされた訴訟から  
来ています。15歳のロリ妻が有利になるようになって、ね？」  
「蓮華の知識は糞すぎて涙がでてくる」

こんな妹いや……。

幼い少女が笑顔でこんなこと言うんだぜ？  
年齢的には10歳程度だがあり得ないだろ……。

俺はふと、遠い目で前方を見る。

「あー、九字の授業なのに、なんでリルの呪お披露目会みたいになつてんだ？ 先生まで生徒に交じって見てるし」

隣のルリがくすくすと笑っている。

「でも、嬉しそうですよ。リルちゃん。久々に見ました、あんな笑顔」

ルリは遠い目をして見つめていた。

リルは炎を鳥の形にして、芸をさせている。  
本当に嬉しそうにしていた。

問題見つけてやりたいな……。

はあ……、なんだかしみつたれて来たな。  
隣のルリも心ここにあらずって感じた。

よし！

「蓮華、一つ頼む」

蓮華が頷き。

「ゴキブリのかかったホイホイに火を放つと、キーツキーツと大



合唱を聞くことができます。さながら歌唱大会です、ね？」

「……」

俺とルリはなんとも言えない気分になった。

まじ使い道ねー！ こいつの知識！

てかゴキブリネタが多すぎ！！

いきなり蓮華が立ち上がり、

「みなさんも元気にしてあげましょうね？」

そうほほ笑み、

「皆さん！ 犯罪のニュースで「暴行」と言ったらレイプ！ 殴る蹴るの暴行」と言ったら、性的行為を伴わない暴行ですので注意です！！ ね！？」

叫びやがった。

知らなくてもいい事実全員が押し黙った。

ルリが暗い顔をしてとぼとぼと帰ってきた。

そして、俺の隣に無言で体育座りをした。

「あれ？ ルリさんもういいんですか？ ね？」

蓮華が笑顔で問いかけるが、

「……ええ、知った事実が抉るわ」

俯いてしまった。

「変ですね？ もっと面白いことが必要でしょうか？ ね？」

大きく息を吸い込み。

「日本人の年間死亡原因の一位は「癌」ではなく、「中絶」です！  
！ ね？」

叫びやがった……。

もう全員が体育座りをする異様な光景が出来上がった……。  
先生まで鬱になってる。

「まだですか？ ならば」

「ストップ蓮華。もうみんな元気だから大丈夫だ……」

俺には妹を責めることなんて出来ない。

「そうですねー、それはよかったですよ、ね？」

満面の笑顔だ。

この笑顔の為にクラスには犠牲になってもらおう……。

あ、そう言えば、聞きたいことあったんだった。  
ちようどいいし話を切り替えよう。

「なあ、二人とも。生徒会ってどうやったら入れるんだ？」

俺の言葉に二人が顔をガバっと上げる。

「はいるんですか!？」

「はいるの!？」

そんな目をキラキラさせて見つめられても。

「んー、入ろうかなと」

街から出れないんじゃないかな。自由には動きたい。

ルリは唇に指を添え、少し上向きになり、

「そうですねー、アタシが推薦しちゃいましょうか？」

「いや、それじゃ形だけの生徒会になっちゃう。本来は？」

ルリは少し考え、

「実技テストに魔物討伐って言うのがあります。それで規定以上倒せば大丈夫ですね。成績は余裕でしょうし」

魔物討伐？

「学園でそんなことしていいの？ 危険だろ？」

「いえ、これは普通選びませんよ。ただ、規定を超えるにはこれしかないんです。危険な分評価が一番高いので。ちなみに、アタシとルリちゃんもこれで生徒会になりました」

ふむ、それがいいな。

「わかった。それでいい」

「ま、ときなら余裕よね。あんな呪符初めて見たわ。水龍もね」

あれでも力抑えたけどな……。

「ときさんが入ってくれたら学園対抗戦も楽ですよね」

ルリがそんな事を言いだした。

「なんだそれ？」

「ええ、この都市と同じように、他にも同じような学校が世界中にあるんですよ。それで集まって、対抗戦があるんです。年に一度の魔族討伐の指揮権がもらえますね。世界中の学生が討伐に参加しますので、数百万人の頂点ですよ。」

それって……。

「人死ぬよな？」

俺の言葉に二人はキョトンとした。

「そりや当り前ですよ。かなり死にますね。でも、それが学生ですよ？ それに、討伐で数を減らさないと結界が保ちません。人類滅亡です」

こともなげに言ったが……。

それがどれだけ異常か分かっているのだろうか？

どうも学費免除や生活支援があると思った。  
つまり、自衛隊みたいなものじゃないか。

多分この世界では普通なのだろう。

たくさん子供を作り、一定年齢になったら戦死。  
そうしないと、人類が滅亡する。

貴重な大人は資金作りに躍起になる。

しかもこれが全部俺のせいだと思つと……。

やりきれねーな。

「ま、そうだな。頑張るか？」

俺は二人に声をかける。

笑顔でうなずいてくれた。

出来るだけ人が死なないように。

俺が前線に出るかな。

地のページだしな。

最悪は

『ハク。二人のバックアップを取っておいてくれ』  
『はい』

蘇生。

ほんと、生命で遊んでるって感じだよな……。

「あふっ」

「んっ」

俺は寄り添う二人の頭を撫でてやる。

右側にルリ。

左側にリル。

不思議そうに俺を見る双子。

「どうしたんですか？」

「なによ？」

ま、その前にやるのがいろいろあるけどな。

「別に、ただこうしたかっただけだ」

二人は顔を見合わせ、ほほ笑む。

俺に寄りかかり、目を瞑った。

別に好意でもなんでもなく寄り添うだけ。

この世界での俺の家族。

軽く幻惑で幸せに。

っていつか、視線が痛い。

泣きそう……ぐすん。

七一話 実技・魔物討伐（前書き）

雑学王が怖い。

注\*蓮華の発言は、ある程度調べてから載せていますが、ガセ情報あり。キャラの心情を盛り下げる役割って考えていただければ幸いです。



七二話 実技・魔物討伐

通学中

くそっ！

何回目の遅刻確定だろうか！？  
最近毎日走ってるぞ！？

「また遅刻よ！　ときが来てから遅刻おおいわ！」

糞リルめが！

「何でお前ら、服兼用出来んのに両方とも下着ねーんだよ！！」

朝なかなか起きないルリを起こしにいくと、部屋に大量の下着が洗濯しないで貯めてあった。

俺はそれを洗濯機へ。

で、次にリルを起こしに行くと同じ状況。

洗濯機へ。

そしてコイツらは寝るとき下着を穿いていなかった。

結果、下着がなくなり、乾燥待ち。

盛大に遅刻した。

どう考えてもコイツらのズボラのせいだ。

「いいから走れ！ ルリ走れ！！ さもないと蓮華に頼むぞ！！？」

俺がそう言うと、必死に走り始めた。

「任せてください！ 洗濯液のアタックを使うと驚きの白さになる理由は、蛍光塗料が入っているからなんです、ね？」

ああああ……、俺だけにダメージが。

この双子に洗濯の概念は皆無だ。

「次だ蓮華！」

「はい！ カビキラーを使ってカビは落ちません！ 化学物質で脱色してしまうだけです！ ね？」

俺集中攻撃だ！！

家事は俺やってるんだぞ！？

「俺以外を標的にしろ！！」

「はい！！ お二人は身長を気にして牛乳を飲んでいるらしいですが。日本人には牛乳のタンパク質を分解する酵素を持ってる人がほ

とんどいません！ 呑んでも栄養として摂取出来ません！ ね？」

ズザアアアアアア

二人が前のめりに倒れて沈黙した！

コイツら毎日めちゃくちや飲んでたからな……。

「走れルリル！ 寝るな！！」

「アタシはもうダメよ……。何年間無駄な努力を……」

「神様の意地悪……」

ピクリともしなくなつた！

逆効果だつたか！！

俺は二人を脇に抱え、走る。

蓮華を体内に入れてから魔力で身体強化が出来るようになった。

「とき……、下着がめり込んでるわ……」

「黙れ！ 遅刻だが！」

「ときさん、もう変わらないです。諦めましょう……」

「アホかつ！ 今日是一日外部に魔物討伐だが！！」

「それなら方向が違うわよ？」

「今更言うなバカ！ 案内しろ！」

俺は二人を抱え、リルの案内で走る。

隣では蓮華がものすごい速さで走って行く。

まじハエー……。

街出口付近

ぎりぎり……。  
て言うか、他の生徒は先に出発したらしい。

先生がひとり残っていた。  
五郎先生だった。

「お前達遅かったなー。刻、貴様はハーレムを築いたのか？ 殺す」

コイツはマジで先生なのだろうか？

「話はいいから早くしてくれ、追いつけない」

どれくらい前に出たかわからんが、追いつけない！

「ああ、生徒会がいるからわかると思うが。人型を口に啜えてる。  
今日はこちらで支給するから今度は作っておけよ？」

そう言つて、5枚ずつ人型を渡してきた。

なぜか俺の名前が書いてあり、釘が刺さっていた。

「先生。のろい殺そうとしましたか？」

「ハハハそんなわけないだろ？ お前も可愛い生徒だからな。あと  
で髪の毛一本もらつていいか？」

俺は髪の毛一本ですら床に落とすことは許されない。

双子のせいで俺への嫉妬がやばいからな。

写真撮られた次の日なんて、街中に俺と双子が写ったポスターが  
張つてあった。

俺の顔が削られてたり。

双子の写真が切り取られてたり。

極稀に俺のも切り取られていたりしたが。

結局一日ですべて持ち去られて無くなっていたが。

ちなみに、ルリとリルの部屋にはA1で印刷された写真が飾ってあった。

「はいよ、蓮華」

俺は蓮華の口にはさんでやった。

「喰うな！」

普通に喰いやがった！！

って言うても。

俺も蓮華も必要ない。

てか、邪魔だ。

「とき、これ」

リルが、複雑そうな模様が描かれた符を二枚手渡してきた。

「何これ？ 呪い？」

「そんなわけないでしょうが！ 通信符よ！ 蓮華にも持たせて置いて。喋れなくなるから」

ふむ、便利だな。

俺は一枚をポケットに突っ込み。

もう一枚を蓮華のパンツに挟んだ。

「あんた……」

リルが文句を言ってきたので。  
ルリリルの通信符を奪い取り、挟めそうもなかったが胸の間に入れておいた。

「よし行くぞ！ 下着の間なら落ちないからよかつたな」

俺がニッコリ笑ってやると、俺の通信符が奪われ、下着の中に入られた。

「行くわよ！」

今此処に、下着内に通信符を入れた、四人の若者が旅立つ。

「よし、じゃ開くからな？」

俺達は口に人型を挟み、開かれた扉をくぐる。  
どうやら二枚あるらしく。

俺達が入ると閉じ込められた。

「ははは、まるでペットだな刻！」

糞教師め！

結界程度俺は通過出来るんだぞ！？

二枚目の結界が開かれ、外に出る。

枯れ果てた木や、岩。

一面に広がる荒野。

「主様、何もいませんね。そう言えば、アブラゼミはピーナッツク  
リームの味がしました、ね？」

喰ったのか！？

ってか、すでに人型喰ったなコイツ！

二人が慌てて人型を啜えさせた。

『ちゃんと挟んでないと危険よ！？』

脳裏にリルの声。

『お前は挟めるほどなかっただろ？ 通信符がずり落ちる』

俺がそう言うと、石がすっ飛んできた。

『チツ』

こいつ気にしてるのか！？

全裸見られても恥ずかしくないコイツがか！

『リルちゃん、とりあえず追いつきましょう。ときさんには後で、  
微乳のよさをたっぷり教えてあげればいいのです』

コイツも怒ってるか！？

てか、15でこなら微乳ってわけでもないと思うが？  
ギリギリこって感じだったか。



『そつね、ついていらっしやい』

リルが先導して俺達はついて行く。

## 合流

ふう。

一時間くらい歩いたかな？  
追いついたわけだ。

でもこれはねー……。

『何遊んでるんですか？』

とりあえず声をかけてみた。

『き、君たち怪我人を連れて戻ってくれ！ 誰か応援を頼む！』

対処してる先生が声をかけてきた。

周りにはボロボロな生徒たち。

死んだ奴はいないようだが、人型がたくさん破れてる事から傷を肩代わりしたんだろう。

それでも骨くらいは折れてるだろうな……。

『んー、生徒会としてはどうすんだ？』

『そうですね、あれは魔族ですね。あと魔族に従ってる魔物が数百  
』。？』

毛が生えてないゴリラみたいなもの。

20メートルくらいありそう。

腕が異様に長い。

魔族って人型だと思ってたが……、あれは人じゃないわ。

それが数十体＋魔物数百って感じだった。

教師は結界を補強しているようだ。

『よし、行くのだルリ!』

『つて、ルリちゃんだけ!? なんでアンタは手伝わないのよ!?!』

いや、実力見たいなど。

『ま、ダメそうなら手伝う』

それよりも……。

ハク、アレはページか？

『いえ、違います。ただの雑魚ですね』

ただの雑魚らしい。

『主様、パンツの中で紙が擦れてくすぐったい、ね?』

そういやそうだ。

俺ポケットに転移しちゃったし。

俺は和服の間から手を入れて取りだしてやる。

帯の間に入れ直した。

ちなみに今はピンク色の浴衣だ。

着物に飽きたので、浴衣に変えた。

夏だしね!

『がんばれルリ』

『はい!』

俺が応援すると、符を取り出し、何やら呟いているようだ。

符の形が変わり、えーっと。

洋弓？

身長よりデカイ光の弓になった。

さらに符を取りだし、呟くと矢になった。

長い光の矢。

それをつがえ、放つ。

一度上空に打ちあがると、分裂して雨のように魔物に降り注ぐ。

必中の精度で一度に数十匹消えた。

魔物は気づいたようで、ルリに向かってくる。

突如、ルリは上空にジャンプした。

っつかスゲーー！！

30メートル位まで飛んだぞ！？

どうやってんだよ！？

そのまま、一匹の魔族の上に着地し、落下の速度を利用し、弓を頭に突き刺す。

弓は魔族を貫通し、地面に突き刺さり、敗れた符に戻った。

魔族が倒れる直前に、ガウンから符を取り出し投擲し、こちらにジャンプした。

目の前に着地したと同時に、一匹の魔物が炎に包まれて焼け死ぬ。

『やるなー、ルリ』

『当たり前でしょ！ ルリちゃんは学園で一番強いのよ！？』

お前が威張るなよ……。

とりあえず、俺達に結界を張った。

話すら出来ないからな。

その時、

『き、君たち大丈夫か！？』

知らない先生が声をかけてきたが、

『アンタ、結界張ってるだけじゃなく敵引きつけて此処から離れればよかったんじゃないか？ どうやら知能は低いようだから、お前が魔族一匹でも倒せばお前を追ってきただろうに。生徒が怪我したのもお前のせいじゃないのか？』

思ったことを言ってみた。

結界なんて長く持つものじゃない。

助けなんて確実に来ないこの場所で、結界張ってどうするつもり

なんだろうか？

いずれ死ぬなら、コイツがおとりにでもなればいいのに。

てか、この世界の大人はムカツク。

子供にすべて任せてるところが特にな。

『無駄よとき。魔族なんてこの人には倒せないわ。魔物がせいせい  
ね』

侮蔑を含んだ言葉をリルが発した。

はあ……。

こいつを引率にするなんて、大人は何を考えているんだ。

『下がれ』

俺は先生にそう言い捨て、5枚の符を投擲。  
生徒たちに結界を張る。

『き、君たちは？』

先生がまた、声を発してきた。

『生徒会です』

リルがそう言うと、安堵の表情を浮かべた。

……全くコイツは。

『じゃー、次誰が訓練する？』

『なっ！？』

俺が声を発すると、先生は驚愕をあらわにした。

『君たちはこの事態がわかっているのかい？』

わかってるだろ？

『実技授業だわ』

こともなげにリルが言う。

討伐の実技授業だ。

ただ、この先生がバカしてピンチになっただけ。

『んじゃ、アタシが行くわ』

そんな事をリルが言った。

『……おまえ、呪使えないよな？』

『そうね、でもやりようはあるわ』

そう言うと、ルリに光の剣を二本もらっていた。

二刀か？

突如、リルは消えた。

俺でも視認はほとんど出来なかった。

前方を見ると、黒い鮮血が宙を踊っていた。

まるで雨のように、黒い血が降り注ぐ。

あれは人間の動きだろうか？

確実に違う。

どうやったら刀より太い魔族の首を両断出来るんだ？

物理的に不可能。

刃が真空刃になってるわけでもない。

なのに……。

呪力はないかもしれないが、リルには確実に何かがある。

そんな事を思っていると、リルはこちらに戻ってきた。

最後に二本の剣を投擲し、二匹の魔族の眉間を貫いた。

『お前鬼神じゃん』

思った通りのことを言ってみた。

『ちっ、違うわよ！！アレくらい普通よ！！』

てか、俺はルリが助けて生徒会に入ったのかと思っただが、全然違うな。

こいつ自信強い。

呪力なんて必要ない程に。

まあ、ルリ並のやつと闘ったら負けるかも知れんが。

それより……。



『お前らひどいなソレ……』

ルリルは黒い血を浴びてドロドロだ。  
臭い。

『仕方ないでしょ!?!』

真っ赤になって怒ってる。

『うーん、俺は最後でいいや、蓮華練習してきていいぞ』  
『はい! 主様!』

蓮華は刀に指を置き、呟いて指を這わせる。

黄色く輝く九字が刻まれる。

『えっ!?! 蓮華、九字全部刻めるの!?!』

そう言えば珍しいんだっけな。

『当然だろ? 俺の妹だし』

妹がほめられるのは嬉しいぜ!

『アンタが威張ってどうすんのよ!?!』

コイツがそれを言うのか!?!  
さんざんルリを自慢しておいて!

突如、蓮華の武器が変化した。

って、ええええええええ！！？

なんですかその武器！？

一メートルくらいの円に、50センチ位の刃がピツシリ生えてる。  
円の中は空洞。

なんでレン製なのに漆黑に！？

刃に刻まれてる文字まで漆黑に！

なんかめちゃくちゃ怖いし……。

円の中に腕を通し、ぶんぶん音がするくらいに回している。

残像が実体に見える程だ。

黒い円が腕から生えているようにしか見えん。

『いつくよー！ ていつー！』

可愛く言つが、

高速で飛翔するよくわからない武器。

そして、

魔物や魔族の体が半分に切断されてゆく……。

てか、どうやって操作してるんだろうか？

蓮華が指を振ると方向が変わる。

自然霊と感応？

次々に切断され、血の海が……。

そして、円が戻ってくる。

円が真横に来たところで、手を突き出し、また右手を軸にしてぐるんぐるん回している。

『もういつちよー』

『いや、もういい』

トラウマを残しそうな光景だった。

ルリリルが青ざめてるし。

『そう？　ね？』

そう言つと、円は白い刀に戻った。

どう変化したら漆黒のアレになるんだろうか……。

利点としては、回転しているので、血が自分にも円にもつかない。

『にしても結構残ったな』

うーん、魔族30くらいに、魔物数百残った。

『アタシが殺つて来ちゃおっか？』

それ以上真っ黒くなってどうすんだよ……。

『ま、ここは俺がやるから。とりあえずお前ら二人は帰ったら風呂だからな?』

俺は刀に指を添え。

『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』

呟き、一気に指をスライドさせる。

九色に輝く漢字と、周りに浮かぶ四つの文字の円。

『……あんた何よそれ?』

訝しげにリルが聞いてきた。

『九字だろ?』

『ちっがーうわよ! どんな九字がそんなになんのよ!?』

なっちゃんだから仕方ない。

俺はそれを両手で持ち、地面に突き刺す。

『喰い尽せ……カヤノ姫』

突如、前方を埋め尽くすような数のノヅチが地面から這い上がる。

巨大なヘビのようだが、短い脚が無数に生えている。

イソギンチャクの触手のようにうにうにと……。

それが魔物に喰いつき。

バリバリと音を立てて咀嚼する。

生も死も関係なく。

すべてを喰い尽すノツチの群れ。

咀嚼音と、魔族と魔物の叫びだけが聞こえる。

数分後、ノツチは地面に戻っていた。

後には何も残らず、穴も空いていない。

血の一滴も落ちていない。

もともとノツチは野の精霊と言われることから実態があるわけではないのだ。

丁度、荒野だったから使ってみた。

さて、終了。

『さーて、終了！ 今日のはなまこのソテーにしようか！』

俺が後ろを振り向くと、

双子はへたりこんで涙目だった。

お互いを抱きしめて震えていた。

『お前ら漏らしたな……』

二人はブンブンと頭を振るが。

俺は双子のスカートを捲ってみる。

『漏らしてるじゃん……』

『……』

まあ、わからなくもない。

カヤノ姫はイザナギ・イザナミの子供だ。

かなり神格が高い神だし、本体ではなくても、眷族のノヅチを見  
たんだから死んでもおかしくなかった。

失神しなかっただけでもほめられることだ。

よし、褒めてやろう！

『えらいなお前ら』

俺はにこりとほほ笑んでやった。

二人は真っ赤になって、殴ってきた。  
しかも本気だった。

『あ、アンタ！ おもらしたことを褒めてどうすんのよ！？』

ええええ！？

そう言えば説明しないで褒めてた！！

ま、いつか。

『はい、とりあえずパンツ脱げ。気持ち悪いだろ？ 他の奴は先生  
が退避させたし、ここには俺とお前らだけだ。だからコレ』

俺は先ほど取り出した二人の下着を渡す。

『……』

あれ？

『あんた……、何で持ってるの？』

何を言っただ？

『俺はいつもお前らの下着持ってるぞ？』

裸見られても恥ずかしくないのに、なんで下着は恥ずかしいんだらうか？

『はあ、もういいわ。とりあえずありがと……』

不満そうだが書き替えて、漏らした下着を俺の顔面に投げつけてきた。

『くさっ！』

『あ、ああ、アンタ！ 臭いって何よ！ 臭くないわよ嗅ぎなさい！』

『やめろ！！ 尿死する！！』

俺の顔面に押し付けてきやがった！！  
誰がこんなの嬉しい奴いるんだ！

『ああんっ、そんなときさんが素敵』

ルリは違う意味で変態だ！

てか、脱げ！！

俺はルリを脱がし穿かせてやる。

てか、コイツらは濡れてても気にしないだろう人格を持ってるからな。

『とりあえず帰るか。一応訓練したし』

俺はそう言いながら、蓮華の手を引き街方面に歩きだす。

『そうね』

『はい！』

二人は俺の横に駆け寄って来て、一緒に歩く。

『と言うか、最後の何よアレ。呪力がやばかったわよ？ 感知できないアタシですら恐怖したものだ』

『アレって地球ごとへビみたいので埋め尽くせますよね？』

ふむ、そうなのだ。

アレは地があれば全てから生まれる。

“地”球なら全てを飲み込むことが出来る。

『そうだな、アレは神卸しだ。一時的に神を降ろして力を借りた。カヤノ姫は国産みと神産みの子供だからな。大地の神そのものだ』



俺の言葉に驚愕に目を見開く二人。

ってかおい！

俺の方が神としては偉いんだぞ！？

イザナギとイザナミだって俺の子供だし！

教えないけどさ……。

『アンタなんてもん呼び出してんのよ！？ 制御できなかったら地球ごと食べられちゃうじゃない！』

リルが頭をパコパコと殴ってくる。

届かなくて、ぴよんぴよん飛んでるが。

『それよりも、それを呼び出せるときさんのほうが異常だと思いますが……、さすが『不幸王』です。素敵』

変な二つ名つけられた！？

これで、俺の二つ名は『非常識』『残酷王』『不幸王』だ。  
ロクなのがねえ……。

『ま、お前ら呼び出すなよ？ 神は制御がまじむずかしい。アレみすつたらみさかえなく喰い尽すから』

うん、星ごと呑みこみかねない。

神が俺の制御下になかったら、確実に呼び出した瞬間暴走する。  
暴食の姫だし。

『だ・か・ら！ なんでアンタはそんなの呼びだしてんのよ！？』

びよんびよん跳ねて面白い。  
飛び跳ねたところを俺がキャッチする。

『離しなさいよ!』

『はっはっは! ちっこいのー』

もう服が汚れたけどいいわ。

帰ったら四人で風呂に直行だ。

双子は直行させないと普通にリビングを血まみれにする。

『主様臭い……』

蓮華にまで言われた……、俺のせいじゃないぞ?

『そんな主様に一つ。人口中絶で子宮から胎児を取り出さない、胎児は口を大きく開け沈黙の悲鳴をあげます、ね?』

『『『……』』』

俺達三人は沈黙した。

『ちなみに、中絶時に胎児を取り出すさい、頭をつぶしてから取り出します、ね?』

やめて!!

想像したら涙が出るから!!

かわいそすぎる。

『ですから新しい生命は大切に、ね?』

蓮華が双子に言うと、こくこくと二人が青ざめて頷く。  
むしろ子供を産むことにトラウマが出来そうだな……。

『主様、お疲れでしょうからコレをどうぞ、ね？』

そう言つて、レンゲは俺にタバコを渡してきた。  
よく買えたな……。

とりあえずせっかくもらったので啜えて火をつける。

「げほっげほっ」

人形ごと吐きだした。

「無理！ まじ無理だ！ てか俺体は16歳だ！」

二人が慌てて俺の口に、

「ばかつ！ げほっむせてる最中に中に突っ込むはっ」

まじバカッ！

7枚も入れやがった！

啜えるんじゃないやなくて中に突っ込むな！

てか、もうめんどい。

「もう邪魔だこれ。蓮華もはずしていいぞ」

「はい」

蓮華は人型を捨てた。

双子が驚愕の顔をしてる。

『あ、アンタたち何で平気なの！？』

「ああ、俺と蓮華は体に呪力を纏ってるんだよ。いずれお前らも出来るんじゃないか？ 外でも平気になる」

呪力ではないが、嘘ではない。

原理は同じなんでコイツらも出来るはず。

『なんかずるいわね』

不貞腐れた。

「ま、頑張れよ失禁双子少女」

殴られた……。

『殴られてるときさん素敵』

どっちかと言つと、ルリの方が頭おかしいよな？

「そついえば主様」

蓮華が俺に声をかけてくる。

「愛煙家が合言葉のように「たばこ税は俺達が云々」って言いますが。たばこ税の多くはポイ捨てたばこを拾う除去料に使われている

んですよ？ ね？」

コイツはそれだけのために俺にタバコを渡したんだな……。  
そのせいで人型口に丸め込まれたし。

はあ……。

## 七一話 実技・魔物討伐（後書き）

カヤノヒメ（カヤヌヒメとも）は、日本神話に登場する草の神である。『古事記』では鹿屋野比売神、『日本書紀』では草祖草野姫（くさのおやかやのひめ。草祖は草の祖神の意味）と表記し、『古事記』では別名が野椎神のうちのがみであると記している。

WIKIより

七十二話 閑話・ある夏休み。（前書き）

注\*蓮華の発言は、ある程度調べてから載せていますが、ガセ情報あり。キャラの心情を盛り下げる役割って考えていただければ幸いです。

小説の下の方にお気に入りに入ってます、みたいなのあることにさっき気がついたんですが、

これって、どの作品でも、大体紹介作品同じですよね？  
必要あるんでしょうか？

上位はアクセスが増えるけど、他の作品が減りそうです。  
皆一生懸命書いてるんだから、ランダムにすればいいと思いますけど。

そう思うのはボクだけでしょうか？

七十二話 閑話・ある夏休み。

自室

今日から夏休みに入った。

って言っても、一週間しかない。

何でも、学園都市に大人が押し寄せて、改築、修理をするらしい。

ってことで、俺は今、部屋にいる。

この部屋はルリリルから、俺が使っていていいと言われた部屋だ。

広さは八畳くらいだろうか？

けっこう広い。

家を建てて、すぐ死んでしまった父親の部屋（予定だった）らしい。

あまり興味がなかったなので、部屋は適当だったが、やることもないので色々レイアウトを変えようかなと。



蓮華も俺の部屋の住人だしな。

「蓮華。何か欲しいものあるか？」

俺自身あまり気にしないので、蓮華に聞いてみる。

「はい、『知らなければよかった雑学』って、本がほしいです、ね？」

コイツはこれ以上暴走したいのだろうか……？

とりあえず、データベースからパクって創りだしてやる。

それを放り投げ、

「それやるからリビングでも行ってる……」

「はい！ 主様！！ 私は更に進化します、ね？」

喜々として部屋から出て行った。

すまん、ルリル。

蓮華がここにいたら、覚えた知識が飛び出てきそつで嫌だ。

「とりあえずどうしようかな……」

ベッドすらない部屋だ。

実は、俺はリビングのソファで寝ているし、蓮華はルリルのどっちかの部屋で寝ていたのだ。

自室には塵すら落ちていない。

とりあえず……、落ち付ける部屋がいいな。

まずは茶色いラグ（毛）ジュータンを敷いて。

ダブルベットを、むしろクイーンベットを設置つと。

窓には木製のブラインド。

低い木枠のガラステーブルを中心に配置。

カジュアルソファを二つ配置。

二人座れるやつだ。

シートクッション+ヌードクッションも置いて。

AVボードと、AV機器を設置。

AVつてアヴァンチュールつて訳したくなるのは俺だけだろうか？

書棚にチェスト、ドレッサーを置いて。

ベットの横にはシックなライト。

とりあえずこれくらいで。

見まわしてみる。

完璧だ……。

癒し空間が出来上がった。

すべてを木製にしたから自然って感じで、新生活応援フェアだな  
これ。

俺はソファに座ってみる。

最高すぎるー！！  
ひゃっほーいーい！

よし、ここはARIAの曲集だろ

俺はコンポにCDをセットし、しばらく癒されていた。

が……、

ドアが蹴破られた……。

「アンタこれ引き取りなさいよ！！　なんてもん渡してくれたのよ！！　ああ……、もうなめこ食べられないわ……。なめこ汁大好きだったのに」

蓮華を抱え、俺の部屋にリルが怒鳴りつけてきた。

一体なめこが何だっけ言うんだ……。俺も好きなんだぞ！？

「って、アンタこの部屋……」

俺の癒しは続かなかったか……。

「自室だから好きにしていいだろ？」

俺に自由を！

「そつね、いいわよ。ちょっと待ってて」

と言うと、リルは階段を降りて行き、すぐ戻ってきた。

リルを連れて。

「ときさんの部屋キレイになりましたねー。でも、シンプルさが足りませんね」

リルがそんな事を言うが、お前らがシンプルすぎるんだ。オセロのように白と黒しかない部屋だからな。

停止世界がお似合いだ。

なんだかんだ言いながら、二人は俺のベッドに腰かけた。

「このベッド……、どんだけいいベッドよ？ ふかふかだわ？」

そりゃ最高級使いまくり？

「お金は？」

「ああ、俺の金使った」

うん。

この街に来てすぐに、大人の住む街へ行つて、宝石を売ってきた。家具とかは創造だけど。

「アンタどんだけ金持ちなのよ！？ あ！」

リルが何かを思いついたように、顔をコチラに向けた。

「居候が二人も増えたのに出費が減ったのよ、食事も良くなってるのになんでかしら？」

それは、お前達が服を着る＝買う。  
だったからだろ。

一回しか着ないとかありえない。

「お前らの家事能力が証明されたんだよ」

肩をすくめながら言ってる。

「家事と言えば、スーパーのマグロとイカは高い確率で寄生虫がいるんです、ね？」

蓮華が口を開くといいことがない。

「にしても、何でときは、こんなうんこ色にしたのかしら？」

「女の子がそんなこと言うな……。落ち着くだろ？」

自然色は精神を落ち着かせるのさ！

お前らのせいで俺はハゲそつだ！

「あ、それならばモノクロに変えましょうか？」

ルリがそんな事を言ってくるが、どこが『それなら』なんだろう  
か？

ゴス少女侮れない。

「つて！ お前なんで壁にそんなの張るんだよ！！」

ルリがA1の大きなポスターを……。

もちろん、俺とルリルルが写ってる物を張りつけてゆく。

「嫌ですか？ 記念ですよ？ 雑誌の表紙になった記念？」  
「すごく嫌だ。」

「だれが『この敵をブチコロセ』なんてキャッチコピーが表紙に書いてある雑誌に喜ぶんだ。」

「あ、そう言えばまだまだありますよ？」

「そして、ルリがガウンから取り出した写真数十枚。」

「お風呂場で全員裸のとかある。  
いつ撮ったんだ？」

「てか、明らかに俺ら以外が撮った写真とかあるぞ？  
両腕に双子、首に蓮華が抱きついてる写真とか誰が！？」

「ちゃんと、人数分現像してあるので、持って行ってくださいな」  
「そう言って、ほほ笑むルリ。  
ま、悪くはないな。」

「てかオイ！ なんでお前ら布団に潜り込んでんだよ！？」  
「普通に寝るような雰囲気だぞ？」

「今日からアタシたちここで寝るから」  
「しれっと、言いやがった！」

「俺の寝るところどうすんだよ!?!」

別にソファーでもいいが、俺の癒し空間が……。てか、寝るにしてもまだ昼だぞ?

二人は顔を見合わせ、

「なんで? 別に一緒に寝ればいいじゃない」

コイツらは……、まあ、別にいけどな。

「広いから四人でも寝れるわよ?」

四人は無理だろ……、クイーンはがんばって三人だぞ?

「ちょっと来て」

リルが手を引いて、俺はベッドに寝させられる。ポジションはセンター。

「それで」

リルがレフト。

ルリがライト。

蓮華がフライ。

「ってバカッ! なんで蓮華が俺の上なんだよ! ついでにお前ら俺を抱き枕にするな! 左右めちやくちや空いてるだろが!?!」

シングルベット並にしか使っていない。

「失礼ね！　こんなかわいい二人を侍らせて何が不満なのよ！」

確かに可愛くはあるが、

「それにホラ。いろいろ楽しめるでしょ？」

「何が？」

俺の返答に、首をかしげ。

「胸とか？」

「無理。どっちかと言うと、息苦しくて悪夢見そうだ」

夢なんて一億年前から見たことないけど。

てか、夢ってなんだっけ？

「悪夢ですか？　アタシはときさんが出てきたときは楽しい夢でしたよ？」

そう言って、ルリは微笑む。

「リルちゃんにお尻を蹴られて逃げ回ってました。すごく素敵でした」

俺にとっての悪夢じゃねーか……。

「それならこつこつのはどうでしょうっか？」

いきなり頬にキスをしてきた。



リルも同じようにキスをして、

カシャッ

「って、蓮華カメラマンポジションかよそこ!？」

蓮華が写真を撮った。

「あとで、これも現像しますね。最近現像しているお店の人に変な顔をされるんですね？ 今度この男の人を連れてきてほしいって言われました」

最悪だ!!

現像ってことは見られるんだっ!!

しかもその店員俺を殺る気だ!

「そっだ!!」

ガバッとリルが立ち上がった。

そして俺を見、

「みんなで買い物に行きたいわ。ちょうどh・jeillyの新作が出てるのよ! 行くわよ!」

h・jeillyつてのがなんだか知らんが……。  
服だよな多分。

「行ってらっしゅい」

俺は笑顔で手を振ってやる。

「み・ん・な・でよ」

笑顔で凄むとは器用だな……。

「ホラ！ ときの服も選んであげるから行くわよ！」

「うわー、絶対やだ。」

ゴス服団体さんになる。

って言っても、コイツらはゴスって言うかパンク？

二人は俺の両腕をホールドし、連れて行くこととする。

「って、待て待て！ わかったから着替えさせる。蓮華は自宅用の和服だし、俺はパジャマだ！」

とりあえず双子を部屋から追い出す。

はあ……、あの双子に弱いな俺……。

そんな事を思った午後の昼下がりに。

h . j e l l y

まじ最悪だ……。

俺達はルリリルご用達の店に足を運んだ。

デパートの6階。

まわりは、夏休みだけあって学生だらけだ。

女ばっかりだが……。

そして、俺 + 和服の蓮華が店の外で二人を待っている。

双子は物色中。

しかも何か俺のおごりらしい。

別に金はあるからいいけどな。

「あのー、お暇ならご一緒にお茶しませんか？」

いきなり二人組の女の子に声をかけられた。

「すみません、連れがいるんで」

「そ、そうですか……」

肩を落として去って行ったが。

俺の隣には蓮華がいるんだぞ？

どうみても妹だけど。

ついでに、誰が好き好んでこんな場所に突っ立ってるよ？

お茶より紅茶の方が好きだしな。

さつきから、そんな感じで声かけまくられてる。

多分20組くらいかけられたかも……？

5分起き位にかけられて困る。

ってか、二人おせーよ！！

「終わったわよー！」

「ふんふん」

嬉しそうな二人が戻ってきた。

二人の服装が変わっていたが。

ドット柄のフリルカットソー。

黒い服に、胸元にはピンクの英語とドクロのマーク。  
大きく広がった襟元。

襟元と裾には二段になった半透明なフリル。  
裾と袖がなんかくたびれてる？

下は水玉パンスカート。

黒くて二段になってるフリルスカートみたいだ。  
てかパニエ？

水玉は、上の段にだけ黒に近い白。  
かなり短い。

靴下は膝上まであるはハイソックス。

黒と茶色と薄い茶色がランダムっぽくラインになり組み合わせ  
られている。

どこの黒装束だ？

顔がいいから似合うのかもしれないが、まあ、いいか。

「にしても、アンタ。店の中から見てたけどどんだけ逆ナンされて  
んのよ？」

溜息を付きながら言ってくるが、

「お茶しないかって言われたただけだぞ？ お前らと違って俺は顔よ

くないし。紅茶が好きだ」

思ったんだが、何故逆ナンって言うのだろうか？  
女が男に声をかけたってナンパだよな？  
全然逆じゃないし！

そんなのレディーヌデーがあつて、メンズデーがないのくらい差別だ。  
別だ。

女性車両があつて、男性車両がないのくらい差別だ！  
男性車両はゲイ・ボルクされそうで怖いが。

てか、二人が唾然としたような表情してるぞ？

「アンタ……鏡見たことある？」

失礼な！

毎日歯磨く時に見てるぞ！？

「見てるが？」

「アンタの感性が狂ってるのよ！」

だが、俺は実際顔で好かれたことなんてないぞ？

地球では逆に嫌われてたし。

他の世界では優しくしたからだろう。

あとは幻惑。

リルがずいっと俺の方に身をのりだして、まあ、ちっさいが。

「いい？ まず造形はおかしいくらい完璧よ？ あ、アタシだって

今まで見たことないくらいか、カッコイイとは思っわ！ べ、別に好きにはならないけど！ そして何よりそれ！」

片手を腰に当て、人差し指を顔の前に立て捲し立てる。

「その金色の瞳。どんな人間がそんなキレイな瞳になるのよ！？ 黄色じゃなくて金よ？ 黒点すら砂金みたいに金色がちりばめられてるじゃない！ よく見えるわね！？ まるで王に接しているみたいな気分になるのよ？」

そんな王を召使みたいに扱ってるこいつはなんなのだろうか？ ついでに、これは絶対遵守の神眼だ。だが、俺は服従の神眼なんて抑えている。

瞳の色は金色から変えられないけど。

抑えないとかなり輝くし、夜なんてまじ怖い状態になるし。黒点が白くなるしな。

てか、リル。

周り見る。

痴話喧嘩みたいに思われてるぞ？

「とりあえず行こう。てかお前買いきぎ……」

横の店員がめちゃくちゃ袋持ってるぞ？

「せっかくのおごりだもの！ いっぱい買ったわ。たぶん百万超えたんじゃないかしら？」

俺はリルの言葉に啞然とした。

服に100万って……。  
別に金はいいけど……。

「ちなみに今着てる服はいくらだ？」

「そうね。5万くらい？」

侮りがたしゴス服。

どんな素材使ったらそんな値段になるんだろうか？

「はあ……、ま、気がすんだならいいけどさ」

俺がそう言つと、驚く二人。

「いいの？ 怒らないの？ ときのお金よ？」

そんな意外そつにされても……。

だって、お前ら嬉しそうだし。

てか、怒ると思うなら買つなよ。

「別にいいよ、二人が嬉しそうなら金なんていくら使つても。俺金  
ほとんど使わないし」

実際全く使わない。

創造しちゃうし。

二人は驚いたあと、俺の左右の腕に抱きついてきた。  
俺を見上げ。



「あ、ありがと。あと……」じめんなさい

リルが謝るって珍しいな。

てか、裸見られるより謝る方がはずかしいのか!?

真っ赤になってるし。

「ふふ、リルちゃんはときさんがどこまでしたら怒るのか試したんです? なんだかんだ言っつて、いつも許してくれるから。無理してるんじゃないかって」

「る、リルちゃんっ!?!?」

リルの言葉に、リルは慌ててリルの言葉を止めた。

そんなこと思ってたのかよ……。

うーん。

とか思っていると、

あ、なんかリルが店員に住所書いて、配送してもらっつ手続きしてるな。

それが終わり、俺達は歩き出す。

双子は腕から離れない。

少し間が空いたけど、俺は口を開く。

「うーん、そっだな。お前らのわがまま程度なら俺は怒らないぞ? 性格や、ズボラなものな。俺が怒るのは」

その原因を作った大人だ。  
そして、責任を全て子供に押し付ける大人。

蓮華が前に言った、子供の漢字の『供』が、そなえるって意味だ  
ってやつ。

この世界はまさにそれだ。

子供が生贄。

腐りきってる大人に腹が立つ。

それに比べたらコイツらなんて可愛いもんだ。

だが、別に現在の大人が悪いわけじゃない。

昔から続くこの制度が悪い。

今の大人はそれにのっとり生きているだけだ。

なんて世界だよ全く。

「と、ときさん？」

どうやら顔に出ていたらしいな。  
ルリが心配そうに俺を見上げる。

俺は二人に微笑み、

「いや、気にしなくていいぞ？」

「それで、怒るのはなによ？」

そついや、そこで話しきったんだっけ。

「いや、何でもないよ。お前らのわがままくらい受け入れてやるよ」

俺の言葉に二人は不思議そうにしていたが、

はあ……、こんな世界にした俺のどこが神だ。

せめて目に見える範囲くらいは助けたいか……な。

「ふーん。じゃ、早く帰りましょ。帰ったらお礼にルリちゃんとアタシのファッションショーをしてあげるわ！ あ！」

そこで何か思いついたようだが、コイツの思いつきはロクなことがない。

「下着買い忘れてたわ。この前みたいに、なくならないように買っておきましょう」

俺の腕を引っぱるリルだが、

それはコイツらが洗わないのが悪いわけで、家に数百着くらいあるぞ？

ついでに俺は下着売り場はきつい……。

「俺ファミレスで待ってちゃダメか？ あそこの空気はキツイ……」

まじ行きたくない……。

「大丈夫よ、試着室の中に居ればいいのよ。ついでにアタシ達も色

々見せるから選んでいいわよ?」

どこからそんな案が浮かぶんだろつか?

あんな狭い所に何故三人も入ろうと思うか?

相変わらず裸見られることは気にしないようだし……。

「やはり俺は……」

俺が止まろうとするが、ガッチリ固定されている。

「行くわよ!」

「行きましようときさん。女性に蔑まされるときさんも素敵です」

嫌だ……。

結局、俺は店員や客に軽蔑の視線を送られました。

二人が試着室でワイワイ着替えまくるので目立ち、中から出てきた俺に突き刺さる視線。

もう一生行きたくない……。

はぁ……。

七十二話 閑話・ある夏休み。(後書き)

書いてる最中叫びたくなりました。

## 七三話 討伐実技テスト（前書き）

注\*蓮華の発言は、ある程度調べてから載せていますが、ガセ情報あり。キャラの心情を盛り下げる役割って考えていただければ幸いです。

## 七三話 討伐実技テスト

自宅・朝

「アンタ今日頑張りなさいよ？ これで生徒会に入れるか決まっちゃうんだから」

現在俺達は朝食中。

今日実技テストがある。

討伐以外を選んだ生徒は、すでに実技テストは終わっている。

今日は討伐メンバーの実技テスト。



自信がある奴だけが参加するらしい。

それか、ルリルルにお近づきになりたい者が参加する。

「んー、そうだな。ま、適当に倒せばいいだろ？」

別に他人がどうこうとかどうでもいい。

ようは生徒会に入れる、つまり規定以上の点数をとり、トップになればいいのだ。

「にして、お前牛乳やめてヨーグルトにしたのか？」

リルはヨーグルトを食べていた。

「だって、意味ないし。だったら、健康になったら成長するかなと？」

まあ、健康になって栄養をより多く摂取出来れば成長するかも？

「あ、リルさん、ね？」

蓮華が口を開く。

絶対に知らない知識が……。

「人には人の乳酸菌があるって言いますよね？ だったら、そのヨーグルトに入ってる乳酸菌はどうやって作ったんでしょうか？ 人からしかとれませんよね？ つまり」

蓮華の言葉に、リルの顔がみるみる青ざめてゆく。

「人間のう　ちから最初は乳酸菌をとったわけです。それを培養したのが今の乳酸菌。最初の人には偉大ですよ、ね？」

蓮華が笑顔で言い切った瞬間、リルがヨーグルトを口から吹き出した。

目の前の俺に……。

「リル……吐くな……」

俺の言葉など聞いていないとばかりに、

「アタシは一体何を食えばいいの……」

テーブルに伏してうなだれていた。

確かに、蓮華の知識によって食べれなくなった食材は多い。それがなぜかリルの好物ばかりだったから不思議だ。

「てかさ、今まで食ってたんだから全部平気だろ？」

顔とテーブルを拭きながら言ってやる。

俺は割り切ることにしたんだ。

「それは違うわ……、確かに食べられるかもしれないけど、これまでのようにおいしく頂けないのよ」

それはわかる。

脳裏にちらつくからな……。

「それならもつと栄養があるものがありますよ、ね？」

蓮華が……、

リルはさすがのような目で見つめているが。

蓮華の言葉だぞ？

「精液を飲めばいいんです。精液に含まれている栄養分は、ナトリウム、カリウム、タンパク質、ブドウ糖、コレステリン、アスコルビン酸、シユウ酸ですから栄養満点です、ね？」

笑顔でそんな事を言いやがった……。

「とき、頼むわ」

リルはアホだった……。

「硫酸でも飲んでろ」

「ちなみに、硫酸はかけてもすぐには発熱しません。消石灰で中和するのが言いと言われますが、水と反応してかなり発熱するので危険です。炭酸カルシウムで中和するのが一番安全です、ね？」

「コイツ普通の知識もあつたのか……。

「さて、俺はそろそろ準備するわ」

俺は席を立つ。

後ろでリルが『精液……』とか言ってるが、死ねばいいと思う。

## 学園出口

「えー……」

今、俺は学園の出口に来ている。

集まった討伐人数は50人くらいだろうか？  
先生はまた五郎先生だ……。

他にも二人先生がいるが。

唯一俺が嫌いじゃない先生だな。  
思考がおかしいが。

「とりあえず刻。お前は外部までハーレムを連れて行くつもりか？  
よし、殺そう」

そう言って、槍を俺に向ける先生。

現在俺は、右腕にルリ、左腕にリル、背中に蓮華が抱きついてい  
る。

蓮華は参加なので納得だ。

だが、この二人はすでに実技テストは終わっている。  
学校もあるのに……。

だだをこねてついできたのだ。

生徒会として直に見たいとのこと。  
ただの言いわけだ。

視線が超痛いしな。

しつこいようだが、コイツらはこの都市のアイドルなのだ。  
そんな双子を連れてる俺は睨まれるわけ。

「違います先生。見てくださいこの二人の表情を！俺が痛い視線  
を向けられていることを楽しんでます」

俺の言葉に五郎先生＋生徒が視線を向ける。  
だが、

「お前がひどいこと言うから泣いてしまっただろ！」

二人はうるうるとした瞳をしていた……。

さっきまでルリは恍惚とした表情だった。

ルリはニヤニヤとしていた。

呆れるほどの表情変化だ……。

「にしても刻。お前だけだぞ？ 一年で参加したのは？」

いやいや、春木と蓮華もいるし！

ま、春木と蓮華抜かしたらいない。

ほぼ9年生だ。

学校は15歳から10年制で行われる。

何が悲しくて25まで学校に通わなくてはいけないんだ。

で、ほぼ9年生ってことはそれだけ危険なんだろう。

「はー、まあ、試しです。どんな感じなのかと」

俺が適当に言つと、周りからくすくすと笑い声がする。

「ハッ、一年は学校で授業でも受けてろよ。わざわざ命を捨てに行

「くこともないだろ？」

「一人がそう言うのと、周りが笑いの渦に包まれる。」

「アンタたっ」

「リルが叫びだしたので、俺はリルの口に指を押し付けて止める。」

「気にするな。俺は周りの評価とかはどうでもいい。ようは結果を示せばいいだけだ。こんなくだらないことで言い合うなんてタダのバカだ」

「俺はリルに笑いながら言ってる。」

「“先輩方”への侮蔑を含ませて。」

「おまえ！！少しは先輩を敬え！！」

「はぁ……。」

「敬いますよ。先輩達が結果を出せばですが。年齢なんて関係ないんですよ。ようは結果が全てです。だから、この子たちも一年で生徒会にいるわけですし。頑張っっていい点数取ってくださいね。“先輩さん”」

「そう言い、俺はリルの頬を撫でてやる。」

「リルはくすぐったそうにしている。」

「チツ、死にそうになっても助けてやらねーから！」

「ええ、そのかわり俺も助けませんから」

俺の言葉に、全員の視線が鋭いものになる。

てか、何で全員男なんだよ……、どうせルリル狙いだろっが。

「こら、お前らいい加減にしる。ま、俺も刻の意見には賛成だな。全員に言えることだが結果を出せ。年齢で点数なんてやらないから？ 実力で平等にやるからな」

五郎先生が全員を見回す。

「さて、ルート設定だが。三つの魔物の群れを回る。数が少ないところから回るからな。魔物はすべて1点。魔族は最低30〜って点数だ。強さによって変わるからな。やることは簡単だ。出来るだけ多くの魔族を倒せばそれでいい。一応危険だと判断したら俺達が助けに入るからな。その時点で助けに入られた生徒は終了だ。じゃ、行くぞ」

話が終わると、全員が人型を啜える。

とりあえず俺達も啜える。

「ルリルは今回手出すなよ？」

コイツらが手だしたらすぐ終わりだ。

『わ、わかってるわよ！ そんなこと言うからにはいいところ見せてくれるんでしょうね？』

ルリルがニヤリと笑う。



『先輩達次第』

俺もニヤリと笑う。

ニヤニヤと笑う俺達。

周囲が不気味なものを見るような目つきで見ている。  
てか、嫉妬？

さて……と。

お手並み拝見かな？

コイツらが使い物にならなかつたら、魔族討伐の指揮権とかいら  
ないぞ？

いない方がマシだ。

## ひとつ目の群れ

二時間くらい歩き、ひとつ目の群れに着いた。

なんでも、人工衛星から位置を把握し、向かっていたらしいが。

群れじゃなかった。

魔族1匹に、魔物数十匹位しかない。

魔族と魔物の違いを初めて知った。

単純に大きさだけだった……。

10メートル超えれば魔族らしい。

呪力で出来ているから、大きくなればそれだけ強いらしい。

魔物が魔族に従っているのは、魔物が魔族から溢れた呪力が形を成したものだからだ。

人形は吸血鬼くらいしかないらしい。

暇だったので道中教えてもらった。

『つてか、行けよ春木』

『アンタもよ』

眼前では先輩方が闘っていた。

タツノオトシゴのような30メートル程の魔族に全員で……。無視した魔物に足喰われたりして、肩代わりした人型がひらひらと舞っている。

しかも、魔族に40人以上襲いかかってそれかよ……。

『トキりん、行かないのか？』

春木が声をかけてくる。

『ああ、俺は最後の群れでいい。見ればわかると思うが、先輩方は最後の群れまで体力がもたない。春木は魔物狙った方がいいぞ。てか、あの人数で魔族倒しても、点数魔物二匹分くらいだぞ？ ついでに、魔物は魔族を守るからな、注意が先輩方に行くから一方的に魔物を倒せる』

俺の言葉に、チャンスとばかりに春木が走って行った。

『にしても、あの魔族硬くないか？』

40人で挑んで全然倒れない魔族を見、ルリルルに聞いてみる。

『そうですねー、魔族って言うのは呪力で出来ていますよね？ 自分の放つ呪力>魔族の体を構成する呪力、でないとあまりダメージを与えられないんです。それにしても、先輩方全然ダメです。ときさんならもつと素敵に吹っ飛んだり殴られたりしますのに』

俺がやられるところを想像して悶えるなルリ。

『やっぱルリルリルは強いんだな』

『一応生徒会だからね。アンタの方が“少し”強そうだけど。少しね！』

納得してんだかしてないんだか。

そもそも俺は人間の尺度で測れないし。人間じゃないから。

前方では魔物を春木が『ひゃっほーい』とか言って刻んでる。血で真黒だ。

近寄せたくない。

そもそも、移動中に乾いて動きが鈍るだろうに。

『刻は行かなくていいのか？』

三人の先生が近づいてきて、五郎先生が声をかけてきた。

『ああ、先輩達が疲れてへばる最後の群れを全部もらえば済むよ』

肩をすくめて言っただけ。

もう敬語めんどい。

『ほう、それも一つの手だな。春木はうまいな。今のところ得点は一番だ』

て言うか、先輩がバカだ。

自分の点数のことだけ考えて、チームワークゼロ。

『てか、コレいつまで続くんだ？ 全然魔族倒せそうにないんだが？』

そもそも、周囲の呪力を吸収して回復してるから無理だろ。  
どんなに贖目に見ても、10分以内に倒せる実力がないと回復力が上回る。

『そうだな。今回のやつらは討伐って言うより、生徒会に入りたい奴だからな。点数のことしか考えず全員が牽制しあってる。実力はそこそこあるんだがな。あれじゃ倒せない』

と言うか、味方の攻撃邪魔するって何してんだろ。  
むかつくな。

『時間制限とかないの？ これじゃ一生終わらん』  
『そうだな、魔物が終わったら下がらせるか』

って言っても、春木の方はもうすぐだ。  
先輩方の“犠牲”で一方向的に切ればいいだけだし。

あ、終わった。

『おーい、お前ら結界内に戻れ』

五郎先生が叫ぶ。

生徒は不満そうだが戻ってくる。

『刻、あれなら70点くらいだぞ？ やるか？』

五郎先生がニヤリと笑う。

『倒してもいいですけど点数はいりません。三つ目の群れ以外はどうでもいいです』

肩をすくめながら言い、呪符を一枚投擲する。

魔族に当たった瞬間、魔族の体を木が這い。固定する。

更に一枚投擲。

炎となり焼き付くす。

魔族＋一人を……。

それだけで終了。

必要時間10秒。

『ほう。「木生火」で足りない呪力を補ったか。やるな』

てか、一人大火傷負って重傷だぞ？

死んではいないが……。

他の生徒が親の敵のような目で俺を睨みつける。

はぁ……。

『先生今の俺悪くありませんよね？ちゃんと最初の呪符を投げた時誰もいないの確認しましたし』

確かにいなかった。

ただ、固定されたのを見、一人がチャンスとばかりに飛び込んだのだ。

固定だけで終わらず奴はいないだろ……。

『ああ、と言うかだな。お前ら人形ばつか持って何で呪符持ってこないんだ。確かに九字の方が威力は高いが、相性を利用すれば魔族だって倒せるだろ？ 生存ばかりに気を使って、人形ばかり持つてくんな。ちなみに、刻は何枚人形持つてきた？』

五郎先生が俺を見るが、

『4枚ですね』

俺の言葉に啞然とする一同。  
てか、先生も驚いてる。

四枚は口に啞える最低限の枚数だ。  
二時間程で一枚消費する。

ダメージを受けることが許されないと言うことだ。

実際は、作るの忘れていて、この前の残りだ。  
ハサミで切ったりめんどいんだアレ。

呪符は書くだけだし。

『刻は少なすぎだけどな。まあ、人形は補助だからな。メインは攻撃だ。討伐に来たんだろが』

五郎先生がそう言うが、納得いかなそうだ。

『点数のことでも気にしてるなら関係ないぞ？ 刻は今の魔族の点数はいらないらしい』

なんか一同がほっとしているが……。

呆れすぎてもう帰りたい。

どっだけライバル心燃やしてるんだよ……。

『じゃ、次の群れに行くぞ。一時間くらいで着くだろう』

先生方が歩いて行くので、後ろを俺達はついて行く。

その後ろを疲れきっている先輩方が。

これ死ぬな。



## 二つ目の群れ

移動したが、ここもたいして数がない。

魔族が十くらいに、魔物が百程度だ。

魔族は、先輩方が5人くらいで一匹を相手にしている。  
魔物は、春木が高笑いを上げながら刻んでいる。

そして、俺達は

「あつ！ ルリちゃんそれアタシのエビフライっ！」

「ふふー、早い者勝ちです」

結界内の空気を浄化し、お昼ごはん。

「にしても、刻は、もぐもぐ、りょうひもひはー」

「先生。飲み込んでから話してください。子供ですか？」

ま、五郎先生のそう言うところは好きだ。

「主様、トマトジュースはいりません。塩が大量に入っていて、飲みすぎると体に悪いんですよ、ね？」

吸血鬼はトマトジュースが好きなんじゃなかったのか……。  
そっぴや、こいつは血も嫌いなんだった。

「にしても、確かに互角以上に戦ってるけど、へとへとだな。こころで脱落じゃないか？」

先輩方は足がガクガクだ。  
移動距離が長いしな。

「ああ、一応連れて行くが、無理だろう」

それならそれで都合がいい。  
無駄に死なれるよりはマシだ。

「で、生徒会への規定ポイントってどれくらいなんだ？」

俺は先生に質問してみる。

「三千点だな。次の場所だけでもいけるんじゃないか？ けどな、次の場所はよくわからないんだ。地面自体が黒くてな。魔物と地面の区別がつかない。だが」

五郎先生は、突如真剣な面持ちになる。

「生徒会までハーレムにする刻を殺さなければいけない」

生徒会って言っても、家と変わらないだろ……。  
メンバー双子しかないし。

「つて、何槍構えてるんですか先生!!?」

「ここまでなのか五郎!!」

「俺は40年間彼女なしだ!」

誕生日迎えたのか!?

てか俺は一億年いねーよ!

なんか隣のルリが先生を睨んでるぞ?

「先生、ときさんの半径13、356キロ以内に入らないでください」  
「い」

「地球外退去!?!」

なんか五郎先生が泣きながら膝をついてるぞ?

『ルリ様に……』とか言ってるし。

ルリは俺ににこりとほほ笑み。

「ときさんがいなくなったら、アタシ達はどうやって生活すればいいんですか?」

確かにコイツらは生活能力皆無だ。

だが、そんな事のために先生を地球から追放するのか……。

よく罵倒で計算できるよな。  
地球の直径と大気圏外までの距離。

てか、五郎先生適当だな。  
他の先生ちゃんとチェックしてるぞ？

眼前を見ると、魔物はすでに終わっていた。  
魔族が残り二体。

式神を使ってる奴もいるけど、あれは神じゃない。  
妖怪だ。  
しかもちっこい。

名前すら分からない妖怪……。

『ときりーん、俺も入れてくれー』

結界外で真黒な春木が笑顔で言ってきた。

「黙れ！ 貴様みたいな汚物は入るな！」  
『ヒドイっ！』

あんな汚いの無理！

「先生、そろそろ終わりそうですから行ってあげてください。俺は片づけてから行きますので」

俺は先生に声をかける。

「そうか？ 飯ありがとな。お前はいいお嫁さんになるな、ウチに

「こないか？」

コイツついに男でもよくなったのか!？」

俺のバツクディフェンスを甘く見るなよ？

刀を構えて先生に突きつける。

「死ぬか結界から出るかしてください」

俺が冷めた声で言うと、すごすごと出て行ってくれた。

「あと、春木。お前も俺達待ってる。半径10メートル以内には近づくなよ？」

『扱いヒドツ!？』

俺はそれだけ言い、ゆっくりと片づけ始める。

「ねえ、別に待ってもらえばよかったんじゃない？」

リルがそんな事を言ってくるが、

多分地面が黒いつていうのは……。

もしそうならリルリルは生徒を守りながら戦うだろう。

疲れてようが敵わなかつと、あの先輩方なら向かって行くだろうし。

点数の為に。

足手まといの味方を守りながら戦うほど不利なことはない。

守っている方も必ず傷を負う。

それなら……、

俺はこの二人が傷を負わない方法をとる。

例えそれが、最低な行為だとしても。

「ああ、あと少しだしもったないから食べちゃおうぜ？」

俺はそう言って、笑ってやる。

結界外にも出して春木にもおすそわけ。

『人形啜えてて食えないんだけど……？』

しゃーない。

「入っていいけど、俺達から離れるよ？ 臭いし汚いし」

春木を入れてやると、涙を流しながら食べていた。

ふふ、そんなに嬉しかったか。

にしても、先行組は……。

死ぬかな……。

まだ確定ではないが、地面の黒が全て魔物だったら……。

他を捨てて、大切なものを守る。

ホント歪な神だなー俺……。

## 七四話 三つ目の群れ（前書き）

注\* 蓮華の〜以下略。

最近百話を超えたらどうやって三文字で話数を書こうか悩みます。

百二三話とかだと四文字なんですよ。

まだまだですが、いい案があったら教えてください。

## 七四話 三つ目の群れ

### 三つ目の群れ

やっぱりこうなるよな……。

数百メートル前方には、全てを埋め尽くすような魔族と魔物。数えることなど不可能だろうな。

ページが入りこんだ奴はいないようだ。

一体どこにいるんだか……。

『な、なによ……コレ』

リルが震えながら声を発する。

先生の結界内にいるのは20人ほどだろうか。他の生徒は、なんて考えなくてもわかる。



その20人も、足が切断されていたり、腕がなかったり、無事な生徒はいない。

人形もすべてなくなつたようだ。

先生三人が、結界を常に補強している。

すぐに符が破れるので、敗れた所に符を置く作業を繰り返している。

『助けましょう、リルちゃん!』

『うん! リルちゃん!』

二人が符を取り出し、武器にする。

だが、それをさせるわけにはいかない。

俺は5枚の符を投擲し、二人+春木を結界に閉じ込める。

二人は最初わけが分からないようだったが、

「とき!! なんてよ!?! 死んじゃう……みんな死んじゃうよ!」

リルは泣きながら結界を叩いている。

リルは武器で破壊しようとしてるが、壊せるはずもない。ルールを付加した結界だ。

この世界内なら俺以外は誰にも破壊出来ない。

「なんで……なんでよ!!」

内側に両手をつき、涙をぼろぼろとこぼしながら座りこむ。

俺は結界を挟んで二人の前にしゃがみ込み、

「すまんが二人をそこから出すことは出来ない。俺は他人よりお前の方が大事だからな。嫌ってくれてもいい。それでも俺は」

嫌われるだろうな……。

最低なこと言ってるって自分でもわかる。

「それじゃあ!! それじゃああの人たちはどうするの!!?」

俺は微笑み、

「お前達の代わりに俺が行くよ。また後でな」

死亡フラグみたいだ……。

「とき!」

「ときさん……」

俺は二人に背を向け、

「蓮華。行くぞ」

「行きます、ね?」

二人が後ろで叫んでる声を無視し、歩きだす。

「俺は、お前達を傷つけないんだよ……」

誰にも聞こえないだろう声で呟く。

まず、先生たちの結界付近に寄り、

先生達の結界を、俺の結界で上書きする。

そして、創造した人型を、百枚ほど渡してやる。

「刻……、撤退だ！　ここは俺が防ぐから生徒を連れて逃げてくれ  
！」

五郎先生がそんな事を言ってくる。

まったく、この先生はホントいい先生だな。

「違いますよ」

俺は軽い調子で言ってる。

先生は何を言ってるか分からないようだが、

「これは授業です。魔族と魔物を討伐して皆で帰る。それが授業内容です。ならば簡単でしょ？」

「なっ！！？ おまえアレを」

俺は刀を持ち、

「アレを全滅させれば終わりじゃないですか 『宿れ！ ルー！』」

俺は始めてルーを宿す。

前のように力を借りるわけじゃなく、ルー自信を宿す。

刹那、俺の刀が光輝く。

10メートル程の大剣。

空中には九字が描かれた九色の球体が浮遊する。

俺の周りを直径5メートル程の四つの、文字の羅列の円が回る。

隣では蓮華が九字を刻む。

前回の円が半分に割れた半月型。  
それが二つ。

弓の弦の部分に、黒い取っ手が付けられている。  
蓮華はそこを持ち、振り上げる。

漆黒の刃が一振りで、数十本魔物に飛翔する。

それが貫通し、何条もの道が出来る。

俺は巨大な剣を一振りする。

斬撃が光の刃になり、横一文字として100メートルほどの範囲を貫通しながら魔物を切り裂く。

俺は後ろを振りむき、

「見ていてください先生。ちゃんと点数くださいよ？ もともとありましたよね？ “最後の群れ”は俺が全部もらうって」

驚愕の表情をしている先生をしり目に、俺と蓮華は走りだす。

俺の周りの球体が自動迎撃を開始する。

広範囲に飛び交い。

焼き殺し。

押し流し。

凍りつかせ。

刻み。

消滅させ。

貫き。

閉じ込める。

俺の周りの円が。

分解し。

消し去り。

時を止め。

操る。

俺自身は剣を振り敵を駆逐する。

蓮華は刃を飛ばしながら踊るように舞う。

まるで扇子を持っているように漆黒の半円を振り回す。

一方的な殺戮。

俺と蓮華は魔力を纏い、血すらも近づぐことを許さない。

俺の後方から大きな腕が襲い来る。

拳に着地し、飛ぶ。

飛ぶ反動で魔族は碎かれ、俺は敵の後方まで飛ぶ。

およそ数キロ。

身体強化が出来なければ着地でつぶれていただろう。

そして振り向き。

斬撃を飛ばす。

光の斬撃は一発で数百匹を駆逐する。

上空の球体からとめどなく放出される炎、水、氷、風、雷、土、  
金、光、闇。

数分ではぼすべてを駆逐している。

蓮華の攻撃は俺のところまで届いている。  
どこまでも貫通する無数の漆黒の刃。

『蹴散らすぞ、蓮華』

内部で話しかける。

『わかりました主様、ね？』

突如、地面から漆黒の剣山が全ての魔物を串刺しにする。

俺は上空に全く同じ光の剣山を作りだし、落とす。

魔物は上下からの剣山に挟まれ潰れ、

刹那、

光と闇の拒絶。

重なった瞬間に光と闇が大きくはじける。

白と黒の閃光。

その爆発に周囲一帯すべてが消えさる。

後には巨大なクレーターだけが残る。

魔物は血すら残さず消え去った。



それはよかったが……。

すごい疲労だ……。

魔力より先に、足腰が立たない。

ガクブルしてる。

「ハク……世界すら滅ぼせるのに。なんでこの程度でふらついてんだよ俺……」

ハクに聞いてみる。

『そうですね、現在のご主人さまの消費魔力は、無理な身体強化\*2 + ルーちゃん憑依魔力\*2 + ルーちゃん消費魔力 + ご主人さま魔力消費魔力 + 蓮華ちゃん消費魔力 + 蓮華ちゃん供給魔力です。吸血鬼用の身体強化はご主人さまの体に合ってますから大幅に減ります。憑依も慣れてませんから改善の余地ありますね。それで、蓮華ちゃんは闇のような普通の魔法は使えないのに無理に使ったんですよ。もともと身体強化しか出来ませんでしたから。数十倍から数百倍消費したんではないでしょうか？ 時間 + 空間がある星の戦い方ですね。最後の魔法以外は』

「すげー燃費悪いな……」

『はい、一応身体強化と魔法の融合が出来る星があるので、水のページまで集めたら修行に行きましょう。このままじゃへばります』

この燃費のままじゃやってられん。

しかも、身体強化後の体の状態ありえん。

足がガクガクする。

やっぱ人には人の身体強化が必要か。

体は人だし、神だけど。

神の身体強化か？

一旦戻るか……、今はわからんし。

とりあえず、蓮華の元に転移した。

一応、先生たちの結界にはこちらが見えないようにしているからな。

「あー、蓮華頼む。肩貸してくれ、倒れる」

足腰がやばい。

初めてまともに身体強化したせいで……。  
体が負荷に耐えられてないし……。

「はい、主様、ね？」

素直に肩を貸してくれるが……、

ちっちゃくて引きずられる。

あと漆黒の円が当たって痛い……。

俺は剣を解除し、蓮華のも解除する。

帰って寝たい……。

とりあえず、結界を解除つと……。

先生たちの方を見ると、全員怪我は治ったようだ。

五郎先生が俺を見つげ、走ってきた。

『刻！ 大丈夫か！？ これはお前が？』

そう言つて、俺の背後を見渡している。

「ええ、疲れただけです。頑張つて全部倒したんですから、俺と蓮華の点数たくさんくださいよ？」

俺は疲労で声も出すがだるい……。

『点数は満点だ。にしても、それじゃつらいだろ？ 俺が肩かしてやる』

先生がこちらによつて来るが、

「来るな！ そんな真黒にテカつたマッチョ髭野郎に近づかれたくない！」

俺はあらかぎりの声で叫んだ。

血を浴びて真黒だ。

気持ち悪いし臭い。

『ひどい……。善意なのに……』

先生が落ち込んでるが仕方ない。

そんなとき、後方からルリルルが走ってきた。

「おーい、お前ら大」

言葉の途中で思いつきりビンタされた……。

普通ビンタは衝撃を逃がすために、顔がビンタされた方向に逃げるだろう。

だが、この双子は見事なタイミングで両側からビンタしてきた。

しかも威力がヤバい、吐血した……。

止めとばかりに、俺はそのまま地面に倒れ伏した。

いや、立とうと思えば立てたよ？

足腰がガクブルするけど。

膝カックンされたら『あふん』とか言って倒れそうだけど。

『何でアンタは自分勝手なのよ!!? それでそんなになって!!』

『ときさんの体はもうときさんだけのものじゃないんですよ!!?』

二人は涙をためて睨んできた。

とりあえず、俺の体の中には5人住んでるから俺のだけじゃないけど……。

「いや、でも倒し」

『アンタが死んだらアタシたちはどうするのよ!!?』

リル……、そんなに俺のこと……。

『アンタが死んだらアタシ達は餓死するわ!!』

……。

感動を返せくそ野郎……。

「ごめん……」

確かに俺も悪かったけど……、二人が死んだら多分暴走する。  
世界ごと消し去るかも知れん。

『お願いだから……、無茶しないで……よ』

二人が泣きながらそう言うてくるが、俺にとってこれくらいなん  
も無茶じゃない。

ルーと身体強化の練習してたらこうなっただけだし。

やろうと思えば最初から空間ごと消し去ればよかった。

二人が倒れた俺の前にしゃがみこむ。

『アタシたちじゃときの手伝いは出来ないの？ 一緒にいたら迷惑  
なの？』

ごめん……。

迷惑じゃない。

迷惑じゃないが、死なれたら俺が耐えられない。

ただの俺の我がまま。

どろじょい、

「……パンツ丸見えだぞ？」

適当に言ってみた。

『パンツくらい何よ！ 見ればいいわよ！ 誤魔化さないで！！  
見なさいよ！』

「ぶっ……いひあれきない！！！！」

このバカ！

俺にとどめ指そうと顔面に押しつけやがった！

「くさっ！」

別に臭くはなかったけど、言ってみた。  
癖みたいなものだ。

『臭くないわよ！？ 臭いなら慣れるまで嗅ぎなさい！』

めちやくちやだコイツ！

不意に離れ、二人が両側から俺の腕に頭を通した。

立ち上がり、支えてくれる。

『ときさん。どうすれば強くなれるんですか？ どうすれば手伝えますか？』

ルリが呟くように言った。

『アタシたちはさっきの見ていたわ。アタシが呪力がなくて弱いから頼ってくれないの？ 確かにときみたいには出来ないかもしれない、でも……』

リル……。

強くて俺は同じことをしただろう。  
大切だと思っただから守りたかった。

でも、コイツらにはそれが重荷なのかもしれないな。  
それなら、一緒に戦って守ってやればいい。

それが出来る程度には力を持っているつもりだ。

最悪、二人を別世界に飛ばせば……。

「はあ……、わかったよ。これからは頼むよ。ルリ、リル」

俺はため息をつき、言ってやる。

『任せなさい！ アンタを守ってあげるわ！』

『ときさんが嫉妬の眼を向けられるくらい傍で護ります！ 素敵っ』

守る……ね。

女に守られる俺カッコワルイ……。

ま、たまにはいいか。

てか、先生達置いてきちまった。

コイツらまじハエー……。

歩いてるって言うか、飛んでるみたいだ。

身体能力高すぎだろ？

『今日はアタシ達が洗ってあげるわ』

はい？

『いつも洗ってもらってばかりで悪いのでがんばります』

いやいや、お前らに洗われると皮膚ごとズル剥けそうやだ。

洗い終わったら皮膚がなくなって、肌がピンク色になりましたと  
か最悪。

その前に摩擦で体が溶けそう。

「俺、今日帰ってすぐ寝たいな……と」

『ダメよ。寝る前にお風呂入らないとダメって言ったのはトキでし  
よ？』

確かに最初言ったけど……。

『帰ったら隅々まで洗いましょう。お尻の中まで』

嫌だーーーーー！

てか、俺はトイレなんて行かない。

全部魔力に還元されちゃうから必要ないのだ。



塵などは俺に触れることも出来ずに消えるし。

ただ、風呂が好きだから入ってるだけだ。

そんな俺が、何故バツクホルダーの内部まで洗われなといけな  
い！

「考えてみる？ お前ら人に下半身洗われるの嫌だろ？」

二人はキョトンとし、

『最初後ろも前も、ときが洗ったじゃない』

『汚いから中まで洗うとか言っていましたね』

そうだった……。

だって、マジばっちいんだもんコイツら。

「今洗われたら嫌だろ？」

『別に洗いたいならいいわよ？』

『どうせ毎日見られてますし』

羞恥心を教えよう……。

将来が心配だ。

普通に大勢の前で恥ずかしいこと言うしなコイツら。

このままじゃ変な方向の職業につきそうで嫌だ。

はあ……、先行きが心配すぎる。

手のつけられない娘の父親のような気分だ。

唯一の救いは、なぜか男に触られるのが嫌いつてことか。

あれ？

でも最初から俺触られてなかったか……？

謎が多いな。

七五話 式神卸し(前書き)

注\* 蓮華(以下略)

## 七五話 式神卸し

### 放送室

こここの設備はすごいと思う。

周りが見えないくらいにカメラが設置されている。

その映像を3Dにしてホログラムとして流しているらしい。

いま俺は、生徒会の放送とか言うのに強制出演させられるため、ここにきている。

メンバーはルリ、リル、蓮華、俺だ。

生徒会は生徒の代表とか言うが、全員私服だ。

ルール無視しまくりの代表だった。

「んじゃ、始めるわよ?」

リルの声で我に帰る。

あー、緊張する。

1 - C 教室 Side 春木

『あーあー、只今マイクの、マイクないけど  
リル様の声が聞こえてきたー!!』

「静かに!!! 双子姫様の演説がはじまるぞ!!!」

週に一度の演説、オレはこの為に生きているのかもしれない。

『『『てーらはー』』』

「『『『てーらはー』』』」

毎回思うが、この素晴らしい挨拶は誰が考えたんだろう？

つてか、トキリんと蓮華ちゃんもいるし!?

そう言えば生徒会に入ったんだっけ。

うらやましい。

『まず、生徒会の新メンバーを紹介するわ!』

そこで、リル様は一步後ろに下がり、トキリんと蓮華ちゃんが出てきた。

蓮華ちゃんの和服姿はすばらしいな。

『ではまず、私から行きますね？ 如月蓮華と申します。よろしく、ね?』

蓮華ちゃんが首をかしげた。

「『『『うおおおおお!』』』 蓮華様かわええええええ

！！！！！！！！！

はっ！？

思わず俺も叫んでしまった。

トキリンのようにクールにならないとハーレムが作れない。

最近全然クールじゃないが。

そして入れ替わりにトキリン。

『蓮華の兄の如月刻だ。よろしく』

いつもどおり適当だなー。

「「「「「如月死ねー！！！！！！！！！！」」」」」

「「「「「如月君かつこiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！！！」」」」」

男どもは憎悪を、女子は黄色い歓声を。

ここまで別れる人間も珍しいよな。

『はい、では今日の一言。どうぞルリちゃん！』

『賞味期限 過ぎた卵も 食べられる おいしいけれど サルモネラ菌』

ルリ様の和歌にトキリンがなんかゲンナリしてるな……。

でも和歌は素晴らしい！

「急いで賞味期限が過ぎた卵を注文しろ」

「『『『『オスツ!!』『』『』『』」

全員が携帯を取り出して注文し始めた。

俺もしなくては！

『次は質問コーナーよ！ 冬に存在しない人間はなーんだ？ ハイ！ 蓮華ちゃん！』

毎回素晴らしい問題すぎて俺には分からないんだよな……。

「誰かわかる奴はいないか!？」

俺は叫ぶ。

「ダメだ！ 今回ののは難しすぎる!!！」

「ヤバイ!! 早くしないと蓮華様の答えに合わせられない!!！」

『わかりました、ね?』

わかつちやっいたらしい、俺の人生は終わった。

『答えは、TUBEです、ね? 夏の広瀬香美も存在しません、ね?』

くあつ!!!

なんて頭がいいんだ蓮華ちゃん!!!



惚れ直すぜ！！

今度トキりんが結婚確定のお付き合いしていいか聞いてごう。

てか、トキりんが後ろでうなだれてる？

『次は蓮華ちゃんの今日の雑学よ！ どうぞ』

『ダンスの上等にたまる埃のほとんどは人間の皮膚です、ね？』

蓮華ちゃんが可愛く首をかしげた。

「全員この世界からダンスを消滅させる！！」

「「「「「ラジャー！！」」」」」

俺も帰ったら燃やさないと。

『では、今日の歌は「さっちゃんの歌」です』

『なんて選曲するんだお前ら……』

トキりんが初めて喋った！

「「「「「黙れトキ死ね！！」」」」」

すごい嫌われてるな、トキりん。

『さっちゃんがね おべを置いてった ほんとだよ だけ  
どっちちゃいから きつと貰いにこないだろ 悲しいな さっちゃん』

サツちゃんはね 線路で足をなくしたよ だから お前の足を もらいに行くんだよ 今夜だよ サツちゃん

さっちゃんはね、恨んでいるんだホントはね だって押されたからみんなとさよなら、悔しいね あいつらだ さっちゃん『』

『ストップ！ ストップ！！ なんてお前ら四番から息が合ったように歌いはじめんだよ！？』

せつかくの美声がトキリんのせいで……。

全員が人形にトキリんの名前書き出してるぞ？

って、あれ？

俺の手元にもなぜか人形が！？

『アンタいいところで止めないでよね？ せつかくのってきたんだから！』

『この曲で乗れるお前らがわからない！』

『でわー、ときは無視して、スポンサーからの宣伝をしますメモしなさいよ？』

おっしやー、買い占めてやる。

『売店からパンの宣伝ね。食パンにヨウ素液をぶっかけましょう！ デンプン反応！ 今日一日青紫DAYです！ コレで売り切れ間違いなしよ！ 早く売店にいきなさい！ ちゃんと聞き終わってか  
らね？』

あぶねえ、あやうく走りだすところだった。

『では、今日のラッキーアイテムよ。まずはアタシからは『尿道パスタ』 つぎはルリちゃん』

『アタシは『乳を揉みたい』で、次蓮華ちゃん』

『私は、『前歯についた羽虫』です、ね？ 主様』

『はあ…… 『食塩無添加下着』』

三人のをメモしなくては。

女子はトキリんのをメモしてるっばいな。

『それではまた今度！ では、いつものお別れの挨拶よ？』

一拍置き、

『みらすーぶ』

『ぴちぴちぴっうー』

『胸毛の谷間、ね？』

『半熟ピクミン』

『じゃーねー、チャオ』

そこでホログラムは消えた。

とりあえず……。。

「「「「ああああああああああああああああああああああ  
！！　また外れた！！！！」」」」

クラス全員が叫んだ。

今までの中率0パーセントらしい。

てか、毎回思っけど。

ルリルル様、特にルル様は絶対トキリんのこと好きだよな……。

俺達は式神を使役するための儀式として、体育館に来ていた。中が真っ白な体育館だった。

普通はステージがある場所に、大きな神台がある。マジでかい。

高さ30メートル、横50メートルくらいだろうか？

神台の前で祈祷すればいいだけらしい。

別に神楽みたいな祈祷祈念するわけではなく、祈るだけだ。

蓮華と俺はやらないつもりだ。

と、言うか。

蓮華の場合、俺が最高神だからこれ以上の加護は受けられない。俺にはルーがいる。

今のところ順番にやっているみたいだが。妖怪ばかりで神など出ない。

一応、妖怪、荒神、神霊、超人的存在（？）みたいなのが使役出来るらしいが。

ちっこい妖怪ばかりだ。

それより、

「お前ら何でまたいんだよ……」

俺はため息をつきながら声を発する。

「生徒会は一心団体よ」

「ときさんに対するいじめがみたくて」

一心団体ってか、一卵性なのはお前らだけだ。  
いじめられるのはお前達のせいだ。

「てか、儀式まで此処でやるのかよ」

自由な学校だな……。

「ええ、実際滞在時間はC組の方が長いわ」

「A組の男子がときさん殺すって言ってました」

確かにずっといる。

殺すって言うてるのは都市中が言うてるからもういい。

今日の生徒会放送もそうだけど、なんでコイツら人気あるんだよ？  
顔に騙されすぎてる。

「主様思ったのですが、よっちゃんイカを箱で買つと40袋+あたりだけ付いた袋が分けられて入ってますよね？そして、当たりをコンビニに持っていけばかなりお得ですよ、ね？」

何をいきなり言うてるんだこいつは？

今儀式やってる奴がイカみたいなの卸したからなのか？

「てかさ、お前らわざとやってるんだと思っけどさ？ 寄りそっちな」

俺が座ってる左右に双子。

背後から前に腕をまわしてる蓮華。

そして、超痛い視線。

「気持ちよくない？」

そんな首かしげられても知らん。

「お前らの行動と発言は脊髄反射すぎる。前頭葉切除してもきつと変わらん」

いきなりな行動と狂った発言ばかりだ。

「ときさんいますか？」

「いらん。誰が前頭葉もらって喜ぶんだよ……」

「昔ロボトミー手術で前頭葉を切除するのが主流でしたが、前頭葉を切除すると人格が破壊されてしまいます、ね？」

確かに知識はすごいが、無駄すぎる情報だ。

「ほら、行って来いルリ。お前の番だぞ？」

ルリが俺の横から、とことこと前に走って行く。

「どんなの卸すかな」

「ルリちゃんなら十二天将くらい卸すわよきつと」

確か伝説になってるとか。

実際は安部清明が使役するはずなんだよな。  
生まれなかつたけど。

どうなるかな。

どっちかと言うと、俺はリルの方が気になる。  
リルの身体能力と呪力はあるえないからな。

絶対使役に問題があるだろう。

どうもルリが卸すのに成功したらしい。

大きな白い犬。と言うか戌。

毛は白く、赤いラインが入っている。

周囲に青白い炎が浮かび、顔がルリの体くらいある。



周囲が驚愕に目を見開いているが、

「さすがルリちゃんね……、大きな犬、てか狼？」

ルリが身を乗りだして驚いている。

あれは戌だ。

戌神、天空。

立派な十二天将だ。

例え小さな犬だったとしても、動物が卸されるはずはないのだ。

「見てみてー、大きなワンコ」

そう言って、ルリが撫でている。

「ルリ行って来い。次はお前だ」

「わかったわ、かわいいの卸すわ！」

ルリは駆けて行った。

俺は戌をじっと見つめる。

戌は驚愕に目を見開く。

俺のことは知っているようだな。

まあ、ルリを守ってくれるならそれでいいけどな。

関係ないけど、春木は10センチくらいのスライムみたいな妖怪だった。

少しすると、リルが使役に成功したようだ。

両手で小鳥を抱き上げて、くるくる回って喜んでいる。

あれか。

リルの異常の原因。

酉神、太陰。

てか……、太陰の野郎アホか？  
なんで鶏じゃなくて小鳥なんだよ……。

まあ、鶏よりは見た目的にもいいか。

「ルリちゃん！　とき！　見てみて！　可愛い小鳥！」

そう言って、笑顔で掌の上に乗せた小鳥を突き出す。

「ああ、よかったな可愛い“酉”で」

俺は小鳥にニヤリと笑ってやる。  
ビクッと小鳥がなる。

「よかつたな太陰」

俺は近寄り、鳥にだけ呟く。

鳥が逃げ出そうとするので、リルの手の上から掴んでやる。

「リル、絶対離すなよ？ コイツ逃げようとしてるぞ？」

「え？ アタシじゃ嫌だった？」

不安そうに聞くリルに、小鳥はブンブンと首を振る。

リルは顔を輝かせる。

今夜にでも部屋に呼ぶか。  
太陰をな。

さーて、理由によってはぶち殺すぞ太陰。

七六話 太陰（前書き）

蓮華の（r y

七六話 太陰

リビング

今はリビングで紅茶タイム。  
て言うか、自室には三人が寝てるからここしかない。  
もう自室とは言えない。

現在時刻0時過ぎ。

なんでこんな時間に此処にいるかと言うと、糞太陰に聞かないと  
いけないことがある。

「おい、太陰、天空。霊体化解け。あ、天空は別にそのままでもいい  
からな」

俺が言葉を発したが、物音一つしない。

「潰すぞ？」

ドスの効いた声で言ってやる。

『わ、わかったよ、まったく』

そんな声が聞こえると、一匹の小鳥が虚空から現れた。

「人型で、だ」

小鳥が人の形になる。

ちっさい女の子だ。

まあ、少女の姿を好む女神だしな。  
性別なんてないはずだが。

茶色い髪のツインテール少女だ。

若干釣り目で気が強そうだ。

胸はギリB？ 下手したらA。

140センチないかもしれない。

袖無の白と黒のピッチリした上着。

柄的には八卦の太陰対極だな。

腰のあたりから、白くて長い前開きの袴。

前開きの部分には黄色い布が見える。

下着ではなく、ちゃんとひざ上辺りまである。

後方には、半透明の天の羽衣みたいなものを纏っている。

「まったく、何でアンタみたいな神が此処にいるのよ？」  
「リルみたいな話し方だな……。」  
「ま、俺のこと神ってわかる程度には神様らしいが。  
腰に腕を当てて不貞腐れてるし。」

「そりゃこっちのセリフだろ？ 俺の創った世界じゃん」  
俺も頬杖を突きながら適当に言ってやる。  
「適当には適当で返す主義だし。」

「そりゃそうかもしれないけどさー？ 今更じゃない？」  
「ま、今更だよな。」  
「こんな世界になってずっと放置して今更ね。」

俺は太陰に茶を勧める。

「黄茶でいいだろ？」

素直に席に着いて呑んでくれた。

なんか驚いてるし。

「コレ！ これどうしたのよ？ すごくおいしいんだけど！？」  
「そんなことかよ……。」

「君山銀針だよ。30グラムで一万くらいするんだぞ？ 中国でだ

って年間200キロしかとれない茶だ」

ま、俺の場合いくらでも創れるが。

「さすが神ね、わかってるじゃない」

にこにここと笑ってそんな事を言う太陰だが、

「お前だつて神だろが……」

「全然違つてでしょ？ たかが酉神よアタシは」

たかが酉神がめちゃくちゃエラそうだな……。

「知名度だけなら十二支のお前の方が全然有名だろ？ てか俺知つてる奴なんていないし」

悲しいが知ってる奴なんて誰もいないだろう。

「そうね、アタシもしらないわよ？ おかしな話よね。自分たちを創った神の名を知らないなんて。かなり神格が高い神なら知ってるんじゃないかしら。アンタが最初に作りだした神とか？ そう言えば名前は？」

もう足組んでめっちゃエラそうだぞ？

「トキだよ」

「トキね、コウトトリ目トキ科トキ亜科トキ属学名ニッポニア・ニッポンね」

そのトキじゃねーよ……。



西神だけあって鳥には詳しいな……。

「でさー、本題入るけど。お前リルに何したの？」

俺は真剣な顔になり、問い詰める。

太陰は普通に足を組んで、頬杖ついて茶飲んでるが……。

「そうねー、守ってたのよ」

知れつといいやがった。

意味が分からん。

「なんで神が式にされてないのに守ってたんだよ？」

「そうね、気が合ったから？ 白と黒大好きだし？ 性格とか合いそうだったし？」

適当な理由だった。

「それで、ずっと見てただけどね？ 親が死んだあとのあの子はホント暗くなっちゃってね？ だからちよちよと強くしてみたの」

ま、これが本来の神だろうな。

人間の意思なんて関係なく気分で物ごとを起こす。

「呪力を喰ったのは？」

「あれは仕方ないのよ。呪力を変換して身体強化に割り当てたから。もともと呪力高かったからかなり強くなったわね」

はあ…。

けらけら笑いながら言いきつたよ。

「宿れば身体強化も出来て呪力も使えるだろ？」

溜息をつきながら言っただけ。

「そうねー、でも式となったのは昨日だから、今までは背後霊みたいなものよ？」

「別に前から式になればよかったら？」

「うーん、最近面白そうだったから式になったのよ。そしたらビツクリよ。いきなり創造神が目の前にいるじゃない。何の冗談か思っただわね」

頬杖を突きながらはにかんでいるが、

コイツの場合普通に嫌味に聞こえるから不思議だ。

「別に神の神格なんて生まれた順番だろ？ そんな関係ないし。お前の方が強いかも知れんだろ？」

俺が適当に言っただけだと、太陰は眼を細めた。

「それは嘘ね。子が親を超えることは出来ないわ。だんだんと弱くなってゆく。そういう構造にしたのはアナタでしょ？」

俺がつけたルールじゃないけどな。

「それに、神格第一位のアナタは、全ての神なんて一瞬で消せるでしょ？」

突き刺さるような視線だな。

まあ、自分達がそんなちっぽけな存在からだって思いたくはない  
だろう。

神からみた人間はひどくちっぽけだ。  
俺から見た神もちっぽけではある。

「まーな、殺すつもりはないけど、殺そうと思えばすぐだ」  
「そう」

重苦しい空気が……。

「じゃ、お前、って言うよりリルに今度宿らせる方法教える予定だ  
から、それまで適当に守ってくれ。あとさ」

俺はじつと太陰を見つめ、

「何でお前そんなちっこい体なんだ？ 神の威厳皆無だな。小鳥だ  
し」

ランドセルとか似合いそう。

「し、仕方ないじゃない。子供の姿の方が好きだし！」

真っ赤になつて怒ってるし……。

「ついでに、何で女の姿なのさ？ 女装？」  
「失礼ね！？ コレでもちゃんと女の人の体よ！？ 性別はないけ  
ど……。子供だつて作れるわよ？ 神となら」

てか、神って大地とだつて子供作れるからな……。  
やろうと思えば頭とかかち割れば生まれるかも知れん。

生まれるのが人型とは限らないが……。

「試してみる？」

ニヤリと笑いやがった。

性格悪いな……。

「じょーだん。お前みたいな幼女に興味はない。てか、俺と神が子供作ったらどんなの生まれるんだよ？ 宇宙とか生まれるかも知れん。そもそも、俺はお前の祖先だぞ？」

近親相姦嫌すぎる。

「あら、いいじゃない。絶対服従の強い子供よ？ アタシが神の頂点になるわ！ それに神は親子とだって子供作ったりするわよ？」

野望スゲー……。

そんな、ない胸張って言いきるなよ。

神の玉の輿みたいじゃん。

歴代にはそう言うの多いけどさ……。

「これでも結構気に入ってる体なんだけど？」

自分の体を眺め言う。

「はいはい、『パチン』」

俺は膝の上に太陰を転移させる。

やっぱ小さいな。

「それいいわね。アタシにもくれない？」

膝の上で俺を見上げ言ってくる。

「お前世界と同期してんだからどこにだって移動出来るだろ？」

「ぶー、できるけどさー。自分だけよ？ 他の人は無理。アナタならちよちよいのちよいでしょ？」

頬を膨らませながら言ってくるが、

「確かにちよちよいのちよいだが、お前の性格が悪すぎてやる気にならん」

「ケチねー、アタシは自分に素直なのよ？」

まんま子供だわコイツ。

足をぱたぱたとしながら膨れている。

「あ、言い忘れてたけど、カヤノ姫が創造神が現れたこと言いふらしてたわよ？」

唐突にそんな事を言いだした。

たしかにアレは俺が一度使ったが……。

「結構アンタのこと狙ってるやついるわよ？ 玉の輿で。創造神の妻なんて実質数多の宇宙の王よ？ どう？ このロリボディ堪能しない？」

自分でロリボディって言いやがった。

「ロリコンって噂だし」

くあっ!?

神々の中で創造神がロリコン!!

たまたま周りに集まってくるのがロリなだけだったの!?

って、何脱ぎだしてんの!?

「みて、このアナタ好みのロリボディ!」

イラン!

ロリすぎる!!

俺の手を胸に持って行くが……、ぺったんだ。

「あら? 太陰こときが創造神様にとりいるとは笑えないわね?」

不意に後ろから声がかけられた。

太陰がそちらを睨みつける。

「へえ、本体で出てくるなんて珍しいはね? ノツチの姫。ノツチとでも子供うんだらどうかしら?」

カヤノ姫かよ……。

膝まである黒髪の美人だ。

普通に大人っぽい。  
身長も170近い。

「誰があんな奴らと！ はなれなさい太陰！！」

自分の眷族にひどい言い草だな。

でも、コイツは……。

「あー、俺さすがに既婚者には、ってか子供産んだ女性には興味ないぞ？」

俺の言葉にカヤノ姫が泣き崩れた……。

「あはははは！！ ほら見なさいカヤノ！！ 創造神はアタシみたいなロリ体系の処女にしか興味ないのよ！！」

お前は何高笑いしてんの！？

「ちなみに性格の悪いロリ体系にも興味はないぞ？」

太陰が床に崩れ落ちた。

神ってこんなやつらなのかよ……。

アホすぎる。

「創造神様、どうぞわたくしを娶りくださいませ」

後ろから声がかけられる。

振り向くと、床に土下座をしている女性が……。

美しい黒髪の女性だった。

「げっ、な、なちる!?!」

なちるって誰だよ!?!

「わたくしは、木花知流姫神。太陰のように“ロリ”体系でもありませんし、“既婚”者でもありません。まだ殿方を知らぬ身でございます」

そう言っ、顔を上げて微笑むなちる。

てか、神だけあつて規格外にキレイなんだよなコイツら……。

「ちよつとなちる! どういうことよ!?! アンタにはニニギがいるでしょ!?!」

「彼のようなもの捨て起きました。安心してください、接吻すら許しておりません」

神腹黒っ!?!

もういやだコイツら!!

「うん。お前らの言い分はわかった。頭冷やしてこいバカども。さようなら宇宙の彼方まで」

『パチン』

俺は三人を、ブラジルがあるであろう辺りまで飛ばした。って言っても、戻ろうと思えばすぐだ。



「天空へちょい出てきてくれ」

俺が言うと、目の前に老人が現れた。

白くて長い髭を持った老人だ。

「神ってあんなのばっかなのかよ？」

疲れたように言ってる。

「ほっほっほ、おモテになりますなあ、トキ殿」

優しそうな神だな。

「モテるってか、下心ありまくりじゃねーかアイツら……」

世界征服を考える人間みただった。

「ほう、それも仕方がないこと。創造神に出会えることなど珍しいのじゃよ。数多の世界を管理しているのじゃろ？」

「んー、まあな。守護者に任せっぱなしだけど創った世界は多いな」

俺が創ったわけじゃないが。

「あやつらが言ったことも事実でしょう。妻となれば実質神々の頂点じゃからの」

頂点とかどうでもいいなあ。

俺が創った星でも、俺が支配者だと思ったことなど一度もない。

創ったのは俺でも、星事態はそこに住むやつらのものだろう。

「ま、俺はそんなつもりないって回しといてくれ。あんな奴らばっかじゃ星ごと創りなおしたくなる」

「それは困りますな。神々には言っておこう」

そう言い、天空の姿は消え去った。

俺は紅茶を一口飲み、

「にしても……、リルに宿す……か」

人間の武器如きに神を宿すなんて出来るのか……？  
って言っても、呪力がないと傷も治せないし結界も張れないから  
な。

もしもの時に困る。

今度修行でもするか。

戦術の幅も広がるし。

武器も出せないんじゃないや困る。

毎回ルリに出してもらってわけにも……。

ま、今日は寝よう。

自室はアイツら起こしちゃうからリビングでいいや。

俺は白と黒のドット柄のソファーに寝ころんだ。

## 七七話 学園総会（前書き）

趣味はペットボトルの口から指を入れてパチャパチャやることです。

誰かポットに水を入れ、その中に唾液を一滴垂らして一か月放置してください。

結果が知りたくて夜も寝れません！

どんな菌が繁殖するか楽しみ

七七話 学園総会

地下

「いい？ 絶対違う場所に置かないでよ？ 戻れないんだからね！  
？ 特にとき！」

現在、地下三十階。

周りには多くの台座がある。

真っ白く、台座の上には真っ赤で細かな呪が描かれている。

その上に転移符を置くと転移が出来るらしい。

階ごとに転移出来る地方が違うとのこと。

ちなみに目的地は、ロンドンだったらしい場所。

言語は、地球標準語と言うわけのわからない言語。

此処も地球標準語らしいが、俺には翻訳されてしまうのでわからなかった。

陰陽道しかないので、主に漢字が使われるらしいが。

「ちょっと、とき聞いている!?!? 一枚十万くらいするんだからね!?!?」

なんで俺にだけそんな言っただよりル……。

「わかつたって、ホレ」

俺は適当な石板においてみた。

「って、ちがっ」

俺の周りの景色が変わる。

ふむ……。

術式発動は転移とたいして変わらないな。

擬似的に神と同じ転移方法をするのか。

多分先祖の神が教えたんだろう。

複製も簡単だ。

しかも劣化版だなこれ。

一応世界データにどこでも使える転移符あるじゃん。

で、転移っつと。

みんなの元に戻ってくる。

「やほっ」

「やほっ、じゃないわよ!! 何やってんのよ!?!」

ぶるぶると震えて真っ赤になって怒ってる。

「いやー、転移面白くてな。代わりにこれやるよ」

俺が創った転移符を百枚ずつくらいやる。

ルリリルが驚愕に目を見開く。

「あ、あんたコレ『神移符』じゃない!?!」

なんだよそれ……。

「これ一枚百万くらいするわよ!?!」

そんなにすんのかよ。

「てかね、値段なんてどうでもいいけどさ。危険になったり死にそうになったら使えよ? 面倒臭がって自室に戻るときとか使っなよ?」

ついでに、コレには少し細工してある。

どこにいても俺の意思で飛ばせる。

危険な状態になったら無理やりにも飛ばす。

特にページとの戦闘に入ったら……。

「しないわよ！ あー、でももったいない。こんな持ち歩けないわ。ルリちゃん持って」

「い、嫌だよりルリちゃん。自分のだって持ってるの怖いんですよ！？」

使わなそう……。

「はあ、無くなったらまたやるから早く行け」

俺が肩をすくめながら言っていると、

「そうね、ちゃっちゃと行きましょう。適当にここに置いて」

そう言っつて、リルの姿が消えた。

神移符を渡してから転移符はどうでもよくなったか？

にしても、神移符って確かにその通りなんだよな。

神が移動するときを使う転移方法だし。

もちろん符なんて使わないけど。

そんな事を思っているとルリリルが消えた。

「蓮華行くぞ〜」

「はい、ね？」

俺と蓮華は同じように消えさる。

## ロンドン

「わー、ここがロンドンかー、って全然チゲーー！！！」

セントポール大聖堂とか見たかったよ！！？

普通に学園都市と変わらないし！！

「ときさん、ロンドンなんて千年ほど前に消えましたよ？ C - 0



3地区です」

すごくしょんぼりな事実だわ。

ちなみに、今までいた学園都市はF・32地区らしい。

これは結界の番号。

この世界には、魔族って言う共通の敵がいることから国のいさかいなどやってる暇がないのだ。

せつかくイギリスに来たつてのに観光すら出来ない。

「ちなみに全部の都市がこんな感じよ？」

観光名所なんて必要ないよな……。

「よし、行くぞー楽しみだなーC・03地区。まずはどこ行くかな？」

「全部同じだし、即行で学園協会の総会に行くのよ？」

せつかく、カラ元気披露したのに……。

現実って切ない。

「学園協会？」

全く意味が分からないぞ？

「あんだ学園協会知らなくてよく生きてこれたわね！？ まあ、正確には全ての学園が加入している協会ね。年に一回各学園の生徒会

が集まるのよ」

ふむ……。

それで指揮権を奪い合うと？

「ときさん、テスト頑張ってくださいね？」

は？

「学科テストと公認試合で決めますので。去年は此処、C・O3地区が勝ちました」

うわー、普通に投票なんかと……。

「ちなみにテストは10期生の問題よ。ここにくる生徒も大体十期生。学園のトップだしね」

まあ、ここに来る生徒が十期生だったのはわかってたが。問題までかよ。

俺と蓮華はチート出来るが、こいつら一期生だぞ？

「お前ら平気なの？」

「心配しないでいいわ。伊達に生徒会名乗ってないわよ。あんただって抜いちゃうわよ？」

自信があるならいいけどさ。

「じゃ、行くわよ？」

リルがとことこと小走りで行くので、後を追う。

## 協会

なんかすごい場所だった。

代表が一つの学園で5人まで。

それが二千人ほど。

最低でも、400の学園都市があるってことだ。  
生徒数四百万人。

まあ、普段の地球からしたら少ないが、この世界ではかなりの数  
だろう。

巨大な国会議事堂みたいな所に、全員が納まり、地区番号が書かれたプレートが前に出されている。

国がないだけあって、人種もばまばらだ。

日本人すくな……。。

人数少ないから血薄れちゃったんだろうな。

思えばルリルも全然日本人って感じじゃないからな。  
日本人の血は入ってそうだが。

蓮華と俺は完全日本人って感じた。

瞳が赤と金なの以外。

てか、ここの雰囲気怖いよ！！

「さすが代表達だな。ルリルなんかより全然強そうだし大人だ。  
特に胸とか」

「あ、アンタ何言ってるのよ！？ 微乳の真価はこれからよ！？  
巨乳供をひざまづかせてやるわ！」

てか、何でコイツら白人の血濃いのにそこまで大きくならないんだろつ。

顔つきと胸だけ日本人の血引いてるのか。

もうこの世界の人間は血が混じりすぎて判別なんて出来ない。

優勢遺伝しまくりでうらやましいな。

そんなことを思っていると、

『諸君、お集り頂きありがとうございます。私はC-03地区代表バル・ベラ  
ーだ。今日まで協会の会長をやらせて頂いた者だ。早速だが……』

前の大型ウィンドウにカツコイイ白人が映った。

金髪に青い瞳。

純血っぽい顔だな。

「なあリル、バグベアーが会長なのか？」

「ベアーじゃないわよっ！ 去年指揮権を持った学園が会長よ。一  
年首都として機能するわ。全部倒しちゃえはずっとそこが世界の中心  
ね」

ふむー、ベアーってかバグでもないんだけどそこは突っ込まない  
のか。

『では、テストを開始しようか』

いきなり！？

俺の周りに不可視の結界が張られた。

個人ごとに結界が張られるのか。

外部から見えるからカンニングしようにも出来ないからな。

いい仕組みだよなコレ。

手元の机の上にテスト問題が現れた。

ペンタブレットか。

ハイテクだな！

左側にテスト問題と回答、右側に空白のノート。

ノートはページ送りが出来るようになってる。

スゲー！

『では、これからテストを開始する。12教科、合計12時間内ならどの順番でやるうとも自由だ。お手洗いや休憩もテスト時間としてカウントされるからな。では、始め』

学校と違って良い点数をとらすためではなく、ふるいつてことか。

12時間なんて普通の人間なら集中力が続くはずもない。

時計すらないってことは時間配分を体内時計でやれってことだな。

これが学園だったら暴動が起きるぞ？

ま、やるかな。

俺はペンを手に取る。

ホテル

「俺は死ぬ」

「アタシもよ」

「もうダメです」

「はふ、ね？」

用意されていたホテルに帰ると、俺達はくたばった。

12時間テストがあんなつらいとは。

ちなみに、蓮華と俺は二時間くらいで終わったが、協会の仕事をやらされていた。

「てか、お前らも初めてだよなコレ？ 出来たか？」

「ええ、テストは簡単だったわ。でも、津軽海峡を泳いで横断した時くらいいつかれたわ……」

十期生の問題が余裕つてのも異常だが、呪力汚染のひどい世界で津軽海峡横断したのがすごい。

「ちなみに津軽海峡なんて見たこともないわ」  
「ねーのかよ!？」

ダメだ……、叫ぶだけで疲れる。

「もうダメよ……、死ぬしかないわ。寝ましょう」  
「俺もダメだ。今日は風呂は許す。明日の朝入ろう」

四人で風呂場で寝そうだ。

朝起きたら水死体が四人見つかる。

「おやすみー」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

「おやすみなさい、ね？」

俺の意識はすぐに落ちた。



## 闘技場

二日目は闘技場に来ていた。

此処で一か月かけて武術の方の大会があるらしい。  
チヨチヨカルトはないらしい。  
裏ではあるらしいが。

試合はトーナメント形式だ。

8、9試合で一位が決まることになる。

会場の広さは500メートル程の円だろうか。  
外部はいなく、全員が学生。

で、現在はテストの集計結果を発表するとか。

「緊張しますね……」

ルリがちよつと緊張してる感じだ。

「まったく、ルリちゃんはいいい点取れるでしょ？ き、緊張する必要なんてないわ」

足をガクガクさせながら言われても説得力皆無だぞリル？

『それでは、今から上空のキューブに点数を表示します。最後に学園ごとのランキングも出ます』

上空を見上げると、5面体の数十メートルのキューブが浮かんでいる。

半透明の事からホログラムだろう。

周囲にもいくつか少し小さめのキューブが浮かんでいる。

そこに、下位から順番に表示される。

別に一気に出せばいいと思うが。

順番に表示されて行っただが、

10位から上が表示されない。

「ないわね」

「ないな」

俺達の名前はない。

「とりあえずは十位以内ってことかしら？」

俺と蓮華は間違えることなんてないからな。  
蓮華が回答欄ミスらなければ。

『では、十位からを発表いたします。では』

そこで一旦言葉が聞こえなくなり。

『第十位、H - 29地区、ラル・リサルト。987点、所要時間1  
1時間47分』

あたりから歓声が飛ぶ。

五位まで、俺達の名前が挙がることなかった。

「これなら上位四人独占じゃない？ アタシが一番ね！」

どこからその自信が来るんだリルよ？

『五位、F - 32地区、瀬古瑠璃。1096点、所要時間10時間  
27分』

「なっ!?!」

リルが驚いていた。

四位だと思ってたから驚いたんだろうな。

「ごめんなさい、アタシのせいで独占できませんでした」

リルがペコリと謝る。

「だ、大丈夫よリリちゃん！ アタシ達が一位なのは決まってるから！」

慌てたようにリルがフオロー。

『四位、F - 32地区、瀬古里瑠。1113点、所要時間10時間  
42分』

「ええっ!?!」

ふむ……。

「ルリ気にするな。この“バカ”も一位どころか三位もとれなかった。ホント“バカ”は“バカ”だからなー、ルリは何も悪くないぞ？ 責任は全部この“バカ”にあるからなー」

俺は笑いながらリルの頭をぽんぽんと手で叩いてやる。

「ううー……、がうがうがう！」

「いてっ！？ 何コイツ頭に噛みつくな“バカ”！ “バカ”になるだろうが！」

頭に噛みつくのって難しいんだぞ！？

挟めるはずもないから限界まで開いて押し付けるしかない。

「あんだどんだけ“バカ”って言うのよ！？ 六回よ六回！ ぐすん……ルリちゃん」

ルリに泣きながら抱きついてるリル。

「冗談で言ってみたが、コイツは成績だけで生きてたからな。可哀そうだった。」

まじ泣きしてるし……。

『三位、C・03地区、バル・ベラー。1134点、所要時間8時間37分』

大きな歓声上がる。  
会長人気だな。

「八時間で終わらせるってすごいな。点数もいいし」

素直にすごいと思う。

前の地球だったらハーバード大学並の問題だったぞ？

最下位なんて23点だったしな。

隣を見ると、二人がすごいジトっとした目つきで俺を見てる。

「アンタがそれ言うの？ これで短時間だったら怒るわよ？ アンタと蓮華どっちが上かしらねー」

楽しそうに笑うりル。

多分ここまで来たら……。

『次は二位なんですが、同列一位の為、一緒に発表します』

少しどよめきが、

『一位、F - 32地区、如月蓮華。点数1200点、所要時間1時間43分。

一位、F - 32地区、如月刻。点数1200点、所要時間49分』

蓮華は一回、回答欄全部間違えて書き直したとか言ってたからな。それくらいにはなるだろうな。

あれ？

全く歓声ないんだけど？

見まわしてみると、周囲は唾然としていた。

「あ、ああ、アンタどんだけ万能なのよ！ バカッ！ どうやった  
らあのテストで一時間以内で終わるのよ！？ 返せ！ アタシのプ  
ライドを返せ！」

「いたっ！？ いてーよ！！ いてててて！！」

めちやくちや噛んできた。

マジ痛い！

普通に流血してるじゃねーか！！

俺と蓮華は解答と式なんて始めからわかるんだから仕方ねーだろ  
が……。

集中力が一時間程度しか続かないから早く切り上げたただけだ。

10時間以上も続くお前らの方がすごい。

「ってか、お前吸血鬼か！？ 首に噛みつくなボケ！ 飲むな！  
血呑むのはこえーよ！」

なんかリルが驚いた顔になったぞ？

「アンタの血なんでこんなにおいしいの？」

すごい不思議そうに噛みついてる……。

神の血は極上のワインって言われるくらいだ。

魔力の凝縮だし、味も最高。

だが、俺が嫌だ！  
吸うな！！

「ダメだ！ 離れるポケ！！ 恍惚とした表情で人の血吸うなポケ  
」

なんとか離れたがヤバイ。

俺が人だったら死んでたぞ？

動脈切りやがった！

血ぬれ少女みたいになってんじゃねーか！

「ときどき、明日からときの血ジュースが飲みたいわ」

そんなへにやっとした笑顔で言ってもダメだ！

めちゃくちゃ怖い！

「なんだか体がすごい軽くなったわ」

そりゃなあ……、たぶん宇宙でいちばん体にいいんじゃないだろ  
うか。  
下手したら不老とかになりそうだ。

『では、ランキング順に、一位と四百位。と言った具合に戦ってもらいます。一位から順番に試合を開始します。第一試合はすぐに始まりますので、選手はフィールドに降りてきてください』

助かった。

このままじゃ血抜かれる。



リルは俺の首にしがみつき、油断したら喰われそうだと、  
中毒性がやばいな！

「ああ、リルちゃんに襲われるときさんも素敵」

「最悪姉妹が出来上がった。」

俺はリルを首に抱きつかせたままフィールドに向かう。

## 第一試合

ふむー、相手はマッチョ集団だ。  
半裸きしよい。  
頭が悪いはずだわ。

相手は五人だな。  
こっち四人だし。

『では、第一試合を始めたいと思います』

司会がそう言うと、マッチョ達が一礼してきた。  
別に礼儀がないわけではないようだ。

俺達も一礼する。

距離は端から端で500メートル。

フィールドは岩や枯れた木々が生えている。  
崖とかもあることから、本番と同じ状態の荒野でやるのか。

『それでは、試合開始!』

そう言った瞬間には、相手五人とルリリルは駆けだした。

俺と蓮華は止まったまま。

ここでルリリルを見極めないといけない。

ルリが上空にランダムに矢を放つ。

幾条もの矢となり相手に向かうが、一人以外は急急如律令の簡易呪言で弾く。

残り四人。

どうやらあの矢は威力が弱いようだな。

あれじゃ、多数の魔族には勝てない。

多分適正が違っただろうな……。

リルは見えない程の速さで敵に接近し、攻撃する。

一人を弾きとばし、二人目。

二人目は攻撃に気づき、結界を張った。

リルは何回も切りつけ、結界を破ろうとする。  
理論上は結界の許容量以上の攻撃を加えれば破れる。

だが、

結界内からの簡易呪言で、リルの下の地面が盛り上がり、岩の塊に殴り飛ばされる。

口から一条の血が流れる。

これが呪の使えない限界だな。

結界で守られ、その間に攻撃を受けたら終わりだ。

上位の魔族で例えるなら、攻撃して傷を与えてる間に殺される。  
防御も出来ないからすぐに死ぬ。

俺はリルとルリが所持している転移符を用いて傍に転移する。

「あ、ありがとうとき」

「ときさんごめんなさい」

俺は二人を見据え、

「お前達にはガツカリだ」

冷めた言葉を言い放った。

「「え？」」

俺はリルの光の剣を奪い取り。

投擲。

まっすぐに飛翔し、もちろん避けられる。

だが、

方向を変えて更に襲いかかる。

蓮華と同じで、コントロール可設定。

三人すべてを壁に叩きつける。  
それだけでマツチヨは気絶。

『勝者！！ F - 32 地区！！』

大きな歓声上がる。

しかし、俺達の表情は暗い。

二人に背を向け、俺は歩き出す。

不意に、後ろから二人が抱きついてくる。

「待つてとき！ 頑張るから！ もっと頑張るから見捨てないで！  
！ まって……まってよ……お願い……い」

「ときさん、ごめんなさい！ 次はもっとつまくするから……お  
願います」

泣きながらすがりつく二人を振りはらい、俺は蓮華を連れて帰る。

実戦だったら次なんてない。

死んだらそこで終わりだ。

って、言っても。

見捨てるつもりは……ないけどな。

「いいの？ 主様。後ろで泣き崩れちゃってるけど、ね？」

蓮華が心配して言ってくるが、

「ああ」

「主様、言葉が足りないよ、ね？」

そうだろうな……。

見捨てたみたいになっちまったし。

でも、もしこのまま連れて行ったら確実にアイツらは死ぬ。  
最低でも

ま、準備するかな。

## 七八話 リルの気持ち（前書き）

コックローチが台所にいた。  
部屋にフルーツフライがいた。

泣きたくなかった。

意味が分かる人だけ分かってください。

ヒント：インセクト

思ったのですが、蛇とか獣が怖いのは遺伝子の記憶じゃないですか。  
なんで自分の死に全く関係ないコックローチに恐怖を抱くのでしょうか。

クワガタより飼うのが楽だから皆飼えばいいと思うよ。

でも、近寄らないで

にしても、この話書いているとき恥ずかしくて叫びそうになった。

僕はアニメでもドラマでも恋愛シーンになると恥ずかしくて布団に  
ダイブする主義なんです。

現実だと普通なのになんでだろうか？

七八話 リルの気持ち

ホテル Sidereal

「とぎ……」

あれから、アタシとルリちゃんは、座り込んで動けなかったのが係りの人に送られてホテルに戻ってきた。

帰ってきたけど、ときはいなかった。

探すにもどこにいるかなんてアテもない。

ただ、膝を抱えて泣くことしか出来ないよ……。



何も出来ない自分が嫌い。

「とき……ごめん……」

呆れられてしまった。

アタシが弱いから呆れられてしまった……。

もう戻ってこないのかもしれない。

ときにとつてアタシ達はそこまで大切じゃないのかもしれない。  
だって、ずっと迷惑かけて、ずっと甘えてたから。

くるしい、涙が止まらないよ。

なんで、なんで？

ずっと一緒にいたかった、でもときはいなくなってしまった。

アタシがいけなかったの？

頑張ってきたよ？

お母さんやお父さんが死んじゃった時がまんしたよ？

呪が使えなくても頑張ったよ？

まだ足りないの？

どうすればいいの？

「とき……どうすればいいの？ ……おしえてよとき」

返事などない問いかけ。

アタシは……どうすれば？

もう嫌だよ……生まれてきたくなんてなかったよ……。

つらいよ……。

助けてよ……とき。

「……リルちゃん」

リルちゃんが声をかけてきたけど、アタシは頭を上げることすら出来ないでいた。

ベッドが少し沈みこむ。

隣にリルちゃんが座ったんだと思う。

「これ、ときさんから」

ガバツッとアタシは顔をあげた。

泣きはらした目をしているリルちゃんと目が合った。

手には、ひとつの手紙。

封は切っていない。

アタシとリルちゃんの名前が書いてあった。

でも、アタシにそれを読む勇気はない。

もし、出て行くと書いてあったら、アタシは耐えられない。

ときの子だ。

少し丸いキレイな字。

涙がぼろぼろと零れる。

ときが書いたアタシの名前。

とき……とき……。

ルリちゃんはボロボロと泣いてるアタシをじっと見つめる。

「ねえ、ルリちゃん……」

ごめんルリちゃん。

返事もできないよ……。

「ルリちゃんはき　ときさんが好きだよね」

え？

好き？

そんなんじゃないと思う。

そもそも好きって何？

ルリちゃんが好き。

蓮華が好き。

ときが……好き？

「嫌い？」

アタシは大きく首を横に振る。

そんなわけない。

「友達？」

首を横に振る。

もっともつと大切。

「アタシとどつちが大事？」

そんなのわからない。

ルリちゃんもときも大切。

どつちかなんて選べない。

「ずっといままで二人だったけど、ときさんが来てからとどつちが  
幸せだった？」

そんなの比べるまでもない。

ルリちゃんがいて、

ときがいて、  
蓮華がいた。

幸せだった、人生で一番幸せだった。

「あ、ああ……あ……」

そんな幸せをアタシは

涙がぼろぼろとこぼれおちる。

失ってしまったの。

こんな簡単に失ってしまう幸せ。

朝に在ったものが失い。

他のものなんて何も要らない、ただ、ただそう在りたかった。

「苦しいの？ リルちゃん」

深く頷く。

苦しい、助けて。

「一緒に……いたかったの？」

うなづく。

ずっとずっと一緒にいたかった。

「……好きだよね？」

同じ問いかけ。

何かがかチリとはまった気がする。

ああ、そうなんだ……。

深く頷く。

きっと、そうだったんだ。

気付かなかった……、

知りたい。

ときの全てが知りたい。

きっと、アタシは、

スキ。

大好き。

遅すぎた。

気づくのが遅すぎた。

今なら言える

ときが好き。





出会ったところから？

魔物から助けしてくれた時から？

一緒に暮らす中で？

優しくしてくれたから？

お父さんみただから？

叱ってくれたから？

抱きしめてくれたから？

色々教えてくれたから？

わからない。

考えても分からない。

でも

今、すべてが愛しい。

すべてがときとの大切な思い出。

アタシの好きなひと。

初めてのスキな人。

アタシの初恋。

終わってしまった恋。

せびつらよ、とわ。

くるつらよ、とわ。

せつないよ、とき。

大好きだよ　とき。

不意に、アタシは抱き締められる。  
ルリちゃんに抱き締められる。

「ねえ、アタシ達は双子だね」

え？

ルリちゃんがほほ笑みながらそんなことを言ってきた。

「アタシもだから」

「るり……ちゃんも？」

「うん」

嬉しかった。

ルリちゃんも一緒。

「だから、一緒に読もうか？」

アタシの目の前に差し出される手紙。

ときからの手紙。

それを手に取り、

コワイ。

自分でも震えているのがわかる。

無理。

見れないよ。

ずっと、アタシの手にルリちゃんの手が添えられる。

ルリちゃんの方を見ると、

「アタシも一緒だから……」

ルリちゃんの手は震えていた。

うん。

アタシ達は双子。

気持も一緒。

思い切って封を切る。

中には一枚の紙。

「読むよ？」

「うん」

“ 闘技場で待つ ”

ただ、一言だけ書かれていた。

なんか、一気に気が抜けた。

……。

「何やってたんだろう……、アタシ達」

「最後のお別れ……とか」

やめてルリちゃん！

そんな想像したら死んじやう！！

「とりあえず行く？　ルリちゃん」

「うん」

どうなっちゃうかな。

## 闘技場

アタシ達は闘技場に来た。

昼間、ときと別れたあの場所。

ときはすぐに見つかった。

目がきらきらと金色に輝いていた。

なんでだろう、アレが人間の持つ瞳だろうか？

いつも思ってたけど、アレは何かが違うと思う。

発光する瞳なんて存在するのだろうか。

でも、それよりも今は



ときの隣には知らない老人と、女の子。

「ルリちゃん……やっぱりアタシ達すてられちゃったよー」

ルリちゃんに抱きついてぼろぼろと涙をこぼす。

悲しい。

苦しい。

痛い。

切ない。

「つて、待て待て！？ お前ら何で二人とも号泣してるんだよ！？」

ときがいつもどおりに突っ込んできた。

なんでいつもどおりなのよ……。

アタシたちはこんなに心配したのに！

腹が立ってくる。

「だってときがアタシ達を捨てて他のメンバーを！」

ときの傍の二人を睨みつける。

ときを奪っていった二人。

「ああ、太陰と天空のことかよ……、てかお前ら自分の式の霊体くらしいないか気づけ！」

え？

だって、アタシは小鳥だし、ルリちゃんは犬よ？

「あー、もう太陰、天空一旦戻れ」

ときがそう言うと、老人と少女の姿が変わる。

大きな犬と、小鳥。

アタシ達の使い魔だ。

すぐに老人と少女に戻った。

「まあ、泣かせちゃったのはすまなかつたよ。いろいろ準備する」とがあってさ」

頬を搔きながら言葉を発する、とき。

アタシ達の為に？

嬉しい。

すごくうれしい。

アタシはこんなにもときが好き。

言いたい、ときに伝えたい。

でも……、いまは恥ずかしくて無理。

「とりあえずリルはコレで、ルリはコレ。俺が“創”ったやつだから」

ときがアタシとルリちゃんに手渡す。

アタシには二振りの白い剣。

剣自らが発光し、周囲には白い粉が舞っている。

ルリちゃんには同じような白いガウン？

ちよつといいなあと思った。

武器と服だと……、むー。

「ちなみに両方とも戦闘用だから。普段着じゃないぞ？」

え？

ルリちゃんのは普段着じゃないの？

「ルリの衣はある程度の呪や攻撃なら遮断してくれる。リルのは刃零れしないでよく切れる剣かな？」

すごくあたしのが適当に聞こえる……。

ルリちゃんのほうが好きなのかな……？

それはちよつと悲しい。

「まずはルリ、お前は攻撃タイプじゃない。補助に特化したほうがいい。お前のタイプは土気だ。出来るだけ前衛を生かす補助を行うことが大事だ。たとえば、この大会程度なら穴に落としてしまえば前衛が攻撃して終了って感じた。魔族とかだとちよつと違うが。だ

から衣。自分を守れ。ついで、人形で前衛を回復させたり、結界を張ったりな」

ルリちゃんのことよく見てる……。

「次いでリル」

「ふぁ、ふぁいー！」

変な感じの返事に……。びっくりしたわ。

「お前はどうか考えても前衛タイプ。金気だ。風を使えば更にスピードも上がるし、空も飛翔出来る。九字を使えば斬撃だって飛ばせる。その剣はお前の意思で手元に戻るようになってるから投擲も自由だ」

えっと……、アタシ呪が……。

「ごめん……実はアタシ“呪”使えないのよ……」

隠さなければよかった。

こないいい剣もらっても。

こんなもの“作”れるときも万能すぎるんだけど。

「そんなのあった瞬間からわかってるっつの。太陰、守護解除」  
「仕方ないわねー、わかったわよ」

少女がそう言うと、急に体が重くなる。でも、変わりに他の何かが。

自然霊が見える。

これが……呪力？

「あー、実はな。このバカ少女がお前を勝手に守護しててな。お前の呪力を身体能力に変換してたんだよ。ホラ謝れ」

そう言って、少女の頭を叩いている。

「うー……、ごめんなさい」

アタシに謝ってくる。

でも、守護してくれていたならそれはうれしい。

呪力を持ってても、今より強くはなれなかったと思う。

「ちなみにコイツらは　まあ、自己紹介しろ太陰、天空。お前らの主だろうが」

人間になれる式なんて聞いたことがない。  
なれるのなんてきつと

「十二天将の一人、太陰。五行は金神、十二支は酉。風が得意よ」

アタシの式は十二天将だった。

式のトップの十二天将。

立派な神様。

アタシなんかに使役されてくれた神様。

「十二天将の一人、天空じゃ。五行は土神、十二支は戌。霧や黄砂を操ったりと補助が得意じゃな」

隣ではルリちゃんが目を丸くしていた。

同じ十二天将。

でも、アタシ達の式なのにときの言うこと聞いているみたいだけど？

ときも同じ十二天将なのかな？

それだったら嬉しい。

「ときも十二天将の式を？」

アタシが聞くと、苦笑いをしていた。  
式卸してなかったから、もしかしていない？

「あー、うん。俺のはコレだ」

ときの後ろから何か大きな光が現れた。

龍？

30メートルはありそうな金色に輝く龍。

ときの瞳と同じ金色の龍。

いまのアタシならわかる。

十二天将もすごい呪力だったけど、あの龍の呪力は規格外。

前に時が卸した神よりも遙かに怖い。

あの龍が殺気を放っただけでも、人間は死んでしまっただろう。

「んー、まあこれだ。結構かわいいやつなんだよこれでも」

ときがそう言うと、龍がときに顔をこすりつける。

うーん、あれはきつと女の子だわ。

ライバルね。

「それをかわいって言うのはアナタくらいのものよ？ それよりアタシの方がかわいくない？」

「黙れ太陰。お前は腹黒すぎるんだよ！」

なんか……、アタシの式もときを狙ってるの？

神なのに人間を？

でも、譲らないわ！

「で、二人に渡したそれ。それは器だ。普通の武器や衣じゃ神を入れることなんて出来ないんだよ。ちよい見てるよ？」

ときがどこからかとりだした白い刀の刃に、指を置く。

『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』

九字を唱え、指を這わせる。

龍が光となって、剣に吸い込まれる。

前見た九字と違い、周囲に九字が描かれた球体が浮かぶ。  
更にときの周りに文字の羅列が円となりまわる。

呪力を感知できるようになったアタシには、九字の球体一つでも十二天将二人分以上の呪力が溢れていることがわかる。

「まず、宿す。次に身体強化。リルはわかると思うが、身体強化が出来ないと困る。今までは体全体を強化してたから呪力がなくなっていた。体の必要箇所を強化出来るようになれ。式の力も借りられるから慣れれば全体強化でも呪力はなくならないだろう。あとは宿した器の扱い。斬撃を飛ばしたり、硬くしたり、符に寄せたり色々出来る。ついでに言うなら、普通の九字より宿す九字は相当難しいからな？ 多分いきなりやっても光るのは一字くらいだな。ちよつとやってみる」

ときの言葉に、うなずく。

今ならときの言葉になんでも従ってしまいそうだ。

そう言えば、アタシは二本九字を刻むのだろうか？

とりあえず、一本に指を這わせ、

『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前』

九字を唱える。



少女、アタシの式の太陰が風となって剣に吸い込まれる。

九字が刻まれるが、薄く光るのが8つ。  
輝いているのがひとつ。

それが二本に刻まれる。

「リルのは対の剣だから一本に刻めばいい。薄く輝いているのは通常の九字。光輝くのは宿した九字」

ってことは、アタシはまだ一文字しか出来ないってことだわ。

普通の九字は全部刻まれてるけど、その程度ではときの隣にはいれない。

絶対に全部宿さないと。

ときはおろか、蓮華だつて出来てるし。

隣では、ルリちゃんの衣が同じような状態になっていた。  
ルリちゃんでも一つしか輝かない。

「んー、とりあえず。二人とも練習がてら俺に挑め。俺は武器も何も使わないから。符もな。素手オンリー」

ひらひらと手を振ってるとき。

大丈夫なのだろうか？

「リル〜やってみなさい。アイツなら大丈夫よ」

剣から声が聞こえる。

アタシが主なのに呼び捨てだわ……。

とりあえず、アタシはときに剣を構え駆ける。

突如、ときが消えた。

呪力なんて見えなかった。

身体能力だけで消えた。

一瞬後、あたしの隣にはルリちゃんがいた。

そして……

「ほーう、遅いな〜双子〜。うんうん、胸のやわらかさは一級品だな。小さいけど。色もよかったし？」

「え？」

あたしとルリちゃんの後ろにときがいた。

後ろから腕をまわし、アタシとルリちゃんの服の中に手を入れていた。

しかも、下着が地面に落ちてる？

そして、直に胸を揉まれていた。

顔が真っ赤になるのがわかる。

好きって気づいたからなのか、すごく恥ずかしい。

次の瞬間にはときは元の位置に戻っていた。  
消えたようにしか見えない。

ルリちゃんを移動して、下着を取って胸を揉んだ？

どれだけの早さなら……。

きつと早さとは違う。

そんなの出来るはずがない。

ときはアタシ達の方をじっと見、

ニヘラ、と笑う。

「あ、ちなみに俺と蓮華が教えるけど、早く覚えないと体中まさぐられるから頑張れよ？ もうお嫁にいけない体になるぞ？」

下着を持ってにやにやと笑っている。

気づいたら地面の下着はなくなっていた。

下の下着も脱がされてる？

でも、

やっと笑ってくれた。

泣きたいくらいに嬉しい。

はじめて笑ってくれた。

いつものときの笑顔。

また抱きしめてもらいたい。

一緒に居たい。

ときが大好き。

お嫁にいけない体でも体じゃなくてもときに賣ってもらおう。  
ルリちゃんも一緒に。

でも、頑張ろう。

ときの隣に立てるよつば。

ね、ルリちゃん。

七八話 リルの気持ち（後書き）

ああああああああああああああああああ！！！！

こつこつ話苦手ー！！

キヤーーキヤーーキヤーー！！！！

朝から悶えます。

誤魔化すために最後軽くふざけた。

七九話 十二天將（前書き）

ばらばらばらばら

## 七九話 十二天将

闘技場・決勝戦・控室

あの後も順調に勝ち進み、今日が決勝戦だ。

結局、二人は、式を宿した九字を全部刻むことが出来なかった。現在四つまで刻めたようだ。

多分この試合くらいは勝てるはず？

「で？ いつもどおりの作戦でいいの？」

そんな事を思っていると、リルが声をかけてきた。

「ああ、前衛がリルと蓮華、俺は後衛攻撃、ルリが後衛補助」

俺は気だるそうに言ってやった。

最近リルがおかしい。

自分からべたべたするくせに、恥ずかしくてすぐ離れてしまう。言葉もどもるし、顔もすぐ真っ赤になる。

訓練のしすぎで情調不安定だ。

休んでいって言うのに、急かすように訓練したいと言いだす。

狂戦士一步手前の迫力だ。

「と、ときが言うならそれでいいんでしょうね」

そう言って、真っ赤になってそっぽを向いた。

しかも素直だ。

体をまさぐりすぎておかしくなったか？

この世界ではほぼ幻惑なんて使ってないから、依存はしないはずだし……。

「皆さん、そろそろ時間ですので、フィールドに入りましょうか？」

リルの言葉に全員が立ち上がる。

「じゃあー！ 円陣よー！」

リルがそう言い、俺達は三人で円陣を組む。

真ん中には蓮華がしゃがんでいる。



意味が分からない。

『かごめかごめ』 籠の中の鳥は〜 いろいろでやる〜』

「ストップ！ 意味が分からない。円陣禁止。なんか怖い」

こいつらの思考回路がまじ怖い。

「そう言えば、かごめかごめには都市伝説もありますが、六芒星。6\*6で括って、左側を縦に、右側を縦に、あと×読みすると、闇の支配者のことを言っているんですよ。ピラミッドの目ともいいます、ね？」

マイナーすぎる上にどうでもいい。

俺は背を向け歩きだす。

「待ってとき！！ 見捨てたらアタシは死ぬわよ！？」

「ときさーん、嫌ですー！」

何で涙目になってんだよコイツら！？

「はいはい、見捨てないからおいで」

俺が腕を広げてやると、うれしそうに飛び込んできた。ペットみたいだな……。

「とき、勝ったらご褒美は？」

リルが俺を見上げ言ってくる。

また何か買わせるのか……？

「魔族に勝つたらな」

ルリリルが『魔族殺』とか、変な覚悟を決めていた。

そのまま、俺達はフィールドへ歩きだす。

『では、これより決勝戦を開始いたします。太陰対極の白は、前年度優勝地区C - 03。黒は勝利経験なし、F - 32地区。この試合により、今年度の指揮権が移行します。試合は5分後に開始いたします』

さーて、作戦作戦。

「で、二人はどう見る？」

俺は二人に質問する。

相手の呪力を見れば大体作戦がわかるのだ。

俺が教えてもいいが、訓練の一環だ。

「そうね、ありえないかもしれないけど、前衛一人、後衛四人じゃないかしら？」

「アタシもそう思います。後ろの人の服の内側に大量の結界符が張ってあります。主に呪符での攻撃と補助ではないでしょうか？」

ふむ、大体あってるな。

珍しい戦い方だ。

つまり、あの会長が一人で前衛。

相手の攻撃を全て無力化し、後衛が呪符で攻撃するスタイル。よほど自信がないと出来ない布陣だ。

「で、参謀の意見は？」

俺達は補助のルリを参謀として置いてある。

指揮系統だ。

もし勝つと、四百万人の指揮はほぼ、会長であるルリが行うことになるからだ。

「はい、ルリちゃんと蓮華ちゃんが敵陣の後衛まで走り抜けましよう。アタシとときさんは前衛の一人をまず倒し、前衛の二人と競合」

ほう。

「理由は？」

「まず、相手の前衛に二人掛かりになってしまうと、後衛からの集中攻撃に合います。補助の人数が人数ですから、倒すのにもかなりの時間がかかります。後衛の人の呪力を見る限り、宿した蓮華ちゃんとルリちゃんなら余裕で四人を相手に出来ます。前衛の一人は、アタシが足止めするので、ときさんが呪で攻撃すれば勝てると思います。あとは、二人にアタシ達が合流すれば、勝てるはずです」

ふむ、だが問題は……。

あの前衛……、十二天将の騰とつた？宿してるぞ……。

火神、蛇神。

突破力だけなら十二天将最強だ。

しかも、九字に宿している。

俺ならいけるが、果たしてルリに足止め出来るか……。

『あと一分で試合を開始します』

司会の言葉に、俺達は九字を刻印し、宿す。

「じゃ、アタシは奥まで特攻するわ」

「私も、ね？」

ルリは二刀流。

蓮華は半月円を構える。

「まず、アタシがフィールドを霧で覆いますので、その間に走り抜けてください」

二人が頷く。

『それでは、試合開始!!』

はじまった瞬間、ルリが矢を放つ。

一度打ち上げ、雨になり上空から降り注ぐ。

ただの水。

それが気化し、あたりを霧が包み込む。

そこで、ルリと蓮華の姿が一瞬にして消えさる。

直後、幾条もの炎の龍が霧の中からこちらに向かってくる。

俺に当たる軌道は自動迎撃で消し去られ、

ルリは弓で迎撃、消せないとわかると、さらに呪符を投擲し、消し去る。

炎の蛇の騰？。

かなりの攻撃だよな。

リルと蓮華の防戦で忙しいのか補助はない。

霧が晴れる。

そこには、背後に、幾条もの炎の蛇を従えた会長がいた。  
手には大きな紅蓮の鎌。

「ふふ、君たちは強いね。久々に本気が出せるよ」

楽しそうに笑っていた。

刹那、姿が掻き消えた。

一瞬後、リリが、鎌を右腕の天空を宿した衣で受け止めていた。

レン製＋天空の衣は強度的には壊れることはない。

「騰？の鎌を防ぐか、ならこれならどうだ」

背後の数十の炎の龍が全てリリに襲いかかる。

一匹一匹が必殺。

確実に死ぬだろう龍。

さすがにそれは見過ごせない。

水の球体に指示を出し、同数の水龍を作りだす。

炎の龍を相克。

「俺も居ることを忘れるなよ？」

ニヤリと笑ってやる。

「くっ！ 君は最後に回したかったよ。二対一じゃ勝てなそうだからね。騰？は君とやりたがっているようだけどね」

さすが、十二天将一番の好戦神だな。

俺と会長の会話中も、ルリは水気で鎌を消し去ろうとするが、密度が違う。

『火侮水』

火が強すぎて水の剋制を受け付けず、逆に水を侵食する。

人形でダメージを肩代わりしているようだが、ルリは体が溶けるような痛みを受けているはずだ。  
額から汗がとめどなく流れ落ちている。

俺が助けようかと思っていると、

刹那、会長が横に吹き飛んだ。

「それ以上ルリちゃんを苛めたら許さないわよ？」

後ろにはルリと蓮華がいた。

遠くには、気絶した四人がいる。

残りは会長だけ。

会長は腕を持っていかれたようで、千切れた人形が舞っていた。

「はは……、やはりあの四人ではダメか。絶体絶命、どうしようかな」

そんなことを言いながらも、にやにやと楽しそうだ。

「アンタを気絶させて終了でしょ？」

リルが笑いながら言う。

「んー、でもさ。僕は負けられないんだよ」

「そんな意見はどうでもいいわ」

リルは鼻で笑って吐き捨てる。

「そうだね、じゃあ、奥の手を使おうかな」

ニヤリと笑う。

直後、会長の体から溢れる膨大な呪力。

魔族のそれに近い、人を汚すものだ。

「ルリリル、自分の呪力を纏え。出来なければ人形を啜えろ」

俺の言葉に、二人が呪力を纏う。

纏わなければ、人など一瞬で意識を刈り取られる。



事実、会場ではかなりの人数が気絶していた。

「と、とき。アレは？」

ルリリルはがくがくと震えている。

「あれは」

呪力が形を持ち、雲の中を大きな龍が泳いでいる。  
破壊の意思を持ちし龍。

「十二天将。騰蛇。火神。アイツは自分の体を生贄に捧げ、騰蛇を降ろし、暴走させた」

ここで神を降ろすなんて何を。

魔族との戦いで降ろせばどれだけの人間を救えるか。

それをアイツは人間を殺すために降ろした。

龍がこちらを向き、大きな炎の塊を吐きだす。

大きさは数百メートル、

それを、俺の全ての球体が迎撃する。

力を押さえた俺と、全開＋状態の龍。

俺の力は全開にすると、周囲全て破壊する上に、溢れ出す力だけで破壊をもたらず。

なんとかその攻撃を相克する。

狂った神と狂った自然霊。

掌握する出来ない。

だから俺はルリルにも神は降ろすなと言った。  
暴走したらこうなるから。

同調した神は世界の自然霊など掌の上だ。

「ときさん……、アタシたち死んじゃいますか？」

アレをみたら人間の力など本当にちつぽけなものだ。  
どんなに努力しようがたどり着けない神の領域。

世界そのもの。

「仕方ねー、お前ら全力で呪力を纏え、全てを遮断しろ。そして心を強くもて」

俺は地面に剣を突き刺す。

世界からの召喚。

守護者。

『朱雀 六合 勾陳 青竜 貴人 天后 玄武 大裳 白虎 従え、  
十二天将！』

突如、呪力が更に跳ね上がる。

人間なら即死しても余りある程の力の奔流。

会場の人間は結界を張つても一瞬で気絶する。

俺の前には残りの9人の神。

「あはは、全員集まるってはじめたわ！」

太陰と天空も出てきている。

俺は全員を見据え、

「アレをなんとかするぞ。暴走しちまった。一応お前らの仲間だろ  
？」

俺は上空の龍を指さし言う。

「失礼ですが、アレはもともと私たちとは相容れぬ存在ですが？」

長身の青い髪青年が言葉を発した。

青龍だろうか。

「なら、それでいい。ならば殺せ。神殺しを俺が許そう。手伝え」  
俺の言葉に膝をつき、

「御意に」

そして、11人が上空へ飛翔する。

「あ、ああ、アンタなんてもん呼び出してんのよ!？」

リルが口をぱくぱくさせながら聞いてきた。

「十二天将は他の神と違って、人でも従えさせられるんだよ? っ  
て言っても、お前らが降ろすなよ? 一人くらいなら平気だろうが、  
全員降ろしたら確実に暴走する」

守護者十二人が暴走したら世界が終る。

「あ、アンタは……大丈夫なの?」

心配そうに尋ねてくる。

会長みたいにならないか心配しているのだろう。

「当たり前だろ? 俺を誰だと思っている?」

俺は浮遊し、

「ルリとリルの家族兼兄だぜ?」

笑いながら言い、龍に向かって飛翔する。

上空

さすが、世界の力を独占しているだけあるな。  
11人でかかってても、これかよ。

「十二天将、十二星角結界。騰？の守護星角、南西は俺が代わりにやる」

全員が散らばる。

俺は南東、巳。

朱雀が南、牛。

六合が東、卯。

勾陳が南東、辰。

青竜が北東、寅。

貴人が北東、丑。

天后が北西、亥。

天空が北西、犬。

大陰が西、酉。

玄武が北、子。

大裳が南西、未。

白虎が南西、申。

六壬神課。

世界を司る根源の太陰対極。

太陽の黄道上の位置。

指標と時刻。

十二支。

天地盤が宙に刻まれる。

世界を使った結界。

中心に描かれる、北斗七星の線に騰？は貫かれて停止する。

結界なので、殺傷能力はない。

「好き勝手やってくれるねー、騰？」

俺は騰？の顔付近に近づき、声をかける。

「お前を十二天将から外そう。他の奴に変わりでもやってもらうさ。お前には……そうだな。蓮華の式にでもなってもらおうかな。意思もなく、ただの道具として。お前達はそれでいいか？」

周りを見回すと、全員が頷く。

もともとコイツは合わなかったらしいからな。

俺は剣を振り上げ、突き刺す。

存在を改変。

さすがに神には直接改変しないと無理だった。

直後、騰？の呪力がものすごい速度で抜けてゆく。

大きさも小さくなる。

やがて、暴走によって世界から供給されていた呪力が消え、元の姿に戻る。

真つ赤な髪の毛を逆立てた人型。

さらに改変。

小さなへびになる。

それを俺は、左手で鷲掴む。

そして、結界を解除。

最後に後ろを降りむく。

「すまなかつたな、つまらんことに呼び出して。あとあと南西には違つちやつ置いておくから。まともな守護者をな」

俺は苦笑いを浮かべながら言っただる。

「いえ、謝るのは我々の方です。守護者が正常に機能せず、アナタ様に任せられた星がこうなってしまうました。申し訳ございません」

ふむ。



騰？によつて、守護が機能せず、さらに俺の本が現れた。  
最悪のタイミングだったんだな。

「ま、それは俺が何とかするから。お前らは戻っていいぞ」

「感謝します」

そう言い、太陰と天空以外は消えた。

「やるねー、このこの。アタシ濡れてきちゃったわ」

太陰が俺の脇腹を、肘で小突きながら危ないことを言いだす。

「よし、お前も改変して奴隷にしてやろう」

「ごめんなさいもうしません」

土下座してきた。

「あ、でも奴隷もいいかも……」

頬を染め始めた。

コイツも変態だった。

「とりあえず戻るぞ？」

俺はそのまま下に戻る、俺の後を二人が付いてくる。

## 闘技場

って、二人とも気絶してるし。

戻ったら蓮華以外、会場も二人も気絶中。

「蓮華、これやるよ」

俺は左手に持った蛇を差し出す。

「いいりません。そんなまだら模様の蛇気持ち悪いです、ね？」

確かに気味が悪いが……。

俺は蓮華の武器に投擲した。

中に入り込んだ。

「あああああ！！ 主様に中を犯されました！！ なんか色かわりました、ね？」

漆黒の半月円から青と黒い炎が上がっている。

「その蛇とりだす必要もないし、呪力だけ奪って使えばいいさ。俺の負担も減るしラッキーだ」

うん、終わりよければすべてよしだ。

会長は暴走させた瞬間に死んだけどな。

俺のせいじゃないし。

自分で死んだ。

そして、俺は気絶した二人を両脇に抱える。

「さーて、戻ろう。結果は録画映像見ればわかるだろう。全員起きるまで待ってたら明日になっちまう」

そのまま歩き出す。

「はい、主様、ね？」

「あれ？ アタシ主が気絶してるから戻れないわ。つまり、トキの子供が産めるってことじゃないかしら？」

太陰の変態は治らなかった。

「安心しろ、お前が俺に触れた瞬間存在ごと消滅させてやる」「ヒドイッ！ 触れることすら許されないプレイなんて!？」  
「どんなプレイだよ!？」

コイツの変態さはやばい。

あ、そうだ。

コイツの下着も奪っておじつ。

穿いてなそうだけど……。

七九話 十二天将（後書き）

最後はいつもどおりにぶざけちゃいました。

八十話 魔族討伐作戦（前書き）

やっとなん話。

パンツの紐がちよちよぎれそうなくらいうれしいです。

## 八十話 魔族討伐作戦

### 指揮系統

俺達四人は、指揮権を得ることが出来、現在テストを受けた国会議事堂のようなところに来ていた。

全く内装は同じだが、場所はF - 32地区だ。

地球の中心が現在此処に移っている。

集まったのは生徒会長400人。

前の会長は無くなったので、副会長が来ている。

全土に協会会長就任放送をしたので、俺達の顔は全員が知っている。

年で一番重要な制度なので、全員が放送を見ていたらしい。

あんだだけ俺を殺そうとしてた男子諸君も、奇襲をやめてくれるようになった。

そして、今俺達の周りには数メートル程の袋が置かれている。

「ファンレターだってさ」

「適当にリルが教えてくれる。

すごい量だぞ？」

「ふっ、

「ひゃっほーい ついにモテない俺に春がきた」

俺は喜々としながら、自分のひときわ大きい袋に手をかける。

そして、一枚を取り出す。

「あ、忘れてたけど、ときはアタシとルリちゃんですら全部燃やしたわよー！」

俺は手紙を地面に投げつけた。

「なんで、代わりにキャバクラとか風俗のビラ入れんだよー!!? 許さん！ お前らは男子の純情をもてあそんだー!!」

「と、ときにはアタシ達がいるじゃない!？」

「真っ赤になって何言ってるんだこいつ!？」

「お前ら俺のこと召使にしか思ってねーだろが!？」

「あ、アタシ達は!……とき……なら」

「何言ってるんだか全然聞こえない……」。



まあ、いいや。

冗談だし、どうせ俺に恋愛なんて許されない。  
恋愛感情ないし……。

「あの……そろそろ始めていただけませんか？」

一人の女性が声をかけてきた。

たしか、八期生の女性だ。

秘書らしいが、15、6歳に仕えるのはかわいそうだな……。

八期は23歳だし。

「ああ、ルリ頼む」

「はい」

うなずき、前に出る。

「はい、では。衛星映像から魔物の分布を」

前方に大きなウィンドウが現れる。

地球の地図と、魔物が大量にいる場所は赤くなって、数によって濃くなっている。

地球と言うが、海が随分干上がっていて、面影はない。

「見てわかるとおり、一番多いところが“元”R-13地区。此処が魔族の本拠地と思ってもらっていいでしょう」

群を抜いて多い。

色は赤が黒くなりすぎ、黒くなっている。

R・13地区はすでに廃墟と化している。

「此処を抑えないといけません。前年度は、ここを狙い、全戦力を集中しました。結果、中心にいた数十万人は、各所から集まってきた魔族に包囲され、全滅」

見まわしてみると、一様に苦い表情。

「ですから、今年は作戦を大幅に変更します。今までやってこなかったような物へ」

ざわめきが生まれる。

つまり、今まで闘ってきたことは無意味と言っているのだ。作戦が悪かったから負けたと。

「まず、一般生徒には比較的数が少ない所に行ってもらいます。知つての通り、一般生徒には魔族一体でもかなり危険です。本拠地から離れた魔物の討伐。本拠地に魔物が集まるのを防いでもらいます」

発言が一区切りつくと、一人が手を上げる。

「どうぞF・19地区」

立ち上がり発言する。

「お言葉ですが会長。それだと、他の赤い地域はどうするのでしょうか？一般生徒の戦力がない場合戦力が足りません」

全員が頷いている。

「はい。まず此処に先日の選抜試合のデータがあります。こちらで戦力を数値化したものです。いまの現状でどれくらいまで耐えられるかというものです。上位の方々には、一番強い黒い部分以外の赤い所に向かつてもらいます。後々、地区データを閲覧可能にしますので、有力な一般生徒を連れて行っても構いません」

話が終わると、一人が机をたたく。

「それでは本拠地はどうするのだ！？ 今年は攻めないと言っても言うのか！？」

空気が不穏なものに変わる。

当たり前だ、それでは本来の目的が達成出来ない。

「静粛に、説明いたしますので。本拠地には、アタシ達が行きます。更に最上位10人には本拠地周辺の魔族が、本拠地に近付かないようにして頂きたいのです。本拠地内はアタシ達4人が潜入し、外に最上位の10人。400万人のTOPです。一人でも一般生徒の数百から数千の戦力があるでしょう」

ルリは瞳を瞑りながら言いきる。

周囲は叫んだり騒ぎ出す。

「そんな作戦が」

「訂正しましょう、ハッキリ言って邪魔なのです」

「「「「「なっ！！？」」「」「」

全員が驚愕の声を上げる。

「例えば、足手まといを守りながら戦ったとしたら、邪魔にしかありません。守りながらだと防戦一方になる上に、味方を気にして大きな呪を使えません。これのどこに利点があるでしょうか？」

会場が絶句する。

それは、お前達は弱いから邪魔だと言っているのだ。

お前達が倒す敵の利点より、呪を放てない方が不利だと。

「そうですねー……、リルちゃんお願い」

リルがそう言うと、リルが九字を刻む。

太陰を宿した九字。

すべてが宿されている。

「たとえば、目の前にリルちゃんと同じ力をもった魔族がいたとしましょう。呪力を見ればわかると思いますが、あなた達が束になっても倒せません。そして、アタシ、ときさん、蓮華ちゃんなら倒せます。しかし、アタシ達が特技を放てばアナタ達が死にます。必然的にアナタ方を守ります。そうしたら勝てるものも勝てません。全ての攻撃を消さないといけないのですから、避けることも出来ません。呪による攻撃の場合は数は邪魔なのです。どれだけ少人数で力を保持出来るかが大事です」

リルは目を瞑ったまま、ひたすらに言葉を紡ぐ。

体が震えているのが傍目にもわかる。

本来こんな事などないのだろう。  
プレッシャーに押しつぶされそうだ。

周囲は悔しそうにしている。

リルの呪力には勝てないと分かっているのだろうか？

「では、続きをときくんお願い」

そう言って、後ろに下がる。

俺が前に出る前に、リルの頭を撫でてやる。  
にこりと笑って返してくれた。

「えー、一期生如月刻だ。多分このままじゃ全滅するだろう。上位組が決定的に足りない。一般生徒を守りながら、なんて言ったら先ほど言ったとおり足手まといで死ぬ」

俺の言葉にざわつく。  
構わず続ける。

「だから、他の場所には神を降ろす事にした」

俺の言葉に全員が驚愕に包まれる。

神を前線に加えないのは理由がある。

地のページにより、下位神の攻撃は通じない。

俺と蓮華は、ルーを媒体にして、外部から自然霊を操っているか

ら平気だが。

って、言っても。本来の魔力を使うことは出来ないが。

「神は誰が呼ぶんだ！ “前” 会長のようになるだろ！！」

まあ、そう思っただろうが。

「アレは制御が出来ないバカだからああなった。例えば ナチル」

俺が言葉を発すると、俺の横に黒神の美人が立つ。

「トキ様、ついにわたくしを娶ってくれるんですね」

こんな性格だけど神だしな……。

「こいつは木花知流姫神。こんな感じで俺が降ろす。一か所にこれ以上降ろすと、お前らが死ぬから今は一人だけ納得したか？」

周囲を見回すが、全員がパクパクしている。  
神を式にしているルリルは平気なようだ。

平気だが……、ナチルをめちゃくちゃ睨んでる。

「と言うわけで、今日は解散。追って、担当地区を連絡する。それまでは各自自主練や休むなりしてくれ。以上」

俺は下がる。

「トキ様。初は桜散る中で散りたいです……ポッ」

ポットか口で言うな……。

桜が散るように美しい神って意味で木花知流姫神だからな。  
桜好きなのか。  
しないけど。

「うん、ありがとうナチル。さようなら、次元の果てまで」

『パチンッ』

俺はナチルを火星まで飛ばした。

あいつは桜の日がいいとか言って、べたべたしすぎる。

「とりあえず帰るか、せつかくいいホテル割り当ててもらったのにもったいない」

俺は三人に声をかける。

三人は、自分のファンレターを手に持ち。

ふ、

「そのファンレター危険だぞ？ 呪力を調べたら呪がかかった」

「『ええ！？』」

三人が投げだす。

俺はそれを燃やす。

消炭すら残さずに。

「はっはっは、俺が助けてやったから安心しろ」

俺は胸を張って言ってやった。

理不尽は許さない。

「」「……」「」

沈黙が訪れた。

「だってずるいじゃん！俺の春はお前らが燃やして、なんでお前らだけ持ってたんだよ！？」

ずるすぎる！

俺の脳内環境が破壊されそうにムカチク！

「それは、アタシ達がときだけを見るって言うヤキモチかしら？」

何言いだすんだリル。

ただ、ずるいから燃やしたただけだけど？

「安心してくださいときさん、アタシはときさんの墮天使で居続けますから」

お前は墮天使って言うより、駄天使って感じだボケ！

確かに、俺の不幸を喜ぶ歪な天使みただけどさ！



二人が俺の両腕に抱きついて来るが、コレ全国放送されてるんだからね？

「はいはい、冗談言っでないで帰るぞ〜」

何かいきなり不機嫌になった二人を連れて、俺は帰る。

あ、蓮華忘れて来た。

ホテル

あれから帰って、今はホテルで作戦会議中。

「んー、じゃ。ルリリルは本拠地の西担当、俺が北東南担当で」

「……」

ものすごく不満そうだ。

「とき、死ぬわよ？　ときが死んだらアタシも死ぬわよ？」

何故だ！？

「ちなみに、それ以外なら連れて行かない」

悪いが、理由がある。

十中八九本拠地の魔族にはページ持ちがたくさんいる。

断片だから、コイツらでも倒せるだろう。

コイツらにはバレないように結界を張る。

レンに時間を止めてもらって、レンが東。

エルが南。

俺と蓮華が北から攻める。

蓮華は闘わず、両親を喰らった魔族まで走り抜けてもらう。

動く奴がページ持ち。

他は雑魚だから一気に全範囲に魔法を放って殺す。

ページ持ちを多数相手にするにはルリリルを分けたら死ぬ。

レンとエルにはルーの断片を宿しておこう。

ページとの戦闘はかなり戦力が削られるが仕方ない。

そんなことを思っていると、

「わーんルリちゃん、やっぱりアタシ達捨てられたー」

泣き出した!?

リルはルリに抱きつき、二人で泣きだした……。

「あの一……、信用してなかったら連れても行かないっての。こちだつて、俺と蓮華で行くんだからな？ 他の方角は神に任せるとの」

レンとエルは神ってことにしちゃおう……。

「ぐすっ……」「」

なにコイツら……。

「終わったらご褒美だからね……?」

ジッと俺を見つめ、リルが言ってくる。

「ああ、何でもやるよ。だから頑張れよ？」

まあ、金なんていくらでもあるしな。

一億使おうが大したことはない。

二人は眼を輝かせ、自分の器の手入れを始めた。

はあ……。

『ハク、断片でも魔法は無理か？』

内部に声をかける。

『はい、ルーさんを宿した武器のみですね。放出系は無理です。蓮華さんの針も無理です』

それだとかかなり戦力が落ちるな。

『呪符はどうだ？』

『無理です。自然霊だとしても、ご主人さまの意思が通った瞬間に変質してしまい、ご主人さまの魔力となります』

神つてのがここでやっかいに。

もともと俺の創った世界だから、この世界では俺の意思が通った俺の物になっちまう。

ルーは俺と契約してない別個の生命体だからなんとか平気って感じか。

って言っても、俺の世界から創られた、守護者だからな！。  
かなりの制約がかけられて本来の力は使えない……。

『エルは鎌にルーを宿すとして、レンはどうすっかな。何かほしい武器とかあるか？』

『んー、ハルパーがいいかな？』

なんてマニアックな武器を……。

『イメージ送ってもらっていいか？』

俺の中にイメージが……。

すげえ……。

ジグザグに曲がった歪な剣みたいだ。

刃は白から青のグラデーション。

ところどころ龍の牙のような物が生えている。

斬るって言うよりも、ガリガリって感じで体を破壊しそうな剣。  
しかもデカイ……三メートルくらいありそうだ。

まあ、レンの希望だし、深層世界に創りだしてやる。

『ありがとおにーちゃん　これでくびり殺しちゃうね』

その剣のように歪になってゆくレン……。  
当初の妹姫様から離れて行った。

『とりあえず、危険になったら龍になって物理的に踏みつぶしちゃっていいぞ』

あんまお勧めしないけどな。  
味方まで踏みつぶされそう。

『そだ、地のページが入った魔族倒したらどうすんだ？ 回収出来  
ないか？』

いちいち回収してたら何年かかるか。

『それは大丈夫です。一番大きな地のページに吸収されます』

ん？

『それって、蓮華が戦う相手が強化されるんじゃないか？』  
『はい』

勝てるのかよ……、最悪俺が

『主様、任せてください。絶対にやり遂げて見せますので、ね？』

蓮華はめっちゃくちゃ張り切ってる。

今回は蓮華に任せるかな……。  
蓮華の願いでもあるわけだし。

ま、いざとなればその時考えよう。

『さて、当日は頼むなお前ら』

『はい』

『わかりましたお父様』

『はい』

『大丈夫です、ね？』

よしよし、

さーで、それまで準備するかな。

## 八十話 魔族討伐作戦（後書き）

くれぐれも変態ではありません。

ムカチクは誤字じゃないよ？

ムカムカチクチク

ごめん、適当に言ってみた。

ティツシュは一日2箱までしか使いません！

もちろん銘柄はスコツティです。

名前可愛いですし。

スコツティを想像しながらです！

エリエールは年上すぎます。

ネピアは幼すぎます。

コレ重要：いつそすがすがしいくらいに送られてくるメッセージが小説に関係ありません。

そんなアナタ達を愛したい！

送られてくる 返信 来る 返信 r o o p

こんななんつてる人が多いけど許します！

皆みんな大好き！

わーきゃー



メッセージ見てると、みんな濃いよね…。  
同じ人でも感想に書く時より濃い。

そんなテンションでコスタリカ行ったら補導されちゃっつよ？

八一話 蓮華の望み（前書き）

いま大流行のエコを実践してみたいと思います。

紙がもつたいないから文字数減らすね

髪がもつたいないからお風呂に入らないと同義です

## 八一話 蓮華の望み

本拠地まで

まず、布陣はこんな感じで出発した。

最前列、一般生徒＋学校の生徒会＋神

中列、上位生徒会＋神。

最後尾、俺達4人。

最前列が縦に道を作り、本拠地周辺は上位生徒会。

本拠地が俺ら。

大体どこもこんな感じで布陣を組んでいる。

なにしろ数が多い。  
すべての生徒を把握出来ない。

『本拠地周辺制圧完了。押し寄せる魔族も対処可能です』

最上位10人+有能な一般生徒から連絡が入る。

『了解、これより本拠地の制圧に移る。くれぐれも死ぬなよ？』  
『はい、如月様もお気を付けください』

なんか、俺が神降ろしてから、みんな如月様って呼ぶようになった。  
俺が死んだら神も消えちゃうから心配してんのかな？

「聞いたかルリリル？」

「行ってくるわ！ ときのご褒美のために！」

「アタシもご褒美を！」

目的がおかしくなってる。

星をくれとか言われそう……。

ちなみに二人は呪力を纏っているので、人形を啜えてはいない。

「まあ、いいや。転移符で転移してくれ、西は任せた」

二人は頷き、その場から消え去った。

「さーて、出番だぞ皆！」

俺の声に反応し、周りにレン、エルが現れる。  
ルーは既に憑依状態。

今回は剣にのみ宿してある。

「ルー、全員に宿ってくれ」

「はい、まかせてまかせなさいまかします、むしろまさぐります」

ルーが光となり、蓮華、レン、エルに宿る。

「じゃ、みんな作戦通り行ってくれ」

「はい」

「行ってきますお父様」

「頑張りましょう、ね？」

二人は姿を消す。

蓮華は漆黒の炎を纏った半月円を両手に持っている。

「行くぞ蓮華、みんなが作ってくれた道だからな」

俺だけだったら無駄に魔力を消費していただろう。  
助かった。

「はい、がんばります、ね？」

俺と蓮華は走りだす。

## 本拠地

本拠地は城などではなかった、山そのものに魔族が蔓延る。

まず時間を止め、山ごと破壊した。

ページ持ちの残りは約10万匹。

大きさはまちまちだが、相性が最悪だった。

こちらの魔法は効かない。

だが、地面は自然物を操るので、普通に貫通する。

「主様！ 私も闘います、ね？」

「ダメだ、お前は最後まで力を使うな！」

全方位からの攻撃。

後ろの敵に剣を突き刺し、前方からの拳を飛んで避け、飛ぶときに剣を縦に振り上げ両断。

上空からの鳥のクチバシを受け止め、振り回す。

蓮華に向かう敵を剣の投擲で殺し、剣を手元に戻す。

そのすきに腕を掴まれ、ひしゃげるが人形に傷を移し、腕を斬り体も両断。

上方から襲い来る敵を、散布しながら切り裂き、殺す。

全方位から数体が俺めがけて捨て身の突進。

上空に飛び、剣を下に構え地面に突き刺す。

岩が立ち上がり、串刺しにする。

キリがない。

全然進めていない。

くそっ！

『ハク、本体がいるであろう場所を特定してくれ』

俺は切り裂きながら問う。

『はい、視覚同期します』

俺の視界が黒くなる。

そして、前方約3キロに見える白い光。

すぐさま視覚を切り替え、周りの魔族を殺す。

「蓮華っ！！ お前死なないよな!？」

「はい！ 原子まで消されなければ大丈夫です」

よし。

俺は蓮華を掴む。

「着地しろよ？」

「へ？」

俺は全開で身体強化をする。

吸血鬼用の身体強化で体が軋む。

そして、本体がいるであろう場所に蓮華を投擲する。

「きゃあああああ~~~~」

『ね?』って言う暇もなく遠ざかって行く蓮華。



死ぬなよ……、皆。

俺はそのまま剣を構え、魔族の処理を続行する。

いたた……、ひどいですね主様……、ね？

骨がグチャグチャに砕けましたよ……。

腕片方とれちゃいましたし……、治りましたが。

とりあえず武器にもう一回九字を刻んでつと。

あたりには何もありません。

きつと、主様の魔法で消え去ったのでしよう。

魔族はみんな四方向に向かったのかもしれない。

面影はありませんが。昔私が住んでいた場所……です、ね？

それなら、この下に……。

たしか、本体以外なら魔法が効くんですよね？

漆黒の龍さん。

周囲の地面を破壊してください。

刹那、上空から巨大な黒い龍が地面に突撃しました。

地面が砕け、私諸共地下に落下しました。

主様、魔力大量にもらっちゃいました。

死なないでくださいね……。

って、私が死んじゃいます落ちる！ 落ちるー！！！！

『グチャ』

痛い……、なんて言うか。

100メートルくらい落ちました。  
かなり潰れましたがすぐ戻ります。

立ち上がり前方を見ると、

「なんだろう……、巨大な岩かな、ね？」

丸くて大きな岩。

50メートルくらいありそう。

岩の隙間から黒い呪力が漏れています……、ね。

「ヒッ!?!」

突如、丸い岩に黒い大きな目が生まれました。

そして、岩から生える数十の腕。

掌などなく、尖った腕。

主様を送ってくれた場所……。

二つの半月円を握りなおす。

がんばります主様。

なんとか本体まで近づかないと!

前方から来る半月円でたたき折る、ルーさんが宿った半月円は軽々と岩を破壊する。

それでも後から後から襲い来る腕。

ひたすら砕き、前へ。

全然進めない。

砕き、押し戻され、砕き、弾きとばされ、砕き、穿たれ、砕き、砕き、殴り飛ばされる。

進み、戻りを繰り返す。

どうしよう……。。

主様……。、どうしよう……。

『お前の利点はなんだ？』

ふと、脳裏に主様の声が……。

主様が見ていてくれた。  
頑張ります。

私の利点は

不死。

私は半月円を襲い来る腕の上に乗せ、その上に私が乗る。

そして、風を使い本体に近づく。

左腕が飛ばされる。

右足が飛ばされる。

頭が碎かれる。

下半身が切り取られる。

私は不死。

魔族最強の吸血鬼。

これくらい何でもない。

あと少し、体は既に回復済み。

主様ごめんなさい。

魔力たくさん借りちゃいます。

更に、腕が、頭が、足が、下半身が、上半身が砕かれる。

私は跳躍、両手に半月円を握り、回転するように岩を砕きながら近づく。

そして、

叩きつける！！

何回も何回も、身体強化を全開にして、叩きつける。

中の黒い部分が見えてきた。

刹那、岩が丸ごと私に向かってきた。

骨が全て砕け、体すらもペチャンこになり、数百メートルも弾き飛ばされる。

すぐに体が戻り、立ち上がる。

前方には、砕かれた私の体が数百人分転がっていた。  
内臓とか脳髄とかまで出て気持ち悪い……。

自分の体だけ……。

勝てない。

攻撃が全然届かない。

「蓮華！ 今助ける！！」

上空の穴から主様が降りてくる。  
まるで、天使のようだと思った。

金色の瞳を光らせながら……。

でも、

「主様！！ 私は！！ 私は自分で取り返します！ それで、見て  
もらいたいです！！ 私は立派に成長したよって、心配しないで  
逝ってくださいって！！ パパとママに言っんです！！ だから私  
は！！！」

私の言葉に、主様は空中で停止していました。

後ろには魔族を倒し尽くしたのか、レンさんとエルさんもいます。  
私の主様と仲間。

いいところ見せたいです。

私は前方に視線を移し、

どうすればいいんだろう。



攻撃は届かない。

投擲？

全力で投擲すれば貫通出来るかも？

私は身体強化をし、全力で二つの半月円をブーメランのように投げました。

相手は攻撃に気づき、数十の腕を伸ばします。

それを、半月円は砕きながら突き進む。

突如、大きな腕がダイヤモンドのように変質しました。それは、体まで全てをダイヤモンドに変えました。

半月円の軌道上に腕が掲げられ、半月円がそれを削り取りながら進みます。

しかし、

数十メートル程進んだところで、突き刺さったまま止まってしまいます。

それを手元に戻し、私に襲い来る、ダイヤモンドの腕を砕きます。

先ほどと違い、重い攻撃。

武器は壊れませんが、一回ごとに私の腕が半ばから砕かれます。

更に、足を砕かれ、体中を貫かれ。

粉々に破壊されます。

ダイヤモンドの嵐が終わると、ゆっくりと、体が戻ってゆきます。

ああ、呆れられちゃったかもしねません……主様に、  
こんなに弱く。

醜い姿。

体の中身が全て散らばった汚い私……。

主様……嫌われたくないよ……。

主様の方を見ると、じっと私を見ていました。

涙をこぼしながら、醜い私をずっと見ていてくれました。

唇を噛み、血が出て、拳を握り締めて手からも血が滴っています。

私が自分でやるって言ったから、待っていてくれた。

主様は、まだ私を信じてくれていた。

嬉しい。

こんなにも嬉しい。

期待に答えたい。

でも、この武器じゃ攻撃が届かない。

魔法は使えない。

多分あれを倒すには二つに叩き斬るしか……。

……え？

二つに……。

主様の言葉を。

確か、

『ハク、断片でも魔法は無理か？』

『はい、ルーさんを宿した武器のみですね。放出系は無理です。蓮華さんの針も無理です』

ルーさんを宿した武器。

それはこの半月円。

でも、これは元々は満月円だった。

どうやって変えた？

私が自分の意思で変えた。

形も若干変わってる。

大きさも……。

……大きさ？

私は走りだす。

身体強化をし、地面をかける。

途中で、腕が襲い来て、体を挟られるけど、大丈夫。

私は死なない、死ねない。

こんなところで死ねない。

こんなところで死なない。

パパとママを食べた魔族に駆ける。

ただ、真っ直ぐに、半月円も腕も落としたけど大丈夫。  
アレは私に戻る。

足を落としたけど大丈夫。  
風が運んでくれるから。

頭を砕かれたけど大丈夫。  
見えなくても、たたまっすぐに走るだけ。

たたまっすぐに、あそこにパパとママが眠ってる。  
千年以上前からずっと眠っている。  
取り戻そう。

パパとママ。

私は上空に飛翔する。

追いつがるように腕が延びる。

手元に半月円を呼び、大きさを変える。

大きく、硬く、鋭く。

50メートル程の大きな漆黒の半月円。

地面や壁を抉りながら、私は振り降ろす。

この仇を！！

『パパとママを返せ怪物ッ！！！！』

叫び、降りぬく。

怪物の頭にめり込み、そのまま抉り込む。

真っ二つに！

地面や壁ごと切り裂く。

怪物は黒い呪力をシューシューと放出しながら、消えてゆく。

黒い目がジッと私を見つめている。

そして、怪物は消え去った。

残ったのは、二つの遺体と、茶色い球。

茶色い球は、主様の方に飛んで行き、体に入り込んだ。

私は着地し、遺体の傍に。



「ババ……ママ……。私は立派になれたよ、ね？」

本拠地中心

蓮華は一人で倒した。

俺の手を借りずとも一人で。

あたりは、蓮華の血と肉塊がごろごろと転がっている。  
多分数千人分の肉塊。

それだけの痛みを味わいながら、両親の仇をとった。

途中、何度助けに入ろうと思ったか。

大切な子が何千回とぐちゃぐちゃにされる所を見ることになる  
は……。  
発狂しなかったのは、蓮華が壊れなかったからだ。

そして、俺の元に、茶色い球体に戻ってきた。  
地のページ。

途中で、ページがまとまり、ダイヤモンドになった時はどうしようかと……。

ホントこのページは迷惑をかけてくれる。  
世界を狂わせ、魔族も人間も神さえも狂わせたページ。

蓮華の両親を奪ったページ……、  
いや、奪ったのは俺か……。

蓮華の方を見ると、遺体の前にしゃがみこんでいた。

後ろからでもわかる。

肩が震え、泣いている。

声を押し殺して泣いている。

「主様……」

蓮華が声をかけてきた。

ふむ……。

「蓮華、もし、お前がこの世界で暮らしたいなら残ってもいいぞ。

お前の記憶から、両親を創りなおしてやってもいい」

ルール違反だけど、それを望むなら叶えてやるう。

蓮華は、コチラを振り向かず、

「いいんです。それはもうパパとママではありませんから。私のパパとママは此処にいます。これでいいんですよ、ね？」

震えながら言葉を紡ぐ蓮華。

痩せこけてはいたが、

美しい女性と、顔の整った男性だった。

両方がキレイな黒髪と、赤い瞳。

蓮華は母親似だろうな。



！ 幸せでしたー！！ パパとママのごともでー！！ わだじはしあわせでしたあゝあゝあゝ！！！！」

蓮華は泣き崩れた。

地面に手を付き、ぼろぼろと。

「あるじさま……、パパとママが……わたじのことを……」

「ああ」

蓮華は泣きながらもうれしそうだった。

『ご主人さま、何やっただんですか？』

ハクが内部で声をかけてきた。

『ああ、両親の脳から記憶の復元。蓮華への想いをな』

『蓮華ちゃんのこと嫌ってたらどうするつもりだったんですかー？  
壊れちゃいますよ？』

『ちゃんと、俺が見てからだよ。サービスマイナもんかな』

ま、見せて蓮華がどちらに転ぶかわからなかったけど。

『それで、どうでした？』

『さあ』

ハクには適当に答えたが、あまり他人に言っているいいものでもない

だろう。

両親は本当に蓮華のことを愛していた。  
生まれた瞬間からずっと。

蓮華の一喜一憂に喜び、泣き。

蓮華の喜ぶ、いろいろな話を聞かせていた。

それが今の雑学王になったって感じだけど……。

そして、コレは蓮華には知らせなかったが。

蓮華を長く生かすために、二人は魔力をほぼ蓮華に渡していた。

そして、あの地のページが入った魔族を倒そうと立ち向かった。

アイツは蓮華を殺そうとしたらしい。

そして、蓮華を逃がしたあと、喰われた。

仲間の魔族に、蓮華を頼むと伝え。

大方、仲間の魔族は蓮華に両親のことを伝え、殺されたのだろう。

これが、蓮華が一人になってしまった理由。

俺のページから始まった因果が、いま此处で終結した。

「主様、行きましょう。リルさんとルリさんが待ってますからね、  
ね？」

そう言い、蓮華は微笑んだ。  
目を真っ赤にさせながらも、ほほ笑んだ。

「お前がここに居たいなら」  
「主様！」

言葉を遮られた。

「主様はニッコリ笑って、帰ろうか蓮華、って言っんですよ、ね？」  
……。

そうだな……。

「帰ろうか、蓮華？」

蓮華は俺の言葉に深くうなずき、

「はい！ 主様！ ね？」

走ってきた蓮華を抱きしめ、俺は飛翔する。

にしても、蓮華俺より大人じゃん……。

蓮華の方が神っぽいし、むしろ俺が神っぽくない。

はぁ……。





八一話 蓮華の望み（後書き）

長くなつた！！

しかもシヨボー！！

蓮華より僕が泣きたい！

稚拙すぎる文章に泣きたい！

## 八二話 平和記念日(前書き)

おいっしーからあげつくるなら〜 モミモミ〜

話別アクセスって機能面白いw

四話目くらいまで同じでそこで70くらい下がる。  
ずーっと同じで、

最新話から7個くらい前で2000くらい上がる。

どこら辺で飽きられるとかわかるからいいよねコレ。  
四話で飽きられる)・・・(

双子

蓮華を連れて飛翔しながら、神に連絡を取ると、他の魔族は消し去ってくれていた。しかし、味方の損害もかなりの人数になるとか。って言っても、損害状況は生徒が教えてくれたのだ。神には人間など全く興味ない。

眼下には、背中を合わせて座り込んでいる双子。血で汚れてばかりい。  
ちい。

俺はレンとエルを消して、その場に降りる。

「御疲れさん、二人とも。よくやった」

頭をなでながら、褒めてやる。

二人はこちらを見、うれしそうに微笑む。血で真黒だけど……。

「そっちはどう？」

リルがニコニコ笑いながら聞いてくる。大体、予想はついているのだろう。

「ああ、魔族は全滅。他の地区も全部倒したよ。世界に魔族はもういない。残った魔族と魔物は、神が探して消してくれてる」

やはり、と言うか。残った魔族もいるのだ。単体で動いている者などが。しかし、それは守護者の仕事。事後処理もバッチリだ。

「そう……、終わったのね」

なんか、一気に気が抜けたような二人。

まあ、千年以上も続いた戦争だしな。

「ま、とりあえず戻るぞ。リルが発表するんだろ？」

疲れ果てているルリを促す。

「はい。そうですね、行きましようか？」

二人がゆっくりと立ち上がり、転移符をポケットから取りだす、ずぼらな性格が出ていて、転移符はグチャグチャだ。

ソレを使い、二人が消える。

俺も後に続き、消え去る。

## 総会本部

「お集り頂きありがとうございます。今年度の魔族討伐報告をいたします」

現在、総会本部。

無駄にでかいあの場所だ。国会議事堂みたいなところ。そこに、生徒会長約300人程が集まっている。残りの100人は戦死。

全世界放送もされている。

「まず、戦死者121万6438人」

ルリの言葉に本部の空気が重くなる。

どんなに頑張っても死者は出てしまうのだ。しかも、討伐に参加した約三割が死亡した。

ルリは眼を瞑っている。

「重傷者83万2452人。軽傷者131万1921人」

ほぼ全てがなんらかの傷を負っている、ということだ。

「そして、魔族と魔物の討伐数ですが、計測しておりません」

ルリがそう言うと、本部の人間から野次が溢れだす。

全員が怒り狂っているようだ。

「計測する必要などありません。魔族並びに魔物は全滅させました。分布制圧。本拠地周辺制圧。本拠地制圧完了しました。ですから

」

瞳をゆっくりと開き。

「もう地球に魔族や魔物はいません」

にこりとほほ笑い、言いきった。

本部は静寂に包まれ、

そして、

大歓声が上がる。

天まで届くような大きな歓声。

泣き出すもの、抱きあうもの、飛び跳ねるもの。

みんな一様に歓声を上げる。

そんな中、俺達は、ただほほ笑みを浮かべていた。

外から大きな歓声が聞こえる。まるで、街全体が、世界全体が喜ぶような声。

千年に及ぶ戦いの終結への歓喜。

不意に、俺の両腕に重さが加わる。

視線を下げると、ルリとリルだった。

二人は、俺を見上げて笑っていた。

「いいものですね、頑張ったかいがありました」

「そうね、まさか、アタシ達が終わらせることが出来るなんて思ってもいなかったわ」

まあな、この連鎖を止めたのはコイツらと、今喜んでいる人たち。そして、犠牲になった多くの人間の賜物だ。

「でも、結局」

二人は俺を見上げ、

「「とき(さん)のおかげなのよね(ですよね)」」

嬉しそうに俺を見上げて言ってきた。

俺は首を横に振る。

「関係ないだろ。俺一人じゃ出来なかったし、俺はお前らがいなかったらやるうとも思わなかったよ。だから、胸を張れずばら双子。お前らと、みんなの成果だよ。張る胸もなさそうだけど」

適当に冗談を混ぜながら言ってやった。

実際、これは俺の起こした因果でもある。それに、もしこの二人に出会わなかったら、きつとページ回収だけして、魔族を全部倒すことなんてしなかっただろう。

神の気まぐれを引き出した、この双子の成果がコレなのだ。

「むー、最近はずばらじゃないし、胸だつて……多分成長する?」「ヒドイです。これで胸が成長しなかったらときさんのせいです」

何で俺のせいになるんだろうか……。

俺は双子の胸の大きさなんて世界構造に入れてないぞ? もう遺伝子的にそれだ。

って言っても、15でCなら成長したらD後半くらい行くんじゃないだろうか? うまくすればEくらい? 全然小さくないはずなんだが……。

「そうだわ! ご褒美よ! 約束したわよ!」



行き成りリルがそんな事を言ってきた。  
でも、約束したからには反故にしようとは思っていない。

「それで、ご褒美は何がいいんだ？」

俺の言葉に、顔を真っ赤にする二人。  
意を決したような表情になり、

「遊園地に行きたいわ！」

「遊園地に行きたいです！」

……。

なんか気が抜けた。まあ、コイツらも若いからな、行きたくもなるだろう。

俺は分厚い財布を渡してやる。百万くらい入ってるから足りるはず。

「……なにこれ？」

足りないって言うのか！？

俺は更に上着の内側に空間をつなげ、札束を10個ほど取り出す。

「……」

ええ！？

遊園地貸し切りたいうってことか！？  
くそっ、約束だからな。

俺は札束をバサバサと地面に落とす。たぶん、数億くらいありそう。

「これで足りないか？」

二人は無言だった。

「……ときも行くのよ？」

理由が違った。

最初に言えよ！ 遊園地に行きたいだけじゃ二人で行くって思うだろ！？」

「ああ、二人で行くのかと思ったぞ？」

「ちっ、違うわよ！？ 何のご褒美よそれ！ デートよデート！」

遊びに行く＝デート。

ふむ、本当にまだまだ子供だな……。

「ああ、いいよ。どこにでも付きやってやるよ」

俺が投げやりに言ってやると、二人は本当にうれしそうに笑った。俺と行って何が楽しいんだか……。

実を言うと、俺は生まれてこの方遊園地なんて行ったことがない。エスコートなんて確実に不可能。構造としては理解しているが、そんなの役に立たない。

「じゃ、明後日行きましょう！ 今日早く寝るわよ！ 明後日の

ために！」

お前二日寝るつもりかよ!?

今から寝続けたら、時間狂って確実に寝不足になる!

そんな時、入口の大きな扉が開かれた。

そこには、大勢の大人が立っていた。そのまま、俺達の方に歩いてきて、一礼する。

「私は、学園を統括する者でございます。アナタ方には感謝の言葉もありません。本当にありがとうございます」

初老の爺さんだった。

70くらいだろうか。にしても、統括ねえ……。

「つきましては、明日平和記念パーティーが開催されますので主役としてご出席していただけないかと」

「ええっ!?!」

言葉の途中でリルが叫んだ。

「御用がおありでしょうか?」

ん? なんかつたっけ?

「明日は明後日のために寝ないと……」

マジで寝続けるつもりだったのか!?

「リルちゃん、大丈夫だよ。早めに終わらせて帰れば」

「お前ら二人どれだけ寝続けるつもりなんだよ。」

「はぁ……、それで、大丈夫でしょうか？」

「ダメだ。二人に任せてはおけない。」

「ああ、別にいいぞ。時刻とかの連絡は此処にいいか？ ハッキリ言って今日はめちゃくちゃ疲れてる。コイツらもまだ魔族の血落ちてないから早く風呂入りたいし」

俺は初老の爺さんに、自分の携帯の連絡先を渡す。

「てか、マジで血が……。一応拭いたけど落ちるはずもなく、ルリルリはどこどころ黒い血が付いている。」

「わかりました。では、今日中に連絡させていただきます」

深く頭を垂れてから、入ってきた入口から出て行った。

「平和記念パーティーってどれくらい規模なんだろうな？」

「生徒会長だけが集まるのかも知れないわ」

「ま、その程度だろうな。」

「あー、でもめんどい。」

## 平和記念パーティー

俺達は甘く見ていた。

パーティーって言うより、パレードだった。  
しかも全ての人が見に来るような。

現在、俺達は空中十メートル程に浮いているボードの上立っている。  
いる。

それがゆっくりと、観客の上空を前方に移動するのだ。

上空からは、色とりどりの花ヒラが降り注ぐ。

眼下には、人、人、人。

見える範囲F - 32地区全てが人で埋め尽くされている。

四人のポスターがいたるところに張り巡らされ、銅像が建っている……。

至る所にホログラムで、俺達をうつしている。

よく一日でここまで出来た。

そして、会話が出来ない程の大歓声。

要約すると、ルリは此処、F - 32地区。つまり、地球の首都の地区長になった。

ついでに、俺達四人はなぜか英雄になっていた。

そんな感じのことを歓声で言っている。

恥ずかしくすぎて逃げたい。隣では、ルリルも顔を真っ赤にして俯いている。蓮華はポテトフライを食べている。

俺達の周囲には十二天将+ルーが飛翔している。もちろん、呪力は抑えている。

一応、今回の戦いには神も参加しているので、一緒にいるのだ。

ちなみに、干支の蛇の所には、俺が新しく神を創って置いた。

原形は火之迦具土神。カグツチって呼ばれる奴だ。死んでいたが、姿も意思も違う存在として誕生させた。

見た目は10歳くらいの少年だ。他の十二天将が子供のように可愛がっている。

てか、手振るくらいしかやることがない。

「ルリルル、俺は帰りたい。笑顔に疲れた。長すぎる、手が痛いぞ？」

もう既に三時間くらい笑顔で手を振ってる……。

それなのに、観客は全く減らない。観客が入れ替わってる事から地区に入れる人数限界まで入れ、時間交代なのだろう。だが、俺達は交代出来ない。

「とき、このままじゃ明日に支障が出るわ。転移符を……」

このまま、全員が交代してたら数日このままだ。無理。

「ルリ、終わらせるように軽く演説してくれ……」

ルリは軽く頷く。そして、そばに浮遊しているマイクを手に取り、

『アタシは、学園協会会長、瀬古瑠璃です。本日は、お集り頂きありがとうございます』

ルリが言葉を発すると、一気に静かになった。

『このようなパーティーを開いて頂き、とても感謝しています。ですが、少し疑問があります』

眼下を見回しながら言う。

『確かに、アタシ達の指揮のもと、討伐に参加し、見事長年の戦い

を終わらせることが出来ました。結果、今アタシ達は盛大に祝ってもらっています。ですが、アタシ達はこの戦いを自分たちの功績だとは思っていません』

周囲が少しざわめく。

『何故なら、皆命を賭して闘っていたからです。本拠地はアタシ達が制圧しましたが、他の方々も、必死に戦っていたんです。もし、アタシ達だけだったならば、アタシ達は死んでいたでしょう。アタシ達が戦っている間、魔族が来ないように支えてくれたのは多くの人間です。その結果、無くなった人も大勢いました。ですから』

大きく息を吸い込み、

『皆さんは自分を祝ってあげてください。頑張ってきたのは皆同じです！ どれだけ多くの魔族を屠ったなどではなく、どれだけ努力したかなんです！ 祝いましょう！！ 今日にはアナタ方全員の平和記念日です！！ 自分の地区、家族、親友、恋人。一番喜びを分かち合いたい人たちと祝ってください！！』

ルリが言い終わると、

天を貫くような歓声が上がった。本部の時どころではなく、空気がびりびりと震えるような歓喜の声。

俺達の名前が『様』付で叫ばれている。

ふ、恥ずかしすぎて外に出たくない。

『では、アタシ達も一番喜びを分かち合いたい人と祝います！！  
それでは、御試聴ありがとうございます』



ルリはペコリと一礼し、俺の腕に抱きついてきた。

反対側にリル、背中に蓮華って、お前手が油でギトギトじゃん……

「それじゃ、ときさん。分かち合いましょうか？」

「アタシ達四人でね」

「主様、おつかれです、ね？」

ま、悪くはないかな。

俺達は轉移符でそのまま、久々の自宅へ帰還する。

八二話 平和記念日（後書き）

八十四か八十五で世界渡るかな？

### 八三話 遊園地デート（前書き）

南京虫の交尾がかわいそうです！ 誰か助けてあげてください！

お腹に穴あけて交尾です！ たまに入れられすぎて弾けます！

ちゃんとした方法があるのに、なんてひどい雄でしょう。

## 八三話 遊園地デート

### 遊園地

此処はA・O3地区、この地区は全てが遊園地になっている。  
現在、俺とルリルは遊び、もといデートに来ている。

蓮華は、『二人とは最後だから遊んできて、ね？』だそうだ。で、今は二人を待っている最中だ。

なんで一緒に住んでるのに外で待ち合わせ何だっけ感じたが、そこは女の子の秘密とか言ってたので、仕方なく先に来ていた。

10時待ち合わせなのに、30分ほど過ぎている……。なんてずぼら。

「す、すみません!! 握手してもらえませんか!!」

前方から来た一団に声をかけられた。

「ああ、俺でよければ握手くらいいいぞ?」

俺がそう言つと、すごい喜んでいた。

順番に8人程の女の子と握手する。

「あ、ありがとうございます！！ 一生手洗いません！」

いやいや待て待て。それは双子並に不潔だから洗え！

先ほどからこんな感じでたく

「すいませ〜ん、握手〜」

背後からすごく機嫌悪そうに声をかけられた。

「ああ、いいけ」

後ろを振り向くと、不貞腐れた双子が立っていた。すごい睨んでいる。

「ときー、アタシたちとデートなのよ！ 今日のアタシ達以外触れたり喋ったらダメよ！」

めちやくちや横暴なことを言われた！ てか、遅刻したのこイツらだし！！

「あーもう、お前らが遅刻したことに対しては諦めよう。ホラ、行くぞ？」

俺は二人に背を向け、歩きだす。背後でギャギャーやってるが知らん。

とりあえずチケット売り場に向かう。

「おはようございます、当園　　お、おはようございます……！」

おはようございます二回かよこのチケット販売の人！

「大人フリーパス三枚で」

「はっ、はい！」

俺は一万五千円を渡す。一人4500円だ。今日は俺のおごりつと。

「コチラがチケットになります！　コレがおつりの1500円になります……！」

俺は受け取る。受け取るが……、

「とき……、今日はアタシ達しかダメって言ったわよね？　いつまで手握ってるの？」

いやいや！　俺のせいじゃないだろ！？

「すみません、手を離していただけませんか……？」

この販売員両手で握って離さない。

「わ、す、すみません。では、楽しんでいってください!」

パッと手を離し、笑顔で言ってくれた。

俺達は遊園地内に歩きだす。

「全く、ときは目を離すとすぐ女の子が寄ってくるわ! 死ぬまでアタシ達が面倒みないとダメね!」

「そうです、ときさんの不幸はわアタシが見続けます!」

色々おかしいことに気づけな? お前ら。

ついでにさ、お前達のファンもいるんだからな? 後ろ見ろよ、

男と女の行列を。大名行列みたいになってるし。

「さーて、まずはジェットコースターね!」

一気に元気になったリルが笑顔でそう言った。

乗ったことがないからわからないが、普通穏やかなのから行くんじゃないだろうか?

「ほーら、行くわよとき、ルリちゃん!」

リルが俺とルリの腕を掴み、走りだす。

ジェットコースター

着いたが、すごい混んでいた。  
一時間待ちのプレートがある。

「リル、混んでるから他のに」

リルは涙ぐんでいた。  
乗れないからって涙ぐむのかよ!? 小学生かお前は!?

「お、お先にどうぞ!」

リルの涙に前の人が譲ってくれた。リルは喜々として一人分前に出る。

「ど、どうぞ!」

次の人が譲ってくれた。リルは前に。

「前いいよ」

譲って、前へ。



そんな感じで、待ち時間なしでなぜか最前列。

「やっぱアタシの仁徳ね！」

すっごいいい笑顔で言い切った。

俺には、お前がダダこねて暴走しないように譲ってくれたように見える。

世界放送の後、俺達の顔は世界中が知ることとなった。英雄として。そのせいで、どこに行っても声をかけられたりで、めんどくさい。

「はい、ルリちゃん奥ね。アタシは左」

ふむ。二人乗りだしな、俺は後ろに。  
乗ろうとして、

「ときはここよ」

は？ コイツは何を言っているんだろうか？ 自分の背もたれの上に座れと？ 何その新しい発想！？

「いや、無理だろ？」

「ときなら大丈夫でしょ？」

まあ、大丈夫だが……。

リルに無理やり座らされ、足を自分のベルトのように持たれた。

「お、お客様……、それはちょっと」

係員の人に声をかけられた。当たり前だ!!

「大丈夫よ、ときは英雄だからこれくらい余裕ね!」

「そ、そうですね!」

何納得してんだよこの係員!?

てか、後ろ誰も乗ってねー!!

あんだけ、並んでたんだぞ!?

「それでは」

定員がそう言うと、コースターは発射した、

なだらかな斜面をガチガチと音をさせながら、ベルトがジェットコースターを引き上げる。

「やっぱ、タンマ! 初めてのジェットコースターでコレはマジ怖い! 魔族より怖い!!」

「とき、暴れないで!! 普通のベルトつけてないんだから!!」

「黙れ! 死ぬ!! 俺は飛翔し、後ろの席の背もたれまで移動する。此処に座れば……。」

「待つてくださいときさーん!」

「って、双子が背もたれの上を移動しだした!? 異常なバランス感覚で走ってくるし!」

「そこで、ジェットコースターは斜面の頂点に到着し、猛スピードで走りだす。」

双子は落ち、俺の上空を通過し、後ろのコースの上に着地。そのまま、双子はコースの上を走って追ってきた。

俺は走って前列まで移動、双子が後席に着地、そしてジェットコースターは一回転する。

俺は回転の開始で飛び降り、戻ってくるのを待って着地しようと思うが、双子に襟首を掴まれて回転に巻き込まれる。

「きゃあああああああ！！！！」

双子が叫び、回転の頂点で落下、線路に着地、後ろから追ってくる無人のジェットコースター。

俺達は線路を走って逃げた。

二人を前列に投擲、剣を取りだした二人が、前列で立ち上がり、構える。俺はジェットコースターから逃げる！！

「ときー待ちなさい！！」

「ときさん！！」

ぜってー待たない！！

俺も剣を取り出し、立ち向かう。しかし、足にジェットコースターの先端があたり、回転しながら後方にぶっ飛ぶ。そのまま飛翔し、二人の背もたれに着地。二人をコースに投げ飛ばす。

飛ばされる瞬間、俺を掴み、一緒に吹き飛ばす。そして、ジェットコースターと追いかっこ。

と、思っていると、どうやら、乗車場所に戻ってきたようだ。助かった……。

「二周目どうぞー、サービスです」

まったくスピードを落とさず、二周目へ突入した。

いやああああああー!!!

お化け屋敷

すごい疲れた……。

ジェットコースターはもう一生乗らないぞ。なんてハードな乗り物だよ。

「あー、楽しかったわね！ あんな楽しいの初めてよー!!!」

そんな素敵な笑顔で言われてももう嫌だ。俺は二人のスカートがめくれないように風も使いながらだったし……。

「ときさん、アタシあれがいいです」

ルリの指さした方向には、待つてる人が誰もいないお化け屋敷。てか、大きく18禁って書いてあるんだが？ 18禁のお化け屋敷ってなんだよ？

「いいわね、パンフレットにもお勧めって書いてあったし、行くわよー！」

しづしづ俺はついて行く。

係り員に、何か袋を渡された。

？ よくわからないけど、もらって中に入る。

「とき、アタシ達お化け苦手だから守ってね？」

両側から首に抱きついてくる二人。うーん、お化け屋敷って言うても作りものだろ！？

中は真っ暗だ。とりあえず、中に歩いて行く。突如、横から

「うわああああー！！ コワッ！？ グロー！！ キモッー！！」

俺は思わず叫んだ。双子は俺に抱きついてフルフルと震えている。

アリエナイ俺ですらこえーよ！ ホログラムでお化け作りやがっ

た！ お化けじゃなくてゾンビだこれ！！ 内臓とか脳髄とか普通に出てるし！ 血がぼたぼたと……、だから18禁なのかよ！！  
てか、双子どう見ても15だよ！

「とき、足腰が立たない……助けてこわい」

「ときさん怖いです」

立てなくなってるし！！

そんな俺達にゾンビの大群が！！

「マジこわっ！ 一人が感染ウイルス蔓延！！ ゾンビになっちゃ  
う！」

双子はうずくまって袋に嘔吐していた……、ってこの為の袋かよ  
！！

「とき、アタシはもうダメよ……。死ぬ前にファーストキスくらい  
したかった……」

そのままリルは意識を失った。

「ときさん……、アタシの不幸をもらってください」

リルまで意識を失った……。

俺は二人を抱えて転移した。

## ミラーハウス

二人は全然起きなかった。

いまはベンチで二人を寝かせ、タオルを額に当てて介抱中。  
とりあえず、アトラクションのチョイスが最悪だ。  
もう夕方になっちまったし。

俺は二人を撫でてやる。

「寝顔はかわいいのになあ……、はっちやけすぎだろ？」

ガバつと二人が起き上がった。

「かわいい！？ アタシかわいい！？ とき！」

「アタシもですか！？ かわいいですか！」

マジ元気だった。

「お前ら気絶してたんじゃ」

「そんなことはいいいから可愛い！？」

「ときさん！」

顔ちかつ！ 5センチくらいまで顔近づけて聞いてくる。

「ああ、かわいいよ二人とも」

俺がそう言つてやると、真っ赤になり、

「そっか、アタシ可愛いか、えへへ」

「ときさんから可愛いって、ふふ」

にこにここと笑いだす。

全く何が嬉しいんだか。

「とき、次いくわよ！ えーっと、ミラーハウス！ アレ楽しそう

！」

ふむ。ミラーハウスなら危険はないだろう。

「よし、行くぞ」



二人が俺に抱きついてきて、俺達はミラーハウスに向かう。

お城みたいな建物の中に、鏡が大量に張られていた。ここはどうかやら、普通のアトラクションのようだな。

入口が別になっていたので、三人で別れて入る。

でも、入ったらすぐ横に双子がいた。入口分ける意味なくね？

周囲に俺と双子が映った鏡が大量にある。

「あ、ときがいっぱい、とき！」

そのままリルが走って行く。でも、それは俺じゃなくて鏡だ。

『ゴコンッ』

鏡が割れるんじゃないかと言っくらいに大きな音を立ててぶつかった……。

てか、鏡に血が付いてる。どれだけ勢いよく……。

「あーもっ」

俺は頭をぶつけたリルに手を伸ばすが、鏡にぶつかりつき指。

「二人とも大丈夫ですか？　いまそちらに行きます」

ルリが俺達の方に向かう通路に走りだす。ちゃんと傍目にも鏡ではなく通路だ。

『ゴンッ』

「ぐすっ……………」

盛大に頭をぶつけていた。

てかコレおかしくないか？　俺の時もそうだけど、確かに鏡じゃないはずだ。どうなってるこれ？

「ときーときー……………」

なんかみるみるルリが血だらけに…………。

って何此処！？

俺は入口でもらったパンフレットを取りだす。

「リフレクションハウス？　説明は……………光の屈折率を狂わせて認識  
障害……………、ハアっ！？」

どんなアトラクションだよコレ！？

「とき！　とき！！　ぐすっ……………寂しいよとき、どこ行ったの？」

なんかリルが壊れてきてるぞ！

「痛い……、助けて……」

ルリまで血だらけに。

ふざけやがってこのアトラクション！

『Glanzgriff』

《光彩掌握》

俺は光の屈折力を故意に戻す。

ルリは俺に背を向けて泣き崩れていた。

ルリは俺の方を見ていたが、顔面血だらけ。

「ルリ！ ルリ！」

俺が声をかけると二人は俺に抱きついてくる。

「ときー！ ときー！ 怖かったー！ ぐすっ……」

「ときさんがいましたー！」

二人は俺に抱きついて泣きだした。

二人を抱きしめてやる。

「ふふ、はははははー！ 壊してやろう！ 『Radieren  
Sie es aus』 《消し去れ》」

俺は周囲全てを空間ごと消し去った。

「ほーら、もう大丈夫だぞ？ リフレクションハウスごと消し去ってやったから」

俺は二人の涙と血を拭いとってやる。

二人は俺を見つめ、ほほ笑む。うん、この笑顔のためならこんなアトラクション必要ないよな。うん。

俺達はそのまま移動した。

ルリ

「あ、とき！ ホットドック食べたい！」

なんかリルが幼児退行してるな。遊園地は人を狂わせる。  
俺はリルに財布ごと渡してやる。

「三人分買ってくるわ！」

喜々として走って行った。

「ときさん」

リルが隣で声をかけてきた。

「ん？」

「ありがとうございました」

は？ 俺は何もしてないぞ？

リルは視線をリルに向け、目を細めて笑う。

「ときさんが来てから、リルちゃんは笑うようになりましたから」

あれ？ 最初から結構笑う奴だったぞ？

「アイツが落ち込んでる姿あんま見ないが？」

リルは首を振る。

「いえ、それはときさんが来てからでしょ？ お父さんとお母さんが死んでから、ほとんど笑ってなかったんですよ？」

信じられないような話だ。

「リルちゃんはいつも無理してましたから、呪力もなくて、本当は頭もよくなかったんですよ？」

「あいつはトツプだったろ？」

「いえ、最初は全然下の下。呪の才能がないから、寝る間も惜しんで勉強してたんです。だんだん成績も上がってきて、トツプになりました」

努力でトツプって言うのは俺的には結構好きだな。俺自身努力しないでトツプとかになってるからな。

「小さい頃からアタシにずっと憧れていて、いつも後をついて来ました。なぜか、アタシは呪力も勉強も出来たんです」

まあ、コイツは初めから出来てたしな、あふれ出る呪力もトツプクラスだった。

「だから アタシはこの力が大嫌いでした」

そう言って、ルリは苦笑いをする。

「いつもリルちゃんはアタシのことを立ててくれて、自分のことは置いておいて、まずアタシを褒めるんです。双子なのに正反対だったの。だからアタシはこの力を消す方法をずっと探していた。リルちゃんは強くなれる方法をずっと探していた。努力の方向も正反対

だったんですよ」

ルリは、遠い過去を見るような目をしていた。

「でも、ですね。ときさんが現れました。アタシが最初に行ったこと覚えてますか？」

「確か、『女難の相』が出てるとか」

「ふふ、そうですね。本当は違ったんですよ。アナタならアタシ達を助けてくれるって出ていたんです。占いが得意なのは本当です。だって、見ず知らずの人を普通家に住ませますか？」

「はあ……、どうもおかしいと思ったんだよ。話の展開がおかしかったからな。」

「当たりましたね。ルリちゃんの原因を突きとめて治してもらっちゃって。この世界も救ってくれて。本当にありがとうございます。お礼と言っちゃなんですか、アタシでも食べますか？」

うん。話が全然違う方向に行ってるからね？

「やーだよ。冗談はやめてくれ」

俺は肩をすくめながら言ってる。

「あら、アタシときさんのこと大好きですよ？ 結婚してもいいくらいに」

ニッコリ笑ってそんな事を言い出しやがった。

「でも、それが無理だったのも知ってます。占いは得意なんです。大体、ときさんが“何”であるかも知ってます。でも」

ルリは、こちらにリルが走ってくるのを見つめ、

「これから起ることで、リルちゃんを出来るだけ悲しませ上げないでほしいですね」

つまり、悲しませるってのは決まってるわけか……。

「買ってきたわよー！ おまけしてもらった！」

なんか二十個くらいホットドックの箱が積み上がってるし……。あと、口のまわりケチャップだらけだぞ？

俺はリルの口の周りのケチャップをハンカチで拭きとってやる。

「あふっ……、あ、ありがとう。えへへ」

嬉しそうにほほ笑んだ。

この笑顔を俺が悲しませないといけないのか……、つらいな。



八三話 遊園地デート（後書き）

ピンキーって最近みないけどどこに消えたんでしょうか？

まあ値段の割に少ないよね。

## 八四話 第四の世界からの旅立ち（前書き）

ちなみに、前の話もそうですが、僕が毎回遊園地に行くと思ってることを小説にしていますb

## 八四話 第四の世界からの旅立ち

### 観覧車

「とき！ あれあれ！ あれに乗りたい！！」

幼児退行中リルが指さしたのは、観覧車。  
夜なので、ライトアップがキレイだ。  
大きさは200メートルくらいだろうか？

シンガポール・フライヤーの170メートルよりでかいぞ。

「ああ、アレなら今度こそ安全だよな。行くか？」

二人は大きく頷き、走りだす。

またまた最前列。

と言うか、客が誰もいない。

「では、コチラへどうぞ」

係り員の案内で中に入る。

中は普通の3メートル＋2メートル程度の大きさ。ちよつと大きいかな？

だが、なぜベルトが付いているんだろうか……。この遊園地はおかしすぎて、疑ってしまう。

「ときは真ん中よ」

二人に導かれ、左側の真ん中に座る。二人は左側の俺の両隣。傾いてるぞ？

「では、ベルトをしっかりと固定してください」

係り員の言葉に、俺達はベルトを固定する。と言うか、なぜ観覧車止めて中に入れるんだ？

ベルトをはめると、ゆっくりと観覧車が回りだす。時計回りだ。てか、ゆっくり回りすぎ。スローリー安全！

「ずいぶんゆっくりですね、コレだと一時間くらいかかりそうですよ。」

ルリがそんな事を言うが、確かにそうだな。

「あ、少し早くなつたわよ？」

安全性を考えて、ゆっくりからなんだな。

突如、ガクンと揺れ、少しスピードがアップする。ギアチェンジ激しすぎ！

ガクン、二回目のギアチェンジ。

「少し早くないか？」

二人が俺の腕を抱きしめる。

かなり傾いている。俺達が左側に乗ってるんだから、右に傾くはずだが、左に傾いている。

ガクン 三回目のギアチェンジ。

「ときさん、なんだかこわいんですが……」  
「奇遇だな……」

怪しくなってきた。

ガクン 四回目のギアチェンジ。

かなりやばい。角度が90度に近い。俺達の下には反対側の席が……。

ガクン、ガクン 6回目のギアチェンジ。

「って、待て待て!! 回転するだろコレ!!? もう遠心力で固定されてる!!」

ガクン 七回目。

「きゃあああああ!!!!」

二人が叫ぶ、俺も叫びたいぞ! 100キロくらい出てそうだし、遠心力で地面に立っているみたいだぞ。地面ってか天井?

ガクン、ガクン、ガクン 10回目。

「あう……、とき、アタシ吐くかも……」  
「アタシもダメ」

二人の顔色が青ざめている。

てか、俺も気持ち悪い。

『Elektrische Einnischung』

《電力掌握》

俺は電気の流れを止める。

ゆっくりと、観覧車が止まる。ちょうど頂上の200メートルくらいだ。

遠くの景色が見える。イルミネーションがキレイだ。

二人の顔が眼下のイルミネーションに照らされ、少し青く照らされる。

「きれい……」

リルはベルトをはずし、窓から外を覗いていた。

俺達はしばらくジッと外を眺めていた。

「ねえ、とき。キレイだね」

「ああ」

リルは呟くように言った。

「ねえ、とき。……キレイ？」

「ああ」

同じ質問？

「ときの中でアタシは……キレイ？」

リルはじつと俺を見ていた。

「キレイって言うより可愛いかな」

俺は肩をすくめながら言ってやった。

「わたしの中は……キレイ？」

何を言いたいんだ？

「ま、最初はずぼらだったけど、最近はキレイな心になったかな」

「なら……それはときのおかげだね」

ほほ笑みながら言った。

「違うよ、お前が頑張ったからだ」

「それでも、アタシはときのおかげだと思いたいよ。ときがいなかったらずつと変われなかったから」

それは間違いではないかもしれない。外部の要因がなかったらずつとあのままだった、リルも。この世界も。

「アタシはときの隣に立てるかな？」

その真剣な質問に、俺は答えることが出来ない。



どんな言葉で着飾ろうとも、答えは『否』。人間である限り不可<sup>能</sup>。

「ねえとき！ 知ってる？」

リルはそう言い、右側の座席の上に立ち上がった。  
両腕を後ろで組み、背を向けている。

「アタシは」

両手を組みながら、振り返る。

「如月刻が宇宙で一番大好きです」

満面の笑顔で言い切った。

ああ、コレがルリの言っていたことか……。

ルリに視線を移すと、悲しそうな顔をしていた。

答えなどわかりきっている、と。

その答えしか俺は出せない。

これから、この笑顔を俺は壊さないといけない。

俺は首をゆっくりと横に振る。

「……無理だ」

ごめん、ではなく無理。

俺がソレに答えることは出来ない。

ルリの笑顔は消え去った。

ぼろぼろと、大粒の涙を流すルリ。

俺の前で膝立ちになり、俺の胸を掴む。

「とき！！　とき！！　何で！？　好きなの！！　こんなに大好きなの！！」

涙を流し続けるリルを見つめ、首を横に振る。

「なんで……なんで！　何だってするから！！　ときの言うことなんでも聞くから！！　性格が嫌だったら直すから！！　掃除もちやんとする！！　ときしかいないの！　あたしにはときしか！！」

俺は首を横に振る。

「とき！　とき！！　こんなに愛してるのに！！　ときがいれば何も要らない！　命だって！　地球だって！！　あたしの全てをあげるから！！　ときがしたいことなんだってしてあげるから！！　何でも言い！　奴隷にだってなってあげる！！　だから、とき……とき……」

ああ、リルは子供だ。

納得なんてしないだろう。このままだと自殺だってするかもしれない。

多分、俺が言えば人間だろうと普通に殺してしまうだろう程にあやうい。

「俺も出来れば……、お前と結婚でもして、子供作って。幸せに生きられれば良かったと“思う”よ」

これは本心。

でも、俺にはそんな権利などない。

「子供？ 子供だっときがほしいなら百人だっ千人だっ作るから！」

一体何年生きるつもりだよ。

「違うよ、思うだけ。決して叶うはずもない現実」

リルは俺を掴んだまま、泣き崩れる。

「アタシが……嫌い？」

「いいや、大好きだよ」

「でも……ダメなの？」

「ダメだ」

ぼろぼろと涙をこぼし続けるリル。

こいつは今までがつらすぎて、手を差し伸べた俺に依存しているだけ……。

「ルリちゃんはいいの？」

リルが声をかける。

「はい」

「だって、ルリちゃんも好きだよね？」

「大好きです。愛してます」

「ならなんで!?!」

「無理だからです」

ルリはキツパリと言いきった。

ルリの顔に光が反射し、うつすらと涙が流れているのがわかる。

「なんで、無理無理って……」

「それは、ときさんがときさんでいる限りアタシたちの想いが届く  
ことがないからです」

ルリはゆっくりと語った。

やはり、ルリは知っている。

「なんで……?」

ルリは俺の方を向き、言ってもいいのか? と聞く。

俺はゆっくりと首を横に振る。

これは俺が言わなければいけないこと。恒例の儀式。

「それは、俺が人間ですらないからだ」

ルリは顔を上げる。

涙でぼろぼろの顔。

「ときが魔族だって構わない!!」

俺は首を横に振る。

「魔族じゃない」

リルが首をひねる。

「何で、十二天将や神が俺の言うことを素直に聞くかわかるか？」

「それは、ときが降ろしたから……」

「無理なんだよ。十二天将以外の神は人間なんてどうでもいいと思ってる。降ろすことなんて不可能」

それは無理。

守護者としての、十二天将以外は人なんて死のうが何しようが関係がない。

「なんで？」

「“アレ”がなぜ俺に頭を垂れるかわかるか？」

俺は視線を窓の外に移す。

「え……え？」

窓の外には、この世界に存在するすべての神々、空を埋め尽くす神々。呪力を抑えているが、それでも圧倒的な存在感。

「……ときがああ神々よりえらいから？」

「それも間違いじゃないけどさ……」

俺が一息つくと、太陰が観覧車の中を小鳥になって飛びまわる。

『間違い間違いだって、偉いなんてレベルじゃないわよ？ 神々が逆らえるような奴じゃないのよ』

「太陰、何か知ってるの？」

リルは太陰に聞く、

『ええ、知らないのなんて人間くらいじゃないかしら？ 全く、失礼よねー？ 自分たちの産みの親忘れるなんて？』

リルは困惑の表情を浮かべる。

『あー、だからー。人間や魔族、神々、と言うよりこの地球を創ったのがトキなのよ。神々程度が逆らえるはずないでしょ？』

太陰の言葉に、二人が驚愕に目を見開く。

「嘘よ！！ ときは！ ときはアタシ達と一緒に暮らしてたじゃない！！」

『それは驚きよね？ それにはアタシも同意』

「それに、ときはそんなに強くないわよ！？ 神にだってやられちゃつわよー！」

それは少し傷つく……。

『何言ってるのよ主。トキがやろうと思えば太陽系だって一瞬で消滅よ。もともと自分で創ったんだから』

太陰の言葉に、リルが俺に顔を向ける。  
静かに頷いてやる。

その瞬間ぼろぼろと涙があふれ出る。

「ときは……、ときは……。神なんかじゃない……。アタシ達とずっと一緒に暮らすんだから……」

ダメだな……。

「太陰、神々に伝える。今から地球を創造し直す。今後の生命の成長は任せるってな」

『はいはい、創造神様』

太陰は観覧車の壁をすり抜け、飛んで行く。

「さて、リルとルリ行こうか？」

俺は二人を抱きしめる。

「ズン……へ？」

俺は天井を指さす。



「宇宙へ」

次の瞬間、俺達はその場から消え去った。

太陽系

俺達は真つ暗な空間に浮かんでいた。地上からは星と言われる石が多数見える。

ふわふわと浮いている。

「ときさん、ここは？」

俺は一点を指さす。

そこにあるのは、変わり果てた茶色い惑星。

「地球？」

「ああ」

「でも、息が出来るわよ？」

「俺が出来るようにしたから」

俺は簡潔に説明する。

「ときは……、神様なの？」

「ああ」

こんなところでごまかしてもな……。

「地球をあんな姿にしたのは俺だからな。今のままじゃ、生物なんて数万年は住めないだろう。自分で創った星をあんなにしてしまった。お前達は知らないかもしれないけどな。地球はキレイなんだよ」

今の人間は知らない。  
かつて、青い星と呼ばれていた地球を。

「嫌いになっただろ？ あんな星にして、お前達の両親を奪ったのも俺だ」

二人は大きく首を横に振る。

「なるわけないわ！ 過去なんてどうでもいいの！ アタシはトキと今一緒に居たいの！！」

ふむ……。

「でもな、俺はたくさん星を創ってきたんだよ。同じ様な星がたくさんある。俺はそれをキレイにする旅をしているんだ」

そこで、言葉を切り、

『ハク、今の俺でも修正くらいなら出来るよな？』

『はい。数百年くらい眠れば魔力は全開ですね』

それなら問題ない。

「今から、地球を作りなおす。俺の旅にどういう意味があるか、お前らに見てもらおう」

俺は創造を開始する。

通常時のデータを元に。

汚染された大気、地面を正常に戻す。

そして、海を張る。美しい青い星になるように。自然を戻す。これで、生存は可能。

さらに、絶滅してしまった生物を創りだす。

たった四行程で元の姿に戻る地球。  
青く美しい星。

「これが、俺が創った星、地球。美しいこの姿を、人間にもっと見てほしかったよ。俺が来るのが遅れて見れない人も大勢いただろうな」

俺は二人に向きなおる。

「「……きれい」」

二人は、自分たちの星をじっと見つめていた。そして、涙を流していた。

この涙に何の意味があるのか、俺にはわからない。

それでも、悲しい涙ではないと思いたい。

「ねえ……」

不意に、リルが呟いた。

「ん？」

「ときは、こうやって星や生物を救ってるの？」

「ああ」

うーん、初めてなんだけどな。

「もし、アタシのわがままで、ときをこの星に繋ぎとめちゃったらどれくらいの生物が死ぬんだろう」

「さあ」

正直俺に何が出来るかもわからない。

今回だって、魔族と魔物の命は俺が奪っちゃったし。

「とき、行っていいよ？」

いきなりリルにそんな事を言われた。

「そして、すべてが終わったら戻ってきて。あたし、待ってるから。ずっとずっと、死ぬまで結婚もHもしないで、ときのために待ってるから」

俺を見ず、地球を見つめながらそう言った。

「結婚するかはわからないけどな。俺には時間なんてあってもなくても一緒だから。戻ろうと思えば別れた時間にだって戻れる。寿命もないし」

俺がそう言うと、リルは俺の方を向いた。涙を流しながら、コチラを見上げた。

「でも……、ファーストキスは今もらって」

リルは俺を見つめ、目をつむった。

その唇に、俺はやさしく自分の唇を重ねる。

「んっ……」

普通のキス。

そう言えば、コイツにはキスも初めてだったな。

いつもは舌まですぐやっちゃうのに。

別に、コイツらが大切じゃないわけではなく。そんな事をしなくても楽しかったのだ。いろいろ大変な性格だったけど、俺は幸せだった。

数分に及ぶキス。

リルの唇は、すこししょっぱかった。

リルの悲しみを表しているようで、俺の心を締め付ける。

そして、ゆっくりと離す。

リルは真っ赤になっていたが、ほほ笑んでいた。

「ときさーん、アタシもお願いします」

リルがせがむ。

「はいはい」

俺はリリにもキスをしてやる。

リリはケチャップの味。

ホットドックだ。

なんだか笑いがこみあげてくる。

唇を離す、離す瞬間、一瞬舌を入れられた。

「リルちゃんの後だから、ときさんの唾液もーらい！」

なんか勝ち誇ってる。

リルはぶるぶると震えている。

「んっ!?!」

リルが思いつきり唇を押し付けてきた。

下手すぎる！ 歯が当たってマジ痛かった！

そのまま俺に舌を絡め、離れて行った。

「ふふん！」

「むー」

めちゃくちゃ勝ち誇ってる！？

「ストップ、これ以上はどんどんエスカレートするからな」

展開が見えすぎて嫌だ。

「とき……戻ってきたら、あ、あたしが最初にHするから！」

真っ赤になりながら何叫んでんだ！ 宇宙だから誰もいないけど

さ！

「次アタシで〜」

ルリが二番らしい……。

「ときの童貞はアタシがもらう」

すごい胸を張ってるぞ？

「てか、よく俺が童貞だってわかったな……」

俺が言葉を発すると、二人は眼を見開き、俺に詰め寄る。

「ほ、本当だったの！？ 適当に言ったただけだけど！？」

「ときさん神様なのに童貞ですか！？ 何歳ですか！？」



はめられた……。

「神とか関係ないだろ？ 年齢は16歳超えたあたりから数えてない。一億歳+ くらいかな」

「い、一億！？ でも、ときの初めてとアタシの初めてで交換」  
「ずるいです！ それを知ってればアタシだって初めてがいいです  
「！」

とりあえず、交換じゃなくて、両方とも損失だからな？  
てか、二人に童貞やるなんて言っていない。

「はぁ……、その時に二人が元気にしてたら+俺が童貞損失してなかったら考えてやるよ」

考えるだけだけど……。

「絶対にもらうわ！ 毎日お風呂に入らないと！」

「アタシがもらいます！」

てか、人間との子供でも絶対に神が生まれるよな……。半神だつて、普通の神より強くなるし。

さて、

「じゃ、約束通り下着よこせ」

俺の言葉に二人が目を見開く。

「とき、アタシその約束した覚えがないわ？」

「アタシもないですね……」

うん。俺もない。

「まあ、いいからいいから。コレやるから」

俺はレン製下着を創り出し、宙に浮かべる。

「ときが脱がせて」

「アタシもです」

二人は両手を広げ、抵抗しませんって感じだ。  
てか、羞恥心持てよ？

まあ、とりあえず脱がしてゆく。

何か顔が真っ赤だぞ……？

「お前らさ、裸とかあんま他人に見せるなよ？」

心配すぎるわ。

「み、見せないわよ！　ときにだけよ！」

「軽く見ないでください！」

そんな全裸で言われても全然説得力無い。  
って言っても、俺が脱がしたが。

「てかりルは濡れて……」

「それ以上は禁句よ！！ 死ぬほど好きな人とキスしたんだからそうなるわ！」

どこに自信持ってただよ！？

さて、

「俺はそろそろ行くかな」

二人の顔が一気に暗くなる。

「ときさん、最後に写真撮りませんか？」

ルリがそんな事を言ってきた。

ふむ。

俺は球体を創り出し、浮かべる。

「じゃ、アレカメラだからおいで、二人とも。地球をバックにでも撮ろうか？ 普通出来ないからな？ こんなこと」

二人が俺に抱きついて来て、両側から頬にキスをした。

カシャ

すぐに三枚の写真が球体から出てくる。

二人が笑顔で俺にキスをしている写真。  
なぜか全裸と言う。実際全裸だが。

それを二人に渡してやる。

「結構よく撮れてるな？」

二人を見るが、球体をいまだに見ている。

「ときさん、アレなんか膨れてませんか？」

球体は一メートル程になっていた。

突如、弾け。

中から大量の写真がはじけだす。

「あー、多分。お前らの一番思い出に残った脳内記録まで写真にしちゃったのかも知れん」

俺の記憶は覗けないし。

てか、お前ら何で青ざめてんだよ？

すごいいきおいで写真を回収している。

俺の手元に一枚の写真が、それを見、

「おい？俺には全く記憶がない写真なんだが？」

裸の俺と、裸の双子が抱き合っている。俺は寝ているようだ。

更に一枚手に取る。

何か俺のアレで遊んでる双子……。

更に、……。

「おい、お前らこれいつした？」

二人が視線をそらす。

俺は二人の胸を掴む。

「こ・れ・は？」

揉みしだきながら聞いてみる。

「あふっ……、んっ。それはときが……寝てる時に」

更に一枚、リルが俺の手を自分の胸に持って行ってる……。

コイツら全然知識ないと思ってたら色々やってたー!!!?

「最後まではやってないよな？」

「はい、それはときさんの同意がないと意味がありませんので」

よくわからない理屈だった。

てか、俺の血吸ってるリルとかあるんだが……。

俺も何枚かもらっついこつと。

「ま、お前らが俺の体にやった仕打ちを忘れないようにそれ持ってけ」

二人は真っ赤になって頷いている。

「ときの裸写真げつと……」

「ふふ、これで……」

何か呟いてたけど聞かなかったことにしよう。

『パチン』

二人に服を着せた。

「そろそろかな」

俺の言葉に、二人は写真を抱きしめ向きなおる。

「とき、絶対戻ってきてね。戻ってこなかったらアタシ達は子供も作れないし、一生処女で死ぬんだから！」

「戻ってきてください、結婚はおろか恋人も作りません。と、言うか、誰にも触らせません！」

触れることも許されないのか……。

「またな、俺にとっては数億年、数兆年後にまた会おう。お前らにとってはすぐだな」

二人は笑顔になり。

「「また！」」

元気よく言った。  
満面の笑顔で。

「よく泣かないで送りだしてくれたな。ありがたいよ」

「当たり前です！　ときさんの妻ですから！」  
「ときの初体験の相手よ！　それくらい余裕よ！」

俺は軽く笑い、二人を転移させた。

「つたく。勝手に未来予想図立てて。」

「気づかない振りしてやってたけど、普通に泣いてたぞお前ら。」

「ま、それはお互い様か。」

俺は頬に手をあてる。

「べちよりと水滴が付く。ま、屈折率変えてたからアイツらは気付かなかつたけど。」

俺は地球を振り返り、

「またな、俺の創った地球よ。また会おう」

そして、狭間へと転移する。

## 八四話 第四の世界からの旅立ち（後書き）

最後はいつもどおりおふざけ。

見て驚け！ コレが今回の起承転結予定表だ！

実技授業  
武器に

実技授業  
魔物討伐

討伐実技テスト  
生徒会へ

式神儀式

学園総会  
トップを決める決闘

リルの秘密。  
ルリの秘密。

特訓 酉を宿す。

リルの  
策略で勝。



魔族討伐

最後は蓮華が決める。

二人とデート。

告白、断る。

出なければいけないことを言う。

お別れ。

(´・`・´)

修正なし。

プロットでしかないようなのしか書いてません……。  
そんな才能ないからいいんだ！

しかも何かところどころ変わったたりしてる。

## 八五話 第五の世界（前書き）

一応、原作をやっている人でもわかるような内容にしますが、わからないところがあったら言ってください。なおします。

## 八五話 第五の世界

狭間・2000年目

いつもの狭間に、俺達は漂っている。

まず、魔力回復に数百年。更に吸血鬼用の身体強化による身体の修復で二千年程だった。

もう、年齢とかはよくわからない。今度から一億ってことにしておこう。

レンは既にサイズが一キロを超え、龍に戻ったらなんだかよく分からない存在だ。

「ご主人さまー、では今回の世界のおさらいです」

現在、ハクの授業中。

「まず、一番の目的は水のページ回収。二番目に武器データを世界からの徴収。おまけとしてご主人さまの攻撃手段の増加」

「じゃ、まず一番から順番に説明頼む」

俺の言葉に、ハクは一度コクリとうなずく。

「はい。まず、この世界には聖杯と言うものがあります。その中に水のページが入り込んでますね。てかぶっちゃけご主人さまはゲムやったことありますか？」

F a t e だよな？

「あるぞ？ 確か茶色い髪の子が主人公の」

「……」

黙り込んでしまったハク。

あれ？

「ご主人さま。何分くらいやりました？」

「20分くらい？」

「じゃあ違いますよ！ それはプロローグだけです！ なんで最後までやらないんですか!？」

いや……、プロローグを見て先は想像するって言う俺の楽しみ方が……。

俺の予想だと、あの女の子は赤い男と十八禁の関係になったね。

「はあ……、もういいです。で、聖杯ですけど、七人のサーヴァントって言う、まあ使い魔ですね。闘わせて最後に残ったサーヴァントの主に与えられます。願いが一つ叶うとか。6人のサーヴァントの魂を聖杯の中身にするんですよ。だから、勝ち残らないと現われません」

ふむ。なら、勝った奴の横からかつさらって……。

「心の声も聞こえますからね？ 普通に勝っちゃってくださいよね。って言っても、サーヴァントと呼ばれるのは英霊ですからね。神話とか伝承とかに出てくる奴です。実在しようと架空だろうと、知名度が高い英雄が英霊になります。これは、守護者の選任を星の意思にさせたらこうなりました。意思とか創っちゃうあたり面白いですよねー」

けらけら笑っているが、全然面白くない。

そんなの奴隷製造星じゃねーか……。

「って事ですね、ご主人さまはサーヴァントになれません！ 英雄なんてご主人さまの100万倍くらい格下です。なわけです、干渉しちゃいましょう。どっかの英雄の代わりにご主人さまを入れちゃうわけです。物語ぶっ壊せってことですね。どうせご主人さまが創った世界ですから壊しても文句言われませんかから」

文句は言わないだろうが、もしゲームをやってる奴が俺のことを

見たらぶち殺される。

「ま、どこに入るかはわかりませんが。あ、あと、出来るだけ魔法以外で倒しましょう。時間と空間がある星の為の練習になります。十中八九ご主人さまはすぐ殺されるんで、最初は倍率上げましょう」

俺の方が100万倍くらい格上なのにすぐ殺されるとは……。

「ご主人さまの本質は世界創造なんですから、身体能力で勝てませんよ。で、二番目ですが、これは世界に入った瞬間世界構造丸ごとつてきちゃいます。過去から未来まで全部。私が勝手にやって、ご主人さまの世界にでも形として創造しておきます。魔力と力使っていていいですか？」

「ああ、別に好きに使っていいぞ。全部なくなるとかないよな？」

「ええ、名剣から神が使うようなの全部創っても一割程度しか減りませんよ。あとですね、英雄は宝具つての使っらしいんですが、所持者しか真名解放出来ないみたいなんですよね」

「ってことは、俺は使えないってことか」

「いえ、もともとご主人さまの世界ですから、ご主人さまの物でもあります。全部出来ますね。そうじゃなくてですね、結構厄介ですから、武器情報見て嫌だったらご主人さまをルールから外しちゃってください。死んじやいますから」

でも、武器自体に力があるなら時間と空間のページでも使えそうだからいいな。前みたいのкориゴリだし。

「で、三つ目ですが、ご主人さまは武器の扱いがダメですからね、色々英雄って言う人たちの戦い方を学んで参考にしましょう。ご主人さまに合った戦い方の英雄とかいるかもしれませんし」

まあ、学べるなら学びたい。今の俺は魔法に頼らないと糞だし。魔法なしだと、深層世界から物を取りだすくらいしか出来ない。

「最後に、一番大事なんですけど、あまりお人よしにならないでください」

何を言っているんだハクは。俺は独善で、唯我独尊だぞ？ 気分でしか人助けなんてしない。

「この世界は歪なんです。色々おかしなルールとか付加されてまして、もし全部救うなら世界から魔力全部消し去っちゃってください。一生世界渡れなくなっちゃいますから」

「そんなに酷いのか？ 出来るだけ世界には干渉したくないんだが。その世界の生態系とか狂うし」

「ええ、この世界は魔法が廃れて魔術になり下がってしまったので、それを用いる代償を世界に支払っているんですよ。魂とか精神とか、自分の体とか。魔術の世界では人の価値が薄くなってますね。くれぐれも、魔法を与えないでくださいね？ ご主人さまの力はこの世界の『根源の渦』そのものです。と言うか、ご主人さまが根源ですね。多分、ご主人さまの力が広く漏れちゃうと、ホルマリン漬けとかされます。だって、世界だって創造出来ちゃうんですから」

すごく行きたくなくなってきた……。ホルマリン漬けって……。

「あと、ご主人さまは女難の相が常に出ますから、女性には近づかない方がいいです。この世界だと、強い力を持った子供が欲しくて子供産まされちゃいますよ？ ご主人さまの子供なんて、どう転んでも普通の星の最高神越えますし」

うあー、もう最悪すぎる……。

「ついでに魔法無効ルール付けときましよう。変な術式とかつけられたらたまったものじゃありません。もちろん、召喚の契約は抜いてくださいね？」

学園都市でのローラの例があるからな……。俺を洗脳するなんて出来るとは思わないが、もしものためだし。

「あ、あと。私から課題出していいですか？」

いきなりそんな事を言われた。

コイツがそんな事を言うと、不安だ。

「一つでいいので、ご主人さまの宝具を完成させてください。もちろん、どの宝具よりも強い奴です。もともと、宝具なんておもちゃなんですから、ご主人さまが創るとした、宇宙一つくらい壊せるのがいいですね」

ふむー……、とりあえず降りて、色々見てからイメージを固めるかな。

専用武器も必要だと思ってたしな。

「じゃー、降りますよー？ がんばって男の召喚主に着きましょう」



！ 多分無理ですけどね！」

どんな自身だよ！？ ランダムだろ！？ って言っても、俺も無理だと思う。絶対ややこしいことになりそうだ。

俺はルールを変更し、地球に転移した。

まず、世界データからの場所の特定で、冬木市と言う場所に降りた。

最初の地球にはない市名だな。

時刻は夜。深夜近い。で、現在置は橋の上。

俺の前には女の子が二人倒れていた……。

「おい、大丈夫か？」

とりあえず声をかけてみた。女の子はゆっくりとコチヲを向き。

「ま……、まりよく……」

ふむ。魔力切れで倒れたか。ラインが繋がってるし、たぶん俺を召喚して、魔力を注いだせいでこうなっただって感じだな。

ま、俺にとつての微量でも普通の神にとつたらぶっ倒れるくらいだ。

えーっと、契約は、簡易契約か。これならいつか。すぐ剥がせるし。

『Die Inversion des Vertrages』

《契約の反転》

俺と二人の体が薄く光、主従を反転させる。

俺は腕を噛み切り、二人の口にぼたぼたと血を垂らす。

「ほら飲め。俺の血だから魔力くらいすぐいっぱいになるだろ？」

二人はゆっくりと、それから激しく飲み下してゆく。

ガバッと立ち上がる。

「おいしい！！ 駄メデューサの数倍おいしいわ！」

「美味ですね。奴隷として召喚した甲斐がありました」

うん。そのために瀕死になったのかコイツら。

「悪いが、お前らと俺じゃ神格が違いすぎるぞステンノとエウリュアレ」

二人は眼を見開く。名前がわかったことに驚いているのだろうか？ 世界データからパクってきたただけだが。

ゴルゴン三姉妹。

長女ステンノ。

優雅な仕草、溢れる気品、思慮深い言動。

理想の女性と言われる女神。

彼女に名前を呼ばただけで、男性はあまりの喜びに我を失い、忠誠を誓うといわれている。

次女エウリュアレ。

屈託のない仕草、こぼれるほどの笑顔、無垢な言動。

理想の少女と言われる女神。

彼女に名前を呼ばれただけで、名誉に体を震わせ、命を賭した守護を約束するといわれている。

両方が男性の憧れが具現化した神で不老不死。

この世でもっとも弱く、闘う力がなく、一人では飢えてしまい、誰かの力を借りなければ生きられない永遠の少女。

「なんだが……、俺にはわかるぞ？ 絶対コイツらSだ。俺のこと奴隷召喚とか言ってたし。」

「しかも、純白系ゴスロリデュオだ。てか、見た目似すぎ……。ルリルル並に似てるし。」

紫の髪の毛のツイテール、足元まで髪が伸びている。

瞳は俺と同じで金色、神と最初にわかったのはその為だ。

服は白いゴスロリ服だ。

身長だって140ちょいしかないし、胸だってBくらいしかない。

これが男の理想ならガツカリだ。

ちなみに、丁寧な喋り方が姉のステッノ。

子供っぽいのが次女エウリュアレ。

「で、驚いているところ悪いが、契約を反転させてもらった。別に俺が奴隷でもいいが、そしたらお前ら死ぬぞ？ それでもいいか？」

俺は肩をすくめながら聞いてやる。もしこれで、それでいいって言ったら契約をもう一度反転する。ただし、5分ほどでこの二人は死ぬだろう。

「それは嫌ね……」

「なんて酷い神でしょうか」

ひどいのはお前らだからな？

「てかさ、何で神がサーヴァント召喚してるの？　そして、何故お前ら降りてきてんだよ」

これ人間が召喚するんじゃないやなかったか……？

「私と私はお世話する人がいなくなつたからよ？」

「それよりも、何故貴方のような神が降りてきてるんでしょうか？」

つまり、お世話されないと死ぬから、誰かお世話する奴を呼ぼうとしたつてことか。

私と私つてのはステンノとエウリュアレのことだよな……、わかりにく！

「よく今まで生きてたな？　ちなみに、俺は面白そうなおことがありそうだから来た？」

適当に言ってみた。

「駄メデューサが召喚されちゃつたのよ。私と私以外に仕えるなんてホント駄目な妹だわ」

「面白そうなおことが起きるなら私もついていきたいですね」

気分やだな。てか、守護者は魂を拘束されて、サーヴァントは普通本体じゃなく、分身が行くんたる？　それでも、我慢できないつて……。

「てか、お前ら今俺の奴隷状態だぞ？ ほら」

二人に俺の両手を見せてやる。そこには、令呪が刻印されている。サーヴァントを律する為の命令権が三つ刻印されている。って言うても、俺の場合すぐ剥がせるが。

二人は抱き合い、

「ああ、なんて不幸でしょう。これはメデューサにお仕置きしないといけませんわ」

「ええ、駄メデューサを躡けるしかないわ！」

全然怖がってなさそうだ。

「やはり私と私は男性の憧れですね。ここで無残に蹂躪されてしまおうでしょう」

「仕方ないわ、こんなに美しいんだもの」

……何こいつら？ 確かに、女神だけあってキレイだけどさ、普通に子供だぞ？

「うん。お前らみたいな口リには興味もないから今すぐ契約を破棄してやるう。さっさと形なき島に帰れ！」

俺は上空を指さし、言いきった。

「いえいえ、私と私はもう少し楽しんでから帰ります。せつかく来ましたし」

「駄メデューサを殺すわ、あはは。だって、いつも私を見下してるんだもの」

それは、お前らが小さすぎて必然的に見下ろしてるんだろ？

「てか、殺すのか？」

「そうよ！ それで、帰らせるの。帰ったら黙よ！」

分身だからな、殺しても世界から消えるだけ。本体は残る。

「ふーん、で。お前ら契約切ってやるけどどうする？」

俺が言つと、二人はじつとコチラを見つめ、

「そのままでもいいわよ。と言つか、私と私なら貴方を従えられないかしら？」

ふむ、エウリュアレはどんな勘違いをしているんだろうか？

「お前達、俺がどんな神が知ってる？」

二人は首を傾げる。

「神でしょ？ それ以外に興味ないわ」

姉のステンノが言う。

「うーん、従えられると言うならそれでもいいけど……」

俺は魔力に形をつけず、軽く放出し、いままで抑えていたものを二人にぶつける。

つて！ 10メートル近く吹き飛んだ！？  
かなり力上がってるぞ……。  
二人は息が出来ず瀕死状態だ、すぐに解除して駆け寄る。

「あー、すまんみすった。てかお前ら弱すぎだろ？ なんとなくわかると思うけどさ、この星創った神だ。お前らにしたら父親みたいなものだな」

俺が言っていると、二人は眼を見開き、すぐにニヤリと笑った。

いきなり、俺に抱きついて来て、

「パパ、エウリュアレパパの血が飲みたい」

「お父様、私もお父様の血が飲みたいです」

うん。超コワイ。演技うまいし……。しかも、内側でエルが、お父様ってステンノが言ったことに怒ってるし。

「別にいいが、お前ら血呑みすぎると破裂するぞ？ 俺の血の魔力純度が濃すぎて力の弱い神や人間が飲んだら死ぬし」

これは事実。リルが飲んでも平気なのは、即座に太陰が呪力を奪い取っていたからだ。普通の人間なら一滴ですらキツイ。

「な、なんて生殺しなのかしら！」

「あんなに美味しいのに飲めないなんて酷いですね……」

ふむ……。でも、さっき俺が魔力ぶつけたせいで結構傷負ってるしな。切り傷が……。



「ちょっと、お前ら傷ついた腕出せ」

二人は素直に腕を出してくれる。真っ白な肌から、血が出ている。俺が軽く舐めてやると、すーっと傷が消えてゆく。

「よし、あまり女の子が傷負うなよ？ コレは俺のせいだったが」

あれ？　なんで真っ赤になってるんだ？

『ご主人さま！だからアレほど女の子に近づくなと。ご主人さまの力が上がってるんですよ。見てください。唾液がすぐに体に入り込みましたよね？　あんまりやりすぎると、依存度がめきめきと上がってゆきます。呪いに近いんですからね？　神ですらコレですから、人間にあまりキスとかするのはお勧めしません』

ページは一応揃うまであと一種類。魔力もそうだけど、掌握能力まで上がってるのか……、最近瞳の制御もキツくなってきてるんだよね……、どンドン人間から遠ざかる。

「ああ、触れられるのも許さなかった私の肌が……」  
「もうダメですね。これは娶ってもらうしか」

そんな上目づかいで見るな……、肌舐めたくらいで結婚させられたらたまらない。

「とりあえず、俺がマスターになっても意味ないんだよ。もう一回ルール変えて介入しないと。どうせ、俺もお前らも霊体じゃないから聖杯には……」

あれ？ そう言えば俺霊体じゃないぞ？ 聖杯が6つのサーヴァントの魂を生贄に完成するなら、実体の俺は入れないぞ？ まあいつか。死んだらどうせ意味ないし。最悪俺が、無理やり器に力流し込めば完成する。

そもそも、多分俺は理から外れている。ってことは、マスター8人。サーヴァントなぜか9人。霊体は6人とか言うわけ分からない状態になるぞ……。

霊体が6人ってのはいいけどマスターは7人がいいよな……、一人無駄だし。

やっぱ、俺が召喚されないとまずいよな。次の召喚の奴に介入と。

「で、お前ら俺についてくるの？」

二人に聞いてみる。

「そうね、メデューサが戻るまではいるわ」

「私も面白そうだからついて行きます」

じゃ、二人を俺として認識させるかな。これで、三人が一気に召喚される。サーヴァントとして召喚されるのは俺だけ。ちなみに二人は、俺と簡易契約ってことになっている。すぐにも解除可能だから渡るときは解除。

「てかさ、俺をどうやって召喚した？」

魔方陣なんてどこにもない。それで俺を召喚出来るとか、まじ俺しよぼくね？

「コレね」

エウリュアレが取りだしたのは白いパンツだった……。

「あとコレ」

ステンノが取りだしたのはブラジャー……。  
確か、召喚って呼びだす者のゆかりの品が必要とか……。

下着、双子っぽい見た目、神、幼女、ツインテール。

俺にゆかり……。

なんか一気にちっぽけに思えてきた。

俺が地面に膝をついていると、地面に赤い魔方陣が浮かび上がった。

「あ、二人ともちょっとこっちこい」

俺は近寄ってきた二人を抱きしめた。下手したら違う場所に飛ばされるからな。二人が赤くなってたが知らない。

俺達はその場から消え去った。

工房？

俺達が召喚されたのは、石で出来た工房みたいなところだった。  
気味の悪い彫像や、本が積まれている。足元には、赤い六芒星の  
周りに円、その中に文字が描かれている魔方陣。

そして、目の前には黒髪の倒れた少女……。

またかよ。

俺はため息を溢した。

八五話 第五の世界（後書き）

F a t e 編突入。

予定は20話。

## 八六話 サークヴァント不可？（前書き）

説明編。

別に能力は出した意味ありません。  
普通に、ページ以外は修行にきたようなものですから。

## 八六話 サーヴァント不可？

### 工房

召喚されたのはいいが……。

この倒れてる少女は誰だろうか？

黒髪エッセインテール？ ツイテンテールっぽいけど、後ろの髪も下に流れていて、背中辺りまである。ウェーブもかかっているな。顔は倒れていて見えないけど……。

「うん、知らない奴に召喚されたな」

俺が頷きながら言ってみると、

『違うでしょ！？ ご主人さまが言った主人公ですよ！？』

『いやいや、アレは茶色かったぞ？ 後、高校生なのに見た目が6歳くらいだった』

『どんな勘違いしてるんですか！？ それエンター連打しましたよね！？』

いや、だってプロローグって普通結構飛ばさない？  
プロローグ長くてやめちゃったけど……。

『それは過去の夢ですよ！ 何言ってるんですか！？』

『でも黒髪じゃないぞ？』

『影付けるためにベース色は変えるんですって！ 現実だと黒髪なんです！』

なんて、理不尽なんだゲーム！

『ま、それよりですね見てください』

俺は倒れている女の子に視線を移す。

「ふむ、生命反応なし。ご愁傷様です」

俺は手を前で合わせた。

「死んでるわ」

「お亡くなりになりました」

ステンノとエウリュアレが言う。

「死体に召喚されたのか……」

『違いますよ！！ ご主人さまに魔力全部取られて死んだんです！  
戻してあげてください！ マスターキーリング刻です！』



うーん、だが、人間だから血飲ませるわけにはいかないし……。まず、魔力供給を遮断。あと、注がないと。

「ステンノとエウリユアレなんか方法ない？」

俺よりもコイツらのほうが魔力の受け渡しには向いている。俺がやったら破裂するかもしれん。

「ありますわ、血がダメなら薄めた体液を飲ませればいいのです」

「じゃ、やってく」

「私と私はやらないわよ？ 何故、人間如きに私のキレイな血を捧げなければいけないのよ？」

「……」

神様至上主義の少女たちだった。

仕方がない、薄れたつてのは、唾液かな。純度だと、精液>血液>唾液だし。今思ったら俺人間とやったら相手破裂するかも……。体作り変えてからじゃないと出来ないとか。

とりあえず、俺は女の子を仰向けにする。

少し釣り目のキレイな少女だった。

身長160ぎりぎりないのかな？ 胸はこだな。てか、華奢だからカップだけが上がってる感じ。

口をこじ開け、自分の唇を押しつけ、唾液を流し込む。

別にただ、流しこむだけ。舌なんて入れない。てか、死体に入れたくない！

「パパ」

後ろでエウリュアレが何やら……、振り向くと、二人は仰向けに倒れていた。

「……何してんの？」

「お父様、魔力が足りなくて死にそうです」

そんな血行のよさそうな顔して何言ってるんだコイツら？　そもそも、俺が魔力供給してるし。

適当にキスして流しこんでやる。

「唾液もおいしいわね」

舌舐めずりをしながらエウリュアレが言ってきた。

「これなら、お肉もおいしいでしょうね」

黙れステンノ！　これだから神嫌は！　普通に血とか吸つもん！  
吸血鬼のほうがマシだ！

「ん……」

お？　後ろで声がした。振り向くと、少し寝ぼけた目でコチラを見ている女の子。

「…アンタ達……なに？」

第一声がそれだった。

そして、視線が俺の腕に移動し、

「令呪！？ マスターが此処に入り込むなんて!？」

「ずざつと後ろに飛びずさつた。一人コントか？」

「いや、お前が俺を召喚したんだろ？ マスターお前じゃん？」

「ポカンとした顔をして『そうだったわ』とか言っている。

「コホン、確認するけど、貴方達はわたしのサーヴァントで間違いない？」

「いやいや、三人は無理だろ？」

「俺はそうだけど、後ろの二人はついてきただけ。俺が面倒みるから気にするな」

「肩をすくめて言ってるやろ。」

「それは仕方ないのかもね、儀式失敗したのはわたしのせいかもしれないし……」

「あれ？ 俺失敗されて召喚された？ なんか二人の時もそうだったけど、俺ちっぽけすぎるだろ？」

「にしても、貴方実体よね？ 魔力もほとんどないし……。人間？」

「実態ってのはそうだが、魔力は抑えているから見えないし。」

「ふむー、なら契約剥がすか？ もう一回呼び出せばいいだろ？」

俺は違うやつに召喚されればいいし」

俺は少女に近づき、令呪を引き剥がす。神経に繋がっていたので  
改変しながら。

少女を見上げると、なんか涙目になっていた……。もう一度戻し  
てやった。

「はぁー……、君がマスターだよ」

手を振りながら言ってやる。

「何で貴方そんなこと出来るのよ？ 令呪を剥がせるサーヴァント  
なんて聞いたこともないわ。どこの英霊？」

あれ？ でも、武器データに解除出来る武器あるぞ？

「どこの英霊って……、内緒？」

そんな拗ねるな。英霊ですらないし。

「クラスは？」

「1-C組」

なんか少女がぶるぶると震えだした。

「トイレか？ 漏らす前に行って来い。俺は失禁には飽き飽きだ」

手を振りながら言ってやった。

「あああああ！ あったまきた！ そんなに隠すなら言わせてやるわ！」

何を痼癢起こしているんだが。

『 Anfang……！ 』

ん？ ラインが…。

「バカッ！ やめろお前！」

「バカはどつちよ！ 全部喋らせてあげるわ！ Vertrangen  
Ein neuer Nagel Ein neues Ges  
etz Ein neues Verbrechen ! 《令  
呪に告げる 聖杯の規則に従い、この者、我がサーヴァントに 戒  
めの法を重ね給え》」

少女の右手に刻まれた刻印が光、消えた。

そして、少女は崩れ落ちるが、途中で俺が支える。

「はぁ……、令呪って三回しか命令出来ないんだろ？ こんなところ  
で使うなよ」

少女の右手の令呪が一つ消えた。

「ふふふ、これで貴方は……、アレ？」

目がうつろになってきた。

俺はもう一度キスをし、唾液を流し込む。

「なっ!？」

「いいから飲め。飲まないと死ぬぞお前？」

少女は真っ赤になりながらも、こくこくと飲み下してゆく。

「おいしい……って、何言ってるのよわたし！」

もうその反応にも飽きたよ。

とりあえず、地面に座らせてやる。

「あのなあ、俺は君からの魔力供給を切ってあったんだよ。それで令呪なんて使ったら俺に魔力が流れてきちまうだろ？俺の魔力量が大すぎて、お前の魔力全部奪っちゃうから令呪禁止。死ぬぞ？」

途端に少女は青ざめた……。

「それじゃ……、わたしは……」

いきなり頭を下げてきた。

「お願い！どうしても勝ちたいの！手伝って」

どうしたんだろう？

「お前は俺のマスターだろうが？手伝うに決まってるだろ？」

「え？だって令呪の意味ないのよね？サーヴァントは令呪があるから言うことを聞くけど、無くなったらマスターが殺されるんじゃない……」

そんな心配してたのか……。

「別に殺さない。令呪なんてあってもなくてもどっちでもいいし。そついや、お前は聖杯に何を願うんだ？」

人類皆殺しとかだったら此処で殺しちゃうかもしれんが。

「え？　ないわよ？　勝ちたいだけだし」

キョトンとしたそんな言い草に、俺は啞然とした。

願いがいいなんて……、聖杯は俺がもらうけど、願いなら叶えてやろうと思ったけど。

「く、ははは。うん、君は俺のマスターだよ。これ以上ふさわしいマスターはいないだろうな」

くすくすと笑いながら言ってやった。

少女は何故か真っ赤になってしまった。

「そ、それより！　なんでマスターって認めたのにクラスも真名も教えてくれないのよ!？」

真っ赤になって怒りだした。表情変化豊かだな。

「あー、すまん。別に隠してるわけじゃないんだ。ちよい、待って。調べるから」

少女は『?』って感じたが、

『ハク、ちょっと俺のデータ送ってくれ』

『はい、英霊としてのデータを右のポケットに入れておきますね』

ふむふむ、俺は右のポケットから一枚のカードを取りだす。タロットカードを一回り大きくした感じだ。

なになに……。

クラス      アーチャー

マスター      遠坂凜

真名      如月刻

性別      不明

身長・体重      176cm      57kg

属性      中立・善

筋力      C

耐久      C

敏捷      C

魔力      E X

幸運      E X

不幸      E X

宝具      ? ?

対魔力      E X      全ての魔術をキャンセル。

単独行動      E X      マスター不在でも行動できる能力。宝具の

真名解放可。

女難      E X      全ての女性と親しくなれるが、それに伴う

不幸が増す。

掌握の神眼      A      性別、生物、無機物を問わず、見るだけで



意思を掌握。

任意能力	A	惑星以外の全てを思うだけで操作可能。
神	EX	事実上全ての神の頂点。
全掌握	EX	全ての万象、心象、時空を掌握出来る。
無限創造	EX	宇宙すらも創造出来る。第六魔法に相当。

うん。性別が不明だし、不幸EX（測定不能）だし、女難が能力になってるし。

他のサーヴァント知らないけどさ、きっと反則的だと思うこれ。技能がありえない。

てか、弓なんて使えないぞ？

『ご主人さま、アーチャーって言うのは、ご主人さまが割り込んだポジションがそれだったんです』

名前だけじゃん。

「ちょっと、それに書いてあるの？」

少女、データによると、凜が俺の持つカードを見つめていた。だが、これは見せられないだろ……。

「ああ、で。俺のクラスだけどアーチャーっぽい。真名はどうせ知らないからアーチャーでいい」

俺の言葉にめちやくちやガツカリしてる……。

「そんなガツカリするなよ？ クラスなんて適当だろ？」

ガバつと顔を上げて身を乗りだし、

「適当じゃないわ！ いい？ まずクラスには7つあって、セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バースーカー。その中でも一番強いのがセイバーのクラスなの！ わたしはセイバーを召喚するためにあれだけ宝石を……」

うん、なんかお前には存在価値ないって言われてるみたいだ。

「悪かったな、セイバーじゃなくて」

俺はため息をつきながら言っちゃった。

「え？ あ、うん、そりゃあ痛恨のミスだから残念だけど、悪いのはわたしなんだから……」

謝ってるのか、けなしてるのかわからん。まあ、素直に謝る性格ってのはいいな。

「はあ……、もういいよ。ま、よろしくマスター」

俺は手を前に出す。

「ええ、よろしくアーチャー。わたしは遠坂凜よ」

そう言って、俺の手を握り返してくる。

「私はステノです」

「私はエウリュアレよ」

なぜか二人が左右から手を乗せてきた。部活の試合開始前見たいだ。

そんな二人を見て、凜は固まる。

「……………ゴルゴン三姉妹の？」

「「ええ」」

バッと俺の方見る。

「な、なんでアーチャー神を二人も使い魔にしてるのよ!？」

「ふむ。成り行き？ メデューサがサーヴァントとして召喚されて来たらしい」

凜は俺の言葉に、顎に手を当て考え始める。

「メデューサ……………、クラスは……………ライダーでしょうね。それがわかっただけでも大きな収穫よ？ やるわねアーチャー！」

そう言うてにこにここと笑う。

別に名前わかったから何だっていうんだらうか？ 名前が知りたければならサーヴァントシステムに介入してパクってくれば全部わかるけど……………、まあ、いつか。

「それより凜。俺は眠い。寝よう」

もう三時くらいだし……………。

「……………名前呼び捨てなのね。わたしも疲れたから寝ましようか？」

ベッドは一つしかないから……、ソファでいいかしら？」

「うん、やだ。俺は凜と同じベットで眠ることにしよう。ステンノもエウリュアレも一緒にいいよな？」

二人に振り向き、聞いてみる。

「はい」

「いいわよ」

凜に振り向き、

「な？」

「な、じゃないわよ！？ だって、貴方……どう考えてもわたしと年齢違うじゃないわよ！？」

真っ赤になって叫ぶ凜。

年齢は一億歳以上上だけど……。

「安心しろ、変なこととはしない。自意識過剰だ。お前は身長がでかすぎるし、胸も小さいし、可愛くない。以上」

これだけ魅力がないことを伝えれば俺が襲うなんて思わないだろう。

なんか、真っ赤になってプルプルと震えだした。

「わたしの身長は159よっ！？ む、胸だって人並みにはあるんだから！ かわいさはこれでも」

「はいはい、わかったから寝るぞ。サーヴァントの発言にいちいち

怒るな。だから、お前は毛が生えないんだよ」

「な、ななな！！？」

おかしいよな、日本人って毛深いはずなんだぜ？　なんで生えないんだよ？　まあ、適当に言ってみただけだけど。事実っぽいし。

結局、騒がしい凜を無理やり寝かせつけて寝ることにした。

現在は学校が終わって夜。

学校が終わってから、町を色々案内してもらった。

常にマスターを守るものとか言われたので、不可視+風の魔法で学校では背後霊になっていた。

普通のサーヴァントと違い、誰にも見えないし、感づかれない。

常についてことで、トイレまで一緒に入って不可視を解いてやつたら叫ばれた。

で、アーチャーってことで新都で一番高いビルの屋上に連れてこられた。

俺の目なら、見ようと思えば隣町だって余裕で見える。

ちなみに、ステンノとエウリュアレは金渡したら喜々として遊びに行った。

「どう？　ここなら見晴らしがいいでしょ、アーチャー」

「ああ、凜の下着は薄いピンク色だな」

バッと俺から飛びずさり、スカートを押さえた。

「別に不思議がることはないぞ？　俺がピンク以外全部捨てただけだし」

「って、アレあなたの仕業なの!？」

「アーチャーのクラスを舐めるなよ？　凜。俺にとってそれくらい

朝飯ま』ばき』ごぶっ」

普通に殴られた……、魔法なら耐えられるけど、耐久力半端なくないから俺。

「そんなのクラス関係ないでしょ！？ てか、アンタ本当にアーチヤーなの！？」

なんか存在否定されまくり……。

「ふ、見てろよ凜、ここからお前の家を打ち抜いてやるっ」

俺は黒くて大きな洋弓を取りだした。未来の武器らしいが知らん。そして、カラドボルグ？を創りだす。データはすべて徴収済み。剣自体が捻じれてドリルのようになっている。

「そ、それがアンタの宝具……？ 息がつまりそうな魔力……」

驚愕に目を見開いているが……、別に俺のじゃない。適当に創ってみた。

それを弓に番え、

「つて、やめなさい！ 的たらないと思うけど、万が一的たったら家が壊れるわ！」

ふははは！ 舐めるな！

そのまま、離す。

言い忘れていたが、俺は弓を使ったことなどない。

剣を放った瞬間、柄が俺の顔面に殴打。そして、屋上に落ち、大きな爆発。

下の階が見えていた……。

「アーチャ……」

俺は間一髪で凧を連れて上空へ飛翔していた。

「失敗した。実は俺弓とか使えないし？ 試しにやってみたらこうなった」

俺はカラドボルグ？を消し去り、肩をすくめながら言っただけで存在するカラドボルグ？は偽物だ。しかし、本来の偽物でなく、俺の創った武器は本物である。

消さないといつまでも残るといふ厄介な代物だ。

「って、それアーチャーじゃないじゃない！？ と言うか、何で飛べるのよ！？」

暴れるな凧！

「いや、飛べないとかおかしくね？ 魔術で飛べよ？」

「出来るわけないでしょ！？ そんなの神代の魔術の領域じゃない！？ それか魔法よ！」

あれ？ 魔法もまだあるんだこの世界。

「ちょっと、魔法の説明してもらっていいか？」

「別にいいけど、同じようなの使ってるくせに知らないのね？」



俺は凜の家に飛翔しながら聞くことにした。

「まず、第一魔法。『無の否定』死者の蘇生が出来るとか。第二魔法、『カレイドスコープ』。並行世界を行き来することが出来るわ。一人しか使える人がいないわね。第三魔法、『ヘブンズファイール』。魂を永久機関にして、無尽蔵の魔力を生み出すの。現在は使える人が皆無。第四魔法、『アンフィニッシュド・ブルー』。よくわからないけど、『破壊』を極めた魔法らしいわね。第五魔法、『スペクタクル』。情報を形に出来、形を情報に出来、その“モノ”の本質自体は変わらないが、その在り方を変える。第六魔法『ゼロ・サイクル』。誰も到達していない魔法。エネルギー保存則の打破。無限の創造ね」

ふむ。

よくわからないけど、この世界では魔法＝神の力の一部って感じなのかな？ 第六魔法ってのは俺でも使えるし。

「ま、魔術師の目標ね」

「なら、聖杯に願えばいいんじゃないのか？」

俺は適当に言ってみると、キョトンとされた。

「それじゃ意味がないのよ。自分でたどり着いてこそ意味があるんだと思うわ」

そう言っつて、凜は微笑んだ。

努力でたどり着こうとする意思。俺とは全く違う生き方。素直に美しいと思った。

「ちょ、ちょっと何でいきなり胸揉んでるのよ!？」

飛翔すると揉みたくなるんだよな。なぜか。

「暴れるな、落ちたら死ぬぞ？ 俺の手が勝手に動く。操られたか  
も知れん」

「そんなわけないでしょうが！？ 誰が操って胸揉ませるのよ！」

そりゃそうだ！ 俺だったら絶対自分で揉む！

「とりあえず、ついたから降りるぞ？ それとも、まだ弄られたい  
のか？」

俺がニヤリと笑ってやると、真っ赤になって慌てだした。

「は、早く降りるわよ！ なんだってあんたはそう……」

ぶつぶつ言っていたが、

「あ、言い忘れてたけど、俺は人の魔力と傷の回復が出来る」

キョトンとしているようだ。

「ただ、問題があつてな……」

俺は先ほどの爆発の破片で傷ついた、凜の腕を舐めてやる。

「つつ……！！！！？」

傷は消えたが、凜は真っ赤になってしまつ。

「今のでわかったかもしれないけど、俺の唾液だろうと血だろうと  
快樂が伴うだろ？ だから、大きな傷を負うなよ？ 魔力で代用して、  
更に治療なんてなったら、きつとお前快樂死するからな？」

快樂死なんてあるのかわからないけど……。

この世界の魔術は、魔術回路と言われる疑似神経に魔力を通して  
使うらしい。つまり、腕を失ったりしたら、魔力で再構成し直すこ  
とになる。普通の身体の再構成じゃ無理なのだ。魔法が廃れてしま  
って、それでも使おうとした結果が無理やりな疑似神経の構築。い  
つもの世界や、俺のように息をするように魔法を使うって言うのは  
無理っぽいのだ。

「わ、わかったわ。気をつけるわ……。何か舐められただけで痺れ  
たわ」

そうなのか？ 自分ではわからないからな。

「あ、一人でするならトイレとかでや げふあ！」

殴られた……。心配してあげたのに……。

てか、不便だよな。魔力以外じゃなくて、傷だけなら治せるが、  
魔力もなくなったら体液で補充させるしかないし。俺がマスターな  
ら出来たけど、あっちがマスターだと一方的にもらうことしか出来  
ない。

俺がゆっくりと地面に降ろしてやると、そそくさと家に走って行  
った。

はあ……。実質まったく主従でもなんでもないよな。

サーヴァントは令呪と聖杯があるから言うことを聞くんだな。

俺は殺そうとは思わないけど、絶対誰か殺すってこのルールだと……。

マスター洗脳しちゃえばすぐじゃん……。キャスターみたいな魔術師クラスなら余裕だろうし。

しかも、武器に契約解除あるってなんだよ……。  
いつそ、魂の刻印とかしちゃえば絶対服従なのに。

## 八六話 サークヴァント不可？（後書き）

結構ストーリー崩壊するかも。

魔法の説明って言うのは拾ってきたんで、理解しなくていいですよ

魔法はすごいくらいで……。

第一魔法はバゼット・フラガ・マクレミッツの言葉とエーテル塊の説明から『無の否定』ってことに。

## 八七話 ランサー（前書き）

ゆっくり進んでいくんで、訂正してくれたら反映してゆきます。

Fateの設定が難解すぎて、理解できてない場所があります。

次の話からストーリーからずれゆきます。

基本ページ以外は、別の人間を成長させる予定です。

## 八七話 ランサー

学校・夜

「平和ね〜」

「ああ」

「平和ですね〜」

「ああ」

「「暇」」

「……」

今、俺とステンノとエウリュアレは学校の前の芝生に寝転がっている。

夜だから誰もいないし、めっちゃくちや暇だ。

「リンはどこ行ったのよ？」

「んー、なんか結界が在るとか言って解除しに行った」

俺はエウリュアレの質問にだるそうに答える。

「それって、お父様なら簡単に解けますわよね？」  
「ああ」

うん、超楽。でも、凜が頑張って強くなるって言ってたから、修行になるかなど。

そんなとき、ステンノのお腹がくくと鳴った。

「…………おなか減りました」

「ああ」

「おなか減りました」

「わかったって」

「おなか…………」

何か俺の首もと狙ってるので、血吸われる前にレジヤースhirt+料理を創りだしてやった。

二人はすぐにながつついた。

「ん〜、リンのご飯よりおいしいわね〜」

「ですね。あれは普通の味です」

仕方ないんだ。最初俺が創って出したら、負けた。とか言って落ち込んで、俺が創るの禁止になった。

凜には創造出来るなんて教えてないし。

そんなとき、凜が屋上から飛び降りてきた。

「おーい、お前自殺趣味あったのか？」



とりあえず叫んでみた。

『そんなわけないでしょ！ 着地よろしくー』

俺がいなかったらどうするつもりだったんだよ……。  
風を凜に纏わせて着地させる。

「何してんだ？」

「そ、そんなわけないでしょ！？ 走って！」

俺は凜に手を引かれ、校庭に走りだす！

てか、凜。そんなわけないでしょ！ って俺は何してるんだって  
聞いたんだが？

適当に受け答えされた……。

「二人とも、飯食い終わったらゴミ持ち帰るんだぞ」

二人はひらひらとこっちに手を振った。

「で？ あの目の前にいる男なに？ お前の彼氏？ すごい趣味し  
てるな……」

「ちっ、違うわよ！？ サークヴァントよ！」

俺達の目の前には青い男。

もう服から髪まで青いし。身長185くらいか。それよりも気に  
なるのは、ウエットスーツみたいな服がキシヨい。

後ろには赤い魔槍を持っている。データから「ゲイ・ボルグ」つ  
てことは、ケルト神話における大英雄で、アイルランドの光の皇子・  
クー・フーリンか。

倍率1000くらいから始めるかな。アイツの攻撃早そうだし。

たぶん倍率上げないと一瞬で俺死ぬ。

ゲイ・ボルグの原型は……、オーディーンズのグングニルだっけかな。それでいつかな。

「アーチャー！」

ほいほいっと、俺は凜とクー・フリーンの間に入る。

「へえ」

クー・フリーンはニヤリと口を歪める。

「……いいね。そうこなくっちゃ。話しが早い奴は嫌いじゃあない」

突如、ごうっという旋風が巻き起こる。

2メートル程の赤い魔槍から起きている風。

「気をつけて、あれはランサーのサーヴァントよ！」

うん、それはわかるぞ？ あれ？

「てかさ、凜は相手の武器分らないの？」

キョトンとしている。

あー、でも。これくらいなら能力としては許容範囲だよな？

校庭 Side 凜

わたしのサーヴァントが言っていることの意味が分からなかった。武器なんて見ただけでわかるはずがない。そんなことが分ければ、相手の“切り札”や真名だってわかってしまう。そんな能力は

「あー、そっか。俺の能力に相手の武器の名前知るって言うのがあるんだよ」

「「なっ!?!」」

ランサーが驚くのも無理がない。それが分かれば決定的な有利点になり得てしまうのだから。

「貴方！ それ本当！？」

「ああ、あれはゲイ・ボルク。アイルランドの英雄クー・フーリンだろ？」

「テメエ、何者だ」

相手のランサーは、目を見開き、殺気を振りまいた。はつきり言っ  
て、わたしでは立っているのが精いっぱいだわ。それなのに

「んー、ランサーだ」

そう言っ  
て、アーチャーはニヤリと笑った。ふざけてるとしか思えない言動。

「あん？ いいぜ、クラスなんてどうでもいい。槍えものを出せよランサー」

アーチャーは抜れた剣が宝具のはず。槍なんて。

「貴方……」

アーチャーに声をかけるが、ニヤリと笑ったままだ。

突如、天が雲で覆われた。いきなりの暗闇。そして鳴り響く雷。

アーチャーは宙に手を掲げる、そこへ轟音を立てた大きな雷が落ちる。

そして、その手には

雷を固めたような槍。2メートルを超える大きな槍が握られていた。わたしはアーチャーに張られたであろう結界内にいるから平気だが。槍から出る紫電の余波で地面が削れてゆく。

「ゲイ・ボルク持ってきたんなら、俺はこれで行くわ」

にやにやと笑いながら言う。

「テメエ、グングニルをどうして……」  
「なっ!？」

ありえない。それはあり得ないことだわ。 『グングニル 大神宣言』。  
それはオーデインの武器。槍を向けた軍には勝利が確定する因果逆転。狙ったものは必ず避けられない概念。確かに最強クラスだけど、オーデインなんて召喚出来るはずがない。

「アーチャー、あなたは……」  
「ストップ。俺はオーデインじゃないぞ?」

言葉を遮られ、考えを読まれた。じゃあ、あの槍は? ゲイ・ボ  
ルグの所持者が言ってるんだから確実に本物のはず。

「俺を見極める凜。お前のサーヴァントに相応しいか」

そう言って、アーチャーはわたしに背を向け続ける。頼りない華  
奢な背中。身長だっって一般学生程度だ。それでも

「ええ、手助けはしないわ。貴方の力、ここで見せなさい」

そして、アーチャーはくすりと笑い、消えさった。

「くっ！」

前方でランサーの声が出た。わたしがそちらを見ると、すでに戦いは始まっていた。

赤い神速の槍が奔る。

斬撃などほぼ見えない、視認出来るのは打ち合った時の火花。それが、花火のように散り続ける。

確かにサーヴァントの戦いは人間などが間に入れる戦闘ではない。見えない。わたしにはアーチャーの動きが消えては現れという風にしか見えない。

ランサーの全方位から振るわれるアーチャーの黄金の槍。

だが そのアーチャーの槍の打突と払いをすべて避けるランサーも異常すぎる。

繰り返される花火のような閃光。

不覚にも、わたしはその光景をキレイだと思ってしまった。

これが、サーヴァントの戦い。

魔術師では手の届かない最高ランクの使い魔 英霊を使役する、

聖杯戦争そのもの。

そして、それ以上にアーチャーのことが分からない。確かにアーチャーと言った。

だが、今アーチャーはランサーを槍で圧倒している。不可能な戦い。あの槍は完全な本物。

投影などの偽物ではない。それを、あの保有魔力が示している。アーチャーは何の英霊なんだろうか……。

「うーん、やっぱり強いなー、少しでも下げると死ぬわこれ」

「ハッ、何言つてんだおまえ？」

わたしにもわからない。秘密主義の英霊。令呪も効かず、神を子供扱いしてる英霊。完全な実体。人間？ そんなことがあり得るんだろうか？

そう思っていると、二人は離れる。その離れる速度も異常だった。ランサーの方はギリギリ視認出来たが、アーチャーは消えて現れたような感じた。

「……なあ、テメエ。何処の英雄だ。槍使いの弓兵なぞ聞いたことがない」

ランサーが問いかける。わたしも知りたいわね。

「英雄なんて立派なもんじゃなーよ。ただ、俺は……うーん。誰もが知っていて誰も知らないって奴かな」

此処で謎々……。つくづくふざけたサーヴァントね。

「はは、いいぜえ。ならば出させてやろうお前の真の宝具を」

ランサーが槍を構える。それはおかしな構え。槍の穂先を地を穿つように下げる。

切り札、真名解放。たしかにこれだと、宝具の真名解放でなくては迎撃出来ないのだろう。

宝具の真名解放が出来るのは所有者本人のみ。アーチャーの持つてる槍がグングニルなら、真名解放出来る者はオーディーンのみ。

「食らえ、我が必殺の一撃を」

ランサーの体が沈む。

同時に 空気が凍る。

比喻ではなく、本当に凍ってゆく。

わたしの心臓が早鐘を打つ。

危険だと、体が悲鳴を上げる。

それでも見守らなくてはいけない。

私のアーチャーが何者なのか。見極める。

大気に満ちていたマナはすべて凍結し、この場で呼吸を許されるのはランサーだけ。

それなのに アーチャーはへらへらと笑っていた。

「なら、俺の宝具の一つを見せてやろう」

そう言っつて、アーチャーは構えた。アレは投擲の構え？

空の雷が一層激しくなり、あの雲が続くまで、どこまでもがアーチャーの攻撃範囲。

わかる。アレは地上で放つてはいけない力だ。放つたら最後。地上の全てが蹂躪されるだろう……、止めなくちゃ……。

「誰だ……！！！」



突如、ランサーが声を上げた。

そこには、逃げゆく第三者の人影。たぶんこの学生だろう。

アーチャーそれ追っていないくなる。

「……やっちゃったわね……、ランサーに気をとられて周りの気配に気づかなかったわ」

一般人に知られることは許されないのに……、きっとランサーは目撃者を……え？

そこで、わたしは気づいた。

「アーチャー！ ランサーを追うわよ！ 先に追って！」

「ああ、でも。それなら」

「え？」

アーチャーはわたしを抱え、周りが見えに程の速度で飛翔した。手には既にグングニルはない。

そのまま、ガラスを破って入ると……。

鼻につく死のにおい。

床に流れる大量の血液が結果を物語る。

わたしの浅はかさが招いた結果。

「アーチャー、ランサーを追える？」

「無理。俺にはサーヴァントを感知する能力なんてない」

肩をすくめて言うアーチャーだが、別にそれ程支障があるわけじゃない。

ただでさえ、アーチャーの強さと能力は破格だ。それくらい欠点があってもいい。

それより……。

床に倒れ伏した生徒。

手が震える。直視することさえ出来ない。

でも、これはわたしの甘さが招いた結果。

人の死なんて魔術師ならば必ずこの先も見ることになる。  
ゆっくりと見る。

「……ランサーの槍で心臓を一突き。もう助からないわ」

わたしが俯いていると、隣からアーチャーがわたしの肩に手を置いた。

「俺は人の死なんて慣れてるからな。俺が調べよう」

手慣れた感じでうつ伏せの遺体を仰向けにする。

そして、生徒の顔を見、

「  
」  
息が止まった。

なんで？

なんで、アンタが……。

即死。

少しでも息があれば助けられたかもしれない。

だが、コレでは完全に無理。

これが蘇生出来たら、第一魔法のレベルだ。

養子に行ってしまった桜の……、わたしの妹の想い人。きつとあの子は泣く。

「はあ……」

隣で大きなため息が聞こえる。

「なんで、お前も痛々しい顔で涙を我慢するんだよ」

お前“も”？ 桜のことを考えると、きつい。

「お前の好きなやつか？」

わたしは大きく首を横に振る。

「はあ……、わかったよ。今なら記憶の欠如もないからな。あと数分までなら蘇生できる」

わたしはバツと顔を上げる。アーチャーは今何を言ったのか、脳

の処理が追いつかない。

死者の蘇生。それは生命の理から逸脱させる力があるということだ。

第一魔法『無の否定』。聞きたいことはたくさんある。

でも、今はそれどころじゃない。

「お願い……、助けて」

アーチャーは軽く微笑み。

「わかったよ、じゃ。対価として、終わったらお前の下着を1セットもらうわ。今穿いてるやつ」

何だろう、一瞬驚いたけど、わたしを元気づけようとしてるの？  
案外いい奴なのかもしれない。

「いいわよ！ それくらい！」

アーチャーはくすくすと笑い。

自分の指を噛みちぎった。血がぼたぼたと垂れている。極上の魔力の塊。

それを倒れている生徒 衛宮君の傷に垂らす。そして、手を体に置く。

アーチャーが小さく一言呟くと、衛宮君の傷はまるで巻き戻すように戻ってゆく。

そして、完全に元に戻る。脈を確認してみたが、動いている。

ありえない現象。魔術協会にバレれば即封印指定確定な力。英雄

とはこうなのだろうか？ それは違つとわかる。これは、アーチャーが規格外なだけ。

「ねえ、アーチャー。貴方は何者？」

わたしの言葉に軽く笑い、

「凜のサーヴァント。それ以上でもそれ以下でもない」

それだけ言った。わたしのサーバントアーチャー。今はそれだけで十分だと思った。いつか教えてくれたら嬉しいとも思う。

「あ、蘇生したから下着よこせ」

……元気づけてくれたのではなかった。  
本当に下着がほしいだけだった。

## 道路

いま、俺と凜は衛宮って奴の家に向かっている。プロローグで一瞬だけ出てきた気がするけど。忘れた。

ステンノとエウリュアレは凜の家で寝ている。

もう午前零時だしな……。

「アーチャー遅い！　なんでそんなやる気ないのよ!？」

前方で凜が文句を言ってくるけど……。

「いやー、何か凜が男のためにやる気になってるとどうも」

「えっ、それって嫉」

「俺のためには全くやる気にならないのに全く。俺にも下着よこせ」  
「……………」

まあ、1セットもらったけどさ。

にしても、この武家屋敷みたいなのが衛宮って奴の家か。デカイな。人気もないし、奇襲楽そう。

む？

「凜、退け」

「え？ きゃっ」

俺は凜を突き飛ばす。

刹那、俺達に剣風が襲いかかる、まるで見えない剣筋。  
俺は既に時間停止中。

155くらい的身長の女の子だった。

髪は黄色で、どうやったらこんな結び方出来るんだって感じで後ろで結んでいる。

ちなみに、胸と手足、スカートに甲冑がついているので、胸のサイズは分からない。

服は、青い服を着ている。

剣は見えないが……、データからエクスカリバー。それに、インビシブル・エアって言う鞘。風を纏わせ、透明化出来るらしい。そんなこと出来るんだって感じた。

俺もエクスカリバーとインビシブル・エア《風王結界》を深層から取り出す。

にしても、エクスカリバーってことは、イングランドの伝説的英雄、アーサー王だよな？

なんで女なんだよ……。

そして、時間解除っと、

「やあ、セイバー？ いきなり奇襲とはほめられないねエ」  
適当に挨拶してみた。

「なっ！？ その剣は！」

「え？ お前の剣と同じだろ？」

自分だって同じ剣持つてるのに酷い奴だ。

俺は倍率を上げる。はっきり言って、今の俺じゃ一秒で細切れだ。

そして、セイバーの剣を跳ね上げる。

「くっ！？」

予想以上の速さにか、驚いたような声を上げる。

更に追い討ちをかける、弾いたら、その剣がはじかれた瞬間には  
逆側に移動し弾く。

ランサーの時もそうだが、だんだんと相手の力量を見ながら倍率  
を下げてゆく。

1000倍くらいでもきついんだが……、コイツらまじ化け物。  
精霊の加護ありの、本気で蹴飛ばし、その反動で離れる。

「あー、凜。お前の欲しかったセイバーがいるぞ？ 俺と交換する  
ならそれでもいいぞ？」

にやにやと笑いながら言ってやる。

「い、いいわよ！ いつまでも根にもたないですよ！」



これで交換するって言われたらマジ最悪だったけど。そのまま、俺はセイバーに視線を移す、相当な力で蹴り飛ばしたので、少し苦しそうだ。

ってか、元からあった傷にクリーンヒットしていた……。

「で、セイバーとやら。まだ俺に挑むと？ その傷で？」  
「くっ、アーチャー、そこまでわかっているのですか」

外面だけ取り繕っても俺には見える。俺の瞳から隠れるとかそういうのは無理だ。

風王結界の剣だって普通に見えてるし。

「なあ、そのセイバーのマスター。俺は別にお前と戦いに来たんじゃないんだぞ？ そもそも、お前は命の恩人を殺す主義なのか？」

俺はニヤリと笑ってやる。視線の先には、身長170ないくらいの、短いオレンジ色の髪の少年。

「ご主人さま、あれが主人公ですよー」

「ちよつと想像と違ったシヨック」

「今後のストーリー教えましょうか？」

「いらん、ストーリー通りに進めるのだから。適当にぱっぱと終わらせちまおう」

「はい」

深層会話終了。

衛宮は目を見開いていた。

「お前が……、学校で助けてくれたのか？」

「ああ、って言っても、凧の命令だったかな」

俺から視線が凧に移る。

「ち、違っわよ！　一応周囲を確認しなかったわたしのせいでも……あつたし」

ツンデレだな……。――

「とりあえず立て凧。いつまで尻ついてんだよ。お腹の子に悪いだろ？」

「いないわよ！？」

そう言いながらも、俺の差し出した手を掴み立ち上がる。

「お、おまえ遠坂……！？」

どうした衛宮？

「ええ、こんばんわ、衛宮くん」

にこりと笑う凧。

「え、え、えっと、遠坂は魔術師？」

「そうよ？　お互い様でしょ？」

でも衛宮から魔力なんてほとんど感じないぞ？

「とりあえず、話は中でしょう？　どうせ何も解ってないんで

「しよ、衛宮くんは」

「そう言っつて、凜はずんずんと門に歩いてゆく。」

「っつて、ちよつと待て遠坂！ なに考えてんだお前！？」

凜はゆっくりと振り返り、

「いろいろ考えてるわよ？ ハツキリ言っつて、今わたしの話を聞かないと死ぬわよ？ 今度は助けてなんてあげないからね？」

「っつて言っつても、お人よしな凜ならまた俺に助けろっつて言っつんだろうな。あんま蘇生に頼らないでほしい。」

そのまま、凜は家の中に入って行っつた。そして、顔だけ出し、

「アーチャー、早くあなたもいらっしやい？」

ふむ。

「と言っつわけだから、そんないつまでも敵意むき出しで剣構えるなセイバー」

「そう言っつて、エクスカリバーを消し去っつて凜について行く。」

## 居間

和風つていいなあ。

畳に大きな背の低いテーブル。凧の家は洋風だし。

俺は聞いているだけだが、どうやら衛宮士郎は魔術の初心者らしい。物の強化の魔術くらいしか使えないらしい。強化なんて幻惑の一種だからすごいと思うけど。

凧の話では大したことないらしい。なんかいろいろ狂ってる世界だな。

凧は衛宮士郎に長々とサーヴァントのことを説明していた。親切だなコイツは。

とりあえず俺は……。

「セイバー、そんな熱い、もとい敵意むき出しで俺を見つめるな。穴が開く」

「……………」

はあ……。

「ああ、なんでアンタなんかセイバーを……」

なんて聞こえてきた……。

「よし、士郎！ 俺のマスターになれ！ それでセイバーと凜をぶち殺そう！」

俺は一瞬にして士郎の横に転移し、肩に手を置く。

「「「なっ!?!」」」

「アーチャー、い、いまのは？」

セイバーが初めてまともに喋りかけてきた。

「ん？ 早すぎてお前には見えなかったんじゃないか？」

「そんなはずは」

「実際見えなかっただろ？」

セイバーは悔しそうにしてるが、

「さて、ほーら、俺の方が強い。あの俺を雑魚雑魚って言う凜をぶち殺そう！」

「い、言っていないわよ！ なんで貴方はそんなに子供っぽいのよ……」

溜息つきながら言われた!?

「教えねーよ敵のマスターめが！ さあ、士郎契約だ」

「は？ いや、俺は……」

くそっ！ やっぱり女の子がいいのか！ 俺の居場所が……。

「もう、嘘よ嘘。アーチャーで我慢してあげるわ」

そんな事を言う凜をジトっとした目で見つめる。

「あーもう。アーチャーがいいわよ。コレでいいでしょ？ どんだけプライド高いのよ……」

「いやいや、そんなのお前。子供に、あの子のお父さんがお父さんだったらよかったのに。って言われた親と同じようなもんだろ！？」

三人は黙り込んだ。めちやくちやショックだからな？

「さ、さて、そろそろ行きましようか？」

凜がどもりながらも話を変えた。

「え？ どこにだよ。もうこんな時間だし遠いのは」

「聖杯戦争のこと教えてくれる場所よ。隣町だから急げば明日までには帰ってこれるわ。それに明日日曜だしね」

俺ねみー……。

「でも、それは……」

「そーだそーだ、眠いぞ糞凜！ お前のせいで俺の体力がマツハでゼロになる！ 俺の耐久力はサーヴァントで最弱なんだぞ！？」

「なんで自分の弱点公言してんのよ!？」

「つまり、攻撃を受ける」死の法定式が成り立っているんだ」

俺は胸を張って言うてみた。凜は顔を押しさえて溜息をついていた。

「話を戻しますがシロウ、私も彼女の意見に賛成です。貴方はマスターとして知識がなさすぎる。貴方と契約したサーヴァントとして、シロウには強くなってもらわなければ困ります」

なんか、士郎が一気に落ち込んだ……。

「わかったよ、行くよ。で、何処なんだよそこ?」

「行先は隣町の言峰協会。そこがこの戦いを監督してる、エセ神父の居所よ」

ニヤリと凜は笑っていた。

「はっはっは、士郎ご愁傷様。俺は此処で寝てるからお休みなさい」

俺は横になる。凜が俺の上に乗ってきた……。

「あ・な・た・も・よ! アーチャー」

「凜 令呪の蓄えは十分だろうな」

俺はニヤリと言ってやる。

「……わかったわよ……、下着くらいあげるわよ……」

俺を律する令呪「下着という契約があれば成り立ったのだ。

「すごいな、お前と遠坂の関係」

「ああ。あと俺の名前は刻でいいぞ？」

「ああ、よろしくな刻」

さーて、仕方ないけど行くか。

振り向くと、凜が目を見開いていた。

あ……。

「アーチャー……、貴方今刻って言ったわよね？」

すごいぶるぶるしてる。

仕方ないよな？ 俺守護者じゃないし。今までそんな風周なかったし。

「いやー、俺の生鳩、木に留ってもいいぞって言う意味で……」

「どんな苦しい言い訳よそれ！？ もういいわ！ 今度から刻って呼ぶから！ 全然有名じゃないからバレもしないわよ」

まあ、そうだけどさあ……。宝具なんてないし……。

「それよりトキ、貴方が使っていた剣は……」

セイバーまでトキと呼ぶとはいい度胸だ。

「お前と同じだよ“アーサー王”」

俺が言った瞬間。空気が固まった。

「え？ アーサー王ってイングランドの大英雄の！？ やっぱりセ



イバーが……」

「おい、凜。それ以上言ったらまじで俺は家出するからな？ お前の全下着持ってな」

「じよ、冗談よ」

俺達は和やかだが、セイバーの顔は険しい。

「確かにそうですが、それを知っている貴方。そしておなじ宝具を所持しているのは何故ですか？ 確かにアレは本物でした」

全員の視線が俺に集まる。

「え？ だって刻はグングニルも……」

「さあ？ いっぱい持つてる存在が居てもいいんじゃないか？」

「そんなはずありません！ 宝具は一人の英雄に一つと」

「じゃ、コレが俺の宝具だ」

俺が取りだしたのは、先端に両手が固定されている槍。二本の手指し指が突き出ている。

「な、何よそのふざけた魔力！？ ものもふざけてるけど……」

俺は構え、

「我が必殺の槍、受けてみる」

ランサーのマネを試してみた。

セイバーが立ち上がるが、空間ごと固める。

『尻穴を穿つ不潔な槍』  
ゲイ・ホリアルク

俺が突いた瞬間には、それは尻穴に納まっているという、因果逆転の魔槍。

俺はそれを全力で投擲する。

俺の手から離れ、あり得ない軌跡をたどるそれは、

「アッー！ー！！！」

士郎の尻の穴に入り、後ろの処女を奪った。

男にしか使えず、男にしか効果のない魔槍。だが、きわめて危険な能力により、封印された魔槍である。

ちなみに、俺が今作ったからそうなる予定。

士郎はびくんびくんとなる。

「シロウー！！！」

セイバーが士郎から引き抜こうとするが抜けない。

「ま、までセイバー！ 動かすな！！ 変な気分になる！！ アッ

ー！！！」

「ふっ、俺の宝具は世界一」

「な・に・が世界一よ刻……」

後ろには鬼の形相の凜がいた。美人が怒るとこえー！！  
手には、パイプ、ってどこから！？

『 ふざけた使い魔を掘り進む剣《大腸・ピラン》』

「こわっ!?!」

それ、ピラムの改造型!?!?

すさまじい速度で迫るソレを俺は全力で避けきる!

「因果逆転」

「何故!?!」

「アアッー!?!」

ちなみに、尻の穴の前に空間を繋げて逃げ切ったから大丈夫。

八七話 ランサー（後書き）

もう、わけ分からない！

八八話 バーサーカー（前書き）

おとうおじ

## 八八話 バーサーカー

### 教会

現在俺は、士郎と凜が戻ってくるのをセイバーと待っている。結構前に、教会に入って行った。なんか、いろいろ聞くから時間かかるとか言ってたけど……。

「ふあ〜」

超眠い……。

隣を見ると、俺のことをずっと睨んでるセイバー。何でだよ……。

「お前さっきから何？ 言いたいことあるなら言えば？ 答えるとは限らないけどさ」

もうかつたるすぎて……。

「アーチャー、貴方は何ものですか？ 先ほどの私への魔法……」

あー、空間ごと固定した奴か。

「何ってサーヴァント？」

「アーチャーは神霊の類の者でしょうか？ 私の耐魔力は相当なものだと自負しています。普通はかすり傷も与えられない。それが先ほどのように無様な……」

ああ、それが屈辱だったのね。

「神霊って言うか、俺は霊じゃなくて実体だぞ？ 凜からの魔力供給もしてもらってないし。お前が抵抗すら出来ないのは、お前の耐魔力より俺の魔術のほうが上だからだろ？」

「なっ!?!」

簡潔に言っただけなのに、何で驚くんだよ。

「ありえません！ 英霊ですらない人間が英霊より強いなど！ 私の耐魔力は現代の魔術では傷すら与えられないはずです」

うーん。頭固いな。どんだけ、自信あるんだよ。

「俺が人間って何時いった？ 英霊と人間以外にも世界にはいるだろ？ ま、俺に向かってこなかったら殺さないから安心しろ。実力差なんてわかると思っただけさ。無駄に死ぬことはないだろ？」

「それでも私は……」

聖杯に叶えてもらいたい願いがあることね。

「じゃ、精々万全の状態で挑んで来い。ちなみに、俺の魔力見ればわかるけど、お前のエクスカリバーだって真名解放何回でも出来るからな？ お前が失った残りの二つの宝具も持つてる」

俺の言葉にセイバーは黙り込んでしまった。出来れば戦いたくないからな。最悪、5人倒して俺の力注げば聖杯は完成する。聖杯はページ入ってるから破壊させてもらうけど。

「まあ、そうだなあ」

俺は腕を歯で千切る。

そして、血が垂れている腕をセイバーの前に差し出す。

「な、何を……」

「敵からの施しなんて嫌かもしれないけどな。その傷と魔力じゃ士郎が死ぬ。お前の為じゃなく士郎の為に飲め」

「……」

はあ……。

「別に貸し借りとかじゃない。ただ、俺は士郎が死ぬのが嫌なだけ。アイツには成長してもらいたいからな」

あいつは、まだまだしょぼいけど幻惑持ってるしな。人間が幻惑持つとどうなるか見てみたい。

セイバーはゆっくりと俺の腕に近づき、

「すみません……、頂きます」

そのまま、飲み始める。うーん、エロい……。こしょぼいし。

「あんた達なにやってんの……」



後ろを振り向くと、すごいムスっとした顔の凜が仁王立ちしていた。

「何って血あげてただけだぞ？」

「え？ セイバーってまさか血吸うのか？」

何を勘違いしてんだ土郎。

「それは違いますシロウ。魔術師の血液は魔力の塊です。それを体内に摂取することで、魔力を外部から取り入れることが出来ます」

そんな事を言いながらまた飲もうとするな。

「え？ じゃあ、俺の血液でもセイバーに魔力を与えることが出来るのか？」

土郎の言葉にセイバーが言いづらそうに沈黙する。

「そう言えば、刻の血一滴で土郎の心臓再生したわよ？ 私は飲んだことがないから知らないけど、どれくらい凝縮されているのかしら？」

唇に指を当てて思い出すように聞いてくる。

「そうですね、今は数滴しか飲んでませんが、傷の完全治癒と、もうバレましたから言いますが、真名解放二回分くらいでしょうか」

その言葉に、凜が驚愕の瞳を俺に向ける。

「それってどれくらいなのよ……」  
「リンの魔力全てをもらっても最初からゼロの状態だと真名解放は出来ませんね」

その言葉に凜と士郎が絶句する。

「アンタどれだけ魔力の塊よ……」

いや、体が魔力で出来てるぞ？

「あ、それじゃ、俺の場合真名解放一回するまでにどれくらいの血が必要だ？」

士郎……、それは聞かない方が。

「シロウですと……、シロウ数人分？」

「なんでさ……」

俺と比べること自体が間違いだ。

「士郎なら、セイバーに精液数回注げば一回くらい真名解放出来るぞ？」

「なっ!？」

俺の言葉に士郎が驚く。凜は真っ赤になっているが、普通だ。

「いや、精液が一番魔力の凝縮率が高いんだよ」

「でもそれは……」

士郎がちらちらとセイバーを見る。

「考えてみなさい士郎。それでセイバーが強くなるなら大したことないでしょ？ わ、わたしだって刻の魔力がなくなったらそれくらいの覚悟はあるわよ……」

そんな真っ赤になって言うな。

「いやいや、お前の魔力じゃ焼け石に水どころか、溶岩に霧雨だ」  
「こ、これでも魔術師としては」

「違うんですリン。アーチャーの魔力量が多すぎるんです。逆に、アーチャーからの精液でリンの魔力許容量を超えて死にます。おそらく、私でも消えるでしょう」

「なっ！？」

つまり、俺は一子供作れないんだよな。

子供作るとしたら、レンやエル、ルーくらいしか無理だ。

人間ですらないし……。

「ちなみに、凜が俺を召喚したときの魔力供給でお前心臓止まったからな？ ついでに、令呪使った時も数分で死んだな。俺の唾液で蘇生したし」

俺の言葉に真っ赤になる凜。

「はあ……、ってことは私、魔力供給も出来ない役立たずじゃない」

スゲー落ち込んでるし……。

「いや、俺がサーヴァントと闘ってるときお前はマスターとでも闘え。不意打ちはちよっとだるい。んで、お前の目標は何なんだ？」

俺がサーヴァントの間に少しくらい進歩するようにしたいんだが？」

わからないことにはな……。

「ゼルレッチ大師父の第二魔法『並行世界の運営』ね。まずは宝石剣かしら？」

ふむ、宝石剣ゼルレッチって奴か。並行世界ってこの世界にしかないんだよな。

データはつと、並行世界に小さな穴を繋げて、大気マナを無限に作りだす、ね。

「これか？」

俺は創造して出してやる。

「なっ！？　なんでアンタがそれを!？」

「いや、俺の宝具の中に入った。コレやるから見本にでもしろ。

あ、でも絶対使つなよ？　使つのはお前が自分で作つてからだ。研究用にやるから」

俺は適当に放り投げてやった。

凜が慌ててキャッチする。

てか、何かすごい歪な剣だ。絶対切れない。刀身がごつい宝石になつてんだもん。

「いらないわ……。でも借りておくわ！　いろいろ調べたいし」

うん。顔がいらないうって言ってないもん。並行世界を調べるなら、

必要な資料だと思う。

あれ？ 空間使って、異世界からマナを持ってくれば時間と空間のページでも……。

え？ いやでも……。やる価値はあるかもしれない……。ただ、それには何かが足りない……。

「話戻るけど、刻、もうやっちゃダメよ？ 明日からは敵同士なんだから！」

凜がいきなり叫びだした。

「いや、けど出来れば敵同士になりたくないんだ。俺、お前みたいな奴好きだ」

「な」

凜が真っ赤になる。

「ストップ！ 土郎ダメだ！ コイツはそう言つの慣れてないくらい子供だからそう言つこと言つちゃダメ！」

俺は凜を抱きしめながら言う。

「俺はそんなつもりで言つたわけじゃ……」

「それより刻！ 離れなさいよ！ どれだけわたしを子供扱いするのよ……」

抱きしめられたくらいで真っ赤になってるくらいだし。

「使い魔に抱きしめられたくらいで赤くなるな」

「だって、貴方見た目的には同じ年じゃない！」

そういや、コイツ16だ。俺も16だ。見た目だけ。

「気にするな、どうせ今後もお前は魔力切れになって俺の唾液飲むことになるから。これくらいで恥ずかしがるな」

「それは！……そうなるかもしれないけど……。ねえ？ どこ見てるの？」

俺は一点を見つめ続ける。

教会から少し離れた林の中。

「セイバー、凜。ついでに士郎も何か出来るなら戦闘の準備しろ」

凜を離すと、すぐに凜は手に魔力が込められた宝石を取り出す。

セイバーも不可視の剣を取り出す。

「は？ 何言ってるんだ刻」

士郎空気読め。

俺はサーヴァントの気配は読めないが、不可視だろうと何だろうと、魔力の気配は読める。

「こんばんは皆さん。お兄ちゃんはこうして会うのは二度目だね」

木々の間から、少女の声が響く。

ゆっくりと近づいてくる巨人と少女。

少女の方は、130くらいしかない身長。腰まである白い髪、赤い瞳。

紫のダッフルコートに白いマフラー。

巨人は250センチ以上の大きさ。瞳は黒点がなく赤い。髪は無造作に伸びた黒で、ざっくばらんに切られている。

肌は浅黒く。ものすごい筋肉だ。腰にだけ、甲冑のような服を着ている。腕にはギザギザとした2メートル近くある大剣。

世界データからギリシャ神話における大英雄・ヘラクレスとわかる。12の命を持つてる半神半人。

多分……こいつらにはキツイかもしれん。

だが、それよりも

「士郎テメーあんな幼女にお兄ちゃんって呼ばれて喜んでんじゃねー俺が呼ばれて よ！」

「はあっ！？ お前何言っつてんだ！」

俺は戦闘よりも妹がほしい。

まあ、目的としては、固まった士郎をほぐしたってのもある。

「バーサーカー」

凜が呟くように言った。

「やば。あいつ、桁違いだ」

凜は震えて絶望的な表情だ。これじゃ、戦闘にすらならない。

少女は行儀よく裾を持ち上げて、上品にお辞儀をした。

「はじめまして、わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「アインツベルン」

凜はわかったようだが、俺には全く分かん。とりあえずあだ名はフォンにしようって思ったくらいだ。

凜が自分のことを知っていたのがうれしいのか嬉しそうに微笑み、

「じゃ、殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

少女が楽しそうに言った瞬間、バーサーカーは飛ぶ。

「シロウ、下がって……！」

セイバーが駆ける。

あの巨体で数メートルの距離を飛ぶ。その落下地点に、セイバーがちょうど走り、

閃光。

二人が剣と大剣を叩きつけ、空気がビリビリと震える。

更に旋風のようなバーサーカーの大剣がセイバーを追随する！

大剣をバーサーカーは自由自在に振りまわし、セイバーに叩きつける。

かろうじて、セイバーは不可視の剣で抑えるが、次第に押されていき、セイバーは吹き飛ばされる。

更に追随。

避ける暇もなく、絶え間なく降り続ける大剣。地面を砕き、木をなぎ倒し、まるで嵐のような剣筋。



技も何も無く、ただ叩きつけるバーサーカー。あれは 俺と同じだ。

技能も何も無く、ただ力と能力だけで圧倒する巨人。俺と全く同じ戦い。ホント醜い戦い方だわ。

セイバーがもう一度大きく吹き飛ばされる。

そのまま追越し、立ち上がれないセイバーに幾条もの攻撃を浴びせる。

「刻！ あなたなら倒せる!?!」

さすがのような瞳で凜が俺を見つめる。

確かに倒せるが、

「今回は俺は手を出さない」

「なっ!?!」

別に意地悪を言っているわけではない。傷を負ったら治してやるし、魔力が切れたら注いでもいい。

だが、あのくらいで負けているようでは、俺は愚か、他の奴にも負けるだろう。

セイバーは血だらけになりながらも、立ち上がる。

勝てないとわかりながらも、防ぎようのない攻撃をひたすらに受ける。

一合いごとにセイバーの体が後ろにずれ、沈む。  
大きな横合いの一閃。

セイバーは大きく吹き飛ばされる。宙に舞う体と潜血。常人なら死んでいるだろう。

それでも、剣を地面に突き立て立ち上がる。

「……くっ……シロウを守る……」

「セイバー逃げろ！」

士郎が叫ぶ。

そして、俺の方を向き、

「頼む！ 刻！ セイバーを助けてくれ！」

必死の懇願。俺はただ、セイバーを指さす。

黄金の剣を携えた少女を。

セイバーは剣を頭上に掲げている。立っているのすらキツイ少女が、威風堂々と。

「シロウ、見ていてください。コレが貴方のサーヴァント……」

士郎の見守る中、

『エクスカリバー  
約束された勝利の剣』

真名解放　その剣の力を解き放つ。

目もくらむような光が剣から天に突き刺さる。  
それを、セイバーはバーサーカー目指して振り下ろす。

閃光が奔り、轟音を響かせる光の剣。

光が納まった中には

黒い巨人が立っていた。焦げてはいるが、ズッシリと立っている。

直後、ズシャッと音を立てて、セイバーは倒れる。

「あは、すごいじゃない、一回でバーサーカーを三回も殺したのだから。でも、勝てるわけじゃないじゃない。わたしのバーサーカーはね、ギリシヤ最大の英雄なんだから」

「ギリシヤ最大の英雄って、まさか

」

凜の愕然とした問いかけに、

「そうよ、そこにいるのはヘラクレスっていう魔物。あなたたち程度が使役出来る英雄とは格が違う、最凶の怪物なんだから」

イリヤと名乗った少女は、愉しそうに目を細めて笑う。

凜は絶望と言う感じで、膝をついていた。

んー、まあ。セイバーのシロウを守るって覚悟は見れたし……。  
半神に英雄じゃ、無理だよな……。

「ストップ。此処からは俺がやるわ」  
「あら？ 凜のサーヴァントよね？ 三回殺したって言っても、まだ9回の命が残ってるのだけれど」

俺は前に出る。

「んー、引いては……、くれないよね？」  
「なんで？ 殺しちゃえバーサーカー」

俺はバーサーカーを射竦める。

『……………！』

バーサーカーが叫ぶ。それが何の叫びかは俺には分からない。だけれど……、

「我が貴様の力見定めてやろう、ヘラクレス。そのような身になるうとも、戦士の心死せずなら、我に見せてみる。その力を」

カツコイイこと言ったが……、倍率上げて精霊の補助ないと多分瞬殺される……。

俺は右手に、剣を創りだす。

炎を凝縮して作った真つ赤な剣。

俺に向かって、バーサーカーが大きく一閃。

それを剣で受ける。受けた瞬間、火花、否。炎が飛び散る。

確かに重い斬撃だが、剣による補正と補助で受けられないほどではない。

そして、連激を放つバーサーカーの大剣を受け、逸らし。大きく払い、俺は飛翔する、すれ違いざまに首を切り裂く。

『……………!!』

「残り8回」

「うそ………」

振り向きざまに大剣を振りぬくバーサーカー。それを、回し蹴りで穿ち払う。

そのまま心臓へ突き刺す。そして、手を離す。

「残り7回」

後ろに飛びずさり、

『フロックン・ファンタズム壊れた幻想』

目もくらむような閃光。

サーヴァントならまずやらない攻撃。宝具を破壊し、魔力を爆発させる。その宝具が消え去る攻撃。

「残り6回」

「刻！ 何壊しているのよ!!?」

凜が叫ぶが、俺は両手にゲイ・ボルグを二本創り出し、

『ゲイ・ボルグ刺し穿つ、死棘の槍』

真名解放で二本を刺突。

因果をねじ曲げ、刺突で心臓を貫く因果逆転。

二本が心臓を貫き、そのまま後方に飛びずさる。

『フロークン・ファンタズム  
壊れた幻想』

閃光と轟音、衝撃が巻き起こる。

「残り二回」

「やだやだやだ！ バーサーカー殺して！」

『—————！！』

すぐに俺は両手にグングニルの槍を創り出し、

『グングニル  
大神宣言』

片方を投擲、投げれば必中の槍。投げた瞬間には意図した箇所に直撃する。

俺の意図した、眉間に突き刺さる。

「ラスト・ワン」

俺はそこで、凜の傍に着地する。

「どうする？ イリヤ、バーサーカー。俺が槍を破壊するか、このグングニルを投擲すれば、ヘラクレスは死ぬけど？」

ニヤリと笑いながら言っつてやる。

「やだやだ！ バーサーカーあんなやつ殺しちゃえ！」

子供のように泣きながらわめく少女。

「……………！！！」

ヘラクレスは少女の言うことを聞いて、俺に向かう。

「エルキドゥ  
天の鎖」

バーサーカーの体の全てを固定する、虚空から現れた銀の鎖。  
神格が高ければ高いほど拘束力を増す鎖。

俺になんて使ったら、きっと世界ですら引きちぎれるほどの拘束力だろう。

俺は、グングニルを払い、バーサーカーの大剣を弾き飛ばす。

「現実を見る少女。これのどこに勝ち目がある？」

「何よあなた！ 何で何で何で！ バーサーカーは一番強いのに！  
なんで格下の英雄なんかに！！」

ふむ…………、ダメか？  
そんな時、

「なあ、刻。イリヤを仲間に出さないか？」

…………、何を言っているんだ士郎？

「いや、そもそも俺と士郎って敵対してるだろ？」  
「そうだった……」

そう言い、俺と士郎は凜を見る。

「うつ……、だって聖杯戦争よ！？ 勝者は一人じゃない！」

俺と士郎はジトっと見つめる。

しばらくの沈黙。

「わかった、わかったわよ！ 他のサーヴァントが消えるまで停戦協定を結んであげるわ！」

ふう、俺も妹みたいな少女に泣かれるのは……。

「だそうだけど、どうするイリヤ？ 此処でサーヴァントを失うか、最後の三組になるまで停戦協定を結ぶか。もちろん攻撃してきたら今度は殺すけど」

少女はバーサーカーに近づき、そっと触れて見上げる。

ガチガチに拘束されたバーサーカー。

そして、少女は微笑んだ。

こちらを見、

「いいわ。その協定受けましょう」

そう言って、ほほ笑む。



「あと一つ条件がある」

俺はニヤリと笑う。

「……条件？」

不審そうにイリヤは眉をひそめる。

「士郎のことはシロウで構わない。だが」

俺のことはお兄ちゃんと呼べ！！

「「「……」」」

全員が沈黙した……。

「おにい……ちゃん？」

不思議そうにしてるが、

「うん、わかったわお兄ちゃん」

イリヤはキレイにほほ笑んだ。

俺はバーサーカーの拘束を解き、槍を霧散した。

「……ロリコンね」

「ロリコンだな」

「ロリコン？」

上から、凜、士郎、イリヤだ。

イリヤは可愛く唇に指を添え、首をかしげている。

「断じて違う！ 可愛い少女を見たらお兄ちゃんって呼んでほしい  
だろ！」

俺の言葉に、凜と士郎が顔を見合わせ、

「「ロリコン」「

同時に言いやがった……。

イリヤが俺の袖を引く、

「ねね、ところでお兄ちゃん。わたしのサーヴァントにならないか  
しら？」

「なる」

「ちよっと、待ったー！！ アンタなに即答してんのよ！？ わ  
たしどうするわけ！」

俺は一点を指さす。

「アレ」

「いやよー！」

腕を組んで、そっぽを向きながら言った。

「強いのがいいって言ってたじゃん」

「無理よ！ アレは無理！」

「リン、酷いわね。わたしのバーサーカーを無理なんて」

「ソレを捨てようとしているアンタは何なのよ!？」

「失礼ね、わたしなら二人くらい余裕で魔力供給出来るんだから」

なんか拗ねてるけど、無理。

「無理だぞイリヤ。凜ですら一秒立たずに全魔力持ってたかれて瀕死になったんだから、今は供給してないし。イリヤが多くても確実に一時間保たないで死ぬぞ？」

俺の言葉に目を見開いてるけど、断言できる。

「刻、セイバー助けてやれないか？」

士郎が声をかけてきた。忘れてたわ。

「精液？」

「「ダメ!」「」」

冗談だったのに、三人に否定された……。

「お前ら……、アレだけの傷治すとどれだけ俺の血が必要か……」

澁々ながらも、

俺はセイバーに近寄り、腕の血管をちぎる。

50mlくらいかなこれだと。

俺はドバドバとセイバーの口に流し込み、キスをする。

「……なっ!?!」

「黙れ、飲めないんだから押し込むしかないだろ！」

「俺はセイバーの顎を上げ、唾液と息と血を押し込む。」

「せき込んで血が逆流してきたけど、それをそのまま流し込む。」

「その魔力を使い、内部から傷を修復してゆく。」

「ほい、終了」

振り返ると、凜と士郎が真っ赤になっていた。

「士郎、いくらお前のセイバーだからって今は非常事態だ。こっするしかなかったんだから、いちいち怒るなよ」

「ああ、すまん……、ありがとう」

「すごい落ち込んだ。なぜか凜まで落ち込んでる。」

「へへ、お兄ちゃんは魔法まで使えるんだね」

「え!?!」

「凜が驚いた声を上げる。」

「何を驚いているのリン。今は体の再構成よ？ 原子レベルから作りだすのなんて第六魔法じゃない」

「え、ええええええ!! 第六って無限創造じゃない!?!」

「おや? バレた。イリヤすごいな」。凜なら騙せてたのに。

「それに、ゲイボルクやグングニルが二本も存在してるなんて、どう見ても第六魔法だよな？」

そう言つて、イリヤはにこりと笑つてきた。悪気なんてちつぽけもない顔だった。むしろ、わかつたことに対して褒めてつて感じた。

「えらいなー、イリヤは。凜なんて気づきもしなかつたぞ？」

俺はイリヤの頭をなでてやる、気持ちよさそうに目を瞑つてにこにこしている。

「えへへ」

「つて刻！　じゃあ、アンタの宝具つて……」

「ああ、存在するすべての宝具が無限生産」

驚愕に目を見開く凜。

「あ、でも勘違いするなよ？　この魔法弱点があるんだよ」

「弱点？」

「宝具の保有魔力は俺の魔力だからな。たとえば俺と同じ力を凜が持つたとしても、宝具なんて創れない。名剣がせいぜいだろっ」

「ああ、だから誰も到達出来ない。出来たとしても大したことが出来ないから使用者がいない」

まあ、それで大体はあつてるかな。

「でも、刻。貴方宝具をほいほい創つては破壊してたわよね？」

「それは、俺の魔力が人より多いからだ。限度はあるから、あんまり期待するなよ？　お前らも闘える方法あるんだからな？」

実質限度なんてない。宝具程度数十億真名解放しても消えるような魔力じゃないのだ。

何故知らない宝具を創れるのかってのは気付かなかったようだから助かった。

さすがに、地球と同期してるなんて言えない。

「ええ、そうね！ わたしたちも頑張るわ！」

俺はやる気になった凜の頭を撫でてやる。

「な、何するのよ!?!」

「嫌か、じゃあイリヤ」

「えへへ」

俺はイリヤの頭を撫でてやる。

ジトつとした目を凜が向けてくる。

「……ロリコン」

すっごい小さい声で呟きやがった！

気にしないで撫で続ける。凜がだんだんそわそわしてき。

「わたしも……、撫でてくれてもいいわよ？」

何それ？ なんて上目線からの言葉だよ……。

「いいよ、俺イリヤ撫でてるから」

凜がすっごい睨みつけてくる……、多分俺がイリヤのサーヴァント

になっちゃうとも思ってるのか。  
俺のすそを引っ張ってきた。

「……なに？」

「……」

真っ赤になってるが無言だ。

「撫でて」

片言だ。

俺も最近わかってきたんだが、こう言う場合は確実にただの、成り行き+やきもちなのだ。前の世界でのツンデレリル改め、ヤンデレリルで学んだ。この属性はなぜか、異常にやきもちを焼く。放っておくと涙目になるからいじめすぎるとダメだ。

俺は凜の頭をなでてやる。

嬉しそうにしているのだが、嬉しそうにしているのを見せないようにしている感じだ。

「……ん」

後ろで声が出たので、振り向くとセイバーが起き上がっていた。

「なっ！？ はなれてくださいシロウ！」

いきなり、イリヤに向かって剣を振ってきたので、加速させ、剣を蹴り飛ばす。

「何をするのですかアーチャー！ 裏切ったのですか!？」



……。

「セイバー……、イリヤは仲間になった。だから剣を引いてくれ」  
「なっ!? では何故最初はあんな……」  
「刻がバーサーカーをあと一回まで倒して、確実に倒せるってところまで持って行った。それで取引をしたんだ」

士郎が簡潔に言ってくれた。

「……、確かにアーチャーなら倒せたでしょうが……。なんか納得いきませんね」

不満そうだけど、納得しろ。

「ねね、お兄ちゃん。お兄ちゃんはうちに住む？」

何か懐かれたようで嬉しいが、

「いや、俺達は士郎の家に泊まるから。お前も来るか？」  
「「「なっ!?」」」

「いや、だって、広さ的にも、学校への近さ的にも一番いいだろ？」

凜は何やら考え込んでいるようだが、

「そうね」

「遠坂!?」

「一か所に固まっていた方がいいのよ。それに、今現在最強のサーヴァントが三体よ? 絶対負けられないじゃない」

「確かにそうだが……」

最強でもないんだよな……、魔力的にセイバーより大きいのが  
感じるし。

「あ、お兄ちゃん達。わたしはずっと街を偵察してたんだけど」

イリヤがニコニコと喋りだす。

他のサーヴァント達も手を組んだみたいなの



## 八八話 バーサーカー（後書き）

このあたりから独自ルート入って行きます。  
ストーリー通りとかやったらボロ出まくり。

## 八九話 作戦 ルビー（前書き）

今回ほどウィンドウズのアップデートがむかついたことはありません。

かなりの文章量で書いて、読み返してる最中に、仮眠取りました。

起きたら……（、・・・、）

やる気がどん底まで落とされた……。

二回目だからしょぼくなった。

もう、思考とかもどんどん変わってるし、完全に別世界に変わってききましたね。

イリヤの目的……だよ？ とか言われても、知りません。これは違う物語です！

## 八九話 作戦 ルビィ

### 士郎の家・屋根

現在時刻零時過ぎ。

俺は屋根の上で寝ころんで、一人思考中。

って言うのも、凜と同じはなれに居候してるんだけど、凜は宝石剣を解析中。

ステンノとエウリュアレはその部屋で熟睡中。考え事は一人に限る。

俺が考えた方法は、まず異世界から環境を抽出。

って言うっても、この場合の抽出は周囲に疑似的に俺の世界のルールを創り出すだけ。

で、この世界でわかったことは疑似回路。魔力回路のことだ。この世界にはもともと魔法とか魔術は存在しない。それを疑似的に世界に繋げて汲み取り使用している。

だから、空間と時間のページの世界にも疑似的につなげればいいんだけど……、全然うまくいかなくてどうしようかなと……。

俺がうんうん唸っていると、

「刻？」

足元で声がした。首をひねってみると、俺が架けた梯子を上り、屋根上に顔を出している土郎。

「ん、どうした土郎。こっちゃこい」

俺は横の瓦をぱんぱんと叩いてやる。土郎はそこに腰をかける。

「うわっ！？ なんだこれ。暖かいぞ？」

「ああ、魔術で俺の周囲の温度を上げてる」

『へー』とか言ってるが、俺は魔術なんて使えないから、魔法だな。

俺は寒いのが苦手なのだ。と言うか熱いのも苦手だ。だから、周囲の温度は常に変えている。普通冬場に、こんな所に居れないしな。

土郎はなかなか喋らない、もしかしたら梯子を見て上がってきただけかもな。

俺は宝具の事に思考を移す。

数分経ち、

「なあ、刻」

唐突に土郎が口を開いた。

「ん？」

「刻はなんでそんな強いんだ？」

なんだ……、いきなり藪から棒に……？

「強くなりたくて強くなったんじゃない。俺の願いが、強くないと手に入らないから強くなった。そして、これからも強くないとならない」

「いまの俺じゃ敵わないとわかってるから、強くないといけない。もつともつと。」

「俺はさ、昨日セイバーがあんなになっても、何も出来なかった。あの時ほど力がほしいと思ったことはないさ」

横を向いてみると、士郎は寂しそうだっただ。

「だったら強くなれ士郎。ぶつちやけ、今の士郎に願う権利なんてないからな。願うくらいはいいが、それを実行出来ることが許される実力がない」

むかし、当麻に言ったことと同じことを言う。

「俺は、理想を叶える為に強くなりたい」

ふむ……、悔しそうだな。

士郎は、拳を強く握り、悔しそうな顔をしていた。

「お前の理想　夢は？」



「誰も傷つかないでいい世界。そんな世界を……。これは親父の夢、すべてを助ける“正義の味方”になりたいんだ」

誰も傷つかない それは理想。夢。俺が求めていたもの。そして、いつか出来たらいいなと言う願望。出来るとは思っていない夢。

「笑つか？ この年になってこんなことを言ってる俺を」

そう言って、土郎は苦笑した。

「いや、別に。だけど それなら俺はお前を強くすることは出来ないな」

「え？」

それが夢なら、矛盾が生じてしまう。

「お前が“正義の味方”になるなら、俺がお前を強くしたら矛盾が生じてしまう。将来必ず、お前が強くなかったらって思う奴が出てくるだろ？ そいつらにとってお前の強さは“悪”だからな」

俺は苦笑しながら言ってやる。

「それでも俺は」

「ああ、別にお前の夢をバカにしてるわけじゃないぞ？ それを指してくれて構わないし、俺に意見する資格なんてないからな。俺の願いも“正義の味方”だし」

「え？」

俺は鼻で笑いながら続ける。

「俺の“正義”は自分の周囲　大切な奴だけを守ること。幸せにすることだ。他者が死のうが何しようが、干渉するなら殺す。これは誰にも文句を言わせないさ。これが俺の願い。“自己満足”って言う夢」

士郎は黙り込む。

「俺が今まで、この願いのためにどれだけ他の願いを潰してきたかわかるか？」

苦笑しながら問いかける。

「わからない……でも、一万は超えるだろ？」

甘いなく、士郎。

「まず、俺が殺した約30万に、俺が決めてきた国、我がままで創った星。」

ルールで死んだ奴は一体どれほどか。

「約10兆人、殺したのは約一兆人くらいじゃないか？」

「なっ!?!　地球の人口超えてるじゃないか!?!」

「俺はサーヴァントだぞ？　この世界の人口なんて関係ない」

人間だって、他の生物にとつたらただの侵略者だしな。

「な？　夢を持つことは人を悲しませること、人を殺すこと。

それがどんなささやかな願いだとしても影響を及ぼす。だから士郎……」

俺は士郎の目を見つめ、

「どこまでも夢を追ってみろ。そしてたくさん恨みを買え。そのあとに、振り返ってみろ。自分が歩いてきた道を。間違ってたなら戻ればいいさ。合ってたなら進めばいいさ。戻れなくなる前に振り返ってみろよ？ それを忘れたら破滅まで一直線だ」

俺はすでに戻れないからな。茨どころか、全方位剣山の道を選ん  
でしまったから……。

そこで横を見ると、土郎は俺を見つめていた。

「俺は“正義”の道を歩いてみるよ」

覚悟した奴の目をしていた。俺が何度も見たあの瞳。

「それがいいさ。忘れるなよ……土郎。何を思ってそこに至ろうと思っただか。至った後に、一度振り返ることを。人生の先輩の言葉だ」  
「年齢なんてほぼ変わらないだろ？」

「はは、違くないな」

実際は一億以上離れてるが、そんなことは今はどうでもいい。  
いま言ったことは、俺が前の俺に言われたこと。きっかけを忘れたらいけない。

「俺も探してやるよ、お前がそこに至れる力を。凜のサーヴァント  
でいる間だけな」

「ああ、サンキューな」

俺達は苦笑し合う。

俺が魔術師だったら、教えてやれただろうが、俺には無理だ。何か思いついたら教えてやるかな。

士郎は立ち上がり、

「また何かあったら相談していいか？」

「ああ、俺はいつも夜は此処にいるからな。いつでも来るといい」

士郎の方は向かず、手を振ってやった。梯子が軋む音がすることから、士郎は降りて行ったのだろう。

流されるままに生きたほうが楽っちゃ楽だけどな……。

あいつがそれを望まないならその道を行くといいさ。

俺はそのまま目を瞑り、眠りについた。

## 昼

士郎は何やら悩んでいたもので、今日は俺が昼食を創ってやった。作ったのではなく創ったところがポイント。

それを俺は披露する。

「負けたわ……」

「負けた……」

「おいしいわ」

「いつもどおりおいしいわね」

「おいしいわ」

「アーチャー！ お代りを所望する！」

士郎と凜落ち込む……。

「士郎と凜、材料が違うんだよ。最高級材料使ったから、作り手の腕なんてほぼ関係ないだろ？ セイバーは台所に行ってみろ」

士郎は顔を上げた、セイバーは台所に行った。

「そういえば、よくこんな食材手に入ったな？ 売ってないだろ？」

「おおおおおおおお！……！！！」

台所から、壊れたセイバーの叫びが聞こえた。台所に大量に料理を削ってやったからな。

「ああ、食材調達のルートは秘密だ。料理人の生命線だからな」

俺は適当に言ってやったが、士郎は納得したようだ。  
それよりも、

「凜、お前なんでそんな目の下にクマ作ってんだよ？ 百年の恋も一瞬で憎悪に変わるくらいの見ただな。髪もぼさぼさだし」

「そ、そんなことないわ！ そうよね衛宮くん！？」

いきなり話を振られた士郎は慌てて、

「あ、ああ。十分キレイだと思うぞ？」

「な　！」

「バカ！ 凜はそう言うのに全く慣れてないほどモテなかったんだからな！？ ほらみる！ 真っ赤になって士郎にメロメロじゃないか！？」

「何言ってるのよ？ それぐらいで　ほあっ！？」

俺は凜の背後に転移し、パジャマの上から手を突っ込んだ。

「下着くらいいつけるよ凜……。どんだけ無防備なんだお前……」

凜は真っ赤になって、目を見開いている。思考が働いていないのか、全く振りほどこうとしない。

「さすがですなアーチャー。今の動き、私には目で追えませんでした」

料理を自分の周囲に置き、とつたら殺すと言わんばかりにがつついてセイバーが言葉を発した。

「そりゃそうよ。だって今のは」

「ああ、イリヤ。言わなくていいぞ？」

「そう？」

イリヤは鋭すぎる……。さすが魔力の塊。昨日解析してみたが、イリヤは魔術回路で出来ている人間のようだった。と言うか、絶対に生まれないであろう人間。むしろ、神に近い構成。十中八九作られた存在だろうな……。

「つて、刻！　いつまで胸揉んでるのよ！？」

お前が振り払わないからだろ……。

俺は凜を離してやり、移動してイリヤを膝の上に乗せる。

「それでね」

「待って！」

イリヤが話し始めようとしたのに凜が邪魔をする。

「何でそれで普通に話し始めるのよ！？」

俺とイリヤを指さして言う。

「お兄ちゃんだから普通でしょ？」

「妹だし？」

俺とイリヤは顔を見合わせる。

「本当の兄妹じゃないでしょ!？」

全く何が不満なんだコイツ。

「ステンノ、エウリュアレちょっと来い」

二人が近寄ってきて、俺の両隣に座る。

「ほら、仲のいい兄妹達の団らんだろ？」

「違うわよ!？　ロリコンが少女三人を待らせている構図だわ!」

「ヒドッ!？」

「はぁ……、後で一緒に風呂入ってやるから我慢しろよ」

溜息をつきながら言ってる。

「わ、私は別に……別にいいけど」

真っ赤になりながらそっぽを向く凜。

何なんだよコイツ……。

「話を戻すわね？」

イリヤはコホンと一つ咳ばらいをし、話を続ける。

「まずサーヴァントなんだけど、キャスター陣営。これは柳洞寺を本拠地にして、結界を張ってあるわ。結界のせいであまり、調べら



れなかったけど、3体のサーヴァントがいるわね。それで、あとは他のサーヴァント。アサシンはわたしが倒したから、ライダー、ランサー。あとわたしの知らないサーヴァントで組んでるわね、で

「

「ちょっと待ってイリヤ！ それだと、合計10人のサーヴァントがいたってことになるわよ!？」

「話の腰を折らないでよリン？ そうよ、今回の聖杯戦争は少しおかしいの。多分、聖杯ではなく他でサーヴァントの維持魔力を補ってるわね」

「だって、サーヴァントよ!？ そんな魔力どこから」

「あるぞ凜。補う方法が」

俺は少し考え込み言った。

「ええ、だったら、人間から魂、エーテル体を回収すればいいのよ。英霊だから相当な人間を犠牲にしてるわね」

「『なっ!?!?』」

凜と士郎、セイバーが驚きの声を上げる。

一番簡単な方法だ。人間にだって魔力はごくわずかだがある。それを摂取すればいいだけ。

例えば、俺が神霊だとしたら、地球一個分くらいの人数を犠牲にすれば、数分くらいなら実体で居れる。凜やステンノ、エウリキュアレが死ななかつたのは俺が実体だったからだ。

「あとは、大きな力が二つ街に入ったわ。たぶん人間じゃないんじゃないかしら？ 多分英霊よりも強いわね」

「『なっ!?!?』」

またしても三人が驚く。確かに俺でも感じ取れるほどの魔力が…

…。多分天災規模、地球くらいなら破壊できそうな魔力保持者が。

「あとは、魔術協会も来るわね。お兄ちゃんが協会前で闘っちゃったんだもの。第六魔法目当てで来るわよ？ 封印指定確定。反撃したら抹殺指定。脳だけでも欲しいともうわよ。研究すれば、第六魔法に届くことが出来るかも知れないもの。言峰って神父が連絡入れたでしょうしね」

「あのエセ神父……！」

まあ、わからなくもない。俺の場合、地球どこるか宇宙移動まで出来る。研究できれば得るものは多いだろう。

てか、二つの大きな力つてのも、狙いは俺だろうな……。

あと……、サーヴァントは……、

「まあ、二つは置いておいて。サーヴァントが増えたのはいいな」

俺の言葉に、マスター三人が不思議そうな顔をする。

「聖杯は6人のサーヴァントの魂で完成するだろ？ 今回は10人だぞ？」

「「あ！」」

士郎以外は気づいたようだ。

「え？ え？」

アホか士郎！

「衛宮くん……、あのね？ わたしたち三人＋一人が残った時点で聖杯は完成するの。だから、他を倒せばそれで終わりなのよ」

「あ」

遅いな!?

「で、問題だけど、四人残ってるから更にそこで戦闘がある。手に入るの一人だからな。まず、もう一人は倒したとして」

うむ……。

「わたしはいらわないわよ？ 聖杯戦争終わっても、刻は実体だから維持出来るし」

「私もバーサーカーは維持出来るからいらさない。第三魔法とかどうでもいいもん」

凜とイリヤが言う。

「俺はいらないけど、セイバーに使ってもらおう」

「……すみません、シロウ」

すまなそうにセイバーが言う。

「ま、それは決まったからいいとして、どこから攻めるんだ？ マスター三人。俺達は従うぞ？」

俺は三人を見回す。

「そうね、場所が特定できてる方がいいから、キャスターかしら？」

「それがいいかも」

「俺はよくわからないから従うよ」

ふむ、場所も決まったようだし、俺も聞きたいことがあったんだよな。

「聖杯ってなんなの？ 名前の通り杯？」

見まわしてみるが、誰も知らなそうだ。

「聖杯はわたしよ？」

イリヤの言葉に全員が驚く。

「聖杯は、サーヴァントの魂を入れる器なの。6人分たまったら大聖杯“根源の渦”と繋がる道を降ろす器」

ふむ、でもイリヤからは水のページの気配がしない。多分大聖杯に寄生したんだろうか。と言うか、多分“根源”が水のページなのだろう。実質保持魔力は無限だし。

「って言っても、今回は何故か違う聖杯が起動しているみたいなの。アサシンを倒したけど、わたしの中にもないもの」

ふむ……、でもそれはそれでよかった。さすがにイリヤを殺したくない。

「ま、どうせ6人倒せば出てくるんだろ？」

「ええ」

それならそれでいい。どうせ倒さないとけない事実が変わりはない。

「じゃ、今から行きましようか？」

何を言いだすんだ凜？

「そんな目の下真黒にして、シヨウジヨウバエの子供のように目真つ赤にしてどこに行くつもりだ？ ファーストキスすらしたことがない凜が更にするのが遠ざかるぞ？」

「わ、わたしだってそれくらいしたことあるわよ!？」  
「俺以外に？」

ニヤリと笑ってやる。

「くっ……、衛宮くん！ わたしってそんなにモテないかしら!？」

また士郎が振られて慌てる。

「い、いや。学校ではアイドルっぽいぞ？ 俺もキレイだと思うし」

「バカッ！ 士郎コイツに言うなって言っただろうが!？ ああ、また真つ赤になって処理不能だ！」

「ちよつと！ わたしはそんな はふっ!？」

俺は転移し、凜にキスをした。ついでに魔力供給。

だが、これは布石。実は試したいことがあったのだ。

「な、なにするのよ!？」

真つ赤になった凜は放つて置いて、俺はある杖を創造。

金色の円の中に星。円からは左右に3枚ずつの羽根が生えている。柄は赤。変身ステッキのようだ。

「なっ!? そ、それはカレイドステッキ!?」  
『やや、はじめまして皆さん。私はカレイドステッキの機能、指針、気持ちなどを代弁する人口天然精霊、マジカルルビーと申します。どうぞ、気安くルビーとお呼びください』

ステッキは宙に浮き、喋る。

「だ、大丈夫! わたしは契約なんてしてないもの!」  
「はははは! 俺が創ったコイツは契約なんて必要ない! 俺の命令で即契約だ!」  
「なっ!?」

逃げようとする凜。

「行けるルビー!」  
『はいさ! 主様!』

さて、凜の体内から血液のマスター認証してつと。  
凜の手にステッキを転移。

「はっ!? ふざけないでわたしは 負けないわ!」  
『無駄です、契約の手順はすべて整いました! 接触による使用の契約、私を起動させるためのエネルギー確かに頂きました!』

ぎゅんぎゅんとステッキは光りだす。

「わ、わたしは……魔力なんておくつてないわよ!」  
『ノンノン、カレイドステッキの起動に必要なのは魔力なんてチヤチなものじゃありません!』  
「え?」

『必要なものはラブ！ それも意中の男性に対する、素直になれないスーパー乙女力なのですよー！！』

「はは……なにそれ……もう死にたい……」

凜はそのまま涙を流して倒れた。

『ち・な・み・に！！ マスターの意中の相手は主様です！ もう抱きしめてチュッチュしてもらいたい気持ちでエネルギー満タンです！』

うわー……引くわー。

「遠坂！ 俺がいま助ける！」

士郎が頑張ろうとしたが、凜はガバッと立ち上がった。

「いえ、何の問題もないわ衛宮くん。マジカルルビーは正義の精霊。彼女の行動に間違いは一生微塵もないわ。わたしは正義の魔法少女。わたしの行動には正解は一つもないわ。そう 逆らう悪党には、反撃さえ許さない」

「あああああ、契約ってか洗脳じゃねーか!?!」

士郎落ち着け！ 俺も理解が追いつかない！

「黙るわ、衛宮くん！ わたしは魔法少女。愛と正義の為に戦うのに、何を恥ずかしがる必要があるの？」

「凜、お前ちよつと危ないぞ？」

「何を言ってるの刻。わたしの愛はいつでも刻に向いているわ。貴方のハートにストロベリー？」

そう言って、凜は俺に銃の形にした手を向けてバーンとか言うてる。

「士郎……、俺はちよつと寝てくる」

「待て刻！ お前がやったんだろ！？」

「いやいや、こんなもんだと思ってなかったぞ？ 魔力ブースターって説明しか……。」

「主様を邪魔する悪党はわたしが許さないわ」

もう、ルビーと意識が交じってる！ てかルビーが言わせてるだろ！？

「さあ、いくわよシエロ！ コンパクトフルオープン！ 境界回廊最大展開！」

なんかポーズ決め始めた！ しかもステッキの名前変わってるし！

「Der spiegel form wird fertigung Transport！」

「Ja, meine Meisterin  
Offnung des Kaleidoskopsgatter」

突如、凜が光に包まれ、光の中からは、

「お待たせ！ 魔法少女カレイドルビー！ ここに誕生！」



ポーズをしている猫耳凧。服は袖のないスカートタイプの真っ赤なジャケット、下には白い短いスカート。変なマント……。腕には真っ赤な二の腕まである手袋……。いろいろなまじい人間だ。てか完全な魔法少女だ。

カシャ

とりあえず俺は写真を撮った。これしか出来ない俺を許してくれ凧。あとで一枚やるから。

「さあ、行くわよ 正義と愛の執行者カレイドルビー、わたしの道にはストロベリーキュートな血塗れの愛が道を作るわ」

そう言って、ピースにした指を目のあたりに掲げて、ウィンクする。

正直ドン引き。

「そのとおりですマイマスター！ 次週、新番組魔法少女カレイドルビー第一話、“愛と勇気が友達さ！”でも、他にも居るからね？”にスカーレット・スカッド発射ですよー！”

やばい……。気分悪くなってきた。

「あつれー、わたしの愛を阻む壁、行くわよシェロ！」

『はい！ マイマスター！』

「開けシュバインオーグ！ 我は我の望む場所へ、我は我の望む法を！ せーの、S e s a m , o f f i c e d i c h !」

『キヤー 素敵ですマイマスター！ やりましたー！』

膨大な魔力が壁にぶち当たり、爆発とともに壁を壊し去った。

「ああああ！！！！　うちが壊れるー！！！！」

士郎の精神も壊れ去った。

『さて、契約がなされたことですし、私は引っこ込みますね。あ、記憶は残しておきます。でわ』

ルビーの気配は消え去った。

「はあい、お待たせ皆！　愛と正義のカレイドルビーのプリズムメイクをはじめまるわ、よ………？」

全員が凜の姿を見つめる。

次第に真っ赤になり、ぷるぷると震えてる凜。

「あ………れ？………あは………はは、は………」

きつと、今凜は自分の痛い言動を思い出しているだろう。何も言わないのが優しさだ。

「ねえ………」

俺達は眼をそらす。

「………いいわよ、笑ってよ」

俺達は無言。

「ねえ……ぐす……」

俺だったら泣きたくなるな。  
だが、俺は紳士だ。

凜を抱きしめてやる。

「え？」

「かわいいよ……、凜」

「……おかしくない？」

「ああ、全然……ぜ、ぷぷ……いよ」

「笑ってるじゃないの!!」

いや無理！ 笑い我慢しすぎて涙出てくる！

「リン元気だしたほうがいいよ？」

「ありがとうイリヤ、あなたも契約してみる？」

「死んでも嫌よ」

そういえば、

「凜。気になってたことがあるんだ」

「……なに？」

俺は凜のスカートを下からのぞきこむ。

「パンツまで変わってるのか……。しかもハートマークがついた子供パンツ」

「笑いなさい！ このわたしを！ ああ、死にたい！」

もう壊れそつだ。

「私、ああはなりたくないわ」

「そつね、私もですの」

ステンノとエウリユアレが言う。

「いやーでも、お前猫耳似合つな？ まるではじめから魔法少女カ

レイドルビーのような……ぷっ」

「笑つくらいなら慰めなくていいわよ！」

もうダメだ。この恰好でいたら俺の腹がはじける！

俺は凜をお姫様抱っこし。

「え？」

「今から俺は凜を着替えさせて、むしろ写真撮影に行くからじゃー  
な」

「つて、あんた絶対楽しんでるわよね!？」

楽しいもん。

そのまま俺は転移した。

八九話 作戦 ルビィ（後書き）

カレイド  
ルビィ

## 九十話 ライダー（前書き）

やっと90話了。

ちょっと疲れた……。

ライダーのマスターの書は、桜の令呪を写して二回命令出来る  
ってことにしてあります。

文句言われても知りません！

## 九十話 ライダー

学校

俺が情眼を貪っていると、凜にいきなり呼びだされた。しかし、俺に令呪を回避する手段はなかったのだ。これで凜の下着が何セツトになるかわからない。

「で？ いきなり学校に呼び出して何さ？」

もう来て早々胸糞悪くなる。

なんか、視界が赤いし……。昼なのに生徒達が全員倒れてるし、溶けてるし……。

これって、ギリシャ神話のアンドロメダが使った血の結界じゃね？ この世界ではメデューサの鮮血神殿って言うらしいけど……。吸血種が内部に入った者を血に溶かして、魔力として摂取する結界じゃん……。

「刻、これ解除出来ない？」

「出来るぞ」

「無理よね……、こんな複雑な構築の術式……」  
「……」

なんか爪を噛んで悔しそうにしてるが、話しかけといて一人で考  
えるなコイツ……。

「士郎、凜は放っておいて、マスターはどこだ？」

「いや、まだわからない」

ふむ。てか、この結界を解けばいいのか？ 俺的には解きたい。

胸糞悪いし。

俺は凜の胸を揉む。

「ちよ、ちよっと！ こんな時になによ！？」

「何よも何も、お前考え込むな。この結界解けばいいのか？」

俺の言葉に目を見開く凜。

「……出来るの？」

なんだその信じてなさそうな顔……。

『パチン』

俺が指を鳴らすだけで世界が戻る。

「あんだ、どうやって解いたの？」

どうやって説明すっかな？ 実際は結界内のルール変えたただけだ  
けど。



「複雑な魔法は構成が緩い部分があるんだよ。そこをひも解いてやれば崩れるさ」

めちやくちや 適当なことを言った。

「そう……、わたしはまだまだ未熟ね。気付かなかったわ」

悔しそうにしているが、俺もわからないから。

「とりあえず屋上行くぞ」

「え？ 何で？」

「結界解いたんだから、結界張ったやつが来るだろ？ ここで戦ってもいいけど、コイツら死ぬぞ？」

俺は足元の生徒を指さす。

多分、一日は起きないだろう。

「そうね、なら早く行きましょう」

士郎と凜は歩いて行く。

ま、理由はそれだけじゃない。結界の基点は屋上の階段から反対側。ここは遠い方なのだ。

それでこの有様。基点はおそらく骨まで溶けているか……、凜は魔術師の癖して優しすぎる。

多分、人の死すら見たことがないだろう。

そんな事を思いながらついてゆく。

屋上 Side 凜

刻の言葉で、わたし達は屋上に移動した。魔術師なら、あのくらい覚悟していたはずなのに、歯がカチカチとなっていたのが自分でもわかる。

刻はいつもどおりだった、マスターのわたしがあんなんじゃ呆れられるかもしれない。

「凜、来たらしいぞ？」

「え？」

屋上の入口を見ると、二人の人影。

一人は170センチを超えた長身の女性。

足元まである長い紫色の髪。

露出の高い黒い装束を着た女性だ。

目には紫色のサイバーゴーグルのような形の布をつけており、額には赤い蛇のような文字。

二人目は

170に満たない身長の人。

髪はウェーブのかかった青、茶色い制服……。

「どづいつつもりなのかしら 慎二」

わたしは最大限の敵意を込め、睨みつける。

「それはボクのセリフだろ。せつかく張った結界を壊してくれちゃって」

さも呆れたとばかりに答える慎二。

「慎二……、何でお前はこんなことを」

隣の衛宮くんが問いかける。たしか、衛宮くんは慎二と仲がよかつたはず。

「ああ、衛宮か。何って、ちょこっと魔力をもらおうと思ってね」  
堂々とぶざけたことを言う。

「アンタはっ！」

「おや、そんな怒らないでもらいたいね。サーヴァントの力を上げるなんてみんなやってるだろう？」

ニヤニヤわらいながら言った。確かにセイバーも刻に貰ってやっている。だけど、関係者以外から無理やりもらうなんて！

自分でもわかるくらいに震える。怒りが抑えられない。

その時、刻の令呪が光った。

そして、二人の人影が現れる。

「あらあら、駄メデューサ。貴方はそこまで堕ちたのね？ つくづく救えない子」

「全く誰に似たのかしら？ そんな不細工な男の下につくなんて」

嫌味な笑いを浮かべるステンノとエウリュアレ。

「お、お姉さま！！ こ、これにはわけが」

途端に、顔を青ざめさせるライダー。

意味が分からない。

「そうね私と私の躰が必要かしら？」

「帰ったらしっかり躰ないといけませんわね」

「ヒッ！！？」

がくがくと震えだすライダー……。なんだろうコレ。

「刻……これは？」

唯一知っているであろう刻に声をかける。

「んー、ゴルゴン三姉妹の日常？ 姉が妹を連れ戻しに来たんだよ」

つまり、あの小さな二人が姉だと。

「鑑賞用にすらならない不細工に従うなんて貴女らしいわ」

「ええ、本当にお似合い」

「ち、違いますお姉さま！ 私は望んだわけでは！」

ちなみに、慎二はこれでも女子にかなりの人気がある。だけど、ステンノとエウリュアレの美貌はまさしく神のそれだ。そんな二人にとっては人間など不細工なのだろう。

唯一刻だけには心を開いているようだが……。  
確かに刻はかっこいいが……。

「な、何なんだお前達は！ ぼ、ボクが不細工だと!？」

慎二が怒って言うが、

「あら？ 不細工が私に話しかけないでくれないかしら？」

「移ったら大変ですし」

いっそ哀れにすら思えてくる。完全に見下して話す二人。  
あそこまでの美少女に言われたらショックだろうな、と思う。

「くっ、許さないぞ！ ライダーあの二人を殺せ！」

「い、嫌です！ それだけは！」

ライダーが震えながら後ずさる。

「何で言うことを聞かないんだよ！ 殺せ！」

そして、慎二が持っている本が輝く。たぶん、アレが令呪の変わりならば。

『ドスッ』

ライダーから放たれる二つの50センチほどの鎖付きの杭。それが ステンノとエウリュアレの胸に突き刺さる。二人の薄い胸を貫通し、背中に抜けている。飛び散る潜血。流れる血が地面を濡らす。そのまま二人はうつ伏せに倒れた。調べなくてもわかる。二人は助からないであろうことが。

「あ、ああ、お、お姉さま……？」

震えるライダーの言葉に、

「め……メデューサ……？ まったく……あな……たは」

「ねえ……めゆでー……さ……わたしは……」

ゆっくりと言葉を紡ぐ二人。

「「ほんとうは……あなたにあこがれていたの……」」

動かなくなる二人。英霊ですらない彼女達は消えない。  
この場で死を迎える。

突如、空間がひび割れる。

まるでガラスのように、そして、ありえないマナの濃度。

息が出来ない。

隣を見ると、衛宮くんも同じようで、空気を欲して口をぱくぱくとさせている。

「貴様は何をしたか分かっているのか小僧……」

静かな、それでいて威圧感がある声。

その発信源は わたしのサーヴァント、刻。

「な、ななにを」

「黙れ、貴様が何をしたかわかっているのかと聞いたんだ小僧が」

いつもみたいに、ふざけている刻ではなかった。

双方の瞳が黄金に光輝き、空間すらもひび割れる魔力を放ち続ける刻。

わたしは気づいた。きっと刻はわたしに召喚されていいようなサーヴァントじゃなかった。

こんな者が誰に召喚出来ようか。まさしく規格外。他のサーヴァントなど、刻にとつたら赤ん坊にも満たない存在だろう……と。

「さ、サーヴァントなら……死には」

「サーヴァントだと？ どの口がそれを言うか？ そんな口いらないよ？」 『潰れる』

次の瞬間、慎二の口は潰れた。顎がなくなり……歪な顔に……。

「ッ!!!」

痛みで膝をつく慎二。

「貴様がしたのは神殺し。人間如きが神を殺す。それがどれ程の罪か貴様はわかっているのか？」

突如、慎二の本が光る。たぶん、令呪を使って刻を殺そうと思ったのだろう。

わたし達と士郎の周りに結界が張られる。術式などなく、いきなり。

そして、ライダーの眼帯が外れる。中からは黄金の瞳が現れた。メデューサの石化の魔眼。強力な上位の魔眼。見ただけで相手を石化させる魔眼“キュベレイ”。

しかし 刻は全く平然としている……。

「ごさかしい真似をするな小娘。島で姉を待っている。『消える』」

刻が言葉を発するだけで、ライダーは燃え上がり、消え去る。

多分、これで、彼女は元の島に戻る。ただし、姉がいなくなつた島に。

刻は慎二に向きなおる。

「さて、神殺しをした貴様には死んでもらうぞ？ 一瞬で殺すなんて言わず、ゆっくりと殺してやろう。先ずは『腕』」



慎二の両腕が千切れ飛ぶ。

「……………?!?!?!」

叫びにならない声を上げる慎二。

『足』

両足が千切れ飛び、ゴトンと、体が地面に落ちる。

「意識が切れないようにしてやっているんだ。感謝しろよ？ 痛みは残しているがな」

ひたすらに無表情で言葉を発する刻。

正視に堪えない光景。痛みだけを与えられる慎二は眼球が裏返し、白目のまま、声にならない叫びを上げる。

刻は前に腕を出し、

『潰れる』

刻が拳を握った瞬間。慎二の体は弾けた。

まるで大きな手に握られ、隙間から飛び散るように血や肉塊が飛び散る。

「げほっ……………あ、ああ」

わたしは膝をついて嘔吐する。

隣では、衛宮くんも同じように胃の中のを吐き出している。

刻は強かった。宝具が強いと思っていた。体術が強いと思っていた。だけど……、

刻の本質は 魔法だ。アレは宝具なんてなくても、魔法だけで頂点に君臨する覇者だ。

言葉だけで生命を、事象を操作できる能力。魔術師では決してたどり着けない領域。

刻がサーヴァントとして呼ばれたのは何かの間違い。英霊なんて生易しいものじゃない。

瞳で気付くべきだった。ステンノとエウリュアレと同じ瞳。神の黄金。神そのもの。

刻はそのまま、二人に歩み寄る。

血を流して絶命した二人。それを、仰向けに起こし。

「ごめん……、二人とも……。俺のせいで、俺なんかと契約したせいで……」

涙を流していた。

自分のせいで死んだのだと。

「今、治すから……」

もし、魔術師なら不可能。魔法使いでも不可能。

絶命してしまった神の蘇生。一体どれだけの神秘なら神を蘇生出来るのか。

それでも

「Ich beginne die Schaffung von  
Gott」

《神の創造を開始する》

息もつまるような魔力の奔流。  
すべてのマナが刻の周りに集結する。

『Ich baue Existenz wieder auf』

《存在を再構築》

体が戻ってゆく、まるで巻き戻しのように。

『Ich baue einen Wunsch wieder auf』

《願いを再構築》

神の誕生に込められた願いが。

『Ich baue Bedeutung wieder auf』

《意義を再構築》

込められた存在意義が。  
だんだんと、神秘性が戻ってゆく。

『Ich baue Glauben wieder auf』

《信仰を再構築》

神としての格が。  
人の意思までも捻じ曲げて信仰させる。

『Der reinvention endet』

《創造終了》

光が納まる。

それでも、二人は眼を覚まさない。

「これからは誰にも手出しさせないように」

突如、刻の手に二つの鞘。青く、美しい鞘。

『アウマロン  
全て遠き理想郷』

その鞘は光輝き、二人の体の中に入り込む。

あらゆる物理干渉や魔法すらも遮断し、傷や病、老化をも癒す結界宝具。

この世の理すら遮断する最高の結界宝具。

『Beginn von Gott』

《神の降臨》

二人の体が光輝く。

まるで、神の魂が戻ってきたような。

「戻っておいで、二人とも」

刻が優しく呟くと、光が薄れる。

そして、二人がゆっくりと瞳を開ける。

その二人を抱きしめる刻。

黄金の瞳を輝かせながら、優しく抱きしめる。

「あれ？ パパ？」

「お父様？」

「おかえり、二人とも」

二人は、優しく微笑む刻を見つめ、

「「ただいま」」

抱きつく二人。

黄金の瞳の三人が抱きあう。

神秘的な光景ですらある。

否　神々の光景そのもの。

でなかったら、なぜわたしと衛宮くんは泣いているんだろうか。

二人が蘇生したからではない。絶対に違うと言いきれる。

神に対する無自覚の信仰。敬ってしまう。称えてしまう。人間の  
根源の部分が無自覚に敬う。

多分、わたしのサーヴァントは今までで一番の大物なのだろう。

神ですら創りだせる使い魔。一体どれほどの存在ならそれが出来る  
のだろうか。

確かにこのサーヴァントに願いなんでないはずだ。そんなもの自  
分で実行出来るのだろう。

偶然でも、そんな使い魔を召喚出来たわたしはきつと幸せなのだ  
ろう。

それとも　不幸なのだろうか。

人間のちっばけさをあらためて感じてしまう存在。

そこで、刻はコチラを振り向いた。

## 屋上

本当に良かった……、蘇生できなかったらどうしようかと思った。  
俺のせいで、二人が死ぬところだった。  
二人の探し人が見つかって、令呪を使って呼んでしまったけど、  
あれは失策だったな。二人を喜ばせようとしたけど、一回殺して  
しまった。

そう言えば、メデューサは先に帰しちゃったし。

後で謝っておかないとな、二人に。

俺の胸に顔をうずめてる二人に。

だけど、今はもう少しこの二人が戻ってきたことに感謝したいな。

慎二って奴は知らん。士郎にも言ったけど、他人と仲間じゃ、仲間一人のほうが全然大事だ。

しかも、あんな結界張りやがって。うん。全然後悔してないな。どンドン自分勝手な神になっていくわ俺。

そこで気付いた。

あとの二人を忘れていた。

俺は凜と士郎に視線を移す。

……。

なぜか二人は泣いていた。そして、吐いた後が……。

「すまん……。ちよつとグロかったか。さすがにムカついた」

俺は軽く二人に頭を下げる。

「だ、大丈夫よ!? わたしも慎二は許せなかったし」

「あ、ああ。殺したのはちよつとアレだが……。平気だ」

なんかすごく焦ってるぞ? 士郎なんて正義を目指してるのに死んだの容認してるし。

とりあえず、俺は邪魔な肉塊と血を消し去る。殺人現場みたいだし。

「「なっ!?!」」

「え? 消さない方が良かった?」

二人がなぜか驚いていた。

「い、いえ! 大丈夫よ! じゃんじゃん消しちゃいましょう!」

何言ってるんだ凜……。お前自分で何言ってるか理解できてるか?

そのまま、俺は立ち上がり、

「とりあえず帰るか? 俺的にはステンノとエウリュアレが戻ってきたから御馳走にしたい気分だ」

「パパの御馳走!」

「死んだ甲斐がありますわ」

そう言っつて、にこにここと笑う。

「わたしは遠慮するわ……」

「俺も無理だ……」

む? 死体初めて見たんだなそっぴい。

俺はトマトジュースを二つ創りだし、二人に投げやる。

「……嫌味?」

すごいジトつとした目で俺を見つめる凜。

「いや、お前がそんな元気ないの似合わないだろ?」



俺が言っただけで、顔を真っ赤にする。  
そして、急にまじめな顔になり、

「ねえ、刻はわたしのサーヴァントよね？」

ほんとおかしいなコイツ。

「それ以外の何だって言うんだよ？」

「そ、そうよね！」

何なんだよ全く。

「さ、帰るわよ！ あんまり此処居たくないわ！」

そう言って、屋上を後にしようとする凧を浮かせる。

俺達と士郎も。

「わわっ！？」

「うわっ！」

「何で驚くんのだよ……凧には前も使ったぞ……？」

「ええ？ 何時よ！？」

「ほら、ランサーの時に前が落ちてきたら。その時受け止めた  
ただろ？」

『そういえばそうだったかも』とか言ってる。

凧がおかしいが、そのまま家に向けて飛翔する。

「刻って万能よね？」

「いや。全然だよ」

肩をすくめながら言ってる。凜は不満そうだが、事実だ。  
この程度じゃ全く歯が立たない星があるしな。

「あ、そついやステンノとエウリュアレ。メデューサ帰しちゃったけど、お前らも帰るか？」

二人の目的は終わったしな。

「んー、パパともうちよつと一緒にいるわ」

「私ももう少しいます」

そっか。俺ももう少し居たかった。さびしいし。

「じゃ、帰ったら凜の穿いてる下着をもらってっつと」

「っつて、何で!？」

「いやいや、約束だろ!？ もう助けないぞ!」

「わかったわよ! それくらいあげるわよ! 最近下着代がかさむわ……」

毎日俺にとられてるからな。

そもそも、コイツのお願い事が多すぎて俺が毎日数枚もらっつのだ。

「今日のは濡れてなかったらいいなー」

「きよ、今日は平気よー!」

「遠坂……、お前……」

はは、まあ、アクシデントはあったけど、平和だな。

やっぱ、大切なやつらが傷つけられると俺は我を失うな。

「刻の正義も見せてもらったけど、確かに力がないと出来ないよな」  
唐突に士郎が言ってきた。

「まあな。俺よりお前の正義の方が全然大変だぞ？ なんせ全てを救うだしな」

俺は苦笑しながら言ってる。

「何よ？ 刻の正義って？」

「ああ、遠坂は知らないんだな。自分の大切な人を守るんだってさ」  
「士郎！ それ以上言うな！」

まじ恥ずかしい。

俺の隣に凜が飛んできて、意地の悪い笑顔を浮かべる。

「刻の大切な人にわたしも入ってる？」

「私も入ってますか？」

「私もよね？」

二人まで便乗。

俺は無言。

「「「ねえ？」「」」

「あーもう！ 入ってるよ！ 当たり前だろ？」

もうヤケになって叫んだ。

なぜか凜が真っ赤になっている。

「ありがとうございますお父様」

「ありがとパパ」

二人が交互にキスをしてきた。  
こいつら多分ファーストキスだよな……。

「わ、わたしも、したいならしてもいいわよ？」

何言ってるんだ凜。

「さーて、急いで帰るかー」

「ちょ、ちよつと!？」

なんか怒りながらキスをしてきた。

てか、コイツも下手！ 歯がぶつかるってある意味才能だわ。ど  
んだけ強くキスするんだよ。

「刻はもてるな……やはり顔か……」

士郎が落ち込んでるし……。

俺達は、そのまま飛翔して家に向かう。

九十話 ライダー（後書き）

眠くて文章がわけわからない。

九一話 平和な日常（前書き）

久々に・hackやりたくなってきた。

ハセヲ愛してる！

九一話 平和な日常

林

周りには緑の木々が立ち並び、湿気が多い。  
と言うか……、樹海。  
転移だしね。

宝具の試作中。  
思った以上に難しい。とりあえず、疑似回路として、地球に同期。  
異世界につながるのはちょっと難しいので、試作段階でやってみる。

魔力は異世界の代わりに、俺の中からくみ上げてみる。  
空間と時間のページがある世界では使えないけど、原理的には合  
ってるか試すって感じた。

手には試作宝具のフォーク。普通のレン製フォークだ。

別に完成型がコレなわけじゃない。レン製でどこまで魔力許容量が保つかテストを兼ねているのだ。俺の知っている最高の物質がこれなのだ。

実質壊れることないレンの鱗だが、俺の場合は話が違う。確実に数発で壊れるだろう。

しかも、今回は俺の魔力だけだが、実際は異世界からのマナも取り入れるため、かなりの強度がないと弾ける。

『さて、ハク。テストするぞ？』

俺は内部のハクに声をかける。

『はい。あ、一応自分の周りに結界張ってくださいね？』

ハクの言葉に俺は、周囲に結界を張る。宇宙空間に威力を流し込むのだ。更に標的以外にも結界。

標的は前方の一本の木。真名解放でフォークを投げてどうなるかって感じた。

見事木を消滅させれば成功。貫通したり、刺さっただけとかなら、俺の制御が足りない。

俺はフォークを手に持ち、

『 試作品N01《フォーク》 』

適当な真名解放。

膨大な魔力がフォークに集まり、光輝く。ぎゅんぎゅんと輝きを増し、



視界全てを、白く塗り潰した。

大きな轟音と閃光を放ちながらの爆発。

飽和量を超えての爆発だった。投擲すらしていない。

見渡す限りの木々が全て消滅し、荒野に変わってしまった……。

繋げた未使用宇宙空間の許容量を超えて、溢れた余波で……。

『ハク、目標の木は消滅したぞ？ 貫いても、刺さっただけでもないし』

『何言ってるんですか！？ どの口がこれを成功だって言うんですか！？ こんなんじゃ使えませんよ！ ちゃっちゃと樹海を戻してください！』

そんなハクの剣幕に、俺はため息をつきながら樹海を元に戻す。

『どうすっかな……。さすがに制御することが多すぎて無理』

『ですねー、一つ一つの制御が大きくて、大変すぎますからね』

まじ出来る気がしない。きつと、システムをAIに任せても、AIごと消し飛ばす。

今は魔力をくみ上げることと、フォークに魔力を抑え込むことに集中した。

結果、フォークの強度の維持と、地球への同期が出来なくなり、地球のルールに従って飽和量を超え弾けた。

しかも……、これでもまだ試作なのだ。本来はもっと多くの制御が必要だ。

俺は大きくため息をついた。

『お父様、私たちを使つては如何でしょうか？』

唐突に、内部からエルの声がした。

『4つのシステムを、私たちが一つずつ肩代わりすれば楽ではないでしょうか？』

それは俺も考えたけどさ……。

『それすると、失敗した時にお前らに反動が行くんだぞ？ お前らで構成された武器つてことだし。だからダメ。却下』

『別に私はいいのですけど……、お父様がそう言うなら……』

下手したらコイツらが死にかねない。成功するってわかってたらすごく便利なんだが……、放つても俺の中に戻ってくるし。失敗を考えると無理。

『とりあえず戻るか？ もう一回一から構築しなおそう』

『はい。まだまだ時間ありそうですし』

ハクの言葉にうなずき、俺は転移する。

## 学校

そのまま、不可視状態で学校に来た。

まず、土郎は生徒会室っぽいところで、知らない男と飯を食っていた。

多分昼飯なのだろう。

んで、今は屋上。

屋上には一人しかいなかった。そこで、俺は不可視を解く。

「はあ、凜は友達の一人居ないのか！。さびしいよなー屋上で一人は」

「！？」

凜はビックリしたようだが、俺的にはその気持ちわかる。

だって、俺も最初の地球では一人でくっってたからな！

「ち、違うわよっ！ わ、わたしは一人の方が好きなだけなんだから！ ってか何で貴方が此処に？」

真っ赤になって抗議してきた。

にしても、購買の弁当かな。

俺は背後に五段積みの中箱を創りだす

「ほら、それじゃ栄養が偏っちまうだろ？ コレ食え」

俺は風呂敷に入った中箱を手渡してやる。

「……、わたしに太れって？」

ジトつとした目を俺に向けてくる。

「別に全部喰わなくてもいいよ。それにお前は華奢すぎる。食え」

俺は凜の買っておいた弁当を消し去る。

「ああっ！ もったいない！」

魔術に金かけすぎて金欠なんだよなコイツ……。

なんで宝石魔術とかするかな……、めちゃくちゃ金かかりそうな魔術だ。

俺はそんな事を思いながらも、テキパキと中箱を風呂敷の上に並べてゆく。

「……何このおせち料理？」

「重箱はおせち料理だった。」

「いいじゃん、普段のお前じゃ食べなさそうな伊勢海老とかアワビとかいっぱい入ってるし」

しかも出来たてだ。

「風呂敷の見た目は5段くらいだったのに、何で15段に増えるのよ？」

並べる際に創造しながらだからだ。

「ほら、洋中和勢ぞろいだ。値段にしたら100万超えてるかも知れない」

「なんで学生の昼食にそんなお金使うのよ!？」

「……別にお前の金じゃないしいいだろ？」

凜はそのままおせちにハシを運ぶ。

「ん、相変わらずおいしいわね」

「優秀じゃないと凜のサーヴァントはやっていけない。ホレ」

「素直にお礼を受け取りなさいよ……。紅茶って……。おせちには合わないわよね？」

紅茶が好きなんだから仕方ない。

「……おいしいのはわかるけど。これ幾らしたの？」

何で毎回金に換算するんだ……。

「値段は言わない。ホワイトティーとだけ言っておこう」

俺が言うと、俺の顔面に紅茶を吹き出しやがった……。

「あ、あんたは何でそんな高級品ばかり出すのよ!？」

「そんなことより俺の顔が紅茶とお前の唾液でびしょ濡れだ」

「!」

真っ赤になっているのはいいが、マジでやめてほしい。

俺はずいっと凜の顔に自分の顔を近づける。

「ホーラ、舐めて拭きとれ凜よ」

「!？」

「ほーら、お前の責任だ」

「待って! わかったからそれ以上近づかないで!」

凜はおずおずと俺の頬を舐める。

そして、屋上の扉が開かれた。ま、だから舐めさせたんだけどな。

視線を移すと、固まった四人の女子生徒。

ちなみに、凜は俺を舐めた状態で固まっている。

「いやー、遠坂もやるわねー、学校に男連れ込んでイチヤイチャするなんて」

肩まである茶色い髪の毛、サバサバしてそんな女子生徒が凜に声をかけた。

身長は160くらいだろうか？

俺は顔面についた液体を霧散させる。これで、ただ舐めているような状態だ。

凜は我に返り、バッと離れる。

「ち、違つわよ綾子！ コイツがわたしがかけた紅茶を舐めとれつて……」

「どこに紅茶があるのよ？」

当然の疑問だな。紅茶も消し去つてあるし。

凜は真っ赤になつてあたりを探すが、在るわけもない。

「……あの、わたし達は帰るんで……」

身長155くらいのおっとりしてそんな女の子がおずおずと言つ。こちらも肩まである茶色い髪。仕方ない、助け舟を出してやるか。

「ああ、コツチおいで四人とも。俺は弁当届けにきただけだから、一緒に食べるといいさ」

「え……でも」

ちらちらと凜の方を見る。

「凜、さすがに俺達の時間を邪魔したからって邪見に扱つことないだろ？ 帰つたらいつものしてやるから」

「なっ　　！？」

凜だけじゃなく、全員が真っ赤になる。って言つても、いつものなんて何もしてないけど。

四人はおずおずとこちらに近づいてきて、座る。

「どうぞ？　せっかく作ったのに凧が全部食べられないって言うから食べていいぞ」

俺は四人に、箸を渡して進める。ついでに、お茶も出してやる。

四人は遠慮がちに料理を口に運び、

「うまい！」

「おいしい」

「……おいしいです」

「……美味」

口々に言ってくれる。

「くあー、遠坂に負けたー！　料理がうまい、見た目も完璧！　しかもラブラブとは。この勝負は遠坂の勝ちか……」

ふむ、どうやらコイツら勝負してたらしいな。おおよそ、どっちが先に彼氏が出来るかとかかな？

「ちよつと待って綾子！？　刻は　むふっ！！？」

「……おお」「……」

話の最中で俺は凧の唇を奪った。

四人の顔は真っ赤だ。

「そうなんだよー、凧は恥ずかしがり屋だけだな、実は結構可愛いところもあるんだよ。そんなわけだから、このツンデレ少女を今度から昼飯にでも誘ってやってくれ。断っても本心じゃないと思った



方がいいぞ?」

俺はニコリと笑い、言ってる。

「刻! アンタ何を!?!?」

凜を後ろから抱きしめてやる。そして、耳を噛む。

「ああ、ごめん遠坂。私たち邪魔だったわね。せつかくの彼氏との時間ごめんなさいね」

そう言って、四人が立ち上がる。

「ま、待って」

「ああ、重箱10個くらい持って行ってくれ、どうせ余っちゃうから」

俺が笑顔で言っていると、二人が5つずつ持ち、俺にお辞儀をする。

「あの……、洗って遠坂さんにお返ししますね」

「ああ、じゃーな」

俺は笑顔で手を振ってる。四人のうち三人が顔を赤くし、わたしと屋上を出て行った。

「……ああ。わたしの印象が……」

凜は頂垂れていた。

「安心しろ、お前の印象は学校に彼氏を連れ込み、エロい事して、観衆の前でキスをしちゃうような人間と認知される」

「全然安心じゃないじゃない!？」

「てかね、お前お高く止まりすぎて友達いなくなるだろが。ツンデレもいい加減にしとけよ？　そもそも」

「ヒヤッ　!？」

凜のスカートの中に手を入れ、太ももをさする。

「いつもはあんな短いスカートとハイソックスなのに。なんで学校だとこんな長いスカートなんだよ？　どんだけ優等生にみられたいんだよ。ったく」

後ろから抱きしめながら、太ももをさする俺、危ない。

「先生とかに目つけられたらめんどくさいじゃない？」

「安心しろ。お前は不純異性交遊で地に堕ちたから」

「それは刻が!！　……はあ。もういいわよ。口で勝てるとは思ってないわ」

なんか諦めたようにため息をついた。

「そりゃあ、お前のキス下手だし勝てないわな」

「なんで言葉通りに取るのよ!？」

「コイツとの言い合いは面白いな。てか、からかうのが面白い!　つと、そろそろ時間だな。」

「さーて、俺はそろそろ帰るからキスだ」

「は　んっ!？」

とりあえず血液は無理だから、唾液を流し込む。  
飲み下すのを確認し、離れる。

「はあはあ……」

幻惑成分抑えてもこう毎回だとそろそろまずいな。

「まったく、刻はキスしすぎよ？ わたしじゃなかったら通報されてるわ」

真っ赤になり、頬をふくらませて怒る凜。

「じゃ、お前なら良いつてことじゃん？」

「なっ!？」

驚愕とともに俯いていしまう。

その時、チャイムが鳴り響く。

「あ、それじゃ、わたしは行くわね」

「おう、頑張つて来い」

俺は凜が出て行くまで手を振つてやる。

「にしても……、頑張りすぎあいつ」

毎日ほとんど寝てないのか、体力もなくなってるし。  
魔術行使で魔力も尽きかけてるし。

俺がからかいがたら魔力わけないと死ぬぞまじで。

そのせいで毎日セクハラまがいなことをすることになるけど。こんなこと続けてたら依存度がぐんぐん上がっちゃう……。

俺が異世界からの魔力供給をものにするのと、アイツが宝石剣を解析するのどっちが時間かかるかな。俺が早ければ並行世界の運営の研究手伝えるんだが。

ま、やるしかないか。帰ったら宝具の再構築だな。

そんな事を思いながら俺は消え去った。

もう何度目かわからないが、意味がわなからない。  
現在は居間で作戦会議中。

メンバーは俺、凜、セイバー、イリヤ。

双子はすでに熟睡中。毎日21時には寝てしまう。

「シロウが心配です！ 早く行きましょう！」

セイバーは必至だ。最初なんてすぐ走りだしそんな勢いだったし。

「待ちなさいセイバー。あなた一人で三人のサーヴァントを倒せると？」

「くっ」

何でも士郎がさらわれたとか。イリヤが偵察用の使い魔で見ているらしい。

令呪使わない程度なら大丈夫そうではあるが。

場所は柳洞寺。キャスター陣営だ。一体シロウを捕まえてどうするんだか。

洗脳してセイバーでも操ろうとしてるのか？ それはセイバーが最強なら効果的だが、現状どう考えても俺の方が強い。俺が契約を破棄させて終了だ。

「セイバー、念話で連絡とれないのか？」

「無理です。シロウは魔術師としては未熟で、令呪で呼びだす以外の方法は……」

セイバーは悔しそうに言った。

「俺は行くとして、イリヤと凜は？」

俺は二人に聞いてみる。

「わたしは刻が行くなら行くわよ？」

「わたしは家に残るつもりだよ？ 今回のようなことがないように、結界を張っておきたいし。全く、魔術師の家は言わば砦なのに、何で守りの一つも張らないのよシロウは」

イリヤはため息をついている。ま、たぶん士郎じゃ張ろうと思っても無理。

「じゃ、行くか？」

「そうね」

「行きましよう」

俺達は立ち上がる。

「セイバー。真名解放は何回出来る？」

「一回が限度でしょう」

ふむ……、十分かな？

「ならいいか。行くぞ？」

俺達はそのまま士郎の家を出る。

九二話 キヤスター陣営（前書き）

ゴキジェットでは蚊もハエも死にません。

お得だと思って買ったのが間違いでした。

アースジェットの缶に書いてある、ハエの絵がカツコイイ！

前書きとあとがきが日記になり果ててる）、・・・、（

## 九二話 キャスター陣営

### 柳洞寺

俺達は寺に向かって疾走中だ。

セイバーはすでに不可視の剣を取り出していて、俺も取りだしている。

「……刻？ それは何？」

「宝具だ」

「……」

走りながらも、全員が息切れをしていない。

既に数キロ走っているにも関わらず、だ。

ちなみに俺が持っているのは先端が二股に分かれた剣。ここまで言えばわかると思うが、彼の有名な英雄が使っていた剣。



「わたしにはネギにしか見えないのだけれど？」

「青葱だ」

「……」

刃は緑、柄は白。

電子英霊ミクが持っていた武器だ。

「あんたもつと強いの出せるでしょーが！ー？」

「お前！ ミク様バカにするなよ！？ 見てろ？ これの真骨頂はな」

俺はネギをくるくると回す。まるで魔法少女の変身シーンの様に華麗に。

「いたっ！？ 涙が……、玉ねぎ並よこれ！？」

「ふははははは！！！！ 見たか凜よ！ 歌具『永久ノ廻シ葱』を！」

「アーチャー！ シロウが大変なんですからちゃんとやってください！」

「すみません」

俺と凜は謝った。

だってさ、セイバーめちやくちやぶちギレてるんだもん……。マジ怖いよ？

下手したら真名解放してきそう。

ん？

「ストップ、二人とも」

小さな山の上にある柳洞寺の参道の下に到着し、俺は静止をかける。

「なによ？」

凜に返事はせず、俺は寺があるであろう山頂を見つめる。

凜もそちらを見るが、多分見えないだろう距離。

「セイバーはわかるか？」

「ええ。左が日本の刀を持った者ですね。右は宝具を持っていないようですが」

「なっ!？」

凜よ……、今更だぞ？ キャスター陣営には三人居るってイリヤが言ってたじゃん？

「順当に行くと、刃物対決はセイバー、俺は右。凜は土郎の所まで走るって感じか？」

凜じゃサーヴァントは無理だろうな。

「それがいいでしょう」

セイバーは表情を引き締める。

「あと、セイバーは速攻で真名解放でもして、凜と上に行ってくれ。凜と土郎でキャスターを倒すなんて無理だしな。よくて、数分抑えられるくらいだろ？」

「シロウが心配です。そうします、あの……」

セイバーがなぜかしどろもどろに……。

「終わったら……血をもらっても……」

ああ、真名解放なんてしたらこれから戦闘が出来ないよな。

「別にいいぞ、とりあえず俺は右の林を突っ切る。セイバーは左な。凜は参道を登れ、そっちに行きそうな攻撃は俺とセイバーが防ぐから」

「わかったわ」

「わかりました」

そのまま俺とセイバーが左右の林に突っ込む。

緩やかな斜面を走り、山頂を目指す。

突如、俺に向かって幾条もの矢が襲いかかる、魔力量からして名剣で出来た矢？ それにしては弱い。

俺は全てを、手に持った青葱で叩き落とす。

この葱をバカにしてはいけない。これは俺が創ったなんちゃって宝具なのだ。

ちなみに壁に叩きつけたら普通に折れる。ただ、魔力を保持した武器には絶対に壊せない設定にしてあるだけ。

宝具のような矢はたたき落とされ、地面を破壊する　　ってまづ  
っ！？

『フロークン・ファンタズム  
壊れた幻想』

そんな声が聞こえ、

視界を埋め尽くすような閃光が叩き落とした剣から放たれる。  
周りの木岐が広範囲にわたって弾け飛ぶ。

俺は間一髪で後ろに飛びずさっていた。

そして、飛んできた方向を見つめる。

浅黒い肌と白い短髪の190センチ近い長身の男が立っていた。  
肩から手にかけてと、腰に真っ赤な布 データから赤原礼装っ  
て概念武装だな……、外敵って言うより外界からの守りか。

「で？ おまえ何？」

俺は気だるそうに聞いてみた。

相手は軽く皮肉な笑みを浮かべ、

「敵に名を名乗るバカはいないのではないかね？ セイバーかもし  
れないしランサーかもしれない」

すっげー、バカにされた……。

「まあ、いいや。何でここにいるんだ？」

「マスターの命令でね。この参道を守れと言われているのだよ。一  
応あれでもマスターなんでね」

ホント忠誠とかないな……。とりあえずデータデータと……。

特技は投影ねー、英霊エミヤかー、……ん？

『ハク、生前の名前頼む』

俺はハクに声をかける。

『はい　　わかりました、衛宮士郎ですね。未来の英雄から召喚されたらしいです。所持魔術は一つ。無限の剣製です』  
アンリミテッド・ブレイドワークス

ってことは……、士郎に教えられるかも知れん。

『ハク、魔力の動き、体の動き全て保存してくれ』  
『了解しましたー』

さて、出来るだけ全ての技を出させたいな。  
そんな事を思っていると、

「帰るならば追わないのだが？」

なんとも優しい問いかけをしてきた、しかし

「無理。てかさ、何で過去の自分助けないんだ？」

俺の言葉に空気が凍る。  
すさまじい程に俺を射刺す殺気。

「ほう、そこまでわかるのか。そもそも、リンのサーヴァントは俺のはずだが？」

ああ、ってことは。俺はあいつの代わりに入り込んだってわけね。  
んで、余ったあいつはよく分からない奴に召喚された……と？

「たまたま、俺が入っただけだろ？　それで、何で今現在士郎を見

殺しに？」

相手はうすら笑いを浮かべ、

「俺の目的が衛宮士郎を殺すことだから……と、言ったら？」

理由はわからんが、あれは本気の目だな。

いまの自分が嫌だから過去を変えるってことか？ ま、どっちにしろ。

「お前を殺す、かな？」

「ほっ」

俺はそのまま数十メートル後ろに飛びずさる。

まずは、遠距離の攻撃方法を調べないとな。

突如、白と黒の剣が俺に襲いかかる。投擲だろう。

あれは 陽剣干将、陰剣莫耶？

二つで一つの宝具、対の夫婦剣。互いを引きよせ、手放しても持ち主の手元に戻る呪い付き。

俺は青葱でそれを弾く、前方では更に同じ干将莫耶が飛んでくる。手元に戻った？ 俺は確かめるために前方に弾き飛ばす。火花が散り、前方に戻る、さらにその後ろに同じものが……。

創造？ 人間が創造を使えるのか？

俺の前方から襲い来る夫婦剣を チツ。

上方に飛びのく、眼下では、最初に弾き飛ばした夫婦剣が左右から引き合い飛翔し、前方の夫婦剣とぶつかって大きな閃光と轟音を響かせる。

大きな魔力を感じ、アイツの方を見ると、黒い洋弓を構えていた。

▣ I am the bone of my sword

《我が骨子は捻じれ狂う》▣

詠唱により、ひとつの剣が生まれた。ねじれた一本の剣。

ドリル状のそれは、間違いなく宝具の魔力を兼ね備えている。それを弓に番え、

▣ “偽・螺旋剣” 《カラド・ボルク》▣

真名を解放し、放つ。

試してみるか……。

俺は手に一振りの剣を創造する。

それを手に握り、

▣ 凶硬の稻妻カラド・ボルク▣

真名解放をし、偽・螺旋剣に打ち付ける。

両方が同じ武器。片方は捻じれ、片方は原型。

カラドボルクはケルト神話のアルスター伝説に登場する硬い稻妻の意。

神話では、三つの山の頂きを切り離れたとも言われている。

エクスカリバーの原型の一つでもある剣だ。

アレが本物なら、お互いの攻撃は相殺 真作なら……な。

赤、青、白の火花が舞い。轟音を立ててぶつかり合う同じ矢と剣  
どちらも崩れ去らず拮抗する、が 突如、偽・螺旋剣は砕け  
散る。

凶硬の稲妻は無傷。

「ふーん、偽物？」

「お前は……、英霊フェルグスか？」

カラドボルグを持っているならそう思うよな？

「いや、違う。それより、偽物ってことは……魔力で模倣してるの  
か？」

俺の質問に対する返答は沈黙。ならば

俺は一本の槍を創造する。宝具、ゲイ・ボルグ。確かに、この槍  
は心臓を穿つ因果逆転効果がある。だが、この呪い以上の神秘、概  
念を持つ宝具ならば突破可能だ。

俺はそれを構え、

「 刺し穿つ、死棘の槍ゲイ・ボルグ！」

それを打突する。

「チツ」 I am the bone of my sword  
《体は剣で出来ている》

「 熾天覆つ七つの円環 ” 《ロー・アイアス》

「！」



相手の前方に、大きな紫色の花びらが七枚浮かび上がる。そこに、槍があたり、止められる。

しかし、未だに槍は突破しようとする。突き進む。削るように火花とギリギリと言う音が響く。

花びらが一枚、また一枚と散りゆく。

アイツはその槍に無数の名剣をぶつけている。虚空にいきなり現れる名剣。

宝具は魔力消費が多すぎるのだろうか？

にしてもロー・アイアスか。ハッキリ言ってなんだそれって感じである。

アイアスの原型が全くデータにないぞ？ アイギスならあるが、形状が全く違うし……。

とか思っていると、眼前では花びらを一枚残し、ゲイボルグは進撃を止められていた。

「ふーん、ゲイボルグより高い概念とはやるね！」

俺は笑顔で誉めてやる。しかし、ソイツは苦い表情をしていた。

「ゲイ・ボルグ……、投影……ではないか」

つまり、アイツの魔術は投影ってことか。

「んー、てかさ？ 早く全部見せてくれね？ お前の一番強い技とやらを」

俺は宙に数十の宝具を創り出し、聞いてみる。

「……見せるつもりなど」

「見せる。お前の意見など聞いてないんだよ」

コイツの耐魔力は弱い。

心象掌握の神眼。確実に操ることが可能。たとえば、それが英霊であつたとしても。

「いいだろう。あとで後悔しても遅い、とだけ言っておこう」

これは、ただそうしたほうがいいと心を動かしただけ。完全に操つたらランクが下がってしまうのだ。

そして、奴は詠唱を開始する。

俺はただそれを待ってやる。

o r d .  
I a m t h e b o n e o f m y s w

体は剣で出来ている。

r e i s m y b l o o d .  
S t e e l i s m y b o d y , a n d f i

血潮は鉄で、心は硝子。

o u s a n d b l a d e s .  
I h a v e c r e a t e d o v e r a t h

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death .

ただの一度も敗走はなく、

Not known to Life .

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create many weapons .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet , those hands will never hold anything .

故に、生涯に意味はなく。

So as I pray , unlimited blade works .

その体は、きつと剣で出来ていた。

詠唱が終わり、突如周囲に炎が広がる。

炎が境界を創り、内部の世界が侵食される。

深層世界の顕現。

何も無い丘。何も無く、全てがある赤い丘。

見渡す限りが剣で埋め尽くされている。

馱剣、名剣、魔剣、妖刀、宝具。

詠唱もそうだが、きつとこいつの歩いてきた道がこの場所なのだろう。

さびしい場所だな。士郎はどうなるかな。

にしても、詠唱長すぎて相手が待ってくれないと死ぬぞ？

ソイツが手を振り上げると、数多の剣が指示に従い、丘から抜け。剣先を俺に向ける。

『ハク、バックアップは？』

『完了しております』

よし、

「おー、すごいな。じゃ、剣対決と行きますか？」

「……なに？」

相手は眉をひそめるが、

『パチン』

俺の背後に現れる無限の剣。

それはまさしく無限。同じ剣すらある。そのどれもが本物。

この世界に存在する、しないに関わらず、ありとあらゆる剣達。

「……お前は」

軽く驚いた様子だが、

「質問なんていらん。お前の技は全部模倣したしな。模倣を模倣したって感じか？ 来いよ？」

俺は肩をすくめながら言ってる。

「ふっ……」

ソイツは、そのまま手を振り下ろす。同時に、数多の剣が俺に向かう、それを俺の背後の剣が迎撃する。

散り続ける閃光、火花、轟音。

砕き、相殺し、地を抉り、空を焦がす。

その中から、俺に向かう影が。

その影の攻撃を俺はネギで受ける。

相手が持っているのは対の夫婦剣。干将莫耶。多分、これがコイツの近接用の二刀。

「ほう、接近戦も出来るんだな？」

「お前もな」

俺は苦笑しながら言ってる。

轟音と閃光の中、俺達は剣舞のように踊る。

お互いがつたない剣術。誰にも教えられないであろう我流の剣筋。多分、コイツには才能がない。それを努力でひたすらに鍛えた結果がいまの剣なんだろう。

俺には才能がない。魔法を使つてのめちゃくちな剣筋。

二流同士の剣舞。

それを数十分と俺達は繰り返す。  
楽しかった、まるで、拙いもの同士が剣を競い合うように剣を振るう。

いつまでも続きそうな稽古。

だが、終わりはやってくる。

「そろそろだろうか」  
「そうだな」

ちょうど最後の鷹作が打ち壊された。

俺の剣は真作、対して相手は鷹作。更に俺はいくらでも生み出せる。相手は魔力の限界がある。

「名を聞こう」  
「如月刻。創造神だ」

俺は凜にすら言っていない真実を告げた。  
ただ言わないといけないと思ったから言った。

相手は笑い。

「私は英霊エミヤ。今の私 いや、俺を頼むな、トキ。お前が居れば大丈夫だろう」  
「ああ」

俺達は笑い合った。

この言葉がコイツの素なのだろうな……。

「さよならだ。エミヤ」

「ああ」

直後、無数の剣がエミヤを刺し貫く。まるで剣山のように。肌など見えず、栗のように刃だけが見える。

そして、俺は剣を全て消す。

そこにエミヤは居なかった。そこで、世界は元に戻る。

周りの木々は荒れてはいなく、あれが別の空間なのだと言っているようだった。

「ふう……、最初は糞ムカツク野郎だったが。いい奴だったな」

俺はふっ、と笑い。山頂目指して走りだす。

寺

俺が山頂に着くと同時に。二人の男女が剣に突き刺されて絶命した。

まるで、先ほどのエミヤと同じような剣が無数に突き刺さる。

だが、これは真作。自分自身が真作を使うからわかる。これは本物だ。

少し離れて、傷を負った土郎と凧がいた。

セイバーは金ピカの青年と闘っていた。

180ちよいの身長で、かなりのイケメンだ。全身金ピカな鎧がダサイが。

俺は凧たちに近づく。

「どうしたんだあれ？」

凧に話しかける。

「わたしにもわからないわよ。葛木先生とキャスターがマスターとサーヴァントで、わたしとセイバーが戦っていたらいきなり黄金のサーヴァントが現れて……」



ふむ、倒れてる二人は、って今はサーヴァントが消えたけど。学校の先生なのか。

黄金のサーヴァントねえ……、データ上はギルガメッシュか。古代メソポタミアのウルク第一期王朝の王ね。半神半人か。

「ギルガメッシュか……」

「なっ!？」

凜が驚くが、

「ふはははは！ そこな雑種やるではないか！ やはり我の王気を隠すことは出来ぬか。さよう、我はこの世の全てを手に入れた英雄王ギルガメッシュ」

高笑いを上げながら叫ぶギルガメッシュ。セイバーとの戦闘中だつてのに、余裕だな。

「それにしてもセイバー、やはりお前は我が宝。王に侍ることを許そうぞ」

「私は全ては国の為！ そのような自由はない!!」

ギルガメッシュの後方から打ち出される無数の宝具をエクスカリバーで弾き飛ばすセイバー。

あの剣……、空間を繋げて取りだしてるんだな。更に、幻惑で意思を与えて操ってるのか。

てか、確かに世界が一つの時の王ってことは全てを手に入れたけどさ。

あの能力なんだよ？ データでは“王の財宝”ってことになってるけど。当時自分が持っていた剣を出し続けられるって反則だな！

人のこと言えないが！

「でさ、凜。参道に居た二人のサーヴァントのマスターは？」  
「って、今はそれどころじゃ……、いいわ。刻に何言っても聞かないでしょうし」

何その扱い！？

「あれはキャスターが召喚したサーヴァントよ。魔力は新都の人間から捕っていたわ」

ふむ、サーヴァントがサーヴァントを従えられないなんてルールはない。事実、俺だって二人簡易契約してるし。

そんな事を思っていると、雨がぽつぽつと振ってきた。

「む？ 我的戦いを邪魔するとは、が、これも自然の摂理。我もそこまでは高慢ではない。帰るとしよう」

高慢なのは自覚してたのか……。まあ、王は我がままじゃないといけないか思ってるのかも知れんが。

てか、マジで去った！ 濡れるのが嫌で！

「で、セイバー。アンタのこと知ってるようだけど、アイツは？」

戻ってきたセイバーに凜が訪ねた。

「彼はギルガメッシュです。前回の聖杯戦争の時から何かとしつこく言い寄ってくるのです」

「って、セイバーもアイツも連続で呼ばれたの！？ どんな確立よ

それ!？」

ふむ? かなり珍しいことなのかな?

「にしてもセイバー、あれだけ好かれれば女冥利に尽きるって?」「なっ!?! バカにしないでくださいリン! 私は民のために口を捨てた身。興味などありません!」

うん。それはわかったが士郎が落ち込んでるぞ?

「安心しろ凜。俺が愛してやるっ」

そのまま凜を抱きよせ、キスをする。

うーん、血で供給できないのは困るよなー、とりあえず唾液しかないし。

俺は凜が飲み下すのを待ち、離す。

なんでコイツはいつも魔力が切れてるんだよ……。

「……刻」

真っ赤な顔でとろんとしている凜。

「お前の下着は俺が愛す」

「へ?」

なんかアホっぽい顔になった。

「雨に濡れて髪と服がびったりと肌に張り付いてる姿はいいよなー」

俺はにやにやしながら凜の服の中に手を入れてやる。

「ちょ、ちよつと！？ 仕方ないでしょ雨が降って、って！ 何でアンタは濡れないのよ！？」

いやいや、水滴なんて俺に触れられるはずないし？

「さーで、凜。雨に濡れて風邪ひくから脱ごうか？」

「ま、待って！？ せめて家でにして！ と言うか！ わたしにもその魔法だか魔術かけなさいよ！？」

くそっ！ なんて我がままなんだ！？

仕方ないから凜の水滴を飛ばしてやる。

「……ありがたんだけど、何でパンツだけびちょびちょのままなのかしら？」

「それはお前がキスで濡れて」

「違うわよ！？ 全部がびしょびしょじゃない！ キスでは一部だけよ！？」

お前言わなくてもいいこと口走ってるからな？

セイバーは不思議そうにしてるが、士郎は真っ赤だし。士郎むっつりスケベ。

俺は三人に風を纏わせ、浮きあがる。

「とりあえず帰るぞー」

そのまま飛翔し、士郎の家を目指す。

不意に凜が、

「ねえ、刻」

「ん？」

言いにくそうに、口を開く。

「英雄王ギルガメッシュって強いわよね？」

「強いだろうな」

事実強いだろう。英霊の中では最強じゃないかと思う。ただ、神となると話は別だ。

多分、ある程度の神なら勝てる。ステンノやエウリュアレじゃ瞬殺されるけど。

「刻……、勝てる？」

俺の目を見つめ、聞いてくる。

「さあ、どうだろう？」

肩をすくめて答えてやったが、千回やって千回は勝てる。一億回なら一回くらい負けるかも知れん。俺が転んだりして。

「死なないでね」

そう言って、凜は俺の胸に体を預けた。

はあ……、弱いなコイツ。魔術師だろうに。

「俺は最強の魔術師のサーヴァントだぞ？ そんな俺が最強じゃないはずないだろ？ 勝てるさ」

「……うん」

暗いなー。

「にしても、疲れた。帰ったら一緒に風呂入るか？ 凜」

「うん。魔力供給？」

真っ赤になつて何言いだすんだコイツは……。

「ちげーよ……、魔力的にはほとんど減つてないし。ただ、精神的に疲れた。魔力供給は俺よりセイバーだな。士郎やってやったら？」

俺はニヤニヤと笑つて士郎に言つてやる。意味が分からなそうだったが、意味に気づいて顔を朱色に染める。

「なっ！ 刻何言つて」

「私的にはアーチャーの血の方が魅力的なのですが」

確かに俺の血の方が全然魔力あがるけどさ？ 士郎めちやくちや落ち込んでるからね？

俺の長年の感で、士郎のフラグ叩き潰した気がする。

むしろ、いくつか叩き潰してそう。あー、本格的にフラグブレイカー目指そうかな？

俺は凜を抱きしめたまま、家に飛翔する。

魔力供給してやったのに元気ないなー凜は。

九二話 キヤスター陣営（後書き）

泳げたいやき君を見習って、たいやきを水の中に入れて一日経つとあら不思議。死んだ魚のようにふやけてポロポロに！  
もったいないと思うかもしれませんが、違います。  
サランラップにくるんで四日ほど経ったタイヤキなんです。

次はかなりズレちゃいます。

### 九三話 魔術協会（前書き）

僕の真骨頂はどこにあるのか。

ストーリーは適当、文章は拙い。

そこで考えました。むしろメールしました。

「俺の存在って何？」と、友人に。

「声真似？」「むしろないことが存在価値？」「ボケ？」 e t c …

そんな役に立たない中コレだ！ ってのがありました。

「言葉遊び」

これです！ 普段から言葉遊びが好きな僕は色々冗談やからかいを入れていたのですが。て言うか、小説に関係あることがこれくらいだったのですが。

で、話は戻りますね。

F a t e 編と言うか二次だと、言葉遊びが余りいれられない。

これは僕の存在を全て消しているのではないかと。

バゼットは腕を切り取られてなんていません！



## 九三話 魔術協会

### 士郎の家・屋根

俺はいつもの日課の宝具考察……ではなく。  
何度も何度もエミヤとの戦闘を再生していた。

投影　本物の宝具や名剣、魔剣を模倣する魔術。しかしこれは……。

まず、あのエミヤは剣以外の投影にはかなりの魔力負荷がかかるのだろう。剣製に特化した魔術か。ついでこれはランクが一個落ちるらしい。だから、俺の真作には敵わない。

これは考察だが、真名解放がある程度出来るのはアーサー王縁の物。たとえばカラドボルグもエクスカリバーの原型である。他のも出来るのだろうが、確実に威力も低い上に魔力消費が半端ない。自由に出来るなら、無限の剣製。凜に聞いたら固有結界と言っらしいが。その剣を全て解放してしまえばいいのだ。剣には一発分の魔力くらいは全てに宿っていたのだから。実際俺は、適当に『全開放』とか言っちゃえば同時に全てが解放された。

あと、もう一個考えていたのは宝石剣のことだ。あれを作るのは凜には不可能だったのだ。

まず、“人間には到達することが出来ない未来”の構造だったからだ。

穴を開けるくらいなら出来るが、真名解放や作ることは不可能。

あんなに毎日寝不足になって、魔力も空っぽになってるのにかわいそうだとは思いが……。こればっかは無理なのだ。

だが、アレを使えないと第二魔法に届くことは出来ない。つまり……。

第二魔法 人間をやめる。しかないのだ。吸血鬼の真祖になるか、俺のように神になるか。英霊程度では不可能。士郎なら成長すれば創れるかもしれないが、本物を作るのは確実に不可能。

もし、凜がそれを作った瞬間。それは凜が人間ではなくなっていると言っていることだ。

そんなとき、梯子が軋む音がした。

最近は毎日士郎と此処で話すのが日課になっている。

「士郎、いいぞー」

俺の声に士郎は上って来て、俺の隣に寝ころぶ。これもいつものこと。

そして、いきなり溜息をついた。

「どうした？」

「はあ……、また今回も迷惑かけてさ……。キャスターの洗脳、しかも遠距離からの。魔術師なら絶対かからない距離でかかって連れ去られて……。助けに来てもらっても何も出来なくて情けなくてさ……。」

心底落ち込んでます、みたいな感じでこぼした。わからなくもない。今のところ全く戦力にならないから……。やっぱ、アレか。一番危険じゃなさそうだし。

「なあ、士郎。俺が創りだした宝具とか見ただけで構成とかわかるか？」

もし、出来ないならあのエミヤはおかしい。

アレ程の剣をどうやって投影すると言うのだ。触ることは不可能。あとは全ての設計図をとってことだが。無理だろうな。

「ん？ そんなの見ただけでわかるだろ？」

俺は啞然とした。士郎はそれが普通だとばかりに言いきったのだ。俺ですら無理。俺の場合は地球からデータぱくってるから出来るけどさ……。

だが、今は都合だ。

「士郎、投影って出来るか？」

士郎は首を横に振る。

「親父に教えてもらって、昔やってみただけど無理だった。俺が出来るのは解析と強化くらいだな」

それは魔術回路が慣れていなかったのと、構成が甘すぎたんだ。

「お前の戦い方見つかったぞ？」

「本当か!？」

チカツ!? そんな鼻がぶつかりそうなくらい近づくな! 男とは嫌だ!

俺は少し離れてから、

「ああ、ただ。お前が最後に辿り着くだろう領域はまだ無理だ。けど、頑張ればすぐに、漏れだす力くらいは使えるかもしれない」

アーチャーの最初の剣製は漏れだした力だろう。最後に見せた無限の剣製からの。

「まずはコレだ」

俺は二振りの剣を創りだし、士郎の脇に置いてやる。

陽剣干将、陰剣莫耶。アーチャーの近接用武器、干将莫耶。白と黒の対の剣。

士郎はそれを手に取り、

「二刀流なんて使えないけど?」

「ああ、すぐに出来るとは期待していない。それでセイバーとでも稽古しろ。あと、一応ソレ宝具だから、隅々まで、一点の漏れもなく解析してから投影の練習でもしてみる。全く同じものを創りだせでも、無理するなよ? 多分最初は神経が焼け切れる。よくて嘔吐だな。最悪死ぬ。それでもやる覚悟があるならやってみる」

士郎はじつと夫婦剣を見つめ、強く握りしめた。

「ああ、やってやるさ。出来るだけ早くものにしてみせる」

そう言って、ニカリと笑った。  
俺も笑ってやる。

「じゃ、行って来い。俺との話よりそっちのが為になるだろ？」  
「わかった、またな刻！」

そう言って、士郎は梯子を降りて行った。

さーで、問題は……。

魔術師は夜に来るって本当だったなー、こんな月がキレイな日に  
来なかったっていいのに。

俺はそのまま梯子を下りた。

## 居間

居間に入ると、全員が居た。相変わらずステンノとエウリュアレは寝ていたが。

俺は空いている席に座り、溜息をついた。

「はー、マジできたよ」

俺の言葉に士郎とセイバー以外はため息をついた。

「でも、逃走しても追われないわよ？ 一般人に知られたりしなければね」

ふむ、それなら大丈夫なはずだ。飛翔中は不可視だし。

「今回は違うのよリン」

イリヤが口を開く。

「先行してきた魔術師の頭覗いて調べたんだけどね、お兄ちゃんの第六魔法は『無限創造』ってことで封印指定なんだけど。これって本当の根源よね？ 魔術師の追い求めた完全な根源。神の領域なのだから。だから、魔術協会も喉から手が出るほどほしいのよ。最悪その脳や、種子だけでもね。逃げられるよりはるかにマシだわ。どんなに犠牲を払ってもほしい魔法よね」

まあ、創造なんて神しか出来ないだろうしな……。

「じゃ、じゃあ！ 素直に捕まって保護してもらうとか？ 優遇されるらしいし」

「もし逆らったら抹殺指定ね。だって、味方になれば最高の魔法、敵になったら最凶の魔法よ。素直に従ったら、一生幽閉は確実。研究して、誰にも辿り着けないとわかったら、種馬として死ぬまで性交ね。魔力もありえないくらい高い、魔法まで使える血筋なら入れ食い状態よ」

めちゃくちゃ怖い魔術師……、ハッキリ言って逃亡以外に俺は選  
択したくない。

ならば……、

「なあ、それって凜にもイリヤにも俺の捕獲命令ってきたか？」

「ええ、ずいぶん前にね」

「わたしもきたよ」

ふむ…… なら行けるか。

「士郎お前は出てくるなよ？ 結界張って気配断っておくから。セイバーもな」

俺は士郎に向き会っ。

「ならどうするんだ刻！？ こんな理不尽な！」

まあ、怒ってくれるのは嬉しいが。

俺は士郎とセイバーを結界内に閉じ込め、不可視状態にする。

二人が叫んでいるが、声も遮断している。

「さて、外の結界も解くかな」

俺とイリヤ、凜が立ち上がる。

「行くか？」

二人は頷く。

俺は結界を解き、庭に出る。



庭

さーで、この全方位から現れた魔術師どうすっかな……。この見渡す限りの100人以上居そうなスーツ姿のわけわからないやつらを……。

俺達が庭に出ると、一人の女性が前に出てきた。

「はじめまして、あなたが遠坂凜のサーヴァントの刻様ですか？」

ふむ……。名字は知られてないか。知られるはずもないが、エミヤにしか言ってないし。

にしても、この170以上の身長的女性、髪は紫色で男のような髪型。

可愛いとかキレイって言うよりカツコイイな。

「そうだけど？ アンタは？」

「失礼しました。私は魔術協会所属の執行者、バゼット・フラガ・マクレミッツと申します」

「なっ!?!」

凜がめちゃくちゃ驚いているがわけがわからん。

「執行者!?! こっちは逃亡すらしてないのにいきなり捕縛するために執行者を送ってきたの!?!」

ん？ つまり、始めから断れたら速攻で武力行使に出るからなコノヤローってことか？

「ええ、もし逃亡するならばその場で殺害してもいいと」

「ちよつと待ちなさいよ！？ つまり、最初から死体さえ手に入れ  
ばいいと！？」

「そのようなことは私にはわかりかねます」

もう最悪だわ。魔術師嫌いだよマジで。

「刻はわたしのサーヴァントよ！？」

「それでも、です。実際彼は実体。英霊ではありません」

まーな。

てか待て、いきなりリンとイリヤが戦闘態勢に入った、バーサー  
カーまで後ろにいるし。

「今は聖杯戦争中よ！ もし、わたしのサーヴァントを連れていく  
なら容赦しないわ」

「ならば」

魔術師とバゼットが戦闘の構えをとる。

まずいな、このままだとイリヤと凜まで抹殺対象に入る。

「なっ！？」

バゼットが驚愕の表情を浮かべる。

「ああ、俺の魔法は知ってるだろ？ 第六魔法。創造が出来るなら

破壊も出来る。お前らを一瞬にして破壊することだって出来るんだよ。今は事実を見せるために、お前が持ってた宝具を消し去った」

俺は悠々と言い発つ。

こいつの宝具、フラガラックはうざい。後から打っても先に撃つたことになる因果逆転。ただし、切り札に対してのみ。宝具の真名解放に対しては絶対の強さを誇る。ま、俺の場合他の宝具で解放しても反応しないっばいけど。切り札じゃないし。

「引いてくれないか？」

「出来ません」

頭固いな。他の奴も捨てゴマか？ 誰も引かない。それとも、それだけ神がほしいか？

「わかったよ……、なら」

俺はその場の全員を空間ごと束縛する。

「「「「「なっ！！？」」「」「」」

それは、凜やイリヤも同じだ。

「刻！？ なんでわたしたちまで!？」

俺はわめく凜に近寄る。

「いや、実はただお前達を利用してただけだ。聖杯さえ手に入れてしまえばお前らなど用済みだ。ま、あとは俺が勝手に他のサーヴァントを殺して終わらすよ」

「え　？」

凜は愕然とした表情を浮かべ、

「命令よ！　わたしを解放しなさい！！」

「嫌だよ、マスター」

俺は凜の右手に触れ、令呪を不可視状態＋仮切断状態にする。

「なんで！　なんでよ刻！？」

凜はボロボロと涙をこぼしはじめる。

イリヤの方を見ると……、笑っていた。

はあ……、イリヤ察しが良すぎるよ。

俺は振り返る。

「さて、お前らの魔術回路は邪魔だから消しとくな？」

『パチン』

凜とイリヤ以外の全ての者の魔術反応を根絶から断ち切る。

各々から絶望の叫びがあがる。

「ま、お前らが俺に干渉したのが悪いんだよ。次来るやつに言っ  
け。魔術師に戻れない体になってもいいなら来いと、じゃーな」

俺はそう言ってニヤリと笑い、消え去った。

橋

現在橋の上空。

はあ……、これで凜に嫌われたら最悪一人で聖杯ぶっ壊すかな。  
鬱だわ。

にしても、

「そのじーさん出て来いよ」

俺は虚空に話しかける。

そこに、一人の老人が現れる。

「ははは、気づいたか」

豪快に笑うじーさん。

「てか、アンタの魔力あり得ないだろそれ……、この剣と同じ魔力の質だな」

俺は一つの剣を創り出し、投げてやる。

老人はしげしげとそれを調べ。

「ふむ、さすが第六魔法の体現者と言ったところかの？　ワシの宝石剣を完全に創りだすとは」

調べたあと、放って返してくる宝石剣を消し去る。

「ワシがもつと若かったら決闘を挑みたいところだったのだがな」

何言っただか、その赤い瞳と魔力の質。

「アンタ不老不死だろうが。で、俺は刻だ。アンタは？」

鬱陶しげに俺は問いかける、

「ワシはキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。第二魔法の使

「い手、と言えはわかるかの？」

名前は知らなかったが、魔法はわかってたさ。

「ま、お主も使えるのだろうか？」

「ニヤリ、と笑った。

「ああ、魔法なら何だって使えるさ。で、セルレツチだけ？ ア  
ンタも俺を捕縛でもしにきたのか？ だったら消すぞ？ 存在こと  
な」

俺もニヤリと笑ってやる。

「ハハハ、ワシのことをそこまで言う奴はお主が初めてだの。実際  
消されるだろうな。だが、ワシはまだ他の世界で遊びたいのだ。無  
駄なことはせんよ。それに、ワシはお主を気に入っておるのでな」

遊びたいと来たか。

にしても、気にいったって、会ったの初めてだし。

「不思議そうな顔をしておるの。ワシはずっと見ておったのでな。  
なんだかんだ言っつて人を助ける、先ほどのようにのう」

「はあ……、覗きが趣味かよ？」

「いやいや、お主の不器用なところなぞ見ていて楽しかったわな」

本当に面白そうに笑うゼルレツチ。

「俺何もしないだろ？ それより魔術協会を何とか出来ね？ ア

ンタも魔法使いならわかると思うけどさ。つぎだけなんだよね。何人来ようと捕獲なんて出来ないっての……」

ホントだるい……。

「殺せばよかるっ」

そう言って、ニヤリと笑う。

「わかってて言ってるだろ？ 俺の独善者だ。殺すなんて出来ないんだよ」

「わはは、独善とわかっててやるとは、ますます面白い！ 魔術協会の方はワシがなんとかしてやろう」

「マジか!？」

「ああ、あそこには馴染みも多いのでな」

それは助かった……、だけど。

「何が望みだ？」

魔術師がただで何かしてくれるなんて思っただけ。

「ほう、わかるではないか」

そう言って、楽しそうに笑っているゼルレッチだが……。マジ不安。

「いや、ワシも最近少々老いちゃったの、体力が落ちてしまったのだ。治せないか?」



これ以上元気になってどうすんだよ……。しかも、一体何百年生きてるんだか……。

「それならしてやる。だが、それを対価としては俺が不利だぞ？」

ゼルレッチは『ほう』と言い、笑みを浮かべた。

「今ここに向かっている大きな魔力が二つあるだろ？ あれのどっちが相手頼む」

「ふむ……。片方はアルクエイド、それと殺人貴かの」

知り合いかよ……。コイツの知り合いなんてロクなもんじゃないだろうな。

「よかるう。して、ワシはどっちの相手をすればよいのだ？」

強さ敵にはアルクエイドってのが強そうだが、データから引張ってきたら殺人貴っての“直死の魔眼”持っているし……。俺でも死ぬんじゃないか？ 物の死の戦と点が見えるってやつ。

にしても、あのアルクエイドって地球のバックアップで相手より上の強さを保持するってわけわからん。どれだけ親を拒絶するんだよこの星……。地球程度なら俺より全然弱いけど。

「俺的にはアルクエイドの方が戦いやすいから」

「なら、ワシはアルクエイドをやるうかの」

「……」

まじ糞爺だコイツ……。

「はあ……。もういいよそれで」

「意地悪く思えるかもしれんがの、全開のワシと全開のアレで戦ってみたいのだ。魔力的に暴走状態だろって」

全然わからん。

「全開とは？」

「アレは吸血衝動を抑えていての、普段は力を七割ほど抑制に使っておるのだ。それを、完全に力にしておるの。しかも、星からのバツクアツプ。これはお主を相手と認識して、星の全開までバツクアツプしておるの」

まあ、そうだろうな。てか、マジはえー、車よりハエーよあいつ<sup>ら</sup>。

とりあえず、こいつの身体年齢を下げないと殺されちまう。

身体年齢だけ20台位にしておくか。

『パチン』

うわー、イケメンだなーじーさん。嫉妬するわ。

「おお、やはり若い体はいいの、感謝するぞ刻よ」

「感謝はいいよ、魔術協会のことと、あの暴走アルクっての頼む。てか、離れて戦ってくれ。足引っ張りあっちまうだろ？」

ぜってーコイツの魔術でかいし。あの二人が星の意思でコチラに向かってんなら一人を足止めしても、もう一人はこっちに来るだろ  
う。

「わかっておる」

そう言って、ゼルレツチは消え去った。

もうちよいで来るよな……、まじめんどいわ……。  
どうなっかな……。

九四話 星の拒絶（改変）（前書き）

神話が出てくる小説書くと頭良くなるよね？

クトゥルフ神話とか学びたいなあ。

にしても、眠い……。

## 九四話 星の拒絶（改変）

### 橋の上

とりあえず橋の上に着地し、結界を張った。  
その直後に壊されたので、また張りなおした。

これだけでも直死の魔眼って奴の異様さがわかるよ……。  
仮にも神が張った結界を何で壊せるんだよ。

そして、俺の前方、橋の道路を挟んで前方にソイツは現れた。

空を見上げる学生服の少年。

身長は170程度だろうか？ 髪は黒。

手には一振りのナイフ。

もう本当にめんどうだ。

どつやって殺そうか……。

って、ハッ？ 俺今何を思った!？

なんか空気がおかしい。人を殺したくなる。あーうざい！

「おい、お前」

「いい月夜だ」

俺の言葉はソイツの言葉で殺された。

不意に、ソイツは俺を見た。

煌々と蒼く輝く瞳。

すべてを呑み込むような蒼。

もし、俺が神でなかったら、魔眼などではなく、ただその瞳に呑まれていただろう。

そして、今俺の瞳も黄金に輝いているだろう。

「確かに　いい月夜だな」

多分、俺は呑まれていた。

でなかったら何故、

「殺しあうには最高の夜だ。そうは思わないか？　オマエ」

こんな考えをしてしまうんだろうか。

ソイツは、フツと笑い。

「生涯最初で最後の神殺しだ。

お互い、遠慮なしに燃え尽きようぜ！」

「 そうだな。」

「 殺されるのはお前だが」

ヒュンと、ナイフがクルクルと宙を舞う。

「 ま、こうして出会っちまったんだ。することは一つだろっ?」

それを右手に掴み、口の端を釣り上げて笑う。

「 さあ 殺し合おうぜ?」

俺は宙に無限の剣を創造する。

その中から、取りだす一本の黒い剣。禍々しいオーラを放つ剣。ペガーナの神々のムングが使った剣。

名前は 死。

それ以外に必要な名前はない。

触れた物は生物、無機物にかかわらず消滅させる剣。

「 ほう、死がないな」

感心したようにソイツは言う。

「 お前には死が満ちているがな」

俺はにやりと笑みを浮かべ言い放つ。

殺したい殺したい殺したい殺したい。

この衝動は剣から来るのか、アイツの気配からなのか。だが実際に俺は

どうしようもなくアイツを　たい！

俺とソイツは同時に駆ける。

『一から二十、解放』

俺の背後の剣が全て殺人貴に躍りかかる。  
真名を解放した数多の宝具。

それを五閃程のナイフの振りです殺人貴。

「ああ、ようやく会えたよ神。この快楽に勝る快楽はない。脳髄が  
とろけるほどに殺し合おうぜ……」

突如、殺人貴は消えた、だけど、魔眼程度に、俺が負けるはずも  
ない。

神眼を見せてやろう。

俺は虚空に剣を突き刺す、そして、その空間は　んだ。

殺人貴はそこにぶち当たり、地面に片手をつき後ずさる。  
口からは血が一条垂れている、それを袖で拭きとり。

「やってくれるね。さすがにこの眼でも虚空の死は見えない。なら  
ば　」

殺人貴は掻き消え、俺の横から現れた。

消えているわけではない、ただ、一歩目から最高時速に乗ったた  
め、視認が追いつかないだけ。

迫りくる刃を横から蹴り飛ばしズラす。腕を軽く裂かれたが問題



はない。

裂いた姿勢のまま、止まらずに右手を地面に着き、支柱とし、まるでカポエラーのように頭部を穿ちに来る。

俺は腕を蹴り飛ばし、迫りくる蹴りを避けるが、蹴りの背後からは、俺に蹴られた動作を軌道に乗せたナイフがせまる。

時間を加速する、が、  
加速世界のルールが される。俺の体から浸透しはじめたルールをしたのだ。

そのままナイフは俺の右腕を豆腐のように切り裂いた。  
骨などないようななめらかな斬り口、俺は血液を止め、魔力の流出を防ぐ。

そのまま、後方に飛びずさる。

アイツ デタラメすぎる。

どう考えてもアイツの存在はバグだ。  
星に意思なんてつけるからおかしなことに……くそっ！

「神とはこんなもんか？ 興ざめだよ」

俺の右腕を弄びながらつまらなそうにつぶやく殺人貴。

『 右腕解放』

俺の右腕が解放される。

中から膨大な魔力がはじけ飛び、周囲を消し去る。  
結界内部全てを。

新都とをつなぐ唯一の橋を俺は消し去った。

土煙りが消え、そこには

殺人貴が立っていた。

自分の魔力だからわかるが、純粋な魔力の奔流ごと　　のだ。

だが、奴は五体は満足だが、体中血だらけ、服はほぼ全てが破け去っている。

「くははは！　面白い面白いな！　やはり楽しませてくれるな！！」

その状態でも、殺人貴は向かってくる。

だが　遅い！

俺は飛び上がり、

『　　挟ち砕く、雷神の槌』ミヨルニル

巨大な槌が殺人貴を砕こうと紫電を走らせながら飛翔する。その背後に俺は取り着く、

前方ではミヨルニルをした殺人貴が、いきなり現れた俺に驚きの表情を見せるが、

そのまま俺は、左手の死を振りおろす。

触れたものを完全に殺し尽す剣。

俺が殺人貴の腕にそれを振り下ろす直前、殺人貴は自分の肩口を切り裂いた。

死が触れた瞬間、切り裂かれた左腕は消滅する。

はは……、マジ狂ってやがる。

原理的にはその行動は合っているが、ためらいもなく自分の腕を斬り落とすなんて誰が出来るだろうか？

「　　いてーな」

笑いながら呟いた殺人貴。

コイツは人間として、越えちゃいけないところまで行っているだろつ。

「じゃ、再開といこーか、神」

本当に楽しそうに笑う奴だな。殺人貴つてのも納得だ。

残った右腕にナイフを持ち、構える少年。

ああ……、月がこんなにも近い。

此処までキレイな月は初めてだ。

だったら　無様に殺してやらないとな。

俺は倍率を上げて奔る。左手には死の剣。

一閃、閃光と火花を散らしながら俺達は打ち合う。

秒間何度の打ち合いがあったかわからない。

死のない剣と死を突くナイフ。

相手を　すまで撃ち合う。

存在を　まで穿つ。

拮抗する剣とナイフ。

そして、一度俺達は離れる。

「その剣 邪魔だ」

鬱陶しそうに奴は言い、ゆらりと揺れる。

『……九死衝』

突如、姿が掻き消える、そして、俺の眼前に現れる。

『 双狼』

左右同時に俺にナイフが迫る、二刀ではなく、ナイフの技術だけでそれを可能としている。  
それを背後の剣で弾く。

『 八穿』

もう一度姿が消える どこだ？

地面に影が……上！ 影に気づいた瞬間には俺は後ろに飛びずさる、奴は地面に着地し、

『 伏竜』

消える、今度は気配も音も……、だが、神眼を甘く見ないでほしいな。

直死の魔眼から溢れる魔力だけは消すことはできない。俺は剣を、自分の足もとに向かって振り下ろす、閃光が弾け、俺の下から上に

切り裂こうとしたナイフをはじき返す！

『 閃走・六兎 』

俺の体制が振り下ろした状態のままの所に、全てが顔面を穿つ蹴りがくる。時間を引き延ばすと、まるで足が6本あるような同時攻撃。足の付け根を穿ち、その攻撃を回避する。

『 八点衝 』

俺が追撃をしようとする、まるで腕が無限にあるような乱れ斬撃が襲い来る。剣山の壁。これが一本のナイフで出来ているなど誰が思うだろうか？ 剣に命令し、背後からの攻撃。それに気づき、奴は飛びのく。

『 十星 』

いつの間に接近したのか、奴は俺の横にいた。そして、両肘・両肩・両膝・両股関節を同時に狙った蹴り。前方の空間を固めて防ぎきる。更に、眉間と心臓をナイフで狙っていたらしく、それを飛びすさり回避する。

『 一風 』

飛びすさった後ろには 奴がいた。そのまま首を握られる……  
まずい！

首を捻り潰すくらい握ったまま、奴は全体重を使って俺を地面に叩きつけようとする、俺は速攻で転移する。もしくらったら、確実に死ぬ。

『極死……七夜!』

転移した瞬間には、俺の目の前に投擲されたナイフが迫っていた。だが、投擲されたナイフなどどうでもいい。本体がいない。

突如、自動迎撃に設定してある背後の剣が一本俺の上空を飛翔した。

俺に降りかかる潜血。雨のようだった。

ドスつと音を立て、俺の脇腹にナイフが突き刺さる。そして、前方には腹に穴を開けたヤツが落ちてきた。

「『九死衝』を防ぐとはな……」

ソイツはゆっくりと立ち上がる。腹からはぼたぼたと血が流れる。もし、このまま闘っていたら確実に死ぬだろう。

俺は既に意識を取り戻していた。さすがに、あの攻撃を吞まれたままでは無理だ。コイツはそれでいいのかもしれないが、俺にはそれに耐えられる体術はない。魔法で補助が必要なのだ。

「それじゃあ　続きを始めようか」

ニヤリと笑い、奴は言う。

「残念だ殺人貴。俺はもうお前に関わりたくない」

「あ?」

卑怯な方法なら簡単に倒せるのだ。

ただ、俺が吞まれていて殺さないといけないと思っただけ。

俺の言葉は絶対だ。それがいくら人間離れしよう、  
“存在”

する限り俺のルールには逆らえない。

『意識の切断』

俺はただ、それだけを口にした。

それが終焉。

なんとも呆気ない反則。

それだけで、殺人責は倒れる。

って言っても、腕を斬られないでそのまま殺されてたら終わりだ  
っただけだ。

腕を斬られて正気を取り戻しただけ。  
にしても、腕と腹どうしようか？

『ハク、これってすぐ戻せないか？』

困った時のハク頼み。

『魔力を大量に消費すれば、今のご主人さまなら出来ますね』

ふむ、どうせ狭間で何年もいるから別にいい。

俺は腕と脇腹を再生する。魔力を腕と腹にするイメージだ。

ついでに服も元に戻してっと、更にアイツの体も治してっと……、  
さて。

あの月どうしよう……、確かにキレイだけどさー。

アレ落ちたら地球滅亡だよなーまじで。

「ふむ、終わったようだの」

俺の傍にゼルレッチが転移してきた。  
肩には金色の髪の女性を乗っけている。

「こっちは終わったけどさ、お前アレどうすんだよ？」

肩をすくめながら言ってる。

「ちと、気絶させるのが遅くなっての、『月落し』を使われてしま  
つてな。星のバックアップが強力過ぎたの」

強力過ぎるわ……、それだけ俺を殺したかった……か。俺をこの  
星に留めたかったんだろうか。どっちにしる星如きに命令されたく  
ない。

「で、どうすんだあれ？」

俺は視線でソレを指す。

もう結構デカくなってしまった月。  
数時間で落ちるだろうな。

「ふむ」

ゼルレッチは宝石剣を取りだした。

「破壊してしまえばよからう」

「アホかっ！？ 月なくなるだろが！？ どんだけ適当なんだよ！  
俺が戻すからこの殺人貴も頼むわ」

「よからう」



俺は、月の転移先のデータを閲覧。  
公転速度を維持して、軌道上に座標セット。  
転移つと、

月は消え去り、上空に輝く。

「ふー……」

「ふむ。やはり魔法使いは違うな」

にやにやと笑いながら言うイケメン。  
きつと、コイツは俺が神だって気づいているんだろつな。

「ああ、それよりさ。ちょいソイツ地面に寝かせてくれ」

俺はアルクってやつを指さして言う。

「ふむ。どうするのだ？」

そう言いながらも、ゼルレッチは地面に寝かせる。  
とりあえず、星の意思がうざい。これ取っ払って、バックアップ  
は一日ほど消すかな。あと、吸血衝動とかいらねーよ。とっちまお  
うか。

『パチン』

そこで、俺はソイツを起こす。ゆっくりと瞳を開く。  
黄金の瞳の女性だ。一目で吸血種だとわかる。

「……あれ？ 何で私こんな所にいるのよ？」

あたりをキヨロキヨロと見、殺人貴を見つける。

「あー！ 志貴っ！ ……」

嬉しそうに飛び付いたが、気絶していることに気づいて言葉が止まる。

そして、俺の方を睨みつける。

「貴方が志貴を ……」

「黙れ迷惑娘」

「いったーい、何よもうっ！」

俺は上空の空間をアルクエイドに叩きつけた。地面にクレーターが出来るほどだ。人間なら死んでいるだろう。

「お前月まで落として迷惑かけすぎ！ そっちの志貴ってやつも性格破たんしすぎ！」

「あれ？ ってことは七夜が出てきたってことね？」

「七夜？」

「そ、志貴の殺人鬼の部分ね。殺人嗜好だったでしょ？」

なんて嫌な二重人格だ……。

「まあ、それもそうだけどー、私“月落し”なんて使えないわよ？使えたのは“朱い月”だけだったし」

指を唇において考え込んでいるようだ。だが、思いだせ迷惑娘！

『パチン』

記憶を復元。

「あっ！ そうだったわね。なんか、すごい星がうるさくて、眠ったら星に操られちゃったんだ！」

操られちゃったじゃねー！！

「それにしても、貴方が星の危機ねー。何したのよ？」

「はあ……、何したも何も俺の方が聞きたい。自分が創った星に反旗翻されたんだぞ？ まじ糞だわこの星。いつそ消すか」

俺の肩をすくめて言った言葉に、アルクエイドとゼルレッチは眼を見開く。

「あー、それでね。外界からの敵ってことで消そうと思ったのね。にしても神かー。初めて見たわ」

俺の顔をじろじろと見る。

「瞳は……、私と同じ色ね。でも、己ら発光してるわ。私の魔眼も効かないし。顔は、カッコイイけど志貴のほうが全然いいわね！」

何このバカップル？ てか、このこしよばゆいの魔眼使ったからなのかよ！？

勝手に洗脳するな……。

「ほほ、やはり神だったようだな刻」

ずっと黙っていたゼルレッチが、笑いながら俺に話しかけてきた。

「ああ、だから魔術協会とか勘弁して。マジ罰あたりじゃね？」  
「神と知れば更に本腰を入れてくるだろうな」

「うわー、マジ最悪。」

「本腰入れてきたらこの世界に干渉して魔術師根絶やしにするぞ……？」

「それは困るのでな。魔術協会は約束通りなんとかしよう」

「まじ心配だわー……、繋がってる魔術回路全て切断しちゃえば楽だしな。」

「俺はアルクエイドに向きなおり、」

「あとさ、星の意思に伝えといて。次俺に干渉してきたら、お前の意思消し去るからって」

「ええ、わかったわ。と言うか、この会話も聞いてるんじゃないかしらっ？」

「ま、それならそれでいい。とりあえず……。」

「志貴とかアルクエイドの住んでるところとかわからんから、引き取ってくれ」

「ああ、では、また会おう刻よ」

「じゃーねー、次は“志貴”も連れて会いに来るわ」

「そう言っつて、三人が転移した。」

「もう来るなよ……。でも、七夜じゃない方の志貴ってのも少し気になるな。ま、それより……。」

「俺はこの惨状をなんとかしないと……。まあ、認識阻害の結」

界張つてあるから、入ってくるのは魔術師くらいだろうけど。

まあ、でも。

「んー、疲れた！ とりあえず今日は此処で寝るかな」  
「此処で寝てどうするのかしら？」

俺が腕を組んでのびのびしていると、後ろから声が  
振り返る、そして更に振り返る。

見なかったことにしよう。……般若がいた。

『 A c h t ……！ 』

轟音がして、俺の背後に何かが当たった気がした。てか、当たっ  
ただけど、俺の耐魔力で消された。

「なにすんの……？」

俺が背後を振り向くと、ぷるぷると震えた凜がいた。

「何で傷すらつかないのよ！？ 秘蔵の宝石使ったのに！」

「いやいや、傷つけようとしたの？」

「俺の耐魔力はセイバー以上だぞ？ キャスターの魔法だろうと傷  
すらつかない」

泣きそうだなー……。

突如、横からセイバーが俺に斬りかかってきた。

俺はそれを結界まで弾き飛ばす。たぶん、一瞬で意識を刈り取ったはずだ。

「……………何お前ら？」

バーサーカーが襲いかかってきたので天の鎖で拘束。

「……………わけわからないんだけど？」

まじわけわからん……………。何でこんな好戦的なの？

って、凜何泣きだしてんだよ！？

めっちゃ号泣だし！

「……………ぐす……………なんでそんな強いんだよ！」

ええー……………。

「だって、貴方はわたし達を裏切って敵になったんじゃない！だから倒さないとイケないの！」

そう言っつて、首から赤い宝石がついたペンダントを引きちぎり、特大の魔法を俺にはなっつてきた。宝石にはかなりの魔力が入っていたようだが。

俺にあたり霧散。

「……………父さんの形見が……………」

ええー……………！？

「何でそんなもん軽々しく使っつてんの！？ バカなの！？」

「もう貴方にそんなこと言われたくないわよ！」

てか、あれ？ イリヤ知ってるはずだけど、俺はイリヤに視線を移す。

くすくすと笑っていた。

言っていないな……コイツ。

「えーっと、凜？」

「そんな軽々しく名前を呼ばないで！」

どうしろって言うんだ。あと、イリヤ笑いすぎ。

「……ずっと信じてたのに。何だよ！ 何で裏切ったのよ刻！」

凜は俺に抱きついて来て、ぼかぼかと胸を叩く。てか痛い。言っとくが、魔法耐性は高いが耐久力からはらつきしだぞ俺？ てか、ぼろぼろと涙流して……いいづね……。

「刻、お願い。下着あげてもいいからもう一回契約して！」

いやー、俺の扱いが下着でどうにでもなる存在になってる。

「別にいらない」

ますます泣き出す凜。ミスった！。ただ、下着がいらないうって言うただけなのに……。

イリヤ地面叩きながら笑うな！

「……何で？ わたしじゃダメなの？ 確かに刻にはふさわしくない主かもしれないけど、これからなればいいでしょ？ ちゃんと魔

力供給もするから！」

「いやいや、俺にふさわしい主なんて宇宙探してもいないし。魔力供給なんてした瞬間お前死亡だ。」

「魔力供給なんて無理だから諦めろ」

「出来るわよ！ こ、行為をすれば一方的にあげられるはずよ！？」

「待て、お前は何をするつもりだ。てか、またミスった。まるで契約を嫌がつてるみたいに思われてるのか？ そもそも契約切れてないぞ？」

「てか、イリヤ腹抱えて笑うな！」

「あー、凜。勘違いしてるどころ悪いんだが……」

「勘違いなんてしてない！ 刻に一緒にいてほしいの！」

うん。絶賛勘違い中。そんなプロポーズみたいなこと言われても困る。

俺は凜の手を取り、不可視と切断を解除する。

元通りになり、令呪が現れる。

「え　？」

うん、啞然とした顔をしている。そんな色々な角度で見ても変わらないからな？

「もう一度してくれたの？」

俺は首を横に振る。凜は何故かまた涙がぼろぼろと……あー。



「だから勘違いだつて。もともと契約解除なんてしてない」  
「して……ない？」

困ったな……。

「だからねリン。お兄ちゃんは最初から解除なんてしてなかったのよ。あそこで、わたしやリンが魔術師と闘ったらわたし達まで抹殺対象よ？ だから、悪役を演じて逃げたってこと」

イリヤが助け舟を出してくれた。もつと早く言え！

凜はポカンとして、だんだんと理解が出来たのか顔を真っ赤に染め上げた。

「じゃ、じゃあ！ わたしが今使った宝石とかは？」

「無駄」

「わたし、恥ずかしいこと口走った？」

「うん」

カーッと火が出るように顔を真っ赤にさせてわたわたし始めた。

『刻とずっと一緒にいたいのに！ Hだって毎日してあげるから！』

イリヤが凜の声真似をして言いだした。てか、うまいし……。

凜、顔を真っ赤にするのはいいが、お前そんなこと言ってないぞ？

「わたしそんなこと言ったのね」

言っていないし……。

「いいわ！ やってやるうじゃない魔力供給！」

「却下だ！ 変な決意するなバカ！ 死ぬだろ！」

「イリヤに聞いたわ。刻がわたしの中に出さなければ大丈夫らしいわ！」

「どっちにしろやるだろボケ！ やらねーよ！」

てか、どっちにしろ凜の魔力を凝縮してようと、俺にとつたらホント雀の涙以下だ。

どっちにしろこの会話やだ！ 話変えないと！

「てかさ、よくお前からあの魔術師達から逃げさせたな？」

100人以上いたし。

「なに言ってるのよ？ あそこに居たのは魔術のことを知っていた一般人よ？ すぐに、協会の魔術師が来て記憶を改変するために連れて行かれたわ」

ああ、魔術回路を繋がられなくなったら一般人だからな。哀れ魔術師。自業自得だがな！

「それより、刻はこれから狙われるのよ？ 今度からは勝手にしないで！ 別に、わたしは協会と敵対しても構わないわ」

いやいや、それはやめておけ。普通の魔術師じゃ勝てないわあれ。

「大丈夫だぞ？ ゼルレツチに頼んだら何とか出来るらしい」

俺の言葉に凜は驚愕に目を見開く。

「だ、大師父に会ったの！？」

「ああ、何か気楽なじーさんだったな。よくわからんが気に入られた」

「気に入られたって……」

何で驚くのかわからん。

「アルクエイド・ブリュンスタッドって奴倒すの手伝ってもらった」

今度はイリヤまで目を見開く。

「そ、それって吸血鬼の真祖のよね！？ それで月が近づいてきたり、この有様!?!」

「そんなようなもんかな。月は俺が戻したし、橋がなくなったのも俺がやったけど」

「……死んでないわよね?」

「死んでたらいないだろ?」

凜はほっとしたように息を漏らした。

「よく毎回毎回面倒事に巻き込まれるわね」

「いやいや、今回は俺だが、いつもはお前らの巻き添えだ。

とりあえず……、いつまでも此処にいるもなー」。

「ま、それはいいとして、帰るかー」

俺はそのまま家路を急ごうとするが、袖をつかまれた。

「あれ、どうするのよ?」

ジトつとした目を向けて凜が言ってきた。確かにやったのは俺だが、責任は地球にあるぞ。いい気味だと思っんだが。仕方ないので俺は元に戻した。

凜と士郎は眼を見開いて驚いている、

「今のも第六魔法？」

「そそ」

「本当に何でも創造出来るのね……」

一応これでも神だしなあ。

「あ、そだ刻。宝石たくさん無くなったからお小遣いちょうだい」

そう言っつて、俺に手を出した。

俺は愕然とした、俺を親か何かと勘違いしてるんじゃないだろうか？

「なんでだよ……」

「んー、じゃあ変わりにこれあげるわ」

そう言っつて、取りだしたのは父親の形見らしい宝石がついたペンダント。先ほど使ってしまった魔力があまり入ってない。チェーンも壊れている。

「大切なもんだろ？」

「別にもういららないわ。魔力入ってないし」

チェーンを治してやる。

「少ししゃがんで」

俺は軽く膝をつく、まるで主にひ頭を垂れているようだ……。俺の首に真つ赤なペンダントが付けられる。

「似合うじゃない！」

全然似合わないって……。

てか、無理しすぎ。実は、コイツの聖杯戦争で勝ちたい理由見ちゃったんだけど。

死んだ父親との約束だったんだよ……。娘を危険な目に合わせるってのは微妙だが……。

俺は同じものを創造して、凜の首にかけてやる。

「これ……最初のより純度が全然高いわ……。最初から入ってる魔力も数倍多い」

俺が創ったやつだしな。凜はじつと俺の方を見、

「あ、ありがとう」

ニコリと笑った……。

そして、

「ペ、ペア？」

いやいや、そんな真つ赤になって言わなくてもいいから。ペアってか同じ型創っただけだし。

「あ、そだ。金はやらないけど代わりの宝石ならやるぞ?」

俺は凜の頭上にこの世にあるありとあらゆる宝石を創りだしてやる。

宝石から魔力供給も出来るらしいので、これで毎日死にそうにはならないだろう。

「いたっ！ いたたたたたた！!!」

「ごんごんと凜の頭に大量に落ちる宝石。

凜が埋もれるくらい大量に。はつきり言って、これでもすぐになくなるだろう。

「コイツはがんばりすぎて魔力がいつも空っぽなのだ。

「って、全部魔力が最初から膨大に入ってるじゃない！ わたしが入れる必要もないわ」

「宝石に魔力入れるくらいなら自分で使え。毎日瀕死の顔でいられても困る」

凜はじつと俺を見つめ、腕に抱きついてきた。

「さっ、帰りましょうか!」

「あ、ああ」

「宝石どうすんだよ？ 置いていくのか!？」

仕方ないので、俺は凜の部屋に宝石を転移させた。あとでもう一回部屋に創ってやったとか言えばいいだろう。

「  
」

凜はなんか楽しそうだな。コイツが鼻歌を歌うなんて始めてたぞ？

九四話 星の拒絶（改変）（後書き）

明日の朝まで寝る！

早寝早起きだ！

超眠い！ 文章がグチャグチャかもしれないから後で直します！

殺人鬼じゃなくて殺人貴つてのは誤字ではありません。

月落しは本来朱い月の技ですが、星の完全バックアップによって再  
現。



九五話 ちよつと休憩（前書き）

刻の体液についての謎。

唾液にかかわらず血液とかもね、

九五話 ちよつと休憩

???

いま俺は何故か途方に暮れている。

上半身裸、下半身はパンツのような布地しか穿いていない。

「お父様あそこ行きましょう!」

「私はアレで滑りたいわ!」

双子のような少女は全く別々の方向を指さす。

二人の格好は白と黒の下着のような布地だけ。

まあ、ぶつちやけ水着だ。

別にスクール水着とかじゃなく普通のビキニタイプだ。越のあたりに隠すんだか隠さないんだか微妙なパレオがついている。

二人はニコニコしながら俺の腕を違う方向にひっぱる。

まあ、これには理由があるのだ……。

朝

俺はすやすやと寝ていた。

だが、俺の穏やかな眠りは許さないとばかりに、屋根の上に現れたツインテ悪魔。

そして俺は襲われた。

アレは比喻ではなく襲われたと言える。

屋根の上から落とされたのだ……。常人だったらマジで殺人未遂とかになりそうな勢いだ。

更に、その俺に屋根の上から飛び蹴りをくらわせた悪魔。そしてニコニコとしながら、

「お父様、世間では今の時期はプールが主流らしいのですが」

「パパ、私と私の晴れ姿見てください」

全く意味が分からないことを言ってきた。そもそも、今は11月だ。冬にプールに行く主流があったらたまらないさ。当然俺は、

「嫌だ」

断るわけだ。

「ぐすつ……、最近お父様……私と私に冷たい」

「リンにはあんなにやさしいのに……えっぐ」

いきなり泣き出したのだ。当然、小さな女の子に泣かれたら焦るだろう。

「あー……、わかったけど。今の時期はやってないから無理だろ？」

俺の言葉に顔を輝かせた二人。ギラって感じだった。完全な嘘泣き。

「「いれー」」

二人の手には三枚のチケット。なんか絵本の絵のようなキャラクターがにこにこしている。

わくわくざぶ〜んって書いてある。子供用プール？ 屋内プールか。

「どうしたんだそれ？」

「シロウにもらったのよ」

「剣あげたんだから何かちようだいって言ったの」

うん。あげたのは俺だし、それは脅迫に近い。

「ふーん……、で。そこに行きたいと？」

「うん」

ふむ、まあコイツらも年齢的には子供じゃないが見た目子供だしな。プールに行きたくもなるんだろう。子供用プールってことは俺は保護者か。

「ああ、いいぞ？」

「「やった！」」

二人は手を打ち合って喜んでいる。

まあ、プールくらいで喜ばれるんならいいか。

ざぶくん

ってことで来たんだけど、全然子供用プールじゃなかった。  
全天候型屋内ウォーターレジャーランド。かなりでっかい施設だ  
った。

しかも、何か休日だけあってカップル多いなー、俺は子供連れだ  
よチクショー。

「とりあえず、ストップ。順番に行ってやるから引つ張るな」

俺はため息をつきながら言ってる、二人は不満そうだが、それ  
で我慢するらしい。

てか、二人とも違う方向指すから無理。

「じゃ、まずは定番ウォータース」

「ねえねえ、君たち。二人でプールに来たの？」

「俺達も二人でさーどう？ 一緒に遊ばない？」

いやいや、その金髪のお兄さん方。どう考えても俺にしがみつ

いますよね？

てか、あなた達ロリコンですか？ 二人とも身長145ないんだよ？

ツインテ二人は途端に不機嫌になった。

「話しかけないで頂けますか不細工、汚らしい顔が移ったらどうしてくれるんですか？」

「ええ、本当に不細工ですわね。死んで来世に期待したらどうですか？」

ちなみに、たぶんイケメンの部類に入るのじゃないかと言う男達。

「ッ！ テメー調子に」

「消えるロリコン！」

俺の回し蹴りでプールに顔面から二人がダイブした。

「さすがですお父様！」

「やはり格が違うわ」

「フッ」

二人はにににことしながら俺に抱きついてくる。

でもさ、これで何人目かわからん。一応この二人は美の女神だ。男の理想の塊だけあってさっきからめちゃくちゃ声がかけられる。まるで、俺がいけないかのように。

『プーーーーー』

「そこ！ 飛びこまない！」

係り員のお兄さんに注意されてるナンパ野郎ガンバレ。

俺達はそのままウォーターライダーに移動する。

あれからもナンパされまくった二人だが、何とか俺が殴りとばしてたどり着いた。

「どうする？ 浮き輪二人乗りだけど？ 俺一人でいいから、お前から二人で乗るか？」

ハの字のようになってる浮き輪。身長制限が140なので。コイツらだけでも大丈夫なのだ。

「いえ、大丈夫ですお父様」

「見ててくださいね？」

そう言うと、二人は係りの男の人に近づき、



「どうしてもお父様と一緒に乗りたいんです！」  
「お願いしますお兄さん」

涙をためた瞳で懇願する二人。  
お兄さんはたじろぎ、

「ど、どうぞ！」

許可を出した……。

この二人は将来魔性の女になるだろう。いま現在でもそうだが。

「では、行きましようお父様」

「パパはここです」

そう言って、二人に促された位置は後ろの穴。

そこに、尻を入れるような格好になった。足を前の穴に通す。

「で、私と私は」

まず、俺の上にステンノが寝そべる。何故かうつ伏せ。

次いで、俺の肩に足をかけるような感じでエウリュアレが跨る。

別に顔の上に座ってるわけではなく、俺の頭はエウリュアレのお腹のあたり。

どっちにしろかなりツライ体制だ。子供がつくる戦闘機みたいな状態である。

「苦しい！ やっぱ俺は降りる！」

「おにいさーん、浮き輪押してください！」

「は、はい……」

お兄さんは浮き輪を押し、ゆっくりと滑りだす。  
てかっ！　なんで幼女に籠絡されてんだよ！

「てか痛い！　尻が擦れていたい！」

「まあ、お父様。私と私の前でそんなお尻だなんて」

何言ってるんだコイツら！

俺達は右へ左へ流されてめっちゃ痛い。

「いたっ……、頭撃った」

エウリユアレは頭をぶつけて涙目だ。

そして、やはり無理に三人乗ったのがいけなかった。ちょうどカーブの所で浮き我がすっぱ抜けた。

そのままガードルから飛んで浮き輪は落下。

てか、くっついていたら俺らも落っこちたんじゃないか？

「お父様落ちます！　落ちます！」

「キヤーーーー！」

叫んでる割にめっちゃくちや楽しそうだった。てか、これ浮き輪用だよな？　まじで落ちそうなんだけど！？　てかお前らくっついてくるな！　落ちる時は俺だけおとすつもりだが！

てか今気づいた！　コイツらカーブの直前で逆側の壁蹴ってやがる！

「お父様！　後ろ！」

ステンの言葉で後ろを振り向くと、仲のよさそうなカップルの驚愕に見開いた目と合った。

てか、早くね！？ 普通下で確認してから降ろすよな？ 混んでるからってありえないだろ！

「お父様、守って！」

「パパお願い！」

そう言っつて二人は俺を後ろに突きとばす。だが、俺は二人を足で挟み込んで逃げるのを防ぐ。

「ひどいですお父様！」

俺はそのまま後頭部を後から来た浮き輪にぶつけ、さらにステンの頭が俺の胸に、エウリュアレの頭部が俺の頭部にぶつかり、激痛の中滑り続ける。

てかさ……、スライダー用の浮き輪硬くね……。

結局あのと三人でめちやくちや怒られた。

ついでに、係員の奴は経営者に呼びだされていた。

「パパ、次はビーチボール！」

ふむ。二人は全く懲りてないな。とりあえず、俺達は一度木の影に移動し、ビーチボールを創り出しプールに向かう。

「じゃあ、勝負だツインテ悪魔！」

俺が不敵な笑みを浮かべると、まさに悪魔の笑顔で、

「では、お父様が負けたら血をもらい受けましょう」

俄然やる気になっていた。

俺達はプールに入る。視線がかなり集まっていたが気にしない。

「では、私からいきますねー」

ニコニコと上空にビーチボールを放り投げるステンノ。

『プーーーーー』

「君たち！ そんな危険な　　ぺぶっ！」

係り員は見張り台ごと10メートル程弾き飛ばされた。  
10メートル程のビーチボールに。

俺は着地点に移動し、蹴り穿つ!!

無回転ボール特有のブレを描きながらエウリュアレに飛翔するボール。

「舐めないくださいパパ！」

「ぶはっ！」

近くの男性の顔面を足場に、飛びあがりアタック。  
俺は一度プールサイドに上がり、バク宙キック。

周りの水を弾きとばしながらステンノに高速で飛翔する。

「ぱっ」

「ぶっ」

二人を足場にしながらジャンプ!

「お父様! 空気の貯蔵は十分ですか?」

ニヤリと笑うステンノ。そして、

『 乙女の秘密アタック《ビーチボール》 』

くそっ! ここで真名解放か!

完全に水を縦に割り、迫りくる球体。俺はそれを避ける。背後のプールサイドを破壊しながら突き進む。倍率を上げ、前方に移動。

「神舐めるなよ小娘！」

俺は大きく足を後ろに振り上げ、

『俺はロリコンじゃない《ビーチボール》』

蹴りつける。近くの人間を弾き飛ばしながら突き進む。それはまさしく光速。

普通の人間には対処不能な攻撃。だが、俺が神であるように、二人もまた、神なのだ。

『私の愛を受け取って《ビーチボール》』

繰り返される真名解放の嵐。逃げ惑う人々をあざ笑うかのように、悪魔の命（弾）は俺に迫りくる。

俺が蹴り返そうとする瞬間。二人はニヤリと笑った。

「お父様、愛を甘く見ないでください。近親相姦なんて望むところですよ！」

ステンノが叫び、

『壊れた幻想』  
フロークン・ファンタズム

くっ！俺は飛びのくが、遅い。ビーチボールは破壊され、膨大な風が俺を壁まで吹き飛ばす。

俺は 負けたのか……。  
きつと俺は甘く見ていたのだ。

俺の元に寄ってきた二人は俺を見下ろし、ニコリと笑う。

「覚悟してくださいお父様」

「パパの全てを受け入れます」

いや、マジ血全部抜かれたら死ぬ。二人の唇が俺に近づき、

左右の首に噛み着いた。

「んー、はっぱりほうひー」

すごい勢いで抜かれる俺の血。抜かれた量を魔力で創りだしてゆく。

はたから見たらいやらしいことをしているように見えるだろう。  
だが、これは捕食だ。

って、係員が数人走ってきた！

「ストップ！」

「いやへふ！」

全然離れない二人を抱え、岩影に退避、そこで逆サイドの岩影に  
転移。

俺達が元居たところは騒ぎになっていた。

それもそのはずだ。周囲のプールサイドは破壊尽くされ、ひとつのプールが使い物にならなくなっている。

ついでに、二人はまだ俺から離れない。血が回りすぎて、顔が真っ赤になっている二人。

そこで気付く。

俺は勘違いしていたのかもしれない、人間なら確実に破裂する。神も破裂するのかと思っていたが。どう考えてもこの量を吸って破裂しないってのはおかしい。

「ちよいタンマ。聞きたいことがある」

ゆっくりと二人が離れる。離れた時に、唾液と混じった血が赤い糸を引く。

「お前らさ、何か変わったところとかない？」

二人は首をひねる。

「そうですね、お父様が大好きになりました」

うん。それは俺の体液の副作用だから違う。

「他には？」

「たぶん、パパに合った体に作り変えられると思う」

ん？

「何それ？」

「はい。まず、神秘性が上がってます。神としての格ですね。更に、魔力の最大量増加。肌の質感とかよくなってますね。あと、スタイ



ルも前より良くなっています。それとおそらくですが」

確かに、水着の上が少しきつくなっているようだが。

「お父様の子どもが産めるように作り変えられましたね。前だったら確実に死んでましたけど。今なら、精液も受けとめられますね」

ニコリと笑うが。とりあえず子供云々は置いておいて。

つまり、俺の体液をたくさん摂取すると、俺よりになってくると言うわけだ。

完全な神に近づく……ってことは。

凜やばいんじゃないだろうか？ 唾液だが、あれも俺の体液だ。

血液ではないが、下手したら

「お父様！」

「パパ！」

俺の思考中に二人が抱きついてくる。

「完璧ですね！ どうでしょう、ここらで一っ子作りに専念してみ  
ては？ 次世代の創造神が産まれます！」

「私と私と子供作ったらきつと可愛くなります！」

うん。嬉しそうに言うのはいいが、腹黒+永久幼女しか生まれな  
さそうだ。ついでに作らない。

「いやいや、無理。お前らみたいな幼女に興味ない」

「それは、血をもっともらえば成長します！」

「お前から身長伸びてないよな？」

確かに前より若干キレイになった気がするが、もともと完璧だったが。

身長は全く伸びていない。

「……多分最高身長がコレなのでしょう」

がんばっても140ちょいしかねないって可哀そうだな……。

多分、胸も限界がくらいだ。美の化身ってことはバランスの為一定までしか成長しないってことだろう。今のが限界。肌も今では卵肌のようにつるつる。もう全部が限界だ。

あとは、どれだけ俺に近づくかだな……。

俺もそうだが、コイツらも髪と眉毛くらいしか毛は生えてないから、そこまでは俺よりになっている。

排泄はどうだろうか。

神秘と魔力だけか？

「お前らもうやめた方がいいぞ。神やめることになる。排泄とか今どうなってる？」

「前はしてましたが、お父様とラインが繋がってからないです」

やっぱり体の構造変わってきてるな……。凜もやばいかもしれん。

「生理現象とかは？」

神にだってあるはずだ。基本人間と変わらないのだから。

「ないわ。パパの近くにいると子供作りたくてしょうがなくなるけ

ど。他の神には全く興味ないわね」

むー……、つまり俺専用に作り変えられるわけか。意思とか神秘性とか関係なしに強制的に。結構まずいかもしれない、気軽に魔力やったりしたらヤバイな。セイバーにもこれ以上はやめたほうがいいな。血液だけならいいが、唾液はどうなるか……。でも、凜の裸はよく見るが、変わったところはないはずだから大丈夫なのか？

「俺と一緒にいるとどんな感じだ？」

「んー、幸せよ。ずっと一緒にいたい。あと、体が疼くわ」

あー、幻惑で幸せと快楽をあげたときみたいな感じってことか。血液中の成分を絞れば……。

「ちょっと、二人とも、もう一回血吸ってみてくれ」

二人はうれしそうに俺の首筋にかぶりつく。

「どうだ？」

二人は不思議そうな顔をする。

「おいしいはおいしいです」

「ちょっと濁った？」

絞るところなるのか。

「もっかい、いいか？」

もう一度嘸みつき、とろんとする。

「今度はほわほわします」

「いつもの感じで気持ちいいわ」

これが通常時。やっぱり、何か副作用あるな。味をそのままで性質を変えるって出来るかな……。たぶん、やろつと思えば出来る。ハクのアドバイスが必要だが。

あとは、効果高めるために限界まで魔力を凝縮。

「もう一回いいか？」

二人は更に首に噛みつき、目を見開く。

「んん！！ あふつ ！？」

「んあつ！？」

え？ 魔力を固めるのまずいのか！？

二人の焦点が合っていない。

「お、お父様……じんじんします……」

「愛してます お父様がほしいです」

これはまずい、ダメだ。これは神の抵抗力でもまずいのか。魔力を固める⇨依存度も上がるのか。

「あー、ごめん二人とも、大丈夫か？」

「いえ、大丈夫ですけど……」

「我慢するのがツライです」

悪いことしたな……実験台にしちまったよ。

「ごめんな、今日は帰るか？ ソレじゃプールなんて入れないだろ？」

水着の上からでもわかる。何がと言わないがぐしょぐしょだ。そんなんで入れるわけがない。

「はい……」

「ごめんなさいお父様」

すまなそうに二人が謝るが、二人のせいではない。

「いや、悪いのは俺だから」

俺は二人の体外の水分を飛ばし続ける。ハッキリ言って移動すらキツだろうな。そのままじゃ服すら着れない。

俺のせいだから仕方ない。財布や服は諦めて家に轉移しよう。

「帰るから掴まってくれ二人とも」

「はい」

二人は俺に掴まるが、やはり疼くのか敵しそうだった。

帰ったら凜も調べないと危険かもしれない。さすがに、神になつてしまつたら人間に戻すのは不可能だ。人間が神になったらカテゴリーが変わってしまう。それだけは……。

俺は頭の中を整理しながら家に轉移する。

## 九五話 ちよつと休憩（後書き）

刻魔力供給は不可能なのか！

何か面白い小説ないかなあ、小説家になろうつで。

久々に他の人の見てみたいかも。

ランキングで僕の小説が載ってないページの作品でお願いしたいです！

自分の順位とか知りたくないんで。

お勧めあつたら教えてください！

九六話 星とのリンクを確立するために(前書き)

やばい忘れまくってます……。

性格少し違ったらごめんなさい。

白本…… 若気の至りのな作品です(お

九六話 星とのリンクを確立するために

シロウの屋敷の庭

「で、話って何？」

双子のプールでの事が在り、俺は凧が神化しているのかを試すため、庭に呼びだした。

「んーちよつと試したいことが在ったからな」

俺は手元に一つの宝石を取り出す。これは、真名解放出来たら光って教えてくれる宝具（偽）だ。

ただ、作りだしたのは俺で、使い手は俺。つまり俺の眷族の神以外は担い手ではない。神ならば光るってわけだ。

それを凧に手渡す。

「……キレイな宝石ね」

それをしげしげと見つめ、宝石魔術に使えないかしら……とか呟いている。



「人間の魔力じゃ無理。それは神の魔力しかとどめられないから。んで、実験の為に真名解放してくれね？ えーっと、真名は……」  
明後日は晴れ《フェイク・ルビー》『でいいや』  
「……なにその真名？」

疑わしげな視線を向けてくるが、実際真名に意味なんてない。適当にいま設定したのだ。

「……この武家屋敷が壊れたりはい……」  
「いいから早くしろっての！」

『疑問は心のよりどころよ……』とかブツブツ言っているが、寶石を天に掲げ。

『明後日は晴れ《フェイク・ルビー》』

叫んだ。

……。

何も起こらない。

「遠坂……占いにでもはまったのか……？」  
「シッ、ダメですシロウ！ 見ない方がいいです！」  
「セイバーそれは逆効果。あれは……そう！ 日本のブシドウね！？」

背後に士郎とセイバー、イリヤが立っていた。  
凧は真っ赤になってわなわなと震えだす。

そんな凧の肩に手をポンと、俺は置き。

「よしつ。神として俺が明後日は晴れにしてやるつ」

まるでこじかのようにプルプルと震えている。

「どうしたトイレか？ だった早くい　ぶへあっ!？」

「刻のバカアアアアア!」

凧は俺を盛大に宝石拳で殴って、離れに走って行った。

「なにしたのさ……」

「いや……士郎にはまだ早いさ……フツ」

口から血を流してカツコつけてみた。  
にしても……凧は神化していないのか？

とりあえず、困った時のハク頼み。

「そうですねー、人間は初めから神としての力を蓄えられないのか  
もしれないですよ？　それか……」  
「それか？」

「凧さんが故意に隠しているか」

確かに真名解放の言葉だけでは意味がない。  
魔力を入れなければ発動はしないのだ。

だが……。

『俺に隠す意味ってあるのか?』

『さあ……本人次第ですねー。まあ、神って言っても、星>神ですから大丈夫ですよ。ご主人様みたいに星より優位にはなりません』

とりあえず放っておくか……。

まず目先の事を何とかしないと。星の拒絶がひどすぎる。ライオンが途絶え始めてるしな……。

そこで俺は士郎に向き直る。

「士郎、俺はちょっと出かけてくる。二、三日帰ってこないかもしれないけど、その間セイバーは士郎を守ってやれよ?」

「当たり前です。シロウはマスターなのですから絶対に守ります!」

そんなセイバーにくすりと笑い、俺は目的地に転移する。

目的　アルクエイドの気配がする場所に転移した。アルクエイドは力が大きすぎて、何処に居ても気づきそうだ。

転移すると、いきなり現れた俺に、その場にいた人間（？）が目を見開く。

「あら？　神じゃない？」

やはりというか何と言うか、アルクエイドが居て、声を掛けてきた。てか、神ってどんな名前だよ。

「神って呼ぶなっつの。如月刻だって」

「あはは、でも神じゃない？」

ケラケラと笑う姿は、普通に人間と変わらない。

「あー、アルクの知り合い？」

志貴が所在なさげに声を掛ける。

でも、此処はお前の家だから俺の方が所在はずだぞ？　例え、近くのソファァーに堂々と座ってても。

「知り合って志貴も知り合いじゃない？」

「え？」

あの時はなー……。

「あー、遠野志貴。俺が知り合いなのは七夜志貴だからお前が知らなくてもおかしくはない」

その瞬間、ピシリと空気が凍った気がした。  
てか、空気と化した他の四人の目つきがこえー……。

「そつよ志貴？ 志貴が負けてるの見たもの」

「シキさんが負けたのですか!？」

いやいや、てか誰よ君？

「あ、シエル。トキは本物の神だから殺しちゃダメよ？ “神を騙った者”を消すのがあなたのお役目だろうけど……でもそれはそれで面白いわね」

どうやらシエルって言うらしい。えーっと、データだと聖堂教会だっけな。地球とのリンクが安定しなくて閲覧が……。

シエルの眉がピクッと動き、次の瞬間には黒鍵 柄が短い投擲用の剣を5本投げてきた。

俺は空間を繋げ、そいつの服に突き刺した状態に黒鍵を転移させる。更に、壁に転移させて貼り付けにする。

時間的には一瞬だから、二度転移させたとはいわないだろう。

「物騒すぎるっての」

「あははは、やっぱりシエルでも無理よねー」

だったらやらせるなよ……。

「神……わたしを消しに来たのでしょうか？」

長髪黒髪の少女がいきなり声を発したが、わけがわからない。

「あほか？ “略奪”の混血程度消すなら、まずアルクエイド消すだろ？ まあ、目的はどっちも違うけどな。ちなみに俺から熱奪つても意味ないぞ？ 最初から神みたいな上位存在にはそんなものきかねーよ。遠野の当主さん」

俺がニヤリと笑ってやると、目を見開いて驚いている。

現在データバンク閲覧出来ないが、志貴が攻めてきたときに閲覧したデータを言ってみた。

予想では、アルクエイドを使って実力行使をしたけど迎撃不可能だからせめてもの抵抗でリンクを切ったのだろう。まじ星うざい。

「私が目的よね？」

アルクエイドがふふと笑う。それに頷いてやる。

「星とのリンクは継続中か？」

「ええ。でも、あのときよりは細い」

「それで結構」

アルクエイドに近づき、額に手を置く。そして目を瞑り、細い回路を辿ってゆく。無数に枝分かれした道。それは無限にもあるように感じられる。

この道を人間は辿り、根源へと至る。どれだけ低い確率でこんな

枝分かれした道を通るんだよ全く。

一本の緑色の線をひたすらたどる。

確立、破棄、破棄、破棄、確立、破棄、破棄、破棄、破棄、確立……。

星による妨害。無駄な線を破棄しながら一番近い道をたどる。アルクエイドから繋がったその道を。

破棄、破棄、破棄、接続、破棄、破棄、破棄、破棄、確立、接続、破棄、破棄、破棄……。

星が道を切断し、それを神として再度接続する。侵入してくる異物を追い出そうとする星と、星を創造した神の戦い。

接続、破棄、破棄、破棄、破棄、破棄、移動、破棄、破棄、破棄、破棄……。

近づく異物に星は更に妨害を施行する。強制的にラインを変更する。そこから正規のルートに戻る。

だんだんと破棄の数が、増え。それゆえに道が増える。

侵食、浸食、突破、浸食、破壊、浸食、破棄、接続、浸食、破棄、破棄……。

星の意思そのままの妨害を侵食し掌握する。更に妨害をねじ伏せ突破。

そしてゆっくりと俺は目を開ける。時間にして約5時間くらいかかったか。

「……ついた」

「すごいわね。無駄なラインが消えたから、星のバックアップ完全よ？ 今なら朱い月だって倒せそう！」

俺はそんなアルクエイドを見てくすりと笑う。

星へのアクセス速度は星が決め、アルクエイドをバックアップしている。現在、俺が直立回路を確立しているから、世界で一番星のバックアップを受けているのだろう。

「さーて。星掌握するんだけど……」

俺は皆を見回す。

「俺に触らない方がいいぞ？ 触ってもいいが……なんて言うかな？ 触れば確実に根源へたどりつけるが、俺が今からやるのは掌握だ。だから、吞まれたらそこで存在の定義が消え去る。もし勝てたらアルクエイドと同じように星のバックアップを受けられるけどな。一応結界張ってやるけど、出たら責任はとらん」

俺はパチンと指を鳴らし、全員に結界を張る。

『再変換・上書』



志貴SIDE

『再変換・上書』

刻がそう言った瞬間、世界が変わった。

直視の魔眼を使ったときの比ではない程の痛みが走る。

辺りを見回すが、全員が膝をついている。

「見ようとしないう方がいいわ、人間には重すぎる。視界に入った物だけを見た方がいいわね」

アルクエイドの言うとおりにすると、頭痛は和らいだ。どうやら、知らず知らずのうち何をするのか気なり、探ってしまったらしい。

「この世界はなんだ？」

辺りが全て緑になっている。

「うーん。多分志貴には見えないと思うけど、世界の真理ね。1と0の世界。まるで二進数のようだよ。これをちよつといじるだけで物事の法則や存在やあらゆるものが変えられるわ。これが世界の法則。それを刻が今上書きしてるの。ある意味世界創造の立ちあい者ね！ 魔術的に言うと、星全てを永続する固有結界で包み込んでる感じ？」

刻を見ると、足元から真緑になるくらいラインが出ている、それはだんだんと本数を増やし、濃くなってゆく。それに伴い、世界が上書きされてゆく。

もし今触つたら、あの線全てと繋がる。そんな膨大な演算処理、人間では脳が一瞬で破壊されるだろう。

「惚れぼれするくらいキレイに書き換えられてゆくわね……私じゃ線一本でも歪んじゃうのに。あ、でも惚れないわよ？ 志貴の方が好き」

そんなアルクの言葉にくすりと笑ってしまう。

それにしてもキレイだ……。全て見れないことが悔やまれる。何故かはわからないが、それを見たいと思ってしまう、甘美な誘惑が押し寄せる。

「志貴っ！ ちゃんと心を強く持って！ 飲み込まれるわよ？」

その声にハッとすする。どうやら知らず知らずのうちに前に進んでいたようだ。結界から出たらどうなるかわからない。

いわば此処は星の中心。完全な異空間だ。尤も力が働く場所である。出たらきつと呑まれる。

「はぁ……刻も外と同じように時間とめてくれればいいのに。明らかに面白そうだからかと思って此処だけ時間止めてないわよ？」

どうやら他は時間が止まっているらしい。

「それよりシエル死ぬわよ？」

シエル先輩の方を見ると、ゆっくりと歩いていた。

咄嗟に、持っていたナイフを投げると、条件反射でそれを黒鍵で弾いていた。

「ハッ！？ 何を？」

どつやら気づいたようだ。

「シエル、あんた死にたいの？　あとあれを見なさい？」

アルクの指さした方向。

床に刺さったナイフだ。ただ、そこは結界の外。

「細いラインしか切れてないから大丈夫だと思うけど……龍脈一本くらい亡くなっただかも……。最低一つの都市が壊滅でしょうね」

はぁ……とアルクがため息をつくが、規模がおかしい。神なんて吸血鬼どころではない。なんで自分がこんな場所にいるのか不思議に思えてくる。

しかも寝れないし意識も失えない。集中してないとすぐさま刻の方に引き込まれてしまう。

一体いつまで続くんだ……。

三日後

星の意思：書き換え終了

法則：元来の物を使用

存在：再構築終了

システム：一部変更

俺がずっといるなら、俺が意思となってもいいのだが、それは出来ない。だから、従来のもものを使用し、運営出来るように変更した。ただ、俺を拒絶する意思が鬱陶しいので、星の思考は変更しておいた。

あとは、追い出したが何処に水のページがあるかわかった。

そして世界を戻す。

「終わった！」

三日もかかり、俺は両腕をあげてのびのびする。

そこで辺りを見回すが、なんか全員憔悴していた。

「どうした？」

首を傾げると、非難っぽい視線が突き刺さる。

「私はいいけど、他は人間よ？ 三日三晩、寝ず食はず飲まず。更に集中しっぱなし。しかもおかしな緑の世界で。精神が壊れなかっただけ立派だわ」

「あー、すまん。とりあえず飯出すわ」

俺は指をパチンと鳴らし、大量の料理を創造する。  
誰も驚かないと言うか、反応する気力がないと言うか。

「それでどうなったの？」

「んー、書き換えたな。まず、守護者制度消し去った。魂を拘束するのはダメだ。まあ、今現世に出るのが消えたら終わりだろう。法則が狂ってるから、それを書き換え。この世界の神に頼んで守護者の変わりしてもらおう。あとは、星の意思。こいつが屑だったから新しい意思に作り替えた（正確には意思に寄生してた水のページを追い出し、ある道に入れたのだが。それは言わなくていいか）」  
「ってことは私達は今までと同じね」

「いや、吸血鬼の真祖にも守護者として働くように意思入れたぞ。吸血衝動と眷族を作りだすこと出来なくしたが、バツクアップ上昇させたから大丈夫だろう。ついでに、欠番に新しい吸血鬼作っておいた」

「それ吸血鬼じゃないわよね……？」

「だから、守護者だって」

そもそも、吸血鬼を作った前の星の意思の意味がわからない。明らかに逸脱した存在だしな。

「あ！ そうだった！ 頼みが在ったの！」

アルクエイドがキラキラした目でこちらを見つめる。

「んー、ある程度なら聞くぞ？」

アルクエイドのおかげで色々事が進んだし。

「人間を不老不死に出来ないかしらっ!？」  
「ぶっ!!!?」

アルクエイドの隣で志貴が飲んでいた紅茶を嘔き出ししていた。

『兄さん』とか言っつて、秋葉が拭いてやってるが……過保護すぎ  
だろ？

「出来るぞ?」

「志貴を不老不死にして!」

なんとなくわかってたが……。

志貴に視線をやると、ぶんぶん首を横に振る。

「だそうだが?」

「なんでよー、志貴! あの誓いは嘘だったの!？」

「どの誓いだよ!？」

ギャーギャー言ってるがまあいいか。

「まあ、聖杯戦争が終わるまでは俺もこの星にいるから、その間に  
決めて来い」

そこで、俺が立ち上がると、誰かに腕を掴まれた。てか、かなり  
痛い。

そこにはシエルがキラキラとした目でつかまっていた。

「是非! 聖堂教会へ我らが神よ!」

「いつお前等の神になったんだよっ!？ 言っておくが俺が一番上  
の神だぞ? そんな神が肩入れするなんて無理なんだよ。そこらに  
いる、神話に出てくるような下級神でも祀っておけ。ほら、ゼウス

とかそのあたり。多分どっかにいるだろうし」

「是非！ 聖堂教会へ！」

「同じこと言っちなキチガイめ！」

しつこいなマジで。

そんなことよりも、士郎に三日って言ってたから早く帰らねーと。

てか、凜に言わないできちまったけど、大丈夫かなアイツ？ 絶対帰ったら文句言われる。

リンクも回復したから覗いてみるか……。

……。

……は？

「トキ？ なにそんな顔を青ざめさせてるのよ？」

「いや……俺のマスターが死にそう……」

全員の動きがピタっととまった。

「手伝おうか？」

「私も手伝ってもいいわよ？ 吸血衝動なくしてくれたし」

志貴とアルクエイドがそう言うってくれたが、首を振る。

「いや、一人で大丈夫だ……て、バーサーカー死んでる！ イリヤ誘拐されてる！ 士郎とセイバー戦ってる！」

最悪すぎる……。

「あー俺帰るわ。志貴が不老になるなら俺のここ来い。座標は星からデータもらつていいから。じゃ」

多分、このままだと凜は死ぬ。

てか何でイリヤが……？

死んだ聖杯に入ってるサーヴァントは、アサシン\*2、ライダー、アーチャー、キャスター、バーサーカー……まだ6……。

今戦闘中のセイバーとギルガメッシュ……どっちが負けても……イリヤを捕獲しておけば、言峰はもう一つのサーヴァント、ランサーで聖杯を手に来る。

それに気付き、俺はすぐさま士郎の屋敷に移る。



九六話 星とのリンクを確立するために（後書き）

久々で微妙でした。ごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2489i/>

---

白の本は世界を渡る

2010年10月9日12時33分発行